

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第124集

笹間館跡発掘調査報告書

ほ場整備事業笹間地区関連遺跡発掘調査

(財)岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

笹間館跡発掘調査報告書

ほ場整備事業笹間地区第12号関連遺跡発掘調査



遺跡全景（一次完掘）
巻頭写真－1

（西から撮影）



(西から撮影)

完掘後全景 (二次)

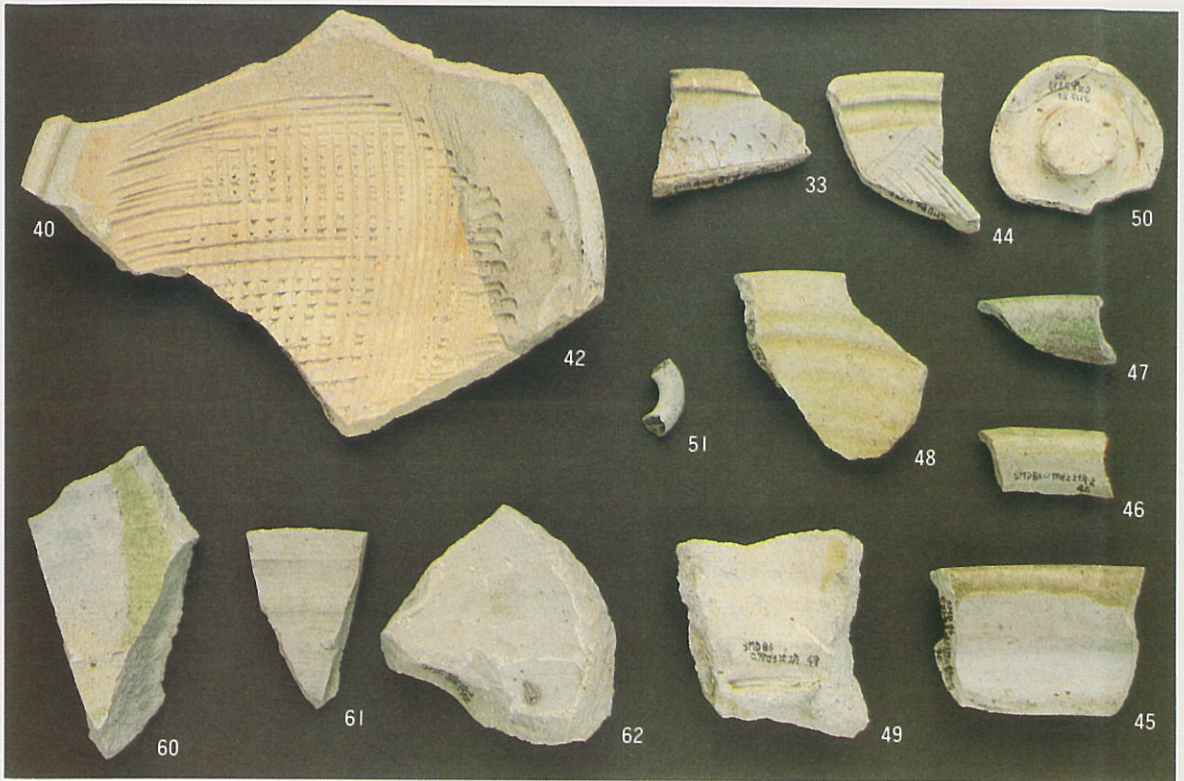


外 面



内 面

瀬戸・美濃系灰釉陶器— I
 卷頭写真— 3



外 面



内 面

瀬戸・美濃系灰釉陶器—2
 卷頭写真—4



外 面



内 面

鉄釉陶器 (国産・中国)
 卷頭写真一 5



外 面



内 面

唐津・朝鮮系陶器
卷頭写真—6



外 面



内 面

青磁一
卷頭写真一七

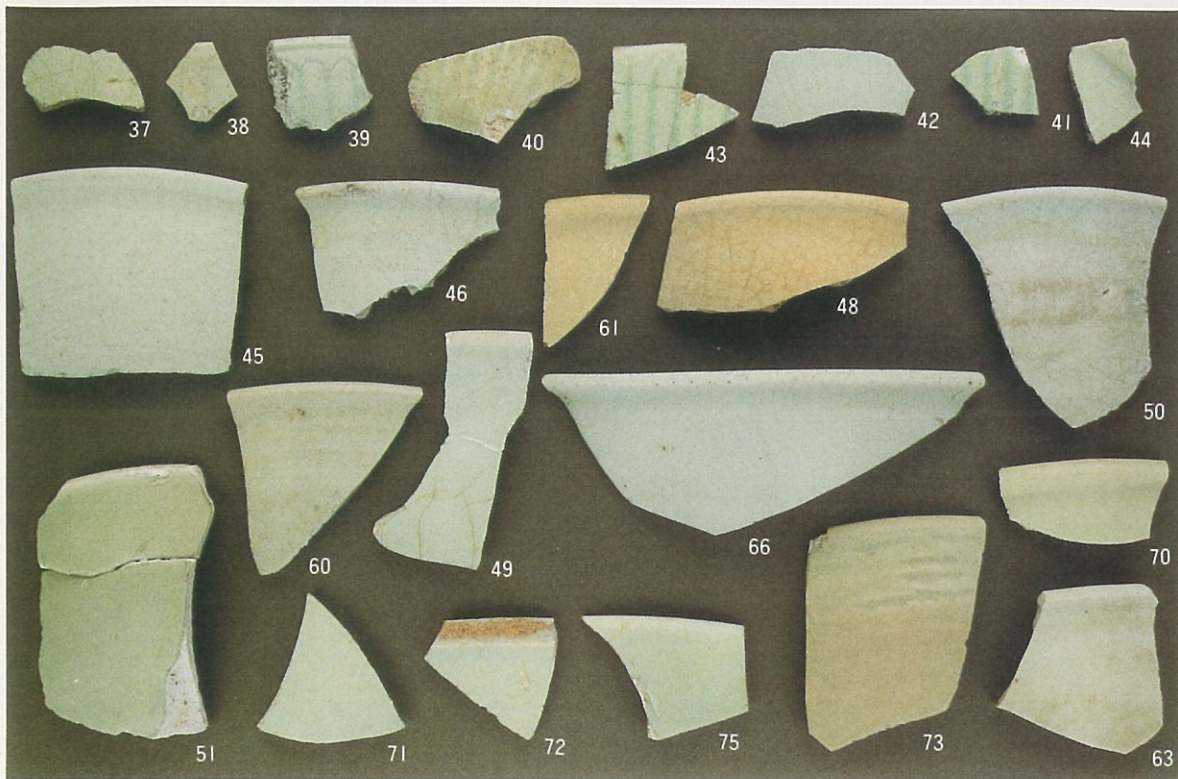


外 面



内 面

青磁—2
卷頭写真—8



外 面

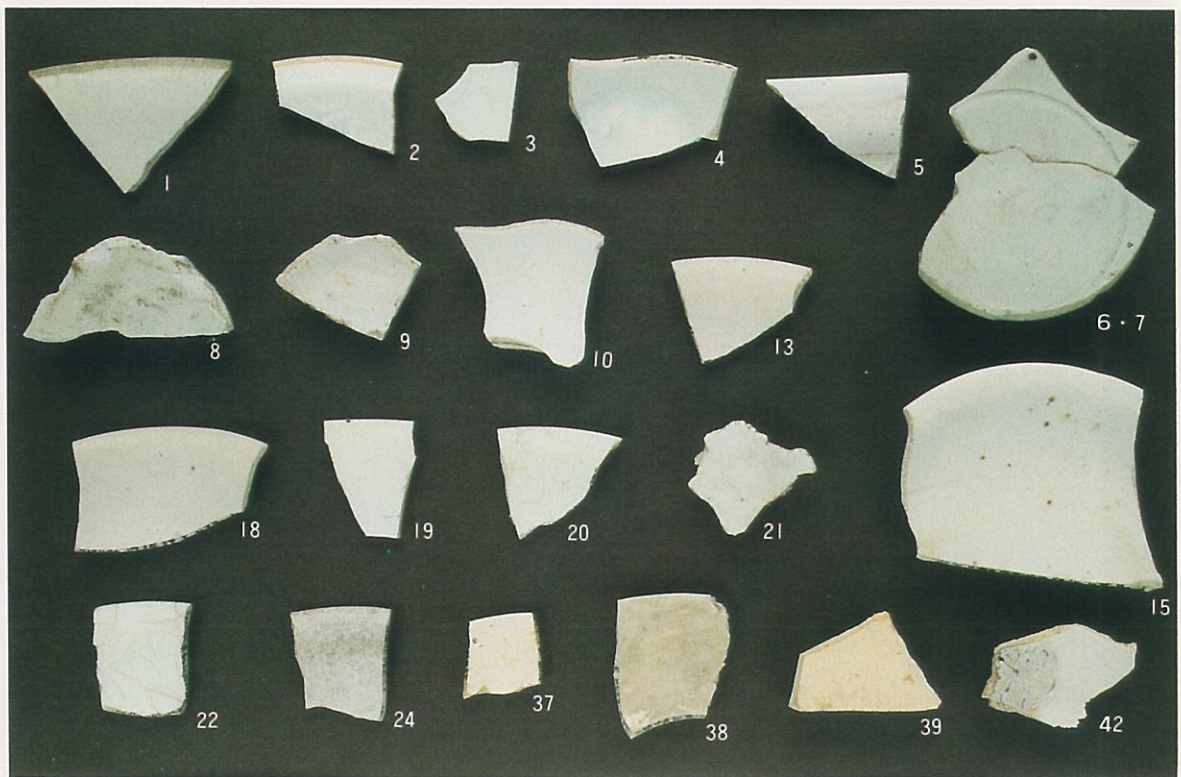


内 面

青磁一 3
卷頭写真一 9

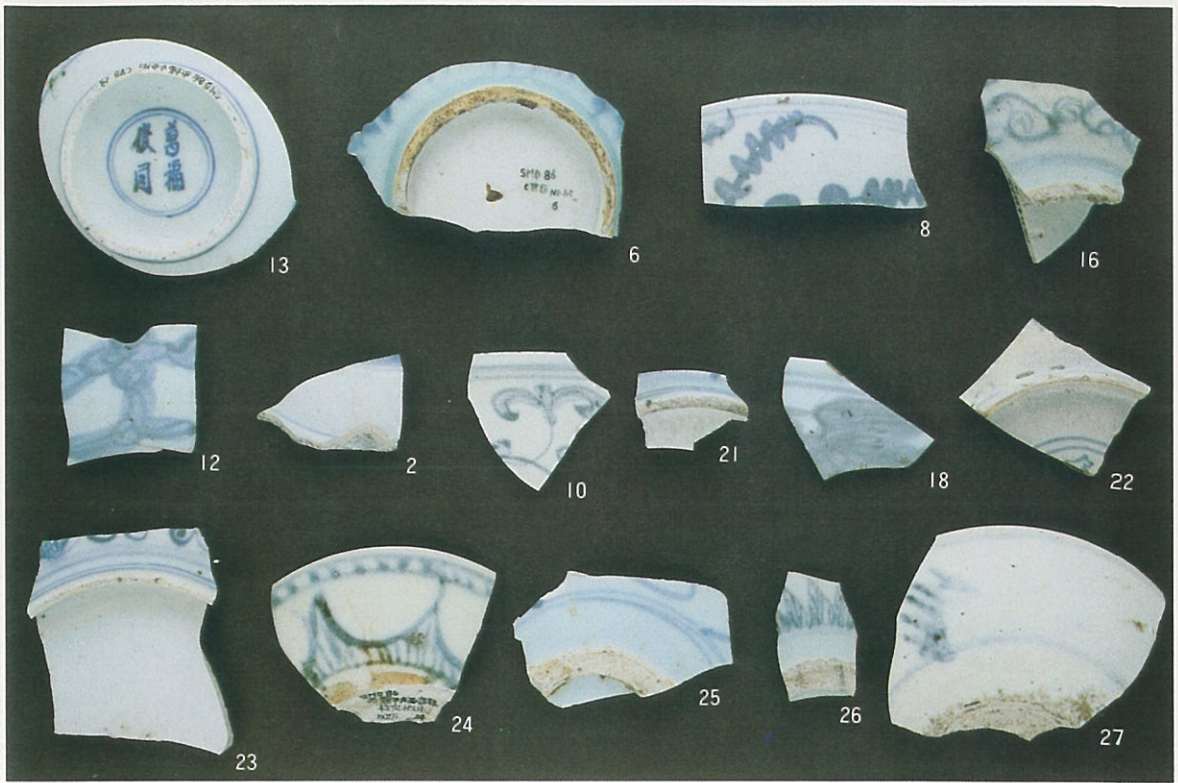


外 面

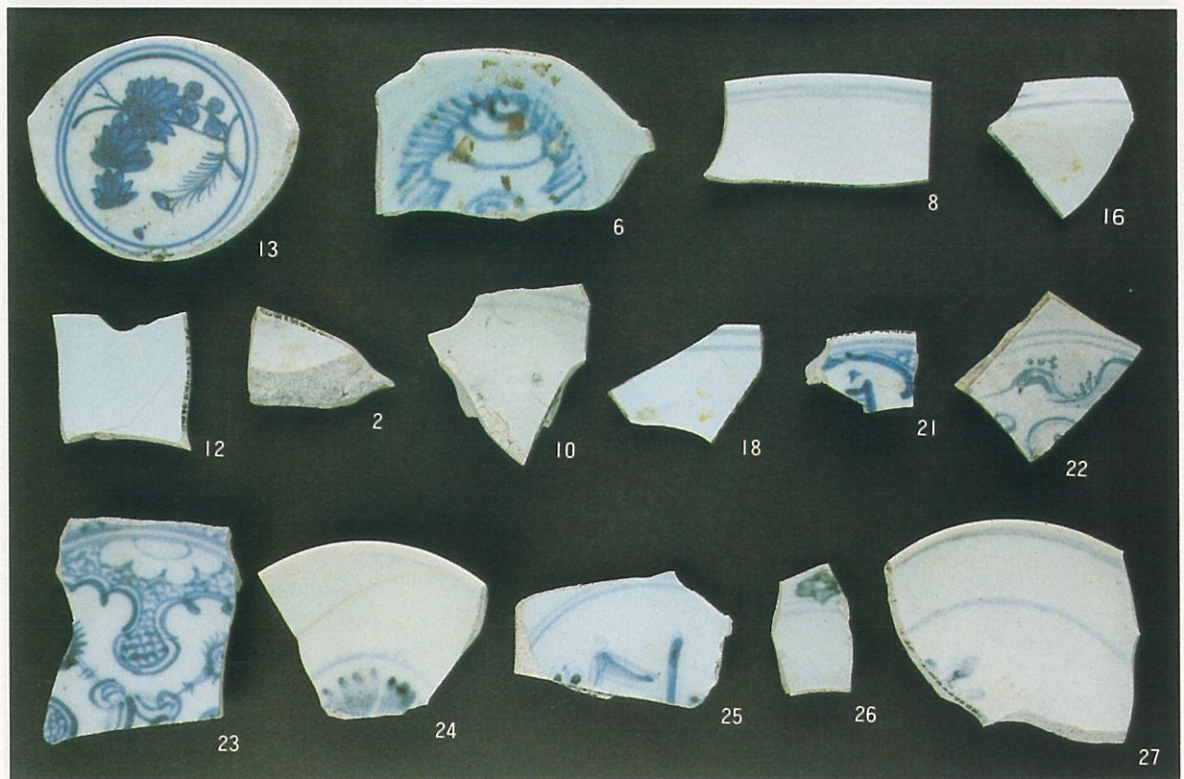


内 面

白 磁
卷頭写真—10



外 面

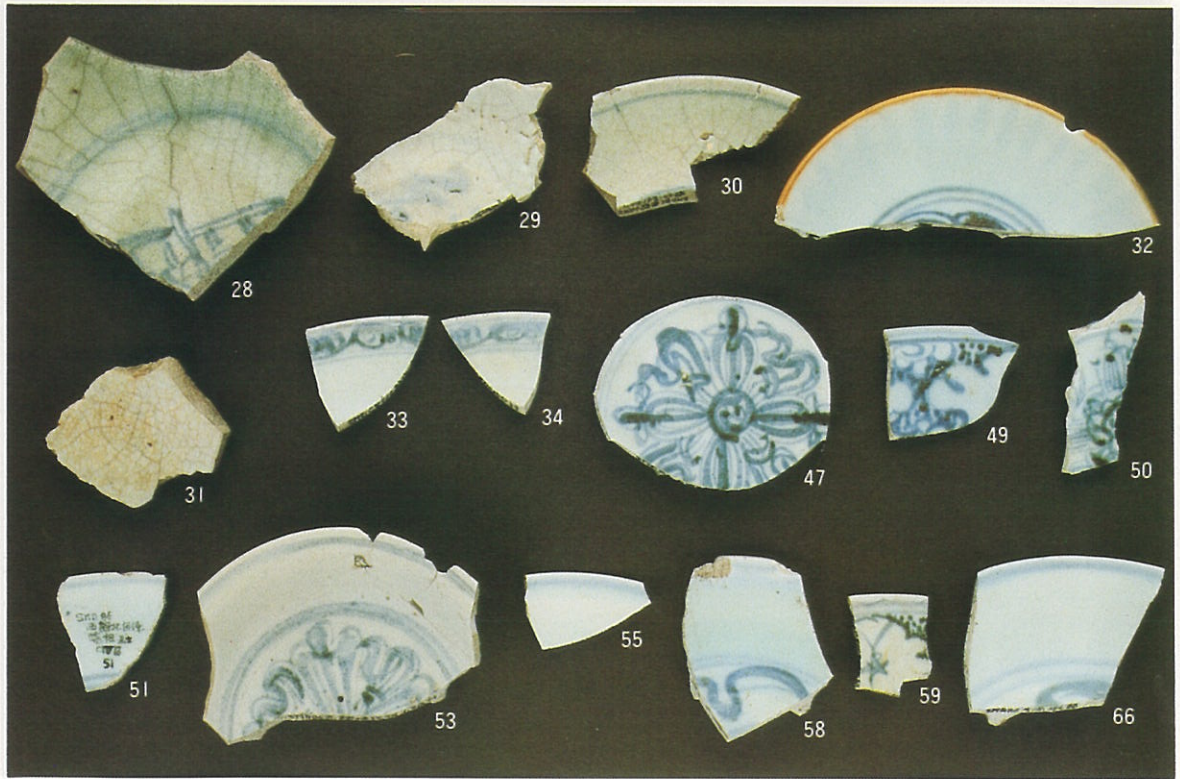


内 面

染付一
卷頭写真一11



外 面



内 面

染付—2
卷頭写真—12

序

本県には縄文時代の遺跡をはじめとする数多くの埋蔵文化財包蔵地があり、7,000箇所にあふ遺跡が確認されております。これらの先人が残した文化遺産を保存し、後世に伝えていくことは、県民に課せられた重大な責務であります。

このような埋蔵文化財の保護・保存と開発との調和も今日的な重要な問題であり、当岩手県文化振興事業団は、埋蔵文化財センターの創設以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに止むを得ず消滅する遺跡の発掘調査を行い、記録保存する措置をとってまいりました。

一方、広大な面積を有する本県の大部分は山地であり、地域開発に伴う社会資本の充実も重要な一施策であります。特に幹線道路網の整備や農地の区画整理は、産業経済の開発や基盤の整備として、多方面から期待されるところであります。

本報告の笹間館跡は、花巻市南西部の東方に張り出す扇状地形を示す洪積低位段丘に相当する舌状台地の突端部に位置しており、ほ場整備事業に伴って昭和61年度に発掘調査致しました。その結果中世の掘立柱建物跡や井戸跡、各種の土坑、堀跡をはじめ、平安時代の土坑、縄文時代の各種陥し穴状遺構等の遺構と、陶磁器、石製品、木製品、金属製品、炭化穀類、土師器・須恵器などといった遺物が数多く発見されました。この後、昭和62年度において出土資料の整理を行ってまいりましたが、ここに発掘調査報告書として発刊するはこびとなりました。

この報告書が広く活用され、斯学の研究のみならず埋蔵文化財に対する理解の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、これまでの発掘調査及び報告書作成にご援助・ご協力を賜りました花巻市教育委員会をはじめ、関係各位に心から謝意を表します。

昭和63年3月

財団法人 岩手県文化振興事業団

理事長 中村 直

例 言

1. 本報告書は、花巻市北笹間6—60ほかに所在する笹間館跡に対する発掘調査の結果を収録したものである。
2. 本遺跡の発掘調査は、ほ場整備事業笹間地区第12号に伴う事前の緊急発掘調査である。調査は、岩手県教育委員会事務局と岩手県農政部との協議を経て、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが担当した。
3. 岩手県遺跡台帳の遺跡番号はME45—0050、遺跡略号はSMD—86である。
4. 発掘調査面積は15,000㎡、調査期間は昭和61年4月7日～9月30日である。
5. 整理期間は昭和62年4月1日～昭和63年3月31日とおりでである。
6. 野外調査及び室内整理の担当者は以下のとおりである。

野外調査	高橋與右衛門・佐々木嘉直・田村壮一
室内整理	高橋與右衛門
7. 本報告書の執筆分担は以下のとおりである。

I	……………	昆野 靖
II、III、IV、V、VIII	……………	高橋與右衛門
VI	……………	田村壮一
VII	……………	高橋與右衛門、田村壮一
8. 分析・鑑定は次の方々に依頼した。(敬称略)
 - 須恵器・陶器の胎土分析 三辻利一(奈良教育大学)
 - 石質鑑定 佐藤二郎(佐藤地質工学研究所)
 - 陶磁器の鑑定 矢部良明(東京国立博物館)、佐々木達夫(金沢大学)、井上喜久夫(愛知県立陶磁資料館)、赤羽一郎(愛知県教育庁)、大橋康治(佐賀県立九州陶磁文化館)
 - 掘立柱建物跡の分析 宮本長二郎(奈良国立文化財研究所)、高島成侑(八戸工業大学)
9. 野外調査と室内整理にあたって次の機関と方々からご協力とご指導を受けた。

花巻市教育委員会、藤井敏明(花巻市教育委員会)、本堂寿一(北上市立博物館)、
佐々木浩一(八戸市立博物館)、南洋一郎(福井県立朝倉氏遺跡資料館)、水野和雄(福井県立朝倉氏遺跡資料館)、三浦圭介(青森県埋蔵文化財調査センター)
10. 野外調査にあたっては、根子広氏・斉藤万次郎氏をはじめとする地元の方々37人の協力をいただいた。また、室内整理では南館泰子氏・藤島ヒロ子氏ほか7名の協力を得た。

11. 発掘調査によって得られた一切の資料は岩手県立埋蔵文化財センターが保管している。
12. 本報告書の編集・レイアウト・校正は高橋與右衛門が担当した。
13. 本遺跡の発掘調査によって発見された遺構と遺物は以下のとおりである。

1) 中世に属する遺構と遺物

(1) 遺 構

- ①掘立柱建物跡—72棟、②門跡—5基、③柱穴列—10条、④竪穴住居跡—3棟
- ⑤土坑—193基、⑥井戸跡—8基、⑦落ち込み遺構—3箇所、⑧竈状遺構—1基
- ⑨溝・堀跡—20条、⑩周溝遺構—18基、⑪畜錢遺構—1箇所、⑫塚—1基

(2) 遺 物

- ①国内陶器類—瀬戸・美濃系灰釉陶器—64点、同系鉄釉陶器—26点、唐津系陶器—6点、常滑・知多等東海系陶器—39点、信楽系陶器—3点、産地不明陶器—4点、瓦質陶器—2点、須恵質陶器—2点、土器（カワラケ）—14点
- ②中国陶磁器—青磁—117点、白磁—53点、青白磁—1点、染付磁器—68点、鉄釉天目茶碗—8点、褐釉壺—1点
- ③朝鮮陶磁器—碗—2点、黒釉壺—1点
- ④石製品類—砥石—85点、石臼—19点、硯—14点、石鉢—13点、その他—15点、使用痕ある礫—6点
- ⑤漆・木製品—漆塗製品—15点、木製品—下駄・曲物・篋・底板・箸・菰槌・板材・加工材・切痕もつ自然木等合わせて51点
- ⑥炭化穀類—米・粳・大麦・小麦・大豆・小豆・粟か稗・そば・黍
- ⑦金属製品類—鉄製品—125点、銅製品—8点、中国貨幣—514枚
- ⑧その他——埴塙・鞆羽口・土錘・さいころ・漆・歯・角・骨など15点

2) 古代に属する遺構と遺物

(1) 遺 構

- ①土 坑—1基、②溝跡—4条

(2) 遺 物（（ ）内の数字は掲載点数である）

- ①土師器—1469点（93点）、②須恵器—345点（156点）、③石製品—勾玉1点

3) 縄文時代に属する遺構と遺物

(1) 遺 構

- ①土 坑—16基、②円形陥し穴状遺構—26基、③溝形陥し穴状遺構—45基
- ④長方形陥し穴状遺構—3基

(2) 遺 物（（ ）内の数字は掲載点数である）

- 土器—115点（53点）、②石器—31点

本文目次

序	1) 陶磁器	278
例言	(1) 国内陶磁器	278
I 調査に至る経過	(2) 中国陶磁器	302
II 位置と立地及び環境	(3) 朝鮮陶磁器	330
1. 位置と立地	2) 石製品	331
2. 歴史的環境	(1) 砥石	331
1) 文献にみる和賀氏と笹間村	(2) 石臼	339
2) 和賀地域の中世城館	(3) 硯	344
III 野外調査と室内整理の方法及び経過	(4) 石鉢	346
1. 野外調査	(5) その他の石製品	348
2. 室内整理	(6) 使用痕をもつ円礫	352
3. 調査の経過	3) 漆・木製品類	353
IV 中世の遺構と遺物	4) 炭化穀類	366
1. 遺構	5) 金属製品	368
1) 郭	(1) 鉄製品	368
2) 堀跡	(2) 銅製品	378
3) 土橋	6) その他の遺物	403
4) 柱穴群	V 古代の遺構と遺物	407
5) 掘立柱建物跡	1. 遺構	407
6) 門跡	1) 土坑	407
7) 柱穴列	2) 溝跡	414
8) 竪穴住居跡	2. 遺物	418
9) 土坑	1) 土器	418
10) 井戸跡	(1) 土師器	418
11) 落ち込み遺構	(2) 須恵器	420
12) 竈状遺構	2) 石製品類	442
13) 溝跡	VI 縄文時代の遺構と遺物	443
14) 周溝遺構	1. 遺構	443
15) 蓄銭遺構	1) 土坑	443
2. 遺物	2) 円形陥し穴状遺構	449

3) 溝形陥し穴状遺構	459
4) 長方形陥し穴状遺構	474
2. 遺物	476
1) 土器	476
2) 石器	482

VII まとめ	489
1. 中世	489
2. 古代	520
3. 縄文時代	526
付編 笹間館跡出土土器の胎土分析	532

表 目 次

第1表	旧和賀郡内中世城館一覽表	22・23
第2表	瀬戸・美濃系灰釉陶器一覽表	285
第3表	瀬戸・美濃系鉄釉陶器一覽表	290
第4表	唐津・朝鮮系陶器一覽表	293
第5表	その他国産陶器一覽表	297
第6表	瓦質陶器及び土器一覽表	301
第7表	青磁一覽表	310
第8表	白磁一覽表	318
第9表	染付一覽表	326
第10表	中国天目茶碗一覽表	330
第11表	砥石一覽表	337
第12表	石臼一覽表	343
第13表	硯一覽表	344
第14表	石鉢一覽表	348
第15表	その他の石製品一覽表	351
第16表	使用痕のある礫一覽表	352
第17表	漆製品一覽表	364
第18表	木製品類一覽表	364
第19表	炭化穀類一覽表	367
第20表	金属製品類一覽表	373

第21表	中国貨幣一覽表	385
第22表	その他の遺物一覽表	406
第23表	土師器・須恵器一覽表	433
第24表	縄文土器一覽表	480
第25表	縄文石器一覽表	486
第26表	掘立柱建物跡一覽表	491
第27表	地点別・種類別出土点数(国産)	505
第28表	地点別・種別出土点数(舶載)	505
第29表	器種別・産地別構成一覽表(国産)	508
第30表	機能別・器種別構成一覽表(国産)	508
第31表	種類別・器種別構成一覽表(舶載)	510
第32表	機能別・器種別構成一覽表(舶載)	510
第33表	機能別・器種別構成一覽表(全体)	512
第34表	土師器・須恵器集計表	525

図 版 目 次

第1図	岩手県全図	1
第2図	遺跡の位置	3
第3図	遺跡付近の現況	5・6

第4図	昭和20年代の地籍図	7・8
第5図	郭ごと土層断面図(基本層序)	11・12
第6図	城館の位置図	19・20

第7図	グリッド配置図……………25・26	第39図	(30)D III d 1 建物跡……………69
第8図	推定される笹間館縄張り図…31・32	第40図	(32)D III e 2 建物跡— 1 ……69
第9図	土橋……………37	第41図	(33)D III e 2 建物跡……………70
第10図	(1)C II c 10 建物跡……………39	第42図	(34)D III e 7 建物跡……………71
第11図	(2)C II d 10 建物跡— 1 ……41	第43図	(31)D III e 1 建物跡……………72
第12図	(3)C II d 10 建物跡— 2 ……42	第44図	(35)D III h 4 建物跡……………73
第13図	(4)C II j 8 建物跡……………44	第45図	(36)D IV c 1 建物跡……………74
第14図	(5)C II j 10 建物跡……………45	第46図	(37)D IV d 2 建物跡……………74
第15図	(6)C III b 1 建物跡……………45	第47図	(38)C V b 10 建物跡……………75
第16図	(7)C III c 4 建物跡……………46	第48図	(39)C V e 7 建物跡……………76
第17図	(8)C III c 7 建物跡……………47	第49図	(40)C V e 8 建物跡— 1 ……78
第18図	(9)C III d 1 建物跡……………49	第50図	(41)C V e 8 建物跡— 2 ……79
第19図	(10)C III d 7 建物跡……………50	第51図	(42)C V f 6 建物跡……………80
第20図	(11)C III e 9 建物跡……………51・52	第52図	(43)C VI c 9 建物跡……………81
第21図	(12)C III h 6 建物跡……………51・52	第53図	(44)C VI d 4 建物跡……………81
第22図	(13)C III i 2 建物跡……………54	第54図	(45)C VI e 4 建物跡……………83
第23図	(14)C III i 4 建物跡……………54	第55図	(46)C VI e 9 建物跡……………84
第24図	(15)C III j 2 建物跡……………55	第56図	(47)C VI f 4 建物跡……………84
第25図	(16)C III j 5 建物跡……………56	第57図	(48)C VI f 5 建物跡……………85
第26図	(17)C III j 7 建物跡……………57	第58図	(49)C VI f 7 建物跡……………86
第27図	(18)C IV c 5 建物跡……………58	第59図	(50)C VI g 8 建物跡……………88
第28図	(19)C IV e 1 建物跡— 1 ……59	第60図	(51)C VI h 8 建物跡……………88
第29図	(20)C IV e 1 建物跡— 2 ……60	第61図	(52)C VI e 3 建物跡……………89
第30図	(21)D II a 6 建物跡……………61	第62図	(53)C VII f 1 建物跡— 1 ……90
第31図	(22)D II a 7 建物跡……………62	第63図	(54)C VII f 1 建物跡— 2 ……91
第32図	(23)D II d 10 建物跡……………63	第64図	(55)C VII f 6 建物跡……………92
第33図	(24)D II e 6 建物跡……………64	第65図	(56)C VII f 7 建物跡……………92
第34図	(25)D II h 8 建物跡……………65	第66図	(57)C VII g 2 建物跡……………93
第35図	(26)D II h 9 建物跡……………65	第67図	(58)C VII g 9 建物跡— 1 ……94
第36図	(27)D III i 8 建物跡……………66	第68図	(59)C VII g 9 建物跡— 2 ……94
第37図	(28)D III a 7 建物跡……………67	第69図	(60)C VII h 2 建物跡……………96
第38図	(29)D II b 1 建物跡……………68	第70図	(61)C VII j 2 建物跡……………96

第71图	(62) D V a 7 建物跡·····97	第103图	(15) C II g 6 土坑·····126
第72图	(64) D V b 8 建物跡·····98	第104图	(16) C II g 8 土坑·····127
第73图	(65) D V f 7 建物跡·····99	第105图	(17) C II h 8 土坑·····127
第74图	(66) D V f 9 建物跡·····99	第106图	(18) C II i 6 土坑·····128
第75图	(67) D VI b 5 建物跡·····100	第107图	(19) C II i 7 土坑·····129
第76图	(68) D VII a 1 建物跡·····101	第108图	(20) C III a 2 土坑—1·····131
第77图	(69) D VII a 3 建物跡·····103	第109图	(21) C III a 2 土坑—2·····131
第78图	(70) D VII b 1 建物跡·····104	第110图	(22) C III a 3 土坑·····132
第79图	(71) D VII b 4 建物跡·····105	第111图	(23) C III a 10土坑·····132
第80图	(72) D VII b 7 建物跡·····106	第112图	(24) C III b 6 土坑—1·····133
第81图	(1) C IV j 9 門跡—1 a·····107	第113图	(25) C III c 6 土坑·····134
	(2) C IV j 9 門跡—1 b·····107	第114图	(26) C III c 8 土坑·····134
第82图	(3) C IV j 9 門跡—2 a·····107	第115图	(27) C III c 9 土坑·····135
第83图	(4) C IV j 9 門跡—2 b·····108	第116图	(28) C III c 10土坑·····135
第84图	(5) C V a 7 門跡·····109	第117图	(29) C III d 7 土坑·····136
第85图	柱穴列·····111·112	第118图	(30) C III d 9 土坑·····136
第86图	(1) D II a 10 豎穴住居跡·····115	第119图	(31) C III f 4 土坑·····137
第87图	(2) C VI a 5 豎穴住居跡·····116	第120图	(32) C III g 4 土坑
第88图	(3) C VII d 7 豎穴住居跡·····117		(33) C III h 4 土坑—1·····138
第89图	(1) B II i 10土坑·····119	第121图	(34) C III h 4 土坑—2·····140
第90图	(2) B II j 9 土坑·····119	第122图	(35) C III i 9 土坑·····140
第91图	(3) B II j 10土坑·····119	第123图	(36) C III j 1 土坑·····141
第92图	(4) B IV j 3 土坑·····120	第124图	(37) C III j 4 土坑·····142
第93图	(5) B IV j 5 土坑·····126	第125图	(38) C IV a 5 土坑·····142
第94图	(6) C II a 9 土坑·····121	第126图	(39) C IV b 2 土坑·····142
第95图	(7) C II a 10土坑·····122	第127图	(40) C IV c 2 土坑·····143
第96图	(8) C II b 8 土坑·····122	第128图	(41) C IV d 3 土坑·····143
第97图	(9) C II b 9 土坑·····123	第129图	(42) C IV d 4 土坑·····145
第98图	(10) C II b 10土坑·····123	第130图	(43) C IV e 4 土坑·····145
第99图	(11) C II c 8 土坑·····124	第131图	(44) C IV h 1 土坑·····145
第100图	(12) C II d 8 土坑·····124	第132图	(45) D II a 5 土坑—1·····147
第101图	(13) C II e 7 土坑·····124	第133图	(46) D II a 5 土坑—2·····147
第102图	(14) C II f 7 土坑·····126		

第134图	(47)D II a 5 土坑—3	147	第166图	(80)D III j 8 土坑—2	169
第135图	(48)D II b 8 土坑	147	第167图	(81)D IV a 1 土坑	171
第136图	(49)D II d 9 土坑	147	第168图	(82)D IV a 2 土坑	171
第137图	(50)D II e 5 土坑	149	第169图	(83)D IV d 3 土坑	171
第138图	(51)D II f 5 土坑	149	第170图	(84)D IV e 2 土坑	171
第139图	(52)D II f 8 土坑—1	149	第171图	(85)D IV g 7 土坑	171
第140图	(53)D II f 8 土坑—2	151	第172图	(86)E II a 5 土坑	172
第141图	(54)D II h 5 土坑	151	第173图	(87)E II a 10 土坑	174
第142图	(55)D II i 5 土坑	151	第174图	(88)E II b 6 土坑	174
第143图	(56)D III f 3 土坑	153	第175图	(89)E III a 1 土坑	174
第144图	(57)D III f 8 土坑—1	153	第176图	(90)E III a 4 土坑	175
第145图	(58)D III f 8 土坑—2	153	第177图	(91)E III a 7 土坑	175
第146图	(59)D III g 3 土坑	153	第178图	(92)E IV b 1 土坑—1	175
第147图	(60)D III g 5 土坑—1 (61)D III g 5 土坑—2	153	第179图	(93)C V a 8 土坑	176
第148图	(62)D III g 6 土坑—1	155	第180图	(94)C V e 7 土坑—1	176
第149图	(63)D III g 6 土坑—2	155	第181图	(95)C V e 7 土坑—2	179
第150图	(64)D III g 6 土坑—2	157	第182图	(96)C V e 8 土坑	179
第151图	(65)D III h 2 土坑	158	第183图	(97)C V f 6 土坑	179
第152图	(66)D III h 3 土坑	158	第184图	(98)C V f 7 土坑	179
第153图	(67)D III h 8 土坑—1	159	第185图	(99)C V f 8 土坑	181
第154图	(68)D III h 8 土坑—2	160	第186图	(100)C V f 9 土坑	179
第155图	(69)D III i 1 土坑	161	第187图	(101)C V g 6 土坑	183
第156图	(70)D III i 3 土坑	162	第188图	(102)C V g 8 土坑	183
第157图	(71)D III i 4 土坑	163	第189图	(103)C V g 9 土坑—2	183
第158图	(72)D III i 5 土坑	163	第190图	(104)C V h 8 土坑	182
第159图	(73)D III i 7 土坑—2	165	第191图	(105)C V j 6 土坑	183
第160图	(74)D III i 8 土坑—1	165	第192图	(106)C V j 8 土坑	183
第161图	(75)D III i 9 土坑	165	第193图	(107)C V j 9 土坑—1 (108)C V j 9 土坑—2	185
第162图	(76)D III j 1 土坑	166	第194图	(109)C VI a 4 土坑	187
第163图	(77)D III j 2 土坑	167	第195图	(110)C VI b 5 土坑	189
第164图	(78)D III j 7 土坑—1	168	第196图	(111)C VI b 10 土坑	189
第165图	(79)D III j 8 土坑—1	169	第197图	(112)C VI c 6 土坑	190

第198图	(113)C VI c 7 土坑	191	第229图	(147)C VII c 6 土坑—2	212
第199图	(114)C VI d 6 土坑	191	第230图	(148)C VII d 1 土坑	212
第200图	(115)C VI d 7 土坑	191	第231图	(149)C VII d 2 土坑—1	212
第201图	(116)C VI d 9 土坑	193	第232图	(150)C VII d 2 土坑—2	213
第202图	(117)C VI e 4 土坑	193	第233图	(151)C VII d 3 土坑	213
第203图	(118)C VI e 2 土坑	194	第234图	(152)C VII d 5 土坑	214
第204图	(119)C VI e 8 土坑	194	第235图	(153)C VII d 7 土坑	215
第205图	(120)C VI g 6 土坑	195	第236图	(154)C VII d 10 土坑	215
第206图	(121)C VI g 8 土坑	195	第237图	(155)C VII e 2 土坑	217
第207图	(122)C VI i 9 土坑	197	第238图	(156)C VII e 3 土坑	217
第208图	(123)C VI i 10 土坑	197	第239图	(157)C VII e 4 土坑	217
第209图	(124)C VI j 4 土坑	199	第240图	(158)C VII e 7 土坑	219
第210图	(125)C VI j 5 土坑—1	199	第241图	(159)C VII R 8 土坑	219
第211图	(126)C VI j 5 土坑—2	199	第242图	(160)C VII g 9 土坑	220
第212图	(127)C VI j 6 土坑	200	第243图	(160)C VII h 8 土坑	220
第213图	(128)C VI j 8 土坑	200	第244图	(162)C VII h 10 土坑	220
第214图	(129)C VII a 1 土坑	200	第245图	(163)C VII i 9 土坑	221
第215图	(130)C VII a 3 土坑—1	200	第246图	(164)C VII j 1 土坑—1	221
第216图	(131)C VII a 3 土坑—2	200	第247图	(165)C VII j 1 土坑—2	223
第217图	(132)C VII a 3 土坑—3	203	第248图	(166)C VII j 7 土坑—1	223
第218图	(133)C VII a 4 土坑—1	203	第249图	(167)C VII j 7 土坑—2	223
第219图	(134)C VII a 4 土坑—2	203	第250图	(168)C VIII e 2 土坑	223
第220图	(135~138)C VII a 5 土坑— 1~4	204	第251图	(169)C III g 2 土坑	225
第221图	(139)C VII b 2 土坑	204	第252图	(170)D V a 6 土坑	225
第222图	(140)C VII b 3 土坑	206	第253图	(171)D V a 七土坑	225
第223图	(141)C VII b 6 土坑	207	第254图	(172)D V a 8 土坑	225
第224图	(142)C VII b 7 土坑—1	207	第255图	(173)D V a 9 土坑	225
第225图	(143)C VII b 8 土坑	207	第256图	(174)D V b 6 土坑	227
第226图	(144)C VII c 2 土坑	208	第257图	(175)D V b 9 土坑	227
第227图	(145)C VII c 5 土坑	209	第258图	(176)D V f 7 土坑	227
第228图	(146)C VII c 6 土坑—1	211	第259图	(177)D VI a 9 土坑	227
			第260图	(178)D VI a 10 土坑	227

第261図	(179)DVI b 3 土坑 ……………229	第293図	(4)C II h 8 周溝遺構 ……………265
第262図	(180)DVI c 5 土坑—1 ……………229	第294図	(5)C II h 10 周溝遺構 ……………265
第263図	(181)DVI c 5 土坑—2 ……………231	第295図	(6)C II i 8 周溝遺構 ……………266
第264図	(182)DVI c 6 土坑 ……………231	第296図	(7)C II i 9 周溝遺構 ……………267
第265図	(183)DVI d 4 土坑—1 ……………231	第297図	(8)C II j 7 周溝遺構……………268
第266図	(184)DVI d 4 土坑—2 ……………231	第298図	(9)C III h 1 周溝遺構 ……………268
第267図	(185)DVI d 5 土坑 ……………233	第299図	(10)C III h 2 周溝遺構 ……………269
第268図	(186)DVI e 2 土坑 ……………233	第300図	(11)C III h 3 周溝遺構 ……………269
第269図	(187)DVI h 3 土坑 ……………233	第301図	(12)C III h 4 周溝遺構 ……………270
第270図	(188)D VII a 1 土坑 ……………235	第302図	(13)D II a 8 周溝遺構 ……………271
第271図	(189)D VII b 2 土坑 ……………235	第303図	(14)D II b 6 周溝遺構 ……………272
第272図	(190)D VII b 3 土坑 ……………235	第304図	(15)D II e 6 周溝遺構 ……………272
第273図	(191)D VII b 4 土坑 ……………236	第305図	(16)D II f 6 周溝遺構 ……………274
第274図	(192)D VII b 6 土坑 ……………236	第306図	(17)D II g 6 周溝遺構 ……………275
第275図	(193)D VII c 7 土坑 ……………237	第307図	(18)D II h 6 周溝遺構 ……………275
第276図	(1)C II d 8 井戸跡 ……………239	第308図	蓄銭遺構 ……………276
第277図	(2)C II h 9 井戸跡 ……………239	第309図	B II j 9 塚 ……………276
第278図	(3)C IV a 7 井戸跡 ……………241	第310図	瀬戸・美濃系灰釉陶器—1 ……280
第279図	(4)C IV j 4 井戸跡 ……………241	第311図	瀬戸・美濃系灰釉陶器—2 ……284
第280図	(5)D IV c 8 井戸跡 ……………243	第312図	瀬戸・美濃系鉄釉陶器 ……………289
第281図	(6)C VII j 8 井戸跡 ……………243	第313図	唐津・朝鮮系陶器 ……………292
第282図	(7)C VII j 10 井戸跡 ……………243	第314図	その他国産陶器 ……………297
第283図	(8)D VII e 3 井戸跡 ……………244	第315図	瓦質陶器と土器 ……………300
第284図	(1)C VII i 8 竈状遺構 ……………248	第316図	中国磁器(青磁—1) ……………306
第285図	溝跡—1 ……………249	第317図	中国磁器(青磁—2) ……………307
第286図	溝跡—2 ……………251	第318図	中国磁器(青磁—3) ……………308
第287図	溝跡—3 ……………253・254	第319図	中国磁器(青磁—4) ……………309
第288図	溝跡—4 ……………257・258	第320図	中国磁器(白磁—1) ……………317
第289図	溝跡—5 ……………261・262	第321図	中国磁器(白磁—2) ……………318
第290図	(1)C II f 8 周溝遺構 ……………263	第322図	中国磁器(染付—1) ……………323
第291図	(2)C II g 7 周溝遺構 ……………265	第323図	中国磁器(染付—2) ……………324
第292図	(3)C II h 7 周溝遺構 ……………265	第324図	中国磁器(染付—3) ……………325

第325図	鉄釉陶器	329	第357図	その他の遺物	405
第326図	石製品(砥石-1)	332	第358図	(1)C IV c 4 土坑	411
第327図	石製品(砥石-2)	333	第359図	(2)D IV f 5 土坑	411
第328図	石製品(砥石-3)	334	第360図	(3)D IV f 6 土坑	411
第329図	石製品(砥石-4)	335	第361図	(4)E III b 6 土坑	411
第330図	石製品(砥石-5)	336	第362図	(5)E IV b 1 土坑-2	411
第331図	石製品(石臼-1)	340	第363図	(6)C V g 9 土坑-1	411
第332図	石製品(石臼-2)	341	第364図	(7)C VII i 2 土坑	412
第333図	石製品(石臼-3)	342	第365図	(8)C VII i 10土坑	412
第334図	石製品(硯-1)	345	第366図	(9)D VI b 9 土坑	413
第335図	石製品(硯-2)	346	第367図	溝跡	415・416
第336図	石製品(石鉢)	347	第368図	土師器・須恵器-1	421
第337図	その他の石製品-1	349	第369図	土師器・須恵器-2	422
第338図	その他の石製品-2	350	第370図	土師器・須恵器-3	423
第339図	使用痕をもつ礫	351	第371図	土師器・須恵器-4	424
第340図	漆製品	354	第372図	土師器・須恵器-5	425
第341図	木製品-1	359	第373図	土師器・須恵器-6	426
第342図	木製品-2	360	第374図	土師器・須恵器-7	427
第343図	木製品-3	361	第375図	土師器・須恵器-8	428
第344図	木製品-4	362	第376図	土師器・須恵器-9	429
第345図	木製品-5	363	第377図	土師器・須恵器-10	430
第346図	金属製品-1	370	第378図	土師器・須恵器-11	431
第347図	金属製品-2	371	第379図	土師器・須恵器-12	432
第348図	金属製品-3	372	第380図	土師器・須恵器-13	433
第349図	金属製品-4	373	第381図	(1)C III g 2 土坑	446
第350図	貨幣拓影-1	379	第382図	(2)C III h 2 土坑	446
第351図	貨幣拓影-2	380	第383図	(3)D III h 4 土坑	446
第352図	貨幣拓影-3	381	第384図	(4)D III h 6 土坑	446
第353図	貨幣拓影-4	382	第385図	(5)D III h 7 土坑	446
第354図	貨幣拓影-5	383	第386図	(6)D III i 7 土坑	446
第355図	貨幣拓影-6	384	第387図	(7)D III i 8 土坑	446
第356図	貨幣拓影-7	385	第388図	(8)D III j 7 土坑-2	447

第389図	(9)D III j 8 土坑— 3 …… 447	第421図	(26)E II a 10陥し穴状遺構 …… 458
第390図	(10)D IV d 9 土坑 …… 447	第422図	(1)C III g 1 陥し穴状遺構 …… 468
第391図	(11)E III a 7 土坑— 2 …… 447	第423図	(2)C III i 3 陥し穴状遺構 …… 468
第392図	(12)E III a 7 土坑— 3 …… 447	第424図	(3)C IV c 4 陥し穴状遺構 …… 468
第393図	(13)E IV a 4 土坑 …… 447	第425図	(4)C IV g 6 陥し穴状遺構 …… 468
第394図	(14)C VII d 9 土坑 …… 448	第426図	(5)D II a 8 陥し穴状遺構 …… 468
第395図	(15)C VII j 2 土坑 …… 448	第427図	(6)D II d 9 陥し穴状遺構 …… 468
第396図	(1)C III a 1 陥し穴状遺構 …… 455	第428図	(7)D II e 9 陥し穴状遺構 …… 468
第397図	(2)C III b 4 陥し穴状遺構 …… 455	第429図	(8)D III b 8 陥し穴状遺構 …… 469
第398図	(3)C III b 5 陥し穴状遺構 …… 455	第430図	(9)B V j 9 陥し穴状遺構 …… 469
第399図	(4)C III a 2 陥し穴状遺構 …… 455	第431図	(10)C V b 8 陥し穴状遺構 …… 469
第400図	(5)C III c 5 陥し穴状遺構 …… 455	第432図	(11)C V c 7 陥し穴状遺構 …… 469
第401図	(6)C III d 6 陥し穴状遺構 …… 455	第433図	(12)C V i 8 陥し穴状遺跡 …… 469
第402図	(7)C III j 10陥し穴状遺構 …… 455	第434図	(13)C VI d 10陥し穴状遺構 …… 469
第403図	(8)C IV b 9 陥し穴状遺構 …… 456	第435図	(14)C VI e 7 陥し穴状遺構 …… 469
第404図	(9)C IV b 10陥し穴状遺構 …… 456	第436図	(15)C VI h 7 陥し穴状遺構 …… 469
第405図	(10)C IV c 1 陥し穴状遺構 …… 456	第437図	(16)C VI i 6 陥し穴状遺構 …… 470
第406図	(11)C IV c 2 陥し穴状遺構 …… 456	第438図	(17)C VI i 7 陥し穴状遺構 …… 470
第407図	(12)C IV c 5 陥し穴状遺構 …… 456	第439図	(18)C VII d 1 陥し穴状遺構 …… 470
第408図	(13)C IV c 8 陥し穴状遺構 …… 456	第440図	(19)C VII d 2 陥し穴状遺構 …… 470
第409図	(14)C IV d 7 陥し穴状遺構 …… 457	第441図	(20)C VII j 1 陥し穴状遺構 …… 470
第410図	(15)D II j 10陥し穴状遺構 …… 457	第442図	(21)D V b 7 陥し穴状遺構 …… 470
第411図	(16)D III b 7 陥し穴状遺構 …… 457	第443図	(22)D V b 8 陥し穴状遺構 …… 470
第412図	(17)D III b 8 陥し穴状遺構 …… 457	第444図	(23)D V e 7 陥し穴状遺構 …… 470
第413図	(18)D III c 9 陥し穴状遺構 …… 457	第445図	(24)D V f 10陥し穴状遺構— 1 471
第414図	(19)D III d 3 陥し穴状遺構 …… 457	第446図	(25)D V f 10陥し穴状遺構— 2 471
第415図	(20)D III f 3 陥し穴状遺構 …… 457	第447図	(26)D V g 6 陥し穴状遺構 …… 471
第416図	(21)D III g 2 陥し穴状遺構 …… 457	第448図	(27)D V g 8 陥し穴状遺構 …… 471
第417図	(22)D III h 8 陥し穴状遺構 …… 458	第449図	(28)D V g 9 陥し穴状遺構 …… 471
第418図	(23)D III i 1 陥し穴状遺構 …… 458	第450図	(29)D V g 10陥し穴状遺構 …… 471
第419図	(24)D IV a 1 陥し穴状遺構 …… 458	第451図	(30)D V h 5 陥し穴状遺構 …… 471
第420図	(25)D IV b 2 陥し穴状遺構 …… 458	第452図	(31)D V h 7 陥し穴状遺構— 1 471

第453図	(32)D V h 7 陥し穴状遺構— 2	472	第465図	(44)D VII c 6 陥し穴状遺構	……473
第454図	(33)D V a 6 陥し穴状遺構	……472	第466図	(45)D VII d 5 陥し穴状遺構	……473
第455図	(34)D VI b 5 陥し穴状遺構	……472	第467図	(1)D II g 10 陥し穴状遺構	……475
第456図	(35)D VI b 6 陥し穴状遺構	……472	第468図	(2)D II i 10 陥し穴状遺構	……475
第457図	(36)D VI c 4 陥し穴状遺構	……472	第469図	(3)E II a 10 陥し穴状遺構— 2	475
第458図	(37)D VI c 5 陥し穴状遺構	……472	第470図	縄文土器— 1	……478
第459図	(38)D VI c 7 陥し穴状遺構	……472	第471図	縄文土器— 2	……479
第460図	(39)D VI c 8 陥し穴状遺構	……472	第472図	縄文土器— 1	……484
第461図	(40)D VI e 1 陥し穴状遺構	……473	第473図	縄文石器— 2	……485
第462図	(41)D VI e 2 陥し穴状遺構	……473	第474図	縄文石器— 3	……486
第463図	(42)D VI e 2 陥し穴状遺構	……473	第475図	陶磁器編年表	……515・516
第464図	(43)D VI f 1 陥し穴状遺構	……473	第476図	土師器・須恵器の各種	……523・524

袋詰図版目次

袋詰図版— 1	西館平面図— 1	袋詰図版— 6	東館平面図— 2
袋詰図版— 2	西館平面形— 2	袋詰図版— 7	東館平面図— 3
袋詰図版— 3	西館平面形— 3	袋詰図版— 8	東館平面図— 4
袋詰図版— 4	西館平面形— 4	袋詰図版— 9	建物跡遺構配置図
袋詰図版— 5	東館平面図— 1	袋詰図版— 10	陥し穴状遺構配置図

巻頭写真目次

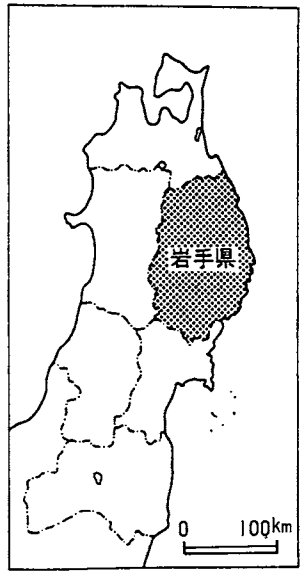
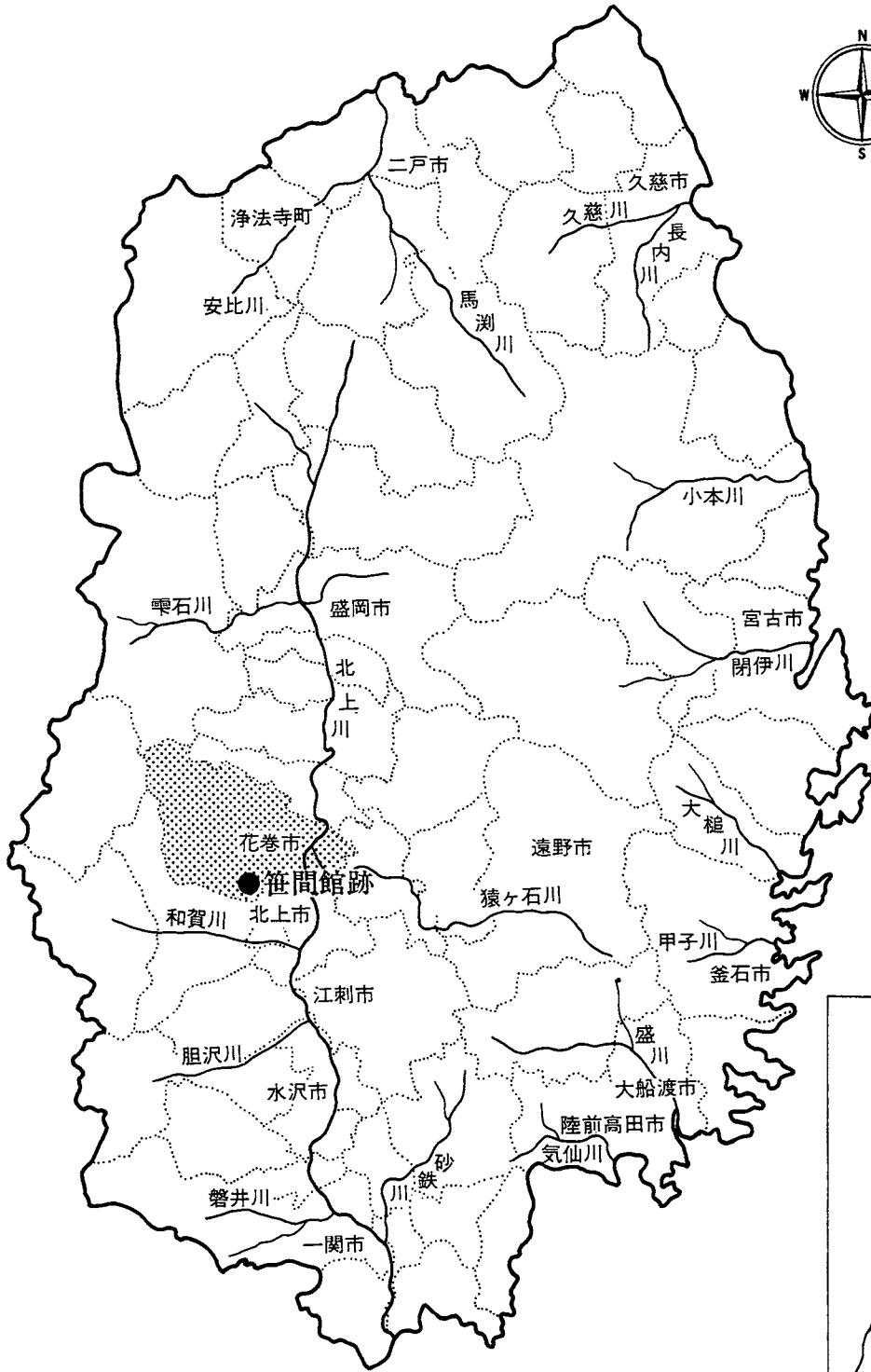
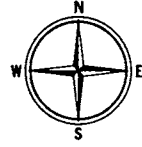
PL— 1	……①	PL— 7	……⑦
PL— 2	……②	PL— 8	……⑧
PL— 3	陶磁器— 中国青磁	PL— 9	……⑨
PL— 4	陶磁器— 中国青磁	PL— 10	……⑩
PL— 5	陶磁器— 中国青磁	PL— 11	……⑪
PL— 6	……⑥	PL— 12	……⑫

写真図版目次

写真図版 1	遺跡全景 (航空写真)	……543	写真図版 4	昭和21年の航空写真	……546
写真図版 2	西館全景 (航空写真)	……544	写真図版 5	調査前の現況	……547
写真図版 3	東館全景 (航空写真)	……545	写真図版 6	調査風景と現地説明会	……548

写真図版 7	法面の状況と土層…………… 549	写真図版39	中世—31 (土坑—22) …… 581
写真図版 8	中世— 1 (堀跡) …… 550	写真図版40	中世—32 (土坑—23) …… 582
写真図版 9	中世— 2 (外堀と土橋) …… 551	写真図版41	中世—33 (土坑—24) …… 583
写真図版10	中世— 3 (建物跡— 1) …… 552	写真図版42	中世—33 (土坑—25) …… 584
写真図版11	中世— 4 (建物跡— 2) …… 553	写真図版43	中世—35 (井戸— 1) …… 585
写真図版12	中世— 5 (建物跡— 3) …… 554	写真図版44	中世—36 (井戸— 2) …… 586
写真図版13	中世— 6 (建物跡— 4) …… 555	写真図版45	中世—37 (井戸— 3) …… 587
写真図版14	中世— 7 (建物跡— 5) …… 556	写真図版46	中世—38 (落ち込み遺構) 588
写真図版15	中世— 8 (門跡) …… 557	写真図版47	中世—39 (竈跡・塚) …… 589
写真図版16	中世— 9 (門跡・住居跡) …… 558	写真図版48	中世—40 (溝跡— 1) …… 590
写真図版17	中世—10 (竪穴住居跡) …… 559	写真図版49	中世—41 (溝跡— 2) …… 591
写真図版18	中世—11 (土坑— 1) …… 560	写真図版50	中世—42 (溝跡— 3) …… 592
写真図版19	中世—12 (土坑— 2) …… 561	写真図版51	中世—43 (溝跡— 4) …… 593
写真図版20	中世—13 (土坑— 3) …… 562	写真図版52	中世—44 (周溝— 1) …… 594
写真図版21	中世—14 (土坑— 4) …… 563	写真図版53	中世—45 (周溝— 2) …… 595
写真図版22	中世—15 (土坑— 5) …… 564	写真図版54	中世—46 (周溝— 3) …… 596
写真図版23	中世—16 (土坑— 6) …… 565	写真図版55	中世—47 (蓄銭遺構) …… 597
写真図版24	中世—17 (土坑— 7) …… 566	写真図版56	古代— 1 (土坑) …… 598
写真図版25	中世—18 (土坑— 8) …… 567	写真図版57	古代— 2 (土坑・溝跡) …… 599
写真図版26	中世—19 (土坑— 9) …… 568	写真図版58	古代— 3 (溝跡) …… 600
写真図版27	中世—20 (土坑—10) …… 569	写真図版59	縄文— 1 (土坑) …… 601
写真図版28	中世—21 (土坑—11) …… 570	写真図版60	縄文— 2 (土坑) …… 602
写真図版29	中世—22 (土坑—12) …… 571	写真図版61	縄文— 3 (陥し穴遺構) …… 603
写真図版30	中世—23 (土坑—13) …… 572	写真図版62	縄文— 4 (陥し穴状遺構) …… 604
写真図版31	中世—24 (土坑—14) …… 573	写真図版63	縄文— 5 (陥し穴状遺構) …… 605
写真図版32	中世—25 (土坑—15) …… 574	写真図版64	縄文— 6 (陥し穴状遺構) …… 606
写真図版33	中世—26 (土坑—16) …… 575	写真図版65	縄文— 7 (陥し穴状遺構) …… 607
写真図版34	中世—27 (土坑—17) …… 576	写真図版66	縄文— 8 (陥し穴状遺構) …… 608
写真図版35	中世—27 (土坑—18) …… 577	写真図版67	縄文— 9 (陥し穴状遺構) …… 609
写真図版36	中世—28 (土坑—19) …… 578	写真図版68	縄文—10 (陥し穴状遺構) …… 610
写真図版37	中世—29 (土坑—20) …… 579	写真図版69	縄文—11 (陥し穴状遺構) …… 611
写真図版38	中世—30 (土坑—21) …… 580	写真図版70	縄文—12 (陥し穴状遺構) …… 612

写真図版71	瀬戸・美濃系灰釉陶器(1)…613	写真図版103	漆器(1) ……645
写真図版72	瀬戸・美濃系灰釉陶器(2)…614	写真図版104	漆器(2)・木製品(1) ……646
写真図版73	瀬戸・美濃系灰釉陶器(3)…615	写真図版105	木製品(2) ……647
写真図版74	瀬戸・美濃系灰釉陶器(4)…616	写真図版106	木製品(3) ……648
写真図版75	瀬戸 美濃系鉄釉陶器(1)…617	写真図版107	木製品(4) ……649
写真図版76	瀬戸・美濃系鉄釉陶器(2)…618	写真図版108	その他の遺物 ……650
写真図版77	瀬戸・美濃系鉄釉陶器(3)…619 唐津系陶器	写真図版109	金属製品(1) ……651
写真図版78	朝鮮陶器・他の国産陶器(1) ……620	写真図版110	金属製品(2) ……652
写真図版79	他の陶器(2)、カワラケ……621	写真図版111	金属製品(3) ……653
写真図版80	青磁(1)……622	写真図版112	金属製品(4) ……654
写真図版81	青磁(2)……623	写真図版113	金属製品(5) ……655
写真図版82	青磁(3)……624	写真図版114	金属製品(6) ……656
写真図版83	青磁(4)……625	写真図版115	貨幣(1) ……657
写真図版84	青磁(5)……626	写真図版116	貨幣(2) ……658
写真図版85	青磁(6)……627	写真図版117	貨幣(3) ……659
写真図版86	青磁(7)・白磁(1)……628	写真図版118	貨幣(4) ……660
写真図版87	白磁(2)……629	写真図版119	貨幣(5) ……661
写真図版88	白磁(3)・青白磁・染付(1)……630	写真図版120	貨幣(6) ……662
写真図版89	染付(2)……631	写真図版121	貨幣(7) ……663
写真図版90	染付(3)……632	写真図版122	貨幣(8) ……664
写真図版91	染付(4)・鉄釉(1)……633	写真図版123	貨幣(9) ……665
写真図版92	鉄釉(2)・砥石(1)……634	写真図版124	須恵器(1) ……666
写真図版93	砥石(2)……635	写真図版125	須恵器(2) ……667
写真図版94	砥石(3)……636	写真図版126	須恵器(3) ……668
写真図版95	砥石(4)……637	写真図版127	須恵器(4)・土師器(1) ……669
写真図版96	砥石(5)・石臼(1)……638	写真図版128	須恵器(5)・土師器(2) ……670
写真図版97	石臼(2)……639	写真図版129	須恵器(6)・土師器(3) ……671
写真図版98	石臼(3)・石鉢(1)……640	写真図版130	須恵器(7)・土師器(4) ……672
写真図版99	石鉢(2)・使用痕ある石器(1) ……641	写真図版131	縄文土器(1) ……673
写真図版100	使用痕ある石器(2) その他石製品(1) ……642	写真図版132	縄文土器(2) ……674
写真図版101	その他の石製品(1) ……643	写真図版133	縄文時代の石器(1) ……675
写真図版102	硯 ……644	写真図版134	縄文時代の石器(2) ……676



第1図 岩手県全図

I 調査に至る経過

花巻市笹間地区のほ場整備事業は岩手県が事業主体となり、昭和56年に計画された事業であり、翌57年に着工し、昭和65年完了の予定である。

これに関連する埋蔵文化財の調査は、昭和56年5月から岩手県農政部と岩手県教育委員会文化課との間で調整が行われた。その間の経過は、以下のとおりである。

昭和56年5月6日付け 構第204号 岩手県農政部から岩手県教育長あて依頼

県営ほ場整備事業笹間地区に係る埋蔵文化財の分布状況について

昭和57年4月26日付け 教文第82号 岩手県教育長から岩手県農政部長あて回答

県営ほ場整備事業笹間地区に係る埋蔵文化財の分布状況について

昭和60年9月27日付け 農整第386号 岩手県農政部長から岩手県教育長あて依頼

埋蔵文化財に係る現地調査依頼について

昭和60年10月7日 岩手県教育委員会文化課による現地調査

昭和60年10月9日付け 教文第376号 岩手県教育長から岩手県農政部長あて回答

埋蔵文化財に係る現地調査について

昭和60年10月17日付け 花土地第378号 花巻土地改良事業所長から岩手県教育長あて依頼

笹間館遺跡の現地調査依頼について

昭和60年10月31日 岩手県教育委員会文化課による試掘調査実施

昭和60年11月5日付け 教文第432号 岩手県教育長から花巻土地改良事業所長あて回答

笹間館遺跡の現地調査について この中で現状地形を保持する工法をとることとする。

昭和60年12月12日

花巻土地改良事業所と岩手県教育委員会文化課との取扱い協議において、地権者の削平要望の強いことが説明される。

昭和60年12月13日付け 花土地第455号 花巻土地改良事業所長から岩手県教育長あて協議書

笹間地区ほ場整備事業に伴う笹間館遺跡の一部地区編入について（陳情書付き）

昭和60年12月17日付け 教文第516号 岩手県教育長から花巻土地改良事業所長あて回答

県営ほ場整備事業に伴う花巻市笹間館跡の取り扱いについて

これにより笹間館跡の調査は、昭和61年度における岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターの発掘調査計画にくみ入れられ、花巻土地改良事業所の委託をうけた当センターが昭和61年4月1日付け契約により、調査に着手することとなった。

II 位置と立地及び環境

1 位置と立地

〔位置〕 (第1・2図)

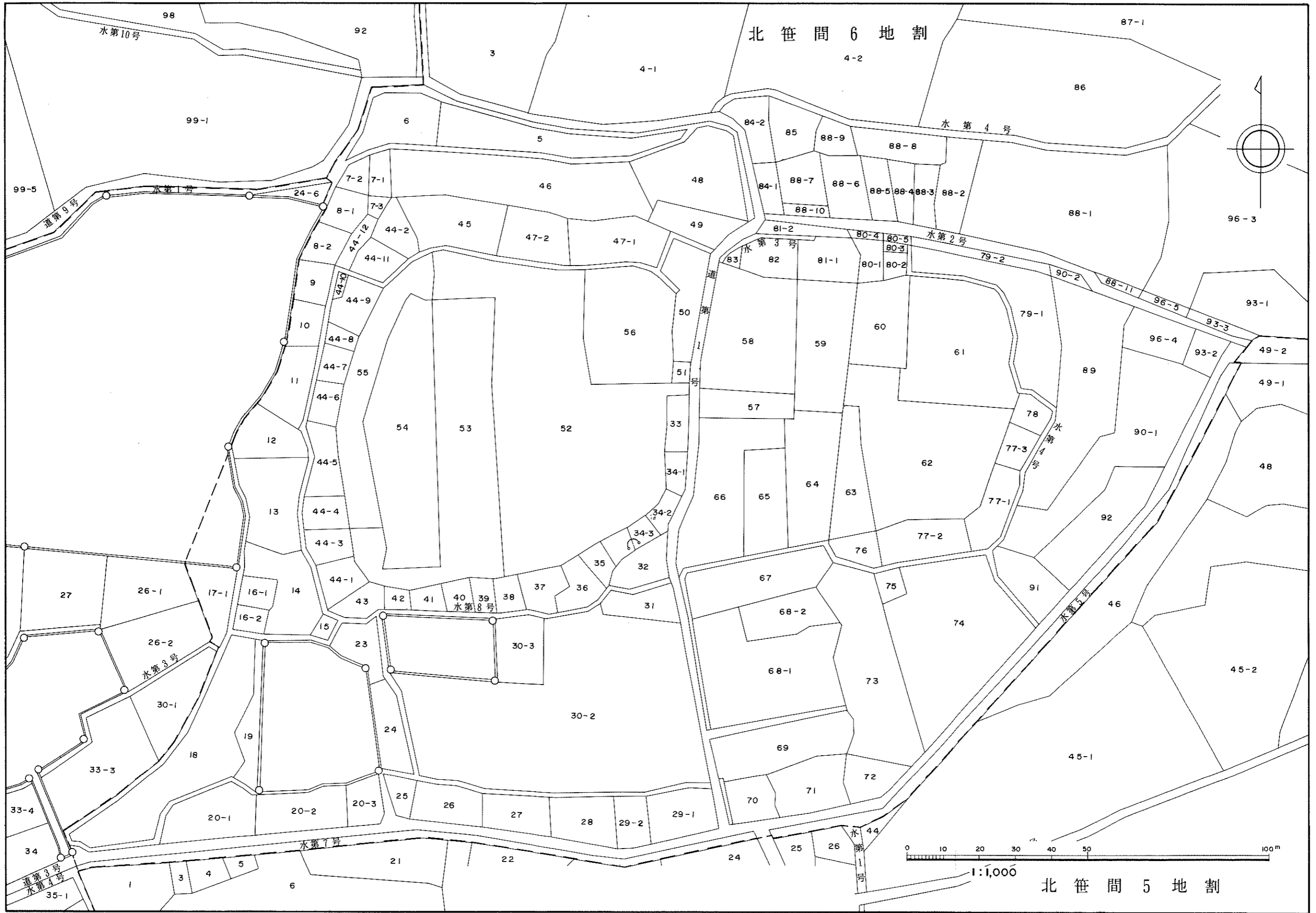
笹間館跡は花巻市北笹間第6地割字槐田60番地を中心とする場所にあり、東日本旅客鉄道株式会社東北本線「花巻駅」の南西7km、同線「北上駅」の北西9kmに位置する。花巻市は、北上川の中流域で県の中央部に北西から南東に長い東西29.5km、南北27.5km、面積384.73km²を有し、人口74,000人強の市である。当市は、昭和29年に当時稗貫郡南部の花巻町・湯本村、矢沢村、宮野目村、太田村の1町4村が合併して市制を施行した。さらに、翌30年には当城館が位置する笹間村とも合併して現在に至る。花巻市北笹間地区は市の南西部を占め、東から南東部が北上市飯豊や同市村崎野と境を接し、他の周囲は当市中笹間・栃内・轟木・太田に囲まれている。旧笹間村は和賀郡に所属し、南笹間・中笹間・北笹間・栃内・轟木・横志田・尻平の7村が合併して成立した村で、江戸時代には独立した北笹間村と呼ばれていた。

県都盛岡市の中心部から約35.5km南に位置する既述の東北本線「花巻駅」から、岩手県交通株式会社バス路線「花巻駅―笹間農協」線や「花巻駅―尻平川」線を利用して「笹間第一小学校」前で下車し、東方へ約1.2km進むと曹洞宗東光寺に至り、遺跡はこの東光寺の東方200mに約40,000m²の広さをもって所在する。

〔立地と地形及び周囲の環境〕 (第3・4図)

花巻市は、東部を南流する北上川を境にして地形が大きく分けられる。東側は北上山地の西側丘陵地域にあたり、古生層の花崗岩類、蛇紋岩、安山岩、鮮新世の砂岩や頁岩を基岩とする山地や丘陵地が入り組んで発達している。山地は標高476mの権現山を主峰とする標高300m前後が主体で、丘陵地は標高300m～150mである。台地は、山地や丘陵地を開析して西流する北上川の支流猿ヶ石川、稗貫川等の流路に沿って、小規模な河岸段丘として観察されるが、その発達は不良である。一方、西側は急峻で起伏の大きい奥羽山脈が分布し、その東縁の断層崖下には新旧の扇状地が発達している。奥羽山脈の東側斜面を水源とする豊沢川・宇南川・和賀川等の諸河川は急勾配で北上川に合流し、これらの河川的作用によって形成された扇状地性の段丘状を示す台地は新旧3段が認められ、特に中位と下位の面が広面積で良く保存されているが、所謂一般的な形での河岸段丘は発達不良である。

上面面は、西部山地東縁の丘陵地域や北上川河谷低地に面した扇状地性台地の末端部に小面



第4図 昭和20年代の地籍図

積分布する。中位面は、北上川の支流豊沢川と和賀川の間南北約10kmに、周囲を低位面に囲まれたゆるやかな起伏をもった開析扇状地面をなし、中川久夫他（1963）の村崎野段丘に相当するのであろう。下位面は、北上川右岸の扇状地性台地の広い部分を占め、豊沢川の山地から出た付近では数mの礫層を被り、扇頂部付近の下位面は地表面に巨礫が露出し、新期の形成であることを示唆する。

笹間館は、奥羽山脈東側山群の一角をなす南から明倉山（800.5m）、八方山（716.6m）、天ヶ森（806.9m）、五間ヶ森（568.5m）等の東側山裾から東方に延びる標高99.5m～100.5mを示す中位面の東端に立地する。以下に遺跡の周囲に限定してその環境を概観する。

西側は当城館の載る中位面と同位の地形が西に寄るほど標高を高くして続き、最奥部との比高は約30mである。北側には中位面を開析する沢による比高約2mの低地が入り、上流部は埋積して幅1m位の小川となっている。東側は南側を開析する沢と北側のそれが合流し、半湿地状の低地が連続する。南側は現在寺田堰が東流するが、この用水堰は当城館の立地する地形面を開析する自然の沢跡を利用したものである。現在、当城館の北側約170mを宇南川（北上市域は飯豊川）が東流するものの、本来は現在地より約700m南にあった流れを変えたものであるという。その時期は明確でないが、昭和21年撮影の空中写真には現在地に写し出されていることから、昭和20年以前の工事であることは確実である。調査時点の当城館内を含む周辺地域は屋敷地と小面積の畑地を除くと他はすべて水田であったが、昭和35年頃までは当城館内は水利の関係で「館畑」と呼ばれる畑地として耕作されていたが、昭和30年代後半の開田ブームの際に西側外堀の一部を埋め戻して道路と水路を設けて水田にした。昭和10年代には、笹間地区の台地や微高地は屋敷地や畑・山林であったと言われ、その後宇南川の流路を、それまでの低地から現在地の高い面に変更したことにより、台地部分の開田が大きく進み、現在の状況になったという。

〈引用文献〉 「土地分類基本調査」 岩手県企画開発室 1976年

〔地 質〕 (第5図)

当城館が立地する中位段丘相当面の扇状地性台地の構成層は、砂及び粘土を基質とする礫層で、この上面を黄褐色～赤褐色の火山灰層が覆い、火山灰層には村崎野浮石と呼ばれる粗粒浮石層の介在する場合が多い。

既述のとおり、本城館は昭和35年頃にそれまで畑であったものを水田に直している。この際の重機による攪乱によって土層が大きく乱れている。特にこの状況は西館において顕著である。調査時の標高が西館は100.5m、東館99.5mと、両館の間に1m位の比高がみられるものの、粗掘りの状況から判断すると、西館は30cm前後の耕作土を除去すると黄褐色火山灰土が露出する

ことと、東館の場合の耕作土下に黒褐色土の自然堆積層が部分的に認められる状況を比較すると、本来は西館の標高がもっと高く、開田時の重機による削平が強かったことを示すものと考えられる。各館を限る四周の法面には、西館の西側法面を除くと黒色土系の土が厚く堆積し、郭面の黒色土が四周の法面と内堀に落され、水田面積を拡張したり農道を敷設されたものらしい。

以上のことを留意して以下に本城館跡で観察された層序について記すこととする。なお、層位は上位からローマ数字でⅠ・Ⅱ層とした。

- I 層——現在の表土で耕作土として利用されている。本来の表土ではなく、開田時にそれまでの表土と地山の黄褐色粘土質火山灰土粒が混合した土を基調とし、その後の耕作によって腐植質と混じり合って暗褐色～黒褐色をなす。砂粒や径5cm以下の小礫が混入し、粘性があり比較的締りの良い土である。ほぼ遺跡全面を被うが、西館は層厚が20cm～35cmで黄褐色火山灰土粒の混入が多いのに対し、東館の場合は層厚25cm～40cmと若干厚く、さらに火山灰土の混入が少ないという差がみられる。本層には中世～古代の遺物が数多く包含され、遺構に共伴しない遺物のほとんどが本層からの出土である。
- II 層——開田時の表土と考えられる土層で、西館の東西に走る農道の部分と東館北西部、各館の四周法面に観察される。最大層厚10cmと薄層が多い。色は黒褐色を示し、砂粒や地山粒を混入しない。中世～古代の遺物が若干と縄文土器が出土している。
- III 層——地山の黄褐色～赤褐色を示す火山灰土で、遺跡全面を層厚30cm～50cmで被う。粗粒浮石の混在は認められない。上面が削平を受けている地域が多い。下位ほど粘性が強く、色調も淡色となる。無遺物層である。
- IV 層——白色粘土混じりの砂礫層であるが、層厚は確認していない。無遺物層である。

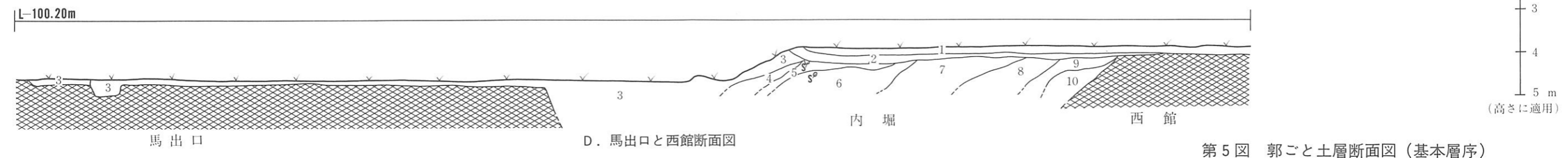
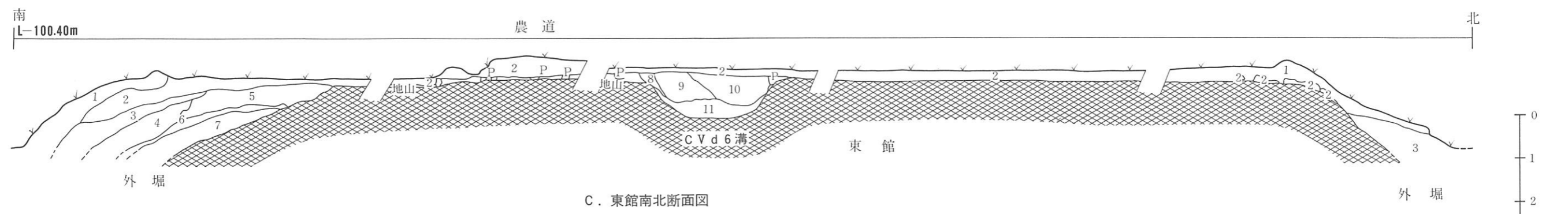
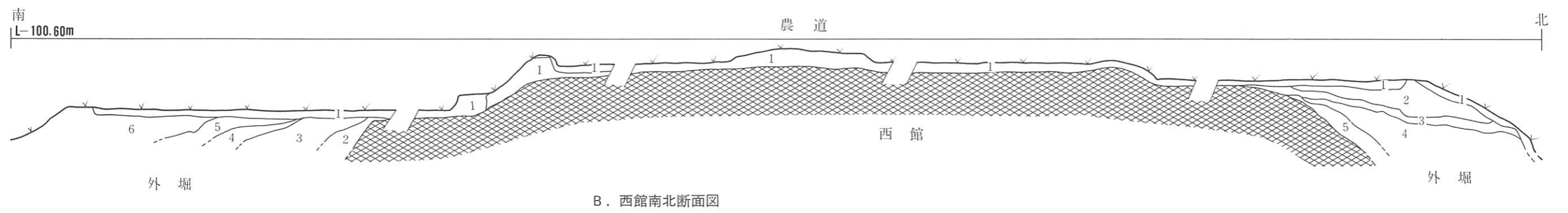
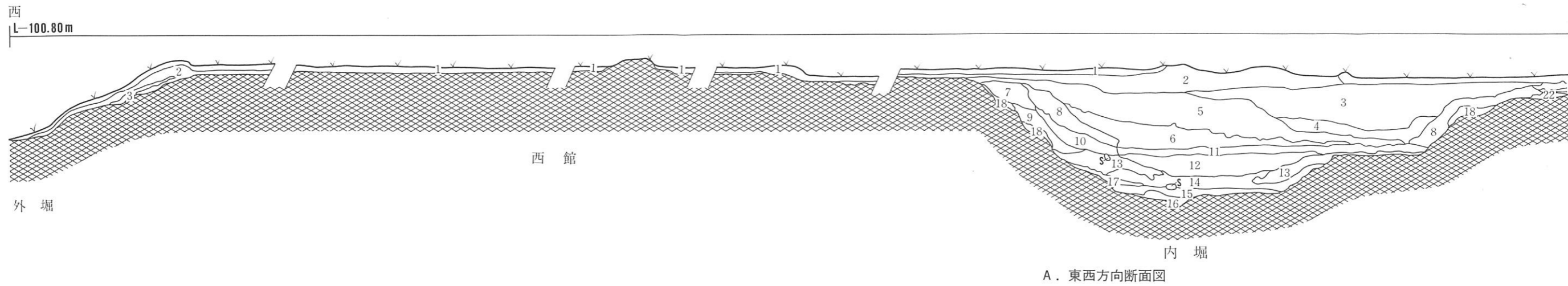
以上が本城館で観察された層序であるが、発掘調査で検出された遺構や遺物の関係を見ると次のようである。

既述のとおり開田時の削平によってかつての表土の遺存状況が悪く、ほとんどの場合は時代に関係なくⅢ層上面で検出されたが、縄文時代に属する陥し穴状遺構の一部が東館北西部のⅡ層上面でその存在が確認されていることから考えると、Ⅱ層は縄文時代の堆積土である可能性を示すものであろう。このような状況は、既述した遺物の出土状況とも矛盾するものではない。

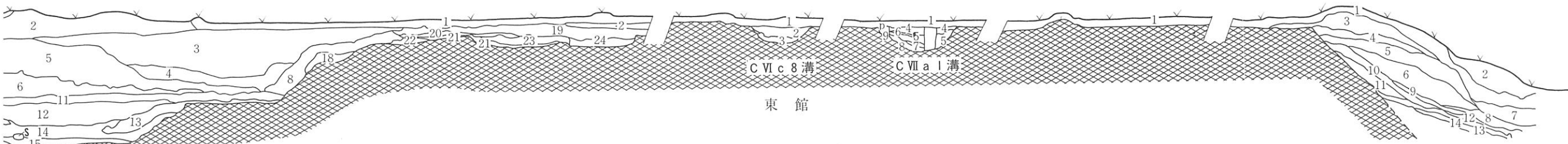
2 歴史的な環境

1) 文献にみる和賀氏と笹間村

当笹間館跡の位置する旧笹間村は、弘仁2年(811)に和賀郡が建郡された後昭和30年までそ



第5図 郭ごと土層断面図 (基本層序)



内堀

外堀

東館

西館南北ベルト (南側法面)

- 1 10Y R 4/2 灰黄色 ~にぶい黄褐色シルト、水田の耕作土
- 2 10Y R 4/4 褐色 火山灰土、炭が若干混入
- 3 7.5Y R 3/4 暗褐色 シルト、淡黄色粘土や黄褐色土が粒状に多く混入
- 4 7.5Y R 4/4 褐色 シルト、淡黄色粘土が粒状に混入、炭を若干含む
- 5 10Y R 3/2 黒褐色 シルト
- 6 10Y R 2/3 黒褐色 シルト、黄褐色土や淡黄色粘土がブロック状に多く混入、水田造成の盛り土

内堀断面

- 1 10Y R 3/2 黒褐色 シルト、耕作土、植生根多い
- 2 10Y R 2/2 黒褐色 シルト、褐色土がブロックで混入、1~5cmの礫が混入
- 3 10Y R 4/6 褐色 火山灰土、粘土質土がブロックで混入
- 4 10Y R 3/3 暗褐色 シルト、褐色土がブロックで混入
- 5 10Y R 3/1 黒褐色 シルト、2~4cmの礫が混入、炭化物若干含む
- 6 10Y R 3/3 暗褐色 シルト、4と同じ
- 7 10Y R 2/3 黒褐色 シルト、黄褐色土が小ブロックで混入
- 8 10Y R 2/2 黒褐色 シルト、黄褐色土が粒状に混入、鉄分植物根有
- 9 10Y R 2/3 黒褐色 シルト
- 10 2.5Y 4/2 暗灰黄色 シルト
- 11 2.5Y 3/1 黒褐色 シルト、植物の腐植層、苗床の使用面
- 12 2.5Y 1.7/1 黒色 土 最下部に植物の腐植層がある
- 13 5Y 3/1 オリーブ黒色 粘土質土と黒褐色砂質土との層、植物混入
- 14 5Y 2/1 黒色 粘土質土、植物と礫が若干混入
- 15 5Y 2/1 黒色 粘土質土、植物と礫は微量
- 16 7.5Y 3/2 オリーブ黒色 粘土、17が混入
- 17 10G 6/1 緑灰黄色 粘土
- 18 2.5Y 7/4 浅黄褐色 粘土
- 19 10Y R 2/2 黒褐色 シルト、1~3の礫や炭若干混入
- 20 2.5Y 6/4 にぶい黄色 粘土、0.5~2cmの礫が混入
- 21 10Y R 4/2 灰黄褐色 シルト、鉄分混入
- 22 10Y R 6/6 明褐色 火山灰土
- 23 2.5Y 7/4 浅黄褐色 粘土とにぶい黄褐色土のブロック土の混入
- 24 10Y R 2/2 黒褐色 シルト、にぶい黄褐色土や炭が若干混入

東館・東西ベルト (東側法面)

- 1 10Y R 2/3 黒褐色 ~暗褐色シルト、耕作土及び表土、炭化物や植生根が多い、黄褐色土がまだらに混入
- 2 10Y R 5/8 黄褐色 火山灰土と暗褐色土との混入、後世の盛り土
- 3 10Y R 3/2 黒褐色 シルト、小石や炭が若干混入、旧表土か
- 4 10Y R 3/4 暗褐色 シルト、小石や炭が若干混入
- 5 10Y R 4/4 褐色 火山灰土、炭化物若干混入
- 6 10Y R 4/3 にぶい黄褐色 火山灰土と淡黄色粘土との混入、埋めた土層か
- 7 10Y R 2/2 黒褐色 シルト、泥質、苗代の土
- 8 2.5Y 4/1 黄灰褐色 粘土と緑灰色粘土と灰白色粘土との混入、緑灰色砂質土がブロックで混入
- 9 2.5Y 7/6 明黄褐色 粘土
- 10 10Y R 2/3 暗褐色 粘土質シルト、淡黄色粘土若干混入
- 11 10Y R 3/4 暗褐色 粘土質シルト
- 12 7.5GY 7/1 明緑灰色 粘土、暗褐色土が若干混入
- 13 10Y R 2/2 黒褐色 シルト、泥質
- 14 2.5Y 4/1 黄灰褐色 粘土、青灰色砂質粘土がまだらに混入

西館・南ベルト (北側法面)

- 1 10Y R 2/2 黒褐色 シルト、耕作土及び表土、黄褐色土がまだらに混入、炭を含む
- 2 10Y R 2/2 黒褐色 シルトと黄褐色土との混入、黒色土も混入、炭を含む、水田造成の際の盛り土か
- 3 10Y R 2/3 黒褐色 シルト、均質な層、水田造成前の表土か
- 4 10Y R 4/4 褐色 ~暗褐色シルト、黄褐色土や淡黄色土が粒状に混入、炭を含む
- 5 10Y R 2/2 黒褐色 シルト、黄褐色土や淡黄色土が若干混入する

東館・南北ベルト (南側法面)

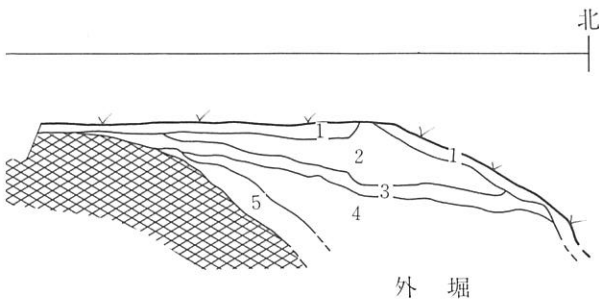
- 1 10Y R 3/2~3/3 黒褐色~暗褐色 シルト、表土、植生根多し
- 2 10Y R 4/4~3/4 褐色~暗褐色 シルト、耕作土、小石や黄褐色土が混入
- 3 10Y R 3/3~2/3 暗褐色~黒褐色 シルト、小石が多く混入
- 4 10Y R 2/3 黒褐色 シルト、小石や炭が若干混入
- 5 10Y R 6/8 明黄褐色 火山灰土と暗褐色土との混入、盛り土か
- 6 10Y R 2/2 黒褐色 粘土質土、酸化して赤変がみられる
- 7 5Y 6/3 オリーブ黄色 シルト質粘土、下半は粘土、かたい

西館・東西ベルト (西側法面)

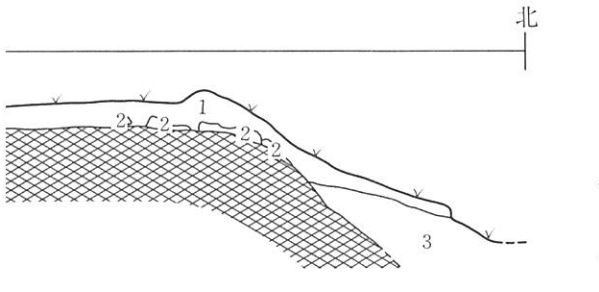
- 1 10Y R 2/2 黒褐色 シルト、表土及び耕作土、植生根多し
- 2 10Y R 5/6 明褐色 火山灰土と黒褐色土半々の混入、盛り土
- 3 5Y 8/3 淡黄色 粘土、黒褐色土が混入、盛り土
- 4 10Y R 2/2 黒褐色 シルト、内堀の埋土

馬出口と西館断面 (内堀)

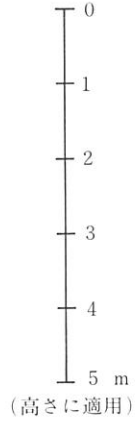
- 1 10Y R 3/3 暗褐色 シルト、耕作土、黄褐色土が多く混入
- 2 10Y R 5/6 黄褐色 火山灰土、黒褐色土がブロック状に混入、水田造成の盛り土
- 3 10Y R 3/2 黒褐色 シルト、表土及び耕作土、1層に近い
- 4 10Y R 2/2 黒褐色 シルト、黄褐色土が粒状に混入
- 5 黄褐色 火山灰土と黒褐色土半々の混入
- 6 10Y R 2/3 黒褐色 シルト、淡黄色粘土や黄褐色土が多く混入
- 7 10Y R 2/3 黒褐色 シルト
- 8 10Y R 2/3 暗褐色 シルト、淡黄色粘土が混入、6層に似る
- 9 10Y R 2/2 黒褐色 シルト
- 10 10Y R 3/2 暗褐色 シルト、黄褐色土や淡黄色土が多く混入



外堀



外堀



(高さに適用)

東館・南北ベルト (北側法面)

- 1 10Y R 2/2 黒褐色 シルト、耕作土、植生根多い、小石や炭を含む
- 2 10Y R 3/3 暗褐色 シルトと黄褐色土との混入
- 3 10Y R 3/3 暗褐色 シルト、黄褐色土が粒状に混入、小石や炭を含む

※注
 実測図はA~Dまで縮尺 100分の1となっている。しかし、A土層図は、西館西端から東館東端まで連続した黄間館全体の東西断面図のため総延長 190mと非常に長く、全てを掲載することが困難のため、土層や高低に変化のない部分は省略し、全体の長さを短縮してある。
 南北断面図は短縮していない。

第5図 郭ごと土層断面図 (基本層序)

の一部をなし、中世には和賀氏の領地であったとされていることから、『岩手県史』、『北上市史』、『和賀町史』の中から旧笹間村の歴史的な背景を概観し、当笹間館跡の位置づけを明らかにしておきたい。

歴史上に和賀地方に関する事蹟が出て来るのは『続日本紀』天平9年(737)4月10日条に記載される帰服の狄「^{わがのみまけあるい}和我君計安壘」という人名が初出である。和我が現在の和賀に通じることから和賀地方出身の人物であろうとされている。その後、延暦21年(802)に胆沢城、翌同22年(803)に志和城が創建され、当和賀地方を含む盛岡市付近までが、それまでの化外の地から律令制社会に組み込まれた。『日本後記』弘仁2年(811)正月11日条に「於_{陸奥國}。置_{和賀}。葍縫。斯波三郡」の記事がみえ、この年に盛岡市付近まで郡制がしかれた。これらのことから、和賀と言う地名は奈良時代初期の成立と推定されるが、地域的な範囲を示す地名として和賀がでてくる最初の記事である。

『吾妻鏡』によれば、平氏を滅亡させた源頼朝は我が弟義経の力を恐れて、義経と義経が逗留していた奥州平泉の藤原氏を討つべく、文治5年(1189)7月28万4,000人の将兵を引き連れ奥州に攻め下り、平泉はおろか藤原氏の領地すべてを手に入れる結果となった。頼朝は、この文治5年の役によって欠所になった磐井郡(現在の一関市付近)以北を、鎌倉御家人と呼ばれる関東武士に論功行賞として分け与えた。この時、和賀郡が誰に与えられたか『吾妻鏡』に記載はないが、『松川小原氏系図「和賀氏之託文」』によると、和賀三郎新左衛門尉、従五位下薩摩守義治(義春?)が「文治5年8月、軍功によって和賀郡に食邑五千余町賜わり、岩崎城に居城した」と記され、鎌倉時代初期から和賀氏の領地と伝えている。一方、和賀氏の一族鬼柳氏が伝えた『鬼柳文書』の中に残る和賀泰義と同景行の相論に添えられた系図では、出自を小野姓中条氏と伝え、苅田郡を領有して苅田氏となり、三代目の左衛門入道義行が初めて和賀氏を称したとあり、先の松川系図とは異なる書き方をしている。『続群書類従』巻第7系図部所載の「小野氏系図」によると、義行の父義季は中条成尋の二男で隣りの稗貫郡の領主となった中条家長の弟と記され、出羽國小田島郡を領有後和賀郡に移住した小田島義春(松川系図義治と同人か)も義行の弟と記載されている。

『北上市史』、『和賀町史』によると、和賀郡は文治5年の役後、鎌倉幕府の直轄領と北条氏の得宗領であったと考えられるが、建長8年(1256)の『鬼柳文書』に記載される地頭24人中に和賀三郎兵衛尉・同五郎右衛門尉の名前があることから、和賀氏は承久の乱(1221)以後の新補地頭として和賀郡の地頭職を補任されたものらしい。したがって、先の松川系図にみえる文治5年8月の拝領の記事とは必ずしも一致しない状況を示している。得宗領は北条時政の子義時が相続したが、義時が貞応2年(1224)6月13日に没すると、遺領のうち和賀郡の一部が血縁関係にある苅田義行(後の和賀義行)に譲られ、それによって和賀郡に下向し黒岩村岩崎(現

北上市)に住して和賀氏を称したと考えられる。先の『鬼柳文書』の中の「和賀氏系図」の中に、義行は生前に、次郎左衛門尉泰義に和賀郡惣領、三郎左衛門尉景行時に橘(立花)村、橘内(吉内)村、偵村(口内町水押)の野馬所を、五郎右衛門尉景行は室対(尻平)村、梅木(岩崎)、江釣神田(江釣子神社の神田)、桜岳(旧笹間村内)と須々孫(煤孫)野馬所、日戸(新平)の牧を譲ったことが記され、さらに女に対しては、長女には記載がないので領地を分けなかったかも知れないが、岡田女子と呼ばれ後鬼柳氏となる二女には新田(有田)、岳田(北鬼柳)、渭山(曾山)、黒沢尻野馬所が譲られ、仁治4年(1243)2月29日に義行は没した。一方、義行の弟小田島義春も義行の領地に隣接する狭良柵(更木)村、二子村、成田村、臥牛村を相続したものでらしい。また、『鬼柳文書』観応3年(1352)10月7日の足利尊氏御教書と文和2年(1353)11月3日の吉良貞家奉書によると、下須々孫村(煤孫)、小国村(湯田村・沢内村)、阿弥内嶋(姉内)、下藤村(夏油)は和賀越前権守行義の領地であったことが知られ、この和賀氏は義行の弟小田島義春系の人物と推定されている。惣領泰義の領地は記載されないが、先の系図に出てこない黒岩村・湯沢村・二子村付近と考えられる。これらによって、当笹間館が位置する旧笹間村は、桜岳野馬(笹間村の内としている)を相続した五郎右衛門尉景行か惣領泰義の領地と推定される。

『北上市史』・『和賀町史』では、和賀氏を称した系譜に小野姓苅田氏系和賀氏と多田源氏系の2系あるとし、その2系に血縁関係はないとされている。この2系の関係について、『北上市史』所収の「和賀氏の姓系についての考察」によると、『遠野南部家文書』の中に建武元年(1334)4月8日に陸奥守北畠頭家の国宜を得て津軽や八戸方面へ代官として下向した多田木工助貞綱、さらに『伊達家文書』元弘3年(1333)5月13日付文書にみえる「但馬国少佐郷伊達孫三郎入道々西貞綱」も多田貞綱と同人で、北上市黒岩に住した多田左近将監はこの多田木工助貞綱と同族と推定される。多田左近将監は文和3年(1354)閏10月4日には武家方として戦い軍功を上げていることから、官方から武家方に転向したものであろう。西村家所蔵の『和賀家記録』の中の「鬼柳伊賀文書」写の中に、応安3年(1370)10月8日、陸奥守から鬼柳式部大夫に宛てた遵行状に「陸奥国和賀郡黒岩郷内和賀左近将監跡事……以下略」と記され、この年には多田氏から和賀氏に改姓している。『統群書類従』巻第166系図部61の「小野氏系図」の冒注に「佐々木佐渡守殿より摂州多田庄之を給ふ。多田姓此氏に之有。文明7年(1476)なり」とあり、先の出自で触れた小野姓中条氏系の苅田氏が平姓和賀氏となり、さらに源姓和賀氏に変る過程が推定される。それは、婚姻関係によって苅田系和賀氏と血族関係になった多田系和賀氏が、摂州多田庄を領有することによって大きな力を得る結果となり、これによって和賀郡惣領が苅田系和賀氏から多田系和賀氏に移譲されたものと推定され、それまで苅田系和賀氏の称した薩摩守をも名のるようになり、ここに多田系和賀薩摩守が成立するとしている。この系は

後述する天正18年の秀吉による奥州仕置まで継承される。

『聞老遺事』の「稗貫状」によると、永享7年（1435）5月に和賀氏宗家と一族の須々孫義窮の間に確執が生じ、それが近隣の諸族にも波及し和賀の大乱となったが、青森県三戸町の三戸城にいた南部遠江守義政（後の盛岡南部氏）が仲介して和睦した。その後も黒沢尻五郎の二男で左近将監政義の養子家親が須々孫氏をそそのかして再び戦いを企て、それによって飯豊城が陥落し、城主和賀小二郎義篤は南部氏に救援を頼んでいる。この戦いがどの地域を舞台としたかは明らかでないが、笹間村と飯豊村は隣接するだけでなく、今回調査した笹間館と飯豊城は僅か2.5kmの距離であることをも考えれば、当館もまったく戦乱と無関係であったとは考えられない。むしろ、当館が一度焼亡していることから考えれば、この永享7年の戦乱に伴って焼失した可能性が強い。

応仁の乱（1399）以後足利幕府の力が衰退し、それによって守護大名が独立し、群雄割拠の時代が16世紀末まで続き、この社会的な風潮は当和賀郡も例外ではなく、一族間の内訌や近隣諸族間の争いの絶えることのない時期であった。和賀氏に限ってみれば、大永2年（1521）、天文3年（1534）、天文6年（1537）、天正元年（1573）、天正10年（1582）に戦闘があったことを伝えている。

天正18年（1590）に豊臣秀吉の小田原攻めに参陣しなかった葛西氏、和賀氏、稗貫氏は仕置を受ける結果となった。浅野弾正長吉を軍監とする奥羽仕置軍は、稗貫氏の本城鳥谷ヶ崎城に本陣を置き、仕置と検地を行い、その後鳥谷ヶ崎城に浅野庄左衛門、和賀氏の本城二子城には後藤半七を目代としておき、仕置軍は引き上げた。これによって和賀氏も領地を没収され、居城を追放される結果となった。これを不満とした諸族は、同年10月に葛西氏の重臣柏山氏が一揆を起こすと、和賀氏と稗貫氏もこれに呼応して大一揆となり、鳥谷ヶ崎城と二子城を奪回することに成功した。しかし、翌天正19年（1591）に九戸政実の乱が起きると、豊臣秀吉を総大将とする再仕置軍によって簡単に落され、稗貫・和賀の2郡は南部氏の領地となった。

戦国時代の和賀氏の系譜には諸説があって断定できないが、秀吉の仕置が行われた天正18年の領主は和賀薩摩守義治（義与、信親とも称した）で、戦わずして逃亡し天正18年10月に秋田県仙北郡で病死し、その子薩摩守義忠は仕置後の二子城を一時奪回したが、再仕置軍との攻防戦に天正19年10月19日に討死したと諸書に伝えている。天正18年7月28日に浅野六右衛門から和賀氏の出自を聞かれた簡治部助が答えた控書には、義治には4人の子供がいることを伝えている。それによれば、長男孫二郎は庶子のため稗貫氏の養子となって広忠といい、二男の月斉は盲目のため黒岩に住して黒岩月斉と称し、三男が又二郎義忠である。四男主馬は笹々間（現在は笹間）を知行して笹々間忠親と名のつたと記されるが、これには異説もある。秋田県仙北郡本堂城に居城する和賀氏の同族本堂氏の『本堂系図』に「和賀嫡流秀親（義忠）死す。本堂

忠親をして和賀家を継がす」と記され、天正19年頃に和賀忠親は和賀郡笹々間村には住していないとする考え方である。また、『岩手県史』所収の「源姓和賀系図」には義忠・忠親の妹に笹間玄馬資弘に嫁した女が書かれている。これらから、和賀氏の一族に笹間氏を称した人物が実在したことは確実であり、この人物が笹間館に何んらかの関わりをもつ人物であろう。

和賀忠親が笹々間忠親か本堂忠親であるかは断定できないが、和賀宗家最後の当主和賀忠親が慶長5年（1601）9月20日に和賀氏の旧領地岩崎城（現和賀町岩崎）に立て籠もり旧領の再度奪回を試みたが、翌同6年4月26日に南部氏軍によって一揆は鎮定され、ここに岩崎一揆も終結し、これによって和賀郡までの盛岡南部氏の支配体制がゆるぎないものとなった。

『聞老遺事』に載る一国一城制に伴う「諸城破却書上」（天正20年6月11日付）によると、天正20年には和賀氏領内に鬼柳、二子、岩崎、江釣子、安俵の城があり、すべて破却したとあることから、当城館はこの時は既に廃城となり無住であったか、少なくとも城としての機能は失われていたものであろう。

『小田島家記録』による永禄元年（1558）の和賀氏領内の検地控によると、領内の総石高が71,450石あり、その内笹間村は450石の取れ高と記載されている。

大正4年に刊行された『笹間村誌』の記載では、当遺跡を笹間城として「当城は初め多田氏の世河内守の二男主膳忠清氏居城し、其後一族または家臣を以って城守たらしめしが、其後忠明25世の孫薩摩守義治の長子主馬をして笹間邑を知行せしむ。然れども同氏失明して後月斉と称し、和賀落城に際して仙台松山に遁れ、和賀帯力を称し其末裔今尚士家に伝えて在り。」と和賀月斉（黒岩月斉と同人か）を城主とし、出典を『和賀郡領主多田主馬軍記』としている。また、和賀氏の家臣に笹間大助・同助五郎・同助三郎と笹間氏を称した人物があり、この人物も笹間村を領有し当笹間館に住したとも記されている。和賀月斉が笹間村を知行した記事は『続群書類従』巻第22所収の「岩崎城由来記」の中に「和賀薩摩守の嫡子主馬事。笹間村知行に預け置く申す由。後に盲に成り、月斉と申す由。（以下略）」とみえることに一致する。また、『奥南盛風記』の「和賀家譜伝曰」には、和賀薩摩守義治に4人の子供があり、4男の主殿が笹間（笹間）村を知行したと記され、主馬忠親とは別人に書いている。笹間大助については、『北上市史』や『和賀町史』に引用された『小田島家記録』の「和賀御分限録」には同名の該当する人物の記載はなく、似ている人物に「笹間大助50石」がある。誤植の可能性も考えられるが、両書とも笹間大助であることから「笹間」ではなく「笹間」が正しいものと推定され、笹間大助なる人物には疑問が残る。しかし、既述のように義忠の妹に笹間玄馬資弘に嫁いだ女がいることから、主馬や月斉系以外に笹間氏を称した人物がいることは確実であろう。

以上の諸書に収載される和賀氏や他の関連する諸系図から館主を推定すると次のようになる。13世紀～16世紀前半頃に関係する記事の中に笹間村を直接的に表現した記録はまったく見

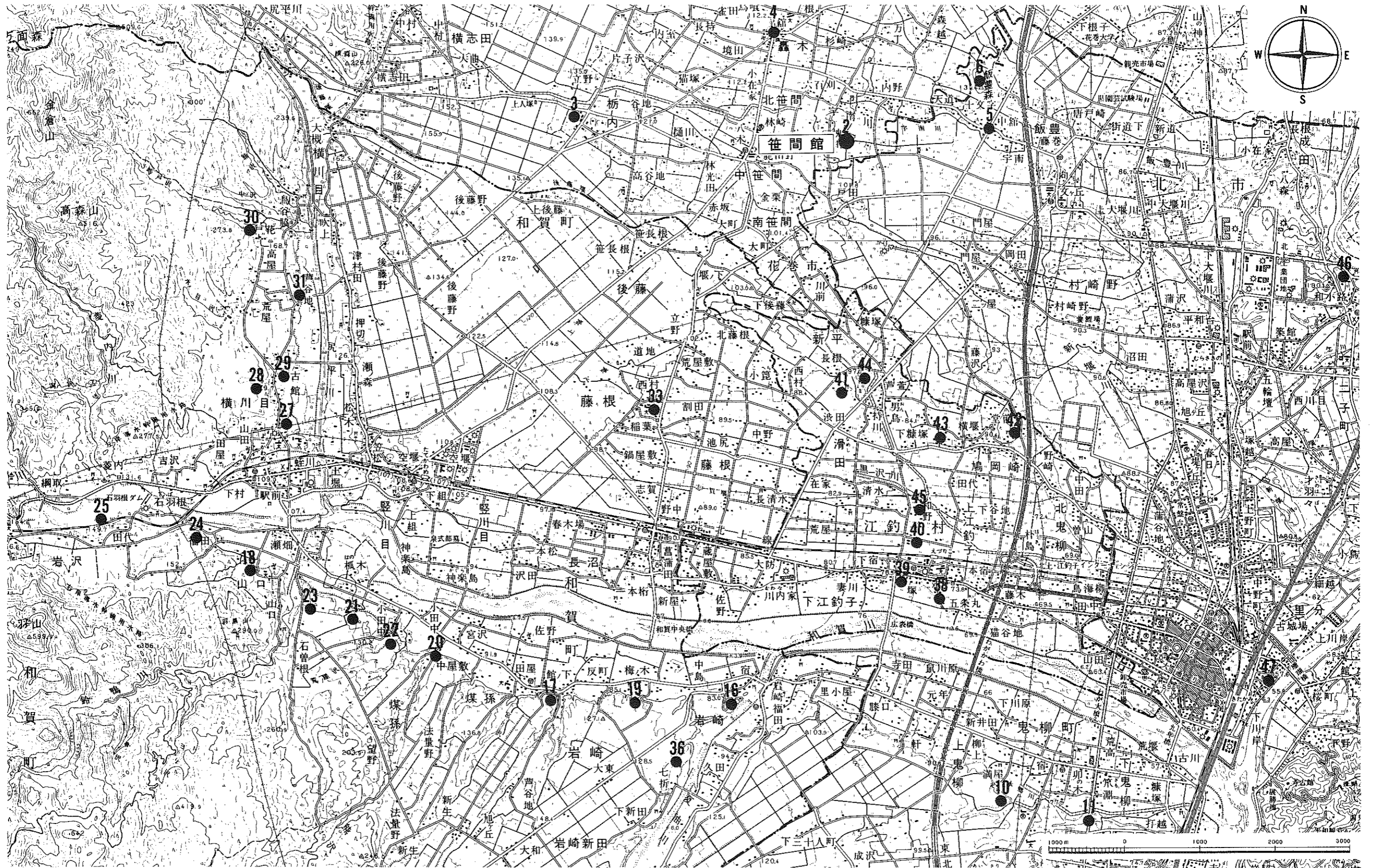
受けられないが、先の相論に添書された系図にみえる景行の領地桜岡村が笹間村の内であれば、笹間村全域が景行の領地であった可能性もある。しかし、笹間村と明記していないことに注目すれば、景行の領地ではなく和賀氏宗家の直轄地であった可能性も考えられ、それがために笹間村に直接関わりをもつ人物の記載がないのかも知れない。16世紀末頃には和賀月齊・同主馬の兄弟を城主とする記載がみえ、この地が和賀氏宗家相伝の本貫の地であったため地行地として分与されたことが推定される。最初月齊が当笹間館に入ったが盲目となったので黒岩に換地となって黒岩城に移り、その後主馬が城主として入った可能性を示唆している。義忠の娘が嫁した笹間玄馬資弘は、月齊や主馬が入る以前に直轄地の代官として笹間村に住し笹間氏を称したとも考えられる。

なお、笹間館の位置する笹間地区に残る伝承には、和賀氏に直接関連するものはまったく残っていない。地元では城主を「辻市越中守」と伝え、北上市内にその子孫が住しているとされる。信憑性は不明であるが、この姓氏は和賀氏関連の系図に記載がなく確認できなかった。

〈引用・参考文献〉

- | | | | |
|----------|---------------------------|-------|------|
| 1. 田中喜多美 | 『岩手県史』 第2巻(中世篇上)復刻版 | 昭和48年 | 岩手県 |
| 2. 田中喜多美 | 『岩手県史』 第3巻(中世篇下)復刻版 | 昭和48年 | 岩手県 |
| 3. 司東 真雄 | 『北上市史』 第2巻(古代2・中世) | 昭和45年 | 北上市 |
| 4. 司東 真雄 | 『北上市史』 第3巻(中世2) | 昭和51年 | 北上市 |
| 5. 司東 真雄 | 『和賀町史』「和賀市の時代へ～和賀氏から南部氏へ」 | 昭和52年 | 和賀町 |
| 6. 紫桃 正隆 | 『史説 北上平野の戦乱』 | 昭和55年 | 宝文堂 |
| 7. 司東 真雄 | 『和賀氏400年史』 | 昭和58年 | 岩手出版 |
| 8. | 『笹間村誌』 | 大正4年 | 笹間村 |

和賀氏については諸説があつて正説の判断が困難であるが、以上の諸書に詳述されている。岩手県史と和賀町史・和賀氏400年史は通史的に記載されているので全体的な流れを理解するのに最適である。北上市史は史料・資料の収録を編集の基本としており、収載されている古文書の引用はすべてこれによつた。実際には多くの断片資料が収録されており、その解釈によつて背景となる流れが異なる可能性がある。なお、『聞老遺事』に記載される「諸城破却書上」と「稗貫状」は『南部叢書』所収版によつた。



第6図 城館の位置図

2) 和賀地域の中世城館 (第1表、第6図)

和賀郡全体で大小150箇所近い中世城館跡^{註1}が存在すると言われるが、その中で北上川以西に限定すると概ね75箇所位の存在が知られる。市町村別にみると、北上市が二子・飯豊・黒沢尻・鬼柳の四地区で19箇所、和賀町22箇所、江釣子村8箇所、沢内村14箇所、湯田町9箇所となり、それに旧和賀郡の当笹間館が位置する旧笹間村4箇所が加わる。

これらの城館跡を立地する地形や地理的条件でみると、次の3型に分類される。

①段丘崖の縁辺部に構築される型

和賀川右岸の和賀町岩沢付近から北上市の丸子館付近まで続く、和賀川と夏油川によって形成された河岸段丘の崖沿いに一郷一館に近い状況を示しながら続いている。このような立地を示すのは北上市4箇所、和賀町14箇所と、和賀町内に所在する城館の63.5%が入る。これらには、岩崎城や上須々孫館の西館のように、川や沢によって浸蝕を受け舌状に張り出した突端部を堀切りで区画し一方または二方に段丘崖をもつ例と、鹿島館のように前面を段丘崖とし後背の平坦面を堀と土塁で区画し複数の郭を構築する例があり、後者の場合は一方または二方に沢の開析による自然地形を堀として利用し、奥は堀と土塁を併用する場合もある。両者とも複数の郭が存在してもいずれの郭も同位の平坦面を示すのが通例で、地形的には単純である。堀は多くの場合空堀である。郭と集落との間には30m～40mの比高があり、この例には丸子館、鹿島館、岩崎城、下須々孫館、上須々孫館といった中核をなすと推定される大規模な城館が多くみられる。この類は居館であるだけでなく、陣地や詰城としても使われる。

②独立丘陵の頂上部に構築される型

若干の起伏はあるが、平坦地に残る丘陵状台地の頂上部を堀や土塁で区画して郭を構築する城館で、単郭式の例もあるが多くの場合最頂部を主郭とし、主郭より低地に主郭に匹敵する郭を配し、尾根筋の鞍部に堀切りを入れ、さらに斜面にも堀をめぐらし帯郭や腰郭を構築するなど、①より起伏に富み構造的にも地形的にも複雑な構造を示す。この典型的な例は二子城で、他に飯豊森館、岩田堂館、蟹沢館、新平城の4箇所あり、例としては少ない。地域的には江釣子村1箇所、北上市4箇所であるが、いずれも開析扇状地内の浸蝕残丘に立地し、麓と頂上部とは30m前後の比高をもつ。堀は全て空堀である。居館のみではなく詰城としての性格も強い。

③現在の集落立地面と同位面に構築される型

水田面との比高1m～2mの微高地や、比高1m～2mの段丘崖縁や舌状台地の突端部を堀や土塁で区画して構築される。単郭式の例と複郭式とする例があり、当笹間館や五条丸館は複郭式の典型であるし、轟木館や江釣子館が単郭式の例である。ほとんどの場合は方形や長方形を示し、現在の集落内や水田の中に立地している場合が多い。このような場所に立地することは、城館主が水田や畑という生産基盤と一体になり、常住した居館としての性格が強いであろう。

第 1 表 旧和賀郡中世城館一覽表

No	名称	別称	所在地	形式	現状	遺構	城主等(文献)
1	姉内館		花巻市笹間字姉内沢			所在地不明	和賀行義?
2	笹間館	笹間城	花巻市北笹間字桃田	平地・複郭式	田畑	字南川右岸にある比高2mの低台地。東側台地基部を直状堀で切断	和賀氏・笹間氏
3	栃内館	栃内城・館屋敷	花巻市笹間字栃内	平地	境内・宅地・水畑	八坂神社付近一帯60m×60mほどの区画で土塁あり	栃内氏
4	轟木館		花巻市笹間字轟木	平地・単郭式	境内・宅地	笹間の各街道が裏結する場所。高い土塁を方形にめぐらし、外圍を水堀で区画	轟木兵庫守
5	飯豊城		北上市飯豊町中館	平地・居館	宅地・畑	瀬畑街道が中館部落をつきぬけるあたり。遺構不明。	飯豊豊後
6	飯豊森館		北上市飯豊町十文字	山頂・詰城	神社境内・山林	東西50m・南北約100m。頂部に狭い平場。南斜面に4段の帯状腰郭。	
7	岩田堂館		北上市飯豊町成田	山頂・詰城	神社境内	八幡神社境内、遺構不明	岩田堂隠岐
8	小館		北上市飯豊町成田	平地		小館と称する屋敷があるが遺構不明	赤坂権頭
9	成田館		北上市飯豊町成田	段丘・居館	水田	東西南北200m。背後堀切・開田によって全面破壊	成田氏
10	鹿島館	羽場館	北上市鬼柳町宿	段丘・居館	山林	東西約420m・南北約100m。7郭からなり、堀や土塁残るが1〜3郭は破壊	鬼柳義昌 (奥南落穂集)
11	丸子館	沢淵館	北上市鬼柳町沢淵	段丘・居館	山村	東西約300m・南北約250m。3郭からなり主郭破壊。堀・土塁	鬼柳伊賀守 (鬼柳文信)
12	白髪館	崎山館	北上市鬼柳町西裏	段丘・居館	神社境内	白髪神社境内(主郭50m×15m)と南館観音堂境内(20m×15m)からなる。遺構不明。	初期は鬼柳義光?・鬼柳藏人
13	都鳥館		北上市鬼柳町下鬼柳	平地・居館	空地	旧鬼柳小学校跡地。約100m四方。遺構不明。	都鳥兵馬
14	柳上館	羽場館	北上市鬼柳町柳上	段丘・居館	山林	東西南北約50mの出崎。南後背に堀切。谷の西側に一郭あり。古基群は破壊	鬼柳伊賀守 (岩手県管轄地誌)
15	願念館	妾女屋敷	北上市鬼柳町田中	平地・居館	宅地	羽場(墓場)屋敷という地が田中17番にあり。この付近を元元ともいう	葉場妾女守恒義、願念隠岐
16	岩崎城		和賀町岩崎	段丘・平山城	公園・畑	東西約600m・南北約300m。本丸・二の丸・三の丸・城内土塁・堀跡。	岩崎弥右衛門
17	下須々孫館	煤孫城・観音館	和賀町煤孫字観音館	段丘・居館	神社境内・畑・林	東西約250m南北約170m。主郭を中心に3郭。これらは堀と土塁で分断。前面に帯郭。	煤孫下野守治義か。
18	福田館	タテ	和賀町山口字福田	段丘・居館	神社境内・畑・林	東西南北約100m。南側2重堀西側にも堀。幅7m深さ3m。単郭	福田氏か。
19	兵庫館		和賀町岩崎字梅の木	段丘・陣地	運動場	砂利採取による破壊。	南部信直
20	上須々孫館	林崎館	和賀町煤孫字本郷	段丘・居館	山林	東西約400m南北約200m。次を境に新・旧の郭あり。向郭後背に堀・土塁。	和賀基義後に煤孫上野介義重。
21	八幡館		和賀町煤孫字小田中	段丘・居館	神社境内	範囲・遺構不明。	
22	月館		和賀町山口48地割	段丘・居館	山林	南北68m東西60mの方形単郭。周囲に幅6mの堀	
23	田中館		和賀町山口字東田中	段丘・居館	畑	東西230m南北100m。南北2郭堀切で分断。堀幅約6m深2m。土塁一部残る。	
24	馬場館		和賀町山口字馬場館	山麓	墓地	範囲・遺構不明。	
25	下仙人館		和賀町岩沢字下仙人	段丘・居館	山林	東西60m南北40mの単郭、後背堀切。堀幅約7m深約2m。	仙人別当浄念坊
26	水沢館		和賀町岩沢	段丘・詰城	山林	東西南北各50mの単郭。堀切幅約4m、深約2m	
27	蛭川館		和賀町横川目字蛭川	段丘・居館	宅地	東西約90m南北約70mの単郭式。北と西に堀と土塁があったが破壊	
28	蟹沢館	カンジャダテ	和賀町横川目字蟹沢	山頂・詰城	山林	東西約140m南北約100m。東西2郭。幅約5mの空堀がめぐる。	
29	古館		和賀町横川目字古館	平地・居館	宅地	東西約110m南北約50m。東西2郭・幅約7.5mの空堀	小原左京の一族
30	中花館		和賀町横川目字戸花	段丘・居館	水田	東西南北約90mの単郭式。開田にて破壊	小原左京
31	時田館		和賀町横川目字時田	段丘・居館	水田	南北約200m東西約100mの複郭(3郭)。西側後背を堀切。主郭の堀幅約6m・深約3m	
32	長沼館		和賀町長沼	平地・居館	水田	位置不明	

33	八幡館	タテ	和賀町藤根字稲葉	平地・居館	水田	東西約200m南北約40mの複郭式(3郭)。空堀跡。	伝八幡太郎義家、藤根氏
34	堀ノ内		和賀町藤根字稲葉	平地・居館	水田	堀跡らしい水田と池あり	
35	谷地館		和賀町藤根字谷地館	平地・居館	宅地	屋号だが遺構不明。	
36	七折館		和賀町岩崎字七折	段丘・陣地	山林	東西南北約76mの単郭式・幅約7m深2mの堀と帯郭。	南部信直
37	陣地		和賀町岩崎字下中嶋	平地・陣地	水田	水田にて破壊・範囲不明	南部信直
38	五条丸館		江釣子村下釣子五条丸	平地・居館	宅地・水田・畑	西郭70m×55m・東郭50m×65m・後背(北側)に堀跡と土塁	不明
39	江釣子城	古館?	江釣子村江釣子五条丸宿	平地・居館	山林・寺社境内	東西95m・南北50mの単郭。後背(北側)に幅10m~25m・深3mの堀跡。	江釣子民部(和賀郡誌)
40	江釣子城		江釣子村上江釣子林妻	平地・居館	水田	地籍図では東西約120m南北約80mの方形で副郭あり。	創建は和賀氏家臣野田氏、後江釣子氏
41	新平城		江釣子村新平(日平)	丘陵・居館	山林	東西約80m南北120mの単郭。幅約4m・深1.5mの堀跡。	
42	鳩岡崎三館		江釣子村鳩岡崎堂前	平地・居館	水田・畑・宅地	北側と西側に土塁と堀跡。東西約75m南北約60mの単郭式	鬼柳氏か(鬼柳文吾)
43	下糖塚古館		江釣子村滑田下糖塚	平地・居館	水田・畑・宅地	範囲不明。近世の環壕屋敷か	
44	新平環壕屋敷		江釣子村新平(日平)	平地・屋敷	宅地	東西約60m南北約65m。北と西に幅約3mの堀跡。(屋号「大日平」)	旧新平の肝入宅
45	田代主殿屋敷		江釣子村上江釣子田代	平地・屋敷	宅地・畑地	東側に長さ約40m・西側に約60mの堀跡(幅約5m)	
46	二子城	飛勢城	北上市二子町字宿	丘陵・居館	神社境内・山林	東西約500m南北約100m。居館。重臣屋敷跡に堀・前面に帯郭。出城あり	和賀氏本城(和賀郡誌)
47	黒沢尻柵	安倍館	北上市黒沢尻町中川岸	平地・居館・城柵	宅地	堀跡が一部残るが、他は区画整理によって全面破壊	伝安倍正任(陸奥話記)

※註 岩手県教育委員会発行の『岩手県中世城館跡分布調査報告書』1986年3月によって作成したが、地域は限定した。他の現花巻市域については、旧裨貫郡に入るため除いた。当城館の位置する旧笹間村に関連する部分を主体とし、第6図の数字は表中の番号と一致する。図中に数字の入っていない城館は一覧表に記載されていない。また、図中には主要な城館のみを入れた。

以上3型に分類したが、これらの城館は和賀氏が下向し、和賀郡一円を支配する態勢が確立するに従い、一族や姻族の近縁者に分割知行させることによって、その譲与された領地内に新たな居館を構築するため数が次第に増加し、さらにより良い適地に移転することも多々あったらしい。特に南比朝時代には南朝方と北朝方に一族相分れた和賀氏は、和賀郡を舞台にした戦闘も何度か記録に残り、他に一族間の内訌も何回となく伝えられている。また、戦国時代といわれる16世紀にも多くの戦いがあった。このような戦闘を経る中で、自衛手段として防衛性と自領を支配するための拠点として、領地内の最適地に城館を構えたと考えることができる。

いずれにしても、これらは地形的・地理的な制約の中で、社会的・政治的背景の中から、位置・規模・縄張りが決定されたものであろう。

〈引用・参考文献〉

1. 岩手県教育委員会 『岩手県中世城館跡分布調査報告書』 1986 岩手県教育委員会
2. 本堂寿一編 『日本城郭大系』「岩手県」 昭和55年 新人物往来社

III 野外調査と室内整理の方法及び経過

1. 野外調査

〈調査区の設定〉 (第7図)

本遺跡は東西175m、南北95mの範囲を有し、長軸の中軸が東西方向にほぼ一致することから、公共座標軸の第X系に合わせて設定することとし、小調査区を3m×3m、大調査区を30m×30mを単位とした。実際の設定に当っては、東館に基準点-1 (X-72580m、Y20100m、H99.484m)、西館に基準点-2 (X-72580m、Y19970m、H100.514m)を設置し、この2点を直線で結び南北方向を分割する基準線として使い、南北両方向に30m単位で分割した。東西方向を分割する基準線は、基準点-2上に東西基準線に直交する南北方向の直線を設定して東西方向を分割する基準線とし、東西方向に30m単位で分割した。さらに、30m×30mの範囲を東西・南北とも3m単位で10等分し、3m×3mの範囲になるように分割した。

〈調査区の名称〉

大調査区は、西から東へローマ数字でI・II～VIIIまで付し、南北方向は北から南へA～Eまで命名し、その名称を組み合わせるとA I区・A II区と呼称した。

小調査区は西から東へアラビア数字で1～10、北から南へa～jまで付し、その組み合わせでa 1・a 2とし、全体的には大調査区名と小調査区名を組み合わせるとA I a 1と呼称した。

〈遺構名の命名〉

遺跡内の位置関係を明確にするため、調査区名と遺構の種別名を組み合わせるとA I a 1 堀立柱建物跡、B III b 3 土坑のように命名・呼称した。

〈粗掘〉

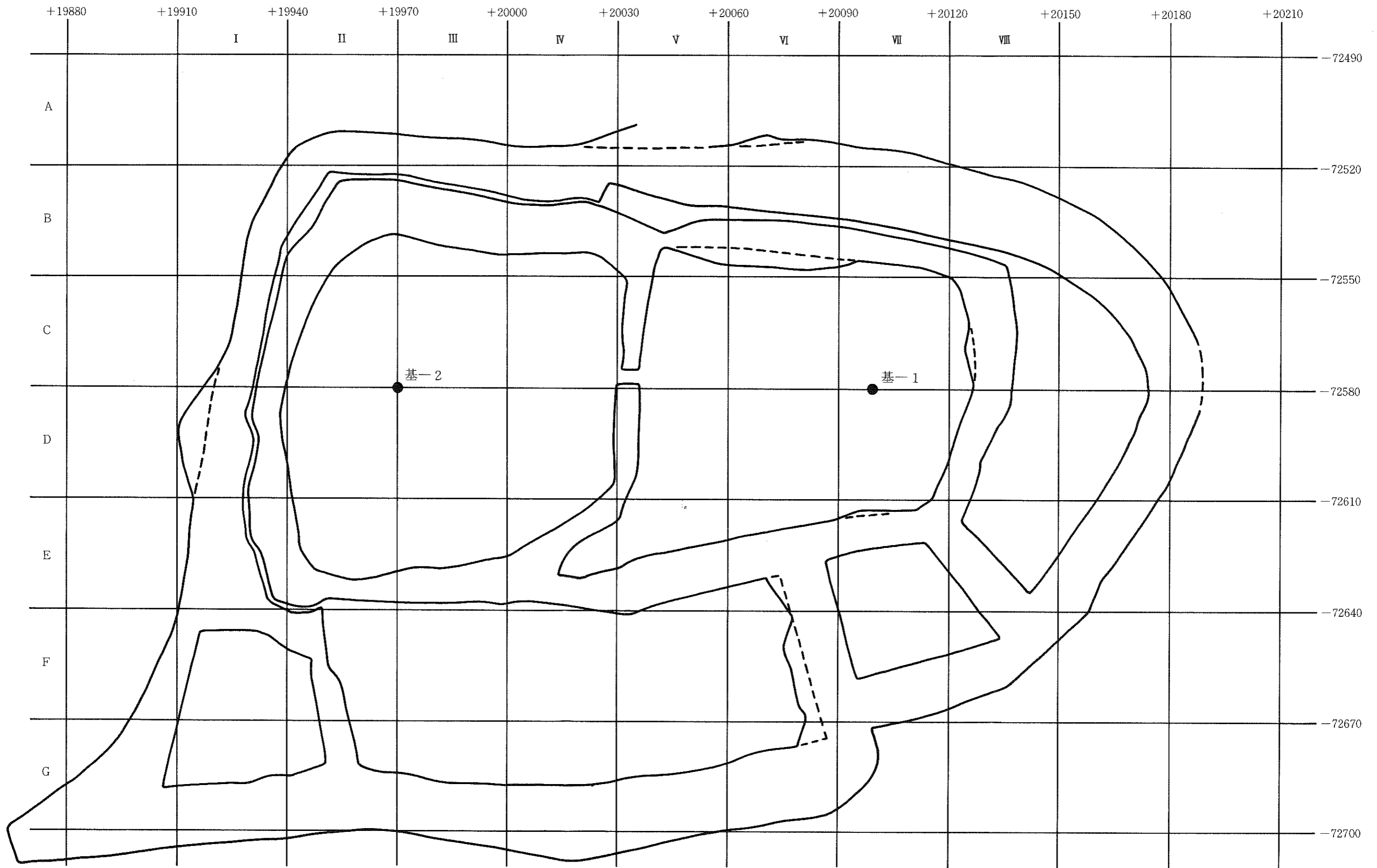
調査時の調査範囲全域の現状が水田・農道・畦畔であったことから、開田時の削平による攪乱の程度や旧地形を確認のため東館・西館とも試掘溝によって予備調査を行ない、その結果に基づいて水田のI層表土は耕作土であるため重機を使って除去した。東館はII層とした黒色土が北側に残存し、中央部はI層を除去すると直接III層とした地山が露出する。西館は、東館より削平が強く、表土を除去するとIII層が直接露出した。粗掘りの一部と遺構検出は手掘りで行なった。

〈精査〉

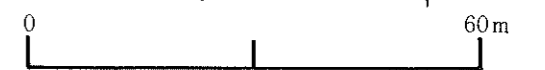
竪穴住居跡と大型の土坑は4分法、小形の土坑と陥し穴状遺構は2分法、溝跡や堀跡は適宜土層観察用の畦畔を残して掘り上げた。

〈実測〉

断面図・平面図とも縮尺20分の1を原則としたが、一部に縮尺10分の1、40分の1も併用し、



第7図 グリッド配置図



遺構の状況によって適宜使い分けた。

〈写真撮影〉

35mm版カメラ2台、6cm×7cm版カメラ1台を一組として使用し、35mm版はカラースライドとモノクローム、6cm×7cm版はモノクロームのフィルムで撮影した。

2. 室内整理

〈遺構関係〉

野外調査中に作成した原図は、平面図と断面図を各遺構ごとに組み合わせて点検と修正を行った後、第2原図を作成し、報告書掲載用トレースの原図とした。

遺構の写真はそれぞれアルバムにベタ焼写真とフィルムが一組になるように貼り付け、写真登録カードを作成した。報告書にはその中から適宜選択して使用した。

〈遺物関係〉

種類ごとに分類し、それぞれの登録台帳を作成した後、注記をした。陶磁器類・石製品類、木製品類、金属製品類、炭化穀類等中世に属する遺物は全て登録台帳に記したが、土師器と須恵器、縄文土器は報告書掲載用を選択し、その遺物のみを台帳に登録した。なお、縄文石器は全て登録した。

実測図の作成は、陶磁器類は口縁部や底部が残存するか体部の大型破片を選択したが、中世に属する他の種類は可能な限り実測図を作成した。縄文石器はすべて実測したが、土器は拓影を作成した。土師器は実測可能な個体のみを掲載したが、須恵器は実測不能で掲載を必要とする個体は拓影を作成して掲載した。実測図はすべて実大で作成し、トレースは一部2分の1に縮小してトレース原図とした。

3. 調査の経過

〈野外調査〉

昭和61年4月7日に現地事務所と作業員休憩所となるプレハブを建設し、野外調査に着手した。最初雑物撤去等の遺跡内の清掃作業を行い、併行して調査前の遺跡全景を各方向から撮影した。引き続き、岩手県教育委員会が昭和60年10月に試掘調査を実施した際の試掘溝を清掃し、遺構の検出面、堆積土の土層、堆積土の深さについて検討・確認した。試掘溝は東館・西館とも北辺部に片寄っているため全体を把握するには無理があったことから、新たに各館とも南北2条、西館の西端から東館の東端まで1条の試掘溝を設定し、予備調査を行った。

予備調査の結果を踏まえて、4月11日から全面粗掘を開始した。最初は手掘りによったが、面積が広大であることや作業員の人数が少ない等から粗掘りを短期間に終える必要との判断か

ら、4月18日からはバックホーによる表土剥ぎを併用させた。その後、作業員は随時遺構検出と粗掘りを並行させて作業を行った。平坦面の重機による表土剥ぎは5月16日でほぼ終了し、引き続き法面調査と内堀の盛土部分の除去に着手し、重機による作業は5月28日で終了した。5月28日からは各館の縦断面・横断面の土層断面図の作成に着手し、並行して各遺構の精査を開始した。最初は土坑類を4分法や2分法に掘り上げ、次いで柱穴状土坑の一部掘り下げ・柱痕跡の検出・確認、平面図の作成、半截、断面図作成、記録、完掘の手順で作業を進めた。東館の精査は8月9日で平面図作成、写真撮影を含めて終了した。西館の精査は東館のそれと並行させる形で7月16日から開始し、9月29日でほぼ終了した。一方、東館には埋め戻した堀が検出され、西館の精査と並行させながら、断面調査を行って、断面図を作成し、平面図は平板測量によって作成した。調査に関わる一切の作業は9月30日(火)午前中で終了し、午後器材を搬出し現場を撤収した。一次精査の終了した9月11日と調査終了時の9月27日にセスナ機を利用して空中から遺跡全景を撮影した。

その間、5月9日に文化庁文化財調査官佐々間豊氏、9月12日には奈良国立文化財研究所の宮本長二郎氏が来跡され、種々ご指導を受けた。また7月8日には稗貫教育事務所管内教育研究会社会科部会の研究会、7月31日には花巻市立笹間公民館主催青少年教室の体験学習が当遺跡を会場として開催された。さらに、野外調査がほぼ終了した9月25日には、市町村文化財担当職員、各報道機関、一般市民約150人の参加のもと現地説明会を開催し、それまでの調査成果を一般に公開した。

IV 中世の遺構と遺物

発掘調査によって検出された各種の遺構の中で、中世に属する遺構が種類、数とももっとも多い。これらは西館と東館に散在するものの、西館は東、南、北側が開田時の削平が著しいことから遺存状態が良好とは言い難い。東館の場合は、南側縁辺部には検出されなかった。

遺構としては、掘立柱建物跡72棟、柱穴列10条、門跡6基、竪穴住居跡3棟、土坑と不整形な落ち込み遺構196基、井戸跡8基、竈状遺構3基、溝跡20条、土橋1箇所、周溝遺構18条、塚1基が検出されている。他に縄文時代や平安時代に属する遺構も検出されているが、縄文時代か平安時代に属しない遺構はすべて中世の遺構として報告する。

なお、遺構に共伴した遺物は遺構の記述で概略を記し、詳細は遺物の項で記述する。

1. 遺 構

1) 郭 (第8図、写真図版1・4)

発掘調査の時点には西館と東館と呼称した二つの郭が遺存し、この郭が今回の調査範囲である。ところが古い地籍図や昭和21年撮影の航空写真をみると、本来はもっと多くの郭と堀があり、今回の調査範囲は全体からみれば郭総面積約24,000㎡の55%強に相当し、地籍図や航空写真から推定復元された縄張り図の検討の結果、西館、東館とも中枢部に当る郭跡であることが明らかとなった。本項では、今回発掘調査を行った西館、東館のみならず、調査時に遺存しなかった郭も地籍図や航空写真から推定復元し、その概況について記すこととする。

(1) 一ノ郭 (西館)

今回発掘調査を実施した西館に相当する。最大長で東西約90m、南北約90mの範囲を有し、実面積は約7,200㎡である。平面形は隅丸でやや歪んだ方形形状を示し、南西隅部が僅かに突出する。東辺の北東隅から南へ約30mの場所に土橋を設けて東館へ通ずる通路としていた。調査時に実測された東西方向の距離が、地籍図のそれに比較すると約10m短かく、地籍図と一致しない。当郭の西側の内堀と外堀をトレンチ調査した時の所見によれば、内堀の法肩と郭の法肩の間にはほぼ10mの差がみられたことから、後世の攪乱によって削平を受けていることが窺われた。地元関係者談によれば昭和35年頃までは郭面と堀面の中間に幅3間位の畑があつて耕作されていたが、開田の時に削り落したとの話があり、調査時の実測図と地籍図の差はこれに起因す

ることはほぼ間違いないものとする。もし、それが正しいとすれば、西辺に郭面より一段低く細長い腰郭があったことになる。西端部に後述する落ち込み遺構が西辺と並行して南北に約33m、北辺沿いに並行して約9m、中央部の北寄りに東西約13m検出され、この部分はすべて埋め戻されて整地されている。また、この落ち込み遺構と一部の土坑は埋土内に炭化物の粉と草木灰の混合層がほぼ例外なく観察されることから、火災によって郭内の施設が焼亡しているものと推定され、落ち込み遺構の埋め戻し整地はすべて火災後の土木工事である。このことは火災後に建物等の施設の配置換えを伴うような大規模な工事を行ったことを示すものであろう。なお、土橋の西側1.5mには門跡が検出されていることから、東館から西館へ入るという経路が想定され、本郭は本城館の中核部としての機能をもつ主郭に相当すると理解される。

(2) 二ノ郭（東館）

今回発掘調査を行った東館である。最大長で東西約100m、南北約80mの範囲を有し、実面積は約6,200㎡の広さをもつ。平面形は若干歪んだ台形状を示し、南西隅部に幅約10m、長さ約20mの張出し部がつく。調査時の実測図と他の資料とほとんど違いはないが、北辺の西側が内側に凹むような状況を示すが、検出された遺構の位置関係や後述する内堀と外堀の中間に土塁状の高まりが航空写真に写っていることと、湧水の激しい地形で調査中にも崩れが頻繁にみられたことから、当初は北へ5m位広がったと推定され、その他は大差がない。本郭から検出された溝跡の中で、規模から堀跡と考えられる例が5例あり、そのいずれもが最終的には埋め戻されている。溝跡個々については後述するが、1条を除いては北西部に位置する。北西隅部で検出された門跡との関係から考えると、当初はこの門を囲むようにL字形に掘られた堀が、次の段階で東西方向を埋め戻して南へ延長し、新たに方向を西へ変える。これがさらに約2.5mほど東に移され、南側の東西方向を示す旧来の堀と接続させ、それまでの堀は埋め戻している。南東部に位置する東西方向の堀の時期変遷は不明であるが、旧自然地形をみると、当堀の3m～4m南に段丘崖が位置し、調査時の段丘崖は盛り土造成によって人工的に造り出された地形であることが判明した。さらに、当郭から検出された遺構の配置をみると、南西部の張出し部から続く南辺付近は、幅15m位の範囲で遺構がまったく検出されないか疎らである。このことは、張出し部の機能的な役割とも関連するものと推定される。遺構が存在しないということは、逆に考えると施設があると不都合であったことが考えられ、端的に言えばこの部分は土塁か通路、そして張出し部は馬出し口いわば「大手口」としての役割りが想定される。また、南側縁辺部の6m部分は砂利で盛り土され、その内側約10m分は低い凹地状を示していることから、かつての縁辺部には基底幅6m位の土塁の存在が想定され、その内側は道路であった可能性が強い。張出し部の法面調査によって、張出し部を分断する形の埋め戻された堀が検出されており、当

初は張出し部がなかったことが明らかとなった。この埋め戻された堀は、後述する内堀の改修に伴うと推定される。土橋は西側7m分は盛り土、東側4m分は地山の削り残りで構築され、この状況は内堀の底面の高低差に良く表われている。おそらく、当初は土橋、張出し部がなく、西側の深い底面をもつ堀が南北に直線的に掘られ、当城館が大改修された時期（もしかすると西館を含む他の郭が構築された時期）に内堀が東側に掘り広げられ、土橋と張出し部を構築したと推定される。と言うことは、張出し部と土橋のなかった時期には西館が存在しなかった可能性があり、さらに大手口の場所も異なっていると考えられる。館の構築当初は東館のみで、当館内で埋め戻されて検出された堀で区画されていたと推定される。

(3) 三ノ郭

一ノ郭と二ノ郭の南側に位置する郭で、発掘調査時には遺存しなかった。地籍図や航空写真から推定される規模は、東西約120m、南北約50mの範囲で実面積5,700㎡の広さをもつ。平面形は若干歪みをもつ長方形を示し、一ノ郭や二ノ郭とは幅約10mの内館を挟んで対峙する。昭和21年撮影の航空写真を見ると、郭全体の西側約1/2を残存する状況が写し出されており、東側の約1/2はそれ以前に削平を受け撮影時には既に残っていなかったことを表わしている。地元の関係者談によると、低地にあった水田は湿田が多かったために昭和15年～18年頃にかけて、当時の地権者が土取り場に利用し、湿田の盛り土に利用したという話があり、写真の状況とほぼ一致する。さらにこのような状況は昭和27、8年頃から35年頃にあり、最終的には郭全体の土を他へ運んでしまったという。土取りされる以前の状況については明らかにし難いが、先の関係者の話によると、一ノ郭や二ノ郭とほぼ同じ高さがあり、かつては畑として利用されていた。土質はすべて黒色土と褐色土が混じり合った土で、元々からそこにあった土ではなく、どこからか運ばれ盛り土されたような土であったという。これらの得られた情報から判断して、この郭は外堀や内堀を掘削した時の残土を積み上げて人工的に構築された郭である可能性が高いことを表わしている。

(4) 四ノ郭

この郭は三ノ郭の西側に幅約7m～8mの堀を挟んで位置したと推定される郭で、現在民家（根子家一屋号寺田）の屋敷地として利用されている。現状は三ノ郭と同じ低地で、当時の面影は残していない。東西約40m、南北約40mの範囲が想定され、実面積は1,300㎡位と推定される。航空写真には民家が写し出されており、郭としての明確な状況は明らかでないが、構築方法や構築時期は三ノ郭と同じと推定され、屋敷地として利用される以前に削平されたものであろう。

(5) 五ノ郭

二ノ郭の南側、三ノ郭の東側に幅10m～15mの堀を挟んで位置する東西約40m、南北約33mの範囲で実面積約1,000㎡の広さをもつ小規模な郭である。平面形は若干歪んだ台形状を示す。航空写真には僅かな範囲が痕跡として残っているのみであるが、本郭も三ノ郭同様、削平を受けたものであろう。

(6) 六ノ郭

この郭は二ノ郭の東側に幅約10mの内堀を挟んで位置する。発掘調査時には現存しなかったが、航空写真には明瞭に写し出している。地籍図から推定復元すると東西約35m、南北約85mの範囲で実面積は2,500㎡位の広さと考えられる。外堀として断面調査した内堀―2の調査時の所見によれば、本郭の基盤は三ノ郭のような盛り土ではなく、地山の黄褐色粘土質土であることが確認されていることから、本郭は一ノ郭や二ノ郭と同位面の洪積低位段丘が続いていた可能性が強い。平面形は南西―北東に長軸方向をもつ歪んだ長方形形状を示し、北西隅は北側の内堀と外堀を分ける土塁状の高まりに続く。

2) 堀 跡 (第8図、写真図版1・4・8)

前項で詳述したように、当遺跡は六つの郭で構成される大規模な中世城館跡であることが判明し、それに伴って各郭はそれぞれ堀によって区画されていることも明らかとなった。したがって、調査時に内堀、外堀と呼称した堀は、堀全体からみれば一部に対しての呼称であったとともに、外堀とした一ノ郭の東側の堀は実際は外堀ではなく内堀であることから、まったく的はずれの命名となってしまった。以上のことから、本項では調査時の呼称を新ため、新名称を付して記述することとする。

実際に発掘調査したのは一ノ郭と二ノ郭を画する内堀のみで、他は二ノ郭東側の内堀の断面調査、一ノ郭西側の堀が二重堀となるか否かについての断面による確認調査を行ったのみである。ここでは、発掘調査を行った堀と外堀について記述する。

(1) 内堀―1 (写真図版8)

内堀とした部分は西館と東館の間にある堀のことで、両館を繋ぐ土橋を挟んで北側と南側に延びる。土橋の南側約30mは真南へ直線的に延び、そこから約70°西へ方向を変えた後次第に南の方へ湾曲させながら約30m進んで、調査時に南側の外堀と呼称した堀(実際は別の内堀)に接続する。検出面での幅は最狭11.5m、最広14.5m、断面図を作成した土橋付近で11mある。

底面は西館沿いが低く、東館沿いが高くなる 2 段になっており、低い方の幅が 4 m～4.5m、高い方はほぼ 2 m である。深さについても同様で、底面の低い西館寄りでは 2.7m、高い東館沿いが 1.7m である。底面、法面とも若干凹凸はみられるが、ほぼ平坦な状態を示し、法面は底面の直角に対して 50°～52° 外傾し、法面の崩壊はまったくみられない。土橋の北側はほぼ真北に約 30m 延びて外堀に接続する。検出面の幅は 12m～14m と南側の状況とほぼ同様である。この堀は昭和 35 年頃に郭面が開田されるまで細長い低地で苗代として利用されていたことから、埋土の大半は開田時に埋められた時点の埋土である。土層図の検討では、1 層～6 層、8 層は開田時の埋土分で、7 層、10 層、11 層が開田時の地表面と考えられる。開田時の盛り土は西館から土を落したことが窺える。埋められる以前の埋土は黒色土が大半を占め、地山を起源とする黄褐色土の堆積がまったくみられない。また層相の観察でも人為的な埋め戻しを示す状況はまったく観察されないことから、自然堆積による埋土と理解される。12 層～15 層は粘性が強く植物遺体の混入が多いことから、当初は水堀であった可能性が高い。

(2) 内堀－2

東館東側の堀を外堀の一部として調査したが、この部分も実際は東館とその東側にある六ノ郭を限る内堀の一部であることが明らかとなったので、本項では内堀－2 として記述する。

この堀は、西館と東館を全周するように囲み、内堀－1 と接続しさらに調査時に遺存しなかった南側の郭を限る内堀とも接続する。実際の調査は一部の断面を調査したのみであるため他の部分は断定できないが、地籍図で復元すると北側は幅が 12m～13m と計測され、他の 10m 前後に比較して幅が広い。なお、調査した部分は東館の東側部分である。

東館東端の郭面と堀の現地表面である水田面とは約 2 m の比高差があり、堀の底面はそれよりさらに約 2.5m 低い面にある。したがって当時は郭面から堀の底面まで 4.5m 強の深さがあったことになる。検出面の幅は約 11m、底面の幅が約 3.5m の規模である。埋土の状況については壁面の崩落によって実測図が作成されていないが、水田の耕作土である現表土を 1 層にすると、2 層は漆黒色土で内堀－1 の 12 層にほぼ相当する。その下位は内堀－1 では堆積が確認されなかった白色粘土の堆積層で、4 層は 2 層とほぼ同様である。最下層の 5 層は泥炭質の極暗褐色土の堆積が確認されている。埋土内に植物遺体が多く混入していることから当時は水堀であったと推定される。

(3) 外堀

本遺跡は六ツの郭をもつ大規模な中世城館であることが明らかとなったが、これらの郭は堀によって全体が囲まれており、このもっとも外側を区画する堀を外堀とする。しかし、今回の調査では西側が二重となるか否かの確認を行ったのみであり、全体的なことはまったく不明である。したがって、ここでは昭和21年撮影の航空写真と古い地籍図の対比から、当時の外堀を推定復元することとしたい。

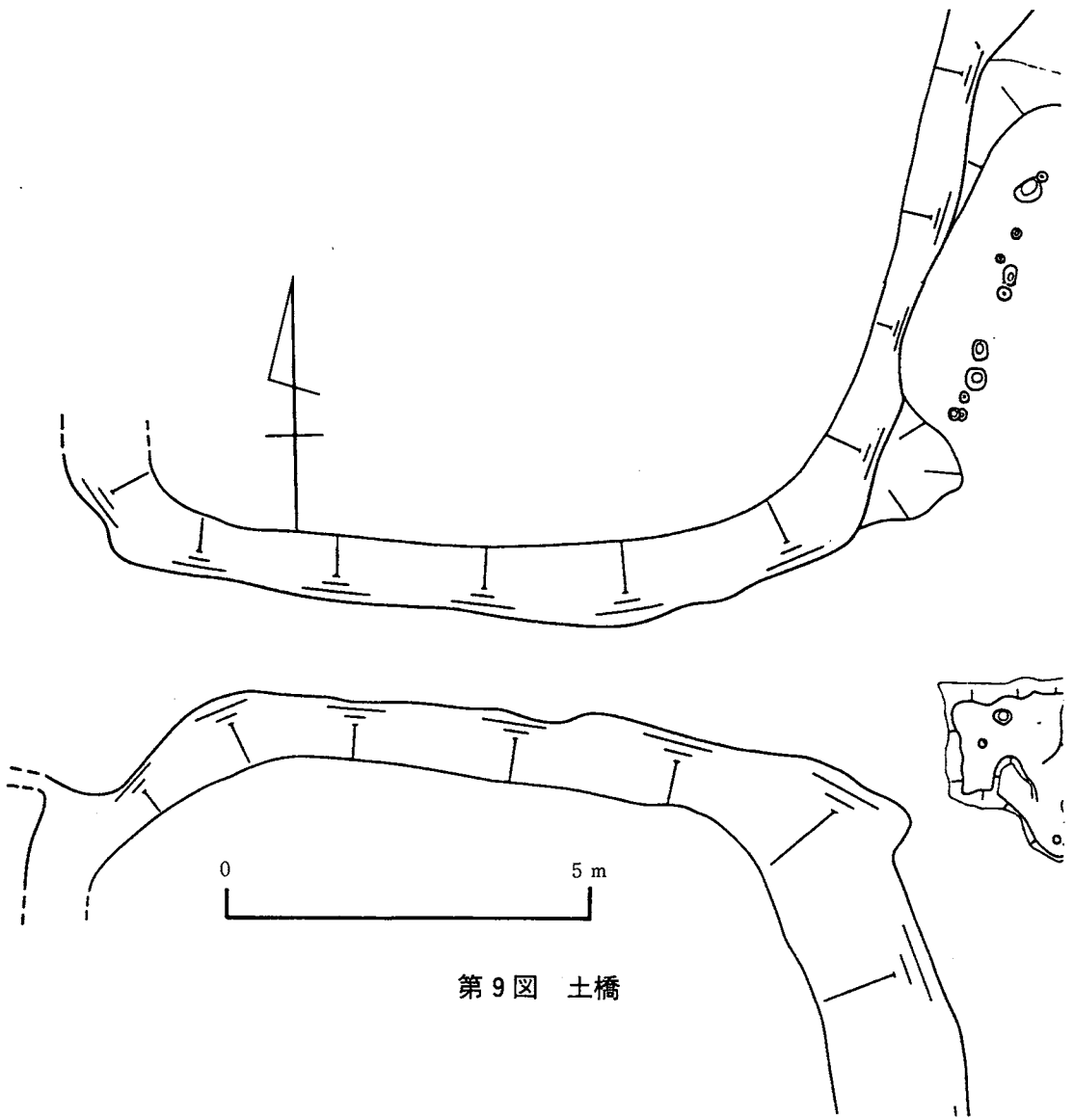
西側は全長約200mであるが、北側の120m分が二重堀となり、その内側の堀が内堀として西館と東館を全周し、西館と東館を区画する内堀と接続する。外側の堀は北西隅から約130m南で四ノ郭と三ノ郭を区画する内堀が分岐し、外堀はそのまま南西隅部に達する。この部分は現在寺田堰と呼ばれている水路に相当しており、当時は堀に貯めた水の取入口であった可能性がある。南側は現在の寺田堰の流路に一致し、四ノ郭、三ノ郭の南側を緩い円弧を描くように東へ約220m延び、この地点で方向を北東に変える。南東側は五ノ郭と六ノ郭に沿うように約180mほど延びる。北側は北西隅から東へ約180m間は二重堀でその東約80mは六ノ郭沿いに延びる。また、北側の外堀には北西隅から約110m付近に土橋の存在したらしいことが窺える。

西側の二重堀をトレンチ調査した結果によれば、ほぼ中央に幅2mほどの畦畔状の高まりが地中に存在し、横断面がW字形になることが確認されており、二重堀となることは確実である。地元の関係者談によれば、昭和30年頃にはリヤカーや馬車が通行できる道路があり、作場道としていたと言われることと、トレンチ調査の結果は一致する。北側の場合は確認をしていないので断定できないが、東館部分には中央に土塁状の高まりがあって内堀と外堀を分けている状況が写真に写っていることから考えて、西館部分も同じように土塁状の高まりを中央にして南側に内堀、北側に外堀という配置関係にあったことが予想される。

西側と北側のみを二重堀にした理由は、西館が主郭、東館が主郭に準ずる郭と考えられることから、中枢部の西側と北側に郭を配置していない当館は、西辺と北辺の防備のために二重堀とすることは必要不可欠な施設と推定される。南側と東側には三ノ郭～六ノ郭が配され、その外側に外堀、その内側に内堀を入れることによって防備を固めるという縄張りを想定することができる。

1) 土橋 (第9図、写真図版1・9)

古い地籍図と航空写真をみると西館と東館を限る内堀、そして東館北側の内堀と外堀を区画する土塁状の高まりと北側の城外を結ぶ部分に土橋の存在を示す状況が記録されている。しかし、前者の内堀は埋め戻され完全に土中に没していたし、後者はすべて水田となっていた。今



第9図 土橋

回の調査は後者の位置する水面より1.5mほど高い郭面の調査に重点がおかれていたことから、前者の検出と精査を行った。

(土橋)

東館の北西隅から南へ約30mの地点に西館を結ぶように位置する。全長約12m、路面幅は中央部約1.5m、基部約3.5mを示し、基底部は中央部で幅約3.3mであり、横断面が台形状をなす。深さはもっとも深い中央部で約2.5m、東寄りの浅い部分で約1.55mである。路面は非常に硬く良く踏み固められた状況を示しているが、中央部が緩く凹んでいる。構築方法をみると、東側の浅い部分はすべて地山であることから、堀の幅を広げた時に土橋部分を削り残したものと推定される。西側の深い部分は盛り土によって構築されているが、断ち割りをしていないため断定できないが、法面検出作業中の所見によれば、ほとんどは黒色土や黒褐色土で地山起源の黄褐色土はあまり混入していない。おそらく下層から突き固めた築成土であろう。

4) 柱穴群 (袋詰図版1～8、写真図版1)

西館から約5,290、東館から約7,720の柱穴(杭穴状の小坑も含む)が検出されたが、既述のとおり、西館は開田による削平によって、東・南・北方に寄るほど疎らになり、本来は中央部西寄り部分の密度に近い分布状況が推定される。東館では、外堀の縁辺部、特に南側では縁辺から15m位の幅で柱穴が全く検出されない部分がある。当館は攪乱を全く受けていないことから考えると、この付近には建物を建設しなかったと理解するのが妥当であろう。

西・東館ともに、表土の層厚が20cm～35cm、厚い所でも40cm位と薄かったことと、開田の際に旧表土が全面的な移動を受けていたこと等から、これらの柱穴はほぼ同一面で検出されている。しかし、整地層部分では層位的な違いがあるやに見受けられたが、明確に把握することはできなかった。

掘り方の形状には方形・円形・楕円形があるものの、大多数は円形か楕円形を示し、方形は極く僅かである。規模は径0.20m～1.00mと差が大きいが、全体的には0.30m～0.50mがもっとも多く、径0.50m以上は僅かである。傾向としては、大規模な建物跡は径の大きい柱穴が多く、特に庇がついたり間仕切りの入る建物に顕著である。深さは、検出面からの深さでは0.15m～0.70m位までであるが、攪乱・削平の著しい場所ほど浅い傾向がある。もっとも多いのは0.25m～0.50mの深さである。なお、明らかに中世と考えられる柱穴の中で、断面の最深部が尖る所謂打込み柱と推定される例は皆無である。何れも断面が円筒状をなし、一部に柱痕跡を確認していることから、埋込み柱の柱穴と考えることができる。しかしながら、柱根が実際に遺存した柱穴は西館の両端部と同南西部に20数基を数えるのみである。

埋土は、ほとんどが黒色土を主とし、若干の褐色や黄灰白色の地山粘土塊を混入する例が多く観察された。このような状況は西館、東館とも同様であり、このことは、掘り上げた土をそのまま埋め戻した結果によるものであろう。また、東館の南東部に位置する柱穴の中に、根固め石を埋め込んだ例も若干みられた。ほかに、西館、東館ともに炭化材や炭化穀類が出土した柱穴も若干存在する。

柱穴内から出土した遺物には舶載陶磁器38点、国産陶磁器31点、金属製品56点、石製品35点、木(漆器、漆膜含む)製品7点があるものの、何れも埋土内からの出土であり、地鎮のために埋納された状況を示す例はない。

5) 掘立柱建物跡

西館5,290、東館7,720に及ぶ柱穴から、西館37棟、東館35棟の建物跡を推定した。検出され

た柱穴13,010からすれば、確認された建物跡が72棟、使った柱穴1,451はあまりにも少なすぎる。おそらく、もっと多くの建物跡が存在すると推定される。これらの建物跡は、単独の例も若干みられるものの、他の建物跡と重複する。ほとんどの場合は、ほぼ同じ場所で棟方向を若干変えて2棟～4棟のほぼ同規模で同じ柱配置をもつ建物跡が重複している。

西館、東館ともに南側と北側に建物跡が並ぶ傾向がみられ、郭の使い方を示すものであろう。

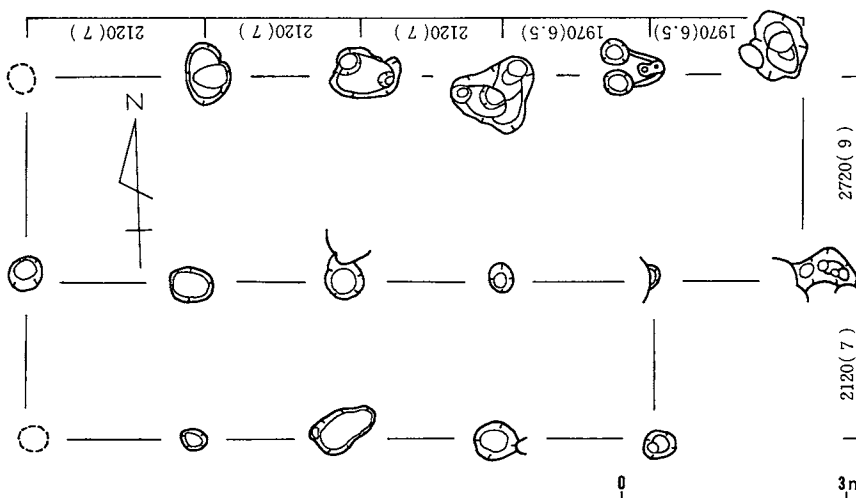
棟方向は東西棟と南北棟にほぼ分けられ、重複する建物跡相互でも棟方向が共通する場合が多い。このことは、建設当初から使われ方が決定しており、最後までそれを受け継いだ結果を示すものであろう。

〈西 館〉

既述のとおり、東・南・北側は削平によって柱穴の遺存状態が悪く、検出数も少なく規模特に深さが浅くなっており、僅かに底面のみが残っている例もみられた。にもかかわらず、把握された建物跡は郭内全体に散在する状況を示し、中には2棟～5棟重複する地点もあり、削平を受けていなければもっと多くの建物跡が確認されたであろうことが推定される。

(1) C II c 10建物跡 (第10図)

北西隅のグリッドC II・C III区にまたがってC II d 10建物跡-1、同一-2、C III d 1建物跡、C III b 1建物跡と重複して位置する建物跡であるが、重複相互の新旧関係は不明である。桁行10.3m (34尺) 5間、梁行4.84m (16尺) 2間の規模をもち、N-88°-Wの棟方向を示す東西



第10図 (1)C II c 10建物跡

棟である。

西側と北側が削平によって0.3m低いため、西妻の南北両隅の柱穴が未検出であるが、本来は西側と北側に更に広がる建物跡である可能性がある。

桁行5間を個々の柱間でみると、西側3間は2.1m強とほぼ共通するが、東側2間はそれより若干狭く1.95m強を測り、この建物跡は2種類の間尺を使っていると推定される。計測値から算出される間尺は、西側3間は7尺、東側2間は6.5尺が考えられる。梁行は南側が2.1m強、北側が2.7m強の計測値であることから、南側7尺、北側9尺の間尺が想定される。

掘り方の規模は径0.3m～1mまで含むが、他の柱穴と重複する柱穴は径が大きく、単独の柱穴は0.3m～0.5m位であり、平面形は円形や楕円形である。深さは、検出面から0.2m～0.5mと差がみられるが、0.4m位がもっとも多い。

埋土は黒色土を主とし、若干の褐色粘土塊や小粒を含む。

(2) C II d 10建物跡-1 (第11図)

北西隅のグリッドC II区・C III区にまたがりC II c 10建物跡、C II d 10建物跡-2、C III b 1建物跡、C III d 1建物跡が重複して位置する建物跡である。重複による新旧関係は定かでない。桁行14.84m (49尺) 7間、梁行10.6m (35尺) 4間の規模をもち、N-85°-Wの棟方向を示す東西棟である。

削平を受けている西側からも柱穴が検出されていることから、西側に更に延びていた可能性が強い。また、桁行南側柱列の西端と西端梁行柱列北側の柱穴は検出されていない。

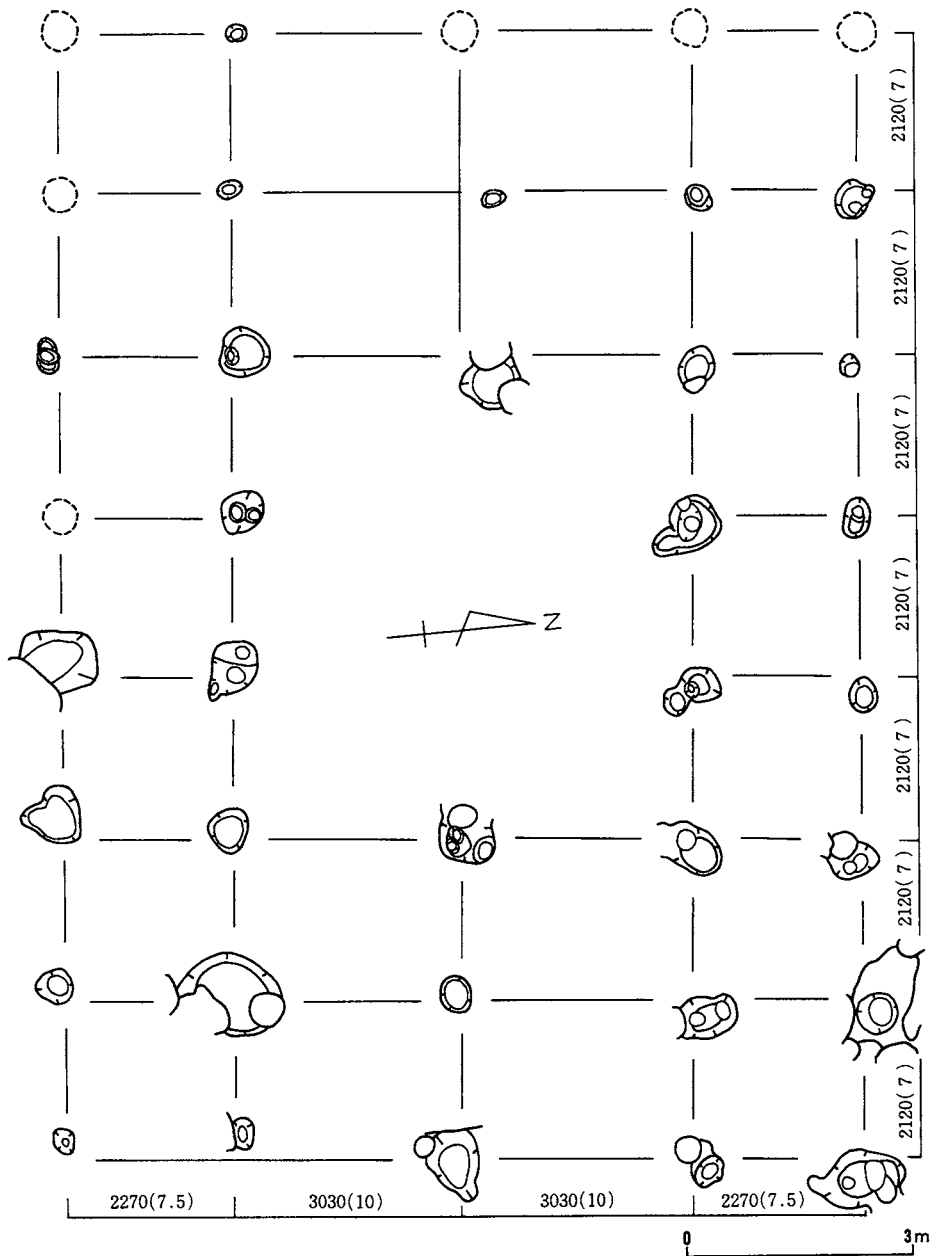
桁行7間を個々の間尺でみると、1.9m～2.2mと差がみられるも、全長から割り出すと2.1m強となり、7尺等間の柱間と考えられる。梁行は中央2間が3m前後とほぼ同様の計測値を示し、南側と北側の1間は2.15m強とほぼ共通していることから、中央の2間は16尺、他の2間は7.5尺の間尺と推定され、南側と北側の1間は底部分と考えられる。柱配置の状況からみて、西側の2間、中央の3間、東側の2間に間仕切りが入り、大きく3部屋に仕切られていた可能性がある。

掘り方の規模は0.25m～1mの範囲であるが、他の柱穴と重複する柱穴は径が大きく、単独の柱穴は0.5m～0.6mの規模で、平面形は円形や楕円形を示す。深さには検出面から0.3m～0.5mまでであるが、0.4m～0.5mが主体を占める。

埋土は黒色土を主とし、若干の褐色粘土小塊を混在する。

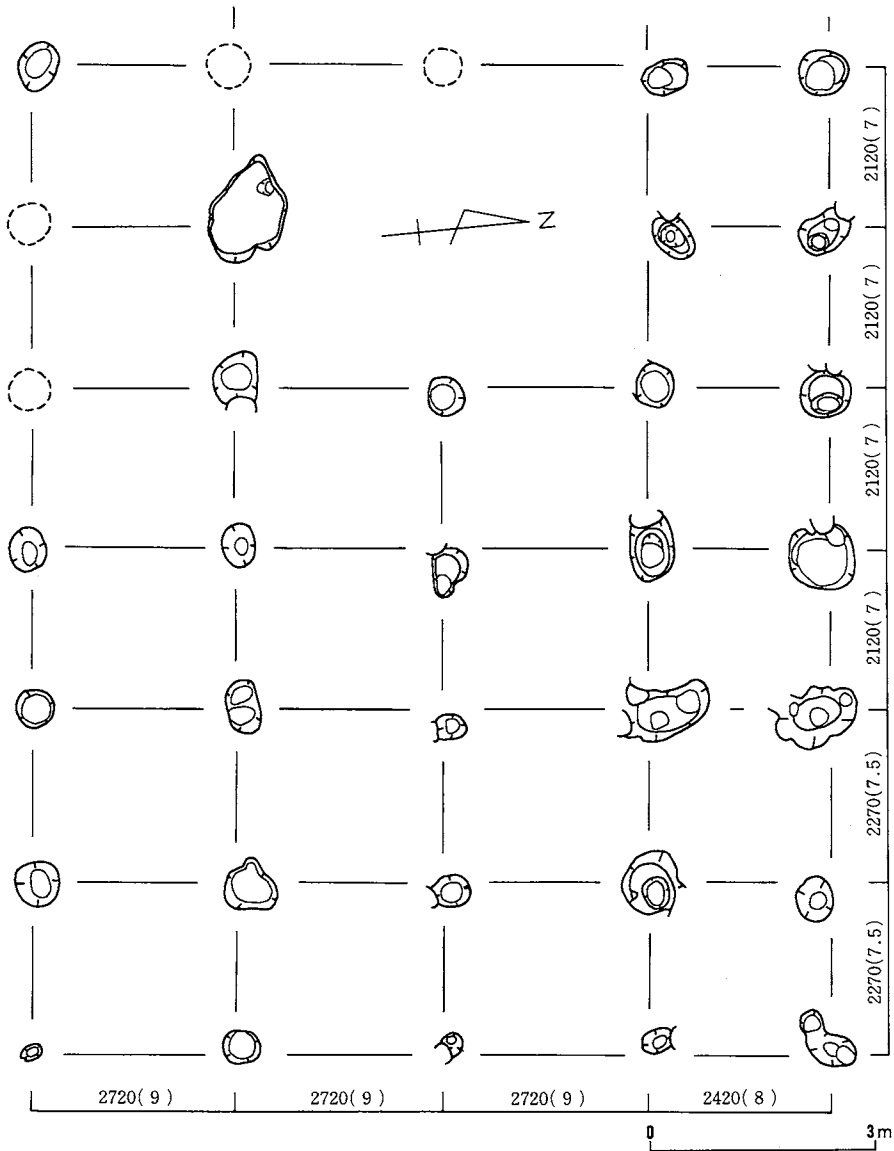
(3) C II d 10建物跡-2 (第12図)

北西隅のグリッドC II区、C III区にまたがり、C II c 10建物跡、C II d 10建物跡-1、C III



第11図 (2)C II d 10建物跡 - I

b 1 建物跡、C III d 1 建物跡と重複する建物跡であるが、重複による新旧関係は不明である。桁行は13.02m (43尺) 6間、梁行10.6m (35尺) 4間の規模をもち、N-85°-Wの棟方向を示す東西棟である。南側柱列の西方と西妻の一部で柱穴が検出されていないが、この付近は削平、整地された地点であることに起因すると考えられ、本来は建物全体が更に西へ広がる可能性



第12図 (3)C II d 10建物跡-2

がある。

桁行6間の間尺を個別に計測すると1.9m~2.3mまで変化がみられる。その中でも東2間はほぼ2.25m強と共通し、その西方4間は全長から平均すると2.1m強ではほぼ共通していることから、東側2間は7.5尺、西側4間は7尺等間で建設された建物跡と推定される。梁行の4間は、南側3間は平均するとほぼ2.7m強となり、北側の1間はそれより狭く2.4m強であることから、南側3間は9尺、北側1間は8尺で建設されたと推定され、北側1間は底部分の可能性はある。検出された柱の配置関係を見ると、棟持柱列の西側2間分の柱穴は未検出であるが、他は全て

の位置に配置する所謂ベタ柱である。これらから考えて、複数の部屋に仕切られていた可能性を示している。

掘り方の規模は径0.25m～1.5mまでであるが、他の柱穴と重複する柱穴は径0.7m以上と大きく、単独の場合は0.5m～0.7m位が主体を占めている。深さは0.4m～0.5mが多い。

埋土は黒色土と褐色粘土が混在した土である。

(4) C II j 8 建物跡 (第13図)

西端の中央部グリッドC II区、D II区にまたがり、D II a 6 建物跡、D II a 8 建物跡と重複する建物跡であるが、重複相互の新旧関係は明らかでない。当遺構は南北棟の西側桁行に東西棟の東妻が接続したT形の平面形を示す。南北棟部分の規模は桁行16.36m (54尺) 8間、梁行3.18m (10.5尺) 2間を測り、N-2°-Eの棟方向を示す建物跡である。東西棟部分は桁行7.42m (24.5尺) 4間、梁行4.24m (14尺) 2間の規模をもち、棟方向は南北棟のそれに直交する。

南北棟の桁行8間を個々の間尺で見ると、南側2間、北端と北から4間目の間尺が2m弱、それ以外は2.1m強の計測値であることから、2種類の間尺が使用されていると理解され、2m弱は6.5尺、2.1m強は7尺の間尺と推定される。梁行2間は1.6m位とほぼ同様であることから、5.25尺の等間と考えられる。東西棟部は東側3間が共に2.25m強、西端が0.9m強が計測されることから、前者は7.5尺等間、後者は3尺の建物跡であろう。梁行の2間は共に2.1m強と共通することから7尺の等間と推定される。両棟とも棟持柱は明確であるが、床束や間仕切りに関係する柱穴は検出されていない。

掘り方は径0.3m～0.8mの規模であるが、0.3m～0.5mが主体をなし、平面形も円形から楕円形まで含まれる。

埋土は、褐色粘土の混入した黒色土である。

(5) C II j 10 建物跡 (第14図)

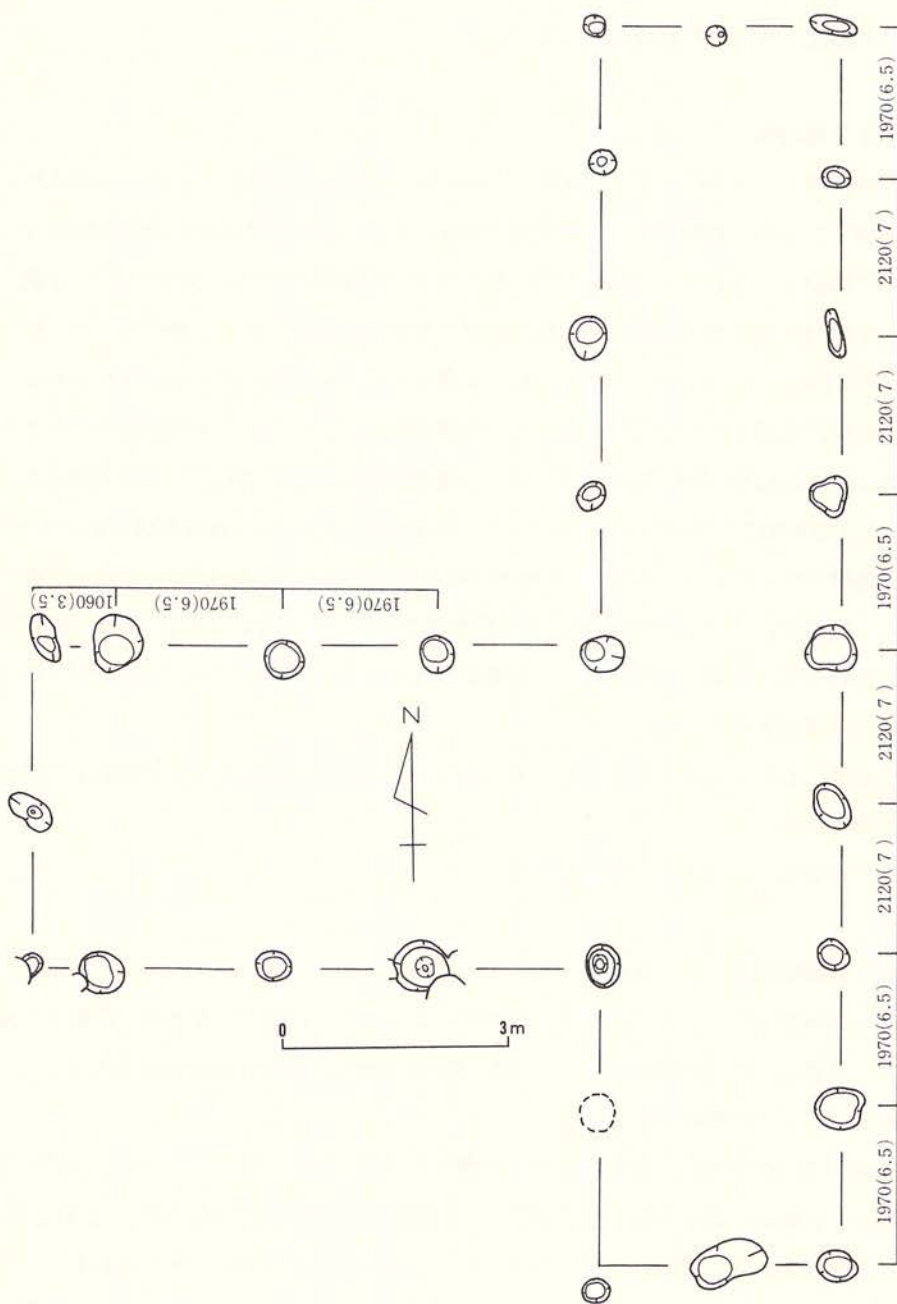
西端から15m東方のグリッドC II区、C III区にまたがり、C III i 2 建物跡、C III j 1 建物跡と重複して位置し、桁行9.99m (33尺) 4間、梁行3.03m (10尺) 1間の規模をもち、N-101°-Wの棟方向を示す建物跡である。

桁行4間個々の計測値は、西側2間が2.7m強と共通し、東側2間は2.25m位とほぼ同様であることから、2種類の間尺を使用して建設した可能性を示し、西側2間は9尺、東側2間は7.5尺の間尺と推定される。梁行はほぼ3mであることから、10尺の間尺と考えられる。

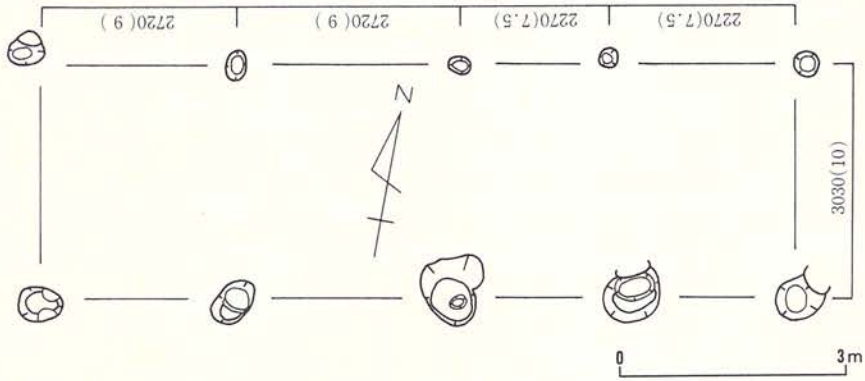
掘り方は0.25m～0.8mの規模をもつが、北側柱列は削平整地された部分に位置し、整地層を除去した面での検出であるため、南側柱列に比較して径0.25m～0.35mと総じて径が小さく、

円形～楕円形の平面形を示す。南側柱列の深さは0.3m～0.4mであるが、北側柱列のそれは0.05m～0.2mと浅いものの、底面レベルで大きな差はない。

埋土は黒色土や褐色粘土の混入する土である。



第13図 (4)C II j 8 建物跡



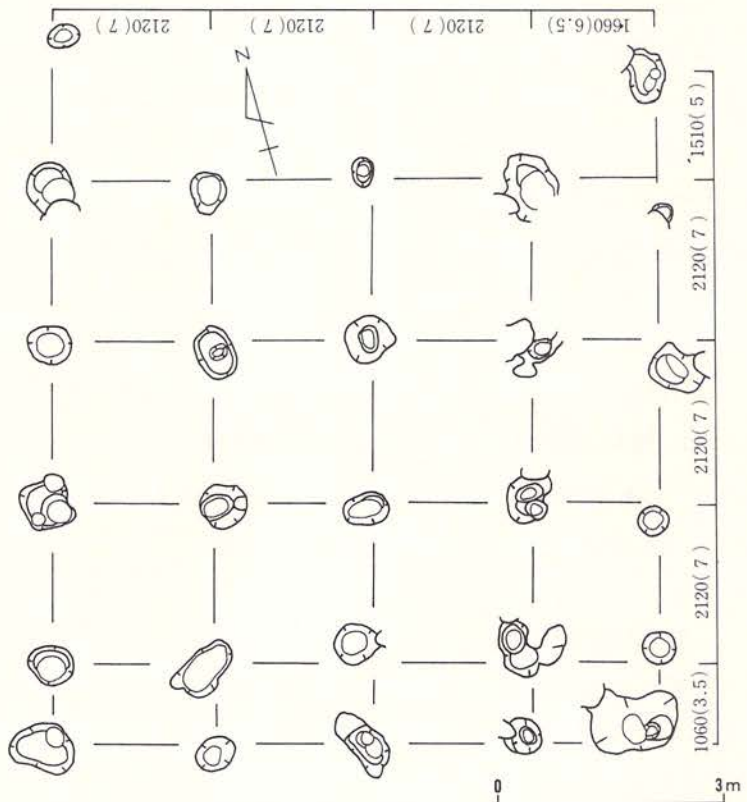
第14図 (5) C II j 10建物跡

(6) C III b 1 建物跡 (第15図)

北西隅のグリッドC II区、C III区にまたがり、C II c 10建物跡、C II d 10建物跡—1、C II d 10建物跡—2、C III d 1建物跡と重複して位置し、棟方向がN-17°-Eを示す建物跡である。

北側が削平による低地部分にかかるため柱穴の検出はないが、本来は北側に更に広がる可能性があり、南北を桁行として記述する。検出された桁行は8.93m (29.5尺) 5間、梁行8.02m (26.5尺) 4間の規模をもつ。柱穴の省略がなく、桁間と梁間の交点にはすべて配置されるベタ柱である。

桁行5間個々の柱間は、南端の1間が1m強、続く3間は若干異同はあるが平均すると2.1m強を測り、北端の



第15図 (6) C III b 1 建物跡

1間は東側が1.5m強、西側が2m弱の計測値を示すことから、南端は3.5尺、次の3間は7尺等間、北端は5尺か6.5尺の間尺と推定される。梁行4間は西側3間が平均すると2.1m強となることから7尺等間、東側1間は1.6m強となることから5.5尺の柱間と推定される。このことから、南妻と東側の1間は底部分に相当すると考えられる。

掘り方は径0.3m～1mの規模をもつが、他の柱穴と重複する柱穴は径0.7m以上の場合が多く、単独の柱穴はほぼ0.3m～0.5mの範囲に入り、平面形は円形か楕円形を示す。深さは0.3m～0.5mがもっとも多い。

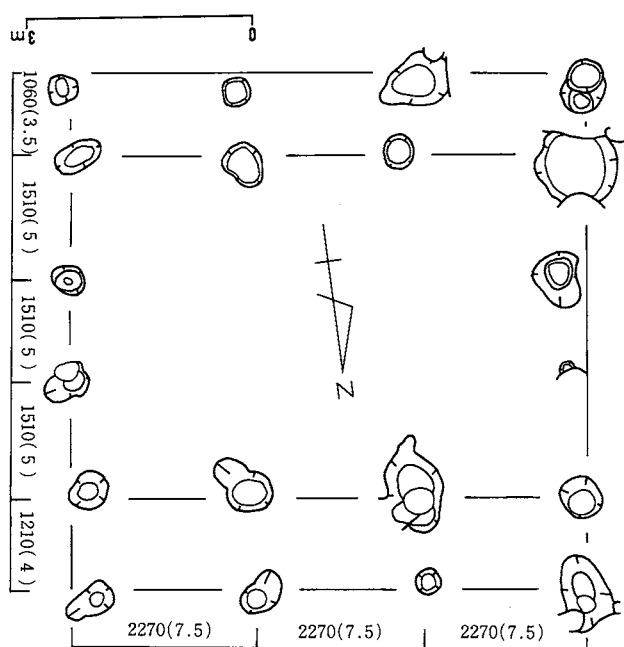
埋土は褐色粘土粒が混入した黒色土である。

(7) C III c 4 建物跡 (第16図)

西端の東方20m、北端から南方13mのグリッドC III区に、C II d 10建物跡-1、C II d 10建物跡-2、C III d 1建物跡の東部と重複して位置し、桁行6.81m (22.5尺) 3間、梁行6.81m (22.5尺) 5間の規模をもち、N-83°-Wの棟方向を示す建物跡である。

桁行3間は個々の間尺に若干異同があるものの、全長から算出するとほぼ2.25mとなることから、7.5尺等間の間尺と推定される。梁行5間は、個々の間尺では差がみられる。全長から算出すると、中央の3間部分は4.5m強の計測値が得られることから、5尺等間と推定される。北側は1.2m強、南側は1m強の計測値であることから、北側は4尺、南側は3.5尺の間尺と考えられる。柱穴の配置関係をみると、桁行に4条の柱列があることから、南北両面に庇の付く建物跡である。

掘り方は径0.25m～1.15mの規模であるが、他の柱穴と重複する柱穴は0.6m以上の径をもち、単独の柱穴は0.5m以下の規模



第16図 (7)C III c 4 建物跡

模である。深さは0.2m～0.5mの範囲であるが、東側は削平によって0.2m～0.3mと浅い。平

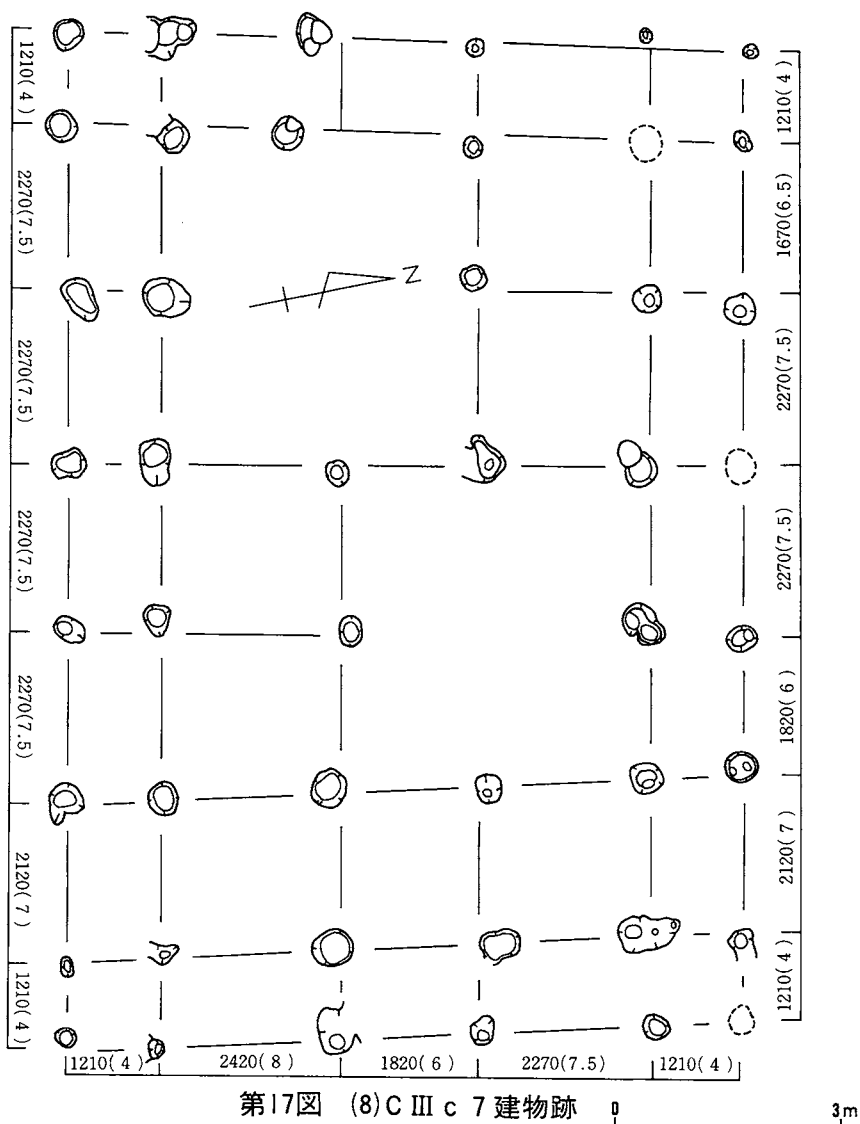
面形は円形か楕円形を示す。

埋土は褐色粘土粒の混入した黒色土である。

(8) C III c 7 建物跡 (第17図)

西端から30m東方、北端から14m南方のグリッドC III区に、C III d 7 建物跡、C III e 9 建物跡と重複し、桁行13.6m (45尺) 7間、梁行8.93m (29.5尺) 5間の規模をもち、N-78°-Wの棟方向を示す建物跡である。

桁行7間個々の間尺を計測値で見ると、南側と北側の長さが一致しない。全長を比較すると、北側が南側より約0.7m強狭くっており、すべての間尺が狭いか一部の間尺が狭いことを示し



ている。東側から対面する南北両面の計測値を比較すると、東端が約1.2m、2間目が2.1m強と近似している。3間目は南側が2.25m強に対し、北側が1.8m強と約0.45m狭くなっている。4、5間はともに2.25mと等間になる。6間目は南側が2.25m強、北側が1.95mほどと北側が約0.3m狭くなっている。西端はともに1.2mである。以上から、北側柱列が東から3間目で0.45m、6間目で0.3m狭く、建築時に0.75m狭く設計されたことがうかがえる。これから間尺を算出すると、南側柱列が東から4尺・7尺・7.5尺・7.5尺・7.5尺・7.5尺・4尺、北側柱列も同様に4尺・7尺・6尺・7.5尺・7.5尺・6.5尺・4尺と推定され、東端と西端の1間は底部分と考えられる。梁行5間は、東西両面とも近似した計測値を示し、間尺が等しいことを表わしている。柱間個々の計測値は、南から1.2m・2.25m強・1.95m強・2.25m強・1.2m強となり、4尺・7.5尺・6.5尺・7.5尺・4尺の間尺と推定され、東西両面は桁行同様底部分に相当するであろう。柱穴の配置関係を観察すると、身舎南西部と中央部北寄りに柱穴の省略がみられるものの、他はすべて配置されるベタ柱状を示し、複数の部屋に仕切られていたことが推定される。

掘り方は径0.2m～0.6m・0.2m～0.3mの深さで、円形や楕円形の平面形を示し、北西隅部に比較して検出面からの深さが浅く、この状況は開田時の削平に起因している。

埋土は褐色粘土の混入した黒色土である。

(9) C III d 1 建物跡 (第18図)

北西隅部のグリッドC II区とC III区にまたがり、C II c 10建物跡、C II d 10建物跡-1、同一-2、C III b 1建物跡、C III c 4建物跡と重複して位置し、桁行15.5m (51尺) 8間、梁行7.6m (23尺) 4間の規模をもち、N-90°-Wの棟方向をもつ建物跡である。西端部が削平・整地部分にかかり、妻を構成する柱穴が未検出であることから、本来は西方へ更に延びる可能性が強い。

桁行8間を柱間個々の計測値を比較すると、南側と北側が必ずしも一致しないが、東側から7間の全長が南側で13.4m、北側で13.6mと、平均値が44.5尺の13.5mと同じであることから、東側から7間までは44.5尺の設計と考えられる。個々の間尺では、東側から1・2・4・6～8間目が1.95m強、3・5間目が1.8m強と大体2種類の間尺に分類されることから、前者は6.5尺、後者は6尺の間尺をもつと推定される。梁行は、東側と西側の全長を比較すると、西側が0.3m位狭く、建設当初から西側が1尺狭く設計されたと推定される。東側4間個々の計測値を比較すると、いずれも異なり一致しない。南端の間尺からみると、1.5m強・2.4m強・1.8m強・1.8m強の順になり、5尺・8尺・6尺・6尺が推定されるものの、棟持柱と考えられる中央の柱穴が中心部に配置されたと考えると、南側2間分と北側2間分がともに12.5尺に設計された可能性も想定される。

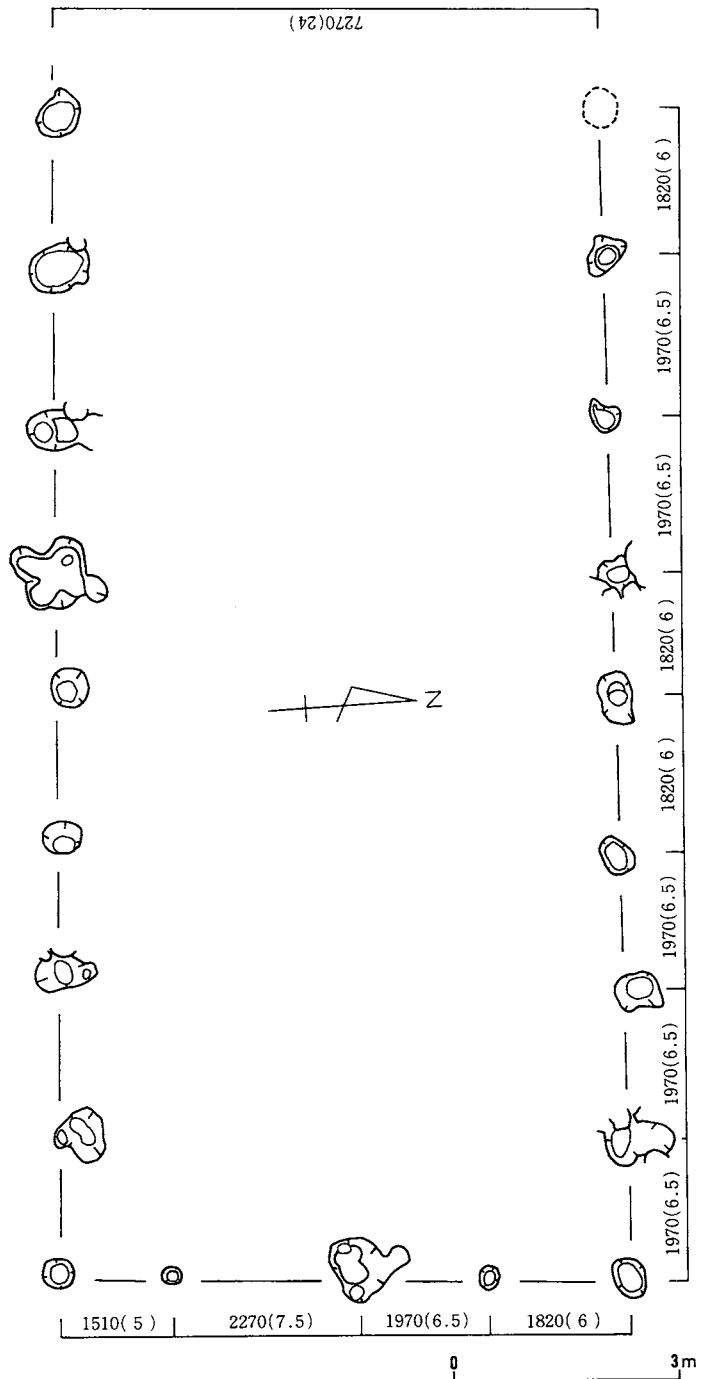
掘り方は0.25m~0.8m、最深0.5m~0.6mの規模をもち、平面形はほぼ円形や楕円形であるが、径0.5m~0.6mの規模がもっとも多い。埋土はほとんどが黒色土のみである。

(10) C III d 7 建物跡

(第19図)

西端から東方30m、北端の南側15mのグリッドC III区にC III c 7 建物跡、C III e 9 建物跡と重複して位置し、桁行10.6m (35尺) 5間、梁行6.06m (20尺) 3間の規模をもち、N-85°-Wの棟方向を示す建物跡である。

桁行5間個々の計測値は必ずしも一致しないが、北側柱列の全長を単純に5等分するとほぼ2.1m強の長さとなり、7尺等間の間尺で設計されたと推定される。梁行は東側と西側で柱穴の配置が異なる。東側は南側1間は1.2m強、中央が2.25m強、北側が2.55m強の3間となり、南側から4

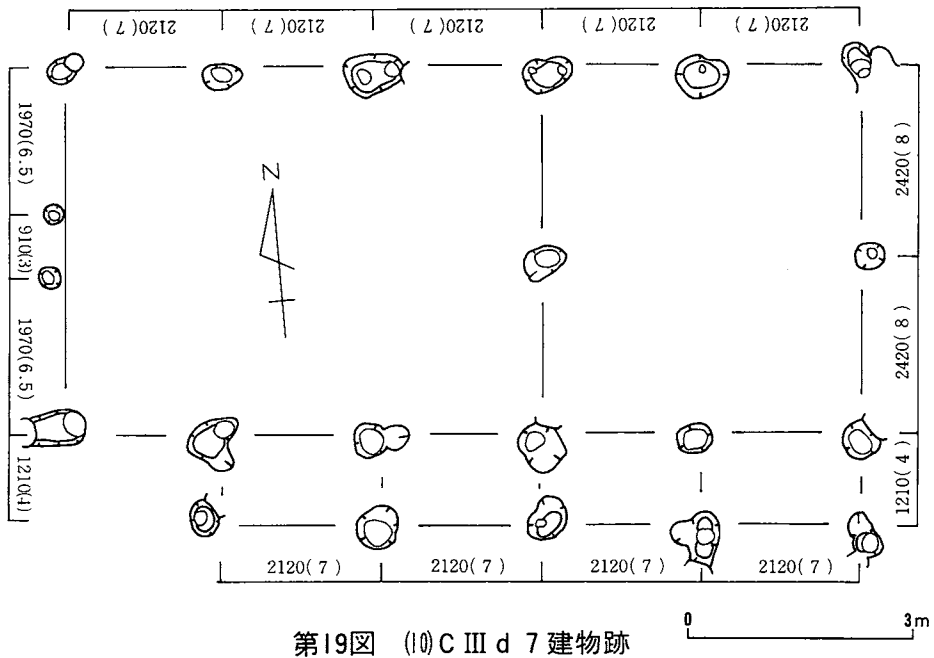


第18図 (9) C III d I 建物跡

尺・7.5尺・8.5尺の間尺が考えられる。西側は、東側の南1間に相当する部分は柱穴が未検出のため不明であるが、他の部分の全長は東側の全長に共通する。計測された4.85m強は、南側から2m強、0.8m強、1.95m強の計測値を示し、それぞれ6.75尺・2.75尺・6.5尺の間尺とも考えられるが、両側が6.5尺・中央3尺で設計された可能性もある。柱穴配置をみると、桁行南側の1.2mを示す狭い間は庇部分と推定され、桁行の東側から2間目の棟持柱の位置に柱穴が配置されていることから、東・西2部屋に仕切られていたと推定される。

掘り方は径0.25m～0.8m、最深0.3mの規模をもち、開田時の削平によって北西部の柱穴に比較して全体的に浅い。

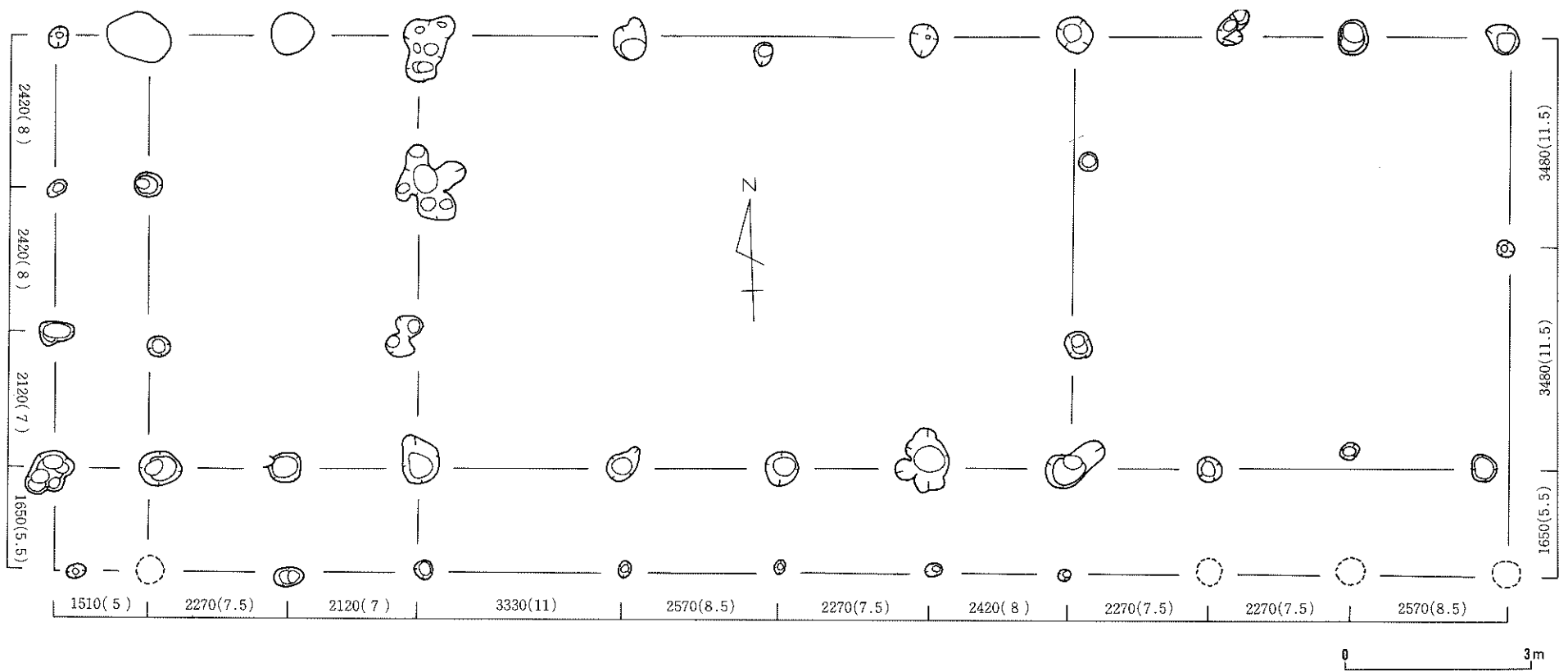
埋土は黒色土を主体とした土である。



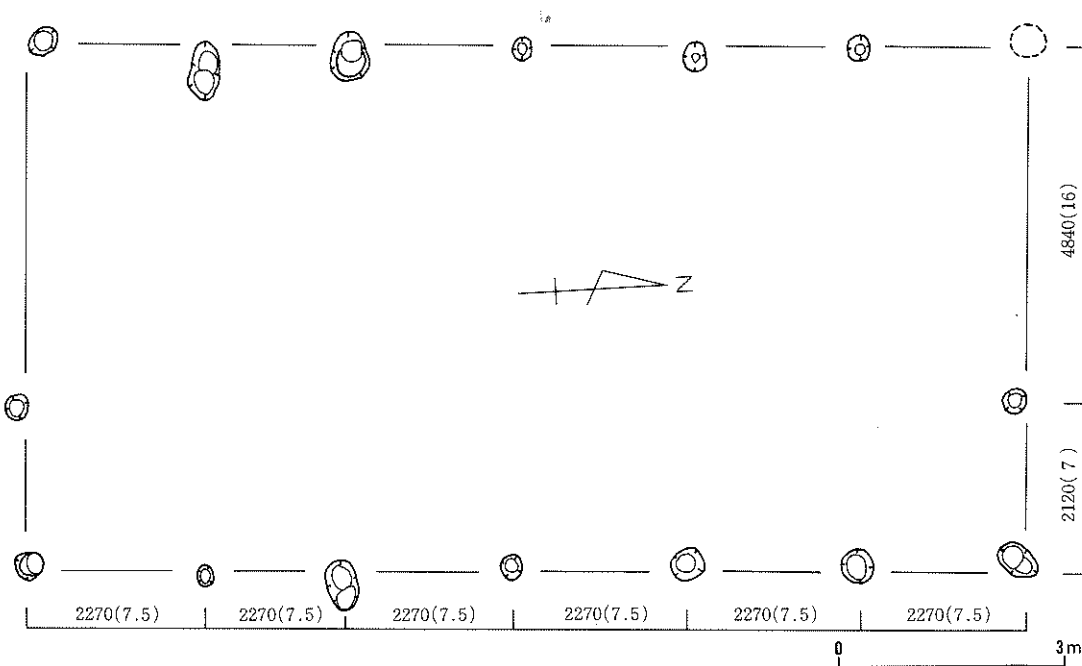
(11) C III e 9 建物跡 (第20図)

西端から約39m東方、北端から約16m南方のグリッドC III区・C IV区にまたがり、C III c 7 建物跡・C III d 7 建物跡、C IV e 1 建物跡—1・同一—2と重複して位置し、桁行22.11m(73尺) 10間、梁行8.63m(28.5尺) 4間の規模をもち、N-88°-Wの棟方向を示す建物跡である。

桁行10間個々の計測値を比較すると、南側・北側の柱列ともに長短があり、等間で設計された建物跡とは考えられないが、南側・北側相対する計測値間には大差がなく、相対する柱間は等間と推定される。個々の間尺を東側から計測すると、2.1m・2.25m・2.25m・2.4m・2.25



第20图 (I) C III e 9 建物跡



第21图 (I) C III h 6 建物跡

m・2.55m・3.3m・2.1m・2.25m・1.5mに近い計測値を示し、7尺・7.5尺・7.5尺・8尺・7.5尺・8.5尺・11尺・7尺・7.5尺・5尺の間尺で設計されたことが窺え、西端の5尺は庇部分に相当するであろう。梁行は東側と西側では柱配置を異にするが、西妻の南1間を除いた全長が約4.6mで、東妻の長さもほぼ同様である。東妻は南から3.55m・3.4の2間に分割され、西妻は2.1m・2.4m・2.4mの3間に分けられている。これから考えると、東妻は南から11.75m、11.25m、西妻も同様に7尺・8尺・8尺の間尺で設計されたと推定される。さらに、南側に1.65mの狭い柱間を示す柱列が付き、この部分は5.5尺の庇部分と考えられる。間仕切りや床束を示す明確な柱穴は検出されていない。

掘り方は径0.25m～1.1m、深さ0.15m～0.3mの規模であるが、庇部分と推定される桁行南側柱列は径0.25m～0.45m、深さ0.15m前後と、身舎のそれに比較し小規模である。

埋土は褐色粘土が僅かに混入した黒色土である。

(12) C III h 6 建物跡 (第21図)

西端から32m東方、北端から25mのグリッドC III区・D III区にまたがり、C II j 7 建物跡、D III a 7 建物跡と重複して位置し、桁行13.33m (44尺) 6間、梁行6.96m (23尺) 2間の規模をもち、N-85°-Wの棟方向を示す建物跡である。

桁行6間個々の計測値をみると、いずれも2.25mに近く、全身を単純に6等分した数値に近似しており、7.5尺の等間で設計されたと推定される。梁行全長6.96mは、東妻・西妻とも中心より南寄りに各柱穴1を配置し、2間に分けている。東妻は南より2.25m強、4.7m強となり、7.5尺・15.5尺の間尺と考えられる。西妻は2.1m強、4.85m強で、7尺・16尺の間尺が想定される。東・西妻の南側1間が0.15mの違いがみられることから、本来は7尺か7.5尺で設計された建物跡の可能性がある。間仕切りや床束の柱穴は未検出である。

掘り方は径0.2m～0.5m、深さ0.15m～0.3mの規模をもち、平面形は円形か楕円形である。位置する付近は開田時に削平を受けているため、深さの浅い柱穴が多い。

埋土は黒色土である。

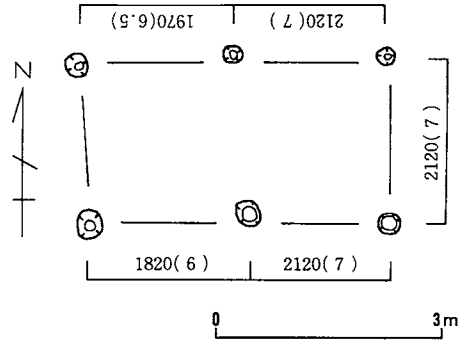
(13) C III i 2 建物跡 (第22図)

西端から23m、北端から31mのグリッドC III区にC II j 10建物跡と重複して位置し、桁行が北側4.09m (13.5尺) 2間、南側3.93m (13尺) 2間、梁行2.1m (7尺) 1間の規模をもち、N-83°-Wの棟方向をもつ建物跡である。

桁行2間は既述のとおり北側の全長が南側に比較して0.15m長く、四隅が直交しない。桁行個々の間尺をみると、北側が東から2.1m、1.95m強と7尺、6.5尺の間尺が推測され、南側は

東から1.82m、2.1m強と計測され、6尺・7尺の間尺が推測されることから、北側が5寸長く設計されたことが窺える。梁行は東妻・西妻とも2.1m強が計測され、7尺の設計と推定される。間仕切りや床束の柱穴は未検出である。

掘り方は徒0.25m～0.35m、深さ0.2m～0.4mの規模をもち、円形か楕円形を示す。埋土は黒色を主体とする。



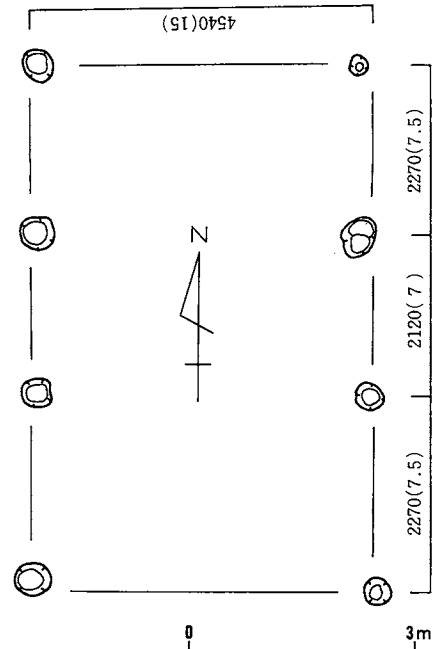
第22図 (13) C III i 2 建物跡

(14) C III i 4 建物跡 (第23図、写真図版11B)

西端から30m、北端から31mのグリッドC III区にC III j 5 建物跡と重複して仕置き、桁行6.66m (22尺) 3間、梁行4.54m (15尺) 1間の規模をもち、棟方向がN-2°-Wを示す建物跡である。

桁行3間個々の間尺は南から2.27m、2.21m、2.27mと計測され、7.5尺・7尺・7.5尺の間尺で設計されたと推定される。東側柱列と西側柱列の計測値に若干差がみられるものの、小異であることから同間尺による設計と考えられる。梁行は南妻が4.54m、北妻が4.3m強の計測値で約0.24mの差がみられ、尺に換算すると南妻15尺、北妻14.2尺弱となる。このことは、設計段階から北妻を狭くした可能性を示すが、14.5尺か15尺の間尺をもつ可能性も考えられる。

掘り方は径0.25m～0.5m、深さ0.25m～0.35mの規模をもち、平面形は円形や楕円形を示す。埋土は黄褐色の地山土が少量混入した黒色土で占められる。



第23図 (14) C III i 4 建物跡

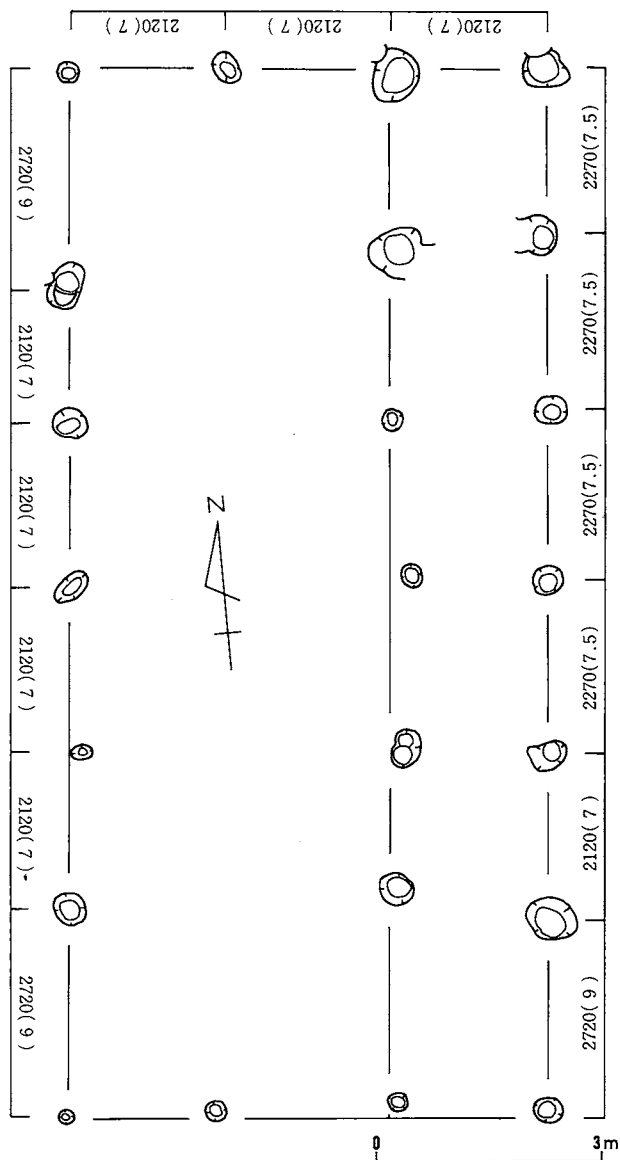
(15) C III j 2 建物跡 (第24図)

西端から23m、北端から34mのグリッドC III区にC II j 10建物跡、C III i 2 建物跡、D II d 10建物跡、D III b 1 建物跡、D III d 1 建物跡、D III e 2 建物跡-1、D III e 2 建物跡-2と重複して位置し、桁行13.93m (46尺) 6間、梁行6.36m (21尺) 3間の規模をもち、N-6°-E

の棟方向をもつ建物跡である。

桁行6間は東側柱列・西側柱列ともに全長が13.93mを示し、全体が長方形で四隅が直交する建物跡であるが、個々の間尺の計測値は、東側が北から2.27m、2.27m、2.27m、2.27m、2.27m、2.57mとなり、北寄り5間が7.5尺の等間、南側が8.5尺で設計されたことを窺わせる。西側柱列は北から2.7m、2.1m、2.1m、2.1m、2.1m、2.7mが計測され、南北両端が9尺、中央4間が7尺の間尺が推定される。東側の入側柱列の計測値は東側・西側の計測値に必ずしも一致しないが、全体的にみると東側柱列の計測値に近似した数値を示すことから、東側柱列と同じ間尺を示すものであろう。梁行4間は、南妻・北妻ともに全長が6.36mと同じ数値であるが、個別の間尺には若干の差がみられる。北妻の3間はともに2.1m強とほぼ同じ計測値であることから7尺の等間と推定され、東側1間は底部分と考えられる。

掘り方は径0.2m~0.7m、深さ0.3m~0.4mの規模をもち、平面形は円形や楕円形を示す。埋土は黒色土を主体とする。



第24図 (15) C III j 2 建物跡

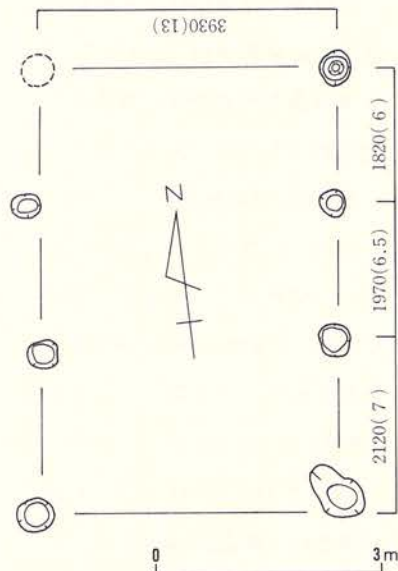
(16) C III j 5 建物跡 (第25図)

西端から30m、北端から32mのグリッドC III区にC III i 4 建物跡と重複して位置し、桁行5.9

m (19.5尺) 3間、梁行3.93m (13尺) 1間の規模をもち、棟方向をN-7°-Eにもつ建物跡である。桁行西側柱列北端の柱穴は未確認であるが、調査時の検出漏れの可能性がある。

桁行3間個々の間尺をみると、東側柱列では北から1.82m、1.95m、2.12mが計測され、西側柱列もほぼ近似した数値を示すことから、東西両柱列の相対する柱間は同じ長さとして推定される。これから考えると、北から6尺・6.5尺・7尺の間尺で設計された建物跡と考えることができる。梁行は南・北両妻とも3.93mに近似した計測値を示していることから、尺に換算すると13尺となり、梁間13尺として設計された建物跡を示すものであろう。間仕切りや床束を示す柱穴は検出されていない。

掘り方は径0.2m~0.55m、深さ0.2m位の規模を示し、円形や楕円形の平面形をもつ。埋土は黒色土が主体である。



第25図 (16) C III j 5 建物跡

(17) C III j 7 建物跡 (第26図、写真図版12A)

西端から39m、北端から37mのグリッドC III区にC III h 6 建物跡・C III h 9 柱穴列・D III a 7 建物跡と重複して位置し、桁行13.33m (44尺) 6間、梁行5.45m (18尺) 3間の規模をもち、棟方向がN-7°-Wを示す建物跡である。

桁行6間は、西側柱列と東側入側柱列の全長が13.33mに近似するが、東側柱列13.5m強とそれより0.17mほど長くなっている。柱穴の位置関係をみると、東側柱列の南端が桁行柱筋からはずれるが梁行柱筋上では定位置である。一方、北端の柱穴は桁行柱筋・梁行柱筋とも定位置からずれており、おそらく柱部材の形状に影響されたものと推定される。これから考えると、本来は桁行全長13.33m—44尺に設計された建物跡と推測される。桁行の相対する間尺に大差がなくほぼ近似した計測値を示すことから、相対する柱間は同じ間尺で設計されたと考えられる。北から計測値をみると2.1m・2.1m・2.27m・2.1m・2.1m・2.57mとなり、尺に換算すると7尺・7尺・7.5尺・7尺・7尺・8.5尺の間尺が想定される。梁行は、既述のとおり南東・北東隅の柱穴位置がずれているため、柱位置からの計測値では正確に把握できないが、桁行東側柱列の延長線と各妻柱列延長線との交点までの距離を梁行の全長として計測すると、両側とも5.45m強に近い数値を示し、18

尺で設計されたと推定される。個別の間尺をみると、南妻で東から1.2m強、2.12m、2.12mの、4尺・7尺・7尺となり、東の1間は庇部分に相当する。間仕切りや床束に關係する柱穴は検出されていない。

掘り方は径0.25m～1m、深さ0.15m～0.2mの規模をもち、平面形は円形か楕円形である。埋土は地山の褐色粘土が少量混入した黒色土が占める。

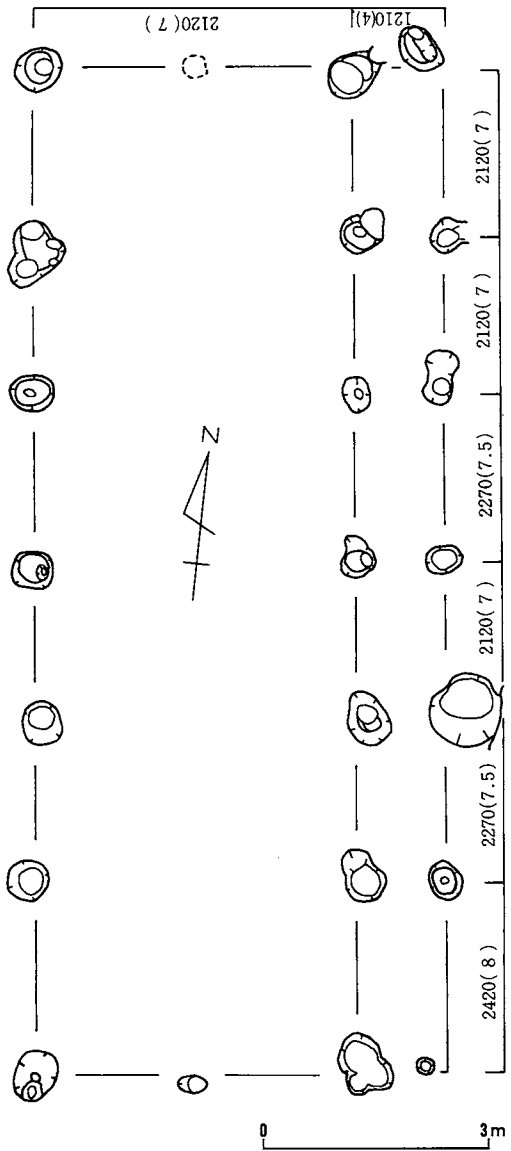
(18) C IV c 5 建物跡 (第27図)

西端から53m、北端から10mのグリッドC IV区に他遺構と重複することなく単独で位置し、桁行の北側柱列が9.99m(33尺)4間、南側東列が9.55m(31.5尺)4間、梁行の東側4.45m(14.5尺)1間、西側4.3m(14.5尺)2間の規模をもち、N-93°-Wの棟方向を示す建物跡である。柱配置をみると、規模で既述のとおり、桁行の南側柱列と北側柱列の全長に差がみられるものの、西側梁行と南・北桁行とは直交し、東側梁行が桁行と直交しない。

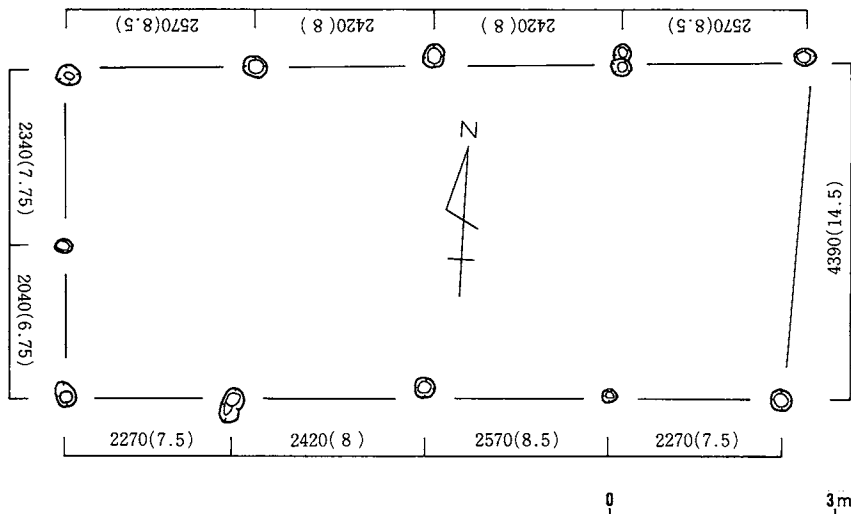
桁行個々の間尺をみると、南側柱列は東から2.27m・2.57m・2.4m・2.27mに近い計測値を示し、東から7.5尺・8.5尺・8尺・7.5尺で設計された建物跡であることを窺わせる。北側の柱列は、東から2.57m・2.4m・2.4m・2.57mと、8.5尺・8尺・8尺・8.5尺の間尺が推定される。

梁行は東妻は1間であるが、西妻は南から2.04m・2.35mと計測され、6.75尺・7.75尺の間尺が推定される。間仕切りや床束に關係する柱穴は未検出である。

掘り方は径0.2m～0.35m、深さ0.15m～0.2mと小規模で、平面形は円形や楕円形を示す。埋土は黒色土が主体である。



第26図 (17) C III j 7 建物跡

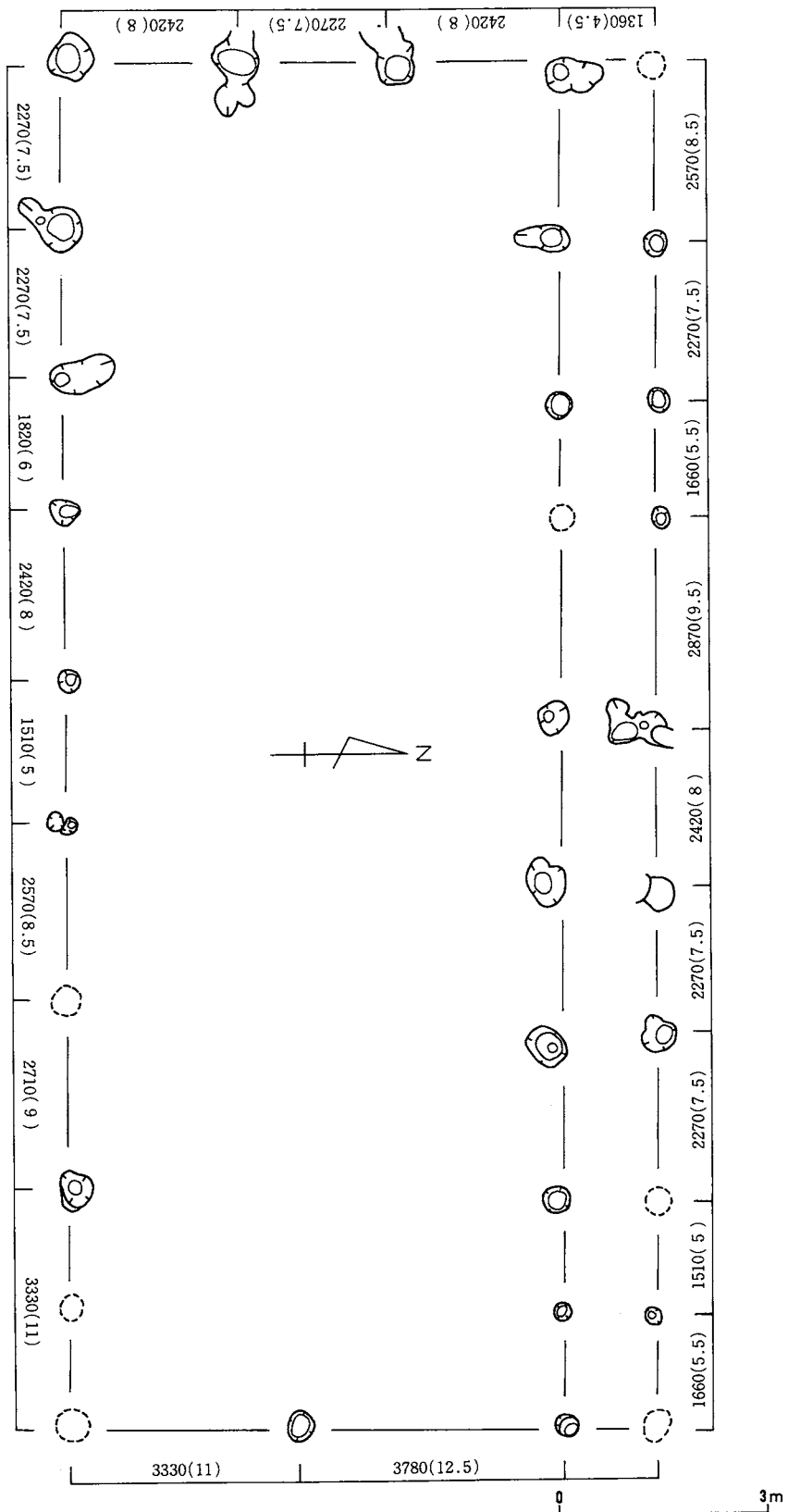


第27図 (18) C IV c 5 建物跡

(19) C IV e 1 建物跡一1 (第28図)

西端から45m、北端から15mのグリッドCIV区にCIII c 7建物跡、CIII e 9建物跡、CIV e 1建物跡一2と重複して位置し、桁行19.54m(64.5尺)9間、梁行8.48m(28尺)4間の規模をもち、N-89°-Wの棟方向を示す建物跡である。柱穴配置をみると、柱穴が一部検出されていないが、これは、この付近は開田時の削平が著しくその際に消滅したことに起因するものと考えられる。また、検出された柱穴の位置関係をみてあまり規則正しい配列状況とは言えず、等間を示す間尺とは考えられない。しかし、桁行南側と北側の全長がほぼ同じ長さを示し、全体が四隅で直交することから、建物跡とした。

桁行の間尺を個別にみると、南側柱列で東から5.2m弱、2.1m強、2.4m強、1.85m弱、2.3m弱、2.25m強の計測値を示し、梁行の東端隅に柱穴が存在したと仮定すると最東端が3.5mとなる。尺に換算すると、最東端から11.5尺・17尺・7尺・8尺・6尺・7.5尺・7.5尺となり、東側の2間には中間に柱を配置していた可能性が強い。北側の柱列は両隅部の柱穴が未検出であるが、あるものと仮定すると東から1.6m強、4.05m弱、2.0m強、2.4m強、3m強、1.67m弱、2.25m強、2.55m強の計測値となり、5.3尺・13.3尺・6.6尺・8尺・10尺・5.5尺・7.5尺、8.5尺が想定される。北側入側柱列は東から、1.66m・1.51m・2.27m・2.27m・2.42m・2.97m・1.66m・2.27m・2.57mが計測され、5.5尺・5尺・7.5尺・8尺・9.5尺・5.5尺・7.5尺・8.5尺の間尺で設計されたことが推定される。梁行は、東妻が南から3.33m、3.78m、1.33mとなり、11尺・12.5尺・4.5尺の間尺と考えられる。西妻は南から2.42m・2.27m・2.42m・1.33mとなり、8尺・7.5尺・8尺・4.5尺の間尺が想定される。以上から梁行の北側1間は庇部分



第28图 (19) C IV e | 建物一 |

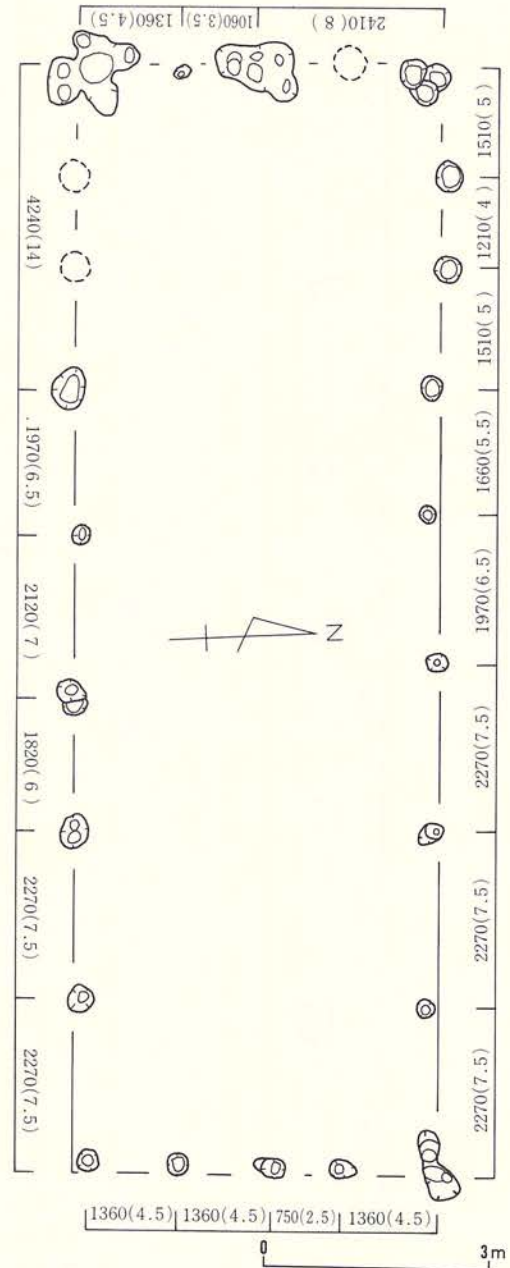
に相当すると推定される。間仕切りや床束に関連する柱穴は検出されていない。

掘り方は径0.2m～0.8m、深さ0.1m～0.2mの規模をもち、円形や楕円形の平面形を示す。埋土は黒色土である。

(20) CIV e 1 建物跡-2 (第29図)

西端から45m、北端から15mのグリッドCIV区にCIII c 7建物跡、CIII e 9建物跡、CIV e 1建物跡-1と重複して位置し、桁行14.69m(48.5尺)8間、梁行4.84m(16尺)4間の規模をもち、棟方向をN-88°-Wを示す建物跡である。本建物跡が検出された付近は開田時の削平が著しく、桁行南側西端の柱穴が消滅している可能性がある。

桁行個々の間尺を計測値でみると、南側柱列東から2.1m・2.27m・1.82m・2.12m・1.95m・4.24mとなり、尺に換算すると7尺・7.5尺・6尺・7尺・6.5尺・14尺が想定される。北側柱列では東から、2.27m・2.27m・2.27m・1.96m・1.66m・1.51m・1.21m・1.51mの計測値となり、7.5尺・7.5尺・7.5尺・6.5尺・5.5尺・5尺・4尺・5尺の間尺で設計されたことが窺える。梁行では、東妻が南から1.2m・1.36m・0.75m・1.36mの計測値が得られ、4尺・4.5尺・2.5尺・4.5尺の間尺が推定される。西妻は南から1.2m・1.06m・2.42mとなり、4尺・3.5尺・8尺が想定される。間仕切りや床束に関連



第29図 (20) CIV e 1 建物跡-2

する柱穴は検出されていない。

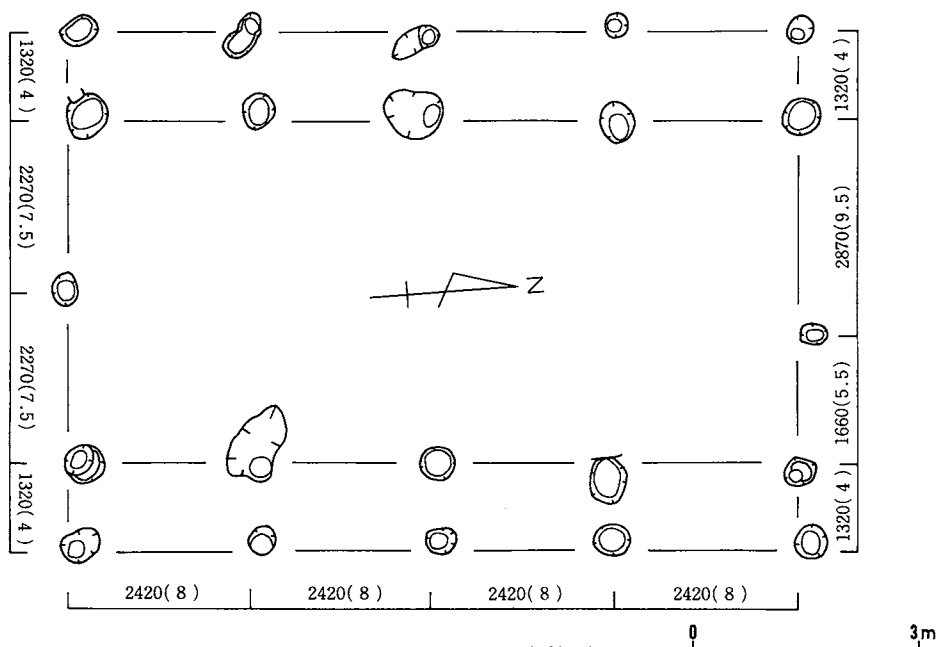
掘り方は径0.25m～0.6m、深さ0.1m～0.2mの規模で、平面形は円形や楕円形である。埋土は黒色土を主とする。

(2) D II a 6 建物跡 (第30図、写真図版11A)

西端から5m、北端から35mのグリッドD II区にC II j 8 建物跡、D II a 7 建物跡と重複して位置し、桁行9.69m (32尺) 4間、梁行6.96m (23尺) 4間の規模をもち、N-4°-Eの棟方向を示す建物跡である。

桁行の4柱列を、柱間個々の間尺を計測すると、東側柱列南から2.5m・2.35m・2.3m・2.65m、東側入側柱列が南から2.4m・2.4m・2.25m・2.5m、西側入側柱列南から2.3m・2.3m・2.5m・2.45m、西側柱列南から2.3m・2.35m・2.5m・2.45mとなり、正確に一致する計測値は少なく、最短と最長には0.2mの差があるものの、全長から割り出して行くと、2.4m強の平均値が得られ、尺に換算すると8尺に相当する数値であることから、本来は桁間8尺として設計された建物跡と推定される。梁行は、南妻は東から1.2m・2.3m・2.3m・1.2mとなり、4尺・7.5尺・7.5尺・4尺の間尺が想定される。北妻は、東から1.2m・1.7m・2.9m・1.2mの計測値が得られ、4尺・5.5尺・9.5尺・4尺と推定される。間仕切りや床束に関する柱穴は未検出であるが、桁行東西両面の4尺の間尺を示す部分は庇に相当すると推定される。

掘り方は径0.3m～0.7m、深さ0.35m～0.5mの規模をもち、円形や楕円形の平面形を示す。埋土は地山の褐色粘土粒が混入した黒色土で占められる。



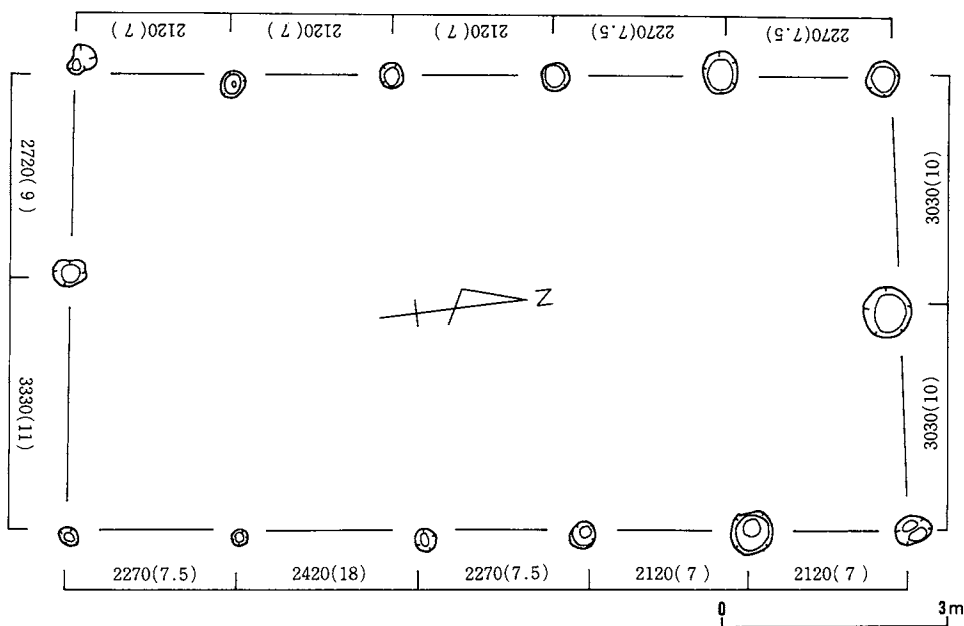
第30図 (2) D II a 6 建物跡

(22) D II a 7 建物跡 (第31図)

西端から8m、北端から37mのグリッドD II区にC II j 8 建物跡、D II a 6 建物跡と重複して位置し、桁行10.9m (36尺) 5間、梁行6.06m (20尺) 2間の規模をもち、N-7°-Eの棟方向を示す建物跡である。

桁行個々の柱間を計測すると、東側柱列南から2.27m・2.42m・2.27m・2.1m・2.1mとなり、7.5尺・8尺・7.5尺・7尺・7尺の間尺が想定される、西側柱列は南から2.1m・2.1m・2.1m・2.27m・2.27m、の計測値が得られ、7尺・7尺・7尺・7.5尺・7.5尺の間尺と推定される。梁行は南妻東から3.33m・2.72mが計測されることから、11尺・9尺の間尺が考えられる。北妻は3m・3mとなり、ほぼ10尺の等間と推定される。間仕切りや床束に関する柱穴は検出されていない。

掘り方は径0.2m~0.65m、深さ0.3m~0.5mの規模をもち、平面形は円形か楕円形を示す。埋土は黒色土が主体である。



第31図 (22)D II a 7 建物跡

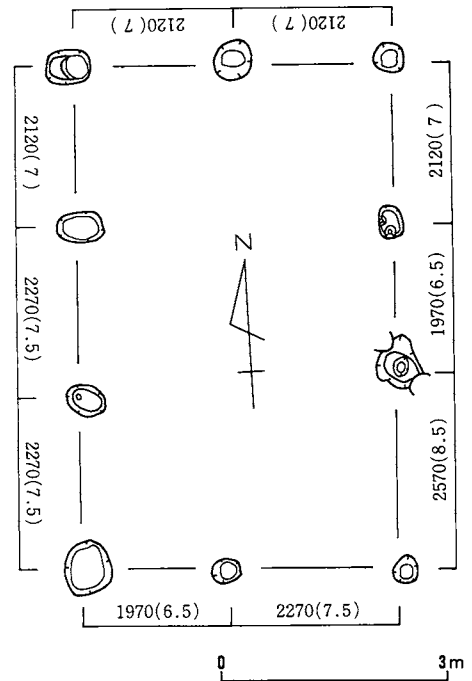
(23) D II d 10 建物跡 (第32図)

西端から19m、北端から45mのグリッドD II区にC III j 2 建物跡、D III b 1 建物跡、D III d 1 建物跡と重複して位置し、桁行6.66m (22尺) 3間、梁行4.24m (14尺) 2間の規模をもち、

棟方向がN-2°-Eを示す建物跡である。

桁行個々の間尺は、東側柱列南から2.1m・2.27m・2.27mとなり、7尺・7.5尺・7.5尺の間尺と考えられる。西側柱列は南から2.1m・1.97m・2.57mが計測され、7尺・6.5尺・8.5尺の設計が推定される。梁行は、南妻が東から2.1m・2.1mと7尺の等間と推定され、北妻は東から1.97m、2.27mと計測されることから6.5尺・7.5尺の間尺が考えられる。間仕切りや床束に係する柱穴は検出されていない。

掘り方は径0.35m~0.65m、深さ0.3m~0.4mの規模をもち、円形や楕円形の平面形を示す。埋土は黒色土が主体である。



第32図 (23) D II d 10建物跡

(24) D II e 6 建物跡 (第33図、写真図版10 B)

西端から6m、北端から50mのD II区にD II d 7柱穴列と重複して位置し、桁行7.57m (25尺) 4間、梁行4.99m (16.5尺) 4間の規模をもち、N-3°-Eの棟方向を示す建物跡である。柱穴の配置関係が若干不規則であるが、殆んどの柱穴に柱根が遺存していることから、1棟の建物跡とした。

桁行の柱列も柱筋に乱れがみられるが、東側入側柱列の東から1.06m・3.18m・2.1m・1.2mと計測され、尺に換算すると3.5尺・10.5尺・7尺・4尺が考えられる。西側入側柱列の間尺は1.2m・2.1m・2.87m・1.2mと計測され、尺に換算すると4尺・7尺・9.5尺・4尺となる。南端と北端の狭い1間が、南端は3.5尺と計測されたが、北端が4尺であることや、全長から算出すると、南端も4尺で設計された可能性がある。東側側柱列は南から2.4m・1.97m・1.92mと計測され、8尺・6.5尺・6.3尺位の間尺と推定される。西側側柱列の場合は、南から2.4m・2.7mと8尺・9尺が想定され、東側柱列と西側柱列の間には柱の配置に違いが認められる。入側柱列との対応関係でみると、両側とも北端部の柱穴を欠き、さらに、西側では南端の柱穴をも欠くとともに、何れの柱穴も入側柱列に対面する位置からもずれている。梁行は南妻が1.5m・1.5mとほぼ5尺の間尺となり、北妻は東から0.9m・1.2m・0.9mとなることから、3尺・4尺・3尺か3.3尺の等間になる柱間と推定される。なお、桁行東側の0.75m-2.5尺と西側の

1.2m—4尺の部分は庇と考えられる。間仕切りや床束を示す柱穴は未検出である。

掘り方は径0.25m～0.55m、深さ0.3m前後の規模をもち、平面形は円形や楕円形を示す。埋土は黒色土が主体である。

(25) D II h 8 建物跡 (第34図、写真図版10A)

西端から12m、北端から56mのグリッドD II区にD II h 9 建物跡、D II i 8 建物跡と重複して位置し、桁行が8.48m (28尺) 4間、梁行5.45m (18尺) 2間の規模をもち、N—4°—Wの棟方向を示す建物跡である。

桁行柱間個々の計測値は、東側柱列南から2.05m・2.3m・2.1m・1.7mとなり、西側柱列が南から2.2m・2.15m・1.9m・2.3mと、各柱間ごとに異なる数値を示すが、東側柱列北端の1間を除いた全長から割り

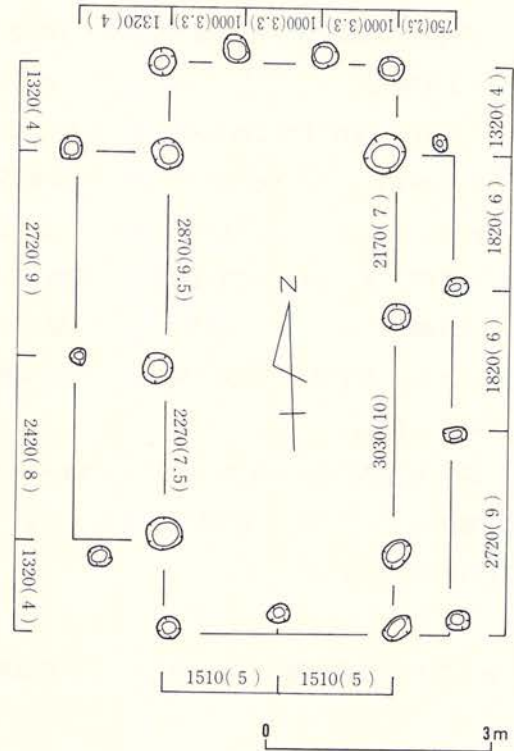
出すと2.1m強の間尺となることから、本来は7尺等間で設計された建物跡の可能性がある。また、東側柱列の北端は6尺の間尺と推定される。梁行は南妻が2.7m・2.7mと計測され、9尺等間と考えられ、北妻の計測値も南妻のそれにほぼ同様であることから、南妻と同じ9尺等間が想定される。間仕切りや床束の存在を示す柱穴は検出されていない。

掘り方は径0.2m～0.65m、深さ0.3m～0.4mの規模で、円形や楕円形の平面形を示す。埋土は黒色土である。

(26) D II h 9 建物跡 (第35図、写真図版10A)

西端から17m、北端から60mのグリッドD II区とE II区にまたがりD II h 8 建物跡・D II i 8 建物跡と重複して位置し、桁行6.36m (21尺) 3間、梁行1.8m (6尺) 1間の規模をもち、棟方向をN—6°—Wに示す建物跡である。

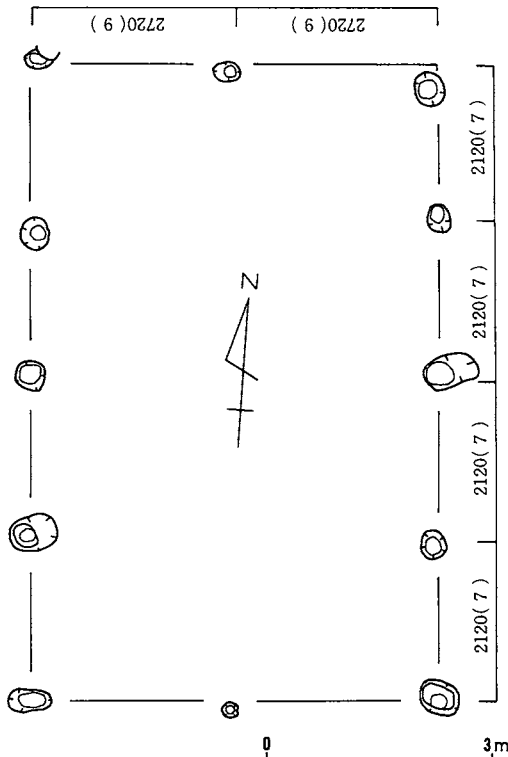
桁行の柱間個々の間尺を計測すると、東側柱列南から2.1m・2.1m・2.35mとなり、西側柱列南から2.25m、2.15m、2.1mと各柱間ごとに異なる数値を示すが、全長から割り出すと1.17



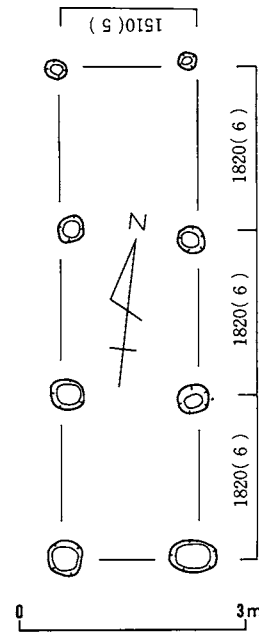
第33図 (24) D II e 6 建物跡

mとなり、7尺～7.2尺の間尺と推定される。梁行は南妻と北妻では若干差がみられるものの、ほぼ1.8m強と6尺に近い間尺を示している。間仕切りや床束に関する柱穴は検出されていない。

掘り方は径0.25m～0.65m、深さ0.3m位の規模をもち、平面形は円形か楕円形を示す。埋土は黒色土である。



第34図 (25) D II h 8 建物跡



第35図 (26) D II h 9 建物跡

(27) D II i 8 建物跡 (第36図、写真図版10A)

西端から13m、北端から60mのグリッドD II区にD II h 8 建物跡、D II h 9 建物跡と重複して位置し、桁行6.81m (22.5尺) 3間、梁行4.54m (15尺) 1間の規模をもち、N-2°-Eの棟方向を示す建物跡である。

桁行個々の柱間は、東側南から2.1m・2.2m・2.2mと計測され、西側は南から2.3m・2.15m・2mとなり、個別の計測値では必ずしも一致しないが、全長から割り出すと2.2m位の数値となり、尺に換算すると7尺～7.5尺の範囲の間尺が想定される。梁行は南妻・北妻とも4.5

m強が計測され、15尺の間尺が推定される。間仕切りや床束の存在を示す柱穴は検出されていない。

掘り方は径0.3m～0.45m、深さ0.3m～0.4mの規模を示し、平面形は円形か楕円形である。埋土は黒色土が主体を占める。

(28) D III a 7 建物跡 (第37図、写真図版12A)

西端から40m、北端から35mのグリッドD III区にC III j 7 建物跡、D III e 7 建物跡、C III h 9 柱穴列と重複して位置し、桁行13.02m (43尺) 6間、梁行4.84m (16尺) 2間の規模をもち、N-7°-Wの棟方向を示す建物跡である。四隅の柱位置にずれがみられ、全体が若干歪みを持つため、並行四辺形的な形状を示している。

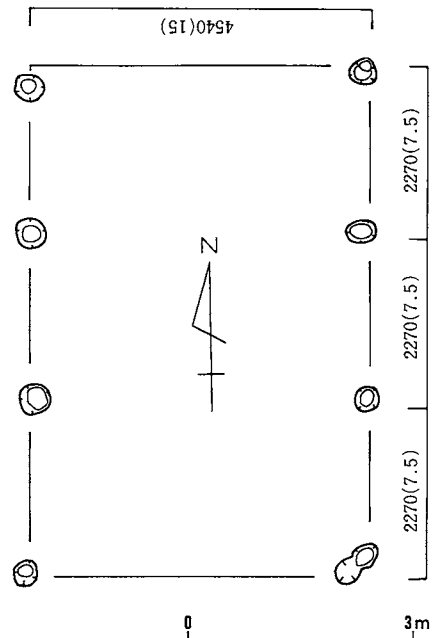
桁行個々の柱間をみると、それぞれ若干異なる数値を示すが、東側柱列と西側柱列の相対する間尺がほぼ近似した計測値を示し、相対する柱間は同じ間尺で設計されたことが窺われる。南から個別に計測すると、 $2.27\text{m} \cdot 2.27\text{m} \cdot 2.1\text{m} \cdot 2.1\text{m} \cdot 2.1\text{m} \cdot 2.1\text{m}$ の数値が得られ、尺に換算すると7.5尺・7.5尺・7尺・7尺・7尺・7尺の間尺が推定される。梁行は、南妻が東から3.3m・1.5mに近い数値が計測され、北妻もほぼ同じ計測値であることから、相対する柱間は同じ間尺と考えられ、東から11尺・5尺の間尺が想定される。間仕切りや床束を示す柱穴は検出されていない。

掘り方は径0.3m～0.8m、深さ0.2m～0.3mの規模をもち、平面形は円形や楕円形を示す。埋土は地山の褐色粘土粒が混入した黒色土である。

(29) D III b 1 建物跡 (第38図)

西端から23m、北端から40mのグリッドD III区にC III j 2 建物跡、D III d 1 建物跡、D III e 2 建物跡-1、D III e 2 建物跡-2と重複して位置し、桁行11.81m (39尺) 5間、梁行6.06m (20尺) 2間の規模をもち、棟方向がN-11°-Wを示す建物跡である。

桁行の柱間個々の計測値には若干の差がみられるものの、相対する柱間の計測値はほぼ同じ数値を示すことから、相対する柱間は同じ間尺と推定される。全長から割り出した柱間の距離は、南から $2.1\text{m} \cdot 2.1\text{m} \cdot 2.1\text{m} \cdot 2.7\text{m} \cdot 2.7\text{m}$ に近似した数値が得られ、7尺・7尺・7尺・



第36図 (27) D II i 8 建物跡

9尺・9尺で設計された建物跡であることを窺わせる。梁行は、南妻東から2.57m・3.48mが計測され、8.5尺・11.5尺の間尺が考えられる。北妻は東から3.18m・2.87mとなり、10.5尺・9.5尺の間尺が想定される。間仕切りや床束を示す柱穴は検出されていない。

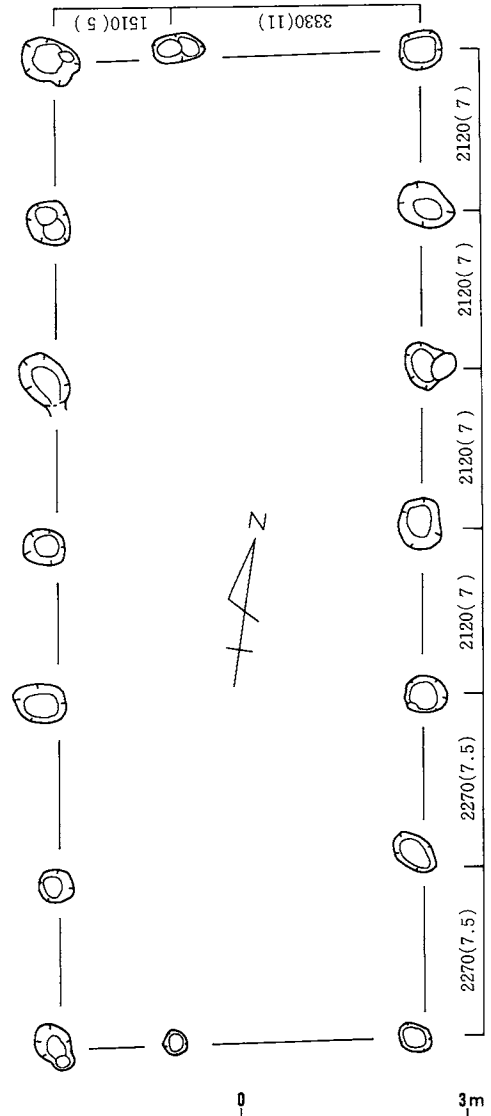
掘り方は径0.3m～0.7m、深さ0.4m～0.5mの規模で、平面形は円形や楕円形を示す。埋土は黒色土を主体とした土で占められる。

(30) D III d 1 建物跡 (第39図)

西端から23m、北端から45mのグリッドD III区にC III j 2建物跡、D III b 2建物跡、D III e 2建物跡-1、D III e 2建物跡-2、D III f 2建物跡と重複して位置し、桁行9.09m (30尺)4間、梁行6.06m (20尺)1間の規模をもち、N-12°-Wの棟方向を示す建物跡である。

桁行柱間個々の計測値をみると、西側柱列は4間とも2.27mの7.5尺に近い数値を示すことから7.5尺等間と推定されるが、東側柱列は南から2.1m・2.15m・2.8m・2.15mと各柱間ごとに異なった数値を示す。全長は西側柱列と同じであることから考えると、南から7尺・7尺・9尺・7尺か西側柱列の間尺と同じ7.5尺の等間と推定される。梁行は南妻と北妻の計測値に若干差はあるが、北妻が20尺に相当する6.06mであることから、南妻も北妻と同じ間尺で設計されたと推定される。間仕切りや床束の存在を示す柱穴は検出されていない。

掘り方は径0.4m～0.7m、深さ0.3m～0.4mの規模をもち、円形や楕円形の平面形を示す。埋土は黒色土である。



第37図 (28) D III a 7 建物跡

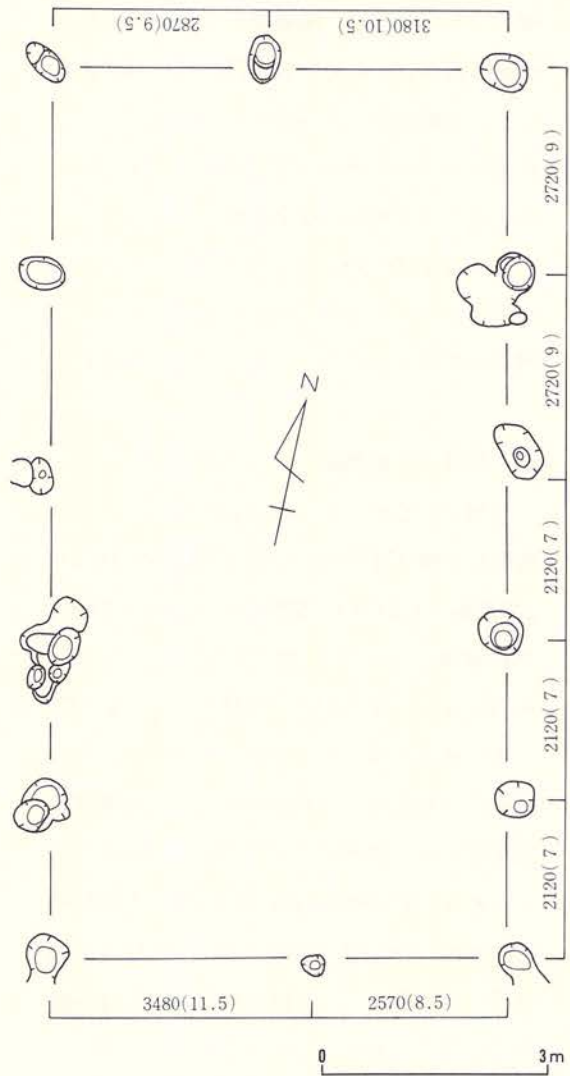
(32) D III e 2 建物跡—1

(第40図)

西端から23m、北端から48mのD III区にD III b 1 建物跡、D III d 1 建物跡、D III e 2 建物跡—2、D III f 2 建物跡と重複して位置し、桁行9.24m (30.5尺) 4間、梁行5.45m (18尺) 2間の規模をもち、棟方向をN-110°-Wにもつ建物跡である。

桁行の柱間個々の計測値をみると、必ずしも一致した数値ではないが、西側柱列が東から8尺・7.5尺・7.5尺・7.5尺の間尺に近似した2.4m・2.27m・2.27m・2.27mと計測されることから、東側柱列や東側入側柱列も西側柱列の間尺と同じ間尺で設計されたと推定される。梁行は、東から2間目までは南から3.33m・2.1mと11尺・7尺の間尺と考えられるが、西側3間は南から3.33m・1.82mとなり、11尺・6尺の間尺と推定され、当初から1尺狭く設計されたことが考えられる。柱穴の配置や間尺から桁行の東側1間は庇部分に相当するであろう。間仕切りや床束の存在を示す柱穴は未検出である。

掘り方は径0.2m~0.45m、深さ0.3m~0.4mの規模をもち、円形や楕円形の平面形を示す。埋土は黒色土を主体とする。

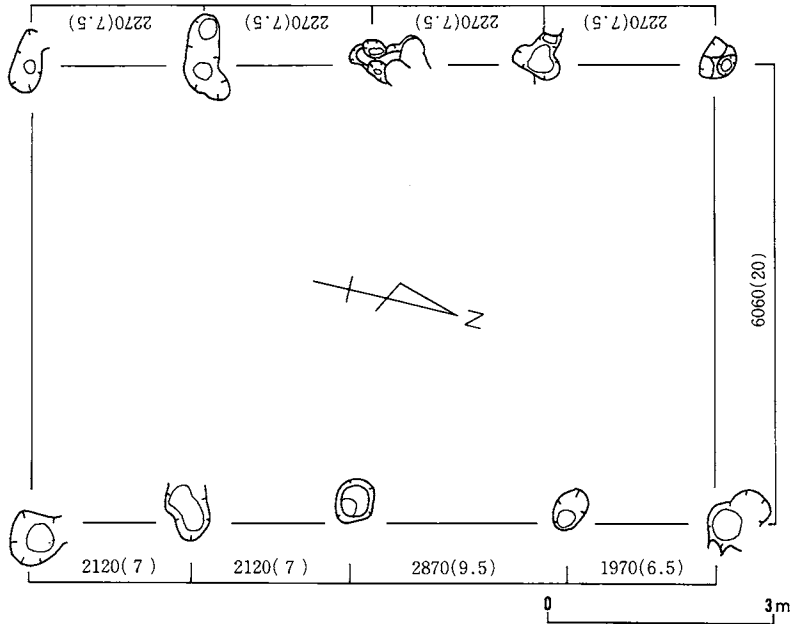


第38図 (29) D III b 1 建物跡

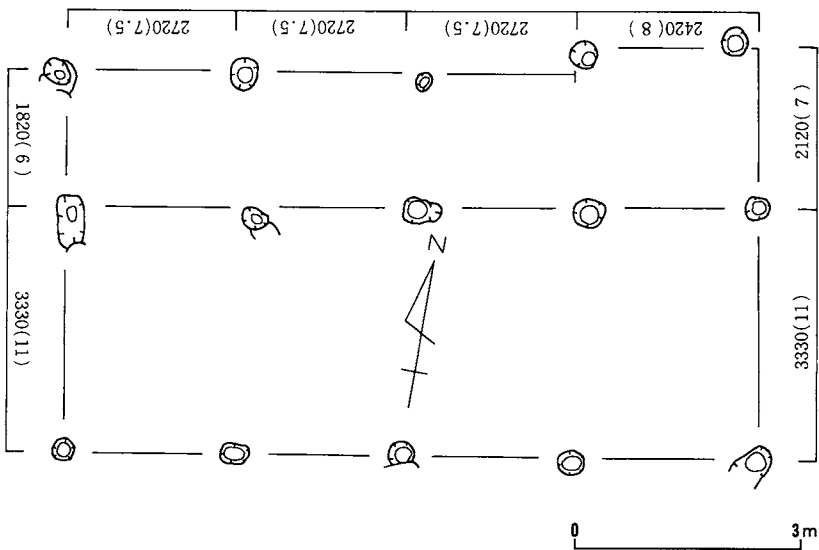
(33) D III e 2 建物跡—2

(第41図)

西端から25m、北端から50mのグリッドD III区にC III j 2 建物跡、D III b 1 建物跡、D III d 1 建物跡、D III e 2 建物跡—1、D III f 2 建物跡に位置し、桁行11.66m (38.5尺) 5間、梁行



第39図 (30)D III d I 建物跡



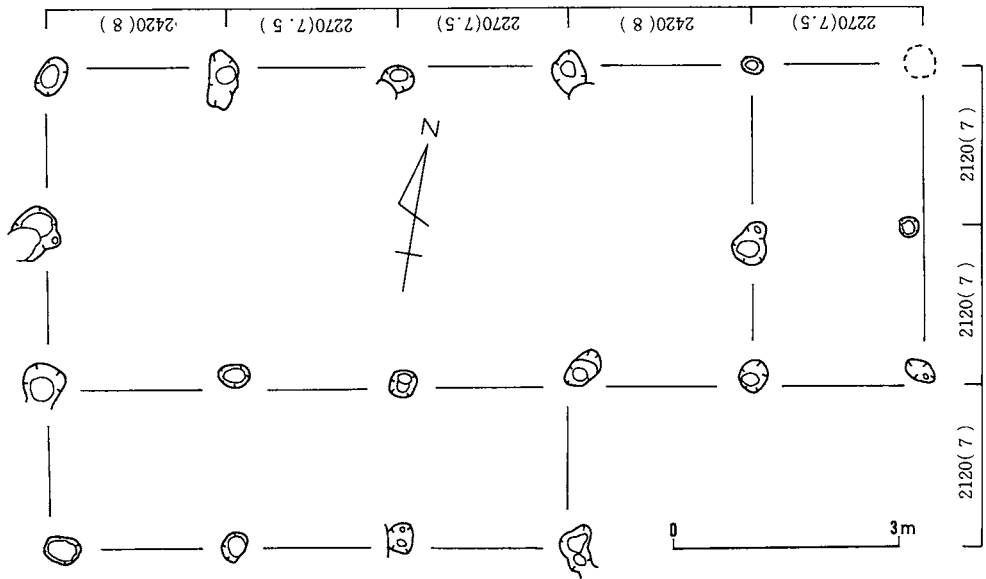
第40図 (32)D III e 2 建物跡-I

6.36m (21尺) 3間の規模をもち、棟方向がN-99°-Wを示す建物跡である。

桁行柱間個々の長さは必ずしも一致しないが、北側柱列が東から7.5尺・8尺・7.5尺・7.5尺・8尺の数値に近似した2.27m・2.4m・2.27m・2.27m・2.4mが計測されていることから、相

対する柱間の間尺は北側柱列の間尺と同じ間尺と推定される。なお、南側柱列の東側2間分は柱穴が検出されていない。梁行は東妻・西妻とも2.1m前後とほぼ近接した計測値を示し、7尺の等間で設計されたことが窺える。柱穴の配置関係からみて南側1間は底部分に相当すると考えられる。

掘り方は径0.25m～0.6m、深さ0.3m～0.4mの規模をもち、平面形は円形か楕円形を示す。埋土は黒色土である。



第41図 (33)D III e 2 建物跡－2

(34) D III e 7 建物跡 (第42図)

西端から40m、北端から47mのグリッドD III区、E III区にまたがってD III a 7 建物跡、D III h 4 建物跡と重複して位置し、桁行17.27m (57尺) 7間、梁行6.06m (20尺) 2間の規模をもち、N-6°-Wの棟方向を示す建物跡である。

桁行個々の柱間は、東側柱列南から1.5m・2.12m・2.27m・2.27m・2.72m・2.42m・2.87m、西側柱列は南から1.21m・3.48m・2.42m・2.12m・2.12m・3.03m・3.03mと相対する柱間の間尺も一致しない計測値である。全長も東側柱列16.66m (55尺)、西側柱列17.27m (57尺) となり、さらに後述するように梁行の長さも両妻間に差があることから建物跡全体に歪みがあり四隅が直交しない。得られた計測値をそのまま尺に換算すると、東側柱列は南から5尺、

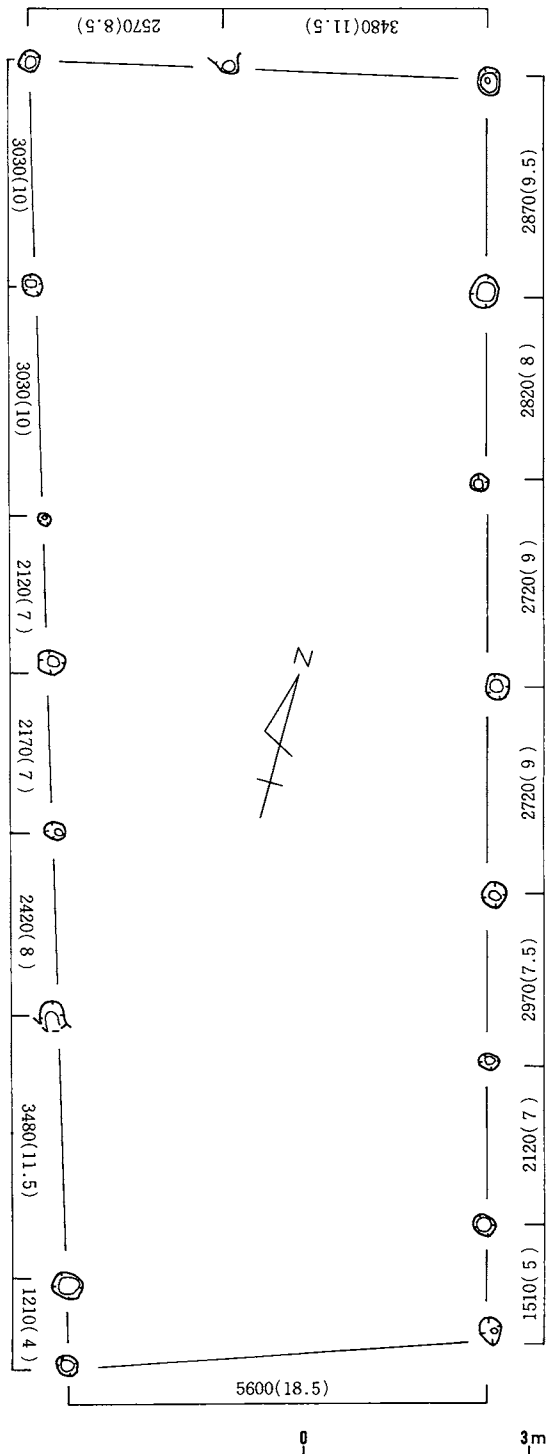
7尺・7.5尺・9尺・9尺・8尺・9.5尺、西側柱列は南から4尺・11.5尺・8尺・7尺・7尺・10尺・10尺となり、4尺・5尺・7尺・7.5尺・8尺・9尺・9.5尺・10尺・11.5尺の9種類の間尺が混在し、両柱列間の長さに2尺の差がある。梁行は、南妻が5.6mの1間、北妻は東から3.48m・2.57mとなり、両者間には0.46mの差がある。尺に換算すると、南妻は18.5尺、北妻は北から11.5尺・8.5尺になる。間仕切りや床束に関連する柱穴は検出されていない。

掘り方は径0.18m～0.45m、深さ0.1m～0.4mの規模をもち、平面形は円形や楕円形を示す。開田時の削平が著しい南部はすべて深さが0.1m位と浅い。埋土は黒色土が主体である。

(31) D III e 1 建物跡 (第43図)

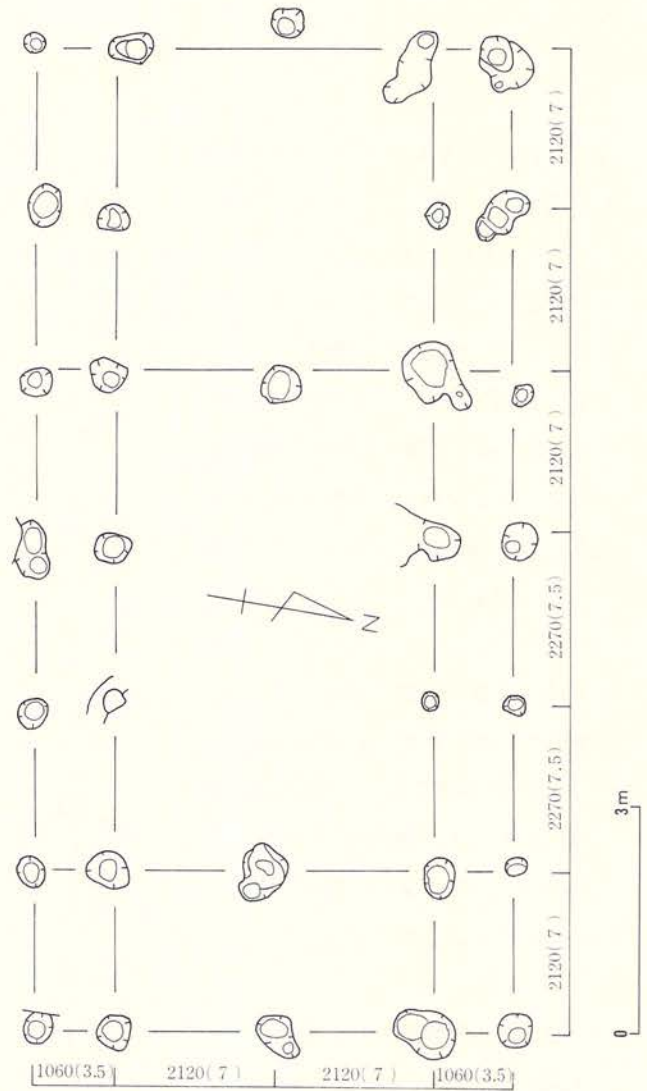
西端から23m、北端から50mのグリッドD III区にD III e 2 建物跡-1、D III e 2 建物跡-2と重複して位置し、桁行13.02m(43尺)6間、梁行6.36m(21尺)4間の規模をもち、棟方向がN-110°-Wを示す建物跡である。

桁行柱間個々の間尺は必ずしも一致しないが、全長が両柱間とも近似した数値を示すことや、相対する柱間の間尺も近似することから、相対する間尺は等間と推定される。柱間個々の間尺は東から2.1m・2.27m・2.1m・2.1m・2.27m・2.1mと計測され、尺に換



第42図 (34) D III e 7 建物跡

算すると東から7尺・7.5尺・7尺・7尺の間尺となる。梁行は東妻が南から1.06m・2.1m・2.1m・1.06mとなり、3.5尺・7尺・7尺・3.5尺の間尺が想定され、東側入側柱列の柱間も近似した数値が計測されていることから、北妻の間尺と同様であろう。西妻は南から1.06m・2.27m・1.97m・1.06mと東妻のそれとは若干異なった計測値を示し、尺に換算すると3.5尺・7.5尺・6.5尺・3.5尺となる。桁行の東から4間目に入る柱列は間仕切りを示すと推定されるが、床束と考えられる柱穴は未検出である。なお、桁行の南・北両側に位置する梁間の狭い部分は庇に相当するであろう。



第43図 (31) D III e I 建物跡

掘り方は径0.25m～0.7m、深さ0.4m～0.45mの規模をもち、円形や楕円形の平面形を示す。埋土は黒色土を主体とする。

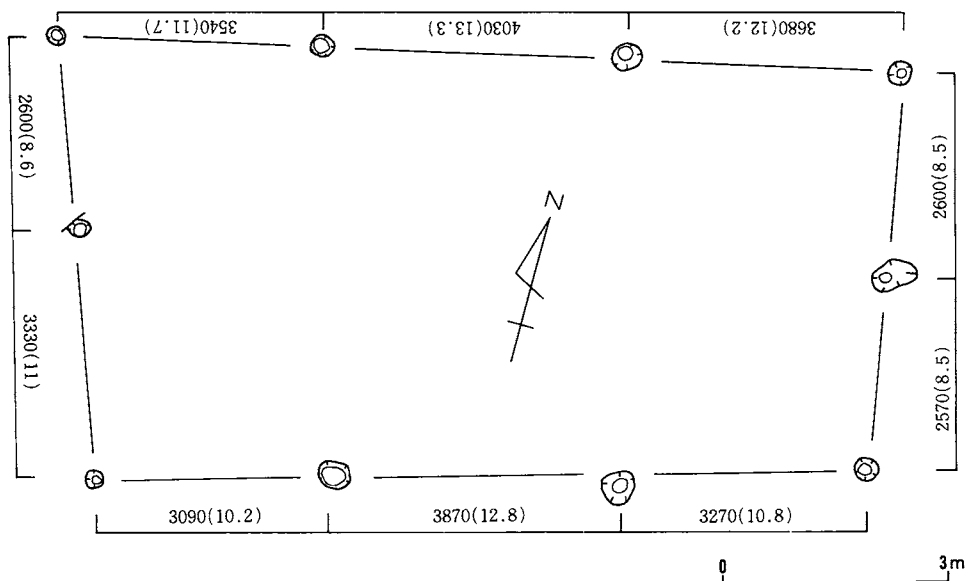
(35) D III h 4 建物跡 (第44図)

西側から32m、北端から52mのグリッドD III区にD III e 7 建物跡と重複して位置し、桁行11.27m (37.2尺) 3間、梁行5.93m (19.5尺) 2間の規模をもち、N-104°-Wの棟方向を示す建物跡である。柱穴配置と計測値をみると、何れの柱列も全長が異なり、全体的に歪みをも

ち四隅が直交しないが、とりあえず建物跡とした。

桁行の柱間個々の長さは、南側が東から3.27m、3.87m、3.09mと計測され、尺に換算すると10.8尺・12.8尺・10.2尺の間尺が想定される。北側の柱列は東から3.7m・4.02m・3.54mの長さを有し、12.2尺・13.3尺・11.7尺の間尺に換算される。梁行は、東妻が南から2.57m・2.6mとなり、8.5尺・8.6尺の間尺が推定される。西妻の場合は南から3.33m・2.6mと計測され、11尺・8.6尺の間尺に換算される。間仕切りや床束に関連する柱穴は検出されていない。

掘り方は径0.25m～0.4m、深さ0.3m～0.45mの規模をもち、平面形は円形か楕円形を示す。埋土は黒色土が主体である。



第44図 (35) D III h 4 建物跡

(36) D IV c 1 建物跡 (第45図)

西端から51m、北端から40mのDIV区に他遺構と重複することなく単独で位置し、桁行5.75m (19尺) 3間、梁行2.42m (8尺) 1間の規模をもち、N-5°-Wの棟方向を示す建物跡である。

桁行の柱間個々の長さは、東側の南から2.72m・3.03mと計測され、尺に換算すると9尺、10尺と推定される。西側は南から2.42m・1.66m・1.66mとなり、8尺・5.5尺・5.5尺の間尺が考えられる。梁行は、南妻2.42m、北妻2.25mと計測され、8尺・7.5尺と換算される。この

ように、桁行の柱列は東側・西側とも直線的であるが、梁行が南妻に比較して北妻が0.5尺狭いことから、全体に歪みがあり四隅が直交しない。間仕切りや床束を示す柱穴は検出されていない。

掘り方は径0.25m～0.45m、深さ0.1m～0.15mの規模をもち、円形や楕円形の平面形を示す。埋土は黒色土が主体をなす。

(37) D IV d 2 建物跡 (第46図)

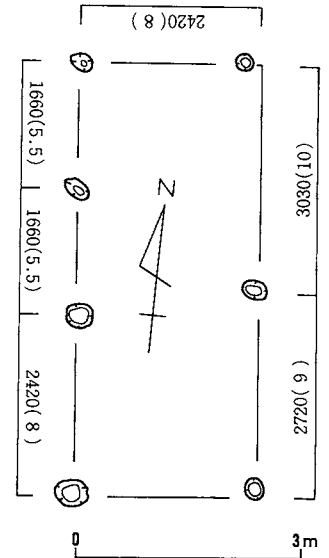
西端から56m、北端から45mのDIV区に他遺構と重複することなく単独で位置し、桁行5.75m (14尺) 4間、梁行3.63m (12尺) 2間の規模をもち、棟方向がN-5°-Wを示す建物跡である。

桁行個々の柱間は、東側柱列南から1.2m・1.35m・0.75m・2.4mと計測され、4尺・4.5尺・2.5尺・8尺と換算される。西側柱列の場合は南から、1.2m・1.35m・1.35m・1.5mの計測値を示し、尺に換算すると4尺・4.5尺・4.5尺・5尺となり、東側柱列の全長に比較して約30cm—1尺短いことから北端の両隅が直交しない。梁行は南妻・北妻ともほぼ東から2.72m・0.9mと計測され、9尺・3尺と換算される。間仕切りや床束の存在を示す柱穴は検出されていない。

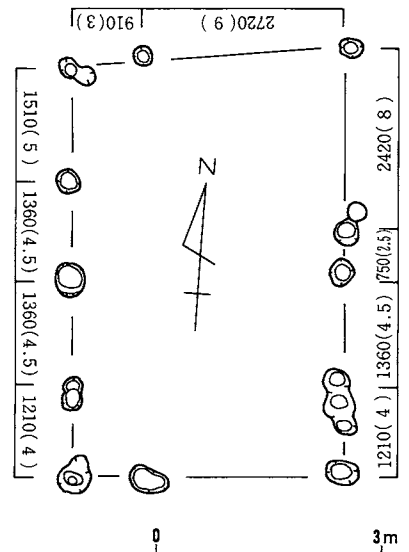
掘り方は径0.25m～0.45m、深さ0.1m～0.15mの規模をもち、平面形は円形や楕円形を示す。埋土は地山の褐色粘土粒を若干混じる黒色土である。

〈東 館〉

当館も開田時に削平を受けているが、西館の東寄りのような著しく切り土された部分は見受けられず、おおむね保存状態は良好である。おそらく、旧地形が西館より平坦であったため、強い切り土削平を必要としなかったのであろう。こうした状況の中で馬出し口と推定される南西端から南辺部沿いを東端まで約15mの範囲には柱穴が



第45図 (36) D IV c I 建物跡



第46図 (37) D IV d 2 建物跡

まったく検出されていない。検出された柱穴の数7720からみれば、建物跡35棟はあまりにも少なすぎる。本来はもっと多くの建物跡が存在するものと推定される。

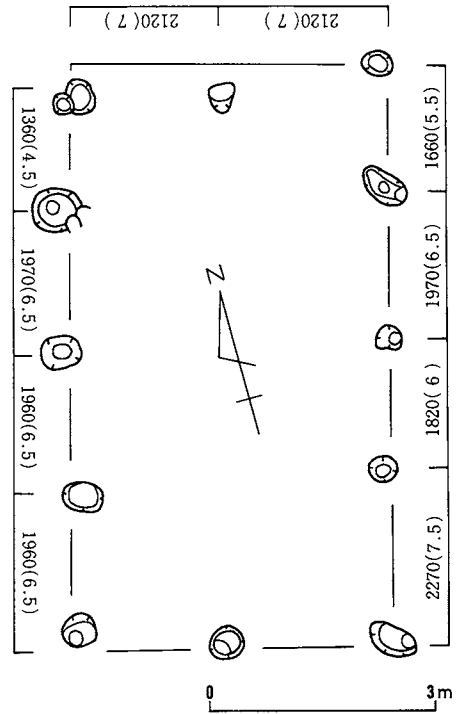
(38) C V b 10建物跡 (第47図)

西端から12m、北端から8mのグリッドC V区とC VI区にまたがって他遺構と重複することなく単独で位置し、桁行7.72m (25.5尺) 4間、梁行4.24m (14尺) 2間の規模をもち、棟方向がN-14°-Eを示す建物跡である。柱穴配置と計測値をみると、南端両隅は直交するが、北端の両隅は直交せず歪みをもつ。

桁行の柱間個々の長さを計測すると、東側柱列南から2.27m・1.82m・1.97m・1.66mとなり、尺に換算すると7.5尺・6尺・6.5尺・5.5尺に相当する。西側の柱列は南から1.97m・1.97m・1.97m・1.35mの長さがあり、6.5尺・6.5尺・6.5尺・4.5尺に換算される。東側柱列と西側柱列の長さには1.5尺に相当する0.45mの差があり、全長で西側柱列が短く、相対する柱間の間尺も異っている。梁行は、南妻・北妻ともに東から2.1m・2.1mと尺に換算すると7尺に近い計測値を示すことから、7尺等間で設計された建物跡と推定される。

間仕切りや床束に関連する柱穴は検出されていない。

掘り方は径0.3m~0.6m、深さ0.4m~0.5mの規模をもち、平面形は円形や楕円形を示す。埋土は少量の地山褐色粘土粒が混入した黒色土が主体をなす。

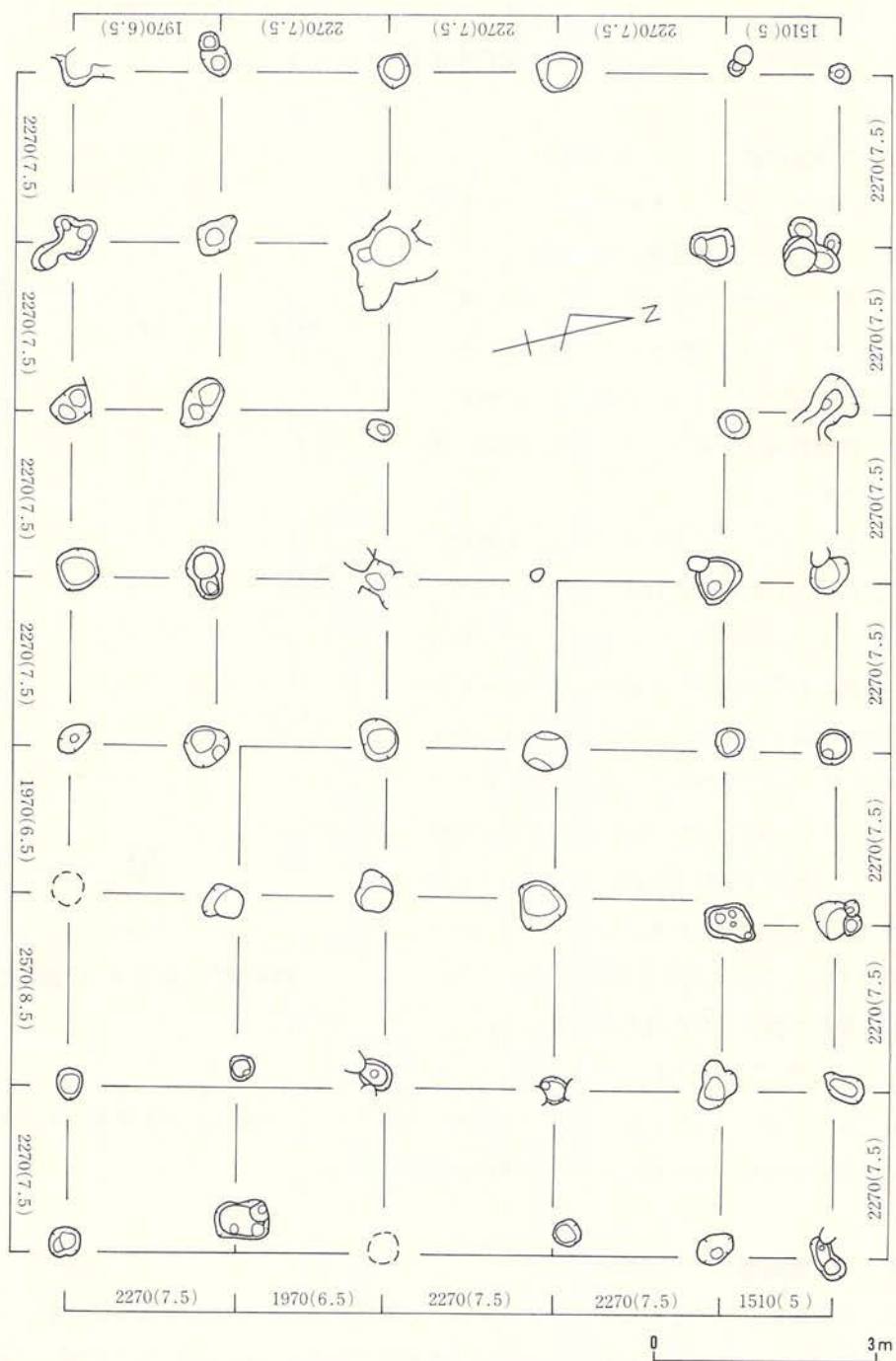


第47図 (38) C V b 10建物跡

(39) C V e 7建物跡 (第48図)

西端から6m、北端から18mのグリッドC V区・C VI区にまたがってC V e 8建物跡-1、C V e 8建物跡-2、C V f 9建物跡と重複して位置し、桁行15.9m (52.5尺) 7間、梁行10.3m (34尺) 5間の規模をもち、N-77°-Wの棟方向を示す建物跡である。柱穴の一部が検出されていないが、東4間分がベタ柱状の柱配置がみられ、西2間分の中央の柱穴が抜けている。

桁行の柱間個々の間尺は、南側柱列東から、若干の長短がみられるが2.27m・2.57m・1.97



第48図 (39)C V e 7 建物跡

m・2.27m・2.27m・2.27m・2.27mと計測され、尺では、7.5尺・8.5尺・6.5尺・7.5尺・7.5尺・7.5尺に換算される。全長から割り出すと7.5尺の等間であるが、柱位置から2間目が8.5尺、3間目が6.5尺と異なった間尺を使用している。北側の柱穴は、若干の違いがあるものの、いずれも2.27mの近似値が計測され、尺に換算すると7.5尺となることから、7.5尺の等間に設計された建物跡であろう。梁行は、東妻の南から2.27m・1.97m・2.27m・2.27m・1.5mとなり、7.5尺・6.5尺・7.5尺・7.5尺・5尺の間尺が推定される。西妻は南から1.97m・2.27m・2.27m・2.27m・1.5mが計測され、尺に換算すると6.5尺・7.5尺・7.5尺・7.5尺・5尺の間尺となる。東妻と西妻の間尺を比較すると、東から1間目と2間目が異なるが、他の相対する柱間は同じ間尺を使用している。また、桁行南側と北側の各1間は底部分に相当するであろう。検出された柱穴の配列状況から、複数の部屋に仕切られ、板張り床をもつ建物跡と推定される。

掘り方は径0.30m～0.7m、深さ0.4m～0.6mの規模をもち、平面形は円形や楕円形を示す。埋土は地山褐色粘土の小塊を含む黒色土である。

(40) C V e 8 建物跡—1 (第49図)

西端から8m、北端から20mのグリッドC V区・C V I区にまたがり、C V e 7 建物跡、C V e 8 建物跡—2、C V f 9 建物跡と重複して位置し、桁行14.84m (49尺) 7間、梁行10.15m (33.5尺) 5間の規模をもち、N-76°-Wの棟方向をもつ建物跡である。中央部から東端にかけての柱穴に未検出部分がみられるが、ベタ柱の様相を示す。

桁行の柱間個々の間尺を計測すると、それぞれによって若干差がみられるが、いずれも2.1mに近似した数値を示し、間尺が7尺の等間で計測されたことを窺わせる。梁行の場合は、東妻が南から2.1m・1.5m・1.5m・1.5m・2.1m・1.35mと計測され、7尺・5尺・5尺・5尺・7尺・4.5尺の間尺と推定される。西妻では南から2.1m・2.57m・1.97m・2.1m・1.35mを示し、尺に換算すると7尺・8.5尺・6.5尺・7尺・4.5尺となる。このように、東妻と西妻では一部に異なった間尺が使用され、西妻の2間目と3間目の2間15尺が、東妻では5尺の3間に柱を配置している。検出された柱穴の配列状況からみて、複数の間仕切りや板張り床をもつ建物跡と推定される。

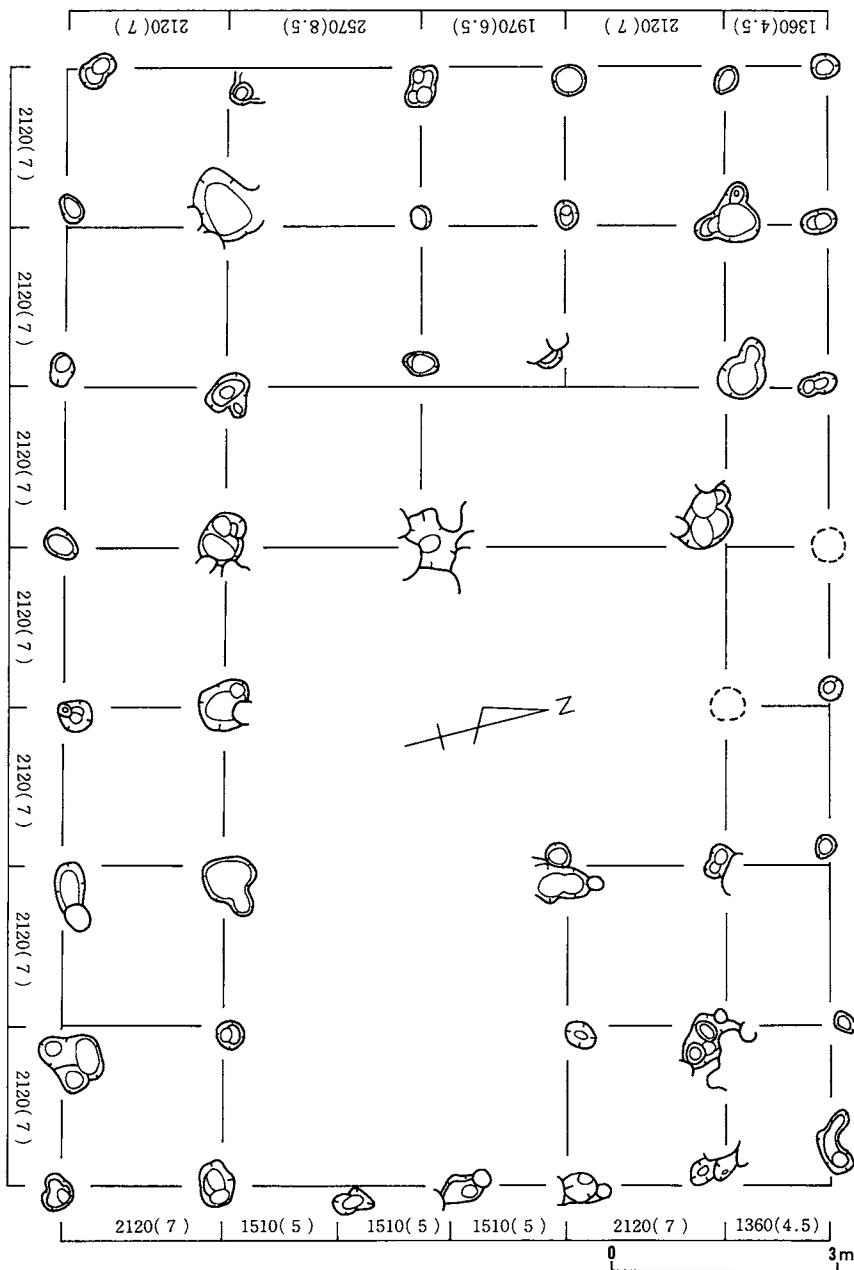
掘り方は径0.3m～0.7m、深さ0.4～0.6mの規模をもち、円形や楕円形の平面形を示す。埋土は黒色土が主体である。

(41) C V e 8 建物跡—2 (第50図)

西端から7m、北端から20mのグリッドC V区にC V e 7 建物跡、C V e 8 建物跡—1、C V f 9 建物跡と重複して位置し、桁行11.51m (38尺) 6間、梁行6.96m (23尺) 4間の規模を

もち、棟方向がN-10°-Eを示す建物跡である。北東隅部の柱穴はBVI j 1溝跡と重複し、検出されていない。

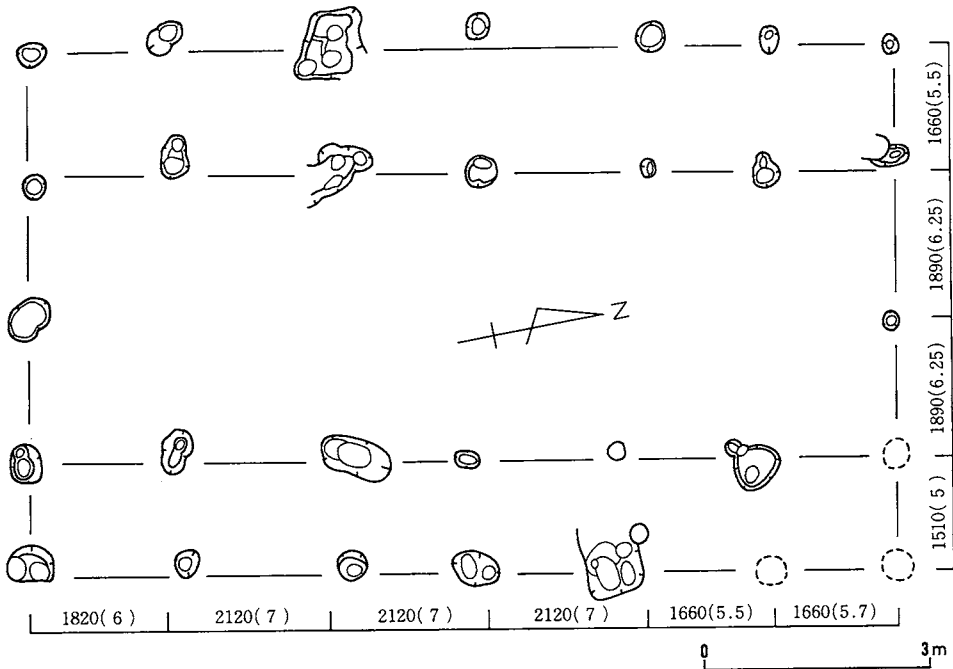
桁行の柱間個々は、西側柱列の南から1.8m・2.1m・2.1m・2.1m・1.6m・1.6mの近似値が計測され、尺に換算すると6尺・7尺・7尺・7尺・5.5尺・5.5尺となる。入側柱列の計測値は側柱列の計測値に比較してほぼ同じ数値を示すことから、入側柱列の間尺は相対する側柱



第49図 (40)C V e 8 建物跡-I

列の間尺と同じ間尺を使用していると推定される。東側柱列は、北端部に未確認の柱穴があるため全長の計測は不能であるが、側柱列、入側柱列の各柱間とも一致した計測値ではないが、西側柱列の間尺に近似した数値を示しており、西側柱列・東側柱列ともに相対する柱間は同じ間尺で設計された建物跡であろう。梁行は、南妻が東から1.5m・1.9m・1.9m・1.65mの計測値を示し、5尺・6.25尺・6.25尺・5.5尺の間尺が考えられる。北妻は、東2間を南妻の延長で計測すると、1.5m・1.8m・2.0m・1.66mとなり、5尺・6尺・6.5尺・5.5尺と換算される。桁行東・西両側の狭い間尺は庇部分に相当するであろう。間仕切りや床束に関連する柱穴は検出されていない。

掘り方は径0.25m～0.65m、深さ0.4m～0.5mの規模をもち、平面形は円形や楕円形を示す。埋土は黒色土が主体をなす。



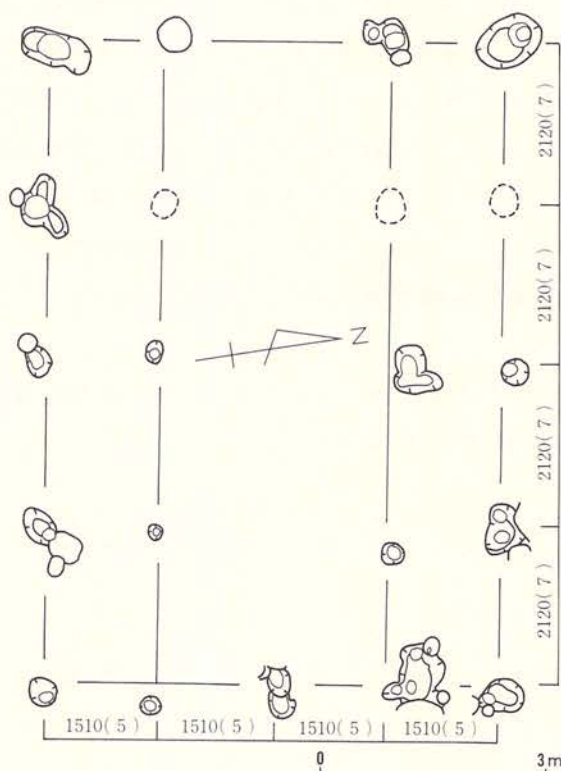
第50図 (4) C V e 8 建物跡－2

(42) C V f 9 建物跡 (第51図)

西端から12m、北端から20mのグリッドC V区、C VI区にまたがり、C V e 7 建物跡、C V e 8 建物跡－1、C V e 8 建物跡－2 と重複し、桁行8.48m (28尺) 4間、梁行6.06m (20尺) 4間の規模をもち、N-82°-Wの棟方向を示す建物跡である。

桁行個々の柱間は、南側柱列の東から2.1m、2.1m、2.1m、2.1mに近い数値が計測され、

7尺等間になる間尺と推定される。入側柱列の計測値は、側柱列のそれに必ずしも一致しないが、ほぼ2.1mに近似した数値であることから、側柱列の間尺と同じ2.1mの7尺が考えられる。北側柱列と入側柱列の柱間も南側柱列の計測値と大同小異の数値が計測されたことから、北側柱列と入側柱列の間尺も南側柱列のそれと同じ間尺で設計されたと推定される。梁行の柱間は、東妻が南から1.5m・1.5m・1.5m・1.5mとなり、5尺の等間であろう。西妻の棟持柱に相当する中心柱は土坑と重複のため不明であるが、計測された西妻の長さは東妻の相対する柱間の長さにはほぼ等しく、5尺の間と推定される。桁行南・北両側



第51図 (42) C V f 9 建物跡

の狭い柱間は庇部分に相当するであろう。間仕切りや床束に関連する柱穴は検出されていない。掘り方は径0.2m～0.7m、深さ0.3m～0.4mの規模をもち、円形や楕円形の平面形を示す。埋土は黒色土を主体とする。

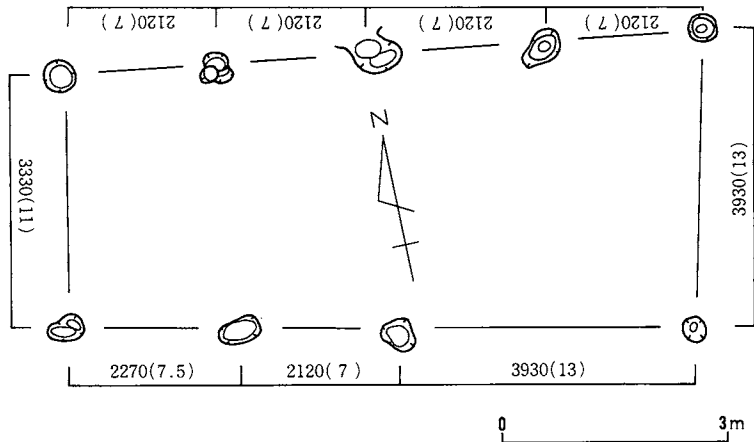
(43) C VI c 9 建物跡 (第52図)

西端から40m、北端から8mのグリッドCVI区とCVII区にまたがってCVIe 9建物跡と重複して位置し、桁行8.48m(28尺)4間、梁行3.93m(13尺)1間の規模をもち、棟方向がN-78°-Wを示す建物跡である。各柱列の全長が全て異なることから、全体的に歪みがあり、四隅は直交しないが、柱列が直線的な配置関係を示すことから建物跡とした。

桁行柱間個々の計測値は、南側柱列東から3.93m・2.1m・2.27m、北側柱列は東から2.1m・2.1m・2.1m・2.1mとなり、南側柱列の全長が0.15mほど短い。尺に換算すると、南側柱列東から13尺・7尺・7.5尺、北側柱列は東から7尺・7尺・7尺・7尺の等間となる。南側柱列の東端は13尺であるが、この部分にCVIIa 1溝跡が位置し検出されていない。おそらく、中間に

柱を入れて6.5尺等間か7尺・6尺かに分割していたと推定される。梁行は、東妻が3.93mの13尺、西妻が11尺の3.33mと計測される。間仕切りや床束の存在を示す柱穴は検出されていない。

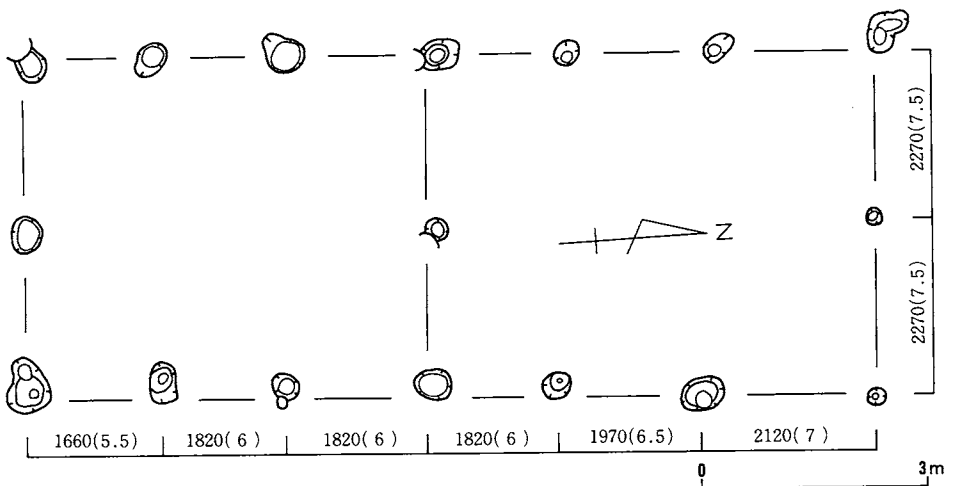
掘り方は径0.3m～0.45m、深さ0.3m～0.4mの規模をもち、平面形は円形や楕円形を示す。埋土は黒色土が主体を占める。



第52図 (43) C VI c 9 建物跡

(44) C VI d 4 建物跡 (第53図)

西端から26m、北端から10mのグリッドCVI区にCVI e 4 建物跡、CVI f 4 建物跡と重複して位置し、桁行11.36m (37.5尺) 6間、梁行4.54m (15尺) 2間の規模をもち、N-2°-Eの



第53図 (44) C VI d 4 建物跡

棟方向を示す建物跡である。

桁行柱間個々の計測値は、東側柱列の南から1.8m・1.65m・1.95m・1.7m・1.9m・2.3mの全長11.3mとなり、尺に換算すると6尺・5.5尺・6.5尺・5.5尺・6.5尺・7.5尺に近い数値を示す。西側柱列は南から1.65m・1.81m・2.1m・1.65m・1.97m・2.1mが計測され、5.5尺・6尺・7尺・5.5尺・6.5尺・7尺と換算される。柱間個々の計測では相対する柱間の間尺は必ずしも一致しないが、両柱列とも全長が37.5尺に近い11.35mであることから、本来は相対する間尺は等間で設計された可能性が強い。梁行は、南・北両妻とも2.27m、2.27mに近似した数値が計測されることから、7.5尺の等間を示すと推定される。桁行の南から3間目の梁行中央にも柱穴が検出されているが、これは間仕切りに関連すると考えられ、これは南半分と北半分に仕切られた建物跡と推定される。床東に関係する柱穴は検出されていない。

掘り方は径0.2m～0.6m、深さ0.3～0.45mの規模をもち、円形や楕円形の平面形を示す。埋土は黒色土が主体を占める。

(45) C VI e 4 建物跡 (第54図)

西端から27m、北端から13mのグリッドC VI区にC VI d 4 建物跡、C VI f 4 建物跡、C VI f 5 建物跡と重複して位置し、桁行13m (43尺) 6間、梁行7.7m (25.5尺) 4間の規模をもち、棟方向をN-7°-Eに示す建物跡である。検出された柱穴の配置関係をみると、外周の各柱間の全長が異なるとともに、全体に並行四辺形状の歪みがあるため、四隅は直交しない。

桁行柱間個々の長さは、東側柱列南から1.97m・2.27m・2.27m・2.27m・2.27m・1.97mと計測され、尺に換算すると6.5尺・7.5尺・7.5尺・7.5尺・7.5尺・6.5尺の間尺となる。西側柱列は南から、1.82m・2.27m・2.27m・2.27m・2.27m・1.97mの計測値が得られ、6尺・7.5尺・7.5尺・7.5尺・7.5尺・6.5尺と換算され、東側柱列の相対する柱間とは、南端の1間を除いて同じ間尺を示し、南端は西側が0.5尺狭い。梁行は、南妻が東から0.9m・2.27m・2.27m・2.27mと計測され、3尺・7.5尺・7.5尺・7.5尺の間尺が想定される。北妻の場合は東から0.9m・1.97m・2.12m・2.27mの3尺・6.5尺・7尺・7.5尺の間尺が使用され、南妻に比較して全長で0.45mの1.5尺狭くなっている。それは、東から2間目で1尺、3間目で0.5尺狭いことに起因するが、桁行の各柱列はいずれも直線的な配列状況を示しており、このような平面形は設計段階の形状を示すものと理解される。また、桁行東側の3尺と狭い間尺を示す部分は庇に相当するであろう。この建物跡には柱穴の省略がまったく見られず、桁行と梁行の交点にはすべて配置するベタ柱を示す。

掘り方は径0.3m～0.6m、深さ0.4m～0.45mの規模をもち、平面形は円形や楕円形を示す。埋土は少量の地山褐色粘土粒が混入した黒色土が主体をなす。

(46) C VI e 9 建物跡

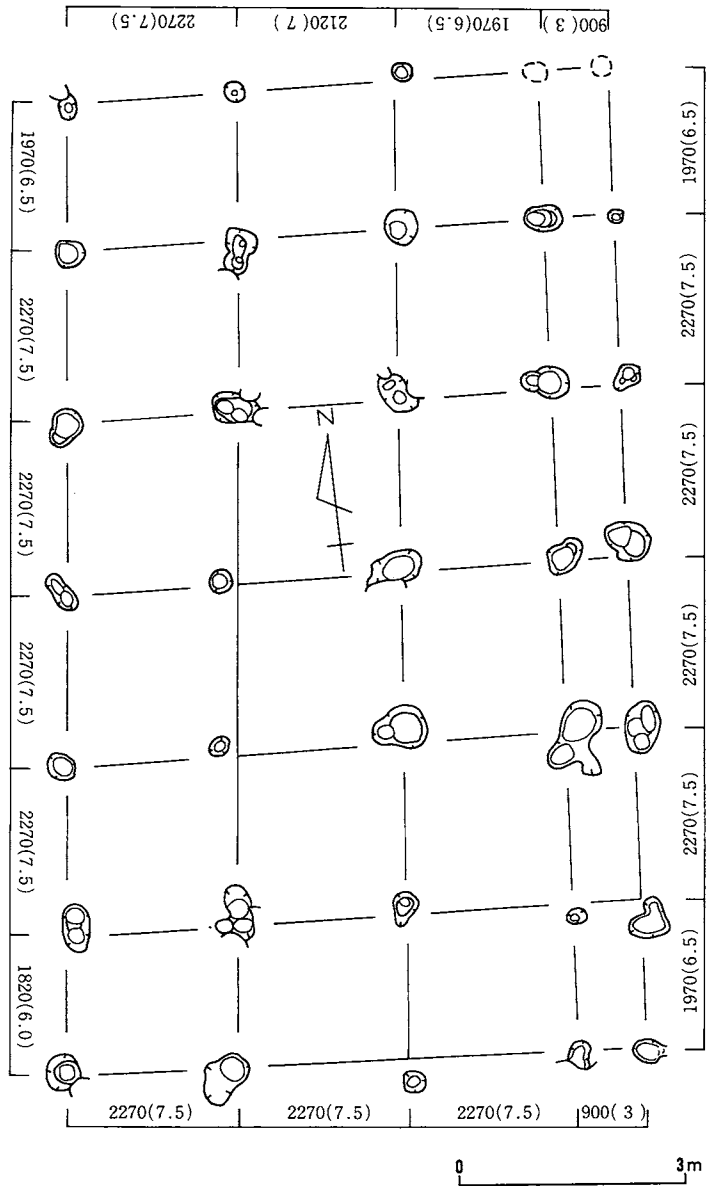
(第55図)

西端から41m、北端から11mのグリッドC VI区・C VII区にまたがり、桁行7.05m(23尺)3間、梁行3.33m(11尺)2間の規模をもち、N-97°-Wの棟方向をもつ建物跡である。梁行の柱間の長さに若干差があるため四隅が直交せず、歪みをもつ建物跡である。

桁行柱間個々の長さは、南側柱列の東から2.3m・2.1m・2.4mと計測され、7.5尺・7尺・8尺と換算されるが、北側柱列は東から2.3m・2.6m・2.15mの7.5尺・8.5尺・7.5尺の間尺が想定される。梁行の東妻は南から1.33m・0.6m・1.33m、西妻の場合は南から3m・3mとなり、尺に換算すると東妻は4.5尺・2尺・4.5尺、西妻は10尺・10尺の間尺が考えられ

る。間仕切りや床束に関連する柱穴は検出されていない。

掘り方は径0.3m~0.7m、深さ0.3m~0.4mの規模をもち、円形や楕円形の平面形を示す。埋土は黒色土である。



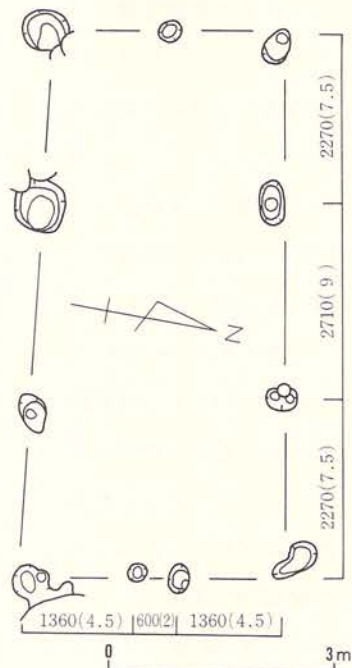
第54図 (45) C VI e 4 建物跡

(47) C VI f 4 建物跡 (第56図)

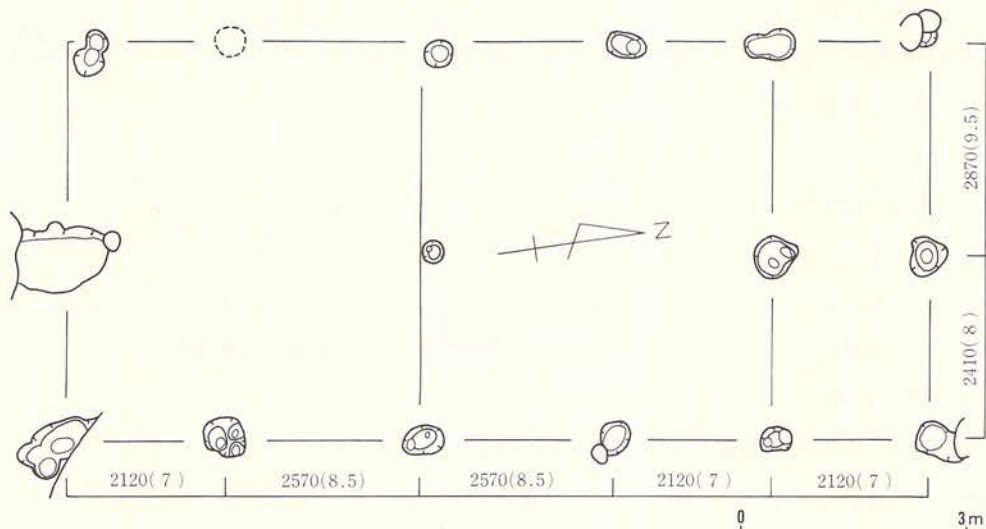
西端から28m、北端から18mのグリッドC VI区にC VI d 4 建物跡、C VI e 4 建物跡、C VI f 5 建物跡と重複して位置し、桁行11.51m (38尺) 5間、梁行5.3m (17.5尺) 2間の規模をもち、棟方向がN-8°-Eを示す建物跡である。

桁行柱間個々の計測値は、東側柱列が南から2.12m・2.57m・2.57m・2.12m・2.12mと7尺・8.5尺・8.5尺・7尺・7尺の間尺を示す。西側柱列も東側柱列の相対する柱間と近い計測値を示すことから、相対する柱間は同じ間尺を使用していることが窺える。梁行は、南妻、北妻とも東から2.4m・2.87mと計測され、8尺・9.5尺の間尺と推定される。桁行の南から2間目と4間目の梁行中央の柱穴は間仕切りに伴うものであろう。床束に関する柱穴は検出されていない。

掘り方は径0.3m~0.6m、深さ0.3m~0.4mの規模をもち、平面形は円形や楕円形を示す。埋土は黒色土を主体とする。



第55図 (46) C VI e 9 建物跡



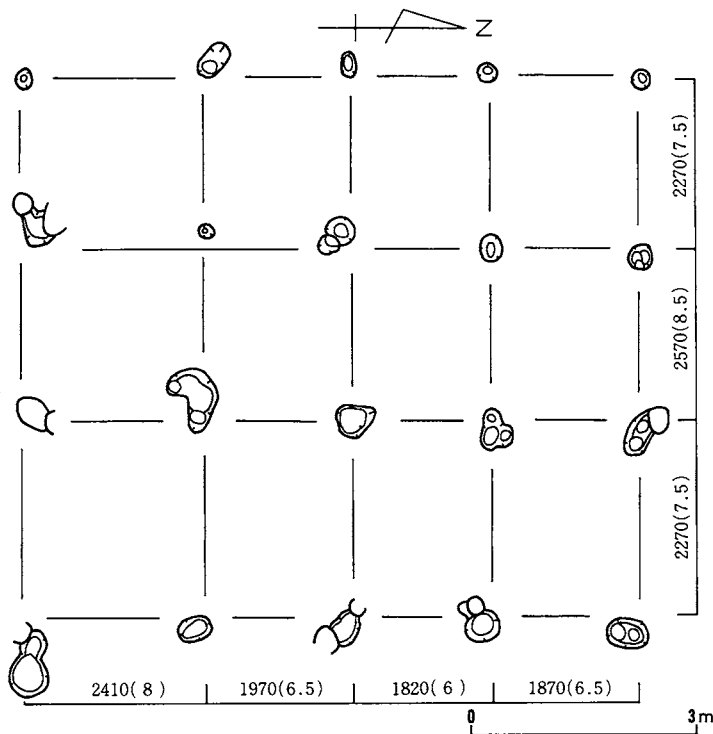
第56図 (47) C VI f 4 建物跡

(48) C VI f 5 建物跡 (第57図)

西端から31m、北端から17mのグリッドC VI区にC VI d 4 建物跡、C VI e 4 建物跡、C VI f 4 建物跡、C VI f 7 建物跡と重複して位置し、桁行8.18m (27尺) 4間、梁行7.12m (23.5尺) 3間の規模をもち、棟方向がN-1°-Wを示す建物跡である。

桁行柱間個々の間尺は、東側柱列の南から2.3m・2.0m・1.8m・2.0m、西側柱列は南から2.4m・2.27m・1.8m・1.97mと計測され、尺に換算すると東側は南から7.6尺・6.6尺・6尺・6.6尺、西側は南から8尺・7.5尺・6尺・6.5尺となり、相対する柱間でも一致する間尺は少ないが、全体の柱穴位置に大きなずれがないことから、本来は相対する柱間は等間で設計された可能性が強い。梁行は柱間個々の計測値には若干の異同はみられるが、全体の柱穴の配置状況から考えて、東から2.57m・2.57m・2.27mの8.5尺・8.5尺・7.5尺に近い間尺で設計されたと推定される。この建物跡には柱穴の省略がまったくみられず、桁行と梁行の交点に柱穴をすべて配置するベタ柱の建物跡である。

掘り方は径0.2m~0.6m、深さ0.3m~0.35mの規模をもち、円形や楕円形の平面形を示す。埋土は黒色土である。

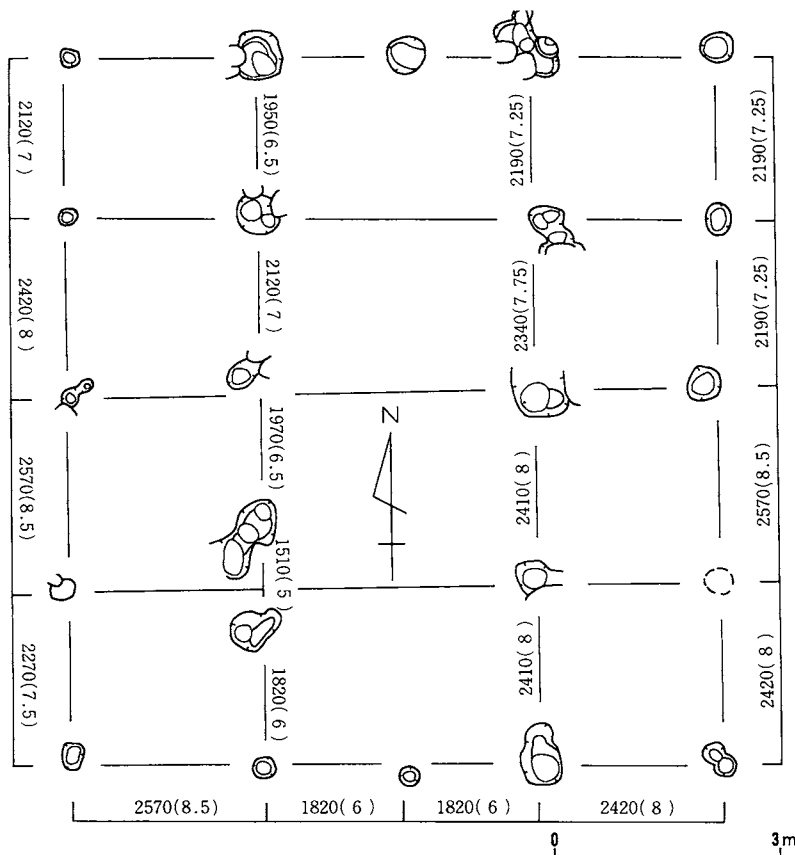


第57図 (48) C VI f 5 建物跡

(49) C VI f 7 建物跡 (第58図)

西端から37m、北端から17mのグリッドC VI区にC VI f 5 建物跡、C VI g 8 建物跡、C VI h 8 建物跡と重複して位置し、桁行9.4m (31尺) 4間、梁行が8.7m (28.5尺) 4間の規模をもち、棟方向がN-1°-Wを示す建物跡である。

桁行の柱間個々の長さは、東側柱列の南から2.42m・2.57m・2.19m・2.19mが計測され、尺に換算すると8尺・8.5尺・7.25尺・7.25尺の間尺になる。西側柱列は南から2.27m・2.57m・2.42m・2.12mとなり、7.5尺・8.5尺・8尺・7尺に換算され、一部の相対する柱間が異なる間尺を使用している。東側の入側柱列の計測値も側柱列のそれに比較して大差がないことや、ほぼ直線上に配列されることから、同じ間尺と考えられるが、西側の入側柱列は北2間は相対する側柱列と同じ間尺と推定されるが、南2間は南から1.82m・1.51m・1.97mの3間に分割されている。梁行は、南妻が東から2.42m・1.82m・1.82m・2.57mの8尺・6尺・6尺・8.5尺となる。北妻の計測値も南妻のそれと同じ数値を示すことから、相対する柱間は等間と推定される。この建物跡は柱穴の省略がみられず、桁行と梁行の交点にはすべて配置するベタ柱の建



第58図 (49) C VI f 7 建物跡

物跡であるが、西側柱列の柱穴は規模が小さいことから、庇部分の可能性もある。

掘り方は径0.25m～0.65m、深さ0.3m～0.5mの規模であるが、西側柱列のそれは径0.2m～0.3m、深さ0.3mと他の柱列に比較して小規模である。平面形は円形か楕円形であるが、方形気味を示す例もみられる。埋土は地山褐色粘土塊が若干混じる黒色土である。

(50) C VI g 8 建物跡 第59図、写真図版12B)

西端から40m、北端から18mのグリッドC VI区・C VII区にまたがってC VI f 7 建物跡、C VI h 8 建物跡、C VII f 1 建物跡—1、C VII f 1 建物跡—2と重複して位置し、桁行13.95m(46尺)6間、梁行8.2m(27尺)4間の規模をもち、N—90°—Wの棟方向を示す建物跡である。

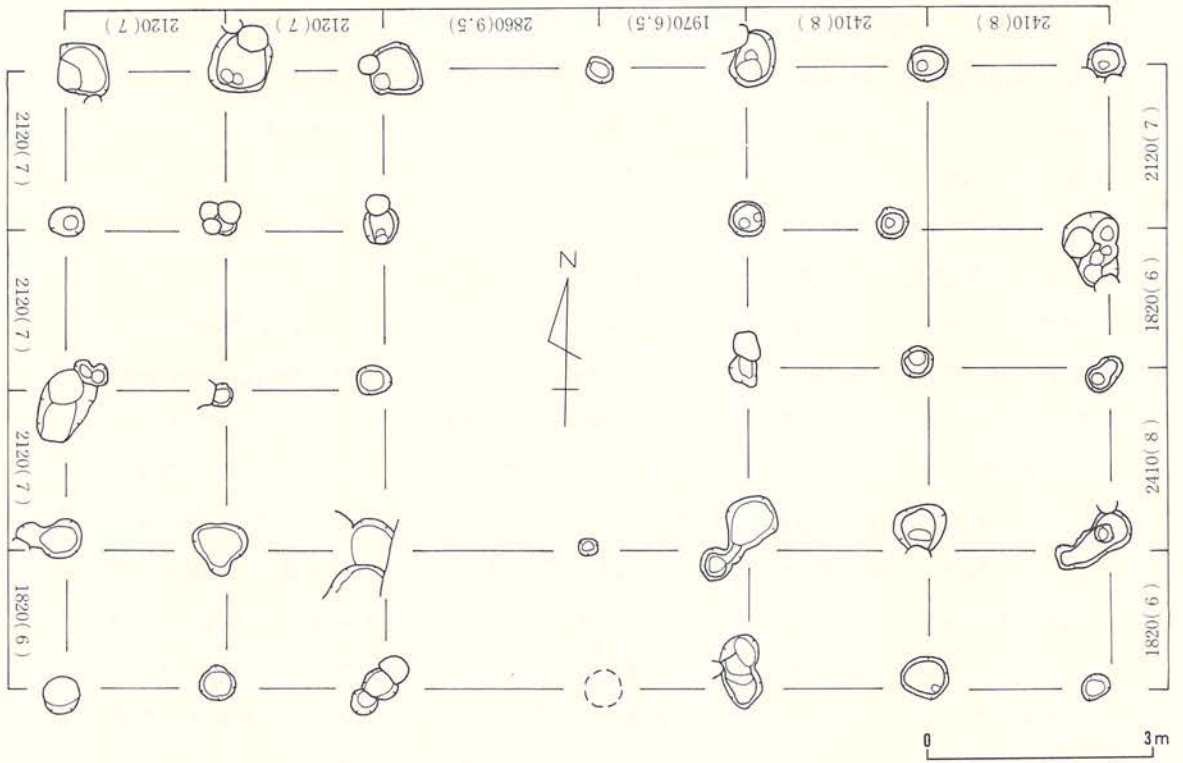
桁行柱間個々の長さは、それぞれによって異なった数値を示すが、大きくずれる計測値はないことや各柱間とも柱穴が直線的に配列されていることから、相対する柱間は同じ間尺を使用していると推定される。柱穴がもっとも良く揃っている北側柱列の柱間を東から計測すると、2.44m・2.41m・1.97m・2.9m・2.1m・2.15mとなり、8尺・8尺・6.5尺・9.5尺・7尺・7尺の間尺に換算される。梁行は、東妻の南から、1.85m・2.4m・1.82m・2.15mが計測され、尺に換算すると6尺・8尺・6尺・7尺の間尺となる。西妻の場合は南から1.82m・2.12m・2.12m・2.12mの6尺・7尺・7尺・7尺となり、東妻と相対する柱間の間尺と異なる柱間もある。この建物跡は中央部に柱穴が検出されていないが、この部分はC VII a 1 溝跡と重複するため、調査時の見落としも考えられるが、この部分を除くと、桁行と梁行の交点にはすべて柱穴を配置するベタ柱の建物跡である。おそらく複数の部屋に仕切られていたものであろう。また、桁行南側の6尺を示す部分は庇の可能性もある。

掘り方は径0.4m～0.8m、深さ0.4m～0.5mと規模が大きく、平面形は円形や楕円形を示す。埋土は黒色土である。

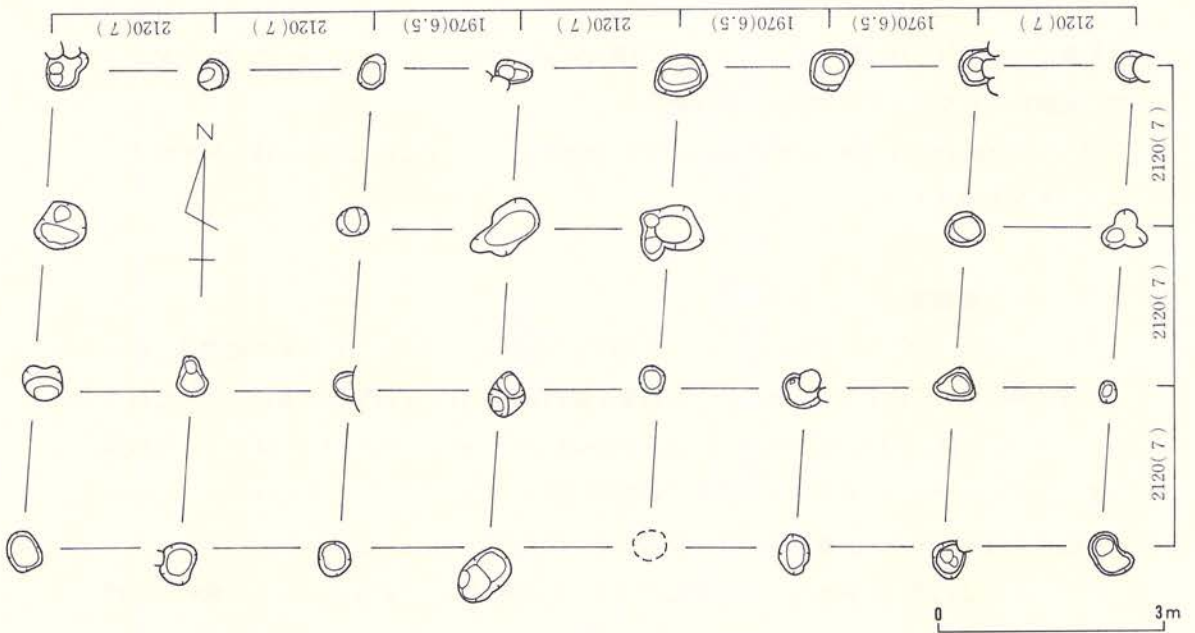
(51) C VI h 8 建物跡 (第60図)

西端から41m、北端から21mのグリッドC VI区・C VII区にまたがってC VI g 8 建物跡、C VII f 1 建物跡—1、C VII f 1 建物跡—2、C VII g 2 建物跡、C VII h 2 建物跡と重複し、桁行14.4m(47.5尺)7間、梁行6.35m(21尺)3間の規模をもち、棟方向がN—91°—Wを示す建物跡である。柱穴の配列状況をみると、相対する柱列の長さには差はないが、柱穴全体が並行四辺形的な配列状況を示すため、建物跡全体に歪みがあり四隅が直交しない。

桁行の柱列はいずれも直線的で梁行の交点にのる柱穴配置がみられることから、相対する柱間は同じ間尺と推定される。柱穴のもっとも良く揃っている北側柱穴は東から、2.12m・1.97m・1.97m・2.1m・1.97m・2.15m・2.1mと計測され、尺に換算すると7尺・6.5尺・6.5尺・



第59图 (5) C VI g 8 建物跡



第60图 (5) C VI h 8 建物跡

7尺・6.5尺・7尺・7尺となることから、南側柱列もこの間尺と同じであろう。梁行は東妻も西妻も2.12m・2.12m・2.12mと同じ計測値を示し、7尺の等間と推定される。2カ所で柱穴の省略があるものの、他はすべて配置されることから、複数の部屋に仕切られ、板張床をもつ建物跡であろう。

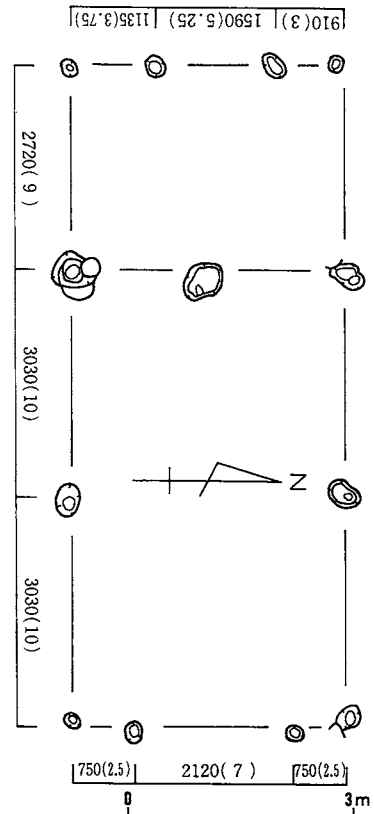
掘り方は0.3m～0.9m、深さ0.4m位の規模をもち、平面形は円形や楕円形を示す。埋土は黒色土が主体をなす。

(52) C VII e 3 建物跡 (第61図)

西端から55m、北端から13mのグリッドC VII区に他遺構と重複することなく単独で位置し、桁行8.78m (29尺) 3間、梁行3.65m (12m) 3間の規模をもち、N-90°-Wの棟方向を示す建物跡である。

桁行の柱間は、南側柱列の東から3.03m・3.03m・2.72mと計測され、北側柱列の柱間もほぼ同じ数値を示すことから、相対する柱間は10尺・10尺・9尺と推定される。梁行は、東妻は南から0.75m・2.12m・0.75mの2.5尺・7尺・2.5尺が計測されたが、西妻の場合は南から1.15m・1.6m・0.9mとなり、尺に換算すると3.75尺・5.25尺・3尺の間尺となるが、東妻と若干異なる間尺を示す。桁行西側1間目の梁行中央に位置する柱穴は間仕切りに関連する柱穴であろう。

掘り方は径0.25m～0.6m、深さ0.3m～0.35mの規模をもち、平面形は円形や楕円形を示す。埋土は黒色土である。



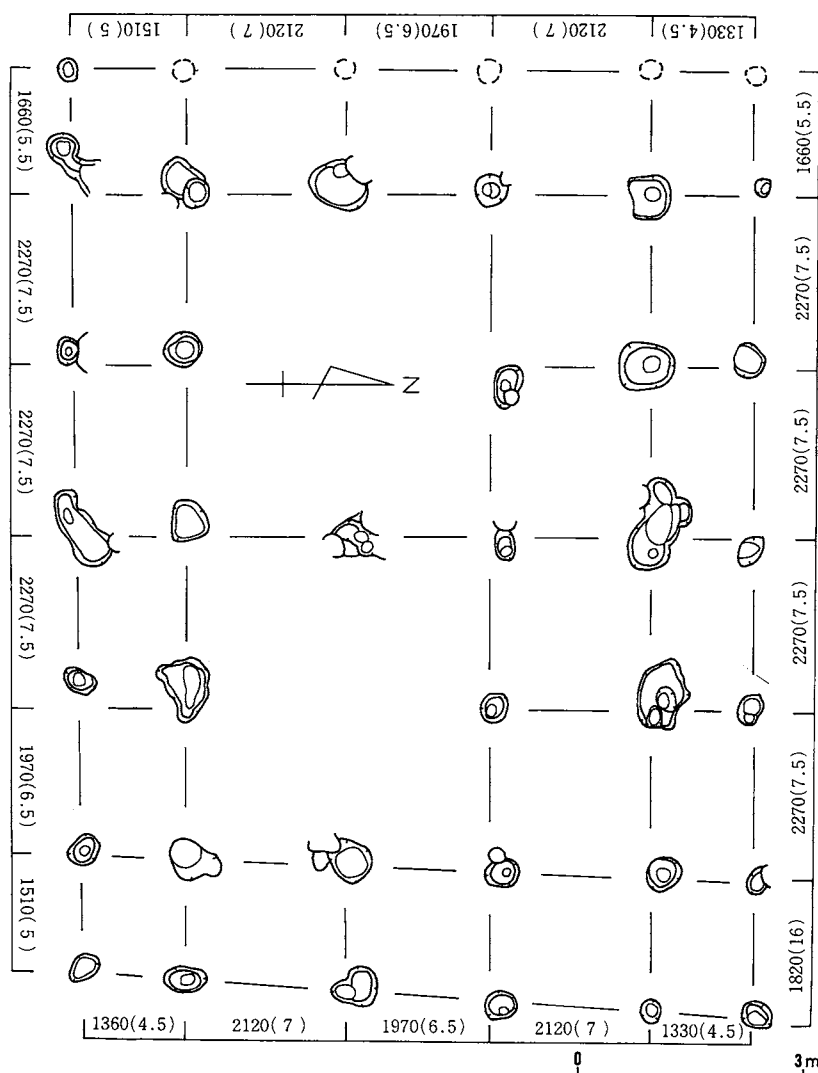
第61図 (52) C VII e 3 建物跡

(53) C VII f 1 建物跡-1 (第62図)

西端から48m、北端から15mのグリッドC VII区にC VII g 8 建物跡、C VI h 8 建物跡、C VII e 3 建物跡、C VII f 1 建物跡-2、C VII g 2 建物跡、C VII h 2 建物跡と重複して位置し、桁行12.56m (41.5尺) 6間、梁行9.05m (30尺) 5間の規模をもち、棟方向をN-91°-Wに示す建物跡である。西側柱列の柱穴が南端以外は検出されていないのは、この部分がC VII a 1 溝跡と重複しており、調査時に見落した可能性が強い。側柱

列の全長がすべて異なった数値を示すことから、建物全体に歪みがあり四隅が直交しない。

桁行柱間個々の長さは、南側柱列は東から1.51m・1.97m・2.27m・2.27m・2.27m・1.66m、北側柱列が東から1.82m・2.27m・2.27m・2.27m・2.27m・1.66mと、西4間の相対する柱間は同じ間尺を示すが、東2間は北側柱列が南側柱列のそれより0.3m長く、全長で0.6m位長くなっている。それ以外の柱間は、南側柱列と北側柱列の相対する柱穴を直線で結んだ線上に位置し、梁行の交点からも大きくはずれないことから、ほぼ同じ間尺と推定される。桁行の間尺を尺に換算すると、南側柱列の東から、5尺、6.5尺、7.5尺、7.5尺、7.5尺、5.5尺、北側柱列は東から、6尺・7.5尺・7.5尺・7.5尺・7.5尺・5.5尺となる。梁行は、東妻の南から1.33



第62図 (53) C VII f | 建物跡一 |

m・2.12m・1.97m・2.12m・1.33m、西妻は南から1.51m・2.12m・1.97m・2.12m・1.33mが計測され、東妻は4.5尺・7尺・6.5尺・7尺・4.5尺、西妻が5尺・7尺・6.5尺・7尺・4.5尺と換算される。桁行の南側と北側及び梁行東側と西側の狭い柱間の部分は庇に相当するであろう。桁行の中央部に柱穴が入ることから、複数の部屋に仕切られ、板張床をもつ建物跡と考えられる。

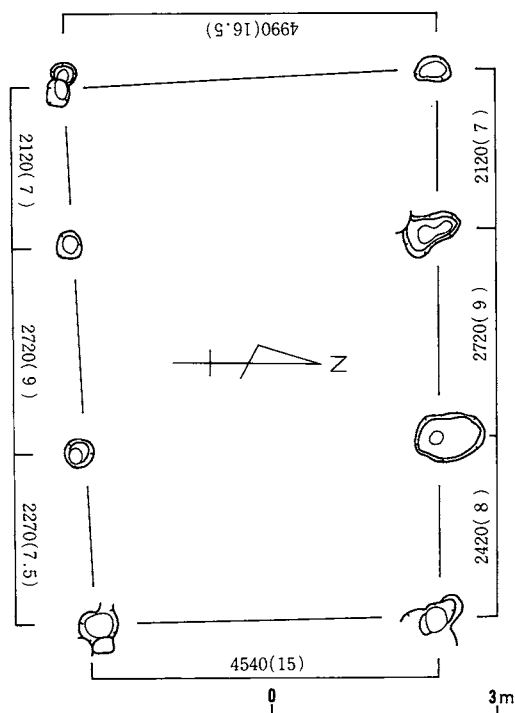
掘り方は径0.3m～0.75m、深さ0.4m～0.55mの規模をもち、平面形は円形や楕円形を示す。埋土は地山の褐色粘土塊が若干混じる黒色土である。

(54) C VII f 1 建物跡—2 (第63図)

西端から50m、北端から16mのグリッドC VII区にC VI g 8 建物跡、C VI h 8 建物跡、C VII g 2 建物跡と重複して位置し、桁行7.27m (24尺) 3間、梁行5m (16.5尺) 1間の規模をもち、N—92°—Wの棟方向を示す建物跡である。

桁行柱間個々の長さは、南側柱列の東から2.27m・2.72m・2.12m、北側柱列は東から2.82m・2.72m・2.12mと計測され、尺に換算すると、南側柱列の東から7.5尺・9尺・7尺、北側柱列は東から8尺・9尺・7尺になる。梁行は、東妻が4.54mの15尺、西妻は5mの16.5尺と計測される。いずれの柱列も計測値に差がみられ、建物跡全体に歪みがあり四隅は直交しない。間仕切りや床束に関係する柱穴は検出されていない。

掘り方は径0.3m～0.7m、深さ0.3m～0.35mの規模をもち、円形や楕円形の平面形を示す。埋土は黒色土である。

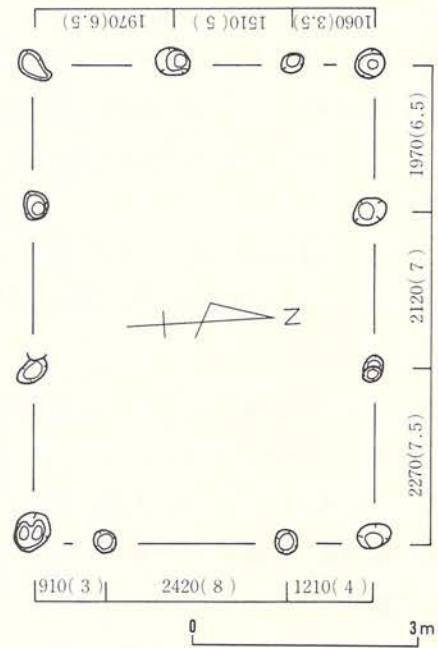


第63図 (54) C VII f. 1 建物跡—2

(55) C VII f 6 建物跡 (第64図)

西端から65m、北端から18mのC VII区にC VII g 2 建物跡、C VII h 2 建物跡と重複して位置し、桁行6.36m (21尺) 3間、梁行4.54m (15尺) 4間の規模をもち、N-93°-Wの棟方向を示す建物跡である。

桁行柱間個々の長さは、南側柱列の東から2.27m・2.12m・1.97m、北側柱列の東から2.27m・2.12m・1.97mと計測され、尺に換算すると南側柱列・北側柱列とも東から7.5尺・7尺・6.5尺の間尺になる。梁行は、東妻が南から0.9m・2.42m・1.21m、西妻が南から1.97m・1.51m・1.06mと計測され、尺に換算すると東妻は南から3尺・8尺・4尺、西妻が南から6.5尺・5尺・3.5尺となる。間仕切りや床束に関係する柱穴は検出されていない。



第64図 (55) C VII f 6 建物跡

掘り方の規模は、径0.3m~0.55m、深さ0.3m~0.35mの規模をもち、円形や楕円形の平面形を示す。埋土は黒色土が主体をなす。

(56) C VII f 7 建物跡 (第65図)

西端から68m、北端から15mのグリッドC VII区にC VII f 6 建物跡、C VII g 2 建物跡と重複して位置し、桁行8.48m (28尺) 4間、梁行2.42m (8尺) 1間の規模をもち、棟方向をN-4°-Eに示す建物跡である。

桁行の柱間は、東側柱列の南から2.27m、1.82m、2.12m、2.27m、西側柱列は南から2.27m・1.97m・1.82m・2.42mと計測され、尺に換算すると東側柱列の南から7.5尺・6尺・7尺・7.5尺・西側柱列は南から7.5



第65図 (56) C VII f 7 建物跡

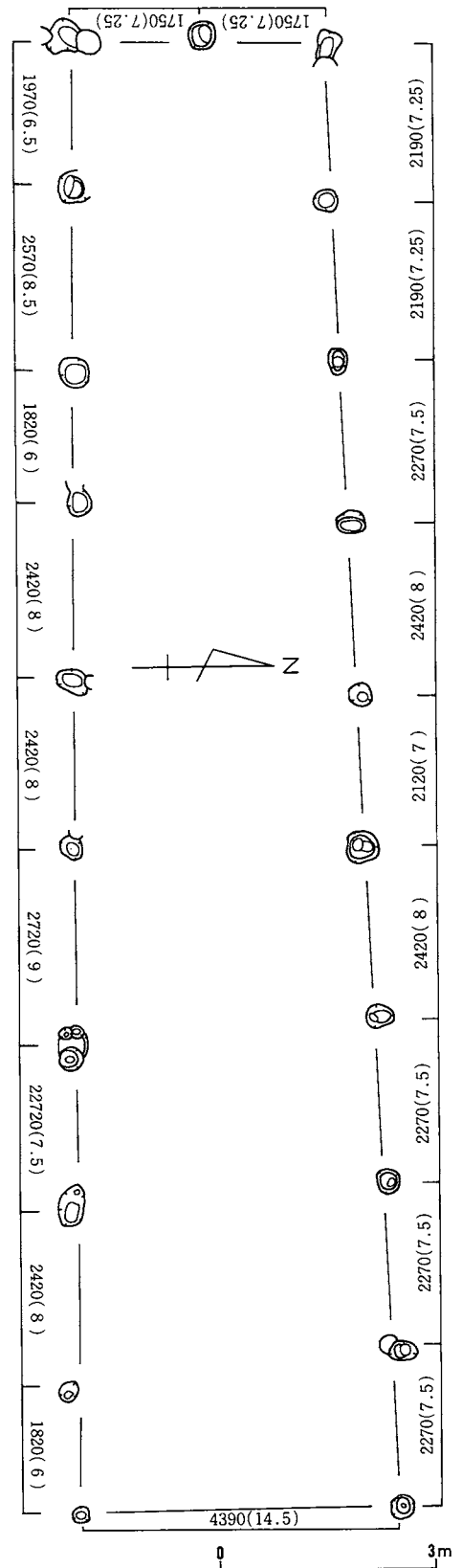
尺・6.5尺・6尺・8尺となり、相対する柱間の間尺は一致しないが、全長では同じ長さとなる。梁行は、南妻・北妻とも2.42mで換算すると8尺と同じ間尺である。間仕切りや床東に関連する柱穴は検出されていない。

掘り方は径0.3m～0.35m、深さ0.25m～0.35mの規模をもち、平面形は円形や楕円形を示す。埋土は黒色土が主体をなす。

(57) C VII g 2 建物跡 (第66図)

西端から53m、北端から19mのグリッドC VII区にC VI g 8 建物跡、C VII f 1 建物跡-1、C VII f 1 建物跡-2、C VII f 6 建物跡、C VII f 7 建物跡、C VII g 9 建物跡-1、C VII g 9 建物跡-2、C VII h 2 建物跡と重複して位置し、桁行20.45m (67.5尺) 9間、梁行4.4m (14.5尺) 2間の規模をもち、N-93°-Wの棟方向を示す建物跡である。

桁行柱間個々の間尺は、南側柱列の東から1.82m・2.42m・2.27m・2.72m・2.42m・2.42m・1.82m・2.57m・1.97m、北側柱列は東から2.27m・2.27m・2.27m・2.42m・2.12m・2.42m・2.27m・2.17m・2.17mと計測され、相対する柱間の間尺も一部を除いて一致せず、両柱列の全長は同じであるが柱間個々の比較では複数の間尺が使用されている。計測値から尺に換算すると、南側柱列が東から6尺・8尺・7.5尺・9尺・8尺・8尺・6尺・8.5尺・6.5尺、北側柱列は東から7.5尺・7.5尺・7.5尺・8尺・7尺・8尺・7.5尺・7.25尺・7.25尺になる。梁行は、東妻は4.4mの1間であるが、西妻は1.75m・1.75mの2間で、東妻は14.5尺、西妻は5.8尺・5.8尺の等間に換算される。梁行の両妻の長さが異なることから、建物全体に



第66図 (57) C VII g 2 建物跡

歪みをもつが、桁行の柱穴は間尺が異なるものの直線的に配列されるとともに、両桁行の全長が同じ長さを示すことから、建設時にこのように設計された建物跡と推定される。間仕切りや床束に関連する柱穴は検出されていない。

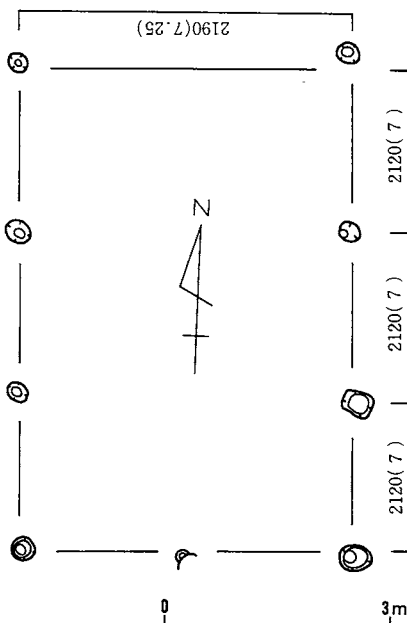
掘り方は、径0.25m～0.5m、深さ0.25～0.3mの規模をもち、平面形は円形や楕円形を示す。埋土は黒色土が主体をなす。

(58) C VII g 9 建物跡—1 (第67図、写真図版13A)

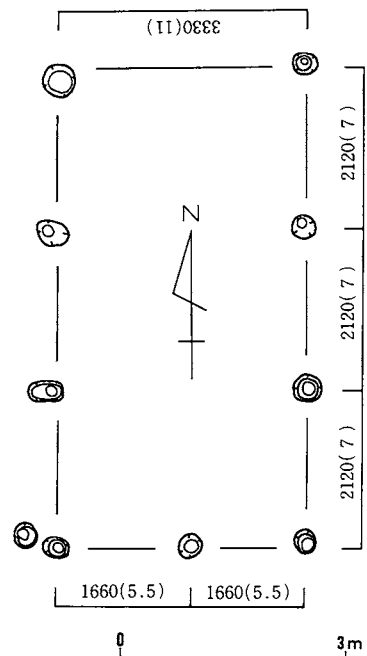
西端から71m、北端から20mのグリッドC VII区にC VII g 2 建物跡、C VII g 9 建物跡と重複して位置し、桁行6.66m (22尺) 3間、梁行4.4m (14.5尺) 2間の規模をもち、棟方向がN—2°—Wを示す建物跡である。

桁行柱間個々の長さは、東側柱列の南から1.97m・2.27m・2.42m、西側柱列は南から2.12m・2.12m・2.12mと計測され、尺では東側柱列は南から6.5尺・7.5尺・8尺に、西側柱列は7尺の等間に換算される。梁行は、南妻は2.2m・2.2mの等間にとり、北妻は4.4mの1間になっている。尺に換算すると南妻は7.25尺・7.25尺、北妻は14.5尺になる。間仕切りや床束に関係する柱穴は未検出である。

掘り方は径0.25m～0.45m、深さ0.25m～0.35mの規模をもち、平面形は方形の例もあるが円形や楕円形が主体を占める。埋土は黒色土である。



第67図 (58) C VII g 9 建物跡—1



第68図 (59) C VII g 9 建物跡—2

(59) C VII g 9 建物跡—2 (第68図、写真図版13A)

西端から72m、北端から20mのグリッドC VII区にC VII g 2 建物跡、C VII g 9 建物跡—1と重複して位置し、桁行6.36m (21尺) 3間、梁行3.32m (11尺) 2間の規模をもち、棟方向がほぼ真北を示す建物跡である。

桁行柱列の個別の長さは、東側柱列・西側柱列ともに南から2.12m・2.12m・2.12mに近似した数値が計測され、3間とも等間に設計された建物跡と考えられ、尺に換算すると7尺の間尺になる。梁行は、南妻が東から1.82m・1.51mの2間で、北妻は3.32mの1間であり、南妻は東から6尺・5尺に、北妻は11尺に換算されるが、南妻中央の柱穴を棟持柱と考えれば5.5尺の等間で建設された可能性もある。間仕切りや床束を示す柱穴は検出されていない。

掘り方は径0.3m～0.4m、深さ0.3m～0.35mの規模をもち、平面形は円形か楕円形を示す。埋土は黒色土である。

(60) C VII h 2 建物跡 (第69図)

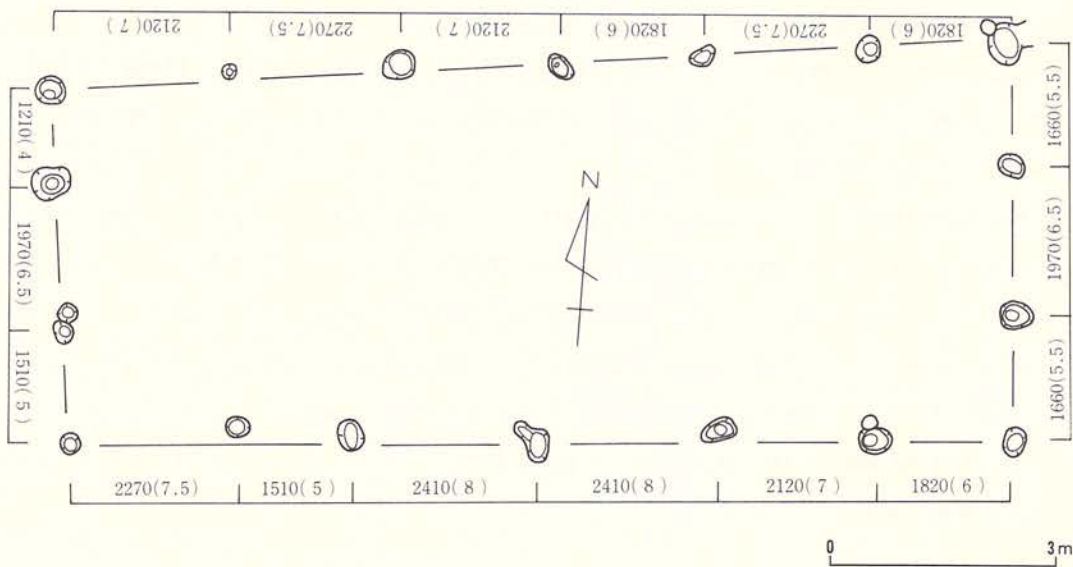
西端から56m、北端から23mのグリッドC VII区にC VI f 7 建物跡、C VI h 8 建物跡、C VII f 1 建物跡—1、C VII f 6 建物跡、C VII g 2 建物跡と重複して位置し、桁行12.72m (42尺) 6間、梁行5.3m (17.5尺) 3間の規模をもち、棟方向がN-97°-Wを示す建物跡である。

桁行柱間個々の長さは、南側柱列の東から1.82m・2.12m・2.42m・2.42m・1.51m・2.27m、北側柱列は東から1.82m・2.27m・1.82m・2.12m・2.27m・2.12mと計測され、1.82m～2.42mまで何種類かの間尺を使用している。計測値を尺に換算すると、南側柱列は東から6尺・7尺・8尺・8尺・5尺・7.5尺、北側柱列の場合は東から6尺・7.5尺・6尺・7尺・7.5尺・7尺となり、両柱列の相対する柱間も同じ間尺を使っていない例が多くみられる。梁行は、東妻の南から1.66m・1.97m・1.66m、西妻は南から1.51m・1.97m・1.21mになり、東妻は5.5尺・6.5尺・5.5尺、西妻は南から5尺・6.5尺・4尺と換算される。このように桁行・梁行ともいずれの柱列も全長が異なるものの、各柱列とも直線的な柱穴の配列状況を示すが、建物全体に歪みがあり四隅が直交しない、間仕切りや床束に関連する柱穴は検出されていない。

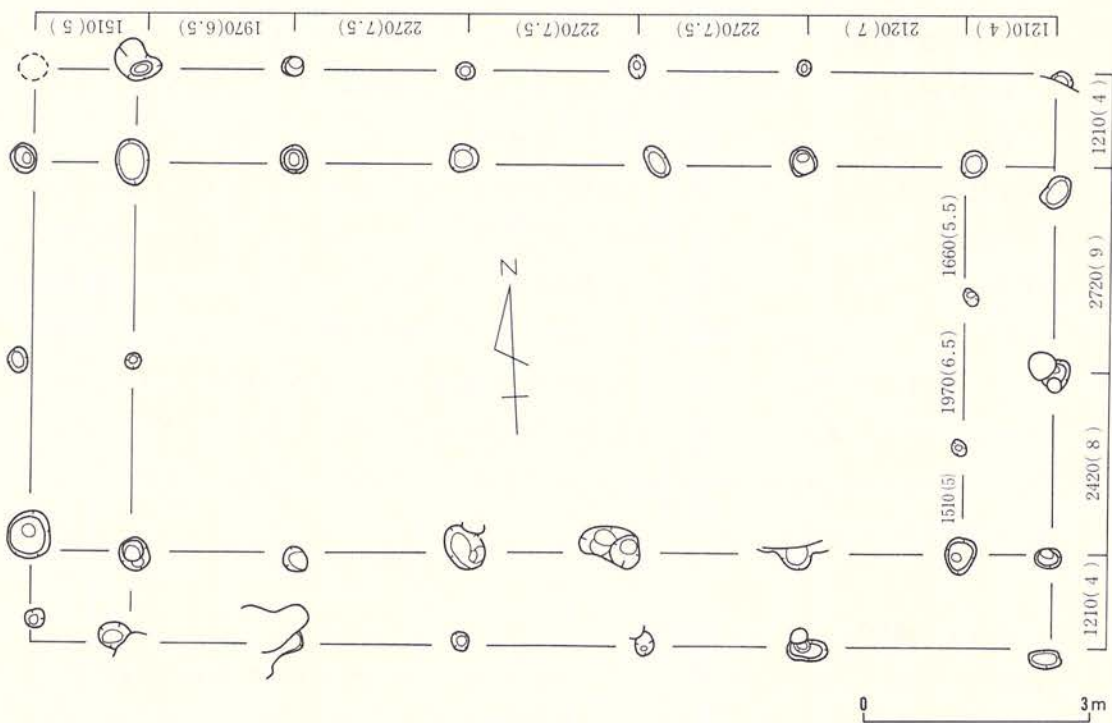
掘り方は径0.25m～0.5m、深さ0.3m～0.4mの規模をもち、円形や楕円形の平面形を示す。埋土は黒色土を主体とする。

(61) C VII j 2 建物跡 (第70図)

西端から55m、北端から28mのグリッドC VII区・D VII区にC VI h 8 建物跡・D VII a 1 建物跡、D VII a 4 建物跡、D VII b 1 建物跡、D VII b 4 建物跡と重複して位置し、桁行13.63m (45尺) 7間、梁行7.57m (25尺) 4間の規模をもち、棟方向がN-87°-Wを示す建物跡である。



第69図 (6)C VII h 2 建物跡



第70図 (6)C VII j 2 建物跡

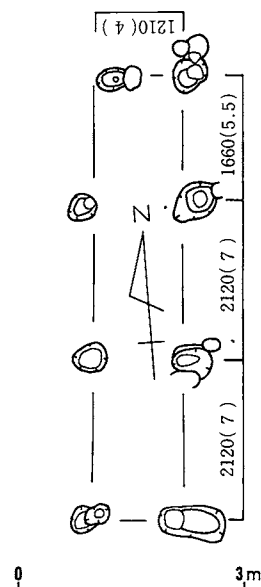
桁行柱間個々の長さは、南側柱列・北側柱列とその入側柱列では各柱間によって若干の差が認められるものの、極端な差はなく、梁行の柱列もほぼ直線上に配列されることから、相対する柱間は同じ間尺を使用しているものと推定される。各柱間の計測値は、東から1.21m・2.12m・2.27m・2.27m・2.27m・2.12m・1.33mとなり、尺では4尺・7尺・7.5尺・7.5尺・7.5尺・7尺・4.5尺に換算される。梁行は、東妻・西妻とも南から1.2m・2.42m・2.72m・1.2mと計測され、4尺・8尺・9尺・4尺に換算される。西側入側柱列の間尺は西妻の間尺と同じであるが、東妻入側柱列の場合は、南から1.2m・1.5m・1.97m・1.66mと異なる間尺を示し、4尺・5尺・6.5尺・5.5尺と換算される。間仕切りや床束に関連する柱穴は検出されていない。掘り方は径0.25m～0.6mの円形や楕円形を示し、埋土は黒色土が主体をなす。

(62) DV a 7 建物跡 (第71図)

西端から7m、北端から37mのグリッドDV区に他遺構と重複することなく単独で位置し、桁行5.9m (19.5尺) 3間、梁行1.2m (4尺) 1間の規模をもち、棟方向がN-5°-Eを示す建物跡である。

桁行の柱間は東側柱列・西側柱列とも南から2.12m・2.12m・1.66mと計測され、7尺・7尺・5.5尺と換算される。桁行の東側柱列は直線的な配列であるが、西側柱列が南2間分は直線的であるが、北端の柱穴が内側にずれていることから、梁行の南妻と北妻では間尺に差がみられるものの、全体の柱穴配置や計測値から考えて、南妻・北妻とも1.2m＝4尺の等間と推定される。間仕切りや床束に関係する柱穴は検出されていない。

掘り方は径0.25m～0.5m、深さ0.3m位の規模をもち、平面形は円形や楕円形を示す。埋土は黒色土である。



第71図 (62)DV a 7 建物跡

(64) DV b 8 建物跡 (第72図)

西端から12m、北端から37mのグリッドDV区・DVI区にまたがってDV a 8 建物跡と重複して位置し、桁行12.72m (42尺) 6間、梁行1.97m (6.5尺) 1間の規模をもち、N-85°-Wの棟方向を示す建物跡である。

桁行の柱間個々は、南側柱列は東から1.82m・2.42m・2.12m・2.12m・2.12m・1.82m、北側柱列は東から1.82m・2.42m・2.12m・2.12m・2.12m・1.82mと計測され、東西両端が6尺、その他は東から8尺・7尺・7尺・7尺と換算され、相対する柱間は同じ間尺を使用し

ている。梁行は、東妻・西妻とも1.97mが計測され、6.5尺と換算される。間仕切りや床束に関連する柱穴は未検出である。

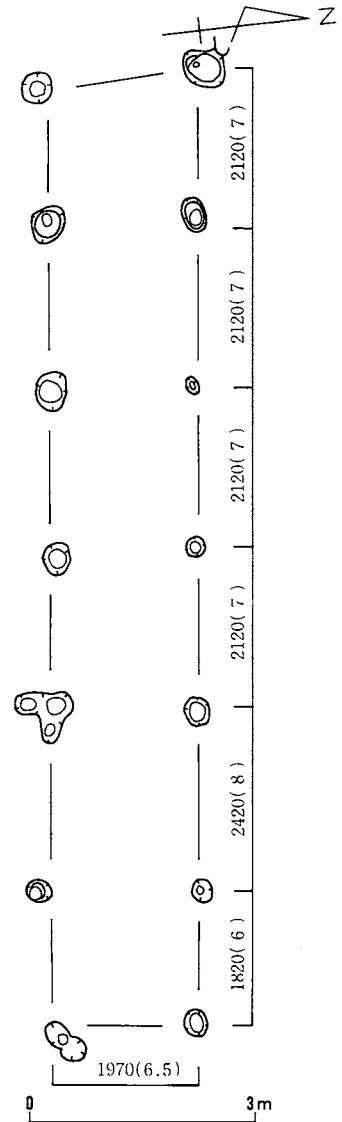
掘り方は径0.25m～0.6m、深さ0.3m～0.4mの規模をもち、円形や楕円形の平面形を示す。埋土は黒色土が主体をなす。

(65) D V f 7 建物跡 (第73図)

西端から7m、北端から51mのグリッドD V区にD V f 9 建物跡と重複して位置し、桁行6.66m (22尺) 3間、梁行3.03m (10尺) 1間の規模をもち、棟方向がN-97°-Wを示す建物跡である。

桁行柱間個々は、南側柱列の東から2.12m・2.27m・2.27m、北側柱列の東から2.12m・2.12m・2.27mと計測され、尺に換算すると南側柱列の東から7尺・7.5尺・7.5尺、北側柱列は東から7尺・7尺・7.5尺となり、中央の1間が南側7.5尺、北側7尺と異なった間尺を使っているため、全長が0.15m—0.5尺の差がある。梁行は東妻・西妻とも3.03mの等間を示し、尺に換算すると10尺となる。間仕切りや床束に関係する柱穴は検出されていない。

掘り方は径0.25m～0.5m、深さ0.3m位の規模をもち、平面形は円形を示す。埋土は黒色土が主体を占める。



第72図 (64) D V b 8 建物跡

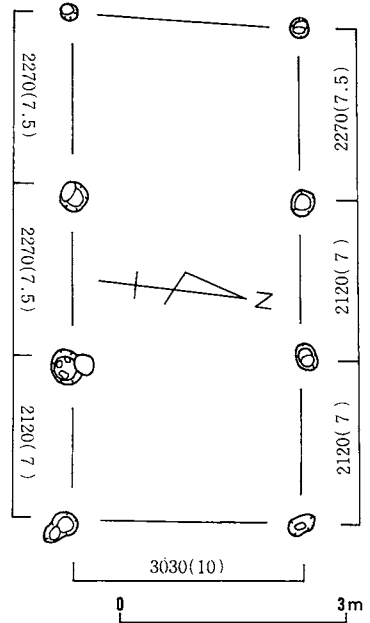
(66) D V f 9 建物跡 (第74図)

西端から12m、北端から50mのグリッドD V区とD VI区にまたがってD V f 7 建物跡と重複して位置し、桁行10.3m (34尺) 4間、梁行4.09m (13.5尺) 2間の規模をもち、N-95°-Wの棟方向を示す建物跡である。

桁行柱間個々の長さは、南側柱列の東から2.42m・2.57m・2.57m・2.57m、北側柱列が東から2.57m・2.57m・2.57m・2.57mと計測され、東端の1間が南側2.42m、北側2.57mと差がある以外は、相対する柱間は2.57mの同じ間尺が使われている。計測値を尺に換算すると、

南側柱列の東から8尺・8.5尺・8.5尺・8.5尺となり、北側柱列は8.5尺の等間になる。間尺に差があることと、柱穴位置にずれがあることから、建物跡全体に歪みがあり、四隅が直交しない。梁行は、東妻・西妻とも南から2.04m・2.04mと計測され、6.75尺に換算される。間仕切りや床束を示す柱穴は検出されていない。

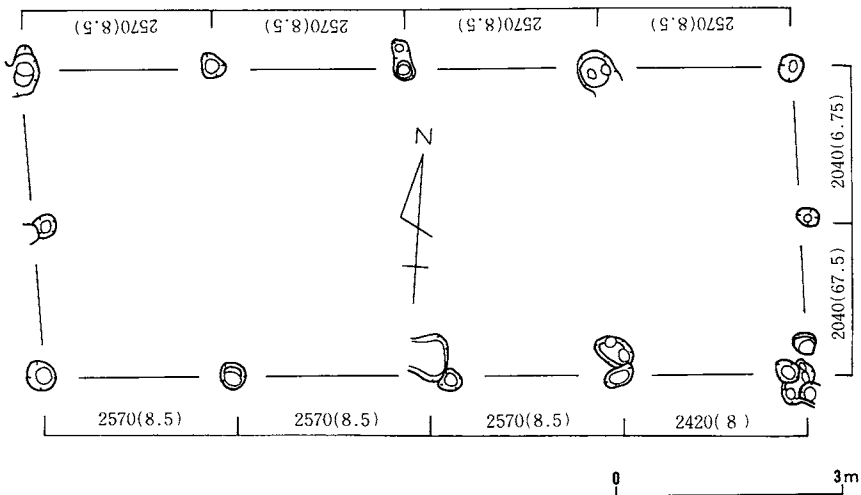
掘り方は径0.3m～0.5m、深さ0.3m～0.4mの規模をもち、平面形は円形や楕円形を示す。埋土は地山の褐色粘土粒が若干混入した黒色土が主体を占める。



第73図 (65) D V f 7 建物跡

(67) D V I b 5 建物跡 (第75図)

西端から33m、北端から38mのグリッドDVI区に他遺構と重複することなく単独で位置するが、検出された柱穴の配列状況を見ると、本来はさらに南に延び規模が大きくなる建物跡と考えられる。検出された規模は、桁行8.48m (28尺) 4間、梁行9.84m (32.5尺) 4間となり、N-83°-Wの棟方向を示す。検出された規模では棟方向を東西にもつようであるが、南へ延びるらしいことや間尺から考えて、南北に棟方向をもつ建物跡と推定される。



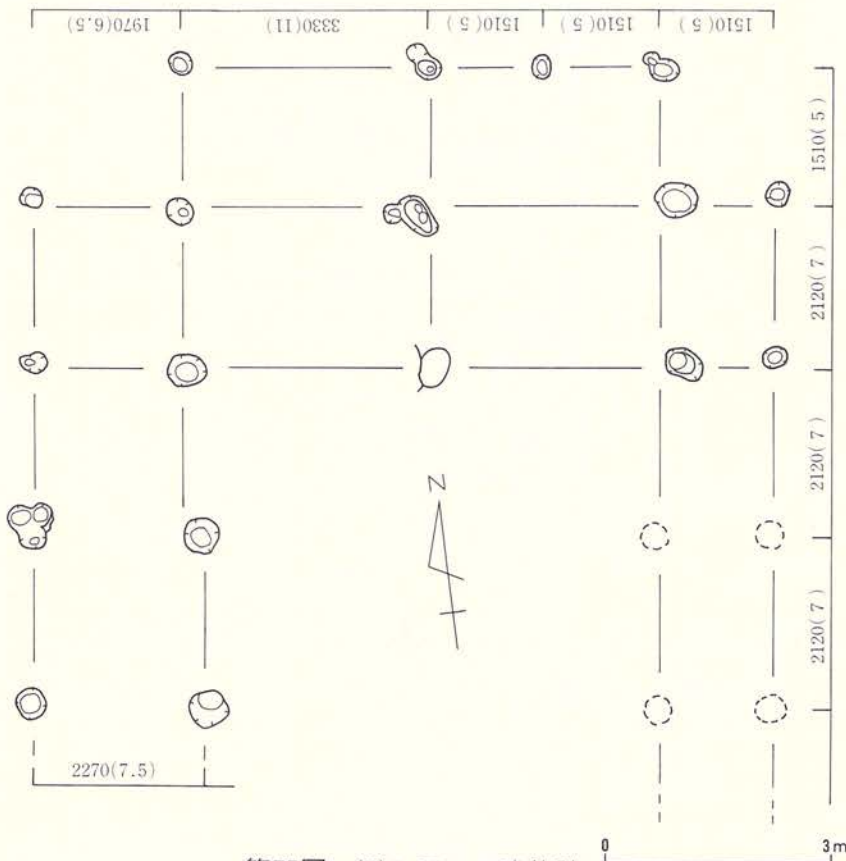
第74図 (66) D V f 9 建物跡

西にもつようであるが、南へ延びるらしいことや間尺から考えて、南北に棟方向をもつ建物跡と推定される。

桁行柱間個々は、柱穴がすべて検出された西側柱列の入側柱列の南から2.27m・2.27m・2.12m・1.51mと計測され、他柱列の相対する柱間もほぼ近似した計測値が得られている。おそらく、相対する柱間は同じ間尺と考えられ、尺に換算すると南から7.5尺・7.5尺・7尺・5尺になる。梁行は、柱穴の揃っている北妻の入側柱列の東から1.51m・1.51m・1.51m・3.33m・1.97mと計測され、他の相対する柱間もほぼ近似した計測値を示し、5尺・5尺・5尺・11尺・6.5尺と換算される。ただし、南妻の西端の1間は2.27mの7.5尺の間尺が使われ、各柱穴も北端の柱との直線上に配列される。

間尺と柱穴の配列状況からみて東側・西側・北側の狭い間尺の部分は庇に相当し、本来は複数の部屋に仕切られ、板張り床をもつ建物跡の可能性が大きい。

掘り方は直径0.3m～0.5m、深さ0.3mの規模をもち、平面形は円形や楕円形を示す。埋土は褐色粘土粒の混入した黒色土である。



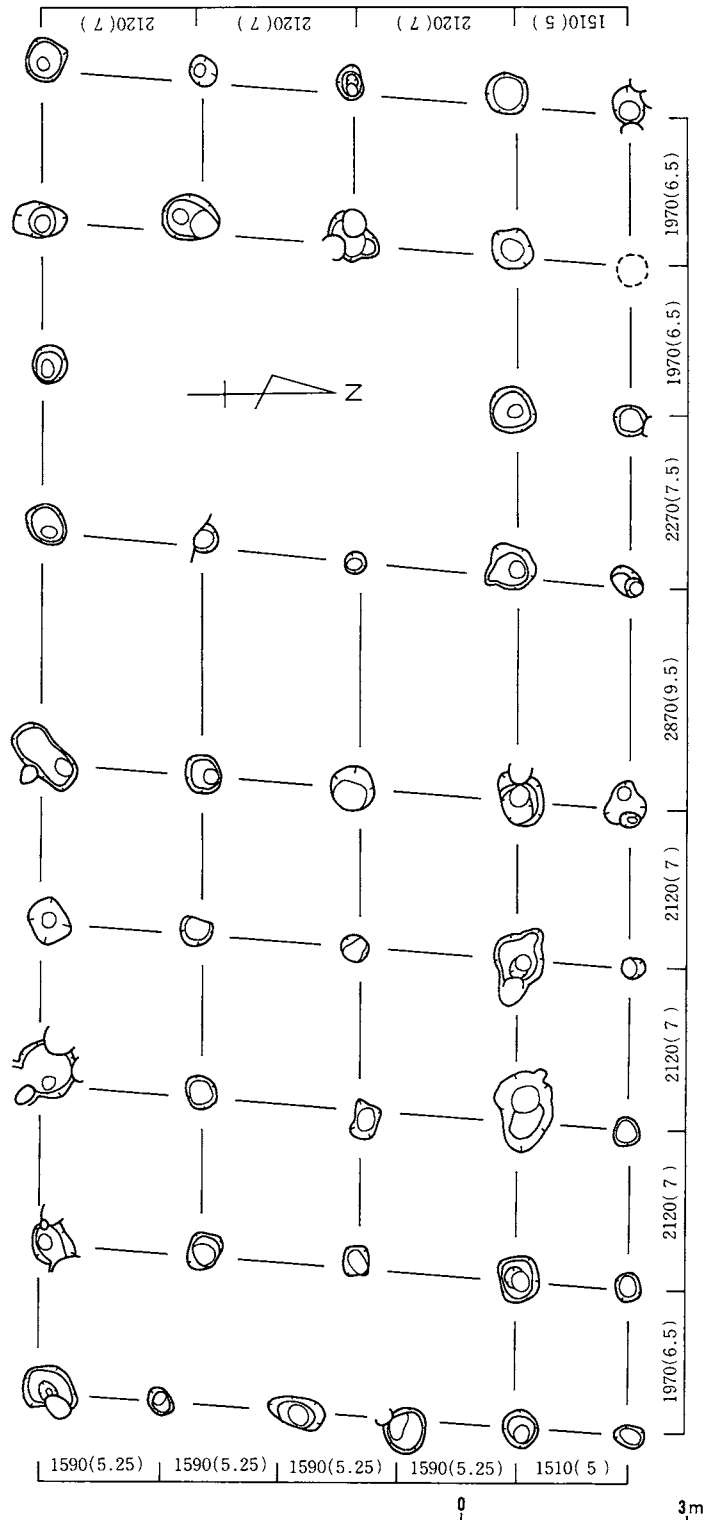
第75図 (67) D VI b 5 建物跡

(68) D VII a 1 建物跡

(第76図、写真図版14A)

西端から49m、北端から32mのD VII区にC VII j 2 建物跡、D VII a 3 建物跡、D VII b 1 建物跡、D VII b 4 建物跡と重複し、桁行17.42m(57.5尺) 8間、梁行7.87m(26尺) 4間の規模をもち、棟方向がN-90°-Wを示す建物跡で、相対する柱列の計測値は同じ数値を示すが、柱穴の配列が全体的にずれているため、建物跡全体に歪みがあり四隅は直交しない。

桁行の柱間個々は、南側柱列の東から1.97m・2.12m・2.12m・2.12m・2.12m・3.03m・2.12m・1.97m・1.97m、北側柱列は東から1.97m・2.12m・2.12m・2.12m・2.87m・2.27m・1.97m・1.97mと、西から3間目と4間目の相対する柱間の間尺に違いがある以外は、相対する柱間は同じ計測値を示す。尺に換算すると、南・北側柱列とも東から4間目までは6.5尺・7尺・7尺・7尺となり、5・6間目は南側が東から10尺・7尺、北側9.5尺・7.5尺で、7・8間間は両柱列とも6.5尺・6.5尺の間尺になる。梁行は、東妻が南から1.59m・1.59m・1.59



第76図 (68) D VII a 1 建物跡

m・1.59m・1.51mとなり、5.25尺・5.25尺・5.25尺・5.25尺・5尺に換算されるが、西妻の場合は南から2.12m・2.12m・2.12m・1.51mと計測され、尺に換算すると7尺・7尺・7尺・5尺になる。このように、西妻の南3間21尺を東妻では5.25尺の4間にしている。西側の一部に柱穴の省略がみられるものの、それ以外は桁行と梁行の交点にはすべて柱穴を配置していることから、建物全体が複数の部屋に仕切られ板張り床をもつ建物跡と推定される。

掘り方は径0.3m～0.8m、深さ0.4m～0.5mの規模をもち、平面形は円形や楕円形を示す。埋土は地山の褐色粘土の小塊が混入した黒色土で占められる。

(69) D VII a 4 建物跡 (第77図)

西端から59m、北端から33mのグリッドD VII区にC VII j 2 建物跡、D VII a 1 建物跡、D VII b 1 建物跡、D VII b 4 建物跡、D VII b 7 建物跡と重複して位置し、桁行13.02m (43尺) 6間、梁行9.54m (31.5尺) 5間の規模をもち、棟方向がN-92°-Wを示す建物跡である。

桁行個々の柱間は、南側柱列・南側入側柱列・北側柱列は若干の差があるもののほぼ近似した数値を示す。実際の計測値は、東から3.03m・2.27m・2.27m・2.12m・2.12m・1.21mと、尺に換算すると10尺・7.5尺・7.5尺・7尺・7尺・4尺となり、北側入側柱列以外の相対する柱間は同じ間尺と推定される。北側入側柱列は、東から3.03m・1.06m・1.97m・1.51m・2.12m・2.12m・1.21mと計測され、側柱列の2・3間目の15尺分が3間に分割される以外は、同じ間尺を示す。梁行は、東妻の南から1.51m・1.66m・3.33m・1.66m・1.21mと計測され、5尺・5.5尺・11尺・5.5尺・4尺に換算される。西妻は南から1.51m・2.57m・2.57m・1.66m・1.21mと、尺に換算すると5尺・8.5尺・8.5尺・5.5尺・4尺になり、南から2間目と3間目の間尺に違いがみられる。内柱はまったく検出されていないが、規模から考えて複数の部屋に仕切られていた可能性がある。南・北・西側にみられる狭い間尺の部分は庇に相当するであろう。

掘り方は径0.25m～0.75m、深さ0.3m～0.45mの規模をもち、平面形は円形や楕円形を示す。埋土は地山の褐色粘土粒が混入した黒色土が主体を占める。

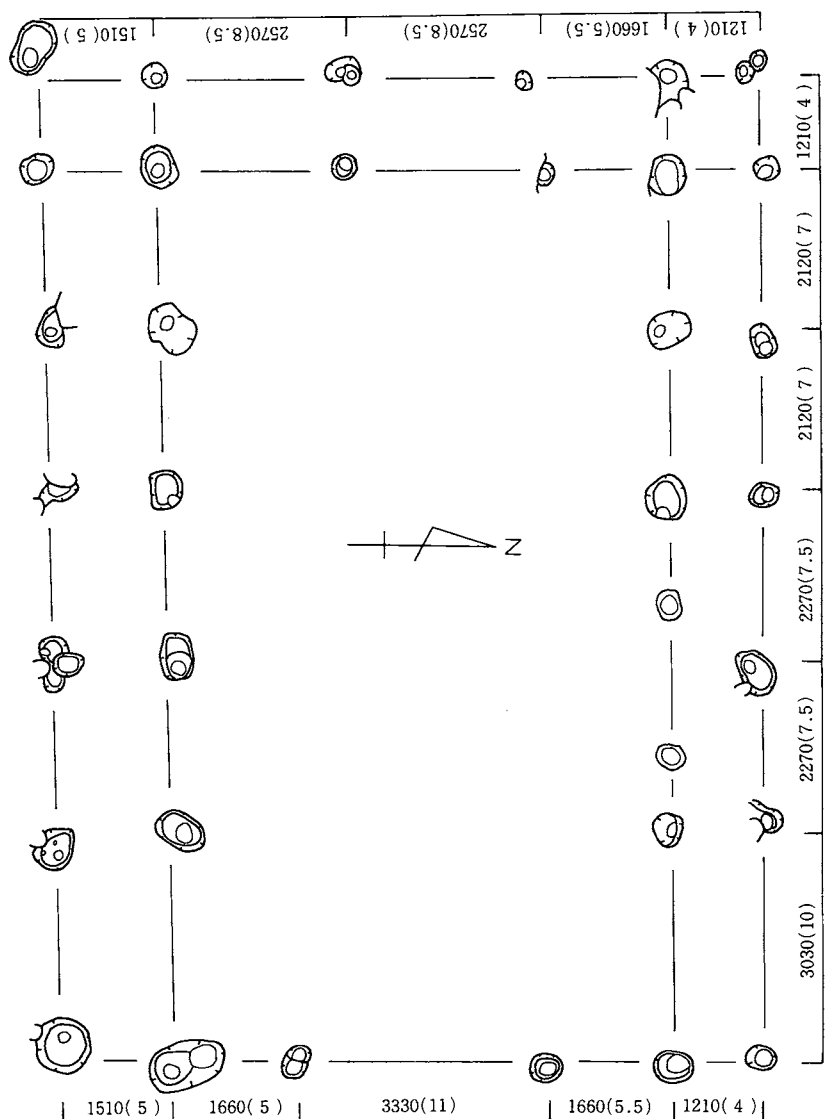
(70) D VII b 1 建物跡 (第78図、写真図版14A)

西端から50m、北端から35mのグリッドD VII区にC VII j 2 建物跡、D VII a 1 建物跡、D VII b 4 建物跡、D VII b 7 建物跡と重複して位置し、桁行15.3m (50.5尺) 7間、梁行6.66m (22尺) 2間の規模をもち、N-96°-Wの棟方向を示す建物跡である。

桁行の柱間個々は、南側柱列の東から2.42m・2.27m・2.12m・2.12m・2.12m・2.12m・2.12mと計測され、北側柱列の柱間もほぼ同じ計測値を示すことから、南側柱列と北側柱列そ

して入側柱列の相対する柱間は同じ間尺を使用していると考えられ、尺に換算すると東から、8尺・7.5尺・7尺・7尺・7尺・7尺・7尺の間尺となる。梁行は、東妻が南から3.33m・3.33m、西妻から3.18m・1.06m・2.12mと、東妻より西妻が0.3m狭くなっている。計測値を尺に換算すると、東妻が11尺・11尺、西妻が南から10.5尺・3.5尺・7尺の3間になる。入側柱列の東端の柱穴は未検出であるが、他の柱穴は省略がみられず、すべてに柱穴を配置することから、間仕切りや板張り床をもつ建物跡である可能性が強い。

掘り方は径0.25m～0.7m、深さ0.3m～0.4mの規模をもち、円形や楕円形の平面形を示す。埋土は黒色土である。

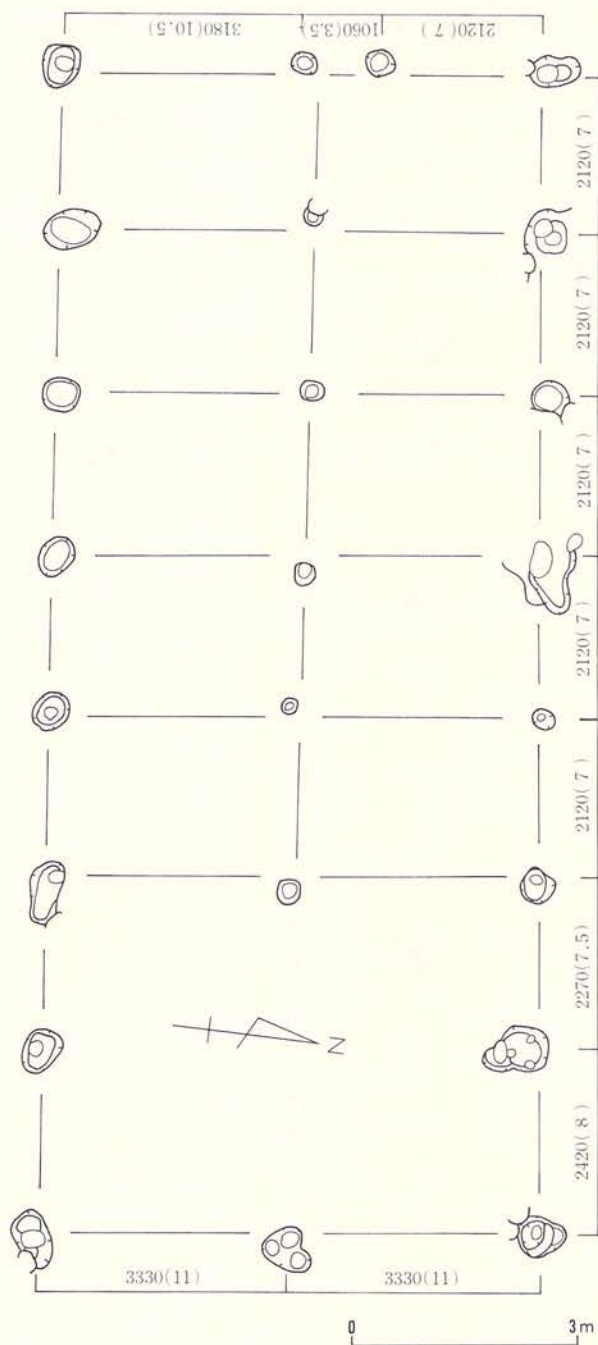


(71) D VII b 4 建物跡

(第79図)

西端から60m、北端から35mのグリッドD VII区にC VII j 2 建物跡、D VII a 1 建物跡、D VII a 3 建物跡、D VII b 1 建物跡、D VII b 7 建物跡と重複して位置し、桁行9.08m (30尺) 4間、梁行6.96m (23尺) 3間の規模をもち、棟方向がN-0°-Wを示す建物跡である。柱穴配置が全体的に歪みがあるため四隅が直交しない。

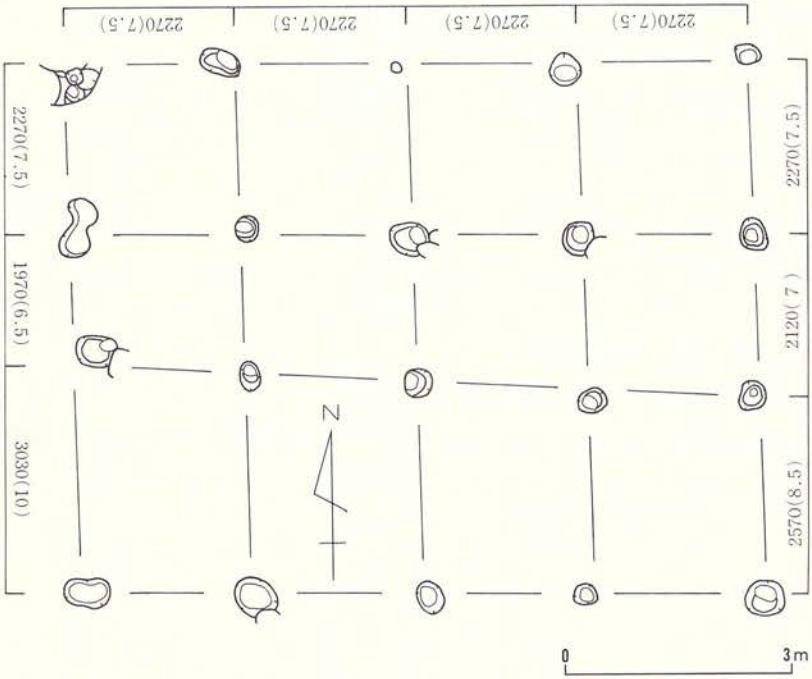
桁行の柱間個々は、南側柱列の東から2.27m・2.27m・2.27m・2.27mと計測され、尺に換算すると7.5尺・7.5尺・7.5尺・7.5尺の等間になる。北側柱列、各入側柱列の柱間個々の計測値も南側柱列の計測値とほぼ同じ数値を示し、各柱列ともすべて同じ間尺で建設されたと推定される。梁行は、東妻が南から2.57m・2.12m・2.27m、西妻は南から3.03m・1.97m・2.27mと計測され、東妻と西妻の全長は同じであるが、南から1間目と2間目の相対する柱間の間尺は異なる間尺を使っている。尺に換算すると、東妻は南から8.5尺・7尺・7.5尺、西妻の場合は南から10尺・6.5尺・7.5尺となる。梁行の間尺が東妻と西妻で異なるが、両妻の柱穴を結んだ直線上に柱穴



第78図 (70) D VII b 1 建物跡

を配置している。この建物跡は柱穴の省略がまったくみられず、桁行と梁行の交点にすべて柱穴を配置するベタ柱の建物跡である。おそらく、複数の部屋に仕切られ、板張り床であったと推定される。

掘り方は0.3m～0.5m、深さ0.4m～0.5mの規模をもち、平面形は円形や楕円形を示す。埋土は地山の褐色粘土粒が混入した黒色土が主体をなす。



第79図 (71)D VII b 4 建物跡

(72) D VII b 7 建物跡 (第80図、写真図版14B)

西端から70m、北端から34mのグリッドD VII区にD VII a 3 建物跡、D VII b 4 建物跡と重複して位置し、桁行6.06m (20尺) 3間、梁行6.81m (22.5尺) 2間の規模をもち、棟方向がN-88°-Wを示す建物跡である。

桁行の各柱間を計測すると、南側柱列と北側柱列の相対する柱間は同じ数値を示し、相対する柱間は同じ間尺を使用していると推定される。実際の計測値は東から1.97m・2.12m・1.97mとなり、尺に換算すると6.5尺・7尺・6.5尺の間尺となる。梁行も相対する柱間の間尺はほぼ同じ数値を示すことから、同じ間尺で設計されたと考えられ、実際の計測値は3.48m・3.48mの11.25尺・11.25尺と換算される。柱穴の配置に若干ずれがみられ、四隅が直交しない。桁

行とした柱列の全長が梁行の全長に比較して短いが、柱穴の配置状況や間尺のとり方、柱穴の規模から、南・北側柱列を桁行として記述した。

掘り方は、桁行柱列の柱穴は径0.5m～0.75m、深さ0.4m、梁行の柱穴は径0.3m～0.35m、深さ0.3mの規模をもち、平面形は円形や楕円形を示す。埋土は地山の褐色粘土粒が混入した黒色土が主体を占める。

6) 門 跡

西館から1箇所2基、東館で1箇所1基の合わせて3基検出された。西館の2基はそれぞれの間重複がみられる。

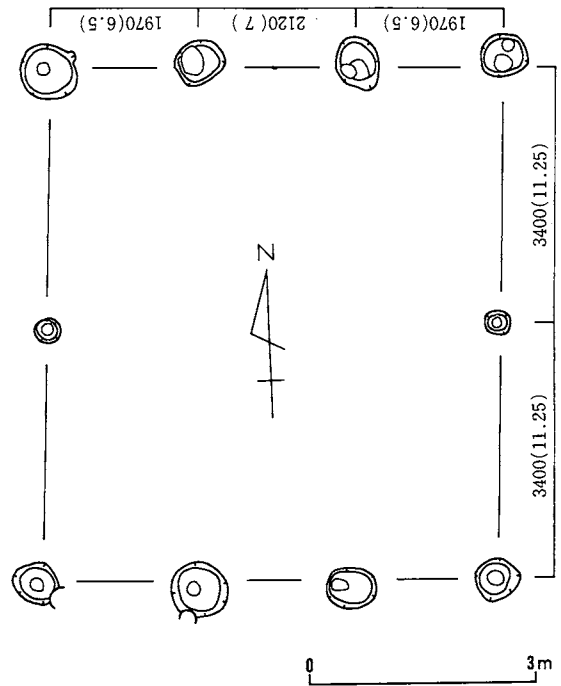
〈西 館〉

(1) CIV i 9 門跡—1 a (第81図—(1)、写真図版15)

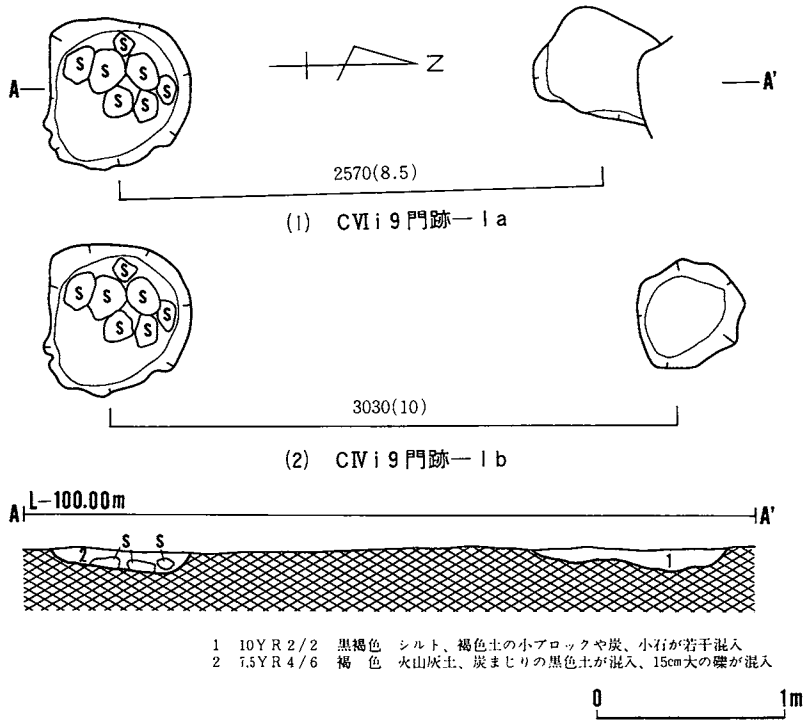
南端から32m、北端から30m、土橋の基部から西6mのグリッドCIV区に土橋の中軸線上の東側縁辺部に位置する。CIV i 9 門跡—1 bと重複し、CIV i 9 門跡—2の西側1mに棟方向を同じにして並列する。

遺構は長軸方向がN-1°-Wを示す芯々距離が2.57mの8.5尺で対峙する柱穴2口からなり、門の形式に沿えば棟門か冠木門と推定される。掘り方は南が径0.8m×0.75mで深さ0.1m、北が径0.55m×0.55m、深さ0.06～0.07mの規模をもち、平面形は南が楕円形、北は方形気味を示す。

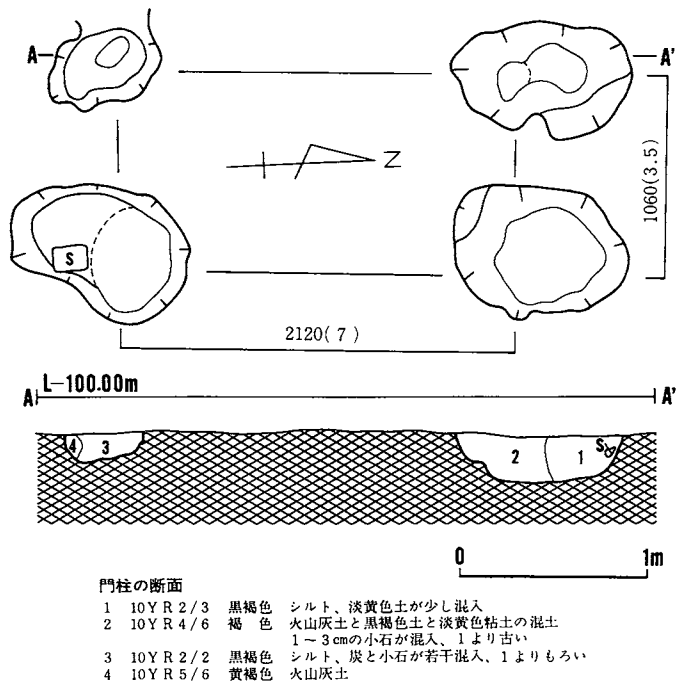
埋土は、南は径0.1m～0.2mの円礫が多量に混入する炭混じりの黒色土が混入した褐色土であるが、北は地山の褐色粘土の小塊が少量と径0.01～0.03mの細礫が混入した黒褐色土である。



第80図 (72) D VII b 7 建物跡



第81図 C IV i 9 門跡 1 a · 1 b



第82図 (3) C IV i 9 門跡-2 a

(2) CIV i 9門跡-1 b (第81図-(2)、写真図版15)

CIV i 9門跡-1 aと重複してほぼ同じ場所に位置し、CIV i 9門跡-2と同じ棟方向で並列する。

規模は芯々距離でCIV i 9門跡-1 aより僅かに大きい3.03mの10尺で、遺構は南と北に中軸線がほぼN-0°-Wを示して対峙する柱穴2口からなる。CIV i 9門跡-1 aとの新旧関係は、断定できる状況ではないが、本遺構の方が新しい可能性をもつ。

掘り方の規模や埋土は、南側・北側ともCIV i 9門跡-1 aと同じである。

(3) CIV i 9門跡-2 a (第82図、写真図版15)

南端から32m、北端から30m、土橋の基部から3mのグリッドCIV区に、土橋の中軸線の東側縁辺部に位置する。CIV i 9門跡-2 bと重複し、N-4°-Eの棟方向を示す。

遺構は南と北に対峙する柱穴4口からなり、南北2.12mの7尺、東西は1.06mの3.5尺の規模をもち、門の形成では薬医門と考えられる。

掘り方は径0.45m~0.65m、深さ0.15m~0.25mの規模をもち、平面形は円形や楕円形を示す。埋土は径0.005m~0.03mの礫が若干混入した黒褐色土や黄褐色土である。

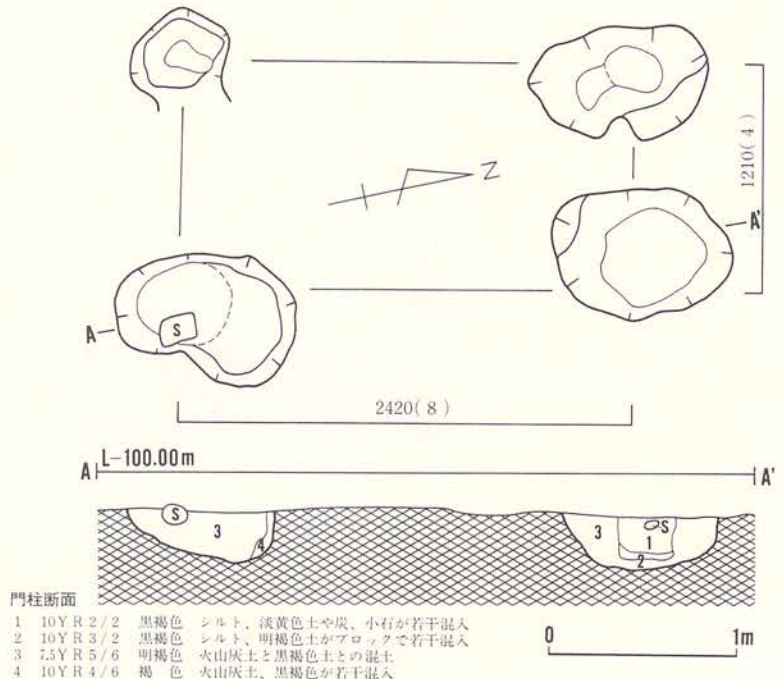
(4) CIV i 9門跡-2 b (第83図、写真図版15)

南端から32m、北端から30m、土橋の基部から3mのグリッドCIV区に、東側縁辺部の土橋の中軸線上に位置する。

棟方向がN-11°-Eを示し、CIV i 9門跡-2 aと重複する。

遺構は南北2.42m-8尺、東西1.21m-4尺の規模をもち、南北に対峙する4口の柱穴からなる。門の形式では薬医門と推定される。

掘り方の規模や埋土はCIV i 9門跡-2 aのそれと同じである。



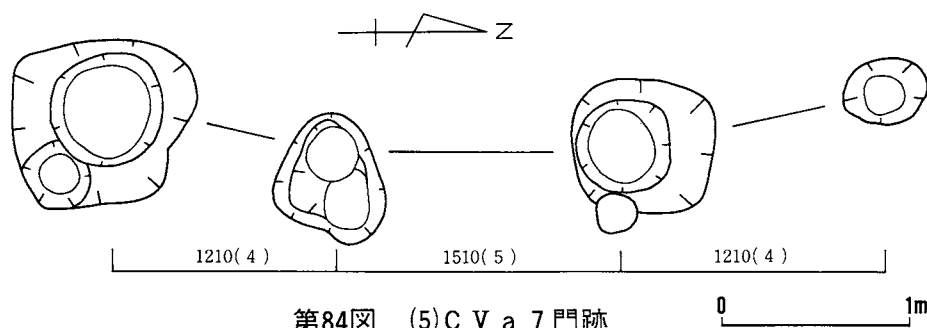
第83図 (4) CIV i 9門跡-2 b

〈東 館〉

(5) C V a 7 門跡 (第84図、写真図版16)

西端から3.5m、北端から7mのグリッドC V区に他遺構と重複することなく単独で位置する。本遺構は、中央に1.51m—5尺の距離で相対する2口の柱穴と、その柱穴から14°の角度で北西と南西に1.21m—4尺の場所に位置する柱穴2口からなり、柱列はN—0°—Wを示し、西辺と並行する。中央の2口が門柱、南・北両端の2口が控柱と推定されることから、門の形式では棟門か冠木門と考えられる。

掘り方は径0.45m~0.85m、深さ0.2m~0.4mの規模をもち、埋土は地山の褐色粘土粒が多量に混入した黒色土である。



第84図 (5)C V a 7 門跡

7) 柱 穴 列

西館に6条、東館に4条の10条が検出されている。これらの中には建物跡の一部かと考えられる例も含まれるが、対応する柱穴が不明であることから、柱穴列とした。

〈西 館〉

(1) C II f 10柱穴列 (第85図—(1))

遺構の西端が、西端から14m、北端から13mのグリッドC II区に位置し、C II c 10建物跡、C II d 10建物跡—1、C II d 10建物跡—2、C III b 1建物跡、C III d 1建物跡と重複する。

柱穴は、C III c 4建物跡の棟方向に並行するN—82°—Wの方向に直線的に配置され、西端から2.12m・1.82m・2.12m・2.12m・2.12m・2.12mの6間12.5mが東に延びており、これらは7尺・6尺・7尺・7尺・7尺・7尺に換算される。

掘り方は径0.35m~0.5m、深さ0.4m~0.5mの規模をもち、埋土は地山の褐色粘土粒が混在する黒色土である。

(2) C III c 7 柱穴列 (第85図一(2))

遺構の西端が、西端から30m、北端から12mのグリッドC III区にC IV c 5 建物跡と重複して位置する。

柱穴は、C III e 9 建物跡、C IV e 1 建物跡-1、C IV e 1 建物跡-2の北側にこれらの建物跡の棟方向に並行するN-83°-Wの方向に、西端から2.27m・3.18m・2.17m・1.51m・1.67m・1.82m・1.67m・1.97m・3.03m・2.41m・2.71m・2.27m・2.57m・2.27m・3.03mの15間34.5m延びており、これらの計測値は8.5尺・10.5尺・7尺・5尺・5.5尺・6尺・5.5尺・6.5尺・10尺・8尺・9尺・7.5尺・8.5尺・7.5尺・10尺に換算される。配列の状況は、東端から22mの付近で軽く北に湾曲して方向を変え、北端の縁辺部とほぼ並行させている。

掘り方は径0.2m~0.4m、深0.15m~0.2mの規模であるが、この付近は開田時の削平が著しいことから、本来はもっと深い柱穴と考えられる。埋土は黒色土である。

(3) C III h 9 柱穴列 (第85図一(3))

遺構の西端が、西端から42m、北端から24mのグリッドC III区にC III e 9 建物跡、C III j 7 建物跡、D III a 7 建物跡と重複して位置する。

柱穴はC III h 6 建物跡の西側に棟方向とほぼ同じN-9°-Eに直線的に配置され、北端から2.57m・2.42m・2.57m・2.87m・3.03m・2.87mの6間16.5mが延びており、これらの計測値を尺に換算すると8.5尺・8尺・8.5尺・9.5尺・10尺・9.5尺になる。

掘り方は径0.2m~0.4m、深さ0.15m~0.2mの規模であるが、開田時の削平を受けた部分であることから、本来は深さがもっとあったと推定される。埋土は黒色土である。

(4) D II d 7 柱穴列 (第85図一(4))

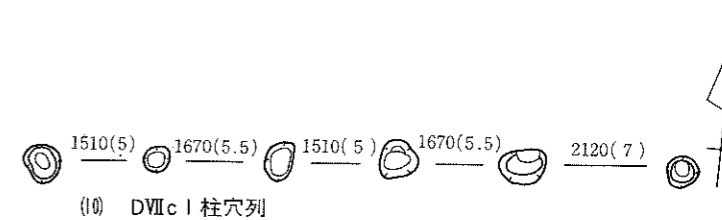
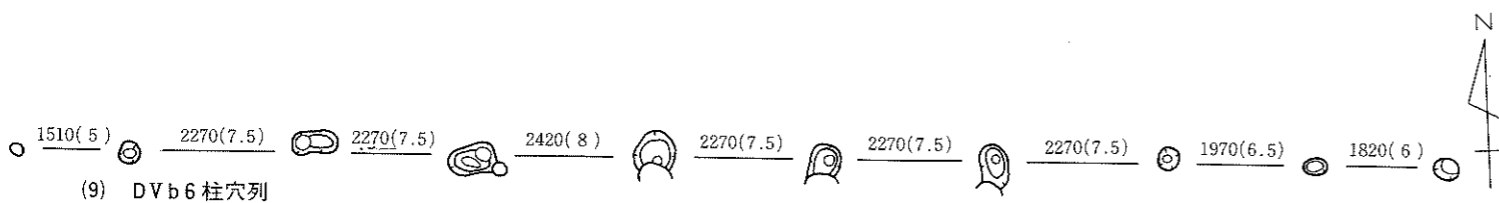
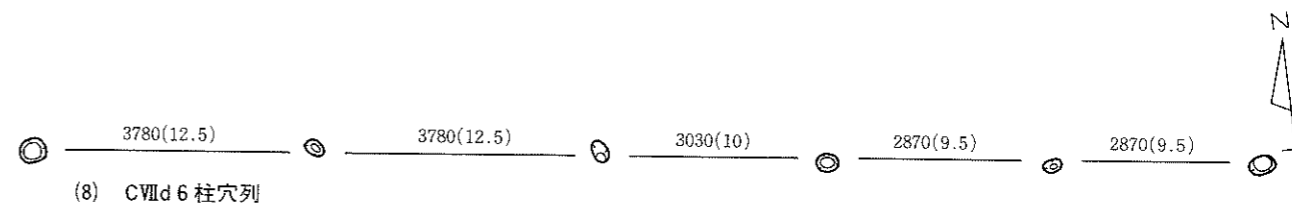
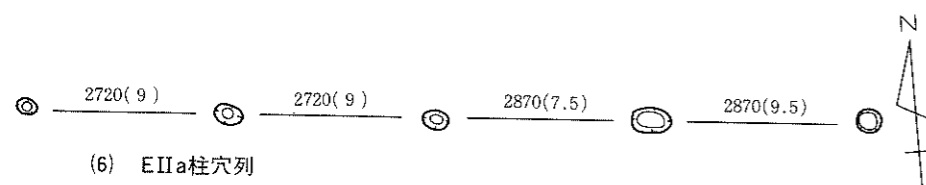
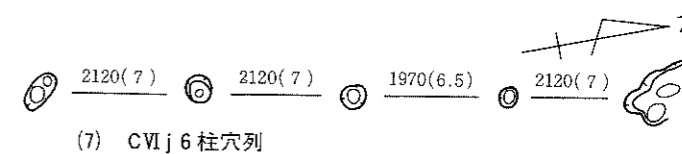
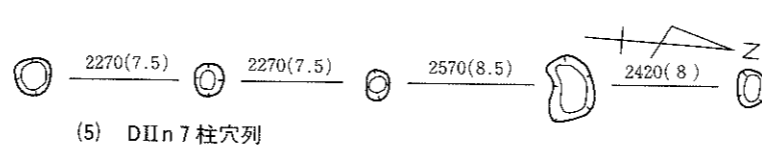
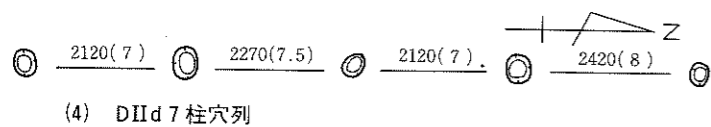
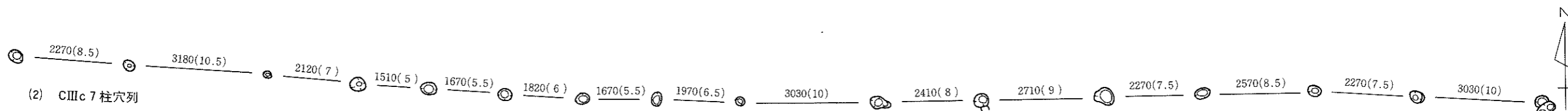
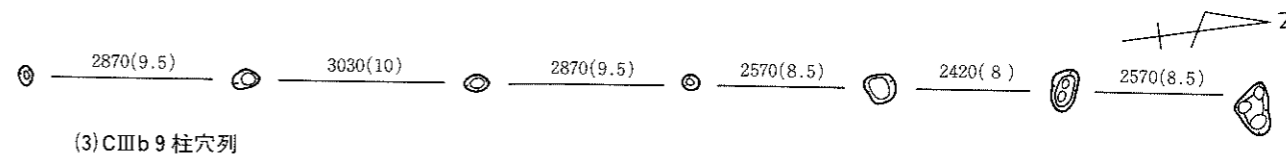
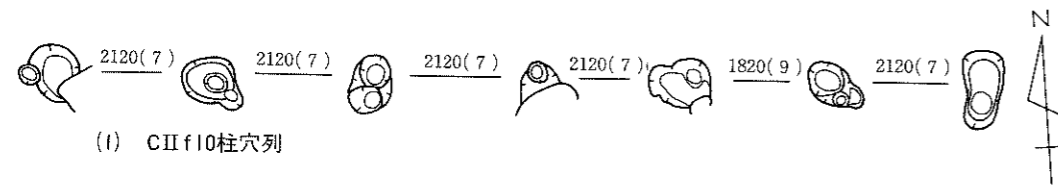
遺構の北端が、西端から10m、西端から50mのグリッドD II区にD II e 6 建物跡、D II h 7 柱穴列と重複して位置する。

柱穴はD II h 8 建物跡、D II i 8 建物跡の西側にD II i 8 建物跡の棟方向に並行するN-0°-Wの方向に、北端から2.42m・2.12m・2.27m・2.12mの4間9mが延びており、これらは8尺・7尺・7.5尺・7尺に換算される。柱穴は直線的に配置され、西側の縁辺部と並行する。

掘り方は径0.25m~0.35m、深さ0.3mの規模をもち、埋土は黒色土である。

(5) D II h 7 柱穴列 (第85図一(5))

遺構の北端が、西端から10m、北端から55mのグリッドD II区にD II d 7 柱穴列と重複して



第85图 柱穴列

位置する。

柱穴はD II h 8建物跡、D II i 8建物跡の西側にD II h 8建物跡の棟方向に並行するN-5°-Wの方向に、北端から2.42m・2.57m・2.27m・2.27mの4間11.25m延びており、これらの計測値は8尺・8.5尺・7.5尺・7.5尺に換算される。柱穴は直線的に配置され、西側の縁辺部と並行する。

掘り方は径0.3m～0.45m、深さ0.35mの規模をもち、埋土は黒色土である。

(6) E II a 6 柱穴列 (85図一(6))

遺構の西端が、西端から7m、北端から70mのグリッドE II区に他遺構と重複することなく単独で位置する。

柱穴はD II h 8建物跡・D II i 8建物跡の南側にD II i 8建物跡の棟方向に直交するN-84°-Wの方向に、西端から2.87m・2.87m・2.72m・2.72mの4間11.2m延びており、これらは9.5尺・9.5尺・9尺・9尺に換算される。西端縁辺部とは直交する方向を示す。

掘り方は径0.2m～0.35m、深さ0.25m～0.3mの規模をもち、埋土は地山の褐色粘土粒を混入する黒色土が主体をなす。

〈東 館〉

(7) C VI j 6 柱穴列 (第85図一(7))

遺構の北端が、西端から34m、北端から30mのグリッドC VI区にC VI f 4建物跡と重複して位置する。

柱穴は建物跡に並列するような配列ではなく、単独で位置する状況を示し、北端からN-82°-Wの方向に北端から2.12m・1.97m・2.12m・2.12mの4間8.33m延びており、これらの計測値は7尺・6.5尺・7尺・7尺に換算される。西側縁辺部とは並行し北側縁辺部とは直交する配列状況を示す。

掘り方は0.25m～0.35m、深さ0.3m位の規模をもち、埋土は地山の褐色粘土粒が混入した黒色土が主体をなす。

(8) C VII d 6 柱穴列 (第85図一(8))

遺構の西端が、西端から66m、北端から14mのグリッドC VII区にC VII e 3建物跡と重複して位置する。

柱穴はC VII f 6建物跡、C VII g 2建物跡、C VII g 9建物跡-1、C VII g 9建物跡-2の北側

に、N-82°-Wの方向に西から3.78m・3.78m・3.03m・2.87m・2.87mの5間16.3m延びており、これらは12.5尺・12.5尺・10尺・9.5尺・9.4尺に換算される。建物跡の棟方向と並行したり直交させる状況は示していないが、本柱列の北側には建物跡が確認されていないことが何んらかの意味をもつであろう。

掘り方は径0.2m～0.3m、深さ0.25m～0.3mの規模をもち、埋土は黒色土が主体をなす。

(9) DV b 6 柱穴列 (第85図—(9))

遺構の西端が、西端から4m、北端から40mのグリッドDV区にDV a 7建物跡、DV a 8建物跡、DV h 8建物跡と重複して位置する。

柱穴はCV j 6溝跡—1～4の南側にはほぼ並行するとともに土橋の中軸線とも並行関係を示すN-88°-Wの方向に、西から1.51m・2.27m・2.27m・2.42m・2.27m・2.27m・2.27m・1.95m・1.82mの9間19m延びており、これらの計測値を尺に換算すると5尺・7.5尺・7.5尺・8尺・7.5尺・7.5尺・7.5尺・6.5尺・6尺になる。配列状況を見ると、重複する建物跡とは関係なく、CV j 6溝跡—1～4に関連するような状況を示す。

掘り方は径0.25m～0.55m、深さ0.3m～0.35mの規模をもち、埋土は地山の褐色粘土粒を多量に混入する黒色土が主体をなす。

(10) DVII c 1 柱穴列 (第85図—(10))

遺構の西端が、西端から49m、北端から37mのグリッドDVII区にDVII a 1建物跡、DVII a 4建物跡、DVII b 1建物跡と重複して位置する。

柱穴は重複するDVII b 1建物跡の棟方向と同じN-97°-Wの方向に、西から1.51m・1.67m・1.51m・1.67m・2.12mの5間8.48m延びており、これらは5尺・5.5尺・5尺・5.5尺・7尺に換算される。

掘り方は径0.35m～0.5m、深さ0.35m位の規模をもち、埋土は黒色土が主体を占める。

8) 竪穴住居跡

西館から1棟、東館から2棟の合わせて3棟検出されたのみである。

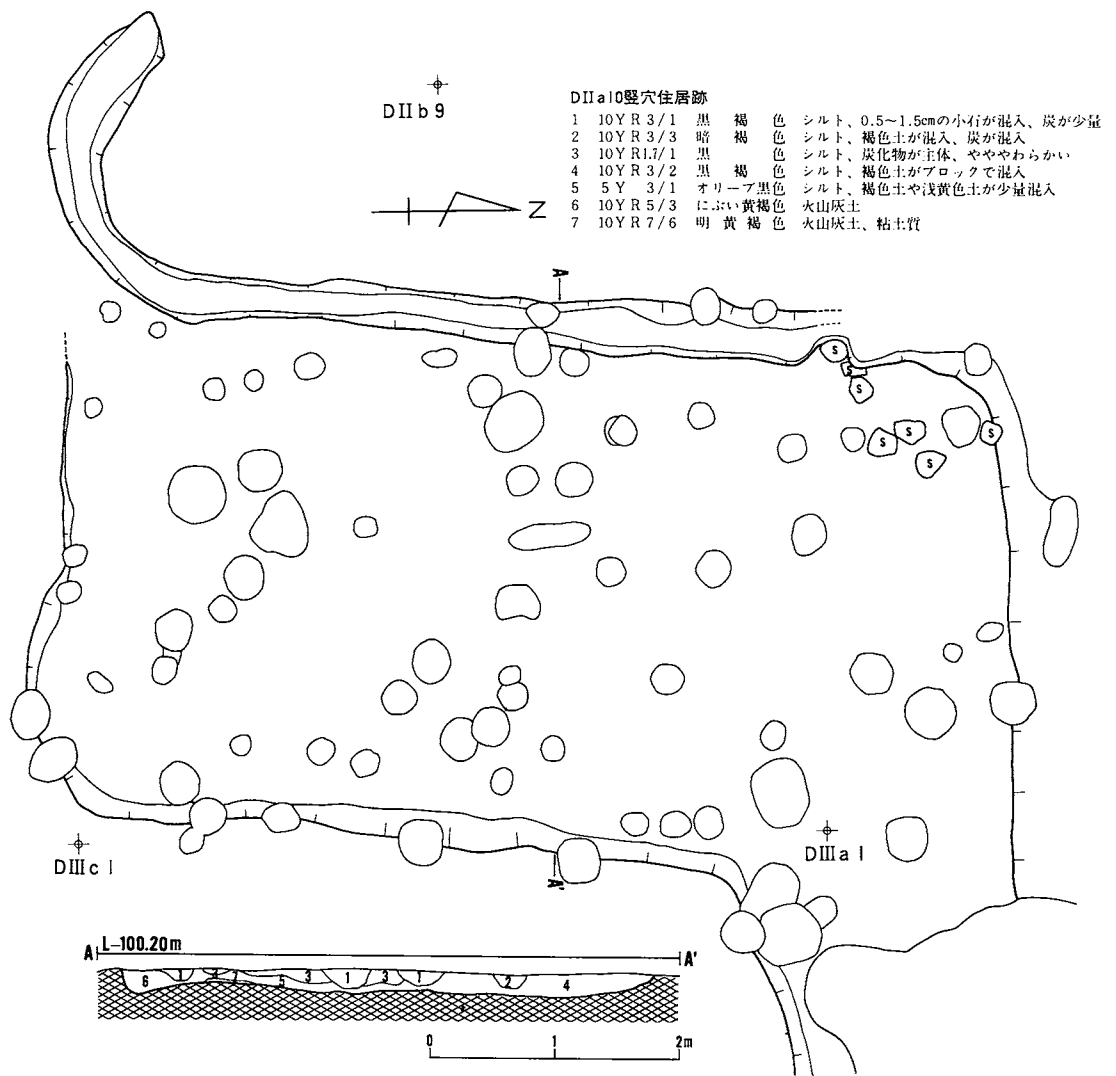
<西館>

(1) DII a 10竪穴住居跡 第86図、写真図版16B)

西端から15m、北端から35mのグリッドCII区・DII区にまたがり、CII j 8建物跡と重複

して位置する。遺存状況が悪く、北側と西側の壁は検出されないが、東側と南側の壁と東壁と並行する西側の壁溝状の溝から竪穴住居跡とした。

規模は東西が4.5m、南北は7.5m位、壁高はもっとも高い東壁で0.15m～0.1mの規模をもち、平面形は長軸がN-65°-Eを示し隅がやや丸味をもつ長方形である。壁は外傾しやや不規則な様想を示し、床面とは丸味をもって接続する。床面には僅かに凸凹がみられるものの全体的にはほぼ平坦で、固くしまる。炉跡はない。西壁に相当する位置に幅0.25m～0.5m、床面からの深さ0.05m～0.1mの溝が、北から南へ約5.5m続いた後、西へ径2.5mの半円状に湾曲する。床面内には62口の柱穴状土坑が検出されているものの、本住居跡との関連については明らかでない。これらの柱穴状土坑は、径0.17m～0.45m、深さ0.05m～0.3mの規模をもち、全体的に浅



第86図 (I) D II a 10 竪穴住居跡

い。平面形は円形や楕円形を示し、埋土は地山の褐色土粒が混入した黒色土である。

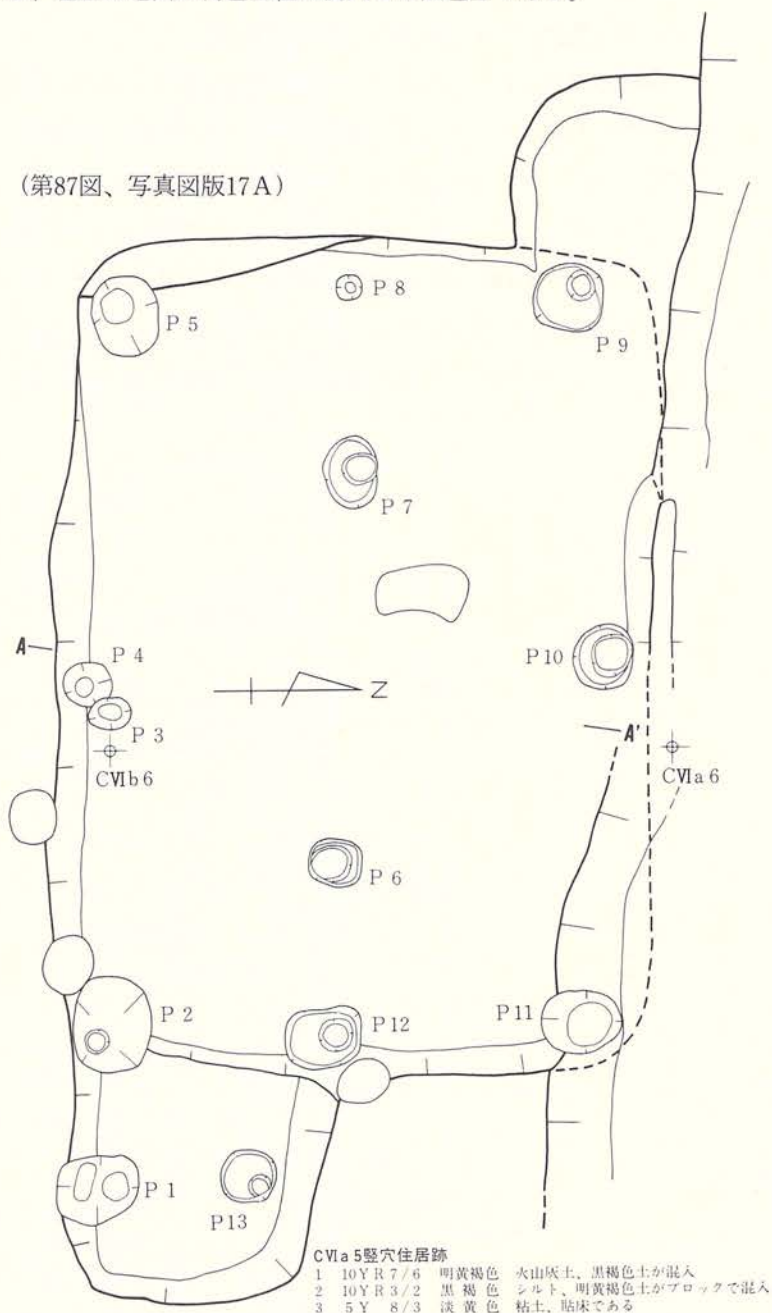
〈東 館〉

(2) C VI a 5 竪穴住居跡

(第87図、写真図版17A)

グリッドC VI区の西から28mで北側縁辺部にC VI a 4 土坑、C VI a 4 溝跡と重複して位置する。重複による新旧関係は、本住居跡がC VI a 5 土坑より古く、C VI a 4 溝跡より新しい。

規模は東西4.45m、南北3.15m、深さ0.25mで、平面形は長方形を示すが、東壁の南半分に、規模が東西1.35m、南北1.3mで床面が東から西に軽く傾斜し、隅が丸味をもつ方形の張り出し部をもつ。床面は若干の起伏をもつが、全体としてはほぼ平坦で固くしまる。炉跡と考えられる焼土は確認されていない。住居内部には各壁の壁際に11口と中軸線上の床面に2口の柱穴が検出されている。それらの柱穴は、P₁-0.44m×0.36m・深さ0.29m、P₂-0.52m×



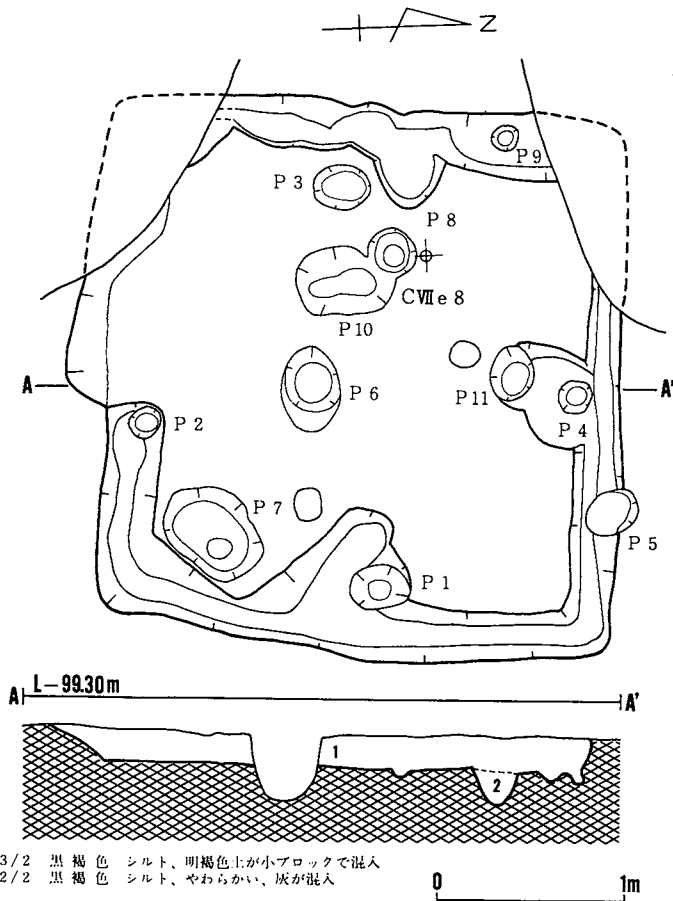
第87図 (2) C VI a 5 竪穴住居跡

0.40m・深さ0.23m、P₃—0.33m×0.17m・深さ0.24m、P₄—0.25m×0.25m・深さ0.47、P₅—0.43m×0.35m・深さ0.43m、P₆—0.28m×0.26m・深さ0.30m、P₇—0.38m×0.30m・深さ0.41m、P₈—0.12m×0.12m・深さ0.20m、P₉—0.38m×0.36m・深さ0.30m、P₁₀—0.35m×0.32m・深さ0.28m、P₁₁—0.45m×0.34m・深さ0.19m、P₁₂—0.40m×0.32m・深さ0.18m、P₁₃—0.30m×0.28m・深さ0.33mの規模をもち、平面形は円形や楕円形を示す。埋土は地山の褐色粘土粒や小塊が混入した黒色土である。

各柱列の柱間は、東側が南から1.21m・1.36mの4尺・4.5尺、西側は南から1.21m・1.21mの4尺・4尺、南側柱列は東から0.75m・1.88m・2.03mの2.5尺・6.2尺・6.7尺、北側柱列は東から1.97m・1.97mの6.5尺・6.5尺、中央柱列は東から0.91m・2.12m・0.91mの3尺・7尺・3尺の間尺と計測される。

(3) C VII d 7 竪穴住居跡 (第88図、写真図版17B)

西端から65m、北端から12mのグリッドC VII区にC VII d 7土坑、C VII e 7土坑、C VII e 8土坑、



第88図 (3) C VII d 7 竪穴住居跡

C VI a 4 溝跡と重複して位置し、重複遺構との新旧関係は土坑はいずれも新しく溝跡は古い。

規模は東西2.95m、南北2.75m、深さ0.20mで、平面形は方形を示す。埋土は明褐色土が小塊で混入した黒褐色土であるが、一部に灰の混入が観察される。床面は北に寄るほど低くなる傾向がみられるものの、大きな起伏もなくほぼ平坦である。南壁際の一部を除いた壁際の床面には幅0.15m～0.30m、深さ0.10mの壁溝が巡っている。住居内部から P₁—0.30m×0.25m・深さ0.25m、P₂—0.20m×0.17m・深さ0.20m、P₃—0.35m×?・深さ0.13m、P₄—0.17m×0.17m・深さ0.32m、P₅—0.30m×0.22m・深さ0.25m、P₆—0.33m×0.30m・深さ0.22m、P₇—0.60m×0.40m・深さ0.12m、P₈—0.30m×0.25m・深さ0.03m、P₉—0.15m×0.15m・深さ0.05m、P₁₀—0.50m×0.37m・深さ0.10m、P₁₁—0.27m×0.25m・深さ0.10mの柱穴状土坑が検出されているものの、位置や規模から考えて P₁・P₂・P₃・P₄ が本住居跡の支柱穴をなすと推定され、他に P₈ は間柱になる可能性がある。P₁—P₃ と P₂—P₄ の長さがともに2.12mの7尺を示す。P₁・P₃ はともに北側の壁溝から1.06mの3.5尺に位置し結んだ線の中軸線とすると、南壁・北壁とも中軸線に並行する。同様に P₂・P₄ の位置をみると、P₂ は東壁から1m、P₄ は東壁から1.4mと差がみられ、P₄ と P₆ を結んだ線が中軸線に直交する。

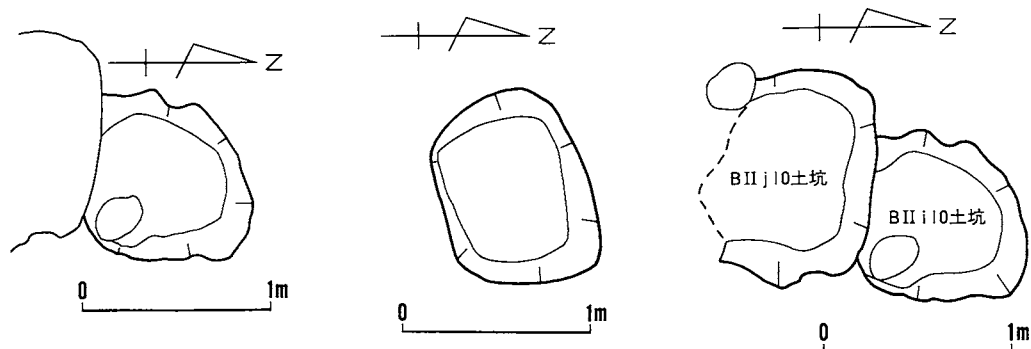
床面から炉跡や焼土は検出されていない。

9 土 坑

本遺跡から検出された遺構では、柱穴状土坑に次いで数が多く、西館92基、東館101基が検出されている。時代的には縄文・平安・中世の各時代に属する例を含むが、縄文時代の土坑は所謂陥し穴状遺構がほとんどで一般的な貯蔵穴状の土坑は数も少なく、埋土によって識別が可能であった。平安時代の土坑は、遺構だけではなく遺跡全体から土師器や須恵器の完形品や破片が多く出土し、この状況は中世の土坑も例外ではなかったことから識別が非常に困難であったが、完形品の出土や埋土の違いによって区別した。以上の状況で判断できなかった土坑は一応中世の中を含めたが、井戸跡は別項にした。

〈西 館〉

検出された92基は、中央部に少なく周辺部に偏在する傾向がみられる。特に、南側の中央、西側、北側と、西辺から東方に延びる低地部分に密である。しかし、既述のとおり、東によるほど開田時の削平が強いことから、浅い土坑は残っていない可能性も考えられることから、本来はもっと多くの土坑が存在したことは確実であろう。



第89図 (1) B II i 10土坑 第90図 (2) B II j 9土坑 第91図 (3) B II j 10土坑

(1) B II i 10土坑 (第89図)

北西端に位置し、B II j 9塚の下位に検出された。B II j 10土坑と重複するが新旧関係は不明である。開口部径推定1m×0.85m、底部径0.7m×0.65m、深さ0.13mの規模をもち、平面形は不整な楕円形で、浅い皿状の断面形を示し、長軸方向をN-16°-Eにもつ。底面は平坦で東側に柱穴があり、壁は緩やかに立ち上がる。埋土は黒褐色であったが精査はしていない。

出土遺物は、直接の共伴ではないがこの付近から須恵器の破片(第368図1~5)が出土している。器種は1と3が瓶か壺の頸部下端から肩部、2は大甕か大壺の口縁部、4は内外両面に並行文をもつ大甕の体部、5は坏の口縁部~体部の破片である。

(2) B II j 9土坑 (第90図、写真図版18)

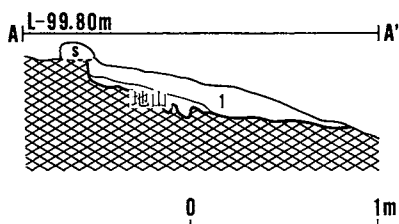
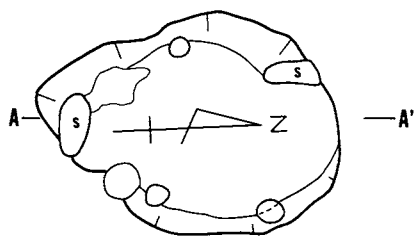
北西端に位置し、B II j 9塚の下位に検出された。南壁は落ち込み遺構によって削平を受けている。開口部径1m×0.75m、底部径0.75m×0.6m、深さ0.6mの規模をもち、平面形はやや不整な長方形で、ピーカー形の断面形を示し、長軸方向はN-73°-Eである。底面は中央でやや低くなるがほぼ平坦で、壁は垂直に近い立ち上がりである。埋土は精査できなかったが、黄褐色土混じりの黒褐色土である。

出土遺物はない。

(3) B II j 10土坑 (第91図)

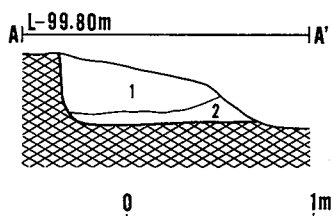
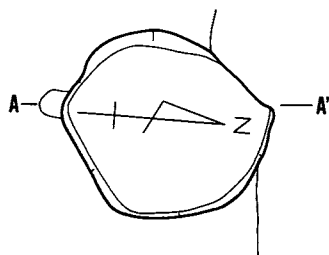
北西隅に位置し、B II j 9塚の下位に検出された。B II i 10土坑と重複するが新旧関係は不明である。南壁は落ち込み遺構と重複し不明である。開口部径0.80m、深さ0.26mの規模をもち、平面形は不整な楕円形と推定され、断面形は浅いピーカー形を示し、長軸方向はN-90°-Wである。底面は平坦をなし、副穴はない。埋土は黒褐色である。

出土遺物はない。



BIV j 3 土坑
1 10YR 2/3 黒褐色 シルト、小石を混入

第92図 (4) B IV j 3 土坑



BIV j 5 土坑
1 10YR 3/4 暗褐色 シルト、かたい
2 10YR 2/2 黒褐色 シルト、炭が混入

第93図 (5) B IV j 5 土坑

(4) B IV j 3 土坑 (第92図、写真図版10)

北端に位置し、外堀に向って低くなる傾斜地に立地する。開口部径1.6m×1.2m、底部径1.3m×0.9m、深さ0.15mの規模をもち、平面形は長軸をN-2°-Eにもつやや不整な楕円形で、浅い皿形の断面形を示す。底面は斜面に沿って0.2mほど傾斜し、径0.05m~0.1m、深さ0.05m位の小穴が多くある。壁の立ち上がりは緩やかで、北側は消失している。埋土は砂や礫を多く含む黒褐色土である。

出土遺物はない。

(5) B IV j 5 土坑 (第93図、写真図版18)

北東部の外堀へ向って低くなる縁辺部に位置し、北側の壁を消失する。開口部径1m、底部径0.85m、深さ0.3mの規模をもち、平面形は不整な円形で、北側は不明であるが断面形は浅いビーカー形を示す。底面は平坦で壁の立ち上がりは垂直に近く、北寄りの底面に径0.1m、深さ0.05mの小穴がある。埋土は暗褐色と黒褐色の2層に分けられ、下位には炭化物が混入する。

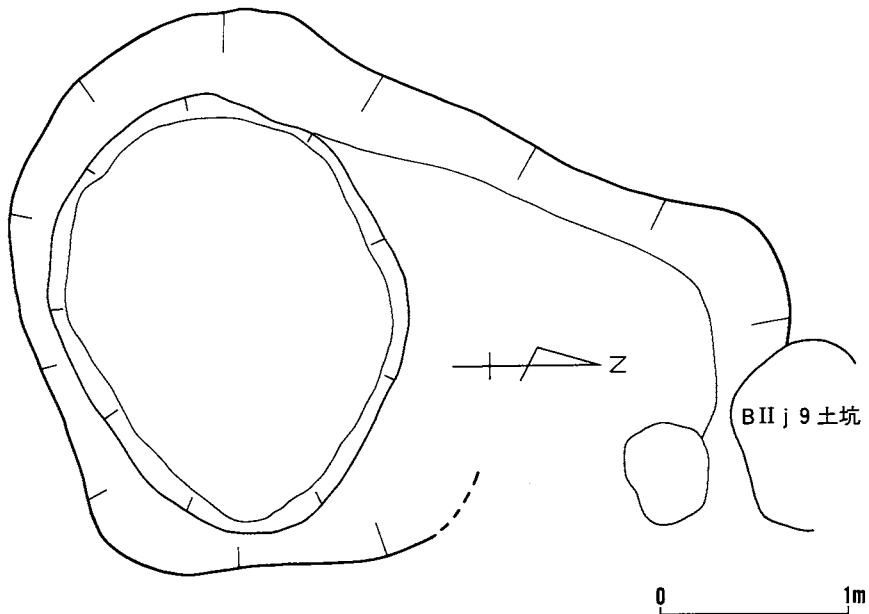
遺物の出土はない。

(6) C II a 9 土坑 (第94図)

北西端に位置し、落ち込み遺構の一部として検出された。落ち込み遺構の下位で底部が確認されたため、上半部の形状は北半分が不明となっている。開口部径3m、底部径2.1m×1.7m、深さ0.5mの規模をもち、平面形は長軸方向をN-88°-Eに示す楕円形で、断面形は皿形を示

す。底面は緩やかに湾曲し、壁の立ち上がりは不明確で、副穴等はない。埋土は上・中層は黒褐色を主体に、黄褐色土や焼土が塊状に混入し、不層は灰黄褐色粘土質土である。

出土遺物には、直接の共伴ではないが、付近の落ち込み遺構から須恵器の破片(第368図7～9)、石硯(第334図1)がある。須恵器は、7・8は甕の体部下端から底部の一部を残存し、9は甕の体部破片である。石硯は、海部の縁辺部のみを残存し、縦は不明であるが横6.4cm、厚さ2cmの大きさで、石質は粘板岩である。



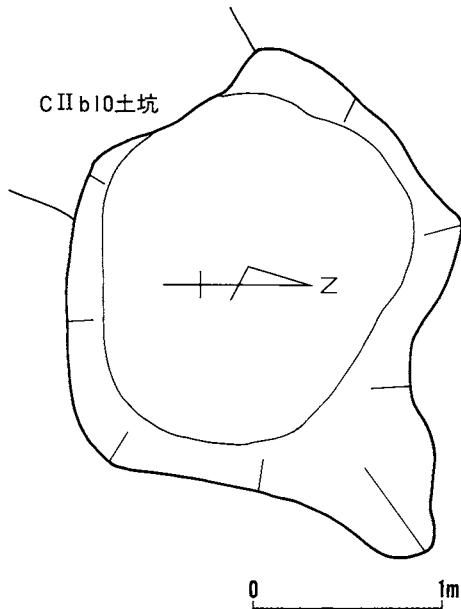
第94図 (6) C II a 9 土坑

(7) C II a 10土坑 (第95図)

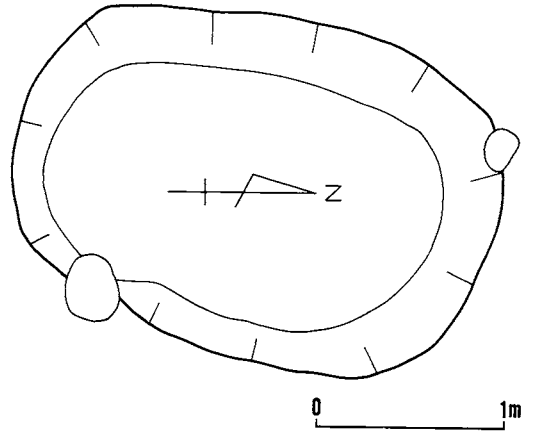
北西部にC II b 10土坑と重複して位置するが、新旧関係は不明である。開口部径2.3m×1.9m、底部径1.85m×1.6m、深さ0.1mの規模をもち、平面形は不整な円形で、断面形は浅い皿形を示す。底面は緩やかに湾曲し、壁の立ち上がりは明確でない。底面には径0.2m前後の円礫が多くみられるが、副穴はない。埋土は炭化物混じりの黒褐色土と下層の灰黄褐色粘土質土からなる。遺物の出土はない。

(8) C II b 8土坑 (第96図、写真図版18)

北西部に位置し、落ち込み遺構の下位に検出された。遺構の上位部分は不明で底部のみを残



第95図 (7) C II a 10土坑



第96図 (8) C II b 8土坑

存する。開口部径2.6m×1.8m、底部径2.1m×1.3m、深さ0.15mの規模をもち、平面形は長軸方向をN-10°-Eにもつ楕円形で、断面形は皿形である。底面は平坦で、壁の立ち上がりは緩やかである。埋土は黄褐色の地山粘土が混在する黒色土である。

遺物の出土はない。

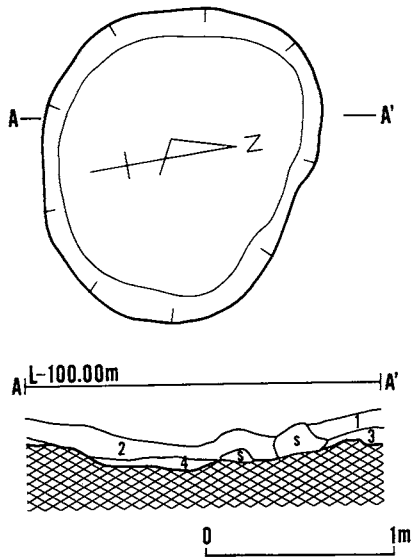
(9) C II b 9土坑 (第97図、写真図版18)

北西に位置し、落ち込み遺構の下位に検出され、C II b 10土坑と隣接し底部のみを残存する。開口部径1.7m×1.4m、底部径1.4m×1.15m、深さ0.12mの規模をもち、平面形は長軸方向をN-55°-Wにもつ不整な楕円形で、断面形は皿形を示す。底面はやや凸凹があり、径0.2m~0.3m大の礫が6個散在する。壁の立ち上がりは緩やかである。埋土は明黄褐色と浅黄色の粘土質土である。

出土遺物はない。

(10) C II b 10土坑 (第98図、写真図版18)

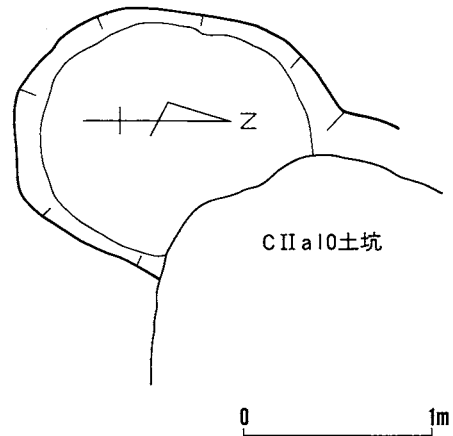
北西部にC II a 10土坑と重複して位置するが、新旧関係は不明である。落ち込み遺構の下位に検出され、底部のみが残存する。開口部径1.25m、底部径1.1m、深さ0.12mの規模をもち、



C II b 9 土坑

- 1 10Y R 2/1 黒色 淡黄色粘土ブロック少量混入
- 2 7.5Y R 5/6 明褐色 粘土質、乾燥してかない
- 3 10Y R 3/2 黒褐色 シルト、かたくしまり、淡黄色粘土少量混入
- 4 2.5Y R 7/4 浅黄色 粘土質、大きいブロックとして混入

第97図 (9)C II b 9 土坑



第98図 (10)C II b 10 土坑

平面形は不整な円形で、皿形の断面形を示す。底面は平坦で径0.2m~0.3m大の礫が4個あり、壁は緩やかに立ち上がる。埋土は地山の褐色粘土が混入した黒色土である。

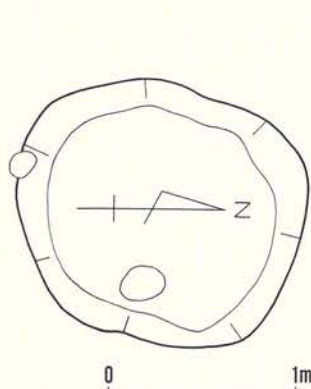
遺物の出土はない。

(11) C II c 8 土坑 (第99図、写真図版18)

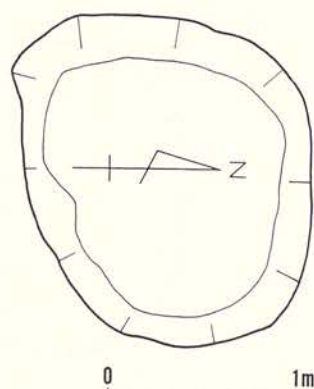
北西部に位置し、落ち込み遺構の下位からC II b 8 土坑に隣接して検出されたが、底部のみが残存する。開口部径1.55m×1.35m、底部径1.2m×1.05m、深さ0.1mの規模をもち、平面形は若干不整な円形で、断面形は皿形を示す。底面は平坦であるが上位からの柱穴状土坑が2箇所見られ、壁は緩やかに立ち上がる。埋土は褐色の地山粘土塊が混在する黒色土である。

出土遺物には土師器坏1点、同甕4点、須恵器坏1点、同甕3点、青磁1点、縄文土器1点、縄文石器2点がある。土師器は図化不能であるが、坏はロクロ成形された非内面黒色処理の口縁部破片で、甕はロクロ成形の後器表を縦方向のヘラ削り調整が入る体部破片である。須恵器(第368図 12・13・23)は、坏(12)が口径13.8cm位と推定される端反する口縁部の破片で

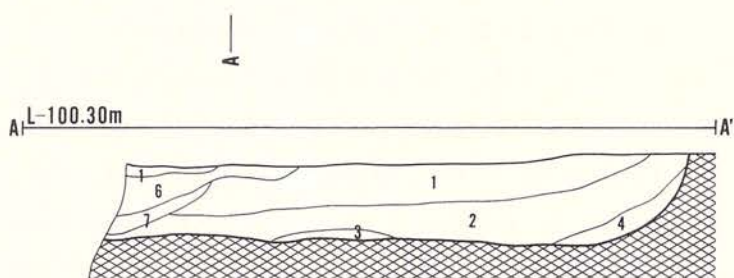
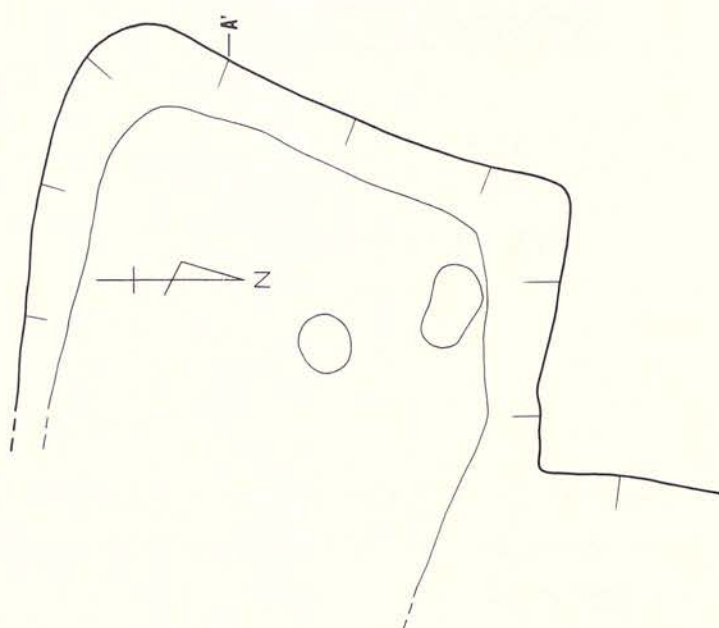
ある。甕は13が器表にヘラ削り調整の入る体部破片で、23は、口径14.9cm位と推定される口縁部破片である。青磁（第316図20）は、器表に不明瞭な鎬蓮弁文の入る碗の口縁部破片である。胎土は白色で、釉は深緑色を示す。14世紀前半頃の製品と推定される。



第99図 (11)C II c 8 土坑



第100図 (12)C II d 8 土坑



C II e 7 土坑

- | | | | |
|---|------------|-----|----------------------|
| 1 | 10Y R 2/3 | 黒褐色 | シルト、明褐色粘土が水平に混入、かたい |
| 2 | 7.5Y R 3/2 | 黒褐色 | シルト、炭が混入、1より極端にやわらかい |
| 3 | 2.5Y 7/4 | 浅黄色 | 粘土と明黄褐色粘土との混土 |
| 4 | 7.5Y R 4/6 | 褐色 | 粘土質土、やわらかい |

第101図 (13)C II e 7 土坑

(12) C II d 8 土坑 (第100図、写真図版18)

北西部に位置し、落ち込み遺構の下位に底部のみが残存して検出された。開口部径1.95m×1.6m、底部径1.5m×1.25m、深さ0.1mの規模をもち、平面形は長軸方向がN-65°-Eを示す不整な楕円形で、断面形は皿形を示す。底面は平坦で壁は緩やかに立ち上がる。埋土は地山の褐色土粒が混入する黒色土である。

遺物の出土はない。

(13) C II e 7 土坑 (第101図、写真図版19)

北西部に位置し、C II d 8 井戸と落ち込み遺構と重複するため東壁の状況は不明であるが、井戸より本土坑が古い。開口部径2.8m、底部径2.2m、深さ0.45mの規模をもち、平面形は方形と推定され、断面形は鍋底形を示す。底面は平坦で、上位からと思われる柱穴状土坑が2箇所検出されている。埋土は4層に分けられ、黒褐色土が主体で下層には浅黄色と褐色の粘土質土が混入し、レンズ状推積を示すことから自然埋没の可能性がある。

出土遺物には土師器甕の図化不能の破片が1点ある。ロクロ成形と考えられ、器表に縦方向のヘラ削り調整が入る。

(14) C II f 7 土坑 (第102図、写真図版19)

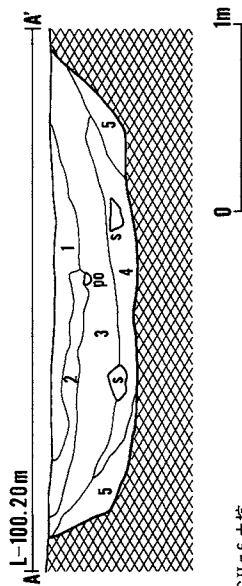
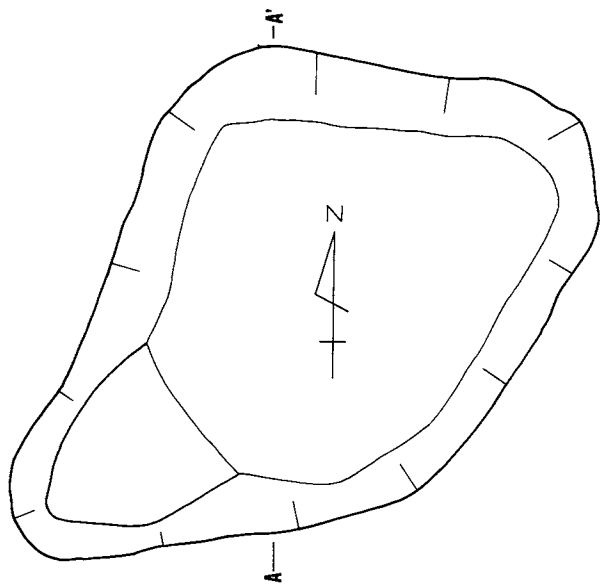
北西の西端に近い付近に位置し、東側で落ち込み遺構と重複のため、東壁は不明である。開口部径3.75m、底部径3.3m、深さ0.3mの規模をもち、平面形は隅丸方形と推定され、皿形の断面形を示す。底面は平坦であるが、東に向ってやや低くなり、その高低差は0.15m程である。中央に径0.85m、深さ0.3mの円形を示す小土坑がある他、西側には0.05m～0.15mの深さをもち柱穴状の凹みが検出されている。埋土は黒色土が主体をなす。

遺物の出土はない。

(15) C II g 6 土坑 (第103図、写真図版19)

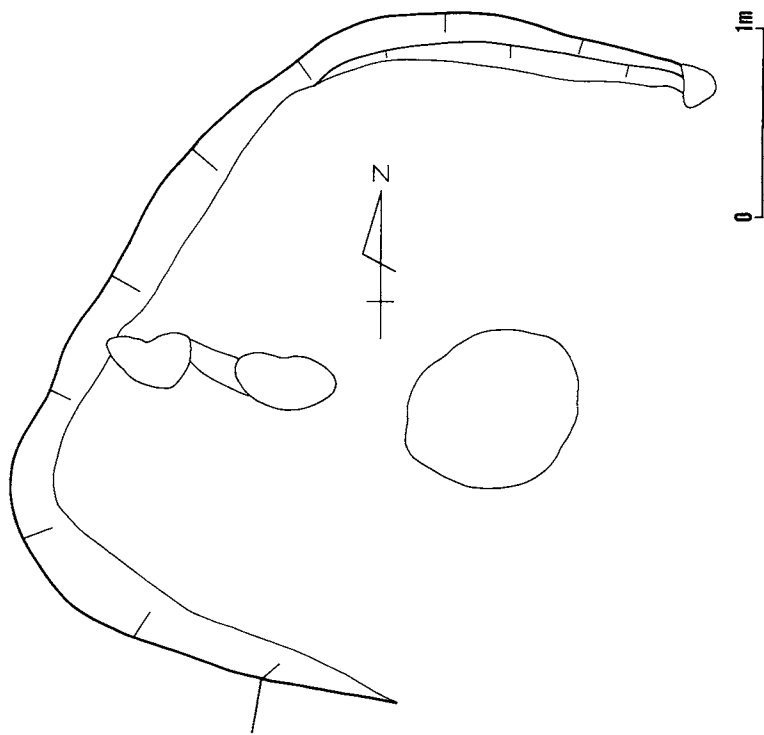
北西部寄りの西端にC II g 7 周溝遺構と重複して位置するが、新旧関係は不明である。開口部径3m×2.4m、底部径1.95m×1.8m、深さ0.4mの規模をもち、平面形はやや不整な三角形状をなし、断面形は鍋底形を示す。底面は平坦であるが、南西隅部分は張り出した形で西壁まで緩やかに傾斜し、低くなり、副穴はない。壁の立ち上がりは緩やかである。埋土は黒褐色土が主体をなすが、5層に細分される。全体に炭化物の混入が多く、上～中層はやや硬く、下層は軟らかい。各層がレンズ状の推積を示すことから、自然埋没の可能性がある。

出土遺物には須恵器の甕2点、瓶1点、瀬戸・美濃系の灰釉陶器2点の破片がある。須恵器



- C II g 6 土坑
- 1 10Y R 2/3 シルト、炭化物が微量に混入
 - 2 10Y R 3/2 シルトと黒色土との互層
 - 3 10Y R 2/3 シルト、1より多く炭化物が混入
 - 4 10Y R 2/2 シルト、ややなにかい、炭化物が混入
 - 5 7.5Y R 5/6 明褐色 火山灰土、障の崩落土

第103図 (15)C II g 6 土坑

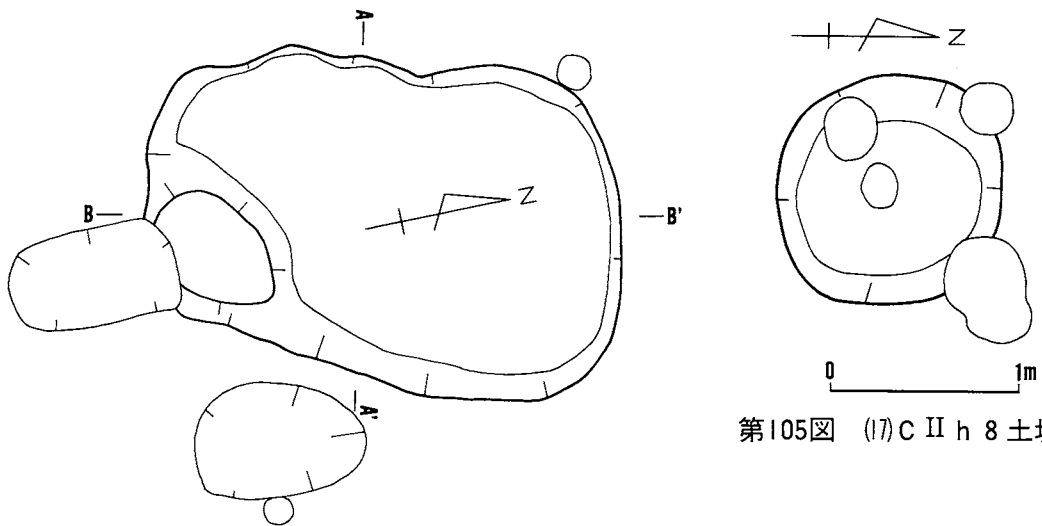


第102図 (14)C II f 7 土坑

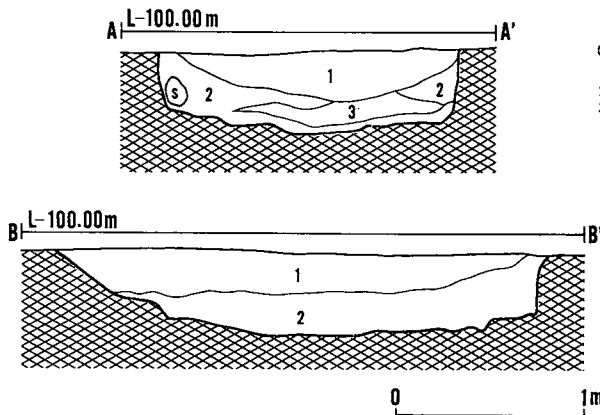
(第377図199・200)は大甕の体部破片で、器表に斜格子文、裏面に青海波文をもつ。瓶はロクロ成形された小破片で、図化不能である。瀬戸・美濃系灰釉陶器(第311図50)は古瀬戸期の合子の蓋で、15世紀前半頃の製品と考えられる。

(16) C II g 8 土坑 (第104図、写真図版19)

西端に位置し、新旧関係は不明であるが、C II g 7 周溝遺構と重複して落ち込み遺構の下位から検出された。開口部径2.6m×1.7m、底部径2.4m×1.4m、深さ0.45mの規模をもち、平面形は長軸方向をN-25°-Eに示すやや不整な楕円形で、断面形は鍋底形をなす。底面は平坦であるが、南側に0.15m~0.2m高くなった部分があり、その南側に径0.90m×0.50m、深さ0.20mの小土坑が接している。壁は垂直に近い立ち上がりであるが、南壁はスロープ状に緩やかな



第105図 (17) C II h 8 土坑



C II g 8 土坑

- 1 10Y R 3/3 暗褐色 シルト、かたい
- 2 10Y R 1.7/1 黒色 シルト、炭化物が混入
- 3 7.5Y R 5/6 明褐色 火山灰土

第104図 (16) C II g 8 土坑

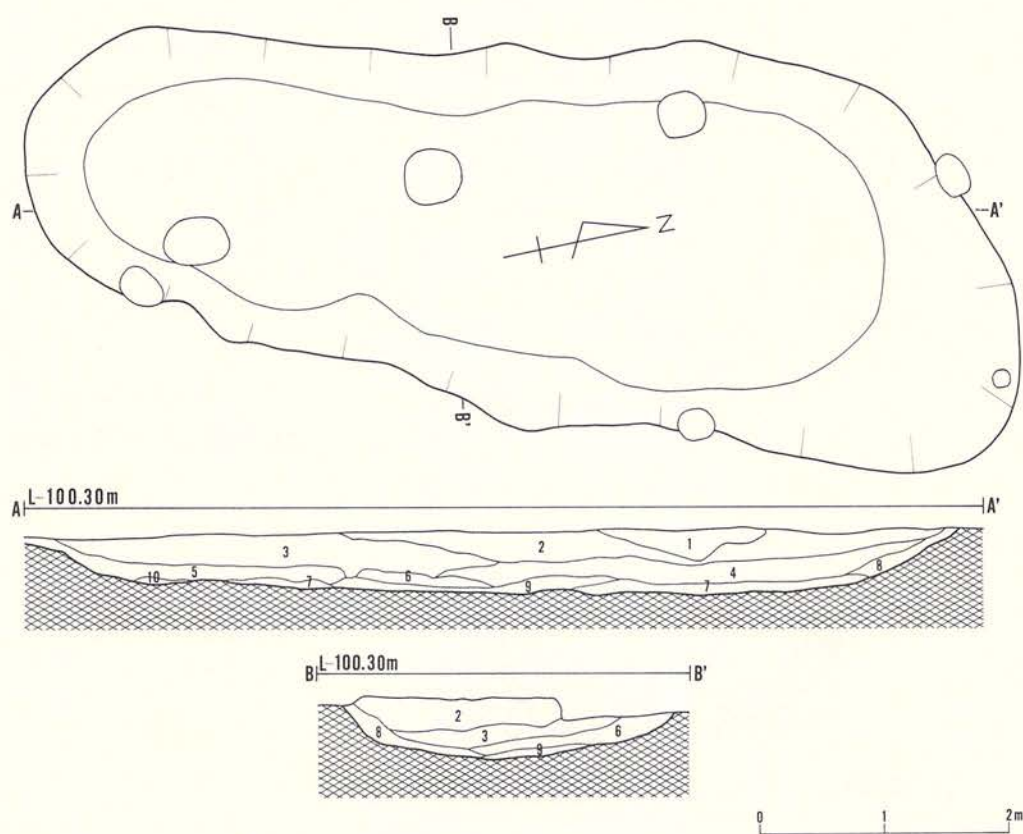
傾斜を示す。埋土は、暗褐色土、黒色土、明褐色粘土質土の3層で構成され、下層には炭化物が混入する。各層がレンズ状や水平な推積状況を示すことから、自然埋没の可能性がある。

遺物の出土はない。

(17) C II h 8 土坑 (第105図)

西側に位置し、C II h 8 周溝遺構と隣接し底部のみが残存する形で、落ち込み遺構の下位から検出された。開口部径1.2m×1.2m、底部径0.95m×0.8m、深さ0.1mの規模をもち、平面形は円形で皿形の断面形を示す。上位からと考えられる柱穴状土坑が4箇所にみられる。底面は平坦で、壁の立ち上がりは緩やかである。埋土は黒色土を主体とする。

出土遺物はない。



第106図 (18) C II i 6 土坑

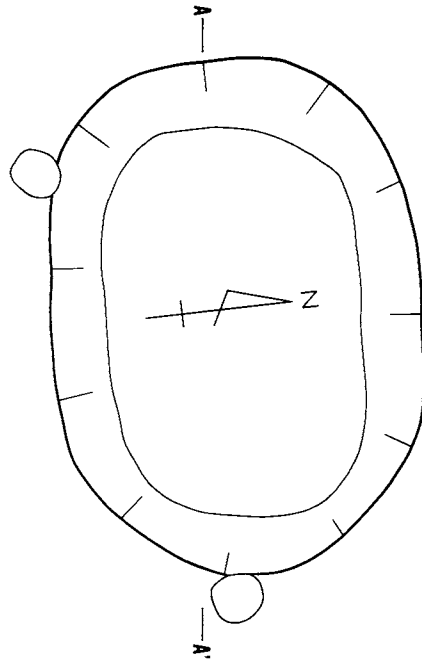
C II i 6 土坑

1	10Y R 2/2	黒褐色	シルト、明褐色土がブロック状に混入、炭入る	6	10Y R 2/2	黒褐色	シルト、5に近いがやわらかい。
2	10Y R 3/2	黒褐色	シルト、明褐色土が1より多く混入、炭入る	7	10Y R 3/1	黒褐色	粘土
3	10Y R 3/2	黒褐色	シルト、明褐色土が2より多く混入、炭入る	8	10Y R 3/3	暗褐色	火山灰土の崩落土
4	10Y R 2/2	黒褐色	シルト、粘性あり、鉄分が混入、炭入る	9	10Y R 6/6	明黄褐色	浅黄色粘土質土を主体
5	10Y R 2/2	黒褐色	シルト、明褐色土がブロック状に混入	10	2.5Y 7/4	浅黄色	粘土質土

(18) C II i 6 土坑 (第106図、写真図版19)

西端に位置し、新旧関係は不明であるが、C II h 7 周溝遺構と重複する。開口部径8.2m×3m、底部径6.5m×2.3m、深さ0.5mの規模をもち、平面形は北半部が幅広となり長軸方向をN-20°-Eにもつ不整な楕円形を示し、断面形は鍋底形である。底面は平坦で壁の立ち上がりは緩やかである。柱穴が若干検出されたが、当土坑に伴わず上位からの柱穴と考えられる。埋土は10層に分けられるが、明褐色土が混入した黒褐色土が大部分を占め、上～中層は硬くしまり炭化物の混入がみられる。下層部分は明黄褐色土や浅黄色粘土の混じり合った汚れた土であることから、人為的に埋め戻したと推定される。

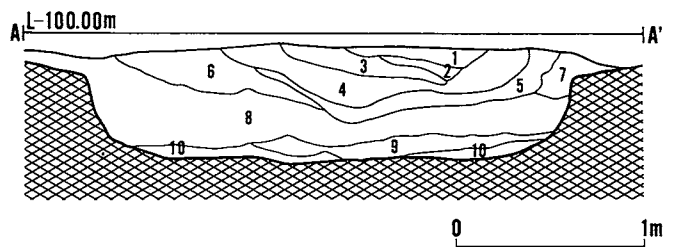
出土遺物はない。



(19) C II i 7 土坑

(第107図、写真図版19)

西端部に位置し、新旧関係は不明であるがC II j 7 周溝遺構と重複して、落ち込み遺構の下位から検出された。開口部径2.7m、底部径2.1m×1.35m、深さ0.65mの規模をもち、平面形は中軸方向をN-90°-Eにもつ楕円形で、鍋底形の断面形を示す。底面は平坦で壁は垂直に近い立ち上りを示し、副穴はない。埋土は黒褐色土が主体を占めるが、10層に細分され、黒褐色土に灰白色粘土や浅黄色～灰



第107図 (19)C II i 7 土坑

C II i 土坑

1	10Y R 3/1	黒褐色	シルト、浅黄色火山灰土が混入、小石や炭混入
2	10Y R 1.7/1	黒褐色	シルト、炭が微量混入
3	10Y R 4/1	褐灰色	粘土
4	2.5Y R 3/1	黒褐色	シルト、灰白色粘土質土が混入
5	10Y R 1.7/1	黒褐色	シルト、2に同じ
6	10Y R 3/2	黒褐色	シルト、明褐色土や灰白色土が多く混入
7	7.5Y R 5/6	明褐色	火山灰土
8	10Y R 2/1	黒褐色	シルト、浅黄色や灰オリーブ色粘土が混入
9	2.5Y 2/1	黒褐色	シルト、下部に植物をしいた層あり(厚さ2~3cm)
10	10G Y 7/1	明緑灰色	地山上部が水をすった部分

オリーブ色粘土が多く混入し、下層の9層には腐植した植物の敷きつめられた状況がみられた。各層はレンズ状や水平な堆積を示すことから、自然埋没の可能性がある。

遺物として炭化した米粒や小豆（第19表1・2）が出土している。

(20) C III a 2 土坑—1 (第108図、写真図版20)

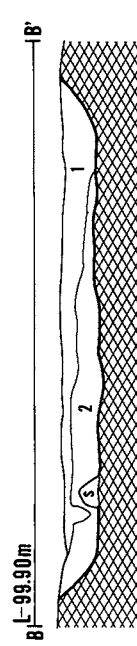
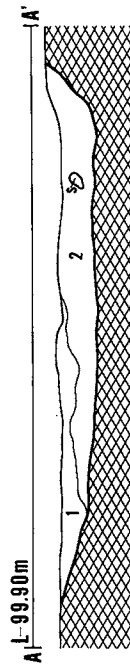
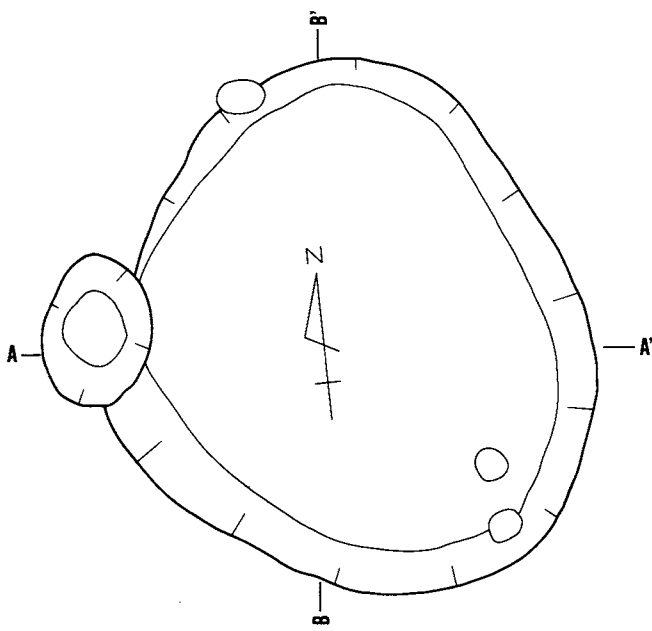
北西に位置し、新旧関係は不明であるがC III a 3 土坑と重複する。落ち込み遺構の東側に隣接するため、壁の境が明確でない。開口部の南北径3.1m、底部径2.1m×2m、深さ0.25mの規模をもち、平面形はほぼ円形で断面形は皿形を示す。底面は中央が低く周辺部に向って次第に高くなり、壁は緩やかに立ち上がる。底面にみられる3箇所の柱穴が当土坑に伴うかは不明である。埋土は黒褐色土が主体をなすが、3層に分けられる。1層は埋め戻して、2層、3層は自然埋没によると推定される。

遺物は須恵器の坏2点、同甕1点、青磁1点、瀬戸・美濃系灰釉陶器2点、砥石1点、勾玉1点が出土している。須恵器（第368図15・16）のうち、15は回軸ヘラ切りの底部をもつ坏で、体部～底部を残す破片で底径7.8cm位の大きさがある。16は瓶か甕の体部破片で、内面にロクロ目を残し外面は横方向にヘラ削り調整される。青磁（第316図11）は畳付を残して全面施釉された皿の底部で、胎土は淡灰白色で釉は緑色である。14世紀前半頃の製品であろう。瀬戸・美濃系の灰釉陶器（第310図1・41）は、1が平碗、41は卸し皿である。1は体部から高台脇を残し、釉の剝落が著しいが体部外面の下半が露胎である。41は体部下位から底部を残す図化不能の小破片であり、外底に糸切り痕を残す。1・41とも15世紀前半頃の製品と考えられる。砥石（第326図3）は縦5.3cm、横2.6cm、厚さ1.2cm、重さ50gの大きさで、白色細粒凝灰岩を使っている。勾玉（第338図13）は、玉髓を使った縦4.4cm、横2.4cm、厚さ1cm、重さ15gの大きさをもつ完形品であるが、古代の遺物と推定される。

(21) C III a 2 土坑—2 (第109図、写真図版20)

北西部に位置し、当土坑より古いC III a 2 陥し穴状遺構と重複している。開口部径2.9m×2.5m、底部径2.5m×2.05m、深さ0.25mの規模をもち、平面形は長軸方向をN-10°-Wにもつ不整な楕円形で、皿形の断面形を示す。底面は平坦で壁の立ち上がりは緩やかである。当土坑に伴うかは不明であるが、浅い柱穴状土坑が3箇所にみられる。埋土は、黒色土とにぶい黄褐色土の2層に分けられ、1層には炭化物が多く混入しいずれも埋め戻した土層である。

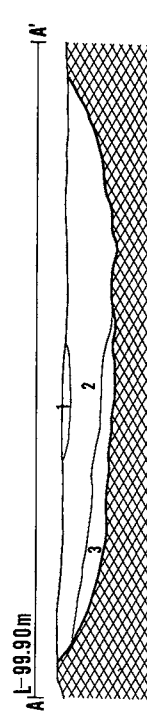
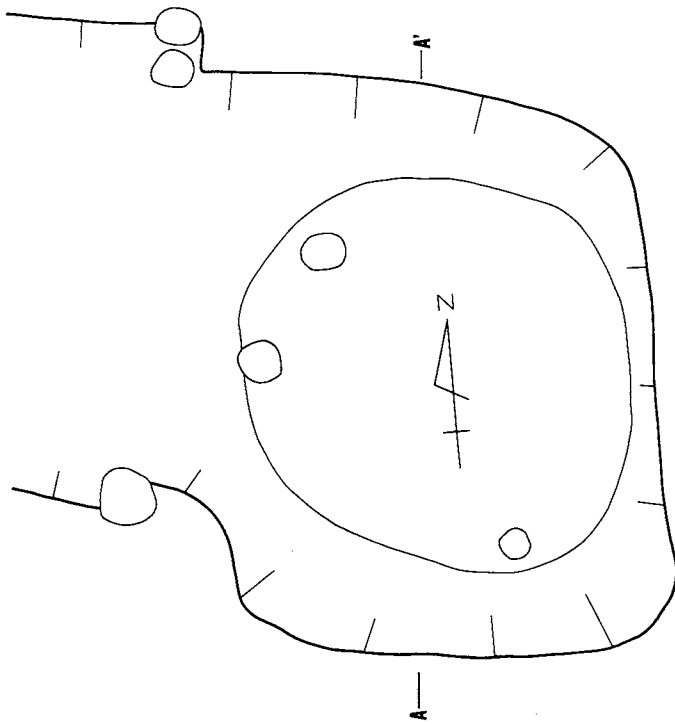
縄文時代の打製石斧（第474図29）が1点出土している。粘板岩ホルンフェルスを使い、縦13.5cm、横6.2cm、幅2.6cm、重さ267gの大きさをもつ。



第109図 (2)C III a 2 土坑-2

CIIIa 2 土坑-2

- 1 10Y R 2/1 黒 シルト、炭が混入
- 2 10Y R 5/4 ほぼ黄褐色 火山灰土、浅黄色粘土が混入



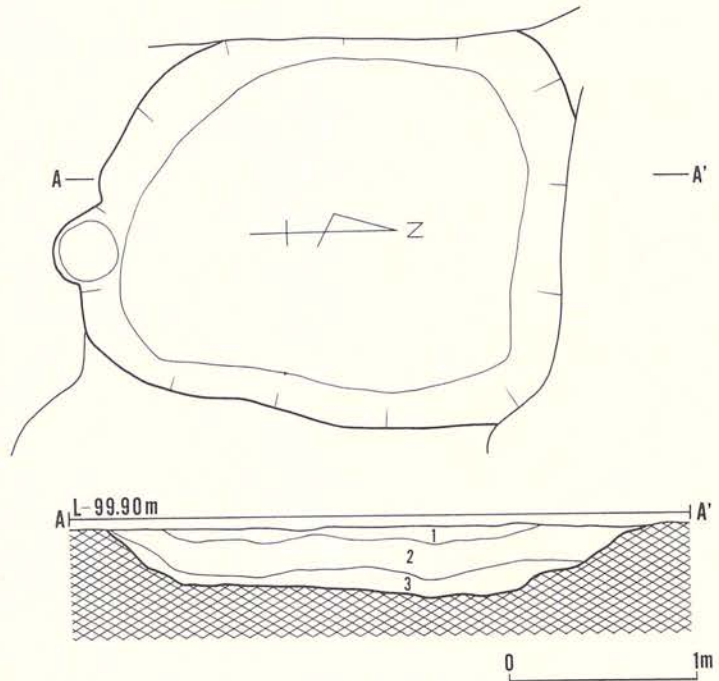
第108図 (2)C III a 2 土坑-1

CIIIa 2 土坑-1

- 1 10Y R 3/4 暗褐色 シルト、褐色アロク土が多い
- 2 10Y R 3/2 黒褐色 シルト、褐色アロク土少ない、炭が少量混入
- 3 10Y R 2/3 黒褐色 シルト、浅黄色粘土が少量混入

(22) C III a 3 土坑 (第110図、写真図版20)

北西部に位置し、新旧関係は不明であるがC III a 2 土坑-1 と重複する。不定形な落ち込み遺構と東方で隣接している。開口部径2.4m×2.05m、底部2m×1.75m、深さ0.35mの規模をもち、平面形は若干不整な隅丸方形を示し、断面形は皿形である。底面は平坦で壁の立ち上がりは緩やかである。埋土はC III a 2 土坑-1 のそれと同じ様相を示し、同時性が窺われる。



第110図 (22) C III a 3 土坑

C III a 3 土坑 (C III a 2 土坑-1 と同じ)

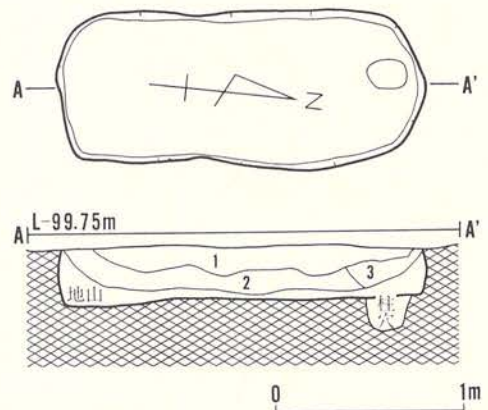
- | | | | |
|---|-----------|-----|-----------------------|
| 1 | 10Y R 3/4 | 暗褐色 | シルト、褐色ブロック土が多い |
| 2 | 10Y R 3/2 | 黒褐色 | シルト、褐色ブロック土少ない、炭が少量混入 |
| 3 | 10Y R 2/3 | 黒褐色 | シルト、浅黄色粘土が少量混入 |

細砂質凝灰岩を使った縦8.8cm、横7.5cm、厚さ4cmで断面が三角形を示す砥石(第326図4)が出土している。

(23) C III a 10 土坑

(第111図、写真図版20)

開田時の削平が著しい北端の中央部に他遺構との重複もなく単独で位置し、削平によって壁が消失し底部が残っている。開口部径1.95m×0.8m、底部径1.8m×0.7m、深さ0.25mの規模をもち、平面形は長軸方向がN-5°-Wを示す隅丸長方形で、皿形の断面形を示す。底面は平坦で、壁の立ち上がりは緩



第111図 (23) C III a 10 土坑

C III a 10 土坑

- | | | | |
|---|-----------|-----|-----------------|
| 1 | 10Y R 2/3 | 黒褐色 | シルト、黄褐色土が多く混入 |
| 2 | 10Y R 2/2 | 黒褐色 | シルト、黄褐色が1よりは少ない |
| 3 | 10Y R 2/2 | 黒褐色 | シルト、黄褐色土が若干混入 |

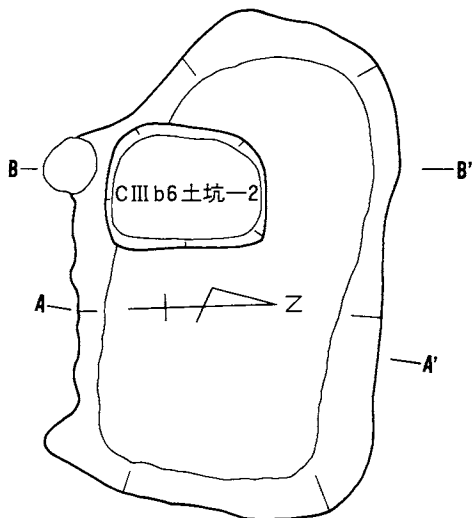
やかである。北端部に上位からの柱穴状土坑がみられる。埋土は黄褐色土が混入した黒褐色土が主体をなし、3層に細分される。人為的に埋め戻した土層と推定される。

出土遺物はない。

(24) C III b 6 土坑—1 (第112図、写真図版20)

北寄りに当遺構より古いC III c 6 陥し穴状遺構と重複して位置する。開口部径2.6m×1.7m、底部径2.2m×1.2m、深さ0.55mの規模をもち、平面形は長軸方向をN-81°-Wにもつ隅丸長方形で、断面形は鍋底形を示す。底面は平坦で壁の立ち上がりは垂直に近い。南壁に上位からの柱穴状土坑が2箇所みられる。遺構に伴う副穴はない。埋土は、上層が黄褐色土、下層が褐色土を塊状に含む黒褐色土の2層に細分され、いずれも埋め戻されている。

遺物は出土していない。

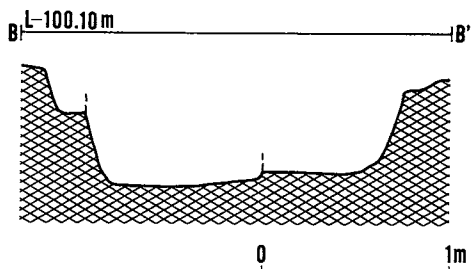
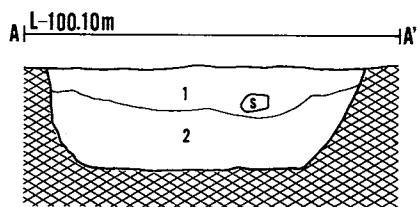


(25) C III c 6 土坑

(第113図、写真図版20)

北寄りにC III b 6 土坑—1と隣接して位置する。開口部径1.5m×1m、底部径1.65m×0.75m、深さ0.3mの規模をもち、平面形は長軸方向をN-85°-Wにもつ若干不整な楕円形で、鍋底形の断面形を示す。底面は平坦で壁の立ち上がりは垂直に近い。底面と壁には上位からと推定される柱穴状土坑が4箇所みられる。埋土は3層に分けられるが、浅黄色粘土を塊状に含む黒褐色土(1層)が大部分を占めることから、埋め戻した土層と考えられる。

出土遺物はない。

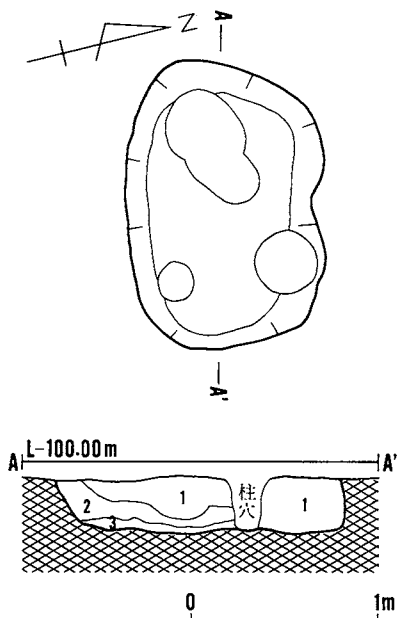


第112図 (24) C III b 6 土坑—1

C III b 6 土坑

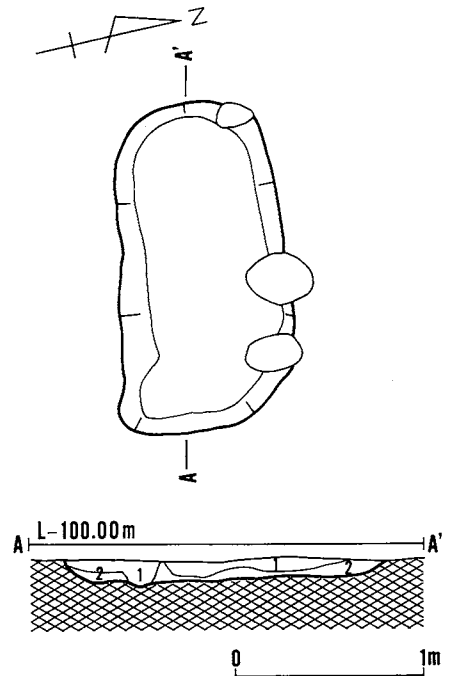
1 10Y R 5/6 黄褐色 火山灰土、人為的、かたい

2 10Y R 3/1 黒褐色 シルト、褐色土がブロック状に混入



第113図 (25) C III c 6 土坑

- C III c 6 土坑
- 1 10Y R 3/2 黒褐色シルト、浅黄色粘土がブロック状に混入
 - 2 7.5Y R 5/4 にぶい褐色粘土
 - 3 10Y R 3/2 黒褐色シルト、2との混土



第114図 (26) C III c 8 土坑

- C III c 8 土坑
- 1 2.5Y 3/3 暗オリーブ褐色粘土、黄褐色土が混入、炭が混入
 - 2 10Y R 5/4 にぶい黄褐色火山灰土、暗褐色土が若干混入

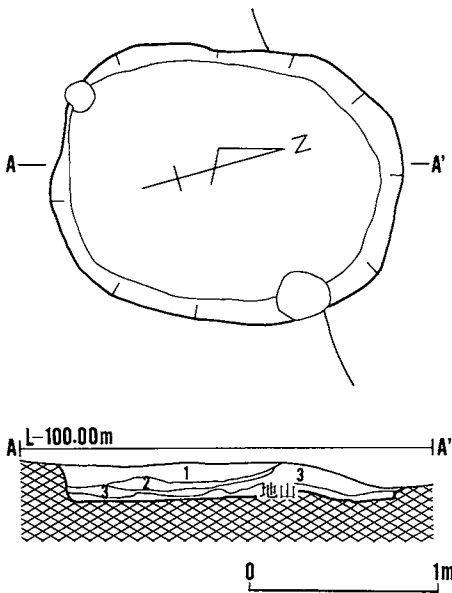
(26) C III c 8 土坑 (第114図、写真図版21)

北寄りに他遺構との重複もなく単独で位置する。開口部径1.7m×0.9m、底部径1.55m×0.65m、深さ0.1mの規模をもち、平面形は長軸方向がN-82°-Wを示す。不整な楕円形で、浅い皿形の断面形を示す。底面は平坦であるが、壁は浅いため立ち上がりが不明瞭である。底面には上位からの柱穴状土坑が3箇所みられる。埋土は地山の黄褐色粘土質土と黒褐色土の2層に細分される。

遺物の出土はない。

(27) C III c 9 土坑 (第115図、写真図版21)

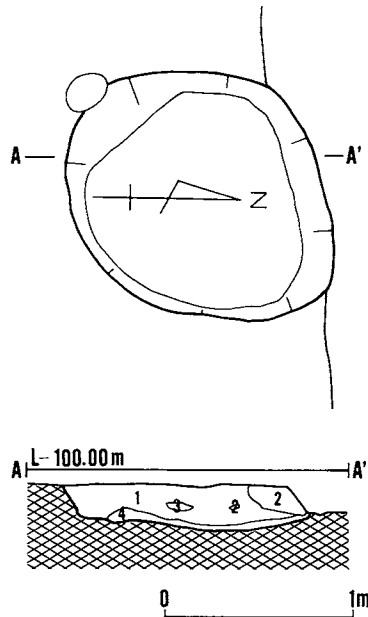
北寄りにC III c 8 土坑とC III c 10 土坑に隣接して位置する。開口部径1.85m×1.45m、底部径1.65m、深さ0.2mの規模をもち、平面形は長軸方向をN-20°-Eに示す楕円形で、断面形は皿形である。底面にはやや凹凸があり、壁は開田時の削平によって一部浅くなっているが、ほ



第115図 (27)C III c 9 土坑

C III c 9 土坑

- 1 10YR 2/2 黒褐色 シルト、黄褐色土が混入、小石が混入
- 2 10YR 4/1 褐灰色 灰を主体とした層、やわらかい
- 3 10YR 2/2 黒褐色 シルト、小石と炭が混入



第116図 (28)C III c 10土坑

C III c 10土坑

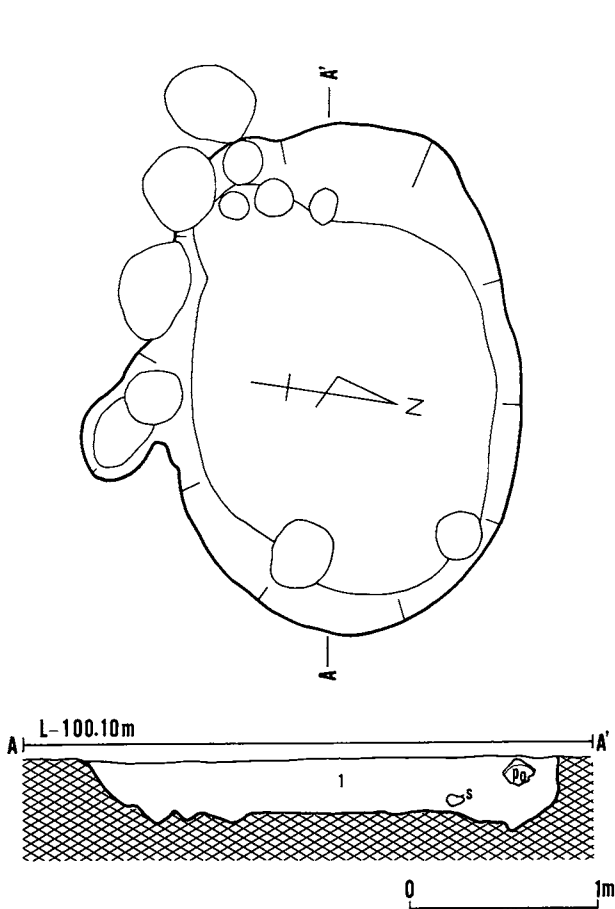
- 1 10YR 2/2 黒褐色 シルト、0.5~1.5cmの小石が多く混入
- 2 10YR 5/3 濃い黄褐色 火山灰土、暗褐色土が若干混入
- 3 10YR 6/6 明黄褐色 火山灰土のブロック土
- 4 10YR 6/6 明黄褐色 火山灰土、黒褐色土が混入

ほぼ垂直に近い立ち上がりを示す。上位からの柱穴状土坑が2箇所で見られる。埋土は、上層と下層の礫混じりの黒褐色土と、中層の草木灰と炭化物粉を主体とした層の3層に細分される。遺物の出土はない。

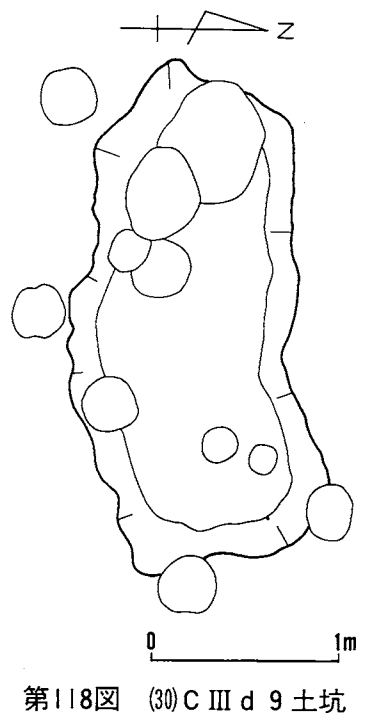
(28) C III c 10土坑 (第116図、写真図版21)

C III c 9土坑と隣接して北寄りに位置する。開田時に北壁が強い削平を受け、南壁と段差をもつ。開口部径1.6m×1.3m、底部径1.15m×1.1m、深さ0.25mの規模をもち、平面形がN-36°-Eの長軸方向を示す不整な楕円形で、皿形の断面形を示す。底面はほぼ平坦で壁の立ち上がりは垂直に近い。埋土は4層に分けられるが、細礫混じりの黒褐色土が大部分を占め、地山の黄褐色粘土質土が塊状に混在することから、埋め戻された土層であろう。

出土遺物はない。



第117図 (29) C III d 7 土坑



第118図 (30) C III d 9 土坑

C III d 7 土坑
1 10YR 2/2 黒褐色シルト、黄褐色土が多く混入

(29) C III d 7 土坑 (第117図、写真図版21)

北寄りに他遺構と重複することなく単独で位置する。開口部径2.7m×1.9m、底部径1.95m×1.6m、深さ0.3mの規模をもち、平面形はN-81°-Eに長軸方向をもつ楕円形で、断面形は鍋底形を示す。底面は小さな凹凸があり、上位からの多くの柱穴状土坑がみられ、壁は垂直に近い立ち上がりである。埋土は黄褐色土が多量に混入した黒褐色土の単層であることから、埋め戻された土層であろう。

遺物は石臼(第333図4)が出土している。約4分の1を残存する茶臼の下臼で、粉受部に黒漆を塗った痕跡を残し、端部を欠損する。臼部の径が約16.8cmで中心部に径2.3cmの円孔が穿た

れ、臼面は中央寄りが次第に高くなり、全体が6分割され、10条位を単位とする並行線を刻む。粉受部は外方へ7.2cm位延び、4.5cm位の深さをもつ。全高で約7cmあり、外底は擂鉢状に凹む。石質は淡緑質凝灰岩である。

(30) C III d 9 土坑 (第118図、写真図版21)

北寄りに他遺構と重複することなく単独で位置する。開口部径2.5m×1.15m、底部径2.1m×0.9m、深さ0.2mの規模をもち、平面形は長軸方向をN-86°-Eにもつ不整な楕円形で、断面形は浅い皿形を示す。底面はほぼ平坦であるが、壁と底面には上位の柱穴と推定される多くの柱穴状土坑がみられる。埋土は地山の黄褐色土粒が混じる黒褐色土の単層である。

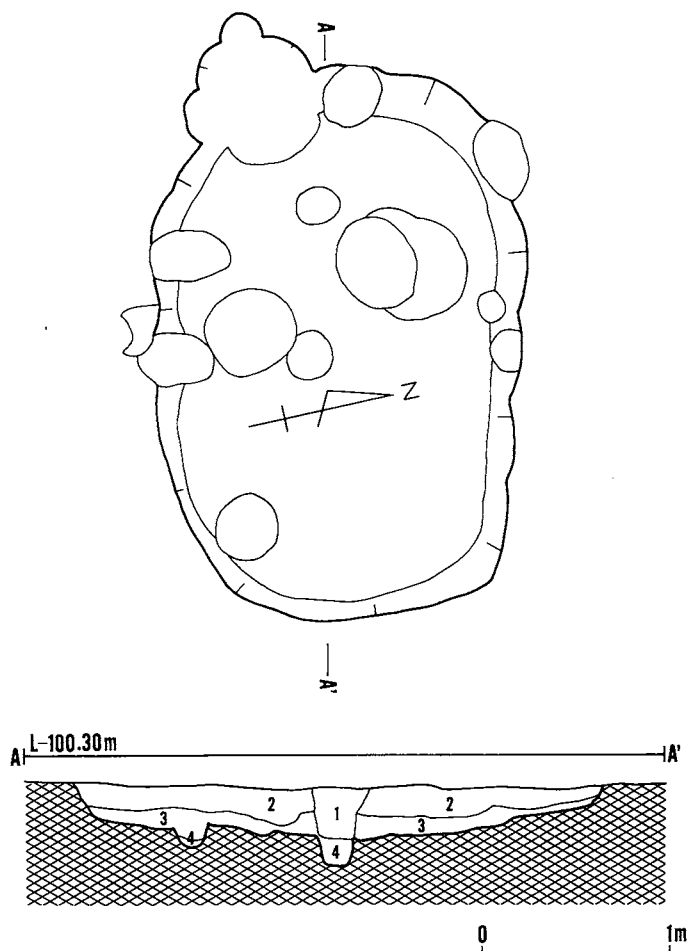
出土遺物はない。

(31) C III f 4 土坑

(第119図、写真図版21)

北西のやや中央寄りの柱穴状土坑のもっとも密集した地点に、多数の柱穴状土坑と重複して位置する。開口部径2.9m×1.9m、底部径2.55m×1.6m、深さ0.25mの規模をもち、平面形は長軸方向をN-80°-Wにもつ楕円形で、断面形は皿形を示す。底面には僅かに凹凸があり、壁は重複する多数の柱穴状土坑によって破壊を受けている。埋土は暗褐色粘質土が混入した黒褐色土が主体を占めるが、4層に分けられる。おそらく埋め戻した土層であろう。

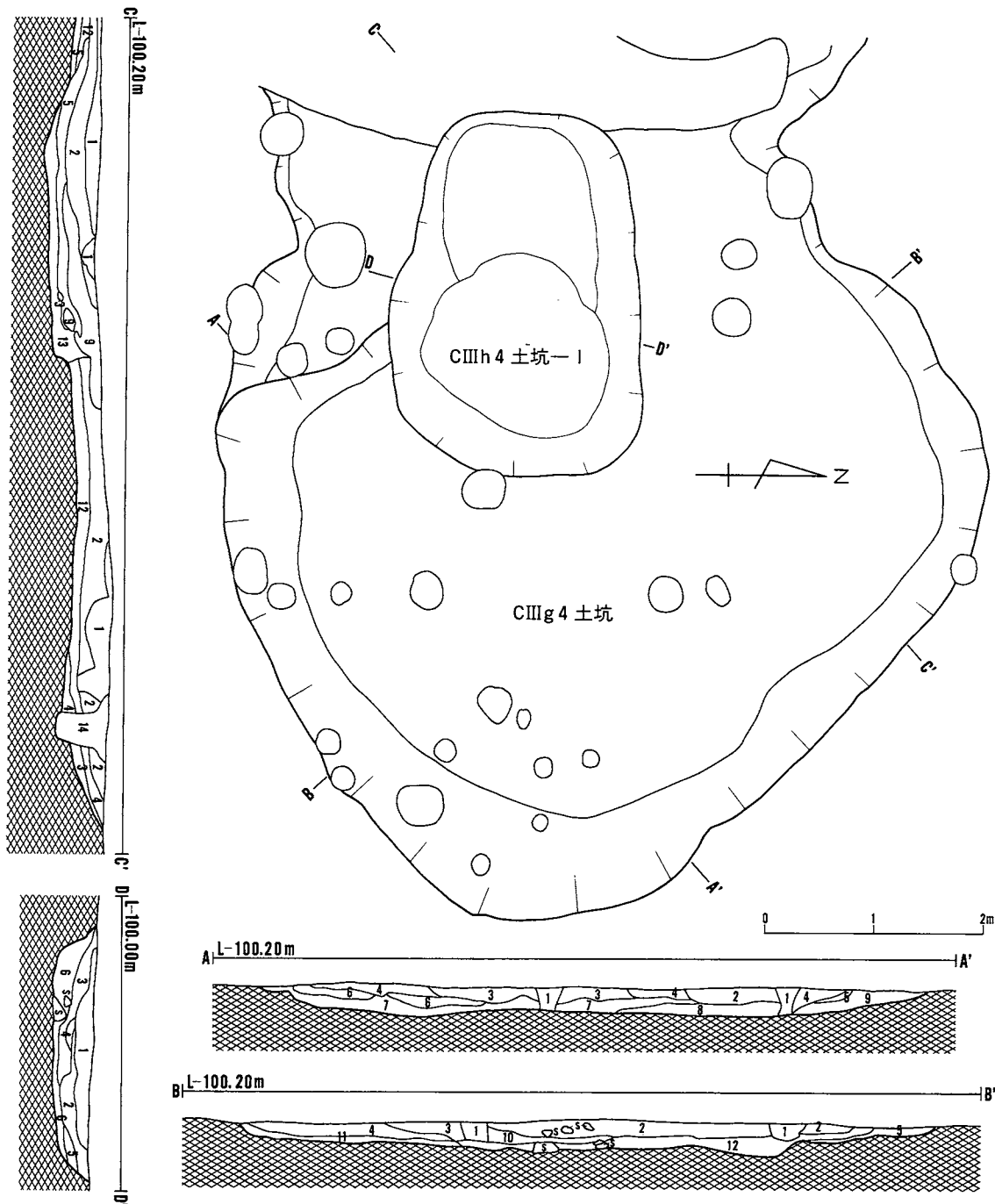
遺物は出土していない。



第119図 (31)C III f 4 土坑

C III f 4 土坑

- 1 10Y R 3/1 黒褐色シルト、0.5~5cmの礫や炭が混入
- 2 7.5Y R 3/2 黒褐色シルト、暗褐色粘土が混入
- 3 10Y R 3/2 黒褐色シルト、暗褐色粘土が混入、粘性あり
- 4 10Y R 6/4 濃い黄褐色粘土



第120図 (32)C III g 4 土坑・(33)C III h 4 土坑一 I

C III g 4 土坑

- | | | | |
|----|-------------|-----|-------------------------|
| 1 | 10Y R 3/1 | 黒褐色 | シルト、かたい、0.5~2cm大の礫が混入 |
| 2 | 10Y R 2/2 | 黒褐色 | シルト、灰黄色粘土がブロック状に混入 |
| 3 | 10Y R 1.7/1 | 黒褐色 | シルト、炭化物層主体、褐色土がブロック状に混入 |
| 4 | 10Y R 2/2 | 黒褐色 | シルト、かたい |
| 5 | 10Y R 1.7/1 | 黒褐色 | シルト、軟質な炭化物の単一層 |
| 6 | 10Y R 1.7/1 | 黒褐色 | シルトに褐色土がラミナ状に混入 |
| 7 | 10Y R 2/2 | 黒褐色 | シルト、2~5cm大の礫が混入 |
| 8 | 10Y R 2/2 | 黒褐色 | シルト、褐色土がブロック状に混入 |
| 9 | 7.5Y R 4/4 | 黒褐色 | 火山灰土のブロック土 |
| 10 | 10Y R 2/2 | 黒褐色 | シルト、炭化物が混入 |
| 11 | 10Y R 2/3 | 黒褐色 | シルト、炭化物が混入 |

- | | | | |
|----|-----------|------|--------------------|
| 12 | 10Y R 3/1 | 黒褐色 | シルト、灰黄色粘土が混入、炭化物混入 |
| 13 | 10Y R 3/1 | 黒褐色 | シルト、12に似るが炭化物が少ない |
| 14 | 10Y R 4/2 | 灰黄褐色 | 粘土、0.5~2cmの礫が混入 |

C III h 4 土坑一 I

- | | | | |
|---|-------------|-----|---------------|
| 1 | 10Y R 4/4 | 褐色 | 火山灰のブロック土 |
| 2 | 10Y R 1.7/1 | 黒褐色 | シルト、軟質な炭化物層 |
| 3 | 10Y R 3/1 | 黒褐色 | シルト、褐色火山灰土が混入 |
| 4 | 7.5Y 7/2 | 灰白色 | 火山灰のブロック土 |
| 5 | | | 2層に似る、火山灰土が混入 |
| 6 | 10Y R 3/1 | 黒褐色 | シルト |

(32) C III g 4 土坑 (第120図、写真図版22)

中央に当土坑より新しいC III h 4 土坑—1と重複して位置し、落ち込み遺構の東端に隣接するため、西側の壁は明確でない。開口部径推定6.8m×7m、底部径推定6m×5.8m、深さ0.25mの規模をもち、平面形は若干不整な円形で、浅い皿形の断面を示す。底面は中央に向かって低くなり、壁の立ち上がりは緩やかである。底面や壁は多数の柱穴状土坑と重複する。埋土は灰黄褐色粘土が混入した黒褐色土が主体をなすが、14層に細分される。炭化物が多量に入る3層や5層の他、下層にも炭化物が含まれている。埋土が浅いため明確ではないが、埋め戻した土層と推定される。

遺物は、土師器坏1点、須恵器甕1点、青磁1点、白磁2点、瀬戸・美濃系灰釉陶器1点、唐津1点、鉄製品4点、貨幣4点、砥石1点が出土している。

土師器はロクロ成形された非内面黒色処理の図化不能な小破片である。須恵器(第368図17)はロクロ成形された瓶か甕の頸部の破片である。青磁(83)は碗の体部小破片である。胎土は灰色で釉は灰緑色を示す。白磁(第320図1・12)は、1が口縁内面端部を無釉にした口禿げ碗で、12は端反りする皿の図化不能な小破片である。青磁は小破片のため時期不明であるが、白磁は1が14世紀、12が15世紀末から16世紀の製品であろう。瀬戸・美濃系灰釉陶器(2)は平碗の実測不能な口縁部小破片である。15世紀中頃の製品と推定される。唐津(第313図2)は体部下位を露胎にした皿で口縁～体部下位を残存する。16世紀末の製品であろう。鉄製品(第346図10～13)は、10が楔か釘、11は釘、12は板状を示すが、13は錆化が著しく器種が不明である。貨幣(第350図3～6)は密着しているため銭銘が元豊通寶の1枚以外は不明である。砥石(第326図5)は縦7cm、横3.2cm、厚さ0.7cm、重さ43gの大きさをもつ細砂質凝灰岩を使っており、使い減りが著しく4面を使用している。

(33) C III h 4 土坑—1 (第120図、写真図版22)

中央部にC III g 4 土坑と重複して位置する。開口部径3.3m×2.3m、C III g 4 土坑の底面から0.4mの深さをもち、平面形は長軸方向がN—86°—Wを示す楕円形で、断面形は鍋底形を示す。底面の中央は若干低くなるが全体的には平坦で、壁は湾曲して立ち上がる。底面に径0.25mほどの礫が1個ある他、副穴等はない。

埋土は、上層は地山の褐色粘土質土、中～下層部は黒褐色土が主体をなすものの、6層に細分される。2層は草木灰や炭化物粉の堆積層である。1層は人為的な埋め戻しと考えられるが、それより下層は自然埋没による堆積であろう。

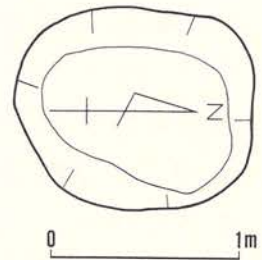
遺物は須恵器甕1点、青磁1点、鉄製品1点が出土している。須恵器(第368図18)は輪積み成形の後ロクロ調整した大甕の口縁部破片である。青磁(47)は端反りする碗の口縁部小破片

であるが、時期は15・16世紀の製品と推定される。鉄製品(14)は
 錆化が著しく、原形が不明である。

(34) C III h 4 土坑一 2 (第121図)

中央やや西寄りにC III g 4 土坑やC III h 4 周溝遺構と隣接して
 位置する。開口部径1.25m×1.1m、底部径1m×0.75m、深さ0.15
 mの規模をもち、平面形は不整な円形で、浅い皿形の断面形を示
 す。底面は中央に向かって次第に低くなり、壁は
 緩やかに立ち上がる。埋土は黒褐色が主体を占
 め、炭化物の混入がみられる。

遺物は出土していない。



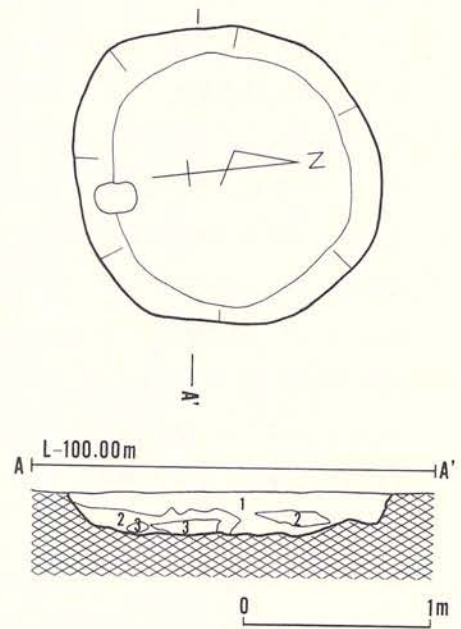
第121図 (34)C III h 4 土坑一 2

(35) C III i 9 土坑

(第122図、写真図版22)

中央部に他遺構と重複することなく単独で位
 置する。開口部径1.6m×1.6m、底部径1.35m
 ×1.25m、深さ0.2mの規模をもち、平面形は円
 形で断面形は皿形を示す。底面はほぼ平坦で、
 壁の立ち上がりは緩やかである。南壁に柱穴状
 土坑が1箇所みられる。埋土は黒褐色が主体を
 占めるが3層に細分される。中～下層に焼土が
 含まれる他、上層にも炭化物や焼土が混入する。
 2層の焼土は黄褐色や黒褐色土が混じり、投げ
 捨てられたものと推定される。

鉄製品(第346図15)として縁金具の完形品が
 出土している。



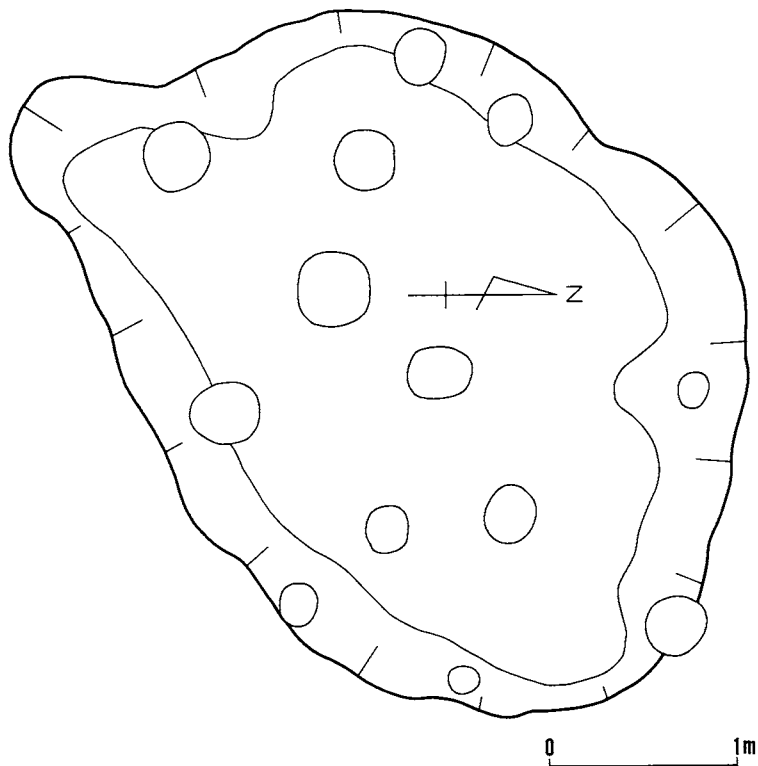
第122図 (35)C III i 9 土坑

C III i 9 土坑

- | | | | |
|---|----------|------|-------------------|
| 1 | 10YR 2/2 | 黒褐色 | シルト、黄褐色土や焼土が混入、炭が |
| 2 | 5YR 5/8 | 明赤褐色 | 焼土、黄褐色土や黒褐色土が混入 |
| 3 | 10YR 2/2 | 黒褐色 | シルト |

(36) C III j 1 土坑 (第123図、写真図版22)

西寄りの落ち込み遺構の下位から検出されたことから、底部だけが検出されている。開口部
 径4m×3.1m、底部径3.5m×2.4m、深さ0.15mの規模をもち、平面形は長軸方向をN-60°-
 Eにもつ不整な楕円形で、断面形は皿形である。底面には凹凸があり、壁の立ち上がりも不明



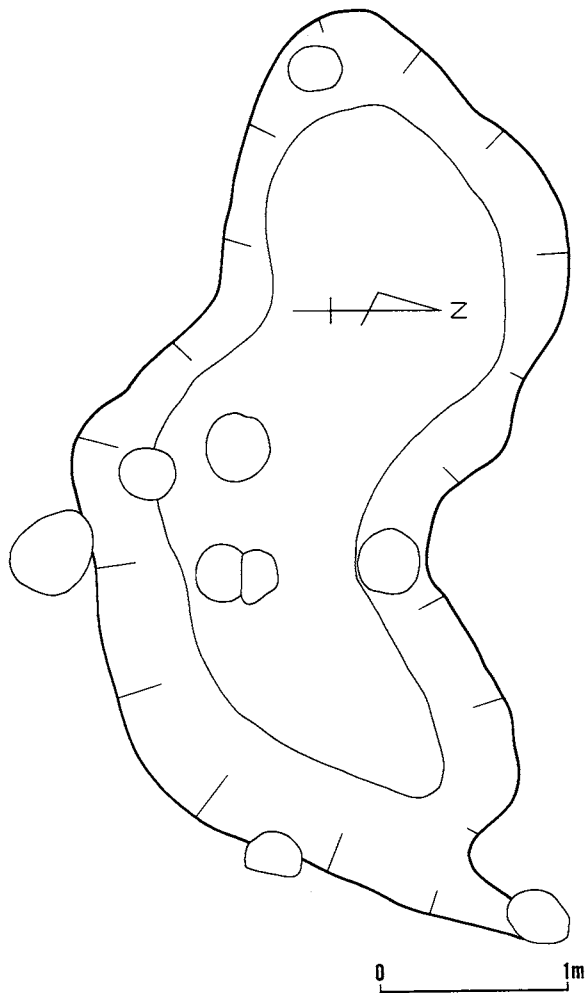
第123図 (36) C III j I 土坑

瞭であり、上位からの多くの柱穴状土坑がみられる。埋土は黒褐色を主体とする。
遺物の出土はない。

(37) C III i 4 土坑 (第124図、写真図版22)

中央西寄りに位置し、当土坑より古いC III i 3 陥し穴状遺構と重複して落ち込み遺構の下位から検出された。開口部径4.5m×2m、底部径3.5m×1.25m、深さ0.1m~0.35mの規模をもち、平面形は屈曲した不定形を示し、長軸方向をN-87°-Wにもつ楕円形の土坑が重複した形状に近い。断面形は浅い皿形で、壁の立ち上がりは緩やかであるが、北壁は不明瞭である。底面は中央に向かってやや低くなって湾曲し、上位からの多くの柱穴状土坑がみられる。埋土は黒褐色土を主体とする。

遺物は出土していない。



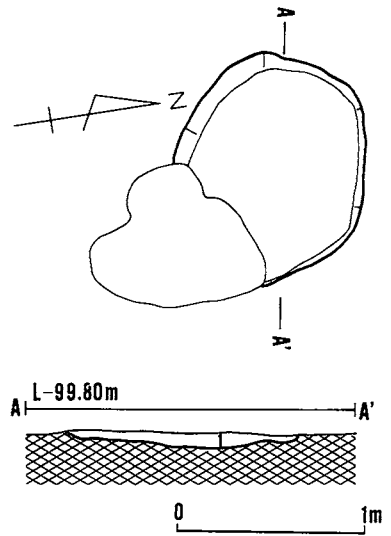
第124図 (37) C III j 4 土坑

CIV a 5 土坑

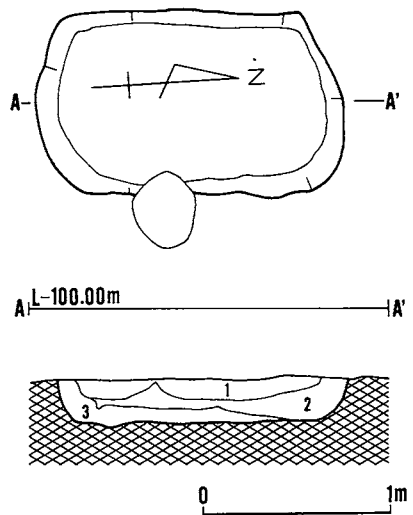
1 10Y R 3/2 黒褐色 シルト、黄褐色土や炭が混入

CIV b 2 土坑

1 7.5Y R 4/4 褐色 火山灰土、かたい
 2 7.5Y R 5/6 明褐色 火山灰土
 3 10Y R 6/6 明黄褐色 粘土質土のブロック土、黒色土が混入



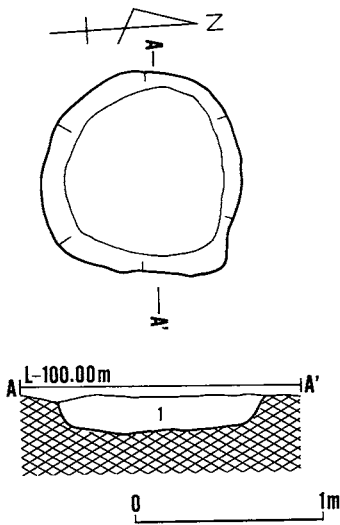
第125図 (38) C IV a 5 土坑



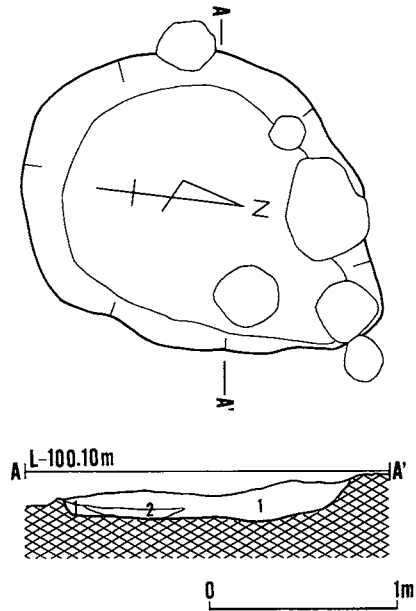
第126図 (39) C IV b 2 土坑

(38) C IV a 5 土坑 (第125図、写真図版22)

北東部に BIV j 5 溝跡の南側に隣接して位置し、開田時の削平によって底部のみが残存する。開口部径1.2m×1m、底部径1.1m×0.9m、深さ0.1mの規模をもち、平面形は長軸方向がN-79°-Wを示す楕円形で、浅い皿形の断面形を示す。底面は平坦であるが、東側は上位の柱穴



第127図 (40)CIVc 2 土坑



第128図 (41)CIVd 3 土坑

CIVc 2 土坑

1 10YR 2/3 黒褐色 シルト、黄褐色土が多く混入、炭が混入

CIVd 3 土坑

1 10YR 2/2 黒褐色 シルト、黄褐色土が混入、炭が若干混入
2 10YR 4/2 灰黄褐色 シルト、灰が主体

状土坑によって壊されている。埋土は黄褐色土が混入した黒褐色土の単層であり、炭化物を含む。

遺物として土師器1点、須恵器1点が出土している。土師器は甕体部の実測不能な小破片である。須恵器(第369図25)は外面に並行叩き具痕と横方向のカキ目、内面に横方向ナデ痕をもつ甕の体部破片である。

(39) CIVb 2 土坑 (第126図、写真図版22)

北寄りに位置し、開田時の削平によって底部のみが残存している。開口部径1.65m×1m、底部径1.4m×0.8m、深さ0.25mの規模をもち、平面形は長軸方向をN-4°-Eにもつ隅丸長方形を示し、皿形の断面形を示す。底面は平坦で壁の立ち上がりは垂直に近い。東壁に上位からの柱穴状土坑がみられる。埋土は地山の褐色～明黄褐色の粘土質土を主体とした3層に分けられるが、いずれも埋め戻された土層と推定される。

遺物は出土していない。

(40) CIV c 2 土坑 (第127図、写真図版23)

北寄りにCIV c 2 土坑-2と隣接して位置する。開口部径1.05m×1.05m、底部径0.9m×0.85m、深さ0.2mの規模をもち、平面形は円形で皿形の断面形を示す。底面は平坦で壁の立ち上がりは湾曲し、上位は垂直に近い。埋土は黄褐色土の多く混入した黒褐色土の単層である。炭化物を混入し硬い。

遺物の出土はない。

(41) CIV d 3 土坑 (第128図、写真図版23)

北東部に位置し、5箇所て上位の柱穴状土坑と重複する。開口部径1.85m×1.6m、底部径1.5m×1.25m、深さ0.2mの規模をもち、平面形は長軸方向をN-26°-Eにもつ不整な楕円形で、断面形は浅い皿形を示す。底面は平坦で壁は緩やかに湾曲して立ち上がる。埋土は2層に細分されるが、地山の黄褐色土が塊状に混入した黒色土が大部分を占める。底面に近い2層は草木灰と炭化物粉が主体をなす。埋土の土性からみて埋め戻されたと推定される。

埋土内から瀬戸・美濃系の灰釉が施された尊式花瓶(第311図49)の体部下位～底部の破片が出土している。15世紀前半頃の製品であろう。

(42) CIV d 4 土坑 (第129図、写真図版23)

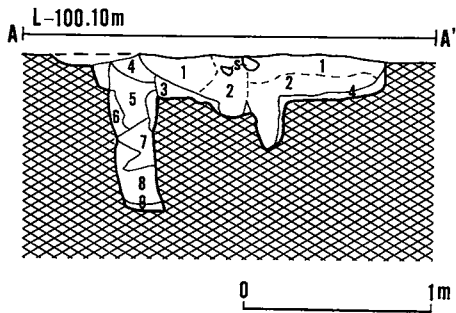
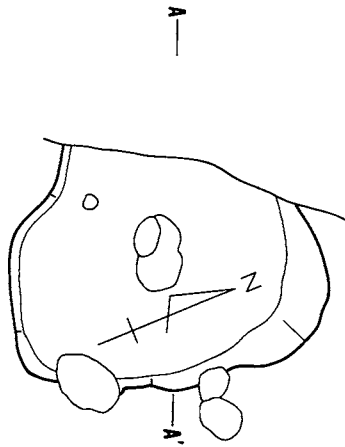
北東部に位置し、CIV c 4 土坑と隣接し、当土坑より古いCIV c 4 陥し穴状遺構と重複する。開口部径1.65m×1.3m、底部径1.45m×1.15m、深さ0.3mの規模をもち、平面形は長軸方向をN-20°-Eにもつ楕円形で、皿形の断面形を示す。底面はほぼ平坦で、上位からの柱穴状土坑が3箇所で見られる。壁は垂直に近い立ち上がりであるが、北西部は他遺構との重複によって不明である。埋土は4層に分けられるが、地山の黄褐色土が混入した黒褐色土が主体をなし、埋め戻した土層と推定される。

遺物の出土はない。

(43) CIV e 4 土坑 (第130図、写真図版23)

北東に位置し、上位からの多くの柱穴状土坑と重複する。開口部径1.85m×1.05m、底部径1.7m×0.9m、深さ0.15mの規模をもち、平面形は長軸方向がN-4°-Eを示す楕円形で、浅い皿形の断面形を示す。底面は平坦で、壁は緩やかな立ち上がりであるが、柱穴状土坑によって攪乱を受けている。埋土は地山の黄褐色粘土質土起源の褐色土の単層で、硬くしまる。

出土遺物はない。



第129図 (42) CIV d 4 土坑

CIV d 4 土坑

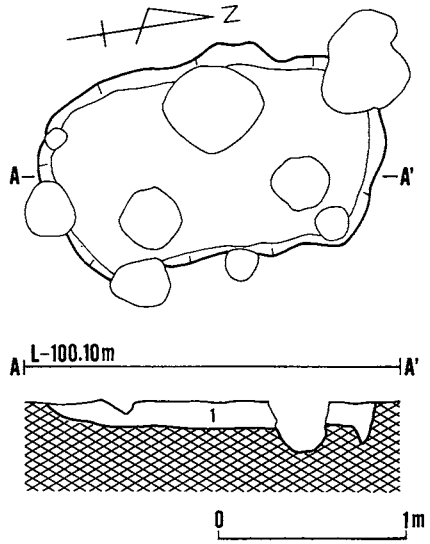
土坑分	1	10 Y R 3/2	黒	褐色	色	シルト、明褐色土がブロック状に混入
	2	10 Y R 2/2	黒	褐色	色	シルト、明褐色土がブロック状に混入、炭が少し混入
	3	7.5 Y R 5/6	明	褐色	色	火山灰土
	4	10 Y R 2/3	黒	褐色	色	シルト
陥し穴	5	7.5 Y R 4/3	褐色	色	粘土	
	6	7.5 Y R 4/4	褐色	色	粘土	
	7	7.5 Y R 4/6	褐色	色	粘土	
	8	10 Y R 3/4	暗	褐色	色	シルト、黒色土が少し混入
	9	10 Y R 6/4	にぶい	黄褐色	色	粘土

CIV e 4 土坑

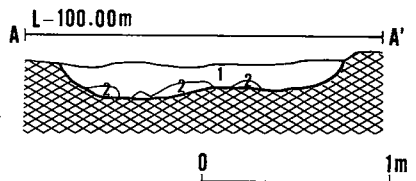
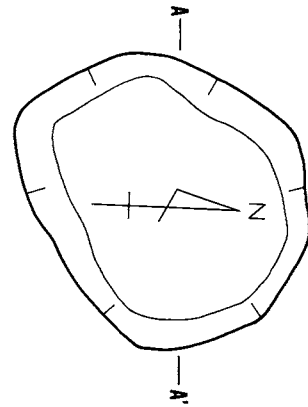
1 7.5 Y R 4/3 褐色 色 シルト、かたい

CIV h 1 土坑

1 10 Y R 2/1 黒 色 シルト、かたい、炭が微量混入
 2 10 Y R 6/6 明黄褐色 火山灰土



第130図 (43) CIV e 4 土坑



第131図 (44) CIV h 1 土坑

(44) C V h 1 土坑 (第131図、写真図版23)

中央部東寄りに他遺構との重複もなく単独で位置する。開口部径1.6m×1.4m、底部径1.3m×1.1m、深さ0.2mの規模をもち、平面形は不整な円形で、浅い皿形の断面形を示す。底面は平坦で、壁は緩やかに湾曲して立ち上がる。副穴や柱穴はない。埋土は黒色土が大部分を占めるが、2層に細分され、硬くしまり若干の炭化物を混入する。

遺物は出土していない。

(45) D II a 5 土坑—1 (第132図、写真図版23)

中央部の西端に位置し、D II a 5 土坑—2・3、C II j 6 土坑と隣接する。開口部径1.05m×0.7m、底部径0.65m×0.35m、深さ0.5mの規模をもち、平面形は長軸方向をN—82°—Wにもつ楕円形を示し、断面形は長軸・短軸とも逆台形状である。底面は平坦であり、壁は緩やかに湾曲して立ち上がり、上部は垂直に近い状況で開口部に至る。副穴はない。埋土は4層に分けられるが、黒褐色土が主体をなし、壁の崩落土も見られる。レンズ状に堆積することや地山の褐色土が混入する状況から、自然埋没による堆積と考えられる。

遺物の出土はない。

(46) D II a 5 土坑—2 (第133図)

中央部の西端にD II a 5 土坑—3と重複して位置するが、新旧関係は不明である。開田時の削平によって浅く底部のみが残存する。開口部径1.9m×1.7m、底部径1.7m×1.4m、深さ0.1mの規模をもち、平面形は円形で皿形の断面形を示す。底面は平坦で、壁の立ち上がりは緩やかで不明瞭な部分もみられる。埋土は黒褐色土である。

遺物は出土していない。

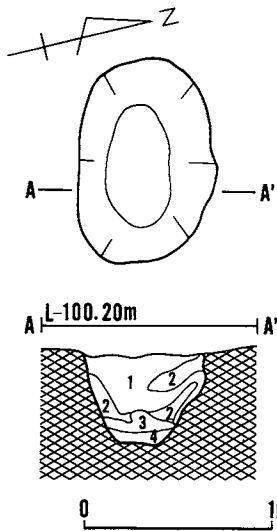
(47) D II a 5 土坑—3 (第134図)

中央部の西端にD II a 5 土坑—2と重複して位置するが、新旧関係は不明である。開田時の削平によって底部のみが残存する。開口部径1.55m×1.45m、底部径1.5m×1.25m、深さ0.2mの規模をもち、平面形は皿形で、浅い皿形の断面形を示す。底面は平坦で、壁の立ち上がりは緩やかである。埋土は地山の黄褐色土粒が混入した黒褐色土である。

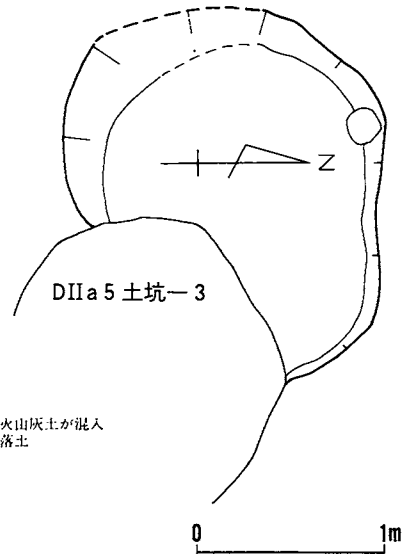
出土遺物はない。

(48) D II b 8 土坑 (第135図)

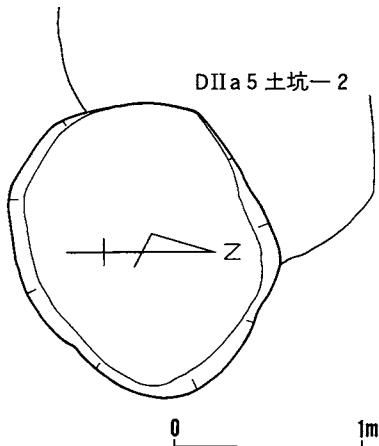
中央部の西寄りにD II a 8 周溝遺構に隣接して位置する。落ち込み遺構の下位に浅い凹みと



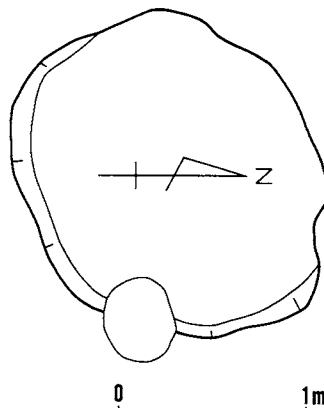
第132図 (45) D II a 5 土坑-1



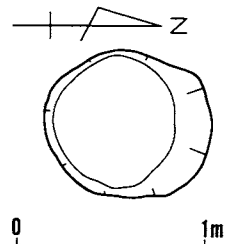
第133図 (46) D II a 5 土坑-2



第134図 (47) D II a 5 土坑-3



第135図 (48) D II b 8 土坑



第136図 (49) D II d 9 土坑

して検出され、西～北側の壁が失われている。開口部径推定1.7m×1.65m、底部径1.6m×1.55m、深さ0.1mの規模をもち、平面形は円形で浅い皿形の断面形を示す。底面は西に向ってやや低くなるがほぼ平坦で、上位からの柱穴状土坑が1箇所みられる。埋土は黒褐色土である。

遺物は出土していない。

(49) D II d 9 土坑 (第136図)

中央部の西寄りに位置し、柱穴状土坑の密集する地点に位置する。開口部径0.9m×0.8m、底部径0.7m×0.65m、深さ0.6mの規模をもち、平面形は円形で断面形は円筒形を示す。柱穴状土坑と認定して掘り上げたため土層図は作成していないが、地山の褐色粘土質土粒を混入する黒褐色土である。底面は平坦で壁は垂直に近い状況を示し、副穴はない。

遺物の出土はない。

(50) D II e 5 土坑 (第137図、写真図版23)

中央部の西端に位置し、南北に広がる落ち込み遺構の下位からD II e 5 周溝遺構と隣接して検出された。開口部径3.15m×2.6m、底部径2.65m×2.1m、深さ0.5mの規模をもち、平面形は長軸方向をN-75°-Wにもつやや不整な楕円形で、断面形は鍋底形を示す。底面は平坦で上位からの柱穴状土坑が2箇所みられ、壁は外方に傾斜し開口部では垂直に近くなる。埋土は落ち込み遺構の一部と判断して掘り上げたため、土層の作成はしていないが、黒褐色土が主体を占める。

出土遺物はない。

(51) D II f 5 土坑 (第138図、写真図版24)

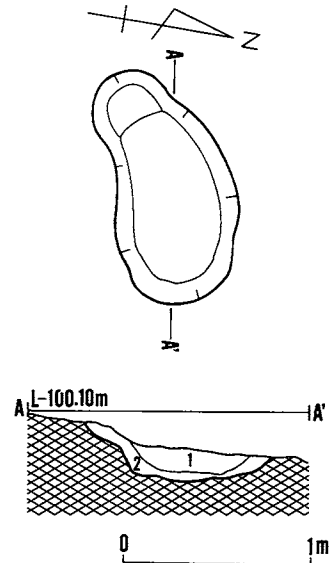
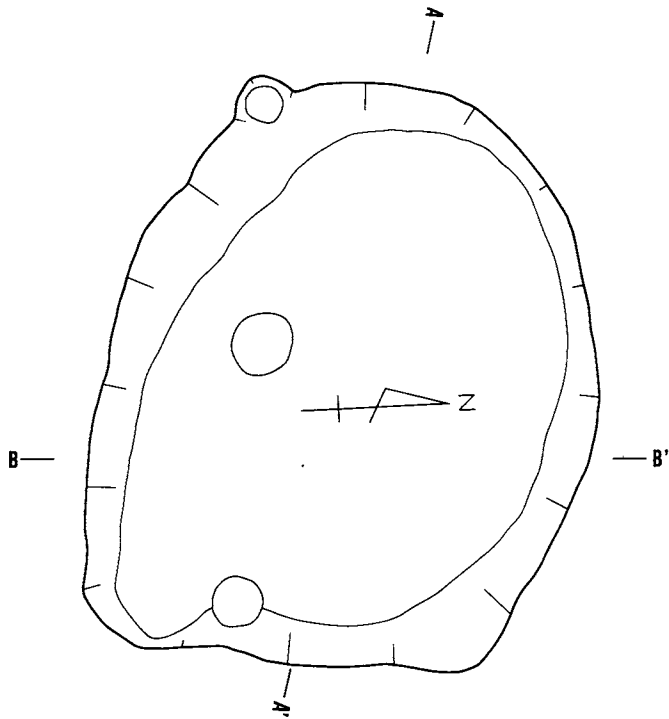
中央部西端のD II e 5 土坑やD II f 6 周溝遺構と隣接して位置する。開口部径1.25m×0.65m、底部径1.1m×0.45m、深さ0.25mの規模をもち、平面形は長軸方向がN-64°-Eを示す楕円形で、断面形は皿形を示す。底面は中央が若干低くなり、壁の立ち上がりは緩やかである。西側には0.1mほど高くなった張り出しがある。埋土は2層に細分されるが、ともに地山の黄褐色土が塊状に混入する黒褐色土であることから、埋め戻しによる土層と推定される。

出土遺物はない。

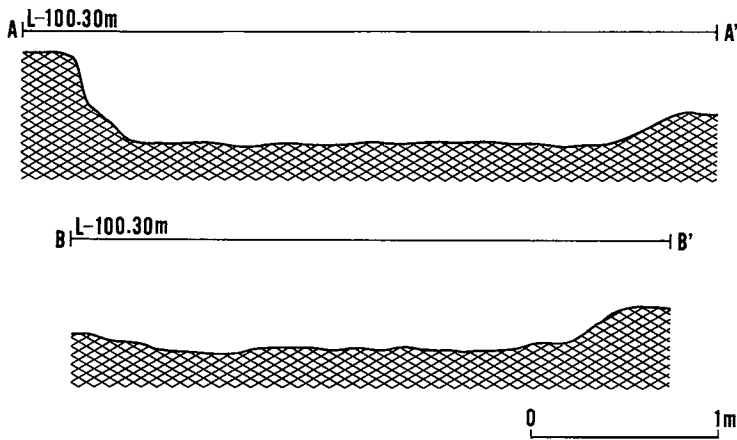
(52) D II f 8 土坑-1 (第139図、写真図版24)

中央部の西南に位置し、D II f 8 土坑-2 やD II e 9 陥し穴状遺構と隣接する。開口部径2.5m×1.25m、底部径2.25m×1m、深さ0.2mの規模をもち、平面形は長軸方向をN-72°-Eにもつやや不整な楕円形で、浅い皿形の断面形を示す。底面は平坦であり、副穴等はない。壁の立ち上がりはやや湾曲し、開口部近くはほぼ垂直である。埋土は黒褐色土が主体を占めるが3層に細分される。1層には草木灰や炭化物が多く混入し、2～3層には地山の黄褐色粘土質土が混在することから、すべて埋め戻された土層と推定される。

出土遺物には、白色細粒凝灰岩の縦7.7cm、横5.7cm、重さ84gの重さをもつ砥石(第328図38)



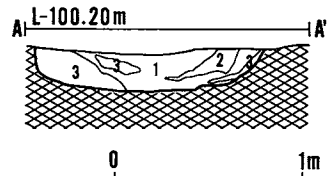
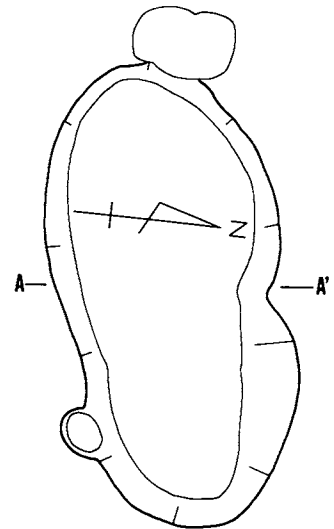
第138図 (51) D II f 5 土坑



D II f 5 土坑

- 1 10Y R 2/3 黒褐色 シルト、黄褐色土や黒色土が混入
- 2 10Y R 3/2 黒褐色 シルト、黄褐色土が混入

第137図 (50) D II e 5 土坑



D II f 8 土坑一 I

- 1 10Y R 3/1 黒褐色 シルト、灰や炭が多く混入
- 2 5Y 8/3 淡黄色 粘土、黒褐色土との混入
- 3 10Y R 5/6 黄褐色 火山灰土、黒褐色土が混入

第139図 (52) D II f 8 土坑一 I

が1点ある。

(53) D II f 8 土坑—2 (第140図、写真図版24)

中央部の西南にD II f 8 土坑—1やD II d 9 陥し穴状遺構と隣接して位置する。開口部径1.3m×1.25m、底部径1.1m×1m、深さ0.25mの規模をもち、平面形は円形で断面形は皿形を示す。底面は平坦で壁は若干湾曲して立ち上がり、開口部は垂直に近い。東西両端で柱穴状土坑がみられるものの、断面観察では当土坑が新しい。埋土は、上層は黒褐色土と地山の褐色粘質土との混土、下層は黄褐色土と白色粘土との混土の2層に細分され、混土状況からみて人為的に埋め戻した可能性が強い。

遺物の出土はない。

(54) D II h 5 土坑 (第141図、写真図版24)

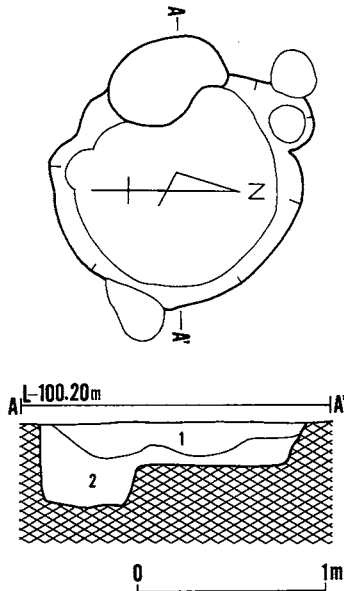
中央部の西南端に位置するが、開田時の削平によって西半部は失われている。D II i 5 土坑と重複するが新旧関係は不明である。開口部径5m×2m以上、底部径4.1m×1.5m以上、深さ0.35mの規模をもち、全体の平面形は不明であるが長軸方向を南北にもつ不整な楕円形と推定される。断面形は浅い皿形である。底面の中央には開口部径0.7m×0.4m、深さ0.2mの楕円形を示し断面形が皿形の土坑が存在するが、当土坑との関係は不明である。土坑周囲の底面はほぼ平坦である。埋土は4層に細分されるが、黄褐色土が塊状に多く混入した暗褐色土が大部分を占め、上層には炭化物粒が混入する。土層や混土の状況から埋め戻された土層と推定される。

遺物は出土していない。

(55) D II i 5 土坑 (第142図、写真図版24)

中央部の西南端に位置し、新旧関係の不明なD II h 5 土坑と重複する。開口部径3.35m×2.6m、底部径2.9m×2.25m、深さ0.35mの規模をもち、平面形は長軸方向をN-12°-Eにもつ楕円形で、皿形の断面形を示す。底面は平坦であるが北に向って若干低くなり、壁の立ち上がりは緩やかに湾曲している。副穴はない。埋土は5層に分けられ、上～中層は黒褐色～暗褐色土、下層は地山の黄褐色粘質土が主体をなし、2層には炭化物や草木灰が多量に混入する。全体的に混土状であることから、埋め戻しによる土層と推定される。

出土遺物はない。



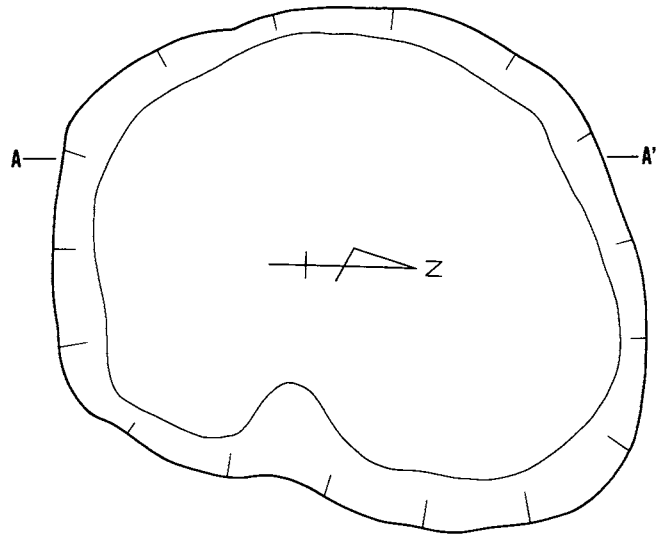
第140図 (53) D II f 8 土坑-2

D II f 8 土坑-2

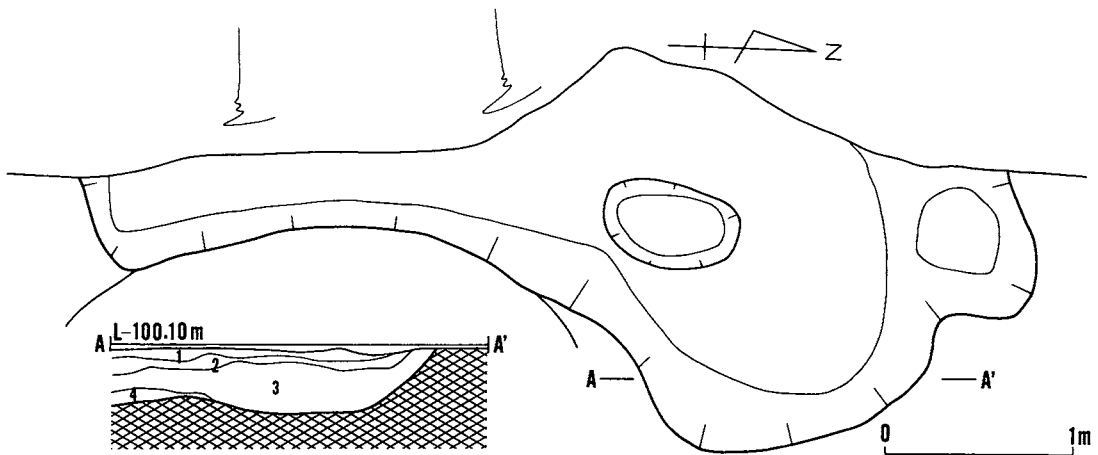
- 1 10Y R 2/3 黒褐色シルト、淡黄色粘土との混入
- 2 淡黄色粘土と黄褐色火山灰土との混入

D II i 5 土坑

- 1 10Y R 2/2 黒褐色シルト、黄褐色土が混入
- 2 10Y R 3/2 黒褐色シルト、炭や灰が多く混入
- 3 10Y R 5/6 黄褐色火山灰土
- 4 10Y R 3/4 暗褐色シルト、黄褐色土が多く混入
- 5 10Y R 5/4 にぶい黄褐色火山灰土、黒褐色土が混入



第142図 (55) D II i 5 土坑



第141図 (54) D II h 5 土坑

D II h 5 土坑

- 1 10Y R 2/2 黒褐色シルト、黄褐色土が混入
- 2 10Y R 3/2 黒褐色シルト、炭や灰が混入
- 3 10Y R 3/4 暗褐色シルト、黄褐色土が多く混入
- 4 10Y R 5/4 にぶい黄褐色火山灰土、黒色土がブロック状に混入

(56) D III f 3 土坑 (第143図、写真図版24)

中央部のやや南西寄りに柱穴状土坑と重複して位置する。開口部径1.05m×0.8m、底部径0.65m×0.45m、深さ0.7mの規模をもち、平面形は長軸方向がN-4°-Wを示す若干不整な楕円形で、断面形はピーカー形を示す。底面は平坦で副穴はない。壁はほぼ垂直に立ち上がり、大きな崩落はない。埋土の上半は黒褐色土、下半は黄褐色土が主体をなすが、5層に分けられている。径40cmの大きな角礫が上層に投げ込まれ、1と3層には多くの小石が混入し、全体が軟らかい。土性や土層の状況から埋め戻されたものと推定される。形態は縄文時代の土坑に似るが埋土が相違する。

遺物の出土はない。

(57) D III f 8 土坑-1 (第144図、写真図版24)

中央部のやや南寄りに位置し、柱穴状土坑と重複する。開口部径1.65m×0.55m、底部径1.25m×1.2m、深さ0.2mの規模をもち、平面形は不整な方形で浅い皿形の断面形を示す。底面はやや凹凸がみられ、壁の立ち上がりは緩やかに湾曲している。副穴はない。埋土は4層に分けられるが全体に黄褐色土粒が多く混入し、人為的に埋め戻したものと考えられる。

遺物は出土していない。

(58) D III f 8 土坑-2 (第145図)

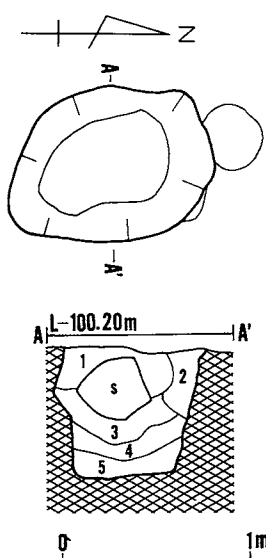
中央部のやや南寄りに位置し、開田時の削平が弱かった農道の上に立地する。多くの柱穴状土坑と重複し、形状の不明な部分もある。開口部径1.5m×1.1m、底部径1.15m×0.75m、深さ0.15mの規模をもち、平面形は長軸方向をN-12°-Eにもつ楕円形で、浅い皿形の断面形を示す。底面にやや凹凸があり、壁の立ち上がりは緩やかで南側は不明瞭である。埋土は黒褐色土を主体とする。

出土遺物はない。

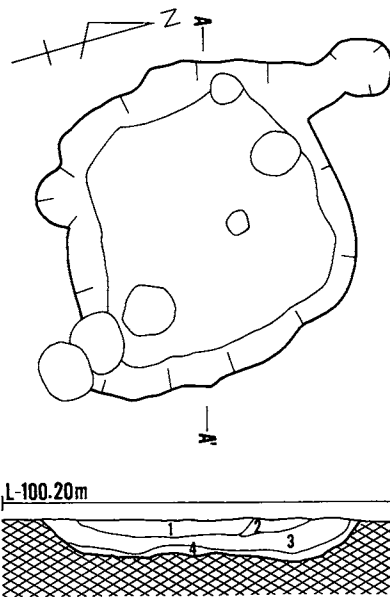
(59) D III g 3 土坑 (第146図、写真図版25)

中央部のやや南西寄りの柱穴状土坑の密集する地点に位置し、2箇所で柱穴状土坑と重複する。開口部径0.8m×0.75m、底部径0.45m×0.25m、深さ0.3mの規模をもち、平面形は隅丸方形で断面は逆台形を示している。底面は平坦で、壁は若干内傾して立ち上がる。副穴はない。埋土は4層に分けられるが、黒色土～黒褐色土が主体をなす。中層部には草木灰の混入がみられる。レンズ状の堆積を示すことから、自然埋没と推定される。

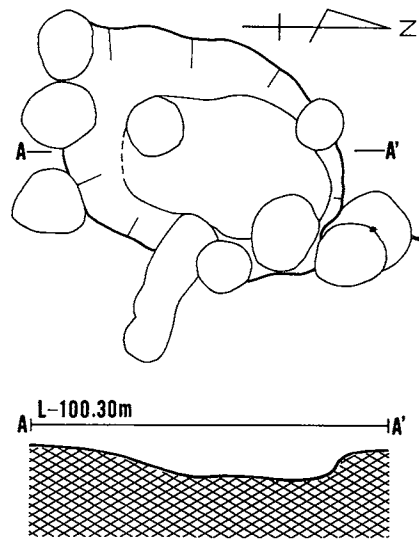
遺物には土師器坏1点、甕2点、鉄製品2点、縄文時代の石器1点がある。土師器は坏、甕



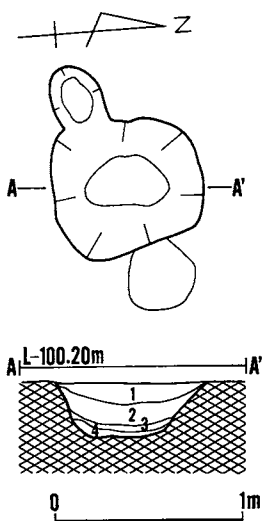
第143図 (56) D III f 3 土坑



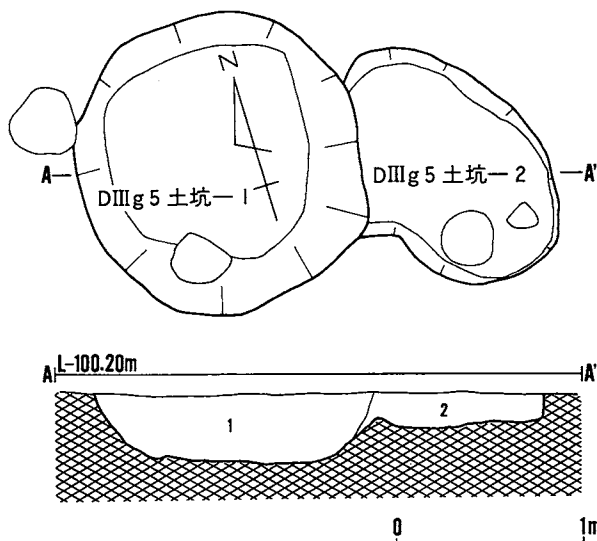
第144図 (57) D III f 8 土坑一



第145図 (58) D III f 8 土坑二



第146図 (59) D III g 3 土坑



第147図 (60) D III g 5 土坑一・(61) D III g 5 土坑二

D III f 3 土坑

- 1 10Y R 3/2 黒褐色 シルト、1~3cmの小石混入
- 2 7.5Y R 5/6 明褐色 火山灰土
- 3 2.5Y 3/2 黒褐色 シルト、火山灰土が混入、小石や炭混入
- 4 2.5Y 7/3 浅黄色 粘土と黄褐色土との混土
- 5 7.5Y R 4/3 褐色 火山灰土

D III f 8 土坑一

- 1 10Y R 3/3 暗褐色 シルトと黄褐色土半々の混土
- 2 10Y R 5/6 黄褐色 火山灰土
- 3 10Y R 2/2 黒褐色 シルト、黄褐色土が混入、炭が若干混入
- 4 10Y R 6/6 明黄褐色 火山灰土、暗褐色土が若干混入

D III g 3 土坑

- 1 10Y R 3/2 黒褐色 シルト、黄褐色土が混入
- 2 10Y R 2/1 黒色 シルト、灰が混入
- 3 10Y R 3/3 暗褐色 シルト、黄褐色土が混入
- 4 10Y R 1.7/1 黒色 シルト、黄褐色土が多く混入

D III g 5 土坑一と二

- 1 10Y R 2/3 黒褐色 シルト、黄褐色土が混入、炭が混入
- 2 10Y R 2/3 黒褐色 シルトと黄褐色土半々の混土

とも実測不能な小破片で、いずれも平安時代に属する。鉄製品の1点(108)は錆化が著しく形状が不明であるが、別の1点(第349図109)は刀子の茎部の破片である。

(60) D III g 5 土坑—1 (第147図、写真図版25)

中央部のやや南寄りに位置し、当土坑より古いD III g 5 土坑—2と柱穴状土坑が重複する。開口部径1.6m×1.5m、底部径1.1m×1.05m、深さ0.35mの規模をもち、平面形は円形で鍋底形の断面形を示す。底面は平坦で壁の立ち上がりは湾曲し、良く形の整った土坑である。副穴はない。埋土は黒褐色土の単層であるが、黄褐色土が粒状や小塊状に混入することから、埋め戻されたと推定される。

遺物の出土はない。

(61) D III g 5 土坑—2 (第147図、写真図版25)

中央部のやや南寄りに位置し、当土坑より新しいD III g 5 土坑—1と重複し、南側の壁が柱穴状土坑によって壊されている。開口部径1.45m×0.9m、底部径1.3m×0.75m、深さ0.2mの規模をもち、平面形は長軸方向をN—26°—Wにもつ楕円形で、浅い皿形の断面形を示す。底面は平坦で壁の立ち上がりは垂直に近い。埋土は単層で、黒褐色と地山の黄褐色粘土質土が半々で混在する土である。おそらく埋め戻しであろう。

遺物は出土していない。

(62) D III g 6 土坑—1 (第148図、写真図版25)

中央部南寄りに、落ち込み遺構やD III g 6 土坑—2、同3と隣接して位置する。開口部径1.15m×0.9m、底部径0.95m×0.4m、深さ0.5mの規模をもち、平面形は長軸方向をN—76°—Eにもつやや不整な楕円形を示し、短軸方向の断面形は逆台形状である。底面は平坦で壁の立ち上がりは垂直に近いが、南壁に若干崩落がみられる。副穴はない。埋土は5層に細分されるが、黒褐色土と黄褐色土の互層を成す。中層に中礫を多く混在し、全体にしまりが無い。レンズ状の堆積を示すことから自然埋没と推定される。

遺物として須恵器杯の実測不能な小破片が1点出土している。

(63) D III g 6 土坑—2 (第149図、写真図版25)

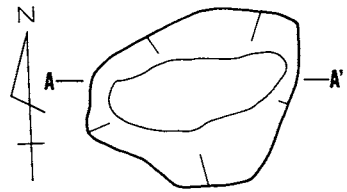
中央部南寄りに落ち込み遺構と重複して位置する。断面の観察では当土坑の方が新しい。弧状の溝が西端の深い土坑部分に流れ込むような形状を示すことから、最深部分のみを土坑としてみると、開口部径1.35m×1m、底部径0.5m×0.3m、深さ0.5mの規模をもち、平面形は長

DIII g 6 土坑一 I

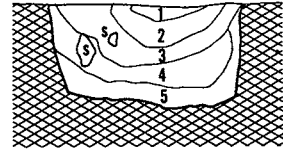
- | | | | |
|---|-----------|--------|-------------------|
| 1 | 10Y R 5/4 | にぶい黄褐色 | 火山灰土と黒色土半々の混土 |
| 2 | 10Y R 2/2 | 黒褐色 | シルト、黄褐色土が混入 |
| 3 | 10Y R 6/6 | 明黄褐色 | 火山灰土、黒褐色土が混入 |
| 4 | 10Y R 4/2 | 灰黄褐色 | シルト、1~5cmの小石が多く混入 |
| 5 | 10Y R 2/2 | 黒褐色 | シルト、黄褐色土が混入 |

DIII g 6 土坑一 2

- | | | | |
|---|-------------|------|--------------------|
| 1 | 10Y R 4/2 | 灰黄褐色 | 粘土質土、小石が混入、黒褐色土混入 |
| 2 | 10Y R 1.1/1 | 黒色 | シルト、炭が混入 |
| 3 | 10Y R 6/2 | 灰黄褐色 | 粘土質土、小石が混入、黒褐色土が混入 |
| 4 | 10Y R 3/1 | 黒褐色 | シルト、浅黄褐色粘土が混入 |
| 5 | 10Y R 2/1 | 黒色 | シルト、炭が主体 |
| 6 | 2.5Y 3/2 | 黒褐色 | シルト、浅黄褐色粘土が多く混入 |



A—100.20m—A'

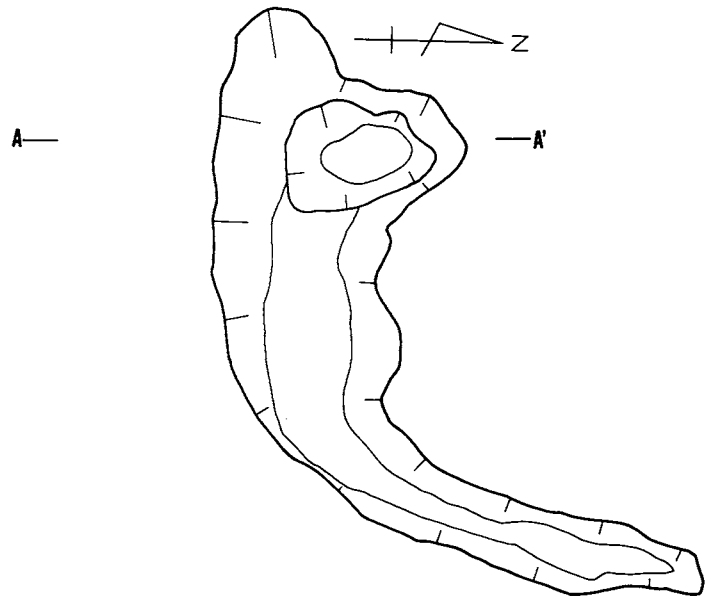


0 1m

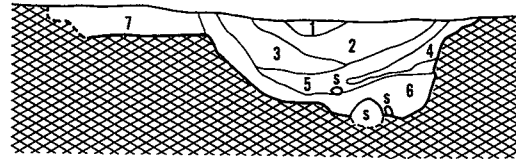
第148図 (62) D III g 6 土坑一 I

軸方向をN-3°-Wに示す楕円形で、断面形は擗鉢形を示す。底面は中央部がもっとも低く壁もなだらかに外傾する。埋土は黒褐色土が主体をなすが、6層に分けられている。2層と5層には多量の炭化物が混入し、上層には灰黄褐色粘土とともに小礫が混じる。レンズ状の堆積状況を示すことから自然埋没である。

出土遺物には土師器坏1点、甕2点、須恵器甕1点、鉄製品1点がある。土師器はロクロ成形で非内面黒色処理の坏(第374図129)の回転糸切り痕をもつ底部破片である。須恵器は、1点是小破片で他の1点(第374図130)は器表に並行叩き具



A—100.20m—A'



0 1m

第149図 (63) D III g 6 土坑一 2

痕、裏面に円形凸面の当て具痕をもつ大甕の破片である。鉄製品は両釘(第371図112)の完形品である。

(64) D III g 6 土坑—3 (第150図)

中央部南寄りに位置し、D III g 6 土坑—1 や同 2 と落ち込み遺構が隣接し D III g 6 溝跡の東端部と重複するが、新旧関係は不明である。開口部径3.15m×1.8m、底部径2.5m×1.5m、深さ0.35mの規模をもち、平面形は長軸方向をN-9°-Eにもつ若干不整な楕円形で、断面形は鍋底形である。底面はほぼ平坦で壁の立ち上がりも緩やかである。埋土は5層に分けられるが、黒褐色土と暗褐色土を主体とし地山の黄褐色土が全体に混入する。上層は埋め戻しによる土層と考えられるが、大半は自然埋没によるものであろう。5層は柱穴状土坑の埋土である。

遺物の出土はない。

(65) D III h 2 土坑 (第151図、写真図版25)

南西部に位置し、柱穴状土坑と7箇所重複する。開口部径2.5m×1.95m、底部径2.2m×1.65m、深さ0.4mの規模をもち、平面形は長軸方向をN-64°-Wに示す楕円形で、断面形は鍋底形を示す。底面には0.02m~0.05mの凹凸があり、壁は崩落もみられず湾曲して立ち上がる。重複する柱穴状土坑が当土坑に伴うかは不明である。埋土は9層に細分され、黒色土や黒褐色土が大部分を占める。全体に草木灰や炭化物粒、小礫が多量に混入している。地山の黄褐色粘質土が塊状に入ることから、埋め戻しによる土層と推定される。

須恵器1点、青磁1点の破片が出土している。須恵器(第374図131)は器表にヘラ削り、裏面にロクロ目を残す甕の体部破片である。青磁(96)は口縁部が端反りする碗の体部上位の小破片である。15世紀頃の製品と考えられる。

(66) D III h 3 土坑 (第152図、写真図版25)

南西部に位置し、柱穴状土坑と4箇所重複する。開口部径2.1m×1.8m、底部径1.5m×1.25m、深さ0.3mの規模をもち、平面形は隅丸方形で鍋底形の断面形を示す。底面には極く小さな凹凸があるもののほぼ平坦で、壁は崩落もほとんどなく垂直に近い立ち上がりである。重複する柱穴状土坑が共伴するかは不明である。埋土は地山の黄褐色土が混入した黒褐色土が主体をなすが、4層に細分される。全体に硬くしまり、土性から埋め戻しによる土層と考えられる。

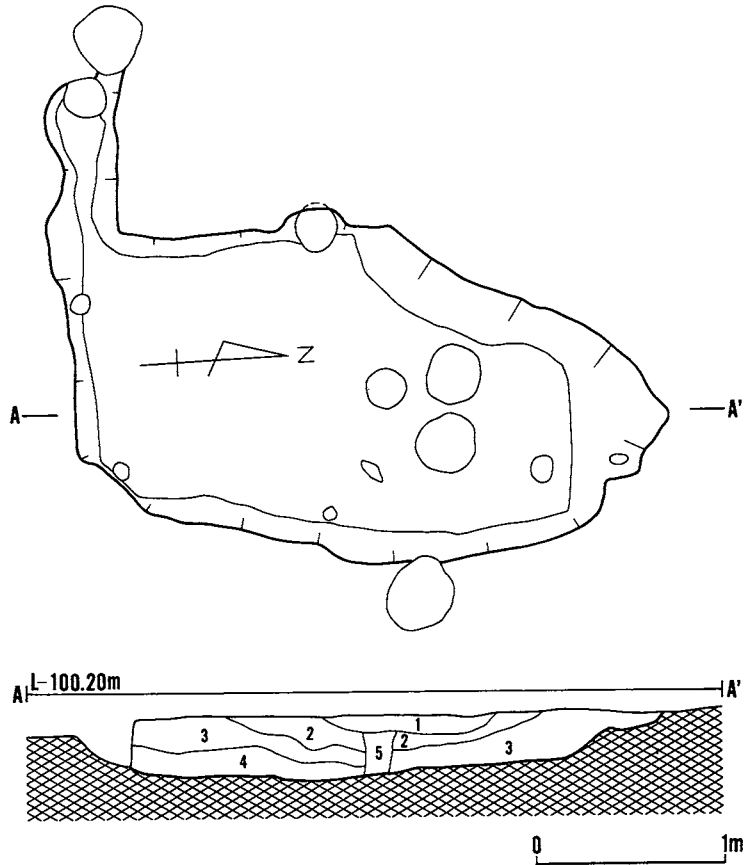
遺物として土師器の甕3点と須恵器甕1点の破片が出土している。土師器は小破片のため実測不能なロクロ成形された破片である。須恵器(第374図132)は表裏に並行文をもつ大甕の体部破片である。

(67) D III h 8 土坑—1

中央部の南寄りに位置し、D III h 8 土坑—2と隣接する。開口部径1.45m×1.35m、底部径1.15m×1.1m、深さ0.45mの規模をもち、平面形は円形で断面形は浅いビーカー形を示す。底面は平坦で中央に径20cm位の角礫があり、酸化鉄分によって底面が硬く赤化している。壁は崩落もなく垂直に近い立ち上がりである。埋土は4層に分けられるが、黒褐色から暗褐色の土である。上層には小礫や炭化物が混じる。地山の黄褐色土の混入状況から埋め戻しによる土層と推定される。

遺物には石臼1点がある。石臼(第333図10)は上部の縁部のみを残留する穀臼の上臼で、両輝石安山岩を石材としている。

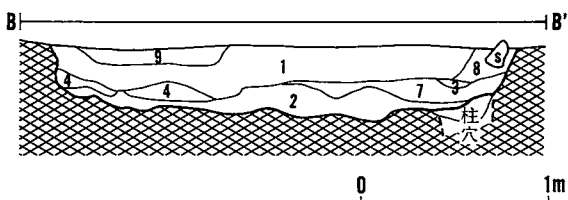
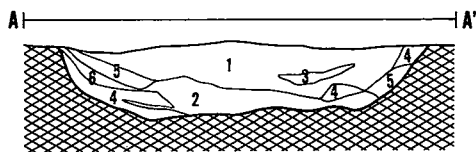
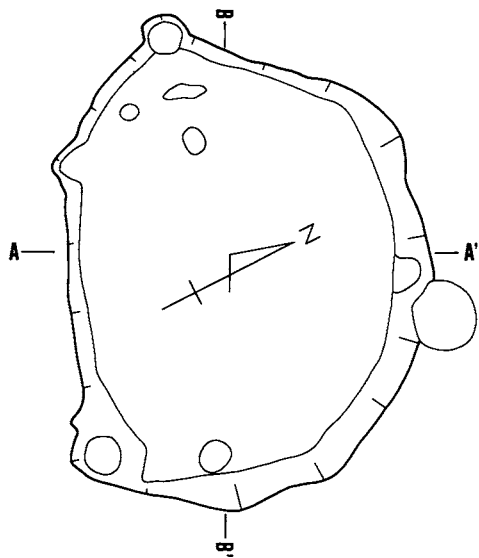
(第153図、写真図版26)



第150図 (64) D III g 6 土坑—3

D III g 6 土坑—3

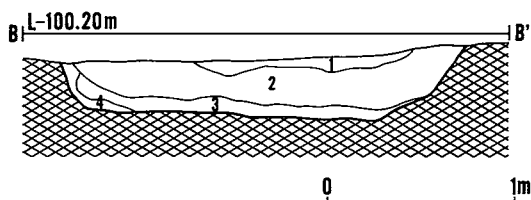
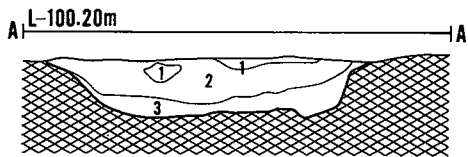
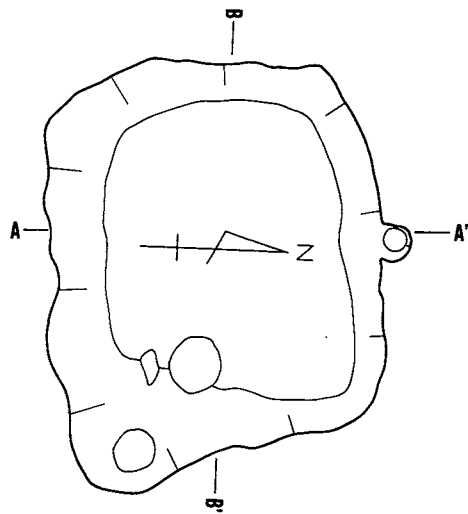
- 1 10Y R 6/6 明黄褐色 火山灰土と黒褐色土半々の混土、炭が混入
- 2 10Y R 3/1 黒褐色 シルト、炭が混入
- 3 10Y R 3/3 暗褐色 シルト、黄褐色土が多く混入、炭が混入
- 4 10Y R 2/2 黒褐色 シルト、黄褐色土がしま状に混入
- 5 10Y R 4/3 にぶい黄褐色 シルト、暗褐色土や炭が混入



第151図 (65) D III h 2 土坑

D III h 2 土坑

- | | | | | | |
|---|-----------|---|-----|-----|--------------------|
| 1 | 10Y R 3/1 | 黒 | 褐 | 色 | シルト、灰や炭、小石が混入 |
| 2 | 10Y R 2/1 | 黒 | 褐色 | 色 | シルト、灰や炭が多く混入 |
| 3 | 10Y R 2/2 | 黒 | 褐褐色 | 色 | シルト、灰が多く混入 |
| 4 | 10Y R 5/6 | 黄 | 褐褐色 | 色 | 火山灰土、崩落土 |
| 5 | 10Y R 2/2 | 黒 | 褐褐色 | 色 | シルト、灰や炭が混入 |
| 6 | 10Y R 4/1 | 褐 | 灰褐色 | 色 | 火山灰土、灰が多く混入 |
| 7 | 10Y R 3/3 | 暗 | 褐色 | 色 | シルト |
| 8 | 10Y R 5/3 | に | ぶい | 黄褐色 | 火山灰土、1~3cmの小石が多く混入 |
| 9 | 2.5Y 8/3 | 淡 | 黄色 | 色 | 粘土質土、黒褐色土が混入 |



第152図 (66) D III h 3 土坑

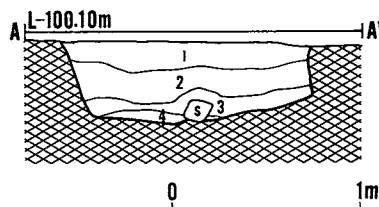
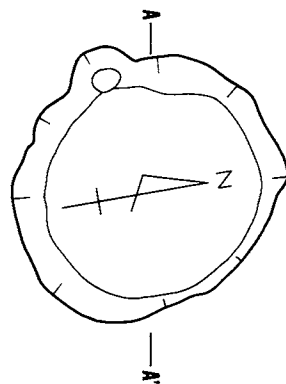
D III h 3 土坑

- | | | | | |
|---|-----------|---|----|-------------|
| 1 | 10Y R 5/6 | 黄 | 褐色 | 火山灰土 |
| 2 | 10Y R 3/1 | 黒 | 褐色 | シルト、黄褐色土が混入 |
| 3 | 10Y R 2/2 | 黒 | 褐色 | シルト、黄褐色土が混入 |
| 4 | 10Y R 5/6 | 黄 | 褐色 | 火山灰土の崩落土 |

(68) D III h 8 土坑—2 (第154図、写真図版26)

中央部南側に位置し、本土坑より古いD III i 8 土坑—2と重複する。開口部径3.8m×2.7m、底部径3.35m×2.9m、深さ0.5mの規模をもち、平面形は長軸方向をN-20°-Eにもつ楕円形で、鍋底形の断面形を示す。底面は平坦であるが北へ徐々に低くなり、その高低差は10cm位である。壁の立ち上がりは垂直に近い。埋土は8層に分けられるが、黒褐色土や黒色土が縞状に水平堆積し、間層に黄褐色土が挟在する。上~中位の3層や8層は特に草木灰や炭化物が多く含まれる。

遺物として土師器杯1点、青磁2点、漆膜が出土している。土師器はロクロ成形された非内面黒色処理の実測不能な小破片である。青磁の1点(第316図8)は口縁部を玉縁状に仕上げ、見込み部を一段低くする丸皿である。別の1点(第318図60)は口縁部から体部下位までを残存する口縁部の端反りする碗の破片である。胎土は濃い灰色、釉は透明度の高い深い緑色を示し、胎土のロクロ目がみられる。15世紀~16世紀頃の製品であろう。漆膜には黒地に赤漆で文様が描かれることから、椀か皿の漆と推定される。



第153図 (67) D III h 8 土坑—1

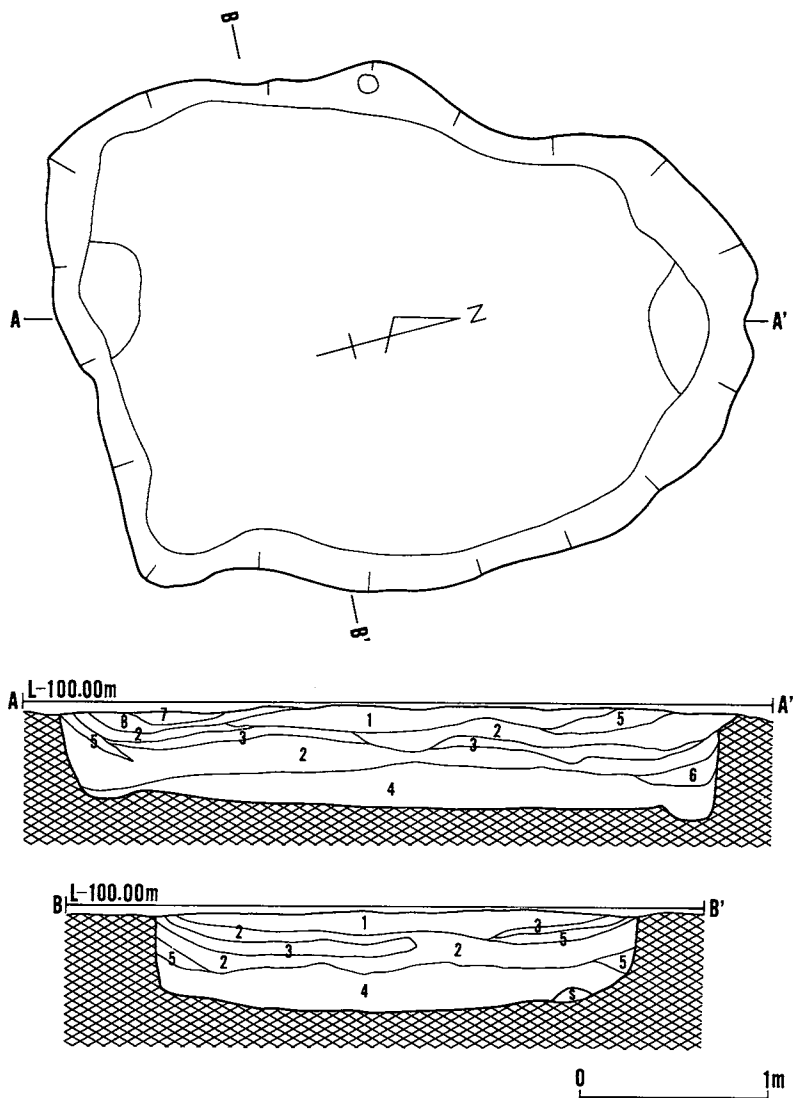
D III h 8 土坑

- | | | | |
|---|------------|------|-------------------|
| 1 | 10Y R 2/2 | 黒褐色 | シルト、淡黄色粘土や小石、炭が混入 |
| 2 | 7.5Y R 3/4 | 暗褐色 | 粘土質シルト、黄褐色土が混入 |
| 3 | 7.5Y R 2/2 | 黒褐色 | シルト、黄褐色土が混入 |
| 4 | 10Y R 6/8 | 明黄褐色 | 火山灰土、酸化し赤味を帯び、かたい |

(69) D III i 1 土坑 (第155図、写真図版26)

南西部に位置し、本土坑より古いD III i 1 土坑と重複する。開口部径2.3m×1.95m、底部径1.95m×1.6m、深さ0.5mの規模をもち、平面形は長軸方向がN-30°-Eを示す楕円形で、断面形は鍋底形を示す。底面は平坦で、壁は崩落もなく垂直に近い立ち上がりを示す。埋土は8層に細分されるが、地山の褐色粘土質土や褐色土を主体とした上半部は、小礫や黒褐色土の混入状況から埋め戻しによる土層と考えられるが、下半部は自然埋没によると推定される。

遺物は出土していない。



第154図 (68)D III h 8 土坑-2

DIIIh 8 土坑-2

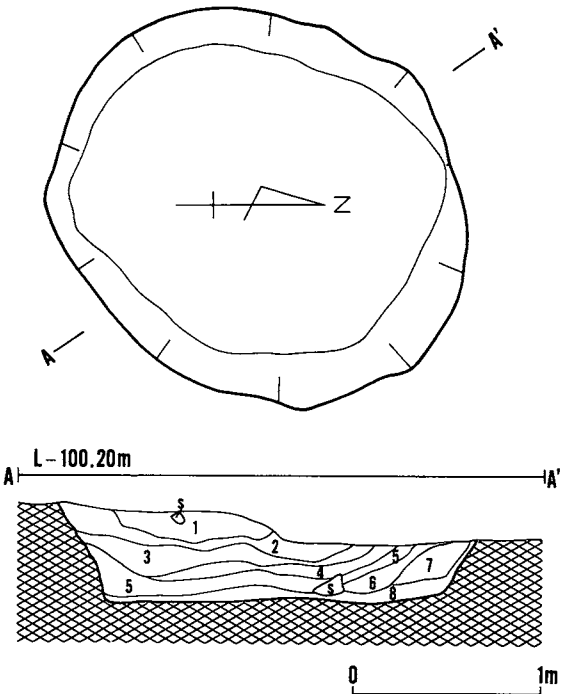
- | | | | |
|---|-------------|-----|----------------------|
| 1 | 10Y R 3/3 | 暗褐色 | シルト、黄褐色土が混入、炭が混入 |
| 2 | 10Y R 2/2 | 黒褐色 | シルト、黄褐色土が混入、2'層は灰が混入 |
| 3 | 10Y R 1.7/1 | 黒色 | シルト、炭が多く混入、灰も含む |
| 4 | 10Y R 1.7/1 | 黒色 | シルト、炭が多く混入、黄褐色土が混入 |
| 5 | 10Y R 5/6 | 黄褐色 | 火山灰土 |
| 6 | 10Y R 5/6 | 黄褐色 | 火山灰土と黒褐色土半々の混土 |
| 7 | 10Y R 2/2 | 黒褐色 | シルト |
| 8 | 10Y R 2/3 | 黒褐色 | シルト、灰が多く混入 |

(70) D III i 3 土坑

(第156図、写真図版26)

南側に位置し、落ち込み遺構の下位に検出されたが、本土坑が落ち込み遺構の西側に壁が削平を受けているため浅い。開口部径2.75m×2.1m、底部径2.3m×1.6m、深さ0.4mの規模をもち、平面形は長軸方向をN-6°-Eにもつ隅丸の三角形状を示し、断面形は鍋底形である。底面は凹凸があり、壁は湾曲して立ち上がる。埋土は7層に細分されるが大半は落ち込み遺構の埋土で、4層～6層が本土坑の埋土と考えられる。

遺物には青磁3点と縄文時代の石器1点がある。青磁3点の内1点(第317図30)は見込み部に印花文を付した高台脇から底部を残す碗の破片、別の1点(第317図39)は器表に線描蓮弁文の文様を付す碗の口縁部破片、残る1点(95)は実測不能な碗の小破片である。30は15世紀、39は15世紀末から16世紀頃の製品であろう。



第155図 (69) D III i 1 土坑

D III i 1 土坑

- | | | | |
|---|------------|-----|----------------------|
| 1 | 5 Y 8/4 | 淡黄色 | 粘土質土、0.5~3cmの小石が多く混入 |
| 2 | 2.5 Y 3/1 | 黒褐色 | シルト、小石が若干混入 |
| 3 | 10 Y R 4/4 | 褐褐色 | 火山灰土、黒褐色が混入、炭若干混入 |
| 4 | 10 Y R 3/1 | 黒褐色 | シルト、5層に似る |
| 5 | 10 Y R 2/2 | 黒褐色 | シルト、黄褐色土が多く混入 |
| 6 | 10 Y R 4/4 | 褐褐色 | 火山灰土、暗褐色土が混入 |
| 7 | 10 Y R 4/6 | 褐褐色 | 火山灰土、崩落土 |
| 8 | 2.5 Y 7/3 | 浅黄色 | 粘土質土、暗褐色土が若干混入 |

(71) D III i 4 土坑

(第157図、写真図版26)

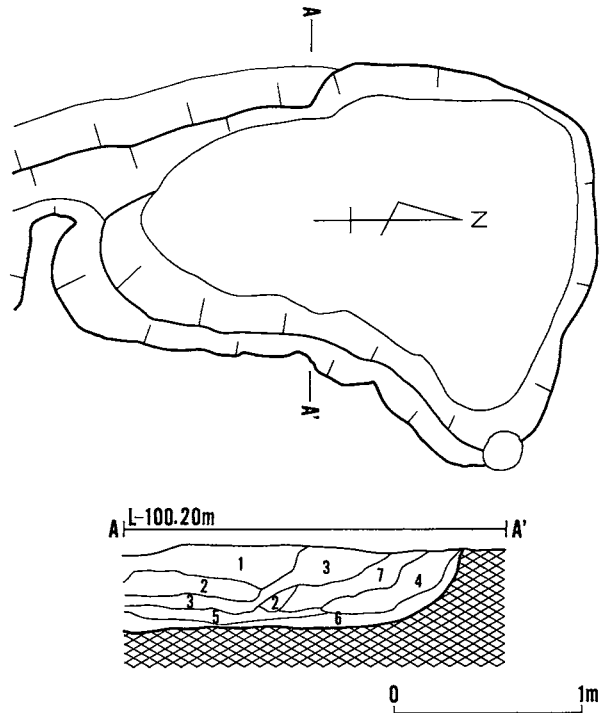
南側に位置し、D III i 3 土坑、D III i 5 土坑と落ち込み遺構に隣接して検出されたが、新旧関係は不明である。開口部径2.2m×1.3m、底部径1.75m×0.9m、深さ0.4mの規模をもち、平面形は長軸方向をN-90°-Eにもつ楕円形で、断面形は鍋底形を示す。底面は若干凹凸があり、壁は湾曲して立ち上がる。埋土は3層に分けられるが、地山の褐色粘土質土と黒褐色土が混土状態で堆積することから埋め戻された土層であろう。底面は酸化鉄分のため赤化して硬い。出土遺物はない。

(72) D III i 5 土坑

(第158図、写真図版26)

南側に位置し、落ち込み遺構に隣接しD III i 4 土坑の南側に立地する。開口部径2.6m×1.95m、底部径2.4m×1.7m、深さ0.45mの規模をもち、平面形は長軸方向がN-84°-Eを示す楕円形で、鍋底形の断面形をもつ。底面はやや凹凸をもつが平坦で、壁の立ち上がりは垂直に近い。埋土は8層に分けられるが、3層の黄褐色土が大部分を占め、上層や下層に炭化物を主体とする層が挟在する。全体が混土状態を示すことから埋め戻しによる土層と考えられる。

土師器の坏と甕が各1点、漆膜が出土している。土師器はいずれもロクロ成形された実測不能の小破片である。漆膜(12)は赤漆であることから、膳や椀のものと推定される。



第156図 (70)D III i 3 土坑

D III i 3 土坑

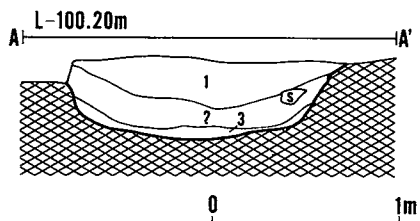
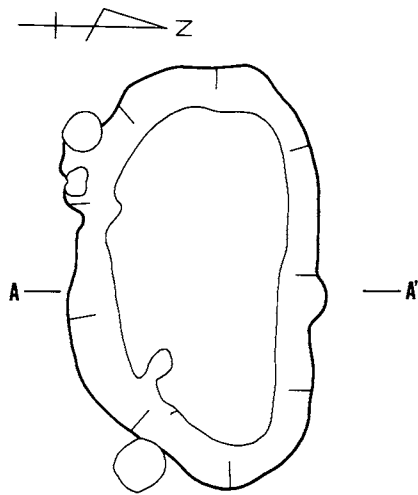
- | | | | |
|---|-------------|-----|-----------------|
| 1 | 10Y R 3 / 1 | 黒褐色 | シルト、小石や炭が混入 |
| 2 | 2.5Y 7 / 4 | 浅黄色 | 粘土質土、小石が混入 |
| 3 | 10Y R 3 / 2 | 黒褐色 | シルト、炭が混入、酸化部分あり |
| 4 | 2.5Y 8 / 4 | 淡黄色 | 粘土質土 |
| 5 | 10Y R 5 / 6 | 黄褐色 | 火山灰土、黒褐色土が若干混入 |
| 6 | 10Y R 3 / 1 | 黒褐色 | シルト、黄褐色と灰が混入 |
| 7 | 10Y R 3 / 4 | 暗褐色 | シルト、黄褐色土が混入 |

(73) D III i 7 土坑-2

(第159図、写真図版27)

南側に位置し、当土坑より新しい落ち込み遺構と古いD III i 7 陥し穴状遺構と重複する。開口部径推定1m×0.8m、底部径0.8m×0.6m、深さ0.15mの規模と、落ち込み遺構との重複によって大半が削平を受け、底部のみが浅い凹みとして残存する。平面形は長軸方向をN-76°-Wにもつ楕円形と推定され、断面形は皿形を示している。底面は平坦であるが中央部が幾分低い。埋土は不明である。

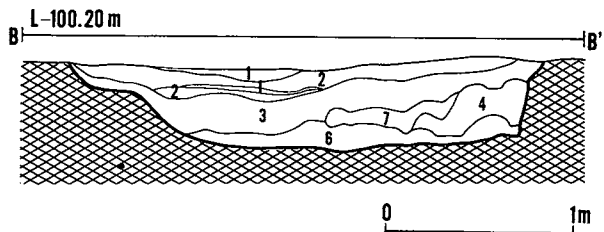
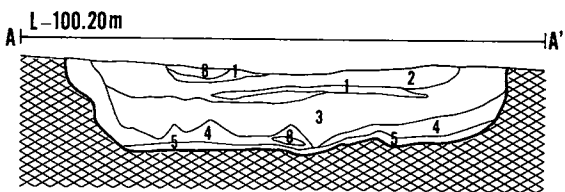
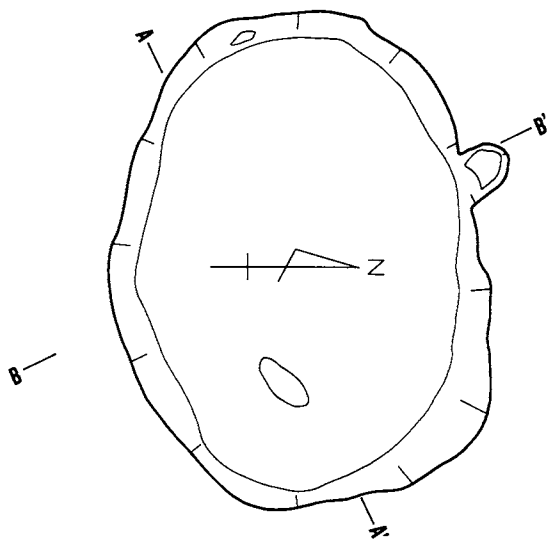
遺物の出土はない。



第157図 (71)D III i 4 土坑

D III i 4 土坑

- 1 2.5Y 8/4 淡黄色 粘土質土と暗褐色土半々の混土、かたい
- 2 10Y R 2/2 黒褐色 シルト、黄褐色土が混入
- 3 2.5Y 8/3 淡黄色 粘土質土、黒褐色土が混入、赤く酸化する



第158図 (72)D III i 5 土坑

D III i 5 土坑

- 1 10Y R 1.7/1 黒色 シルト、炭が主体
- 2 10Y R 3/1 黒褐色 粘土質土
- 3 10Y R 4/3 にぶい黄褐色 粘土質土、かたい
- 4 10Y R 3/3 暗褐色 シルト
- 5 10Y R 1.7/1 黒色 シルト、炭が主体
- 6 10Y R 1.7/1 黒色 シルトと黄褐色土半々の混土
- 7 10Y R 6/6 明黄褐色 火山灰土
- 8 10Y R 2/2 黒褐色 シルト

(74) D III i 8 土坑—1 (160図、写真図版27)

南側に位置し、D III i 8 土坑—2 と重複するが新旧関係は不明である。多くの柱穴状土坑によって攪乱を受け、底部のみが残存する。開口部径1.6m×1.05m、底部径1.4m×0.9m、深さ0.1mの規模をもち、平面形は長軸方向をN—50°—Wにもつ楕円形で皿形の断面形を示す。底面は平坦で壁はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は黒褐色土の単層である。

遺物の出土はない。

(75) D III i 9 土坑 (第161図、写真図版27)

南側にD III j 8 土坑と隣接して位置する。開田時の削平によって底部のみが残存する。開口部径2m×1.3m、底部径1.85m×1.15m、深さ0.1mの規模をもち、平面形は長軸方向をN—11°—Eにもつ楕円形で、断面形は皿形を示す。底面は凹凸もなく平坦である。埋土は地山の黄褐色土粒や炭化物粒が混入した黒褐色土の単層である。

遺物の出土はない。

(76) D III j 1 土坑 (第162図、写真図版)

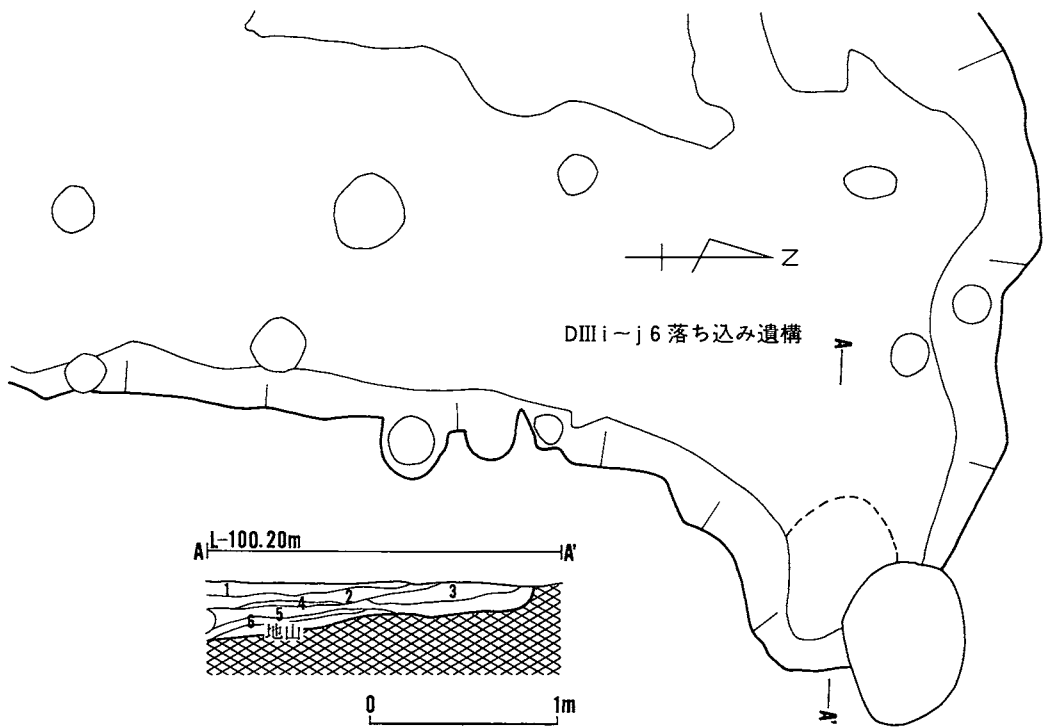
南西部に位置し、当土坑より新しいD III i 1 土坑と重複し、D III j 2 土坑と隣接する。開口部径4.05m×2.5m、底部径3.6m×2.2m、深さ0.4mの規模をもち、平面形は長軸方向をN—26°—Eにもつ楕円形を示し、断面形は鍋底形である。底面は平坦で、壁の立ち上がりは緩やかに湾曲している。埋土は地山の黄褐色粘土質土の混入した暗褐色土が主体をなすが、10層に細分される。全体に硬くしまり、上層には小礫が多く混じり、中層と下層には草木灰や炭化物が多く混入する層が挟在する。土性や堆積状況を見ると、上層は人為的に埋め戻した土層と推定され、中～下層は自然埋没と考えられる。9層と10層は上位からの柱穴状土坑の埋土である。

遺物には表裏にロクロ目をもつ瓶の口縁部破片と推定される須恵器1点(第374図138)がある。

(77) D III j 2 土坑 (第163図、写真図版27)

南西部に位置し、D III j 1 土坑と落ち込み遺構に隣接している。開口部径2.9m×1.7m、底部径2.2m×1m、深さ0.55mの規模をもち、平面形は長軸方向がN—11°—Eを示す中央がやや括れた不整な楕円形で、断面形は鍋底形を示す。底面は平坦で壁の立ち上がりは緩やかに湾曲する。また、底面には2個の角礫がみられ、さらに上位からと推定される柱穴状土坑が2箇所で見られる。埋土は7層に分けられ、上層部は埋め戻されたと考えられる地山の黄褐色土や暗褐色土が主体であるが、下層部は黒色土や黒褐色土が堆積し、自然埋没の土層と推定される。

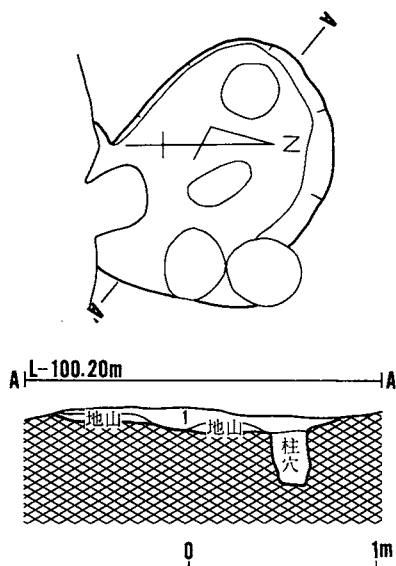
遺物には土師器杯3点、須恵器甕1点、青磁1点、鉄製品1点、貨幣1点、砥石1点がある。



第159図 (73) D III i 7 土坑-2

DIII i 7 土坑-2

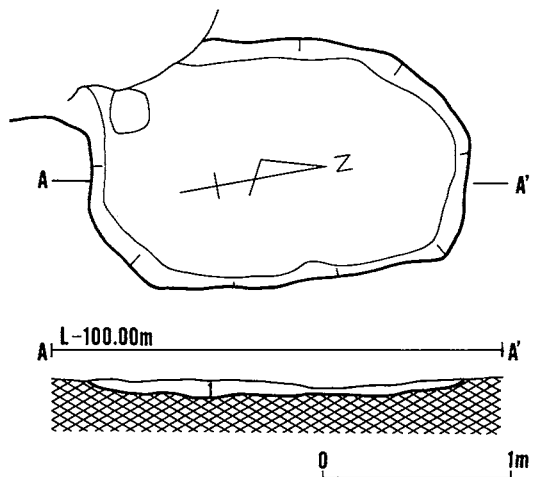
- | | | | |
|---|-------------|-----|---------------|
| 1 | 10Y R 3/1 | 黒褐色 | シルト、灰を非常に多く含む |
| 2 | 2.5Y 8/4 | 淡黄色 | 粘土質土、黒褐色土が混入 |
| 3 | 10Y R 2/3 | 黒褐色 | シルト、灰を多く含む |
| 4 | 10Y R 5/6 | 黄褐色 | 粘土と黒褐色土の混土 |
| 5 | 10Y R 1.7/1 | 黒色 | シルト、灰を含む |
| 6 | 10Y R 1.7/1 | 黒色 | シルト、灰や灰、焼土の屑 |



第160図 (74) D III i 8 土坑-1

DIII i 8 土坑

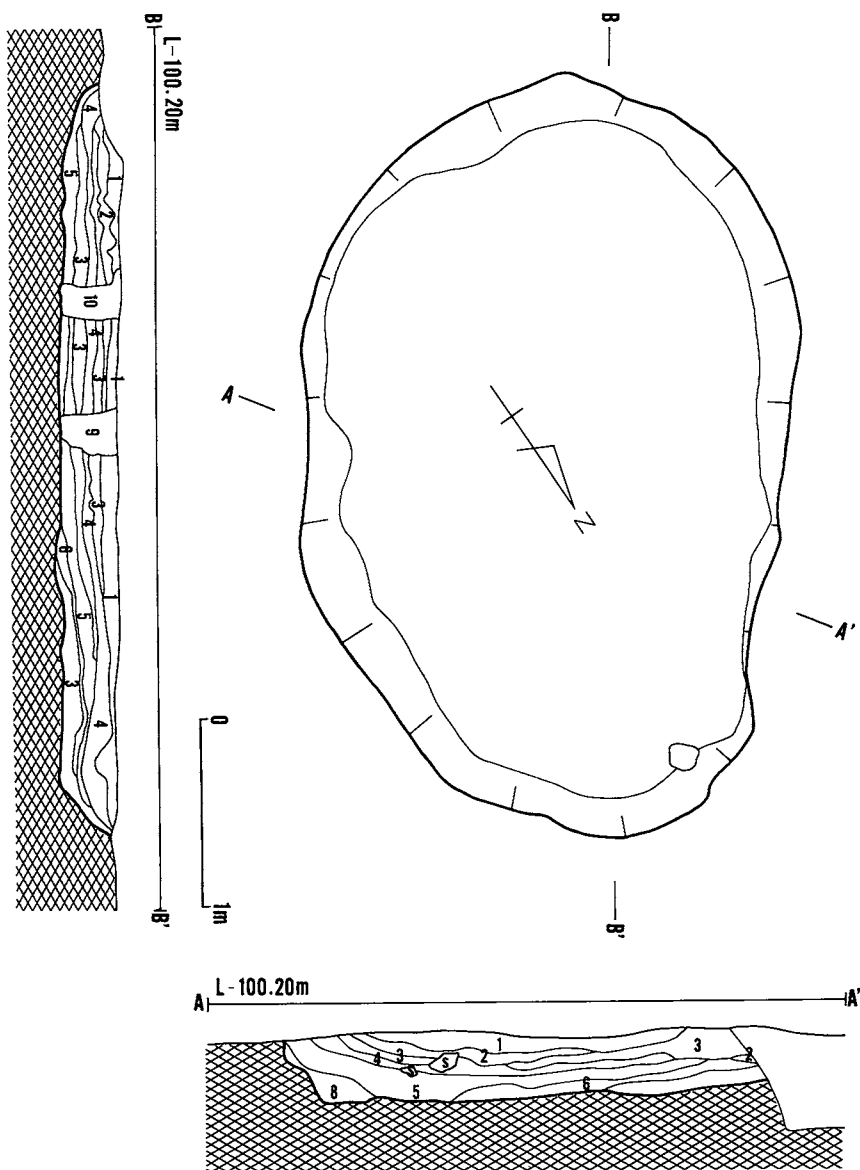
- | | | | |
|---|-----------|-----|---------------|
| 1 | 10Y R 3/2 | 黒褐色 | シルト、黄褐色土や炭が混入 |
|---|-----------|-----|---------------|



第161図 (75) D III i 9 土坑

DIII i 9 土坑

- | | | | |
|---|-----------|-----|---------------|
| 1 | 10Y R 3/2 | 黒褐色 | シルト、黄褐色土や炭が混入 |
|---|-----------|-----|---------------|

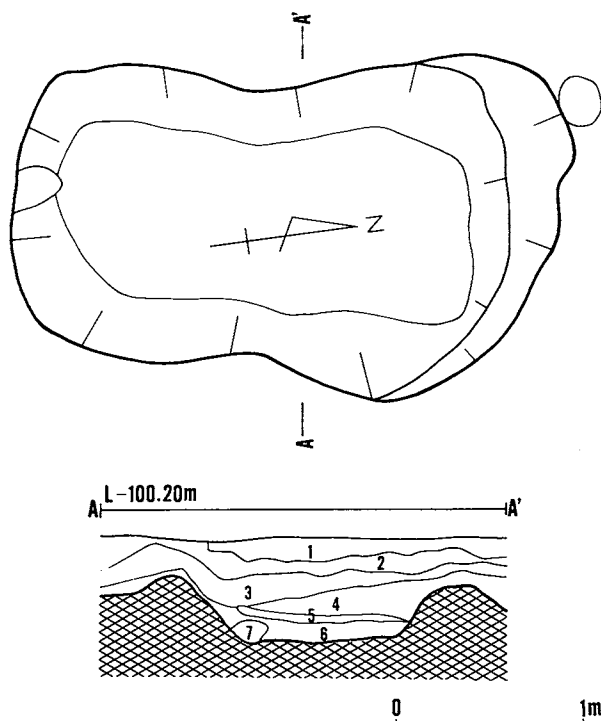


第162図 (76) D III j I 土坑

D III j I 土坑

- | | | | |
|----|---------------|--------|---------------------|
| 1 | 5 Y 8 / 4 | 淡黄色 | 粘土、0.5~3cmの小石が多く混入 |
| 2 | 10 Y R 3 / 3 | 暗褐色 | シルト |
| 3 | 10 Y R 5 / 6 | 黄褐色 | 火山灰土 |
| 4 | 10 Y R 2 / 2 | 黒褐色 | シルト、炭や灰が混入 |
| 5 | 10 Y R 3 / 3 | 暗褐色 | シルト、淡黄色粘土や黄褐色土が混入 |
| 6 | 10 Y R 2 / 2 | 黒褐色 | 〜黒色シルト、灰が多く混入 |
| 7 | 10 Y R 2 / 2 | 黒褐色 | シルト、黄褐色土が若干混入 |
| 8 | 7.5 Y R 3 / 3 | 暗褐色 | シルト、0.5~2cmの小石が多く混入 |
| 9 | 10 Y R 2 / 2 | 黒褐色 | 火山灰土、暗褐色土が混入 |
| 10 | 10 Y R 5 / 4 | にぶい黄褐色 | |

土師器は、1点(第374図139)はロクロ成形の内面黒色処理された体部～底部を残す。他は実測不能はロクロ成形された小破片である。須恵器(第374図140)は器表に並行叩き具痕をもつ大甕の破片である。青磁(12)は実測不能な皿の体上部小破片である。15世紀頃の製品であろう。鉄製品(113)は錆化が著しく原形不明である。貨幣(第351図30)は永樂通寶である。砥石(第328図43)は縦14.4cm、横3cm、重さ182gの大きさを持ち、細砂質凝灰岩を使っている。



第163図 (77)D III j 2 土坑

D III j 2 土坑

1	5 Y 8/4	淡黄色	粘土質土、0.5～3cmの小石が多く混入
2	2.5 Y 3/1	暗褐色	シルト、黄褐色土が多く混入
3	7.5 Y R 4/6	褐褐色	火山灰土
4	10 Y R 2/2	黒褐色	シルト、黄褐色土や炭が混入
5	10 Y R 1.7/1	黒色	シルト、
6	10 Y R 2/1	黒色	シルト、灰が混入
7	2.5 Y 8/4	淡黄色	粘土質土のプロック

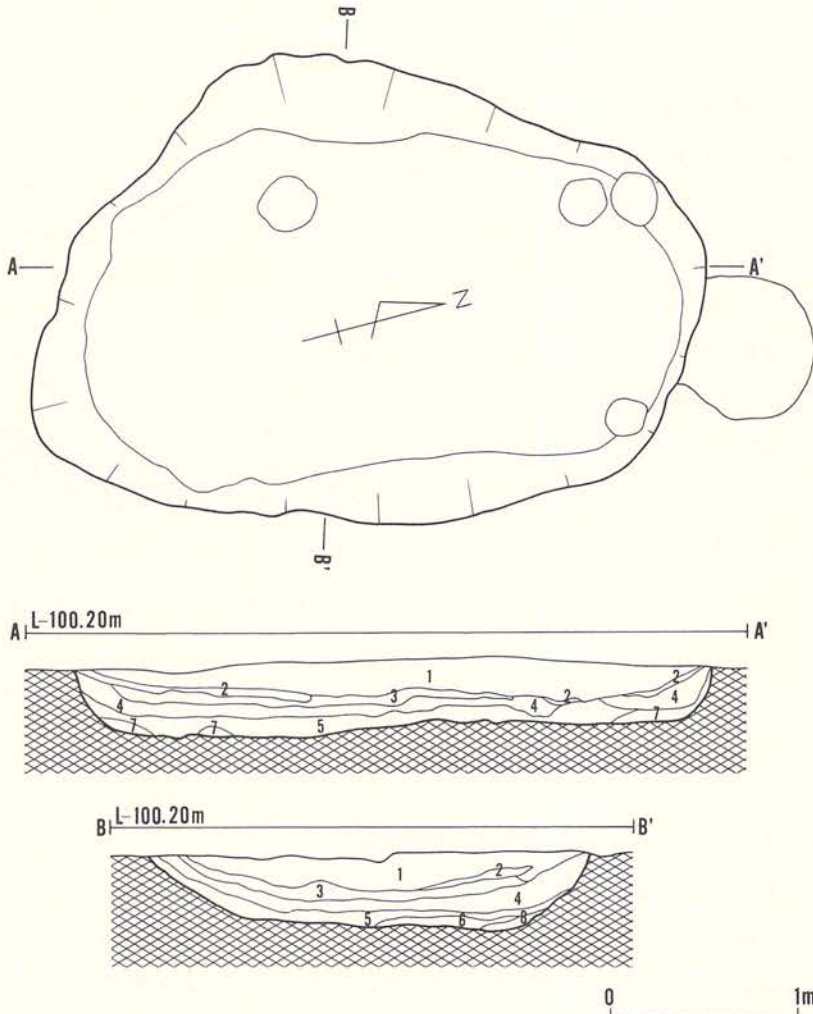
(78) D III j 7 土坑—1 (第164図、写真図版27)

南側に位置し、当土坑よりも古いE III a 8 陥し穴状遺構とD III j 8 土坑—3と重複し、E III a 7 土坑と隣接する。開口部径3.45m×2.5m、底部径3.2m×1.75m、深さ0.4mの規模をもち、平面形は長軸方向をN-14°-Eにもつ不整な楕円形で、鍋底形の断面形を示す。底面は平坦で、壁は緩く湾曲して立ち上がる。上位からの柱穴状土坑が4箇所で見られる。埋土は地山の黄褐色粘質土が混入した黒褐色土が主体をなす。

遺物は実測不能な須恵器の小破片が1点出土している。

(79) D III j 8 土坑—1 (第165図、写真図版28)

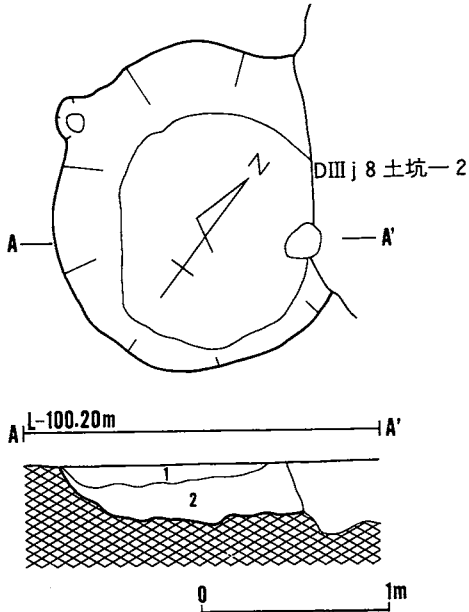
南側に位置し、当土坑より新しいD III j 8 土坑—2と重複する。開口部径1.7m×1.6m、底部径1.25m×1.15m、深さ0.3mの規模をもち、平面形は円形で鍋底形の断面形を示す。底面には凹凸があり、壁の立ち上がりは緩く湾曲している。埋土は2層に分けられ、地山の黄褐色粘質土主体の混土である。おそらく埋め戻しによる土層であろう。



第164図 (78)D III j 7 土坑一 I

D III j 7 土坑一 I

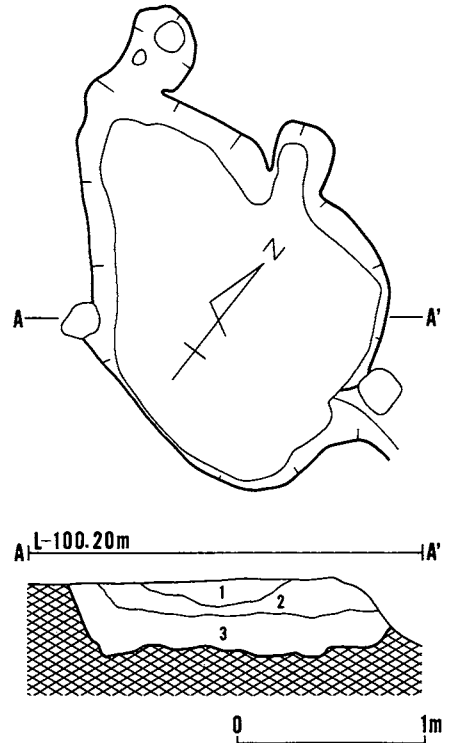
- | | | | | | |
|---|--------------|--------|----|---|------------------|
| 1 | 10 Y R 2/3 | 黒 | 褐 | 色 | シルト、黄褐色土が混入 |
| 2 | 10 Y R 1.7/1 | 黒 | 褐色 | 色 | シルト、炭が主体 |
| 3 | 10 Y R 2/2 | 黒 | 褐色 | 色 | シルト、炭がブロック状に混入 |
| 4 | 10 Y R 4/4 | 褐 | 褐色 | 色 | 火山灰土や粘土と暗褐色土との混土 |
| 5 | 10 Y R 2/3 | 黒 | 褐色 | 色 | シルト、炭が若干混入 |
| 6 | 10 Y R 1.7/1 | 黒 | 褐色 | 色 | シルト |
| 7 | 10 Y R 7/4 | にぶい黄褐色 | | | 粘土質土、暗褐色土が若干混入 |
| 8 | 10 Y R 7/3 | にぶい黄褐色 | | | 粘土質土 |



第165図 (79) D III j 8 土坑-1

DIII j 8 土坑-1

- 1 10Y R 7/4 にぶい黄橙色 粘土質土、暗褐色土が混入
- 2 10Y R 4/2 灰黄褐色 粘土質土、炭が若干混入



第166図 (80) D III j 8 土坑-2

DIII j 8 土坑-2

- 1 10Y R 2/2 黒褐色 シルト
- 2 10Y R 6/6 明黄褐色 火山灰土、暗褐色土が混入
- 3 10Y R 2/2 黒褐色 シルト、黄褐色土が混入、炭が若干混入

(80) D III j 8 土坑-2 (第166図、写真図版28)

南側に位置し、当土坑より古いDIII j 8 土坑-1と重複し、DIII i 8 土坑-1とDIII i 9 土坑と隣接している。開口部径2.3m×1.55m、底部径1.95m×1.35m、深さ0.4mの規模をもち、平面形は長軸方向をN-68°-Wにもつ不整な楕円形で、鍋底形の断面形を示す。底面には凹凸があり、壁の立ち上がりは垂直に近い。上位からの柱穴状土坑によって壁が壊れている。埋土は3層に分けられるが、黄褐色粘質土が混入する黒褐色土が主体であることから、埋め戻しによる土層と考えられる。

出土遺物はない。

(81) DIV a 1 土坑 (第167図、写真図版28)

中央のやや東寄りに位置し、当土坑より古いDIV a 1 陥し穴状遺構と重複する。開口部径1.25

m×1.15m、底部径1.1m×0.95m、深さ0.15mの規模をもち、平面形はやや不整な円形で、浅い皿形の断面形を示す。底面は平坦で壁は湾曲して緩やかに立ち上がる。埋土は、上層が黄褐色土の混入した黒褐色土、下層が黄褐色土の2層に分けられ、ともに埋め戻した土層である。出土遺物はない。

(82) D IV a 2 土坑 (第168図、写真図版28)

中央やや東寄りの柱穴状土坑の比較的少ない区域に位置する。開口部径3m×1.45m、底部径2.65m×1.2m、深さ0.25mの規模をもち、平面形は長軸方向をN-85°-Eにもつ長径の長い楕円形で、浅い皿形の断面形を示す。底面は平坦で壁の立ち上がりは垂直に近い。埋土は3層に分けられるが、大部分を占める1層と2層は黄褐色土との混土状態を示すことから、埋め戻しによる土層であろう。

遺物には縦6.1cm、横2.9cm、重さ55gの大きさをもつ細砂質凝灰岩を石材とした砥石(第329図51)が1点ある。

(83) D IV d 3 土坑 (第169図、写真図版28)

南東側の柱穴状土坑の比較的少ない区域に位置する。開口部径1.7m×1.45m、底部径1.4m×1m、深さ0.2mの規模をもち、平面形は長軸方向をN-54°-Wにもつ楕円形で、断面形は皿形を示す。底面は平坦で壁の立ち上がりは湾曲している。埋土は5層に細分されるが、埋め戻された土層と推定される黄褐色土の混入した黒褐色土が主体を占める。

遺物の出土はない。

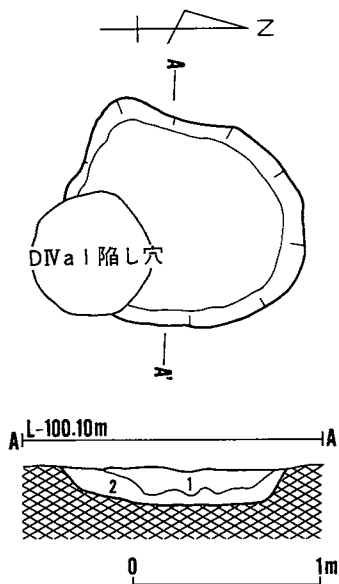
(84) D IV e 2 土坑 (第170図、写真図版28)

南東側に位置し、柱穴状土坑と3箇所重複している。開口部径1.2m×0.8m、底部径1.1m×0.7m、深さ0.3mの規模をもち、平面形は長軸方向をN-30°-Wにもつ楕円形で鍋底形の断面形を示す。底面は平坦で壁の立ち上がりは垂直に近い。北壁は重複する柱穴状土坑によって壊されている。埋土は黒褐色土の単層である。

遺物は出土していない。

(85) D IV g 7 土坑 (第171図、写真図版28)

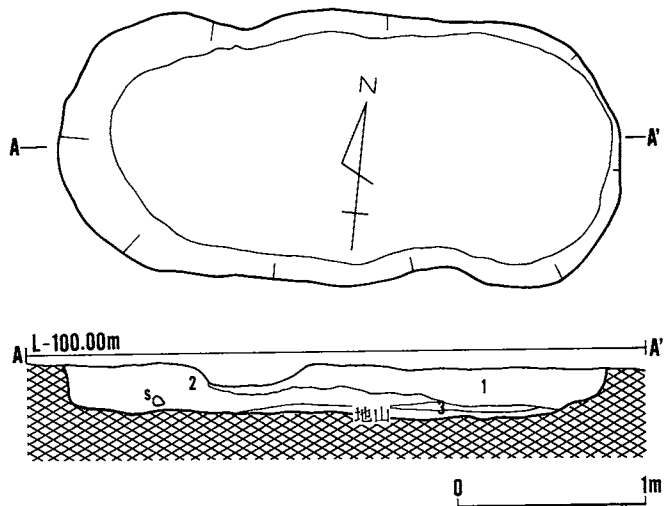
南東部に位置し、開田時の削平を受けなかった農道の縁で検出されたが、南半分は失われている。開口部1.95m×1.4m以上、底部径1.7m×1.25m以上、深さ0.25mの規模をもち、平面形は長軸方向をN-81°-Wにもつ楕円形と推定され、浅い皿形の断面形を示す。底面はほぼ平



第167図 (81) D IV a 1 土坑

DIV a 1 土坑

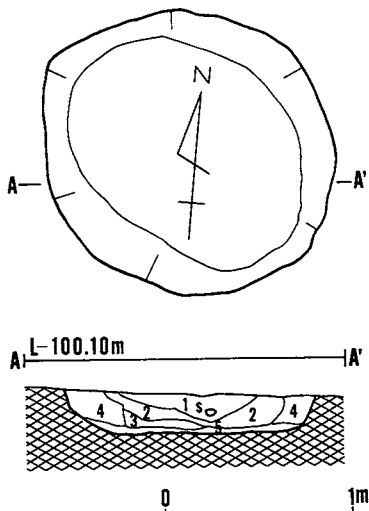
- 1 10Y R 2/3 黒褐色 シルト、黄褐色土が混入
- 2 10Y R 5/6 黄褐色 火山灰土、暗褐色土が若干混入



第168図 (82) D IV a 2 土坑

DIV a 2 土坑

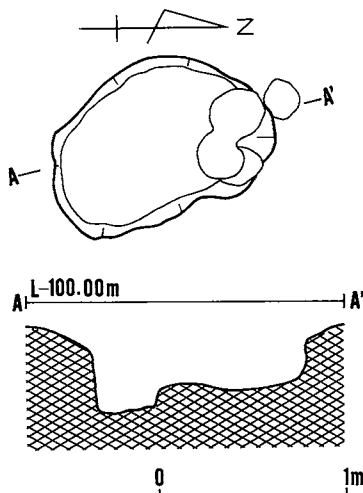
- 1 10Y R 2/2 黒褐色 シルト、黄褐色土が混入
- 2 10Y R 5/4 にぶい黄褐色 火山灰土、黒褐色土が混入
- 3 10Y R 2/2 黒褐色 シルト



第169図 (83) D IV d 3 土坑

DIV d 3 土坑

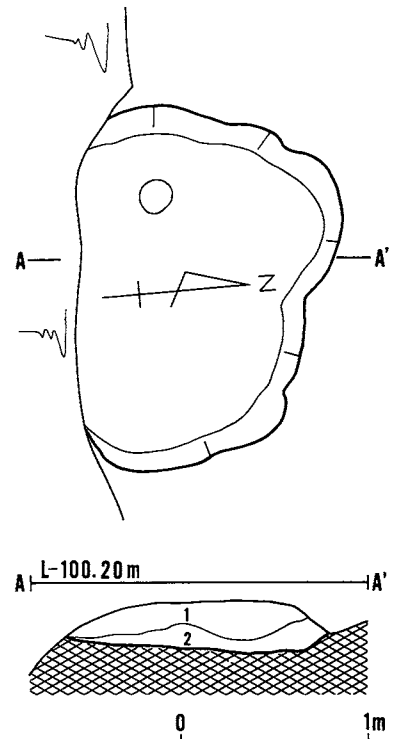
- 1 10Y R 3/1 黒褐色 シルト、黄褐色土や炭、灰が混入
- 2 10Y R 2/2 黒褐色 シルト、明黄褐色土がブロック状に混入
- 3 10Y R 2/3 黒褐色 シルト
- 4 7.5Y R 5/6 明褐色 粘土、下位の灰のうすい層が入る
- 5 10Y R 6/4 にぶい黄褐色 火山灰土、地山で掘りすぎ



第170図 (84) D IV e 2 土坑

DIV g 7 土坑

- 1 5Y 8/3 淡黄色 粘土質土、黒褐色土や炭が混入
- 2 10Y R 5/4 にぶい黄褐色 粘土質シルト、暗褐色土が若干混入



第171図 (85) D IV g 7 土坑

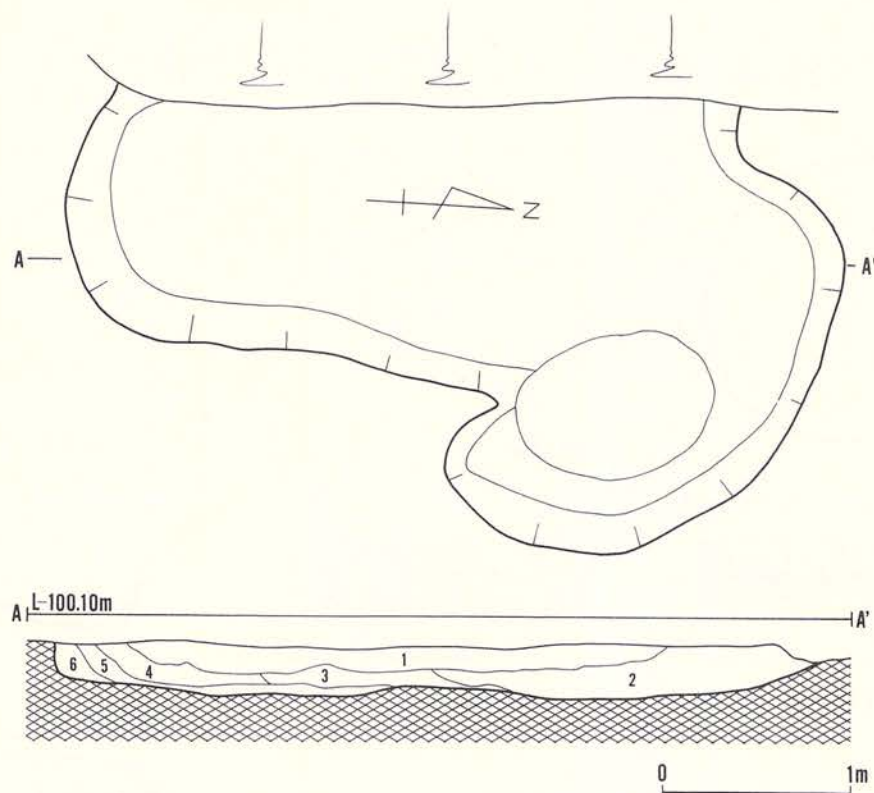
坦であるが、壁には若干凹凸がある。埋土は、黄褐色粘土質土を主体とした黒褐色土との混土が主体で、2層に分けられる。非常に硬く、埋め戻しによる土層である。

出土遺物はない。

(86) E II a 5 土坑 (第172図、写真図版29)

南西端に位置し、開田時の削平によって西半分は失われている。単独の遺構ではなく、複数の土坑が重複したものと思われる。開口部の長径4.15m、底部の長径3.75m、深さ0.3mの規模をもち、平面形は長軸方向をN-30°-Eにもつ楕円形の土坑が重複し合った形状を示し、浅い皿形の断面形である。底面は広い部分と張り出し部とも中央に向かって低くなり、壁の立ち上がりは緩やかである。埋土は黒褐色土や暗褐色土を主体とし7層に細分されるが、各層が混土状態を示し硬いことから、埋め戻しによる土層と考えられる。1・2層には炭化物が含まれる。

出土遺物は哺乳類の肩甲骨(第357図21)1点がある。



第172図 (86) E II a 5 土坑

E II a 5 土坑

- | | | | | | | | |
|---|-----------|-----|----------------|---|-----------|-----|-------------------|
| 1 | 10Y R 2/3 | 黒褐色 | シルト、炭や黄褐色土が混入 | 5 | 10Y R 4/4 | 褐色 | 火山灰土に暗褐色土が混入 |
| 2 | 10Y R 2/2 | 黒褐色 | シルト、炭が混入 | 6 | 10Y R 5/6 | 黄褐色 | 火山灰土、暗褐色土が若干混入 |
| 3 | 10Y R 4/6 | 褐色 | 火山灰土主体に黒褐色土が混入 | 7 | 5 Y 8/4 | 淡黄色 | 粘土質土、黒褐色土や黄褐色土が混入 |
| 4 | 10Y R 3/4 | 暗褐色 | シルト、黄褐色土が若干混入 | | | | |

(87) E II a 10土坑 (第173図、写真図版29)

南西部に位置し、E II a 10陥し穴状遺構と隣接する。開口部径2.45m×2.4m、底部径1.8×1.65m、深さ0.3mの規模をもち、平面形は円形で鍋底形の断面形を示す。底面は平坦で、壁の立ち上がりは湾曲しているが、崩落はほとんどない。副穴はないが、壁際に上位からの柱穴状土坑が3箇所重複する。埋土は5層に分けられるが、黄褐色土を塊状に混入した黒褐色土が大部分を占め、全体が硬くしまる。土性や堆積状況からいずれも埋め戻された土層と考えられる。

出土遺物には木片と韃の羽口がある。木片(49)は器種不明の実測不能な小破片である。羽口(5)は実測不能の先端部の小破片である。

(88) E II b 6土坑 (第174図、写真図版29)

南西部に位置し、南側は開田時の削平によって失われている。開口部径1.6m、底部径1.25m、深さ0.2mの規模をもち、平面形は円形と推定され浅い皿形の断面形を示す。底面は平坦で壁は湾曲して緩く立ち上がる。埋土は3層に分けられ、黄褐色粘土質土と黒褐色土の混土が主体をなすことから、埋め戻しによる土層と推定される。

出土遺物はない。

(89) E III a 1土坑 (第175図、写真図版29)

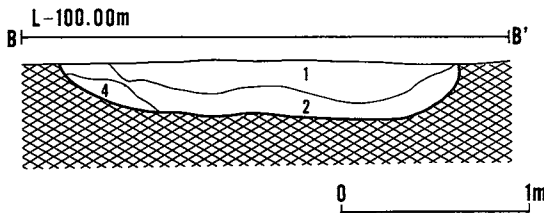
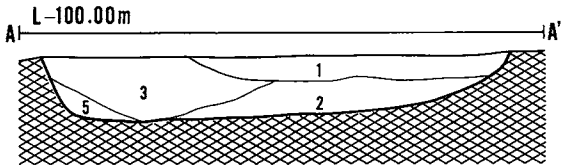
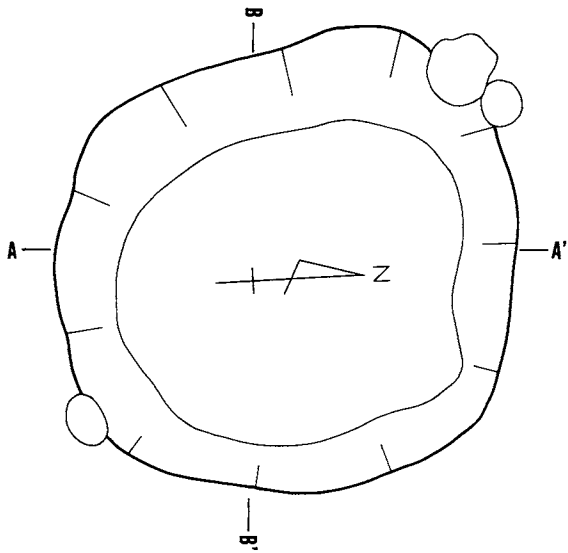
南西側に位置し、上位の柱穴状土坑と数箇所重複する。開口部径2.15m×2.05m、底部径1.7m×1.65m、深さ0.45mの規模をもち、平面形は不整な円形で鍋底形の断面形を示す。底面は平坦で壁の立ち上がりは垂直に近いが、若干凹凸がある。埋土は8層に細分されるが、多くは地山と黄褐色粘質土と黒褐色土との混土状をなし、いずれも硬くしまっていることから、人為的に埋め戻した土層と考えられる。7層と8層は上位からの柱穴状土坑の埋土である。

出土遺物には、長さ8.6cm、直径7.8cm、重さ305gの大きさをもち、断面円形で中心部に円孔を貫通する半割になった韃の羽口(第357図4)が出土している。

(90) E III a 4土坑 (第176図)

南端の中央付近に位置し、落ち込み遺構の底面から検出されたため、底部のみが残存する。あるいは落ち込み遺構の部分的な凹みとも考えられる。開口部径1.9m×1.45m、底部径1.7m×1m、深さ0.2mの規模をもち、平面形は長軸方向がN-45°-Wを示す不整な楕円形を示し、断面形は皿形である。底面は平坦で、壁はほぼ垂直である。埋土は黒褐色土の単層である。

出土遺物はない。



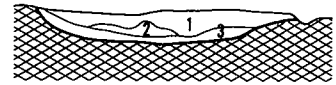
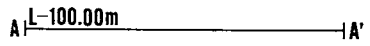
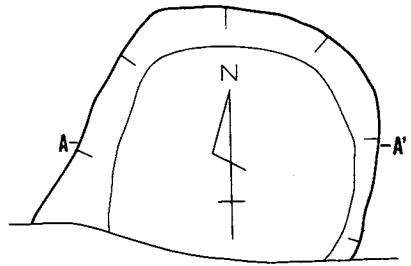
第173図 (87) E II a 10土坑

E II a 10土坑

- | | | | |
|---|-----------|-----|----------------|
| 1 | 10Y R 3/2 | 黒褐色 | シルト、黄褐色土が多く混入 |
| 2 | 10Y R 2/2 | 黒褐色 | シルト、黄褐色土が混入 |
| 3 | 10Y R 3/3 | 黄褐色 | 火山灰土と黒褐色土半々の混入 |
| 4 | 10Y R 3/3 | 暗褐色 | シルト、黄褐色土が多く混入 |
| 5 | 10Y R 2/2 | 黒褐色 | シルト |

E III a 1土坑

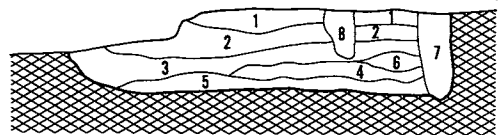
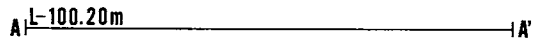
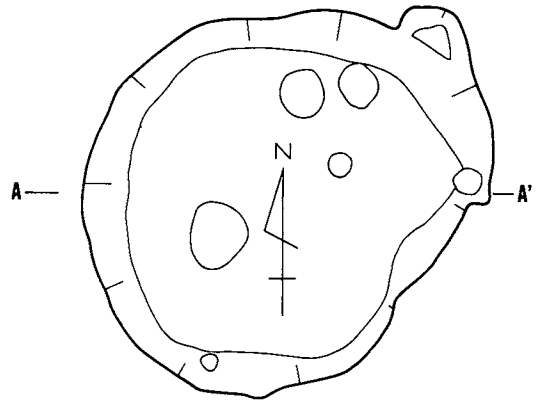
- | | | | |
|---|-----------|--------|-------------------|
| 1 | 10Y R 4/6 | 褐色 | 火山灰土主体に暗褐色土が混入 |
| 2 | 10Y R 5/4 | にぶい黄褐色 | 火山灰土、1層に似る |
| 3 | 10Y R 2/2 | 黒褐色 | シルト、黄褐色土が混入 |
| 4 | 10Y R 3/3 | 暗褐色 | シルト、黄褐色土が多く混入 |
| 5 | 10Y R 2/2 | 黒褐色 | シルト、炭が混入 |
| 6 | 10Y B 3/3 | 暗褐色 | シルト、黄褐色土が混入、4層に似る |
| 7 | 10Y R 6/4 | にぶい黄褐色 | 粘土、黒褐色土が混入 |
| 8 | 10Y R 2/3 | 黒褐色 | シルト |



第174図 (88) E II b 6土坑

E II b 6土坑

- | | | | |
|---|-----------|-----|--------------|
| 1 | 10Y R 4/4 | 褐色 | 粘土と黒褐色土の混入 |
| 2 | 10Y R 2/1 | 黒色 | シルト、かたい |
| 3 | 10Y R 5/6 | 黄褐色 | 火山灰土、暗褐色土が混入 |



第175図 (89) E III a 1土坑

(91) E III a 7 土坑

(第177図、写真図版29)

南側の中央付近に位置し、新旧関係の不明な E III j 7 土坑-1、落ち込み遺構、E III a 7 陥し穴状遺構-1 と重複する。南北と東の壁は重複遺構の削平によって不明である。開口部径1.5m、底部径1.15m、深さ0.25mの規模をもち、平面形は円形と推定され、断面形は皿形を示す。底面は平坦で壁は湾曲して立ち上がり、上位からの柱穴状土坑が1箇所みられる。埋土は3層に分けられるが、黒褐色土や地山の黄褐色粘土質土などが混土状に堆積し、一部に炭化物や草木灰が混入する。埋め戻しによる土層と考えられる。

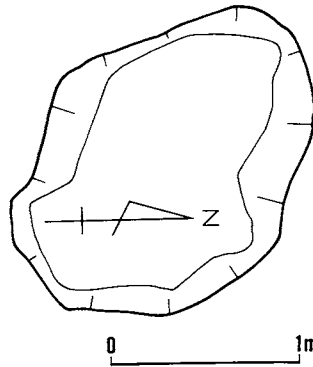
出土遺物はない。

(92) E IV b 1 土坑-1

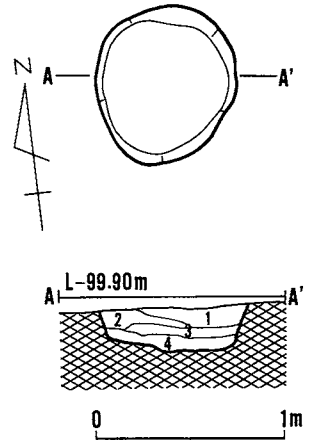
(第178図、写真図版29)

南東部に他遺構との重複もなく単独で位置する。開口部径0.85m×0.75m、底部径0.7m×0.65m、深さ0.25mの規模をもち、平面形は円形で鍋底形の断面形を示す。底面は平坦で壁の立ち上がりは垂直に近い。埋土は4層に分けられるが、いずれの土層も地山の黄褐色粘土質土と黒褐色土の混土状態を示すことから、埋め戻されたことを示すものであろう。

出土遺物には土師器杯の実測不能な小破片が2点出土している。ロクロ成形され、



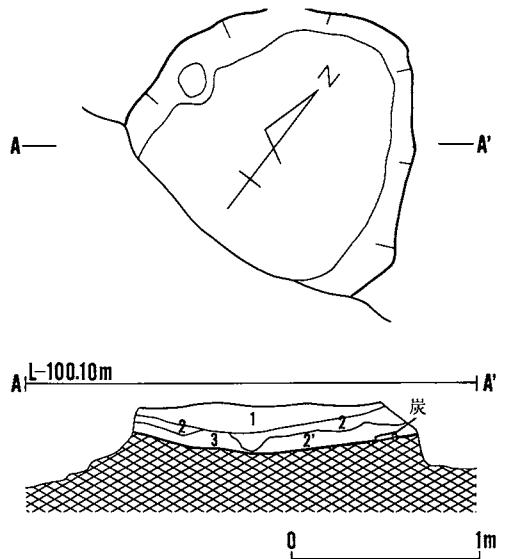
第176図 (90) E III a 4 土坑



第178図 (92) E IV b 1 土坑-1

E IV b 1 土坑-1

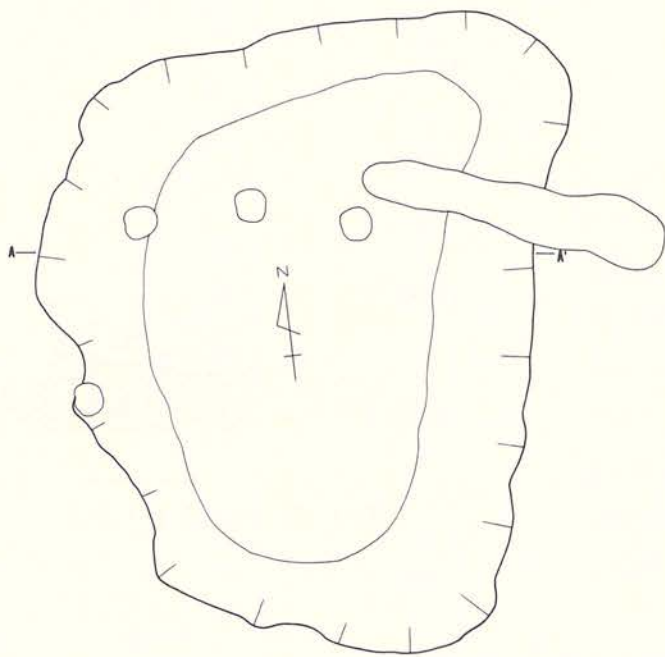
- | | | | |
|---|------------|--------|--------------|
| 1 | 10Y R 2/2 | 黒褐色 | シルト |
| 2 | 10Y R 5/4 | にぶい黄褐色 | 火山灰土 |
| 3 | 7.5Y R 3/4 | 暗褐色 | シルト、黄褐色土が混入 |
| 4 | 2.5Y 7/4 | 淡黄色 | 粘土質土、黒褐色土が混入 |



第177図 (91) E III a 7 土坑

E III a 7 土坑-2

- | | | | |
|---|-----------|--------|----------------------|
| 1 | 10Y R 3/1 | 黒褐色 | シルト、灰が多く混入 |
| 2 | 10Y R 4/3 | にぶい黄褐色 | 粘土質土、炭が混入、2' はやや黒っぽい |
| 3 | 10Y R 3/3 | 暗褐色 | シルト、炭が若干混入 |



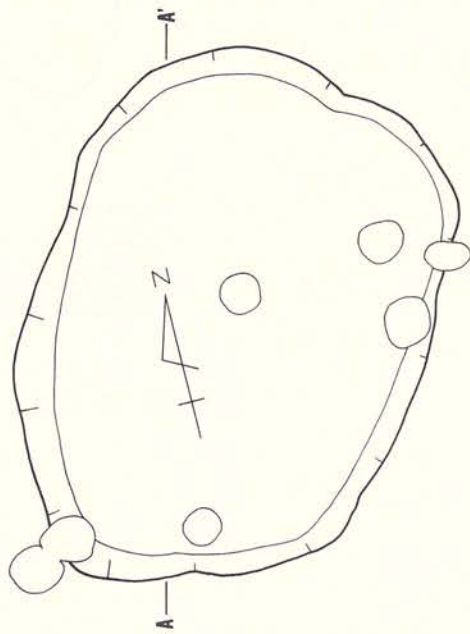
A L-99.50m



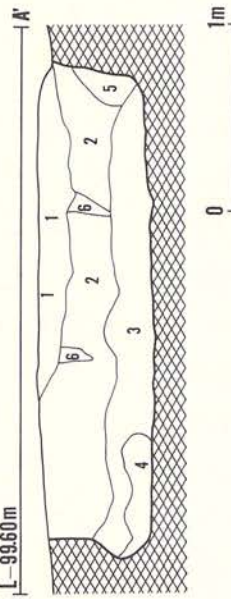
第179図 (93)C V a 8 土坑

C V a 8 土坑

- 1 7.5Y R 5/4 におい、黄褐色 水田灰土、浅黄色粘土混入
- 2 10Y R 5/4 におい、黄褐色 水田灰土、浅黄色粘土と黒色土混入
- 3 10Y R 17/1 黒 シルト、灰まじりの黄色土混入
- 4 7.5Y R 5/4 におい、黄褐色 水田灰土
- 5 10Y R 5/4 におい、黄褐色 水田灰土、浅黄色土若干混入
- 6 5Y 8/3 淡黄 粘土
- 7 7.5Y R 2/1 黒 シルト、炭が混入



A L-99.60m



第180図 (94)C V e 7 土坑—I

C V e 7 土坑

- 1 5Y 8/2 灰 黒色土が若干混入
- 2 10Y R 3/2 黒 黄褐色土や炭が混入
- 3 10Y R 2/2 黒 黄褐色土や炭が若干混入
- 4 10Y R 3/2 黒 シルト、黄褐色土が多く混入
- 5 10Y R 3/2 黒 シルト、黄褐色土が混入
- 6 10Y R 4/3 におい、黄褐色 粘土質土、粒が散か

内面が黒色処理されている。

〈東 館〉

101基あり、これらは南側の縁辺部を除いたほぼ全域に散在する分布状況を示すが、特に北東部に多く分布する傾向がある。当館は開田時の削平が西館ほどには強く受けていないことから、ほぼ原形に近い遺存状態と推定される。規模・形とも西館に位置する土坑のそれと大きな違いは認められないが、既述のとおり、削平の影響が小さいことから当館には深い土坑が多い。

(93) C V a 8 土坑 (第179図、写真図版30)

北西隅に位置し、当土坑より古いBVj9陥し穴状遺構と重複し、にぶい黄褐色土の広がりとして検出された。開口部径5.1m×4m、底部径3.9m×2.3m、深さ0.5mの規模をもち、平面形は長軸方向をN-16°-Eにもつ北側が幅広となる不整な楕円形で、鍋底形の断面形を示す。底面は平坦で、上位からの柱穴状土坑が何箇所かにみられる。壁は崩落もみられず緩やかな立ち上がりを示す。埋土は7層に細分されるが、大部分はにぶい黄褐色土であるが炭化物や草木灰混じりの黒色土が間層として挟在する。各層は塊状や粒状で混入していることから、埋め戻しによる土層と推定される。

遺物として体部中位～高台脇を残す青磁(86)の実測不能な小破片が出土している。胎土は灰色、釉は灰緑色を示す。15世紀頃の製品と推定される。

(94) C V e 7 土坑-1 (第180図、写真図版30)

北西端の内堀際に他遺構と重複することなく単独で位置する。開口部径2.95m×2.1m、底部径2.6m×1.85m、深0.6mの規模をもち、平面形は長軸方向がN-34°-Eを示す楕円形で、鍋底形の断面形である。底面は平坦で壁は垂直に近い立ち上がりを示し、上位からの柱穴状土坑と重複する部分以外は遺存状態が良好である。埋土は6層に分けられるが、黒褐色土が大部分を占める。上層には灰白色粘土質土が堆積し、全体的に黄褐色土が小塊状に混入していることから、埋め戻した土層と推定される。

出土遺物には実測不能な土師器甕の小破片が出土している。

(95) C V e 7 土坑-2 (第181図、写真図版30)

北西側に位置し、C V e 7 土坑-1に隣接している。上位の柱穴状土坑によって一部の壁を壊している。開口部径0.9m×0.75m、底部径0.55m×0.45m、深さ0.25mの規模をもち、平面

形は長軸方向をN-5°-Wにもつ楕円形で、皿形の断面形を示す。底面は平坦で壁の立ち上がりは緩やかである。埋土は小礫の混入した黒褐色土の単層で、硬くしまっている。

出土遺物はない。

(96) C V e 8 土坑 (第182図)

北西部に位置し、新旧関係の不明なC V f 8 土坑と重複して検出された。柱穴状土坑が密集する地域に立地し、それらの多くとも重複し、南半部の壁は残っていない。開口部径1.8m、底部径1.5m×1.3m、深さ0.2mの規模をもち、平面形は円形と推定され、鍋底形の断面形を示す。埋土は黒褐色土が主体を占める。

遺物は出土していない。

(97) C V f 6 土坑 (第183図、写真図版30)

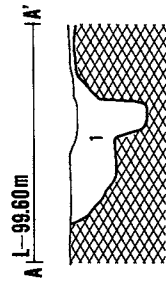
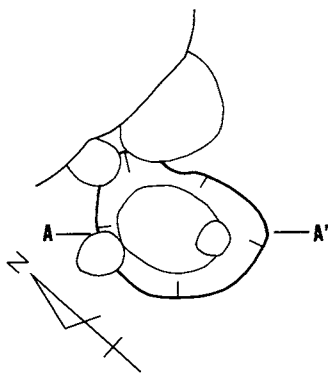
北西端の内堀際に位置し、新旧関係の不明なC V a 6 溝跡と重複し、西壁は失われている。開口部径1.15m、底部径1m、深さ0.3mの規模をもち、平面形は長軸方向がN-75°-Eを示す楕円形と推定され、鍋底形の断面形を示す。底面は平坦で壁は垂直に近い立ち上りを示すが、上位からの柱穴状土坑が数箇所に見られる。埋土は4層に分けられるが、炭化物や小礫の混入した黒褐色土が大部分を占め、硬くしまる。

出土遺物には土師器甕3点、須恵器坏1点、砥石1点が出土している。土師器甕はロクロ使用成形の実測不能な小破片である。須恵器坏(第369図42)はロクロ成形された口縁部～体部下位を残す破片で、口縁端部に自然釉がつく。砥石(第326図16)は縦12.9cm、横6.4cm、重さ480gの大きさの細砂質凝灰岩を使用している。

(98) C V f 7 土坑 (第184図、写真図版30)

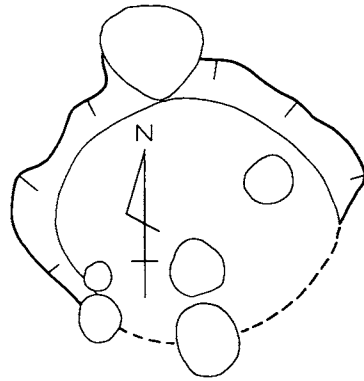
北西に位置し、C V f 8 土坑と隣接している。柱穴状土坑の密集する区域に立地することから、その重複によって壁の一部が壊されている。開口部径2.35m×1.55m、底部径2.15m×1.35m、深さ0.35mの規模をもち、平面形は長軸方向がN-78°-Wを示す楕円形で鍋底形の断面形である。底面は平坦で壁の立ち上がりは垂直に近い。埋土は3層に分けられるが、黄褐色土の小塊や小礫が多く混入した暗褐色土と黒褐色土が主体をなすことから、人為的に埋め戻された土層であろう。

遺物には土師器坏3点、同甕1点、須恵器坏1点を含むが、いずれも実測不能な小破片である。

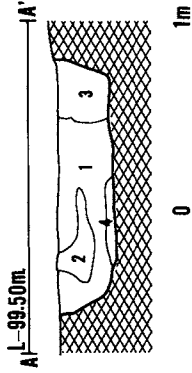
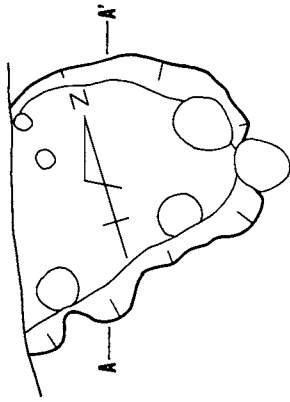


第181図 (95) C V e 7 土坑-2

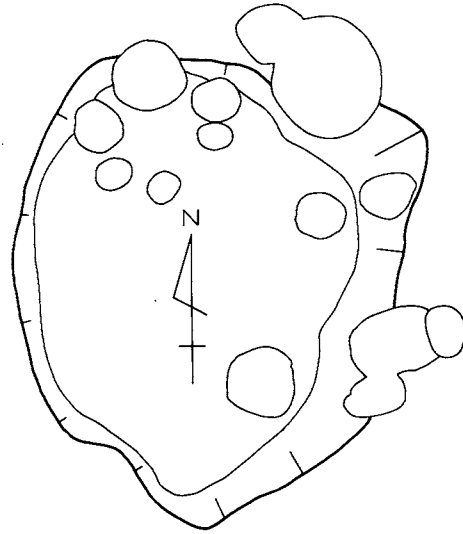
C V e 7 土坑-2
1 10YR2/2 黒褐色シルト、0.5~1cmの小石が混入



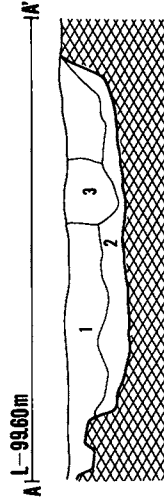
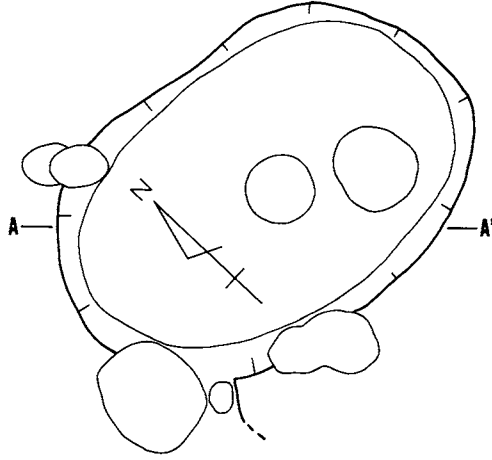
第182図 (96) C V e 8 土坑



第183図 (97) C V f 6 土坑



第186図 (101) C V f 9 土坑



第184図 (98) C V f 7 土坑

C V f 6 土坑

1 10YR3/2 黒褐色シルト、炭や小石が多く混入
2 10YR5/3 黒褐色シルト、炭や小石が混入
3 10YR2/2 黒褐色シルト、淡黄色粘土や小石が混入、柱穴の埋土
4 10YR6/4 オリーブ黄色 粘土質土、汚れている

C V f 7 土坑

1 10YR3/3 暗褐色シルト、紫褐色土や小石が混入
2 10YR2/3 黒褐色シルト、紫褐色土が混入
3 10YR2/2 黒褐色シルト、炭が混入、柱穴の埋土

(99) C V f 8 土坑 (第185図)

北西に位置し、新旧関係が不明なC V e 8 土坑やC V f 9 土坑と重複する。また、付近は柱穴状土坑の密集区域のため、多くの柱穴状土坑とも重複し、規模や底部の凹凸から土坑とするか、一種の落ち込み遺構とするか迷った遺構である。開口部径5.7m×4.4m、底部径5.4m×4m、深さ0.25mの規模をもち、平面形は長軸方向をN-10°-Eにもつ不整な楕円形で、鍋底形の断面形を示す。底面には凹凸があり、壁の立ち上がりは垂直に近い。埋土は黒褐色土である。遺物の出土はない。

(100) C V f 9 土坑 (第186図)

北西部に位置し、新旧関係が不明なC V f 8 土坑の下位に検出され、多くの柱穴状土坑とも重複する。C V f 8 土坑に付随する部分的な凹みの可能性もある。開口部径2.5m×2.05m、底部径2.2m×1.7m、深さ0.4mの規模をもち、平面形は長軸方向がほぼ南北にある不整な楕円形で、鍋底形の断面形を示す。底面や壁に凹凸があり、重複する柱穴状土坑によって壊された部分が多い。埋土は黒褐色である。

遺物は出土していない。

(101) C V g 6 土坑 (第187図、写真図版30)

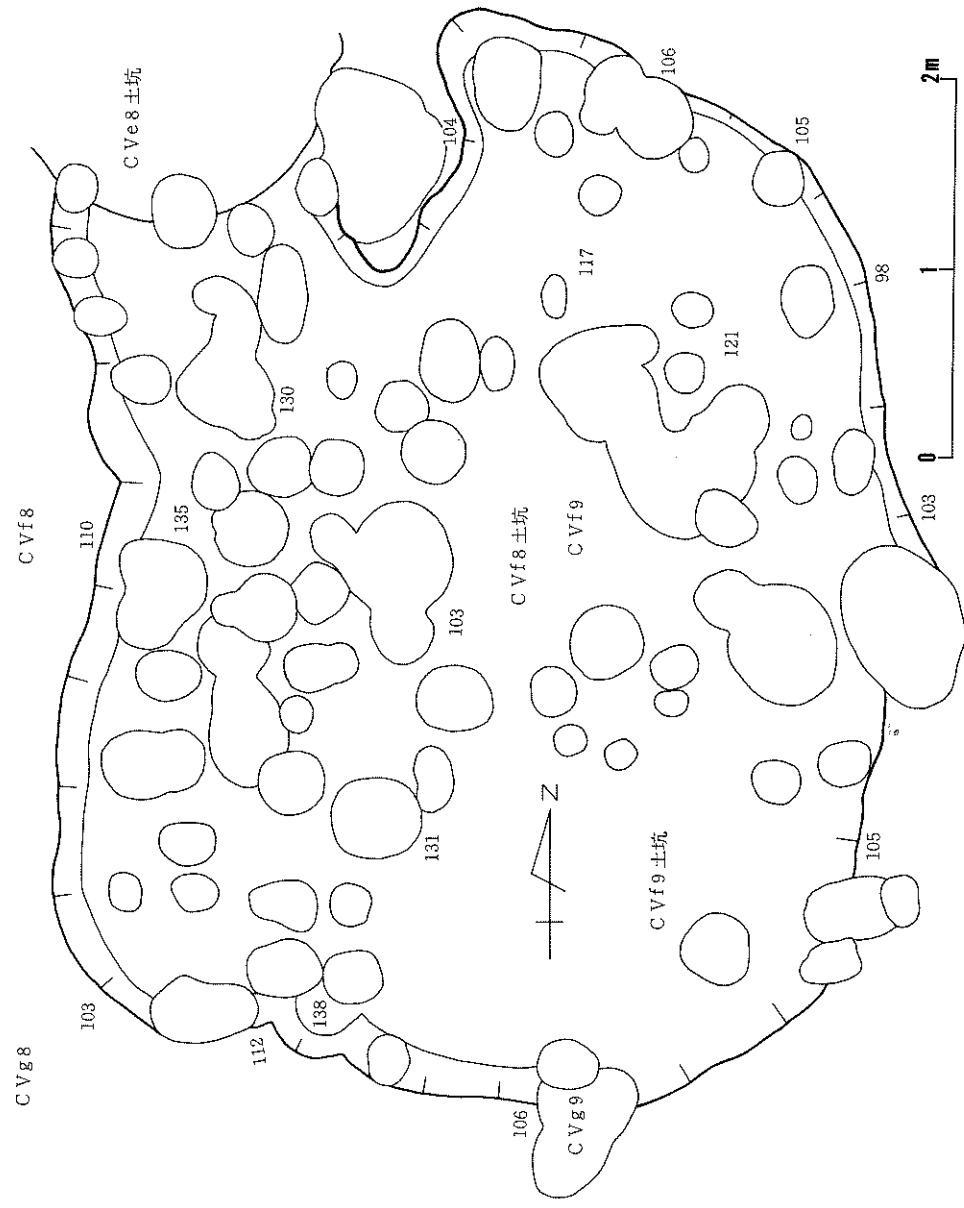
北西端に位置し、新旧関係が不明なC V a 6 溝跡と重複し、西壁はそれによって残存しない。開口部径1.8m×底部径1.55m、深さ0.4mの規模をもち、平面形は長軸方向をN-11°-Wにもつ楕円形で、断面形は鍋底形である。底面にはやや凹凸があり、壁の立ち上がりは緩やかである。埋土は4層に分けられるが、黄褐色土が小塊状に混入した黒褐色土が主体を占める。上層には小礫が多く混入し非常に硬い。土性や堆積状況から埋め戻されたと推定される。

遺物には土師器の甕2点と貨幣1点がある。土師器の甕はロクロ成形された実測不能の小破片である。貨幣(第350図10)は元祐通寶である。

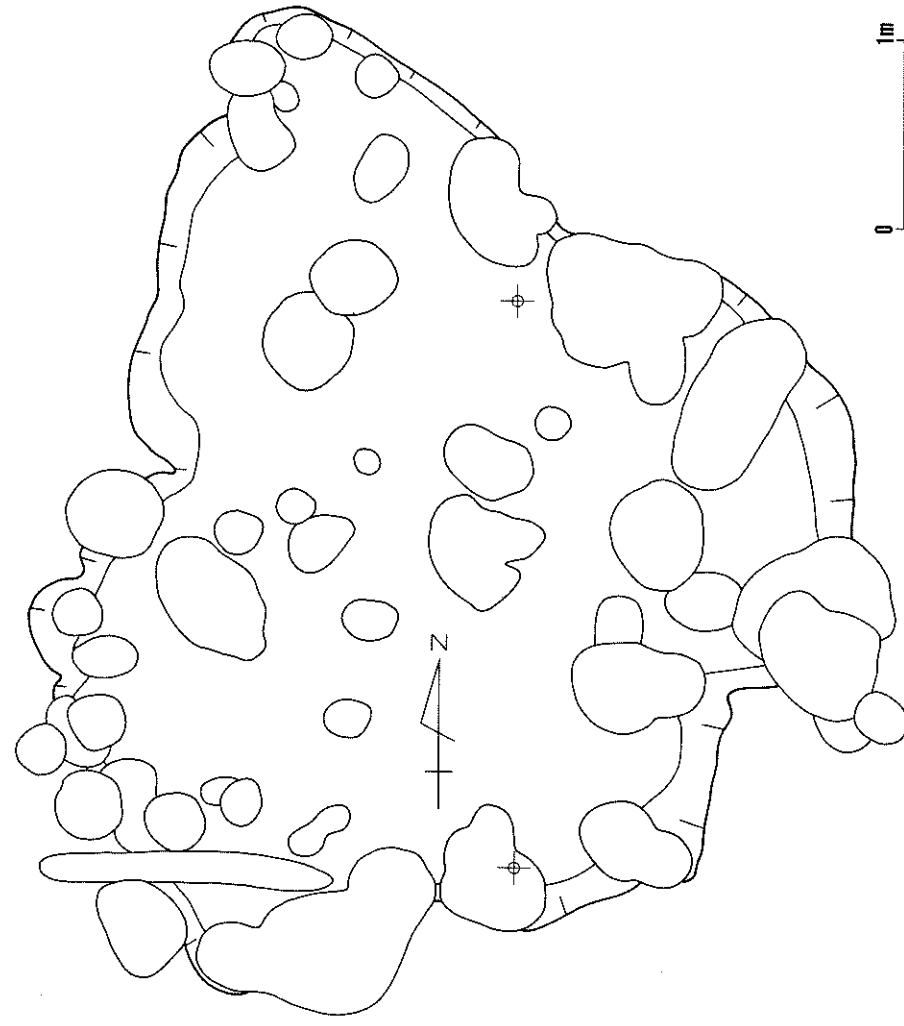
(102) C V g 8 土坑 (第188図、写真図版31)

北西に位置し、多くの柱穴状土坑と重複する。開口部径1.85m×1.4m、底部径1.45m×1.2m、深さ0.25mの規模をもち、平面形は長軸方向がN-54°-Wを示す楕円形で浅い皿形の断面形を示す。底面や壁は凹凸もなく形が整っているが、柱穴状土坑による攪乱がある。埋土は黒褐色土である。

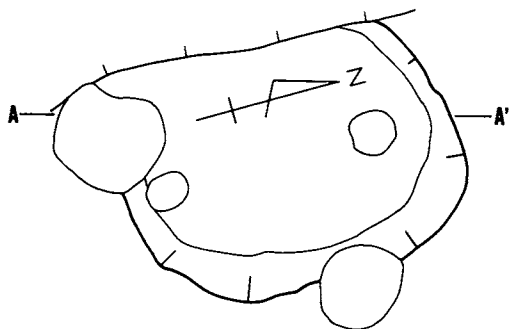
遺物は出土していない。



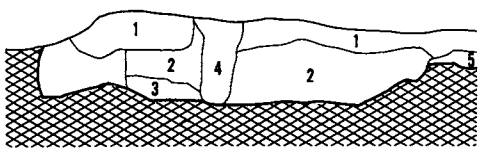
第185图 (99)CVf8 土坑



第190图 (104)CVh8 土坑



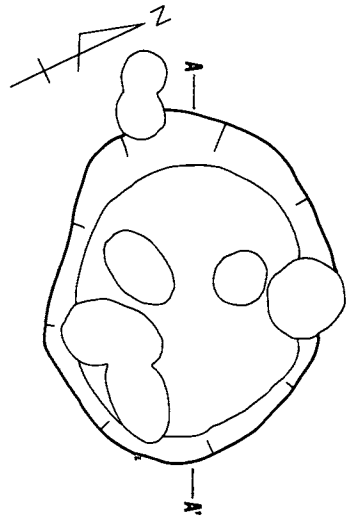
A L-99.50m A'



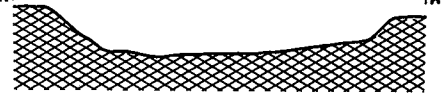
0 1m

第187図 (101) C V g 6 土坑

- C V g 6 土坑
- | | | | | |
|---|-----------|--------|----|--------------------|
| 1 | 10Y R 4/4 | 褐色 | 色 | 火山灰土と暗褐色土との混土、小石混入 |
| 2 | 10Y R 2/2 | 黒褐色 | 色 | シルト、黄褐色土が混入 |
| 3 | 10Y R 6/4 | オリーブ黄色 | 粘土 | |
| 4 | 10Y R 2/2 | 黒褐色 | 色 | シルト、炭が混入、柱穴の埋土 |
| 5 | 10Y R 2/3 | 黒褐色 | 色 | シルト、黄褐色土が混入 |

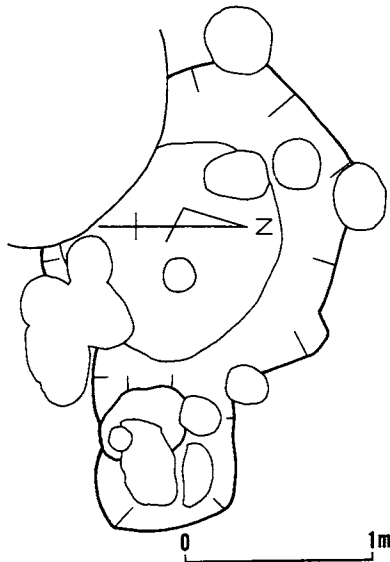


A L-99.60m A'



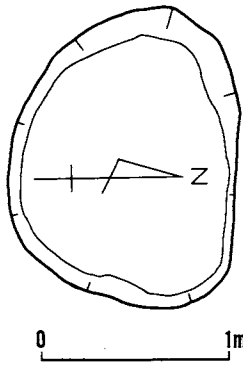
0 1m

第188図 (102) C V g 8 土坑



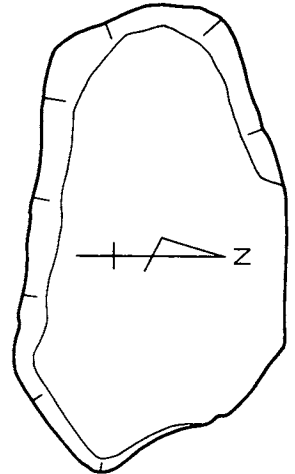
0 1m

第189図 (103) C V g 9 土坑一2



0 1m

第191図 (105) C V j 6 土坑



0 1m

第192図 (106) C V j 8 土坑

(103) C V g 9 土坑—2 (第189図)

北西部に位置し、当土坑より古いC V g 9 土坑—1と、上位からと推定される多数の柱穴状土坑が重複し、その部分は攪乱を受けている。開口部径1.7m×1.5m、底部径1.2m×1.1m、深さ0.5mの規模をもち、平面形は円形で鍋底形のやや深い断面形を示す。底面や壁には凹凸がある。埋土は黒褐色である。

遺物の出土はない。

(104) C V h 8 土坑 (第190図)

西側に位置し、当土坑より古いC V i 8 陥し穴状遺構と重複し、さらに柱穴状土坑が密集する地域に立地することから、多数の柱穴状土坑とも重複する。土坑としては規模が大きく不整形な遺構である。開口部径5.2m×4.1m、底部径4.7m×3.4m、深さ0.2mの規模をもち、平面形は長軸方向をN—6°—Eにもつ不整な三角形で鍋底形の断面形を示す。底面や壁は凹凸がはげしい。埋土は黒褐色土である。

出土遺物はない。

(105) C V j 6 土坑 (第191図)

西端の中央部土橋の近くに位置し、C V j 6 溝跡に隣接して検出された。開口部径1.6m×1.2m、底部径1.35m×1.1m、深さ0.2mの規模をもち、平面形は長軸方向がN—87°—Wを示す楕円形で、浅い皿形の断面形を示す。底面は平坦で壁の立ち上がりも緩やかである。埋土は黄褐色土粒が混入した黒褐色土である。

遺物は出土していない。

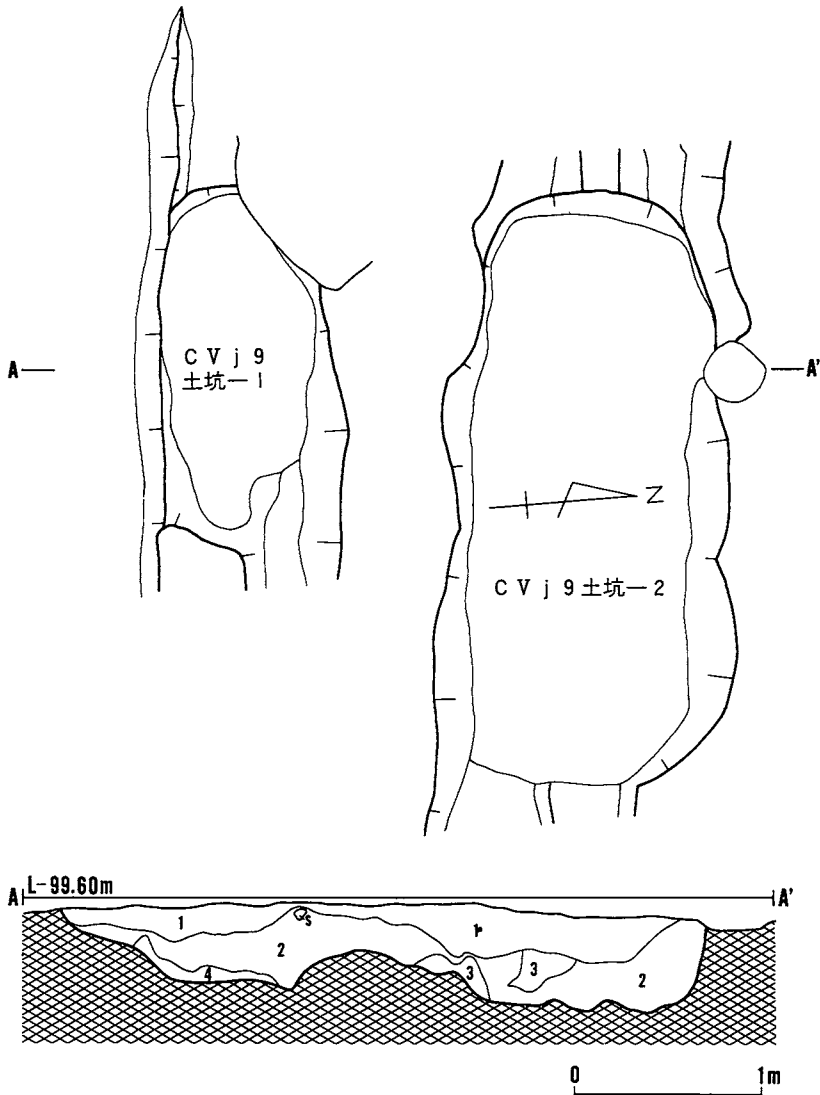
(106) C V j 8 土坑 (第192図、写真図版31)

西側の中央部に位置し、C V j 6 溝跡—1の下位に検出され、C V j 9 土坑—1やD V a 8 土坑と隣接するが、溝に付随する凹みの可能性もある。開口部径2.5m×1.4m、底部径2.3m×1.7m、深さ0.15mの規模をもち、平面形は長軸方向をN—87°—Wにもつ不整な楕円形で、浅い皿形の断面形を示している。底面は平坦で壁は緩やかに立ち上がるが、北壁はほとんど残存していない。埋土は黄褐色土粒や砂粒が混入した黒褐色土である。

遺物の出土はない。

(107) C V j 9 土坑—1 (第193図、写真図版31)

西側の中央部に位置し、C V j 6 溝跡—2の下位に検出され、C V j 8 土坑やD V a 8 土坑



第193図 (107)・(108) CVj9 土坑-1・2

CVj9 土坑-1と-2

- | | | | |
|---|-----------|-----|---------------------|
| 1 | 10YR2/2 | 黒褐色 | シルト、0.5~2cmの小石が若干混入 |
| 2 | 10YR2/2 | 黒褐色 | シルト、0.5~2cmの小石が多く混入 |
| 3 | 10YR2/2 | 黒褐色 | シルトと黄褐色土半々の混土 |
| 4 | 10YR1.7/1 | 黒色 | シルト、黄褐色土が混入 |

と隣接するが、溝跡に付随する凹みとも考えられる。開口部径1.9m×1m、底部径1.75m×0.8m、深さ0.4mの規模をもち、平面形は長軸方向をN-86°-Wにもつ不整な楕円形で、皿形の断面形を示す。底面は平坦であるが壁は凹凸があり浅くて不明瞭な部分もある。埋土は3層に細分されるが、大部分は小礫が多く混入した黒褐色土で、1層は溝の埋土である。全体に硬くしまっている。

出土遺物はない。

(108) C V j 9 土坑—2 (第193図、写真図版31)

西側の中央部に位置し、C V j 6 溝跡の下位に検出されたが、溝跡に付随する凹みかどうかは明確でない。開口部径3.2m×1.55m、底部径3m×1.15m、深さ0.5mの規模をもち、平面形は長軸方向をN-82°-Wにもつやや不整な長楕円形で、鍋底形の断面形を示す。底面は平坦で壁の立ち上がりは垂直に近い。埋土は3層に分けられるが、1層は溝の埋土であり、他は小礫が多く混入し硬くしまった黒褐色土である。

遺物は出土していない。

(109) C VI a 4 土坑 (第194図、写真図版31)

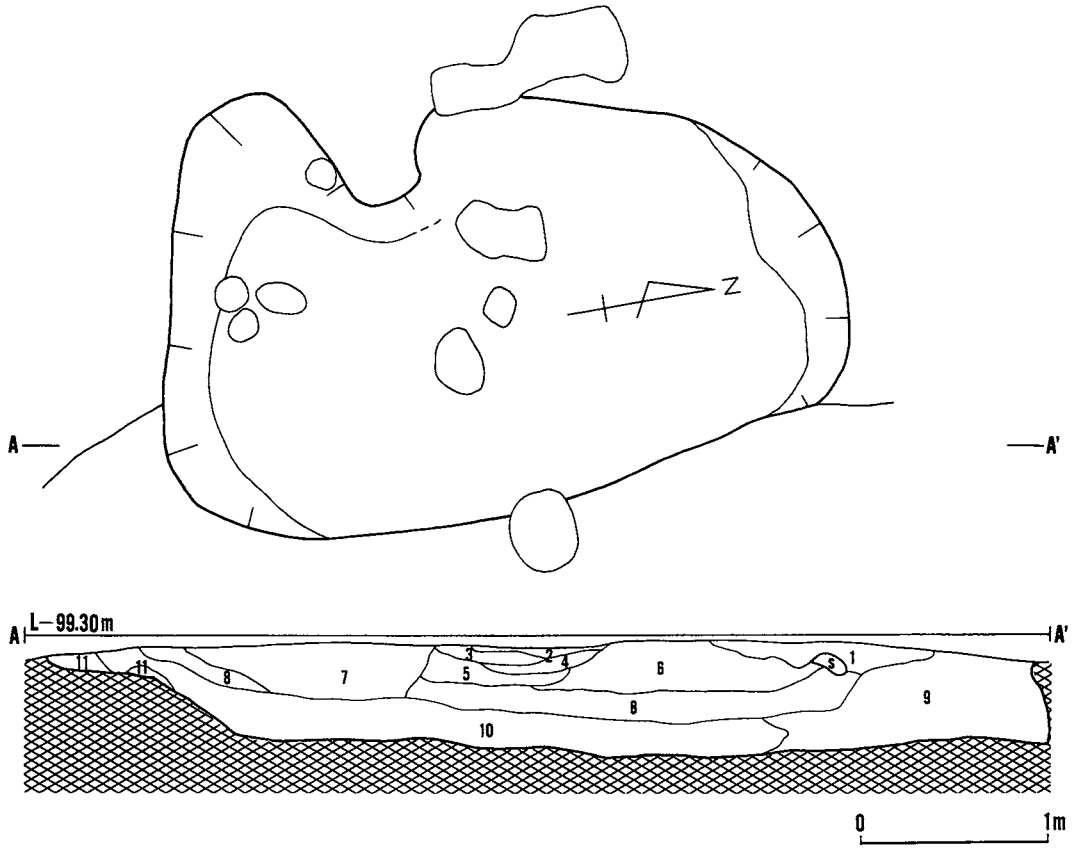
北端の中央部付近に位置し、新旧関係が不明なC VI a 5 住居跡と重複し、東壁は明瞭に残っていない。開口部径3.7m×2.25m、底部径3.15m×1.6m、深さ0.55mの規模をもち、平面形は長軸方向がほぼ南北を示す不整な楕円形で鍋底形の断面形を示す。底面にはやや凹凸があって柱穴状土坑と重複し、壁の立ち上がりは垂直に近い西側と緩やかな東側や南側があり、一定しない。埋土は、断面の設定位置が東端にずれたため一部しか観察できないが、11層に細分される。このうち9層はC VI a 5 住居跡の埋土である。上層部分は黄褐色砂礫土や粘土質土、下層は黒褐色土が主体である。各層が混土状態で堆積し、硬くしめることから埋め戻した土層であろう。

出土遺物はない。

(110) C VI b 5 土坑 (第195図、写真図版31)

北側の中央付近に他遺構との重複もなく単独で検出された。開口部径2.85m×2.2m、底部径2.45m×1.95m、深さ0.3mの規模をもち、平面形は長軸方向がN-11°-Wを示す楕円形で断面形は皿形である。底面は凹凸があり柱穴状土坑が3箇所重複する。壁の立ち上がりは緩やかであり、崩落もほとんどない。埋土は黒褐色土の単層であるが、黄褐色土や灰白色粘土が径5cm~20cmの大塊状に混入し硬い。おそらく埋め戻しによる土層であろう。

遺物は出土していない。



第194図 (109) C VI a 4 土坑

C VI a 4 土坑

- | | | | |
|----|------------|--------|-----------------|
| 1 | 10Y R 4/4 | 褐色 | シルト、白色や淡黄色の礫が混入 |
| 2 | 10Y R 5/4 | にぶい黄褐色 | 砂礫 |
| 3 | 10Y R 1/3 | 黒褐色 | シルト |
| 4 | 10Y R 5/4 | にぶい黄褐色 | 砂礫、2よりも砂が多い |
| 5 | 10Y R 4/1 | 灰褐色 | シルト |
| 6 | 10Y R 5/3 | にぶい黄褐色 | 砂礫、淡黄色粘土が混入 |
| 7 | 10Y R 3/3 | 暗褐色 | シルト、灰白色や黄褐色土が混入 |
| 8 | 2.5Y 8/6 | 黄褐色 | 砂礫、灰白色の礫が多く混入 |
| 9 | 7.5Y R 4/3 | 褐色 | シルト、明黄褐色土が混入 |
| 10 | 10Y R 2/2 | 黒褐色 | シルト、炭化物が微量混入 |
| 11 | 10Y R 5/6 | 黄褐色 | 火山灰土(地山) |

(111) C VI b 10土坑 (第196図、写真図版31)

北端部中央の外堀際に位置し、C VI a 4 溝跡と隣接している。上層から検出された土坑ではなく、掘り下げた状態で明確となった遺構である。開口部径4.8m×4.1m、底部径4.05m×4m、深さ0.55mの規模をもち、平面形は不整な方形で皿形の断面形を示す。底面は中央部に向かって低くなり、壁の立ち上がりは緩やかである。西壁は特に緩らかで明確な外周線を引けない状態である。埋土は暗褐色土が主体を占めるが5層に細分され、上層には黄褐色の粘土質土と礫が混入し、中層には炭化物が混じる。土性と堆積状況からみて上半部分は一時的に埋め戻された土層であろう。

出土遺物はない。

(112) C VI c 6土坑 (第197図、写真図版32)

北側の中央部付近に位置し、当土坑より古いC VI c 7土坑と重複する。開口部径2.45m×2m、底部径2m×1.7m、深さ0.6mの規模をもち、平面形は長軸をN-7°-Eにもつ楕円形で、断面形は鍋底形を示す。底面は平坦で壁の立ち上がりは垂直に近い。柱穴状土坑と重複する部分以外の壁は良く整っている。埋土は9層に細分されるが、灰黄褐色土、黒褐色土、黒色土、褐色土などが互層を成して水平やレンズ状に堆積していることから、自然埋没による土層であろう。上層～下層まで草木灰や炭化物粉が混入し、この状況は6層に特に多い。

遺物は出土していない。

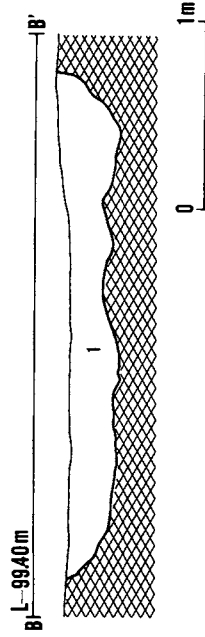
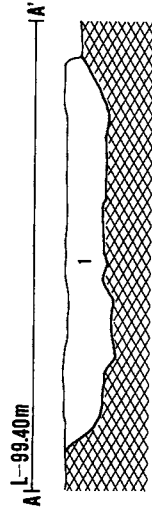
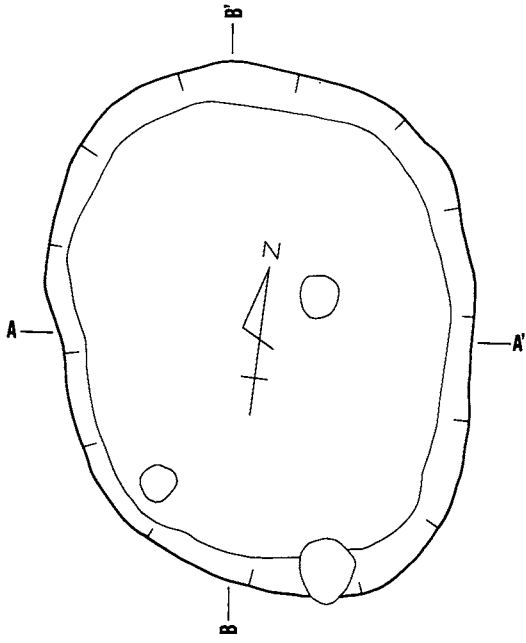
(113) C VI c 7土坑 (第198図、写真図版32)

北側の中央部付近に当土坑より新しいC VI c 6土坑と重複し、C VI d 6土坑と隣接して位置する。開口部径2.7m×1.8m、底部径1.8m×1m、深さ0.75mの規模をもち、平面形は長軸方向がN-3°-Eを示す楕円形で、断面形は深い鍋底状である。底面は平坦で壁の立ち上がりは湾曲し、上部は垂直に近く、西壁以外は崩落もなく整った壁である。埋土は9層に細分されるが、黒色～黒褐色土が主体をなす。上層には小礫や黄褐色土が混入し、4層は炭化物が堆積した層である。全体に軟かくレンズ状の堆積を示すことから、自然埋没による土層と考えられる。

出土遺物はない。

(114) C VI d 6土坑 (第199図、写真図版32)

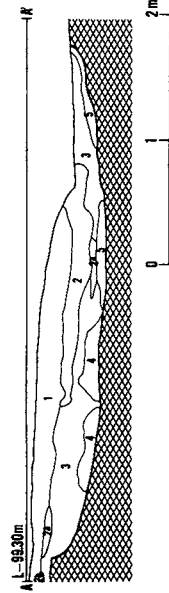
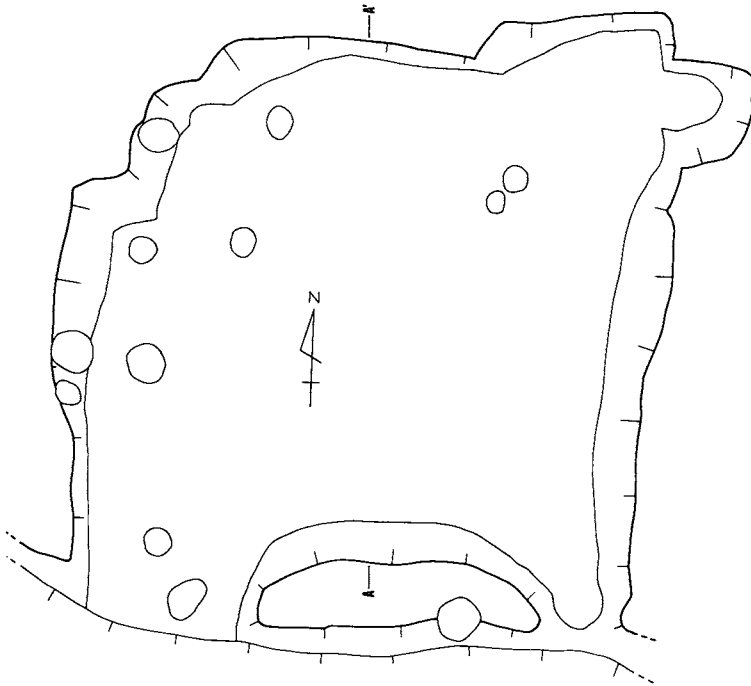
北側の中央部付近に位置し、当土坑より古いC VI d 7土坑と重複し、C VI c 6土坑とC VI c 7土坑に隣接する。開口部径1.35m×1.2m、底部径0.9m×0.9m、深さ0.3mの規模をもち、平面形は円形で鍋底形の断面形を示す。底面は平坦で、壁は垂直に近い立ち上りを示し、柱



第195図 (110) C VI b 5 土坑

C VI b 5 土坑

- 1 10Y R 2/2 黒褐色 シルト、灰白色粘土や黄褐色土が多く混入



第196図 (111) C VI b 10 土坑

C VI b 10 土坑

- 1 10Y R 3/4 暗褐色 シルト、淡黄色粘土や礫が混入
 2 10Y R 2/1 黒褐色 シルト、炭が主体、灰が混入
 2a 10Y R 2/3 黒褐色 シルト、炭が主体、3のまじり少ない
 3 10Y R 3/3 暗褐色 シルト、炭が若干混入
 4 10Y R 6/6 明黄褐色 火山灰土と暗褐色土手々の混入
 5 10Y R 7/6 明黄褐色 火山灰土

穴状土坑が1箇所みられる。埋土は黄褐色土が混入した黒褐色土の単層である。全層に炭化物が混じる。土性や堆積状況から人為的に埋め戻された土層であろう。

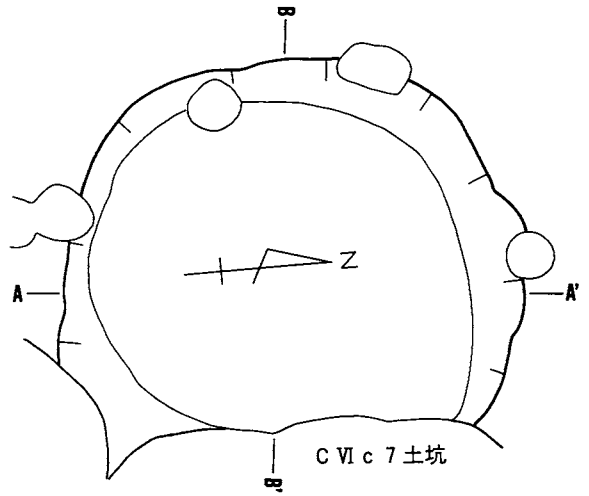
遺物は出土していない。

(115) C VI d 7 土坑

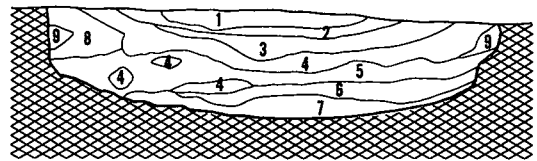
(第200図、写真図版32)

北側の中央部付近に位置し、当土坑より新しいCVId 6土坑と重複する。開口部径2.6m×1.9m、底部径2.3m×1.55m、深さ0.2mの規模をもち、平面形は長軸方向をN-21°-Eにもつ楕円形を示し、断面形は浅い鍋底形である。底面は平坦であるが、多くの柱穴状土坑が重複し攪乱を受けている。壁は湾曲して緩く立ち上がる。埋土は5層に分けられるが、黒褐色土の混入した黄褐色土が主体である。土性や堆積状況から人為的に埋め戻された土層であろう。

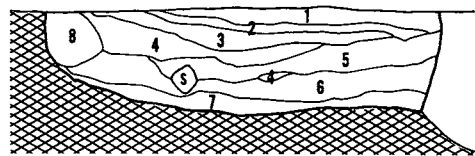
出土遺物はない。



A L-99.50m A'



B L-99.50m B'

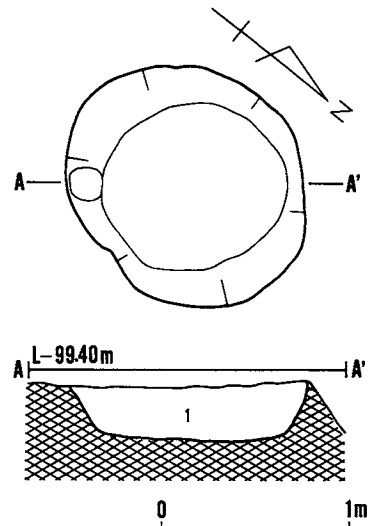
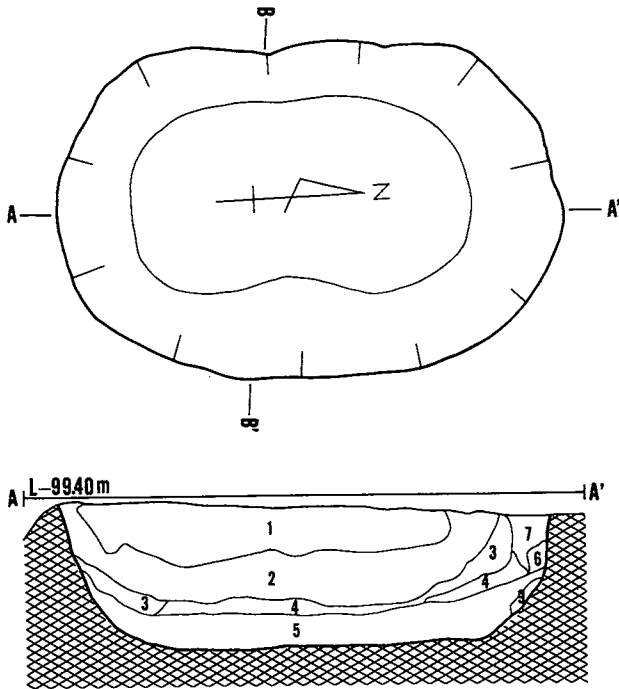


0 1m

第197図 (112) C VI c 6 土坑

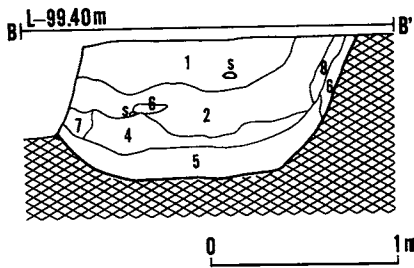
C VI c 6 土坑

- | | | | |
|---|------------|--------|-----------------------|
| 1 | 10Y R 4/2 | 灰黄褐色 | シルト、0.5cmの小石が多く混入 |
| 2 | 7.5Y R 4/1 | 褐色 | シルト、灰を多く含む炭が混入 |
| 3 | 10Y R 2/3 | 黒褐色 | シルト、黄褐色土が若干混入 |
| 4 | 10Y R 5/4 | にぶい黄褐色 | 粘土と黄褐色土と暗褐色土との混土、炭が混入 |
| 5 | 10Y R 2/2 | 黒褐色 | シルト、炭若干混入 |
| 6 | 10Y R 2/1 | 褐色 | シルト、炭が多く混入 |
| 7 | 10Y R 4/4 | 褐色 | 粘土質土、炭が若干混入 |
| 8 | 10Y R 2/2 | 黒褐色 | シルト、5層に似る |
| 9 | 10Y R 5/6 | 黄褐色 | 火山灰土のブロック |



第199図 (114) C VI d 6 土坑

C VI d 6 土坑
1 10Y R 2/2 黒褐色シルト、炭と黄褐色土が混入



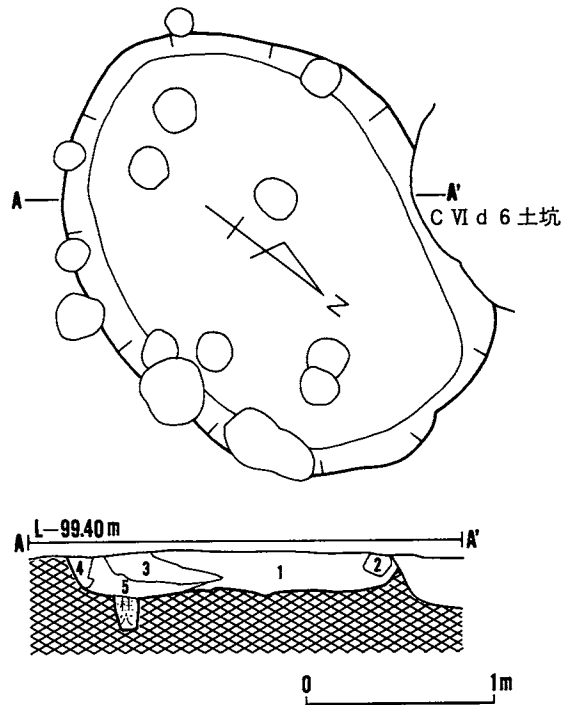
第198図 (113) C VI c 7 土坑

C VI c 7 土坑

- | | | | |
|---|-------------|-----|---------------------|
| 1 | 10Y R 2/1 | 黒色 | シルト、0.5~4cmの小石が多く混入 |
| 2 | 10Y R 2/2 | 黒褐色 | シルトと黄褐色土との混土、炭が混入 |
| 3 | 10Y R 2/2 | 黒褐色 | シルト |
| 4 | 10Y R 1.7/1 | 黒色 | シルト、炭を主体にした層 |
| 5 | 10Y R 4/4 | 褐色 | 火山灰土に黒褐色土が混入、炭が混入 |
| 6 | 10Y R 5/6 | 黄褐色 | 火山灰土、黒褐色土が混入 |
| 7 | 10Y R 2/3 | 黒褐色 | シルト |
| 8 | 2.5Y 8/3 | 淡黄色 | 粘土、浮石や小石が多い |
| 9 | 2.5Y 8/3 | 淡黄色 | 粘土質土のブロック |

C VI d 7 土坑

- | | | | |
|---|-----------|--------|-------------------|
| 1 | 10Y R 5/3 | にぶい黄褐色 | 火山灰土、黒褐色土が混入、炭が混入 |
| 2 | 10Y R 2/3 | 黒褐色 | シルト |
| 3 | 10Y R 3/3 | 暗褐色 | シルト、黄褐色土が多く混入 |
| 4 | 10Y R 2/3 | 黒褐色 | シルト |
| 5 | 2.5Y 7/3 | 浅黄色 | 粘土質土、暗褐色土が混入 |



第200図 (115) C VI d 7 土坑

(116) C VI d 9 土坑 (第201図、写真図版32)

北側の中央部付近に位置し、上位からの多くの柱穴状土坑と重複する。検出時には方形の竪穴住居跡と想定した遺構である。開口部径4.2m×3.5m、底部径3.2m×2.25m、深さ0.7mの規模をもち、平面形は長軸方向をN-71°-Wにもつ楕円形で、鍋底形の断面形を示す。底面は平坦で壁は緩く湾曲して立ち上がり、開口部に近い壁面は大きく外傾する。埋土は8層に分けられるが、黒褐色土が大部分を占める。検出面には径40cmほどの不定形に焼土(3層)が広がっているが、現地性のものかは明らかでない。上層には黄褐色土が塊状に混入することから、人為的に埋め戻された土層であろう。中～下層はレンズ状に堆積することから自然埋没と考えられる。

遺物は出土していない。

(117) C VI e 4 土坑 (第202図、写真図版32)

北寄りの中央部付近に位置し、多数の柱穴状土坑と重複し、C VI a 3 溝跡と隣接している。開口部径2.1m×2m、底部径1.5m×1.3m、深さ0.3mの規模をもち、平面形は円形で鍋底形の断面形を示す。底面は平坦であるが上位からの多くの柱穴状土坑によって攪乱を受け、壁の立ち上がりは緩やかである。埋土は2層に分けられ、黄褐色土が粒状に混入した黒褐色土である。

出土遺物はない。

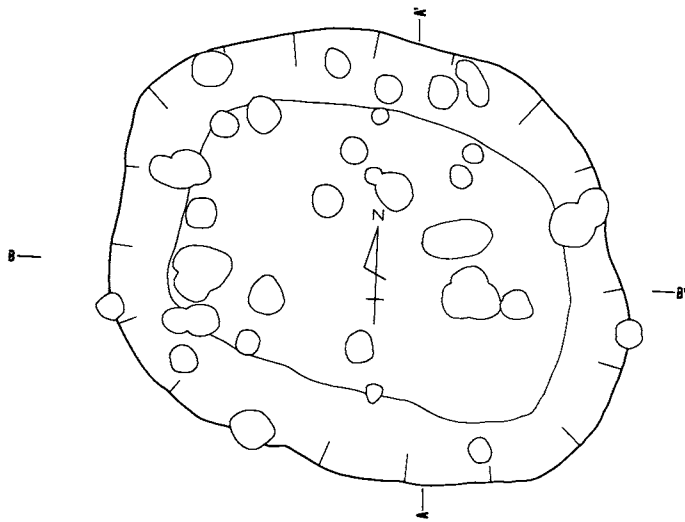
(118) C VI e 7 土坑 (第203図、写真図版33)

北側の中央部付近に位置し、当土坑より古いC VI e 7 陥し穴状遺構と重複し、さらに、柱穴状土坑が密集する区域に立地することから、多くの柱穴状土坑とも重複する。開口部径2.25m×1.25m、底部径1.85m×0.9m、深さ0.5mの規模をもち、平面形は長軸方向がN-78°-Wを示す楕円形で、鍋底形の断面形を示す。底面は平坦で壁の立ち上がりは湾曲している。壁は柱穴状土坑により壊された部分が多い。埋土は7層に分けられるが、上層は黄褐色粘土質土の混入した硬い黒褐色土で、下層は草木灰や炭化物粉が主体の黒色土で軟らかい。上半は埋め戻された土層で、下半は自然堆積の土層であろう。

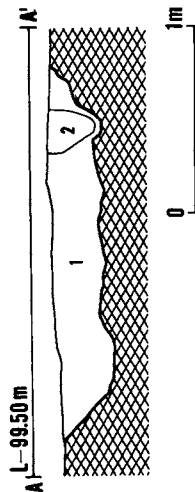
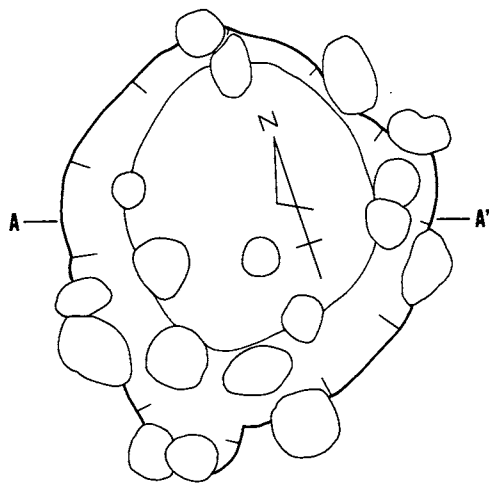
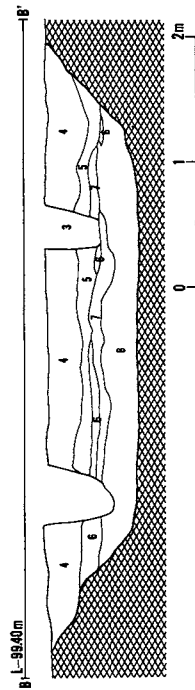
遺物には瀬戸・美濃系の鉄釉が施された天目茶碗(第312図13)の高台脇から底部を残す破片が出土している。15世紀後半の製品と考えられる。その他、草木灰層の中から米、小麦、大麦、小豆などの炭化穀類が出土している。

(119) C VI e 8 土坑 (第204図)

北寄りの中央部分に位置し、C VI c 8 溝跡に隣接して検出された。多くの柱穴状土坑が重複



第201図 (116) C VI d 9 土坑



第202図 (117) C VI e 4 土坑

C VI e 4 土坑

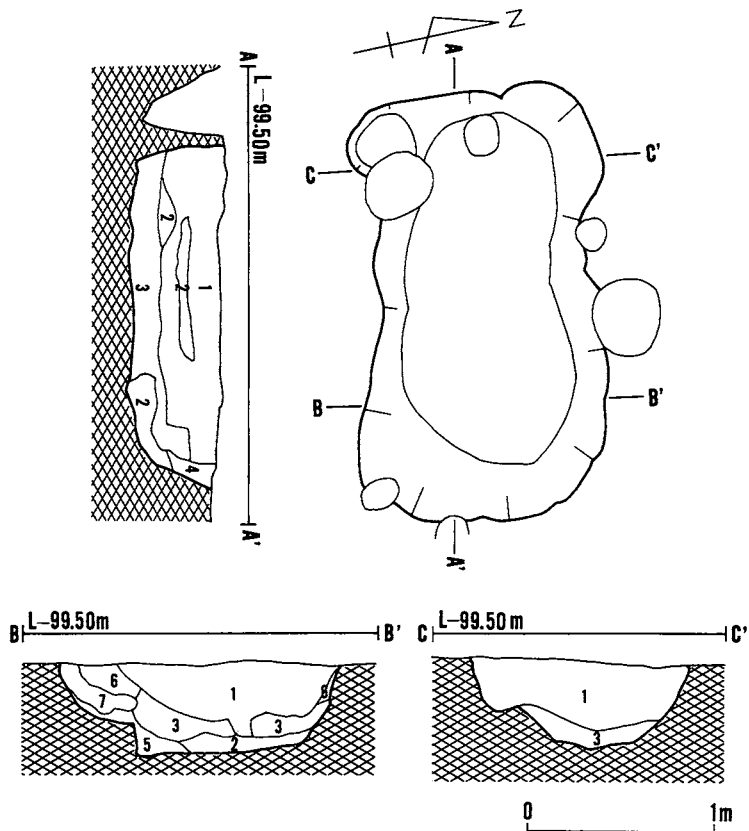
- 1 10Y R 2/2 黒褐色
- 2 10Y R 2/2 黒褐色

C VI d 9 土坑

- 1 5Y R 4/8 赤褐色
- 2 10Y R 3/2 黒褐色
- 3 10Y R 3/2 黒褐色
- 4 10Y R 3/3 黒褐色
- 5 10Y R 3/3 黒褐色
- 6 10Y R 6/6 明黄褐色
- 7 10Y R 3/3 黒褐色
- 8 10Y R 3/2 黒褐色

するため攪乱を受けている。開口部径3.05m×1.8m、底部径2.6m×1.6m、深さ0.25mの規模をもち、平面形は長軸方向がN-15°-Eを示す楕円形で、鍋底形の断面である。西壁は溝との重複のため浅い。底面には若干凹凸があり、壁の立ち上がりは緩やかである。埋土は黒褐色土である。

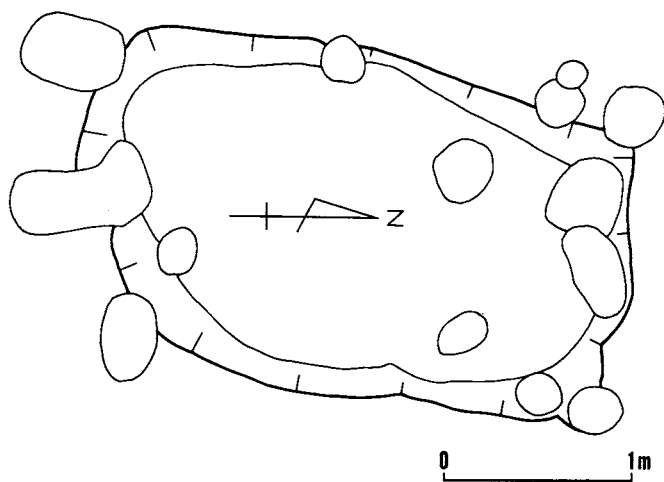
遺物の出土はない。



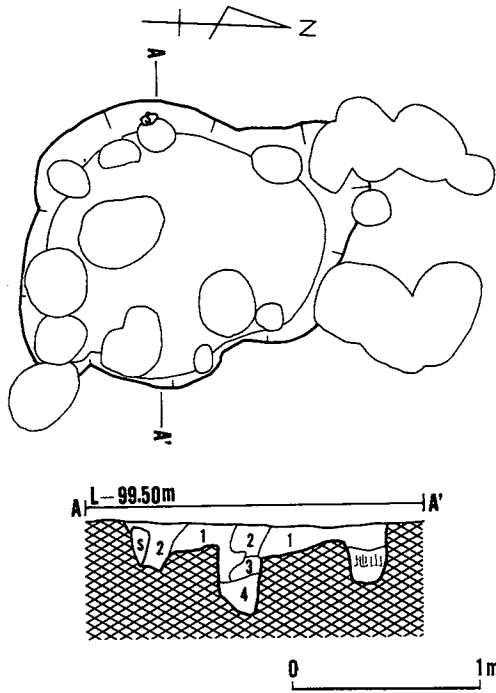
第203図 (118) C VI e 7 土坑

C VI e 7 土坑

- | | | | | |
|---|-------------|--------|----|-------------------|
| 1 | 10Y R 3/2 | 黒 | 褐色 | シルト、浅黄色粘土や炭が混入 |
| 2 | 2.5Y 7/3 | 浅黄 | 色 | 粘土、黒褐色シルトが混入 |
| 3 | 10Y R 1.7/1 | 黒 | 褐色 | シルト、炭が主体、やわらかい |
| 4 | 10Y R 4/3 | にぶい黄褐色 | 色 | 火山灰土 |
| 5 | 10Y R 3/3 | 暗褐色 | 色 | シルト、黄褐色土が混入 |
| 6 | 10Y R 3/4 | 暗褐色 | 色 | シルト、黄褐色土が混入 |
| 7 | 10Y R 3/3 | 暗褐色 | 色 | シルト、黄褐色土がブロック状に混入 |



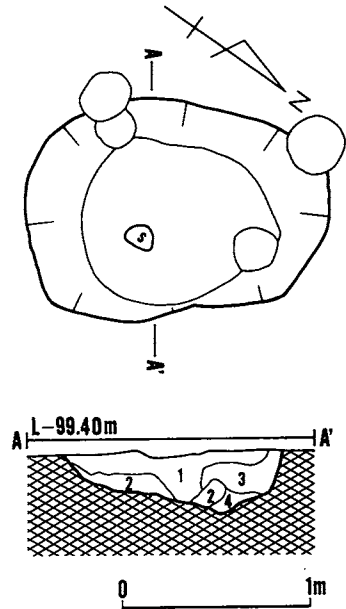
第204図 (119) C VI e 8 土坑



第205図 (120) C VI g 6 土坑

C VI g 6 土坑

- | | | | |
|---|-----------|------|----------------|
| 1 | 10Y R 2/2 | 黒褐色 | シルト、黄褐色土が多く混入 |
| 2 | 10Y R 2/2 | 黒褐色 | シルト、黄褐色土若干混入 |
| 3 | 10Y R 2/2 | 黒褐色 | シルト、黄褐色土との混土 |
| 4 | 2.5Y 6/6 | 明黄褐色 | 火山灰土、黒褐色土が若干混入 |



第206図 (121) C VI g 8 土坑

C VI g 8 土坑

- | | | | |
|---|-----------|-----|------------------|
| 1 | 10Y R 3/2 | 黒褐色 | シルト、炭や赤色浮石若干混入 |
| 2 | 10Y R 2/2 | 黒褐色 | シルト、炭が多く混入 |
| 3 | 10Y R 3/2 | 黒褐色 | シルトと黄褐色土との混土 |
| 4 | 10Y R 3/2 | 黒褐色 | シルト、1層に似るが浮石を含まず |

(120) C VI g 6 土坑 (第205図、写真図版33)

中央部北寄りの柱穴状土坑がもっとも密集する区域に検出され、多数の柱穴状土坑と重複し攪乱を受けている。開口部径1.65m×1.55m、底部径1.45m×1.3m、深さ0.15mの規模をもち、平面形は不整な円形で、浅い皿形の断面形を示す。底面には凹凸があり、壁の立ち上がりは緩やかである。埋土は4層に分けられるが、黄褐色土混じりの黒褐色土が大部分を占め、おそらく埋め戻しによる土層であろう。2～4層は上位からの柱穴状土坑の埋土である。

遺物にはロクロ成形で底部に回転糸切り痕を残すカワラケ(第315図6)がある。

(121) C VI g 8 土坑 (第206図、写真図版33)

中央部に位置し、柱穴状土坑と重複して検出された。開口部径1.6m×1.15m、底部径1.05m

×0.85m、深さ0.25mの規模をもち、平面形は長軸方向がN-32°-Wを示す楕円形で、鍋底形の断面形をもつ。底面は中央に向って次第に凹み、緩く湾曲して壁となる。埋土は4層に分けられ、下層には炭化物が多く混入する。

出土遺物はない。

(122) C VI i 9 土坑 (第207図、写真図版33)

中央部に位置し、C VI i 10土坑と隣接して検出された。当土坑の周囲には柱穴状土坑が密集しており、当土坑とも多くが重複し、壁も大きく崩れている。開口部径1.5m×1.25m、底部径0.9m×0.8m、深さ0.6mの規模をもち、平面形は円形と推定され、深い鍋底形の断面形を示す。底面は平坦で、壁は垂直に近い立ち上がりであるが、上位は外傾して開口部に続く。埋土は2層で、黄褐色粘土質土が小塊で混入する黒褐色土が大部分を占め、5cm～25cmの礫を混じる。

遺物の出土はない。

(123) C VI i 10土坑 (第208図、写真図版33)

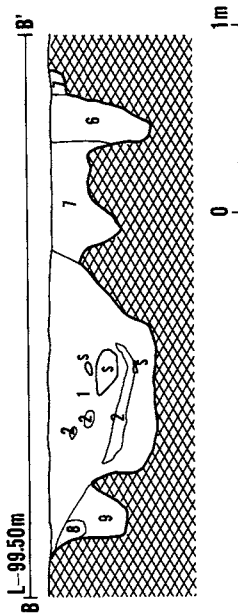
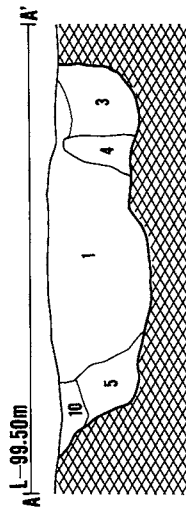
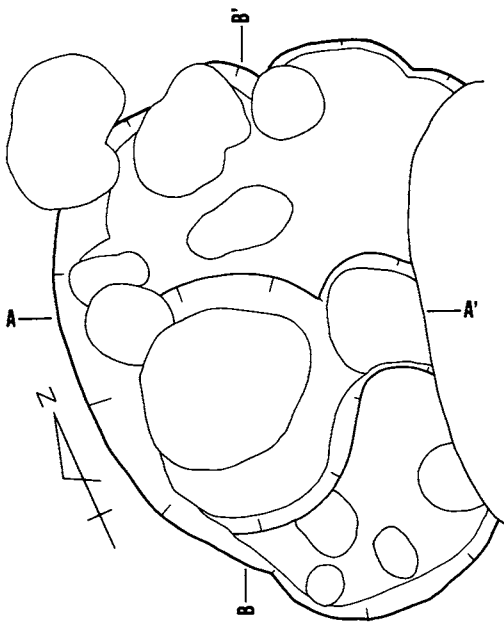
中央部に位置し、C VI i 9土坑と隣接して検出された。開口部径2.55m×2.05m、底部径2.1m×1.5m、深さ0.6mの規模をもち、平面形は長軸方向がN-21°-Eを示す楕円形で、鍋底形の断面形を示す。底面は平坦で壁の立ち上がりは垂直に近い。埋土は7層に分けられ、暗褐色土や黒褐色土が主体をなし、黄褐色土や粘土が混入する。上層は人為的な埋め戻しによる土層と推定されるが、下層は軟かくレンズ状に近い堆積であることから、自然埋没と考えられる。

遺物には土師器坏1点、青磁1点、白磁1点、染付1点、鉄製品1点、スサ入り粘土塊1点がある。土師器の坏はロクロ成形された非内面黒色処理の実測不能な小破片である。青磁(54)は口縁部～体部上位を残存する実測不能な口縁端部が端反りする碗の破片である。白磁(第321図21)は体部下位から底部を残す破片である。染付(41)は口縁部～体部上位を残す実測不能な小破片である。青磁は15世紀、白磁・染付は15世紀末～16世紀前半頃の製品であろう。鉄製品(第347図52)はほぼ完形の釘である。

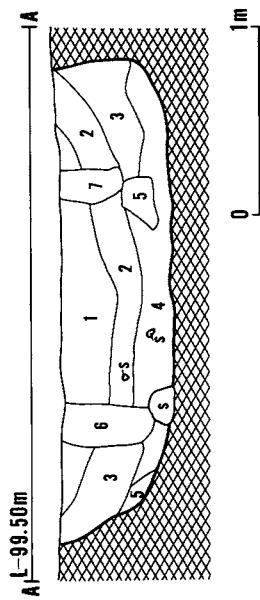
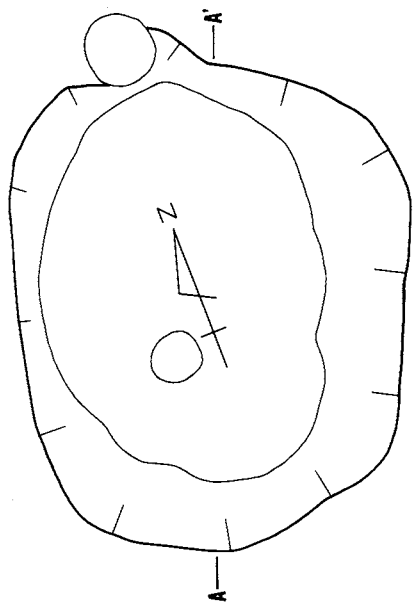
(124) C VI i 4土坑 (第209図、写真図版33)

中央部の西寄りに位置し、柱穴状土坑と重複して検出された。開口部径2.1m×0.9m、底部径1.75m×0.7m、深さ0.3mの規模をもち、平面形は長軸方向をN-82°-Wにもつ不整な楕円形で、皿形の断面形を示す。東半部の深い部分は柱穴の重複である。西半部の底面は平坦で、壁の立ち上がりも緩やかである。埋土は4層に分けられるが、土坑の埋土は1層の黒褐色土である。

遺物は出土していない。



第207図 (122) C VI i 9 土坑



第208図 (123) C VI i 10 土坑

C VI i 10 土坑

- 1 10YR 3/3 暗褐色 成が混入
- 2 10YR 3/3 暗褐色 シルトと淡黄色粘土との混入
- 3 10YR 3/2 暗褐色 シルト、淡黄色粘土や粘土が混入、成が混入
- 4 10YR 3/2 暗褐色 シルト、暗褐色土の混入、やわらかい
- 5 10YR 5/8 黄褐色 火山灰土
- 6 10YR 2/2 黒黒褐色 シルト、成が若干混入
- 7 10YR 2/2 黒黒褐色 シルト、成が若干混入

C VI i 9 土坑

- | | | | | |
|---|----|----------|-----|--------------------|
| 上 | 1 | 10YR 3/2 | 暗褐色 | シルト、淡黄色粘土や成が若干混入 |
| 坑 | 2 | 5Y 8/4 | 黒褐色 | 粘土質土のアロソク |
| | 3 | 10YR 3/2 | 暗褐色 | シルト、淡黄色粘土が混入 |
| 柱 | 4 | 10YR 4/4 | 暗褐色 | 火山灰土と淡黄色粘土と暗褐色土の混入 |
| | 5 | 10YR 3/2 | 暗褐色 | シルト |
| | 6 | 10YR 3/3 | 暗褐色 | シルト、淡黄色粘土が若干混入 |
| 穴 | 7 | 10YR 3/2 | 暗褐色 | シルト、成が混入 |
| | 8 | 10YR 5/8 | 黄褐色 | 火山灰土、暗褐色土が混入 |
| | 9 | 10YR 3/3 | 暗褐色 | シルト、黄褐色土が混入 |
| | 10 | 10YR 3/3 | 暗褐色 | |

(125) C VI j 5 土坑—1 (第210図、写真図版33)

中央部の西寄りに位置し、C VI j 5 土坑—2 や C VI j 6 土坑と隣接して検出された。開口部径1.6m×1.45m、底部径1.4m×1.3m、深さ0.2mの規模をもち、平面形は不整な円形で浅い皿形の断面形を示す。底面や壁には凹凸がある。埋土は2層に分けられるが、黄褐色土混じりの黒褐色土であり、小礫が混入する。

出土遺物はない。

(126) C VI j 5 土坑—2 (第211図)

中央部の西寄りに位置し、C VI j 5 土坑—1 と隣接して検出された。柱穴状土坑の重複による攪乱によって不整な形状である。開口部径1.3m×0.85m、底部径1.15m×0.7m、深さ0.2mの規模をもち、平面形は長軸方向がN—2°—Eを示す楕円形で、皿形の断面形である。底面には凹凸があり、壁の立ち上がりも緩やかで浅い。埋土は黒褐色土の単層である。

遺物は出土していない。

(127) C VI j 6 土坑 (第212図、写真図版33)

中央部の西寄りに位置し、C VI j 5 土坑—1 と隣接して検出された。開口部径2.3m×1.8m、底部径1.75m×1.2m、深さ0.3mの規模をもち、平面形は長軸方向がN—25°—Wを示す不整な楕円形で、鍋底形の断面形をもつ。柱穴状土坑との重複によって底面には凹凸があり、壁の立ち上がりは緩やかである。埋土は黒褐色土の単層であるが、黄褐色土粒や炭化物が混入する。

出土遺物はない。

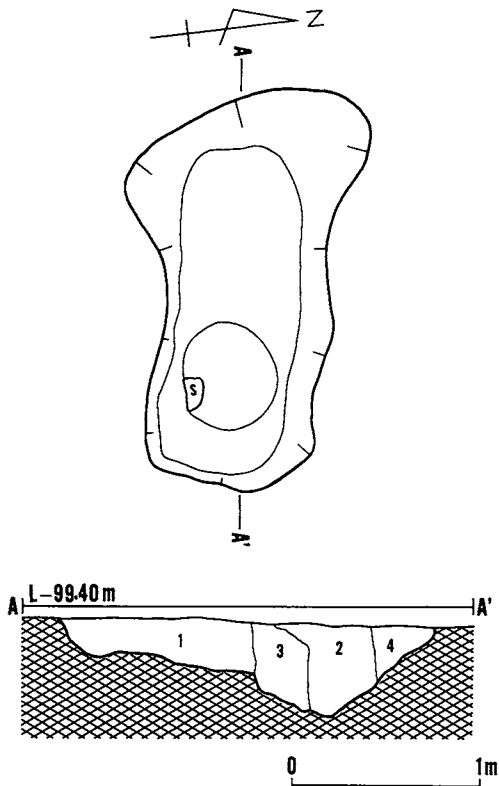
(128) C VI j 8 土坑 (第213図、写真図版34)

中央部に位置し、多くの柱穴状土坑と重複して検出された。開口部径2.6m×1.85m、底部径2.05m×1.4m、深さ0.15mの規模をもち、平面形は長軸方向がN—29°—Wを示す不整な楕円形で、浅い皿形の断面形をもつ。底面には凹凸があり壁の立ち上がりは緩やかである。埋土は黄褐色土が混入した黒褐色土の単層である。

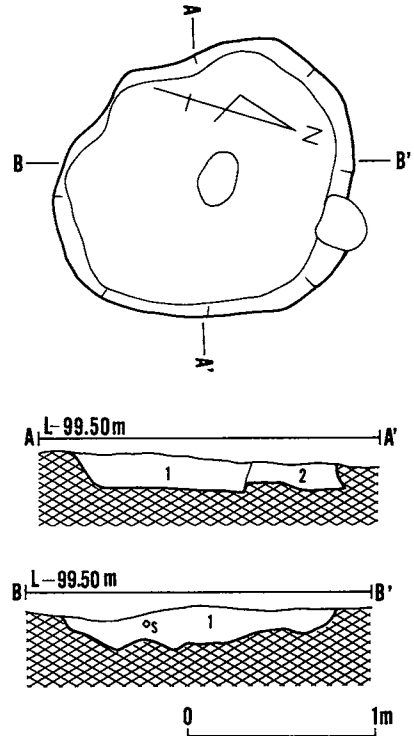
遺物は出土していない。

(129) C VII a 1 土坑 (第214図)

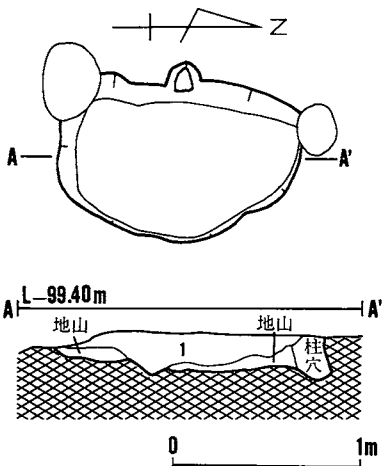
北端部中央の外堀際に位置し、C VII a 1 溝に隣接する。開口部径1.05m、底部径0.8m×0.75m、深さ0.5mの規模をもち、平面形は円形で鍋底形の断面を示す。底面は平坦で壁の立ち上がりは垂直に近い。埋土は黒褐色土の単層である。



第209図 (124) C VI j 4 土坑



第210図 (125) C VI j 5 土坑一 I



第211図 (126) C VI j 5 土坑一 2

C VI j 4 土坑

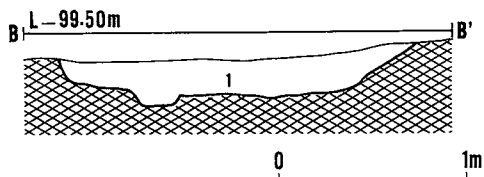
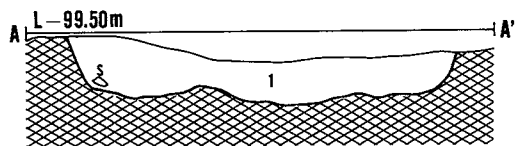
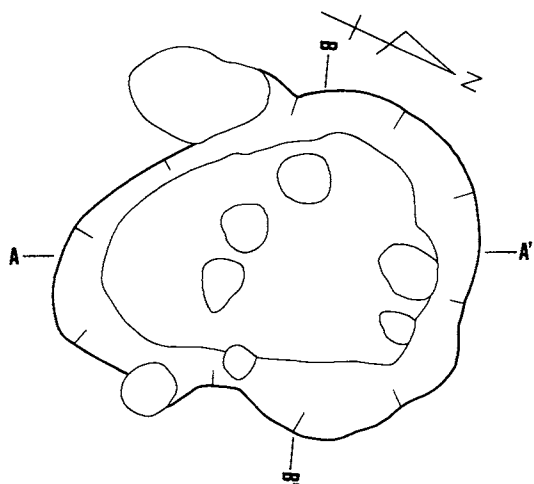
- 1 10Y R 2/2 黒褐色 シルト、黄褐色土が若干混入
- 2 10Y R 2/2 黒褐色 シルト、淡黄色粘土が混入
- 3 5 Y 8/3 淡黄色 粘土主体に暗褐色土が混入
- 4 10Y R 2/2 黒褐色 シルトと黄褐色土半々の混入

C VI j 5 土坑一 I

- 1 10Y R 2/2 黒褐色 シルト、黄褐色、火山灰土と小石が混入
- 2 10Y R 2/3 黒褐色 シルトと黄褐色土半々の混入

C VI j 5 土坑一 2

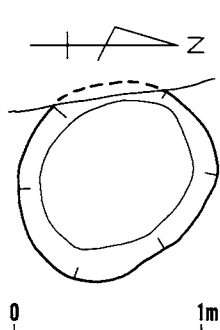
- 1 10Y R 2/2 黒褐色 シルト、黄褐色土が若干混入



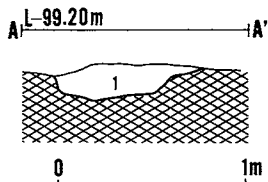
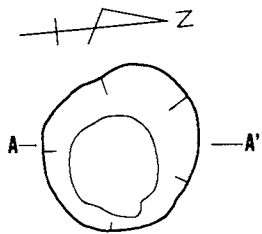
第212図 (127) C VI j 6 土坑

C VI j 6 土坑

1 10Y R 2/2 黒褐色シルト、黄褐色土や炭が混入



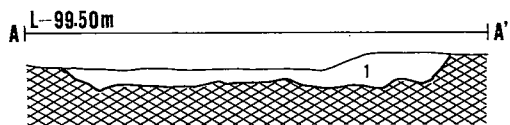
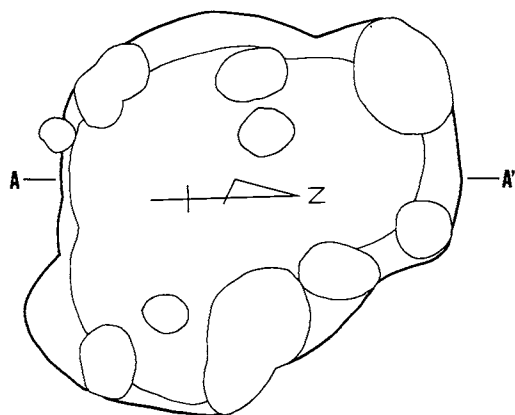
第214図 (129) C VII a 1 土坑



第215図 (130) C VII a 3 土坑-1

C VII a 3 土坑-1

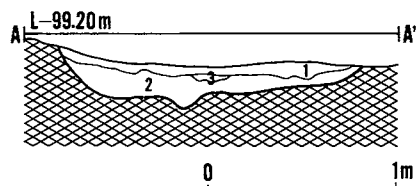
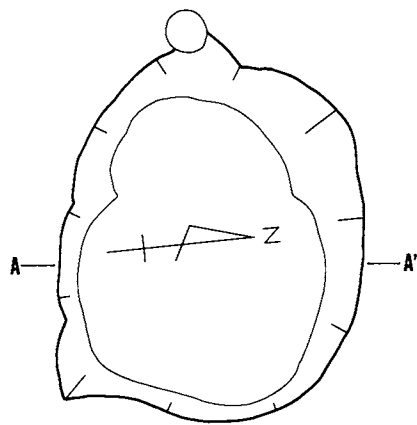
1 10Y R 2/2 黒褐色シルト、黄褐色土が混入



第213図 (128) C VI j 8 土坑

C VI j 8 土坑

1 10Y R 2/2 黒褐色シルト、黄褐色土が混入、炭が若干混入



第216図 (131) C VII a 3 土坑-2

C VII a 3 土坑-2

1 10Y R 2/2 黒褐色シルト、黄褐色土や炭が混入
2 10Y R 3/3 暗褐色シルトと黄褐色土半々の混土、炭が若干混入
3 地山の黄褐色土ブロック

遺物は出土していない。

(130) C VII a 3 土坑—1 (第215図、写真図版34)

北端部の中央に他遺構と重複することなく単独で位置する。開口部径0.9m×0.85m、底部径0.55m×0.5m、深さ0.2mの規模をもち、平面形は円形で断面形は浅い皿形を示す。底面には小さな凹凸があり、壁の立ち上がりは緩やかである。埋土は暗褐色土の単層である。

出土遺物はない。

(131) C VII a 3 土坑—2 (第216図、写真図版34)

北端部のやや東寄りに他遺構と重複することなく単独で検出された。開口部径1.9m×1.6m、底部径1.6m×1.3m、深さ0.2mの規模をもち、平面形は長軸方向をN-80°-Wにもつ楕円形で、皿形の断面形を示す。底面は平坦で、壁の立ち上がりは緩やかである。埋土は地山の黄褐色粘質土や炭化物が混入する黒褐色土と暗褐色土が主体をなし、3層に細分される。おそらく人為的に埋め戻した土層であろう。

遺物は出土していない。

(132) C VII a 3 土坑—3 (第217図、写真図版34)

北端部の東寄りに位置し、新旧関係の不明なC VII a 4 土坑—1と重複して検出された。開口部径2m×1.3m、底部径1.6m×1.05m、深さ0.25mの規模をもち、平面形は長軸方向をN-87°-Wにもつ楕円形で、皿形の断面形を示す。底面は平坦で壁は緩やかに外傾して立ち上がる。埋土は黒褐土が大部分を占めるが5層に細分される。

遺物の出土はない。

(133) C VII a 4 土坑—1 (第218図)

北端部の東寄りに位置し、新旧関係は不明であるがC VII a 3 土坑—3とC VII a 4 土坑—2と重複して検出された。北側の外掘際は削平されて残存しない。開口部径2.3m×2.15m、底部径1.8m×1.7m、深さ0.15mの規模をもち、平面形は長軸方向がN-2°-Eを示す楕円形で浅い皿形の断面形を示す。底面は北に向って緩く傾斜し、壁の立ち上がりは不明瞭である。埋土は黒褐色土の単層であるが、小礫が多く混入する。

出土遺物はない。

(134) C VII a 4 土坑—2 (第219図、写真図版34)

北端部の東寄りに位置し、新旧関係は不明であるが、C VII a 4 土坑—1 と重複して検出された。開口部径 1 m×0.85m、底部径0.8m×0.65m、深さ0.35mの規模をもち、平面形は長軸方向をN-1°-Eにもつ楕円形で、断面形は鍋底形を示す。底面は平坦であるが、西側には柱穴状土坑が重複する。壁の立ち上がりは垂直に近い。埋土は5層に分けられるが、黒褐色土が主体を占め、2層は草木灰や炭化物粉の堆積層である。地山の黄褐色粘土質土が混入する中～下層は人為的な埋め戻しによる土層であろう。

遺物は出土していない。

(135) C VII a 5 土坑—1 (第220図、写真図版34)

北端部の東寄りに位置し、新旧関係の不明なC VII a 5 土坑—2～4 と重複して検出され、重複部分の壁は残存しない。開口部径1.2m×1 m、深さ0.2m位の規模と推定される。平面形は円形と考えられ、断面形は皿形である。底面は平坦で壁の立ち上がりは湾曲している。埋土は黒褐色土の単層である。

出土遺物はない。

(136) C VII a 5 土坑—2 (第220図、写真図版)

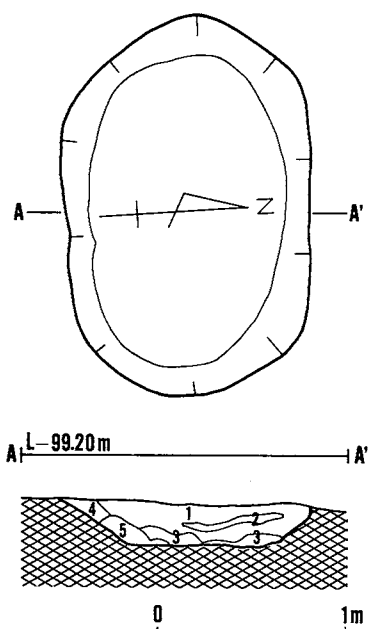
北端部の東寄りに位置し、新旧関係が不明であるが、C VII a 5 土坑—1 と重複して検出された。開口部径0.85m×0.8m、底部径0.7m×0.7m、深さ0.55mの規模をもち、平面形は円形でピーカー形の断面形を示す。底面は平坦で、壁は垂直に近い立ち上がりである。埋土は黒褐色土が主体をなすが5層に分けられる。壁の崩落土がみられたり水平堆積を示すことから自然埋没の土層とみられる。

遺物は出土していない。

(137) C VII a 5 土坑—3 (第220図、写真図版34)

北端部の東寄りに位置し、C VII a 5 土坑—1 や同一—4 と重複して検出されたが、新旧関係は不明である。北半部は重複による削平によって残存しない。残存する部分は開口部径1.5m×1 m、深さ0.1mの規模をもち、平面形は楕円形と推定され、浅い皿形の断面形を示す。底面は平坦であるが緩く北側へ傾斜する。壁の立ち上がりは不明瞭である。埋土は黒褐色土の単層である。

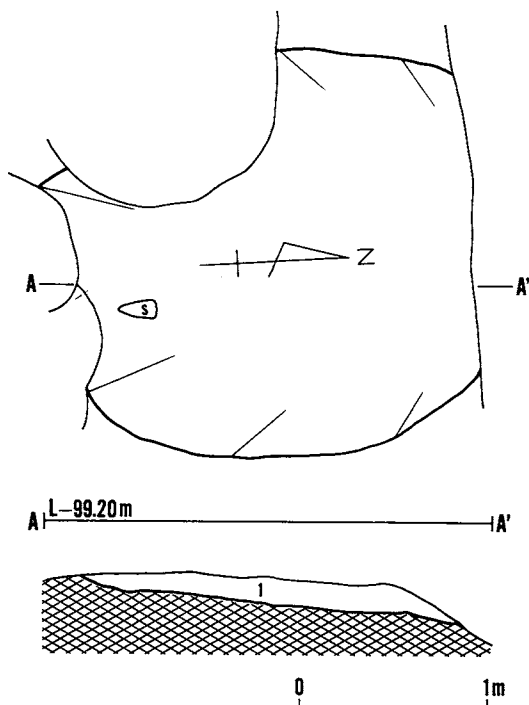
出土遺物はない。



第217図 (132) C VII a 3 土坑—3

C VII a 3 土坑—3

- 1 10Y R 3/2 黒褐色 シルト、黄褐色土が若干混入
- 2 10Y R 2/2 黒褐色 シルト
- 3 10Y R 2/2 黒褐色 シルト、炭が若干混入
- 4 10Y R 8/4 浅黄橙色 粘土質土の汚れたもの
- 5 10Y R 3/2 黒褐色 シルト、黄褐色土が混入



第218図 (133) C VII a 4 土坑—1

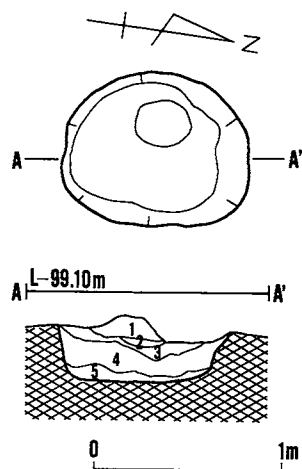
C VII a 4 土坑—1

- 1 10Y R 2/2 黒褐色 シルト、0.5~1cmの小石が多く混入

(138) C VII a 5 土坑—4 (第220図、写真図版34)

北端部の東寄りに位置し、新旧関係が不明なC VII a 5 土坑—1や同一—3と重複して検出され、北半部は失われている。残存する部分の開口部は径1.15m、底部径0.9m、深さ0.25mの規模をもち、平面形は円形と推定され、断面形は鍋底形である。底面はやや凹凸があり、壁の立ち上がりは内湾して広くなりくびれる。埋土は黒褐色土の単層であるが、黄褐色土粒が混入する。

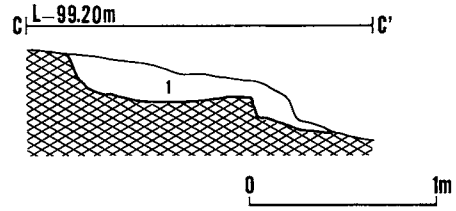
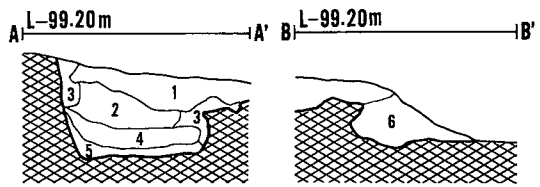
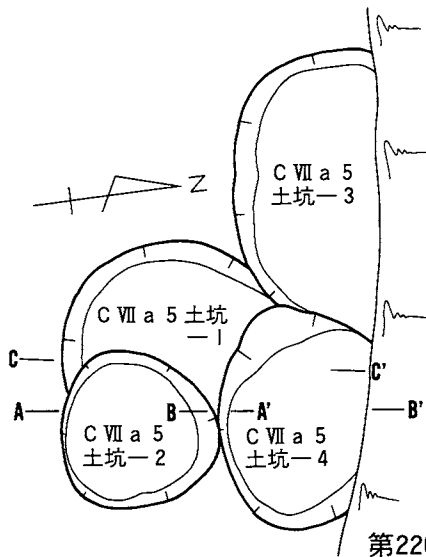
遺物の出土はない。



第219図 (134) C VII a 4 土坑—2

C VII a 4 土坑—2

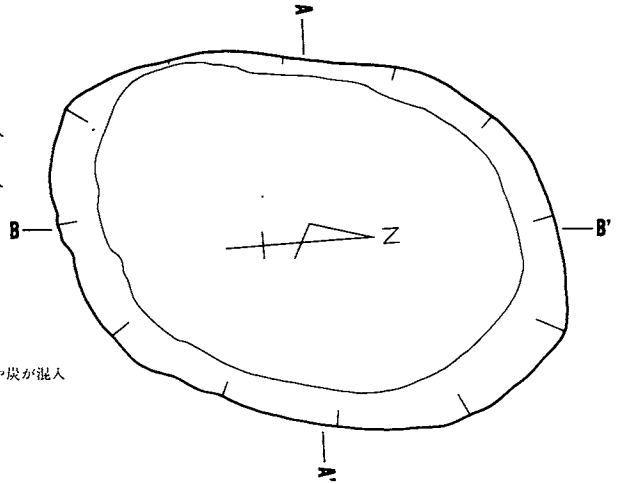
- 1 10Y R 3/2 黒褐色 シルト、黄褐色土が若干混入
- 2 10Y R 1.7/1 黒褐色 シルト、炭が主体
- 3 黄褐色 火山灰土と黒褐色土との混土
- 4 10Y R 3/2 黒褐色 シルト、淡黄色粘土が多く混入
- 5 10Y R 2/2 黒褐色 シルト、湿っている



第220図 (135~138) C VII a 5 土坑-1~4

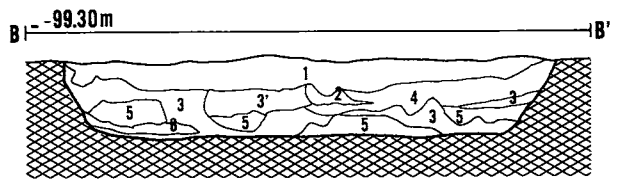
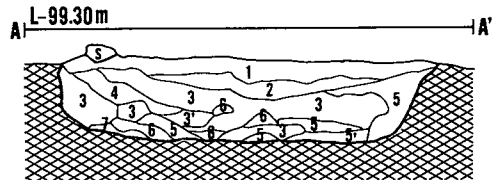
C VII a 5 土坑-1~4 共通

- 1 10Y R 2/3 黒 褐色 シルト、黄褐色土が若干混入
- 2 10Y R 2/3 黒 褐色 シルト、黄褐色土がやや多く混入
- 3 10Y R 4/4 褐色 火山灰土、崩落土
- 4 10Y R 2/2 黒 褐色 シルト
- 5 10Y R 4/3 にぶい黄褐色 火山灰土、淡黄色粘土質土が混入
- 6 10Y R 3/2 黒 褐色 シルト、黄褐色土が混入



C VII b 2 土坑

- 1 10Y R 3/3 暗褐色 シルト、黄褐色土が多く混入、小石や炭が混入
- 2 10Y R 2/2 黒褐色 シルト、黄褐色土が混入
- 3 10Y R 5/6 黄褐色 火山灰土、暗褐色土が混入
- 4 10Y R 3/3 暗褐色 シルト、小石や炭が混入
- 5 10Y R 4/4 褐色 シルト、黄褐色土がまだらに混入
5' はやや黒味がある
- 6 10Y R 2/3 黒褐色 シルト
- 7 2.5Y 8/3 淡黄色 粘土、汚れている



第221図 (139) C VII b 2 土坑

(139) C VII b 2 土坑 (第221図、写真図版35)

北東部に位置し、C VI e 4 溝跡に近接して検出された。開口部径2.85m×1.95m、底部径2.3m×1.65m、深さ0.45mの規模をもち、平面形は長軸方向がN-19°-Eを示す楕円形で、断面形は鍋底形である。底面は平坦で壁は垂直に近い立ち上がりを示し、崩落はほとんどない。埋土は7層に分けられ、上層は地山の黄褐色粘質土や小礫の混入した暗褐色土、中層～下層は黄褐色土や褐色土を主体とした土層である。土性や堆積状況から、人為的に埋め戻された土層と推定される。

出土遺物には土師器の実測不能な甕の体部破片が2点ある。

(140) C VII b 3 土坑 (第222図)

北東部に位置し、C VII a 4 土坑、C VII b 6 土坑、C VII c 5 土坑、C VII c 6 土坑、C VII a 4 溝跡等が集中する内側の低い凹み一帯を当土坑としたが、本来は土坑ではなく落ち込み遺構に入る可能性がある。開口部径8m×5m、深さ0.3mの規模をもち、平面形は不整形で、浅い皿形の断面形を示す。埋土は3層に分けられるが、黄褐色土混じりの暗褐色土が主体をなす。

遺物には砥石2点がある。1点(第330図83)は縦9.6cm、横5.7cm、重さ148gの淡緑色珪質凝灰岩を使用し、別の1点(第330図84)は縦5.2cm、横7cm、重さ64gの両輝石安山岩熔岩を使用している。

(141) C VII b 6 土坑 (第223図、写真図版35)

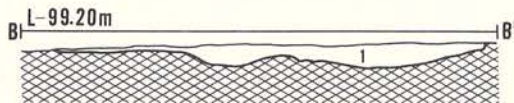
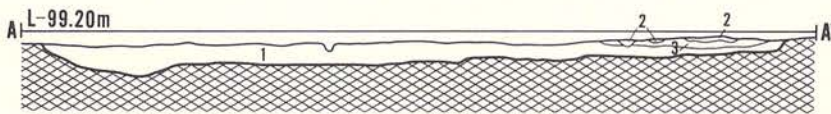
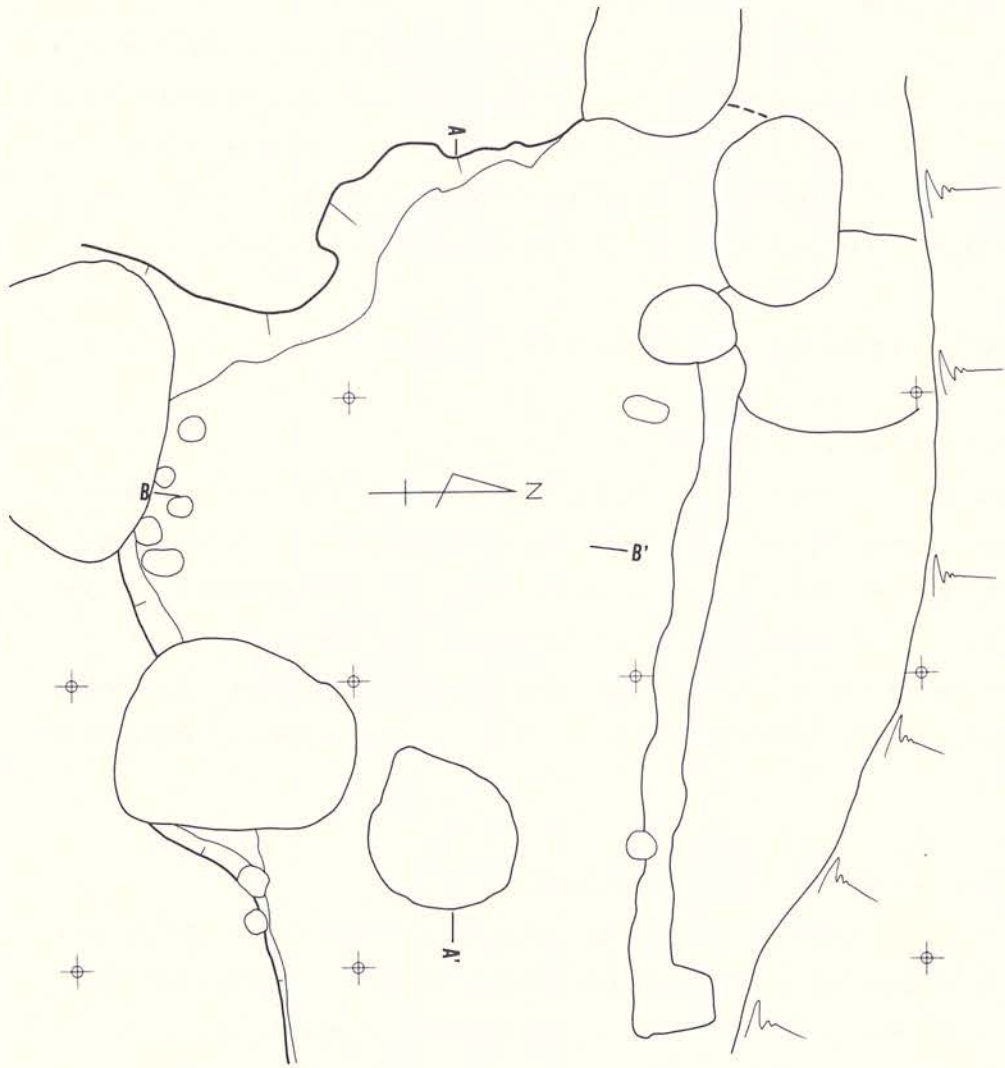
北東部に位置し、C VII b 3 土坑の下位に検出された。開口部径1.6m×1.6m、底部径1.4m×1.3m、深さ0.25mの規模をもち、平面形は円形で鍋底形の断面形を示す。底面は平坦で壁の立ち上がりは緩く湾曲して外傾し、柱穴状土坑が2カ所で重複する。埋土は4層に分けられ、2層の黒褐色土が大部分を占める。

出土遺物はない。

(142) C VII b 7 土坑-1 (第224図、写真図版35)

北東部の外堀際に他遺構と重複することなく単独で位置する。開口部径1.1m×1m、底部径0.75m×0.7m、深さ0.35mの規模をもち、平面形は不整な円形で鍋底形の断面形を示す。底面は平坦で壁の立ち上がりは垂直に近く、崩落はない。埋土は6層に分けられ、上層は黒褐色土、中層は地山の黄褐色土と黒褐色土との混合土、下層は黒褐色土である。径10cm～20cm大の扁平な礫が若干混入する。土性や堆積状況から人為的に埋め戻されたと推定される。

遺物は出土していない。

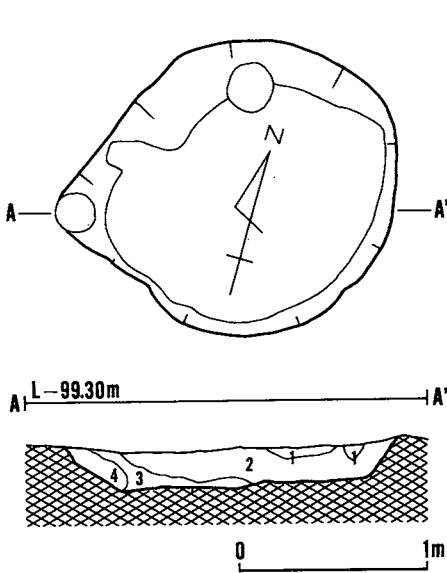


0 2m

第222図 (140) C VII b 3 土坑

C VII b 3 土坑

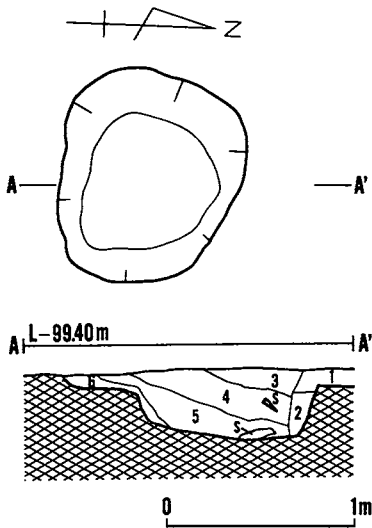
- | | | | |
|---|-------------|-----|--------------------|
| 1 | 10Y R 3 / 3 | 暗褐色 | シルト、黄褐色土が混入、炭若干含む |
| 2 | 7.5Y 8 / 3 | 淡黄色 | 粘土質土、0.5~4cmの小石が混入 |
| 3 | 10Y R 2 / 1 | 黒色 | シルト |



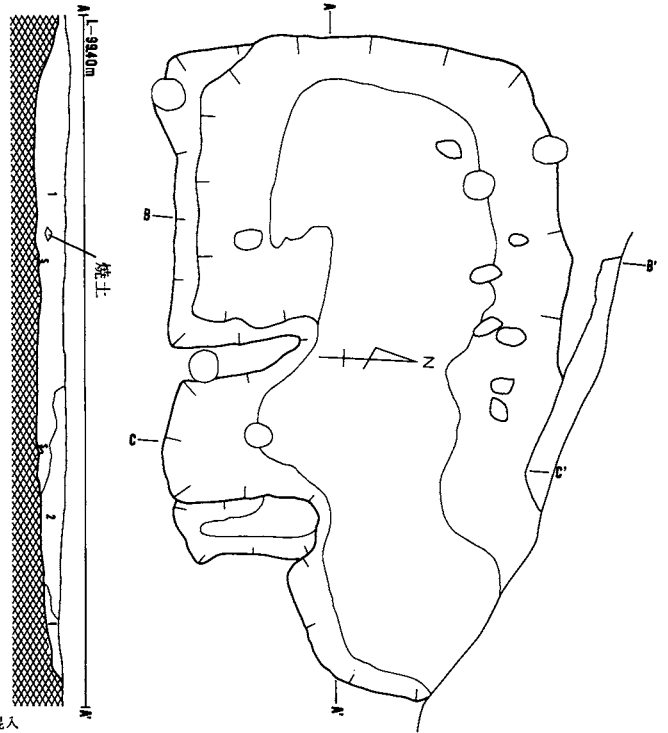
第223図 (141) C VII b 6 土坑

C VII b 6 土坑

- | | | | |
|---|-----------|--------|-----------------|
| 1 | 10Y R 3/4 | 暗褐色 | シルト、黄褐色土が多く混入 |
| 2 | 10Y R 2/2 | 黒褐色 | シルト、黄褐色土や炭が若干混入 |
| 3 | 10Y R 5/3 | にぶい黄褐色 | 粘土、暗褐色が若干混入 |
| 4 | 10Y R 5/6 | 黄褐色 | 火山灰土、黒褐色土が若干混入 |



第224図 (142) C VII b 7 土坑一



第225図 (143) C VII b 8 土坑

C VII b 8 土坑

- | | | | |
|---|-----------|-----|----------------------|
| 1 | 10Y R 2/3 | 黒褐色 | シルト、炭や焼土、黄褐色土が混入 |
| 2 | 10Y R 3/3 | 暗褐色 | シルト、黄褐色土が多く混入、炭、焼土混入 |
| 3 | 10Y R 4/4 | 褐色 | 火山灰土、黒褐色土が混入 |
| 4 | 10Y R 5/6 | 黄褐色 | 火山灰土、黒褐色土が混入 |

C VII b 7 土坑一

- | | | | |
|---|-------------|-----|-----------------|
| 1 | 10Y R 3/3 | 暗褐色 | シルト、炭や黄褐色土が若干混入 |
| 2 | 10Y R 1.7/1 | 黒色 | シルト、炭が主体、焼土が混入 |
| 3 | 10Y R 3/2 | 黒褐色 | シルト、炭が混入 |
| 4 | 10Y R 5/8 | 黄褐色 | 火山灰土と黒褐色土半々の混土 |
| 5 | 10Y R 2/2 | 黒褐色 | シルト、炭と黄褐色土が若干混入 |
| 6 | 10Y R 4/4 | 褐色 | 火山灰土、黒褐色土が混入 |

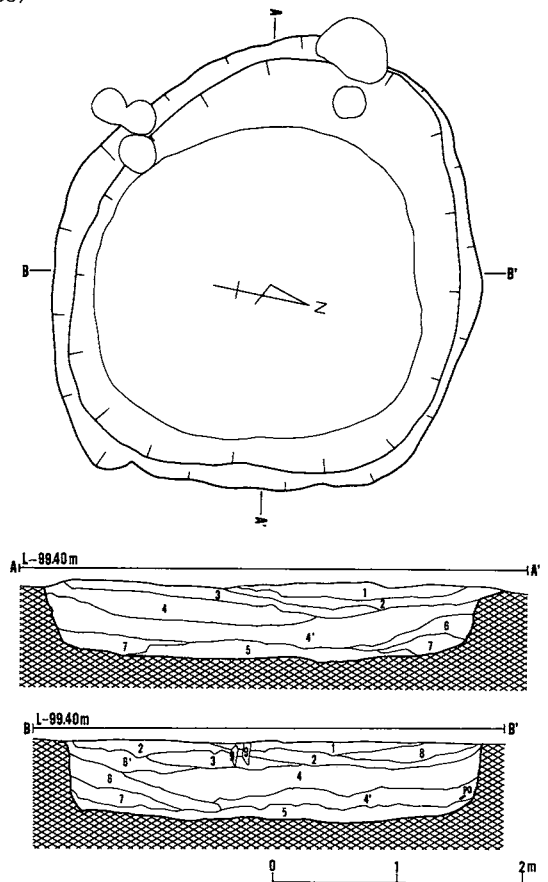
(143) C VII b 8 土坑 (第225図、廻真図版35)

遺物には土師器坏6点、土師器甕2点、鉄製品5点、縄文土器19点がある。土師器坏(第371図89)はロクロ使用成形で底部に回転糸切り痕をもつ口縁部～底部を残す破片である。非内面黒色処理で、外面に墨痕をもつ。他の坏と甕は実測不能なロクロ成形された小破片である。鉄製品には丸棒(第348図88)、両釘(第348図89)、刀子の刀身部(第348図90)、壺(第348図91)、銹化によって原形不明(92)がある。

遺物には土師器坏6点、土師器甕2点、鉄製品5点、縄文土器19点がある。土師器坏(第371図89)はロクロ使用成形で底部に回転糸切り痕をもつ口縁部～底部を残す破片である。非内面黒色処理で、外面に墨痕をもつ。他の坏と甕は実測不能なロクロ成形された小破片である。鉄製品には丸棒(第348図88)、両釘(第348図89)、刀子の刀身部(第348図90)、壺(第348図91)、銹化によって原形不明(92)がある。

(144) C VII c 2 土坑 (第226図、写真図版35)

北東部に位置し、新旧関係の不明なC VI c 4 溝跡と当土坑より古いC VII d 2 陥し穴状土坑と重複して検出された。開口部径3.65m×3.45m、底部径2.7m×2.55m、深さ0.65mの規模をもち、平面形はやや不整な円形を示し、断面形は鍋底形である。底面は平坦で壁の立ち上がりは垂直に近い。柱穴状土坑による攪乱が一部に見られる他は崩落がみられず整っている。埋土は9層に分けられる。上層部には炭化物を多く含み、中層部には地山の黄褐色土混じりの暗褐色土、下層部は汚れた黄褐色の粘土質土である。混土状



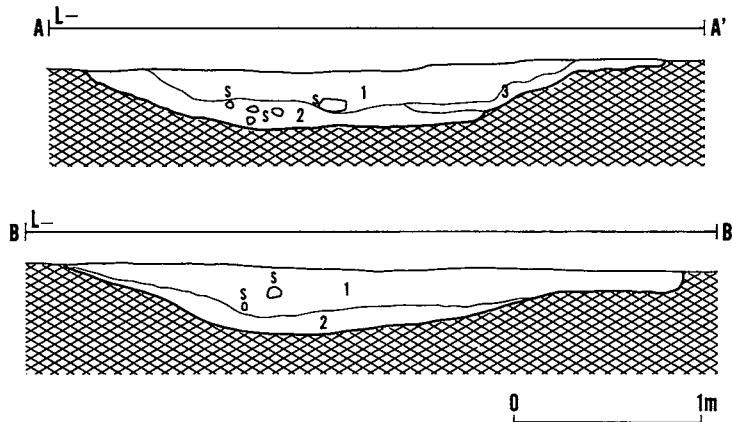
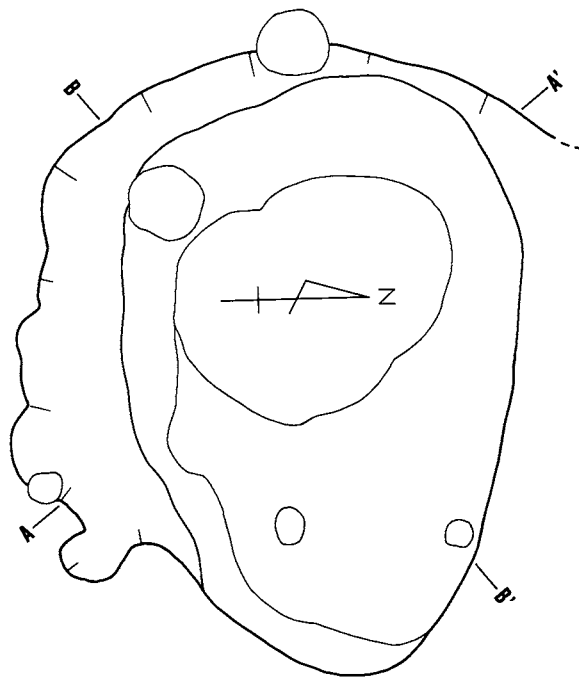
C VII c 2 土坑

1	10Y R 4/3	にぶい黄褐色	シルト、淡黄色粘土が多く混入、炭を含む
2	10Y R 17/1	黒色	シルト、炭が多く混入
3	10Y R 4/6	褐色	火山灰土、暗褐色土が混入
4	10Y R 3/3	暗褐色	シルト、黄褐色土や炭が混入
4'	10Y R 3/3	暗褐色	シルト、黄褐色土がやや多い
5	2.5Y /	にぶい黄色	粘土質土
6	10Y R 4/6	褐色	火山灰土、黄褐色土が混入
7	10Y R 3/4	暗褐色	シルト、黄褐色土が混入
8	10Y R 2/3	黒褐色	シルト、炭が混入
9			杭穴

第226図 (144) C VII c 2 土坑

の堆積を示す土層が多いことから、埋め戻したものと考えられる。

遺物には土師器坏5点、同甕4点、須恵器甕1点、青磁1点、鉄製品1点、砥石1点、炭化材などが出土している。土師器坏はロクロ使用成形で非内面黒色処理された実測不能の小破片である。甕も同様である。須恵器大甕(第371図80)は器表・裏面とも並行叩き具文をもつ体部破片である。青磁(118)は碗か皿の実測不能な体部小破片で、胎土は褐灰色、釉は緑色である。15世紀頃の製品であろうか。砥石(第327図32)は粘板岩を使用し、縦9.3cm、横2.7cm、重さ30gの大きさをもつ。鉄製品(93)は錆化によって原形を残していない。



第227図 (145) C VII c 5 土坑

C VII c 5 土坑

- 1 10Y R 2/3 黒褐色 シルト、0.5-1cmの小石や炭が混入
- 2 10Y R 2/2 黒褐色 シルト、3-5cmの小石が混入
- 3 10Y R 2/2 黒褐色 シルトと黄褐色土との混土

(145) C VII c 5 土坑 (第227図、写真図版35)

北東部に位置し、当土坑より古いC VI a 4 溝跡と重複して検出された。開口部径3.3m×3m、底部径2.95m×1.75m、深さ0.35mの規模をもち、平面形は長軸方向をN-90°-Wにもち西側が膨らむ不整な楕円形で、浅い皿形の断面形を示す。底面は中央のやや西寄り部分がかもっとも深く、壁の立ち上がりは不明瞭で緩やかに外傾して開口部に続く。埋土は3層に分けられるが、黒褐色土が主体をなし、小礫や炭化物が混入する。

遺物には土師器坏8点、青白磁1点、瀬戸・美濃系灰釉陶器1点、鉄製品2点、貨幣1点がある。土師器坏はロクロ成形された実測不能の体部小破片である。灰釉陶器(26)は口縁部が反端りする口縁部から体部上位を残す実測不能の皿の破片である。青白磁(第319図1)は水注の小破片で、灰釉陶器は15世紀末～16世紀前半、青白磁は14世紀頃の製品であろう。鉄製品の1点(第348図93)は鍋の口縁部、別の1点(94)は不明である。貨幣(第350図23)は永楽通寶である。

(146) C VII c 6 土坑-1 (第228図、写真図版36)

北東部に位置し、当土坑より古いC VII d 5 土坑と重複して検出された。開口部径2.55m×2m、底部径2.2m×1.7m、深さ0.45mの規模をもち、平面形は長軸方向がN-9°-Eを示す南側がやや膨らむ不整な楕円形で、鍋底形の断面形を示している。底面には細かい凹凸があり、壁の立ち上がりは垂直に近く、壁の崩落はみられない。埋土は、上層が黄褐色土と地山粘土の混土、中～下層は黄褐色土や炭化物が混入した暗褐色～黒褐色土で7層に細分されるが、ところどころに5cm～15cm大の礫を含む。土性や堆積状況からみて埋め戻しによる土層と考えられる。

遺物には鉄製品1点と縄文時代の石器が1点出土している。鉄製品(95)は鉄滓である。

(147) C VII c 6 土坑-2 (第229図、写真図版36)

北東部に位置し、当土坑より古いC VII d 7 土坑と重複して検出された。開口部径3.1m×2.65m、底部径2.35m×1.85m、深さ0.6mの規模をもち、平面形は長軸方向をN-14°-Wにもつ楕円形で鍋底形の断面形を示す。底面は平坦で壁の立ち上がりは垂直に近いが、いくつかの柱穴状土坑が重複し壁の崩落はほとんどなく整っている。埋土は8層に分けられるが、黄褐色土が粒状や小塊状に多く混入した黒褐色土が大部分を占める。中層の炭化物粉や草木灰が主体の3層以外は埋め戻された土層と考えられる。

遺物の出土はない。

(148) C VII d 1 土坑 (第230図)

北東側に位置し、C VII a 1 溝跡の上位に重複して検出された。開口部径1.1m×1.1m、底部

径0.95m×0.9m、深さ0.1mの規模をもち、平面形は円形の断面形を示す。底面は平坦で壁の立ち上がりは緩やかであり、一箇所で柱穴状土坑と重複する。埋土は暗褐色土の単層である。

遺物の出土はない。

(149) C VII d 2 土坑—1

(第231図、写真図版36)

北東部に他遺構と重複することなく単独で位置する。開口部径1.45m×1.4m、底部径0.75m×0.7m、深さ0.15mの規模をもち、平面形は円形で浅い皿形の断面形をもつ。底面にはやや凹凸があり、北寄りが僅かに低くなり、壁の立ち上がりは緩やかである。埋土は黒褐色の単層で、地山の褐色土や炭化物が混入する。

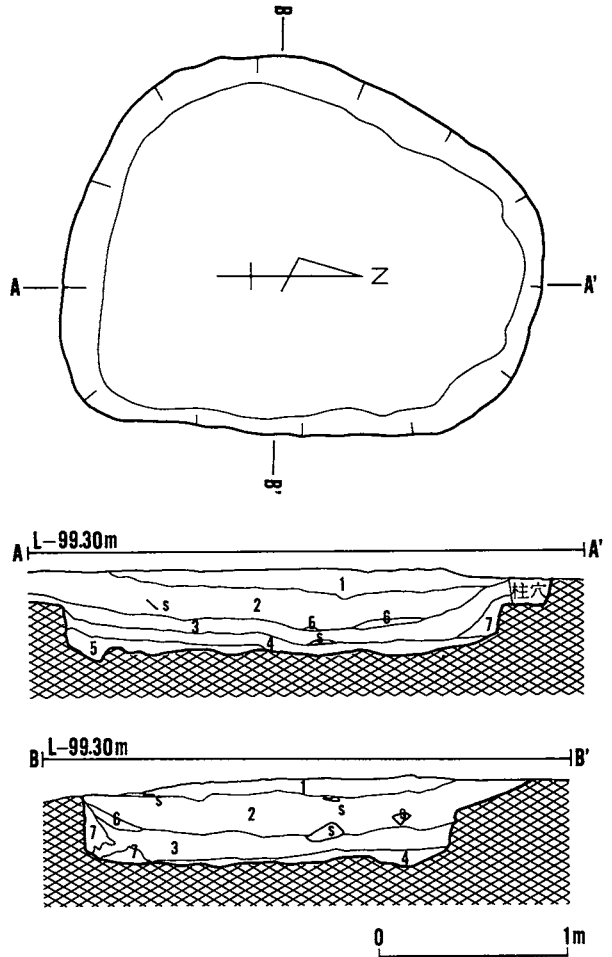
遺物は出土していない。

(150) C VII d 2 土坑—2

(第233図、写真図版36)

北東部に位置し、当土坑より新しいC VII e 2 土坑と古いC VII d 2 陥し穴状遺構と重複して検出された。開口部径2.65m×1.5m、底部径2.1m×1.1m、深さ0.4mの規模をもち、平面形は長軸方向がN—84°—Wを示す楕円形で、鍋底形の断面形を示す。底面は極めて平坦で壁の立ち上がりは垂直に近いものの、西壁には段をもつ。埋土は2層に分けられるが、黒褐色土が大部分を占める。黄褐色土が小塊状で多く混入していることから、埋め戻しによる土層と考えられる。

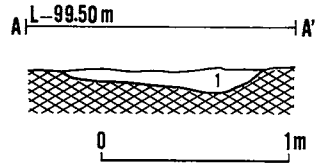
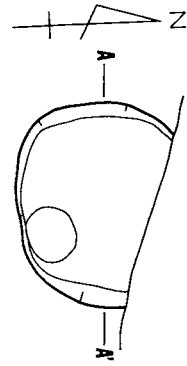
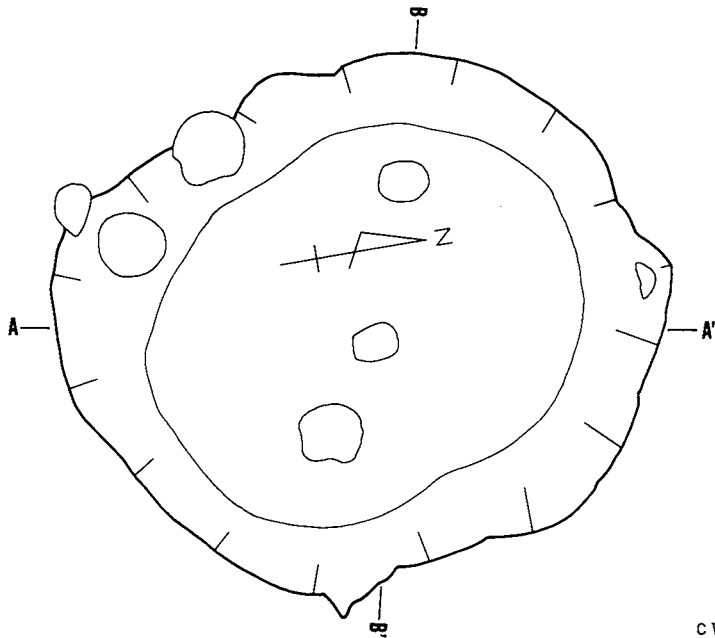
出土遺物には瀬戸・美濃系灰釉陶器の口縁部～頸部を残す袴腰形の香炉(第311図46) 1点がある。



第228図 (146) C VII c 6 土坑—1

C VII c 6 土坑—1

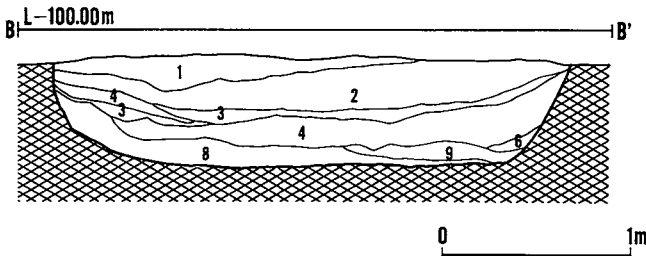
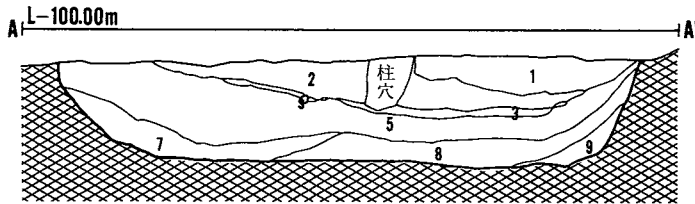
- 1 10Y R 5/6 黄褐色 火山灰土と淡黄色粘土との混土
- 2 10Y R 3/3 暗褐色 シルト、黄褐色土や炭がまばらに混入
- 3 10Y R 2/3 黒褐色 シルト、黄褐色土や炭がまばらに混入
- 4 10Y R 2/2 黒褐色 シルト、黄褐色土や炭がまばらに混入
- 5 7.5Y R 3/4 暗褐色 シルトと黄褐色土との混土
- 6 10Y R 1.7/1 黒色 シルト
- 7 7.5Y R 5/6 明褐色 火山灰土のブロック土



第230図 (148) C VII d 1 土坑

C VII d 1 土坑

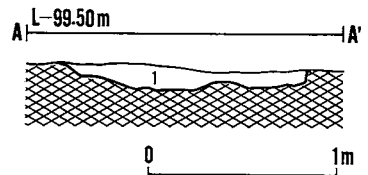
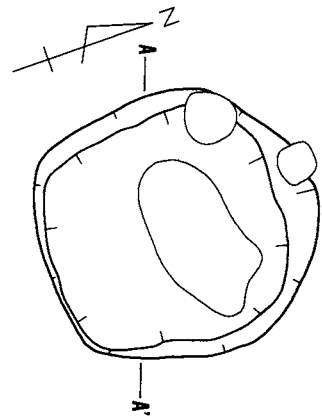
1 10Y R 3/3 暗褐色シルト、黄褐色土や炭が混入する



第229図 (147) C VII c 6 土坑-2

C VII c 6 土坑-2

- 1 7.5Y R 7/6 橙 色 火山灰土（地山）
 - 2 7.5Y R 3/2 黒 褐色 シルト、地山や炭化物が多量に混入
 - 3 7.5Y R 1.7/1 黒 褐色 シルト、炭化物と灰の層
 - 4 7.5Y R 3/2 黒 褐色 シルト、2層に似る
 - 5 7.5Y R 3/2 黒 褐色 シルト、2層に似る
 - 6 7.5Y R 5/8 明赤褐色 火山灰土の流れ込み
 - 7 7.5Y R 7/6 橙 色 火山灰土
 - 8 7.5Y R 3/2 黒 褐色 粘土質シルト、やや砂質
- 4層以下は人為、3層は自然であろう、1、2層も人為的



第231図 (149) C VII d 2 土坑-1

C VII d 2 土坑-1

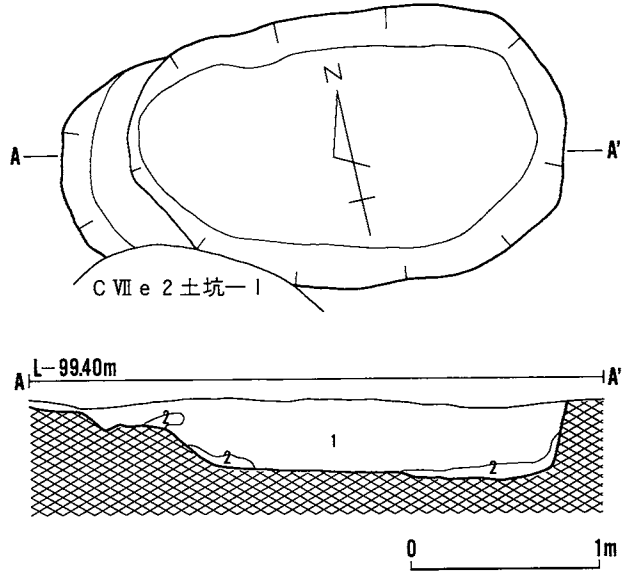
1 10Y R 2/3 黒 褐色 シルト、黄褐色土や炭が混入

(151) C VII d 3 土坑

(第233図、写真図版36)

北東側に位置し、C VII e 4 土坑に隣接して検出された。開口部径1.8m×1.65m、底部径1.5m×1.4m、深さ0.25mの規模をもち、平面形は隅丸方形で鍋底形の断面形を示す。底面はほぼ平坦で壁の立ち上がりは垂直に近いが、6カ所で柱穴状土坑と重複する。埋土は暗褐色土の単層であるが、黄褐色土が塊状に多く混入していることから、埋め戻しによる土層と考えられる。

出土遺物には元祐通寶の貨幣1点(第21図)がある。



第232図 (150) C VII d 2 土坑—2

C VII d 2 土坑—2

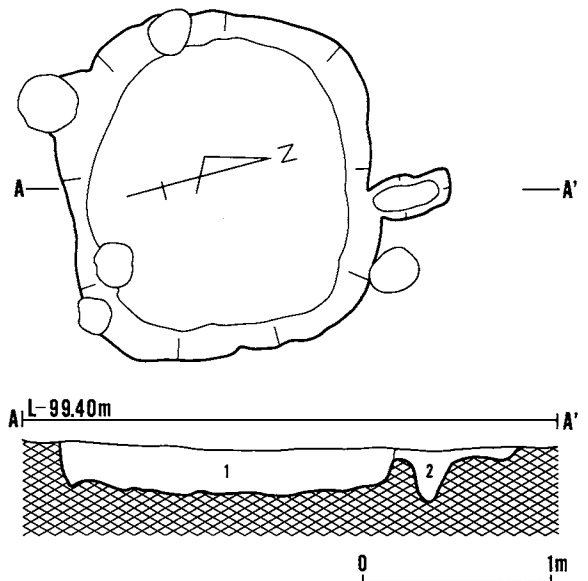
- 1 10Y R 3/2 黒褐色シルト、黄褐色土が混入、炭が混入
- 2 10Y R 5/4 濃い黄褐色 火山灰土

(152) C VII d 5 土坑

(第234図、写真図版36)

北東部に位置し、C VI a 4 溝跡とC VII c 6 土坑—1と重複して検出され、C VII c 6 土坑—1と重複する部分の壁は失われている。開口部径2.8m×2.3m、底部径2.3m×1.75m、深さ0.3mの規模をもち、平面形は長軸方向をN-6°-Wにもつ不整な楕円形で皿形の断面形を示す。底面には凹凸があり、柱穴状土坑との重複もみられ、壁の立ち上がりは緩やかに外傾するとともに、若干凹凸がみられる。埋土は2層に分けられるが、黒褐色土が大部分を占め、黄褐色土が多く混入する。土性や堆積状況から人為的に埋め戻された土層である。

縄文時代の石器が1点出土している。



第233図 (151) C VII d 3 土坑

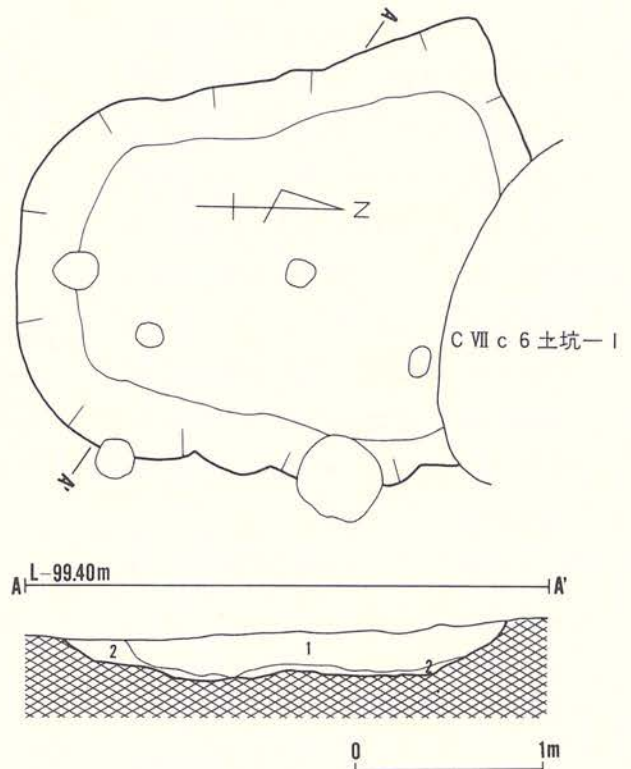
C VII d 3 土坑

- 1 7.5Y R 3/4 暗褐色シルト、黄褐色土が多く混入、炭を含む
- 2 10Y R 2/2 黒褐色シルト、淡黄色粘土がまばらに混入

(153) C VII d 7 土坑

(第235図、写真図版37)

北東部に位置し、当土坑より古いC VII c 6 土坑一 2 や、新旧関係の不明な C VI a 4 溝跡、C VII d 7 竪穴住居跡とも重複して検出され、北壁は失われている。開口部径3.2m×2m、底部径2.2m×1.3m、深さ0.5mの規模をもち、平面形は長軸方向がN-72°-Eを示す楕円形で、鍋底形の断面形を示す。底面にはやや凹凸があるも中央部に向って緩く傾斜し、壁の立ち上がりは外傾する。埋土は6層に分けられるが、上層と下層は黄褐色土が小塊状に混入した黒褐色土、中層は黄褐色土が主体である。4層は草木灰や炭化物粉の堆積層である。土性や堆積状況から考えて人為的に埋め戻された土層であろう。



第234図 (152) C VII d 5 土坑

C VII d 5 土坑

- 1 10YR 2/3 黒褐色 シルト、黄褐色土や炭が混入
- 2 10YR 5/6 黄褐色 火山灰土、黒褐色土が混入

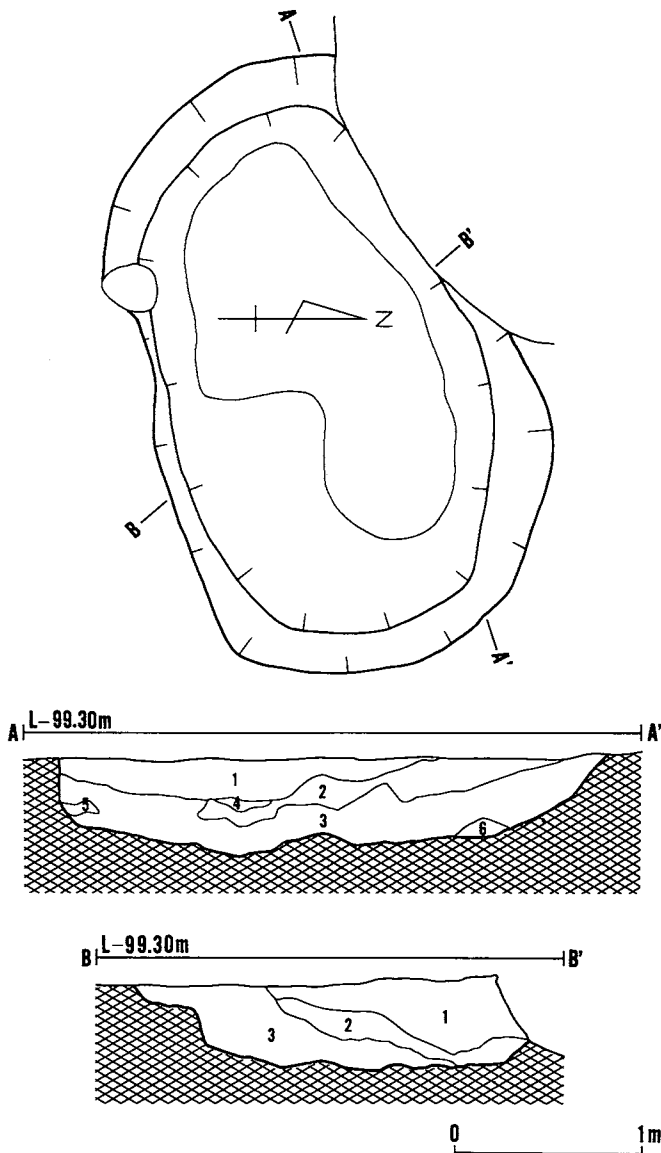
遺物には土師器坏2点、同甕1点、須恵器1点、鉄製品1点、縄文時代の石器2点がある。土師器は坏・甕とも

ロクロ成形された実測不能な体部の小破片である。須恵器(第371図81)は器表に並行叩き具痕、裏面にナデ痕をもつ大甕の体部破片である。鉄製品(第348図96)は鍋の体部破片である。

(154) C VII d 10 土坑 (第236図、写真図版)

北東端に他遺構と重複もなく単独で検出された。開口部径1.85m×1.8m、底部径1.35m×1.3m、深さ0.45mの規模をもち、平面形は円形で鍋底形の断面形を示す。底面は平坦で、壁の立ち上がりは垂直に近い。埋土は5層に分けられるが、黄褐色土や草木灰を含んだ極暗褐色土が主体をなしている。土性や堆積状況から考えて、上層は人為的に埋め戻した土層であろうが、中・下層は明らかでない。

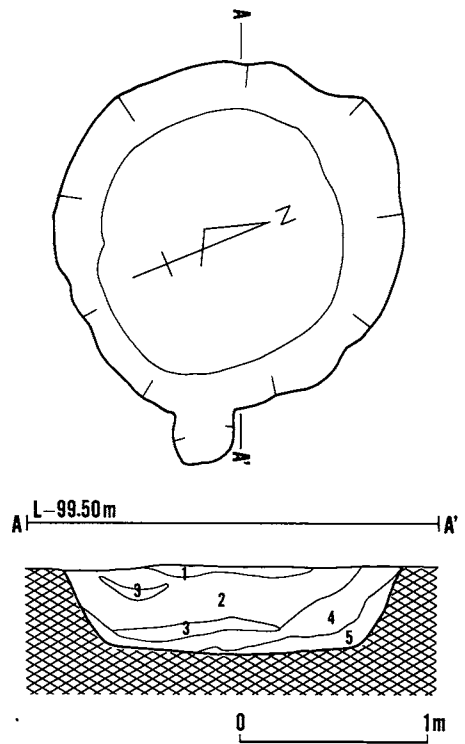
遺物として草木灰層の中から米、大麦、小麦、小豆の炭化穀類が出土している。



第235図 (153) C VII d 7 土坑

C VII d 7 土坑

- | | | | |
|---|-------------|--------|------------------|
| 1 | 10Y R 2/3 | 黒 褐 色 | シルト、淡黄色粘土や炭が多く混入 |
| 2 | 10Y R 5/4 | にぶい黄褐色 | 火山灰土、黒褐色土が多く混入 |
| 3 | 10Y R 3/2 | 黒 褐 色 | シルト、黄褐色土や炭が混入 |
| 4 | 10Y R 1.7/1 | 黒 色 | シルト、炭が主体 |
| 5 | 10Y R 5/8 | 黄 褐 色 | 火山灰土 |
| 6 | 10Y R 5/3 | にぶい黄褐色 | 粘土質土 |



第236図 (154) C VII d 10 土坑

C VII d 10 土坑

- | | | | |
|---|------------|-------|-------------------|
| 1 | 7.5Y R 3/3 | 暗 褐 色 | シルト、黄褐色土がブロック状に混入 |
| 2 | 7.5Y R 2/3 | 極暗褐色 | シルト、黄褐色土や草灰が混入 |
| 3 | 7.5Y R 2/1 | 黒 色 | シルト、草灰、炭化物の層 |
| 4 | 7.5Y R 3/3 | 暗 褐 色 | シルト、黄褐色土が混入 |
| 5 | 7.5Y R 3/3 | 暗 褐 色 | シルト、黄褐色土が多く混入 |

(155) C VII e 2 土坑 (第237図、写真図版37)

北東部に位置し、当土坑より古いC VII d 2 土坑—2と新旧関係が不明なC VII e 3 土坑と重複して検出された。大きく膨らんだ南側と北側では底面に段差があり、2つの土坑の重複した形の可能性もある。開口部径3.4m×2.5m、底部径3.1m×2.2m、深さ0.5mの規模をもち、平面形は長軸方向N—10°—Wを示す不整な楕円形で鍋底形の断面形をなす。底面は南北で0.15mの段差をもち、それぞれは平坦で壁は垂直に近い。埋土は8層に分けられるが、上層は黄褐色土や粘土が主体を占め、下層は黄褐色土の混入した黒褐色土が大部分を占める。全体的に炭化物や草木灰が混入する。土性や堆積状況から、人為的に埋め戻した土層と推定される。

遺物には青磁2点がある。1点(第319図71)は体部内面に型押しによる花文様をもつ碗の体部破片である。別の1点(94)は実測不能な碗の体部破片である。71は15世紀、94は14世紀頃の製品であろう。

(156) C VII e 3 土坑 (第238図、写真図版37)

北東部に位置し、新旧関係が不明なC VII e 2 土坑に隣接して検出された。開口部径1.1m×0.85m、底部径0.95m×0.65m、深さ0.07mの規模をもち、平面形は長軸方向をN—31°—Eにもつ楕円形で浅い皿形の断面形を示す。柱穴状土坑とも重複があるため底面にやや凹凸があり、壁の立ち上がりは緩やかで明確でない。埋土は黄褐色土混じりの黒褐色土である。

遺物は出土していない。

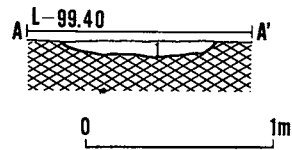
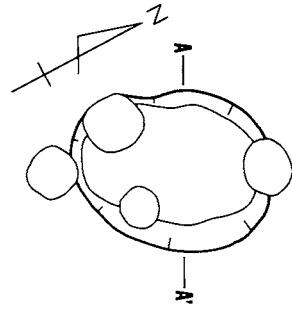
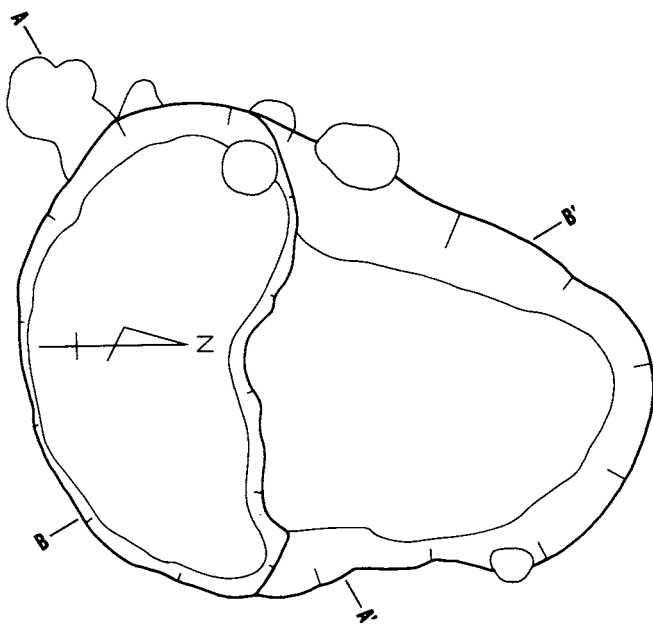
(157) C VII e 4 土坑 (第239図、写真図版37)

北東部に位置し、C VII d 4 土坑に隣接して検出された。開口部径1.9m×1.6m、底部径1.7m×1.3m、深さ0.35mの規模をもち、平面形は長軸方向がN—58°—Wを示す不整な楕円形で鍋底形の断面形を示す。底面は凹凸があり壁の立ち上がりは垂直に近い。埋土は4層に分けられるが、黄褐色土や暗褐色土の混土で炭化物が混入する。おそらく埋め戻しによる土層であろう。

出土遺物はない。

(158) C VII e 7 土坑 (第240図、写真図版37)

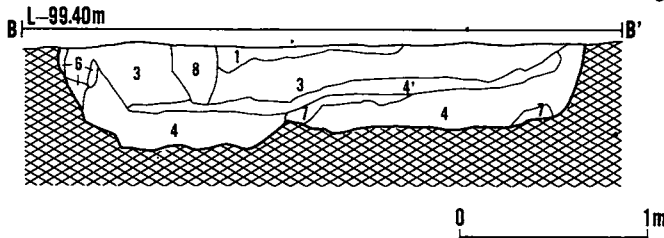
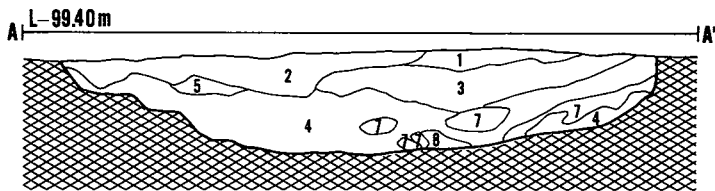
北東部に位置し、当土坑より古いC VII d 7 竪穴住居跡と重複して検出された。開口部径2.9m×2.4m、底部径2.5m×1.9m、深さ0.45mの規模をもち、平面形は長軸方向がN—61°—Wを示す楕円形で鍋底形の断面形である。底面は平坦で壁の立ち上がりは垂直に近く、柱穴状土坑が8箇所重複している。埋土は3層に分けられ、暗褐色土の混入した橙色の粘土質土が大部分を占める。土性や堆積状況から埋め戻しによる土層と推定される。



第238図 (156) C VII e 3 土坑

C VII e 3 土坑

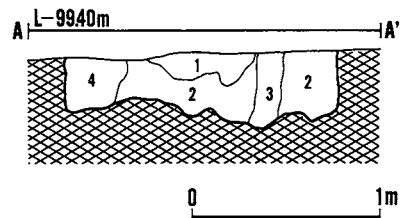
1 10Y R 2/2 黒褐色シルト、黄褐色土と炭が若干混入



第237図 (155) C VII e 2 土坑

C VII e 2 土坑

- | | | | |
|---|------------|--------|------------------------------|
| 1 | 5 Y 8/4 | 淡黄色 | 粘土、小石が混入 |
| 2 | 10 Y R 4/3 | にぶい黄褐色 | シルト、炭が若干混入 |
| 3 | 10 Y R 3/3 | 暗褐色 | シルトと淡黄色粘土と混入、炭が多く混入 |
| 4 | 10 Y R 2/3 | 黒褐色 | シルト、黄褐色土や炭が多く混入
4層は混入が少ない |
| 5 | 10 Y R 5/4 | にぶい黄褐色 | 粘土、炭が混入 |
| 6 | 2.5 Y 4/6 | 明黄褐色 | 火山灰土、黒褐色土が混入 |
| 7 | 5 Y 8/4 | 淡黄色 | 粘土のブロック |
| 8 | 10 Y R 2/2 | 黒褐色 | シルト、炭が若干混入 |



第239図 (157) C VII e 4 土坑

C VII e 4 土坑

- | | | | |
|---|------------|-----|----------------------|
| 1 | 10 Y R 4/6 | 褐色 | 火山灰土、汚れている |
| 2 | 10 Y R 3/3 | 暗褐色 | シルトと黄褐色土との混入、炭が混入 |
| 3 | 10 Y R 3/4 | 暗褐色 | シルト、炭が若干混入、柱穴の埋土 |
| 4 | 10 Y R 2/3 | 黒褐色 | シルト、淡黄色粘土や炭が混入、柱穴の埋土 |

出土遺物には青磁(29)がある。不明瞭であるが見込みに型押しによる花文を付し、高台外面全面に施釉する底部破片である。15世紀頃の製品であろう。

(159) C VII e 8 土坑 (第241図、写真図版38)

北東部に位置し、当土坑より古いC VII d 7 竪穴住居跡と重複して検出された。開口部径2.25m×1.95m、底部径2.1m×1.75m、深さ0.2mの規模をもち、平面形は長軸方向がN-23°-Eを示す楕円形で、断面形は皿形である。底面は平坦で柱穴状土坑が5カ所で重複し、壁の立ち上がりは緩やかである。埋土は2層に分けられ、暗褐色土の混入した褐色粘土質土が大部分を占め、下層に黒色土が大塊状に混入する。土性や堆積状況から埋め戻しによる土層と推定される。

出土遺物には土師器坏1点、瀬戸・美濃系鉄釉陶器1点、貨幣1点、縄文土器1点である。土師器坏はロクロ成形された実測不能な小破片である。鉄釉陶器(第312図19)は体部が球形を示す小型の花瓶で、型押しによる菊花文をもつ。14世紀中頃の製品であろう。貨幣(第350図22)は破損のため銭銘不詳である。

(160) C VII g 9 土坑 (第242図、写真図版38)

東端部に位置し、C VII h 8 土坑と隣接して検出された。開口部径2m×1.5m、底部径1.65m×1.25m、深さ0.25mの規模をもち、平面形は長軸方向がN-83°-Eを示す楕円形で皿形の断面形をもつ。底面は平坦で壁の立ち上がりは緩やかに外傾する。埋土は淡黄褐色粘土質土の単層で、暗褐色土や炭化物、そして小礫が混入する。土性や堆積状況から埋め戻しによる土層と推定される。

出土遺物はない。

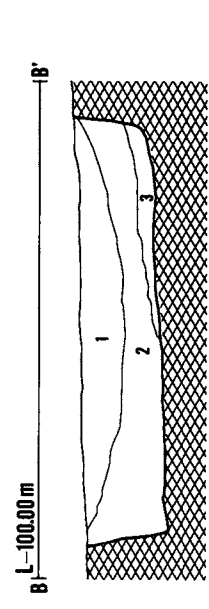
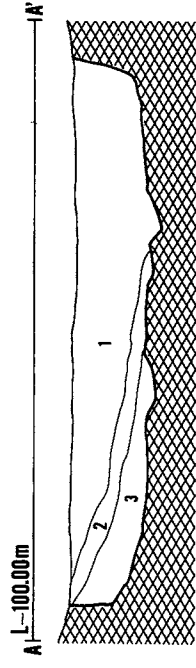
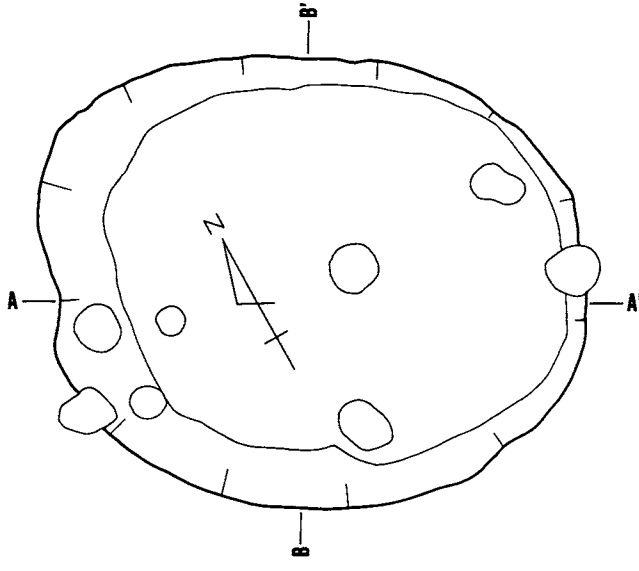
(161) C VII h 8 土坑 (第243図、写真図版38)

東端に位置し、C VII g 9 土坑と隣接して検出された。開口部径3.05m×1.6m、底部径2.85m×1.4m、深さ0.15mの規模をもち、平面形は長軸方向がN-41°-Eを示す細長い楕円形で、浅い皿形の断面形を示す。底面には凹凸があり、多くの柱穴状土坑とも重複し、壁は浅く不明瞭な部分もある。埋土はにぶい黄橙色土である。

遺物は出土していない。

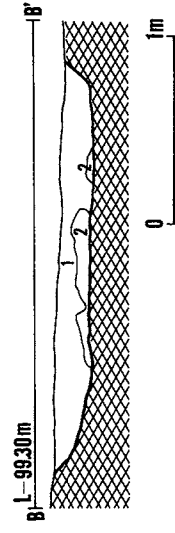
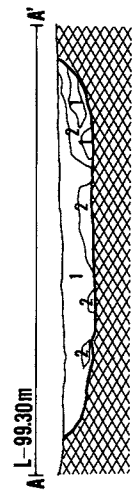
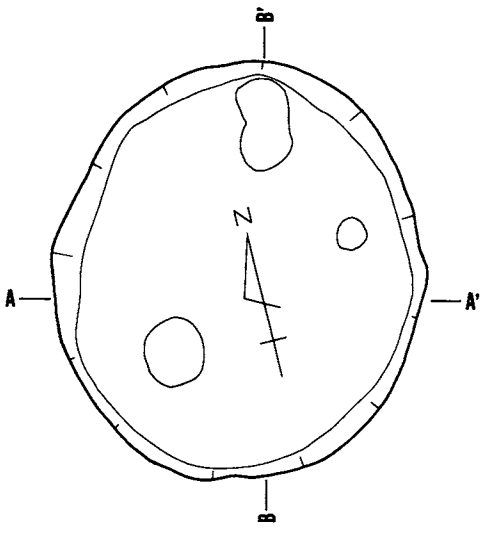
(162) C VII h 10 土坑 (244図、写真図版38)

東端部に他遺構と重複することなく単独で位置する。開口部径2.65m×2m、底部径2.2m×1.5m、深さ0.15mの規模をもち、平面形は長軸方向がN-81°-Eを示すやや不整な楕円形で、



0 1m

第240図 (158) C VII e 7 土坑



0 1m

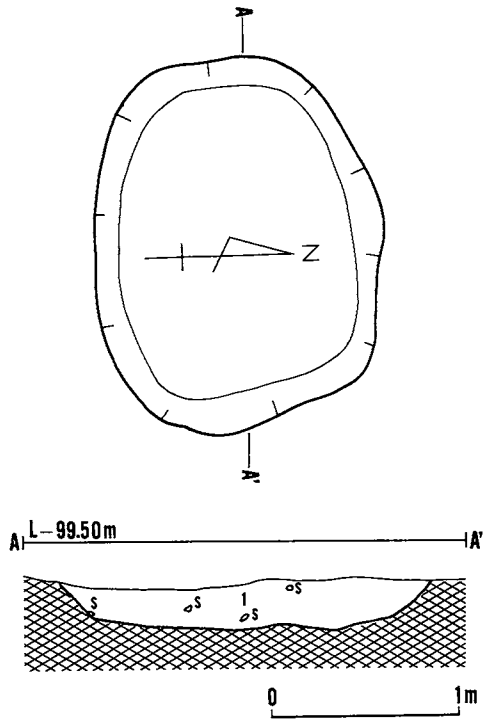
第241図 (159) C VII e 8 土坑

C VII e 7 土坑

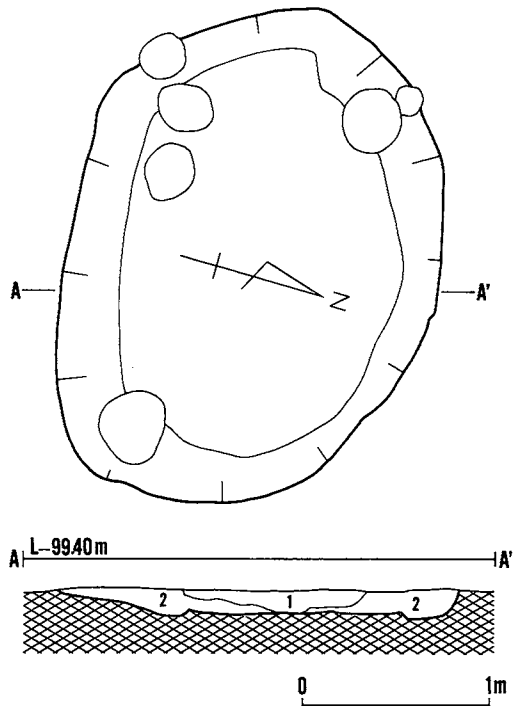
- 1 7.5YR 6/6 橙 粘土質シルト、暗褐色土が混入
- 2 7.5YR 2/3 暗褐色 シルト
- 3 7.5YR 6/6 橙 粘土質シルト(地山)のアロック

C VII e 8 土坑

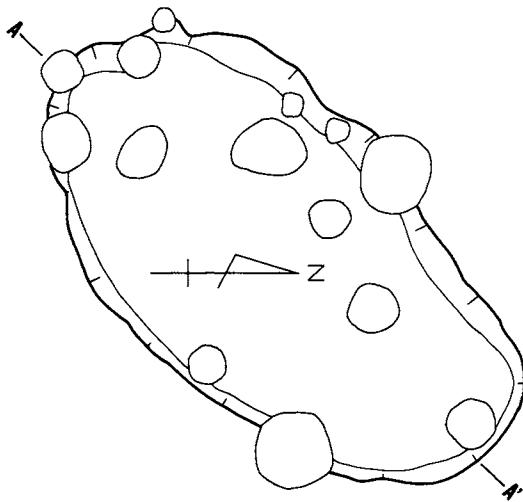
- 1 10YR 4/4 褐 粘土質シルト、暗褐色土が混入
- 2 10YR 1/1 黒 シルト、炭が混入



第242図 (160) C VII g 9 土坑



第244図 (162) C VII h 10 土坑



第243図 (161) C VII h 8 土坑

C VII h 8 土坑

1 10Y R 7/4 にぶい黄橙色 シルト、小石や炭化物が少し混入

C VII g 9 土坑

1 5Y 8/4 淡黄色 粘土、暗褐色土や小石が混入

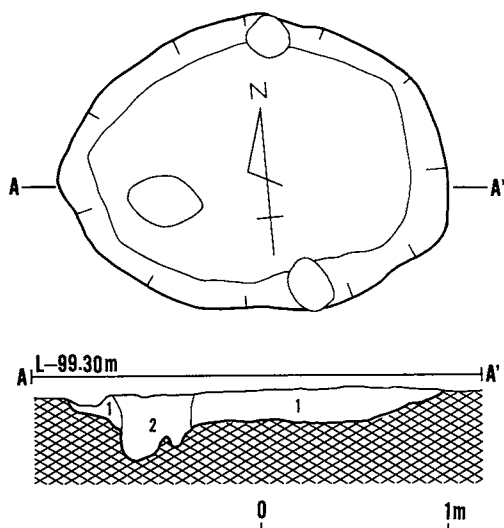
C VII h 10 土坑

1 7.5Y R 5/4 にぶい褐色 シルト

2 7.5Y R 2/2 黒褐色 シルト

浅い皿形の断面形をもつ。底面には凹凸があり、浅い壁は立ち上がりが不明瞭である。柱穴状土坑が7箇所重複している。埋土は2層に分けられ、褐色粘土と黒褐色土の混合土である。

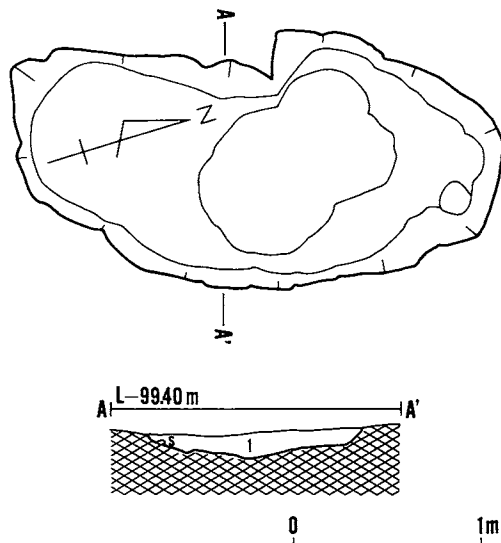
遺物には土師器坏5点、同甕1点がある。いずれも実測不能な小破片である。



第245図 (163) C VII i 9 土坑

C VII i 9 土坑

- 1 2.5Y 8/2 灰白色 ~ 淡黄色粘土、かたい
 2 2.5Y 3/2 黒褐色 シルト、淡黄色粘土や小石が混入、柱穴の埋土



第246図 (164) C VII j 1 土坑-1

C VII j 1 土坑-1

- 1 10YR 2/3 黒褐色 シルト、黄褐色土や小石、炭が混入

(163) C VII i 9 土坑 (第245、写真図版38)

東端部の中央に他遺構と重複することなく単独で位置する。開口部径2.1m×1.55m、底部径1.7m×1.25m、深さ0.2mの規模をもち、平面形は長軸方向をほぼ東西にもつ楕円形で、皿形の断面形を示す。底面は平坦で柱穴状土坑が3箇所重複する。壁は緩く湾曲して立ち上がる。埋土は2層に分けられるが、地山の黄褐色粘土質土が主体である。2層は柱穴状土坑の埋土である。

遺物は出土していない。

(164) C VII j 1 土坑-1 (第246図、写真図版38)

中央部に位置し、C VII a 1 溝跡と隣接して検出された。開口部径2.6m×1.3m、底部径2.4m×1.15m、深さ0.15mの規模をもち、平面形は長軸方向がN-24°-Eを示す不整な長楕円形で

断面形は皿形である。底面には凹凸があり、中央がやや凹む。壁は凹凸や段差をもち、立ち上がりも不明瞭である。埋土は黒褐色土の単層であるが、黄褐色土や小礫、炭化物が混入する。遺物の出土はない。

(165) C VII j 1 土坑-2 (第247図、写真図版38)

中央に位置し、当土坑よりも古いC VII j 1 陥し穴状遺構と重複して検出された。開口部径1.2m×0.95m、底部径0.95m×0.75m、深さ0.1mの規模をもち、平面形は長軸方向をN-43°-Eにもつ楕円形で、断面形は皿形を示す。底面は平坦で壁の立ち上がりは緩やかであり、柱穴状土坑と2箇所重複する。埋土は小礫が多く混入する黒褐色土である。

出土遺物はない。

(166) C VII j 7 土坑-1 (第248図、写真図版38)

東部の中央にC VII j 7 土坑-2と近接して位置する。開口部径1.5m×1.15m、底部径1.1m×0.85m、深さ0.1mの規模をもち、平面形は長軸方向がN-74°-Wを示す不整な楕円形で、浅い皿形の断面形をもつ。底面は平坦で壁の立ち上がりは緩く湾曲する。埋土は2層に分けられ灰褐色土と暗黄褐色土の混合した土が主体をなす。

出土遺物はない。

(167) C VII j 7 土坑-2 (第249図、写真図版39)

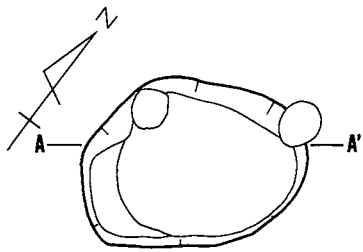
東側の中央部にC VII j 7 土坑-1と近接して位置する。開口部径1.1m×0.95m、底部径0.6m×0.45m、深さ0.4mの規模をもち、平面形は長軸方向をN-66°-Wにもつ不整な楕円形で、深い鍋底形の断面形を示す。底面は中央部が丸く凹み、壁は湾曲して外傾気味に立ち上り、開口部付近は垂直に近くなり、柱穴状土坑と2箇所重複する。埋土は2層に分けられるが、灰黄褐色土が主体となり、径5cm~20cm大の礫が混入している。

遺物は出土していない。

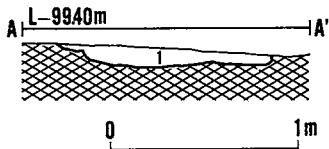
(168) C VIII e 2 土坑 (第250図、写真図版39)

東端部のやや北寄りに位置し、C VI a 4 溝跡や外堀に近接して検出された。開口部径2.2m×1.75m、底部径1.8m×1.45m、深さ0.2mの規模をもち、平面形は長軸方向がN-70°-Wを示す楕円形で、断面形は皿形である。底面は平坦で壁の立ち上がりは緩やかであり、柱穴状土坑と4箇所重複する。埋土は黒褐色土の単層で、黄褐色土が塊状に混入する。

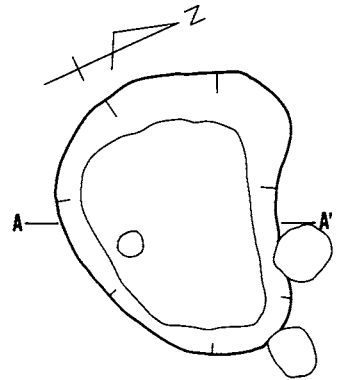
遺物には土師器坏2点、鉄製品1点、縄文時代の石器1点がある。土師器坏はロクロ成形さ



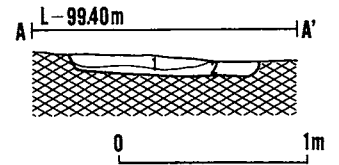
C VII j 1 土坑-2
 1 10YR 2/2 黒褐色 シルト、1~3cmの
 小石が多く混入



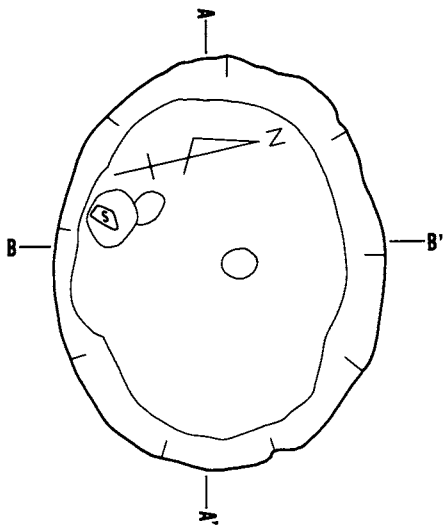
第247図 (165) C VII j 1 土坑-2



C VII j 7 土坑-1
 1 7.5YR 4/2 灰褐色 シルト
 2 7.5YR 7/6 明黄褐色 火山灰土の汚れたもの

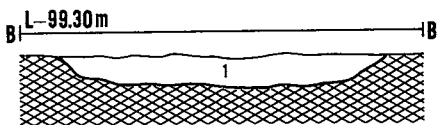
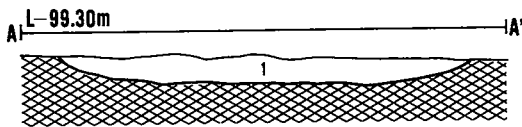


第248図 (166) C VII j 7 土坑-1

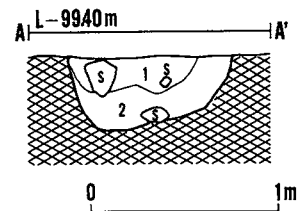
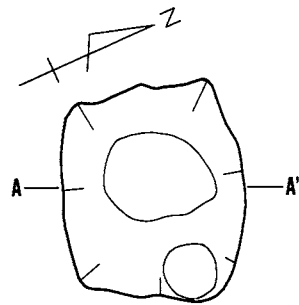


C VII j 7 土坑-2
 1 10YR 4/2 灰黄褐色 シルト、黄褐色土や礫が混入
 2 7.5YR 4/2 灰褐色 シルト、黄褐色土や炭が微量混入

C VII e 2 土坑
 1 10YR 2/2 黒褐色 シルト、黄褐色土がブロック状に混入



第250図 (168) C VII e 2 土坑



第249図 (167) C VII j 7 土坑-2

れ非内面黒色処理の実測不能な体部小破片である。鉄製品（第349図108）は頭部を欠失する釘である。

(169) CⅧ g 2 土坑 (第251図、写真図版39)

東端部に他遺構との重複もなく単独で位置し、外堀に近接して検出された。開口部径2.1m×2.05m、底部径1.7m×1.65m、深さ0.15mの規模をもち、平面形は円形で浅い皿形の断面形を示す。底面は平坦で壁の立ち上がりも緩やかであり、西壁の一部に崩落がみられる。埋土は2層に分けられ、黒褐色が主体をなす。

縄文時代の石器が1点出土している。

(170) D V a 6 土坑 (第252図)

西端部の中央に位置し、C V j 6 土坑、D V a 7 土坑に近接して検出されたが、遺存状態が悪く底部付近のみが残存する。開口部径1.15m×1m、底部径0.85m×0.75m、深さ0.1mの規模をもち、平面形は円形で皿形の断面形を示す。底面は平坦で壁の立ち上がりは不明瞭である。埋土は黒褐色土である。

出土遺物はない。

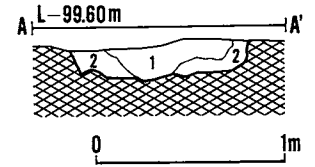
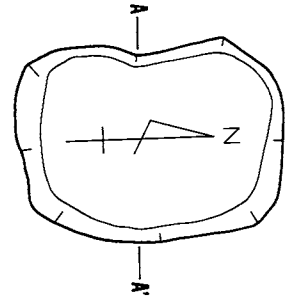
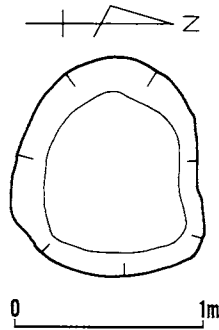
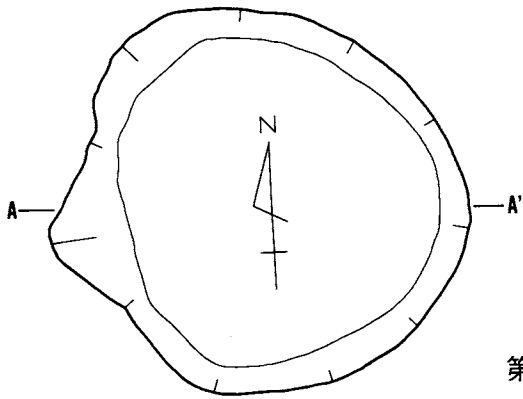
(171) D V a 7 土坑 (第253図、写真図版39)

西端の中央部付近に位置するC V j 6 溝跡-3の下位から検出されたことから、溝に関連する落ち込み部分とも考えられる。開口部径4.1m×2.1m、底部径3.5m×1.6m、深さ0.4mの規模をもち、平面形は長軸方向がN-80°-Eを示す不整な楕円形で、断面形は皿形である。底面にはやや凹凸があり、柱穴状土坑とも重複が多い。壁の立ち上がりは緩やかで不明瞭である。埋土は砂粒や小礫が混入する暗褐色土である。

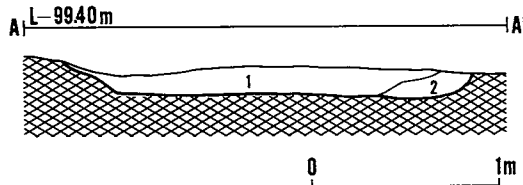
出土遺物には青磁1点と鉄製品1点がある。青磁（第317図33）は、体部下位～底部を残す碗で、高台下端の外側を削った竹の節高台をなし、高台内は無釉である。14世紀頃の製品であろう。鉄製品（第349図121）は頭部を欠損する釘である。

(172) D V a 8 土坑 (第254図、写真図版40)

西端部の中央付近に位置し、C V j 6 溝跡-3の下位に新旧関係の不明なD V a 9 土坑と重複して検出された。形が不定形なことから溝に付随する落ち込み部分に相当する可能性もある。開口部径2.8m×1.85m、底部径2.25m×1.25m、深さ0.3mの規模をもち、平面形は長軸方向を東西にもつ不整な楕円形で、断面形は皿形である。底面は平坦で壁の立ち上がりは緩やかで



第252図 (170) D V a 6 土坑



第251図 (169) C VIII g 2 土坑

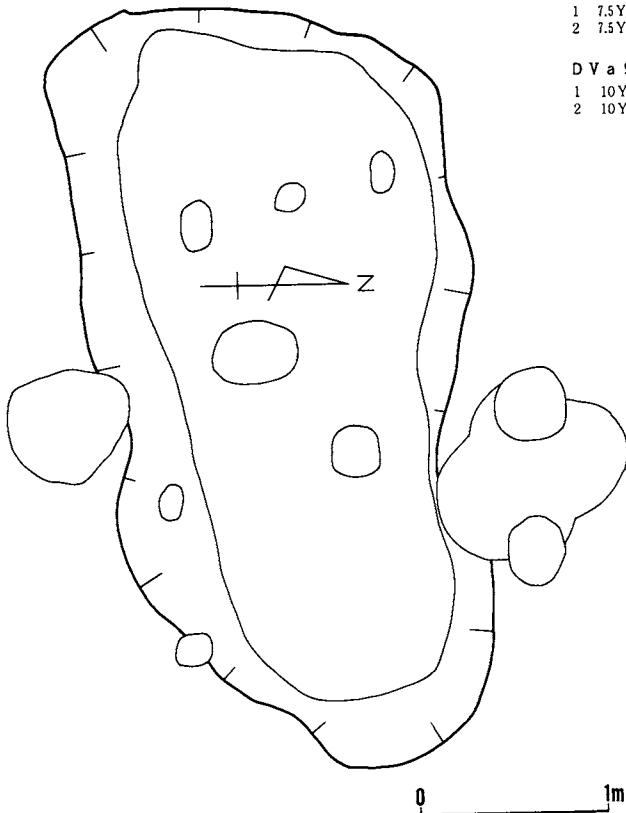
第255図 (173) D V a 9 土坑

C VIII g 2 土坑

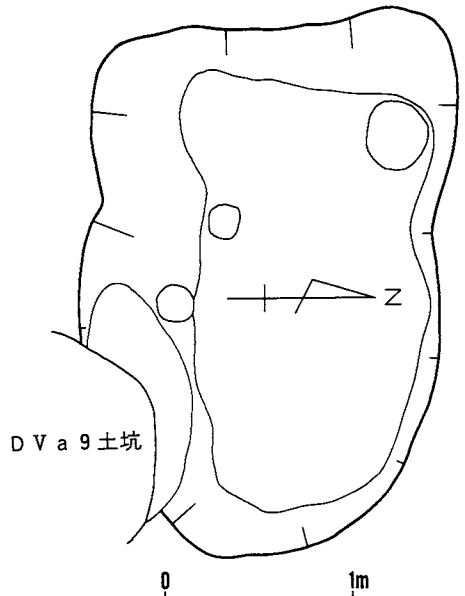
- 1 7.5Y R 2/2 黒褐色 シルト、炭や灰、2cm大の小石が混入
- 2 7.5Y R 2/3 極暗褐色 シルトと黄褐色土との混土

D V a 9 土坑

- 1 10Y R 2/2 黒褐色 シルト、炭が若干混入
- 2 10Y R 2/2 黒褐色 シルトと黄褐色土半々の混土



第253図 (171) D V a 7 土坑



第254図 (172) D V a 8 土坑

ある。埋土は砂粒や小礫が混入する暗褐色土である。

出土遺物には鉄釉が施された壺(25)の破片がある。瀬戸・美濃系であれば15世紀前半頃の製品と考えられるが、舶載品の可能性もある。

(173) D V a 9 土坑 (第255図、写真図版39)

西端部の中央付近に位置し、D V a 8 土坑と重複して検出された。開口部径1.45m×1.05m、底部径1.2m×0.85m、深さ0.2mの規模をもち、平面形は長軸方向が南北を示す楕円形で、皿形の断面形をもつ。底面は凹凸があり壁の立ち上がりは垂直に近い。埋土は2層に分けられるが、黄褐色土が混じった黒褐色土が主体をなす。

出土遺物はない。

(174) D V b 6 土坑 (第256図、写真図版40)

西端部の中央付近に他遺構と重複することなく単独で検出された。開口部径2.65m×1.65m、底部径2.05m×1.15m、深さ0.3mの規模をもち、平面形は長軸方向がN-14°-Eを示す不整な楕円形で、断面形は鍋底形である。底面は平坦で、壁は湾曲して立ち上がり、柱穴状土坑と2箇所重複する。埋土は2層に分けられるが、にぶい黄褐色砂質土が大部分を占める。

遺物の出土はない。

(175) D V b 9 土坑 (第257図、写真図版39)

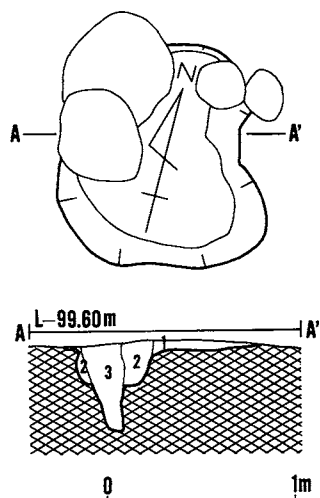
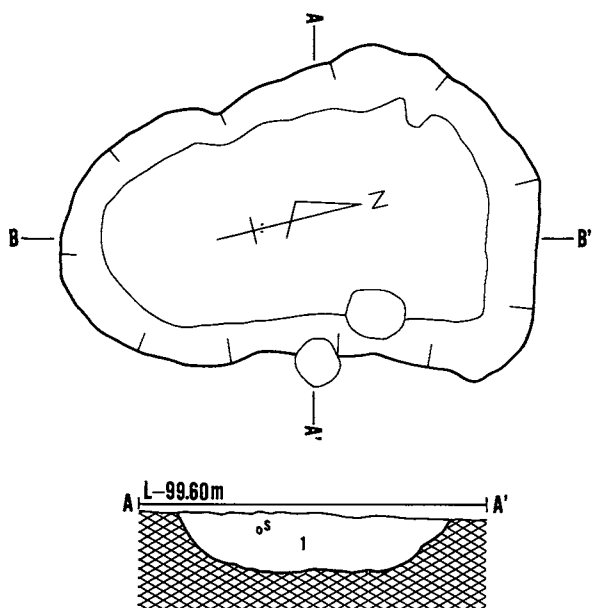
西側に位置し、柱穴状土坑との重複もあって極めて浅く、形状の不明瞭な土坑である。開口部径1.2m×1.1m、底部径1m×0.85m、深さ0.05mの規模をもち、平面形は不整な楕円形で浅い皿形の断面形である。底面は平坦であるが壁の立ち上がりは不明瞭である。埋土は3層に分けられるが、1層の黒褐色土のみが当土坑の埋土で、他の2層と3層は重複する柱穴状土坑の埋土である。

遺物の出土はない。

(176) D V f 7 土坑 (第258図、写真図版40)

南西部に柱穴状土坑と重複して検出され、壁の一部が壊れている。開口部径1.4m×0.9m、底部径1.1m×0.7m、深さ0.15mの規模をもち、平面形は長軸方向がN-58°-Eを示す楕円形で、断面形は皿形である。底面は平坦で壁の立ち上がりは緩やかである。埋土は黒褐色土の単層である。黄褐色土や炭化物が混入する。

出土遺物はない。



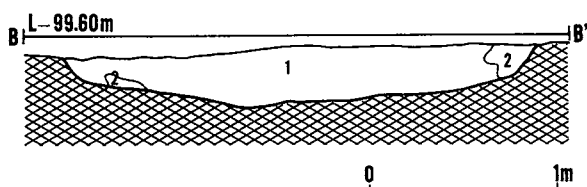
第257図 (175) D V b 9 土坑

D V b 6 土坑

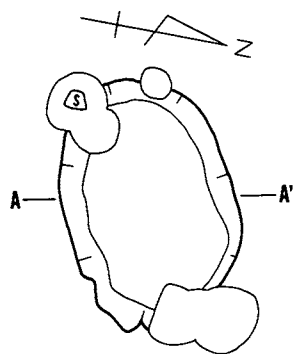
- 1 10Y R 4/3 にぶい黄褐色 砂質土、やわらかい
- 2 10Y R 2/2 黒褐色 シルト、小石が混入

D V b 9 土坑

- 1 10Y R 2/3 黒褐色 シルト、黄褐色土がしま状に混入
- 2 10Y R 3/3 暗褐色 シルトと黄褐色土半々の混土
- 3 10Y R 2/2 黒褐色



第256図 (174) D V b 6 土坑



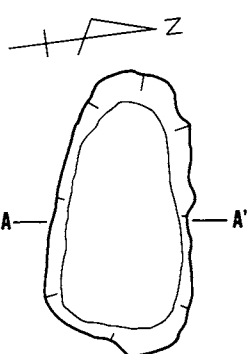
第258図 (176) D V f 7 土坑

D V f 7 土坑

- 1 2.5Y 3/1 黒褐色 シルト、黄褐色土が多く混入、小石を含む

D VI a 9 土坑

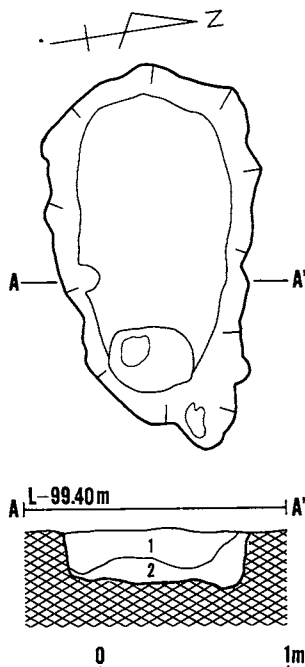
- 1 10Y R 2/2 黒褐色 シルト、黄褐色土が混入、小石を含む



第259図 (177) D VI a 9 土坑

D VI a 10 土坑

- 1 10Y R 2/2 黒褐色 シルト、黄褐色土が多く混入、小石を含む
- 2 10Y R 5/6 黄褐色 火山灰土と黒褐色土、半々の混土



第260図 (178) D VI a 10 土坑

(177) DVI a 9 土坑 (第259図、写真図版41)

中央部に位置し、DVI a 10土坑と隣接して検出された。開口部1.5m×0.8m、底部径1.2m×0.6m、深さ0.2mの規模をもち、平面形は長軸方向がN-80°-Wを示す長楕円形で鍋底形の断面形をもつ。底面にはやや凹凸があり、壁の立ち上がりは垂直に近い。埋土は黒褐色土の単層であるが、黄褐色土粒や小礫が混入する。

遺物は出土していない。

(178) DVI a 10土坑 (第260図、写真図版41)

中央部に位置し、DVI a 9土坑の南側に接して検出された。開口部径1.9m×1.1m、底部径1.55m×0.8m、深さ0.3mの規模をもち、平面形は長軸方向をN-85°-Wにもつ楕円形で、鍋底形の断面形を示す。底面に若干凹凸があり、壁の立ち上がりは垂直に近い。埋土は2層に分けられるが、小礫を含む黒褐色土と黄褐色土が混合した土が主体をなす。

遺物には白色細粒凝灰岩を石材とした縦10.8m、横4.4m、重さ255gの大きさをもつ砥石(第329図57)がある。

(179) DVI b 3土坑 (第261図、写真図版40)

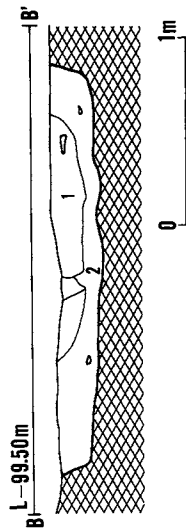
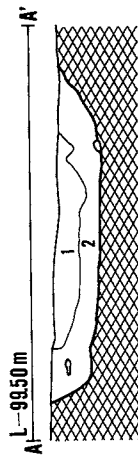
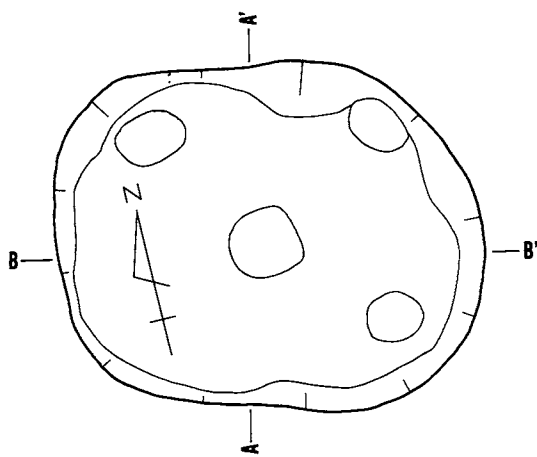
中央部のやや西寄りに位置し、当土坑より古いCVI a 3溝跡と重複して検出された。開口部径2.3m×1.8m、底部径2m×1.6m、深さ0.25mの規模をもち、平面形は長軸方向をN-77°-Wにもつ楕円形で鍋底形の断面形を示す。底面はほぼ平坦で、壁の立ち上がりは垂直に近く、柱穴状土坑と4箇所重複する。また、西半分の底面はCVI a 3溝跡の埋土内にある。埋土は3層に分けられ、小礫や粘土の混入した黒褐色土と黄褐色土が主体をなす。土性や堆積状況から人為的な埋め戻しによる土層と推定される。

出土遺物はない。

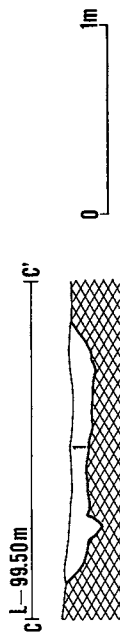
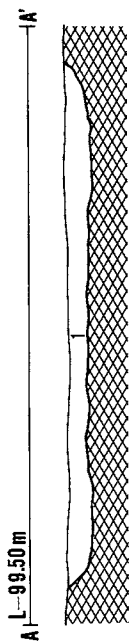
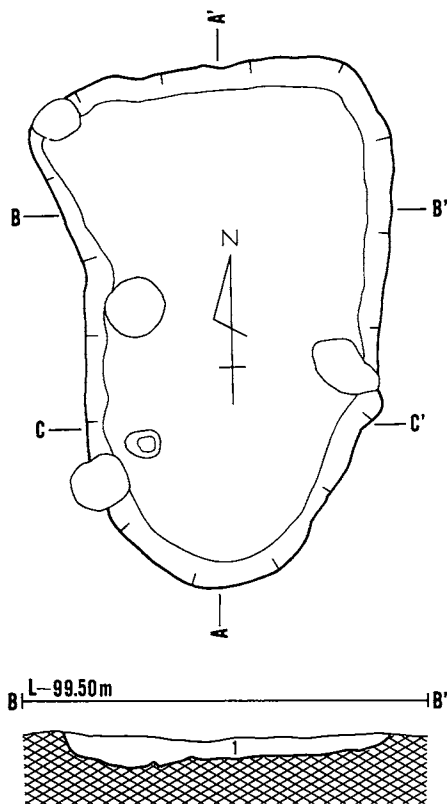
(180) DVI c 5土坑-1 (第262図、写真図版40)

中央部のやや西寄りに位置し、DVI c 5土坑-2と隣接し、当土坑よりも古いDVI c 5陥し穴状遺構と重複して検出された。開口部径2.75m×1.8m、底部径2.5m×1.6m、深さ0.15mの規模をもち、平面形は長軸方向をN-1°-Eにもつ不整な楕円形で、皿形の断面形を示す。底面は凹凸があり柱穴状土坑との重複が多く、壁の立ち上がりは緩やかに湾曲している。埋土は黒褐色土の単層であるが、黄褐色土が小塊状に混入する。

遺物の出土はない。



第261図 (179) D VI b 3 土坑



第262図 (180) D VI c 5 土坑—1

D VI b 3 土坑

- 1 シルト、黒褐色、小石が多く混入、粘土が混入
- 2 シルト、黒褐色、火山灰上主体に黒褐色土が混入、小石が混入
- 3 シルト、黒褐色、火山灰上主体に黒褐色土が混入

D VI c 5 土坑—1

- 1 シルト、黒褐色、黄褐色土がまだらに混入、炭を若干含む

(181) DVI c 5 土坑—2 (第263図、写真図版40)

中央部のやや西寄りに位置し、DVI d 5 土坑とDVI c 5 土坑—1に隣接して検出された。開口部径1.6m×1.35m、底部径1.3m×1.1m、深さ0.2mの規模をもち、平面形は長軸方向を東西にもつ楕円形で、皿形の断面形を示す。底面は多くの柱穴状土坑と重複するため凹凸が著しい。壁の立ち上がりは外傾する。埋土は2層に分けられ、黒色土が大部分を占める。砂粒や粘土質土が多く混入することから、埋め戻しによる土層と考えられる。

遺物の出土はない。

(182) DVI c 6 土坑 (第264図)

中央部のやや南寄りに位置し、当土坑より古いCVI c 8 溝跡と重複して検出された。開口部径2.6m×2.5m、底部径2.1m×2.1m、深さ0.35mの規模をもち、平面形は円形で鍋底形の断面形を示す。底面はほぼ平坦で、壁の立ち上がりは垂直に近い。柱穴状土坑とも6箇所を重複する。埋土は黒褐色土の単層である。

出土遺物はない。

(183) DVI d 4 土坑—1 (第265図、写真図版41)

中央部やや南西寄りに他遺構と重複することなく単独で検出された。開口部径1.7m×1.25m、底部径1.5m×1.05m、深さ0.15mの規模をもち、平面形は長軸方向をN-7°-Eに示す不整な楕円形で、浅い皿形の断面形をもつ。底面は多数の柱穴状土坑が重複するため凹凸がある。壁の立ち上がりは緩やかで浅く明確でない。埋土は黒色土の単層で、黄褐色の粘土質土や炭化物が混入する。

遺物は出土していない。

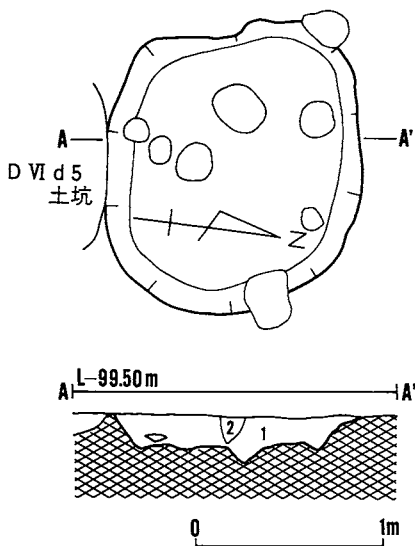
(184) DVI d 4 土坑—2 (第266図、写真図版41)

中央部のやや南西寄りに他遺構と重複することなく、単独で検出された。開口部径2.1m×2.05m、底部径1.8m×1.8m、深さ0.2mの規模をもち、平面形は円形で皿形の断面形を示す。底面は凹凸が著しく、柱穴状土坑との重複が多い。壁の立ち上がりは緩やかである。埋土は黒色土の単層であるが、黄褐色土や砂礫の混入がある。

出土遺物はない。

(185) DVI d 5 土坑 (第267図、写真図版41)

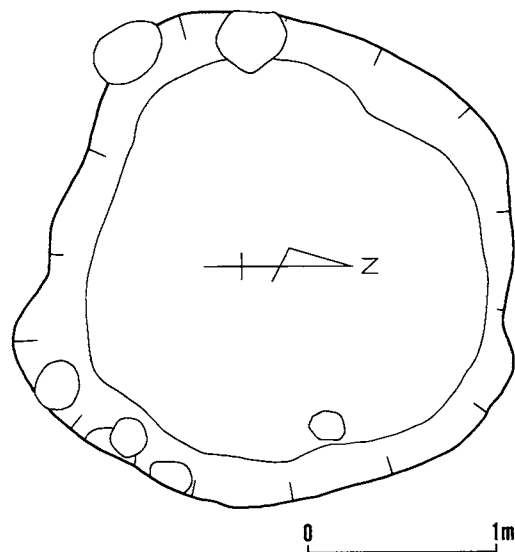
中央部の南西寄りに位置し、DVI c 5 土坑—2と隣接して検出された。開口部径1.85m×1.25



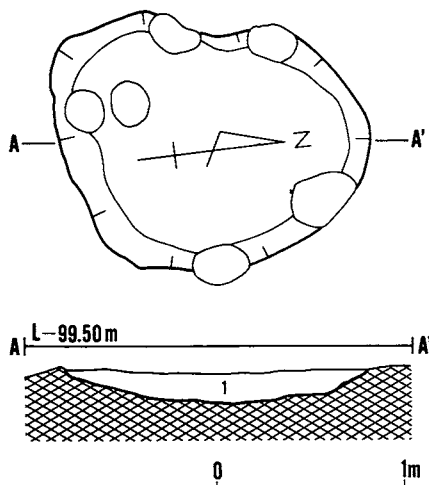
第263図 (181) D VI c 5 土坑-2

D VI c 5 土坑-2

- 1 7.5Y R 2/1 黒色 シルト、砂粒や粘土が混入
- 2 7.5Y R 7/3 に近い橙色 火山灰土、ブロック土



第264図 (182) D VI c 6 土坑



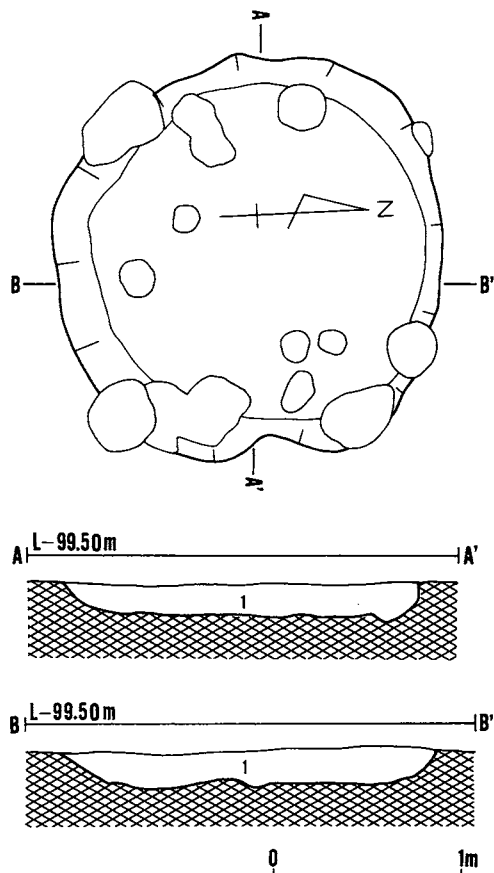
第265図 (183) D VI d 4 土坑-1

D VI d 4 土坑-1

- 1 7.5Y R 2/1 黒色 シルト、黄褐色粘土や炭が多く混入

D VI d 4 土坑-2

- 1 7.5Y R 2/1 黒色 シルト、黄褐色土や砂礫が混入



第266図 (184) D VI d 4 土坑-2

m、底部径1.6m×1.05m、深さ0.15mの規模をもち、平面形は長軸方向を南北にもつ楕円形で断面形は皿形である。底面は凹凸があり多くの柱穴状土坑が重複している。壁の立ち上がりは緩やかである。埋土は2層に分けられるが、多くの砂粒や黄褐色粘土粒が混入する黒色土が大部分を占める。

遺物は出土していない。

(186) DVI e 2 土坑 (第268図、写真図版41)

南西部のDV d 6 溝跡とCVI a 3 溝跡の交わる地点の南側に隣接して位置し、当土坑より古いDVI e 2 陥し穴状遺構やDVI e 3 陥し穴状遺構と重複して検出された。通常の土坑とは若干趣を異にし、溝の交点にある何らかの落ち込み遺構とも考えられる。開口部径7.8m×5m、底部径7m×4.5m、深さ0.4m位の規模で、平面形は溝跡との重複もあり明確でないが、長軸方向をN-5°-Wにもつ不整な長方形気味を示す。埋土は黄褐色粘土質土と黒褐色土が混合した土の単層であることから、人為的に埋め戻したものと考えられる。

出土遺物はない。

(187) DVI h 3 土坑 (第269図、写真図版41)

南西部に他遺構と重複することなく、単独で検出された。開口部径2.05m×1.95m、底部径1.65m×1.6m、深さ0.35mの規模をもち、平面形はやや不整な円形で鍋底形の断面形を示す。底面はやや凹凸があり、柱穴状土坑の重複も多い。壁は湾曲して立ち上がる。埋土は黒色土の単層である。

遺物は出土していない。

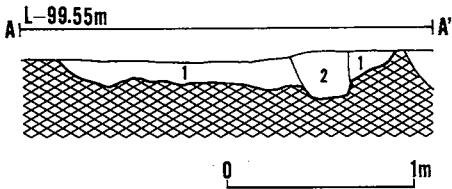
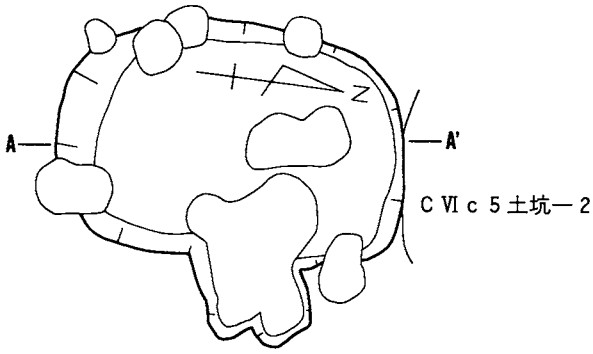
(188) DVI a 1 土坑 (第270図、写真図版42)

中央部に他遺構との重複もなく単独で検出された。開口部径1.7m×1.55m、底部径1.55m×1.35m、深さ0.35mの規模をもち、平面形は円形で鍋底形の断面形をもつ。底面は極めて平坦で壁の立ち上がりは垂直に近い。埋土は2層に分けられるが、黄褐色土や小礫が混入する黒褐色土が大部分を占める。

遺物は出土していない。

(189) DVI b 2 土坑 (第271図、写真図版42)

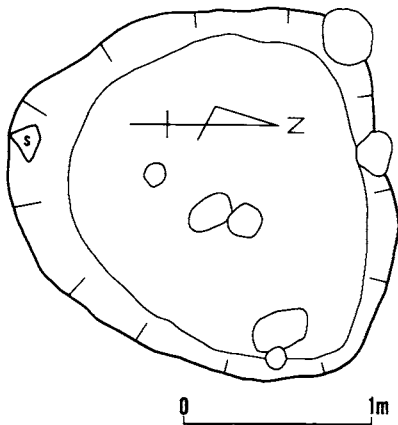
中央部のやや東寄りに他遺構と重複することなく単独で検出された。開口部径2.5m×2.45m、底部径2.15m×2.1m、深さ0.35mの規模をもち、平面形は不整な円形で鍋底形の断面形を



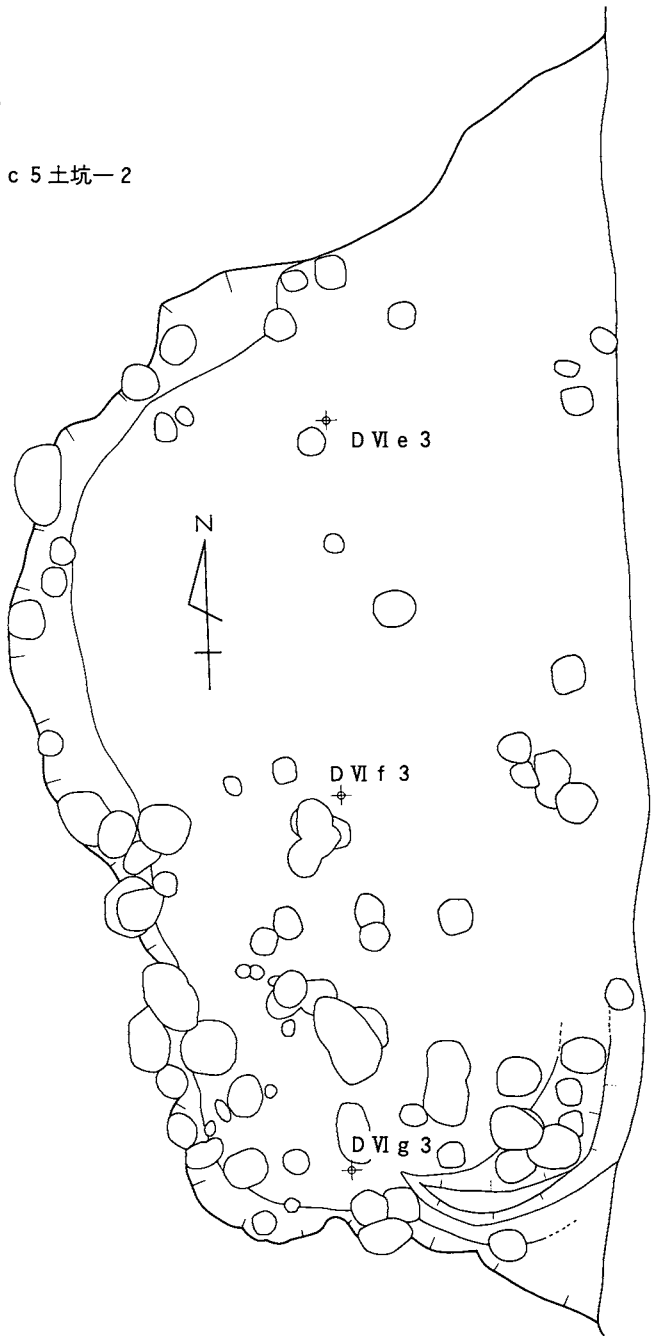
第267図 (185) D VI d 5 土坑

D VI d 5 土坑

- 1 7.5Y R 2/1 黒色シルト、砂粒や粘土粒が多く混入
- 2 7.5Y R 3/2 黒褐色シルト、黄褐色土が混入、柱穴の埋土



第269図 (187) D VI h 3 土坑



第268図 (186) D VI e 2 土坑

示す。柱穴状土坑が密集する地域に位置することから、多くの柱穴状土坑と重複するため底面に凹凸がみられ、壁は緩やかに立ち上がる。埋土は4層に分けられるが、灰黄褐色土や褐色土が大部分を占めることから、人為的な埋め戻しによる土層と考えられる。

遺物には粘板岩を使った硯（第334図10）の陸部の小破片がある。

(190) D VII b 3 土坑 (第272図、写真図版42)

中央部の南東寄りに多くの柱穴状土坑と重複して検出された。開口部径3m×2.1m、底部径2.6m×1.85m、深さ0.25mの規模をもち、平面形は長軸方向をN-1°-Eにもつ隅丸長方形で鍋底形の断面形をもつ。底面は平坦であるが柱穴状土坑によって攪乱を受けている。壁は垂直に近い立ち上がりである。埋土は2層に分けられるが、小礫の混じった褐色土が大部分を占める。おそらく、人為的な埋め戻しによる土層であろう。

出土遺物はない。

(191) D VII b 4 土坑 (第273図、写真図版42)

南東側の中央寄りに位置し、多くの柱穴状土坑と重複して検出された。開口部径3.3m×2.15m、底部径2.95m×1.75m、深さ0.3mの規模をもち、平面形は長軸方向をN-87°-Wにもつ東側が膨らんだ不整な楕円形で、鍋底形の断面を示す。底面は平坦であるが、柱穴状土坑の攪乱を受けている。壁は緩やかに傾斜して立ち上がる。埋土は3層に分けられるが、硬いにぶい黄褐色土が主体をなし、土性や堆積状況からみて人為的な埋め戻しによる土層と考えられる。

遺物の出土はない。

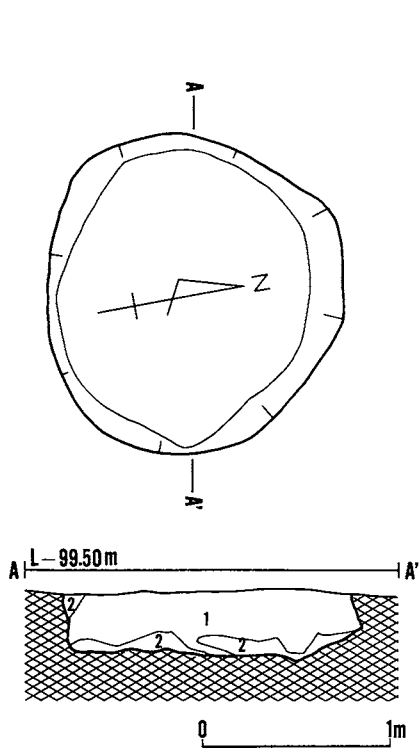
(192) D VII b 6 土坑 (第274図、写真図版42)

南東部に多くの柱穴状土坑と重複して検出された。開口部径1.5m×1.3m、底部径1m×0.95m、深さ0.55mの規模をもち、平面形は方形で箱形の断面形をもつ。底面は平坦で壁の立ち上がりは垂直に近いが、柱穴状土坑との重複によって一部の壁が壊されている。埋土はにぶい黄褐色土が主体であるが3層に分けられる。土性や堆積状況から人為的な埋め戻しによる土層と考えられる。1a層は柱穴状土坑の埋土である。

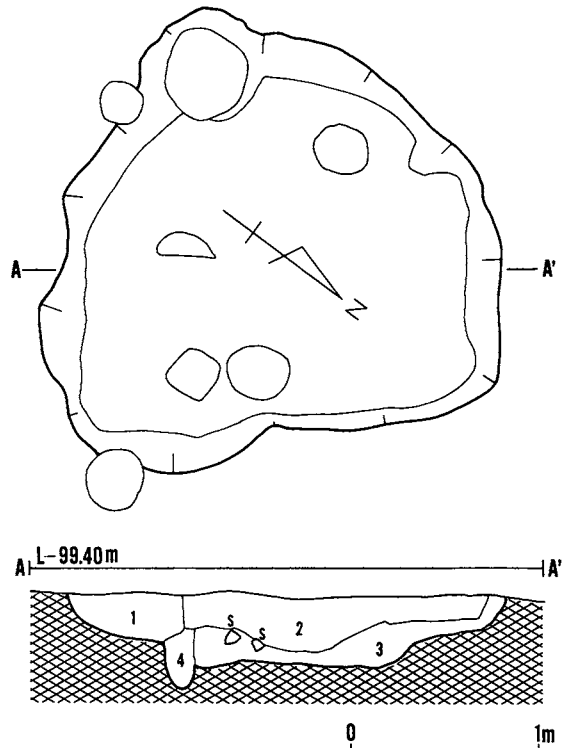
遺物には口縁部～体部中位を残す青磁（第318図63）がある。胎土は白色、釉は緑色で、器壁が厚く粗い貫入が入る。15世紀頃の製品であろう。

(193) D VII c 7 土坑 (第275図、写真図版42)

南東部に多くの柱穴状土坑と重複して検出された。開口部径2.6m×2m、底部径2.3m×1.65



第270図 (188) D VII a 1 土坑



第271図 (189) D VII b 2 土坑

D VII a 1 土坑

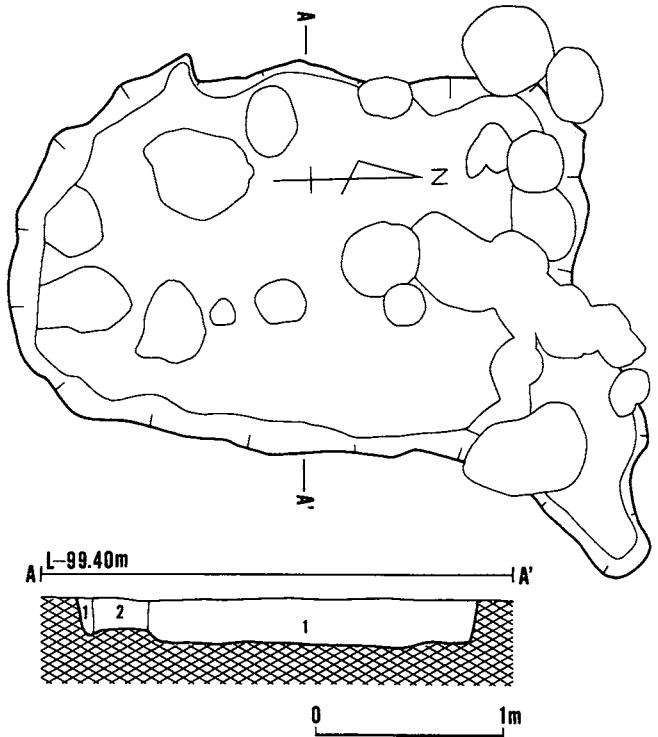
- 1 10Y R 2/3 黒褐色 シルト、黄褐色土や小石が混入
- 2 10Y R 5/8 黄褐色 火山灰土、暗褐色土が混入

D VII b 2 土坑

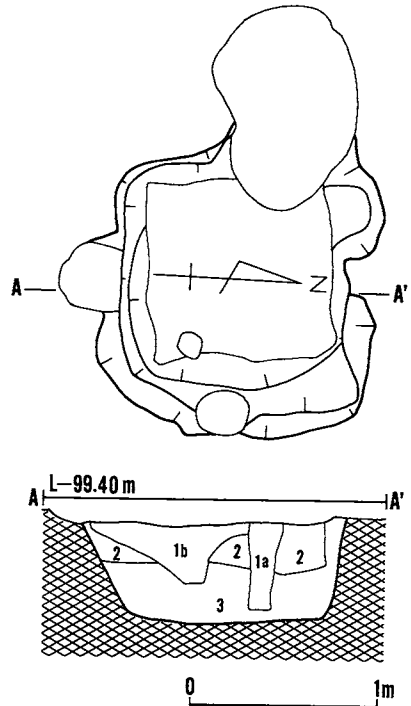
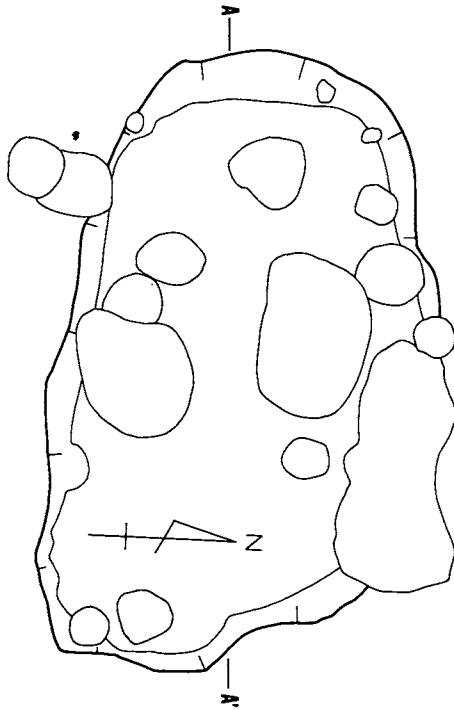
- 1 10Y R 5/2 灰黄褐色 シルト、1~2cmの小石が混入
- 2 10Y R 4/2 灰黄褐色 シルト
- 3 10Y R 4/6 褐色 火山灰土
- 4 10Y R 3/2 黒褐色 シルト、1cmの小石が混入

D VII b 3 土坑

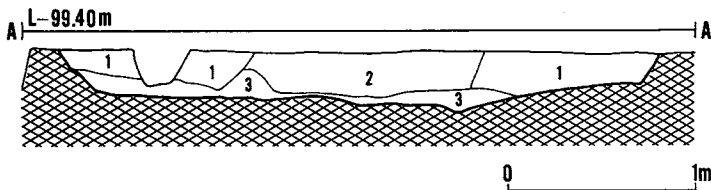
- 1 10Y R 4/4 褐色 シルト、0.5~1cmの小石が多く混入
- 2 5Y 8/3 淡黄色 粘土



第272図 (190) D VII b 3 土坑



第274図 (192) D VII b 6 土坑



第273図 (191) D VII b 4 土坑

D VII b 4 土坑

- 1 10Y R 5/4 にぶい黄褐色 火山灰土、黄色粘土が混入
- 2 10Y R 4/3 にぶい黄褐色 火山灰土、黄色粘土が炭が若干混入
- 3 10Y R 5/6 黄褐色 火山灰土

D VII b 6 土坑

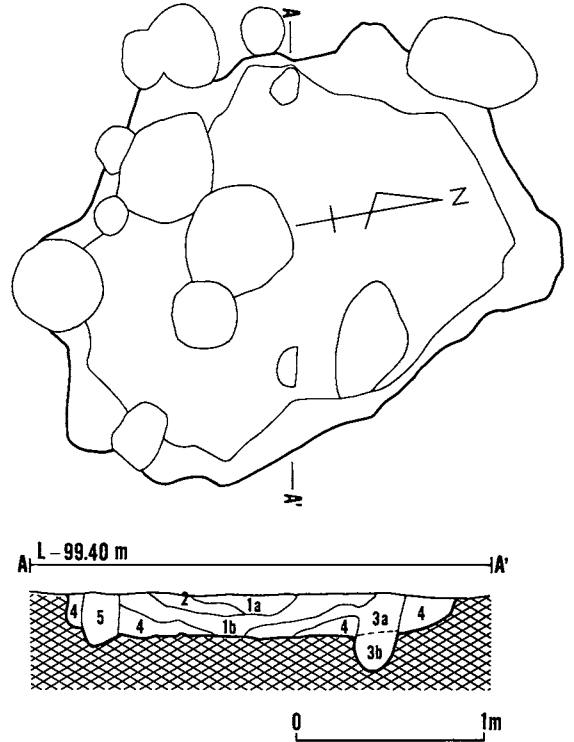
- 1a 10Y R 3/2 黒褐色 シルト、1~2cmの小石や炭が混入
- 1b 10Y R 3/2 黒褐色 シルト、1~3cmの小石が混入、炭は少ない
- 2 10Y R 5/4 にぶい黄褐色 火山灰土、かない
- 3 10Y R 7/4 にぶい黄褐色 火山灰土、やわらかい

m、深さ0.2mの規模をもち、平面形は長軸方向をN-17°-Wにもつ不整な楕円形で、鍋底形の断面形を示す。底面は平坦で壁の立ち上がりは緩やかである。柱穴状土坑による攪乱によって凹凸が著しい。埋土は5層に細分されるが、黄褐色の粘土質土が主体である。小礫や黒褐色土、暗褐色土が混入し、人為的に埋め戻された土層である。

遺物の出土はない。

10) 井戸跡

8基検出されているが、これらは西館に5基、東館に3基が分かれて立地する。西館、東館とも人為的に埋め戻された例が多く、廃絶の段階に使用されていたのは西館で2基、東館は1基のみである。西館の場合は、東側の縁辺に所在する3基が埋められて西端部に場所を変え、東館は東端部の中央に在る2基が埋め戻されてやや南西寄りに場所を変えている。井筒はいずれも特別な施設はなく、すべて地山井筒の素掘り井戸である。



<西館>

(1) C II d 8 井戸跡

(第276図、写真図版43)

西端から5m、北端から15mのグリッドC II区に当土坑より古いC II f 8周溝遺構と落ち込み遺構が重複する。開口部は径2.35m×2.25mのほぼ円形を示し、底面は1辺1.15m～1.1m

の隅丸方形で、2.8mの深さがある。断面形は、底面から開口部に向って直線的に外傾し、開口部付近の1m～0.6mは下部より強く外傾する。開口部の平面形は円形であるが、約1mから下位はほぼ隅丸方形をなし底面まで続く。埋土は13層に細分されている。5層、8層、12層が黄褐色の粘土質土であるが、他の層は黒色土や暗褐色～黒褐色土といった黒色土系の土が堆積し、全体に炭化物が多く混入し、一部に径5cm～20cm大の円礫が混在する。井筒に関連する施設や痕跡はまったく観察されないことから、地山井筒の素掘り井戸と推定される。埋土の土性や堆積状況から考えて、館の廃絶期まで使用され、廃絶後に自然に堆積埋没したと推定される。

遺物の出土はない。

第275図 (193) D VII c 7 土坑

D VII c 7 土坑

1a	2.5Y R 8/4	浅黄色	粘土、1～2cmの小石が混入
1b	2.5Y 7/4～7/6	浅黄色～明黄褐色	粘土、小石が混入
2	10Y R 2/3	黒褐色	シルト、炭が若干混入
3a	2.5Y 6/3	にぶい黄色	粘土、1bと4との混土
3b	5Y 8/3	淡黄色	粘土
4	7.5Y R	橙褐色	火山灰土と暗褐色土との混土
5	10Y R 4/2	灰黄褐色	粘土

(2) C II h 9 井戸跡 (第277図、写真図版43)

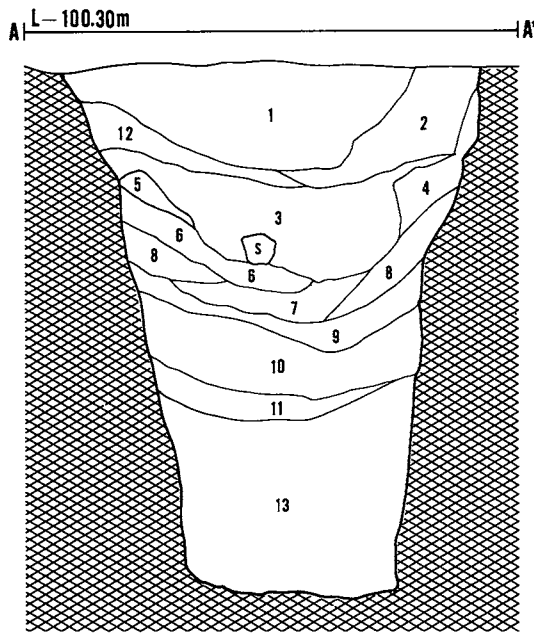
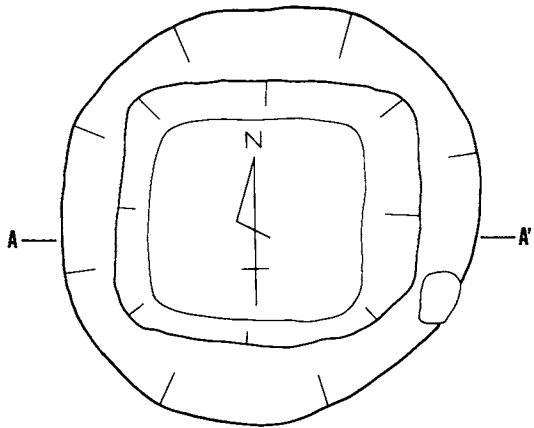
西端から12m、北端から27mのグリッドC II区に、C II d 8 井戸跡の南10mの落ち込み遺構内に位置する。開口部径1.5m×1.3m、底部径1.05m×0.95m、深さ1.35mの規模をもち、平面形は長軸方向をほぼ東西にもつ楕円形で、断面形は壁が外傾するバケツ形に近い形状を示す。底面は中央部が低くなる浅いボール状をなす。埋土は暗褐色土と黒褐色土で5層に細分される。4層は灰黄褐色土で2層は柱穴状土坑の埋土である可能性が強い。いずれの層にも黄褐色土粒や炭化物粒が混入し、5層の上部に径5cm～20cm大の礫が混在する。土性と堆積状況から館の廃絶期まで使用され、廃絶後に自然埋没した井戸の可能性が強い。地山井筒の素掘り井戸である。

遺物には下駄2点と加工材1点がある。下駄の内1点(第341図1)は踵部分を欠損する子供用で、残存長11cm、幅6.5cm、最厚4cmの大きさがあり、平面形は隅丸長方形である。歯は2枚の連歯で厚さ2cm位、高さ2.5cm～2cmである。鼻緒をすげる穴は前1個、後2個で、ともに方形を示し歯の前に穿たれている。材質は不明である。別の1点(第341図2)は踵の右側と左側の中央部分を欠く、全長22cm、幅推定12cm、最厚4cmで、平面形が胴張りの隅丸方形を示す成人用の連歯下駄である。鼻緒のすげ穴は欠けているので定かではないが、平面形が円形で歯の前に穿たれている。

(3) C IV a 7 井戸跡 (第278図、写真図版43)

西端から58m、北端から7m、東側に位置する内堀から西に10mのグリッドC IV区に、他遺構と重複することなく単独で検出された。開口部径1.75m×1.65m、底部径1.35m×1.3m、深さ1.7mの規模をもち、平面形は僅かに歪んだ円形で、断面形は開口部付近は外傾するがその下位は円筒形を示す。底面には若干凹凸があり中央部に向って幾分低くなる。埋土は12層に細分される。1層、5層、6層、9層、11層、12層は地山の黄褐色粘土質土を起源とし、その他は黄褐色土粒や炭化物粒が混入した黒色、黒褐色、暗褐色の土が堆積している。一部には径5cm～20cmの小礫も混在する。堆積状況を観察するとレンズ状を示しているが、土層の中に自然状態では堆積しえない地山起源の埋土がみられることから、人為的に埋め戻された可能性が大きい。井筒に関連する施設は確認されない。おそらく地山井筒の素掘り井戸であろう。

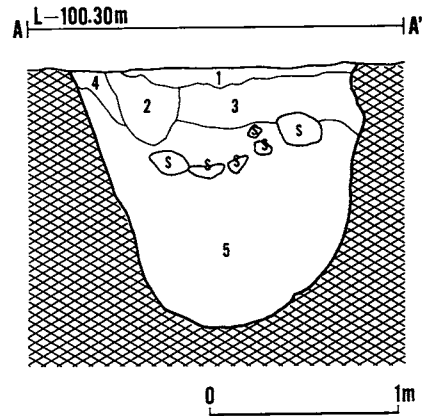
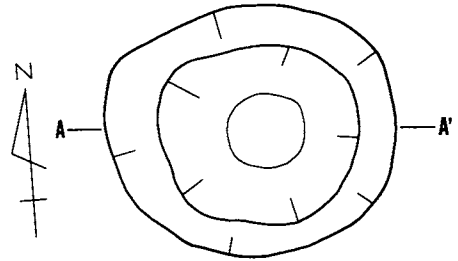
遺物には漆椀1点(第340図3)、篋2点(第343図24・25)、底板1点(第343図27)、箸1点(第344図35)、加工材2点(第345図42・43)、板材1点(第344図32)がある。漆椀は口縁部14.5cm、底部径7.5cm、全高5.8cm、高台の高さ0.3cmの大きさで、内面は無地赤漆、外面は黒漆を全面に塗布した後赤漆でかたばみの花かと推定される文様が描かれている。篋の内1点(24)は全長18cm、最大幅4.2cm、柄の幅1.4cm、厚さ0.7cmの大きさをもつ。別の1点(25)は一部を欠損するが、残存長21.6cm、最大幅6cm、柄の幅3.5cm、厚さ0.9cmの大きさで、材質はともに杉



第276図 (I)C II d 8 井戸跡

C II d 8 井戸

- 1 10Y R 2/2 黒 褐 色 シルト、淡黄色粘土が混入、炭を多く含む
- 2 10Y R 2/2 黒 褐 色 シルト
- 3 10Y R 2/1 黒 褐 色 シルト、炭が多く混入
- 4 10Y R 3/4 暗 褐 色 シルト、黄褐色土に黒褐色土が混入
- 5 10Y R 5/3 にぶい黄褐色 砂質土
- 6 10Y R L1/1 黒 褐 色 シルト、炭が多く混入、下位に灰白色粘土が混入
- 7 10Y R 3/2 黒 褐 色 シルト、4層や灰白色粘土がブロック状に混入
- 8 2.5Y 8/4 淡 黄 色 粘 土、黒褐色土がブロック状に混入
- 9 10Y R L1/1 黒 褐 色 シルト、灰白色粘土が多く混入
- 10 10Y R L1/1 黒 褐 色 シルト、下位に灰白色粘土のうすい層がある
- 11 10Y R 3/3 暗 褐 色 シルト
- 12 10Y R 4/3 にぶい黄褐色 火山灰土、淡黄色粘土が塊状に混入
- 13 10Y R 2/2 黒 褐 色 シルトと淡黄色や緑灰色粘土質土の混入



第277図 (2)C II h 9 井戸跡

C II h 9 井戸

- 1 10Y R 3/3 暗 褐 色 シルト、黄褐色土が小ブロック状に混入
- 2 10Y R 2/3 黒 褐 色 シルト、黄褐色土が混入、柱穴の埋土か
- 3 10Y R 2/2 黒 褐 色 シルト、炭が多く混入
- 4 10Y R 4/2 灰黄褐色 シルト
- 5 10Y R 3/1 黒 褐 色 シルト、炭が若干混入、酸化した褐色部分がまだらにある礫が多く混入する、木器出土

と推定される。底板(27)は円形の桶か曲物のものと考えられるが、一部だけを残す。箸(35)は17.7cmの長さをもち、棒状に径0.6cm位に削りだしたものである。加工材2点はいずれも成品となっていない割木である。板材(32)としたものは、直径16.4cmの正六角形に切り取り、2箇所に径1cm位の円孔を穿ち、中央に幅0.3cm、長さ3cmの貫通孔がある。片面に細い沈線で寸法が書かれている。何に使用されたかは不明であるが、何かの部品の一部と推定される。

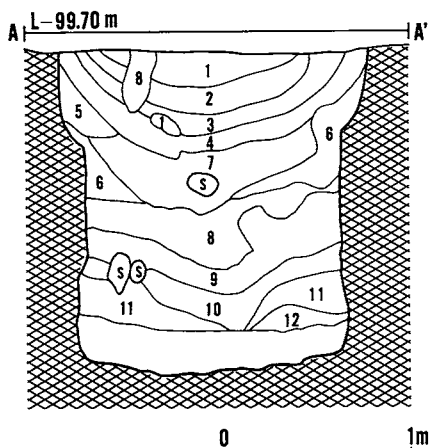
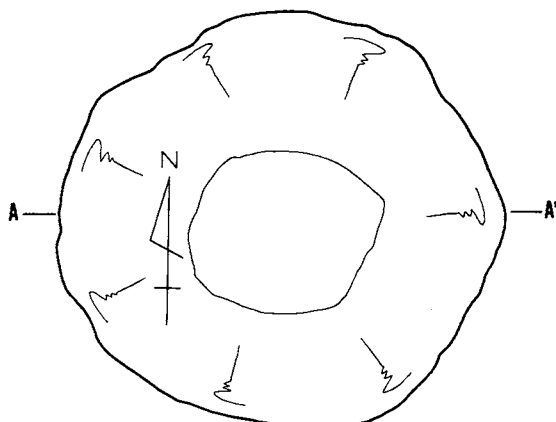
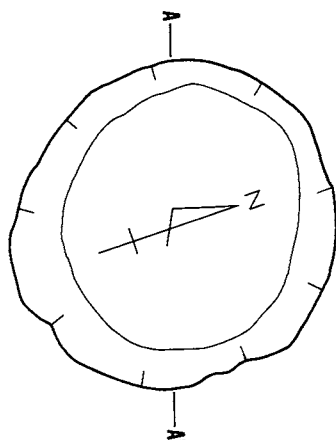
(4) CIV j 4井戸跡 (第279図、写真図版44)

西端から55m、北端から30m、CIV a 7井戸跡の南南西27cmのグリッドCIV区に位置し、土橋のほぼ真西20mに所在する。開口部径2.4m×2.2m、底部径0.9m×0.9m、深さ3.1mの規模をもち、平面形は若干歪みをもつ円形、断面形は底面から壁が外傾するバケツ形を示し、底面は中央部がもっとも低くなる擂鉢形である。埋土は調査時の崩れによって作図できなかったので詳細は不明であるが、下半部は黒色土、黒褐色土、地山の黄褐色土が交互に堆積し、上位はすべて地山起源の黄褐色粘土質土であった。また、埋土中には炭化物が径40cm位の礫や小径の自然木の幹や枝が多く投げ込まれていた。このことから、この井戸跡は人為的に埋め戻されたものと推定される。井筒の施設をもたない地山井筒の素掘り井戸である。

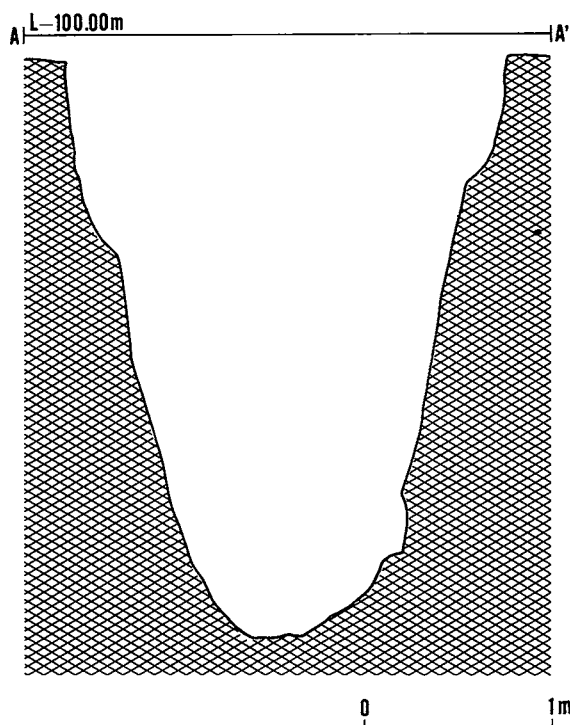
遺物には石臼3点、石鉢4点、使用痕や煤の付着した礫5点、曲物14点、底板2点、加工材1点、切痕をもつ自然木などが出土している。石臼3点(第331図7～9)の内、7は半分に分かれたものを漆で接着した外径21cm、高さ14.5cmの大きさをもつ上臼で、形や大きさからみて茶臼と推定される。8は約半分を残す径29.5cm、厚さ10cmの大きさをもつ上臼で、穀播臼と考えられる。9も上臼の欠損品である。石鉢(第336図5～8)はいずれも破片で、口縁部を残すもの(6・7)、体部下位から底部を残すもの(8)、体部破片(5)が含まれる。曲物(第342～343図5～19)は、ほぼ完形のもの1点(5)のみで、他は破片である。底板2点(第343図27・29)には桶か曲物の底板(29)と箱の底板(26)がある。加工材(第345図38)は丸太を半割し一部に面取りした痕跡を残し、両端に焼け痕をもつ。

(5) DIV c 8井戸跡 (第280図、写真図版45)

西端から71m、北端から40m、内堀の西方5m、CIV a 7井戸跡の南方32mに位置する。開口部径1.9m×1.8m、底部径1.2m×1.05m、深さ2.55mの規模をもち、平面形は幾分歪んだ円形で、断面形は開口部に向って壁が外傾するバケツ形に近いが、下位部は円筒形に近い形状を示す。埋土は調査時の実測中に崩落し、詳細な記録は残っていないが、埋土全体が地山を起源とする黄褐色粘土質土が堆積していた。堆積状況はレンズ状的ではあるが、自然では堆積しえない地山起源の土が堆積することから、おそらく人為的に埋め戻されたものと推定される。



第278図 (3)C IV a 7 井戸跡



第279図 (4)C IV j 4 井戸跡

C IV a 7 井戸

- | | | | |
|----|-----------|--------|-------------------------|
| 1 | 2.5Y 7/6 | 明黄褐色 | 粘土質土 |
| 2 | 10Y R 3/2 | 黒褐色 | シルト、黄褐色土が若干混入 |
| 3 | 10Y R 2/2 | 黒褐色 | シルト、炭が若干混入 |
| 4 | 10Y R 3/2 | 黒褐色 | シルト、黄褐色土が若干混入 |
| 5 | 10Y R 4/3 | にぶい黄褐色 | 粘土質シルト |
| 6 | 10Y R 5/6 | 黄褐色 | 火山灰土 |
| 7 | 10Y R 2/1 | 黒色 | シルト、小石や黄褐色土がブロック状に混入 |
| 8 | 10Y R 3/3 | 暗褐色 | シルト、淡黄色粘土や黄褐色土が混入 |
| 9 | 10Y R 5/4 | にぶい黄褐色 | 火山灰土、木材や植物性遺物を含む |
| 10 | 10Y R 2/2 | 黒褐色 | シルト、木片や炭を含む、1~2cmの小石が混入 |
| 11 | 10Y R 4/3 | にぶい黄褐色 | 粘土質土 |
| 12 | 2.5Y 4/3 | オリーブ褐色 | 砂まじりの粘土質土 |

遺物には底板（第344図31）がある。円形であることから桶の底であろう。

〈東 館〉

(6) C VII j 8 井戸跡 (第281図、写真図版45)

西端から70m、北端から29m、東端から14mのグリッドC VII区に位置する。開口部径2.5m×2.15m、底部径0.95m×0.7m、深さ0.95mの規模をもち、平面形は長軸方向をほぼ東西にもつ楕円形で、断面形は壁が大きく外傾する擂鉢形を示す。底面はほぼ水平に近く平坦である。埋土は12層に細分されるが、地山起源の1層・3層・10層、黒色土の8層、褐色土系の2層・4層～7層・9層・11層・12層に大別され、全体的には褐色土系の土が主体を占める。レンズ状堆積を示すことから自然堆積による埋没の可能性も考えられるが、土性や堆積の様相からみて人為的に埋め戻された可能性が強い。井筒に特別な施設をもたない地山井筒の素掘り井戸である。

埋土内から米、小豆、小麦、キビ、粟、稗などの炭化穀類が出土している。

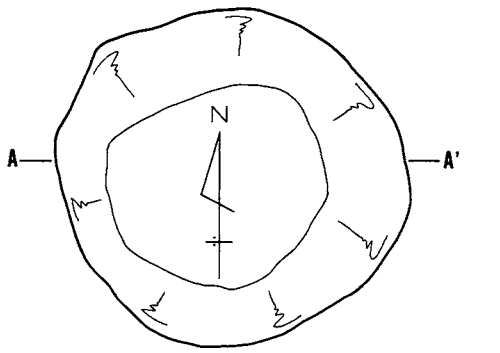
(7) C VII j 10井戸跡 (第282図、写真図版45)

西端から76m、北端から30m、東端から8m、C VII j 8井戸跡の東4mに位置する。開口部径1.3m×1.2m、底部径0.95m×0.9m、深さ0.7mの規模をもち、平面形は円形で断面形は底面から壁が外傾するバケツ形に近い形状を示し、底面は若干凹凸があるもののほぼ平坦である。埋土は11層に細分されるものの、大半は地山起源の黄褐色粘土質土で占められる。おそらく、人為的に埋め戻された井戸跡であろう。井筒の施設やその痕跡を示す状況は観察されないことから、地山井筒の素掘り井戸である。

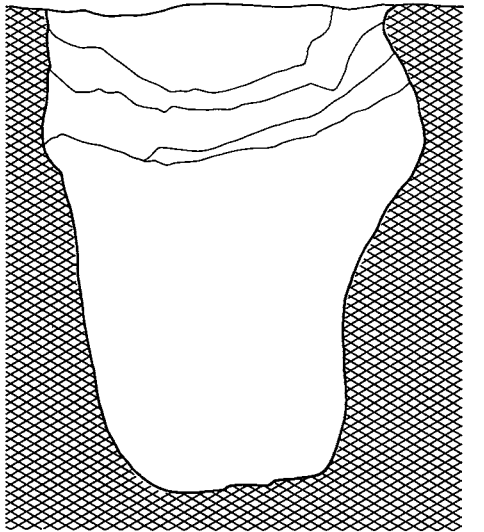
遺物は出土していない。

(8) D VII e 3 井戸跡 (第283図、写真図版44)

西端から54m、北端から45m、東端から23m、C VII j 10井戸跡の南西25mの埋め戻されたD VI e 7溝跡内に位置する。開口部径2.1m×2m、底部径1.3m×1.1m、深さ2.4mの規模をもち、平面形は北東部に膨らみをもつ歪んだ楕円形を示し、断面形は壁がやや不規則な円筒形である。南壁がD VI e 7溝跡の法面にあるため傾斜し、他の部分は溝跡の埋土を壁とするため軟弱で崩れ易い。埋土は実測中の崩落によって上位部分のみ記録されている。それによると2層と6層は地山起源の黄褐色土であるが、他は暗褐色土・黒色土で多量の炭化物を含む。調査時の観察によれば、中～下位の埋土もほぼ黒色土系の土が堆積していることから、自然堆積によっ



A₁ L-99.90m A'



0 1m

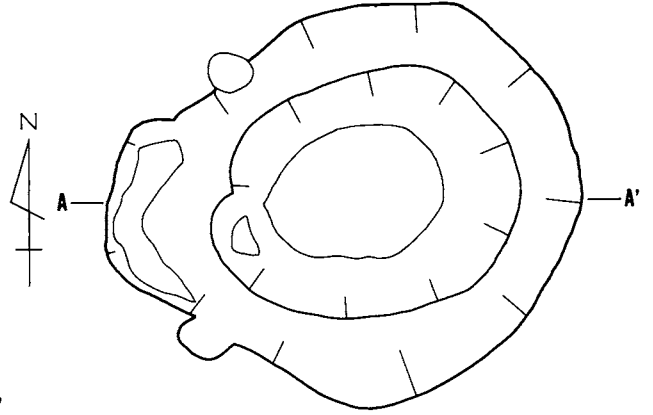
第280図 (5) D IV c 8井戸跡

C VII j 8井戸

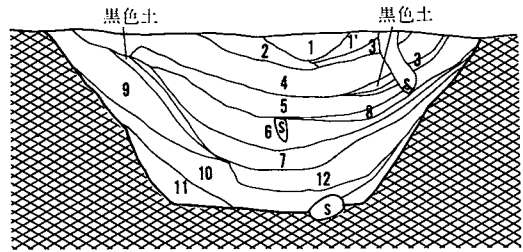
- | | | | |
|----|-----------|-----|-------------------------------------|
| 1 | 2.5Y 8/4 | 淡黄色 | 粘土と暗褐色土と炭、焼土との混土
下半に焼土化して赤化部分がある |
| 2 | 10Y R 3/3 | 暗褐色 | シルト、下辺に淡黄色粘土が入る、炭が混入 |
| 3 | 2.5Y 8/4 | 淡黄色 | 粘土、崩落土 |
| 4 | 10Y R 3/2 | 淡褐色 | シルト、淡黄色粘土が混入、炭が混入 |
| 5 | 10Y R 2/3 | 黒褐色 | シルト、黄褐色土や炭が若干混入 |
| 6 | 10Y R 4/4 | 褐色 | 火山灰土、暗褐色土が混入 |
| 7 | 10Y R 2/2 | 黒褐色 | シルト、黄褐色土若干混入 |
| 8 | 10Y R 1/1 | 黒褐色 | シルトと淡黄色粘土との混土 |
| 9 | 10Y R 3/3 | 暗褐色 | シルト、黄褐色土がブロック状に混入 |
| 10 | 10Y R 5/6 | 黄褐色 | 火山灰土 |
| 11 | 10Y R 4/1 | 褐色 | 粘土、黒色土がブロック状に混入 |
| 12 | 10Y R 3/3 | 暗褐色 | シルト、9層に似る、黄褐色土が粒状である |

C VII j 10井戸

- | | | | |
|----|------------|------|---|
| 1 | 10Y R 3/4 | 暗褐色 | シルト、黄褐色土や淡黄色粘土がブロック状に混入
炭や小石が若干混入、乾くとかたい |
| 2 | 10Y R 6/8 | 明黄褐色 | 火山灰土のブロック |
| 3 | 10Y R 3/4 | 暗褐色 | シルトと黄褐色土との混土 |
| 4 | 10Y R 3/4 | 暗褐色 | シルト、3層に似る |
| 5 | 10Y R 5/2 | 黄褐色 | 粘土、酸化して赤色部分がある |
| 6 | 10Y R 2/2 | 黒褐色 | シルト、黄褐色土若干混入 |
| 7 | 5 Y R 4/4 | 赤褐色 | 酸化鉄の集積したもの |
| 8 | 10Y R 6/2 | 灰黄褐色 | 粘土、5層に似る、壁際は黄褐色土が多い |
| 9 | 10Y R 2/2 | 黒褐色 | シルト、黄褐色土が塊状に混入 |
| 10 | 10Y R 4/6 | 褐色 | 火山灰土 |
| 11 | 7.5Y R 4/6 | 褐色 | 火山灰土と灰黄色粘土の汚れたもの |

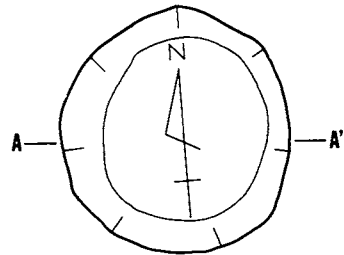


A₁ L-99.50m A'

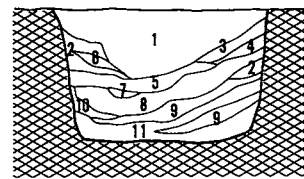


0 1m

第281図 (6) C VII j 8井戸跡

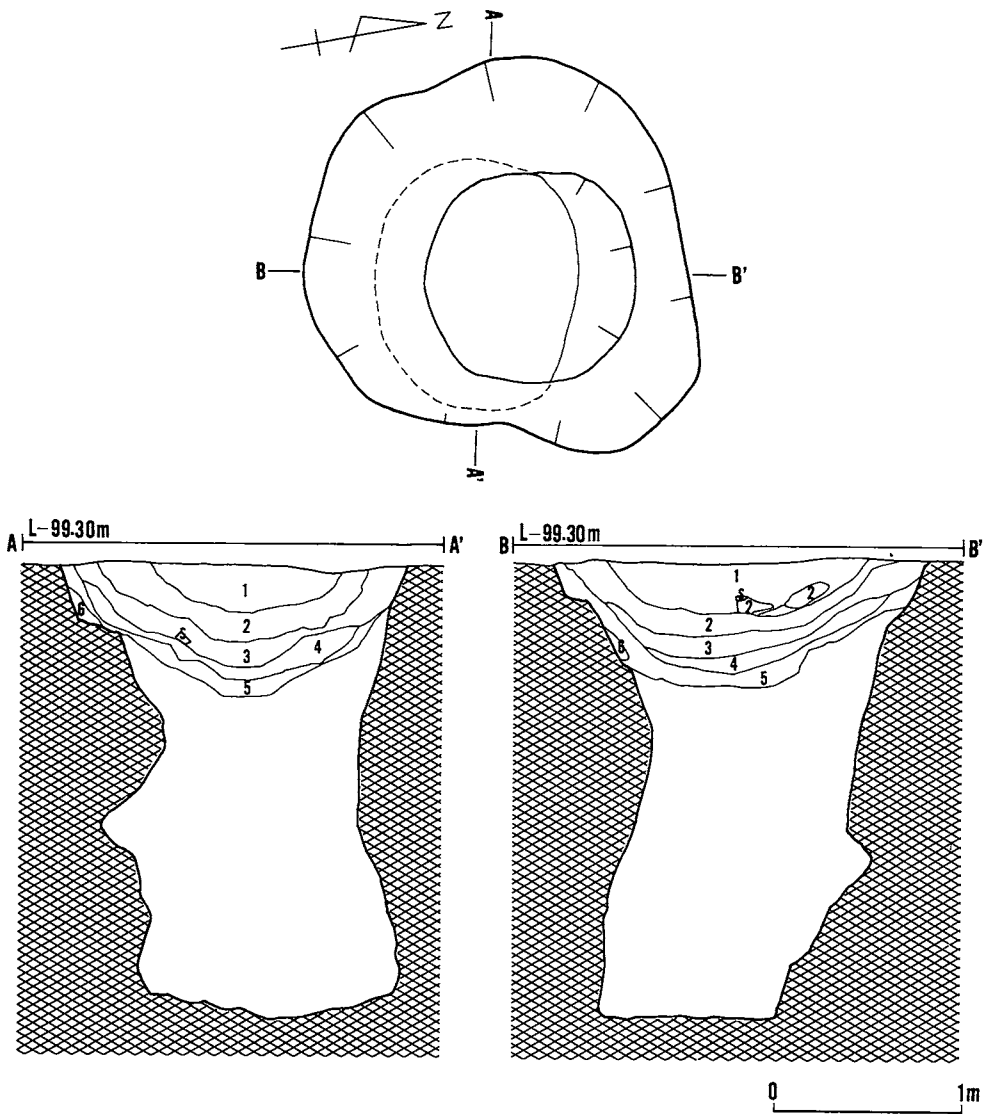


A₁ L-99.40m A'



0 1m

第282図 (7) C VII j 10井戸跡



D VII e 3 井戸

- | | | | |
|---|-------------|--------|--------------------------|
| 1 | 10Y R 3/3 | 暗 褐色 | シルト、0.5-1cmの小石が多く混入、炭を含む |
| 2 | 5 Y 6/3 | オリーブ黄色 | 粘土と暗褐色シルトとの混土、炭を含む |
| 3 | 10Y R 2/2 | 黒 褐色 | シルト、炭を非常に多く含む |
| 4 | 10Y R 3/4 | 暗 褐色 | シルト、赤褐色の砂質土が多く混入 |
| 5 | 10Y R 1.7/1 | 黒 褐色 | シルト、炭を含む |
| 6 | 10Y R 5/6 | 黄 褐色 | 火山灰土のブロック |

第283図 (8) D VII e 3 井戸跡

て埋没した井戸跡と考えられる。おそらく、館廃絶時に使用されていた井戸であろう。井筒の施設は検出されないことから、地山井筒の素掘り井戸である。

遺物として白磁四耳壺(52)の破片が1点出土している。13世紀後半頃の製品と推定される。

11) 落ち込み遺構 (写真図版46)

当遺跡で落ち込み遺構という名称を付した遺構は、広義的に解釈すれば土坑か竪穴状遺構と呼称される遺構に含まれる可能性をもつが、特徴が必ずしも土坑や竪穴状遺構のそれと一致しない遺構をここに一括した。これらの遺構は、検出時ではいずれも溝跡ではないかと考えられたが、完掘後の状況を観察すると、一部は土坑が連続する状況であるし、一部は周溝遺構が連続する状況を示し、一部は溝跡的でもある。いずれにしても、どの遺構にも共通することは、当時の地表面がある意図・目的をもって人工的に掘削され、その後人為的に埋め戻された跡であることは明らかである。その完掘された結果として、土坑・竪穴住居跡・溝といった通常の遺構の形状を示していない遺構に「落ち込み遺構」という名称を付した。当遺跡では西館の西端付近に分布が限定される。

(1) B II j 9 落ち込み遺構 (袋詰図版西館1・3、写真図版46)

当遺構は北側の西端寄りのグリッドC III a 5を東端にして西に17.5m延び、グリッドB II j 9の地点から南に方向を転じて西端沿いに45m延びている。さらに、北西隅部から南へ25mのグリッドC II h 9地点で南へ15mのグリッドC III h 4まで分岐し、77.5mの総延長をもつ遺構である。幅は北側が3.5m～2.5m、西側と東の分岐部分は最大8m、最小2mと不規則で、深さについても0.1m～0.5mと大きな差があり一定していない。底面は凹凸が著しいばかりでなく、多くの土坑や周溝遺構が重複し合うため、まったくの不規則である。特に北側から西側にかけては多くの土坑と分類した凹みが分布し、この付近はこの土坑が切れ間なく連続して重複する様相に近似し、西側南端部の東壁側と東分岐部分の北壁寄りには周溝遺構が連続する状況を示している。しかし、土坑・周溝遺構とも当遺構より古い新旧関係を示し、新しく考えても同時存在としか理解されない。埋土は上層の埋め戻しによると考えられる地山起源の黄褐色粘土質土と黒褐色土の混合土と、中層の草木灰と炭化物粒の層、そして下層の暗褐色土～黒褐色土の3層に大別され、少なくとも当館に火災が発生した時点には当遺構は凹み状であったことは事実であり、その後、この付近の低地が全て埋め戻され、整地していることも明らかである。

埋土内から青磁10点(第316～319図10・19・22・45・46・50・77・79・80・101)、白磁(第320・321図6・7・38)、鉄釉陶器1点(第325図1)、瀬戸・美濃系灰釉3点(第311図30・40・

45)、同鉄釉 5 点 (第312図 6・7・9・20)、カワラケ 2 点 (第315図 4・12)、砥石 7 点 (第326・328・329図 8～11・39・47・50)、石臼 4 点 (第331・332図 1・2・3・11)、石鉢 4 点 (第336図 1・2・4 a・4 b)、使用痕のある礫 1 点 (第339図 1)、硯 1 点 (第334図 1) など多くの遺物が出土している。青磁は皿が 1 点(10)以外は全て碗である。皿は稜花皿の小破片である。碗では19が鎬蓮弁文を付し、80が体部にラマ式蓮弁文に口縁部に雷文帯をもつ以外は、無文である。19は内面に画花文を付し、22は見込みに型押しによる花文をもち、50・77・80・101は圏線を付す。口縁部を残す45・46・50はいずれも端反りする。これらはいずれも14世紀から15世紀初期頃の製品と考えられる。白磁には皿(38)と碗(6・7)がある。皿は高台脇から次第に内湾して口縁部に続き、器厚が口縁部寄りほど薄い。別の個体でみると、高台～高台脇を無釉にする。碗は同個体の破片であるが、高台脇～底部を残す。高台脇～高台を無釉にし、見込みに圏線が入る。皿は15世紀前半、碗は14世紀前半頃の製品と推定される。鉄釉は舶載の天目茶碗で、整地層の上面で出土している。15世紀頃の製品であろう。瀬戸・美濃系の灰釉陶器には皿(30)、卸し皿(40)、香炉(45)があり、皿は上面からの出土であるが他は整地層内からの出土である。皿は15世紀末～16世紀初期、その他は15世紀前期の製品である。鉄釉には天目茶碗(6・7・9)、四耳壺(20)がある。天目茶碗の内6は輪高台の作りで15世紀末～16世紀初期、7は15世紀前期、9は15世紀中期の製品と考えられる。四耳壺は瀬戸窯の祖母懐の茶壺で15世紀後半頃の製品である。四耳壺は整地層上面での出土であるが、その他は整地層内の出土である。カワラケの内4はロクロ成形底部回転糸切りの小皿であり、12は手捏ね的にヨコナデ痕があり、内面に布目痕が付着する。

以上のように、整地層の上面から出土している陶磁器の内でもっとも新しいのは天目茶碗と皿(15世紀末～16世紀初期)で、古いのは四耳壺の15世紀後半で、これらの陶磁器の所属時期から当落ち込み遺構は15世紀中期以前に埋め戻された可能性を示している。

(2) D II f 6 落ち込み遺構 (袋詰図版西館 1・3、写真図版46)

前のB II j 9 落ち込み遺構の南端に同じ方向でさらに続く遺構である。北端がグリッドD II e 6 に位置し、それから南へ約21mグリッドE II b 6 まで続くが、その南は開田時の削平によって遺存しない。おそらくもっと南へ続く遺構と考えられる。幅は2m～5mと不規則で、深さも0.1m～0.4mまで差があり、底面にも凹凸が多くみられる。また、土坑や周溝遺構とも重複する。埋土は黒色土や黒褐色土を主体とするが、地山を起源とする黄褐色粘土質土の大塊が混在することから、人為的に埋め戻されたものと推定される。おそらく、当遺構はB II j 9 落ち込み遺構と一連のもので、同じ一連の作業として埋め戻された可能性が強い。また、埋土内には多くの炭化物や草木灰が混入していることから、火災後に整地された状況をも推定される。

埋土内から古代の土師器や須恵器の破片の他、漆膜が2点(6・7)出土している。

(3) D III h 4 落ち込み遺構

西端から25m、北端から55mのグリッドD III h 4から南東に、南北がグリッドD III h 5～E III b 5の14m、東西がグリッドD III j 3～D III j 6の11mの範囲に、幅3m～5mの溝が楕円形状に広がっている。深さは0.05m～0.5mと大きな差がみられ、所所に深い部分があつて底面に起伏がある。遺構全体でみれば、土坑が切れ間なく連続する状況に良く似ている。埋土は、上層～中層は地山を起源とする砂礫の混じった黄褐色粘土質土が堆積し、下層は腐植質の混入した黒色土や黒褐色土が堆積し、上面に炭化物の粉や草木灰を被っている。当遺構も人為的に埋め戻されたものと考えられる。

埋土内から青磁皿1点(第316図14)、漆塗の木皿(第340図9)、その他木製品(第343～344図26・39)などの他古代の土師器・須恵器の破片が出土している。青磁皿は体部上位から口縁部を残す体部内面にヒダをもち口縁部が折縁となる小破片で、15世紀頃の製品であろう。漆塗りの木皿は、口縁部を欠失するが残存部径12.6cm、高さ2.8cmの大きさをもち、底部は僅かな高さをもつベタ高台である。文様は全面に黒漆を塗った後、明るい橙色で文様が付されているが、文様の種類は不明である。

12) 竈状遺構

当遺跡で竈状遺構や焼土といった厨房に関係する遺構は、西館ではまったく検出されず、東館の東側の北寄りに限定される。しかし、西館は開田時の削平によって消失した可能性もあり、これによって当初から存在しなかったとは断定しがたい。東館についても同様の傾向がみられ、図化できなかった焼土遺構が3箇所と竈状遺構と考えられる遺構が1箇所検出されたのみである。ここでは竈状遺構を記述する。

(1) C VII i 8 竈状遺構 (第284図、写真図版47)

東端から12m、北端から24m、C VII j 8 井戸跡の北4.5mのグリッドC VII i 8にC VII j 9 建物跡-1の西辺南寄りと重複して位置する。開口部径1.2m×0.55m、底部径0.75m×0.4m、深さ0.12mの規模をもち、平面形は長軸方向をほぼ東西にもつ楕円形をなし、断面形は浅い皿状を示す。埋土は1層が黒色土である以外は2層と4層が焼成によって赤化した赤褐色土で、3層は焼土と炭化物と暗褐色土の混土である。遺構全体でみると天井部が崩れによって残存しないため釜据え付け穴も定かでない。しかし、埋土の観察では非常に強い焼成を長時間受けていたことを示している。おそらく開田時の削平によって天井部が消失していると推定される。

遺物は出土していない。

13) 溝 跡

西館5条、東館19条の溝跡が検出されているが、東館の19条には古代と推定される4条の溝跡が含まれていることから、本項からは除外し、中世に属する20条について記述することとする。形状や規模には各種あり必ずしも一様ではない。特に、東館には所謂「堀」と呼ぶにふさわしい例もみられるが、本項では全て溝跡で統一した。

〈西 館〉

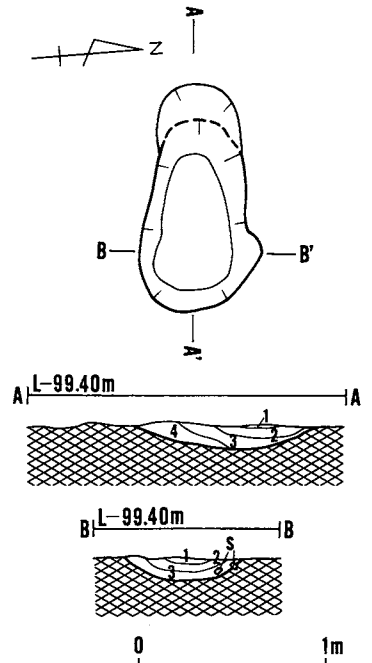
(1) B III i 1 溝跡 (第285図、写真図版2)

北側の西寄りグリッドB III i 1を北端とし、南へ9.5mのグリッドC III b 1まで延び、両端は自然に消えている。方向はほぼ南北を示し、幅が最大0.25mと狭く、深さももっとも深い部分で0.1mである。この付近は開田時の削平が特に著しい地点であることから、当初はもう少し広く、もっと深かったことが予想される。底面にはほとんど凹凸がなく平坦である。埋土は実測図による記録はないが、調査時の観察では黒褐色土の単層である。また、落ち込み遺構と横断重複しているが、当遺構の方が新しい。性格を示す状況は観察されないが、用排水に併う水路とするには狭いことから考えると、柵木痕は確認されないが柵列跡の可能性がもっとも高い。

遺物は出土していない。

(2) B IV j 5 溝跡 (第286図、写真図版48)

北側の東寄りグリッドB IV j 4を北西端として南東へ約24mグリッドC V c 1まで延び、西端は外堀に向って落ちている。方向はN-68°-Wを指すが直線的ではなく、南の方へ僅かに湾曲し、幅0.4m~0.7m、深さが北西端0.45m、中央部0.4m、南東端0.54mあり、U字形の断面を示す。底面は凹凸がなくほぼ平坦であるが、中央部から両端に向って次第に低くなる。埋土



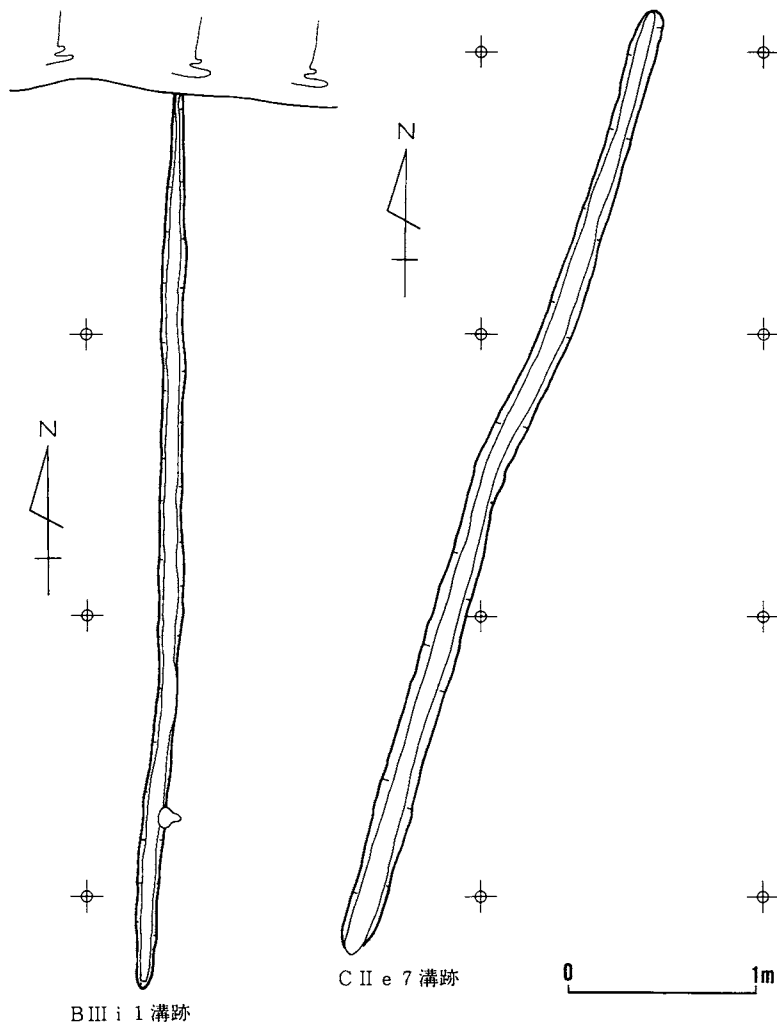
第284図 (1)C VII i 8 竈状遺構

C VII i 8 カマド

- | | | | |
|---|------------|------|--------------------------------|
| 1 | 10Y R1.7/1 | 黒 色 | シルト、炭が多く混入、ボロボロしてい |
| 2 | 2.5Y R 4/8 | 赤 褐色 | 焼土、小ブロックや粒状になっている |
| 3 | 5 Y R 3/4 | 暗赤褐色 | 焼土と炭と暗褐色土との混土、小石が多く混入、ボロボロしている |
| 4 | 2.5Y R 4/8 | 赤 褐色 | 焼土、炭や暗褐色土若干混入、かない |

は3層に細分され、1層は暗褐色土、2層は地山起源の黄褐色土、3層は黒褐色土が堆積し、1・2層には炭化物が混入する。性格を示すような状況は得られていないが、土層図では自然堆積による埋没と理解されることや、柱の痕跡を残さないことから、水路的な役割が想定される。しかし、立地をみると両端が外堀に落ちることや全長が短いことから、所謂一般的な用排水路的な用途は考えにくい。

遺物には須恵器坏2点、同大甕2点の破片がある。坏はロクロ成形された実測不能な小破片である。大甕の内1点(第368図6)は表裏ともに並行文を付す体部破片である。



第285図 溝跡一 I

(3) BIV j 10溝跡 (第286図、写真図版48)

北側の東寄りグリッドBIV j 10を北西端として南東へ約6.2mグリッドCV c 1まで延び、西端は外堀に向って落ちている。方向はN-42°-Wを指すが、北西寄りにはほぼ直線的であり、南東端は東に若干方向を変えている。幅は0.3m~0.4m、北西端の深さが0.13m、中央部0.19m、南東端0.1mであるが、溝底は北方に向って次第に低くなる。底面には凹凸がなくほぼ平坦である。埋土は3層に分けられ、1層暗褐色土、2層黄褐色土、3層黒褐色土とBIV j 5溝跡とまったく同じ様相を示している。おそらく、同時に存在し、同じ状況下で埋没した同じ性格をもつ溝跡であろう。

遺物はまったく出土していない。

(4) CII e 7溝跡 (第285図、写真図版48)

西端の北寄りグリッドCII e 2を北端にして南へ約10.5mグリッドCII h 6まで延び、両端は自然に消えている。方向はN-16°-Eを指し、西端と直線的に並行する。幅は0.3m~0.4m、深さ0.05m~0.1mで、底面には凹凸もなくほぼ平坦である。埋土は黒褐色土の単層である。

遺物の出土はない。

(5) DII f 7溝跡 (第286図、写真図版2)

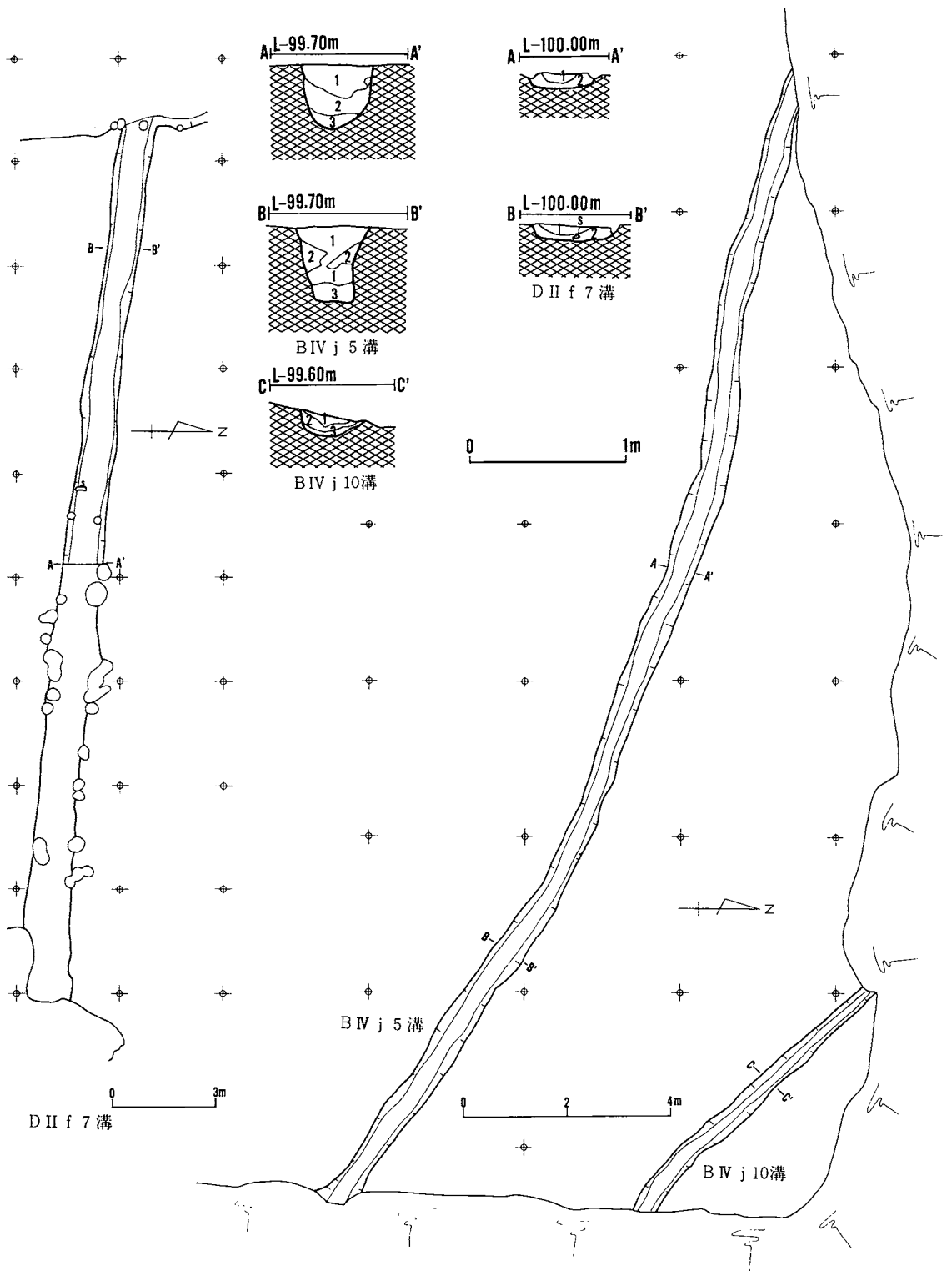
西端の中央やや南寄りのグリッドDII f 7を西端にして東に約27mグリッドDIII g 6まで延び、西端はDII e 6落ち込み遺構、東端はDII f 7土坑と重複するが、重複とするよりはDII f 7土坑に端を發し、西進してDII e 6に合流すると理解した方が妥当である。幅1m~1.3m、深さ0.4mで、底面は凹凸もなくほぼ平坦である。方向はN-83°-Wを指し、ほぼ直線的に掘削されている。埋土は2層に分けられ、1層は黄褐色土、2層は黒褐色土が堆積している。レンズ状の堆積を示すことから、自然埋没による堆積と推定され、BIV j 10溝跡、CII e 2溝跡の様相と近似する。

遺物は出土していない。

〈東 館〉

(6) BVI i 6溝跡 (第287図、写真図版3)

北西隅部のグリッドBVI i 6を北端として南へ約61.5mのグリッドDVI i 5まで延び、北端は外堀へ、南端は未確認であるが直線的に延びて外堀へ続くと推定され、それを含めると全長は約80mの長さをもつことになる。当溝跡より新しいCV d 5溝跡、CV j 6溝跡-4、DV



第286図 溝跡—2

b 6 溝跡、D V d 5 溝跡、D V e 5 溝跡と重複することから、当館で検出された中世の溝跡ではもっとも古い。方向はN-7°-Eを指すが、西辺と並行してほぼ南北に延び、西館への土橋の前も連続することから、土橋が設置される以前の遺構と推定される。検出面の幅2.5m~3m、底面の幅1.5m前後で、深さは0.3m~0.6mと差がみられるが、開田時の削平を受けていなければ0.5m以上の深さと推定され、溝跡というよりは堀跡と考えることができる。埋土は5層に細分されているが、いずれの層も地山を起源とする灰白色、淡黄色、黄褐色、暗褐色の粘土質土が混合した土が堆積しており、人為的に埋め戻されたものであろう。底面は起伏もなく平坦であるが、グリッドC V g 6で北側が0.05cmの段差で低くなっており、掘り手の違いを示している可能性がある。

遺物として実測不能な土師器の小破片が出土している。

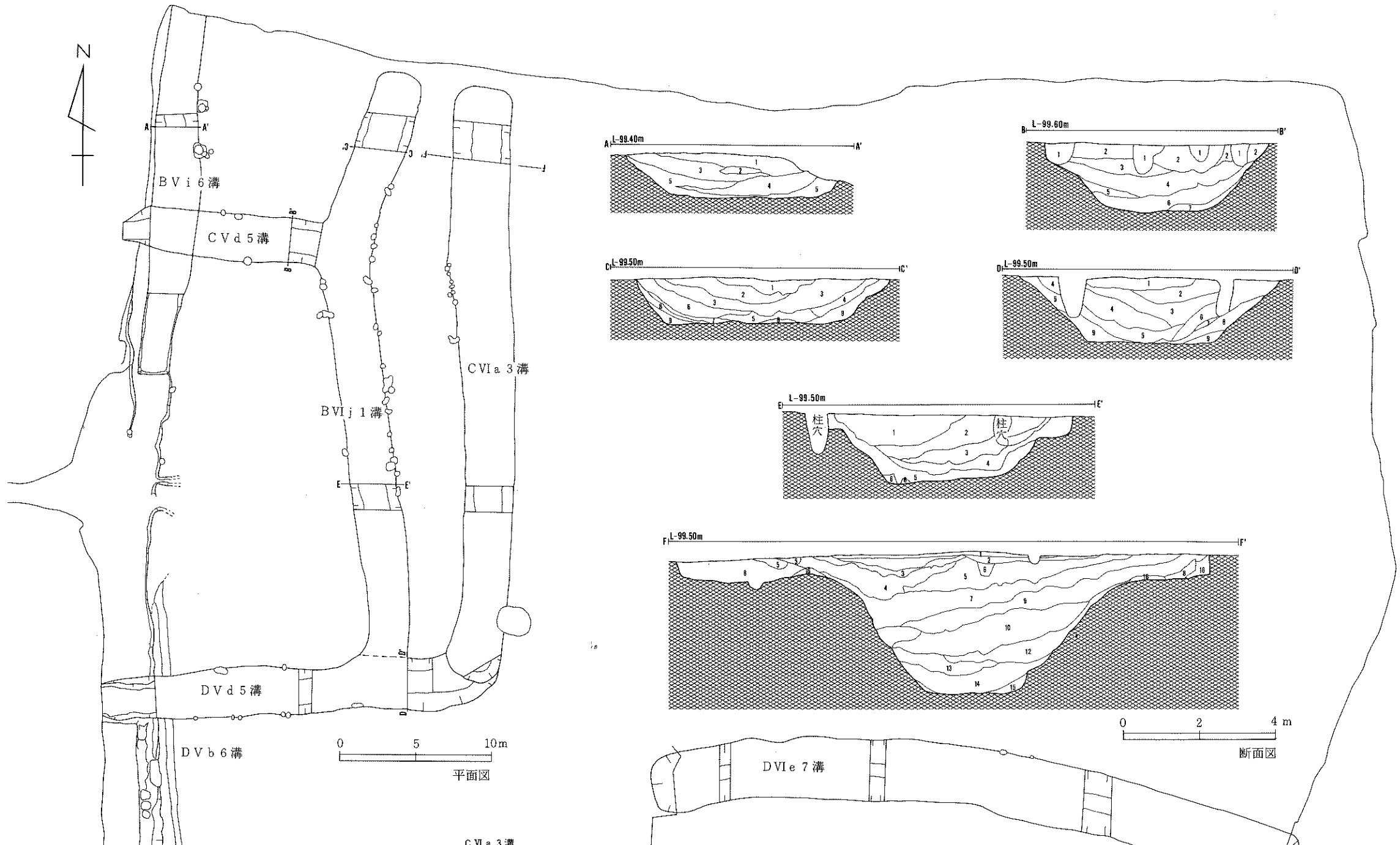
(7) B V i j 1 溝跡 (第287図、写真図版50)

北端の北西隅部寄りグリッドB V i j 1を北端にして南へ約38.5mのグリッドD V i c 1まで延び、北端は外堀と約0.5mの距離をおいて止まり、南端はD V d 5 溝跡に続く。方向をB V i j 1からC V d 10まではN-18°-E、C V d 10からD V i c 1まではN-7°-Wを指し、それぞれの間はほぼ直線的であるが、全体の状況を観察すると本来はD V d 5 溝跡に続く溝跡の可能性はある。検出面の幅は3.2m~3m、底面の幅2.5m~1.8m、深さ0.6m~0.5mで、底面にはほとんど凹凸がなく平坦である。壁も斉一で約50°で外傾する。埋土は9層に細分されているが、1層と2層は地山を起源とする淡黄色や黄褐色の粘土質土が堆積し、7層以外のその他は黄褐色粘土質土粒が混入した黒色土や黒褐色土である。7層は草木灰と炭化物粉の堆積層があり火災にあったことを示している。おそらく1層から6層までは人為的に埋め戻された土層と考えられ、7・8・9層は自然堆積による土層であろう。

遺物は出土していない。

(8) C V d 5 溝跡 (第287図、写真図版3)

西端の北西隅寄りのグリッドC V d 5を西端にして東に約12mグリッドC V d 9まで延び、西端は内堀にそして東端はB V j 1 溝跡に接続する。方向はN-85°-Wを指し、直線的で内堀とほぼ直交する。検出面の幅は約3m、底面の幅約1.5m、深さ約0.6mで、底面は凹凸もなくほぼ平坦である。他遺構の重複関係をみると、C V d 5 溝跡は当遺構より古く、B V i j 1 溝跡との関係は明かでない。埋土は1層の地山起源の淡黄色~灰白色粘土質土が大塊状に混在する暗褐色土、2層は地山起源の黄褐色粘土質土の2層に分けられ、B V i j 1 溝跡でみられた草木灰層が堆積しない。当溝跡も人為的に埋め戻されていることは明らかであるから、草木灰が



- CVe 6溝**
- 10YR 3/1 黒褐色
 - 10YR 3/2 黒褐色
 - 7.5YR 4/3 黒褐色
 - 10YR 2/2 黒褐色
 - 5Y 8/3 淡黄褐色
 - 10YR 4/1 褐灰色
 - 10YR 4/2 灰黄褐色

シルト、小石や淡黄色粘土若干混入
 シルト、小石や淡黄色粘土若干混入
 火山灰土、明黄色土のブロックが混入
 シルト、淡黄色粘土や褐色土が混入
 粘土と黒褐色土の互層（上下に分かれる）
 粘土、淡黄色粘土がブロックで混入
 火山灰土、と黒褐色土との混土

CVI a 3溝

- 10YR 3/1 黒褐色
- 10YR 2/2 黒褐色
- 10YR 5/2 灰明黄褐色
- 10YR 6/6 灰明黄褐色
- 2.5Y 7/3 浅黄褐色
- 2.5Y 3/2 灰黄褐色
- 10YR 4/2 灰黄褐色
- 10YR 2/3 黒暗黄褐色
- 2.5Y R 4/2 灰黄褐色
- 2.5Y 7/4 浅黄褐色
- 10YR 5/6 黄褐色
- 2.5Y 2/1 黒褐色
- 5Y 2/1 黒褐色
- 2.5GY 4/1 暗オリーブ灰色
- 5Y 3/1 オリーブ黒色
- 10YR 5/6 黄褐色
- 10YR 3/2 黒褐色

シルト、小石若干混入
 シルト、灰が混入
 シルト、白色浮石質礫が混入
 火山灰土、酸化鉄を含み褐色化
 粘土、白色浮石質礫が混入
 シルト、2と5の混土
 シルト、粘土のブロックが混入
 シルト、褐色土のブロックや灰が若干混入
 シルト、黒色土が混入
 粘土と黒色土との混土
 火山灰土、酸化鉄を含み褐色化
 シルト、にぶい黄褐色粘土が若干混入
 シルト、明オリーブ灰色粘土が混入
 粘土
 シルト、砂粒が若干混入
 火山灰土
 シルト、淡黄色粘土がブロック混入、炭微量混入

DVd 6溝

- 7.5YR 4/3 褐褐色
- 7.5YR 4/3 褐褐色
- 7.5YR 4/3 褐褐色
- 7.5YR 6/6 橙褐色
- 5Y 8/3 淡黄褐色
- 7.5YR 4/2 灰黄褐色
- 10YR 4/2 灰黄褐色
- 10YR 17/1 黒褐色
- 7.5YR 4/4 褐褐色

火山灰土、淡黄色粘土が混入
 火山灰土、淡黄色粘土が多く混入
 火山灰土、黒色土と淡黄色粘土が混入
 ～にぶい褐色火山灰土
 粘土、灰色粘土がうすい層で3枚入る
 ～褐色火山灰土
 火山灰土
 シルト、褐色土が若干混入
 火山灰土

CVa 6溝

- 5Y 8/2 灰白色
- 10YR 3/3 暗褐色
- 10YR 3/2 黒褐色
- 5Y 8/2 灰白色
- 7.5YR 3/3 暗褐色

～淡黄色粘土、暗褐色土が混入
 シルトと淡黄色粘土半々の混土
 シルト、黄褐色土が粒状に多く混入
 ～淡黄色粘土、1層に似るが暗褐色土が少ない
 シルト、黄褐色土が粒状に混入...やわらかい

BVIj 1溝

- 5YR 8/3 淡黄褐色
- 10YR 5/6 黄褐色
- 10YR 3/2 黒褐色
- 10YR 3/2 黒褐色
- 10YR 3/2 黒褐色
- 10YR 2/3 黒褐色
- 10YR 2/1 黒褐色
- 10YR 3/2 黒褐色
- 7.5YR 3/2 黒褐色

粘土質土、ブロックで入る
 火山灰土、ブロックで入る
 シルト、黄褐色土が小ブロックで多く混入
 シルト
 シルト、浅黄色粘土がブロックで混入
 シルト、黄褐色土や灰が若干混入
 シルト、灰を主とする層
 シルト、浅黄色粘土がブロックで混入
 シルト、黒色土と黄褐色土が細粒で混入

BVIj 1溝

- 5Y 8/3 淡黄褐色
- 7.5YR 5/4 にぶい褐色
- 10YR 2/3 黒褐色
- 10YR 3/2 黒褐色
- 7.5YR 2/2 黒褐色
- 5Y 8/3 淡黄褐色

粘土、かたい
 火山灰土
 シルト、黄褐色土が混入
 シルト、淡黄色粘土がブロックで混入
 シルト、にぶい褐色土が小ブロックで混入
 粘土、にぶい褐色土が混入

第287図 溝跡—3

堆積しないことは、BVI j 1 溝跡の埋め戻し時期とは異なる時期の埋め戻しと考えることができる。おそらく、当初はBVI j 1 溝跡の北端と当溝跡は連続する同一の溝であったものが、当溝を埋め戻してBVI j 1 溝をさらに南へ延長させたものであろう。

遺物は出土していない。

(9) CV j 6 溝跡—1 (第288図、写真図版49)

西端の中央、土橋前のグリッドCV j 6を西端にして東へ約33mグリッドDVI a 6まで延び、さらに南へ方向を変えて約17mのグリッドDVI g 7までの総延長約50mの溝跡で、重複するほどの遺構よりも新しい。検出面での幅が0.3m～0.7m、底面の幅0.15m～0.3m、深さ0.1m～0.25mで、底面には若干凹凸があるととも東に向って次第に低くなる傾向がある。東西方向はN—87°—W、南北方向はN—5°—Wを指し、西端は西辺と直交し自然に消え、南端も低地部に消える。埋土は砂や黄褐色土の細粒が混じる黒褐色土の単層である。

遺物には土師器坏4点(第375図160・161)、同甕3点(第375図159)、須恵器坏1点(第375図162)、同甕1点(第375図163)、青磁1点(第317図32)、瀬戸・美濃系灰釉陶器1点(61)、カワラケ1点(第315図10)、硯3点(第334図5～7)がある。土師器の坏はいずれもロクロ成形で底面が回転糸切り痕をもち、非内面黒色処理である。甕はロクロ成形された口縁部～体部を残す破片である。須恵器の坏はロクロ成形で回転ヘラ切りのものである。甕は表裏に並行文をもつ破片である。青磁は体部下位から底部を残す破片で、胎土は灰色、釉は灰緑色を示し、高台内外を全面施釉する。15世紀頃の製品であろう。灰釉陶器は瓶子の実測不能な体部破片である。15世紀後半の製品であろう。カワラケは若干厚味をもつ体部から次第に薄くなって口縁に続くロクロ成形の口縁部破片である。硯はいずれも破片である。5は海部の縁、6は左右どちらかは不明であるが側縁部、7も海部の縁である。

(10) CV j 6 溝跡—2 (第288図、写真図版49)

西端の中央、土橋前のグリッドCV j 6を西端にして東へ29mのグリッドDVI a 5まで延び、その間グリッドDVI a 3の地点で約2m中断する。重複する他遺構との新旧関係は、本遺構がもっとも新しい。検出面での幅は0.3m～0.7m、底面の幅0.1m～0.3m、深さ0.15m～0.2mであるが、東端部の長さ3m分は、検出面での幅0.5m、深さ0.2m～0.25mと他より深く、独立した短い溝状を示す。底面には若干凹凸がみられるものの、総じて平坦で東に寄るほど低くなる傾向がある。方向はN—87°—Wを指し、土橋の方向に並行し、さらにCV j 6 溝—1とも並行する。埋土は砂粒の混入する暗褐色土や黒褐色土が堆積する。

遺物として土師器3点、須恵器坏1点(第375図164)、唐津系陶器1点(第313図5)、鉄製品

1点(第349図117)が出土している。土師器坏はロクロ成形で非内面黒色処理の実測不能な体部小破片である。須恵器の坏はロクロ成形された体部下位～底部を残す。唐津系陶器は口縁部～底部までの約1/2を残す碗である。内面と体部外面の下部まで施釉とし、それ以外は無釉で口唇に鉄釉の覆輪が入る。鉄製品は平鉄であるが錆化で破壊した。

(11) C V j 6 溝跡—3 (第288図、写真図版49)

西端の中央、グリッドC V j 8を西端にして東へ25mのグリッドDVI b 6まで延び、その間にグリッドDVI a 3～4にかけて1.5m中絶する。他遺構との新旧関係は、本遺構がもっとも新しい。検出面での幅は0.3m～0.7m、底面の幅0.2m～0.5m、深さ0.05m～0.1mで、底面にはほとんど凹凸がなく平坦であるが、東に向って次第に低くなる傾向がある。方向はN-85°-Wを指し、土橋やC V j 6溝—1・2・4とほぼ並行する。埋土は砂粒や細礫が混入した黒褐色である。

遺物の出土はない。

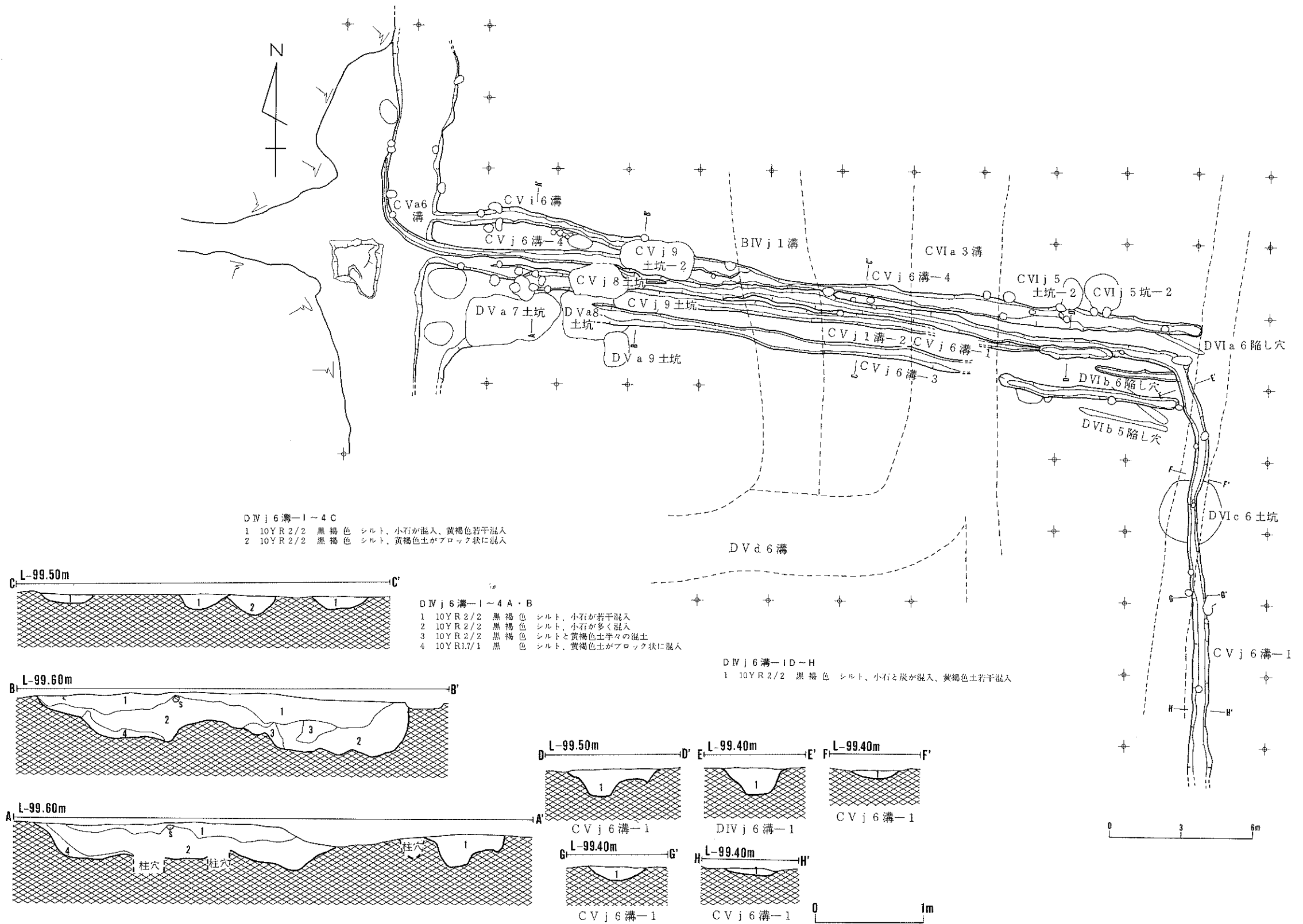
(12) C V j 6 溝跡—4 (第288図、写真図版49)

西端中央のやや北寄り、グリッドC V h 5を北端として南へ約3m延び、方向を東に変えて34mのグリッドD V a 6まで延びている。検出面の幅0.3m～0.8m、底面の幅0.1m～0.5m、深さ0.1m～0.25mで、底面には若干凹凸がみられ、中央部から両端に向って次第に低くなり、西側が顕著である。方向は南北がN-2°-E、東西はN-87°-Wを指し、土橋やC V j 6溝—1～3とほぼ並行する。他遺構との重複関係では、本遺構がもっとも新しい。埋土は細礫が混入した黒褐色土である。

遺物には土師器坏1点、カワラケ1点(第315図9)、貨幣2点(第350・351図28・29)がある。土師器坏はロクロ使用成形で非内面黒色処理の実測不能な体部小破片である。カワラケはロクロ成形で底部糸切りされた素焼きの土器で、口縁部～体部を残す。

(13) C V i 6 溝跡 (第288図、写真図版49)

西端部中央のやや北寄り、グリッドC V i 6を西端として東へ約13mのグリッドC V j 8まで延び、西端はB V i 6溝跡の上面で終り、東端はC V j 6溝跡—4と合流することから、C V j 6溝跡—4を北側に流路変更した可能性がある。方向はN-87°-Wを指しC V j 6溝跡1～4とは広義で並行する。検出面での幅0.4m～0.8m、底面の幅0.1m～0.4m、深さ0.1m～0.25mで、底面は若干凹凸があり、中央部から両端に向って低くなる傾向がある。埋土は砂粒や細礫の混入した黒褐色土である。



第288図 溝跡-4

遺物は出土していない。

(14) C VI a 3 溝跡 (第288図、写真図版51)

北西隅から20m東方のグリッドC VI a 3を北端とし南へ39mのグリッドD V d 3まで延び、南端は東西方向を示すD V d 5溝跡の東端部と接続する。検出面での幅3m～3.8m、底面の幅1.2m、深さ1.8mで、底面・法面とも凹凸がなくほぼ平坦で、南端のD V d 5溝跡の底面とは0.8mの高低差があり、本遺構の方が深い。方向はほぼ南北を示し、北端は外堀と2m強の距離をおいて止まり、B VI j 1溝跡とは北端で2.2m、南端で2.7m南に位置する。他遺構との重複関係は、C V j 6溝跡1～4は本溝跡より新しく、D V d 5溝跡との新旧関係は、土層図の観察や検出時の平面観察では明確ではなかった。ということは同時存在で、本来は本遺構とD V d 5溝跡は同じ遺構である可能性が強い。埋土は17層に細分されるが、2層・6層・8層・12層・13層は黒色土か黒褐色土であるが、他は地山を起源とする黄褐色土系の粘土質土が堆積している。層相の観察では西から投棄されたことを示しており、人為的に埋め戻したことは明らかである。なお、B VI j 1溝跡の下層部に見られた草木灰の堆積層は観察されないことから、B VI j 1溝跡と同時に存在したとは考えられず、おそらくB VI j 1溝跡を埋めて本溝跡に移動させたものであろう。

遺物として青磁が1点(90)出土しているが、実測不能な体部の小破片である。15世紀頃の製品であろう。

(15) C VII a 4 溝跡 (第289図、写真図版49)

北側の中央やや東寄り、グリッドC VII a 4を西端にし東へ約7mのグリッドC VII a 7まで延び、西端はC VII a 4土坑-1と重複して消え、東端は台形気味に掘られている。検出面の幅0.15m～0.25m、底面の幅0.05m～0.1m、深さ0.1m～0.15mで、底面には起伏がある。方向はN-83°-Wを指し、北辺とほぼ並行する。埋土は黒褐色の単層である。

遺物は出土していない。

(16) C VII c 7 溝跡 (第289図、写真図版3)

北東端に近いグリッドC VII c 7を西端にして東方へ約13mのグリッドC VIII c 1まで延び、西端から約1m地点で約0.7m切れている。他遺構との重複はない。検出面の幅0.1m～0.15m、底面の幅0.05m～0.08m、深さ0.1m～0.15mで、底面には起伏がみられる。方向はN-83°-Wを指し、北辺と並行する。埋土は黒褐色の単層である。

遺物の出土はない。

(17) DVb6 溝跡 (第289図、写真図版49)

西端部の中央からやや南寄りのグリッドDVb6を北端にし南へ17.5mのグリッドDVg6まで延び、グリッドDVd6の地点で約0.5m中断し、北端はCVj6溝跡—1～4との重複によって不明である。検出面の幅0.15m～0.3m、底面の幅0.06m～0.12m、深さ0.15m～0.3mで、北側が南側より幅が広く、さらに深さも深く形も整っている。底面は若干起伏がある。方向はほぼ南北を示し、内堀とほぼ並行する。他遺構との重複関係は、CVj6溝跡1～4とBVi6溝跡との関係は不明であるが、DVd5溝跡は本遺構より古い。埋土は1層の黒褐色土、2層の黄褐色土、3層の灰白色粘土質土に細分されるが、一部の上面に地山起源の黄褐色土が堆積することから、最終段階は埋め戻しか盛り土したことが窺われる。

埋土内からロクロ成形された土師器坏と甕の実測不能の破片が各1点と砥石1点(第329図53)が出土している。砥石は白色細粒凝灰岩を素材とし、縦8.1cm、横4.8cm、169gの大きさをもつ。

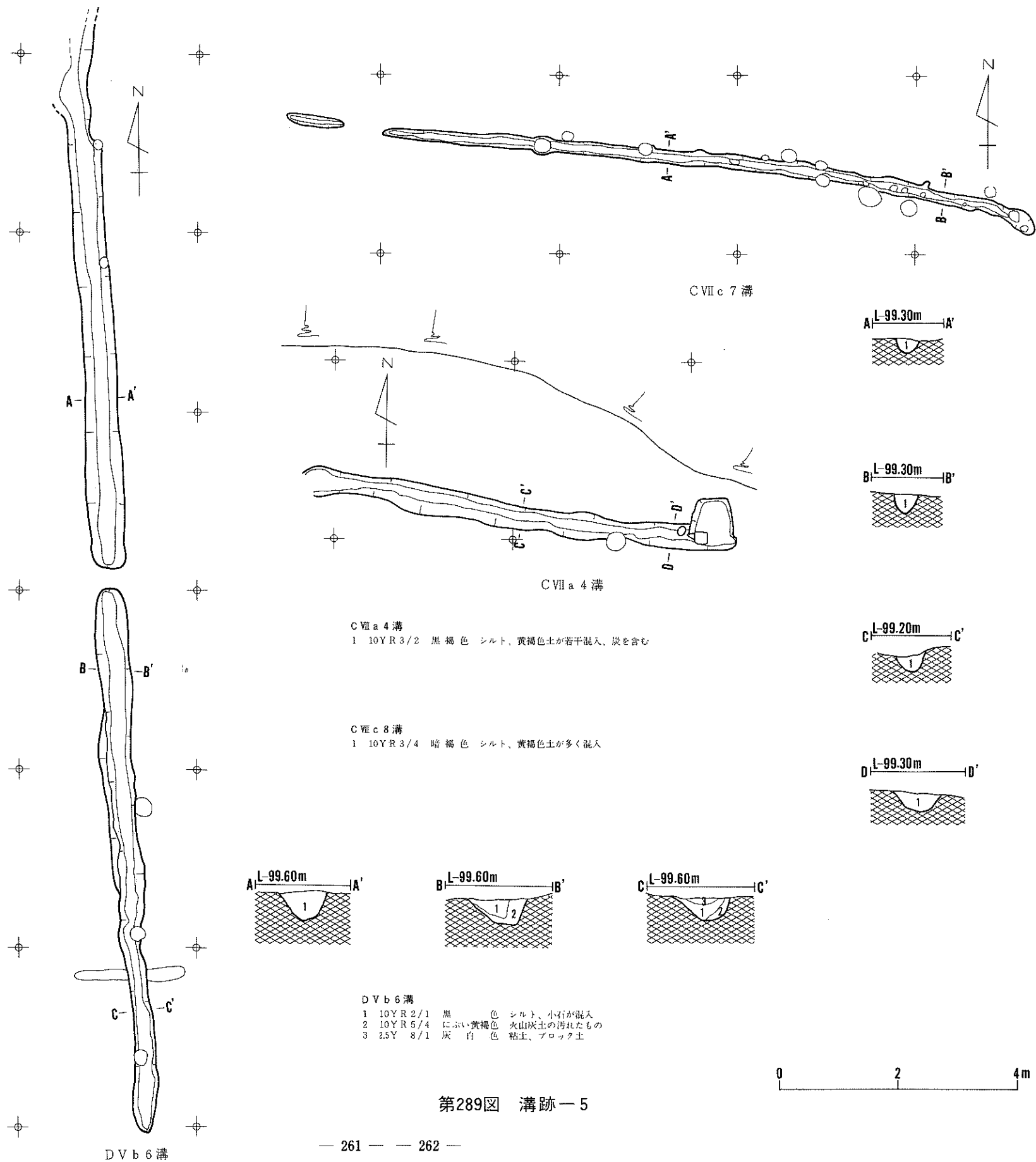
(18) DVd5 溝跡 (第287図、写真図版3)

西辺中央やや南のグリッドDVd5を西端にし南へ約23mのグリッドDVic2まで延び、西端はBVi6溝跡を壊して内堀に落ち、東端はBVIj1溝跡に接続した後CVIa3溝跡の南端と連結する。検出面での幅3m～3.5m、底面の幅1.5m前後、深さ約1mで、底面・法面とも平坦である。全体の平面形をみると、西端から約18mのBVIj1溝跡と接続する部分は僅かに湾曲し、BVIj1溝跡と非常に無理なく連続し、本来は本溝跡とBVIj1溝跡とは同じ溝跡と推定される。さらに、BVIj1溝跡を埋め戻した後も本溝跡が使用されていたことは、検出時の平面観察で確認されており、CVIa3溝跡を掘削後は本溝跡を東に延長させてCVIa3と接続させ、同時に使用されたものと考えられる。埋土を観察すると14層に細分されるが、8層と10層は黒褐色土であるが9層と11層は地山起源の黄褐色土と暗褐色土である。他の溝跡の埋土と比較すると、土性は必ずしも共通しないが、層相の状況は自然埋没の堆積とは考えられないことから、人為的に埋め戻したものであろう。

遺物は出土していない。

(19) DVe5 溝跡 (第287図、写真図版3)

西辺中央南寄りのグリッドDVe5を北端として南へ約10.5m延び、北端はDVd6溝跡に壊されて不明であるが、南端は検出された部分で終る。検出面での幅1.1m～1.3m、底面の幅0.5m～0.7m、深さ0.3m～0.35mで、底面には径0.3m～0.5m、深さ0.1mで楕円形を示す柱穴状土坑が0.6m～0.7m間隔で検出されている。方向はほぼ南北を示し、内堀と並行する。埋



第289図 溝跡一5

土の実測図による記録はないが、砂粒や細礫の混入した暗褐色土である。DV d 5 溝跡より北がまったく不明のため断定できる状況ではないが、底面に柱穴状土坑が検出されていることは、所謂水路的な溝跡ではなく、柵列跡と考えるのが妥当であろう。

遺物は出土していない。

(20) DVI e 7 溝 (第287図、写真図版3)

当館中央のやや南寄りグリッドDVI e 7を西端にして東へ約43mのグリッドDVIII g 1まで延び、東端は外堀へ落ちるが西端は検出された部分で止まる。検出面の幅4m、底面の幅1m、深さ1.8mで、底面・法面とも凹凸もなく平坦である。方向はほぼN-83°-Wを指すが、全体が緩い円弧を描くように湾曲している。他遺構との重複関係は、当溝跡の中央やや西寄りにDVII e 3 井戸跡が掘られている。

埋土内から須恵器甕(第376図173)の破片が1点出土している。

14) 周溝遺構

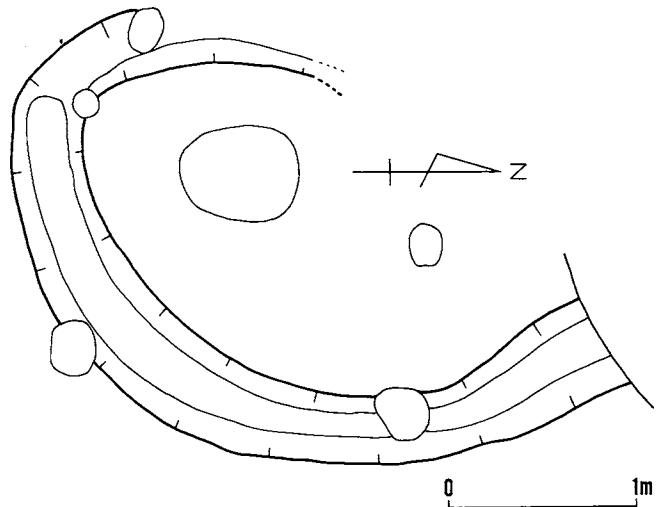
当遺跡で周溝遺構と命名した遺構は、溝跡が円形や楕円形になるように掘られた遺構で、いずれも西館西端部の落ち込み遺構内から検出されている。各遺構相互間で隣接する例はみられるが、重複し合う例はまったくない。なお、土層図の作成は行っていない。

(1) CII f 8 周溝遺構

(第290図、写真図版52)

西端の北西隅部寄りに新旧関係が不明なCII d 8 井戸跡と重複して位置する。北西部の溝が未検出であるが、外周の径推定3.5m×2.5m、内周の径推定2.7m×1.65m、溝の幅0.3m~0.4m、深さ0.1m~0.15mの規模で、平面形は楕円形を示すと推定される。溝底にはほとんど凹凸がなく、

工具痕の形跡も残っていない。土層図は作成されていないが、落ち込み遺構の整地層を除去した面で検出されており、整地層より古い時期の遺構である。



第290図 (1)CII f 8 周溝遺構

遺物は出土していない。

(2) C II g 7 周溝遺構 (第291図、写真図版52)

C II f 8 周溝遺構の5m位南西に寄った西端沿いに新旧関係が不明なC II g 6 土坑とC II g 8 土坑と重複して位置する。東側の溝を未検出のため定かではないが、南西―北東の外周径約3.5m、同内周の径約2.4m、溝の幅0.3m～0.4m、深さ約0.1mの規模で、楕円形か凸辺隅丸の方形気味を示すと推定される。溝底には凹凸もなく、工具痕の痕跡も残っていない。埋土は土層図が作成されていないため明確でないが、整地層を除去後に落ち込み遺構の底面から検出されている。よって整地層より古い遺構である。

遺物の出土はない。

(3) C II h 7 周溝遺構 (第292図)

C II g 7 周溝遺構の南1mに当遺構より新しいC II i 6 土坑と重複して、円弧を描く北側の一部が検出されたが、他の部分は検出されなかった。円弧の一部から推定される規模は、外周径約3.5m、溝の幅約0.2m～0.4m、深さ約5cmである。平面形は明確ではないが円形か楕円形を示すと推定される。溝底には凹凸がなく、ほぼ平坦である。工具痕は残存しない。落ち込み遺構の整地層を除去した落ち込み遺構の底面からの検出であることから、落ち込み遺構の整地層よりは古い遺構である。

出土遺物はない。

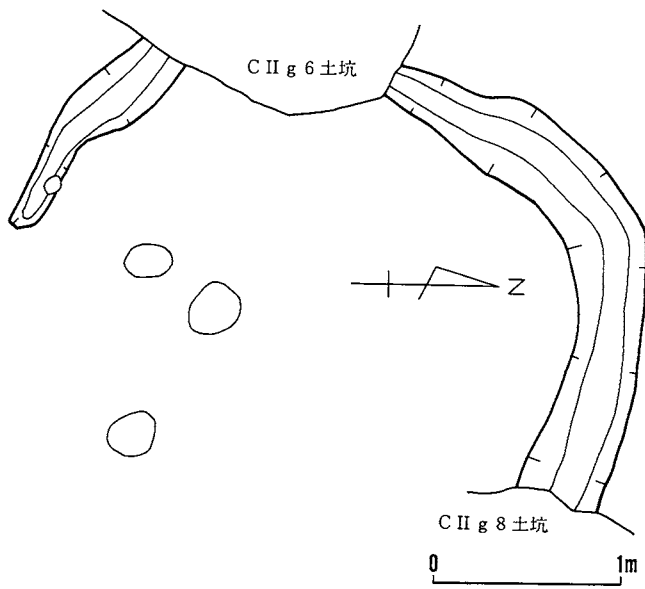
(4) C II h 8 周溝遺構 (第293図、写真図版52)

C II h 7 周溝遺構の東方0.5mに他遺構と重複することなく単独で検出された。北東部の外周が一部未検出であるが、外周の径約3m×2.8m、内周の径2.3m×2.1m、溝の幅0.4m～0.5m、深さ約0.05mの規模で、平面形は僅かに歪んだ円形である。溝底は凹凸もなく平坦である。工具痕の形跡も残っていない。埋土は定かでないが、落ち込み遺構の整地層を除去した底面で検出されていることから、整地層よりは古い遺構である。

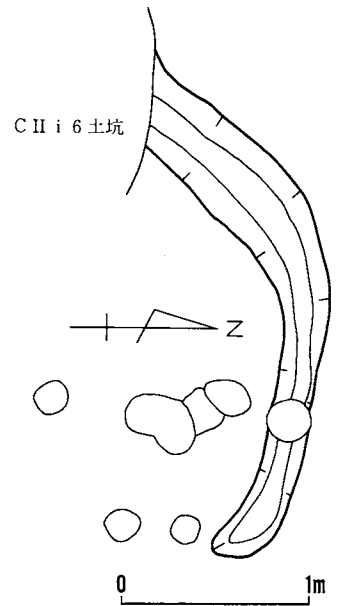
遺物は出土していない。

(5) C II h 10 周溝遺構 (第294図、写真図版52)

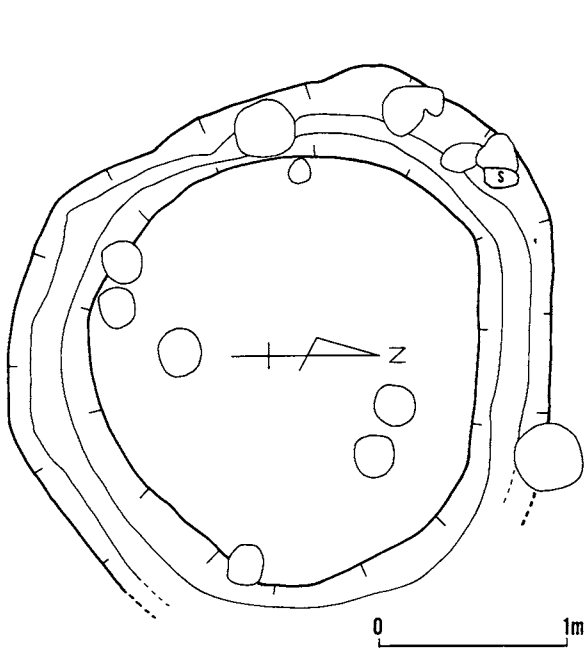
C II h 8 周溝遺構の約8m東方に他遺構との重複もなくC III h 1 周溝遺構と隣接して位置する。西・南・東方の外周が未検出のため、やや歪んだ円形の高まりとして検出された。外周の径推定3.2m×3.1m、内周の径1.8m×1.7m、溝の幅0.75m、深さ0.05m位の規模で、平面形



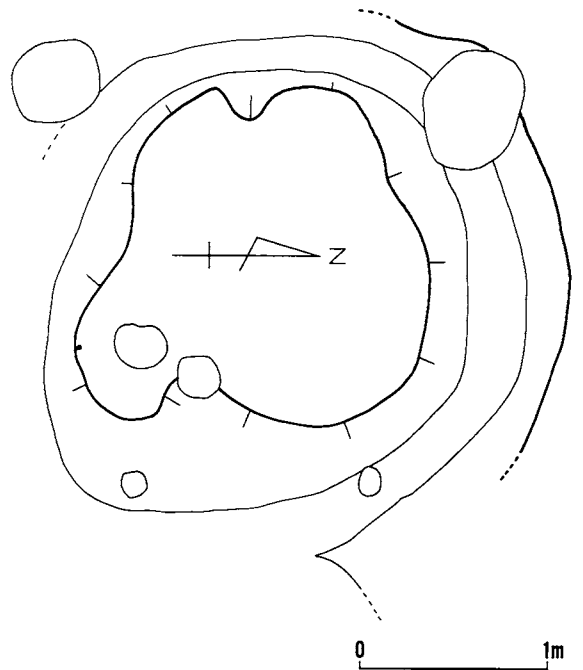
第291图 (2) C II g 7 周溝遺構



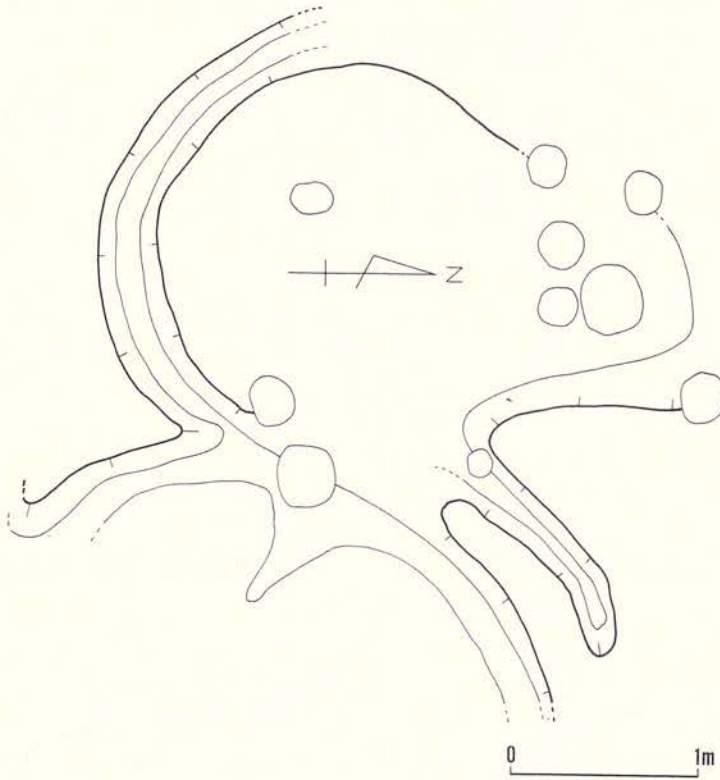
第292图 (3) C II h 7 周溝遺構



第293图 (4) C II h 8 周溝遺構



第294图 (5) C II h 10 周溝遺構



第295図 (6) C II i 8 周溝遺構

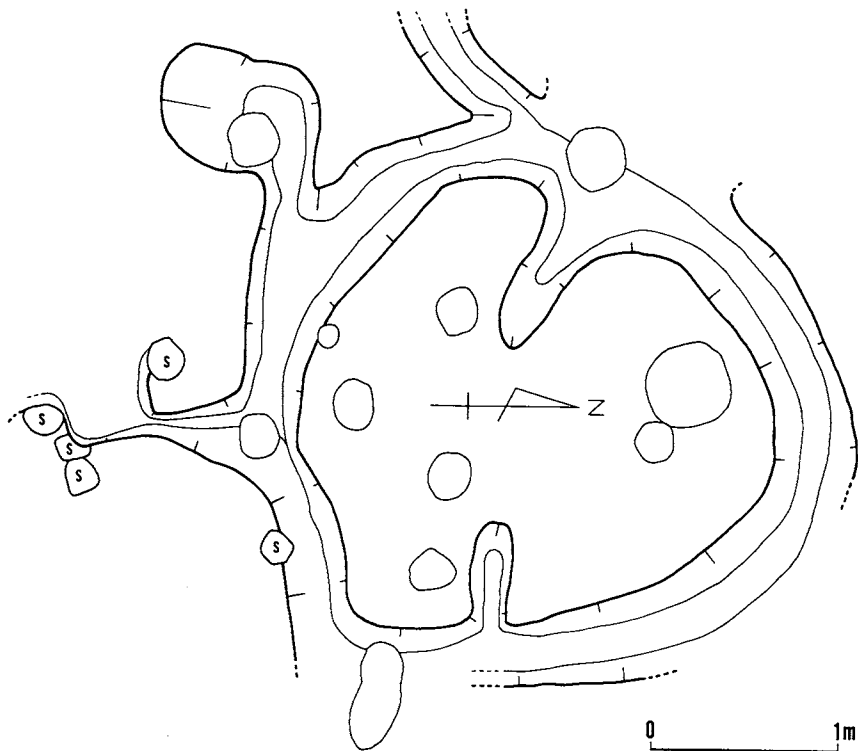
は円形か楕円形を示すものであろう。底面はまったく凹凸がなく、工具痕も残っていない。埋土は不明であるが落ち込み遺構の整地層を除去した底面から検出されていることから、落ち込み遺構よりは古い遺構である。

遺物の出土はない。

(6) C II i 8 周溝遺構 (第295図、写真図版52)

C II h 8 周溝遺構の南東7mにC II i 9 周溝遺構と東側が隣接して位置する。北西側と北側が未検出のため全容が不明であるが、外周の径約2.5m×2.5m、内周の径約2m×1.8m、溝の幅0.3m、深さ0.1m前後の規模をもつ。平面形はやや歪みをもつがほぼ円形を示し、底面は平坦で工具痕も残存しない。埋土は実測図が作成されなかったため明確でないが、落ち込み遺構の整地層を除去した底面から検出されていることから、整地層より古い遺構である。

遺物は出土していない。



第296図 (7)C II i 9 周溝遺構

(7) C II i 9 周溝遺構 (第296図、写真図版52)

C II i 8 周溝遺構の東側に隣接するが他遺構との重複もなく単独で位置する。北東側と東側の一部が未検出であるが、外周の径約3.4m×3.3m、内周の径約2.5m×2.3m、溝の幅約0.4m、深さ0.05m～0.1mの規模をもつ。平面形はやや歪んだ円形を示し、底面は平坦である。落ち込み遺構の整地層を除去した底面から検出されていることから、整地層よりは古い遺構である。

遺物として埋土内からロクロ成形された土師器坏3点、同甕1点の実測不能な小破片が出土している。坏は非内面黒色処理のものである。

(8) C II J 7 周溝遺構 (第297図、写真図版53)

C II h 8 周溝遺構の南4mに当遺構より古いC II i 7 土坑と重複して検出された。東側の一部のみの検出であるため全容は不明である。規模は明確でないが外周の径が3.5m位の円形と推定され、溝の幅0.5m、深さ0.15mである。底面は凹凸もなく平坦である。埋土は不明であるが、落ち込み遺構の整地層を除去した底面からの検出であることから、整地層よりは古い遺構である。

遺物は出土していない。

(9) C III h 1 周溝遺構

(第298図、写真図版53)

C II h 9 周溝遺構の東側に隣接して位置し、他遺構と重複することなく単独で検出された。北側が未検出のため定かでないが、外周の径約2.9m、内周の径約2.3m、溝の幅0.3m~0.4m、深さ0.05m~0.1mの規模をもち、平面形は円形を示すと推定される。底面は平坦で、工具痕の形跡も残っていない。埋土は定かでないが、落ち込み遺構の整地層を除去した面で検出されたことから、整地層よりは古い遺構である。

出土遺物はない。

(10) C III h 2 周溝遺構

(第299図、写真図版53)

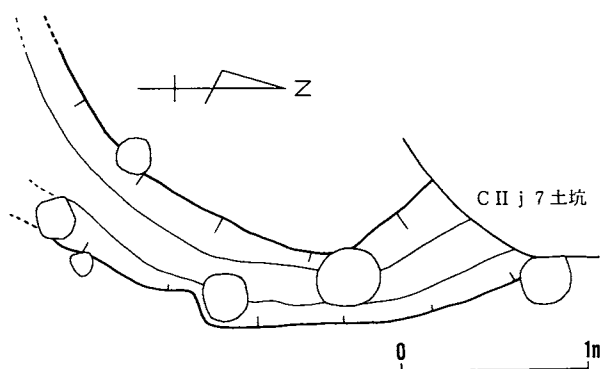
C III h 1 周溝遺構の東側に隣接して位置し、他遺構と重複することなく単独で検出された。外周の径3m×2.8m、内周の径2.3m×1.4m、溝の幅0.3m~0.65m、深さ0.05m~0.1mの規模をもち、平面形は若干歪みをもつがほぼ円形である。底面は凹凸がなく平坦で、工具痕も残っていない。埋土は明確でないが、落ち込み遺構の整地層を除去した底面からの検出であることから、整地層よりは古い遺構である。

遺物は出土していない。

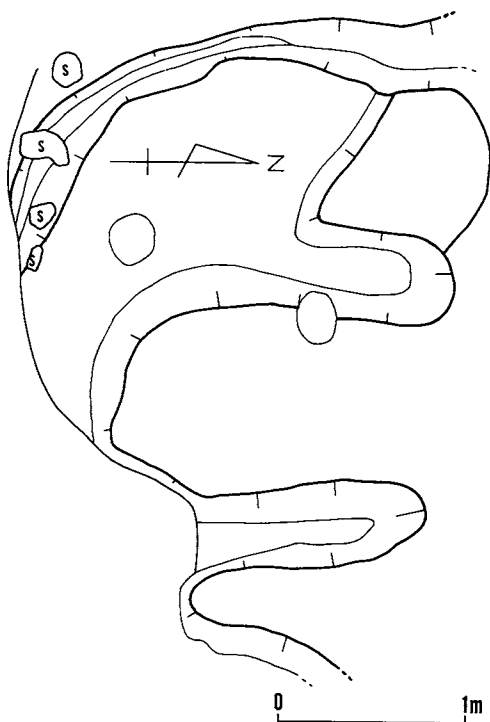
(11) C III h 3 周溝遺構

(第300図、写真図版53)

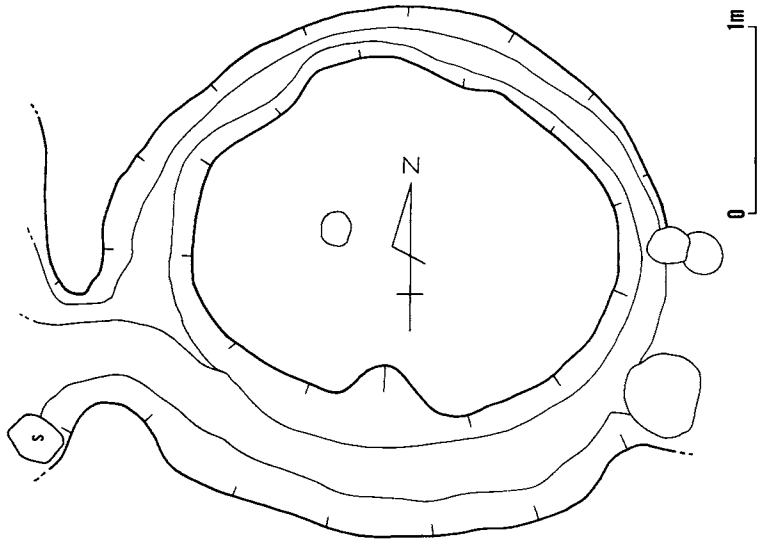
C III h 2 周溝遺構の東側に隣接して位置し、他遺構と重複することなく単独で検出された。



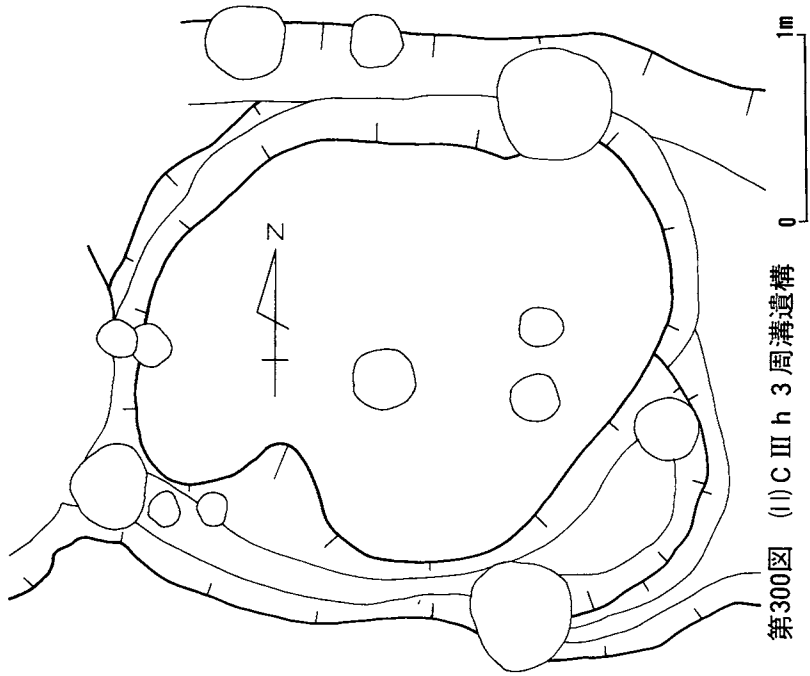
第297図 (8)C II j 7 周溝遺構



第298図 (9)C III h 1 周溝遺構



第299図 (10) C III h 2 周溝遺構



第300図 (11) C III h 3 周溝遺構

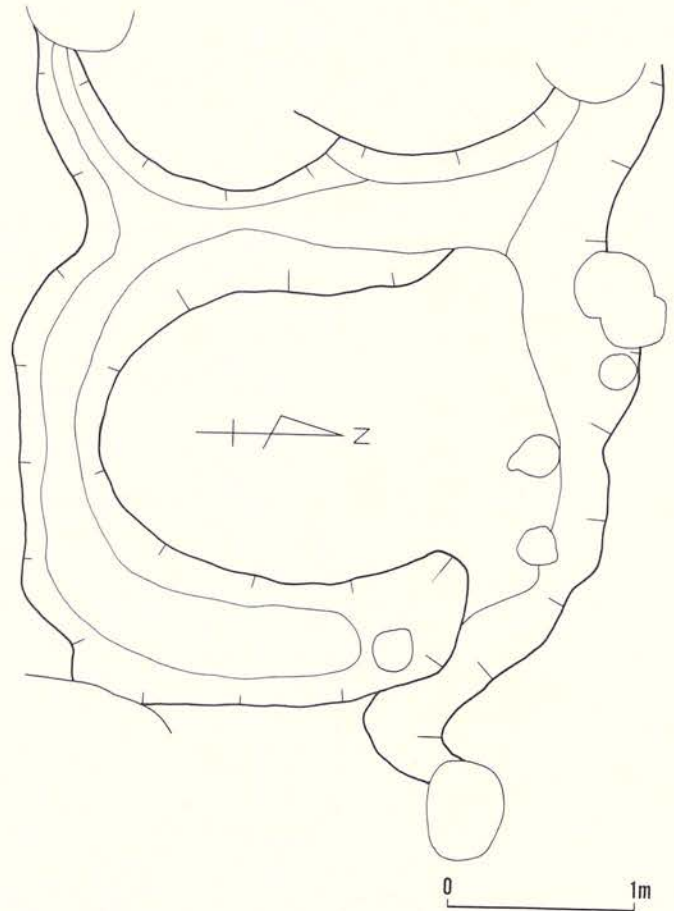
外周の径3.2m×3m、内周の径2.8m×2.25m、溝の幅0.3m～0.4m、深さ0.15mの規模をもち、平面形は若干歪みをもつ円形である。底面は平坦で、工具痕も残っていない。埋土は不明であるが、落ち込み遺構の整地層を除去した底面からの検出であることから、整地層より古い遺構である。

遺物の出土はない。

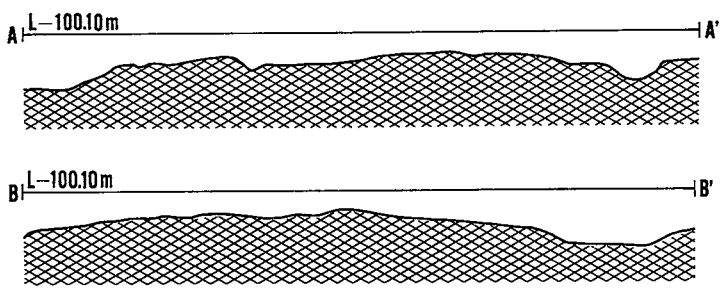
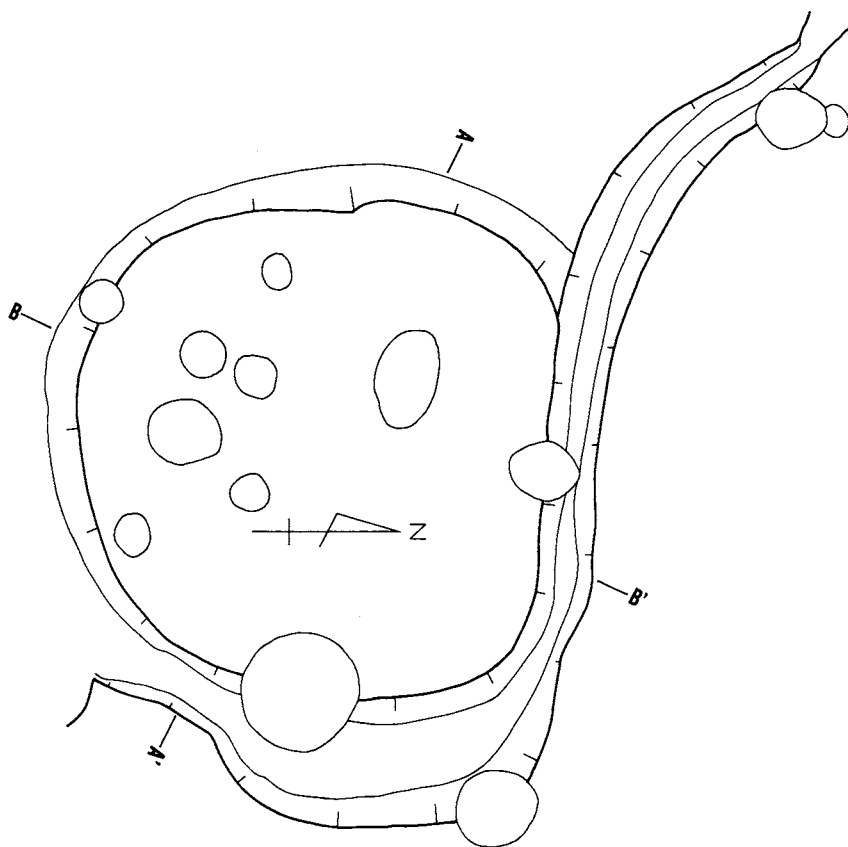
(12) C III h 4 周溝遺構 (第301図、写真図版53)

C III h 3 周溝遺構の東側に隣接して位置し、他遺構と重複することなく単独で検出された。北側が落ち込み遺構の北壁と共用する可能性がある。外周の径3.1m×2.8m、内周の径2.3m×1.5m、溝の幅0.4m～0.7m、深さ0.05m～0.1mの規模をもち、平面形は若干歪みをもつ円形を示す。底面は凹凸もなく平坦で、工具痕も残っていない。埋土は定かではないが、落ち込み遺構の整地層を除去した面で検出されたことから、整地層よりは古い遺構である。

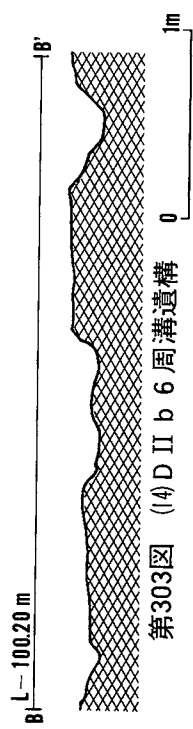
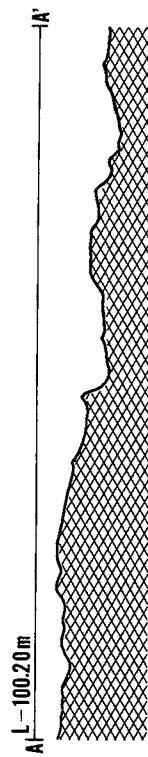
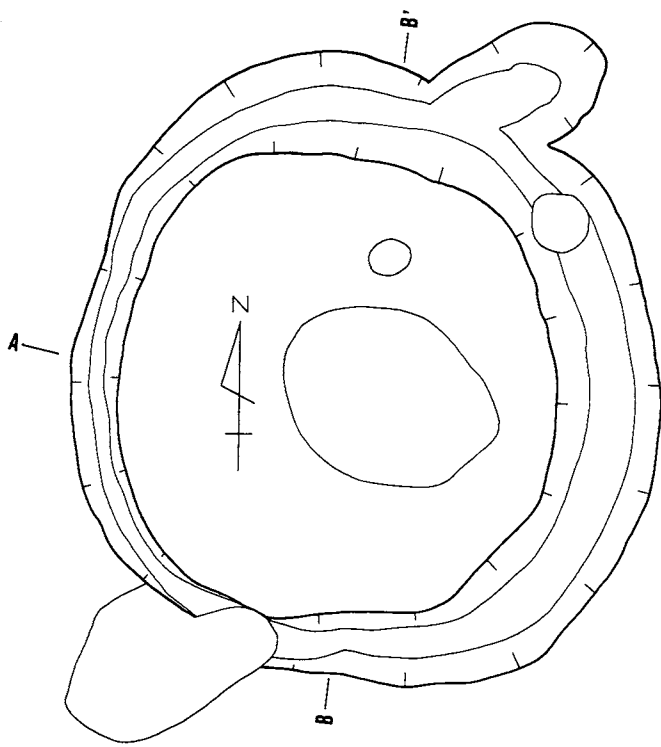
出土遺物はない。



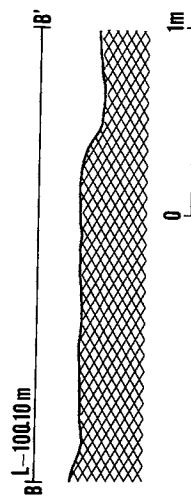
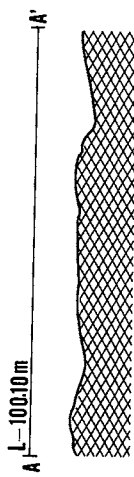
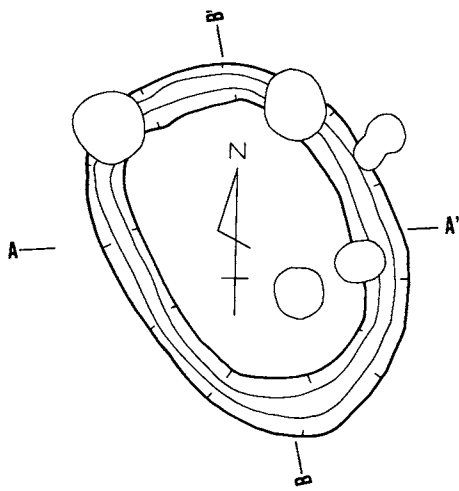
第301図 (12) C III h 4 周溝遺構



第302図 (13) D II a 8周溝遺構 0 1m



第303图 (14) D II b 6 周溝遺構



第304图 (15) D II e 6 周溝遺構

(13) D II a 8 周溝遺構 (第302図、写真図版54)

C II j 7 周溝遺構の南2mにD II b 8 土坑と隣接して位置し、他遺構との重複はない。西側から南側にかけては溝が未検出である。外周の径約4m、内周の径2.6m×2.45m、溝の幅0.3m～0.7m、深さ0.05m～0.1mの規模で、平面形は若干歪みをもつ円形である。底面は平坦である。埋土は不明であるが、落ち込み遺構の整地層を除去した底面の検出であることから、整地層よりは古い遺構である。

遺物は出土していない。

(14) D II b 6 周溝遺構 (第303図、写真図版54)

D II a 8 周溝遺構の南西5mに位置し、中央部のやや東に土坑状の凹みがある。外周の径約3.3m×3.15m、内周の径2.4m×2.35m、溝の幅0.25m～0.55m、深さ0.05m～0.15mの規模をもち、平面形は円形である。中央部の土坑は東西2.5m、南北1.8m、深さ0.11mの規模をもち、平面形は東西に長軸方向をもつ楕円形を示す。底面は凹凸もなく平坦である。溝の埋土は定かでないが、中央部の土坑は暗褐色土の単層である。本遺構は落ち込み遺構の整地層を除去した面での検出であることから、整地層より古い遺構である。なお、周溝遺構と中央部土坑との共伴関係は明らかでない。

遺物の出土はない。

(15) D II e 6 周溝遺構 (第304図、写真図版54)

D II b 6 周溝遺構の南16mに位置し、他遺構との重複もなく単独で検出された。外周の径2.1m×1.5m、内周の径1.55m×1.05m、溝の幅0.25m、深さ0.05m～0.057mの規模をもち、平面形は北西—南東方向に長軸方向をもつ楕円形を示す。底面は凹凸もなく平坦で、工具痕もみられない。落ち込み遺構の整地層を除去した面で検出されていることから、整地層よりは古い遺構である。

出土遺物はない。

(16) D II e 6 周溝遺構 (第305図、写真図版54)

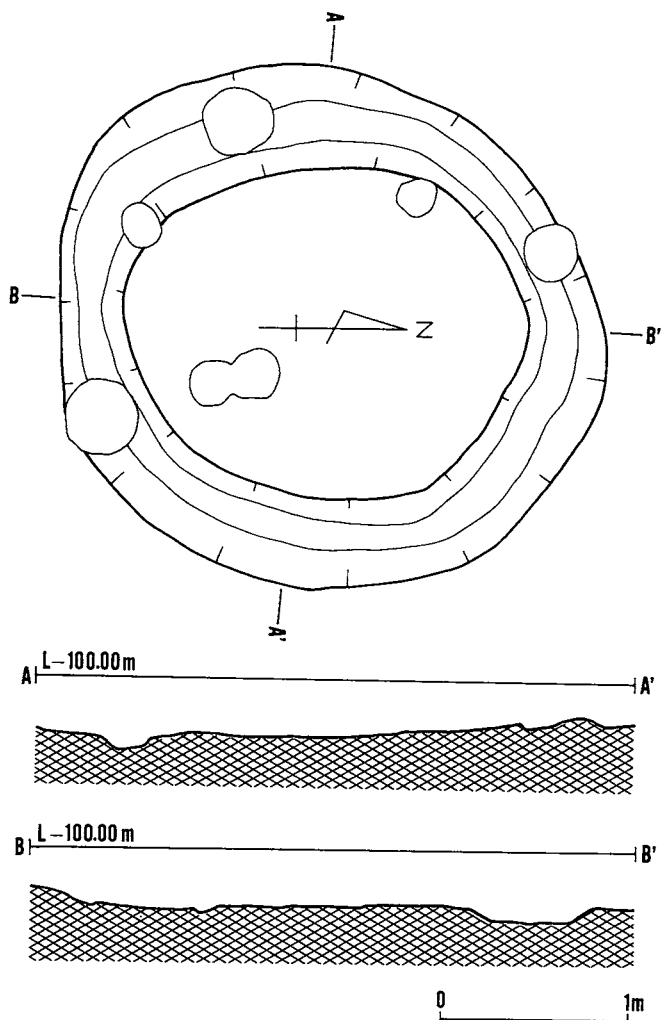
D II e 6 周溝遺構の南西1mに位置し、他遺構との重複もなく単独で検出された。外周の径が3m×2.7m、内周の径2m×1.8m、溝の幅0.35m～0.5m、深さ0.05m～0.15mの規模をもち、平面形は円形である。底面は凹凸もなく平坦で、工具痕も残っていない。落ち込み遺構の整地層を除去した面での検出であることから、整地層よりは古い遺構である。

遺物は出土していない。

(17) D II g 6周溝遺構 (第306図、写真図版54)

D II f 6周溝遺構の南0.7mに位置し、南側でD II h 6周溝遺構と隣接・重複して検出された。外周の径3.5m×3.1m、内周の径2.35m×2.3m、溝の幅0.3m×0.55m、深さ0.05m～0.1mの規模をもち、平面形は円形である。底面は凹凸もなく平坦で、工具痕も残っていない。埋土は定かではないが、落ち込み遺構の整地層を除去した底面での検出であることから、整地層より古い遺構である。

出土遺物はない。



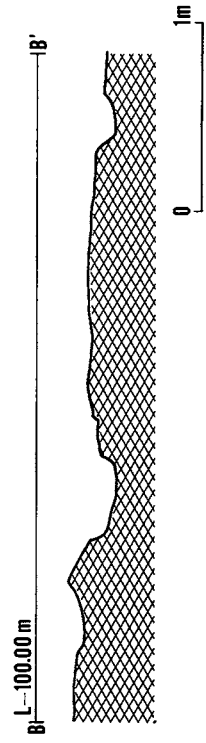
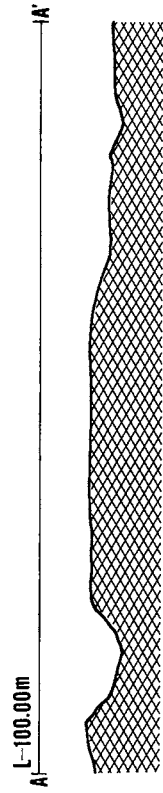
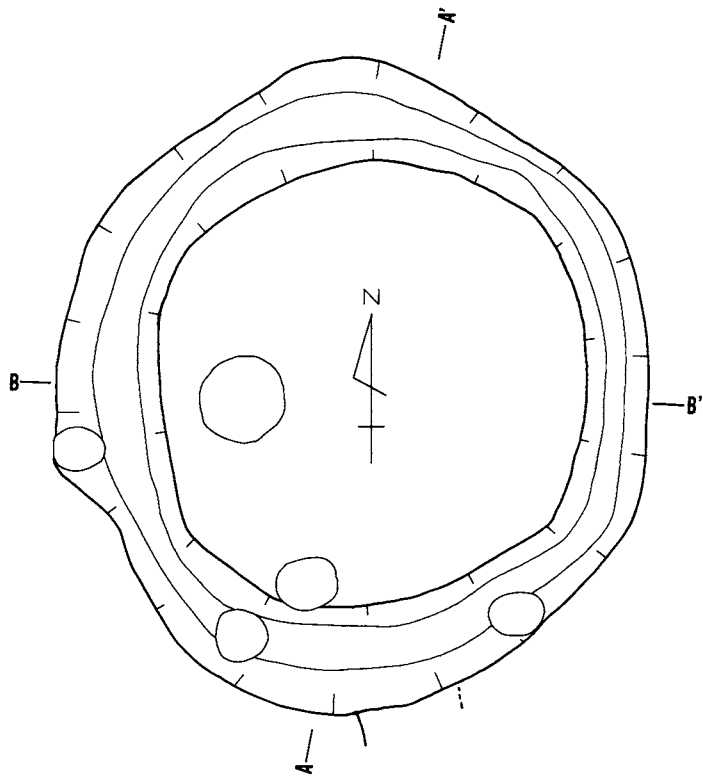
第305図 (16) D II f 6周溝遺構

(18) D III h 6周溝遺構

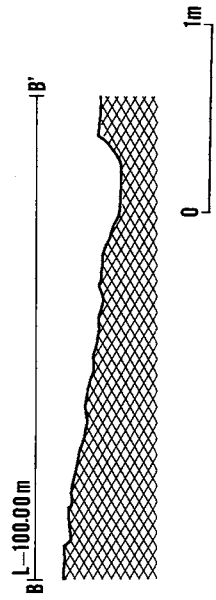
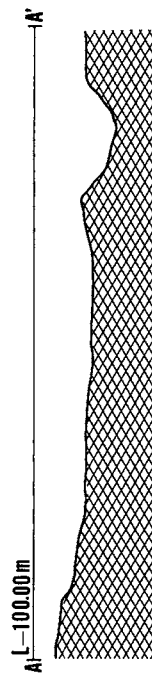
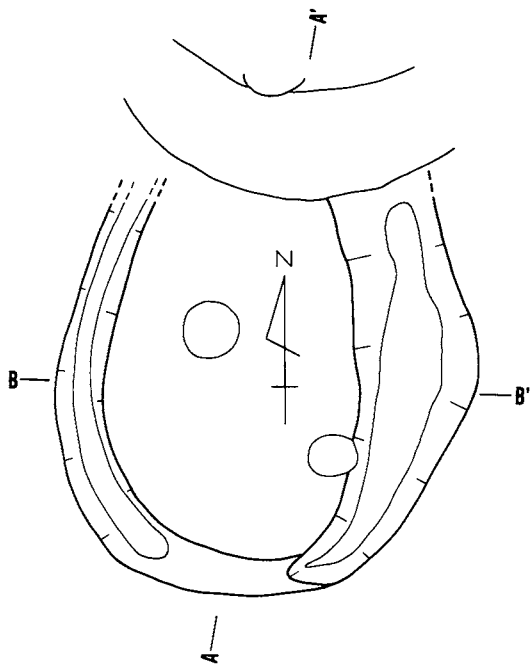
(第307図、写真図版54)

D III g 6周溝遺構の南側に隣接・重複して位置するが、新旧関係は不明である。重複部のD III g 6周溝遺構にまたがる部分が未検出のため、全容は不明である。外周の径約2.5m×2.15m、内周の径1.9m×1.35m、溝の幅0.2m～0.65m、深さ0.05m～0.1mの規模をもち、平面形は長軸方向を南北にもつ楕円形を示す。底面は凹凸もなく平坦で、工具痕も残っていない。落ち込み遺構の整地層を除去した底面での検出であることから、整地層より古い遺構である。

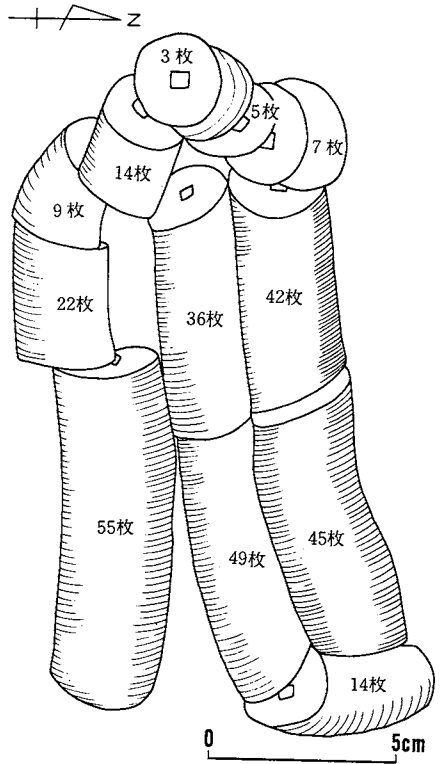
遺物の出土はない。



第306图 (17) D II g 6 周溝遺構



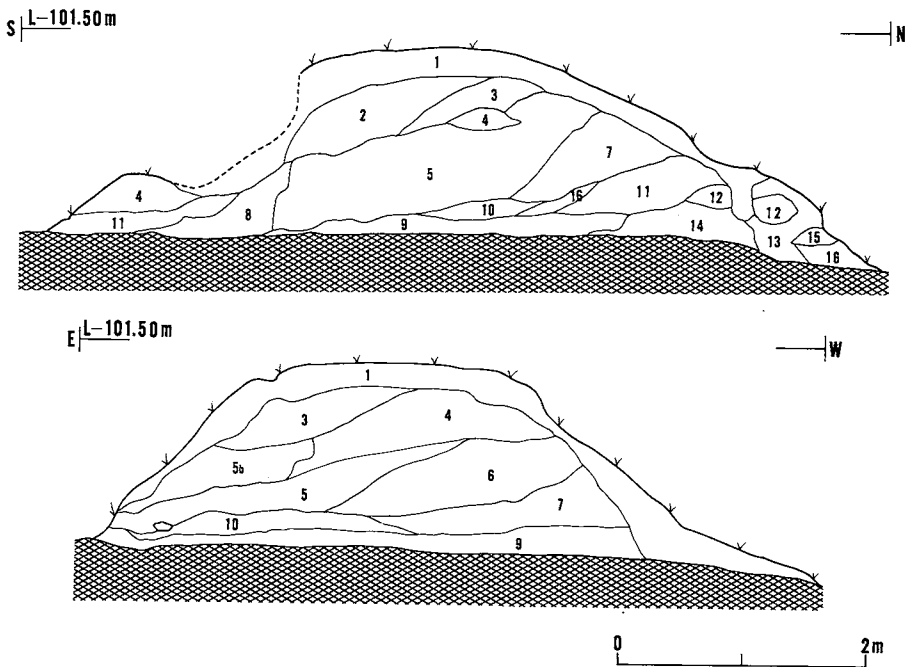
第307图 (18) D II h 6 周溝遺構



B II i 9 塚

- | | | | |
|----|--------------|------|-----------------------------|
| 1 | 10Y R 2/3 | 黒褐色 | シルト、木根が多い |
| 2 | 10Y R 2/1 | 黒色 | シルト、小さい木根が入る |
| 3 | 10Y R 3/3 | 暗褐色 | シルト、5に木根が入り、やわらかくなったもの |
| 4 | 7.5Y R 5/6 | 明褐色 | 火山灰土と暗褐色土との混土 |
| 5 | 10Y R 4/2 | 灰黄褐色 | シルトが水平にうすく10枚程重なったもの |
| 6 | 7.5Y R 5/6 | 明褐色 | 褐色土がブロック状に混入する。5bは4との中間層 |
| 7 | 7.5Y R 1.7/1 | 黒色 | シルト |
| 8 | 10Y R 3/2 | 黒褐色 | シルト、褐色土が若干混入 |
| 9 | 10Y R 3/2 | 黒褐色 | シルト、8よりかたい |
| 10 | 10Y R 2/2 | 黒褐色 | シルト、7から11への漸移層 |
| 11 | 10Y R 3/2 | 黒褐色 | シルト、浅黄色粘土や明黄褐色火山灰土がブロック状に混入 |
| 12 | 5 Y 8/3 | 淡黄色 | 粘土のブロック |
| 13 | 10Y R 3/2 | 黒褐色 | シルト、淡黄色粘土が小ブロックで混入 |
| 14 | 10Y R 3/3 | 暗褐色 | シルト |
| 15 | 10Y R 3/2 | 黒褐色 | シルト、黒色土がブロックで混入 |
| 16 | 10Y R 3/4 | 暗褐色 | シルト、黄褐色土が若干混入 |

第308図 蓄銭遺構



第309図 B II j 9 塚

15) 蓄銭遺構 (第308・352～356図、写真図版55・117～123)

東館の南側中央やや西寄りのグリッドD VII h 3の水田面より0.5mほど高い路面をもつ現用農道下の中世に属する整地層中から、貨幣が一箇所から462枚まとまって出土している。粗掘り中の出土であったため発掘中に一部が動いてしまったことから、原位置を残す部分を記録した。

出土状況は、整地層を径0.2m位の円形に掘り窪めた後、その窪みに緡銭を東西方向に3本並べて置き、その上にさらに2本積み重ねたものと推定され、発掘中に動いたのは上の段の二緡と考えられる。掘り窪めた内部には特別な施設や布や皮といった敷物があったという痕跡はまったく確認できなかった。貨幣は、大半は横並びで密着していたが、両端は列に若干乱れがあった。枚数をみると、北側が102枚、中央が99枚、南側が100枚と一緡略100枚の基準に一致していることから、発掘中に動いた160枚が二緡に40枚不足することから、調査中に不手際があった可能性がある。貨幣を取り上げて観察すると、穿に詰まる土に径2mm位の円孔が貫通していたことから、緡紐の痕跡と考えられる。

出土した462枚にはもっとも古い開元通寶(621年)から永樂通寶(1408年)まで38種の銭種の他銭文の不明なもの2枚が混在する。出土枚数の多いのは元豊通寶(1078年)48枚、開元通寶44枚、洪武通寶(1368年)41枚、皇宋通寶(1039年)40枚、元祐通寶(1086年)39枚、永樂通寶39枚、熙寧元寶(1068年)37枚、政和通寶(1111年)25枚などで、この8種類で313枚の67.75%を占めている。その他は8種類が1枚の出土、3種類が2枚、3種類が3枚、1種類が4枚、5、6枚出土が各3種類、7、8枚出土が各1種類、9枚出土が1種類、10枚出土が2種類、12枚出土が1種類、15枚出土が1種類の構成である。

当貨幣がいつごろ埋められたかは難しい問題であるが、中国明の時代の西歴1408年に鑄造された永樂通寶がもっとも新しい銭種であることから、15世紀前半以降でさらに当城館が火災によって焼亡し整地された後に埋められたことは明らかであることから、15世紀後半～16世紀初期頃の遺構と考えられる。

16) B II j 9 塚 (第309図、写真図版47)

西館の北西隅部グリッドB II j 9に落ち込み遺構や多くの土坑の上に築成された塚状の高まりであるが、地元関係者の話しには二説があり一致しない。一つは、昔からここに赤松の大木(調査時には現存しない)と塚があったという説であり、もう一つは、昭和35年頃に畑から水田に変える土木工事の際に、余った残土を塚状に積み上げたという話である。後者については東館の北東隅部と南東隅部に同様な残土を盛り上げた塚状の高まりがあり、当初の考え方としては後者の説に傾いていたが、とにかく塚として登録し、遺構として発掘調査することとし

た。

基底部の規模は北東—南西6.6m、北西—南東5.4mで、平面形は北東—南西に長軸方向をもつ凸辺の隅丸長方形を示す。高まりの高さは約1.5mで、全体が截頭円錐台形を示し、南側法面には大きな乱掘坑がみられた。地元関係者の話しでは最近土取り場として使われ、以前からみれば小型になったということであるから、この乱掘坑はこの土取りの結果と理解された。断ち割りの結果、築成土は16層に細分された。大きく分けると黒色土系の1・2・7～11・13・15層、暗褐色土系の3・14・16層、地山起源の黄褐色土系の4～6・12層になり、これらは概ね平面的な堆積状況を示し、一部に北側から南に向って積み上げた状況が窺われるとともに、基底部が掘り込み地業された形跡はない。調査中に築成土中や基底部に主体部と言えるような施設が存在したという証拠はまったく確認されていない。以上から、開田時の残土を塚状に積み上げた擬似遺構である可能性の強いことが判明した。

築成土内から瀬戸・美濃系灰釉陶器1点(63)、瓦質陶器1点(第315図1)、伊万里系染付磁器1点(第322図1)、須恵質陶器1点(第314図1)が出土している。瀬戸・美濃系灰釉陶は口縁部～体部を残す平碗の実測不能な小破片である。瓦質陶器は雷文帯をもつ火鉢の体部破片である。染付磁器は細頸の花瓶である。須恵質陶器は播鉢であるが、胎土が粗い砂質であることや成形技法から珠州窯15世紀頃の製品と考えられる。瀬戸・美濃系の平碗は15世紀後半、染付磁器は17世紀頃の製品と推定される。

2. 遺物

当遺跡から出土した中世に属する遺物には陶磁器類512点、石製品類150点、貨幣を含む金属製品648点、漆膜を含む木製品64点、炭化穀類49点、その他22点がある。ほとんどのものは破片として出土し、完形品は非常に少ない。以下に種類ごとに分類しその概要を記すことにする。なお、遺構内から出土した遺物については、遺構の項で大雑把に記述したが、本項では遺構内外出土のもの一切を含めて扱うこととする。

1) 陶磁器

(1) 国内産陶磁器

国産の陶磁器には瀬戸・美濃系灰釉陶器64点(35.16%)、同系鉄釉陶器26点(26.36%)、唐津系陶器6点(3.29%)、常滑・知多等東海系陶器39点(21.42%)、信楽系陶器3点(1.64%)、産地不明陶器4点(2.19%)、瓦質陶器2点(1.09%)、須恵質陶器2点(1.09%)、土器(カワラケ)14点(7.69%)が含まれ、陶磁器類出土総数の31.25%を国産の陶磁器が占める。これらは

いずれも破片での出土点数であるため、そのまま個体数を表すものではないことから、識別できるものについては個別に個体数を推定することにする。

〈瀬戸・美濃系灰釉陶器〉

破片数で64点であるが、この中には平碗9点(14.06%)、折縁深皿3点(4.68%)、小皿28点(43.75%)、下ろし皿5点(7.81%)、香炉3点(4.67%)、壺4点(6.25%)、花瓶2点(3.12%)、瓶子10点(15.62%)が含まれる。

平碗 (第2表 第310図、写真図版71)

9点には口縁部4点(2・6・63・64)、底部1点(3)、体部下位～高台脇2点(1・4)、体部2点(5・10)が含まれ、同一個体の破片はない。これらの内8点は西館から出土し、東館からの出土は1点のみである。西館の中でもCⅡ・CⅢ・DⅡ・DⅢ区で出土し、特にCⅣ・DⅢ区から合わせて5点の出土である。

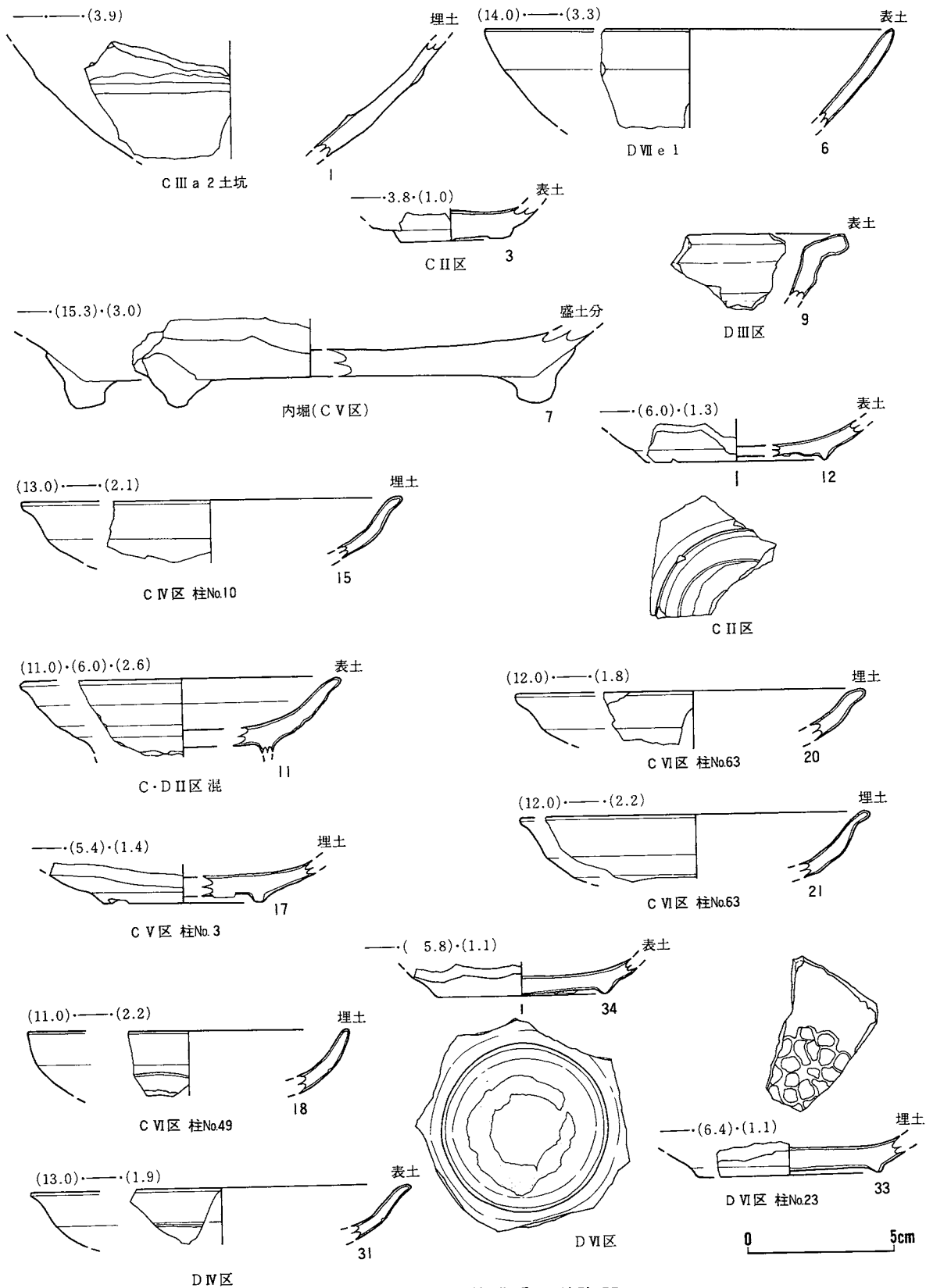
完形の個体は出土していないので定かでないが、体部が直線的に外傾して口縁部が直立気味となり端部が僅か外反(2)するか、そのまま直立(6)する個体と、口縁部が内湾した後端部が括れ前者より強く外反する(63・64)個体の2種類みられる。体部の器厚は前者が3mm、後者が4mm位であるが、前者は端部ほど薄くなり口唇部が丸くなるのに対し、後者は端部の括れで薄くなり口唇部は丸くおさまり全体的に厚い。体部には内外面ともロクロ目を良く残し、高台脇～底部は篋削りにする調整がある。高台部は篋で高さ5mm、径3.7cmに削り出され、畳付けの脇も軽く削り落としている。高台内も篋で1mmほど削り込まれ、底部は低く断面が角形の輪高台状を示す。口縁部径は16cm～17cm位と推測される。釉は内面が全釉であるが、外面は体部下位～底部は露胎である。釉調は貫入の入る緑色～淡黄緑色に発色する半透明のガラス質である。

胎土や器形・釉調・高台から1・2・4～6は15世紀前半頃、3・63・64は15世紀後半頃の製品と考えられる。

皿 (第2表、第310図、写真図版71・72)

28点の中には口縁部11点、体部6点、底部11点が含まれ、これらは西館から9点(11～15・28～31)と東館から19点(16～27・32～38)が出土し、東館出土が圧倒的に多い。西館の場合はCⅡ区の4点出土がもっとも多く他は1・2点の出土である。東館ではCⅥ区から8点、DⅦ区から4点と出土が多く、他は1・2点の出土である。

器形をみると、口縁端部が直線的に外傾するもの(18)と口縁部が外反するもの(11・13・15・16・20・21・26・31・35・36)の2種類あり、後者が圧倒的に多い。前者は底部から直線的に



第310图 瀬戸・美濃系灰釉陶器一 I

外傾した体部が、中位で軽く内湾し端部が直線的に僅か外傾する。口縁部径は11cm位と推測される。後者は底部から内湾気味に立ち上がった体部が口縁端で丸く小さく外反する。口縁部径の推測される5点の口縁部径をみると11cm 1点(11)、12cm 2点(20・21)、13cm 2点(15・31)で、平均すると12.2cmとなる。底部径は5点が推測可能であるが、中に5.6cm 2点(17・34)、5.8cm 1点(12)、6cm 1点(11)、6.4cm 1点(33)が含まれ、平均すると5.88cmとなる。器厚は3mm～7mmとバラツキが大きいものの、後者の器形は3mm～5mmが主体を占め、全体に薄作りである。また、後者には体部上位に稜をもたせて薄くし、端部を外反させるものが大半を占めることから、この形がこの種の基本形態と考えられる。底部内面はいずれも平坦で、1点にはカタバミ文らしい型押しによる印花文を付すが、他はいずれも無文である。外面には篋の削り出しによる2mm～3mmの断面三角形で低い輪高台が付き、体部は高台脇から外傾する。外底は若干盛り上がる器形が主体であるが、中央部を削って一段低くする例が1点(12)ある。また、底面には例外なく輪トチンの跡が付着し、積ね焼きされた状況を示す。

釉は、前者が内面は全面施釉があるが、外面は体部下位に露胎部分を残すことから、体部下位～底部を露胎にする可能性がある。後者は内外面とも全面施釉される。色調には緑色～淡い褐色までバラツキがあるものの、いずれも粗い貫入が入る半透明なガラス質で、施釉に厚薄がみられるもののドブ潰けによる施釉と推定される。

器形や技法から前者(18)は大窯II期、そして後者は大窯I期の特徴を示すことから、前者は16世紀中期、後者は15世紀末～16世紀前期の製品と考えられる。

折縁深皿 (第2表、第310図、写真図版71)

3点の中に口縁部1点(8)、体部1点(9)、底部1点(7)が含まれるが、いずれも小破片のため全体を知ることができない。8・9は西館のDII区・DIII区の出土で、釉調や胎土・器形から同個体である可能性が高い。7は内堀一1の北側新期盛り土内からの出土であることから、原位置は定かでない。

8・9は体部にロクロによる数段の隆起帯を巡らし、端部をくの字状に強く外方に折り、口唇部は丸味をもっておさまる。7はロクロで成形の後底部を切り離しさらに篋による回転再調整され、底部と体部の境に粘土塊を貼り付けて足を作り出す。内面には刷毛塗りによると推定される釉の痕跡が観察されるものの、外面は露胎である。口縁部径は小破片のため計測不能であるが、底径は15.3cm位と推定される。

8・9の釉調は貫入の入る半透明なガラス質で、色調は緑色で厚い所と薄い所がある。7の場合は明らかでないが、内面の体部下半は刷毛塗りで上位は潰けがけと推定され、外面の体部下位～底部は露胎であろう。

器形や胎土・釉調からみて、いずれも15世紀前半頃の製品と推定される。

下ろし皿 (第2表、第311図、写真図版73)

5点には口縁部3点(42~44)、底部1点(41)、口縁部~体部1点(40)を含むが、40と42は同一個体であることから、4個体の破片があり、これらは西館から3点(40・41・43)、東館から1点(44)、内堀北側埋土1点が出土している。40・42の接合によって全体をほぼ知ることができるが、他は一部を残す小破片である。

40は底部から体部がほぼ直線的に外傾し、端部はほんの僅か外反した後丸味をもって口唇に続く。口唇は平坦であるが内側の端に断面三角形で上面を向く突帯が挽きだされ内面はほぼ直立する。器面には内外ともロクロ目を明瞭に残し、底部は回転糸切り離して再調整はみられない。見込みと体部下位には縦横に棒状工具による並行沈線が乱雑に引かれた下ろし目が付される。口縁部径14.6cm、底部径7.5cm、器高2.9cmの大きさである。釉は口縁部~体部上位は漬けがけされ、内面の体部下位にも僅か飛び散っている。43・44とも40と大同小異であるが、43は体部外面が外傾した後僅かに丸味をもって直立気味に立ち上がり、端部が外反する器形を示す。口唇は43・44とも平坦で突帯はない。施釉の状況は43が口唇と内面の端部、44は口唇と内外面の端部は漬けがけによって施し、41の場合は見込みにも施釉される。

釉調は粗い貫入の入る半透明のガラス質で、色調には緑色から淡褐色までバラツキがある。

香炉 (第2表、第311図、写真図版73)

3点とも口縁部を残す破片であるが、46・47は口頸部、45は口縁部~体部下位を残存する。45・47は西館からの出土で、46は東館の出土である。形状をある程度推定し得る45についてみると、頸部はほぼ直立し、端部が外方に強く屈曲し、口唇部は平らになでられる。頸部の下位は丸味をもって傾斜して鋭角に角張る肩部に続く。肩部から下位は次第に内湾して丸味をもちながら底部に続くが、底部の状況については残存しないため不明である。全面にロクロ目を残し、再調整の痕跡はない。46・47とも45の口頸部の状況とほぼ同様であることから、同じ器形を示すものと考えられる。大きさは、45が口縁部径12cm、肩部径12.2cm、46が口縁部径11.4cm、47は口縁部径9.2cm位と推定される。以上からこれらの3点は袴腰形を示すと考えられる。

釉は内面が頸部まで、外面は体部中位付近までかけられると推定される。釉調は全面に粗い貫入が入る半透明のガラス質で、色調は緑色と褐色気味があり、47には濃色の斑点がある。

器形や技法・釉調・胎土から考えて15世紀前半頃の製品と考えられる。

壺 (第2表、第311図、写真図版72・74)

4点には体部1点(39)、肩部1点(52)、耳1点(51)、蓋1点(50)があり、同1個体の破片はない。西館から3点(39・50・52)、東館から1点(51)が出土している。50は小型合子の蓋でほぼ完形を示す以外は、器形を推定できない小破片である。

50はキノコ笠の形をした蓋で、上面が径4.3cmのほぼ円形を示し一部を欠失する。中央部が僅か凹み周辺部に向って丸味をもって傾斜する。下面の中央に径1.7mmの円柱状の突起がある。成形技法をみると、円柱状の土塊からロクロを使用して鐔状に挽きだした後、回転糸切りによって切り離れたものと考えられる。釉は上面にのみ施され、釉調は粗い貫入の入る半透明のガラス質で、色調は淡い緑色を示す。おそらく合子の蓋で、15世紀前半頃の製品であろう。

39は両面施釉された体部上位の小破片で、内面にロクロ成形時の隆帯が巡る。釉の色調は淡い緑色で、粗い貫入の入る半透明なガラス質である。時期は定かでない。

52は外面に粗い貫入の入る半透明なガラス質の釉がかけられた小型壺の小破片である。51は水注か水滴もしくは合子の耳と考えられるもので、断面丸形で円弧を示す。釉の色調が淡い灰褐色で、非常に強い光沢を放ち、貫入の入る半透明なガラス質である。胎土が非常に緻密な上に濃い灰色を示し焼成が非常に良好である。他の破片に比較して胎土が極端に違うことから、瀬戸・美濃系ではない可能性がある。

器形や技法からみて50・52は15世紀前期の製品と推定されるが、39・51は不明である。

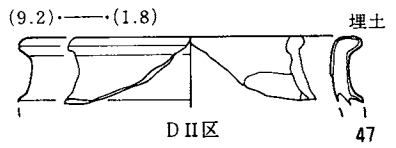
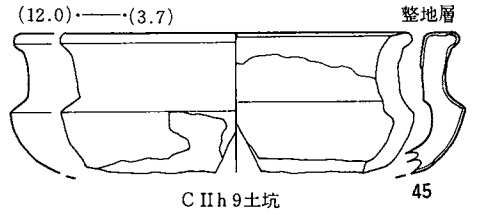
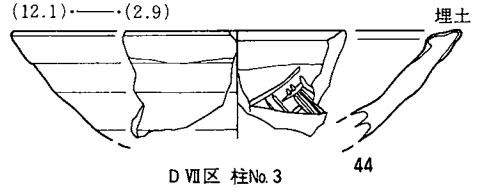
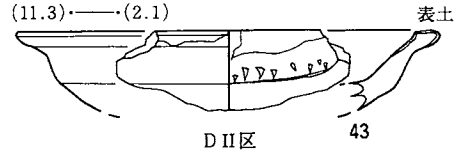
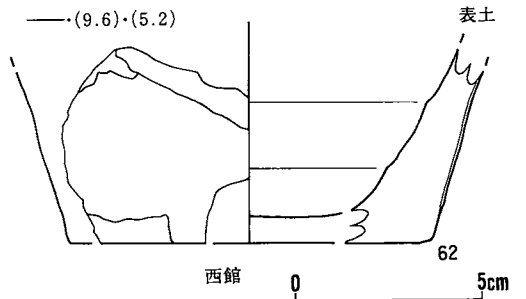
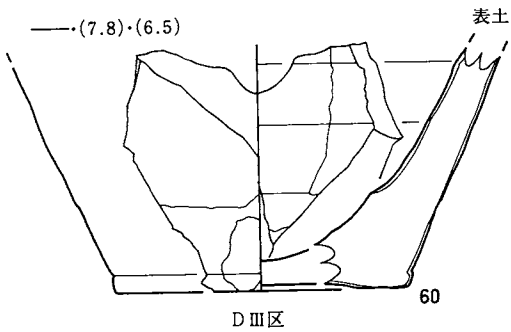
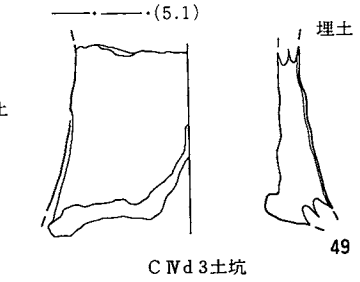
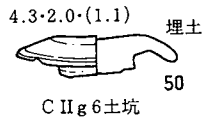
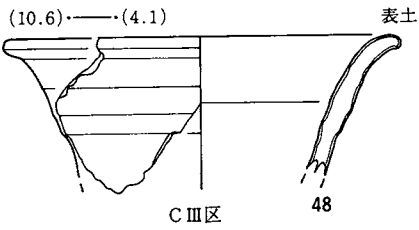
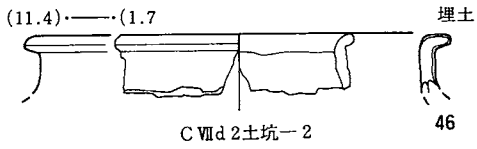
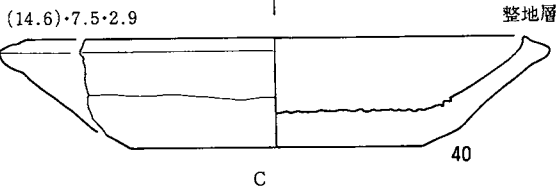
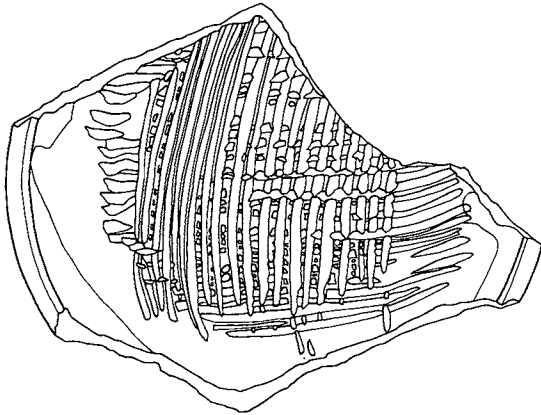
花瓶 (第2表、第311図、写真図版73)

口縁部1点(48)、体部下位1点(49)があり、いずれも西館から出土している。48は尊式花瓶の口縁部で、内外面に粗い貫入が入り、色調が淡い緑色を示す半透明なガラス質の釉がかかった破片である。直線的に外傾する頸部は端部で円弧を描くように外反し、口唇は丸くおさまる。器面には内外面ともロクロによる突起が巡る。49は台の付く尊式花瓶の体部下位の破片と推定される。底部に縁帯状の突帯が付くものの完全に閉塞された状況を残していない。底部から外湾気味に外傾する体部と推定される。釉調は粗い貫入の入る淡い緑色を示す半透明のガラス質である。

器形や胎土、釉からみて15世紀前半頃の製品と考えられる。

瓶子 (第2表、第311図、写真図版74)

体部破片7点(53～57・59・61)、肩部1点(58)、体部下位～底部2点(60・62)がある。破片の釉と胎土からみて54～57は同一個体と推定されるが、他は別個体と考えられる。57・61以外は西館からの出土で、特にC III区とD II区に集中する。体部の破片はいずれもロクロ成形され



第311图 瀬戸・美濃系灰釉陶器—2

第2表 瀬戸・美濃系灰釉陶器一覽表

No	出土地点	層位	器種	部位	口縁部径 (cm)	高台径 (cm)	器高 (cm)	器厚 (cm)	釉調	胎土	文様	特 徴	図版	写真
1	C III a 2 土坑	埋土	平碗	体部～ 高台脇	—	—	(3.9)	0.75	若干黄味をもつ 緑色	淡褐色		体部外面下半露胎、釉の 剥落が著しい、焼成良好	310	71
2	C III & 4 土坑	埋土	平碗	口縁部					淡緑色	淡褐色		端面内削ぎ、内外面とも 貫入多い、焼成良好		〃
3	C II区	表土	平碗	底部～ 高台脇	—	3.8	(1.0)	0.9	緑色	淡褐色		外面露胎、削り出し高台、 焼成良好	310	〃
4	C III区	表土	平碗	体部～ 高台脇					淡緑色	淡褐色		体部外面下半露胎、細か い貫入る、焼成良好		〃
5	D II a 6 検出面	表土	平碗	体部					淡緑色	淡褐色		外面の一部露胎、細かい 貫入る小破片、焼成良 好		〃
6	D VII e 1	表土	平碗	口縁部	(14.0)	—	(3.3)	0.5	褐色味のある 淡緑色	淡灰色		釉が白濁している、焼成 は良好	310	〃
7	C V区 (内堀)	盛土分	折縁深皿	底部	—	(15.3)	(3.0)	1.2	殆んど無釉	褐色		内面に釉が点在、足付、 焼成があまり良くない	310	〃
8	D II区	表土	折縁深皿	体下部					若干黄味をもつ 緑色	褐色		外面にロクロによる段あ り、貫入あり、下部露胎		〃
9	D III区	表土	折縁深皿	口縁部	—	—	(2.1)	0.7	緑色	灰色		外面にロクロによる段あ り、貫入あり	310	〃
10	D III区	表土	折縁深皿	体上部					若干黄味をもつ 淡緑色	褐色		貫入多し、焼成良好		〃
11	C D II区 混	表土	丸皿	口縁部 ～底部	(11.0)	(6.0)	(2.6)	0.6	黄味をもつ 淡緑色	黄白灰色		低い高台あり、口縁端反 り、粗い貫入、全面に釉	310	〃
12	C II区	表土	丸皿	体下部～ 底部	—	(6.0)	(1.3)	0.5	緑色	灰白色		低い三角高台、外底に輪 トチンの跡粗い貫入、全 面に釉	310	〃
13	C II区	表土	丸皿	口縁部					淡緑色	淡灰白色		口縁端反り、粗い貫入		〃
14	C II区	表土	丸皿	体部					黄味をもつ 淡緑色	淡灰白色		内面の釉が白濁		〃
15	C IV区柱 Na10	埋土	丸皿	口縁部～ 体上部	(13.0)	—	(2.1)	0.5	深い黄味をもつ 緑色	黄白色		口縁端反り、粗い貫入、 全面に釉	310	〃
16	C V区柱 Na 1	埋土	丸皿	口縁部					淡い緑灰色	淡灰白		口縁端反り、粗い貫入		72
17	C V区柱 Na 3	埋土	丸皿	底部	—	(5.4)	(1.4)	0.6	緑色	黄白色		低い三角高台、外底に輪 トチンの跡、全面に釉	310	〃
18	C VI区柱 Na49	埋土	丸皿	口縁部 ～体下部	(11.0)	—	(2.2)	0.5	黄味をもつ 淡緑色	黄白色		端反りしない直口形、外 面体下部露胎	310	〃
19	C VI区柱 Na60	埋土	丸皿	体下部					淡緑色	淡灰白色		粗い貫入、小破片		〃
20	C VI区柱 Na63	埋土	丸皿	口縁部 ～体部	(12.0)	—	(1.8)	0.55	淡緑色	淡灰白色		口縁端反り、粗い貫入	310	〃
21	C VI区柱 Na63	埋土	丸皿	口縁部 ～体下部	(12.0)	—	(2.2)	0.5	淡緑色	淡黄白色		口縁端反り、粗い貫入	310	〃
22	C VI区柱 Na66	埋土	丸皿	体部					淡緑色	淡黄白色		小破片、粗い貫入		〃
23	C VI区	表土	丸皿	底部					淡緑色	黄白色		削出しによる輪高台		〃
24	C VI区	表土	丸皿	体上部					淡緑色	淡黄白色		小破片		〃
25	C VI区	表土	丸皿	体下部～ 高台脇					淡緑色	淡黄白色		小破片、粗い貫入		〃
26	C VII c 5 土坑	埋土	丸皿	口縁部 ～体上部					黄味をもつ 淡緑色	淡黄白色		口縁端反り、釉に白濁部 あり		〃
27	C・D VII区	表土	丸皿	底部					緑色	淡灰白色		削り出しの輪高台、粗い 貫入		〃
28	D II区	表土	丸皿	体部					淡緑色	淡黄白色		僅かに貫入あり		〃
29	D III区	表土	丸皿	底部					淡緑色	淡黄白色		貼付(?)の高台、僅か に貫入あり		〃
30	D III区	整地層	丸皿	底部					淡灰緑色	淡灰白色		削り出しの輪高台、外底 に輪トチンの跡		〃
31	D IV区	表土	丸皿	口縁部 ～体上部	(13.0)	—	(1.9)	0.4	淡緑色	淡灰白色		口縁端反り、粗い貫入	310	〃

32	D V区	表土	丸皿	底部					緑色	淡灰白色	輪高台付、外底に輪トチン跡		〃
33	D VI区柱 No23	埋土	丸皿	底部	—	(6.4)	(1.1)	0.55	白濁したくすんだ淡緑色	灰白色	軸の発色が良くない、削出しによる三角の低い輪高台、外底に輪トチン跡	310	〃
34	D VII区	表土	丸皿	底部～高台脇	—	(5.8)	(1.1)	0.4	見込みくすんだ黄緑他淡い緑色	灰白色	削出しの輪高台、外底に輪トチンの跡、若干の貫入あり	311	〃
35	D VII区柱 No 8	埋土	丸皿	口縁部～体上部					淡緑色	淡黄白色	口縁端反り、粗い貫入あり		〃
36	D VII区柱 No13	埋土	丸皿	口縁部～体上部					淡緑色	黄白色	口縁端反り、細かい貫入、薄作り		〃
37	D VII区	表土	丸皿	底部					見込みくすんだ黄緑他淡い緑色	黄白色	削出し輪高台、貫入あり		〃
38	D VII区	表土	丸皿	底部					淡い緑色	黄白色	削出し輪高台、貫入あり		〃
39	E II区	表土	丸皿	体部					緑色	灰白色	細かい貫入		〃
40	C II区	整地層	下し皿	口縁部～底部	(14.6)	7.5	2.9	0.6	やや白濁した黄味をもつ緑色	黄白色	底部糸切り、体中部まで施釉	311	73
41	C III a 2 土坑	埋土	下し皿	体下部～底部					外面は無釉内面は緑色	若干黄味をもつ灰白色	底部糸切り		〃
42	C V区 (内堀)	新期埋土	下し皿	口縁部～体下部					白濁した淡い灰緑色	灰黄白色	40と同一個体		〃
43	D II区	表土	下し皿	口縁部～体下部	(11.3)	—	(2.1)	0.6	淡緑色	灰白色	口縁折縁、口縁のみ施釉	311	〃
44	D VII区柱 No 3	埋土	下し皿	口縁部～体下部	(12.1)	—	(2.9)	0.6	淡緑色	灰黄白色	口縁～体下部に施釉	311	〃
45	D II h 9	整地層	香炉	口縁部～体下部	(12.0)	—	(3.7)	1.4	緑色	褐灰色	体中部まで施釉、ハカマ腰型	311	〃
46	C VII d 2 土坑-2	埋土	香炉	口縁部～頸部	(11.4)	—	(1.7)	0.4	緑色	褐灰色	45より小型品？ハカマ腰型	311	〃
47	D II区	埋土	香炉	口縁部～頸部	(9.2)	—	(1.8)	0.5	緑色	灰色	45より小型品、ハカマ腰型	311	〃
48	C III区	表土	花瓶	口縁部～頸部	(10.6)	—	(4.1)	0.5	淡緑色	灰色	端部外反	311	〃
49	C IV d 3 土坑	埋土	花瓶	体下部～底部	—	—	(5.1)	1.1	淡緑色	灰色	脚部のつく型	311	〃
50	C II g 6 土坑	埋土	合子	蓋	4.3	2.0	(1.1)	1.4	淡緑色	淡褐灰色	小壺のフタ、ロクロ挽き、裏面無釉	311	〃
51	C VI区	表土	小壺か水滴	耳					灰緑色	褐灰色	断面丸形で湾曲している		74
52	D II区	表土	小壺	肩部					淡緑色	灰色	小破片		〃
53	C II区	表土	瓶子か壺	体部					緑色	灰色	小破片		〃
54	C III区柱 No10	埋土	瓶子か壺	体部					若干白濁した緑色	褐灰色	小破片		〃
55	C III区柱 No10	埋土	瓶子か壺	体部					若干白濁した緑色	褐灰色	54と同個体		〃
56	C III区柱 穴	埋土	瓶子か壺	体部					若干白濁した緑色	褐灰色	54と同個体の可能性あり		〃
57	C V区	表土	瓶子か壺	体部					若干黄味をもつ緑色	褐灰色	肩部の下当りか		〃
58	D II区	表土	瓶子か壺	肩部					緑色	灰色			〃
59	D II区	表土	瓶子か壺	体部					緑色	灰色			〃
60	D III区	表土	瓶子か壺	体下部～底部	—	(7.8)	(6.5)	1.5	淡緑色	褐灰色	底部糸切りか？	311	〃
61	(C V) D IV j 6溝-2	南端埋土	瓶子か壺	体部					緑色	灰色			〃
62	西館	表土	瓶子か壺	体下部～底部	—	(9.6)	(5.2)	1.6	緑色	灰色	底部糸切り	311	〃
63	B II i 9 塚	封土	平碗	口縁部～体部					黄緑色	黄褐色	細かい貫入あり		〃
64	D III j 6 落ち込み	埋土	平碗	口縁部					淡黄緑色	淡黄褐色	細かい貫入あり、端反り型		〃

た器表に濃淡はあるものの色調が緑色で、粗い貫入が入り半透明なガラス質の釉がかけられているが、内面にロクロによる凹凸をもつ例(53・59・61)や器表に2条を単位とする沈線を付す例(61)がある。58は肩部の破片であるが、特徴は体部の破片と同じである。60・62の破片で見ると、体部は底部から直線的に外傾し、底部は回転糸切り離しのもの(62)と回転糸切り離し後再調整されるもの(60)がある。60では内面にも釉の流れ込みがみられるが、外面はいずれ体部下端は露胎となる。釉調に濃淡はあるが淡い緑色を示し、粗い貫入の入る半透明のガラス質である。推定される底径は60が7.8cm、62が9.6cmである。

53・54～57は胎土や技法・釉調からみて14世紀末～15世紀前期頃、その他は15世紀後半頃の製品と推定される。

〈瀬戸・美濃系鉄釉陶器〉

破片数で48点の出土であるが、この中に天目茶碗18点(37.5%)、花瓶1点(2.1%)、壺29点(60.5%)が含まれる。個体数で見ると、天目茶碗には接合する破片がないので18個体(85.71%)、花瓶1個体(4.76%)、壺は28点が同1個体の破片であることから2個体(9.52%)となり、ほとんどが天目茶碗で占められる。出土地では、西館の出土が破片数で29点、個体数で16点と、個体数の76.2%を占める。特に天目茶碗と壺が一組みとなることはこの地区の使われ方を示唆している可能性がある。

天目茶碗 (第3表、第312図、写真図版75・77)

18点には口縁部5点(2～4・7・8)、体部8点(5・9～11・15～18)、底部4点(6・12～14)、体部～底部1点(1)が含まれる。西館での出土が多いことは既述したが、その中でもC II区から8点の出土と西館出土の57.1%を占めている。その他はD III区・CV区から2点出土した以外は、C III・C IV・D II・C VI・D Vの各区から各1点の出土である。いずれも破片の出土であるため、各部位の特徴から全体的なことを推定することにする。

5点の口縁部破片をみると、肩の張りが強く頸部の括れが大きいもの(3・4)と肩が丸味をもち頸部の括れが小さいもの(2・7・8)の2種類に分れ、釉の発色も前者は海老茶色、後者は黒褐色と差がみられる。なお、後者は二次的な火熱によって釉に火脹れがみられることから、当館が焼失した時に使用されていたか既に廃棄されていた可能性を示す。推定される口縁部径は2が12.2cm、3が12.2cm、7が11cmとほぼ12cmを相前後する大きさである。釉は口縁部が薄く体部に向かって次第に厚さを増し、3では下端に釉溜りがみられることから、体部下位～底部は露胎となるであろう。形状や釉・胎土からみて7は15世紀前半、2～4は15世紀後半の製品と考えられるが、8は瀬戸・美濃系にしては胎土が緻密すぎるとともに、濃い灰色を示

すことから15世紀の中国製品の可能性が大きい。

体部破片には体部下位～底部を露胎にするもの5点（9・11・15・17・18）と露胎部分に酸化鉄の化粧掛けのあるもの3点（5・10・16）が含まれる。前者は、体部下位の露胎部分に粗いロクロ目を残し、後者のそれに比較して粗野な感がある。釉の発色は9・12は黒色に近く、15・17は茶色で、18は黒と茶の斑である。釉の下端は隆起し、15には流がみられ、先端は瘤状に膨らむ。15・18をみると、高台脇は篋先によって平らに削られる。後者の状況も前者のそれと大差はないが、16は肩部が丸味をもって強く張り、頸部の括れも大きくなる様相を示している。以上から、前者はほぼ15世紀中頃から後半、同後者は5・10が大窯Ⅰ期・16が大窯Ⅱ期であることから5・10は15世紀末～16世紀初、16は16世紀前半頃の製品と考えられる。

底部破片は高台の作り方に2種類みられる。一つは、外側が直に削り出され、畳付けは幅5mmのほぼ水平であるが外側の隅を僅か削り落す。高台内は1.5mm位が水平に削られる輪高台を示すもので、6の1点が該当する。また、この種は露胎部分に酸化鉄の化粧掛けがみられる。別の種類は、上部より畳付け部分の径が小さい斜に削り出され、畳付けは外側を強く削られるため内側のみが接する。高台内は断面三角を示す斜の削り込みだけであるため、輪高台を示すものはない。全体的に削りが粗く、形が粗野な感がある。いずれも外面は露胎であるが、14は流によって全面に薄く施釉されたような状況を示す。見込みの釉は海老茶色1点(13)、黒2点(12・14)、斑1点(6)に発色している。以上から6は大窯Ⅰ期に属することから15世紀末～16世紀初、他は15世紀中葉頃の製品であろう。

体部中位～底部を残す1の状況も他の破片と同じ状況を示すことから、15世紀中葉頃の製品である。

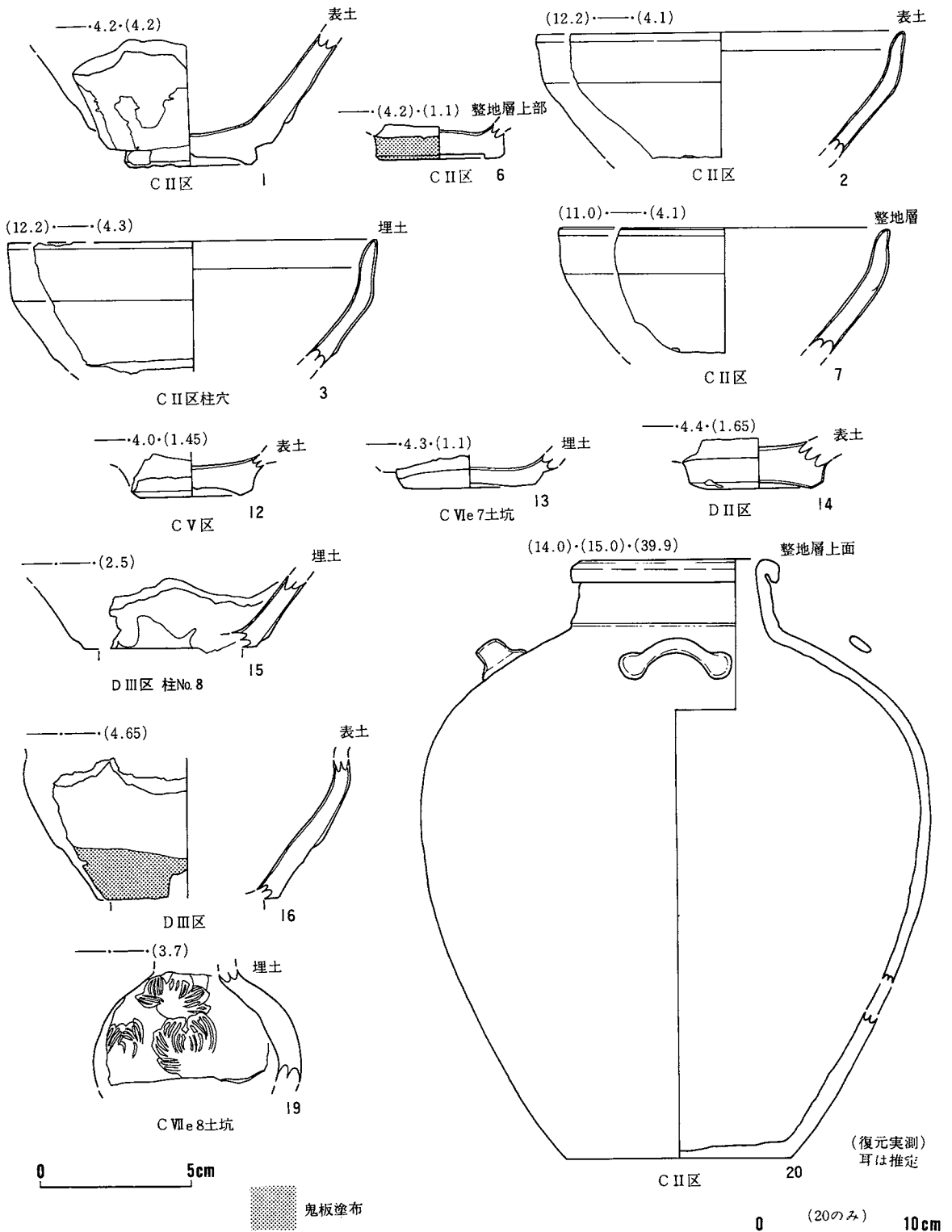
以上をまとめると、本館跡から出土した国産の天目茶碗には15世紀前期1点(7)、15世紀中葉9点（1・9・11～15・14・18）、15世紀後期3点（2～4）、15世紀末～16世紀初2点（5・6）、16世紀前期2点（10・16）となり、15世紀代に入るものが14点、特にも中葉の9点に主体がある。

花 瓶 （第3表、第312図19、写真図版77）

押印による菊花文様の印花文を付し、径6.9cmのほぼ球形を示すと考えられる体部破片であることから、小型の花瓶と考えられるが小破片のため全体的なことは不明である。釉はくすんだ緑色や灰緑色等の斑状の色調を示し、濃さに濃淡があるとともに厚さにも厚薄がある。

文様・胎土・釉調から14世紀中頃の製品と考えられる。

壺 （第3表、第312図20、写真図版26・27）



第312図 瀬戸・美濃系鉄釉陶器

第3表 瀬戸・美濃系鉄釉陶器一覧表

No	出土地点	層位	器種	部位	口縁部径 (cm)	高台径 (cm)	器高 (cm)	器厚 (cm)	釉調	胎土	文様	特徴	図版	写真
1	C II区	表土	天目茶碗	体下部 ～底部	—	4.2	(4.2)	1.0	黒色一部茶味	黄味をもつ 褐灰色		口縁～体中部まで施釉、 一部ナダレ、高台削出し	312	75
2	C II区	表土	天目茶碗	口縁部 ～体中部	(12.2)	—	(4.1)	0.5	黒色	灰		二次火熱によって釉が火 ブクレしている	312	〃
3	C II区柱 穴	埋土	天目茶碗	口縁部 ～体下部	(12.2)	—	(4.3)	0.6	ショウ油色	黄味をもつ 褐灰色		体下部露胎	312	〃
4	C II区	表採	天目茶碗	口縁部 ～体上部					ショウ油色	褐灰色		体下部露胎で鬼板塗布		〃
5	C II区	表土	天目茶碗	体中部～ 体下部					黒色	褐灰色				〃
6	C II区	整地層上 部	天目茶碗	底	—	(4.2)	(1.1)	0.7	エビ茶色	黄味をもつ 褐灰色		外面露胎に鬼板塗布、高 台の削出しに注意	312	〃
7	C II区	整地層	天目茶碗	口縁部 ～体中部	(11.0)	—	(4.1)	0.7	黒色	灰色			312	〃
8	C II区	表土	天目茶碗	口縁部					黒色	灰色		二次火熱を受けている。		〃
9	C III i j 3	整地層	天目茶碗	体下部					黒色	灰色		下部が露胎		〃
10	(V) C・DIV 区(内堀)	埋土	天目茶碗	体下部～ 高台脇					褐色点のある黒 色	黄白色		体下部が露胎で鬼板		〃
11	C V区柱 No39	埋土	天目茶碗	体下部～ 高台脇					黒褐色	灰色		体下部が露胎		〃
12	C V区	表土	天目茶碗	底部	—	4.0	(1.45)	0.7	黒色	褐灰白色		削出し高台	312	〃
13	C VI e 7 土坑	埋土	天目茶碗	高台脇～ 底部	—	4.3	(1.1)	0.5	黒褐色	灰色		削出し高台	312	〃
14	D II区	表土	天目茶碗	底部	—	4.4	(1.65)	1.2	黒色	灰黒色		削出し高台、釉が高台部 にも薄くかゝる	312	77
15	D III区柱 No 8	埋土	天目茶碗	体下部～ 高台脇	—	—	(2.5)	0.7	暗褐色	黄味をもつ 褐灰色～ 灰黒色		体下部露胎	312	〃
16	D III区	表土	天目茶碗	肩部～ 高台脇	—	—	(4.65)	0.75	黒褐色	黄褐灰色		体下部露胎で鬼板塗布	312	〃
17	D V区柱 No 6	埋土	天目茶碗	体下部					褐色	灰白色		体下部露胎		〃
18	西館	表採	天目茶碗	体下部					暗黒褐色	灰色		体下部露胎		〃
19	C VII e 8 土坑	埋土	花瓶	体部	—	—	(3.7)	0.9	黒褐色	灰色		破片を何かに転用してい る	312	〃
20	C II区	整地層上 面	壺	口縁部 ～底部	(14.0)	(15.0)	(39.9)	1.1	茶褐～黒色	濃灰色		同個体28点の破片あり、 祖母懷の茶壺	312	76
21	C II a 9・10溝	埋土	壺	肩部付近					黒褐色	濃灰色		20と同個体		〃
22	C II b 8 井戸付近	整地層	壺	体下部～ 底部					暗褐色	濃灰色		20と同個体、底部の脇が 露胎		〃
23	D II区	整地層	壺	体下部					黒褐色	濃灰色		20と同個体		〃
24	D II区粗 掘	表土	壺	肩部					黒褐色	濃灰色		20と同個体		〃
25	D V a 7 土坑	表土	壺 (中国)	頸部の下					褐色	灰色		ロクロ挽き		92
26	D III区	表土	壺? (朝鮮)	体部					黒褐色	灰色		紐巻き上げ叩きづくり、 内面に凸面当具痕作り		92
27	C III区No13	埋土	壺?	体部					黒褐色	灰色				76

破片数では29点の出土であるが、同1個体の破片が28点あることから個体数は2点である。20は28点の破片となってC II区・D II区を中心に西館の西端から出土した。破片全てが接合するわけではないが、接合した形と各部位の破片から全体形を窺い知ることができる。実測図はそれからの推定復元図である。なお、出土した破片には耳が付着した痕跡を残し、他遺跡例から耳の付くのが通常のことであることから、耳も推定復元したものである。

底部から直線的に外傾した体部は、下位から次第に内湾して肩部に移行し、肩部から直線的に窄んで頸部に至る。頸部は下端に低い稜をもって僅かに窄み、口縁部は外方に折り曲げて丸くし、玉縁状の口縁をなす。耳は破片に残る痕跡をみると、頸部から約4cm下位の肩部とのほぼ中間に横位置に付くと推定されるが、数は定かでない。釉は、外面は体部下位の底部付近を除いた全面に刷毛塗りされた後さらに部分的に振り掛けをして釉を厚くし、焼成後に釉文様が出るように配慮されたものであろう。色調は焦げ茶色から黒色まで部分によって差がみられ、黒色の部分には流がみられる。内面は口唇部と端部にのみ施釉される。ロクロの挽き方は非常に丁寧で、底面は切り離された後回転調整されている。胎土は非常に緻密で、ほんの少量の細礫が混じっている。復元実測された実測図をみると、祖母懐の壺と呼ばれる茶壺に非常に近い形態を示すことから、ほぼこれに相当すると推定される。時期的には15世紀後半頃の製品であろう。

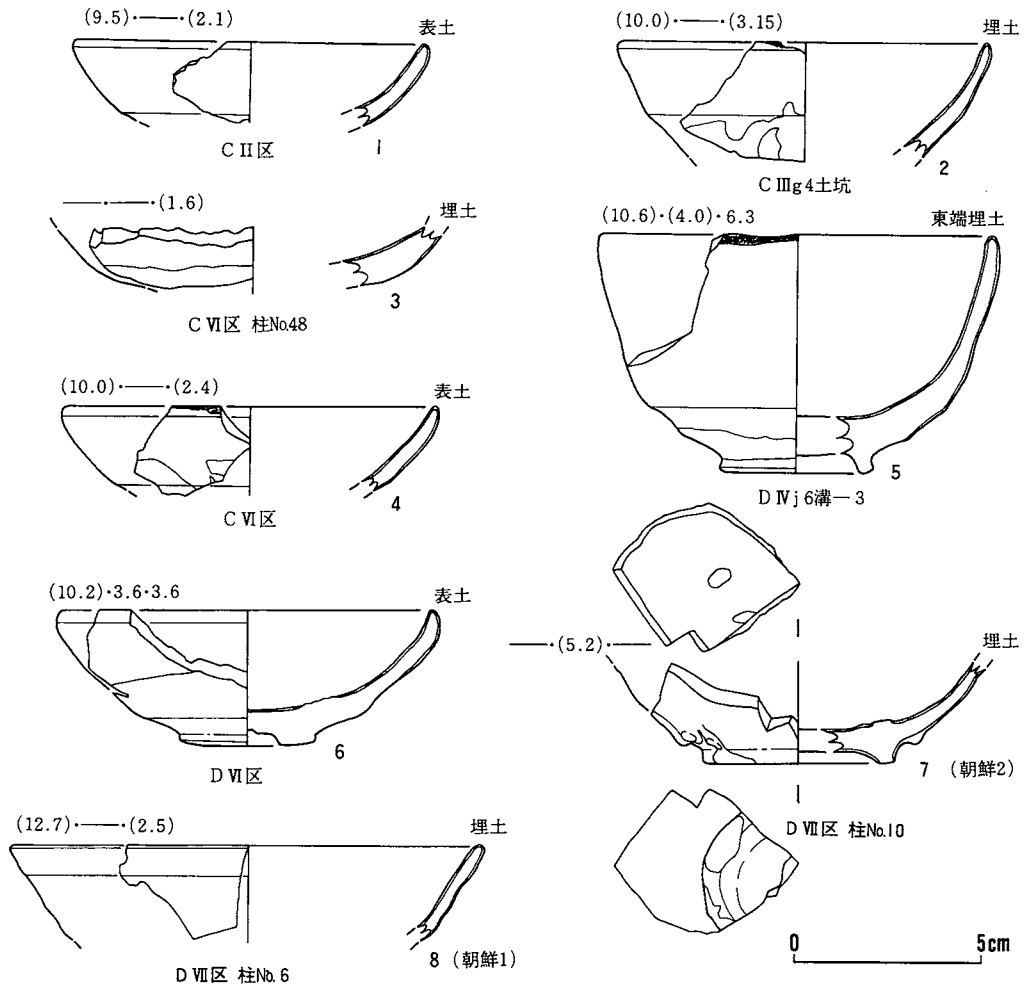
別の1点(7)は体部の小破片であるため詳細は定かではないが、外面に黒色と焦げ茶の斑状に発色する釉がかけられる。胎土は砂質気味で、器厚4mm～5mmの灰色を示す破片である。おそらくあまり大きくない茶壺の体部破片と考えられる。時期的には15世紀代のものであろう。

〈唐津系陶器〉

6点の中には碗1点(5)、皿5点(1～4・6)が含まれ、西館から2点(1・2)と東館から4点(3～6)出土している。瀬戸・美濃系の陶器に比較して出土点数が少ない。

碗 (第4表、第313図、写真図版77)

碗の1点はD VI区の溝跡埋土内からの出土で、口縁部～底部までを残存する口縁部径10.6cm、底部径4cm、器高6.3cmの大きさをもつ破片である。高台脇から大きく外傾した体部は腰部で内湾し、体部中位で僅か窄んだ後内湾気味に軽く外傾して口縁部に達し、口唇は丸くおさまり、腰部と高台との中間に幅約1cmの凹帯が巡る。底部は削り出しによる高さ約3mmで外方にハの字形に軽く開く輪高台が付き、畳付けの両隅は僅かな丸味をもつ。外面には若干のロクロ目を残すが、内面は丁寧に仕上げられる。釉は体部外面下位～底部を露胎とするが、他は全面に施釉される。釉の色調は白濁した灰褐色を示し、色合や熔け方をみると、焼成温度が低かったと推定される。口唇部には焦げ茶色の口紅が入る。



第313図 唐津・朝鮮系陶器

以上の特徴から16世紀末頃の製品と考えることができる。

Ⅲ (第4表、第313図、写真図版77)

4点には口縁部だけを残す破片3点(1・2・4)、体部中位～高台脇を残す破片1点(3)、口縁部～底部を残す破片1点(6)が含まれる。全体を推定できる6をみると、高台脇から直線的に外傾する体部下位は、腰部で張った後上方に屈曲して立ち上がり、体部上位～口縁部は内湾して外傾する。口縁端部は外削ぎされ、口唇は幅狭く丸くおさまり上方を向く。内面は定かでないが、外面は粗いロクロ目を良く残す。底部は削り出しによる幅1cmの輪高台で、高台内は篋で削り込まれる。見込みには胎土目の跡が2箇所ある。外面の釉は体部中位～口縁部と内面に施釉され、体部下位と底部は露胎とする。色調は灰褐色を示し、半透明～不透明な釉である。

大きさは口縁部径10.2cm、底部径3.6cm、器高3.6cmである。他の破片もほぼ同じ様相を示すが、釉の色調に緑色や褐色と差がみられ、2・4には鉄釉による口紅が入る。

以上の特徴から、16世紀末頃の製品と推定される。

第4表 唐津・朝鮮系陶器一覧表

No	出土地点	層位	器種	部位	口縁部径 (cm)	高台径 (cm)	器高 (cm)	器厚 (cm)	釉調	胎土	文様	特徴	図版	写真
1	C II区	表土	皿	口縁～ 体下部	(9.5)	—	(2.1)	0.5	暗褐色	黒褐色		半透明な灰釉	313	77
2	C III 8 4 土坑	埋土	皿	口縁～ 体下部	(10.0)	—	(3.15)	0.5	明黄褐色	黄褐色		半透明な灰釉、体下部が露胎	313	〃
3	C VI区柱 No48	埋土	皿	体中部～ 体下部	—	—	(1.6)	0.8	緑色	褐色		半透明な灰釉、体下部が露胎、見込みに胎土目あり	313	〃
4	C VI区	表土	皿	口縁～ 体下部	(10.0)	—	(2.4)	0.45	灰緑色	褐色		半透明な灰釉、体下部が露胎、鉄釉の覆輪	313	〃
5	C V j 6 溝-2	東端埋土	碗	口縁～ 底部	(10.6)	(4)	6.3	10.0	白灰緑色	褐色～ 暗褐色		白濁し不透明、体部～底部が露胎、口唇が鉄釉の覆輪	313	〃
6	D VI区	表土	皿	口縁～ 底部	(10.2)	3.6	3.6	0.7	白灰緑色	褐色		不透明釉、体部～底部が露胎、見込みに胎土目あり	313	〃
7	D VII区柱 No10	埋土	碗 (朝鮮1)	体中部～ 底部	—	(5.1)	(3.8)	0.7	灰褐色	黒褐色		不透明で白濁する部分もある、見込みに胎土目あり	313	78
8	D VII区柱 No6	埋土	碗 (朝鮮2)	口縁～ 体部	(12.7)	—	(2.5)	0.4	灰褐色	灰色		半透明な灰釉、断面に光沢あり	313	〃

〈東海系陶器〉

本遺跡で東海系陶器と分類したのは、愛知県の常滑や知多地域と滋賀県の信楽地域の製品と考えられる陶器を一括した。器種はいずれも大甕か大壺で、いわば大型容器に属する器種である。破片での出土であるため、個体数や器形等詳細は不明である。

信楽系陶器 (第5表)

体部破片2点(3・4)と底部破片1点(5)の3点が、西館から2点(D II区・D III区)と東館から1点(5)出土している。小破片のため詳細は定かでないが、破片のもつ特徴や出土地点から考えて3個体の破片と推定される。

3は内外面ともくすんだ褐色を呈し、胎土は非常に緻密で若干の砂粒が混じり、色調は淡い灰褐色である。内外面とも無釉であるが、外面には薄い自然釉が認められ、両面に長石と鉄分の熔出がある。

4も基本的には3の特徴と同様であるが、器面の色調が明褐色を示し、自然釉の付着はみられない。

5も他と同様であるが、器面の色調が4よりも明色を示し、自然釉は付着しない。胎土には差がみられない。

以上の3点は、破片の湾曲の程度が弱いことから大型の甕か壺と推定されるが、器厚が7mm～1.2cmと薄いことから、極端な大型品ではないものと考えられる。時期的には15世紀代の製

品であろう。

知多系陶器 (第5表、第314図、写真図版78・79)

11点の破片が出土しているが、その中に口縁部2点(14・18)、肩部付近2点(10・17)、体部6点(9・11・12・15・16・19)、底部付近(13)が含まれている。釉や胎土、出土した部位から考えると4個体分の破片が混在すると考えられる。それは9～11の個体、12～14・16・17・19の個体、15、18の個体であるが、9の個体と12の個体は出土地点が前者は西館、後者は東館と異なるものの、破片のもつ特徴が非常に近似しており、同一個体の可能性が高い。以上から、この両者は1個体として扱うことにする。以下に個体別に記述する。

9の個体には、口縁部・肩部・体部・体部下端の破片がある。胎土には僅かの砂粒が混じるが緻密な土が使用され、色調は灰黒色を示し焼成が良好で硬く、断面には多くの鬆穴が観察される。器表には茶色や焦げ茶色に発色し光沢のある釉がかけられ、9の破片は両者の斑状である。内面にも同系の釉が薄くかけられ、茶色に発色している。破片断面を観察すると、粘土紐巻き上げと叩き、撫で付けによって成形や器面調整されており、口縁部にのみロクロ痕を残すことから体部にはロクロを使用していないと考えられる。器形は定かでないが、底部から外傾する体部が肩部に最大径をもって、頸部に向って直線的に強く窄み、頸部上端には断面三角形の上下に凹帯が巡る。口縁部は上の凹帯から外方にほぼ水平に折れ、さらに上方に端部が挽き出され、内面が受口状となる。器厚が1.5cm前後と厚いことや湾曲の程度から大型品であろう。

15の個体は内外面とも無釉な肩部に近い部分の破片である。胎土に細砂の混入した緻密な土が使用され、断面に多くの鬆穴がある。胎土の色調は暗褐色を示し、器表寄りには幾分明色である。成形技法は定かでないが、内面には横方向の細かな撫で痕を残し、外面には縦や横方向の篋撫で痕を明瞭に残す。器厚が1.3cmであるが湾曲の程度からみると9の個体よりは小型であろう。

18は受口を示す口縁部破片である。頸部から外方へ大きく折れた口縁部は、端部が上方へ挽き出され、全体が縁带状をなす。外面には半透明のガラス質で、焦げ茶色に発色する釉がかけられ、内面は9の外面に見られる釉と同様である。内面にロクロ目と考えられる細かい並行線が観察されることから、口縁部はロクロ仕上げの可能性が大きい。

以上の破片は西館から4点、東館から7点出土している。さらに西館ではC II区から3点、東館ではC V区とC VI区を合わせて5点が集中する。

時期的には、口縁部の形状からみて13世紀後半頃の製品と推定される。

常滑系陶器 (第5表、第314図、写真図版79)

28点の破片が出土しているが、これらは西館のC II区・C III区・D II区・D III区から集中して出土し、東館からはまったく出土していない。28点の中には口縁部2点(20・35)、頸部～肩部7点(22・27・29・31・36・39・40)、体部19点(21・23～26・28・30・32～34・37・38・41～46)を含むが、胎土や色調・釉の状況・口縁部の器形などから2個体の破片が混在すると考えられる。

1個体は20～28の口縁部1点(20)、頸部～肩部2点(22・27)、体部6点(21・23～26・28)を含む9点の破片が出土している。これらはC II区4点(20～23・27)、D II区2点(24・25)、D III区1点(26)、表土1点(28)が出土し、C II区付近で使用された品と推定できる。小破片のため全体的なことは不明であるが、口縁部は外方へ捻り返えされて幅2.5cm、厚さ1.6cmの玉縁状を示し、口唇部は平らに撫でられる。粘土紐巻き上げ成形で、叩き、撫でによって調整される。胎土は砂粒が多量に混入し器面がザラつく。焼成は非常に良好で、灰黒色の色調を示す。外面は茶色の釉がみられるが、内面は露胎である。口縁部径20cm前後の甕か壺と推定される。

20は折り返えされて縁帯状を示す口縁部の破片である。釉はかけられていない。

別の個体には口縁部1点(35)、頸部～肩部5点(29・31・36・39・40)、体部12点(30・32～34・37・38・41～46)の18点が含まれる。これらはC II区3点(29～31)、C III区10点(32～41)、C IV区1点(42)、D II区1点(43)、D III区2点(44・46)、D IV区1点(45)の出土状態を示し、ほとんどがC II区とC III区に集中する。いずれも破片が小さいため全体的なことは不明である。口縁部は前者同様捻り返えされるが、密着させないで細長い楕円形状の空間を残し、さらに折り返えした部分の外側に厚さ4mm、幅4.4cmの粘土板が貼り付けられる。口唇部は丸いが外側に貼り付けた粘土板の上端が外反気味に突出して付着する。口縁部下端も貼り付けた粘土板の下端が斜下方に軽く突出する。器形は、肩部から外反気味に大きく内傾して頸部に至り、頸部で上方に屈曲して口縁部に続く。口縁部は僅か外反気味に内傾しそのまま端部に移行する。肩部から下位の状況は不明である。胎土や焼成・色調は前者と同じ様相を示すが、外面に茶色～くすんだ黄褐色を示す釉がかけられ、長石と鉄分の熔出がみられる。さらに内面にも同質の釉が薄くかけられ、僅かな光沢をもつ淡い海老茶色を示す。口縁部破片から推定される口縁部径は52cm～54cmと、相当大型の甕と考えられる。

時代的には、口縁部形態から前者は16世紀前半、後者は15世紀後半～未頃の製品であろう。

〈須恵系陶器〉 (第5表、第314図1・2、写真図版78)

擂鉢が2点(1・2)出土している。1はB II区、2はD V区からの出土である。

1は体部下位～底部を残存する破片である。ロクロ成形され底部は回転糸切り離して、一部に再調整がみられる。底部から直立気味に立ち上った体部は大きく外傾し、次第に内湾しながら

ら口縁部に至る器形を示すらしい。内面には約4cm幅に13本が組をなす櫛状工具で底部から口縁に向って引かれた並行沈線が付される。櫛状工具の歯は径2mm～3mmの円形で沈線の間隔も2mm～5mmと一定しない。残存する状況から推定して、単位と単位の間には沈線は入らないらしい。内外面とも磨滅が著しく、特に内面の底部は播り目が消える状況がみられることから、使用頻度が相当高かったものであろう。胎土は砂粒が多く混入するとともに、全体的に粗い粘土が使用されている。焼成は非常に良好であるが、断面に多くの鬆穴があり、色調は濃い灰色を示す。底部径が14cm位の大きさをもつ個体であろう。内外面とも無釉である。

胎土、播り目の状況・器形から考えて、石川県珠洲地方の製品と推定され、時期的には15世紀頃が考えられる。

2は前者よりも小破片であるため、詳細は不明である。ロクロ成形され底部は回転糸切り離しの後再調整が入る。内面には10本以上を組にした櫛状工具による断面三角形の並行沈線が、底部から口縁部に向って付されている。沈線の幅は1mm～1.5mm、沈線の間隔3mm位とほぼ一定する。深さは中央部が深く縁辺部が浅いという特徴がある。内外面とも磨滅が著しいもの前者ほどではない。胎土に砂粒の混入はみられるが、非常に緻密な土が使用され、焼成は良く硬い。色調は若干褐色がかった濃い灰色であるが、器表部分は淡色となる。断面には多くの鬆穴が観察される。内外面とも釉はかけられない。

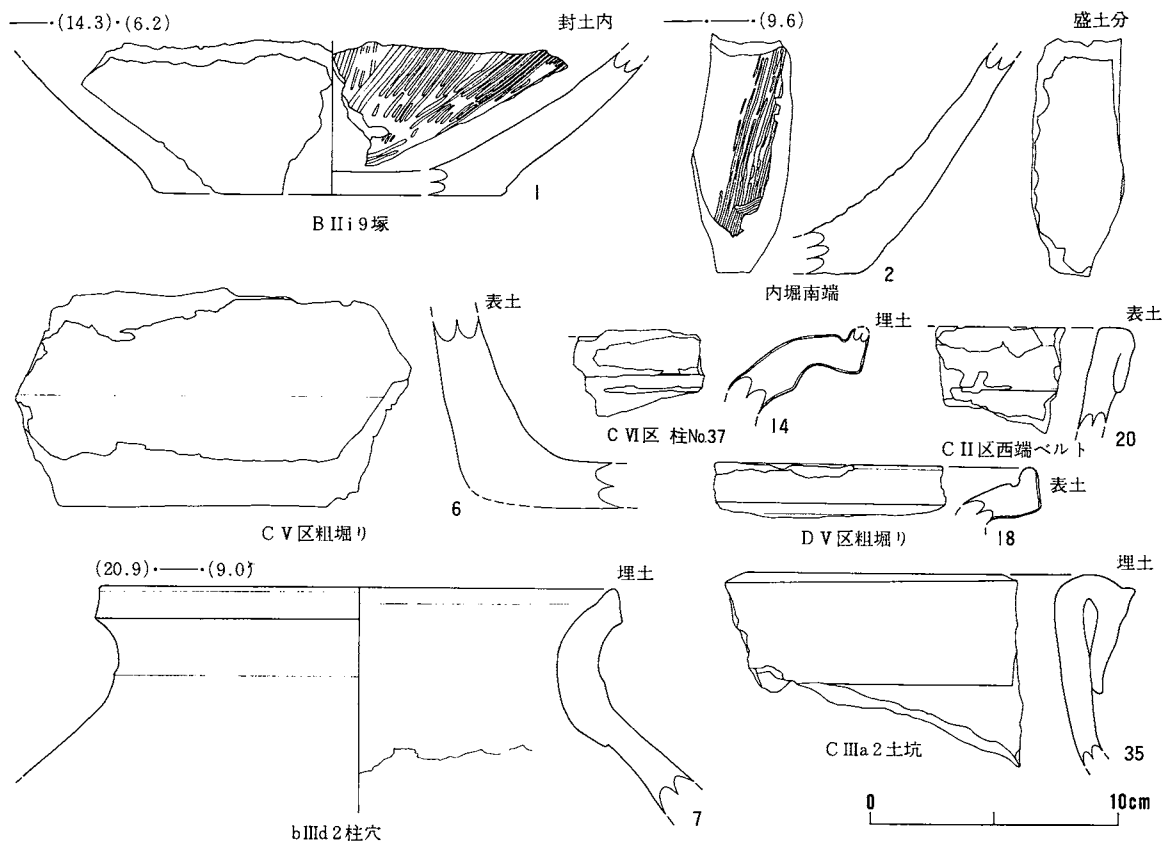
時期的には15世紀から16世紀の製品と考えられ産地は不明であるが北陸系と推定される。

〈産地不明の陶器〉 (第5表、第314図6・7、写真図版78)

生産地の不明な破片が3点(6～8)3個体出土している。いずれも甕で、6は頸部、7は口縁部～肩部、8は体部を残す破片である。6がCV区の出土以外はDIII区からの出土である。

6は非常に作りの粗末な頸部破片で、出土した破片の湾曲程度からみて相当大型の甕か壺と推定される。胎土は砂粒の混じった粗い土を使用し、焼成は良好で硬い。外面には頸部に黒色、肩部寄りに褐灰白色を示す自然釉がみられ、内面の頸部にも薄く付着するのが観察される。器厚が1.5cm～3cmと厚く、技術的に稚拙な状況を窺い知ることができる。

7は口縁部～肩部付近を残す壺の破片である。粘土紐巻き上げによって成形し、撫で調整の後口縁部はロクロで仕上げる。体部は肩部から窄ぼんで頸部に至り、頸部下端に断面丸形で低い突帯を巡らし口縁部は外反する。口縁部は角張って縁帯状を示し、口唇を上方に挽き出し、全体が受口状口縁をなす。作り方は丁寧である。胎土には砂粒が若干混じるとともに、全体としてやや粗い土を使用している。色調は灰色を示す所謂須恵質で、断面に多数の鬆穴が観察される。外面には暗褐色～黒褐色状の自然釉が付着し、その上面にさらに淡い褐色を示す細点状の釉が付着し、器面がザラつく。内面もほぼ同じ状況であるが、外面より少ない。



第314図 その他国産陶器

8は体部の破片であるため器種・器形とも不明である。外面は半透明でガラス質の自然釉が全面に付着し、部分的に流がみられる。内面は横方向の撫で痕をもち、無釉である。胎土は砂粒の混入もなく緻密で焼成も非常に良く、断面に多くの鬆穴をもつが磁質に近い光沢をもち、色調も黒点が点存する淡い灰黒色である。

時期の推定できるのは7のみで、口縁部の形態から13世紀中頃～後半の製品と推定される。

第5表 その他国産陶器一覧表

No	出土地点	層位	器種	部位	口縁部径 (cm)	高台径 (cm)	器高 (cm)	器厚 (cm)	釉調	胎土	文様	特徴	図版	写真
1	B II i 9 塚	封土内	擂鉢 (珠洲)	体中部 ～底部	—	(14.3)	(6.2)	1.9		灰黒色		ロクロ使用底部回転糸切り、搦目は13本単位、須恵質	314	78
2	内堀南端	盛土分	擂鉢 (北陸系)	体中部 ～底部	—	—	(9.6)	2.3		灰黒色		ロクロ使用底部回転糸切り、須恵器	314	〃
3	D II 区柱 No 1	埋土	甕 (信楽)	体部						明褐色		長石の熔融あり、器表は褐色		
4	D III 区 粗掘り	表土	甕 (信楽)	体部						明褐色		長石の熔融あり、器表は褐色		
5	D V 区 粗掘り	表土	甕 (信楽)	体最下部 ～底部						明褐色		長石の熔融あり、器表は褐色		

6	C V区 粗掘り	表土	礫 (産地不明)	頸部	—	—	(8.8)	3.3	淡褐灰～黒褐色	灰黒色	器壁が厚く、粗雑な作り	314	78
7	D III d 2 柱穴	埋土	礫 (産地不明)	口縁～肩部	(20.9)	—	(9.0)	1.9	自然釉	灰黒色	輪積み成形、須恵質	314	78
8	D III f 3グ リット柱穴	埋土	礫 (産地不明)	体部					白灰緑色	灰色	自然釉がかかり、二次火 熱を受けている		
9	C II区セ クシヨ ン ベルト西端	表土	礫 (知多系)	体部					暗褐～黒褐色	灰黒色	釉色が斑状、内面調整が 粗雑、焼き良好		
10	C II区セ クシヨ ン ベルト西端	表土	礫 (知多系)	肩部					暗茶色	灰黒色	焼き良好		
11	C II区セ クシヨ ン ベルト西端	表土	礫 (知多系)	体部					暗茶色	灰黒色	焼き良好、輪積痕あり、 10と同個体		
12	C VII区柱 No 9	埋土	礫 (知多系)	体部					暗茶色	灰黒色	焼き良好、10と同個体?		
13	C VII区柱 No 36	埋土	礫 (知多系)	体下部 ～底部					極暗褐色	灰黒色	焼き良好、10と同個体?		
14	C VII区柱 No 37	埋土	礫 (知多系)	口縁部	—	—	(3.4)	(1.7)	暗茶色	灰黒色	焼き良好、10と同個体?	314	78
15	D III区 (農道付近)	表土	礫 (知多系)	肩部					—	暗褐色	無釉で焼成良好、別個体		
16	D IV j 6溝 1～3西部	埋土	礫 (知多系)	体部					暗茶色	灰黒色	焼成良好、10と同個体?		
17	D IV j 6溝 1～3西部	埋土	礫 (知多系)	肩部～ 体上部					暗茶色	灰黒色	釉色が斑状、焼成良好、 10と同個体		
18	D V区 粗掘り	表土	礫 (知多系)	口縁部	—	—	(2.2)	(1.05)	暗褐色	灰黒色	焼成良好、別個体	314	79
19	D VI区 粗掘り	表土	礫 (知多系)	体下部					暗茶色	灰黒色	焼成良好、10と同個体		
20	C II区 西端ベルト	表土	礫 (常滑系)	口縁部	—	—	(4.2)	1.6	—	灰黒色	焼成良好、砂粒が多い	314	79
21	C II区西端	表土	礫 (常滑系)	体部					—	灰黒色	焼成良好、20と同個体		
22	C II区西端	表土	礫 (常滑系)	肩部上部					暗褐色	灰黒色	焼成良好、20と同個体		
23	C II区西端	表土	礫 (常滑系)	体部					暗褐色	灰黒色	焼成良好、20と同個体		
24	D II区	整地層	礫 (常滑系)	体部					—	灰黒色	焼成良好、20と同個体		
25	D II区 粗掘り	表土	礫 (常滑系)	体部					—	灰黒色	焼成良好、20と同個体		
26	D III区	表土	礫 (常滑系)	体部					—	灰黒色	焼成良好、20と同個体		
27	C・D II区	表土	礫 (常滑系)	肩部上位					暗茶色	灰黒色	焼成良好、20と同個体		
28	表探		礫 (常滑系)	体部					—	灰黒色	焼成良好、20と同個体		
29	C H i 6 土坑	埋土	礫 (常滑系)	肩部上位					茶色	暗褐色	釉色が白濁点と斑状、大 型品		
30	C II区西端	表土	礫 (常滑系)	体部					コゲ茶色	暗褐色	29と同個体		
31	C II区西端 粗掘り	表土	礫 (常滑系)	体部					コゲ茶色	暗褐色	29と同個体		
32	C III a 2 土坑	埋土	礫 (常滑系)	体部					コゲ茶色	暗褐色	29と同個体		
33	C III a 2 土坑	埋土	礫 (常滑系)	体部					コゲ茶色	暗褐色	29と同個体		
34	C III a 2 土坑	埋土	礫 (常滑系)	体部					コゲ茶色	暗褐色	29と同個体		
35	C III a 2 土坑	埋土	礫 (常滑系)	体部	—	—	(7.7)	1.1	コゲ茶色	暗褐色	29と同個体	314	79
36	C III f 4 土坑	埋土	礫 (常滑系)	体部					コゲ茶色	暗褐色	29と同個体		

37	CIII 8 4 土坑	埋土	整 (常滑系)	体部					コゲ茶色	暗褐色	29と同個体		
38	CIII i j 3 付近	整地層	整 (常滑系)	体部					コゲ茶色	暗褐色	29と同個体		
39	CIII i j 3 付近	整地層	整 (常滑系)	体部					コゲ茶色	暗褐色	29と同個体		
40	CIII i j 3 付近	整地層	整 (常滑系)	体部					コゲ茶色	暗褐色	29と同個体		
41	CIII区	表土	整 (常滑系)	体部					コゲ茶色	暗褐色	29と同個体		
42	CIV区	表土	整 (常滑系)	体部					コゲ茶色	暗褐色	29と同個体		
43	DII区	表土	整 (常滑系)	体部					コゲ茶色	暗褐色	29と同個体		
44		表土	整 (常滑系)	体部					コゲ茶色	暗褐色	29と同個体		
45	DIV区	表土	整 (常滑系)	体部					コゲ茶色	暗褐色	29と同個体		
46	DIII h 3	検出面	整 (常滑系)	体部					コゲ茶色	暗褐色	29と同個体		

〈瓦質陶器と土器〉 (第6表、第315図1～6、写真図版79)

瓦質陶器2点と土器が14点の合わせて16点出土している。

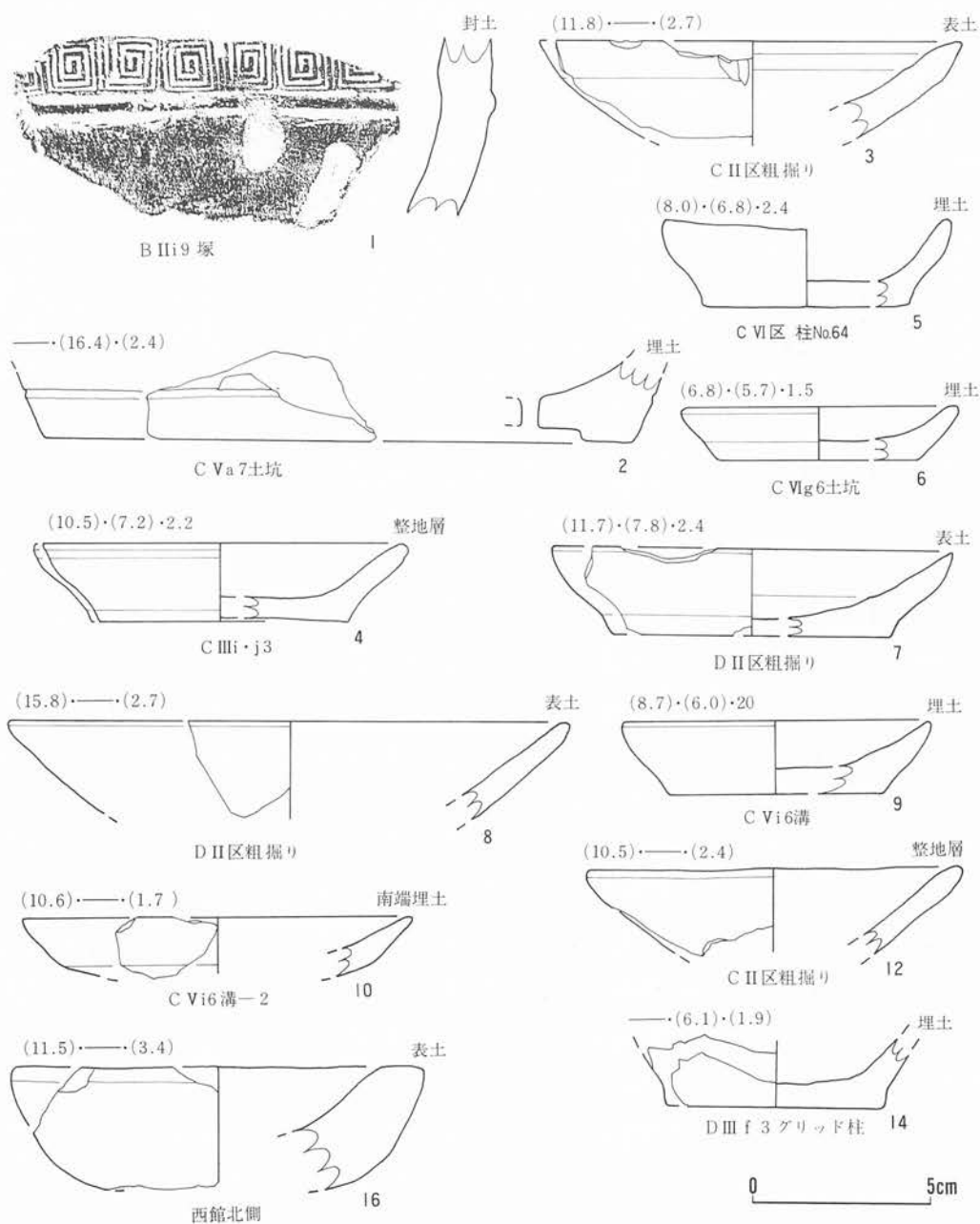
瓦質陶器 (第6表、第315図1・2、写真図版79)

1は円形を示す火鉢の体部破片である。体部最大径部と推定される部分に断面丸形の突帯を付し、その上位に押印による電文帯をもつ。外面は非常に丁寧な仕上げで光沢を放ち、内面のそれは外面に比較して不良である。胎土は真黒色の軟質であるが、器表は淡い灰色を示す。生産地は不明であるが、時期的には15・16世紀であろう。

2は素焼きの植木鉢の破片であるが、現代品とは胎土、焼成、器面調整がまったく異なることから、中世の遺物として取り上げた。底部付近のみを残し、全容は不明である。底部は幅1.5cmの輪高台状で、高台内は平坦に削られ、底面には径5mm位の円孔が穿たれ、全面に磨きが入る。底面から1.5cm上位の体部下端には断面三角形の沈線が巡る。体部は底部から直線的に外傾する器形を示すらしい。内面の調整は外面ほど丁寧ではないが磨きに近い調整が入る。胎土は砂粒が若干混入する緻密な土であるが、焼成は非常に悪く指の爪でも傷がつく。色調は淡い黄褐色であるが、中心部が灰褐色を示す。内外面とも施釉されない。生産地・時期とも不明である。

土器 (第6表、第315図3～16、写真図版79)

14点はCII区2点(3・12)、CIII区2点(4・16)、DII区4点(7・8・13・15)、DIII区1点(14)、CV区2点(9・10)、CVI区2点(5・6)、DVI区1点(11)から出土し、集計すると



第315図 瓦質陶器と土器

西館から9点、東館から5点の出土となる。さらに、これらには口縁部～底部を残すもの6点（4・7・9・16）と口縁部～体部だけを残す破片7点（3・8・10～13・15）、体部下位～底部のもの1点(14)が含まれる。器種はすべて皿である。

口縁部～底部までを残す6点についてみると、16以外はすべてロクロ成形で底部回転系切り離しのもので、再調整はいずれも残していない。おそらく、ロクロ成形された他の7点（3・8・10・11・13～15）も同じ技法で作られたものであろう。実測可能な11点（3～10・12・14・16）について法量値をみると、口縁部径が15cm以上1点(8)、10cm～12cm6点（3・4・7・10・12・16）、8cm台2点（5・9）、6cm台1点(6)に分けられる。底部径についてみると、7cm以上2点（4・7）、6cm前後4点（5・6・9・14）の2種類になり、器高も2cm以上5点（4・5・7・9・10）、2cm以下1点(6)に分けられる。これを総合すると、本遺跡から出土した土器は、口縁部径は3種類～4種類の大小関係を示すが、底部径は2種類に分かれ、器高も2種類に分類されることをも加味すると、体部が大きく外傾する器形と、あまり大きく外傾しない器形が存在することを示すものであろう。12は作りが稚拙で手捏ねらしい様相を示す体部破片で、内面に布目痕をもち黒斑を残す。16は非常に器厚が厚く、ロクロ成形の痕跡はまったく見受けられない。おそらく手捏ねであろう。

生産地は不明であるが、時期的には15～16世紀のものであろう。

第6表 瓦質陶器及び土器一覧表

№	出土地点	層位	器種	部位	口縁部径 (cm)	高台径 (cm)	器高 (cm)	器厚 (cm)	軸調	胎土	文様	特徴	図版	写真
1	BII i 9塚	封土	瓦器火鉢	体中部	—	—	(5.0)	1.5	無軸	黒色		器表は灰白色、雷文帯の下に突帯がめぐる	315	79
2	CV a 7 土坑	埋土	植木鉢	体下部～ 底	—	(16.4)	(2.4)	1.2	無軸	黄褐色		底部は低い高台を付し、 門孔がある器表が暗褐色	315	〃
3	CII区 粗掘り	表土	カワラケ 小皿	口縁～ 体下部	(11.8)	—	(2.7)	1.0	無軸	黄褐色		ロクロ挽き、内面黒色、 器肉厚手	315	〃
4	CIII i j 3	整地層	カワラケ 小皿	口縁～底部	(10.5)	(7.2)	2.2	0.6	無軸	褐色		ロクロ挽き、底部糸切り、 黒斑あり	315	〃
5	CVI区柱 No64	埋土	カワラケ 小皿	口縁～底部	(8)	(6.8)	2.4	0.6	無軸	明褐色		ロクロ挽き、底部糸切り、 黒斑あり	315	〃
6	CVI g 6 土坑	埋土	カワラケ 小皿	口縁～底部	(6.8)	(5.7)	1.5	0.6	無軸	明褐色		ロクロ挽き、底部糸切り、 黒斑あり	315	〃
7	DII区 粗掘り	表土	カワラケ 小皿	口縁～底部	(11.7)	(7.8)	2.4	0.8	無軸	橙褐色		ロクロ挽き、底部糸切り、 黒斑あり	315	〃
8	DII区 粗掘り	表土	カワラケ 小皿	口縁～体部	(15.8)	—	(2.7)	0.7	無軸	褐色		ロクロ挽き、	315	〃
9	DIV i 6溝 (CV)	埋土	カワラケ 小皿	口縁～底部	(8.7)	(6.0)	2.0	0.9	無軸	褐色		ロクロ挽き、底部糸切り	315	〃
10	DIV i 6溝 -2(CV)	南端埋土	カワラケ 小皿	口縁～体部	(10.6)	—	(1.7)	0.7	無軸	褐色		ロクロ挽き	315	〃
11	DVI・VII 区粗掘り	表土	カワラケ 小皿	口縁部					無軸	褐色		ロクロ挽き		〃

12	C II区 粗強り	整地層	カワラケ 小皿	口縁～体部	(10.5)	—	(2.4)	0.6	無釉	暗褐色	手捏ね的	315	79
13	D II区柱 No 4	埋土	カワラケ 小皿	口縁部					無釉	明黄褐色	ロクロ挽き、小破片		〃
14	D III f 3 グリット柱	埋土	カワラケ 坏?	体下部 ～底部	—	(6.1)	(1.9)	0.7	無釉	明褐色	ロクロ挽き、底部糸切り	315.	〃
15	E III a 5 落ち込み	埋土下部	カワラケ 坏?	口縁部					無釉	褐色	ロクロ挽き		〃
16	西館北側	表土	カワラケ 皿的?	口縁～底部	(11.5)	—	(3.4)	2.0	無釉	明褐色	手捏ね	315	〃

(2) 中国陶磁器

中国で製作されたと推定される陶磁器は、舶載陶磁器252点の中の98.81%に相当する249点出土している。その中には磁器240点(96.3%)と陶器9点(3.7%)が含まれる。

磁器には青磁118点(49.6%)、白磁53点(22.1%)、青白磁1点(0.4%)、染付67点(27.9%)があり、その中にそれぞれの器種が含まれる。陶器はいずれも鉄釉がかけられ、天目茶碗8点(88.9%)と壺1点(11.1%)がある。以下に種類ごとに分類し、各器種に分けてその概略を記述することとする。

〈青 磁〉 (第7表、第316～319図、写真図版80～86)

118点の中に碗99点(83.89%)、皿・盤15点(12.71%)、水注1点(0.85%)、壺2点(1.7%)、小杯1点(0.85%)の器種が含まれるものの、碗・皿類で95%以上を占め、他の器種は少ない。各館ごとの出土点数をみると、西館57点、東館60点とほぼ同数であるが、西館ではC II区とD III区で25点と40%以上が出土し、東館の場合はC VI区とD VI区から23点の出土と38.3%に相当し、いずれの館でも集中して出土する地点のあることが判明した。これはおそらく、館内の使われ方に起因するものであろう。

碗 (第7表、第316～319図、写真図版80～86)

99点の中には口縁部39点(39.39%)、体部42点(42.42%)、口縁部18点(18.18%)が含まれる。出土地点も西館ではC II区、D III区から26点(53.06%)、東館はC VI区・D VI区から22点(44%)と、各館とも青磁のほぼ50%が集中する。しかし、破片での出土が多く完形となるものはまったくない。以下に各特徴ごとに分けて記述する。

※体部外面に蓮弁文を付すもの。

体部に蓮弁文をもつ個体が11点(19・20・21・37～43・80)あり、この中に鎬蓮弁文をもつ2点(19・20)、線描蓮弁文7点(37～43)、ラマ式蓮弁文をもつ2点(21・80)が含まれる。鎬蓮弁文をもつ2点は、19は丸形の蓮弁で、蓮弁の先端が丸味をもって尖り、20では蓮弁が断

面三角形の山形で弁先も三角形を示すという違いがあり、前者は内面に型押しによる印花文がつく。器形がある程度分る19は、底部径約6.6cmで体部は高台脇から内湾して外傾する。高台は高さ約1.3cmで外方に軽く踏ん張る。畳付けは丸味をもち、釉は高台の内外面と外底の一部まで施釉する。器厚は体部が約5mm～1.1cmまであり、底部寄りほど厚い。20でみると口縁は直口する。時期的には14世紀の製品と考えられるが、20が先行するであろう。

線描蓮弁文をもつ7点には蓮弁の断面が丸く削られるもの5点(38～41・43)、沈線だけで付されるもの2点(37・42)がある。さらに口唇部までを残す3点(38・39・42)をみると、39は端部に口唇と並行する沈線を付した後山形の沈線で弁先を表し、他の2点は口唇に並行する沈線がない。蓮弁の幅を表す縦位の沈線は、6mm～7mmのもの3点(38・39・43)、5mm以下2点(40・41)、幅が不規則なもの2点(37・42)がある。また、40の内面には型押しによる印花文がつく。器形の分る破片がないため不明であるが、口縁部は直口である。時期は、38・39は15世紀後半～末頃、他は15世紀末～16世紀初め頃に位置づけられるであろう。

ラマ式蓮弁文と考えられる文様をもつ21は、体部下位から底部を残し、外面の高台脇から体部に2条を単位とする沈線によって幅が2cm～3cmと広い蓮弁文が描かれる。内面は見込み部分を1mmほど低くし、中央部に型押しによると考えられる印花文がつく。高台は高さが1cmの断面角形を示し、畳付けは平らである。釉は半透明で胎土のロクロ目が良く分り、高台外面の一部まで施釉される。80は体部のみが残る破片であるが、外面に蓮弁文の一部と口縁部に雷文帯の一部らしい文様が残し、内面は無文であるが見込み部分が若干低くなる。なお、二次焼成によって外面の釉に弱い火脹れがある。2点とも全体器形は不明であるが、口縁部は直口すると推定される。21は14世紀後半頃、80は14世紀末から15世紀前半頃の製品であろう。

※口縁部に雷文帯をもつもの

2点(73・80)出土しているが、80は蓮弁文を付すことから、ここでは73のみを充てる。口縁部から体部下位を残す口縁部が直口の破片である。口縁部にくずれた雷文帯が入り、雷文帯と口唇部の間に細い沈線が巡る。15世紀頃の製品と考えられる。

※玉縁口縁で体部内面に陽刻をもつもの

玉縁口縁で陽刻をもつ破片が3点(70～72)、陽刻は不明であるが玉縁口縁のもの3点(44・54・61)がある。前者には口縁部2点(70・72)と体部1点(71)が含まれる。70は口縁端部に並行する2条の山形文、71と72は形の違う花文が型押しで陽刻され、口縁部は僅かに外反し端部の外側を丸く肥厚させる。72の肥厚部は焼成時に異物と熔着し、それを離して砥石掛けをして平滑にしている。他の3点は陽刻はないが、口縁部が若干外反し端部の外面を肥厚させて玉縁にする破片である。おそらく15世紀の製品であろう。

※無文で口縁部が外反するもの

本遺跡から出土した青磁碗の主体を占めるのは本種で、23点（45・53・55～66・62～68）の出土と口縁部形態の推定できる41点の56%を占める。本種で特徴的なことは、内外面にまったく文様をもたずに口縁部を外反させることである。しかし、この中にも釉が不透明で胎土が見えないもの4点（49・51・63・67）と半透明の釉がかけられ胎土のロクロ目が見えるもの19点の2種類ある。この2種類は、前者は黒点が点在する白色の胎土、後者は黒点のみ見える灰色から灰黒色の胎土と、使用された生地に違いがみられる。また、後者はロクロ成形時の沈線や細い突帯や僅かな段が明瞭に残り、それが釉をとおして良く観察される。外反の程度に差はみられるものの、基本的には同じ器形を示すことからほぼ同時期に属するものと推定される。おそらく14世紀末～16世紀初頃の製品であろう。

※無文で口縁部が直口のもの

当館出土の中では2点（74・75）と非常に少ない。74・75とも小破片のため詳細は不明であるが、74は器厚が3mmと薄く、胎土の色が淡い褐色を示し、75は器厚が6mmと生地・釉ともに厚く、胎土の色調も黒点の点在する白色という違いがみられる。

※見込み部分に圏線か印花文の入るもの、

圏線の入る破片が5点（25・32・50・83・88）と印花文の入る破片が6点（22・23・25・29・30・33）ある。他に既述した蓮弁文を付す19・21と、体部小破片の118にも印花文が入る。25と32の圏線は非常に明瞭な沈線であるが、他は細く浅い沈線である。その他の特徴は他のものと同様である。印花文をもつ個体は、118以外は体部下位～底部を残存する破片である。文様の明瞭なものは少なく、23の十字花文、22の放射状に広がる花文だけがかろうじて分る。それ以外は釉が厚かったり、二次焼成を受けたり、施文時に薄かったりで文様が明瞭でない。

※高台の種類

底部を残す17点（19・21～36）の内、高台の明瞭な13点（19・21～23・25・29～36）について、高台の作り方、施釉をみると、以下のような種類に分けられる。

21の高台を指標とする形で、21と29の2点が該当する。断面角形で両角が若干丸味をもつ形を示し、釉は高台外面の一部までかけられる。成形時のロクロ目を明瞭に残し、外底の中心部が盛り上がる。胎土は砂質気味の粗い土で、色調は褐灰色～黒灰色である。

23・33を標準形とするもので、22・23・30・31・33の5点がある。前者と近似した様相を示すが、高台下端の外面を削り落して薄くし、さらに上端を削り込む例も1点(31)ある。所謂竹の節高台とするものである。胎土や釉は前者と同様である。

32を標準とし、他に25がある。高台の上端から畳付けに向って次第に器を薄くし、断面三角形で畳付けを丸くする高台をもつ。施釉の方法は、ドブ潰けした後外底の釉を円形に拭き取って露胎とし、露胎部分が淡い茶色に発色する。胎土には砂質気味で粗く灰色を示す32と黒点を

点在する白色の2種類ある。

32の高台と良く似るが、断面三角形を示さず断面角形で両角を削って畳付けを丸く仕上げる。釉は前者と同様に外底を拭き取るもの(34)と外底にまったく施釉しないもの(19・27・35・36)がある。胎土はいずれも黒点を点在する白色であるが、34・35は焼成不良である。

※胎土の種類

出土した118点の胎土を観察すると、若干の差はあるが色調が白色系で、小さな黒点が点在する胎土をもつ破片が43点の36.44%と、色調が灰色～黒灰色で砂質気味の粗い胎土をもつ破片が75点の63.56%あり、後者の胎土をもつ破片が圧倒的に多い。特に前者はガラス質に近い焼き上がりを示す破片が多いことから、胎土の違いだけではなく焼成火度が後者よりも高温であることを示す可能性がある。焼成不良の3点(28・34・35)をみると、色調が淡い黄褐色～淡い灰褐色を示すが、砂粒の混入はまったくみられない。後者の場合は、ガラス質の焼き上がりを示す破片はまったくみられず、すべての断面が砂粒状の粗い面をもつ。この状況は、生産地の違いを表すものであろう。

※釉調の種類

釉の色調は個体間の差が大きく、一概に集約することは不可能である。しかし、全体的に概感すると2種類に大別されるようである。それは先の胎土の違いと密接な関係がありそうである。

胎土が白色を示す個体は、釉が非常に厚くかけられ、それも不透明なガラス質であるために印花文も不明瞭となる。したがって、成形時のロクロ目も32以外ではまったくみえない。色調は濃淡がみられるものの所謂緑色で、砧青磁に近いものから天龍寺青磁に近いものなど各種みられる。

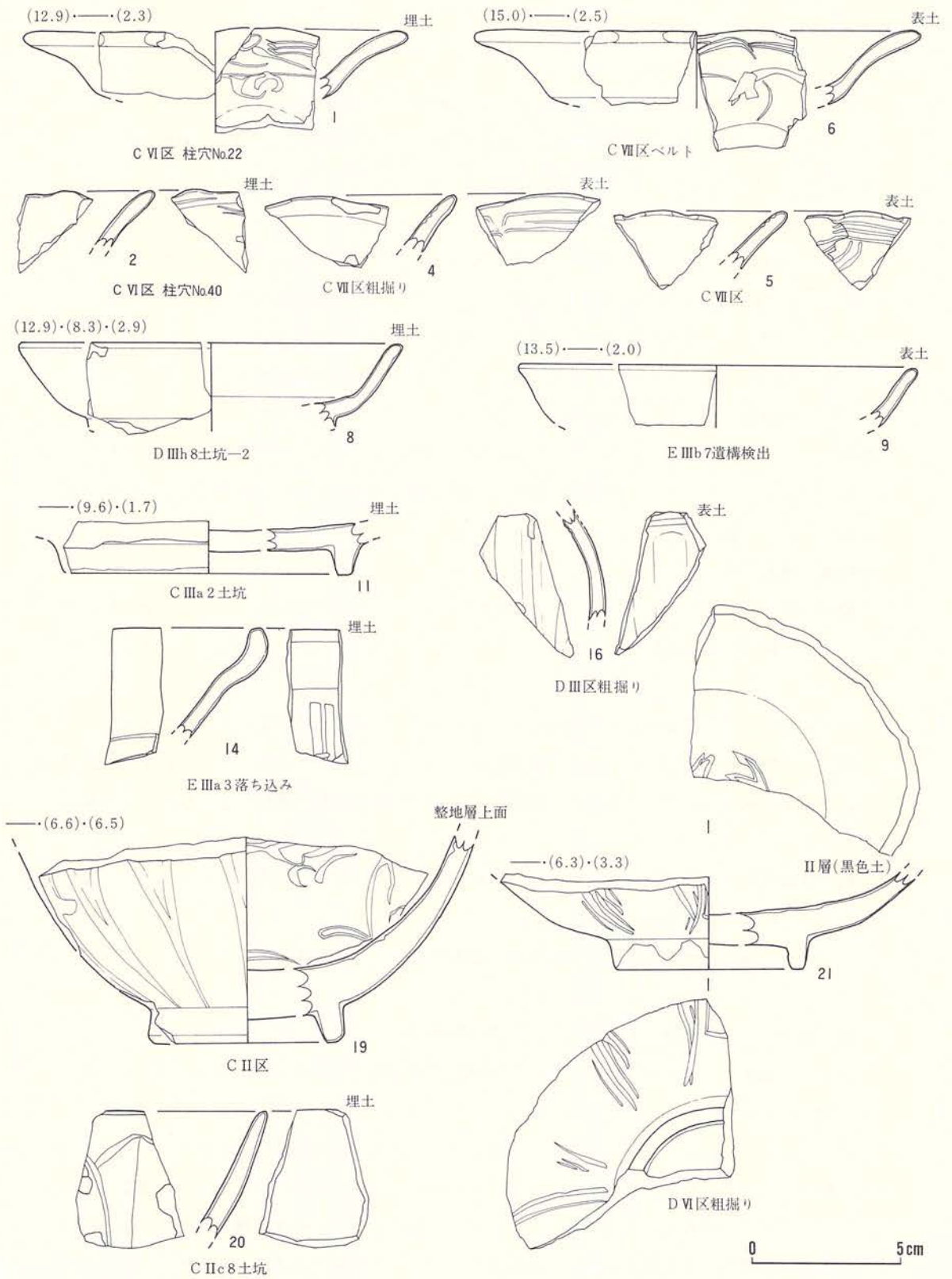
胎土が灰色や黒灰色の粗い個体は、釉のかかり方が一般に薄く、半透明なガラス質で、成形時のロクロ目が明瞭にみえる例が多い。

このような違いは胎土同様生産地の違いに起因するものと推定される。

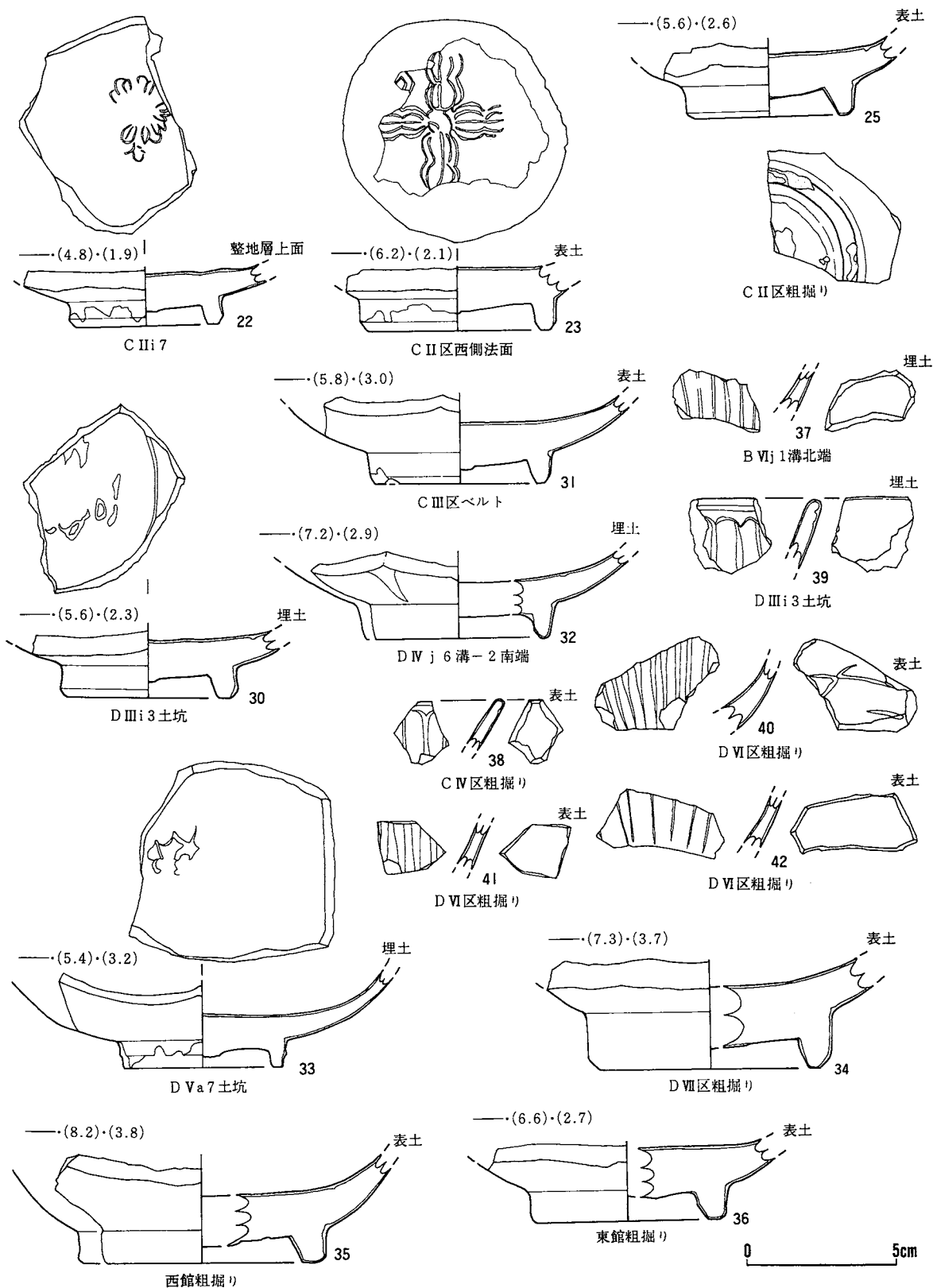
皿・盤 (第7表、第316図1～15、写真図版80)

合わせて15点(1～15)の出土であるが、この中には稜花皿8点(1～7・10)、丸皿2点(8・9)、盤5点(11～15)の破片が含まれる。

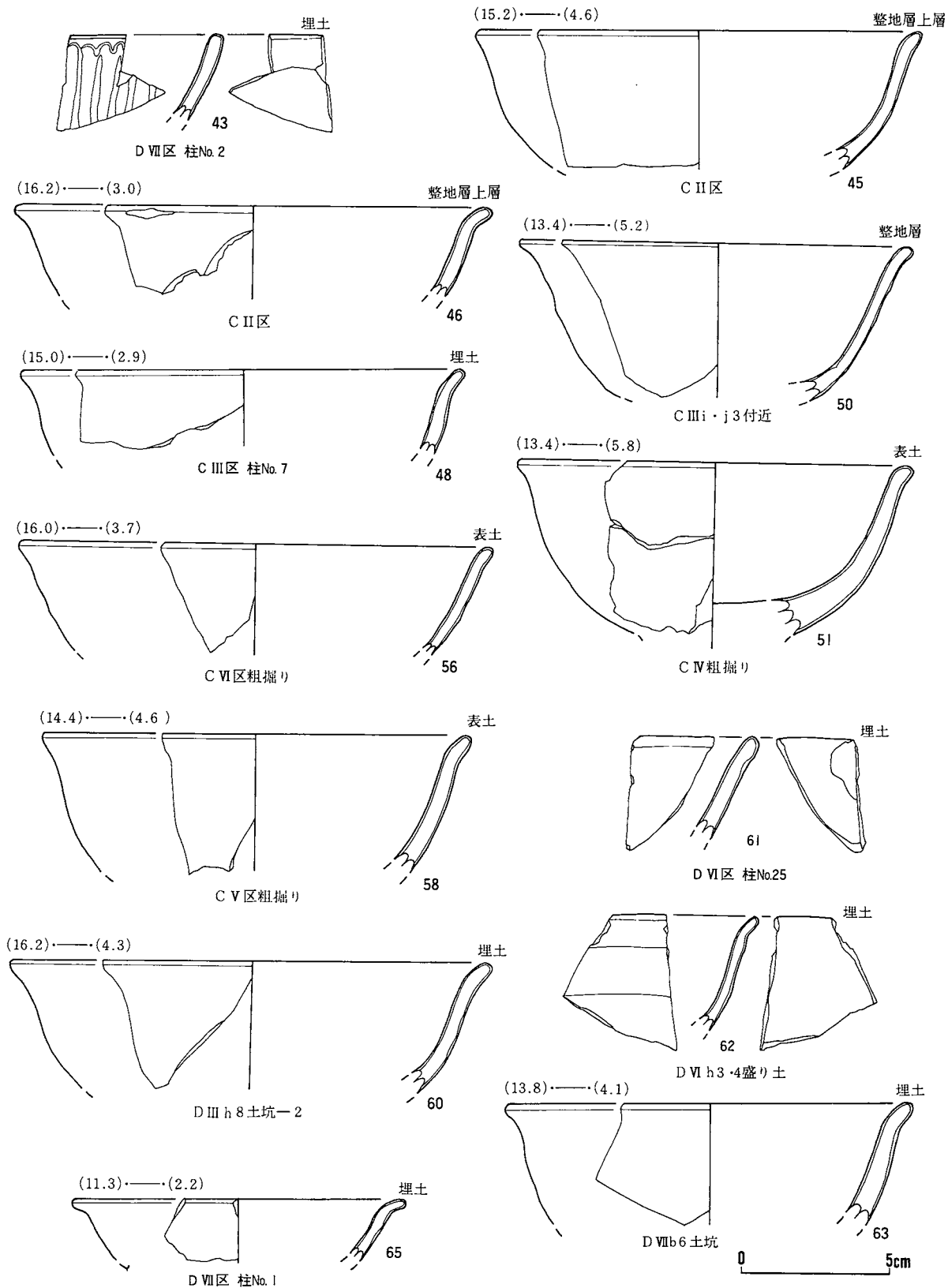
稜花皿は1点(10)を除いて他は東館からの出土である。10以外は口縁部を残す破片であるが、底部を残すものは含まない。1・6の器形は、高台脇から大きく外傾した体部下位は腰部で屈曲して立ち上がり、体部上位～口縁部は外反し口縁は輪花をなす。外面は無文であるが、内面は体部上位～口縁部に画花文をもつ。底部は残存しないため不明であるが、他遺跡の例から低い



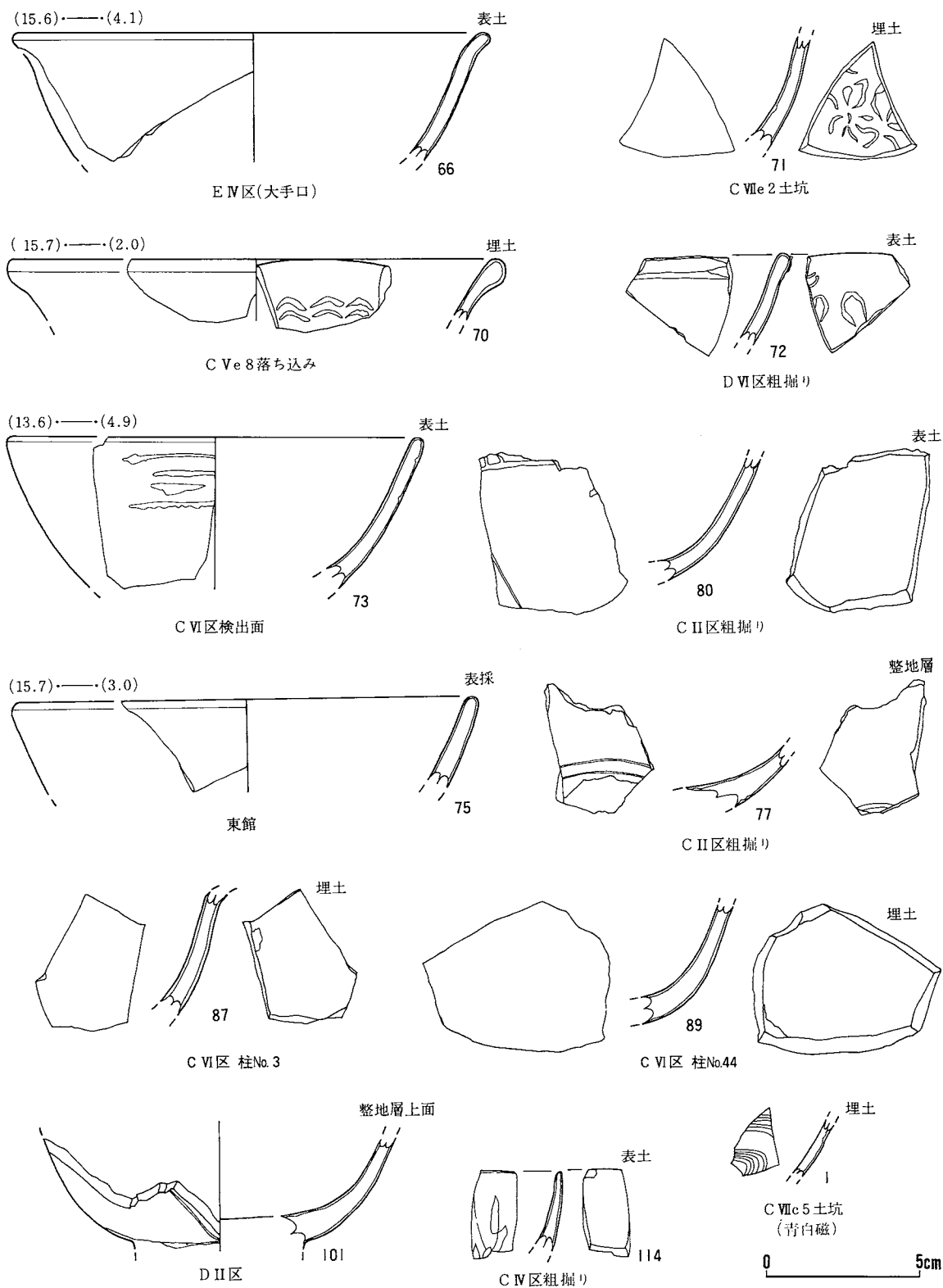
第316図 中国磁器(青磁一I)



第317図 中国磁器(青磁-2)



第318图 中国磁器(青磁-3)



第319図 中国陶磁器(青磁—4)

第7表 青磁一覽表

No	出土地点	層位	器種	部位	口縁部径 (cm)	高台径 (cm)	器高 (cm)	器厚 (cm)	釉調	胎土	文様	特 徴	図版	写真
1	C VI区柱 No22	埋土	稜花皿	口縁～ 体中部	(12.9)	—	(2.3)	0.6	青緑色	灰色		両面に貫入が入る	316	80
2	C VI区柱 No40	埋土	稜花皿	口縁～ 体中部	—	—	(1.9)	0.5	青緑色	青灰色		両面に貫入が入る	316	〃
3	D VII区 粗掘り	表土	稜花皿	口縁部					青緑色	灰色		小破片、貫入がある		〃
4	C VII区 粗掘り	表土	稜花皿	口縁部	—	—	(1.9)	0.6	明灰緑色	灰白色		軸に白濁部が点在する	316	〃
5	C VII区 粗掘り	表土	稜花皿	口縁～ 体中部	—	—	(2.0)	0.6	灰緑色	灰白色		軸に黒点が散在し、若干 貫入が入る	316	〃
6	C VII区 ベルト	表土	稜花皿	口縁～腰部	(15.0)	—	(2.5)	0.6	灰緑色	灰色		貫入が入る	316	〃
7	東館 東西ベルト	表土	稜花皿	口縁～ 体中部					淡明緑色	白色		小破片、竜泉系の胎土		〃
8	D III h 8 土坑-2	埋土	丸皿	口縁～ 高台部	(12.9)	(8.3)	(2.9)	0.6	緑色	淡灰白色		口縁を玉縁状に仕上げ、 見込部を若干段差で低く している	316	〃
9	E III b 7 遺構検出	表土	丸皿	口縁～腰部	(13.5)	—	(2.0)	0.45	淡灰緑色	淡灰白色		口縁が軽く端反り	316	〃
10	D III区 粗掘り	整地層	皿	腰部?					灰緑色	濃灰色		小破片、軸に白濁部があ る		〃
11	C III a 2 土坑	埋土	皿	底部	—	(9.6)	(1.7)	0.8	緑色	淡灰白色		畳付を残して全面施釉、 竜泉系の胎土	316	〃
12	D III j 2 土坑	埋土	盤	体上部					緑色	淡灰白色		竜泉系の胎土、貫入入る		〃
13	E III a 1 土坑	埋土	盤	体上部					緑色	淡灰白色		竜泉系の胎土、貫入入る、 12と同個体		〃
14	E III a 3 落ち込み	埋土	盤	口縁～ 体上部	—	—	(3.7)	0.5	緑色	淡灰白色		竜泉系の胎土、貫入入る、 12と同個体	316	〃
15	C II区 外廂法面	表土	盤	体上部					緑色	淡灰白色		竜泉系の胎土、貫入入る、 12と同個体		〃
16	D III区 粗掘り	表土	水注	体部	—	—	(3.5)	0.5	緑色	白色	あり	竜泉系の胎土	316	〃
17	C V g 9 柱穴	埋土	蓋付壺	口縁部					褐色塗彩	白色		竜泉系口縁部露胎で褐色 塗彩(酸化鉄)、内面に青 磁釉		〃
18	E IV区 (大手口)	表土	酒会壺	体部?					緑色	灰白色	あり	竜泉系		〃
19	C II区 整地層	上面	竈蓮弁文 碗	体中部 ～底部	—	(6.6)	(6.5)	1.45	緑色	淡い灰白～ 褐灰色	あり	竜泉系高台内まで施釉、 高台小さく外に開く、底 部底成不良	316	〃
20	C II c 8 土坑	埋土	竈蓮弁文 碗	口縁～ 体中部	—	—	(4.0)	0.65	深緑色	灰白色	あり	蓮弁文の彫刻が不明瞭	316	〃
21	D VI区 粗掘り	II層 (黒色土)	蓮弁文 碗	体下部 ～底部	—	(6.3)	(3.3)	1.0	やや透明な緑色	淡青灰色	あり	見込部を一段低くしてい る、高台内は露胎	316	81
22	C II i 7 整地層	上面	碗	高台脇 ～底部	—	(4.8)	(1.9)	0.9	灰緑色	灰色		高台下端外側を削り、高 台やや低い、高台外側下 部～内側を露胎	317	〃
23	C II区面 側法面	表土	碗	底部	—	(6.2)	(2.1)	1.1	灰緑色	灰色		高台下端外側を削り、高 台やや低い	317	〃
24	C II区 粗掘り	表土	碗	底部					緑色	灰白色		小破片、竜泉系の胎土		〃
25	C II区 粗掘り	表土	碗	高台脇 ～底部	—	(5.6)	(2.6)	1.0	緑色	灰白色		竜泉系・高台内外に施釉 後、外底を輪状にふきと り	317	〃
26	C III g 4	検出面	碗	高台脇 ～底部					緑色	灰白色		竜泉系の小破片、高台を 欠損、25と同じ縁相		〃
27	C IV区 粗掘り	検出面	碗	高台脇 ～底部					黄味をもつ緑色	淡い黄褐色		焼成不良の竜泉系か?小 破片、外底の袖円形フキ トリ		〃
28	C VI区柱 No27	埋土	碗	底部					緑色	白色		竜泉系の小破片、高台下 端外側を削り、高台内外 まで施釉		〃
29	C VII e 7 土坑	埋土	碗	底部					灰緑色	濃灰色		高台外側まで施釉		〃
30	D III i 3 土坑	埋土	碗	高台脇 ～底部	—	(5.6)	(2.3)	0.95	灰緑色	濃灰色		高台下端外側を軽く削 り、外面のみ施釉、二次 火焼	317	〃
31	D IIIベルト	表土	碗	高台脇 ～底部	—	(5.8)	(3.0)	1.0	灰緑色	灰緑色		高台下端外側の一部を削 り、高台外面と畳付の一 部施釉	317	82

32	DIV j 6 溝 -2 南端 (CV)	埋土	碗	高台脇 ~底部	-	(7.2)	(2.9)	0.9	灰緑色	灰色		高台内外面が削られ、 高台角気味となり、全面 施釉か?	317	81
33	D Va 7 土坑	埋土	碗	体下部 ~底部	-	(5.4)	(3.2)	0.8	灰緑色	灰色		高台下端外側を削り、高 台下部まで施釉	317	82
34	D VII 区 粗掘り	表土	碗	高台脇 ~底部	-	(7.3)	(3.7)	1.3	黄味をおびくす んだ緑色	赤味のある 褐色		焼成不良の竜泉系、高台 全面施釉後外底円形フキ トリ	317	〃
35	西館粗掘 り	表土	碗	高台脇 ~底部	-	(8.2)	(3.8)	1.3	僅かに青味をも つ緑色	褐色~暗褐色		焼成不良の竜泉系、高台 全面施釉後外底円形フキ トリ?	317	〃
36	東館粗掘り	表土	碗	高台脇 ~底部	-	(6.6)	(2.7)	1.3	若干黄味をも つ緑色	褐色		竜泉系高台全面施釉後外 底円形フキトリ	317	〃
37	B VI j 1 溝北端	埋土	線描蓮弁文 碗	体下部	-	-	(1.4)	0.5	緑色	灰色	あり	小破片、細線で間隔不揃 い	317	〃
38	C IV 区 粗掘り	表土	線描蓮弁文 碗	口縁部	-	-	(1.7)	0.45	緑色	灰色	あり	小破片、直口型、蓮弁の 巾がやや広い	317	〃
39	D III i 3 土坑	埋土	線描蓮弁文 碗	口縁部	-	-	(2.4)	0.6	青味のある緑色	青灰色	あり	小破片、直口型、端部に 沈線がめぐり蓮弁の巾や や広い	317	〃
40	D VI 区 粗掘り	表土	線描蓮弁文 碗	体下部	-	-	(2.4)	0.9	緑色	灰白色	あり	小破片、蓮弁の巾が狭く、 不揃いである二次焼成を 受けている	317	〃
41	D VI 区 粗掘り	表土	線描蓮弁文 碗	体中部	-	-	(1.6)	0.5	緑色	褐色	あり	小破片、蓮弁の巾が狭く、 不揃いである。二次焼成 を受けている	317	〃
42	D VI 区 粗掘り	表土	線描蓮弁文 碗	体下部	-	-	(1.8)	0.55	緑色	灰色	あり	小破片、細線で蓮弁の巾 が不揃い	317	〃
43	D VII 区柱 No 2	埋土	線描蓮弁文 碗	口縁~ 体中部	-	-	(3.0)	0.5	緑色	灰白色	あり	竜泉系か、蓮弁はやや巾 広、直口型	318	〃
44	B VI j 1 溝北端	埋土	玉縁状 碗	口縁部					灰緑色	灰白色		竜泉系か、端反りの程度 小さいが、外側肥厚で玉 縁状となる	〃	〃
45	C II 区 整地層	上層	端反り 碗	口縁~ 体中部	(15.2)	-	(4.6)	0.6	灰緑色	灰色		貫入する、頸部に僅かな 稜をもつ	318	83
46	C II 区 整地層	上層	碗	口縁~ 体中部	(16.2)	-	(3.0)	0.6	緑色	灰色		貫入する、二次火熱を受 けている	318	〃
47	C III h 4 土坑	埋土	碗	口縁部					褐色気味	褐色		小破片、焼成不良、細か な貫入	〃	〃
48	C III 区柱 No 7	埋土	碗	口縁~ 体中部	(15.0)	-	(2.9)	0.5	黄味のある緑色	褐色		細かな貫入	318	〃
49	C III 区柱 No 14	埋土	碗	口縁~ 体下部					緑色	灰白色		粗い貫入、竜泉系、 二次火熱を受けている	〃	〃
50	C III i j 3 付近	整地層	碗	口縁~ 体下部	(13.4)	-	(5.2)	0.7	緑色	灰色		粗い貫入、見込み茶 溜り部に沈線めぐる	318	〃
51	C IV 区 粗掘り	表土	端反り 碗	口縁~ 体下部	(13.4)	-	(5.8)	1.2	深緑色	白色		竜泉	318	〃
52	C V 区柱 No 33	埋土	碗	口縁~ 体上部					灰緑色	灰色		二次焼成、体上部に若干 の段あり	〃	〃
53	C V 区 粗掘り	表土	碗	口縁~ 体上部					緑色	灰色		細かい貫入、体上部 に軽い段あり	〃	〃
54	C VI i 10 土坑	埋土	碗	口縁~ 体上部					緑色	白色		竜泉、線かい貫入	〃	〃
55	C VI 区柱 No 2	埋土	碗	口縁~ 体上部					白濁点のある 灰緑色	黄褐色		焼成不良、竜泉系?	〃	〃
56	C VI 区 粗掘り	表土	碗	口縁~ 体上部	(16.0)	-	(3.7)	0.4	緑色	灰青色		僅かの貫入、端反り 程度小さい	318	〃
57	C VI 区 粗掘り	表土	碗	口縁部					灰緑色	灰色		二次火熱を受けている。 小破片	〃	〃
58	C V 区 粗掘り	表土	碗	口縁~ 体下部	(14.4)	-	(4.6)	0.7	若干くすんだ 深緑色	薄い褐色		竜泉系、焼成不良、貫入 する	318	〃
59	D II 区 粗掘り	表土	碗	口縁部					淡い緑色	白色		竜泉、体上部に内外面と も沈線状の段がめぐる	〃	〃
60	D III h 8 土坑-1	埋土	碗	口縁~ 体下部	(16.2)	-	(4.3)	0.6	深い緑色	濃い灰色			318	〃
61	D VI 区柱 No 25	埋土	玉縁状 碗	口縁~ 体中部	-	-	(3.5)	0.6	若干黄味をも つ緑色	濃い褐色		焼成不良、端反りの程度 小さく、外側が肥厚して 玉縁状となる	318	〃
62	D VI h 3- 4 盛り土	埋土	端反り 碗	口縁~ 体下部	-	-	(3.9)	0.5	灰緑色	濃い灰色		器表に白点が散在	318	84
63	D VII b 6 土坑	埋土	碗	口縁~ 体中部	(13.8)	-	(4.1)	0.8	緑色	白色		竜泉、粗い貫入、器壁厚 い	318	〃
64	D VI 区 粗掘り	表土	碗	口縁部					緑色	白色		竜泉系、細かい貫入	〃	〃
65	D VII 区柱 No 1	埋土	碗	口縁~ 体上部	(11.3)	-	(2.2)	0.4	透明は淡い緑色	褐色		体上部に隆線めぐる	318	〃

66	EIV区 (大手口)	表土	碗	口縁～ 体下部	(15.6)	—	(4.1)	0.5	灰緑色	濃灰色	粗い貫入が入る	319	〃	
67	西館 トレンチ10	表土	碗	口縁～ 体上部					緑色	灰白色	貫入が入る		〃	
68	西館中央 トレンチ	表土	碗	口縁～ 体上部					灰緑色	灰色	貫入が入る		〃	
69	東館文化課 トレンチ	表採	端反り 碗	口縁部					緑色	濃灰色	貫入が入る		〃	
70	CVe 8 落ち込み	埋土	玉端状 碗	口縁部	(15.7)	—	(2.0)	0.7	緑色	灰色	端反りの程度小さく、玉 縁状となる	319	〃	
71	CVIe 2 土坑	埋土	碗	体部	—	—	(3.7)	0.6	緑色	灰色	口縁部が残っていない が、玉縁状であろう	319	〃	
72	DVI区 粗掘り	表土	碗	口縁～ 体中部	—	—	(2.9)	0.5	緑色	灰色	玉縁状口縁となる	319	〃	
73	CVI区 検出面	表土	直口型 碗	口縁～ 体下部	(13.6)	—	(4.9)	0.7	深緑色	灰色	体上部外面に横方向の凹 みがある口縁部に雷文帯	319	〃	
74	東館ベルト	表土	碗	口縁～ 体上部					透明な黄味のある 緑色	褐灰色	小破片、灰釉的な軸であ る、半磁?		〃	
75	東館	表採	碗	口縁～ 体上部	(15.7)	—	(3.0)	0.7	深緑色	白色	竜泉系	319	〃	
76	CII区 粗掘り	表土	端反り 碗	体部					灰緑色	褐灰色	小破片		〃	
77	CII区 粗掘り	整地層	碗	体上部～ 高台脇	—	—	(2.0)	0.9	緑色	褐灰色	茶溜り部に沈線をめぐ る	319	〃	
78	CII区 粗掘り	表土	碗	高台脇～ 底部					灰緑色	濃褐灰色	小破片		〃	
79	CII区 粗掘り	表土	碗	体部					緑色	白色	竜泉系、割れ口が不規則 で二次火熱を受けている か?		〃	
80	CII区 粗掘り	表土	雷文帯 碗	体上部～ 体下部	—	—	(3.9)	0.6	深緑色	灰白色	あり	竜泉系、二次火熱を受け ている	319	〃
81	CII区 粗掘り	表土	玉縁状 碗	体部					深緑色	灰色	花文が不明瞭		85	
82	CIII区柱 No 3	埋土	端反り 碗	体部					緑色	褐灰色	小破片		〃	
83	CIII g 4 土坑	埋土	碗	体部					灰緑色	灰色	小破片		〃	
84	CIV区柱 No 7	埋土	碗	高台脇～ 体下部					灰緑色	濃灰色	若干貫入が入る		〃	
85	CIV区 粗掘り	表土	碗	体中～下部					深緑色	白色	竜泉		〃	
86	CVa 8 土坑	埋土	碗	体中部～ 高台脇					灰緑色	白色	半磁、粒子の粗い胎土		〃	
87	CIV区柱 No 3	埋土	碗	体上部～ 体下部	—	—	(4.0)	0.7	白斑が点在する 灰色	褐灰色	竜泉系の焼成不良	319	〃	
88	CVI区柱 No16	埋土	碗	体下部～ 高台脇					緑色	白色	竜泉系、茶溜りに沈線が めぐる		〃	
89	CVI区柱 No44	埋土	碗	体中部～ 高台脇	—	—	(4.0)	0.85	緑色	淡灰緑色	非常に焼成が良好	319	〃	
90	CVIa 3溝中央	埋土	碗	体部					深緑色	白色	竜泉系		〃	
91	CVIc 8溝北端	埋土	碗	高台脇					緑色	白色	竜泉系、小破片		〃	
92	CVI区 粗掘り	表土	碗	体部					緑色	灰色	小破片		〃	
93	CIII区柱 No 7	埋土	碗	体中部～ 体下部					深緑色	白色	竜泉系		〃	
94	CVIe 2 土坑	東側埋土	碗	体下部					灰緑色	濃灰色	半磁、粒子が粗い		〃	
95	DIII i 3 土坑	埋土	碗	体下部					深緑色	白色	竜泉系、小破片		〃	
96	DIII h 2 土坑	埋土	碗	体上部					深緑色	白色	竜泉系、小破片		〃	

97	D III f 3 柱穴	埋土	碗	体下部					緑色	白色	竜泉系、小破片		〃
98	D III区 粗掘り	表土	碗	体下部～ 高台脇					灰緑色	濃灰色	胎土が異質		〃
99	D III区 粗掘り	表土	碗	高台脇					深緑色	白色	竜泉系		〃
100	D II区柱 No 6	埋土	碗	体部					透明な淡い灰緑色	灰色	小破片		〃
101	D II区 整地層	上面	碗	体中部～ 高台脇	—	—	(3.6)	0.9	緑色	白色	竜泉系、二次火熱を受けている	319	〃
102	D II区 粗掘り	表土	碗	体上部～ 体中部					灰緑色	灰色	焼成が非常に良好		86
103	D III h 3 検出面	表土	碗	体部					緑色	白色	竜泉系、小破片		〃
104	D III h 3 検出面	表土	碗	体部					灰緑色	灰色	小破片		〃
105	D V区 粗掘り	表土	碗	体部					緑色	白色	竜泉系、小破片		〃
106	D V区 粗掘り	II層	碗	体部					灰緑色	白色	竜泉系、小破片		〃
107	D VI区 粗掘り	表土	碗	体部					灰緑色	白色	竜泉系、小破片		〃
108	D VI区 粗掘り	表土	碗	高台脇					緑色	白色	竜泉系、小破片		〃
109	D VI区 粗掘り	表土	碗	体下部					暗緑色	褐灰色	竜泉系の焼成不良品?		〃
110	D VII区柱 No 9	埋土	碗	体上部					黄味をもつ緑色	褐色	竜泉系の焼成不良品?		〃
111	D VII区 粗掘り	表土	碗	体上部					黄味をもつ緑色	褐色	竜泉系の焼成不良品?		〃
112	西館文化課 トレンチ	T-4 表土	碗	体部					灰緑色	灰色	小破片		〃
113	東館	表土	碗	高台脇					灰緑色	濃灰色			〃
114	C IV区 粗掘り	表土	小杯	口縁～ 体中部	—	—	(2.4)	0.5	緑色	白色	竜泉系	319	〃
115	内堀	埋土	碗	体下部					濃緑色	白色	竜泉系		〃
116	内堀	盛土内	碗	体中部～ 高台脇					灰緑色	褐白色	買入が多く入る		〃
117	表探	表土	碗	体部					灰緑色	灰黒色	小破片		〃
118	C VII c 2 土坑	埋土	碗	体部					緑色	褐灰色	小破片		〃

輪高台がつくと推定される。7の胎土は白色で白磁の胎土に近いが、その他はいずれも灰色を示す砂質気味の粗い土である。釉調も7のみが他と異って淡い緑色を示すが、他は灰緑色・緑色・青緑色と幅があり、7を除いたすべてに買入が入る。1・6の推定される口縁部径は12.9cm、15cmである。時期的には15世紀後半頃の製品であろう。

丸皿（8・9）には端部外面を若干肥厚させて玉縁状に作り僅か外反させる8と、単純に外反させる9がある。さらに、8は見込み部分に断面三角形の低い突帯を巡らし、内側を僅かに窪ませる。推定される口縁部径は8が12.9cm、9が13.5cmである。胎土はともに黒点の点状の点状の白色であるが、釉の色調は濃い緑色、8は淡い灰緑色と差がみられる。底部は残存しないことから不明であるが、他遺跡例からみて低い輪高台が付着すると考えられる。15世紀後半頃の製

品であろうか。

盤と考えられる5点(11~15)はすべて西館西端部からの出土である。胎土や釉の状況から11と12~15の2個体の破片と考えられる。11は断面が台形状に近い形を示す径9.6cm位で高さ8mmの若干内傾する輪高台の付く底部破片である。見込部分は無文である。胎土は非常に緻密で黒点が点在する白色を示す。釉は畳付けを除いて全面に施釉され、貫入の入る青緑色の半透明なガラス質である。12~15は体部と口縁部破片で、外面に3条の並行する横方向の沈線が付され、内面には幅3mm~5mmの浅い窪みが底部から口縁部の縦方向に並行して付けられる。口縁部は外方へ屈曲した後、その上位は大きく内湾して直立し、全体が受口状をなす。胎土は11と同様で、釉は貫入の入る半透明なガラス質で、色調は深緑色である。時期的には11が14世紀前期、12~15は15世紀前半頃の製品と推定される。

水注 (第7表、第316図16、写真図版80)

体部破片が1点(16)出土している。外面に断面三角形と丸形の鑄文が交互に入り、谷部に手の付着した痕跡を残す。全体的な器形等は不明であるが、器厚が3mm前後と薄く、手が付く可能性があることから、蓋付の小型水注と推定した。胎土は緻密で焼成が良く、色調は黒点が点在する白色である。釉は淡緑色に発色する貫入の入らない半透明なガラス質である。14世紀前期頃の製品であろう。

壺 (第7表、写真図版80)

有蓋壺の体部破片が1点(18)と口縁部破片1点(17)が出土している。ともに小破片のため全体的なことは不明である。18は外面に唐草文が付された後緑色に発色する貫入の入る半透明なガラス質の釉が厚くかけられる。胎土は黒点が点在する白色を示し、緻密で焼成は良好である。17は口唇から口縁部の外面を茶色に発色する露胎とする。胎土は18のそれと同様である。時期的には、18は14世紀後期、17は15世紀頃の製品であろう。

小杯 (第7表、第319図114、写真図版80)

口縁部から体部にかけての破片が1点(114)出土している。口縁部径を算出できるほどの破片ではないので大きさは不明である。体部は内湾気味に外傾して立ち上がり、口縁部はほぼ直口である。胎土は黒点が点在する白色で、釉は淡い緑色に発色する不透明なガラス質である。15世紀~16世紀の製品であろう。

〈青白磁〉 (第319図1、写真図版88)

体部の小破片が1点出土している。外面に陰刻による唐草文をもち、淡い青緑色を示す透明釉がかけられ、内面は露胎である。器厚は2mm～3mmと薄く、破片の湾曲程度からみて水注とした。13世紀末～14世紀前期の製品であろう。

〈白磁〉

西館から29点、東館23点の合わせて52点の破片が出土している。これらには碗4点(7.54%)、皿42点(79.24%)、小杯1点(1.88%)、香炉1点(1.88%)、壺5点(9.43%)が含まれる。

碗 (第8表、第320図1・6～8、写真図版86)

破片4点(1・6・7)の出土であるが、6と7は接合していることから、3個体を含む。いずれも西館の出土で、口縁部1点(1)、底部2点(6・8)である。1は口縁部内面の端部から口唇を露胎にする所謂口兀げの碗である。器形は定かでないが、体部上位は緩やかに外反し端部で幾分強くなり、口唇部は角形に削られる。胎土は緻密で白色を示し、釉は貫入が入り光沢のない淡緑白色に発色している。器厚は3mm位であるが、端部は若干薄くなる。推定される口縁部径は14.6cmである。接合した6・7の個体と8は2個体とも底部のみを残すが、高台の形・技法が同じであることから同系のものと推定される。2点とも外面がほぼ直に、内面は端部を削ぐ断面逆台形状の削り出し高台で、外底も粗く削り込み、畳付けは外側が上る。6・7は高台脇に軽い段をもつが8にはない。見込部分には圈線を入れ、茶溜りは緩やかに窪み、6・7は中央部が僅かに盛り上がり、8は不明瞭であるが押印の痕跡がある。胎土はともに緻密で白いが、6・7には黒点が点在する。釉は貫入の入らない淡い緑白色を示す光沢のない透明釉である。底部径は4.8cm位と推定される。時期的には3個体とも14世紀前半頃の製品であろう。

小杯 (第8表、第320図9、写真図版87)

1点の出土である。体部から底部までを残すが、畳付け部分を欠く。底部は削り出しによる径2.8cm前後の輪高台で、高台脇から腰部まで大きく外傾し、腰部で内湾して立ち上がる器形と推定される。器厚は体部・底部とも2mm～2.5mmであるが高台脇は5mm位と厚い。胎土は黒点の入る緻密な土で、焼成は良好である。釉は若干灰色気味の白色に発色し、外面の高台脇や腰部の一部に釉ののらない虫食いがある。15世紀末～16世紀の製品であろう。

皿 (第8表、第320・321、図2・3・10～49、写真図版87・88)

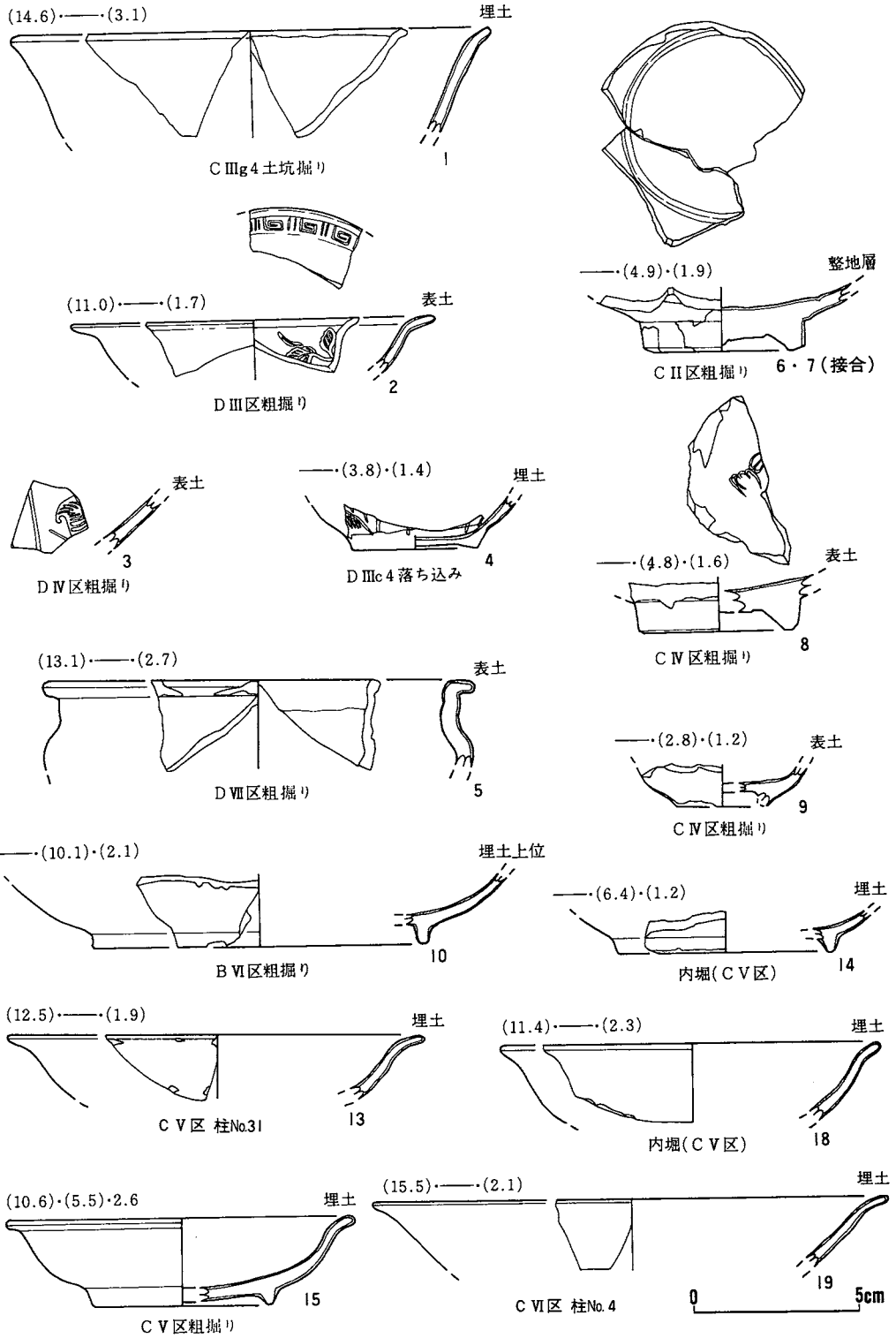
41点には口縁部20点(2・13・15・16・18～20・22～25・28・29・31・32・37・45・46・38・49)、体部14点(3・11・12・26・27・34・35・36・40・41・43・44・47・48)、底部7点(10・14・21・30・33・39・42)が含まれる。これらは西館から19点、東館から21点の出土と差のない出土状況であるが、各館とも集中して出土する地点がある。西館の場合はCⅡ区、CⅢ区、DⅡ区、DⅢ区から14点、東館の場合はCⅤ区、CⅥ区、DⅥ区から17点が出土している。

出土した全体を概観すると所謂口元げ形のもの、口縁部が外反するもの、口縁部が直口で器壁が厚いもの、口縁部が直口で器壁が薄いものの4種類に分かれる。

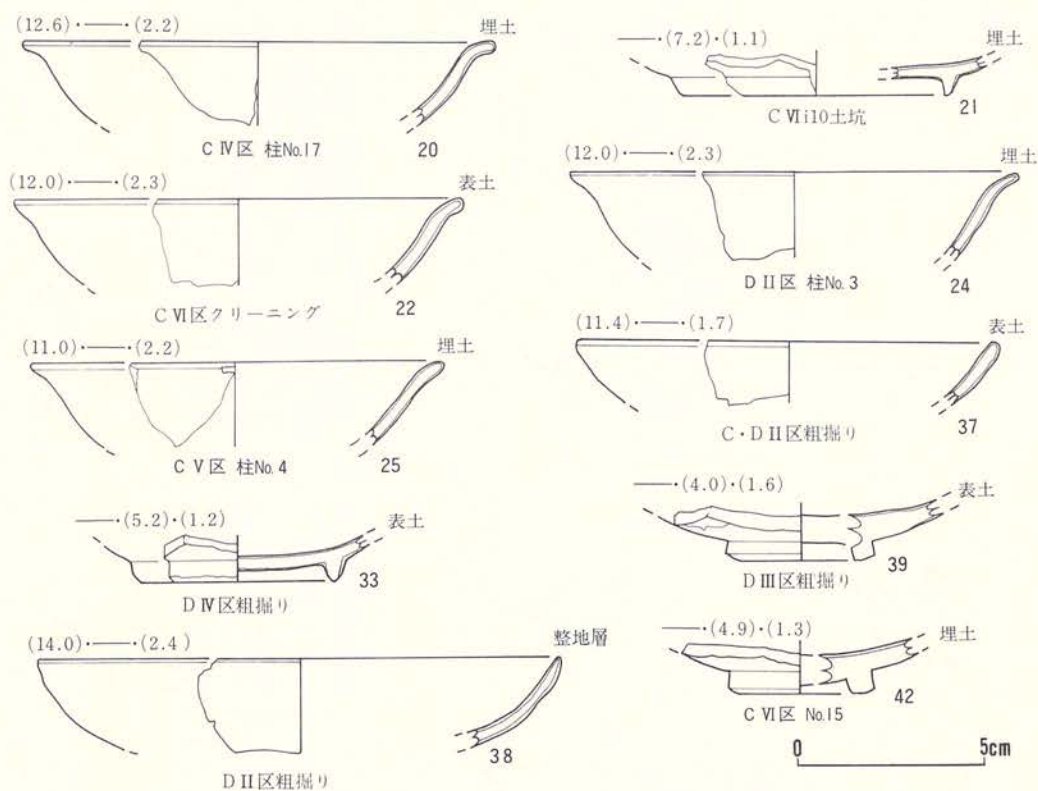
口元げ形は2点(2・3)であるが、口縁部1点(2)と体部1点(3)を含む。2は口縁部径が11cm位と推定される小型品である。内湾気味に軽く外傾する体部は口縁部で大きく外方へ屈曲する。外面にはロクロ目と考えられる並行する低い隆線がみられ、内面の体部には型による牡丹唐草文、口縁部には同じく型による雷文帯が巡る。釉は非常に薄く、口縁端部の内面と口唇部を除いて全面に施釉される。器厚は2mm位であるが端部は削られて薄く口唇部は丸くおさまる。胎土は白色を示し、緻密で焼成は良好である。3の特徴も2のそれと同様であるが、破片の湾曲程度からみて、2より大型になる別個体と考えられる。14世紀の製品であろう。

口縁部が外反する23点(10・13～35)には口縁部14点(13・15・16・18～20・22～25・28・29・31・32)、体部4点(26・27・34・35)、底部5点(10・14・21・30・33)が含まれる。出土地点では、西館8点、東館15点と東館からの出土が多い。また、各館ごとの出土状況をみると、西館ではDⅡ区とDⅢ区から6点、東館の場合はCⅤ区・CⅥ区・DⅥ区から15点が出土している。器形は、高台脇から外傾した体部下位は腰部で大きく内湾して立ち上がり、口縁部で外反し口唇部は丸くおさまる。見込み部分は中央部に向って緩やかに窪む。高台は削り出しの輪高台で約3mmの高さをもって幾分内側に窄む。大きさは、推定される口縁部径が10cm台1点、11cm台2点、12cm台4点、15cm台1点となり、11cm～12cmの大きさが標準であろう。底部径についてみれば、5cm、6cm、7cm台各1点、10cm台1点となり、口縁部径のそれに沿うような状況を示している。胎土は白色で緻密な土を使用し、焼成は良好である。釉は、白色～緑白色や黒点を点在するものなど各種みられ、畳付けを除いて全面に施釉されるが一部に虫喰いがみられる。15世紀後半から16世紀に位置づけられるであろう。

口縁部が直口で器厚の厚いものが9点(37・39・40～47)出土し、その中に口縁部3点(37・45・46)、体部4点(41・43・44・47)、底部2点(39・42)が含まれ、これらは西館から5点、東館から5点出土した。高台脇から斜上方に伸びる体部は次第に大きく内湾し、口縁部は直口気味をなす。器厚が、高台脇を7mm位と厚くするが、体部は口縁部に向って次第に薄くし、口縁端部は3mm位の厚さをもち口唇は丸く(37)や角張る(45・46)。高台は削り出しによる輪高



第320图 中国磁器(白磁一)



第32図 中国磁器(白磁-2)

第8表 白磁一覽表

No.	出土地点	層位	器種	部位	口縁部径 (cm)	高台径 (cm)	器高 (cm)	器厚 (cm)	釉調	胎土	文様	特徴	図版	写真
1	C III 8 4 土坑	埋土	口元碗	口縁～ 体上部	(14.6)	—	(3.1)	0.4	淡い灰緑色が かった白色	白色		口唇と内面端部を露胎、 細かい貫入	320	86
2	D III区 粗掘り	表土	口元碗	口縁～ 体上部	(11.0)	—	(1.7)	0.3	淡い灰色がか った白色	白色		口唇と内面端部を露胎、 端部外反り	320	〃
3	D IV区 粗掘り	表土	口元皿	体部	—	—	(1.3)	0.4	淡い灰色がか った白色	白色		小破片	320	〃
4	D III c 4 落ち込み	埋土	壺	体下部 ～底部	—	(3.8)	(1.4)	0.3	青白気味の白磁	白色	あり	体部下端～底部露胎、型 おこし成形	320	〃
5	D VII区 粗掘り	表土	香炉	口縁～底部	(13.1)	—	(2.7)	0.5	青白気味の白磁	白色		口縁外折、内面は頸部下 位より下は露胎	320	〃
6	D II区 粗掘り	整地層	碗	高台脇 ～高台	—	(4.9)	(1.9)	0.4	緑色がか った白色	淡灰白色		やや高い露胎の削りだし 高胎	320	〃
7	C II区 粗掘り	整地層	碗	高台脇 ～高台	—	(4.9)	(1.9)	0.4	緑色がか った白色	淡灰白色		6と接合する		〃
8	C IV区 粗掘り	表土	碗	高台脇 ～高台	—	(4.8)	(1.6)	0.5	緑色がか った白色	白色		やや高い露胎の削りだし 高胎	320	〃
9	C IV区 粗掘り	表土	小杯	体下部 ～底部	—	(2.8)	(1.2)	0.4	淡い灰白色	白色		高台がつく	320	87
10	B VI区外 掘り	埋土上位	端反り皿	体中部 ～底部	—	(10.1)	(2.15)	0.3	白色	白色		畳付部のみ露胎	320	〃

11	C II区 粗掘り	表土	端反り皿	体中部～ 体下部					白色	白色	小破片	87
12	C III区 4 土坑	埋土	端反り皿	体中部～ 体下部					白色	白色	1と接合する	〃
13	C V区柱 No31	埋土	端反り皿	口縁～ 体下部	(12.5)	—	(1.95)	0.3	白色斑点のある 淡い灰白色	白色		320 〃
14	C V区 (内堀)	埋土	端反り皿	体下部 ～底部	—	(6.4)	(1.2)	0.5	白色	白色	疊付部露胎	〃
15	C V区 粗掘り	表土	端反り皿	口縁～底部	(10.6)	(5.5)	2.65	0.4	白色	白色	疊付部露胎	320 〃
16	C V区 粗掘り	表土	端反り皿	口縁					淡い灰白色	くすんだ白色	小破片	〃
17	C V区 粗掘り	表土	端反り皿	頸部					淡い灰白色	くすんだ白色	小破片	〃
18	C V区 (内堀)	埋土	端反り皿	口縁～ 体下部	(11.4)	—	(2.3)	0.4	淡い緑白色	白色		320 〃
19	C VI区柱 No 4	埋土	端反り皿	口縁～ 体中部	(15.5)	—	(2.15)	0.35	白色	白色		320 〃
20	C VI区柱 No17	埋土	端反り皿	口縁～ 体中部	(12.6)	—	(2.25)	0.35	白色	白色	口縁が玉縁状	321 〃
21	C VI区 10 土坑	埋土	端反り皿	体下部 ～底部	—	(7.2)	(1.1)	0.3	白色	白色	疊付部露胎	321 〃
22	C VI区 フ ニシテ	表土	端反り皿	口縁～ 体下部	(12.0)	—	(2.3)	0.4	白色	白色		321 〃
23	C VI区 ベルト	表土	端反り皿	口縁～ 体中部					白色	白色		〃
24	D II区柱 No 3	埋土	端反り皿	口縁～ 体下部	(12.0)	—	(2.3)	0.3	黒点が散在する 白色	白色		321 〃
25	D V区柱 No 4	埋土	端反り皿	口縁～ 体中部	(11.0)	—	(2.2)	0.3	白色	白色		321 〃
26	D VI区柱 No14	埋土	端反り皿	頸～体上部					白色	白色	小破片	〃
27	D VI区柱 No27	埋土	端反り皿	頸～体下部					白色	白色		〃
28	D E II区 ベルト	表土	端反り皿	口縁～頸部					白色	白色	小破片	〃
29	D II区 粗掘り	表土	端反り皿	口縁～ 体上部					白色	白色	小破片、二次火熱によつて 釉が火ぶくれ	〃
30	D II区 粗掘り	表土	端反り皿	高台脇 ～底部					青味のある白色	白色	小破片	〃
31	D III区 粗掘り	表土	端反り皿	口縁～ 体上部					白色	白色	小破片	〃
32	D III区 粗掘り	表土	端反り皿	口縁～ 体下部					白色	白色		〃
33	D IV区 粗掘り	表土	端反り皿	高台脇 ～底部	—	(5.2)	(1.2)	0.3	黒点の入る白色	白色	疊付部露胎	321 〃
34	D VI区 粗掘り	表土	端反り皿	体部					白色	白色	小破片	〃
35	西館表探	表土	端反り皿	体部					白色	白色	小破片	〃
36	C D II区 粗掘り	表土	直口形皿	体部					淡い黄白色	黄白色		88
37	C D II区 粗掘り	表土	直口形皿	口縁～ 体上部	(11.4)	—	(1.7)	0.4	淡い黄白色	淡い黄白色	貫入が入る	321 〃
38	D II区 粗掘り	整地層	直口形皿	口縁～ 体下部	(14.0)	—	(2.4)	0.4	淡い黄白色	淡い黄白色	貫入が入る	321 〃
39	D III区 粗掘り	表土	直口形皿	体下部 ～底部	—	(4.0)	(1.6)	0.7	淡い黄白色	黄白色	高台脇～高台を露胎、削り 出し高台	321 〃
40	C III区 粗掘り	表土	直口形皿	体下部					白色	白色	高台脇を露胎	〃
41	D IV区 f 6 土坑	埋土	直口形皿	体部					淡黄白色	淡い黄白色	小破片、貫入あり	〃

42	CVI区柱 No15	埋土	直口形皿	体下部 底部	—	(4.9)	(1.3)	0.55	白色	白色	高台脇～高台を露胎	321	〃
43	DVI区柱 No20	埋土	直口形皿	体下部					淡い黄白色	淡い黄白色	小破片		〃
44	CVI区 粗掘り	表土	直口形皿	体部					淡い黄白色	淡い黄白色	小破片、貫入あり		〃
45	CIII区 粗掘り	表土	直口形皿	口縁～ 体上部					淡い黄白色	淡い黄白色	貫入あり、小破片		〃
46	DVI区 粗掘り	表土	直口形皿	口縁～ 体下部					淡い黄白色	淡い黄白色	貫入あり、小破片		〃
47	西館表探	表土	直口形皿	体下部					淡い黄白色	淡い黄白色	高台脇を露胎、小破片、 貫入あり		〃
48	西館表探	表土	直口形皿	体下部					淡い灰白色	淡い灰白色	高台脇を露胎		〃
49	東館ベルト	表土	直口形皿	口縁部					白色	白色	小破片		〃
50	CII区 粗掘り	表土	四耳壺	体下部					淡い緑白色	淡い灰白色	小破片		〃
51	CV区 ベルト	表土	四耳壺	肩部上位					淡い緑白色	淡い灰白色	一部に耳の付着痕をも つ、50と同個体の可能性 有?		〃
52	DVIIe 3 井戸	埋土	四耳壺	体部					淡い緑白色	淡い灰白色	小破片、50と同個体の可 能性有?		〃
53	西館	表土	四耳壺	肩部					淡い緑白色	淡い灰白色	小破片、50と同個体の可 能性有?		〃

台で軽く外方に踏ん張る。断面は逆台形状をなし、両角を削る。胎土は黄色味を帯びた緻密な土で、一部に焼成不良のものがある。釉は全面に細かい貫入の入った黄色味を帯びた透明なガラス質で、体部下位から底部を除いて全面に施釉される。推定される口縁部径が37で11.4cm、底部径が4cm、4.9cmである。15世紀中頃の製品と考えられる。

口縁部が直口で器厚が薄いものが7点(11・12・36・38・40・48・49)あり、その中に口縁部2点(38・49)、体部5点(11・12・36・40・48)を含み、11と12は接合する。器形は前者にほぼ共通するが、高台脇から次第に器厚を薄くして口縁部に続き、端部を外削ぎして口唇部は小さく丸くつくる。推定される口縁部径は14cm位である。胎土は白く緻密で焼成は良い。釉は白色と若干黄色味をもつ例があり、体部下位から底部を露胎とし他は全面に施釉する。15世紀前半頃に位置づけられるであろう。

香 炉 (第8表、第320図5、写真図版86)

口縁部から肩部にかけての小破片が1点(5)出土している。肩部に最大径をもって頸部は窄んで約1cmの直立状をなし、口縁部は外方に直に折り幅8mmの平坦面としている。所謂袴腰形の香炉である。肩部より下位の器形は不明である。胎土は白く緻密で焼成は良好である。釉は白色に発色し、外面全面と内面の頸部まで施釉される。15世紀頃の製品であろうか。

壺 (第8表、第320図4・50～53、写真図版86・88)

5点(4、50～53)の出土であるが、この中には体部下位から底部を残す破片1点(4)、肩

部～体部（51～53）、体部下位1点（50）を含み、胎土や破片の形状から3個体の破片が混在すると考えられる。

4は型作りの小型壺で、外面の体部下位に蕉葉文の陽刻がある。底部の作りが非常に粗末で、周囲を幅5mmで僅か高くして輪高台状にし、外底を若干窪ませる。内面の胎土には成形時の擦痕を多く残す。器形は、底部から直立気味に立ち上った体部下位が大きく外傾し、次第に内湾して体部上位に移行すると推定される。釉は貫入の入らない透明なガラス質で、体部下端と底部以外は全面に施釉される。14世紀頃の製品と考えられる。

50は体部下位の破片であるが、51～53の個体に比較すると胎土・焼成・釉調に差がみられることから、別個体と考えられる。器厚が1cm～1.2cmで、胎土は粗くて鬆穴が多くみられる。釉は細かい貫入の入る若干褐色味がかった淡い緑白色でにぶい光沢がある。

51～53はいずれも肩部付近の破片と推定され、51には耳が付着した痕跡を残す。内面には成形時のロクロ目が凹凸として横走り、外面には細い沈線が横走る。胎土は黒点が点在する非常に緻密な土が使われ、焼成も良好で断面は光沢をもつ。釉は貫入の入る半透明な光沢の強いガラス質で、緑白色を示す。

この2個体は推定される器形や胎土・釉からみて13世紀後半頃の製品と推定される。

〈染付〉

67点の出土であるが、いずれも破片の状態出土し、完形品は含まない。この中に碗16点（23.88%）、皿49点（73.17%）、水注の蓋1点（1.5%）、器種不明1点（1.5%）が含まれる。出土地点をみると、西館から28点、東館から40点と、東館からの出土が圧倒的に多い。

碗（第9表、第322図3～18、写真図版88・89）

16点には口縁部5点（4・8・10・14・18）、体部8点（3・5・7・9・11・12・15・17）、底部3点（6・13・16）を含み、西館から9点、東館から7点出土している。口縁部破片から口縁部形態をみると、若干外反するもの1点（14）、大きく外反するもの1点（10）、直口のものの3点（4・8・18）が含まれる。底部の形は、7mm～1.2cmの高さをもつ輪高台で、基部を厚くして畳付部を薄くし、畳付部を窄める。底部は、中央部に向かって低くなるもの（6）、軽く盛り上がるもの（13）8cm、ほぼ平坦なもの（16）がある。口縁部径は不明であるが、底部径は6が5.4cm、16は5.8cmの大きさである。描かれた文様は不明なものが多いが、唐草文をもつもの5点（3・5・10～12）、見込みに菊花文が入り、外底に萬福攸同の銘が入るもの1点（13）、高台脇に渦状文をもつもの1点（16）、見込みに花状文をもつもの1点（6）、草花文をもつもの3

点(8・9・18)、波濤文をもつもの1点(7)などがある。15世紀後半～16世紀の製品であろう。

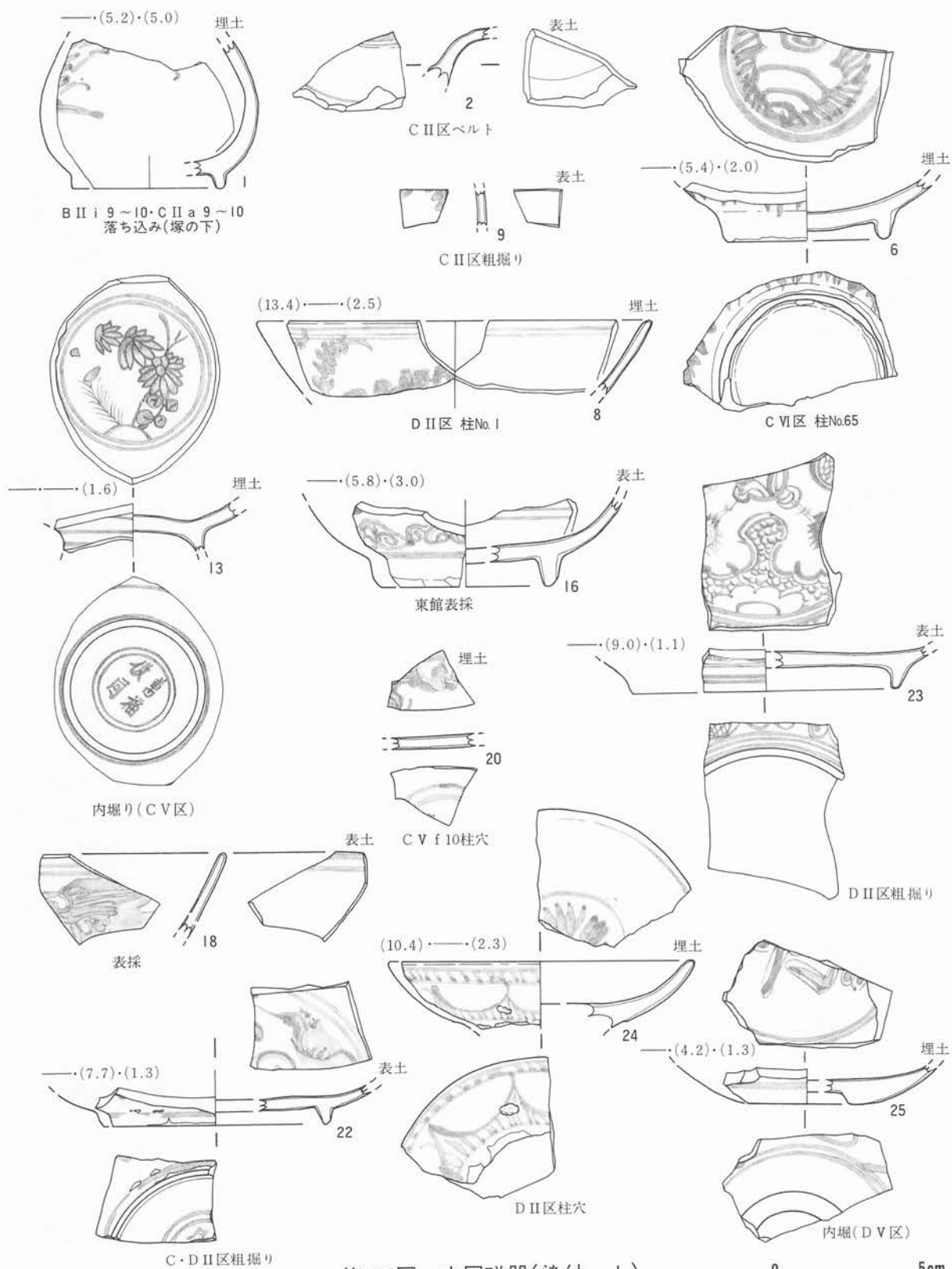
皿 (第9表、第322～324図20～68、写真図版89～91)

49点の中に口縁部20点(24・27・30・32～38・40～42・44・48・49・51・55・59・61・64・65・67)、体部6点(39・45・46・57・60・63)、底部17点(20～23・25・26・28・29・31・43・47・50・52・54・62・68)、口縁部から底部までを残す破片6点(24・27・32・53・58・66)が含まれる。さらに、器形によって口縁部が直口のもの7点(32～38)、碁笥底8点(24～31)、口縁部が外反するもの34点(20～23、39～68)に分けられる。

口縁部が直口の7点はいずれも東館からの出土で、西館からはまったく出土していない。口縁部から底部を残す32は、内湾して外傾する体部が腰に張りをもって立ち上がり、口唇は丸くつく。底部は削り出しによる高さ5mm位の輪高台が付く。体部の内面には口縁端部から体部中位まで縦位のひだ状の凹線が並行して巡る。他の小破片もほぼ同じような器形を示すと推定される。文様は明確でない例が多いが、33・34は外面に唐草文、内面の口縁部には渦状文的な文様が付される。32は外面と内面の体部は無文であるが、見込み部には重圏線が引かれその内側にも文様が付され、口唇部には口紅がつく。他の破片にも何んらかの文様が付されている。推定される口縁部径は10cm台1点(32)、11cm台1点(36)、13cm台2点(34・35)があり、32の底部径は4.6cmと推定される。15世紀後半～16世紀の製品であろう。

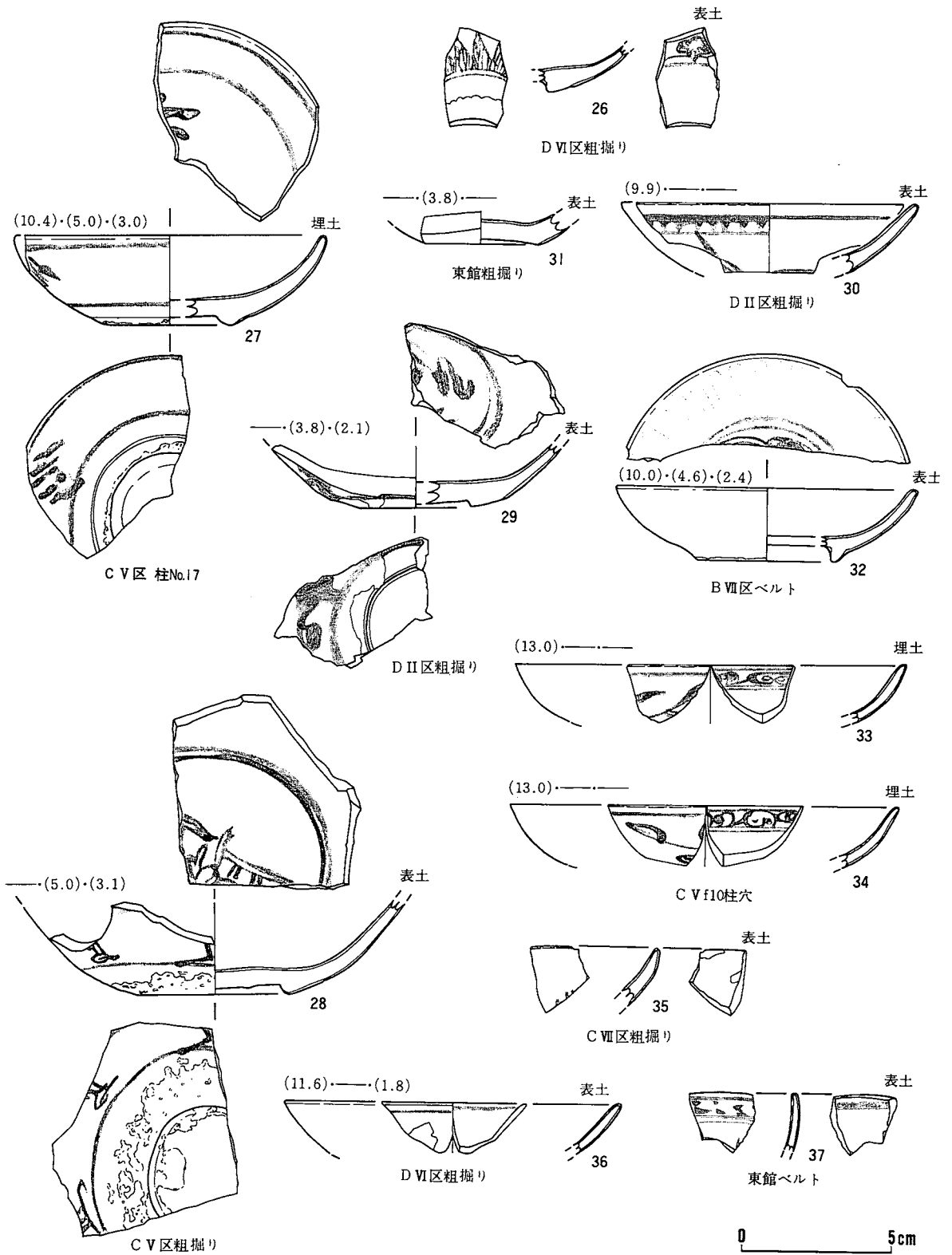
口縁部が外反する34点は口縁部13点(40～42・44・48・49・51・55・59・61・64・65・67)、体部6点(39・45・46・57・60・63)、底部12点(20～23・43・47・50・52・54・62・68)、口縁部から底部を残す破片3点(53・58・66)を含み、西館から16点、東館から14点が出土している。口縁部を外反させる以外は前者と同じ器形を示すが、高台の高さが6mm～7mmと高いものが含まれる。体部外面の文様は、53・58・66を典型とする唐草文をもつもの14点、渦状文をもつものが49・59・65の3点あり、その他は定かでない。体部の内面に施文するのは外面に渦状文をもつ3点のみで、玉取獅子文が付される。体部外面に唐草文を付すものは体部内面を無文とするが、見込み部に玉取獅子文を付す7点(21～23・43・53・58・66)と十字花文をもつ2点(47・50)の2種類がある。41の口縁部には斜格子文が付される。大きさをみると、推定される口縁部が10cm前後3点、11cm台2点、12cm台1点、13cm台1点、底部径は4cm台2点、6cm台1点、7cm台3点、9cm台1点となり、大小関係がみられる。特に高台の高い21～23・43の4点の底部破片は47・53・66等よりは大型の器形をもつと推定される。15世紀後半～16世紀の製品であろう。

底部が碁笥底になる8点には口縁部から底部を残す破片2点(24・27)、口縁部破片1点(30)、底部破片5点(25・26・28・29・31)が含まれる。さらに、胎土と釉が白く焼成の良い4点(24

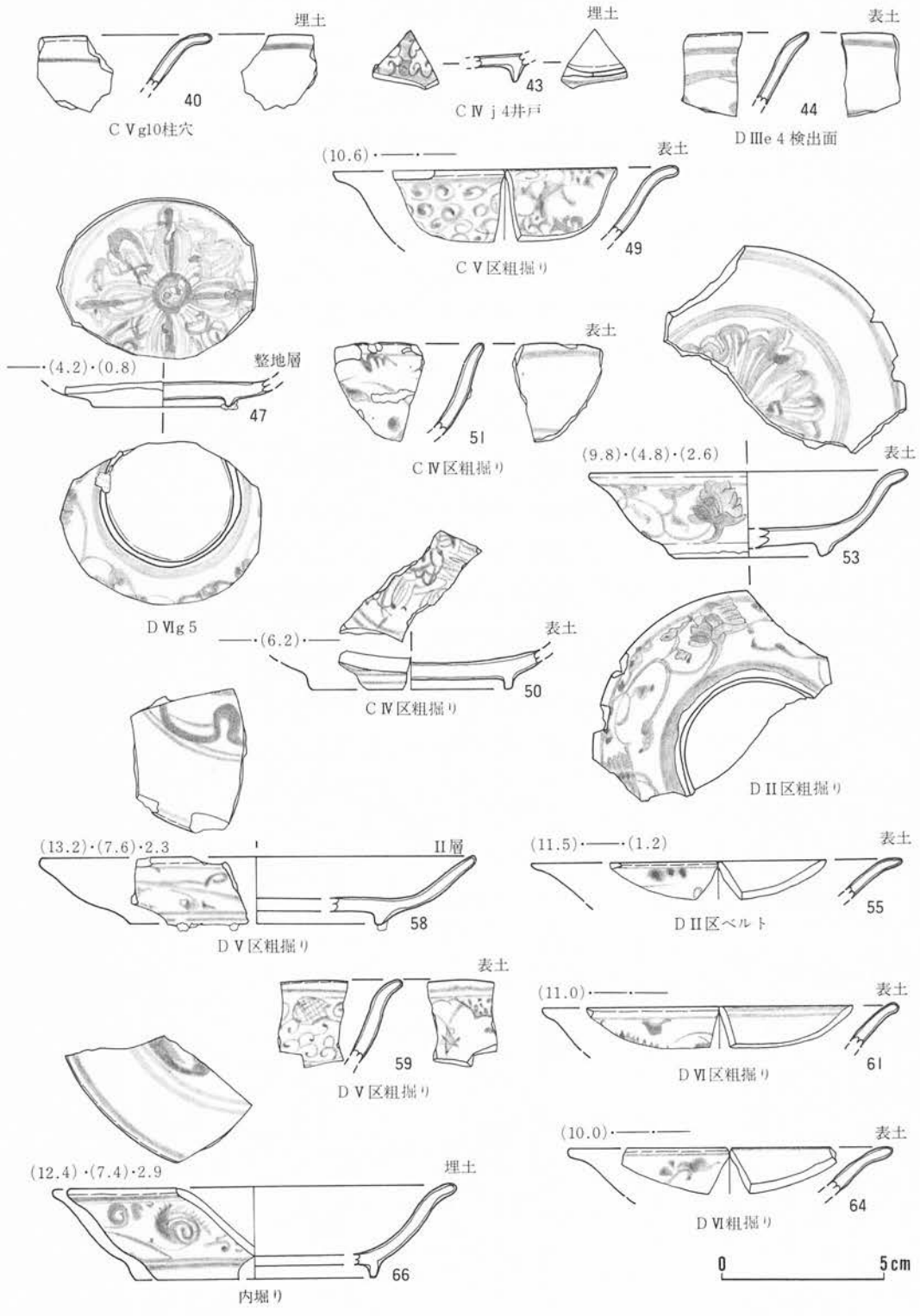


第322図 中国磁器(染付一)

0 5cm



第323図 中国磁器(染付一 2)



第324図 中国磁器(染付一3)

～27) と、胎土が砂質で焼成が悪く褐色を示す4点(28～31)に分けられるが、西館と東館から両者が出土している。前者は体部外面に蕉葉文を付すもの2点(24・26)と明確でないもの2点(25・27)があり、内面の見込み部には壽字文を付すもの2点(25・27)、十字花文1点(24)、不明1点(26)の文様が付される。後者は、外面に蕉葉文をもつもの1点(30)、不明な文様をもつもの2点(28・29)、無文1点(31)があり、内面には壽字文1点(28)、福字文1点(29)、不明1点(30)、無文1点(31)がある。前者の釉に貫入の入る例はないが、後者は全面に細かい貫入が入り、色調も淡い褐色気味に発色している。31の胎土は後者に近似するが、底部の削り込みの形状が異りさらに釉の発色と貫入は似るが透明度がまったく異なることから、別種である可能性が大きい。16世紀の製品であろう。

水注の蓋 (第9表、第322図2、写真図版88)

1点(2)の出土である。全体的な形状は不明であるが、下端の外方に鏢状の突帯が巡るような状況を示し、さらに下端の内側が下方にのびることなどから蓋とした。内面の下半分を除いて全面に施釉される。外面には頂部と下部に呉須による文様が付される。下端の径が5cm～6cmと推定される。おそらく15世紀後半～16世紀の製品であろう。

器種不明 (第9表、写真図版89)

器種の不明な破片が1点(19)出土している。内外面に呉須による文様と施釉がみられ、縁の部分に口紅が入る。器厚が4mm位と比較的厚く、縁は角形を示す。

第9表 染付一覧表

No	出土地点	層位	器種	部位	口縁部径 (cm)	高台径 (cm)	器高 (cm)	器厚 (cm)	釉調	胎土	文様	特徴	図版	写真
1	BII CIIa 9～10 落込み (縁の下)	埋土	花瓶	体上部 ～底部	—	(5.2)	(5.0)	0.6	黒点が散在する 淡い灰白色	白色	あり	高台がつき、内面は露胎、 畳付けを残して全面に施 釉	322	88
2	CII区 ベルト	表土	蓋付鉢	蓋	—	—	(1.9)	0.8	白色	白色	あり	カエリ部分は露胎、頂部 が平ら	322	〃
3	CII区 粗掘り	表土	碗	体下部					白点が散在する 淡い灰白色	白色	あり	釉にニグリがある		〃
4	CII区 粗掘り	表土	碗	口縁部					白点が散在する 淡い灰白色	白色	あり	釉にニグリがある、直口 形		〃
5	CVe8 落込み	埋土	碗	体部					淡い灰白色	白色	あり			〃
6	CVII区柱 No65	埋土	碗	高台脇 ～底部	—	(5.4)	(2.0)	0.5	青味がかかった白 色	白色	あり	底部が垂れ下がっている 、畳付けを除き全面施 釉	322	〃
7	CVII区 粗掘り	表土	碗	口縁部					青味がかかった白 色	白色	あり	小破片、直口形		〃
8	DII区柱 No1	埋土	碗	口縁～ 体中部	(13.4)	—	(2.5)	0.3	青味がかかった白 色	白色	あり	釉にニグリがある、直口 形	322	89
9	DIII区 粗掘り	表土	碗	体部	—	—	(1.1)	0.25	白色	白色	あり	小破片	322	〃

10	D II区粗掘り	表土	碗	口縁～体中部					白点が散在する 淡い灰白色	白色	あり	釉、呉須ともにニグリがある、端反りする		89
11	D III区柱 No.7	埋土	碗	体部					白色	白色	あり	小破片		〃
12	D III h 10 柱穴	埋土	碗	体中部～体部					白色	白色	あり			〃
13	C V区 (内堀)	埋土	碗	高台脇～底部	—	—	(1.6)	0.4	白色	白色	あり	高台内に「萬福收同」銘あり	322	〃
14	東館ベルト	表土	碗	口縁部					白色	白色	あり	小破片、端反りする		〃
15	東館	表土	碗	体上部					黄味をもつ淡い 灰白色	黄白色	あり	小破片、焼成不良		〃
16	東館表探	表土	碗	体下部～底部	—	(5.8)	(3.0)	0.5	淡い灰白色	白色	あり	二次火熱、畳付け無釉	322	〃
17	表探	表土	碗	体部					白色	白色		小破片		〃
18	表探	表土	碗	口縁～体上部	—	—	(2.9)	0.35	白色	白色	あり	呉須がくすんでいる	322	〃
19	西館	表土	大皿か鉢	口縁部					白色	白色	あり	小破片、口唇に褐色の着色(覆輪)		〃
20	C V f 10 柱穴	埋土	中型皿	底部	—	—	—	0.4	白色	白色	あり	小破片	322	〃
21	内堀 (C V)	埋土	中型皿	底部					白色	白色	あり	小破片、畳付部を除き全面施釉		〃
22	C D II区粗掘り	表土	中型皿	体下部～底部	—	(7.7)	(1.3)	0.4	白点が点在する 灰白色	黄白色	あり	畳付部を除き全面施釉、 焼成不良	322	〃
23	D II区粗掘り	表土	中型皿	高台脇～底部	—	(9.0)	(1.3)	0.3	白色	白色	あり	畳付部を除き全面施釉	322	〃
24	D II区柱穴	埋土	ゴケ底皿	口縁～底部	(10.4)	—	(2.3)	0.7	白色	白色	あり	底部を破損、畳付部は露胎、 外底は無釉	322	〃
25	内堀 (D V区)	埋土	ゴケ底皿	体中部～底部	—	(4.2)	(1.3)	0.8	白色	白色	あり	焼成が非常に良好、外底は施釉	322	〃
26	D VI区粗掘り	表土	ゴケ底皿	体下部～底部	—	—	(1.6)	0.8	青味がかつた白色	白色	あり	畳付部が露胎、焼成良好、 外底施釉	323	〃
27	C V区柱 No.17	埋土	ゴケ底皿	口縁～底部	(10.4)	(5.0)	(3.0)	0.8	白色	白色	あり	畳付部に砂付着、外底無釉、 焼成良好	323	90
28	C V区粗掘り	表土	ゴケ底皿	体中部～底部	—	(5.0)	(3.1)	0.6	褐灰白色	褐灰白色	あり	畳付部に砂付着、外底無釉、 焼成不良、貫入する	323	〃
29	D II区粗掘り	表土	ゴケ底皿	体中部～底部	—	(3.8)	(2.1)	0.6	褐灰白色	褐灰白色	あり	畳付部が露胎、外底無釉、 焼成不良、貫入する	323	〃
30	D II区粗掘り	表土	ゴケ底皿	口縁～体中部	(9.9)	—	—	0.6	褐灰白色	褐灰白色	あり	焼成不良、貫入する	323	〃
31	東館粗掘り	表土	ゴケ底皿	底部	—	(3.8)	—	0.7	褐灰白色	褐灰白色		高台の内持りが浅い、 焼成不良、貫入する	323	〃
32	B VII区 ベルト	表土	直口形皿	口縁～底部	(10.0)	(4.6)	(2.4)	0.5	青味がかつた白色	白色		内面に錆状のヒダがある、 口唇部覆輪畳付を除いて 全面施釉	323	〃
33	C V f 10 柱穴	埋土	直口形皿	口縁～体下部	(13.0)	—	(1.9)	0.3	白色	白色		焼成良好	323	〃
34	C V f 10 柱穴	埋土	直口形皿	口縁～体下部	(13.0)	—	(2.0)	0.4	白色	白色		33と同個体、焼成良好	323	〃
35	C VII区粗掘り	表土	直口形皿	口縁～体中部	—	—	(1.9)	0.5	白色	白色	あり	端部外削き、焼成良好	323	〃
36	D VI区粗掘り	表土	直口形皿	口縁～体中部	(11.6)	—	(1.8)	0.3	白色	白色	あり	焼成良好	323	〃
37	東館ベルト	表土	直口形皿	口縁～体中部	—	—	(1.9)	0.3	白色	白色	あり	小破片、焼成良好	323	〃
38	東館ベルト	表土	直口形皿	口縁部					白色	白色	あり	小破片、焼成良好	324	〃
39	C V区柱 No.1	埋土	端反り皿	体下部					白色	白色	あり	小破片		〃
40	C V g 10 柱穴	埋土	端反り皿	口縁部～体上部	—	—	(1.7)	0.3	褐灰白色	褐灰白色	あり	焼成不良		〃

41	CVI i 10 土坑	埋土	端反り皿	口縁部～ 体上部					白色	白色	あり	小破片		90
42	CVI区柱 No41	埋土	端反り皿	口縁部					白色	白色	あり	小破片		〃
43	(DIII j 4井戸) CIV j 4井戸	埋土	端反り皿	底部	—	—	(0.9)	0.4	白色	白色	あり	小破片、 畳付部を除いて 全面施釉	324	〃
44	DIII e 4 検出面	表土	端反り皿	口縁部 ～ 体部	—	—	(2.5)	0.5	白色	白色	あり	小破片	324	〃
45	DIV区柱 No7	埋土	端反り皿	体部					白色	白色		小破片		〃
46	DV区柱 No14	埋土	端反り皿	体下部～ 高台脇					白色	白色	あり	小破片		〃
47	DVI g 5	整地層	端反り皿	体下部 ～ 底部	—	(4.2)	(0.8)	0.4	白色	白色	あり	畳付けを除いて全面施釉	324	〃
48	CV区 粗掘り	表土	端反り皿	口縁～ 体中部					白色	白色	あり			〃
49	CV区 粗掘り	表土	端反り皿	口縁～ 体下部	(10.6)	—	(2.2)	0.45	白色	白色	あり	強あ端反り	324	91
50	CIV区 粗掘り	表土	端反り皿	高台脇 ～ 底部	—	(6.2)	(1.2)	0.45	白色	白色	あり	畳付は露胎	324	〃
51	CIV区 粗掘り	表土	端反り皿	口縁～ 体中部	—	—	(3.0)	0.4	白色	白色	あり	体中部に溶着あり	324	〃
52	DII区 粗掘り	表土	端反り皿	底部					白色	白色		小破片		〃
53	DII区 粗掘り	表土	端反り皿	口縁～底	9.8	4.8	2.6	0.5	淡い灰白色	白色	あり	畳付部露胎	324	〃
54	DII区 ベルト	表土	端反り皿	体下部 ～ 高台					白色	白色	あり	小破片		〃
55	DII区 ベルト	表土	端反り皿	口縁～ 体上部	(11.5)	—	(1.2)	0.3	白色	白色	あり		324	〃
56	DIII区 粗掘り	表土	端反り皿	高台部					白色	淡灰白色		小破片		〃
57	DIII区 粗掘り	表土	端反り皿	体部					白色	白色	あり	小破片		〃
58	DV区 粗掘り	II層	端反り皿	口縁～底部	(13.2)	(7.6)	2.3	0.3	淡青緑色	白色	あり	外底露胎、 畳付に雑物付 着	324	〃
59	DV区 粗掘り	表土	端反り皿	口縁～ 体下部	—	—	(2.7)	0.4	淡青白色	白色	あり		324	〃
60	DVI区 粗掘り	表土	端反り皿	体部					白色	白色		小破片		〃
61	DVI区 粗掘り	表土	端反り皿	口縁部	(11.0)	—	(1.3)	0.3	淡青白色	白色	あり	二次的 火熱を受けて いる	324	〃
62	DVI区 粗掘り	表土	端反り皿	高台脇 ～ 底部					淡青白色	白色	あり	小破片		〃
63	DVI区 粗掘り	表土	端反り皿	体部					淡青白色	白色	あり	小破片		〃
64	DVI区 粗掘り	表土	端反り皿	口縁～ 体中部	(10.0)	—	(1.3)	0.4	淡灰白色	白色	あり		324	〃
65	DVI区 整地層	上面	端反り皿	口縁部					淡灰白色	白色	あり	小破片		〃
66	内堀	埋土	端反り皿	口縁～底部	(12.4)	(7.4)	2.9	0.4	白色	白色	あり	畳付は露胎	324	〃
67	東館ベルト	表土	端反り皿	口縁部					白色	白色	あり	小破片		〃
68	東館ベルト	表土	端反り皿	底部					淡灰白色	黄白色		外底を露胎、 焼成不良		〃

〈鉄釉陶器〉

鉄釉がかけられた破片が9点（1～8・25）出土しているが、この中には天目茶碗8点（1～8）、壺1点（25）があり、天目茶碗の出土が圧倒的に多い。

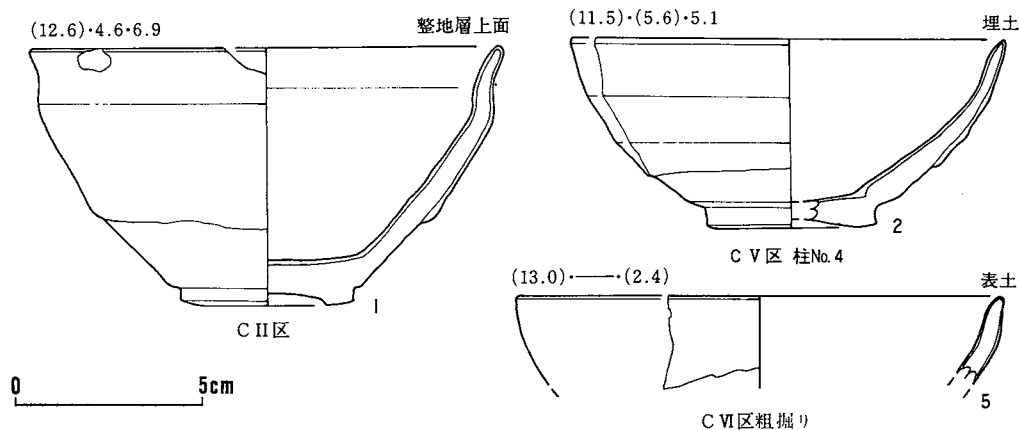
〈天目茶碗〉 (第10表、第325図、写真図版91・92)

8点は西館から2点(1・8)と東館から6点(2～7)が出土した。この中に口縁部から底部を残す破片2点(1・2)、口縁部破片2点(3・5)、体部破片4点(4・6～8)を含む。

1は高台脇を幅2mmで平らに削り、体部はほぼ直線的に外傾し、端部が大きく括れ口縁部は軽く外反する。高台は約6mmの高さをもつ削り出しで、高台内は僅かに削り込まれ輪高台に近い形状を示す。胎土は若干粗く断面に多くの鬆穴があり、施釉部分は灰黒色、露胎部分は淡褐色を示す。釉は厚くかけられ、口縁端部から口唇部は茶色、他は茶色の斑点が入る。また体部下位から底部は露胎とし、釉際は直線状をなす。大きさは、口縁部径12.6cm、底部径4.6cm、器高6.9cmである。15世紀頃の製品であろう。

2は高台脇を約7mmの幅で斜上方に平らに削り、体部は直線的に外傾した後内湾して口縁部に続き、端部の括れはない。高台は高さ約6mmの削り出しで、高台内は縁4mmを残して浅く斜めに削り込まれる。茶溜り部分は2mmの深さで低くなる。胎土は、断面に若干鬆穴をもつが非常に緻密な土を使用し、焼成は断面に光沢をもつほど良好である。釉は口縁部が薄く、体部～茶溜り部分は厚くかけられ、釉際は丸味をもって直線状をなす。内面は口縁部が焦げ茶色、体部下位～茶溜りは黒色に発色し、外面もほぼ同色で禾目的な釉調である。大きさは、口縁部径11.5cm、底部径5.6cm、器高5.1cmである。14世紀後半～15世紀前半頃の製品であろう。

その他は、3・5・8の口縁部は3は2の形に近く、5・8は1と2の中間的な括れの状況を示す。胎土は、色調が灰黒色(3)、黒点の入る灰色(5・7)、灰色(8)、淡い褐灰色(4)があり、4・7は光沢をもつほど焼成がよく、他はザラつく。釉には茶色～黒色まで各色に発色し、さらに禾目状のもの、斑点状のもの等種々みられる。これらはいずれも15世紀に位置づけられる製品であろう。



第325図 鉄釉陶器

壺 (第3表27、写真図版92)

頸部付近の破片が1点(25)出土している。ロクロ成形され、外面に褐色釉がかけられる。内面には成形時のロクロ目が凹凸として明瞭に残り、無釉である。胎土は、粒子は良く揃うが比較的粗い土で断面がザラつくが、焼成は良好である。15世紀頃の製品であろう。

第10表 中国天目茶碗一覧表

No	出土地点	層位	器種	部位	口縁部位 (cm)	高台径 (cm)	器高 (cm)	器厚 (cm)	釉調	胎土	文様	特徴	図版	写真
1	C II区	整地層上面	天目茶碗	口縁~底部	(12.6)	4.6	6.9	0.8	端部~褐色 斑点ある極暗褐色	灰色~ 淡黄褐色		端部が括れが大きく、体下部~底部が露胎、高台の内寄り浅い	322	92
2	C V区柱 No.4	埋土	天目茶碗	口縁~底部	(11.5)	(5.6)	5.1	0.8	一部明色もある が斑点ある黒色	黒灰色		端部の括れなし、茶溜り凹む、焼成非常に良好	322	//
3	C VI区 柱穴	埋土	天目茶碗	口縁部					端部が茶色 他は黒色	灰黒色		端部の括れなし、茶溜り凹む、焼成非常に良好		//
4	C VI区 粗掘り	表土	天目茶碗	体部					内面黒色 外面茶黒の禾目風	灰褐色		非常に焼成良好		//
5	C VI区 粗掘り	表土	天目茶碗	口縁~ 体上部	(13.0)	—	(2.4)	0.55	端部コゲ茶色 黒色に茶斑点	灰褐色		端部の括れ小さい	322	//
6	C VI区 粗掘り	表土	天目茶碗	体下部					黒色に茶禾目	灰褐色		禾目天目、焼成良好		//
7	C VI区 粗掘り	表土	天目茶碗	体下部					外面露胎 内面茶色	黒灰色				//
8	C II区	表土	天目茶碗	口縁部					黒色	灰色		二次火熱を受けている		75

(3) 朝鮮陶器

碗と推定される破片2点(7・8)と壺の破片1点(26)が出土している。これらは、碗は東館のD VII区から、壺は西館のD III区からの出土である。

碗 (第4表7・8、第313図7・8、写真図版78)

1は口縁部の小破片である。器厚が3mmと薄く、胎土は若干砂粒の混じる緻密な土を使用し、焼成が非常に良好で断面が光沢をもち、色調は灰色を示す。釉は灰釉と考えられる透明なガラス質で、貫入もなく薄く施釉される。推定される口縁部径は12.7cmである。

2は体部下位から底部を残す破片である。体部が内湾して外傾する器形をもつらしい。底部は削り出しによる高さ3mmの高台が付き、高台内は篋で斜めに浅く削り込まれる。高台の縁に1箇所、見込み部に2箇所の胎土目積みの痕を残す。胎土は白色の砂粒が混じる砂質で、全体的に粗く、色調は灰色を示す。釉は1と同様灰釉と考えられるが、内外全面に施釉され、外面の流れた部分は白濁する。全体として光沢がなく、濁った褐色を示す。推定される底部径は5.2cmである。

以上の2点はともに15世紀頃の製品と推定される。

壺 (第3表26、写真図版92)

粘土紐巻き上げ作りで叩き調整をもつ体部破片である。胎土は灰黒色を示す砂質で、焼成は良好である。器表の剥落痕や断面観察によると、胎土が2枚構造を示し、中心部から外側が剥落している。釉は鉄釉と推定される黒褐釉で、外面は褐色に発色し、二次焼成に起因する小凹凸がある。内面は汚れた茶色から黒色までみられる。定かでないが15世紀頃の製品であろう。

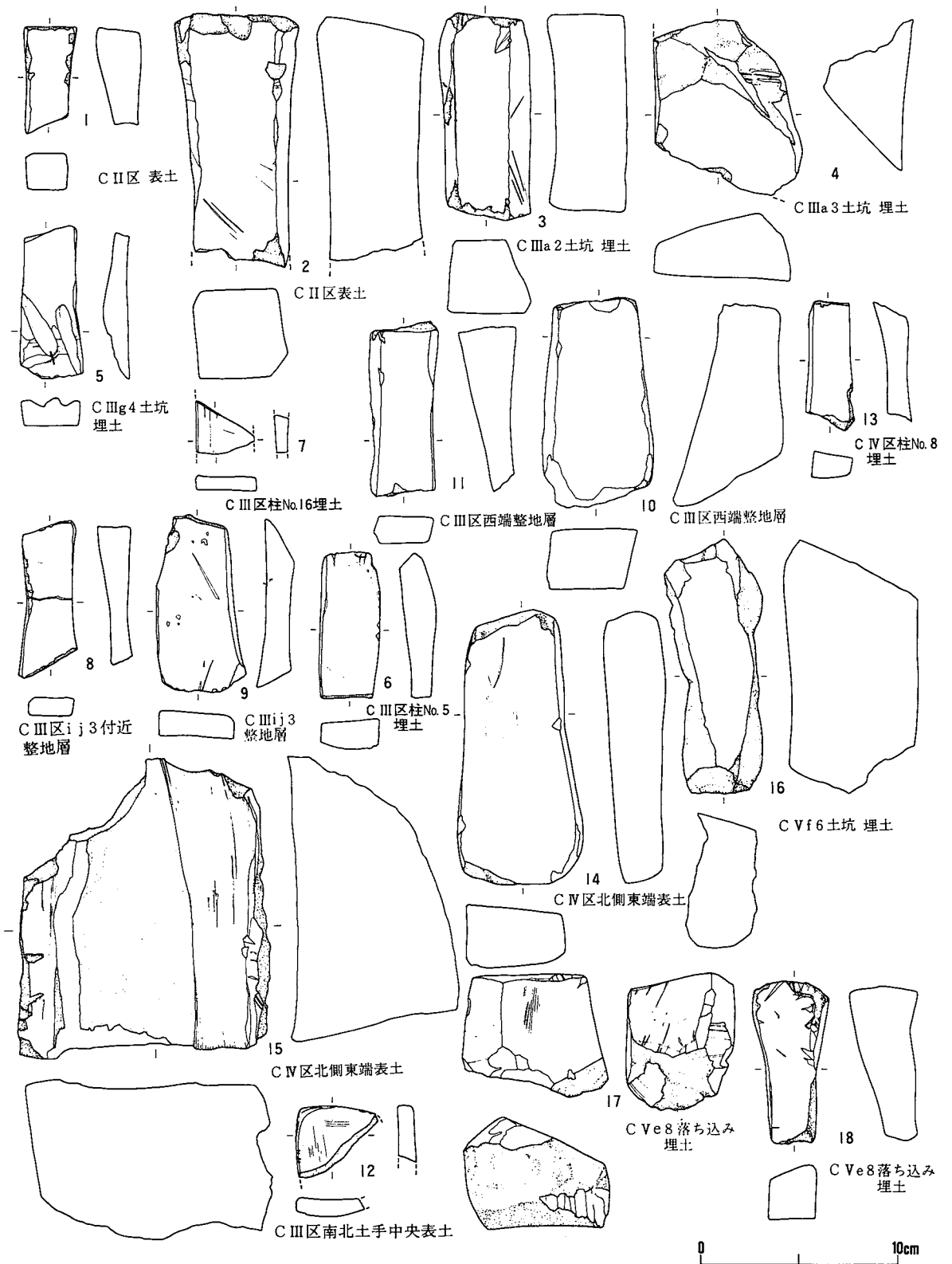
2) 石製品

石を素材とする各種の製品は150点の出土であるが、この中には砥石85点(56.66%)、石臼19点(12.66%)、硯14点(9.34%)、石鉢12点(8%)、使用痕のある礫6点(4%)、その他の石製品14点(9.34%)が含まれる。

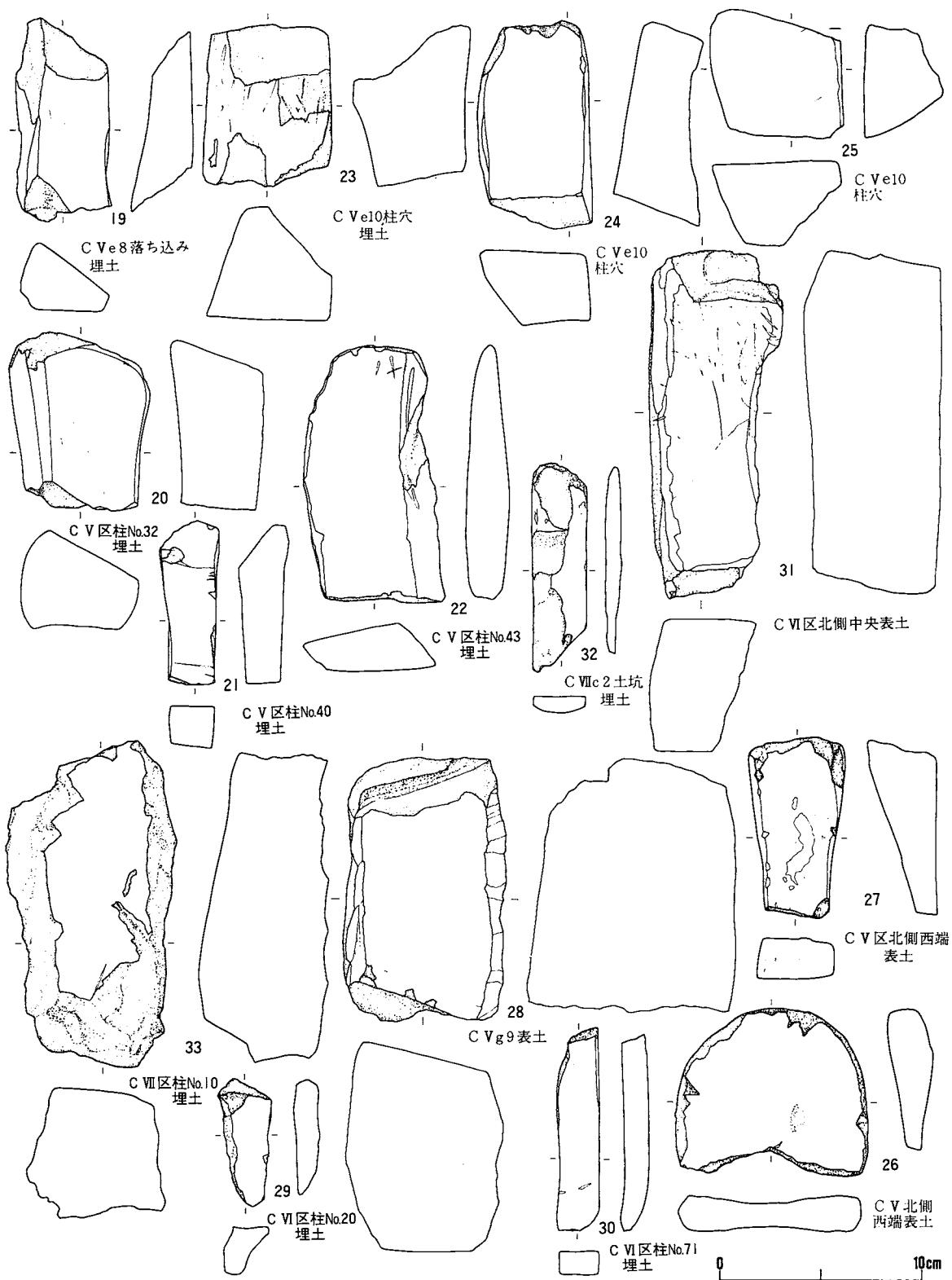
(1) 砥石 (第11表、第326～330図、写真図版92～96)

石製品の中でもっとも多い85点の出土であるが、これらは西館から39点、東館から43点、出土地不明3点の出土である。各館ごとの出土地点をみると、西館では39点の内23点(59%)がCⅢ区・DⅡ区・DⅢ区に集中して出土し、東館の場合は43点の76.7%に相当する33点がCV区、CⅦ区、DV区、DⅥ区からの出土である。

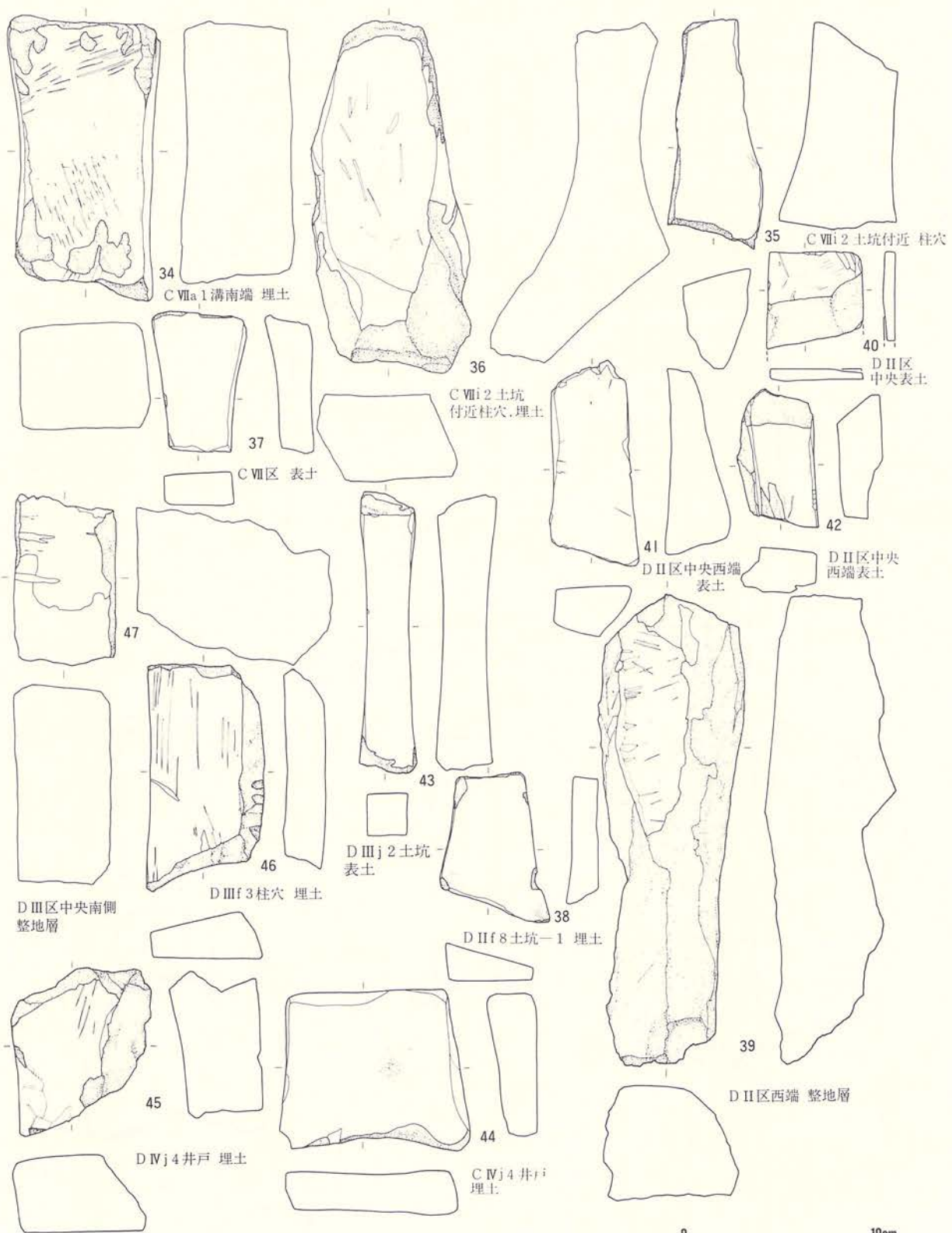
大きさは、最大が縦14.4cm、横13cm、厚さ5.3cm、重さ1,780gと、重さ1,000gを超えるものが5点含まれる。最小が縦3cm、横2.6cm、厚さ0.6cm、重さ7gと、使い減りによって折損したと考えられるものも含まれる。85点を重量別に分けると、100g以下が28点(32.94%)、100～250gが25点(29.42%)、250g～500gが19点(22.35%)、500g～750gが4点(4.71%)、750g～1,000gが4点(4.71%)、1,000g以上が5点(5.88%)となり、84.71%に相当する72点が500g以下である。特にも、50g以下が16点(18.83%)、50g～100gが12点(14.12%)と、28点の32.94%が100g以下の小型品である。さらに、100g～250gの25点(29.42%)を加えると、53点(62.35%)が入り、当館から出土した砥石の主体が250g以下であることを示している。形態はほとんどが長方形や方形を示し、断面形も長方形や方形をなす例が多い。また、厚さをみると、両端が厚く中央部が薄い例が多く、このことは使い減りに起因すると考えられる。使用面の数は、1面が14点(16.47%)、2面が16点(18.82%)、3面が14点(16.47%)、4面が41点(48.24%)になり、約半分が4面を使用面としている。石材には細砂質凝灰岩37点(43.53%)、白色細粒凝灰岩30点(35.29%)、淡緑色珪質凝灰岩11点(12.94%)、粘板岩3点



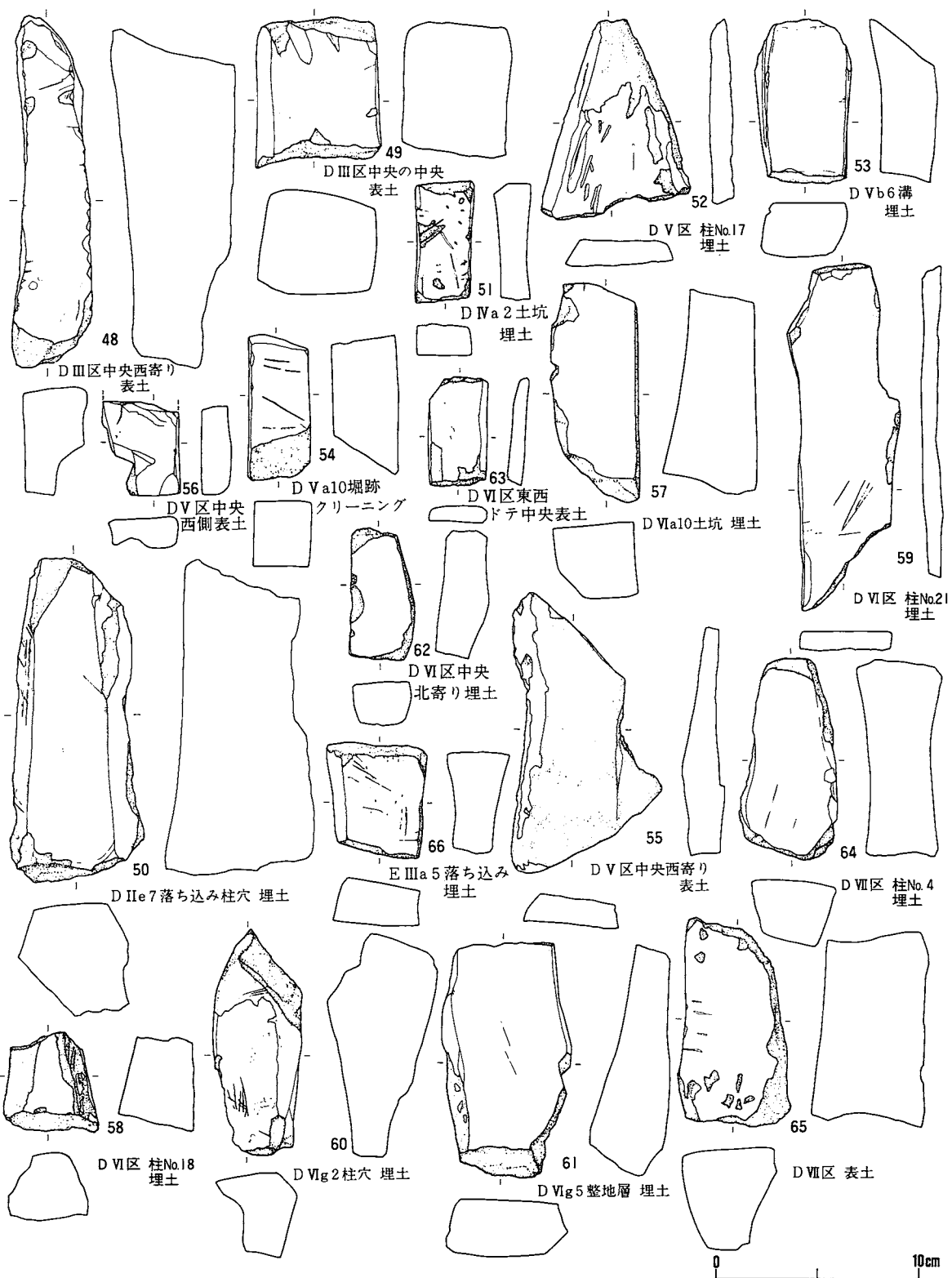
第326図 石製品(砥石一)



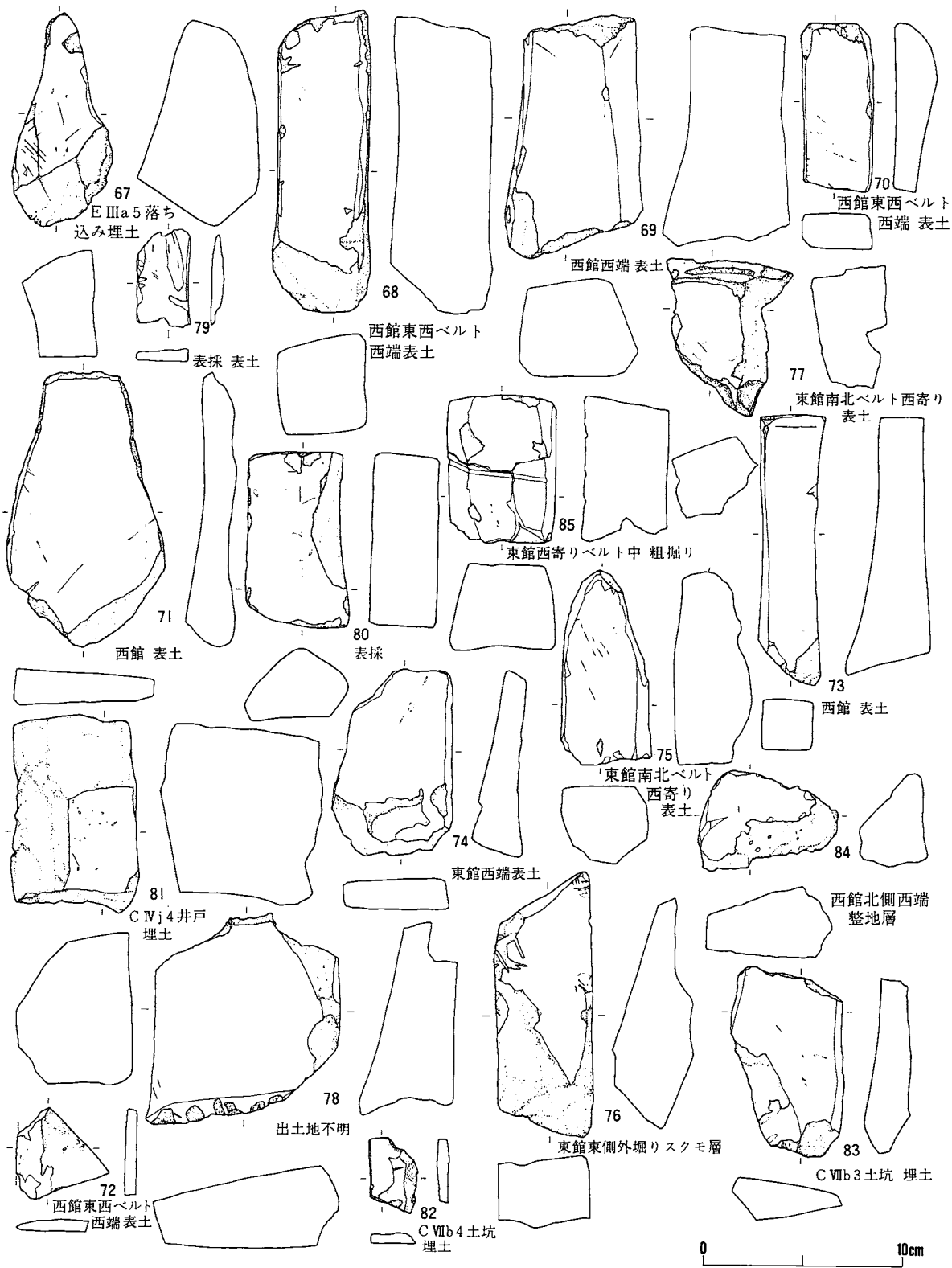
第327図 石製品(砥石-2)



第328図 石製品(砥石一3)



第329図 石製品(砥石一4)



第330図 石製品(砥石一5)

第11表 砥石一覽表

種別 番号	出土地点	層位	器種	法 量				石 質	産 地	備 考	遺物 図版 番号	写真 図版 番号
				縦cm	横cm	厚cm	重g					
1	C II区	表土	砥石	5.3	2.6	1.2	50	細砂質凝灰岩 (石質凝灰岩)	奥羽山地東縁部 新第三系中新統	使い減りがはげしく、4面に使用痕をもつ	326	92
2	C II区	表土	砥石	12.8	6.2	4.5	560	細砂質凝灰岩 (石質凝灰岩)	奥羽山地東縁部 新第三系中新統	やや大き目で、4面を使用している	326	〃
3	C III a 2土坑	埋土	砥石	10.5	4.6	3.6	300	白色細粒凝灰岩	奥羽山地東縁部 新第三系中新統	断面が台形に近く、4面を使用している	326	〃
4	C III a 3土坑	埋土	砥石	8.8	7.5	0.5	220	細砂質凝灰岩 (石質凝灰岩)	奥羽山地東縁部 新第三系中新統	断面が三角形で、2面使用	326	〃
5	C III g 4土坑	埋土	砥石	7.0	3.2	0.7	43	細砂質凝灰岩 (石質凝灰岩)	奥羽山地東縁部 新第三系中新統	断面が扁平で、使いに減りがはげしく、4面使用	326	〃
6	C III区柱No5	埋土	砥石	7.4	3.0	1.0	50	細砂質凝灰岩 (石質凝灰岩)	奥羽山地東縁部 新第三系中新統	使い減りがはげしく、断面は扁平。4面使用	326	〃
7	C III区柱No6	埋土	砥石	2.6	3.0	0.6	7	細砂質凝灰岩 (石質凝灰岩)	奥羽山地東縁部 新第三系中新統	欠損品、小型で断面扁平。4面使用	326	〃
8	C II i j 3付近	整地層	砥石	7.9	3.0	0.9	45	細砂質凝灰岩 (石質凝灰岩)	奥羽山地東縁部 新第三系中新統	使い減りがはげしく、断面扁平。4面に使用痕。	326	〃
9	C III区 i j 3付近	整地層	砥石	8.9	4.5	1.2	97	白色細粒凝灰岩	奥羽山地東縁部 新第三系中新統	使い減りがはげしく断面扁平、4面に使用痕。	326	〃
10	C III区西端	整地層	砥石	10.7	5.7	3.1	360	白色細粒凝灰岩	奥羽山地東縁部 新第三系中新統	やや大き目で断面は方形、4面に使用痕。	326	〃
11	C III区西端	整地層	砥石	8.8	3.5	1.3	102	細砂質凝灰岩 (石質凝灰岩)	奥羽山地東縁部 新第三系中新統	小型で断面が扁平、4面に使用面をもつ	326	〃
12	C III区 南北中央 土手	表土	砥石	3.6	4.1	0.7	16	白色細粒凝灰岩	奥羽山地東縁部 新第三系中新統	欠損品4面に使用面をもつ小型品。	326	〃
13	C IV区柱No8	埋土	砥石	6.6	2.4	1.0	30	細砂質凝灰岩 (石質凝灰岩)	奥羽山地東縁部 新第三系中新統	小型品で、使いべりがはげしい。4面に使用面。	326	93
14	C IV区北側東端	表土		13.9	6.4	2.1	410	淡緑色珪質凝灰岩	奥羽山地東縁部 新第三系中新統	やや大型、断面が扁平で、3面に強い使用面をもつ。	326	〃
15	C IV区北側東端	表土	砥石	14.4	13.0	5.3	1,780	白色細粒凝灰岩	奥羽山地東縁部 新第三系中新統	大型、鋸で引いて整形した痕跡をもつ。使用面は1面。	326	〃
16	C V f 6土坑	埋土	砥石	12.9	5.0	6.4	480	細砂質凝灰岩 (石質凝灰岩)	奥羽山地東縁部 新第三系中新統	大型、2面に使用面をもち、他は自然面である。	326	〃
17	C V e 8 裏ち込み	埋土	砥石	6.2	7.3	3.3	295	白色細粒凝灰岩	奥羽山地東縁部 新第三系中新統	ズングリムックリ形で、1面以外は使用痕をもつ。	326	〃
18	C V e 8 落ち込み	埋土	砥石	8.2	3.8	1.7	120	細砂質凝灰岩 (石質凝灰岩)	奥羽山地東縁部 新第三系中新統	やや小型、断面方形で使い減りがはげしい。	326	〃
19	C V e 8 落ち込み	埋土	砥石	10.1	4.7	2.0	176	細砂質凝灰岩 (石質凝灰岩)	奥羽山地東縁部 新第三系中新統	やや小型、3面に使用痕をもつ。	327	〃
20	C V 区柱No32	埋土	砥石	8.8	7.0	3.7	400	細砂質凝灰岩 (石質凝灰岩)	奥羽山地東縁部 新第三系中新統	ズングリムックリ形で、4面に使用面をもつ。	327	〃
21	C V 区柱No40	埋土	砥石	8.2	2.9	1.7	74	細砂質凝灰岩 (石質凝灰岩)	奥羽山地東縁部 新第三系中新統	小型品、断面方形で使用減りが目立つ。	327	〃
22	C V 区柱No43	埋土	砥石	12.7	7.0	1.1	244	白色細粒凝灰岩	奥羽山地東縁部 新第三系中新統	やや大型、扁平で4面に使用面をもつ。	327	〃
23	C V e 10柱穴	埋土	砥石	8.0	6.4	4.3	317	細砂質凝灰岩 (石質凝灰岩)	奥羽山地東縁部 新第三系中新統	ズングリムックリ形で、4面に使用面をもつ。	327	〃
24	C V e 10柱穴	埋土	砥石	10.3	5.7	2.9	313	淡緑色珪質凝灰岩	奥羽山地東縁部 新第三系中新統	短かめで、断面三角形に近似、3面に使用面をもつ。	327	〃
25	C V e 10柱穴	埋土	砥石	6.4	6.7	2.6	180	細砂質凝灰岩 (石質凝灰岩)	奥羽山地東縁部 新第三系中新統	ズングリムックリ形で、断面三角形に近い。4面使用。	327	〃
26	C V 区北側西端	表土	砥石	8.3	9.6	0.7	140	両輝石安山岩 火容岩(多孔質)	岩手火山第四系	半楕円形で全体が扁平、2面に使用面をもつ。	327	〃
27	C V 区北側西端	埋土	砥石	9.0	4.8	1.1	155	白色細粒凝灰岩	奥羽山地東縁部 新第三系中新統	やや小型、使い減りがはげしく断面扁平、4面使用。	327	〃
28	C V g 9	表土	砥石	13.2	8.1	9.0	1350	淡緑色珪質凝灰岩	奥羽山地東縁部 新第三系中新統	大型、ズングリムックリ形、2面に使用面をもつ。	327	〃
29	C VI区柱No20	埋土	砥石	6.4	2.7	1.1	32	淡緑色珪質凝灰岩	奥羽山地東縁部 新第三系中新統	小型で不整形、1面にのみ使用痕をもつ。	327	〃
30	C VI区柱No71	埋土	砥石	10.2	2.2	1.2	42	粘板岩(風化)	北上山地古生界	細長い形、断面形で4面に使用面をもつ。	327	〃

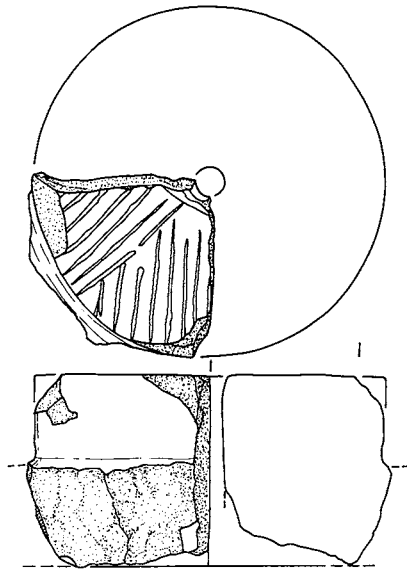
31	C VII区北側中央	表土	砥石	17.2	6.7	6.2	950	細砂質凝灰岩 (石質凝灰岩)	奥羽山地東縁部 新第三系中新統	大型、断面方形に近く、2面に使用面をもつ。	327	94
32	C VII c 2土坑	埋土	砥石	9.3	2.7	0.3	30	粘板岩(風化)	北上山地古生界	断面が扁平で線長方形、4面に使用面をもつ。	327	94
33	C VII区柱No10	埋土	砥石	16.2	8.5	4.6	1040	細砂質凝灰岩 (石質凝灰岩)	奥羽山地東縁部 新第三系中新統	大型でやや不整形、1面に使用面をもつ。	327	94
34	C VII a 1溝南端	埋土	砥石	14.8	8.0	5.4	1130	白色細粒凝灰岩	奥羽山地東縁部 新第三系中新統	断面方形で大型、使用面を3面にもつ。	328	94
35	C VII i 2土坑付近	柱埋 穴土	砥石	11.8	5.0	4.5	330	細砂質凝灰岩 (石質凝灰岩)	奥羽山地東縁部 新第三系中新統	断面台形に近似、2面に使用面をもつ。	328	94
36	C VII i 2土坑付近	柱埋 穴土	砥石	18.2	8.3	3.2	950	淡緑色珪質凝灰岩	奥羽山地東縁部 新第三系中新統	大型、断面方形で平面不整形、4面使用。	328	94
37	C VII区	表土	砥石	7.2	4.9	1.7	115	細砂質凝灰岩 (石質凝灰岩)	奥羽山地東縁部 新第三系中新統	やや小型、使い減りはげしく、4面使用。	328	94
38	D II f 8土坑-1	埋土	砥石	7.7	5.7	1.3	84	白色細粒凝灰岩	奥羽山地東縁部 新第三系中新統	小型、使い減りによって断面が扁平、4面使用。	328	94
39	D II区西端	整地層	砥石	24.5	7.6	3.7	129	細砂質凝灰岩 (石質凝灰岩)	奥羽山地東縁部 新第三系中新統	細長く大型、不整形で1面に使用面をもつ。	328	94
40	D II区中央西端	表土	砥石	5.1	5.0	0.4	27	細砂質凝灰岩 (石質凝灰岩)	奥羽山地東縁部 新第三系中新統	小型で扁平、3面使用。	328	94
41	D II区中央西端	表土	砥石	10.6	4.7	1.2	166	白色細粒凝灰岩	奥羽山地東縁部 新第三系中新統	やや小型、使い減りによって断面扁平、4面使用。	328	94
42	D II区中央西端	表土	砥石	7.3	4.2	1.2	72	細砂質凝灰岩 (石質凝灰岩)	奥羽山地東縁部 新第三系中新統	小型、鋭り引いた整形痕あり、1面のみ使用。	328	94
43	D III j 2土坑	表土	砥石	14.4	3.0	2.3	182	細砂質凝灰岩 (石質凝灰岩)	奥羽山地東縁部 新第三系中新統	細長く断面方形、4面に使用面をもつ。	328	94
44	C IV j 4井戸	埋土	砥石	8.4	9.9	1.5	230	閃輝石安山岩 熔岩(多孔質)	岩手火山第四系	平面方形で、断面が扁平、多孔質。	328	94
45	C IV j 4井戸	埋土	砥石	8.7	7.3	3.9	320	白色細粒凝灰岩	奥羽山地東縁部 新第三系中新統	ズングリムックリ形、3面に使用面をもつ。	328	94
46	D III f 3柱穴	埋土	砥石	11.8	6.1	1.9	236	細砂質凝灰岩 (石質凝灰岩)	奥羽山地東縁部 新第三系中新統	使い減りによって扁平、3面に使用面をもつ。	328	94
47	D III区中央南側	整地層	砥石	8.8	5.3	5.3	760	石英安山岩	豊沢川上流 新第三系鮮新統	大型、不整形で1面のみ使用面をもつ。	328	95
48	D III区中央西寄	表土	砥石	17.4	4.0	3.4	394	白色細粒凝灰岩	奥羽山地東縁部 新第三系中新統	長形で断面扁平、2面に使用面をもつ。	329	95
49	D III区中央の中央	表土	砥石	7.4	6.2	5.1	388	細砂質凝灰岩 (石質凝灰岩)	奥羽山地東縁部 新第三系中新統	ズングリムックリ形、4面に使用面をもつ。	329	95
50	D II e 7 落ち込み柱穴	埋土	砥石	16.0	6.7	5.3	830	淡緑色珪質凝灰岩	奥羽山地東縁部 新第三系中新統	大型、不整形、3面に使用面をもつ。	329	95
51	D II a 2土坑	埋土	砥石	6.1	2.9	1.3	55	細砂質凝灰岩 (石質凝灰岩)	奥羽山地東縁部 新第三系中新統	小型、断面扁平、4面に使用面をもつ。	329	95
52	D V区柱No17	埋土	砥石	9.8	7.4	1.1	97	細砂質凝灰岩 (石質凝灰岩)	奥羽山地東縁部 新第三系中新統	小型、平面三角形で板状、2面に使用面をもつ。	329	95
53	D V b 6溝	埋土	砥石	8.1	4.8	2.5	169	白色細粒凝灰岩	奥羽山地東縁部 新第三系中新統	やや小型、使い減りはげしく断面扁平、4面使用。	329	95
54	D V a 10堀跡	クリーニング	砥石	7.2	3.1	3.2	116	細砂質凝灰岩 (石質凝灰岩)	奥羽山地東縁部 新第三系中新統	やや小型、断面方形、4面に使用面をもつ。	329	95
55	D V区中央西寄	表土	砥石	13.8	7.4	0.7	165	淡緑色珪質凝灰岩	奥羽山地東縁部 新第三系中新統	不整形で扁平、1面のみ使用痕	329	95
56	D V区中央西側	表土	砥石	4.6	3.8	1.3	36	白色細粒凝灰岩	奥羽山地東縁部 新第三系中新統	小型、使い減りによって扁平、4面使用。	329	95
57	D VI a 10土坑	埋土	砥石	10.8	4.4	3.2	255	白色細粒凝灰岩	奥羽山地東縁部 新第三系中新統	やや大型、断面方形、4面使用。	329	95
58	D VI区柱No18	埋土	砥石	5.0	4.7	2.8	100	白色細粒凝灰岩	奥羽山地東縁部 新第三系中新統	やや小型、不整形で断面台形、1面のみ使用。	329	95
59	D VI区柱No21	埋土	砥石	17.2	5.6	0.6	110	粘板岩(風化)	北上山地古生界	長い板状、3面に使用面をもつ。	329	95
60	D VI 8 2柱穴	埋土	砥石	11.2	4.4	1.7	232	白色細粒凝灰岩	奥羽山地東縁部 新第三系中新統	断面方形、4面に使用面をもつ。	329	95
61	D VI 8 5整地層	埋土	砥石	11.7	6.4	1.8	310	白色細粒凝灰岩	奥羽山地東縁部 新第三系中新統	やや大型で断面扁平、鋭削り成形痕あり、3面使用。	329	95
62	D VI区中央北寄	表土	砥石	6.6	3.3	1.7	70	細砂質凝灰岩 (石質凝灰岩)	奥羽山地東縁部 新第三系中新統	小型、使い減りによって断面が若干扁平、4面使用。	329	95
63	D VII区 東西下テ中央	表土	砥石	5.4	2.9	0.5	22	白色細粒凝灰岩	奥羽山地東縁部 新第三系中新統	小型、使い減りによって断面が扁平、4面使用。	329	95
64	D VII区柱No 4	埋土	砥石	9.9	4.9	3.0	236	白色細粒凝灰岩	奥羽山地東縁部 新第三系中新統	2面のみ使用。	329	95

65	DVII区	表土		10.3	5.7	5.0	406	細砂質凝灰岩 (石質凝灰岩)	奥羽山地東縁部 新第三系中新統	やや大型、3面に使用面をもつ。	329	〃
66	EIII a 5落ち込み	埋土		5.7	4.9	1.9	108	細砂質凝灰岩 (石質凝灰岩)	奥羽山地東縁部 新第三系中新統	ズングリムックリで小型、断面は 扁平、3面に使用面をもつ。	330	〃
67	EIII a 5落ち込み	埋土	砥石	10.7	5.0	6.1	252	白色細粒凝灰岩	奥羽山地東縁部 新第三系中新統	一方が尖る楔形に近い平面、断面 は方形、3面使用。	330	〃
68	西館東西ベルト	西表 端土	砥石	15.2	5.0	4.7	620	淡緑色珪質凝灰岩	奥羽山地東縁部 新第三系中新統	やや大型、断面が方形で3面に使 用面をもつ。	330	〃
69	西館西端	表土	砥石	12.2	6.9	4.6	650	白色細粒凝灰岩	奥羽山地東縁部 新第三系中新統	ズングリムックリ形のやや大型、 断面台形状で4面使用。	330	96
70	西館東西ベルト	西表 端土	砥石	8.4	3.7	1.1	90	白色細粒凝灰岩	奥羽山地東縁部 新第三系中新統	断面扁平で板状のやや小型、4面 使用。	330	〃
71	西館	表土	砥石	13.8	7.9	0.6	252	淡緑色珪質凝灰岩	奥羽山地東縁部 新第三系中新統	断面扁平で板状、2面に使用面を もつ。	330	〃
72	西館東西ベルト	西表 端土	砥石	4.7	4.7	0.5	15	白色細粒凝灰岩	奥羽山地東縁部 新第三系中新統	平面三角形で断面扁平なやや小 型、2面使用。	330	〃
73	西館	表土	砥石	13.6	3.2	2.2	218	白色細粒凝灰岩	奥羽山地東縁部 新第三系中新統	やや大型、細長く断面方形、4面 使用。	330	〃
74	東館西端 (内端近)	表土	砥石	9.4	6.0	1.1	144	白色細粒凝灰岩	奥羽山地東縁部 新第三系中新統	ズングリムックリ形で使い減りによ って断面扁平、3面使用。	330	〃
75	東館南北ベルト	西寄り 表土	砥石	9.8	4.6	2.0	226	細砂質凝灰岩 (石質凝灰岩)	奥羽山地東縁部 新第三系中新統	不整形で断面五角形気味、3面に 使用面をもつ。	330	〃
76	東館東側外堀	スク モ	砥石	13.3	5.0	0.9	270	白色細粒凝灰岩	奥羽山地東縁部 新第三系中新統	断面方形で4面使用。	330	〃
77	東館南北ベルト	西寄り 表土	砥石	7.8	6.3	2.2	160	淡緑色珪質凝灰岩	奥羽山地東縁部 新第三系中新統	やや小型、不整形で1面のみ使用。	330	〃
78	出土地不明		砥石	10.7	9.7	1.4	495	細砂質凝灰岩 (石質凝灰岩)	奥羽山地東縁部 新第三系中新統	やや大型、断面扁平で3面使用。	330	〃
79	表採	表土	砥石	5.0	2.7	0.2	10	白色細粒凝灰岩	奥羽山地東縁部 新第三系中新統	小型、使い減りによって扁平、4 面使用。	330	〃
80	表採	表土	砥石	8.8	5.2	3.3	217	細砂質凝灰岩 (石質凝灰岩)	奥羽山地東縁部 新第三系中新統	やや小型、断面三角形で、使用 面は4面。	330	〃
81	CIV j 4井戸	埋土	砥石	9.9	6.5	6.6	680	白色細粒凝灰岩	奥羽山地東縁部 新第三系中新統	ズングリムックリの不整形、やや 大型、1面のみ使用。	330	〃
82	CVII b 4土坑	埋土	砥石	3.8	2.5	0.4	8	細砂質凝灰岩 (石質凝灰岩)	奥羽山地東縁部 新第三系中新統	小型で板状、2面に使用面をもつ。	330	〃
83	CVII b 3土坑	埋土	砥石	9.6	5.7	0.6	148	淡緑色珪質凝灰岩	奥羽山地東縁部 新第三系中新統	やや小型、断面扁平、1面のみ使 用。	330	〃
84	西館北側西端	整地層	砥石	5.2	7.0	3.2	64	両輝石安山岩 熔岩(多孔質)	岩手火山第四系	小型で不整形、1面のみ使用。	330	〃
85	東館西寄りベルト	粗掘	砥石	7.4	5.5	4.1	224	細砂質凝灰岩 (石質凝灰岩)	奥羽山地東縁部 新第三系中新統	ズングリムックリ形、断面台形、 4面に使用面をもつ。	330	〃

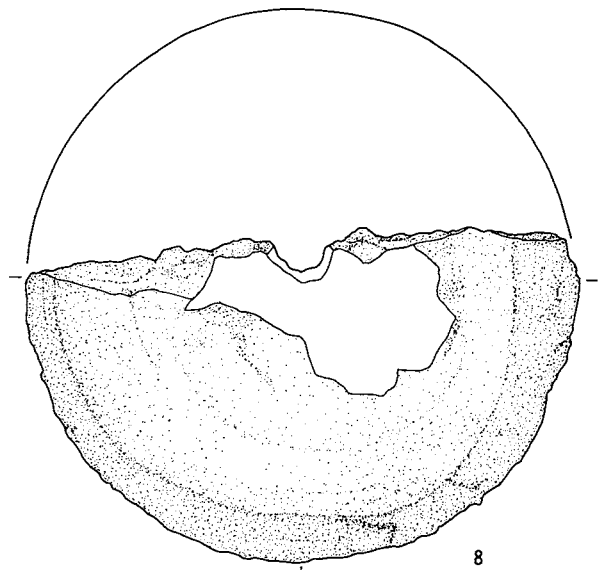
(3.53%)、両輝石安山岩熔岩3点(3.53%)、石英安山岩1点(1.18%)が使用され、所謂凝灰岩質の石が78点と91.76%を占める。これらの石材は、凝灰岩質が奥羽山地東縁部の中新統第三系、粘板岩は北上山地古世界、石英安山岩は奥羽山地東縁部豊沢川上流中新統第三系、両輝石安山岩熔岩は岩手火山第四系を産地とするものと推定される。

(2) 石臼 (第12表、第331~333図、写真図版96~98)

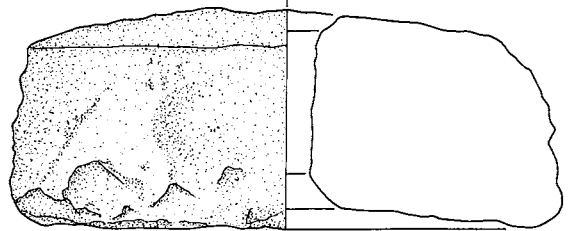
19点は西館14点、東館から4点と73.68%が西館から出土し、1点が出土地不明である。上臼と下臼が組をなすものは全く含まず、いずれも上臼か下臼のみの出土である。部位別にみると、上臼6点(7・9・10・13・17・19)、下臼13点(1~6・8・11・12・14~16・18)になり、下臼の出土が63.16%を占める。しかし、小破片での出土が多く、上臼では2点(17・18)、下



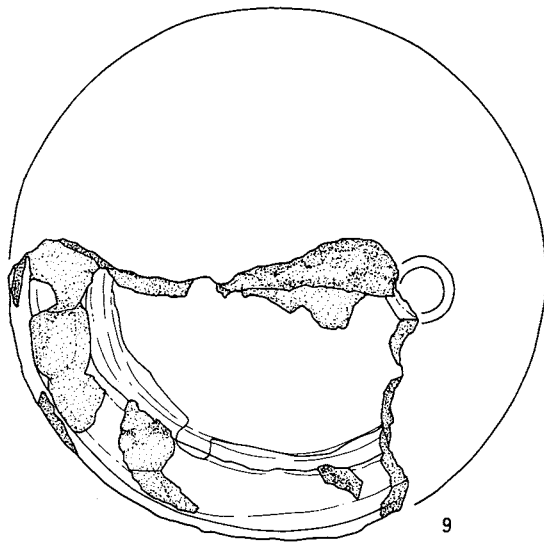
C II区北側西端 整地層下



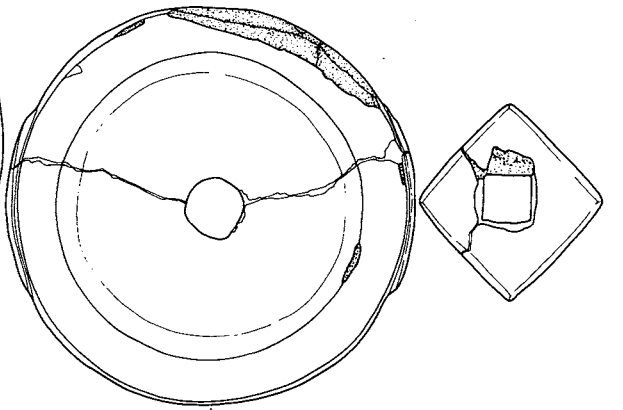
8



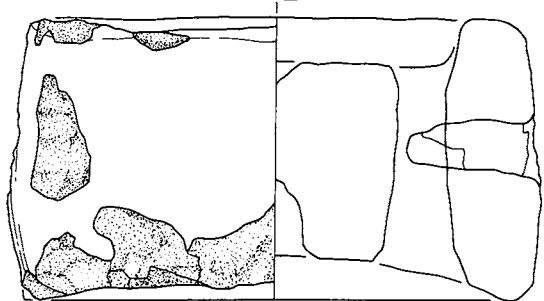
C IVj 4 井戸 埋土中位



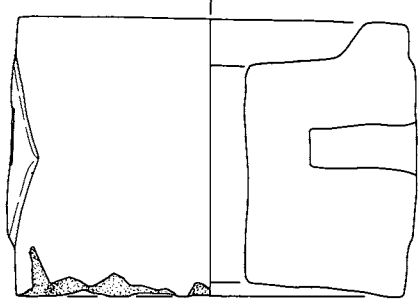
9



7



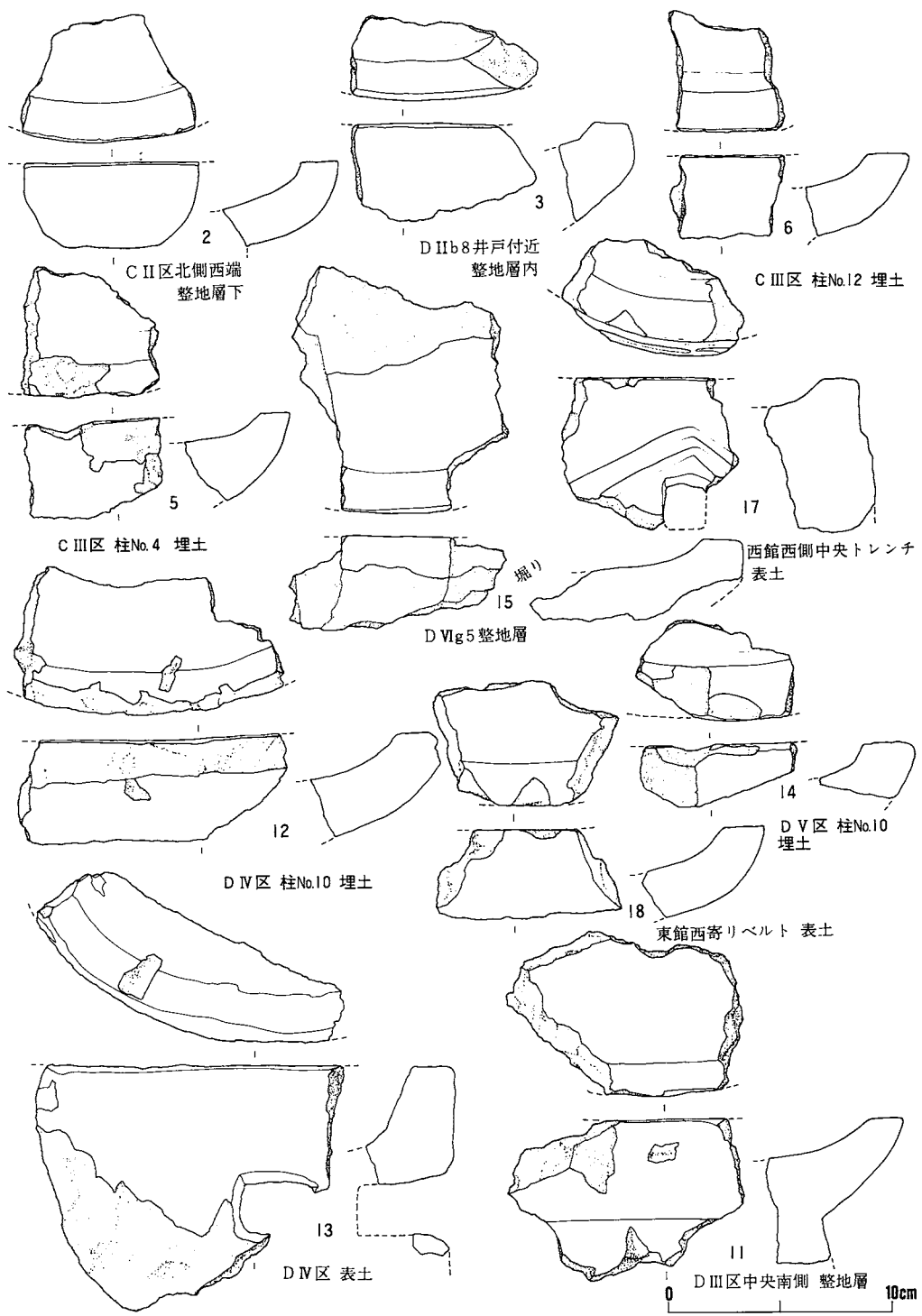
C IVj 4 井戸 埋土中位



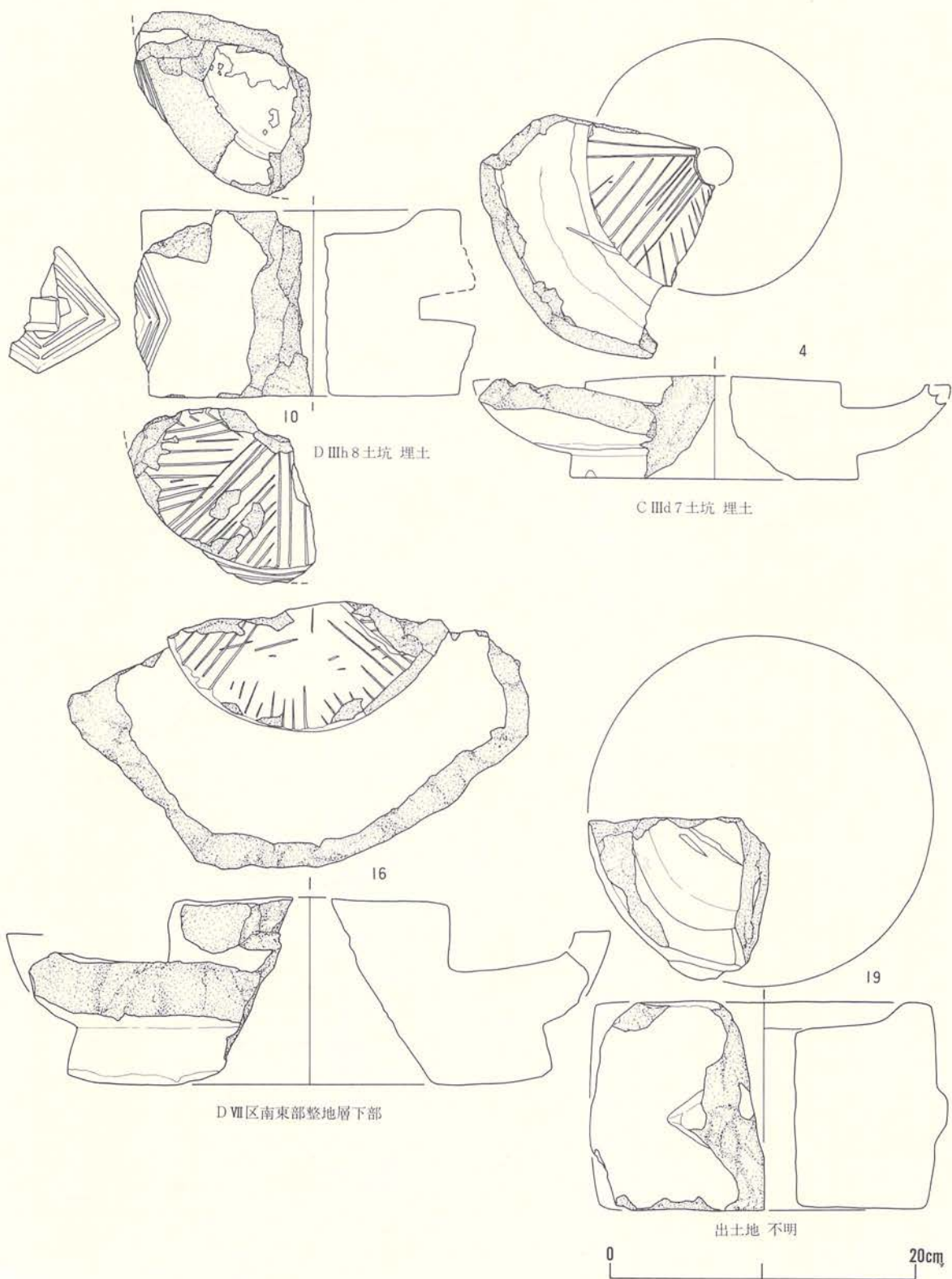
C IVj 4 井戸 埋土中位



第331図 石製品(石臼一I)



第332図 石製品(石臼一2)



第333图 石製品(石臼一3)

第12表 石 白 一 覧

種別 番号	出土地点	層位	器種	法 量				石 質	産 地	備 考	遺物 図版 番号	写真 図版 番号
				縦cm	横cm	厚cm	重g					
1	C II 区北側西端	整地層下	石白	9.8	9.8		1150	両輝石安山岩		茶臼の下臼、播部 $\frac{1}{2}$ 残存、粉受部欠損	331	96
2	C II 区北側西端	整地層下	石白	5.7	7.8		120	両輝石安山岩		茶臼の下臼、粉受部の小破片。	332	〃
3	C II b 8 井戸付近	整地層内	石白	3.8	8.4		90	両輝石安山岩		下臼粉受部の小破片、大型であり、穀白か。	332	〃
4	C III d 7 土坑	埋 土	石白	15.8	15.4		1390	淡緑質凝灰岩	奥羽山地東縁中新統	茶臼の下臼、約 $\frac{1}{2}$ 残存、粉受は端部欠損。	333	97
5	C III 区柱No.4	埋 土	石白	6.0	6.3		110	両輝石安山岩 角礫岩	和賀展勝地中新統	下臼粉受部の小破片	332	96
6	C III 区柱No.12	埋 土	石白	5.4	5.2		75	両輝石安山岩	和または奥中新統	下臼粉受部の小破片	332	〃
7	C IV j 4 井戸	埋土中位	石白	14.5	20.5		9200	両輝石安山岩 角礫岩	和賀展勝地中新統	茶臼の上臼、完形、半割のものを漆つぎ。	331	97
8	C IV j 4 井戸	埋土中位	石白	17.8	29.3		6980	両輝石安山岩 角礫岩	和賀展勝地中新統	穀臼の下臼、 $\frac{1}{2}$ 残存、火を受けている。	331	〃
9	C IV j 4 井戸	埋土中位	石白	16.1	21.7		5120	両輝石安山岩 角礫岩	和賀展勝地中新統	穀臼の下臼 $\frac{1}{2}$ 弱を残存火を受けている。	331	〃
10	D III h 8 土坑	埋 土	石白	12.0	11.4		1580	両輝石安山岩		穀臼の上臼、上部縁部のみを残存、火を受け布痕付着	333	98
11	D III 区中央南側	整地層	石白	7.5	10.6		340	両輝石安山岩		茶臼の下臼、粉受部~台部までの二部を残存。	332	〃
12	D IV 区柱No.10	埋 土	石白	6.8	12.1		300	両輝石安山岩		茶臼の下臼、粉受部の一部を残存	332	〃
13	D IV 区柱No.10	表 土	石白	7.7	13.8		650	両輝石安山岩		茶臼の上臼、穀受に漆が塗布か?	332	〃
14	D V 区柱No.10	埋 土	石白	4.5	7.2		50	淡緑質凝灰岩	奥羽山地東縁中新統	茶臼の下臼、粉受部の一部。	332	〃
15	D VI g 5	整地層	石白	11.0	9.8		225	両輝石安山岩		下臼の粉受部の破片	332	〃
16	D VII 区南東部	整地層下	石白	17.4	30.1		5210	両輝石安山岩		茶臼の下臼、約 $\frac{1}{2}$ 残存、粉受部の口縁を欠失	333	〃
17	西館西側 中央トレンチ	表 土		5.2	8.1		210	両輝石安山岩 角礫岩	和賀展勝地中新統	上臼、穀受部の縁部分、小破片	332	〃
18	東館西寄りベルト	表 土		5.7	8.3		120	両輝石安山岩	和または奥中新統	上臼、粉受部の縁部分、小破片	332	〃
19	出土地不明			10.4	11.7		1510	両輝石安山岩 角礫岩	和賀展勝地中新統	上臼、約 $\frac{1}{2}$ を残存	333	〃

臼の場合は8点(2・3・5・6・11・12・15・16)がそれに該当する。

上臼の内、半割したものを漆接ぎした7は縁を若干欠損するがほぼ完形である。径20.5cmの円形で14.5cmの高さがあり、上面から5.5cmの側面に2.6cmの方形を示す挽き木穴がある。また、挽き木穴の周囲には1辺7cmの菱形に盛り上がる化粧がある。上面は周辺部を2.5cmの幅で残し、その内側を約2cmの深さで皿状に掘り込み、中心部には径3cmの円孔が貫通する。臼面には1cmのふくみがあり、目は磨滅によってまったく残っていない。重さは9,200gである。9は7より大型となる以外はほぼ同じ状況を示す。その他10・13・17・19は小破片のため詳細は定かでないが、ほぼ同様と推定される。

下臼13点には受皿部分の小破片が9点(2・3・5・6・11・12・14・15・18)含まれ、他は約半分を残す2点(8・16)、約4分の1残す2点(1・4)になる。約半分を残す2点は受

け皿がつく16と受け皿の付かない8に分けられる。16の臼面には磨滅した8分画による9本を単位とする溝を付すが、8は磨滅で残っていない。16は底面から臼面まで約12cm、受け皿から臼面まで約4cm、臼面の径約19cm、受け皿を含めた最大径約40cmである。8は最大高約11.5cm、最大径約30cm、ふくみ約2cmの大きさである。約4分の1を残存する1・4は、1は受け皿全体を欠き、4は受け皿の上面まで残す。1は臼面まで約10.5cmの高さがあり、臼面の径約19cmの大きさがあり、臼面には7か8分画による8本の溝が付され、中央に径1.5cmの円孔が貫通する。4は底面から臼面まで約7cm、受け皿から臼面まで約1.8cmの高さがあり、臼面の径は約17cm、受け皿を残した径31.5cmの大きさで、受け皿の一部に黒漆を塗布した痕跡を残す。臼面には6分画による10本の溝を付すが、4本の溝は全通しない。中央部には径約2.5cmの円孔が貫通する。

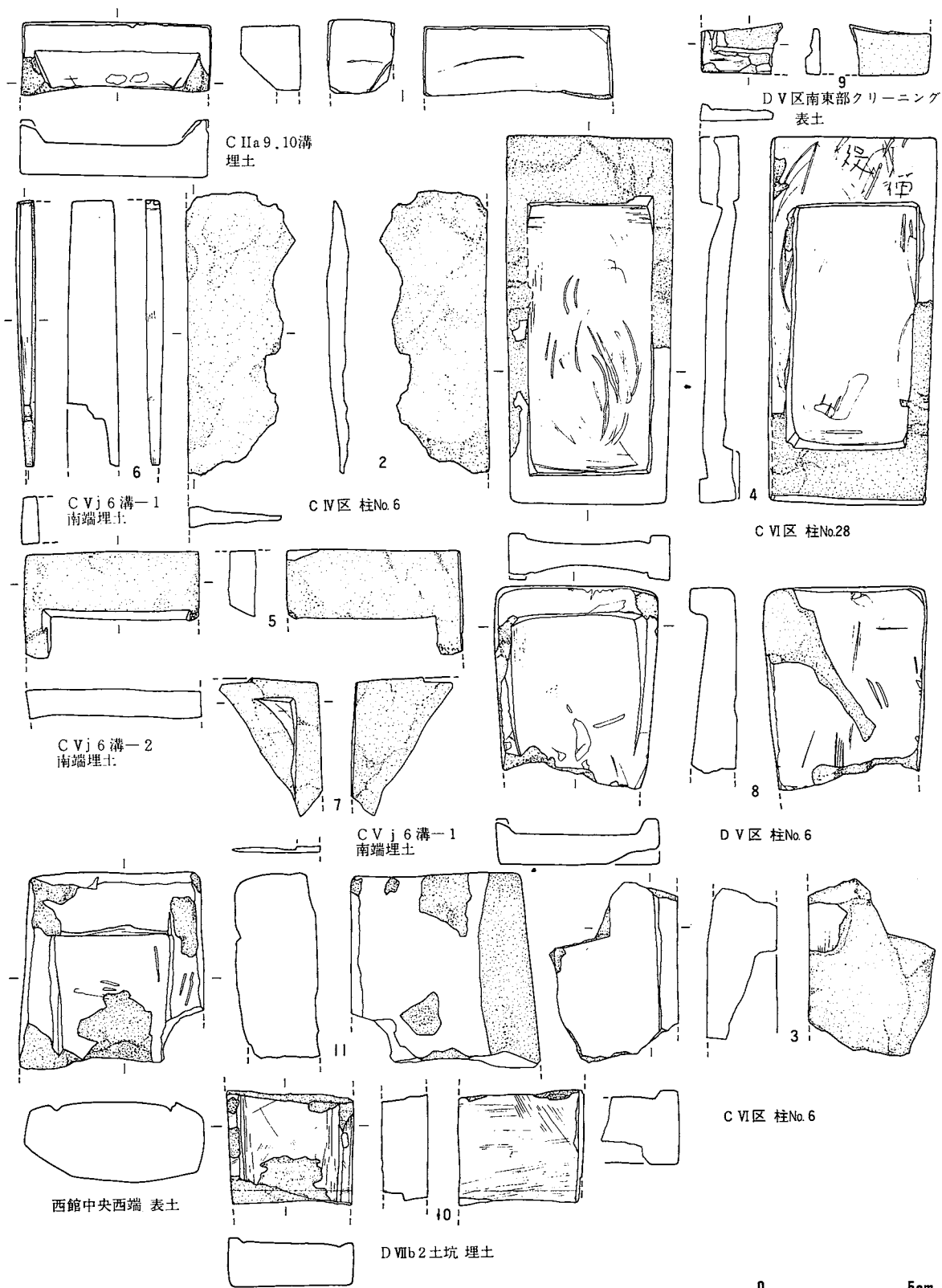
石材は両輝石安山岩11点(1・3・6・10~13・15・16・17)、淡緑色凝灰岩2点(4・14)、両輝石安山岩角礫岩6点(5・7~9・17・19)が使用されている。

(3) 硯 (第13表、第334・335図1~14、写真図版102)

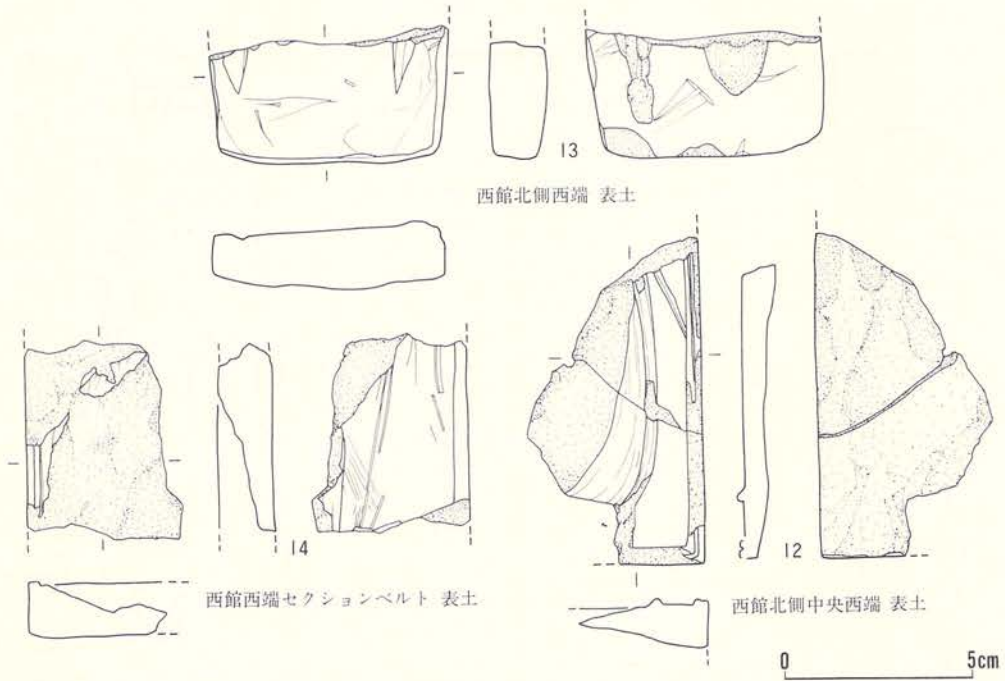
西館から6点、東館から8点の14点が出土している。これらは、柱穴状土坑から4点、溝跡から4点、土坑から1点、粗掘り5点の出土状況を示す。完形品の出土はなく、いずれも破片で陸部分8点(2・3・9~13)、海部3点(1・5・7)、陸部と海部を残す1点(4)、部分の不明のもの2点(6・7)に分かれる。全体が判明する4は、縦12cm、横5.5cm、厚さ1.3cmの大きさがあり、表裏両面に掘り込みをもつ。表面は縦9cm、横4.5cmの範囲で約2mm~3mm掘り込まれ、海部は約7mmの深さでさらに深くしている。裏面は縦8cm、横4cm、深さ2mm~3mmの掘り込みである。製作技法をみると18・11・13の3点はのみ使いが非常に稚拙で、特に11と13が著しい。横幅の計測できるのは6.3cm~6.4cm3点、5.5cm2点、4.2cm1点の分布状況を示し、これらが6.5cm~4cmの横幅をもつと推定されるが、8・10・11・13は陸部分に比較して海部分を幅広につくる。厚さは1.5cm~2.7cmまでみられるが、1.5cm~1.6cm5点、2cm前後2点、2.7cm1点の分布状況を示し、1.5cm~2cm位に主体がある。12は縁に浮き彫りによる文様と全周する圏線を付し、完形であれば優品であろうと推定され、中国製品の可能性をもつ。石材は粘板岩11点(1・2・4~7・9・10・12~14)、細砂質凝灰岩2点(3・8)、白色細粒凝灰岩1点(11)が使用されている。

第13表 硯 一 覧 表

種別 番号	出土地点	層位	器種	法 量				石 質	産 地	備 考	遺物 図版 番号	写真 図版 番号
				縦cm	横cm	厚cm	重g					
1	CII a 9・10溝	埋 土	石硯	2.4	6.4	2.0~ 0.8	54	粘板岩	北上山地古世界	海部の縁辺部のみを残存する。	334	102



第334図 石製品(硯一I)

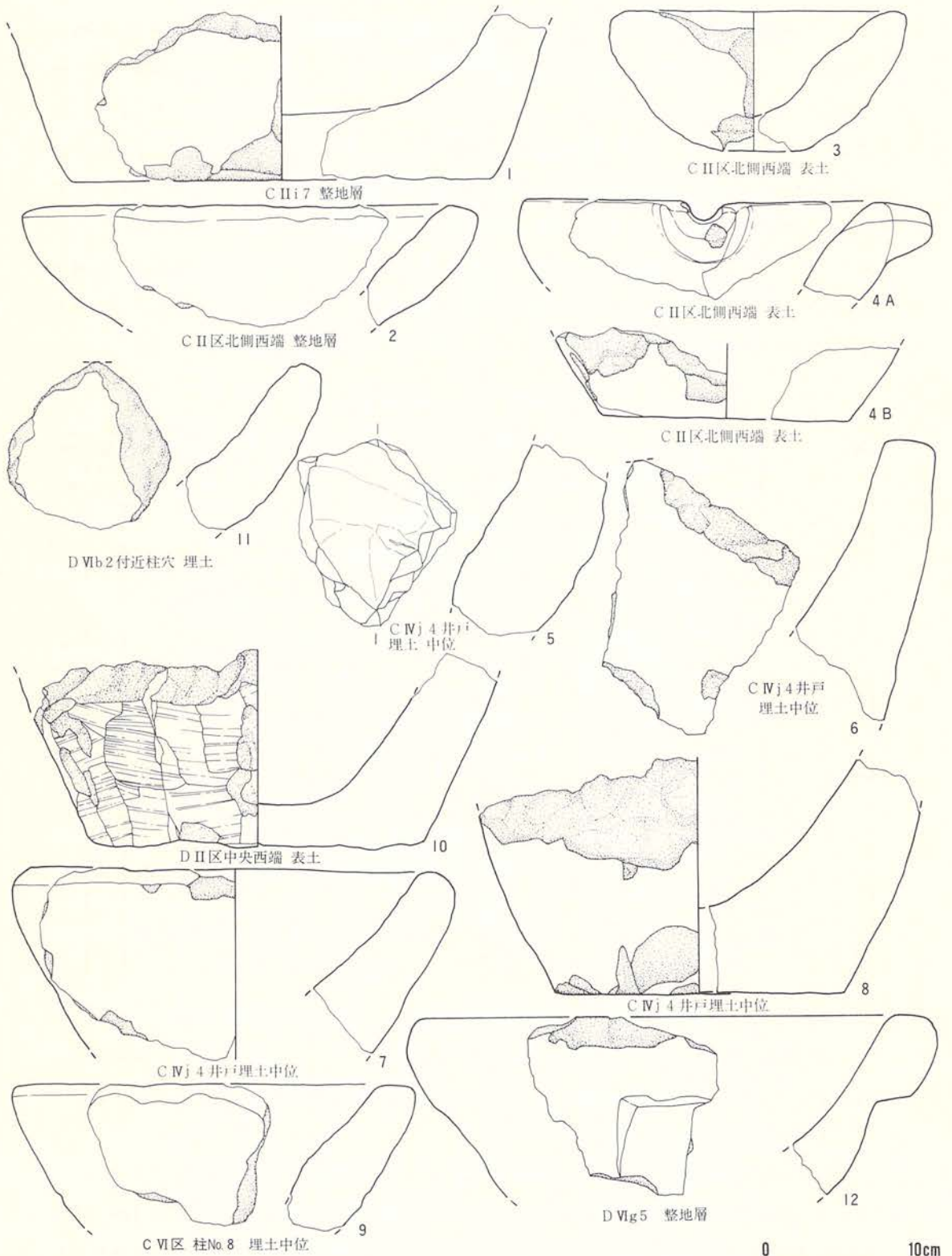


第335図 石製品(硯一2)

2	CIV区柱No.6	埋土	石硯	9.4	3.7	0.7~0.1	22	粘板岩	北上山地古世界	陸部の一部と推定される小破片	334	102
3	CVI区柱No.6	埋土	石硯	6.0	4.2	2.3~0.6	35	細砂質凝灰岩 (石質凝灰岩)	零石西南部 新第三系中新統	陸部と海部を共に一部残す破片	334	〃
4	CVI区柱No.28	埋土	石硯	12.2	5.5	1.2~0.4	125	粘板岩	北上山地古世界	両面を使用、ともに海部の縁辺部を欠損、刻字あり	334	〃
5	CVj 6溝-1	南端埋土	石硯	3.5	5.8	0.9~0.8	24	粘板岩	北上山地古世界	海部の縁辺部のみが残る破片。	334	〃
6	CVj 6溝-1	南端埋土	石硯	8.8	0.6	1.7~1.4	14	粘板岩	北上山地古世界	縁辺部の破片と考えられる。	334	〃
7	CVj 6溝-1	南端埋土	石硯	4.6	3.3	0.2~0.1	5	粘板岩	北上山地古世界	縁辺部の小破片	334	〃
8	DV区柱No.6	埋土	石硯	6.7	5.4	1.5~1.0	88	細砂質凝灰岩 (石質凝灰岩)	零石西南部 新第三系中新統	海部を残す残存する破片。	334	〃
9	DV区南果部	クレンジンシタ表土?	石硯	1.7	2.7	0.5~0.2	3	粘板岩	北上山地古世界	陸右隅部の小破片。	334	〃
10	DVII b 2土坑	埋土	石硯	3.8	4.2	1.5	45	粘板岩	北上山地古世界	陸部の破片	334	〃
11	西館中央西端	表土	石硯	6.0	6.2	2.7~2.0	120	白色細粒凝灰岩	零石西南部 新第三系中新統	陸部の破片、二次火熱。	334	〃
12	西館北側中央	西端表土	石硯	8.7	4.7	0.9~0.5	40	粘板岩	北上山地古世界	陸部の破片、縁辺部に浮彫様文様あり。	335	〃
13	西館北側	西端表土	石硯	3.6	6.4	1.5~1.1	40	粘板岩	北上山地古世界	陸部の破片	335	〃
14	西館西端セクションベルト	表土	石硯	5.4	4.2	1.5~0.4	64	粘板岩	北上山地古世界	陸部の破片	335	〃

(4) 石鉢 (第14表、第366図1~12、写真図版98・99)

13点の出土であるが完形品は含まない。口縁部付近を残すもの7点(2・3・4a・7・9・11・12)、体部を残すもの2点(5・6)、底部を残す破片4点(1・4b・8・10)があり、



第336図 石製品(石鉢)

4 a には断面半円状の片口がつく。底部は平らで直線的に外線的に外傾する体部は中位で僅かに内湾して口縁部に至る。口唇は水平に近い平坦を示すもの(9・12)や軽く外削ぎされて傾斜するもの(2・6・7・11)、さらに丸く仕上げるもの(4 a)などがある。また、12には体部上位に把手がつく。表面は調整が非常に丁寧な4 a・4 bと荒い削り痕を残す2・10や僅かに凹凸を残す程度に調整されるその他に分けられ、全般に調整はあまり良くない。口縁部破片から口縁部径を推定すると最大35cmから最小20cmまでの範囲であるが、25cm～35cmに5点が該当し、この大きさが主体であろう。同様に底部径をみると28cm～19cmの範囲に入る。石材は両輝石安山岩8点(3・6～12)、淡緑質凝灰岩4点(1・2・4)が使用されており、前者が圧倒的に多い。なお、16の内面は使い減りによる磨滅によって非常に滑らかな面を示している。

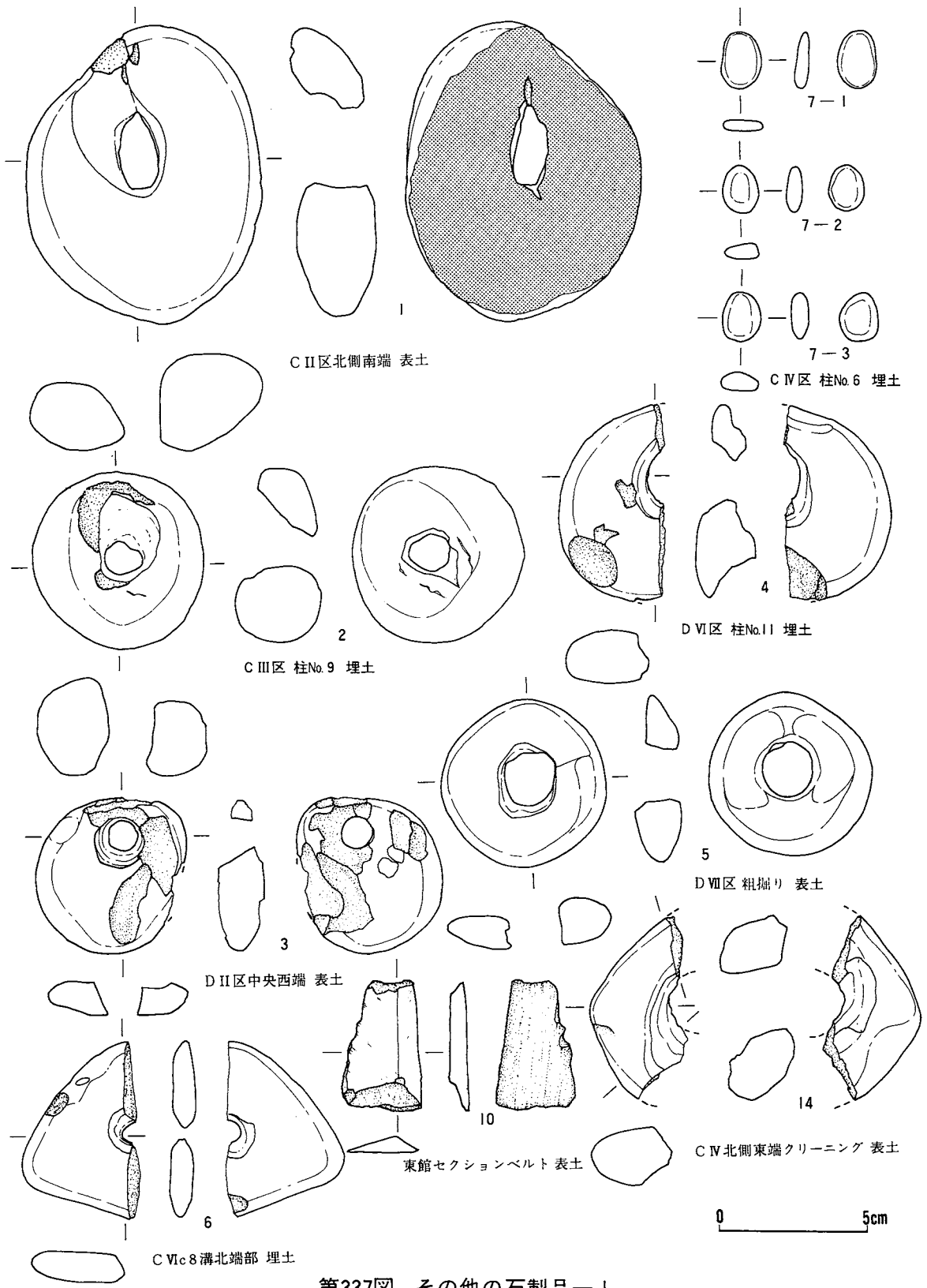
第14表 石鉢 一覧表

種別 番号	出土地点	層位	器種	法 量				石 質	産 地	備 考	遺物 図版 番号	写真 図版 番号
				縦cm	横cm	厚cm	重g					
1	C II j 7	整地層	石鉢	11.1	12.3		1440	淡緑質凝灰岩	奥羽山地東縁 中新統	底部～体下部を残す。	336	98
2	C II区北側西側	整地層	石鉢	8.0	18.3		660	淡緑質凝灰岩	奥羽山地東縁 中新統	口縁～体上部を残す破片	336	〃
3	C II区北側西端	表 土	石鉢	9.2	10.3		700	両輝石安山岩 角礫岩	和賀展勝地中新統	口縁～体上部を残す破片	336	98
4	C II区北側西端	整地層	石A 鉢B	6.6 5.8	17.4 10.7		390 480	淡緑質凝灰岩	奥羽山地東縁 中新統	体中部の破片	336	〃 99
5	C IV j 4 井戸	埋土中 位	石鉢	12.3	10.6		960	両輝石安山岩 角礫岩	和賀展勝地中新統	体中部の破片	336	〃
6	C IV j 4 井戸	埋土中 位	石鉢	18.2	13.6		1150	両輝石安山岩 角礫岩	和賀展勝地中新統	体下部の破片	336	〃
7	C IV j 4 井戸	埋土中 位		12.6	13.0		1060	両輝石安山岩 角礫岩	和賀展勝地中新統	口縁～体上部の破片	336	〃
8	C IV j 4 井戸	埋土中 位		29.0	15.6		3880	両輝石安山岩 角礫岩	和賀展勝地中新統	体下部～底部まで残存。	336	〃
9	C VI区柱Na8	埋土中 位		9.6	12.1		620	両輝石安山岩 角礫岩	和賀展勝地中新統	口縁～体下部を残す破片	336	〃
10	D II区中央西端	表 土		31.6	13.1		2970	淡緑質凝灰岩	奥羽山地東縁 中新統	体中部～底部まで残存。	336	〃
11	D VI b 2付近柱穴	埋 土		11.2	10.8		520	両輝石安山岩 角礫岩	和賀展勝地中新統	口縁部の破片か？	336	〃
12	D VI g 5	整地層		12.0	12.5		700	両輝石安山岩 角礫岩	和賀展勝地中新統	口縁部の破片。	336	〃

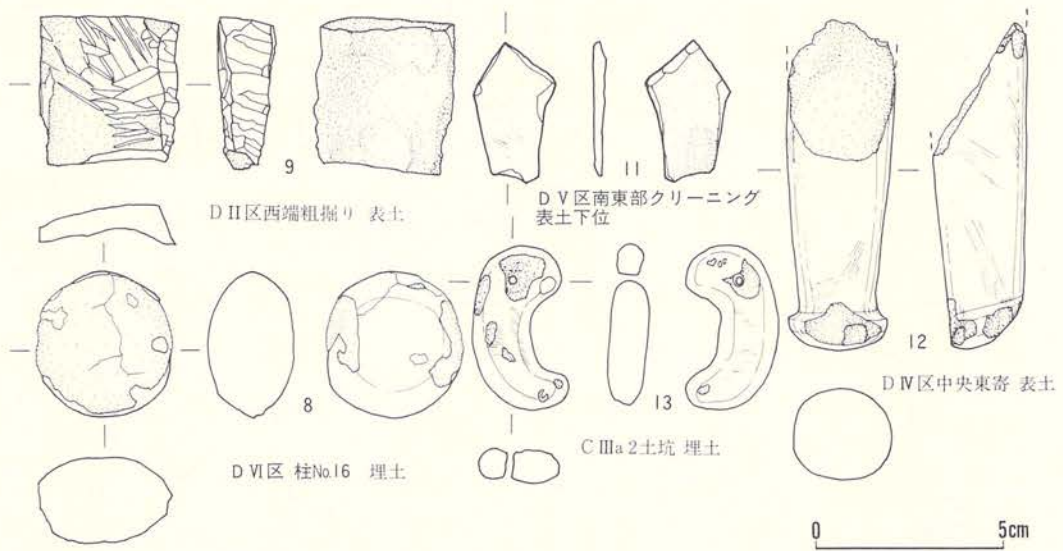
(5) その他の石製品 (第15表、第337・338図1～14、写真図版100・101)

16点の中に穴明き石7点(1～6・14)、基石3点(7-1・7-2・7-3)、器種不明の残片3点(9～11)、杓の獣足脚状のもの1点(12)、扁球状の磨石1点(8)を含み、他に古代に属すると考えられる勾玉が1点(13)ある。

穴明き石と命名したのは、扁平な自然礫に円形～楕円形の貫通孔を穿つものを対象としたが、4・6・14は2分の1強を欠損する他は完形であり、最大の1は長径10.1cm、短径8cm、厚さ2.7cm、重さ206gの大きさがあり、最小は3の長径5.3cm、横5.2cm、厚さ1.6cm、重さ48gであ



第337図 その他の石製品一I



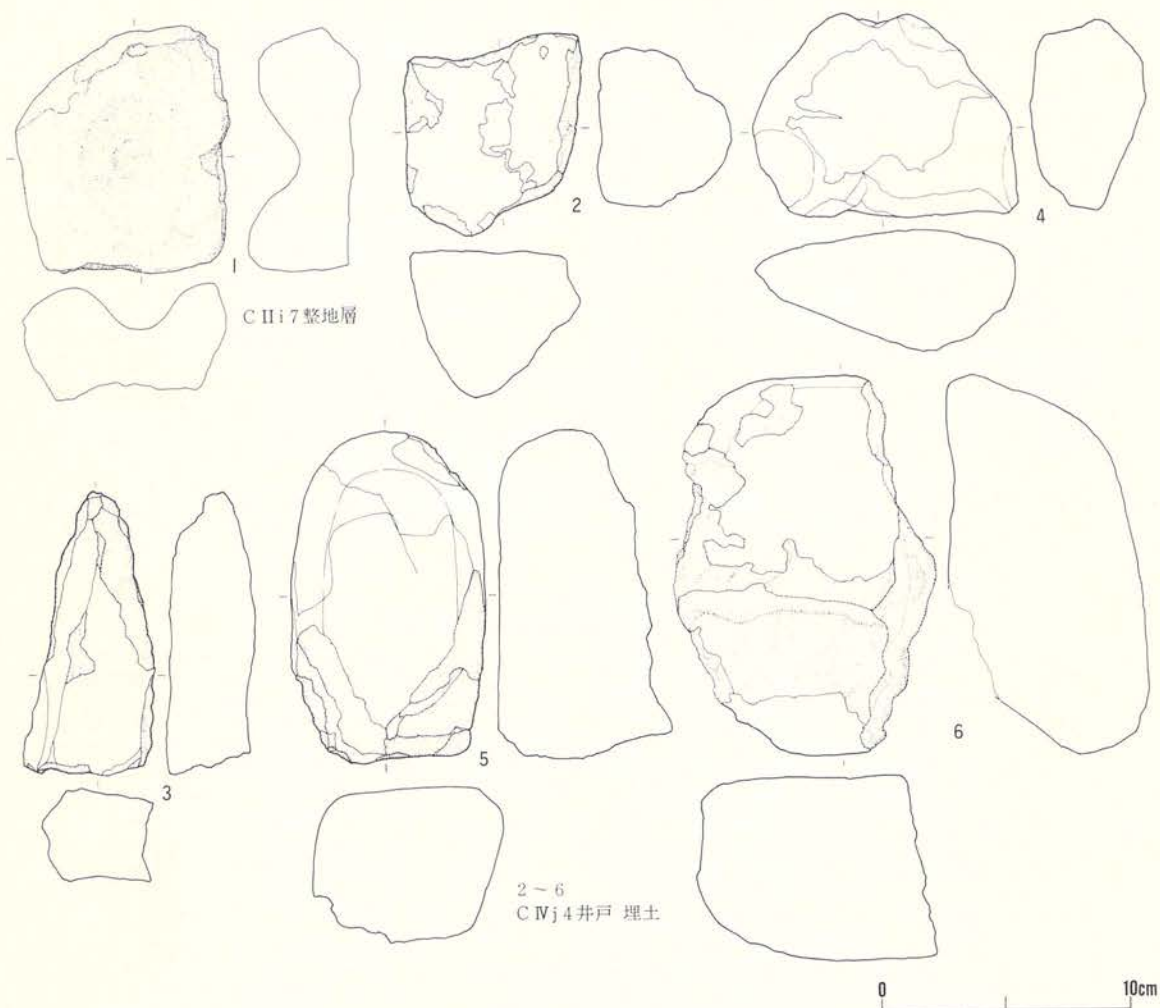
第338図 その他の石製品— 2

る。この中に貫通孔を人為的に穿つもの2点(3・6)と貫通孔の内壁上に紐掛りの擦痕を残す例が3点(1・2・14)、さらに表面を研磨する例が1点(3)含まれる。貫通孔の位置もほぼ中央が2点(2・5)、何れかに片寄るもの3点(1・3・4)、不明2点(6・14)となる。石材は白色細粒凝灰岩5点(1・2・4・5・14)、粘板岩1点(3)、細砂質凝灰岩1点(6)を含むが、人為的に白色細粒凝灰岩を選んだのではなく、自然の穴明き石が出来易いということを示すものであろう。使われ方は定かでないが、穴に紐を通して結び、吊り下げるものと推定される。1～3・14は西館から、4～6は東館の出土である。

基石3点(7-1～7-3)はCIV区の同一柱穴状土坑の埋土内から出土したが、特別な加工痕をもたない粘板岩の扁平な小円礫である。大きさは長径1.6cm～1.9cm、短径1.2cm～1.4cm、厚さ0.5cm～0.6cm、重さ1.4g～1.6gである。礫の色調からみて黒石に使われたことは明らかである。

器種不明の残片3点(9～11)は、10・11は1面がともに研磨面であり、本来の器種は不明であるが、砥石や硯といった研磨面をもつものの破片と推定される。9は2面に鉤状の工具による削り痕をもつが、本来の器種は不明である。3点とも粘板岩を石材とする。

12は径2cmを示す円柱の下端に、3方に張り出す突帯を作り出すもので、円柱部は全長8.7cmで、径3cmと上方ほど太い。机状の品物に付着した獣足形の脚と推定される。粘板岩を石材と



第339図 使用痕をもつ円礫

第15表 その他の石製品一覧表

種別 番号	出土地点	層位	器種	法 量				石 質	産 地	備 考	遺物 図版 番号	写真 図版 番号
				縦cm	横cm	厚cm	重g					
1	C III区北側西端	表土	穴アキ石	10.1	8.0	2.7	206	白色細粒凝灰岩	奥羽山地東縁部 新第三系中新統	扁平で楕円形の自然礫に穴。	336	101
2	C III区柱No 9	埋土	穴アキ石	6.0	5.8	2.9	84	白色細粒凝灰岩	奥羽山地東縁部 新第三系中新統	ほぼ円形の扁平な自然礫に穴、表面の一部研磨。	336	〃
3	D II区中央西端	表土	穴アキ石	5.3	5.2	1.6	48	粘板岩	北上山地古世界	扁平で楕円形の自然礫に穴、表面を一部研磨。	336	〃
4	D VI区柱No11	埋土	穴アキ石	6.6	3.6	2.0	53	白色細粒凝灰岩	奥羽山地東縁部 新第三系中新統	扁平で楕円形の自然礫に穴、約1/2残存。	336	〃
5	D VII区粗掘	表土	穴アキ石	5.7	5.6	1.6	47	白色細粒凝灰岩	奥羽山地東縁部 新第三系中新統	扁平で円形の自然礫に穴。	336	〃
6	C VIc 8溝北端部	埋土	穴アキ石	6.0	4.0	0.8	26	細砂質凝灰岩 (石質凝灰岩)	奥羽山地東縁部 新第三系中新統	不整形で扁平な礫に穿孔、約1/2を欠損。	336	〃

7-1	CIV区柱№6	埋土	基石	1.4	1.9	0.5	1.60	粘板岩	北上山地古世界	黒色で扁平な楕円形をした自然礫。	337	101
7-2	CIV区柱№6	埋土	基石	1.2	1.6	0.5	1.40	粘板岩	北上山地古世界	黒色で扁平な楕円形をした自然礫。	337	〃
7-3	CIV区柱№6	埋土	基石	1.4	1.7	0.6	2	粘板岩	北上山地古世界	黒色で扁平な楕円形をした自然礫。	337	〃
8	DVI区柱№16	埋土	円礫	3.9	3.6	2.3	25	白色細粒凝灰岩	奥羽山地東縁部 新第三系中新統	扁円球をした礫、自然礫の可能性大。	337	〃
9	DII区西端粗掘	表土	加工痕をもつ礫	4.0	3.7	1.6	20	粘板岩	北上山地古世界	残欠ではあるが、面取り加工の痕跡あり。	337	〃
10	東館セクションベルト	表土	研磨痕をもつ礫	4.5	2.7	0.6	10	粘板岩	北上山地古世界	小破片のため詳細不明。	337	100
11	DV区南東部クリーニング	表土下位	研磨痕をもつ礫	3.8	2.2	0.3	2.50	粘板岩	北上山地古世界	小破片のため詳細不明。	337	〃
12	DIV区中央東寄	表土	机の脚?	8.8	2.9	2.7	80	粘板岩	北上山地古世界	円柱状を示し、下端が猫足的である。	337	〃
13	CIII a 2土坑	埋土	勾玉	4.4	2.4	1.0	15	玉髓	奥羽山地東縁部 中新統	灰緑色した原石を使用している。	337	〃
14	CIV区北側東端クリーニング	表土	穴アキ石	6.2	3.3	2.3	41	白色細粒凝灰岩	奥羽山地東縁部	約1/2残存、扁平な自然礫に穴	337	101

第16表 使用痕のある礫一覧表

種別 番号	出土地点	層位	器種	法 量				石 質	産 地	備 考	遺物 図版 番号	写真 図版 番号
				縦cm	横cm	厚cm	重g					
1	CII i 7	整地層		19.7	17.0	8.0	3570	両輝石安山岩		叩き潰しによる大きな凹みを1カ所もつ。	338	100
2	CIV j 4 井戸	埋土		16.2	14.5	10.9	2410	両輝石安山岩		スス状の付着物あり	338	〃
3	CIV j 4 井戸	埋土		23.0	10.7	7.2	2130	石英安山岩	中新統	スス状の付着物あり、一部スリ面あり	338	〃
4	CIV j 4 井戸	埋土		21.2	16.5	9.5	3180	両輝石安山岩	和または奥中新統	スス状の付着物あり、一部スリ面あり	338	〃
5	CIV j 4 井戸	埋土		26.8	15.7	14.2	7120	石英安山岩	中新統	スス状の付着物あり、一部スリ面あり	338	〃
6	CIV j 4 井戸	埋土		30.6	21.1	16.7	11700	スス状の付着物あり、一部スリ面あり	338			

し、DIV区から出土している。

8は径3.9cm×3.6cm、厚さ2.3cm、重さ25gの大きさをもつ扁円球状の礫で、一部の表面が剥落している。一部分に研磨痕らしい状況が観察されるが、自然礫である可能性もある。白色細粒凝灰岩を石材としている。

(6) 使用痕をもつ円礫 (第16表、第339図、写真図版99・100)

6点の出土であるが、1以外はCIV j 4 井戸跡の埋土内から出土した。1は縦19.7cm、横17

cm、厚さ8cm、重さ3.57kgの大きさで若干歪んだ方形を示す両輝石安山岩の1面に叩き潰しによる径10cm×8cm、深さ3.5cmの凹みをもつ自然礫である。CII区の西端部整地層内から出土した。2～6はいずれも二次的な焼成を受けており、表面の一部を剥落する例が多く、さらにすべてに煤状の黒色を示す異物が付着する。また、3～6には研磨か磨滅によると考えられる凹凸の少ない面がある。何に使用されたかは不明である。石材は両輝石安山岩3点(1・2・4)、石英安山岩3点(3・5・6)である。

3) 漆・木製品類

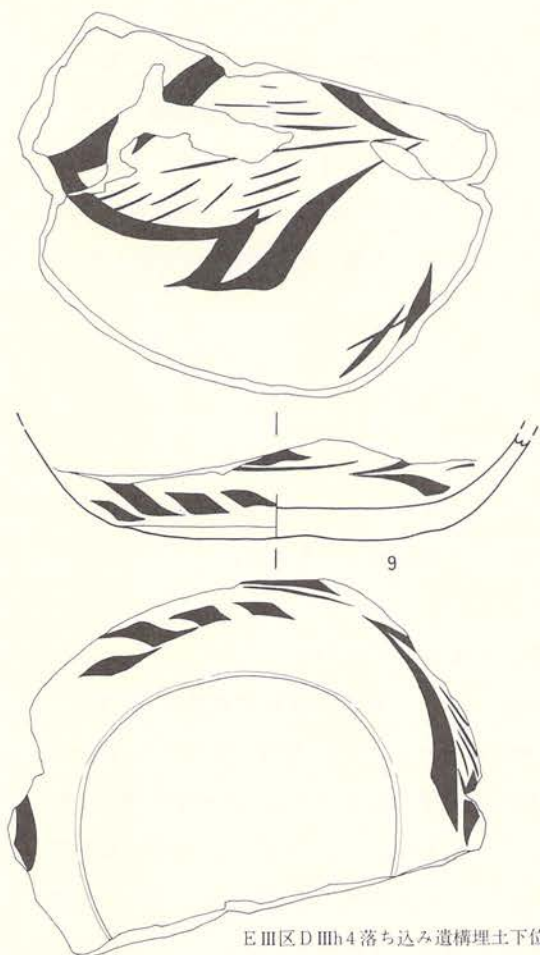
各種木製品類51点、漆塗製品15点の出土であるが、完形になるものは少なく、破片の出土が多い。中でも漆塗製品は木地は腐敗し漆膜だけが残存する例が多く含まれる。

(1) 漆製品類 (第17表、第340図3・8・9、写真図版103・104)

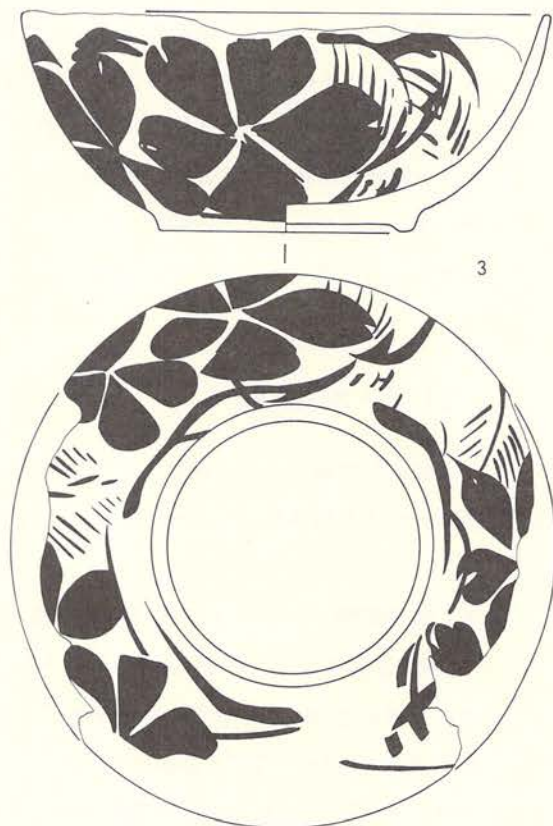
漆器・漆膜を含めた漆製品は15点出土しているが、この中に椀が漆膜を含めて3点(3・5・8)、と皿1点(9)以外は元の器形を推定できる残存状況ではないため、器種が不明である。西館から10点、東館から5点と西館からの出土が多く、特に西館西端部の落ち込み遺構を埋めた整地層の中に器形・器種の不明な漆膜が数多く混在していた。椀・皿以外の器種では、東館のCVI区の柱穴状土坑から小札が出土した。それ以外は赤色漆膜7点、黒色地に赤か赤色地に黒色の文様をもつ漆膜3点である。しかし、下地塗りと仕上塗りの色を変える例が多くみられる。

〈椀〉 (第340図3・8、写真図版103)

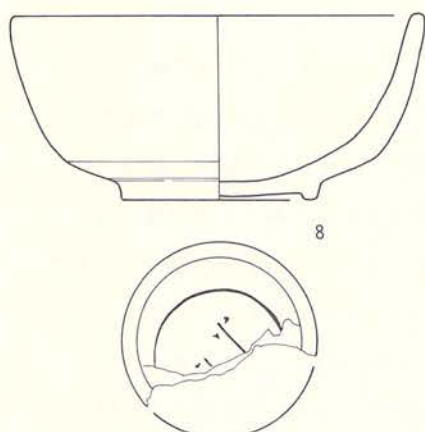
3点の出土であるが、1点(5)は生地が残らず漆膜のみの出土である。3は口縁部と高台の一部を欠くがほぼ全体を残存する。口縁部径14.5cm、底部径7.5cm、器高5.8cmの大きさで、高さ3mm、幅4mmの輪高台がつく。体部は丸味をもって外傾し、器厚は高台脇から次第に薄くして端部に移行し、口唇は丸味をもって小さくおさまる。漆膜は非常に薄く、黒色漆で内外全面に下地塗りしたのち、内面にだけ赤色漆による仕上げ塗りがある。外面は黒色漆の地に赤色漆で草花文(かたばみ文?)が描かれる。西館CIV区のCIVa7井戸の最下位から出土した。5は、東館CVII区の柱穴状土坑の底面に密着して出土したが、生地は腐敗によってまったく残っていない。薄紙に黒色漆を塗り重ねて下地塗りされ、その後高台内を除いた全面に朱色漆が仕上げ塗りされる。高台内は黒色漆に三の銘が入る。全体の大きさは不明であるが高台の径が6.5cmである。文様はまったく描かれないが、3よりは優品であろう。8は東館東側の外堀とした堀の埋土内から出土した。口縁部径11cm、底部径5.3cm、器高4.8cmの大きさがあり、高台脇か



E III区 D IIIh 4 落ち込み遺構埋土下位



C IV区 C IVa 7 井戸 埋土最下層



D VIII区 東館東側外堀 埋土

0 5cm

第340図 漆製品

ら大きく直線的に外傾する体部は、腰部に張りをもって強く立ち上がり、僅か内湾して端部に移行し口縁部は丸味をもっておさまる。器厚は腰部に最大厚をもち、口縁部と底部に寄るほど薄くなる。高台は高さ5mm、幅4mmの輪高台である。漆は最初黒色漆を全面に塗って下地を作り、高台内と口唇を除いて全面に赤色漆を塗って仕上げ、口唇は口紅状にしたものであろう。高台内は赤色漆で円が引かれ、その中に全体が不明な文様が描かれる。

〈皿〉 (第340図9、写真図版104)

1点(9)のみの出土である。口縁部と体部から底部約3分の1を欠損し、DⅢh4落ち込み遺構のEⅢa5地点の埋土下位から出土した。残存部の口縁部径13.5cm、残存器高2.8cm、底部径8.5cmの大きさで、底部は2mm位のベタ高台状の丸底風を示し、体部は僅かに内湾して外傾する。漆は底部を除いて黒色漆を全面に塗った後、内外面に草花文と推定される文様を描いている。

〈小札〉

バラバラに破損した径2mmの円孔が多く付された漆膜が出土している。原形の大きさは不明であるが、円孔を緘糸の穴と考え小札であろうと推定した。心地が残っていないので革なのか他の材質なのか明らかでないが、何んらかの材質の心地に黒色漆を塗ってその上に赤色漆をかけて仕上げている。

〈その他〉

他の10点(1・2・6・7・10~15)はいずれも漆膜の残片である。その中で1・7・12・14は湾曲する部分を含むことから椀・皿の部類と推定され、6は平板的であることから漆塗りの膳であった可能性がある。他は小破片のため不明である。1・7・11は黒色漆の上に朱色漆で草花文的な文様を描き、14を除いたその他は黒色漆を塗った後赤色漆を全面に塗って仕上げているが、14は赤色漆だけで仕上げている。このような漆膜が数多く出土したことと、取り上げられなかった漆膜も多量であったことも考え合わせると、日常生活の中で相当数多くの漆塗り製品が使われていたことを示すものであろう。

(2) 木製品類 (第18表、第341~345図1~51、写真図版104~107)

51点には下駄4点(1~4)、曲物17点(5~23)、篋2点(24・25)、底板6点(26~31)、箸2点(35・36)、菰槌1点(37)、丸棒1点(39)、板材1点(40)、加工材7点(32~34・38・41~43)、切痕のある自然木6点(44~47・51)、木片2点(49・50)、種子2点(48)が含まれる。

〈下駄〉 (第341図1~4、写真図版104)

4点はCⅡh9井戸埋土最下位から2点(1・2)と東館南東部外堀埋土から1点(3)、東館北側外堀埋土1点(4)の出土で、この中には子供用下駄1点(1)、大人用下駄3点(2~4)が含まれる。さらに歯の状況によって連歯のもの3点(1・2・4)と差歯のもの1点(3)

に分かれる。連歯のものは横木取りで作られ、四隅がいずれも丸味をもつ。鼻緒穴は、2と4は円形で前壺は中軸線上に1個、後は両側に各1個の2個あり、ともに歯の前に穿たれる。1も位置は2と同様であるが、形が方形を示し前方を向けて斜めに穿たれるという違いがある。大きさは、1の長さは明確でないが12cm位と推定され、幅は6.5cm、高さは前歯で4cm、後歯で3.3cmあり、平面は隅丸長形状を示す。2と4は、長さが前者21.2cm、後者22cm、高さは前者3.2cm、後者3.9cmと大差はなく、ともに後歯に比較して前歯が高いという共通点もみられるが、幅が前者は9cm、後者12.2cmと大差があり、4は全体に細長くやや作りも粗雑である。3は、前歯・後歯とも厚さ4.5cmの台に枘穴挿しによって装着された差歯である。平面形は後方が尖形をなす舟形状、断面形は舟底形を示し、全長21.6cm幅が前方約7.5cm、後方の最広部で9.7cmの大きさと後を広く仕上げている。前歯は端から4.2cm、後歯は5cmの位置に2個の枘穴で挿し込まれる。鼻緒穴は、いずれも上面は円形をなすが、前壺は前方へ斜めに方形に穿たれ、後の台裏側は方形に大きく穿ち、鼻緒の結び目をはめ込んだものであろう。歯は全体が残存しないので定かでないが、台の幅に比較して接地面が大ききはみだす台形状をなし、接地面には多くの石を嚙んでいる。

〈曲物〉 (第342図5～23、写真図版105・106)

18点の内14点(5～19)が西館のCIV j 4井戸跡の埋土最下位層の出土で、他は内堀の南側埋土1点(20)、東館の東側外堀の埋土内から3点(21～23)が出土している。5がほぼ全形を残す以外はいずれも破片である。5は厚さ1.5mm～2mmの杉薄板を2枚重ねて円形に曲げ、両端の重なり部分を幅7mmの樺皮で縫い合わせた作りで、最大径12cm、最小径11cm、高さ4.4cmの大きさをもつ。底板や上蓋の痕跡がないので身なのか蓋なのかは定かでない。また、樺皮がほつれて長く伸びることから本来はもっと高さのある形の可能性がある。その他では本来は5と同様に円形に仕上げられていたと推定されるもの6点(6～8・11・17・18)を含み、6・11・17は縫い合わせた樺皮が付着し、7・8は5に近い湾曲する状況を示す。18の斜格子状の切り込みは6のそれと同じ状況を示すと考えられる。厚さはいずれも1.5mm～2.5mm位でほぼ一定し、9・10・13・14もほぼ5と同じ様な使われ方が推定される。なお、6・10には焼け焦げ痕が残る。これらはいずれも杉の柁目材を使用し、もっとも幅の広い6で7.7cm、それに次ぐ10が6cmと、5より深く径の大きい曲物も使用されていたものと推定される。

〈篋〉 (第343図24・25、写真図版106)

2点はともにCIV a 7井戸の埋土下位から出土した。2点とも一部を欠失するが羽子板状の平面形をなし、いずれも厚さ7mm～9mmの杉板を素材とする。全長は24が19cm、25は21.8cm、

最大幅が24で4.2cm、25で6cm、握り部分の幅が24—1.4cm、25で3.3cmと、24が25より一回り小型であるとともに、24は角を丸く削るなど25の細工よりも丁寧である。

〈底板〉 (第343・344図26～31、写真図版106・107)

6点はCIV a 7井戸跡埋土下位1点、CIV j 4井戸跡埋土最下位2点、DIV c 8井戸跡埋土下位1点の出土と井戸跡からの出土が多く、他の2点は東館東側外堀の埋土内から出土した。平面形には方形を示す3点(26～28)と円形をなす3点(29～31)に分けられる。前者は26では側面に5個、27は上面の両端に各2個の釘穴と推定される径3mm～5mmの円孔があり、27の場合は貫通している。大きさは、26が長さ22.6cm以上、幅4.6cm以上で、27が長さ23cm、幅6.4cm以上があり、27は中央より若干上位で折損し多くの直線的な切痕をもつ。釘穴をもつことからこの2点は箱物の底板か蓋板と考えられる。28は細工の状況があまり良好ではないが、角を落していることや樺皮で側板を縫い留めていたらしい状況を示すことから折敷膳の底板の一部と推定される。長さ29.5cm以上、幅5cm以上の大きさと左側縁辺部の内側約1cmに、上から約10cmと21cmの二箇所に幅5mmで並行する状態で樺皮が貫通している。厚さは約5mmで表面は平滑な仕上がりであるが、裏面は割面をそのまま残すらしく凹凸が著しい。29はやや歪んだ円形状を示し、他の30・31は円弧を描く破片であることから桶か曲物の底板と推定される。大きさは、29は径10.5cm、厚さ8mm～9mm、30は長さ17.5cm、厚さ1.8cm、31は径20.8cm以上、厚さ1.1cmで、いずれも杉柾目の板材を使用している。

〈箸〉 (第344図35・36、写真図版107)

2点は、35がCIV a 7井戸跡埋土下位、36はD III h 4落ち込み遺構の埋土下位から出土した。これらは杉板を細割にした後角を削り落して方形気味(36)や多角形(35)の断面になるように整形して作られている。長さは35が17.8cm、36は欠損しているので明確でないが11.5cm以上あり、径は両者とも6mmぐらいである。

〈菰 槌〉 (第344図37、写真図版107)

東館東側の外堀の埋土上位から1点している。これは、径5.6cmの自然丸太を16.2cmの長さにて切断し、上端から3cm～5.6cmの間を鉋で切り込みを入れて径4.4cmに削り取って括れを作り出し、紐掛かりとしている。両端も鉋によって切断されている。

〈丸 棒〉 (第344図39、写真図版107)

D III h 4落ち込み遺構の埋土下位から1点出土している。杉板を細割にしそれを削って断面

が円形や楕円形に整形している。下端が焼け焦げ長さ23.2cm、太さは最大2.5cmである。

〈板 材〉 (第345図40、写真図版107)

D III h 9 落ち込み遺構の埋土下位から1点出土した。幅1.3cm、長さ21.5cm、厚さ7mmの大きさがあり、板状に割られた材であるが二次整形の痕跡がまったくない。広葉樹を素材としている。おそらく特定の器種に作る前段階と推定される。

〈加工材〉 (第344・345図32～34・38・41～43、写真図版107)

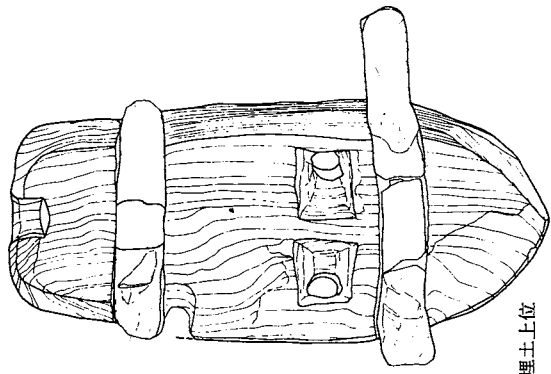
加工材とした7点には32～34の成品であるが器種が不明のもの、38・41～43のように人為的に割られたことは明白であるが、特定の器種に再加工していないものを含む。前者のうち32はCIV a 7 井戸跡の埋土下位、33・34は内堀南側の埋土中位から出土している。後者は38はCIV j 4 井戸跡埋土下位、42・43はCIV a 7 井戸跡埋土下位、41はC II h 9 井戸跡埋土下位から出土した。

前者のうち32は、厚さ7mmの杉の板目材を一辺6cmの正六角形に切り抜き、中央に幅4mm、長さ3.2cmの細長い貫通孔と、2箇所径7mmの円形な貫通孔を穿つ。片面に何んらかの割付けをしたと推定される線が引かれている。器種は不明であるが、成品の一部分であろう。33は全長14cm、幅2.5cm、厚さ1cmの大きさがあり、下位は一辺6mmの方形に柵状に細く細工され、欠失によって定かでないが上位も同様であった痕跡を残す。幅広部分のほぼ中央に径5mmの貫通孔を穿つ。ある器種の部品であろうと推定される。杉を使用している。34は全長15.6cm、最大幅6cm、厚さ1.2cmの大きさがあり、内側を円弧状に切り抜いている。下位の両面を幅2.5cmで厚さ8mmになるように薄くし、この部分が何かに挟み込まれていた可能性がある。前2者同様何かの部品と推定される。

後者の4点は、38は焼け焦げ痕を残すことからなんとも言えないが、41～43は丸太から割り木された材であり、42は一部に面取りされた痕跡を残す。41は鉋による粗い削り痕を残す。43は両端に切断痕をもつが、周囲の1面は自然面を残し他の3面は割り痕のみをもつ。

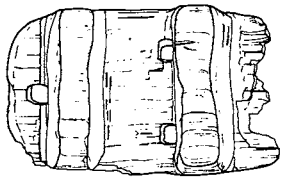
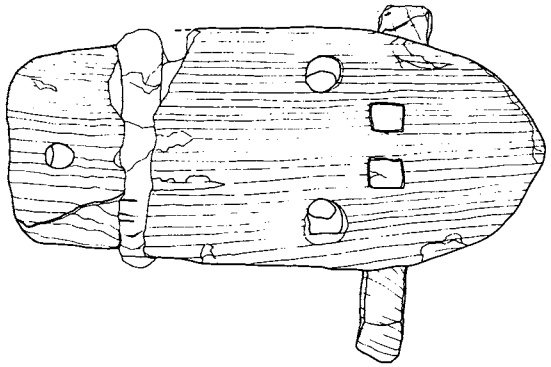
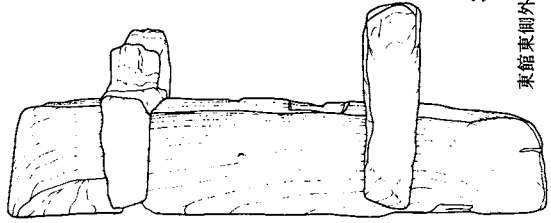
〈切痕をもつ自然木〉 (第345図44～47、写真図版107)

いずれもCIV j 4 井戸跡埋土下位から出土した。これら以外にも径10cm以下の小径自然木が多く投げ込まれていたが、ここには切り倒す際の切痕を明瞭に残す代表的なものを掲載した。長い材は1m以上であったが原形の状態では収納できなかった。鋸引による切断痕をもつ例はまったく含まず、すべて鉋か斧による切痕である。表面にはいずれも表皮をそのまま残存している。



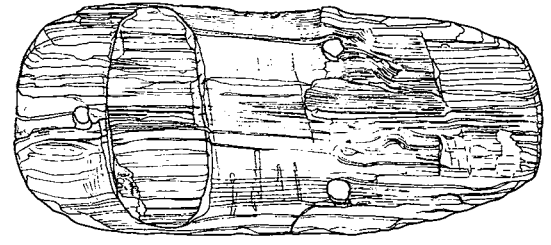
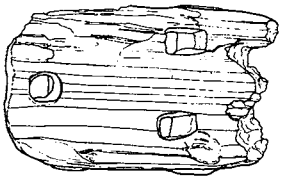
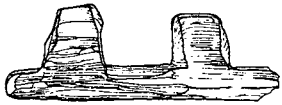
3

東館東側外堀埋土上位



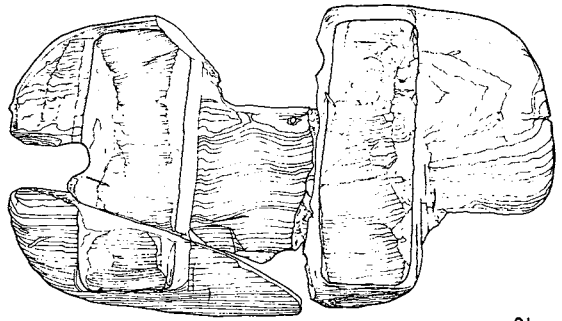
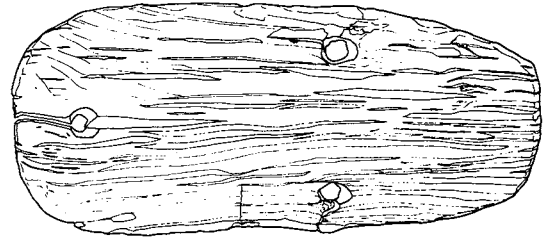
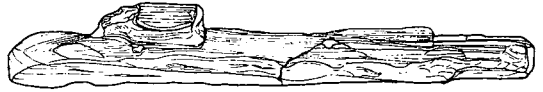
1

C IIh.9 井戸埋土最下位



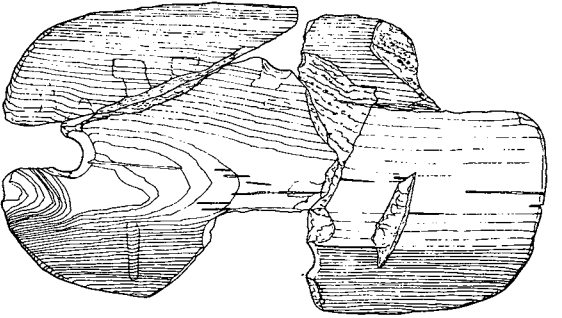
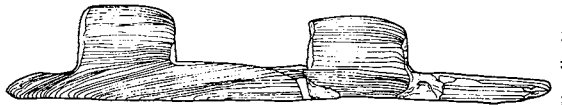
4

東館北側外堀埋土



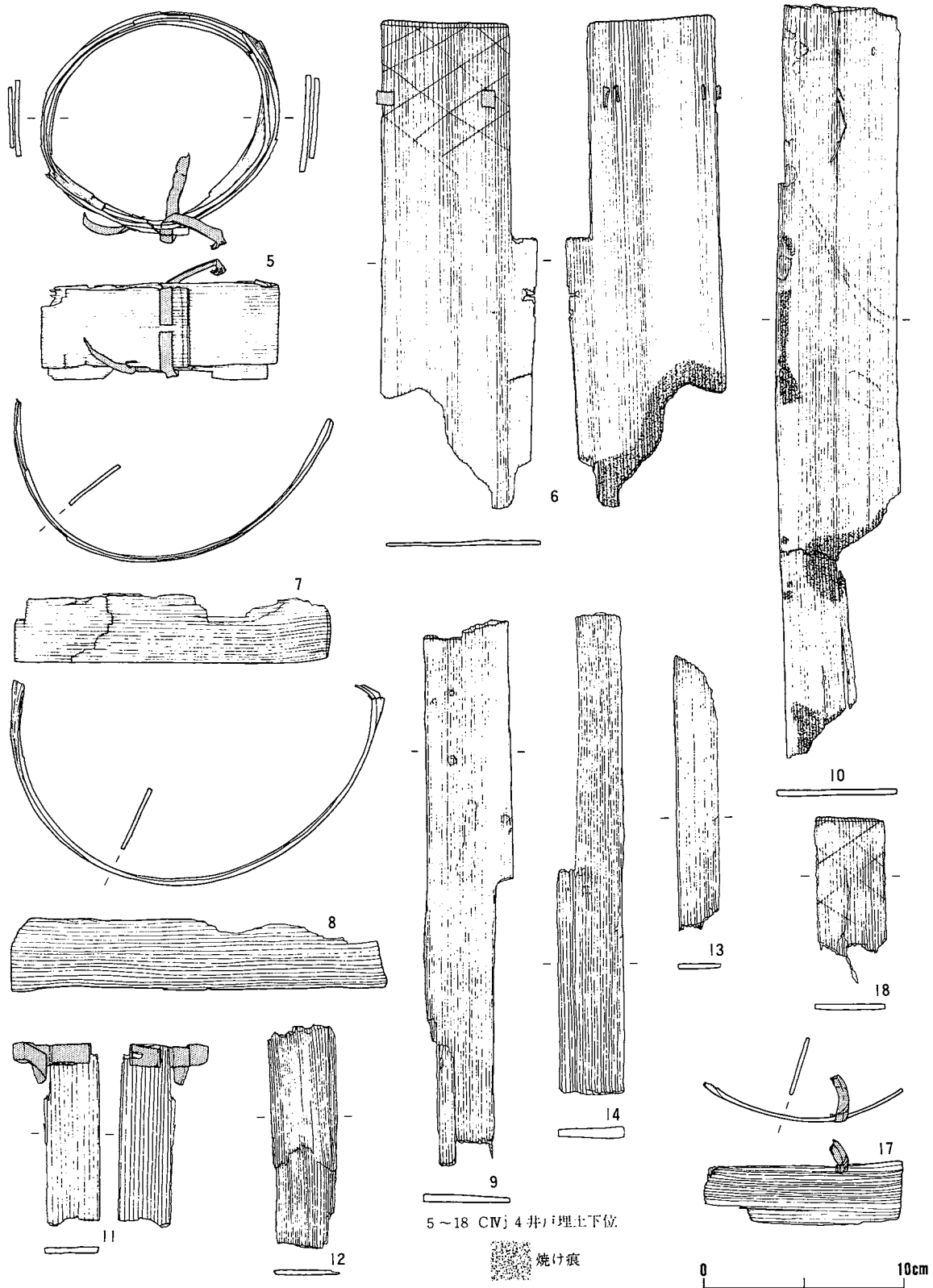
2

C IIh.9 井戸埋土最下位



第34|図 木製品一|

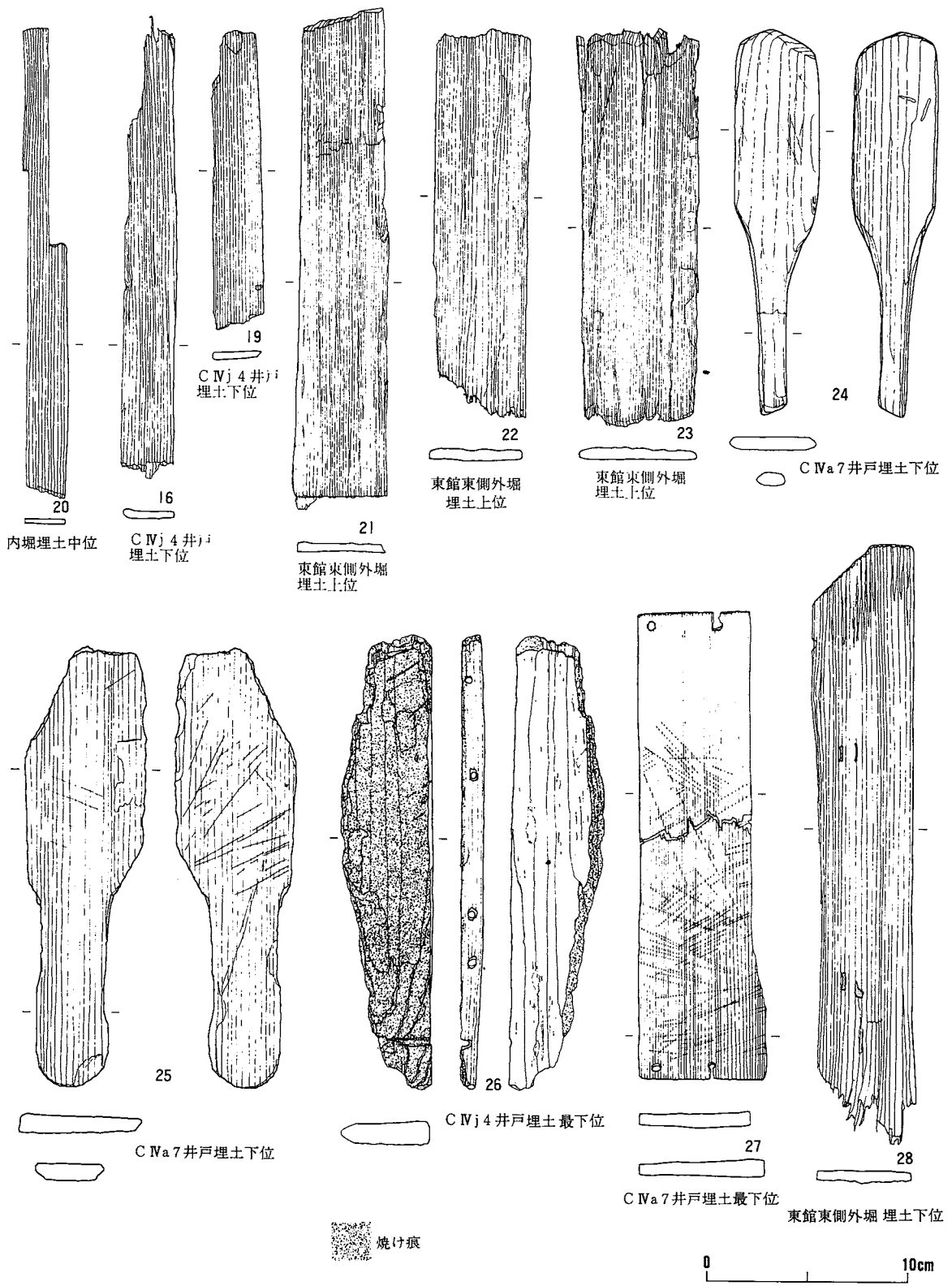
10cm
0



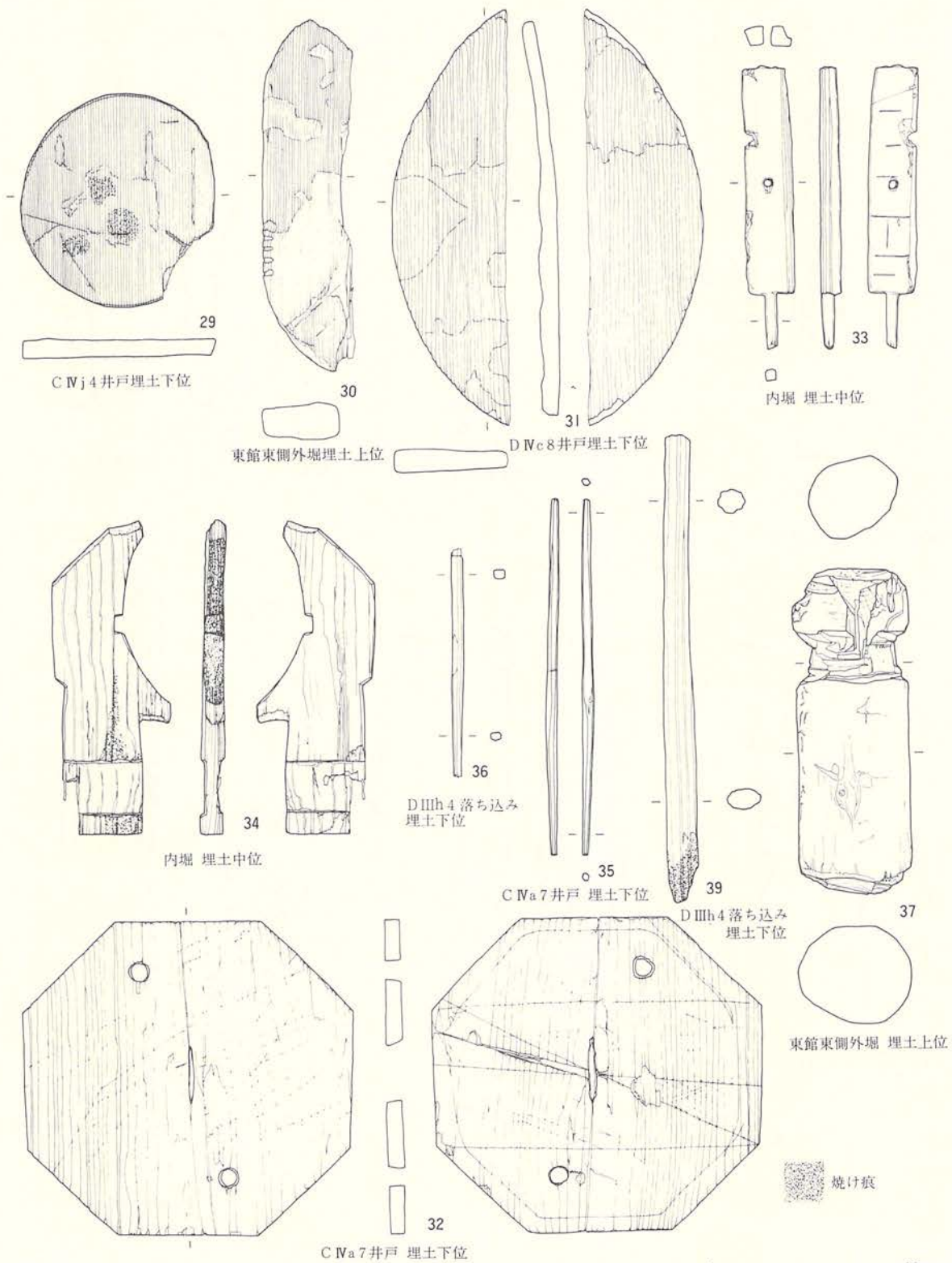
5~18 CMJ 4 井戸埋土下位

焼け痕

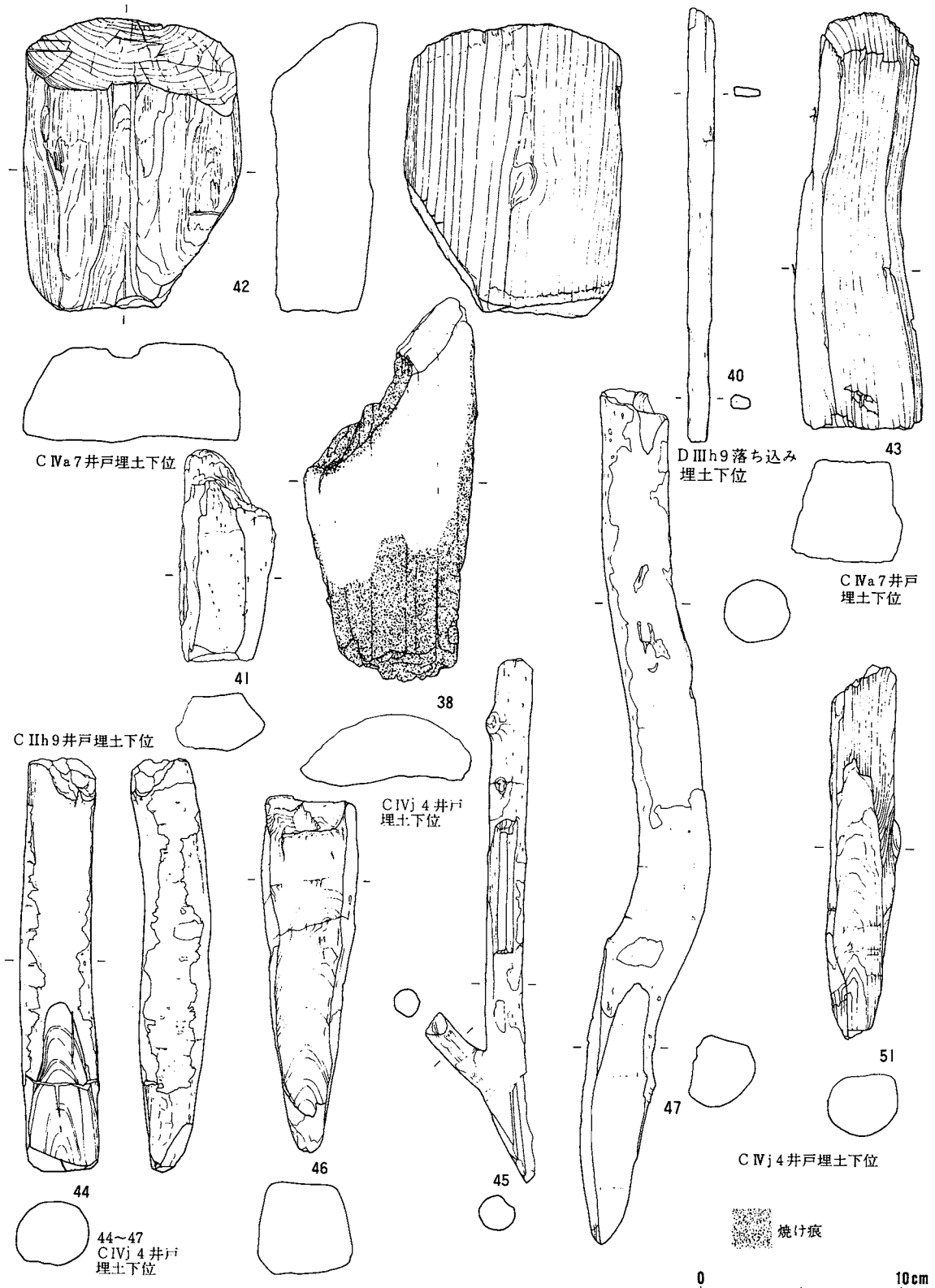
第342図 木製品—2



第343図 木製品一 3



第344図 木製品一4



第345図 木製品一5

第17表 漆製品一覧表

No	地 点	層 位	種 類	器 種	法 量			備 考	図 版	写 真
					口径cm	底径cm	器高cm			
1	C II区西側中央西端	整地層	漆 膜	不 明				黒地に赤漆による文様		
2	C III区柱穴No.8	埋 土	漆 膜	不 明				赤漆		
3	C IV a 7 井戸	埋土最下層	漆 器	椀	14.0	7.0	5.8	黒地に赤漆でカタバミの花文	340	103
4	C VI区柱穴No.69	埋 土	漆 膜	小 札				黒地に赤漆、円孔が多数あく短冊形		
5	C VII区北側東端柱穴	埋 土	漆 膜	椀				内外面に赤漆、外底に「三」の銘		
6	D II区南側西端掘り込み	整地層	漆 膜	不 明				黒色と赤色がある。		
7	D III g 6 溝跡	埋 土	漆 膜	不 明				赤色漆		
8	D IV区東側外堀	埋 土	漆 器	椀	11.0	5.2	5.0	赤色漆	340	103
9	E III a 5 落ち込み遺構	埋 土	漆 器	皿	(13.4)	7.0	(2.8)	黒地に赤漆で文様	340	104
10	D II区柱穴No.5	埋 土	漆 膜	不 明				赤色漆		
11	D III h 8 土坑-2	埋 土	漆 膜	不 明				黒地に赤の文様		
12	D III i 5 土坑	埋 土	漆 膜	不 明				赤色漆		
13	C VI区柱穴No.19	埋 土	漆 膜	不 明				赤色漆		
14	C VI区柱穴No.59	埋 土	漆 膜	不 明				赤色漆		
15	D IV e 3 柱穴	埋 土	漆 膜	不 明				赤色漆		

第18表 木製品一覧表

No	地 点	層 位	種 類	樹 種	法 量			備 考	図 版	写 真
					縦cm	横径cm	厚cm			
1	C II h 9 井戸	埋土最下位	子供下駄		11.0	6.8	3.8		第341	104
2	C II h 9 井戸	埋土最下位	下 駄		21.7	12.1	3.8		第341	〃
3	東館東側外堀	埋土上位	下 駄		21.6	14.3	8.6		第341	〃
4	東館東側外堀	埋 土	下 駄		21.3	9.3	3.3		第341	〃
5	C IV j 4 井戸	埋土下位	曲 物	杉	5.0	11.8	0.3	ほぼ完形	第342	〃
6	C IV j 4 井戸	埋土下位	曲 物	杉	24.3	7.7	0.2	破片	第342	105
7	C IV j 4 井戸	埋土下位	曲 物	杉	3.5	15.7	0.2	破片	第342	〃
8	C IV j 4 井戸	埋土下位	曲 物	杉	3.7	18.8	0.2	破片	第342	〃
9	C IV j 4 井戸	埋土下位	曲 物	杉	27.1	4.3	0.4	破片	第342	
10	C IV j 4 井戸	埋土下位	曲 物	杉	37.5	6.2	0.3	破片	第342	105
11	C IV j 4 井戸	埋土下位	曲 物	杉	9.2	2.8	0.4	破片	第342	106
12	C IV j 4 井戸	埋土下位	曲 物	杉	11.2	3.5	0.2	破片	第342	105

13	CIV j 4 井戸	埋土下位	曲物	杉	13.7	2.1	0.3	破片	第342	105
14	CIV j 4 井戸	埋土下位	曲物	杉	24.0	3.2	0.55	破片	第342	〃
15	欠番									
16	CIV j 4 井戸	埋土下位	曲物	杉				破片	第343	〃
17	CIV j 4 井戸	埋土下位	曲物	杉	3.2	9.9	0.2	破片	第342	106
18	CIV j 4 井戸	埋土下位	曲物	杉	8.3	3.5	0.3	破片	第342	〃
19	CIV j 4 井戸	埋土下位	曲物	杉	14.9	2.6	0.4	破片	第343	
20	内堀	埋土中位	曲物	杉	23.3	2.0	0.3	破片	第343	105
21	東館東側外堀	埋土上位	曲物	杉	24.8	4.7	0.5	破片	第343	〃
22	東館東側外堀	埋土上位	曲物	杉	19.1	4.9	0.6	破片	第343	〃
23	東館東側外堀	埋土上位	曲物	杉	19.7	6.0	0.6	破片	第343	〃
24	CIV a 7 井戸	埋土下位	篋	杉	19.0	4.2	0.6	ほぼ完形	第343	106
25	CIV a 7 井戸	埋土下位	篋	杉	21.8	6.0	0.9	一部欠く	第343	〃
26	CIV j 4 井戸	埋土最下位	底板	杉	22.5	4.5	1.2	木箱か?	第343	〃
27	CIV a 7 井戸	埋土最下位	底板	杉	23.2	6.4	0.9	木箱か?	第343	〃
28	東館東側外堀	埋土下位	底板	杉	29.7	5.0	0.7	折散臍か?	第343	〃
29	CIV j 4 井戸	埋土下位	底板	杉	10.6	9.6	1.0	曲物か桶	第344	〃
30	東館東側外堀	埋土上位	底板	杉	17.5	4.5	1.8	桶?	第344	〃
31	DIV c 8 井戸	埋土下位	底板		20.7	5.7	1.2	桶?	第344	107
32	CIV a 7 井戸	埋土下位	不明		16.5	15.6	0.8	箱物?	第344	106
33	内堀	埋土中位	不明		14.1	2.4	0.6		第344	107
34	内堀	埋土中位	不明		15.6	5.9	1.2		第344	〃
35	CIV a 7 井戸	埋土下位	箸		17.7	0.6	0.4	完形	第344	〃
36	EIII a 5 落ち込み	埋土下位	箸		11.4	0.6	0.5	約1/2残存	第344	〃
37	東館東側外堀	埋土上位	菰槌		16.1	5.7	4.8		第344	〃
38	CIV j 4 井戸	埋土下位	加工材		19.0	8.4	3.5	断片	第345	〃
39	EIII a 5 落ち込み	埋土下位	丸棒		23.2	2.1	1.0		第344	〃
40	EIII a 5 落ち込み	埋土下位	板材		21.5	1.4	0.6		第345	〃
41	CII h 9 井戸	埋土下位	加工材		10.5	4.8	2.7		第345	〃
42	CIV a 7 井戸	埋土下位	加工材		14.5	10.8	5.0		第345	〃
43	CIV a 7 井戸	埋土下位	加工材		20.6	6.4	5.0		第345	〃
44	CIV j 4 井戸	埋土下位	切痕のある 自然木		20.5	4.0	3.1		第345	〃
45	CIV 4 井戸	埋土下位	切痕のある 自然木		25.9	2.0	1.7		第345	〃
46	CIV j 4 井戸	埋土下位	切痕のある 自然木		17.5	4.7	4.5		第345	〃

47	CIV j 4 井戸	埋土下位	切痕のある 自然木	42.3	4.3	3.4		第345	107
48	E III a 5 落ち込み	埋土下位	桃 種 子 皮						
49	E II a 10 土坑	埋 土	木 片						
50	CIV区柱穴No67	埋 土	木 片						
51	CIV j 4 井戸	埋 土		18.5	3.7	3.0		第345	107

〈植物の殻皮〉

D III h 9 落ち込み遺構の埋土下位から栗の種皮1点と、野桃の果殻が2点出土している。栗の種皮は全体の約4分の1の残存であるが、表面が非常に平滑であることから、完熟した種実の種皮と考えられる。野桃の1点は完形、1点は半截している。大きさは全長が3cmと2.8cmで断面が凸レンズを示し、桃特有の溝が全面につく。

4) 炭化穀類 (第19表)

当城館の調査では、19箇所から炭化穀類が出土している。これらは西館6箇所、東館13箇所からの主に遺構内から出土している。西館からの出土が東館のそれに比較して少ないことは、開田時の削平にも一因があるとは推定されるが、本来的に館の使われ方に関連する可能性があることも考慮する必要があるだろう。そうした中で、西館は西端中央のD II a 6 建物跡付近の整地層上面、東館南側中央部の整地層上面から米の状態でもとまって出土している。穀物の種類としては米・大麦・小麦・小豆・大豆・粟か稗・そば・黍の類の8種類である。

米は18箇所から出土し、出土箇所・出土量ともにもっとも多い。出土地点をみると、西・東館ともに出土しているが、整地層以外はいずれも建物跡の柱穴状土坑や一般的な土坑の埋土からの出土である。特に、一般的な土坑の場合は、そのほとんどが炭化物粉と草木灰の混入した層に混在したり、井戸跡の場合は埋土最下位の粘土質土の中に点在する形で出土する。粒数や粒径等の計測を行っていないので大きさは明示できないが、粃の状態のものと粃殻を除いた玄米状の2種類みられる。

麦類と推定されるものには大麦7点、小麦が5点含まれ、大麦は西館から1箇所、東館は6箇所から出土し、小麦はすべて東館からの出土である。出土量は米よりはるかに少なく、小麦は大麦より少量である。出土状況は米のそれと差がなく、これらが混在して出土する 경우가多く、麦類単独の出土例はない。大麦は比較的細長く両端が尖り、一端に芒の痕跡を良く残す。表皮に縦縞状の細かい溝が観察され、断面がハート形に近い形状を示す。小麦は両端に丸味をもち、表皮は平滑で縦に浅い溝状の凹みをもつ。大きさや粒数は計測していない。

豆類には小豆5箇所、大豆が1箇所から出土している。小豆は小麦と近似するが、全体がやや大振りなものを小豆とし、より大型で円球に近いものを大豆と分類した。両者とも粒数は僅かである。いずれも表皮は平滑で溝状の凹みがなく、莢に付着していた時の楕円形を示す目跡をもつ。これらも米や麦と混在する形で出土している。

粟か稗と分類したのは、粒径1mm～1.5mmの円球状を示す炭化物で、他の穀類に混じって出土した。出土地点も2箇所と少なく、粒数も10数粒であり、数粒の未炭化粒を含む。

そばと黍は各1箇所から数粒づつ出土している。そばは断面が略三角形を示し、平面形は楕円形をなす。黍と考えられる中に未炭化のものを数粒含み、それによると径1.5mm位の楕円球状をなし、光沢をもつ表皮を被る。

以上の炭化穀類は、発掘調査時に確認されたものを採集した結果であり、本来はもっと多くの地点から出土していた可能性がある。特に、凹地状の低地や土坑に堆積する炭化物粉と草木灰の混入層にはいずれも多少の炭化穀類が含まれていた可能性が高い。しかし、出土したものが五穀すべてを含み、中でも米がもっとも多いことは多くのことを示唆している。

第19表 炭化穀類一覧表

No	出土地	層位	種類	No	出土地	層位	種類
1	C II h 8 土坑	埋 土	米・小豆?	11	D V 区柱No 5	埋 土	大麦、小麦
2	C VI e 7 土坑	埋 土	米・小麦・大麦	12	D VI 区柱穴No17	埋 土	米
3	C VI 区柱穴No38	埋 土	米・大麦	13	D VI g 7 付近	整地層	米・大麦・小麦
4	C VII 区柱穴No 5	埋 土	米・大麦	14	D VI h 6～7 付近	整地層	米・大麦・小麦・大豆・そば・粟か稗
5	C VII d 10 土坑	埋 土	米・大麦・小麦・小豆	15	D VII j 8 井戸	埋 土	米・小麦・小豆・粟か稗・きび
6	D III i j 6 落ち込み	埋 土	米・小豆	16	D VII 区柱穴No 7	埋 土	米
7	D IV f 6 土坑	埋 土	米	17	西館西端	整地層	米
8	D IV 区柱穴No12	埋 土	米	18	C VI 区柱穴No50	埋 土	米
9	D V 区柱穴No 2	埋 土	米・大麦・小豆	19	D III 区柱穴No 3	埋 土	米・大麦・小豆
10	D V 区柱穴No 3	埋 土	米	20	D II 区柱穴No 5	埋 土	米

5) 金属製品類

金属製品には鉄製品125点、銅製品522点が含まれ、銅製品はさらに貨幣514点とそれ以外8点に分けられる。

(1) 鉄製品類 (第20表、第346・349図、写真図版109～114)

125点には釘34点、刀子9点、苧引金1点、鋸5点、斧1点、縁金具4点、鍋12点、鉢3点、壺1点、環1点、托台2点、鉄板7点、丸棒3点、平鉄5点、ソケット状1点、円盤1点、鉄塊1点、鋳滓10点、不明19点が含まれる。本城館跡は廃絶後畑となり、その後昭和35年頃に水田と化していることから、出土した鉄製品の数は多いものの錆化が著しく遺存状態が良好とは言い難い。器種不明となった19点は特に錆化が激しく、中心部が腐蝕によって空洞していたことにより、錆除去作業中に形が崩壊してしまい原形が不明となったものである。出土した125点のうち34点は西館から出土し、他の91点は東館からの出土である。41点は粗掘り中に表土や表土に近い層位から出土し、84点は整地層や土坑、柱穴状土坑といった人為的な遺構の埋土内からの出土である。

釘は34点ともっとも多い出土であるが、腐蝕が著しく原形を残しているものは非常に少なく、いずれも幾分かを欠損している。正確な大きさは明らかにし得ないが、長さが14.5cm位がもっとも大きく、太さも5mm位と推定される。頭部はいずれかの横方向に折り曲げられ、さらに折り返す例もみられ、横断面はすべて方形か長方形を示す。また、40・89・100・112の4点は両端に尖端部をもつことから、板の木端を縫ぎ合わせる際に使用される合わせ釘と言われる両釘に相当すると考えられる。これらは西館・東館両方から出土している。

楔5点は、1点が西館、残る4点は東館からの出土である。釘の大型品とも考えられるが、釘に比較すると横断面が扁平で、幅広く長いことから楔と分類した。特に36・37は他の3点より大型で長いことから、大釘と呼ばれる釘の一種である可能性がある。また、36・37は農耕具の馬鋤の歯である可能性も否定できない。10・35・48は腐蝕が著しく原形より相当細くなっているものと推定される。

刀子の9点はいずれも錆化が著しいばかりでなく、部分的な遺存状態であることから全体的なことはいずれも不明である。これらの中には鋒だけを残すもの、刀身部の中央付近だけのもの、柄元から茎を残すもの、茎だけのものなど種々みられる。また、104・106は所謂刀子とするには身幅が2cm・3cmと広く、厚さも5mm・7mmと厚く作られていることから、細身の短刀か小刀、または鎧どおしである可能性を示す。茎部を残す109には目釘穴はない。

麻糸を収穫する際に腐敗させた表皮を剥ぐ際に使用される苧引金が1点、東館のC V区を粗

掘り中に出土した。薄い鉄板状の一端に柄を装着する時に必要な角状の突起を付し、約2分の1の残存である。全長6cm、幅2cm、厚さ2mm～3mmの大きさで、長さ約8mmの突起が付着する。

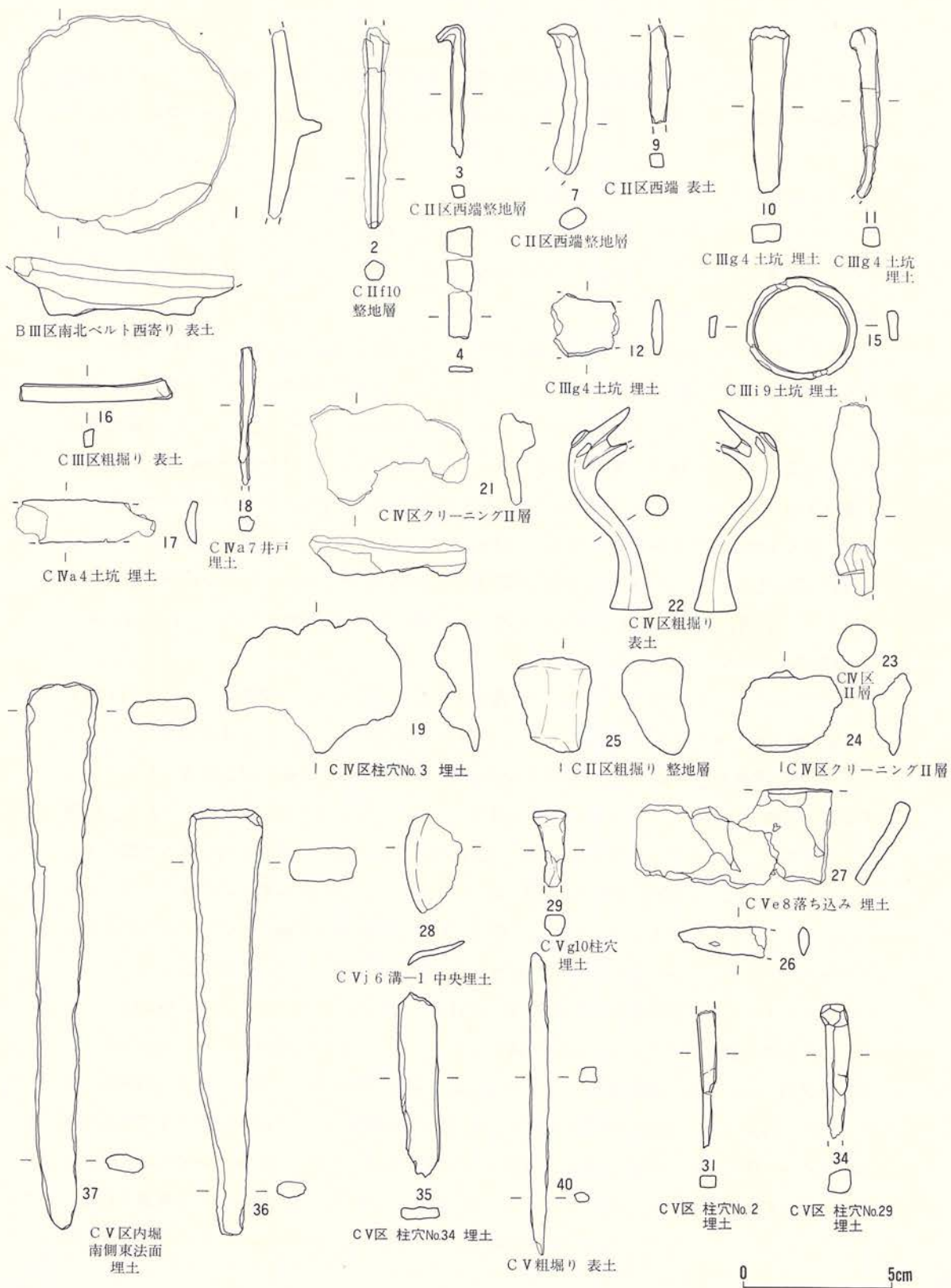
鏃は5点の出土であるが、全体を残す例はまったく含まず、いずれも錆化によって破損している。すべて東館のCⅤ区・CⅦ区からの出土である。鏃部分まで残すのは3点のみで、他の2点は茎部分だけを残す。鏃部は平面菱形に近い形状を示し、大中小の3型がみられる。茎は断面方形で先細りとなる。

CⅤ区から斧が1点出土している。ほぼ完形であり全長13.5cm、最大幅5cm、最大厚さ2.5cmの大きさをもつ横刃型の斧である。柄を装着する穴は3.5cm×2cmの楕円形で、下部に楔が打ち込まれている。頭部には叩かれた痕跡がみられ周辺部が若干外方に張り出している。刃部は柄装着穴の付近から次第に厚さを減して刃部に移行し、全体が手前方向に僅かに湾曲している。刃部の幅は3cm位で薪割りや一木から捏ね鉢等の割り物を作る際に使用される特殊な斧である。

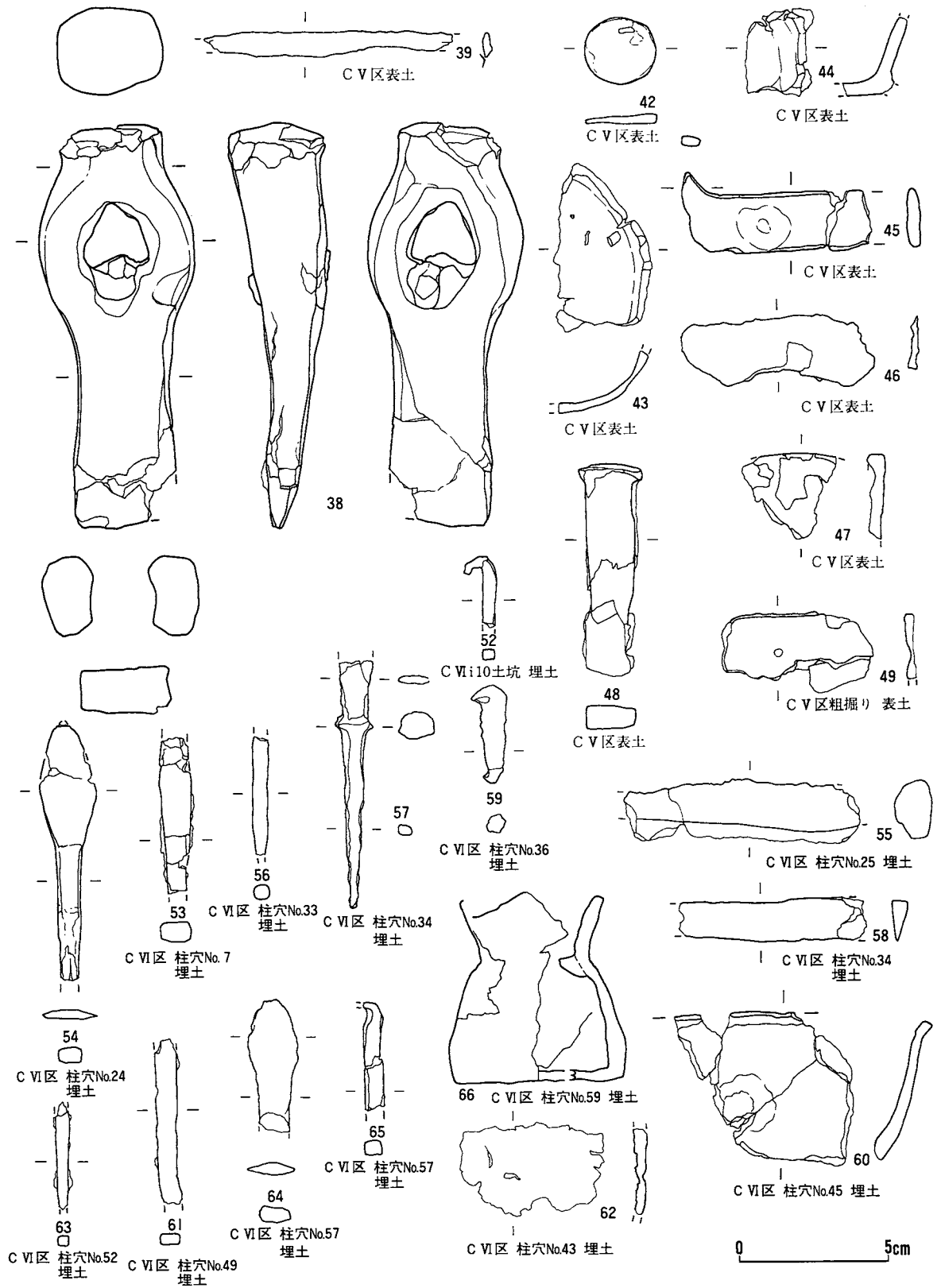
縁金具の4点は、15は西館のCⅢ区、他は東館のCⅦ区から2点(87・99)、DⅤ区から1点(119)の出土である。幅6mm～1.8cmの平鉄を円形や楕円形状に曲げて両端を接着し環状に加工したもので、柄と本体を装着し固定する際の締め金具として使用されたものである。15・99・119は円形を示すが、87は楕円形である。

鍋が12点の出土と比較的多く、これらは西館から2点(1・132)と東館から10点(21・24・51・60・80・93・96・102)が出土している。いずれも小破片であるため全体を知ることはできないが、1は湾曲した外面に中央が凹む5.5cmの横長で高さ5mm～8mmの足が付着することから底部破片と推定されるが、約5mmの厚さと厚作りであることから大型の鍋と推定される。口縁部を残す6点(27・47・51・60・80・93)の口縁部形態をみると、体部と同じ厚さで直口するもの2点(27・93)、端部を肥厚させて直口のもの2点(51・80)、体部と同じ厚さで端部を軽く外反させるもの2点(47・60)がある。厚さはいずれも3mm～4mmで、60の体部の湾曲程度を観察すると、さほど深くない器形と推定される。口縁部径はまったく不明である。

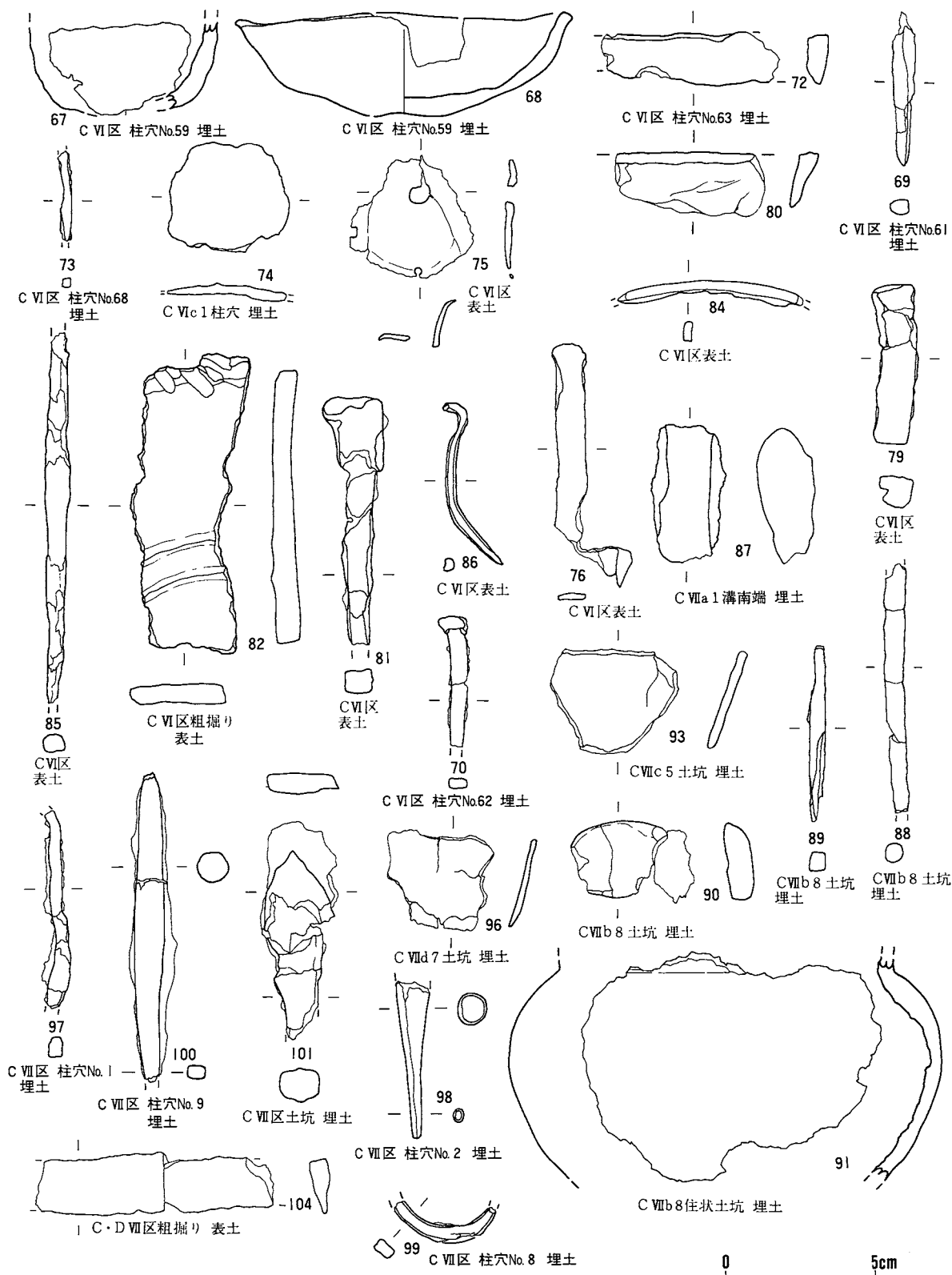
皿状を示すものが東館のCⅤ区から1点、CⅥ区から2点出土している。特に68は66とともにCⅥ区の柱穴状土坑から、43は44と一緒に出土している。遺存状態のもっとも良好な68は、口縁部径11.3cm、器高3.5cmの大きさを持ち、底部が丸底を示す皿で、器厚は底部～口縁部までほぼ同じと推定され、端部は若干外反する。67は底部～体部にかけての一部だけを残存する個体であるが、径6.3cmの円形で底部が丸底をなす。器高は68より高い可能性がある。43は底部と体部を部分的に残す破片のため未実測であるが、67と68の中間に近い形を示すと推定される。鍋として分類した先の12点の中にもこの皿状をなす器種と同じものが入っている可能性が高い。



第346図 金属製品一 I

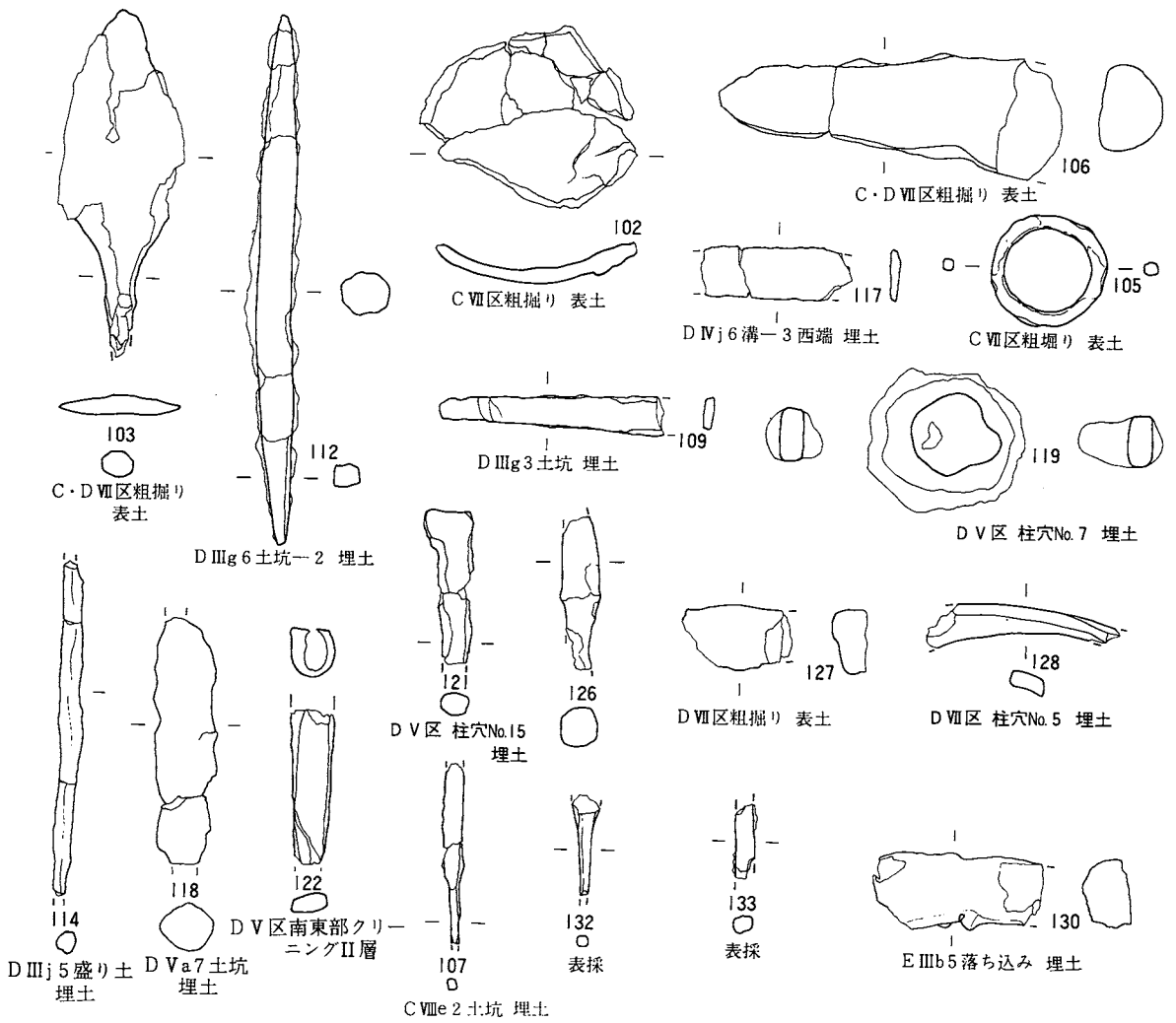


第347图 金属製品—2



0 5cm

第348図 金属製品—3



第349図 金属製品— 4

第20表 金属製品一覧表

No	地 点	層 位	材 質	器 種	部 位	法 量				備 考	図版	写真
						縦 cm	横 cm	厚 cm	重 g			
1	B III区南北西寄り (北端の掘隙)	表 土	鉄	鍋	底 部	7.4	7.2	1.5	165	平足付、大鍋の可能性あり	第346	109
2	C II f 10	整地層	鉄	釘	先 端 部	6.7	0.9	0.7	5.7	頭部欠	第346	109
3	C II区西端	整地層	鉄	釘	頭～身部	4.5	1.0	0.4	5.5	先端欠	第346	109
4	C II区西端	整地層	鉄	薄 板 状	部 分		0.9	0.2	1.0	全体の形状不明	第346	109
5	C II区西端	整地層	鉄							錆化による破壊		
6	C II区西端	整地層	鉄							錆化による破壊		
7	C II区西端	整地層	鉄	釘	頭～身部	5.0	0.9	0.7	3.5	中間を欠失?	第346	109
8	C II区西端	整地層	鉄							錆化による破壊		

9	C II区西端	表土	鉄	釘	身部	3.2	0.7	0.5	0.1	頭部、先端を欠く	第346	109
10	C III g 4 土坑	埋土	鉄	楔か釘	完形?	5.5	1.3	0.6	5.0	断面長方形で一端が巾広	第346	109
11	C III g 4 土坑	埋土	鉄	釘	頭～身	5.7	0.9	0.6	1.5	先端を若干欠失か?	第346	109
12	C III g 4 土坑	埋土	鉄	板状	不明	2.3	2.1	0.4	1.2	両端を欠失	第346	109
13	C III g 4 土坑	埋土	鉄							錆化による破壊		
14	C III h 4 土坑	埋土	鉄							錆化による破壊		
15	C III 9 土坑	埋土	鉄	縁金具	完形	3.7	3.5	0.3	2.9	3個に破断	第346	109
16	C II区粗掘り	表土	銅	不明	不明	5.1	0.5	0.3	5.2	細い板状、断面は略台形	第346	
17	C IV a 4 土坑	埋土	鉄	不明	不明				1.9	細い板状、両端を欠く	第346	
18	C IV a 7 井戸	埋土	鉄	釘	頭～身	4.6	0.5	0.5	2.9	先端部を欠く	第346	
19	C IV区柱穴No 3	埋土	鉄	鉄板	不明	4.5	5.9	1.2	32.3	黒錆のみ残存	第346	
20	C IV区柱穴No 5	埋土	鉄	スラッグ								
21	C IV区クリーニング	II層	鉄	鍋	底部	5.2	3.3	1.2	25.6	平足部分	第346	109
22	C IV区粗掘り	表土	銅	鶴造品	完形	6.7	1.4	0.7	30.2	丹頂鶴	第346	
23	C IV区クリーニング	II層	鉄	釘	身	6.5	1.6	1.4	19.8	両端を欠く	第346	
24	C IV区クリーニング	II層	鉄	鍋	身?	2.8	3.5	1.0	11.5	小破片	第346	
25	C II粗掘り	整地層	鉄	鉄塊		3.2	2.6	2.0	40.6		第346	109
26	C V e 8 落ち込み	埋土	鉄	刀子	先端部	3.0	1.0	0.4	1.3	先端部の小破片	第346	109
27	C V e 8 落ち込み	埋土	鉄	鍋	口縁部	6.5	3.2	0.5	13.0		第346	109
28	C V j 6 溝-1 中央	埋土	銅	座金か蓋	不明	3.3	1.9	0.2	4.7	約4%	第346	109
29	C V i g 10 柱穴	埋土	鉄	釘	頭部～身部	2.6	1.1	0.7	0.6	先端部を欠失	第346	
30	C V g 10 柱穴	埋土	鉄							錆化で破壊		
31	C V区柱穴No 2	埋土	鉄	釘	身～先端	4.6	0.6	0.4	1.1	頭部を欠失	第346	109
32	C V区柱穴No 5	埋土	鉄							錆化で破壊		
33	C V区柱穴No 8	埋土	鉄	刀子	身部?					錆化で破壊		
34	C V区柱穴No 29	埋土	鉄	釘	完形?	4.5	1.0	0.8	5.7		第346	109
35	C V区柱穴No 34	埋土	鉄	楔?	完形?	6.2	1.4	0.4	15.5	断面が扁平	第346	109
36	C V区内堀南側東法面	埋土	鉄	大釘	完形	9.3	2.5	1.2	110	楔の可能性もあり	第346	109
37	C V区内堀南側東法面	埋土	鉄	大釘	完形	17.2	2.4	0.9	115	楔の可能性もあり	第346	109
38	C V区(掘隙)粗掘	表土	鉄	斧	ほぼ完形	13.4	5.2	2.9	395	木割り風	第347	110
39	C V区(掘隙)粗掘	表土	鉄	平鉄	不明	8.3	0.9	0.4	5.9	断面扁平で細い平鉄	第347	109
40	C V区(掘隙)粗掘	表土	鉄	両釘	完形	10.1	0.6	0.5	11.3	両端が尖る	第346	109
41	C V区(掘隙)粗掘	表土	鉄							錆化で破壊		
42	C V区粗掘り	表土	鉄	円盤	ほぼ完形	2.3	2.4	0.3	2.2	用途不明	第347	110
43	C V区粗掘り	表土	鉄	灯蓋	口縁～底部	5.6	3.3	0.3	9.6	全体形状不明	第347	
44	C V区粗掘り	表土	鉄	蓋台?		3.0	2.3	0.5	2.8	全体形状不明	第347	

45	C V粗掘り	表土	鉄	花キノコ		6.4	2.7	0.5	11.2	半分欠失	第347	110
46	C V区粗掘り	表土	鉄	不明	鉄片	6.5	2.4	0.3	10.6		第347	110
47	C V区粗掘り	表土	鉄	蓋か鍋	口縁部	2.9	3.1	0.6	3.9	小破片	第347	110
48	C V区粗掘り	表土	鉄	楔か釘	完形	7.1	2.1	0.8	31	やや大型	第347	110
49	C V区粗掘り	表土	鉄	鉄板	不明	2.7	5.0	0.3	8.9		第347	110
50	C V区粗掘り	表土	鉄							錆化で破壊		
51	C V区粗掘り	表土	鉄	蓋か鍋	口縁部					錆化で破壊(実測不能)		
52	C VI i 10土坑	埋土	鉄	釘	頭～身部	2.4	1.1	0.4	0.6		第347	110
53	C VI区柱穴No.7	埋土	鉄	釘	身部	5.2	1.2	0.7	7.2	全体形状不明	第347	110
54	C VI区柱穴No.24	埋土	鉄	鎌	茎～身部	8.6	1.9	0.5	6.4	茎部の先端を欠く	第347	110
55	C VI区柱穴No.25	埋土	鉄	刀子?	刀身部	7.9	1.9	1.2	27.5		第347	110
56	C VI区柱穴No.33	埋土	鉄	釘	身部	4.9	0.5	0.5	1.3	頭部を欠失	第347	110
57	C VI区柱穴No.34	埋土	鉄	鎌	茎部	8.2	1.3	0.9	8.5	身部を欠く	第347	110
58	C VI区柱穴No.34	埋土	鉄	刀子	刀身部	6.3	1.4	0.5	6.2	茎・鎌を欠く	第347	110
59	C VI区柱穴No.36	埋土	鉄	釘	完形	3.3	1.2	0.6	1.6	頭部の一部を欠く	第347	110
60	C VI区柱穴No.45	埋土	鉄	鍋	口縁部	5.2	5.9	0.6	15.5		第347	110
61	C VI区柱穴No.49	埋土	鉄	釘	身部	5.6	0.7	0.4	2.9	4個に折断	第347	110
62	C VI区柱穴No.43	埋土	鉄	鉄板	不明	3.2	4.8	0.5	12.5	錆化によるヒビ割れ多い	第347	111
63	C VI区柱穴No.52	埋土	鉄	釘	身部	3.6	0.6	0.3	1.1	頭部と身部の一部を欠く	第347	111
64	C VI区柱穴No.57	埋土	鉄	鎌	身部	4.4	1.7	0.5	3.3	茎部を欠く	第347	111
65	C VI区柱穴No.57	埋土	鉄	釘	頭～身部	3.6	0.7	0.5	1.9	身の先端部を欠く	第347	
66	C VI区柱穴No.59	埋土	鉄	蓋台	脚部?	6.3	5.9	0.6	19.9	全体の形状不明	第347	111
67	C VI区柱穴No.59	埋土	鉄	灯蓋	身部～底部	3.0	6.2	0.6	11.3	口縁を欠き、全体形状不明	第348	111
68	C VI区柱穴No.59	埋土	鉄	灯蓋	口縁部～底部	3.4	11.2	0.7	52.7	約1/2残存	第348	
69	C VI区柱穴No.61	埋土	鉄	釘か鎌の茎	先端部	5.1	0.8	0.5	3.3	全体形状が不明	第348	111
70	C VI区柱穴No.62	埋土	鉄	釘	頭～身部	4.3	1.0	0.3	1.4	先端部を欠く	第348	111
71	C VI区柱穴No.63	埋土	鉄							錆化で破壊		
72	C VI区柱穴No.63	埋土	鉄	刀子	刀身部	5.9	1.6	0.7	7.3	全体形状が不明	第348	111
73	C VI区柱穴No.68	埋土	鉄	釘	身部	2.9	0.4	0.3	0.9	頭部を欠く	第348	111
74	C VI c 1柱穴	埋土	鉄	鉄板	不明	3.5	4.1	0.4	6.5	全体形状は不明	第348	111
75	C VI区粗掘り	表土	銅	座金		4.0	4.2	0.3	10.5	円形で中心と周辺に円孔	第348	111
76	C VI区粗掘り	表土	鉄	釘?	ほぼ完形	8.1	1.0	0.2	10.5		第348	111
77	C VI区粗掘り	表土	鉄	スラッグ						4個に破壊		
78	C VI区粗掘り	表土	鉄	スラッグ								111
79	C VI区粗掘り	表土	鉄	釘	頭～身部	5.3	1.5	1.0	11.6	ほぼ完形	第348	111
80	C VI粗掘り	表土	鉄	鍋	口縁部	2.1	5.0	0.6	12.4	全体形状は不明	第348	111

81	CⅥ区粗掘り	表土	鉄	釘	頭～身部	8.2	2.2	0.8	15.8	先端部を欠く	第348	112
82	CⅥ区粗掘り	表土	銅	不明		10.0	4.0	0.8	125		第348	112
83	CⅥ区粗掘り	表土	鉄	スラッグ								112
84	CⅥ区粗掘り	表土	銅	不明	不明	6.2	0.6	0.6	8.9	全体形状は不明	第348	112
85	CⅥ区粗掘り	表土	鉄	不明	不明	12.2	0.8	0.6	14.0	丸棒状であるが全体形状不明	第348	112
86	CⅥ区粗掘り	表土	鉄	釘	完形	5.4	0.4	0.4	2.3		第348	112
87	CⅥa 1 溝南端	埋土	鉄	縁金具	ほぼ完形?	4.5	2.5	1.9	23.5		第348	112
88	CⅦb 8 土坑	埋土	鉄	丸棒状	不明	8.3	0.7	0.7	5.3	両端を欠失	第348	112
89	CⅦb 8 土坑	埋土	鉄	両釘	ほぼ完形	5.8	0.6	0.6	5.9		第348	112
90	CⅦb 8 土坑	埋土	鉄	刀子?	刀身部	2.6	4.1	0.9	11.9		第348	112
91	CⅦb 8 土坑	埋土	鉄	壺	口縁～体部	7.6	10.0	0.8	75.0	蓋付壺か?	第348	
92A	CⅦb 8 土坑	埋土	鉄							錆化で破壊		112
92B	CⅦe 2 土坑	埋土	鉄							錆化で破壊		
93	CⅦc 5 土坑	埋土	鉄	鍋	口縁部	3.5	4.3	0.3	14.8		第348	112
94	CⅦc 5 土坑	埋土	鉄							錆化で破壊		
95	CⅦc 6 土坑-1	埋土	鉄	スラッグ								112
96	CⅦd 7 土坑	埋土	鉄	鍋?	体部	3.3	3.5	0.2	3.4		第348	112
97	CⅦ区柱穴No 1	埋土	鉄	釘		6.6	0.9	0.7	6.8		第348	112
98	CⅦ区柱穴No 2	埋土	銅	不明	完形	5.2	1.1	0.2	5.6	円錐形で中空	第348	113
99	CⅦ区柱穴No 8	埋土	鉄	縁金具		3.4	0.7	0.7	2.9	約1/2残存	第348	112
100	CⅦ区柱穴No 9	埋土	鉄	両釘	完形	10.3	1.6	1.0	29.2		第348	113
101	CⅦ区土坑	埋土	鉄	刀子	茎～刀身	7.2	2.5	1.1	16.7	両端を欠く	第348	113
102	CⅦ区		鉄	鍋	口縁～体部	4.9	5.9	0.5	17.2		第349	113
103	C・DⅦ区粗掘り	表土	鉄	鏝	身部	9.4	3.4	0.7	26.8	茎を欠く	第349	113
104	C・DⅦ区粗掘り	表土	鉄	刀子	刀身部	7.9	2.1	0.6	15.4		第348	113
105	CⅦ区粗掘り	表土	鉄	鏝	完形	3.0	3.2	0.3	4.0		第349	113
106	C・DⅦ区粗掘り	表土	鉄	小刀?	刀身部	9.2	3.2	1.7	53.5		第349	113
107	CⅧe 2 土坑	埋土	鉄	釘	身部	4.8	0.6	0.3	2.4	頭部を欠く	第349	113
108	DⅢa 3 土坑	埋土	鉄							錆化で破壊		
109	DⅢg 3 土坑	埋土	鉄	刀子	茎部	6.1	1.1	0.3	3.7		第349	113
110	DⅢg 6 溝	埋土	鉄	スラッグ	完形							113
111	DⅢg 6 溝	埋土	鉄	スラッグ	完形							113
112	DⅢg 6 土坑-2	埋土	鉄	両釘	完形	14.2	1.4	1.1	21.7		第349	113
113	DⅢj 2 土坑	埋土	鉄							錆化で破壊		
114	DⅢj 5 盛り土	埋土	鉄	丸棒状	不明	9.0	0.7	0.6	3.4	全体形状が不明	第349	113

115	DIV f 6 土坑	埋土	鉄															錆化で破壊		
116	DIV f 6 土坑	埋土	鉄															錆化で破壊		
117	CV j 6 溝2西端	埋土	鉄	平	鉄	不	明	4.1	0.9	0.3	2.2							両端を欠く	第349	114
118	DVa 7 土坑	埋土	鉄	釘		身	部	6.6	1.7	1.3	22.2							頭を欠く	第349	114
119	DV区柱穴No7	埋土	鉄	縁	金具	完	形	3.8	4.2	1.3	31.2								第349	114
120	CV区柱穴No11	埋土	鉄	ス	ラッグ															114
121	DV区柱穴No15	埋土	鉄	釘				4.1	1.4	0.6	5.2							先端部を欠く	第349	114
122	DV区南東部クリーニング	II層	鉄	不	明	不	明	4.1	1.2	0.5	3.2								第349	114
123	DV区南東部クリーニング	II層	鉄																	114
124	DVI# 5	整地層	鉄																	
125	DVIh 2 柱穴	埋土	鉄																	
126	DVII区粗掘り	表土	鉄	鏝	?	茎	部	4.1	1.1	1.0	4.1							両端を欠失	第349	113
127	DVII区粗掘り	表土	鉄	平	鉄	不	明	3.0	1.8	1.0	6.4							全体形状不明	第349	
128	DVII区柱穴No 5	埋土	鋼	不	明	不	明	5.2	1.0	0.4	11.1							全体形状不明	第349	114
129	DVII e	III層	鉄	ス	ラッグ	完	形													114
130	EIII b 5 落ち込み	埋土	鉄	平	鉄	不	明	4.6	2.1	1.2	9.7							全体形状不明	第349	114
131	西館粗掘り	表土	鉄	鍋		口	縁部													
132	表探		鉄	釘		頭部	～身部	2.7	0.8	0.3	2.0							先端部を欠く	第349	114
133	表探		鉄	釘		身	部	2.0	0.6	0.4	0.8							両端を欠く	第349	114

東館のC VII区から壺状を示す口縁部～体部下位を残す破片が1点出土している。全体の形状を推定できる状況ではないが、小型の風炉である可能性も考えられる。頸部径11.1cm、体部径14.1cm、残存器高8cmの大きさで、透し窓の存在を示す状況は明らかでない。頸部は直立気味に立ち上がるものらしい。風炉とする確たる根拠がないことから、ここでは壺としておく。

鑕としたのは径4mm位の丸棒を径3cmの円に丸めたもので、一見縁金具に類似するが、丸棒を加工していることから別種とした。東館のC VII区からの出土である。

68と共伴した66と43と伴出した44を托台としたが、明確な器種は不明である。しかし、68と43はともに皿状を示す器形であり、この両者が組をなす使われ方が想定されることから仮に命名した。もし、68・44が燈明皿として使用されたのであれば、燭台とするべきである。いずれにしても、全体形が台状を示す器具であることは明らかである。66は底部が径5.7cmの平坦な円形で、底面より約4cm上位が径3.7cmまで窄み、その上位はくの字状に開く。44は小破片のため断定できないが、66とほぼ同じ器形を示すと推定される。

鉄板とした7点は、西館から3点と東館から4点が出土している。これらは、元々は器具の

一部であろうと推定されるが、破損や腐蝕によって原形が不明となったものであろう。62は、錆化の仕方や亀裂の入り方から鋳物製と推定され、他は鍛錬されている可能性がある。

断面が丸棒状の素材を使用して作った器種が不明なものが3点(85・88・114)出土している。径5mm～6mmの太さがあり、長さは8cm～12cmで、一端が尖る状況を示す例(85・114)も含まれる。出土した形が原形なのかある器具の一部なのかは定かでない。1点(114)は西館のDⅢ区からの出土であるか、残る2点(85・88)は東館のCⅥ区とCⅦ区からの出土である。

東館のDⅤ区から円錐台形のソケット状を示すものが1点出土している。どういう使われ方をしたか不明であるが、一端は中実で扁平になることから、この先に何かがついていた可能性が大きい。全長4.2cm、最大径1.5cmの大きさがあり、ソケット部は鉄板を曲げて作ったものらしい。

東館のCⅤ区から径2.4cm×2.2cmの楕円形に加工したものが1点出土している。厚さ1mm～1.5mmあり、縁寄りに1箇所鬆穴がある。使用方法・器種名ともに不明である。

幅が1.5cm～1cmでやや長めの平鉄が西館のCⅣ区とDⅣ区・EⅢ区から各1点、東館のCⅤ区とDⅦ区から各1点の5点が出土している。腐蝕や破損によって原形は不明であるが、本来の原形を残すものは含まれないと推定される。127・130は刀子的ではあるが断定できない。117は厚さ1mm位の平鉄で、39は腐蝕が著しく、17は若干湾曲した平鉄である。大きさもそれぞれによって異なる。

西館のCⅣ区から小鉄塊が1点(25)出土している。長さ3cm、最大径2.7cmの大きさがあり、器具の破片なのか元来この形なのかは定かでない。

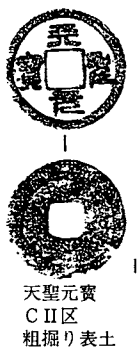
スラッグの10点はCⅣ区1点、DⅢ区2点、CⅥ区3点、CⅦ区1点、DⅤ区1点、DⅦ区1点の、西館から3点、東館から7点の出土と、東館からの出土が多い。大きさはそれぞれによって差があり一様ではないが、いずれも多孔質で赤褐色を示し、重量は体積と必ずしも比例しない。鉄精錬や鋳物製造に伴うスラッグと推定される。

(2) 銅製品類 (第20・21表、第346・348～356図、写真図版109・111～113)

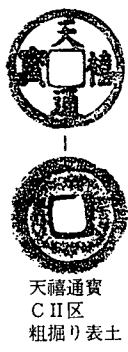
銅製品には座金2点(28・75)、角棒状3点(16・84・128)、丹頂鶴鑄造品1点(22)、ソケット状1点(98)、不明1点(82)の8点と、中国貨幣514枚がある。

座金とした2点は東館のCⅤ区とCⅥ区から各1点の出土である。遺存状態の良好な75でみると、全体が径6cm位の円形で、中央部に径6mmの円孔1と周辺部に径1.5mmの円孔を穿つものらしい。おそらく、中央に化粧釘が打ち込まれ、周辺部の小孔は座金を固定するための釘穴と推定される。28は小破片のため断定はできないが、75とほぼ同じであろう。

角棒状の3点は西館のCⅢ区から1点、東館のCⅥ区・bⅦ区から各1点の出土であるが、



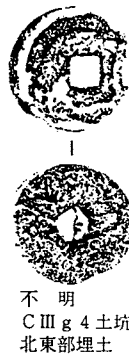
1
天聖元寶
C II 区
粗掘り表土



2
天禧通寶
C II 区
粗掘り表土



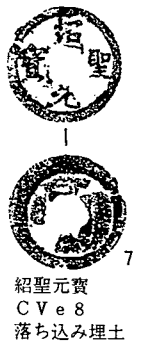
3
元豐通寶
C III g 4 土坑
北東部埋土



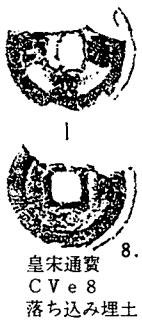
4.5
不明
C III g 4 土坑
北東部埋土



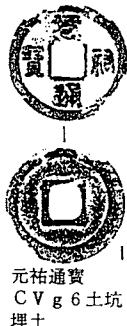
6
不明
C III g 4 土坑
北東部埋土



7
紹聖元寶
C V e 8
落ち込み埋土



8.9
皇宋通寶
C V e 8
落ち込み埋土



10
元祐通寶
C V g 6 土坑
埋土



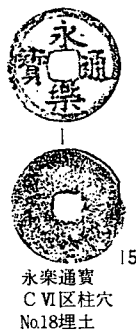
11
永樂通寶
C V 区柱穴
No.42埋土



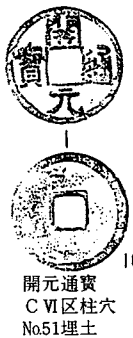
13
永樂通寶
東館北側中央



14
永樂通寶
C VI 区柱穴
No.53埋土



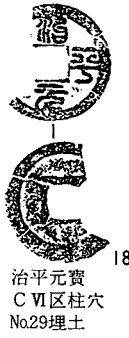
15
永樂通寶
C VI 区柱穴
No.18埋土



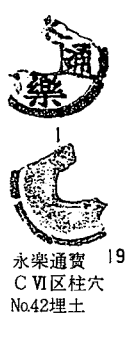
16
開元通寶
C VI 区柱穴
No.51埋土



17
無文錢
C VI 区柱穴
No.21埋土



18
治平元寶
C VI 区柱穴
No.29埋土



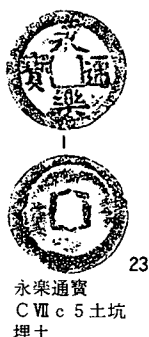
19
永樂通寶
C VI 区柱穴
No.42埋土



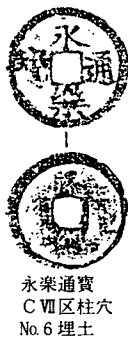
20
永樂通寶
C VI 区柱穴
No.66埋土



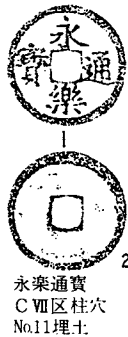
22
不明
C VII e 8 土坑
埋土



23
永樂通寶
C VII c 5 土坑
埋土



24
永樂通寶
C VII 区柱穴
No. 6埋土



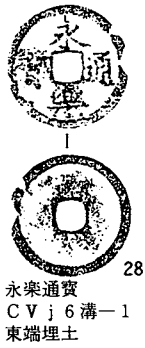
25
永樂通寶
C VII 区柱穴
No.11埋土



26
元祐通寶
C VII 区柱穴
No.14埋土



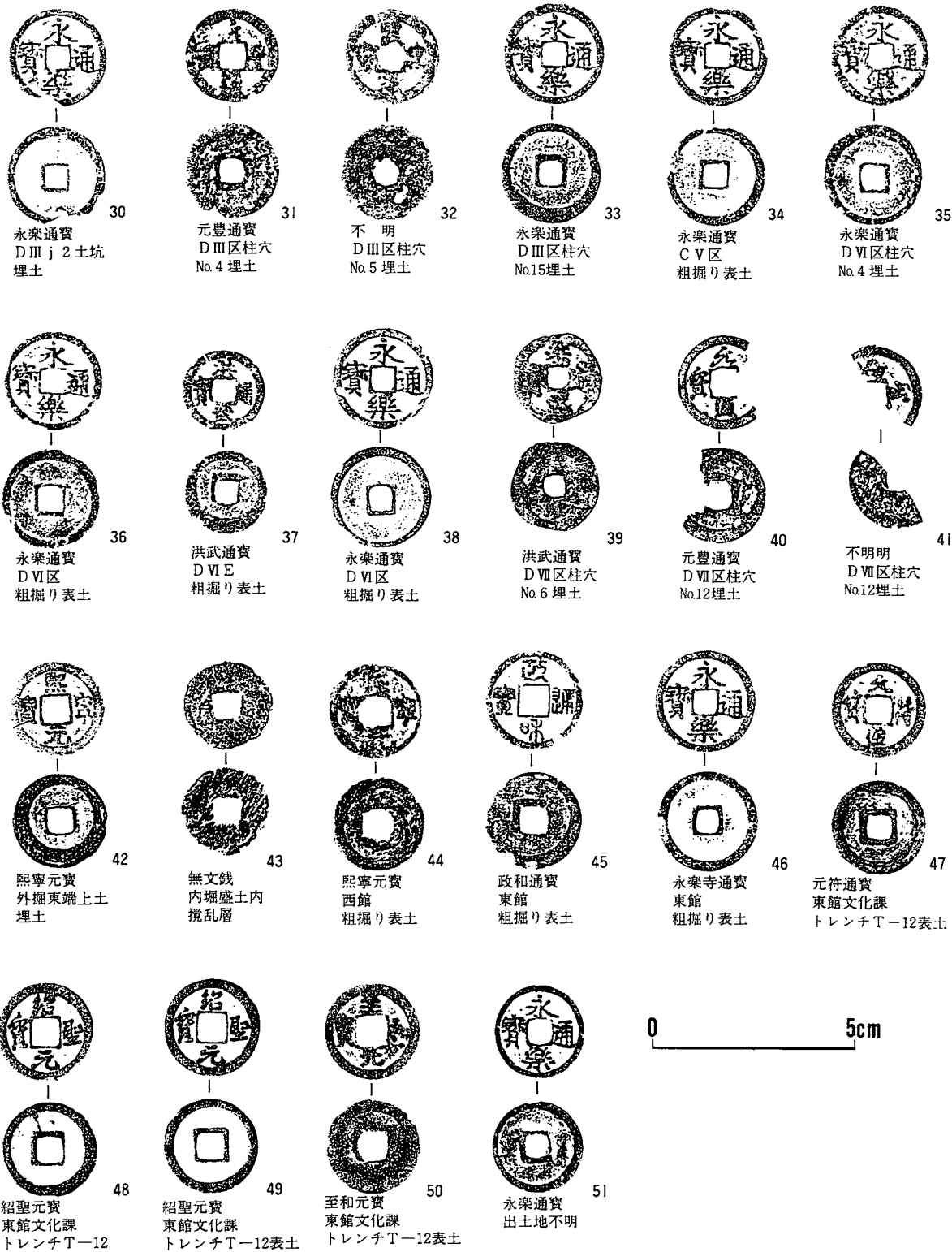
27
皇宋通寶
C VII 区柱穴
No.17埋土



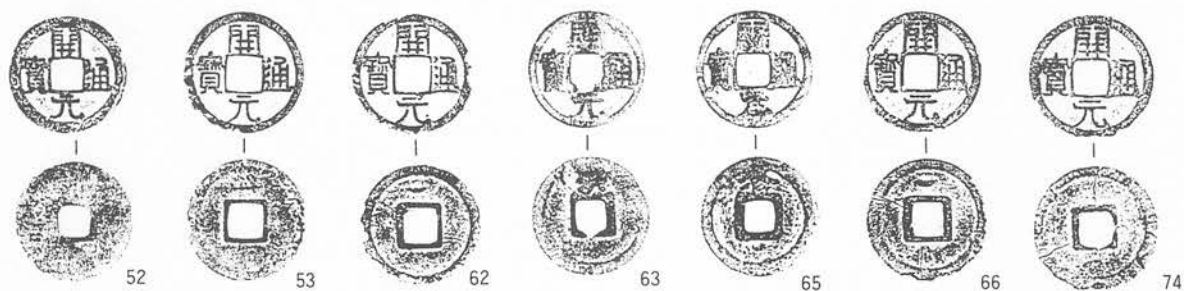
28
永樂通寶
C V j 6 溝-1
東端埋土



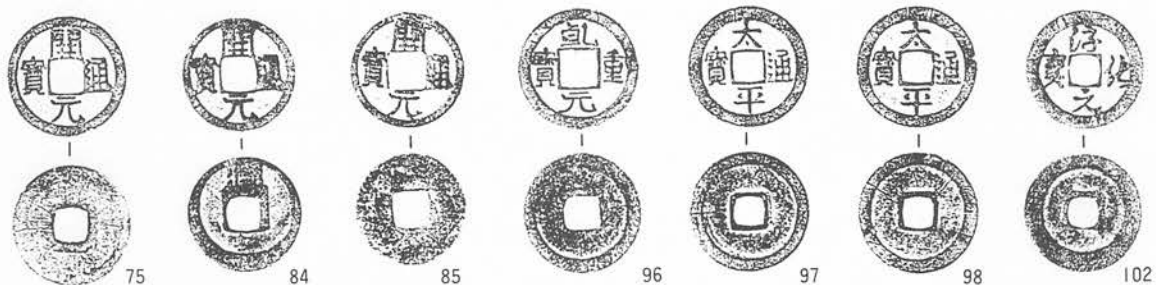
第350図 貨幣拓影一 I



第351図 貨幣拓影一 2



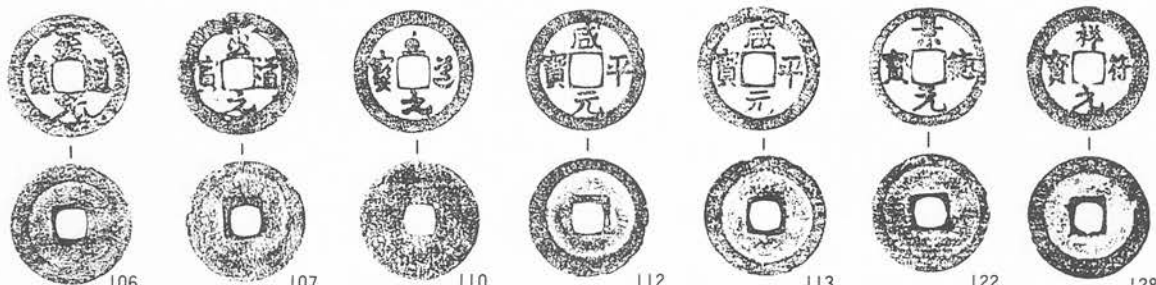
52-85開元通寶



乾元重寶

97·98太平通寶

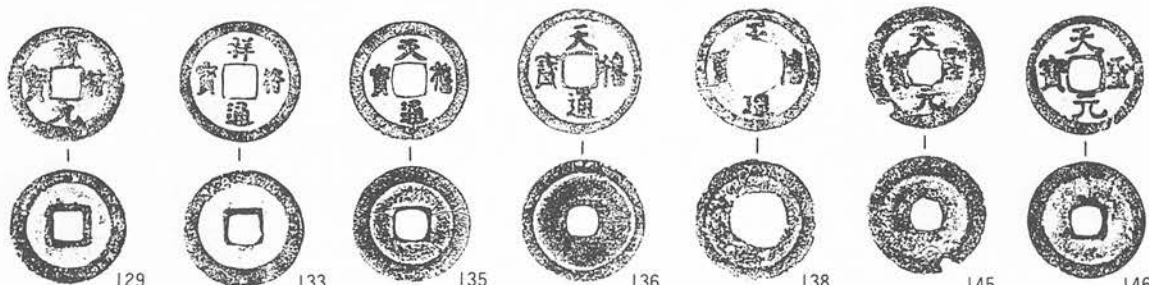
淳化元寶



106-110 至道元寶

112·113 咸平元寶

景德元寶

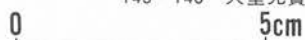


128-133 祥符通寶

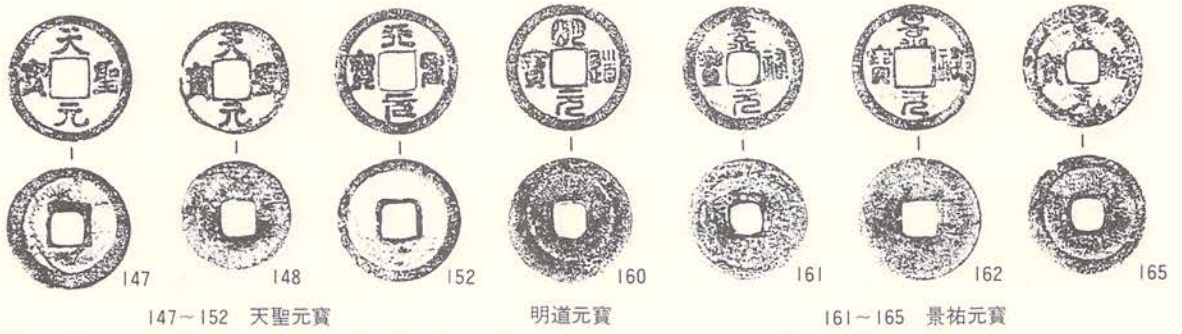
135-138天禧通寶

D VII g 2 蓄錢遺構

145·146 天聖元寶



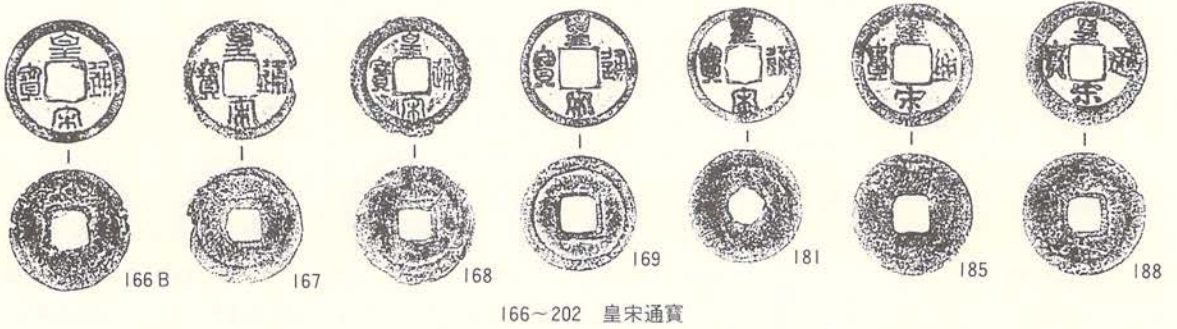
第352圖 貨幣拓影—3



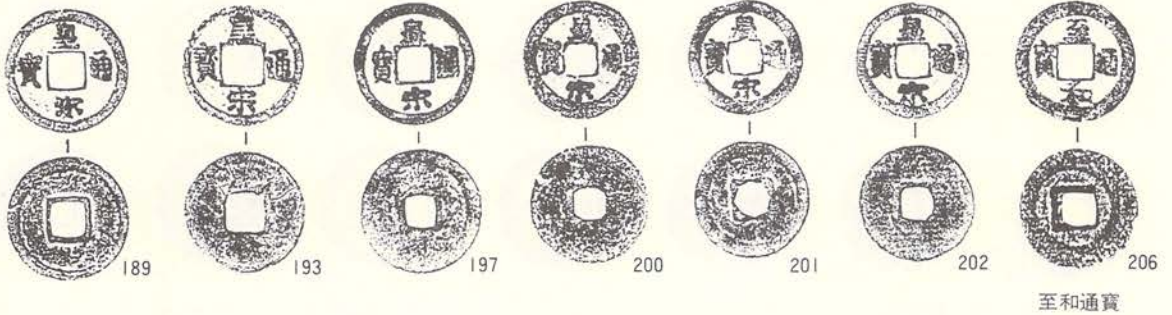
147-152 天聖元寶

明道元寶

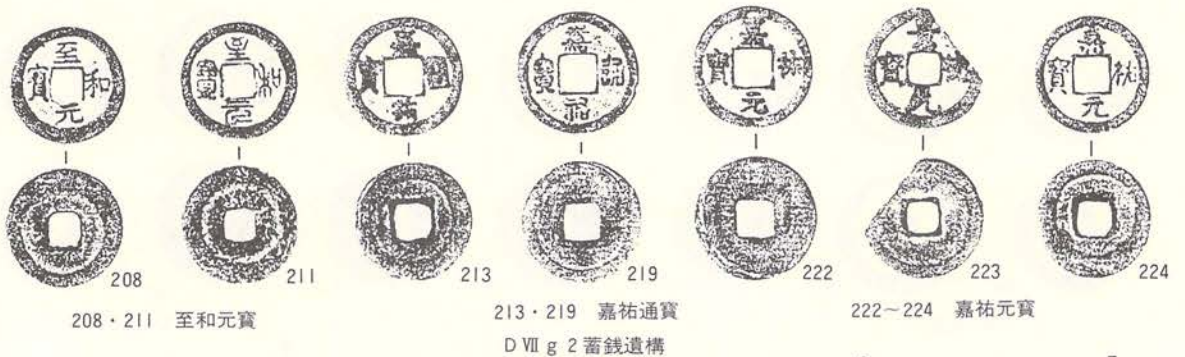
161-165 景祐元寶



166-202 皇宋通寶



至和通寶



208 · 211 至和元寶

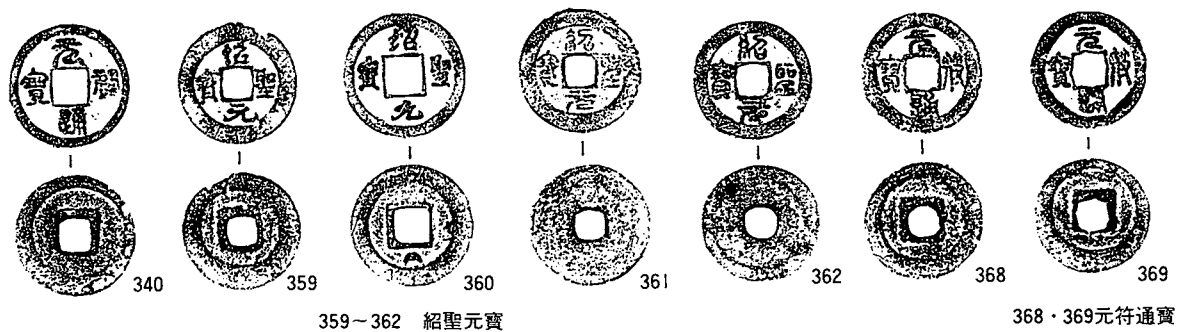
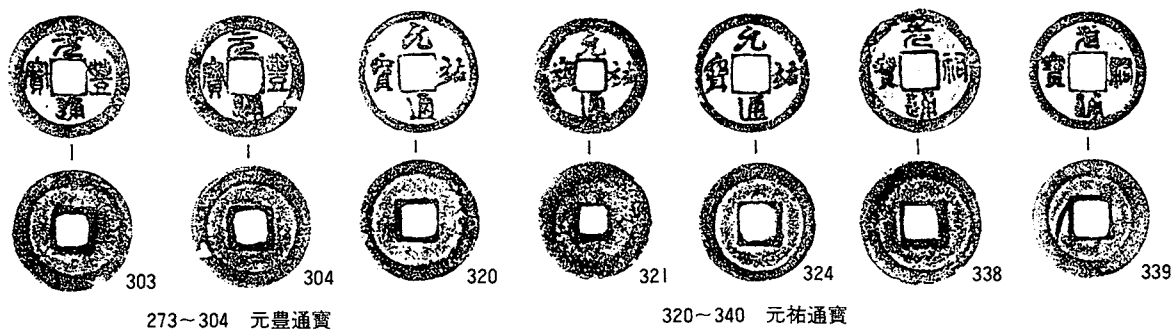
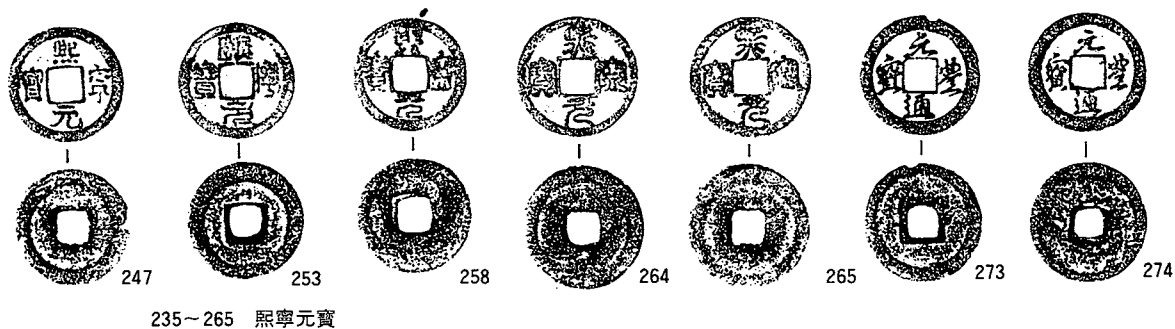
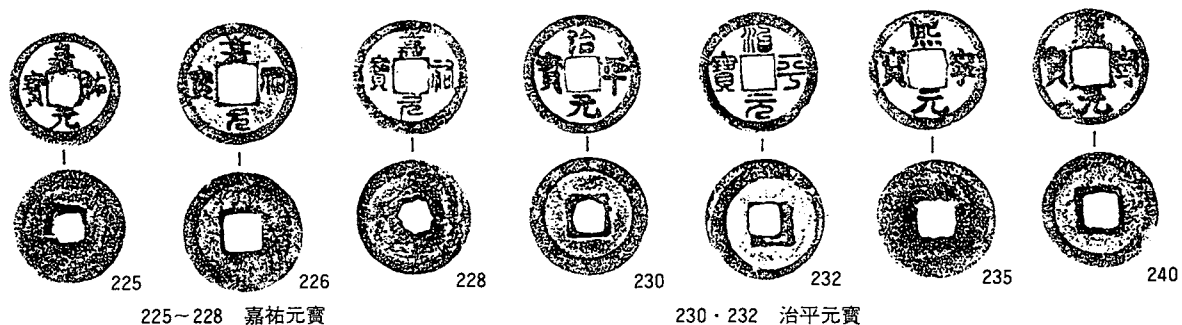
213 · 219 嘉祐通寶

222-224 嘉祐元寶

D VII g 2 蓄錢遺構



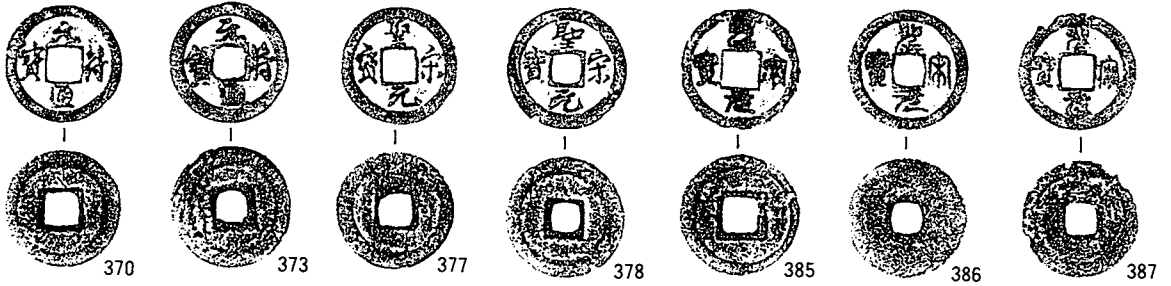
第353圖 貨幣拓影—4



D VII g 2 蓄錢遺構

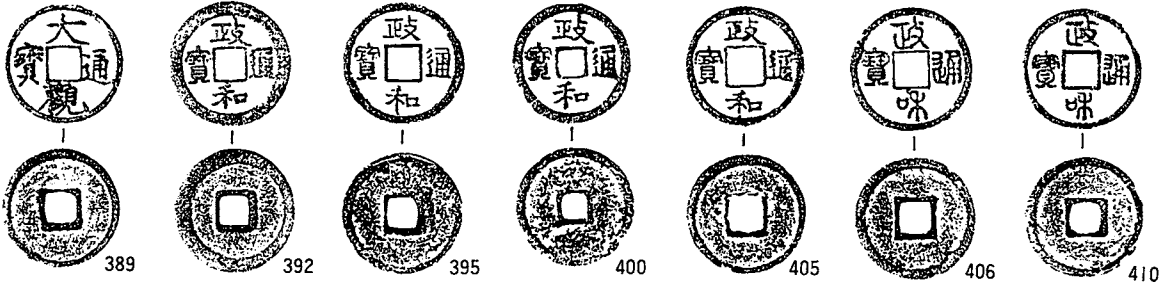
0 5cm

第354圖 貨幣拓影—5



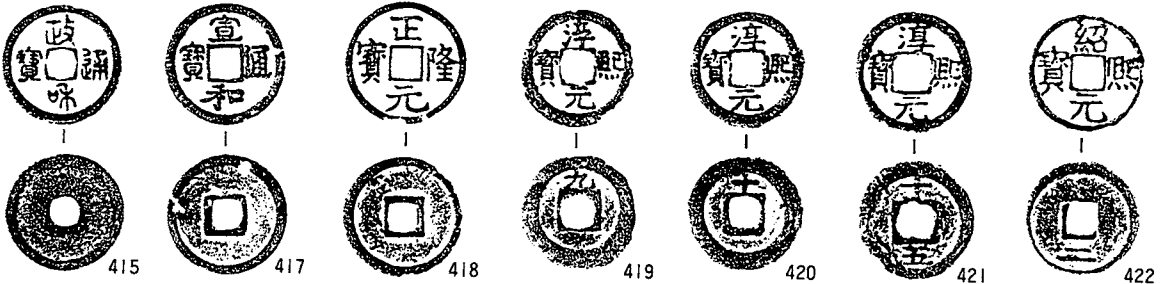
370 · 373元符通寶

377~387 聖宋元寶



大觀通寶

392~415 政和通寶

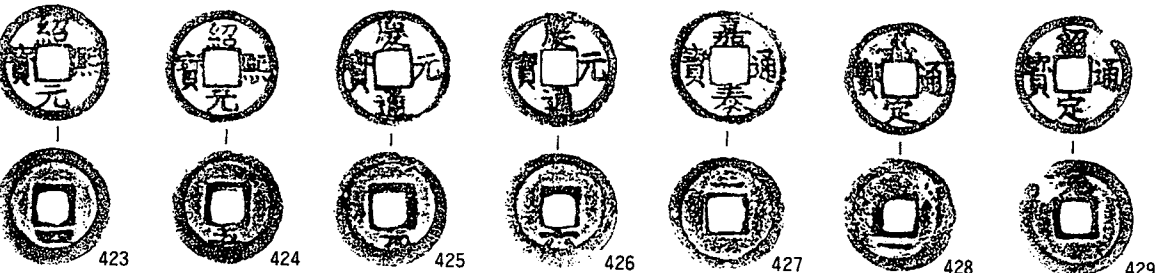


415

宣和通寶

正隆元寶

419~421 淳熙元寶



422~424 紹熙元寶

425 · 426 慶元通寶

嘉泰通寶

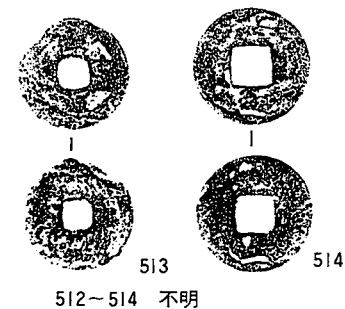
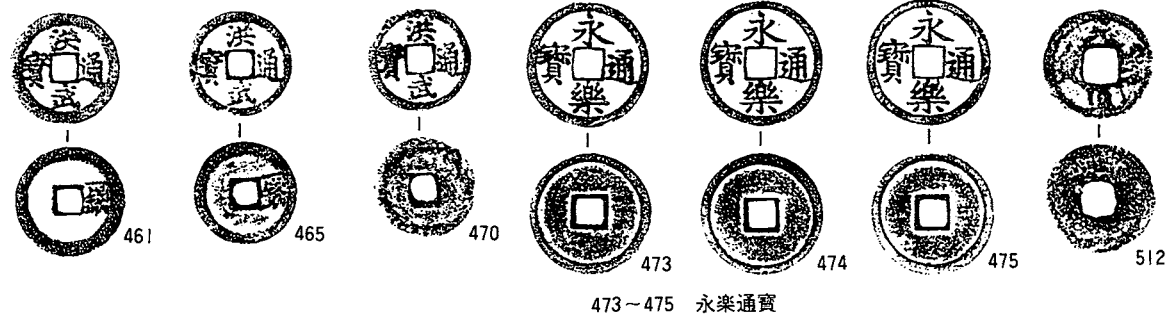
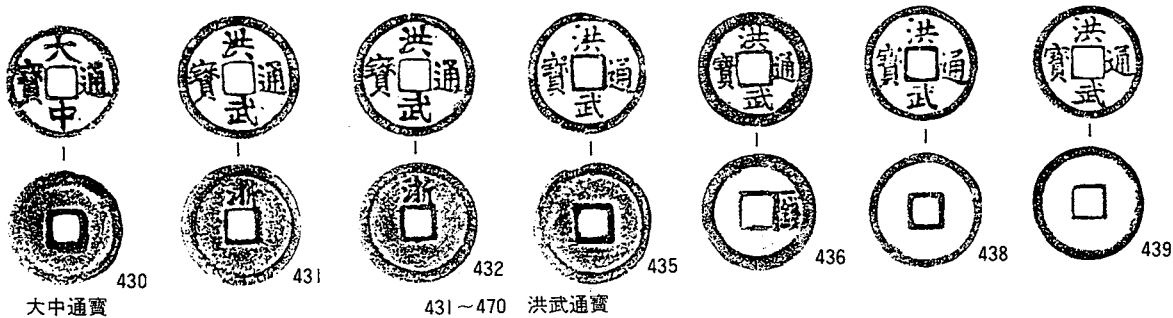
嘉定通寶

紹定通寶

D VII g 2 蓄錢遺構

第355圖 貨幣拓影—6





0 5cm

D VII g 2 蓄銭遺構

第356図 貨幣拓影—7

第21表 出土貨幣一覽表

No	遺構名 (グリッド名)	層位	銭文		初鑄年 (西暦年)	法量						備考	掲載 図版	写真 図版
			面	背		外径cm	穿径cm	郭幅cm	輪幅cm	厚さcm	重さg			
1	C II 区 西館北側西端掘り	表土	天聖元寶	—	北宋仁宗天聖元年 1023年	2.5	0.7	0.1	0.2	0.1	2.5	篆書体、2枚の内1枚	350	115
2	C II 区 西館北側西端掘り	表土	天禧通寶	—	北宋真宗天禧元年 1017年	2.5	0.7	0.1	0.2	0.1	2.5	楷書体、No 1 と 2 枚の内 1 枚	350	115
3	C III g 4 土坑北東部	埋土	元豊通寶	—	北宋神宗元豊元年 1078年	2.5			0.2	0.1	(1.7)	篆書体、破損、4枚の内1枚	350	115
4	C III g 4 土坑北東部	埋土	不明	不明								No 3 と 4 枚の内 1 枚、2 枚密着	350	115
5	C III g 4 土坑北東部	埋土	不明	不明							3.5	No 3 と 4 枚の内 1 枚、No 4 と密着	350	115

6	CIII 8 4 土坑北東部	埋土	不明	不明															No 3と4枚の内1枚、破損	350	115
7	CVe 8 落ち込み	埋土	紹聖元寶	—	北宋哲宗紹聖年間 1094年~1095年	2.4				0.2			1.2					草書体、一部に割れがあり。	350	115	
8	CVe 8 落ち込み	埋土	皇宋通寶	—	北宋仁宗寶元元年 1039年													篆書体、No 7と3枚の内1枚、石損	350	115	
9	CVe 8 落ち込み	埋土	不明	不明														No 7と3枚の内1枚、No 8と密着、破損	350	115	
10	CVg 6 土坑	埋土	元祐通寶	—	北宋哲宗元祐年間 1086年~1093年	2.4	0.8	0.1	0.2	0.1	(1.7)							篆書体、一部破損	350	115	
11	CV区柱穴No42	埋土	永樂通寶	—	明成祖永樂元年 1408年													楷書体、約1/2残存	350	115	
12	CVe 8 落ち込み	埋土	不詳	—														腐蝕著しく、破片として残存	350	115	
13	東館北側中央 再クリーニング		永樂通寶	—	明成祖永樂元年 1408年	2.4	0.6			0.2	0.1	(1.3)						楷書体、一部破損	350	115	
14	CVI区柱穴No53	埋土	永樂通寶	—	明成祖永樂元年 1408年		0.6			0.2	0.1	(1.7)						楷書体、破損	350	115	
15	CVI区柱穴No18	埋土	永樂通寶		明成祖永樂元年 1408年	2.3	0.6	(0.05) 0.1	0.2	0.1	1.3							楷書体、完品	350	115	
16	CVI区柱穴No51	埋土	開元通寶	—	唐高祖武德4年 621年	2.4	0.7	0.1	0.2	0.1	2.3							楷書体、完品	350	115	
17	CVI区柱穴No21	埋土	無文錢	—			0.8				(0.01)	0.6						鑄銭、完品	350	115	
18	CVI区柱穴No29	埋土	治平元寶	—	北宋英宗治平元年 1064年					0.2		(0.9)						篆書体、「寶」部分を欠失	350	115	
19	CVI区柱穴No42	埋土	永樂通寶	—	明成祖永樂元年 1408年					0.2		(1.0)						楷書体、破損	350	115	
20	CVI区柱穴No66	埋土	永樂通寶	—	明成祖永樂元年 1408年				0.1	0.2		(1.5)						楷書体、破損	350	115	
21	CVII d 3 土坑	埋土	元祐通寶	—	北宋哲宗元祐年間 1086年~1093年							(1.0)						篆書体、破損	350	115	
22	CVII e 8 土坑	埋土	不詳	—						0.2		(1.0)						破損	350	115	
23	CVII c 5 土坑	埋土	永樂通寶	—	明成祖永樂元年 1408年	2.4	0.7	0.1	0.3	0.1	1.7							楷書体、完品	350	115	
24	CVII区柱穴No 6	埋土	永樂通寶	—	明成祖永樂元年 1408年	2.5	0.6	0.1	0.2	0.1	2.3							楷書体、完品	350	115	
25	CVII区柱穴No11	埋土	永樂通寶	—	明成祖永樂元年 1408年	2.4	0.6	0.1	0.2	0.1	2.9							楷書体、完品	350	116	
26	CVII区柱穴No14	埋土	元祐通寶	—	北宋哲宗元祐年間 1086年~1093年	2.5	0.7	0.1	0.2	0.1	2.8							草書体、完品	350	116	
27	CVII区柱穴No17	埋土	皇宋通寶	—	北宋仁宗寶元元年 1039年					0.3		(0.8)						篆書体、「宋」部のみ残存	350	116	
28	CV j 6 溝 4 東端	埋土	永樂通寶	—	明成祖永樂元年 1408年	2.5	0.6	0.1	0.3	0.1	2.2							楷書体、一部(輪)を欠失	350	116	
29	CV j 6 溝 4 中央	埋土	洪武通寶	不詳	明太祖洪武元年 1368年							(2.0)						楷書体、破損		116	
30	DIII j 2 土坑	埋土	永樂通寶	—	明成祖永樂元年 1408年	2.5	0.6	0.1	0.2	0.1	(2.1)							楷書体、完品	351	116	
31	DIII区柱穴No 4	埋土	元豐通寶	—	北宋神宗元豐元年 1078年	2.4	0.6	0.1	0.3	0.1	1.8							草書体、輪の一部欠失	351	116	
32	DIII区柱穴No 5	埋土	不詳	—		2.4	0.7			0.3	0.1	2.5						輪の一部欠失	351	116	
33	DIII区柱穴No15	埋土	永樂通寶	—	明成祖永樂元年 1408年	2.5	0.6	0.1	0.2	0.1	2.9							楷書体、完品	351	116	
34	東館DV区 南側西寄柵掘り	表土	永樂通寶	—	明成祖永樂元年 1408年	2.5	0.6	0.1	0.3	0.1	2.3							楷書体、輪の一部を欠失	351	116	
35	DVI区柱穴No 4	埋土	永樂通寶	—	明成祖永樂元年 1408年	2.5	0.6	0.1	0.2	0.1	2.0							楷書体、ほぼ完品	351	116	
36	東館 DVI区中央柵掘り	表土	永樂通寶	—	明成祖永樂元年 1408年	2.5	0.6	0.1	0.2	0.1	2.2							楷書体、ほぼ完品	351	116	

37	東館 DVI区中央掘り	表土	洪武通寶	不詳	明太祖洪武元年 1368年	2.0	0.6	0.1	0.2	0.1	2.1	楷書体、完品	351	116
38	東館 DVI区中央掘り	表土	永樂通寶	—	明成祖永樂元年 1408年	2.5	0.6	0.1	0.2	0.1	2.4	楷書体、一部に割れあり。	351	116
39	DVII区柱穴№6	埋土	洪武通寶	—	明太祖洪武元年 1368年	2.2	0.5	0.1	0.3	0.1	2.9	楷書体、輪に加工痕あり	351	116
40	DVII区柱穴№12	埋土	元豊通寶	—	北宋神宗元豊元年 1078年	2.3	0.7	0.1	0.2	0.1	(1.4)	草書体、「登」部を欠失	351	116
41	DVII区柱穴№12	埋土	不詳	—					0.2	0.1	(1.2)	約1/2を欠失	351	116
42	外堀東端の上土	埋土	熙寧元寶	—	北宋眞宗熙寧元年 1068年	2.3	0.7	0.1	0.2	0.1	3.5	楷書体、完品	351	116
43	内堀盛土内	掘乱層	無文銭	—		2.2	0.7			(0.02)	1.0	鋳銭、完品	351	116
44	西館西端 セクションベルト	表土	熙寧元寶	—	北宋眞宗熙寧元年 1068年	2.3	0.8	0.1	0.2	0.1	2.3	楷書体、完品	351	116
45	東館 セクションベルト	表土	政和通寶		北宋徽宗政和元年 1111年	2.5	0.7	0.1	0.2	0.1	2.1	篆書体、輪を若干欠失するが。	351	116
46	東館 セクションベルト	表土	永樂通寶		明成祖永樂元年 1408年	2.5	0.6	0.1	0.2	0.1	3.3	楷書体、完品	351	117
47	東館文化課 トレンチT-12	表土	元符通寶		北宋哲宗元符元年 1098年	2.4	0.6	0.1	0.3	0.1	2.9	草書体、完品	351	117
48	東館文化課 トレンチT-12	表土	紹聖元寶		北宋哲宗紹聖年間 1094年～1097年	2.4	0.7	0.1	0.3	0.1	2.9	草書体、完品	351	117
49	東館文化課 トレンチT-12	表土	紹聖元寶		北宋哲宗紹聖年間 1094年～1097年	2.4	0.7	0.1	0.3	0.1	3.3	草書体、完品	351	117
50	東館文化課 トレンチT-12	表土	至和元寶		北宋仁宗至和元年 1054年	2.4	0.8	0.1	0.3	0.1	2.0	楷書体、完品	351	117
51	出土地不明		永樂通寶		明成祖永樂元年 1408年	2.3	0.6	0.1	0.2	0.1	1.5	楷書体、完品	351	117
52	DVII区 2番銭		開元通寶		唐高祖武徳4年 621年	2.4	0.6	0.1	0.2	0.1	2.7	楷書体、完品、短元元足前縁	352	117
53	DVII区 2番銭		開元通寶	—	唐高祖武徳4年 621年	2.4	0.7	0.1	0.2	0.1	2.9	楷書体、完品、短元背爪	352	117
54	DVII区 2番銭		開元通寶		唐高祖武徳4年 621年	2.4	0.7	0.1	0.2	0.1	2.6	楷書体、完品、短元無背		
55	DVII区 2番銭		開元通寶		唐高祖武徳4年 621年	2.4	0.7	0.1	0.2	0.1	3.0	楷書体、完品、短元無背		
56	DVII区 2番銭		開元通寶		唐高祖武徳4年 621年	2.4	0.7	0.1	0.2	0.1	4.4	楷書体、完品、短元無背		
57	DVII区 2番銭		開元通寶		唐高祖武徳4年 621年	2.4	0.6	0.1	0.2	0.1	3.3	楷書体、完品、短元無背		
58	DVII区 2番銭		開元通寶		唐高祖武徳4年 621年	2.4	0.7	0.1	0.2	0.1	2.6	楷書体、完品、短元無背		
59	DVII区 2番銭		開元通寶		唐高祖武徳4年 621年	2.4	0.6	0.1	0.2	0.1	2.4	楷書体、完品、短元無背		
60	DVII区 2番銭		開元通寶		唐高祖武徳4年 621年	2.4	0.6	0.1	0.2	0.1	2.8	楷書体、完品、短元無背		
61	DVII区 2番銭		開元通寶		唐高祖武徳4年 621年	2.4	0.6	0.1	0.2	0.1	2.4	楷書体、完品、短元無背		
62	DVII区 2番銭		開元通寶	洛	唐高祖武徳4年 621年	2.5	0.7	0.1	0.2	0.1	3.0	楷書体、完品、長元背洛	352	117
63	DVII区 2番銭		開元通寶	判読不能	唐高祖武徳4年 621年	2.4	0.6	0.1	0.2	0.1	3.5	楷書体、完品、長元背あり。	352	117
64	DVII区 2番銭		開元通寶	判別不能	唐高祖武徳4年 621年	2.3	0.7	0.1	0.2	0.1	3.0	楷書体、完品、長元背あり。		
65	DVII区 2番銭		開元通寶	—	唐高祖武徳4年 621年	2.4	0.6	0.1	0.2	0.1	2.8	楷書体、完品、長元背爪	352	117
66	DVII区 2番銭		開元通寶	—	唐高祖武徳4年 621年	2.4	0.7	0.1	0.2	0.1	2.7	楷書体、完品、長元背爪	352	117
67	DVII区 2番銭		開元通寶	—	唐高祖武徳4年 621年	2.4	0.7	0.1	0.2	0.1	0.5	楷書体、完品、長元背爪		

68	DVII 8 2 番銭	開元通寶	判別不能	唐高祖武德 4 年 621年	2.5	0.7	0.1	0.2	0.1	3.1	楷書體、完品、長元背爪		
69	DVII 8 2 番銭	開元通寶	—	唐高祖武德 4 年 621年	2.4	0.7	0.1	0.2	0.1	2.9	楷書體、完品、長元背爪		
70	DVII 8 2 番銭	開元通寶	—	唐高祖武德 4 年 621年	2.5	0.7	0.1	0.2	0.1	2.8	楷書體、完品、長元背爪		
71	DVII 8 2 番銭	開元通寶	—	唐高祖武德 4 年 621年	2.4	0.7	0.1	0.2	0.1	3.2	楷書體、完品、長元背爪		
72	DVII 8 2 番銭	開元通寶	—	唐高祖武德 4 年 621年	2.4	0.7	0.1	0.2	0.1	3.3	楷書體、完品、長元背爪		
73	DVII 8 2 番銭	開元通寶	—	唐高祖武德 4 年 621年	2.4	0.7	0.1	0.2	0.1	3.3	楷書體、完品、長元背爪		
74	DVII 8 2 番銭	開元通寶	無背	唐高祖武德 4 年 621年	2.5	0.7	0.1	0.2	0.1	3.0	楷書體、完品、長元無背	352	117
75	DVII 8 2 番銭	開元通寶	無背	唐高祖武德 4 年 621年	2.4	0.7	0.1	0.2	0.1	3.3	楷書體、完品、長元無背	352	117
76	DVII 8 2 番銭	開元通寶	無背	唐高祖武德 4 年 621年	2.4	0.7	0.1	0.2	0.1	3.3	楷書體、完品、長元無背		
77	DVII 8 2 番銭	開元通寶	無背	唐高祖武德 4 年 621年	2.4	0.7	0.1	0.2	0.1	2.8	楷書體、完品、長元無背		
78	DVII 8 2 番銭	開元通寶	無背	唐高祖武德 4 年 621年	2.4	0.7	0.1	0.2	0.1	3.4	楷書體、完品、長元無背		
79	DVII 8 2 番銭	開元通寶	無背	唐高祖武德 4 年 621年	(2.3)	0.7	0.1	0.3	0.1	(1.8)	楷書體、完品、長元無背		
80	DVII 8 2 番銭	開元通寶	無背	唐高祖武德 4 年 621年	2.4	0.6	0.1	0.2	0.1	3.0	楷書體、完品、長元無背		
81	DVII 8 2 番銭	開元通寶	無背	唐高祖武德 4 年 621年	2.5	0.7	0.1	0.2	0.1	2.5	楷書體、完品、長元無背		
82	DVII 8 2 番銭	開元通寶	無背	唐高祖武德 4 年 621年	2.5	0.7	0.1	0.2	0.1	2.8	楷書體、完品、長元無背		
83	DVII 8 2 番銭	開元通寶	無背	唐高祖武德 4 年 621年	2.5	0.7	0.1	0.2	0.1	2.9	楷書體、完品、長元無背		
84	DVII 8 2 番銭	開元通寶	潤	唐高祖武德 4 年 621年	2.3	0.7	0.1	0.2	0.1	2.8	楷書體、完品、小樣長元背潤	352	117
85	DVII 8 2 番銭	開元通寶	無背	唐高祖武德 4 年 621年	2.3	0.7	0.1	0.2	0.1	2.4	楷書體、完品、小樣長元無背	352	117
86	DVII 8 2 番銭	開元通寶	無背	唐高祖武德 4 年 621年	2.3	0.7	0.1	0.2	0.1	2.4	楷書體、完品、小樣長元無背		
87	DVII 8 2 番銭	開元通寶	無背	唐高祖武德 4 年 621年	2.3	0.6	0.1	0.2	0.1	2.8	楷書體、完品、小樣長元無背		
88	DVII 8 2 番銭	開元通寶	無背	唐高祖武德 4 年 621年	(2.3)	0.7		0.2	0.1	(2.1)	楷書體、完品、小樣長元無背		
89	DVII 8 2 番銭	開元通寶	無背	唐高祖武德 4 年 621年	2.4	0.7	0.1	0.2	0.1	2.7	楷書體、完品、小樣長元無背		
90	DVII 8 2 番銭	開元通寶	無背	唐高祖武德 4 年 621年	2.4	0.7	0.1	0.2	0.1	2.8	楷書體、完品、小樣長元無背		
91	DVII 8 2 番銭	開元通寶	無背	唐高祖武德 4 年 621年	2.4	0.7	0.1	0.2	0.1	3.4	楷書體、完品、小樣長元無背		
92	DVII 8 2 番銭	開元通寶	無背	唐高祖武德 4 年 621年	2.3	0.7	0.1	0.2	0.1	1.9	楷書體、完品、小樣長元無背		
93	DVII 8 2 番銭	開元通寶	無背	唐高祖武德 4 年 621年	2.3	0.7	0.1	0.1	0.1	3.0	楷書體、完品、小樣長元無背		
94	DVII 8 2 番銭	開元通寶	無背	唐高祖武德 4 年 621年	2.3	0.7		0.2	0.1	2.8	楷書體、完品、小樣長元無背		
95	DVII 8 2 番銭	開元通寶	無背	唐高祖武德 4 年 621年	2.3	0.7		0.2	0.1	2.8	楷書體、完品、小樣長元無背		
96	DVII 8 2 番銭	乾元重寶	無背	唐肅宗乾元二年 759年	2.4	0.7	0.1	0.2	0.1	3.0	楷書體、完品	352	117
97	DVII 8 2 番銭	太平通寶	無背	北宋太宗太平興國 年間 976~983年	2.4	0.6	0.1	0.3	0.1	3.0	真書體、完品	352	117
98	DVII 8 2 番銭	太平通寶	無背	北宋太宗太平興國 年間 976~983年	2.4	0.6	0.1	0.3	0.1	2.8	真書體、完品	352	117

99	DVII 8 2 番銭		大平通寶	無背	北宋太宗太平興國年間 976~983年	2.4	0.6	0.1	0.3	0.1	2.4	真書体、完品		
100	DVII 8 2 番銭		大平通寶	無背	北宋太宗太平興國年間 976~983年	2.4	0.6	0.1	0.3	0.1	2.9	真書体、完品		
101	DVII 8 2 番銭		大平通寶	無背	北宋太宗太平興國年間 976~983年	2.4	0.6	0.1	0.3	0.1	2.8	真書体、完品		
102	DVII 8 2 番銭		淳化元寶	無背	北宋太宗淳化元年 990年	2.4	0.6	0.1	0.3	0.1	3.6	草書体、完品	352	117
103	DVII 8 2 番銭		淳化元寶	無背	北宋太宗淳化元年 990年	2.4	0.6	0.1	0.3	0.1	3.4	草書体、完品		
104	DVII 8 2 番銭		淳化元寶	無背	北宋太宗淳化元年 990年	2.4	0.6	0.1	0.3	0.1	3.2	草書体、完品		
105	DVII 8 2 番銭		淳化元寶	無背	北宋太宗淳化元年 990年	2.4	0.6	0.1	0.3	0.1	2.7	草書体、完品		
106	DVII 8 2 番銭		至道元寶	無背	北宋太宗至道元年 995年	2.5	0.6	0.1	0.3	0.1	3.6	楷書体、完品	352	118
107	DVII 8 2 番銭		至道元寶	無背	北宋太宗至道元年 995年	2.5	0.6	0.1	0.4	0.1	3.5	草書体、完品	352	118
108	DVII 8 2 番銭		至道元寶	無背	北宋太宗至道元年 995年	2.4	0.6	0.1	0.3	0.1	2.7	草書体、完品		
109	DVII 8 2 番銭		至道元寶	無背	北宋太宗至道元年 995年	2.4	0.6	0.1	0.2	0.1	2.8	草書体、完品		
110	DVII 8 2 番銭		至道元寶	無背	北宋太宗至道元年 995年	2.4	0.6	0.1	0.3	0.1	3.8	行書体、完品	352	118
111	DVII 8 2 番銭		至道元寶	無背	北宋太宗至道元年 995年	2.4	0.6	0.1	0.3	0.1	2.9	行書体、完品		
112	DVII 8 2 番銭		咸平元寶	無背	北宋真宗咸平元年 998年	2.4	0.6	0.1	0.3	0.1	3.5	楷書体、完品	352	118
113	DVII 8 2 番銭		咸平元寶	無背	北宋真宗咸平元年 998年	2.5	0.6	0.1	0.3	0.1	3.5	楷書体、ス穴あり。	352	118
114	DVII 8 2 番銭		咸平元寶	無背	北宋真宗咸平元年 998年	(2.4)	0.6	0.1	0.3	0.1	2.5	楷書体、輪一部欠		
115	DVII 8 2 番銭		咸平元寶	無背	北宋真宗咸平元年 998年	(2.4)	0.6	0.1	0.3	0.1	(1.6)	楷書体、1/3欠損		
116	DVII 8 2 番銭		咸平元寶	無背	北宋真宗咸平元年 998年	2.4	0.6	0.1	0.2	0.1	2.7	楷書体、完品		
117	DVII 8 2 番銭		咸平元寶	無背	北宋真宗咸平元年 998年	2.5	0.6	0.1	0.3	0.1	2.8	楷書体、完品		
118	DVII 8 2 番銭		咸平元寶	無背	北宋真宗咸平元年 998年	2.4	0.6	0.1	0.3	0.1	2.8	楷書体、完品		
119	DVII 8 2 番銭		咸平元寶	無背	北宋真宗咸平元年 998年	2.4	0.6	0.1	0.3	0.1	3.2	楷書体、完品		
120	DVII 8 2 番銭		咸平元寶	無背	北宋真宗咸平元年 998年	2.5	(0.6)	0.1	0.4	0.1	4.0	楷書体、完品		
121	DVII 8 2 番銭		咸平元寶	無背	北宋真宗咸平元年 998年	2.4	0.6	0.1	0.3	0.1	3.0	楷書体、完品		
122	DVII 8 2 番銭		景德元寶	無背	北宋真宗景德元年 1004年	2.4	0.6	0.1	0.2	0.1	3.3	楷書体、完品	352	118
123	DVII 8 2 番銭		景德元寶	無背	北宋真宗景德元年 1004年	2.5	0.6	0.1	0.2	0.1	3.0	楷書体、完品		
124	DVII 8 2 番銭		景德元寶	無背	北宋真宗景德元年 1004年	2.5	0.6	0.1	0.2	0.1	(2.6)	楷書体、完品		
125	DVII 8 2 番銭		景德元寶	無背	北宋真宗景德元年 1004年	2.5	0.6	0.1	0.2	0.1	3.2	楷書体、完品		
126	DVII 8 2 番銭		景德元寶	無背	北宋真宗景德元年 1004年	2.4	0.6	0.1	0.2	0.1	2.9	楷書体、完品		
127	DVII 8 2 番銭		景德元寶	無背	北宋真宗景德元年 1004年	2.4	0.6	0.1	0.2	0.1	2.0	楷書体、輪一部欠		
128	DVII 8 2 番銭		祥符元寶	無背	北宋真宗大中祥符元年 1008年	2.5	0.6	0.1	0.3	0.1	3.4	楷書体、完品	352	118
129	DVII 8 2 番銭		祥符元寶	無背	北宋真宗大中祥符元年 1008年	2.4	0.6	0.1	0.3	0.2	5.3	楷書体、完品	352	118

130	DVII 8 2 番銭		祥符元寶	無背	北宋真宗大中祥符元年 1008年	2.5	0.8		0.4	0.1	3.5	楷書体、郭・穿に加工あり。		
131	DVII 8 2 番銭		祥符元寶	無背	北宋真宗大中祥符元年 1008年	2.5	0.6	0.1	0.3	0.1	2.8	楷書体、完品		
132	DVII 8 2 番銭		祥符元寶	無背	北宋真宗大中祥符元年 1008年	2.4	0.6	0.1	0.3	0.1	3.4	楷書体、輪一部欠		
133	DVII 8 2 番銭		祥符元寶	無背	北宋真宗大中祥符元年 1008年	2.5	0.6	0.1	0.3	0.1	3.1	楷書体、完品	352	118
134	DVII 8 2 番銭		祥符元寶	無背	北宋真宗大中祥符元年 1008年	2.5	0.7	0.1	0.3	0.1	3.0	楷書体、完品		
135	DVII 8 2 番銭		天禧通寶	無背	北宋真宗天禧元年 1017年	2.4	0.6	0.1	0.3	0.1	3.7	楷書小字、完品	352	118
136	DVII 8 2 番銭		天禧通寶	無背	北宋真宗天禧元年 1017年	2.5	0.6	0.1	0.2	0.1	3.3	楷書大字、完品	352	118
137	DVII 8 2 番銭		天禧通寶	無背	北宋真宗天禧元年 1017年	2.5	0.6	0.1	0.2	0.1	3.7	楷書大字、完品		
138	DVII 8 2 番銭		天禧通寶	無背	北宋真宗天禧元年 1017年	2.5	1.1		0.3	0.1	2.0	楷書体、郭・穿を加工	352	118
139	DVII 8 2 番銭		天禧通寶	無背	北宋真宗天禧元年 1017年	2.5	0.7	0.1	0.2	0.1	3.0	楷書体、完品		
140	DVII 8 2 番銭		天禧通寶	無背	北宋真宗天禧元年 1017年	2.5	0.6	0.1	0.2	0.1	3.5	楷書体、完品		
141	DVII 8 2 番銭		天禧通寶	無背	北宋真宗天禧元年 1017年	2.4	0.6	0.1	0.2	0.1	2.8	楷書体、完品		
142	DVII 8 2 番銭		天禧通寶	無背	北宋真宗天禧元年 1017年	2.5	0.6	0.1	0.2	0.1	3.2	楷書体、完品		
143	DVII 8 2 番銭		天禧通寶	無背	北宋真宗天禧元年 1017年	2.4	0.7	0.1	0.2	0.1	3.4	楷書体、完品		
144	DVII 8 2 番銭		天禧通寶	無背	北宋真宗天禧元年 1017年	(2.5)	(0.8)	0.1	0.3	0.1	(2.3)	楷書体、輪の一部欠		
145	DVII 8 2 番銭		天聖元寶	無背	北宋仁宗天聖元年 1023年	2.5	0.7		0.3	0.1	3.2	楷書体、小字狭穿、輪一部欠	352	118
146	DVII 8 2 番銭		天聖元寶	無背	北宋仁宗天聖元年 1023年	2.4	0.6	0.1	0.2	0.1	3.4	楷書体、大字狭穿、完品	352	118
147	DVII 8 2 番銭		天聖元寶	無背	北宋仁宗天聖元年 1023年	2.5	0.7	0.1	0.2	0.1	3.6	楷書体、大字広穿、完品	353	118
148	DVII 8 2 番銭		天聖元寶	無背	北宋仁宗天聖元年 1023年	2.3	0.7	0.1	0.2	0.1	2.7	楷書体、大字広穿、輪を加工	353	118
149	DVII 8 2 番銭		天聖元寶	無背	北宋仁宗天聖元年 1023年	2.5	0.7	0.1	0.2	0.1	4.3	楷書体、大字広穿		
150	DVII 8 2 番銭		天聖元寶	無背	北宋仁宗天聖元年 1023年	2.4	0.7	0.1	0.2	0.1	2.6	楷書体、大字広穿		
151	DVII 8 2 番銭		天聖元寶	無背	北宋仁宗天聖元年 1023年	2.5	0.7	0.1	0.2	0.1	3.9	楷書体、大字広穿		
152	DVII 8 2 番銭		天聖元寶	無背	北宋仁宗天聖元年 1023年	2.5	0.7	0.1	0.2	0.1	3.5	篆書体、完品	353	118
153	DVII 8 2 番銭		天聖元寶	無背	北宋仁宗天聖元年 1023年	2.5	0.7	0.1	0.2	0.1	3.1	篆書体、完品		
154	DVII 8 2 番銭		天聖元寶	無背	北宋仁宗天聖元年 1023年	2.5	0.7	0.1	0.2	0.1	2.9	篆書体、完品		
155	DVII 8 2 番銭		天聖元寶	無背	北宋仁宗天聖元年 1023年	2.5	0.7	0.1	0.2	0.1	2.9	篆書体、完品		
156	DVII 8 2 番銭		天聖元寶	無背	北宋仁宗天聖元年 1023年	2.5	0.6	0.1	0.2	0.1	3.9	篆書体、完品		
157	DVII 8 2 番銭		天聖元寶	無背	北宋仁宗天聖元年 1023年	2.5	0.7	0.1	0.2	0.1	3.4	篆書体、完品		
158	DVII 8 2 番銭		天聖元寶	無背	北宋仁宗天聖元年 1023年	2.4	0.8	0.1	0.2	0.1	2.6	篆書体、完品		
159	DVII 8 2 番銭		天聖元寶	無背	北宋仁宗天聖元年 1023年	2.5	0.8	0.1	0.2	0.1	2.7	楷書体、割れている。		
160	DVII 8 2 番銭		明道元寶	無背	北宋仁宗明道元年 1032年	2.6	0.7	0.1	0.3	0.1	3.3	篆書体、完品	353	118

161	D VII 8 2 蓄銭		景祐元寶	無背	北宋仁宗景祐元年 1034年	2.5	0.6	0.1	0.3	0.1	2.5	篆書体狭穿、完品	353	118
162	D VII 8 2 蓄銭		景祐元寶	無背	北宋仁宗景祐元年 1034年	2.5	0.7	0.1	0.2	0.1	3.0	草書体広穿、完品	353	118
163	D VII 8 2 蓄銭		景祐元寶	無背	北宋仁宗景祐元年 1034年	2.5	0.7	0.1	0.2	0.1	2.5	草書体広穿、完品		
164	D VII 8 2 蓄銭		景祐元寶	無背	北宋仁宗景祐元年 1034年	2.5	0.8	0.1	0.2	0.1	3.2	草書体広穿、完品		
165	D VII 8 2 蓄銭		景祐元寶	無背	北宋仁宗景祐元年 1034年	2.4	0.6	0.1	0.3	0.1	2.4	草書体狭穿、完品	353	119
166 A	D VII 8 2 蓄銭		景祐元寶	無背	北宋仁宗景祐元年 1034年	2.4	0.6	0.1	0.2	0.1	2.5	草書体狭穿、完品		119
166 B	D VII 8 2 蓄銭		皇宋通寶	無背	北宋仁宗寶元元年 1039年	2.5	0.8	0.1	0.2	0.1	3.2	大様、篆書大字大郭、完品	353	
167	D VII 8 2 蓄銭		皇宋通寶	無背	北宋仁宗寶元元年 1039年	2.4	0.7	0.1	0.2	0.1	3.2	大様、篆書大字小郭、輪一部欠、完	353	119
168	D VII 8 2 蓄銭		皇宋通寶	無背	北宋仁宗寶元元年 1039年	2.5	0.7	0.1	0.3	0.1	3.2	大様、篆書小字大郭、広輪、完品	353	119
169	D VII 8 2 蓄銭		皇宋通寶	無背	北宋仁宗寶元元年 1039年	2.4	0.8	0.1	0.2	0.1	2.9	大様、篆書太字大郭、完品	353	119
170	D VII 8 2 蓄銭		皇宋通寶	無背	北宋仁宗寶元元年 1039年	2.4	0.8	0.1	0.2	0.1	2.3	大様、篆書太字大郭、完品		
171	D VII 8 2 蓄銭		皇宋通寶	無背	北宋仁宗寶元元年 1039年	2.5	0.7	0.1	0.2	0.1	3.1	大様、篆書太字大郭、完品		
172	D VII 8 2 蓄銭		皇宋通寶	無背	北宋仁宗寶元元年 1039年	2.4	0.7	0.1	0.2	0.1	3.0	大様、篆書太字大郭、完品		
173	D VII 8 2 蓄銭		皇宋通寶	無背	北宋仁宗寶元元年 1039年	2.5	0.8	0.1	0.2	0.1	3.3	大様、篆書太字大郭、完品		
174	D VII 8 2 蓄銭		皇宋通寶	無背	北宋仁宗寶元元年 1039年	2.4	0.7	0.1	0.3	0.1	3.0	大様、篆書太字大郭、完品		
175	D VII 8 2 蓄銭		皇宋通寶	無背	北宋仁宗寶元元年 1039年	2.5	0.7	0.1	0.3	0.1	3.4	大様、篆書太字大郭、完品		
176	D VII 8 2 蓄銭		皇宋通寶	無背	北宋仁宗寶元元年 1039年	2.4	0.7	0.1	0.3	0.1	2.5	大様、篆書太字大郭、完品		
177	D VII 8 2 蓄銭		皇宋通寶	無背	北宋仁宗寶元元年 1039年	2.4	0.8	0.1	0.2	0.1	2.8	大様、篆書太字大郭、完品		
178	D VII 8 2 蓄銭		皇宋通寶	無背	北宋仁宗寶元元年 1039年	2.5	0.8	0.1	0.2	0.1	2.9	大様、篆書太字大郭、完品		
179	D VII 8 2 蓄銭		皇宋通寶	無背	北宋仁宗寶元元年 1039年	2.5	0.8	0.1	0.2	0.1	3.5	大様、篆書太字大郭、完品		
180	D VII 8 2 蓄銭		皇宋通寶	無背	北宋仁宗寶元元年 1039年	2.5	0.8	0.1	0.2	0.1	2.3	大様、篆書太字大郭、完品		
181	D VII 8 2 蓄銭		皇宋通寶	無背	北宋仁宗寶元元年 1039年	2.3	0.7	0.1	0.2	0.1	3.1	小様、篆書小郭、穿が星形	353	119
182	D VII 8 2 蓄銭		皇宋通寶	無背	北宋仁宗寶元元年 1039年	2.3	0.7	0.1	0.3	0.1	2.8	小様、篆書小郭、穿が星形		
183	D VII 8 2 蓄銭		皇宋通寶	無背	北宋仁宗寶元元年 1039年	2.3	0.7	0.1	0.3	(0.15) 0.2	3.8	小様、篆書小郭、穿が星形		
184	D VII 8 2 蓄銭		皇宋通寶	無背	北宋仁宗寶元元年 1039年	2.4	0.6	0.1	0.2	0.1	2.9	小様、篆書小郭、穿が星形		
185	D VII 8 2 蓄銭		皇宋通寶	無背	北宋仁宗寶元元年 1039年	2.5	0.8	0.1	0.3	0.1	3.0	大様、楷書大字大郭	353	119
186	D VII 8 2 蓄銭		皇宋通寶	無背	北宋仁宗寶元元年 1039年	2.5	0.8	0.1	0.3	0.1	3.5	大様、楷書大字大郭		
187	D VII 8 2 蓄銭		皇宋通寶	無背	北宋仁宗寶元元年 1039年	2.5	0.8	0.1	0.3	0.2	4.5	大様、楷書大字大郭		
188	D VII 8 2 蓄銭		皇宋通寶	無背	北宋仁宗寶元元年 1039年	2.5	0.7	0.1	0.4	0.1	3.1	大様、楷書小字広輪	353	119
189	D VII 8 2 蓄銭		皇宋通寶	無背	北宋仁宗寶元元年 1039年	2.5	0.7	0.1	0.3	0.1	2.8	大様、楷書小字大郭	353	119
190	D VII 8 2 蓄銭		皇宋通寶	無背	北宋仁宗寶元元年 1039年	2.4	0.8	0.1	0.2	0.1	3.3	大様、楷書小字大郭		

191	D VII 8 2 番銭		皇宋通寶	無背	北宋仁宗寶元元年 1039年	2.5	0.7	0.1	0.2	0.1	3.3	大様、楷書小字大郭		
192	D VII 8 2 番銭		皇宋通寶	無背	北宋仁宗寶元元年 1039年	2.4	0.7	0.1	0.2	0.1	2.3	大様、楷書小字大郭		
193	D VII 8 2 番銭		皇宋通寶	無背	北宋仁宗寶元元年 1039年	2.4	0.8	0.1	0.2	0.1	2.8	中様、楷書大字大郭	353	119
194	D VII 8 2 番銭		皇宋通寶	無背	北宋仁宗寶元元年 1039年	2.4	0.8	0.1	0.3	0.1	3.3	中様、楷書大字大郭		
195	D VII 8 2 番銭		皇宋通寶	無背	北宋仁宗寶元元年 1039年	(2.4)	0.8		0.3	0.1	(1.7)	中様、楷書大字大郭		
196	D VII 8 2 番銭		皇宋通寶	無背	北宋仁宗寶元元年 1039年	2.3	0.8	0.1	0.2	0.1	2.8	中様、楷書大字大郭		
197	D VII 8 2 番銭		皇宋通寶	無背	北宋仁宗寶元元年 1039年	2.5	0.7	0.1	0.2	0.1	3.3	中様、楷書小字大郭	353	119
198	D VII 8 2 番銭		皇宋通寶	無背	北宋仁宗寶元元年 1039年	2.4	0.8	0.1	0.2	0.1	2.6	中様、楷書小字大郭		
199	D VII 8 2 番銭		皇宋通寶	無背	北宋仁宗寶元元年 1039年	2.4	0.8	0.1	0.2	0.1	3.3	中様、楷書小字大郭		
200	D VII 8 2 番銭		皇宋通寶	無背	北宋仁宗寶元元年 1039年	2.4	0.7	0.1	0.3	0.1	3.6	中様、楷書小字大郭	353	119
201	D VII 8 2 番銭		皇宋通寶	無背	北宋仁宗寶元元年 1039年	2.3	0.7	0.1	0.3	0.1	3.3	中様、楷書小字小郭	353	119
202	D VII 8 2 番銭		皇宋通寶	無背	北宋仁宗寶元元年 1039年	2.3	0.7	0.1	0.3	0.1	3.1	小様、楷書小字小郭	353	119
203	D VII 8 2 番銭		皇宋通寶	無背	北宋仁宗寶元元年 1039年	2.3	0.7	0.1	0.3	0.1	2.8	小様、楷書小字小郭		119
204	D VII 8 2 番銭		皇宋通寶	無背	北宋仁宗寶元元年 1039年	2.3	0.7	0.1	0.3	0.1	2.5	小様、楷書小字小郭		
205	D VII 8 2 番銭		皇宋通寶	無背	北宋仁宗寶元元年 1039年	2.4	0.7	0.1	0.3	^(0.65) 0.1	2.0	小様、楷書小字小郭		
206	D VII 8 2 番銭		至和通寶	無背	北宋仁宗至和元年 1054年	2.5	0.7	0.1	0.3	0.1	2.5	楷書	353	
207	D VII 8 2 番銭		至和通寶	無背	北宋仁宗至和元年 1054年	2.5	0.7	0.1	0.3	0.1	3.0	楷書		
208	D VII 8 2 番銭		至和元寶	無背	北宋仁宗至和元年 1054年	2.4	0.7	0.1	0.3	0.1	3.1	楷書	353	119
209	D VII 8 2 番銭		至和元寶	無背	北宋仁宗至和元年 1054年	2.4	0.8	0.1	0.3	0.1	3.1	楷書		
210	D VII 8 2 番銭		至和元寶	無背	北宋仁宗至和元年 1054年	2.4	0.6	0.1	0.3	0.1	3.7	楷書		
211	D VII 8 2 番銭		至和元寶	無背	北宋仁宗至和元年 1054年	2.4	0.7	0.1	0.3	0.1	3.2	篆書	353	119
212	D VII 8 2 番銭		至和元寶	無背	北宋仁宗至和元年 1054年	2.3	0.7	0.1	0.2	0.1	3.5	篆書		
213	D VII 8 2 番銭		嘉祐通寶	無背	北宋仁宗嘉祐元年 1056年	2.4	0.8	0.1	0.3	0.1	2.9	楷書	353	119
214	D VII 8 2 番銭		嘉祐通寶	無背	北宋仁宗嘉祐元年 1056年	2.5	0.7	0.1	0.3	0.1	3.3	楷書		
215	D VII 8 2 番銭		嘉祐通寶	無背	北宋仁宗嘉祐元年 1056年	2.5	0.8	0.1	0.3	0.1	2.4	楷書		
216	D VII 8 2 番銭		嘉祐通寶	無背	北宋仁宗嘉祐元年 1056年	2.4	0.8	0.1	0.3	0.1	3.3	楷書		
217	D VII 8 2 番銭		嘉祐通寶	無背	北宋仁宗嘉祐元年 1056年	2.4	0.7	0.1	0.2	0.1	2.9	楷書		
218	D VII 8 2 番銭		嘉祐通寶	無背	北宋仁宗嘉祐元年 1056年	2.4	0.7	0.1	0.2	0.1	3.5	楷書		
219	D VII 8 2 番銭		嘉祐通寶	無背	北宋仁宗嘉祐元年 1056年	2.5	0.8	0.1	0.2	0.1	2.9	篆書	353	119
220	D VII 8 2 番銭		嘉祐通寶	無背	北宋仁宗嘉祐元年 1056年	2.5	0.8	0.1	0.3	0.1	2.9	篆書		
221	D VII 8 2 番銭		嘉祐通寶	無背	北宋仁宗嘉祐元年 1056年	2.5	0.8	0.1	0.2	0.1	2.6	篆書		

222	D VII 8 2 番錢		嘉祐元寶	無背	北宋仁宗嘉祐元年 1056年	2.5	0.8	0.1	0.2	0.1	3.6	大樣、楷書廣穿	353	119
223	D VII 8 2 番錢		嘉祐元寶	無背	北宋仁宗嘉祐元年 1056年	2.5	0.7	0.1	0.3	0.1	(2.4)	大樣、楷書狹穿	353	120
224	D VII 8 2 番錢		嘉祐元寶	無背	北宋仁宗嘉祐元年 1056年	2.4	0.7	0.1	0.2	0.1	3.4	中樣、楷書廣穿	353	120
225	D VII 8 2 番錢		嘉祐元寶	無背	北宋仁宗嘉祐元年 1056年	2.3	0.6	0.1	0.3	0.1	2.9	小樣、楷書狹穿	354	120
226	D VII 8 2 番錢		嘉祐元寶	無背	北宋仁宗嘉祐元年 1056年	2.5	0.8	0.1	0.2	0.1	3.4	大樣、篆書廣穿	354	120
227	D VII 8 2 番錢		嘉祐元寶	無背	北宋仁宗嘉祐元年 1056年	2.5	0.8	0.1	0.2	0.1	3.4	大樣、篆書廣穿		
228	D VII 8 2 番錢		嘉祐元寶	無背	北宋仁宗嘉祐元年 1056年	2.4	0.7	0.1	0.3	0.1	3.0	中樣、篆書狹穿	354	120
229	D VII 8 2 番錢		嘉祐元寶	無背	北宋仁宗嘉祐元年 1056年	2.5	0.6	0.1	0.3	$\frac{0.15}{0.1}$	4.1	中樣、篆書狹穿		
230	D VII 8 2 番錢		治平元寶	無背	北宋英宗治平元年 1064年	2.4	0.7	0.1	0.3	0.1	3.1	楷書	354	120
231	D VII 8 2 番錢		治平元寶	無背	北宋英宗治平元年 1064年	2.3	0.6	0.1	0.2	$\frac{0.15}{0.2}$	3.9	楷書		
232	D VII 8 2 番錢		治平元寶	無背	北宋英宗治平元年 1064年	2.5	0.7	0.1	0.2	$\frac{0.15}{0.2}$	4.1	篆書	354	120
233	D VII 8 2 番錢		治平元寶	無背	北宋英宗治平元年 1064年	2.4	0.7	0.1	0.3	0.1	3.4	篆書		
234	D VII 8 2 番錢		治平元寶	無背	北宋英宗治平元年 1064年	2.4	0.6	0.1	0.3	0.1	3.7	篆書		
235	D VII 8 2 番錢		熙寧元寶	無背	北宋真宗熙寧元年 1068年	2.4	0.8	0.1	0.3	0.1	3.0	大樣、楷書	354	120
236	D VII 8 2 番錢		熙寧元寶	無背	北宋真宗熙寧元年 1068年	2.5	0.7	0.1	0.3	0.1	3.5	大樣、楷書		
237	D VII 8 2 番錢		熙寧元寶	無背	北宋真宗熙寧元年 1068年	2.5	0.7	0.1	0.2	0.1	3.4	大樣、楷書		
238	D VII 8 2 番錢		熙寧元寶	無背	北宋真宗熙寧元年 1068年	2.5	0.7	0.1	0.2	0.1	3.7	大樣、楷書		
239	D VII 8 2 番錢		熙寧元寶	無背	北宋真宗熙寧元年 1068年	2.5	0.7	0.1	0.2	0.1	4.1	大樣、楷書		
240	D VII 8 2 番錢		熙寧元寶	無背	北宋真宗熙寧元年 1068年	2.4	0.8	0.1	0.2	0.1	3.5	中樣、楷書	354	120
241	D VII 8 2 番錢		熙寧元寶	無背	北宋真宗熙寧元年 1068年	2.4	0.8	0.1	0.2	0.1	2.6	中樣、楷書		
242	D VII 8 2 番錢		熙寧元寶	無背	北宋真宗熙寧元年 1068年	2.4	0.7	0.1	0.2	0.1	3.6	中樣、楷書		
243	D VII 8 2 番錢		熙寧元寶	無背	北宋真宗熙寧元年 1068年	2.3	0.7	0.1	0.2	0.1	2.6	中樣、楷書		
244	D VII 8 2 番錢		熙寧元寶	無背	北宋真宗熙寧元年 1068年	2.4	0.7	0.1	0.2	0.1	2.9	中樣、楷書		
245	D VII 8 2 番錢		熙寧元寶	無背	北宋真宗熙寧元年 1068年	2.4	0.7	0.1	0.2	0.1	3.5	中樣、楷書		
246	D VII 8 2 番錢		熙寧元寶	無背	北宋真宗熙寧元年 1068年	2.5	0.7	0.1	0.2	0.1	3.5	中樣、楷書		
247	D VII 8 2 番錢		熙寧元寶	無背	北宋真宗熙寧元年 1068年	2.4	0.7	0.1	0.3	0.2	4.5	小樣、楷書	354	120
248	D VII 8 2 番錢		熙寧元寶	無背	北宋真宗熙寧元年 1068年	2.4	0.7	0.1	0.2	0.1	3.4	小樣、楷書		
249	D VII 8 2 番錢		熙寧元寶	無背	北宋真宗熙寧元年 1068年	2.4	0.7	0.1	0.3	0.1	3.4	小樣、楷書		
250	D VII 8 2 番錢		熙寧元寶	無背	北宋真宗熙寧元年 1068年	2.4	0.6	0.1	0.2	0.1	2.9	小樣、楷書		
251	D VII 8 2 番錢		熙寧元寶	無背	北宋真宗熙寧元年 1068年	2.3	0.7	0.1	0.3	0.1	3.4	小樣、楷書		
252	D VII 8 2 番錢		熙寧元寶	無背	北宋真宗熙寧元年 1068年	2.4	0.8	0.1	0.2	0.1	2.9	小樣、楷書		

253	DVII 8 2 番銭	熙寧元寶	無背	北宋真宗熙寧元年 1068年	2.4	0.7	0.1	0.2	0.1	2.8	小様、篆書1類	354	120
254	DVII 8 2 番銭	熙寧元寶	無背	北宋真宗熙寧元年 1068年	2.4	0.7	0.1	0.2	0.1	2.5	小様、篆書1類		
255	DVII 8 2 番銭	熙寧元寶	無背	北宋真宗熙寧元年 1068年	2.4	0.7	0.1	0.2	0.1	2.6	小様、篆書1類		
256	DVII 8 2 番銭	熙寧元寶	無背	北宋真宗熙寧元年 1068年	2.4	0.7	0.1	0.2	0.1	3.1	小様、篆書1類		
257	DVII 8 2 番銭	熙寧元寶	無背	北宋真宗熙寧元年 1068年	2.4	0.6	0.1	0.3	0.1	3.2	小様、篆書1類		
258	DVII 8 2 番銭	熙寧元寶	無背	北宋真宗熙寧元年 1068年	2.3	0.7	0.1	0.3	0.1	2.5	小様、篆書2類	354	120
259	DVII 8 2 番銭	熙寧元寶	無背	北宋真宗熙寧元年 1068年	2.4	0.7	0.1	0.2	0.1	3.6	小様、篆書2類		
260	DVII 8 2 番銭	熙寧元寶	無背	北宋真宗熙寧元年 1068年	2.4	0.7	0.1	0.2	0.1	3.3	小様、篆書2類		
261	DVII 8 2 番銭	熙寧元寶	無背	北宋真宗熙寧元年 1068年	2.4	0.8	0.1	0.3	0.1	3.7	小様、篆書2類		
262	DVII 8 2 番銭	熙寧元寶	無背	北宋真宗熙寧元年 1068年	2.4	0.7	0.1	0.2	0.1	2.6	小様、篆書2類		
263	DVII 8 2 番銭	熙寧元寶	無背	北宋真宗熙寧元年 1068年	2.4	0.7	0.1	0.2	0.1	3.1	小様、篆書2類		
264	DVII 8 2 番銭	熙寧元寶	無背	北宋真宗熙寧元年 1068年	2.5	0.7	0.1	0.2	0.1	3.6	大様、篆書力ニ熙寧	354	120
265	DVII 8 2 番銭	熙寧元寶	無背	北宋真宗熙寧元年 1068年	2.5	0.7	0.1	0.2	0.1	3.5	大様、篆書力ニ熙寧	354	120
266	DVII 8 2 番銭	熙寧元寶	無背	北宋真宗熙寧元年 1068年	2.5	0.7	0.1	0.2	0.1	3.0	大様、篆書力ニ熙寧		
267	DVII 8 2 番銭	熙寧元寶	無背	北宋真宗熙寧元年 1068年	2.4	0.7	0.1	0.2	0.1	3.1	大様、篆書力ニ熙寧		
268	DVII 8 2 番銭	熙寧元寶	無背	北宋真宗熙寧元年 1068年	2.4	0.7	0.1	0.2	0.1	2.7	大様、篆書力ニ熙寧		
269	DVII 8 2 番銭	熙寧元寶	無背	北宋真宗熙寧元年 1068年	2.5	0.7	0.1	0.2	0.1	2.5	大様、篆書力ニ熙寧		
270	DVII 8 2 番銭	熙寧元寶	無背	北宋真宗熙寧元年 1068年	2.4	0.7	0.1	0.2	0.1	3.2	大様、篆書力ニ熙寧		
271	DVII 8 2 番銭	熙寧元寶	無背	北宋真宗熙寧元年 1068年	2.4	0.8	0.1	0.2	0.1	3.1	大様、篆書力ニ熙寧		
272	DVII 8 2 番銭	熙寧元寶	無背	北宋真宗熙寧元年 1068年	2.5	0.7	0.1	0.2	0.1	3.8	大様、篆書力ニ熙寧		
273	DVII 8 2 番銭	元豐通寶	無背	北宋神宗元豐元年 1078年	2.4	0.6	0.1	0.3	0.1	3.9	草書	354	120
274	DVII 8 2 番銭	元豐通寶	無背	北宋神宗元豐元年 1078年	2.4	0.6	0.1	0.3	0.2	4.5	草書	354	120
275	DVII 8 2 番銭	元豐通寶	無背	北宋神宗元豐元年 1078年	2.4	0.6	0.1	0.3	0.1	3.7	草書		
276	DVII 8 2 番銭	元豐通寶	無背	北宋神宗元豐元年 1078年	2.4	0.7	0.1	0.3	0.1	3.8	草書		
277	DVII 8 2 番銭	元豐通寶	無背	北宋神宗元豐元年 1078年	2.3	0.6	0.1	0.3	0.1	2.3	草書		
278	DVII 8 2 番銭	元豐通寶	無背	北宋神宗元豐元年 1078年	2.4	0.6	0.1	0.3	0.1	3.5	草書		
279	DVII 8 2 番銭	元豐通寶	無背	北宋神宗元豐元年 1078年	2.4	0.8	0.1	0.3	0.1	3.1	草書		
280	DVII 8 2 番銭	元豐通寶	無背	北宋神宗元豐元年 1078年	2.4	0.7	0.1	0.3	0.1	3.4	草書		
281	DVII 8 2 番銭	元豐通寶	無背	北宋神宗元豐元年 1078年	2.4	0.6	0.1	0.3	0.1	3.1	草書		
282	DVII 8 2 番銭	元豐通寶	無背	北宋神宗元豐元年 1078年	2.4	0.7	0.1	0.3	0.1	2.8	草書		
283	DVII 8 2 番銭	元豐通寶	無背	北宋神宗元豐元年 1078年	2.4	0.7	0.1	0.2	0.1	2.7	草書		

284	D VII 8 2 番銭	元豊通寶	無背	北宋神宗元豊元年 1078年	2.5	0.7	0.1	0.3	0.1	3.3	草書		
285	D VII 8 2 番銭	元豊通寶	無背	北宋神宗元豊元年 1078年	2.4	0.6	0.1	0.3	0.1	3.5	草書		
286	D VII 8 2 番銭	元豊通寶	無背	北宋神宗元豊元年 1078年	2.4	0.6	0.1	0.3	0.1	3.0	草書		
287	D VII 8 2 番銭	元豊通寶	無背	北宋神宗元豊元年 1078年	2.4	0.7	0.1	0.3	0.1	(2.2)	草書		
288	D VII 8 2 番銭	元豊通寶	無背	北宋神宗元豊元年 1078年	2.3	0.6	0.1	0.3	0.1	2.4	草書		
289	D VII 8 2 番銭	元豊通寶	無背	北宋神宗元豊元年 1078年	2.4	0.6	0.1	0.3	0.1	3.1	草書		
290	D VII 8 2 番銭	元豊通寶	無背	北宋神宗元豊元年 1078年	2.4	0.6	0.1	0.3	0.1	3.9	草書		
291	D VII 8 2 番銭	元豊通寶	無背	北宋神宗元豊元年 1078年	2.4	0.7	0.1	0.3	0.1	3.2	草書		
292	D VII 8 2 番銭	元豊通寶	無背	北宋神宗元豊元年 1078年	2.5	0.7	0.1	0.2	0.1	3.1	草書		
293	D VII 8 2 番銭	元豊通寶	無背	北宋神宗元豊元年 1078年	2.5	0.7	0.1	0.3	0.1	3.6	草書		
294	D VII 8 2 番銭	元豊通寶	無背	北宋神宗元豊元年 1078年	2.4	0.7	0.1	0.3	0.1	3.3	草書		
295	D VII 8 2 番銭	元豊通寶	無背	北宋神宗元豊元年 1078年	2.5	0.7	0.1	0.3	0.1	3.2	草書		
296	D VII 8 2 番銭	元豊通寶	無背	北宋神宗元豊元年 1078年	2.4	0.7	0.1	0.3	0.1	3.5	草書		
297	D VII 8 2 番銭	元豊通寶	無背	北宋神宗元豊元年 1078年	2.4	0.7	0.1	0.2	0.1	2.7	草書		
298	D VII 8 2 番銭	元豊通寶	無背	北宋神宗元豊元年 1078年	2.4	0.7	0.1	0.3	0.1	2.8	草書		
299	D VII 8 2 番銭	元豊通寶	無背	北宋神宗元豊元年 1078年	2.5	0.7	0.1	0.3	0.1	3.3	草書		
300	D VII 8 2 番銭	元豊通寶	無背	北宋神宗元豊元年 1078年	2.5	0.7	0.1	0.3	0.1	3.2	草書		
301	D VII 8 2 番銭	元豊通寶	無背	北宋神宗元豊元年 1078年	2.5	0.7	0.1	0.3	0.1	3.5	草書		
302	D VII 8 2 番銭	元豊通寶	無背	北宋神宗元豊元年 1078年	2.5	0.7	0.1	0.2	0.1	3.4	草書		
303	D VII 8 2 番銭	元豊通寶	無背	北宋神宗元豊元年 1078年	2.5	0.7	0.1	0.3	(0.15) 0.1	3.9	篆書	354	120
304	D VII 8 2 番銭	元豊通寶	無背	北宋神宗元豊元年 1078年	2.5	0.7	0.1	0.3	0.1	3.2	篆書	354	120
305	D VII 8 2 番銭	元豊通寶	無背	北宋神宗元豊元年 1078年	2.5	0.7	0.1	0.2	0.1	3.5	篆書		
306	D VII 8 2 番銭	元豊通寶	無背	北宋神宗元豊元年 1078年	2.5	0.7	(0.05) 0.1	0.2	0.1	3.2	篆書		
307	D VII 8 2 番銭	元豊通寶	無背	北宋神宗元豊元年 1078年	2.4	0.6	0.1	0.3	0.1	3.5	篆書		
308	D VII 8 2 番銭	元豊通寶	無背	北宋神宗元豊元年 1078年	2.5	0.7	0.1	0.2	0.1	3.0	篆書		
309	D VII 8 2 番銭	元豊通寶	無背	北宋神宗元豊元年 1078年	2.4	0.7	0.1	0.3	0.1	3.7	篆書		
310	D VII 8 2 番銭	元豊通寶	無背	北宋神宗元豊元年 1078年	2.4	0.8	0.1	0.2	0.1	3.1	篆書		
311	D VII 8 2 番銭	元豊通寶	無背	北宋神宗元豊元年 1078年	2.4	0.7	0.1	0.3	0.1	3.3	篆書		
312	D VII 8 2 番銭	元豊通寶	無背	北宋神宗元豊元年 1078年	2.4	0.7	0.1	0.3	0.1	3.6	篆書		
313	D VII 8 2 番銭	元豊通寶	無背	北宋神宗元豊元年 1078年	2.4	0.7	0.1	0.3	0.1	3.2	篆書		
314	D VII 8 2 番銭	元豊通寶	無背	北宋神宗元豊元年 1078年	2.4	0.7	0.1	0.3	0.1	3.1	篆書		

315	D VII 8 2 番銭		元豊通寶	無背	北宋神宗元豐元年 1078年	2.4	0.7	0.1	0.3	0.1	3.6	篆書		
316	D VII 8 2 番銭		元豊通寶	無背	北宋神宗元豐元年 1078年	2.5	0.7	0.1	0.3	0.1	3.0	篆書		
317	D VII 8 2 番銭		元豊通寶	無背	北宋神宗元豐元年 1078年	2.5	0.7	0.1	0.4	0.1	2.7	篆書		
318	D VII 8 2 番銭		元豊通寶	無背	北宋神宗元豐元年 1078年	2.4	0.7	0.1	0.3	0.1	3.4	篆書		
319	D VII 8 2 番銭		元豊通寶	無背	北宋神宗元豐元年 1078年	2.5	0.7	0.1	0.3	0.1	2.9	篆書		
320	D VII 8 2 番銭		元祐通寶	無背	北宋哲宗元祐年間 1086~1093年	2.5	0.7	0.1	0.2	0.1	3.4	草書	354	120
321	D VII 8 2 番銭		元祐通寶	無背	北宋哲宗元祐年間 1086~1093年	2.4	0.6	0.1	0.3	0.1	2.9	草書	354	120
322	D VII 8 2 番銭		元祐通寶	無背	北宋哲宗元祐年間 1086~1093年	2.5	0.7	0.1	0.3	0.1	2.6	草書		
323	D VII 8 2 番銭		元祐通寶	無背	北宋哲宗元祐年間 1086~1093年	2.5	0.7	0.1	0.3	0.1	3.2	草書		
324	D VII 8 2 番銭		元祐通寶	無背	北宋哲宗元祐年間 1086~1093年	2.4	0.7	0.1	0.2	0.1	3.3	草書	354	121
325	D VII 8 2 番銭		元祐通寶	無背	北宋哲宗元祐年間 1086~1093年	2.4	0.7	0.1	0.2	0.1	2.9	草書		
326	D VII 8 2 番銭		元祐通寶	無背	北宋哲宗元祐年間 1086~1093年	2.4	0.7	0.1	0.2	0.1	2.8	草書		
327	D VII 8 2 番銭		元祐通寶	無背	北宋哲宗元祐年間 1086~1093年	2.4	0.7	0.1	0.2	0.1	2.8	草書		
328	D VII 8 2 番銭		元祐通寶	無背	北宋哲宗元祐年間 1086~1093年	2.4	0.8	0.1	0.2	0.1	3.5	草書		
329	D VII 8 2 番銭		元祐通寶	無背	北宋哲宗元祐年間 1086~1093年	2.4	0.7	0.1	0.2	0.1	2.9	草書		
330	D VII 8 2 番銭		元祐通寶	無背	北宋哲宗元祐年間 1086~1093年	2.4	0.7	0.1	0.2	0.1	3.0	草書		
331	D VII 8 2 番銭		元祐通寶	無背	北宋哲宗元祐年間 1086~1093年	2.3	0.7	0.1	0.3	0.1	2.9	草書		
332	D VII 8 2 番銭		元祐通寶	無背	北宋哲宗元祐年間 1086~1093年	2.5	0.7	0.1	0.2	0.1	3.4	草書		
333	D VII 8 2 番銭		元祐通寶	無背	北宋哲宗元祐年間 1086~1093年	2.3	0.7	0.1	0.2	0.1	2.6	草書		
334	D VII 8 2 番銭		元祐通寶	無背	北宋哲宗元祐年間 1086~1093年	2.4	0.7	0.1	0.2	0.1	3.4	草書		
335	D VII 8 2 番銭		元祐通寶	無背	北宋哲宗元祐年間 1086~1093年	2.4	0.7	0.1	0.2	0.1	3.3	草書		
336	D VII 8 2 番銭		元祐通寶	無背	北宋哲宗元祐年間 1086~1093年	2.4	0.7	0.1	0.2	0.1	2.2	草書		
337	D VII 8 2 番銭		元祐通寶	無背	北宋哲宗元祐年間 1086~1093年	2.5	0.7	0.1	0.2	0.1	3.0	草書		
338	D VII 8 2 番銭		元祐通寶	無背	北宋哲宗元祐年間 1086~1093年	2.5	0.7	0.1	0.3	0.1	2.9	篆書	354	
339	D VII 8 2 番銭		元祐通寶	無背	北宋哲宗元祐年間 1086~1093年	2.4	0.8	0.1	0.2	0.1	3.5	篆書	354	121
340	D VII 8 2 番銭		元祐通寶	無背	北宋哲宗元祐年間 1086~1093年	2.5	0.7	0.1	0.2	0.1	3.3	篆書	354	121
341	D VII 8 2 番銭		元祐通寶	無背	北宋哲宗元祐年間 1086~1093年	2.5	0.7	0.1	0.3	0.1	3.5	篆書		
342	D VII 8 2 番銭		元祐通寶	無背	北宋哲宗元祐年間 1086~1093年	2.5	0.7	0.1	0.3	(0.15) 0.1	4.6	篆書		
343	D VII 8 2 番銭		元祐通寶	無背	北宋哲宗元祐年間 1086~1093年	2.5	0.7	0.1	0.2	0.1	3.2	篆書		
344	D VII 8 2 番銭		元祐通寶	無背	北宋哲宗元祐年間 1086~1093年	2.5	0.7	0.1	0.2	0.1	3.5	篆書		
345	D VII 8 2 番銭		元祐通寶	無背	北宋哲宗元祐年間 1086~1093年	2.4	0.7	0.1	0.2	0.1	2.7	篆書		

346	D VII 8 2 番銭	元祐通寶	無背	北宋哲宗元祐年間 1086~1093年	2.4	0.7	0.1	0.2	0.1	3.1	篆書		
347	D VII 8 2 番銭	元祐通寶	無背	北宋哲宗元祐年間 1086~1093年	2.5	0.7	0.1	0.2	0.1	3.6	篆書		
348	D VII 8 2 番銭	元祐通寶	無背	北宋哲宗元祐年間 1086~1093年	2.5	0.8	0.1	0.2	0.1	3.5	篆書		
349	D VII 8 2 番銭	元祐通寶	無背	北宋哲宗元祐年間 1086~1093年	2.5	0.7	0.1	0.2	0.2	4.3	篆書		
350	D VII 8 2 番銭	元祐通寶	無背	北宋哲宗元祐年間 1086~1093年	2.4	0.7	0.1	0.2	0.1	3.5	篆書		
351	D VII 8 2 番銭	元祐通寶	無背	北宋哲宗元祐年間 1086~1093年	2.4	0.8	0.1	0.2	0.1	3.0	篆書		
352	D VII 8 2 番銭	元祐通寶	無背	北宋哲宗元祐年間 1086~1093年	2.5	0.7	0.1	0.2	0.1	2.6	篆書		
353	D VII 8 2 番銭	元祐通寶	無背	北宋哲宗元祐年間 1086~1093年	2.5	0.7	0.1	0.2	0.1	2.9	篆書		
354	D VII 8 2 番銭	元祐通寶	無背	北宋哲宗元祐年間 1086~1093年	2.5	0.6	0.1	0.5	0.1	3.7	篆書		
355	D VII 8 2 番銭	元祐通寶	無背	北宋哲宗元祐年間 1086~1093年	2.5	0.6	0.1	0.4	0.2	4.9	篆書		
356	D VII 8 2 番銭	元祐通寶	無背	北宋哲宗元祐年間 1086~1093年	2.4	0.6	0.1	0.4	0.1	2.8	篆書		
357	D VII 8 2 番銭	元祐通寶	無背	北宋哲宗元祐年間 1086~1093年	2.5	0.7	0.1	0.4	0.1	3.4	篆書		
358	D VII 8 2 番銭	元祐通寶	無背	北宋哲宗元祐年間 1086~1093年	2.5	0.6	0.1	0.4	0.1	3.4	篆書		
359	D VII 8 2 番銭	紹聖元寶	無背	北宋哲宗紹聖年間 1094~1097年	2.4	0.6	0.1	0.4	0.1	3.2	中樣、草書小字狹穿狹緣	354	121
360	D VII 8 2 番銭	紹聖元寶	一	北宋哲宗紹聖年間 1094~1097年	2.5	0.8	0.1	0.3	0.1	3.5	大樣、草書大字凸穿狹緣背月	354	121
361	D VII 8 2 番銭	紹聖元寶	無背	北宋哲宗紹聖年間 1094~1097年	2.5	0.6	0.1	0.4	(0.05) 0.1	4.1	大樣、篆書狹穿狹緣	354	121
362	D VII 8 2 番銭	紹聖元寶	無背	北宋哲宗紹聖年間 1094~1097年	2.4	0.6	0.1	0.3	0.1	2.9	小樣、篆書狹穿狹緣	354	121
363	D VII 8 2 番銭	紹聖元寶	無背	北宋哲宗紹聖年間 1094~1097年	2.4	0.7	0.1	0.2	0.1	3.5	小樣、篆書狹穿狹緣		
364	D VII 8 2 番銭	紹聖元寶	無背	北宋哲宗紹聖年間 1094~1097年	2.4	0.7	0.1	0.2	0.1	3.9	小樣、篆書狹穿狹緣		
365	D VII 8 2 番銭	紹聖元寶	無背	北宋哲宗紹聖年間 1094~1097年	2.4	0.7	0.1	0.3	0.1	3.3	小樣、篆書狹穿狹緣		
366	D VII 8 2 番銭	紹聖元寶	無背	北宋哲宗紹聖年間 1094~1097年	2.4	0.7	0.1	0.2	0.1	3.2	小樣、篆書狹穿狹緣		
367	D VII 8 2 番銭	紹聖元寶	無背	北宋哲宗紹聖年間 1094~1097年	2.4	0.7	0.1	0.3	0.1	3.0	小樣、篆書狹穿狹緣		
368	D VII 8 2 番銭	元符通寶	無背	北宋哲宗元符元年 1098年	2.4	0.6	0.1	0.3	0.1	3.3	大樣、篆書狹穿	354	121
369	D VII 8 2 番銭	元符通寶	無背	北宋哲宗元符元年 1098年	2.4	0.7	0.1	0.3	0.1	3.4	小樣、篆書狹穿	354	121
370	D VII 8 2 番銭	元符通寶	無背	北宋哲宗元符元年 1098年	2.4	0.7	0.1	0.2	0.1	3.5	小樣、草書凸穿	355	121
371	D VII 8 2 番銭	元符通寶	無背	北宋哲宗元符元年 1098年	2.4	0.7	0.1	0.2	0.1	3.3	小樣、草書凸穿		
372	D VII 8 2 番銭	元符通寶	無背	北宋哲宗元符元年 1098年	2.4	0.7	0.1	0.2	0.1	2.6	小樣、草書凸穿		
373	D VII 8 2 番銭	元符通寶	無背	北宋哲宗元符元年 1098年	2.4	0.7	0.1	0.3	0.1	3.5	小樣、草書狹穿	355	121
374	D VII 8 2 番銭	元符通寶	無背	北宋哲宗元符元年 1098年	2.4	0.7	0.1	0.3	0.1	1.9	小樣、草書狹穿		
375	D VII 8 2 番銭	元符通寶	無背	北宋哲宗元符元年 1098年	2.4	0.8	0.1	0.2	0.1	3.7	小樣、草書狹穿、穿上加工痕		
376	D VII 8 2 番銭	元符通寶	無背	北宋哲宗元符元年 1098年	2.4	0.7	0.1	0.2	0.1	(1.6)	小樣、草書狹穿		

377	D VII 8 2 蓄錢	聖宋元寶	無背	北宋徽宗建中靖國元年	2.4	0.7	0.1	0.3	0.1	3.3	草書	355	121
378	D VII 8 2 蓄錢	聖宋元寶	無背	北宋徽宗建中靖國元年	2.5	0.6	0.1	0.3	0.1	3.0	草書	355	121
379	D VII 8 2 蓄錢	聖宋元寶	無背	北宋徽宗建中靖國元年	2.4	0.6	0.1	0.3	0.1	2.5	草書		
380	D VII 8 2 蓄錢	聖宋元寶	無背	北宋徽宗建中靖國元年	2.4	0.7	0.1	0.3	0.1	2.6	草書		
381	D VII 8 2 蓄錢	聖宋元寶	無背	北宋徽宗建中靖國元年	2.4	0.7	0.1	0.3	0.1	3.0	草書		
382	D VII 8 2 蓄錢	聖宋元寶	無背	北宋徽宗建中靖國元年	2.4	0.8	0.1	0.2	0.1	3.4	草書		
383	D VII 8 2 蓄錢	聖宋元寶	無背	北宋徽宗建中靖國元年	2.4	0.7	0.1	0.2	0.1	2.7	草書		
384	D VII 8 2 蓄錢	聖宋元寶	無背	北宋徽宗建中靖國元年	2.4	0.6	0.1	0.3	0.1	(2.3)	草書		
385	D VII 8 2 蓄錢	聖宋元寶	無背	北宋徽宗建中靖國元年	2.4	0.7	0.1	0.2	0.1	3.1	大樣、篆書廣穿	355	121
386	D VII 8 2 蓄錢	聖宋元寶	無背	北宋徽宗建中靖國元年	2.4	0.7	0.1	0.3	0.1	2.9	大樣、篆書狹穿	355	121
387	D VII 8 2 蓄錢	聖宋元寶	無背	北宋徽宗建中靖國元年	2.4	0.7	0.1	0.3	0.1	2.5	小樣、篆書狹穿	355	121
388	D VII 8 2 蓄錢	聖宋元寶	無背	北宋徽宗建中靖國元年	2.4	0.6	0.1	0.3	0.1	2.8	小樣、篆書狹穿		121
389	D VII 8 2 蓄錢	大觀通寶	無背	北宋徽宗建中靖國元年	2.5	0.7	0.1	0.1	0.1	3.4	楷書	355	
390	D VII 8 2 蓄錢	大觀通寶	無背	北宋徽宗建中靖國元年	2.5	0.7	0.1	0.1	0.1	3.2	楷書		
391	D VII 8 2 蓄錢	大觀通寶	無背	北宋徽宗建中靖國元年	2.4	0.7	0.1	0.2	0.1	3.4	楷書		
392	D VII 8 2 蓄錢	政和通寶	無背	北宋徽宗政和元年	2.5	0.6	0.1	0.3	0.1	3.4	大樣、楷書廣穿廣輪	355	121
393	D VII 8 2 蓄錢	政和通寶	無背	北宋徽宗政和元年	2.3	0.7	(0.05) 0.1	0.2	0.1	2.5	大樣、楷書廣穿廣輪		
394	D VII 8 2 蓄錢	政和通寶	無背	北宋徽宗政和元年	2.5	0.7	0.1	0.2	0.1	3.3	大樣、楷書廣穿廣輪		
395	D VII 8 2 蓄錢	政和通寶	無背	北宋徽宗政和元年	2.5	0.7	0.1	0.2	0.1	3.8	小樣、楷書廣穿狹輪	355	121
396	D VII 8 2 蓄錢	政和通寶	無背	北宋徽宗政和元年	2.5	0.7	0.1	0.2	0.1	3.2	小樣、楷書廣穿狹輪		
397	D VII 8 2 蓄錢	政和通寶	無背	北宋徽宗政和元年	2.5	0.7	0.1	0.2	0.1	2.5	小樣、楷書廣穿狹緣		
398	D VII 8 2 蓄錢	政和通寶	無背	北宋徽宗政和元年	2.5	0.7	0.1	0.2	0.1	3.7	小樣、楷書廣穿狹緣		
399	D VII 8 2 蓄錢	政和通寶	無背	北宋徽宗政和元年	2.5	0.7	0.1	0.2	0.1	3.2	小樣、楷書廣穿狹緣		
400	D VII 8 2 蓄錢	政和通寶	無背	北宋徽宗政和元年	2.4	0.5	0.1	0.2	0.2	4.1	小樣、楷書狹穿狹緣	355	122
401	D VII 8 2 蓄錢	政和通寶	無背	北宋徽宗政和元年	2.4	0.6	0.1	0.2	0.1	3.1	小樣、楷書狹穿狹緣		
402	D VII 8 2 蓄錢	政和通寶	無背	北宋徽宗政和元年	2.4	0.6	0.1	0.2	0.1	2.2	小樣、楷書狹穿狹緣		
403	D VII 8 2 蓄錢	政和通寶	無背	北宋徽宗政和元年	2.3	0.6	0.1	0.2	0.1	2.1	小樣、楷書狹穿狹緣		
404	D VII 8 2 蓄錢	政和通寶	無背	北宋徽宗政和元年	2.5	0.6	0.1	0.2	0.1	3.2	小樣、楷書狹穿狹緣		
405	D VII 8 2 蓄錢	政和通寶	無背	北宋徽宗政和元年	2.5	0.8	0.1	0.2	0.1	2.9	小樣、楷書廣穿狹緣	355	122
406	D VII 8 2 蓄錢	政和通寶	無背	北宋徽宗政和元年	2.5	0.7	0.1	0.2	0.1	3.6	大樣、篆書大字廣穿	355	122
407	D VII 8 2 蓄錢	政和通寶	無背	北宋徽宗政和元年	2.5	0.7	0.1	0.2	0.1	2.9	大樣、篆書大字廣穿		

408	D VII 8 2 番銭	政和通寶	無背	北宋徽宗政和元年 1111年	2.4	0.7	0.1	0.2	0.1	2.9	大樣、篆書大字広穿		
409	D VII 8 2 番銭	政和通寶	無背	北宋徽宗政和元年 1111年	2.4	0.7	0.1	0.2	0.1	2.9	小樣、篆書広穿		
410	D VII 8 2 番銭	政和通寶	無背	北宋徽宗政和元年 1111年	2.4	0.7	0.1	0.2	0.1	3.4	小樣、篆書広穿	355	122
411	D VII 8 2 番銭	政和通寶	無背	北宋徽宗政和元年 1111年	2.5	0.7	0.1	0.2	0.1	3.6	小樣、篆書広穿		122
412	D VII 8 2 番銭	政和通寶	無背	北宋徽宗政和元年 1111年	2.5	0.7	0.1	0.2	0.1	3.0	小樣、篆書広穿		
413	D VII 8 2 番銭	政和通寶	無背	北宋徽宗政和元年 1111年	2.5	0.7	0.1	0.2	0.1	3.0	小樣、篆書広穿		
414	D VII 8 2 番銭	政和通寶	無背	北宋徽宗政和元年 1111年	2.4	0.7	0.1	0.2	0.1	3.0	小樣、篆書広穿		
415	D VII 8 2 番銭	政和通寶	無背	北宋徽宗政和元年 1111年	2.4	0.6	0.1	0.2	0.1	2.9	小樣、篆書狭穿	355	
416	D VII 8 2 番銭	政和通寶	無背	北宋徽宗政和元年 1111年	2.4	0.6	0.1	0.2	0.1	3.0	小樣、篆書狭穿		
417	D VII 8 2 番銭	宣和通寶	無背	北宋徽宗宣和元年 1119年	2.5	0.7	0.1	0.2	0.1	3.3	篆書	355	122
418	D VII 8 2 番銭	正隆元寶	無背	金完顏亮正隆元年 1156年	2.5	0.6	0.1	0.2	0.1	2.8	楷書	355	122
419	D VII 8 2 番銭	淳熙元寶	九	南宋孝宗淳熙九年 1182年	2.3	0.7	0.1	0.3	0.1	2.9	楷書	355	122
420	D VII 8 2 番銭	淳熙元寶	十	南宋孝宗淳熙十年 1183年	2.4	0.7	0.1	0.3	0.1	2.9	楷書	355	122
421	D VII 8 2 番銭	淳熙元寶	十五	南宋孝宗淳熙十五年 1188年	2.4	0.7	0.1	0.2	(0.15) 0.1	3.5	楷書	355	122
422	D VII 8 2 番銭	紹熙元寶	二	南宋光宗紹熙二年 1191年	2.3	0.7	0.1	0.1	0.1	2.7	楷書	355	122
423	D VII 8 2 番銭	紹熙元寶	四	南宋光宗紹熙四年 1193年	2.4	0.7	0.1	0.2	0.1	2.3	楷書	355	122
424	D VII 8 2 番銭	紹熙元寶	五	南宋光宗紹熙五年 1194年	2.3	0.7	0.1	0.2	0.1	3.0	楷書	355	122
425	D VII 8 2 番銭	慶元通寶	五	南宋寧宗慶元五年 1199年	2.4	0.7	0.1	0.2	0.1	3.2	楷書	355	122
426	D VII 8 2 番銭	慶元通寶	六	南宋寧宗慶元六年 1200年	2.4	0.7	0.1	0.2	0.1	2.9	楷書	355	122
427	D VII 8 2 番銭	嘉泰通寶	二	南宋寧宗嘉泰二年 1202年	2.4	0.8	0.1	0.2	0.1	2.1	楷書	355	122
428	D VII 8 2 番銭	嘉定通寶	一	南宋寧宗嘉定元年 1208年	2.3	0.7	0.1	0.2	0.1	2.1	楷書	355	122
429	D VII 8 2 番銭	紹定通寶	元	南宋理宗紹定元年 1228年	2.4	0.7	0.1	0.2	0.1	2.7	355		122
430	D VII 8 2 番銭	大中通寶	無背	明太祖元至正二年 1361年	2.3	0.6	0.1	0.2	0.1	2.8	楷書	356	122
431	D VII 8 2 番銭	洪武通寶	浙	明太祖洪武元年 1368年	2.5	0.6	0.1	0.2	(0.15) 0.1	3.6	楷書、大樣背浙広穿	356	122
432	D VII 8 2 番銭	洪武通寶	浙	明太祖洪武元年 1368年	2.5	0.6	0.1	0.2	0.1	3.4	楷書、大樣背浙広穿	356	123
433	D VII 8 2 番銭	洪武通寶	浙	明太祖洪武元年 1368年	2.4	0.6	0.1	0.2	0.1	2.7	楷書、大樣背浙広穿		
434	D VII 8 2 番銭	洪武通寶	浙	明太祖洪武元年 1368年	2.5	0.6	0.1	0.2	0.1	2.8	楷書、大樣背浙広穿		
435	D VII 8 2 番銭	洪武通寶	無背	明太祖洪武元年 1368年	2.4	0.6	0.1	0.2	(0.15) 0.2	4.1	楷書、大樣無背広穿	356	123
436	D VII 8 2 番銭	洪武通寶	一錢	明太祖洪武元年 1368年	2.3	0.6	0.1	0.3	0.2	4.3	楷書、中樣背一錢広穿	356	123
437	D VII 8 2 番銭	洪武通寶	一錢	明太祖洪武元年 1368年	2.3	0.6	0.1	0.2	0.1	3.2	楷書、中樣背一錢広穿		
438	D VII 8 2 番銭	洪武通寶	無背	明太祖洪武元年 1368年	2.3	0.6	0.1	0.3	0.1	3.9	楷書、中樣無背広穿	356	123

439	D VII 8 2 番銭		洪武通寶	無背	明太祖洪武元年 1368年	2.3	0.6	0.1	0.2	0.1	3.4	楷書、中樣無背広穿	356	123
440	D VII 8 2 番銭		洪武通寶	無背	明太祖洪武元年 1368年	2.3	0.6	0.1	0.2	0.1	3.4	楷書、中樣無背広穿		
441	D VII 8 2 番銭		洪武通寶	無背	明太祖洪武元年 1368年	2.3	0.6	0.1	0.2	0.1	2.9	楷書、中樣無背広穿		
442	D VII 8 2 番銭		洪武通寶	無背	明太祖洪武元年 1368年	2.3	0.6	0.1	0.2	0.1	3.7	楷書、中樣無背広穿		
443	D VII 8 2 番銭		洪武通寶	無背	明太祖洪武元年 1368年	2.3	0.6	0.1	0.2	0.1	3.2	楷書、中樣無背広穿		
444	D VII 8 2 番銭		洪武通寶	無背	明太祖洪武元年 1368年	2.4	0.6	0.1	0.2	0.1	3.4	楷書、中樣無背広穿		
445	D VII 8 2 番銭		洪武通寶	無背	明太祖洪武元年 1368年	2.3	0.6	0.1	0.2	0.1	3.6	楷書、中樣無背広穿		
446	D VII 8 2 番銭		洪武通寶	無背	明太祖洪武元年 1368年	2.4	0.6	0.1	0.2	0.1	3.7	楷書、中樣無背広穿		
447	D VII 8 2 番銭		洪武通寶	無背	明太祖洪武元年 1368年	2.4	0.6	0.1	0.2	0.1	3.4	楷書、中樣無背広穿		
448	D VII 8 2 番銭		洪武通寶	無背	明太祖洪武元年 1368年	2.4	0.6	0.1	0.2	0.1	3.3	楷書、中樣無背広穿		
449	D VII 8 2 番銭		洪武通寶	無背	明太祖洪武元年 1368年	2.4	0.6	0.1	0.2	0.1	3.1	楷書、中樣無背広穿		
450	D VII 8 2 番銭		洪武通寶	無背	明太祖洪武元年 1368年	2.3	0.6	0.1	0.2	0.1	3.1	楷書、中樣無背広穿		
451	D VII 8 2 番銭		洪武通寶	無背	明太祖洪武元年 1368年	2.4	0.6	0.1	0.2	0.1	3.1	楷書、中樣無背広穿		
452	D VII 8 2 番銭		洪武通寶	無背	明太祖洪武元年 1368年	2.3	0.7	0.1	0.2	0.1	2.9	楷書、中樣無背広穿		
453	D VII 8 2 番銭		洪武通寶	無背	明太祖洪武元年 1368年	2.3	0.6	0.1	0.2	0.1	3.2	楷書、中樣無背広穿		
454	D VII 8 2 番銭		洪武通寶	無背	明太祖洪武元年 1368年	2.3	0.6	0.1	0.2	0.1	3.5	楷書、中樣無背広穿		
455	D VII 8 2 番銭		洪武通寶	無背	明太祖洪武元年 1368年	2.3	0.6	0.1	0.2	0.1	2.9	楷書、中樣無背広穿		
456	D VII 8 2 番銭		洪武通寶	無背	明太祖洪武元年 1368年	2.3	0.6	0.1	0.2	(0.15) 0.1	3.9	楷書、中樣無背広穿		
457	D VII 8 2 番銭		洪武通寶	無背	明太祖洪武元年 1368年	2.3	0.6	0.1	0.2	0.1	3.6	楷書、中樣無背広穿		
458	D VII 8 2 番銭		洪武通寶	無背	明太祖洪武元年 1368年	2.2	0.6	0.1	0.2	0.1	3.2	楷書、中樣無背広穿		
459	D VII 8 2 番銭		洪武通寶	無背	明太祖洪武元年 1368年	2.2	0.6	(0.05) 0.1	0.1	0.1	3.5	楷書、中樣無背広穿		
460	D VII 8 2 番銭		洪武通寶	無背	明太祖洪武元年 1368年	2.2	0.6	0.1	0.2	0.1	2.8	楷書、中樣無背広穿		
461	D VII 8 2 番銭		洪武通寶	一銭	明太祖洪武元年 1368年	2.3	0.5	0.1	0.3	0.1	3.8	楷書、中樣背一銭狹穿	356	123
462	D VII 8 2 番銭		洪武通寶	一銭		2.2	0.5	0.1	0.3	0.1	3.2	楷書、中樣背一銭狹穿		
463	D VII 8 2 番銭		洪武通寶	一銭	明太祖洪武元年 1368年	2.3	0.5	0.1	0.3	0.1	3.4	楷書、中樣背一銭狹穿		
464	D VII 8 2 番銭		洪武通寶	一銭	明太祖洪武元年 1368年	2.3	0.5	0.1	0.3	0.1	3.8	楷書、中樣背一銭狹穿		
465	D VII 8 2 番銭		洪武通寶	一銭	明太祖洪武元年 1368年	2.1	0.5	0.1	0.2	(0.15) 0.1	3.2	楷書、小樣背一銭狹穿	356	123
466	D VII 8 2 番銭		洪武通寶	一銭	明太祖洪武元年 1368年	2.1	0.5	0.1	0.2	0.1	2.9	楷書、小樣背一銭狹穿		
467	D VII 8 2 番銭		洪武通寶	一銭	明太祖洪武元年 1368年	2.1	0.5	0.1	0.2	0.1	3.2	楷書、小樣背一銭狹穿		
468	D VII 8 2 番銭		洪武通寶	一銭	明太祖洪武元年 1368年	2.1	0.5	0.1	0.2	0.1	2.6	楷書、小樣背一銭狹穿		

469	D VII g 2 番錢		洪武通寶	一錢	明太祖洪武元年 1368年	2.2	0.5	0.1	0.2	0.1	3.4	楷書、小樣皆一錢狹穿		
470	D VII g 2 番錢		洪武通寶	一錢	明太祖洪武元年 1368年	2.1	0.5	0.1	0.2	0.1	3.1	楷書、小樣無背狹穿	356	123
471	D VII g 2 番錢		洪武通寶	一錢	明太祖洪武元年 1368年	2.1	0.5	0.1	0.2	0.1	2.7	楷書、小樣無背狹穿		
472	D VII g 2 番錢		洪武通寶	一錢	明太祖洪武元年 1368年	2.1	0.5	0.1	0.2	0.1	3.4	楷書、小樣無背狹穿		
473	D VII g 2 番錢		永樂通寶	無背	明成祖永樂元年 1408年	2.5	0.6	0.1	0.2	0.1	3.0	楷書	356	123
474	D VII g 2 番錢		永樂通寶	無背	明成祖永樂元年 1408年	2.5	0.6	0.1	0.2	0.1	2.9	楷書	356	123
475	D VII g 2 番錢		永樂通寶	無背	明成祖永樂元年 1408年	2.5	0.6	0.1	0.2	0.1	3.4	楷書	356	123
476	D VII g 2 番錢		永樂通寶	無背	明成祖永樂元年 1408年	2.5	0.6	0.1	0.2	0.1	3.9	楷書		
477	D VII g 2 番錢		永樂通寶	無背	明成祖永樂元年 1408年	2.5	0.6	0.1	0.2	0.1	2.6	楷書		
478	D VII g 2 番錢		永樂通寶	無背	明成祖永樂元年 1408年	2.5	0.6	0.1	0.2	0.1	3.0	楷書		
479	D VII g 2 番錢		永樂通寶	無背	明成祖永樂元年 1408年	2.5	0.6	0.1	0.2	0.1	3.7	楷書		
480	D VII g 2 番錢		永樂通寶	無背	明成祖永樂元年 1408年	2.5	0.6	0.1	0.2	0.1	4.2	楷書		
481	D VII g 2 番錢		永樂通寶	無背	明成祖永樂元年 1408年	2.5	0.6	0.1	0.2	0.1	3.4	楷書		
482	D VII g 2 番錢		永樂通寶	無背	明成祖永樂元年 1408年	2.5	0.6	0.1	0.2	0.1	2.9	楷書		
483	D VII g 2 番錢		永樂通寶	無背	明成祖永樂元年 1408年	2.5	0.6	0.1	0.2	0.1	3.5	楷書		
483 B	D VII g 2 番錢		永樂通寶	無背	明成祖永樂元年 1408年	2.5	0.6	0.1	0.2	0.1	2.9	楷書		
484	D VII g 2 番錢		永樂通寶	無背	明成祖永樂元年 1408年	2.5	0.6	0.1	0.2	0.1	3.2	楷書		
485	D VII g 2 番錢		永樂通寶	無背	明成祖永樂元年 1408年	2.5	0.6	0.1	0.2	0.1	3.5	楷書		
486	D VII g 2 番錢		永樂通寶	無背	明成祖永樂元年 1408年	2.5	0.6	0.1	0.2	0.1	3.6	楷書		
487	D VII g 2 番錢		永樂通寶	無背	明成祖永樂元年 1408年	2.5	0.6	0.1	0.2	0.1	4.0	楷書		
488	D VII g 2 番錢		永樂通寶	無背	明成祖永樂元年 1408年	2.5	0.6	0.1	0.2	0.1	3.1	楷書		
489	D VII g 2 番錢		永樂通寶	無背	明成祖永樂元年 1408年	2.5	0.6	0.1	0.2	0.1	3.3	楷書		
490	D VII g 2 番錢		永樂通寶	無背	明成祖永樂元年 1408年	2.5	0.6	0.1	0.2	0.1	3.7	楷書		
491	D VII g 2 番錢		永樂通寶	無背	明成祖永樂元年 1408年	2.5	0.6	0.1	0.2	0.1	2.5	楷書		
492	D VII g 2 番錢		永樂通寶	無背	明成祖永樂元年 1408年	2.5	0.6	0.1	0.2	0.1	2.9	楷書		
493	D VII g 2 番錢		永樂通寶	無背	明成祖永樂元年 1408年	2.5	0.6	0.1	0.2	0.1	2.9	楷書		
494	D VII g 2 番錢		永樂通寶	無背	明成祖永樂元年 1408年	2.5	0.6	0.1	0.2	0.1	3.6	楷書		
495	D VII g 2 番錢		永樂通寶	無背	明成祖永樂元年 1408年	2.5	0.6	0.1	0.2	0.1	3.3	楷書		
496	D VII g 2 番錢		永樂通寶	無背	明成祖永樂元年 1408年	2.5	0.6	0.1	0.2	0.1	3.9	楷書		
497	D VII g 2 番錢		永樂通寶	無背	明成祖永樂元年 1408年	2.5	0.6	0.1	0.2	0.1	3.6	楷書		

498	DVII R 2 番銭	永楽通寶	無背	明成祖永楽元年 1408年	2.5	0.6	0.1	0.2	0.1	3.7	楷書		
499	DVII R 2 番銭	永楽通寶	無背	明成祖永楽元年 1408年	2.5	0.6	0.1	0.2	0.1	3.8	楷書		
500	DVII R 2 番銭	永楽通寶	無背	明成祖永楽元年 1408年	2.4	0.6	0.1	0.2	0.1	2.7	楷書		
501	DVII R 2 番銭	永楽通寶	無背	明成祖永楽元年 1408年	2.5	0.6	0.1	0.2	0.1	2.8	楷書		
502	DVII R 2 番銭	永楽通寶	無背	明成祖永楽元年 1408年	2.5	0.6	0.1	0.2	0.1	3.0	楷書		
503	DVII R 2 番銭	永楽通寶	無背	明成祖永楽元年 1408年	2.5	0.6	0.1	0.2	0.1	3.8	楷書		
504	DVII R 2 番銭	永楽通寶	無背	明成祖永楽元年 1408年	2.5	0.6	0.1	0.2	0.1	2.9	楷書		
505	DVII R 2 番銭	永楽通寶	無背	明成祖永楽元年 1408年	2.5	0.6	0.1	0.2	0.1	3.1	楷書		
506	DVII R 2 番銭	永楽通寶	無背	明成祖永楽元年 1408年	2.5	0.6	0.1	0.2	0.1	3.0	楷書		123
507	DVII R 2 番銭	永楽通寶	無背	明成祖永楽元年 1408年	2.5	0.6	0.1	0.2	0.1	3.4	楷書		123
508	DVII R 2 番銭	永楽通寶	無背	明成祖永楽元年 1408年	2.5	0.6	0.1	0.2	(0.15) 0.2	4.6	楷書		123
509	DVII R 2 番銭	永楽通寶	無背	明成祖永楽元年 1408年	2.5	0.6	0.1	0.2	0.1	3.1	楷書		123
510	DVII R 2 番銭	永楽通寶	無背	明成祖永楽元年 1408年	2.5	0.6	0.1	0.3	(0.15) 0.1	4.2	楷書		123
511	DVII R 2 番銭	永楽通寶	無背	明成祖永楽元年 1408年	2.5	0.6	0.1	0.3	(0.15) 0.1	4.0	楷書		123
512	DVII R 2 番銭	元豊通寶	無背	北宋真宗元豊元年 1078年	2.3	0.7				2.9	郭ぬけ、鋳銭か。	356	123
513	DVII R 2 番銭	判読不能	無背	不明	2.3	0.6				2.8	郭ぬけ、鋳銭か。	356	123
514	DVII R 2 番銭	判読不能	無背	不明	2.4	0.8				1.8	郭ぬけ、鋳銭か。	356	123

いずれも本来は縁金具状に円形か楕円形の輪状を示すものが、切断されて棒状に延ばされたものであり、何かに転用される前段階のものであろう。長さは5cm~7.5cm、幅6mm~1cm、厚さ3mm~4mmの大きさがある。

鶴の鑄造品がCIV区から1点出土しているが、粗掘中の出土であることから、現代のものである可能性がある。高さ6.8cm、首の最小径6mmの大きさで、丹頂部は1mm位周囲より高くし、口を開いて斜前方上方を向く姿であることから、丹頂鶴が鳴く形を鑄移したものであろう。

円錐台形のソケット状を示すものが東館のCVII区から1点出土している。どういう使われ方をするのか、正式な器種名は不明である。全長が5.2cm、最大径1.1cm×1cm、最小径1.5mmの大きさがあり、鑄造されたものらしい。

器種の不明なものが1点ある。長さ10cm、最大幅3.3cm、厚さ6mmの大きさをもつ破片で、平滑な表面に1.2cmの間隔をおいて円弧を描く突帯が付される。裏面に砂型の跡と推定される小凹凸のある砂はだであることから、鑄造作りであろう。周辺部は不規則な凹凸を示し、鑄潰されようとした痕跡を残す。小破片のため原形は不明であるが、仏具の一種の一部分の可能性はある。

本遺跡から出土した古貨幣515枚は、すべて中国貨幣で時代的には7世紀の唐代から15世紀初

めの明代まで787年間の37種の銘文をもつ貨幣が含まれる。他に銘文をもたない無文銭と銘文が判読不能なものもある。これらは、遺構の項で記載した蓄銭遺構から出土した464枚以外に粗掘中に出土した14枚と各種の遺構から出土した37枚に分けられる。さらに、出土地点ごとに見ると、西館から11枚、東館504枚の出土と、全体量の約98%、蓄銭遺構以外の78%を東館からの出土品で占める。銭銘をみると、唐代—2種類46枚、北宋代—25種341枚、金代—1種1枚、南宋代—6種11枚、明代—3種102枚、判読不能—12枚、無文—2枚となり、北宋～明代にかけての貨幣が主体をなすことが判る。さらに、銭種ごとに数の多い順をみると、①永楽通寶57枚(11.06%)、②元豊通寶51枚(9.9%)、③開元通寶45枚(8.74%)、④洪武通寶44枚(8.54%)、⑤皇宋通寶42枚(8.15%)、⑥元祐通寶42枚(8.15%)、⑦政和通寶26枚(5.05%)が数の多い上位7番で、他は1枚～20枚の範囲である。この上位7種で307枚と全体の59.59%を占める。また、一部ではあるが加工銭(32・44・138・145)も含まれる。

6) その他の遺物

その他の遺物としたのは、前項の1)～5)の種類に一致しない遺物を一括した。したがって、種類は特定せず各種含まれる。以下に種類ごとにその特徴を記載することにする。

〈埴 塼〉 (第22表1～3、写真図版108)

3点の出土であるが、1・2は大型品の破片で1は内堀南側埋土、2は東館DV区から出土しており、同個体の破片と推定される。3も内堀の埋土内からの出土であるが小型品である。1は破片1点、2は同3点であるが相互で接合しない。籾殻や稲藁状の芴入り粘土を原料とし、破片の湾曲の程度からみて半円球状の形を示していたものと推定される。外面には成形時の調整痕や籾殻痕が多数付着し灰黄褐色を示す。内面には気泡状の小凹凸と穴が無数にあり、金属性光沢をもつ異物や黒色ガラス質の熔蝕物が全面に付着し、色調は灰黒色～黒褐色を示す。断面観察によると、内側約3分の1の厚さは火熱によって灰黒色に変色し、外側は黄褐色を示し、変色していない。大きさは、1が14cm×8.5cm、厚さ8cmあり、2の大きい破片は14cm×9cm、厚さ3cm～4cmである。3は4cm×2.5cm、厚さ1.2cmの大きさをもつ破片で、砂が多量に入った粘土を原料にして作っている。色調は、外面が濃淡のある褐色で内面は焦げ茶色を示し、内面にだけ熔蝕物が全面に付着する。破片の湾曲程度からみて、1・2と比較して相当小型の埴塼と考えられる。

〈鞆羽口〉 (第22表4・5、第357図4、写真図版108)

2点はEⅡ区・EⅢ区から各1点と、ともに西館からの出土である。4は外径8cm位の円筒状を示し中央に径2.2cm位の貫通孔がある。現存長は約8.5cmであるが、折損した痕跡を残すことから本来はもっと長かったものであろう。先端は使用時の焼成によって黒褐色に変色し、さらに形も若干変形しており、灰黒色～灰褐色を示す多くの小孔があくガラス質の熔蝕物が付着する。砂が多量に混入した粘土を原料にして作り、表面は灰褐色～灰黄褐色、内面は明るい黄褐色を示し、先端部が半割状態で出土した。5は先端部の小破片であるが、全体的なことは明確にしがたい。おそらく、4と大差のない形状をなすものと推定される。

〈土 錘〉 (第22表8)

東館のCⅤ区内堀際から1点している。砂を混入する粘土を素材とし、残存長5.2cm、径2.1cmの大きさをもつ両端が窄む円筒状を示し、中央に径7mm～8mmの円孔が貫通する。両端を欠損し、色調は半分が明るい褐色、半分は黒褐色を示す。

〈さいころ〉 (第22表15、第357図15、写真図版108)

素焼き陶製のさいころがCⅣi9門跡—2北西隅の柱穴から1点出土している。若干否みをもつ方形で、1と6、2と5・3と4が対面するように棒状工具による目を入れている。

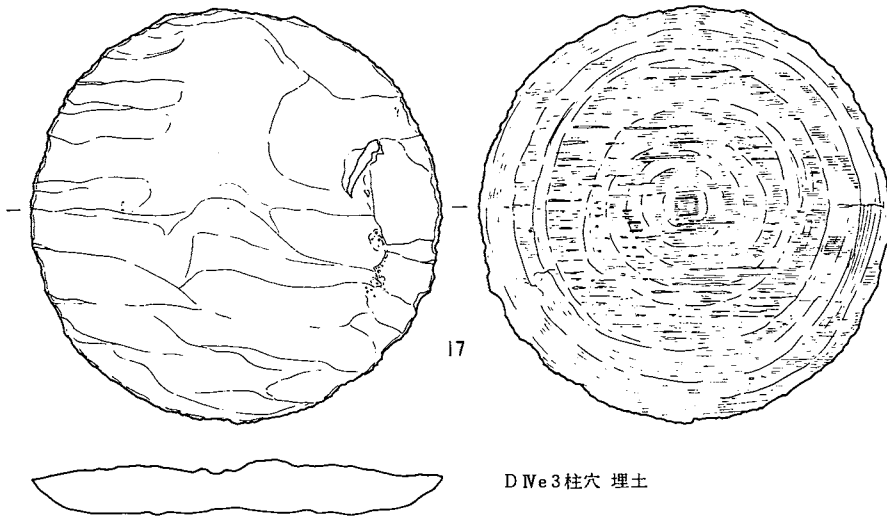
〈漆〉 (第22表6・16・17、第357図17、写真図版108)

生漆が凝固した状態のものが西館のDⅣ区から1点、東館のCⅥ区とDⅤ区から各1点の3点が出土している。6は1面に平織りの布が貼り付いた長さ5cm、幅1.5cm、厚さ1cmの大きさをもつ破片である。16は1面が平滑なことから何んらかの容器に入っていた漆が凝固したものらしく、それが破碎した状態で出土している。17は椀か皿に入れていた漆がそのまま固まったもので、底面に木目跡と考えられる細い筋目がみられる。大きさは、径約11cm、最大厚さ1.4cmで、底面は凹凸があるものの丸底で、上面には大きな起伏がある。

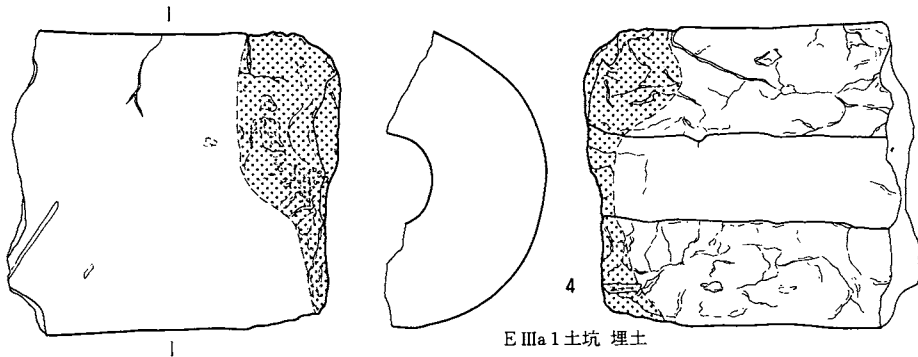
〈歯、角、骨〉 (第22表9～13・18～21、第357図18・21・22、写真図版108)

馬の歯が西館のCⅡ区から1点、東館のCⅤ区、DⅥ区・DⅦ区から各1点の4点出土している。破損のため全体的なことは不明であるが、長さが5cm～7cmあり、成馬の歯であろう。

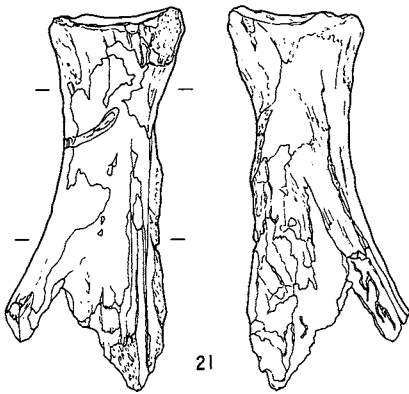
鹿角の角座が西館のDⅡ区から1点出土している。生前に自然脱落した角から角座部分を鋸で切断したものである。角座は4cm×5cmの楕円形で、角は2cm×3.5cmの太さをもつ楕円形である。



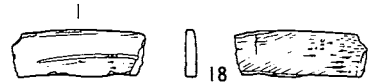
DⅣe3柱穴 埋土



EⅢa1土坑 埋土

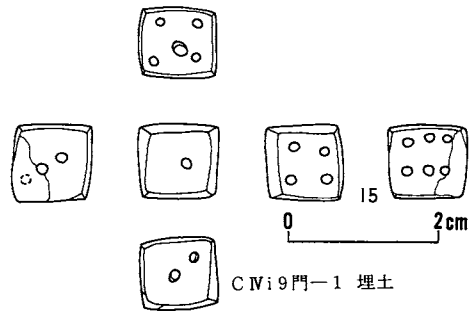


EⅢ区EⅡa5落ち込み 埋土下位



CⅡ区西館北側西端 整地層

0 5cm



CⅣ:9門-1 埋土

0 15 2cm

第357図 その他の遺物

第22表 その他の遺物一覧表

No	地 点	層 位	器 種	法 量				材 質	備 考	図版	写真
				縦cm	横cm	厚cm	重g				
1	BVI j 1 堀跡 DV a 10地点	埋 土	埴 塀	14.0	9.5	5.7	444	切砂入り粘土	初殻を大量に混じる。強い焼成を受けている。		
2	DV b 2 柱穴	埋 土	埴 塀	15.0	10.2	4.7	448	切砂入り粘土	初殻を大量に混じる。強い焼成を受けている。1と同個体?		
3	内堀	埋 土	埴 塀	3.9	3.2	1.7	76	砂入り粘土	内面に増触物が付着、小型品か?		108
4	EIII a 1 土抗	埋 土	鞆の羽口	8.6	7.8	4.4	305	砂入り粘土	先端部分の半截品、長期間使用ではない	第357	#
5	EII a 10土抗	埋 土	鞆の羽口	5.3	3.2	2.1	24	砂入り粘土	先端部分の小破片。		#
6	CVI区柱No36	埋 土	布目痕の付く塊	5.0	1.6	1.1	28	不明	平織りの布目痕が付着。		#
7	CVI i 10土抗	埋 土	不 明	5.5	4.2	3.1	30	切入り粘土	切藁状の切が入っている。		#
8	CV区粗掘り	表 土	土 鍾	5.3	2.2	2.0	25	素焼き土製	細長く、中心部に円孔が貫通。		
9	CII区 セクションベルト	表 土	馬の歯牙	5.0	1.9	1.6	10	歯	破砕かはげしい。		
10	CV区粗掘り	表 土	馬の歯牙	6.2	3.2	2.1	22	歯	一部破砕している。		
11	DVI区粗掘り	表 土	馬の歯牙	7.0	2.1	2.1	21	歯	一部破砕している。		
12	DVII e 3 井戸	埋 土	馬の歯牙	5.6	2.3	2.3	38	歯	完全な形状を示す。		
13	DII区粗掘り	表 土	鹿角の角座	3.6	3.9	3.2	20	角	角座部分のみを残す。		
14	DVI区柱No 4	埋 土	スラッグ?	4.0	5.5	2.4	15		多孔質で非常に軽い。		
15	CIV i 9門-1	埋 土	双 六	1.0	0.9	1.0	2	素焼き陶製	一部を欠失	第357	108
16	DV区柱穴No16	埋 土	漆					生漆の凝固したもの			
17	DIV e 3 柱穴	埋 土	漆	10.9	10.9	1.4		生漆の凝固したもの		第357	108
18	CII区 西館北側西端	整地層	不 明	3.5	1.2	0.3		骨	焼けている	第357	#
19	DIII区 DIII g 6溝	埋 土	骨 片					骨	焼けている		#
20	東館東西ベルト	表 土	骨 片					骨	焼けている		#
21	EIII区 EIII a 5 落ち込み	埋土下位 (黒色)	骨 片	10.2	4.3	1.7		骨		第357	#
22	東館東側外掘り	埋土下位	骨 片					骨			#

哺乳類の骨が5箇所から出土している。これらの中には18～20の焼骨と、21・22の焼けていない骨がある。前者は、西館のCII区・DIII区から各1点、東館から1点の出土であり、その中で18は長さ3.5cm、幅1.2cm、厚さ3mmに面取り加工され、他は破砕されている。後者は西館のEIII区からと東館東側外掘りの埋土内から出土している。21は肩甲骨と推定され、22には肋骨、大腿骨、椎骨等を含むが、種類については鑑定を受けていないため不明である。

〈その他〉 (第22表7・14)

前記の種類に該当しないものが2点ある。東館のCVI区から出土した7は、切入り粘土の塊で、使用方法、種類とも不明である。東館から出土した17は、何かが熔けて固まった状態を示し、表面は凹凸があるものの光沢をもち、内部には多くの気泡をもつ。使用方法・種類とも明らかでない。

V 古代の遺構と遺物

古代に属する遺構として9基の土坑と溝跡4条が検出されている。これらはいずれも複数個体の土師器や須恵器を出土した遺構である。しかし、中世の遺構とした中にも土師器や須恵器を出土した例は多くあり、この現象だけでみれば、中世とした遺構の中にも実際は古代に属する遺構を含む可能性が大きい。遺物には土師器と須恵器があり、出土数も多い。今回の発掘調査では住居跡はまったく検出されなかったが、多量の遺物量からみて城館が構築される以前には相当大規模な集落の存在が予想される。

1. 遺 構

1) 土 坑

西館側に5基、東館側に4基の検出である。

(1) CIVc 4 土坑 (第358図、第369図27~33、写真図版56)

西館の東端から西方20m、同北端から10mに位置する不整な楕円形を示す土坑である。北側が攪乱によって消失し、南側が縄文時代のCIVc 4 陥し穴状遺構と重複し、さらに多くの中世に属する柱穴状土坑とも重複している。開口部径が東西2.5m、南北3.3m、底部径東西2.4m、南北3.15m、深さ0.15mの規模をもち、長軸方向はN-20°-Eを示す。埋土は3層に細分され、1・2層は黒褐色土であるが1層には明褐色土粒、2層には炭下物粒が混入する。3層は明褐色の地山質粘土である。なお、2層の堆積する窪みは重複する中世の柱穴状土坑である。

遺物の土師器は坏・甕とも実測不能のロクロ成形された小破片で、坏は内面がミガキ後黒色処理される。実測された須恵器6点はいずれもロクロ成形で27~29の底部切り離しは回転篋切りで一部に篋削り再調整が入る。大きさは、口縁部径13.2cm~15cm、底径7cm~7.6cmで器高は不明である。いずれも9世紀前半頃に属するであろう。

(2) DIVf 5 土坑 (第359図、第374図146~149、写真図版56)

西館の東端から西方13m、同南端から北13m、DIVf 6 土坑の西方0.5mに他遺構と重複することなく単独で位置する。規模は開口部径が東西0.95m、南北1m、底部径は東西0.55m、南北0.55m、深さ0.25mで、平面形は歪んだ方形気味を示し、断面形は皿形である。埋土は黒褐

色土の単層で、若干の地山の明褐色土粒と炭化物粒を混入する。

遺物として土師器の坏が2個体15点、甕が9個体21点の破片が出土している。その中で実測できたのは坏・甕とも2点の4点である。坏は2点ともロクロ成形無調整で内面黒色処理はない。大きさは、口縁部が146—17.5cm、147—16cmであり、底径や器形は不明である。甕は148がロクロ成形、149が非ロクロ成形である。148の器面は磨滅によって調整が不明であるが、口縁部は斜上方に外反し、口唇部は上方に挽き出される。149は底部の周囲が若干張り出し、体部外面は篋削り、内面は篋撫でによって調整される。146～148は10世紀頃、149は8世紀後半頃に位置づけられるであろう。

(3) DⅣ f 6 土坑 (第360図、第375図150～155、写真図版56)

西館の東端から西へ10m、同南端から11m北方でDⅣ f 5 土坑の0.5m東方に、他遺構と重複することなく単独で位置する。当土坑の南側は近年の開田時に一部が削平を受け、壁が残っていない。開口部径が東西2.35m、南北3.25m、底部径は東西1.6m、南北2.5m、深さ0.35mの規模をもち、平面形は長軸方向をN—3°—Eに示す楕円形、断面形は鍋底形をなす。なお、西～南側の床面は壁際が中央部より若干高い二段構造を示す。埋土は上位から黒褐色土・褐灰色土・褐色土・暗褐色土の5層に細分され、1・2層には黄褐色土粒や灰が多量に混入し、3層は炭化物と灰が混入した黒色土系であるし、4層は地山質の汚れた土、5層は1・2層に近い様相を示す。おそらく自然堆積による埋没であろう。

遺物は土師器の坏が18個体31点、同甕が11個体30点、須恵器が大甕2個体2点が出土しているが、いずれも小破片が多く、実測できたのは坏3点、甕1点、須恵器の拓影のみである。土師器坏はいずれもロクロ成形され、底部切り離しが回転糸切り無調整、内面非黒色処理のもので占められる。大きさは、口縁部径15.2cm、底部径5cm～6.8cm、器高5.2cmである。同甕は口縁部～体部中位までを残し、ロクロ成形で外面は体部上位から下位は粗く篋削りされ、内面は部分的に篋撫での痕跡をもつが、ロクロ目を明瞭に残す。体部が若干膨らみをもち、頸部で幾分窄んだ後口縁部は斜上方にくの字状に外反し、口唇部に直口気味に挽き出される。須恵器大甕は2点とも内外面に並行叩き具痕と当て具痕をもち、内面はさらに同心円当て具痕をもつ。10世紀頃に位置づけられる土師器の様相であろう。

(4) EⅢ b 6 土坑 (第361図、第377図、写真図版56)

西館の西端から36m、同南端から8mに、他遺構と重複することなく単独で検出された。南側の一部が開田時の削平によって消失している。開口部径東西0.8m、南北0.5m、底部径東西0.56m、南北0.48m、深さ0.22mの規模をもち、平面形は長軸方向をN—90°—Wに示す楕円形

で断面形は皿形をなす。埋土は暗褐色土、黄褐色土、にぶい黄褐色土の3層に分けられ、2層は炭化物が混入した地山質土、3層は地山質土と炭化物が混入している。おそらく自然堆積による埋没であろう。

遺物は土師器の坏が4個体4点、甕が3個体15点と須恵器瓶が1点出土している。小破片が多く実測できたのは土師器坏1点、同甕2点、須恵器瓶1点のみである。坏はロクロ使用成形で内面非黒色処理のもので、大きさは口縁部径13.6cm位である。甕は2型あり、191はロクロ使用成形でくの字状に斜上方に外反する口縁部と角張る口唇部をもち、13.4cmの口縁部径をもつ。192は口縁部径が22.9cmの大型で、ズンドウ形を示し、くの字状に斜上方に外反しやや丸味のある口唇部をもつ、ロクロ成形の甕である。須恵器の瓶には径8.7cm、高さ8mmの断面箱形で直立する高台をもち、体部は内湾気味に外傾する。内面にロクロ目の並行する突帯が付き、硯として転用されている可能性がある。9世紀後半～10世紀に位置づけられるであろう。

(5) E IV b 1 土坑—2 (第362図、第377図、写真図版57)

西館東端の6.5m西方、南端から4.5m北方に他遺構と重複せず単独で位置する。南側が開田時の削平によって消失している。開口部径東西1.25m、底部径東西1.05m、深さ0.25mの規模をもち、平面形は歪んだ方形、断面形は鍋底形を示す。埋土は黒褐色土と褐色土の2層に細分され、1層には黄褐色土粒と炭化物粒が混入し、2層もほぼ同じ様相である。自然堆積による埋没であろう。

遺物は土師器坏が7個体10点、同甕が3個体3点、須恵器大甕2点の出土であるが、小破片の出土が多く、実測できたのは土師器坏2点のみである。土師器坏はいずれもロクロ成形・底部切り離しが回転糸切りで内面は無調整非黒色処理である。須恵器大甕は外面に並行叩き具痕、内面に凸面の当て具痕をもつ体部破片である。10世紀頃の遺物であろう。

(6) C V g 9 土坑—1 (第363図、第369・370図43～47、写真図版57)

東館の西端から東方12m、同北端から21m南方に、北側でC V g 9 土坑—2と重複して位置し、他に多くの中世に属する柱穴状土坑とも重複する。開口部径南北1.5m、東西1.6m、底部径南北1.15m、東西1.35m、深さ0.3mの規模をもち、平面形は円形、断面形は鍋底形を示す。埋土は黒褐色土で2層に細分されるが、1層には黄褐色土粒と炭化物粒が混じり、2層は淡黄褐色土との混合土である。人為的に埋め戻された可能性が高い。

遺物は、土師器坏が9個体13点、同甕が19個体38点、須恵器が坏3個体3点の出土であるが、小破片での出土が多く、実測できたのは土師器の坏・甕各2点と須恵器坏が1点のみである。土師器坏は、ロクロ成形・底部が回転糸切り離し無調整で、内面は無調整非黒色処理のもの(43)

と篋みがき後黒色処理の2種類がみられ、底部径は5.8cm、6cmの大きさがある。甕の45・46は両者とも体部下位～底部を残す破片で、器表が45は篋撫で、46は篋削り調整が入り、46はロクロ成形であるが45は輪積みと推定される。須恵器はロクロ成形された口縁部の小破片である。45は8世紀後半頃の遺物と推定されるが、他は10世紀頃に位置づけられるであろう。

(7) C VII i 2土坑 (第364図、第371図、写真図版56)

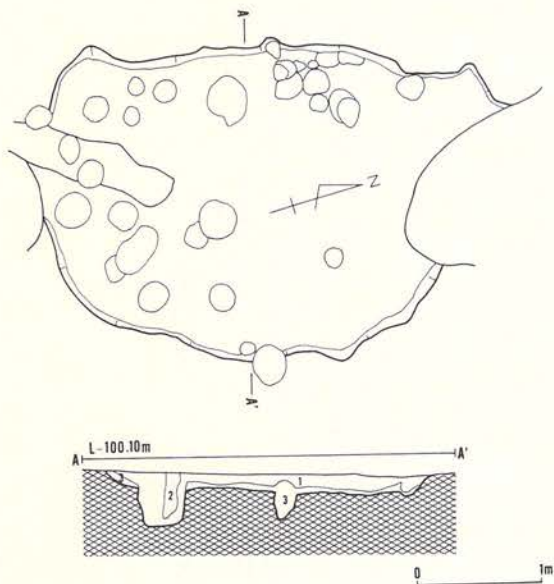
東館の東端から29m、同北端から25.5m南方に中世に属する柱穴状土坑と重複して位置する。開口部径東西2.35m、南北2.1m、底部径東西1.45m、南北1.8m、深さ0.3mの規模をもち、平面形は若干歪んだ円形、断面形は鍋底形を示す。埋土は黒色土、黒褐色土、暗褐色土、褐色土等7層に細分される。いずれの層にも地山起源の黄褐色粘土粒、炭化物等が混入し、2層には灰白色の火山灰が混じる。なお、7層は柱穴状土坑の埋土である。

遺物は土師器の坏11個体46点、甕1個体1点、鉢1個体22点の出土であるが、小破片が多く実測できたのは坏5点と鉢1点のみである。坏はいずれもロクロ成形・底部が回転糸切り離しであるが、82～85は内面無調整非黒色処理で86は篋みがき後黒色処理である。大きさは、口縁部径が14.6cm～15.6cm、底部径4.6cm～6.1cm、器高4.6cm～5cmである。なお、83・84の体部には解読不能であるが墨書がある。87は鉢の完形で、口縁部径25.6cm、底部径10.8cm、器高16.4cmの大きさがある。粘土紐巻き上げロクロ仕上げで、体部は内湾気味に外傾し、頸部はくの字状に小さく外反し、口唇は角張る器形を示す。体部外面の下半は篋削りされる。これらは10世紀頃に位置づけられる遺物であろう。

(8) C II i 10土坑 (第365図、第372・373図90～120、写真図版56)

東館の東端部から西方8m、同北端部から25m南方に中世の柱穴状土坑と重複して位置する。開口部径南北2m、東西3.05m、底部径南北1.2m、東西2.2m、深さ0.45mの規模をもち、平面形は長軸方向をN-60°-Eにもつ楕円形で、断面形は鍋底形である。埋土は9層に細分され、炭化物や焼土、細砂がほとんどの層に混入する。

遺物は、土師器の坏が33個体132点、同甕5個体5点、同鉢1個体14点、埴2個体19点、同不明2個体6点、須恵器は坏が3個体4点、甕が3個体3点出土している。破片の出土が多く実測できたのは土師器は坏22個体、甕1個体、鉢3個体、須恵器坏3個体、大甕2点である。土師器の坏はロクロ成形、底部切り離しが回転糸切りで、内外面無調整の非内面黒色処理である。96と98の体部外面には墨書がある。116には高さ1.4cmで外方にハの字状に踏ん張る高台をもつ。大きさは、口縁部径が12.3cm～14.8cmで平均すると13.6cm、底径は4.8cm～7.6cmまでであるが平均すると6.1cm、器高は4.8cm、5cmである。甕(117)はロクロ成形で体部に若干膨らみをもち、頸部が窄んで口縁部はくの字状に外反し口唇部は角張る。大きさは口縁部径21.8cmである。鉢



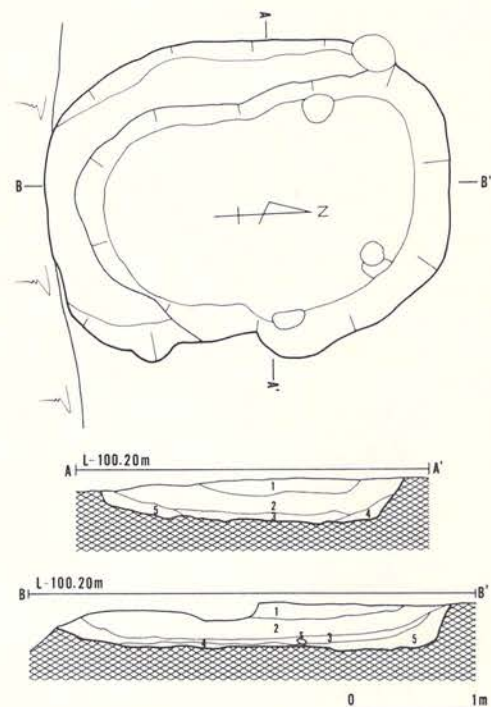
第358図 (1)C IV c 4 土坑

C IV c 4 土坑

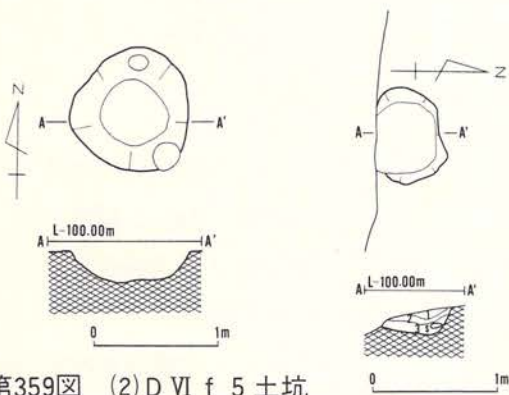
- 1 10Y R 3/2 黒 褐色 シルト、明褐色土がブロック状に混入
- 2 10Y R 3/1 黒 褐色 シルト、下位に炭が若干混入
- 3 7.5Y R 5/6 明 褐色 火山灰土、地山

D IV f 6 土坑

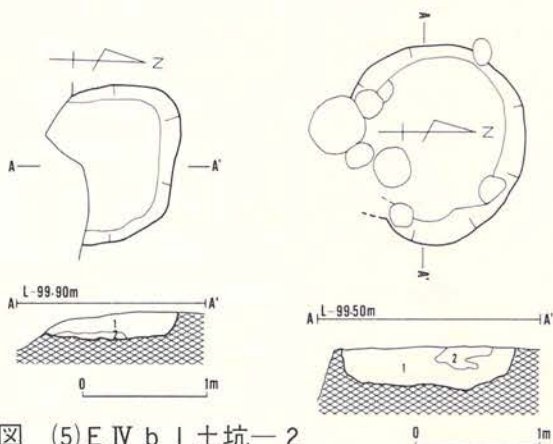
- 1 10Y R 3/1 黒 褐色 シルト、黄褐色土や灰が多く混入
- 2 10Y R 2/3 黒 褐色 シルト、黄褐色土や炭、灰が混入
- 3 10Y R 4/1 褐色 灰 ～黒色土、炭と灰の層
- 4 10Y R 4/4 褐色 色 火山灰土、暗褐色土が混入
- 5 10Y R 3/3 暗 褐色 シルト、黄褐色土や炭が混入



第360図 (3)D IV f 6 土坑



第359図 (2)D VI f 5 土坑



第362図 (5)E IV b I 土坑—2

第361図 (4)E III b 6 土坑

第363図 (6)C V g 9 土坑— I

E III b 6 土坑

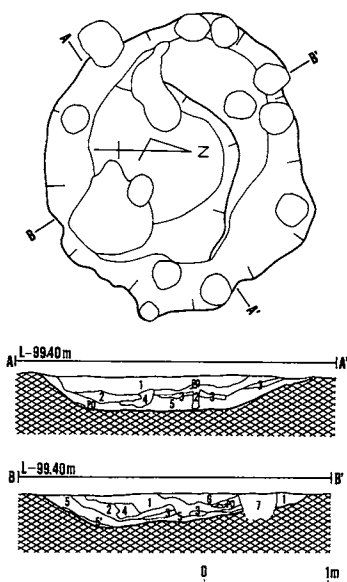
- 1 10Y R 3/4 暗 褐色 シルト
- 2 2.5Y 5/6 黄 褐色 火山灰土、炭が混入
- 3 10Y R 4/3 に近い黄褐色 火山灰土と暗褐色土との混土、炭が混入

E IV b I 土坑—2

- 1 7.5Y 3/2 黒 褐色 シルト、黄褐色土が多く混入、炭が混入
- 2 10Y R 4/6 褐色 色 火山灰土、黒褐色土が混入

C V g 9 土坑— I

- 1 10Y R 2/3 黒 褐色 シルト、黄褐色土と炭が若干混入
- 2 10Y R 2/3 黒 褐色 シルトと淡黄色粘土半々の混土



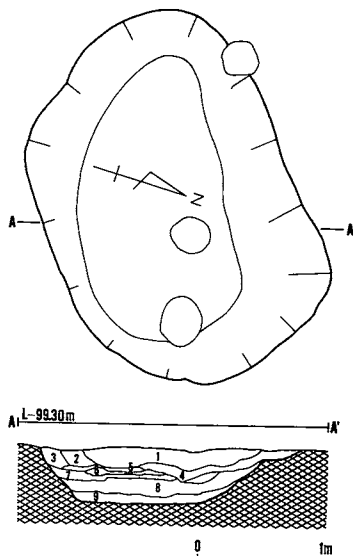
第364図 (7) C VII i 2 土坑

(120)は底部が残存しないため全体形は不明であるが、底部から内湾気味に大きく外傾する体部下位は、上位で直立気味に立ち上がり、口縁端部は小さく外反する。ロクロ成形され、体部下位に篋削り痕をもつ。埴2個体は、118は輪積み手捏ね成形で口縁部は横撫でされ、

体部は直線的に外傾し、口縁部は外反し、口縁部径35.9cmである。119はロクロ成形され、内湾気味に外傾する。体部は口縁端部で小さく外反し口唇は角張る。体部下半は篋削りされ、口縁部は横撫でである。須恵器の坏は、ロクロ成形、底部回転糸切り離して再調整はない。口縁部14.6cmと17.7cm、底部径4.9cm~5.4cm、器高4cm~5.5cmである。大甕は、93は外面が斜行する並行叩き具痕をもち、内面は横方向の撫でである。94は、外面に粗い篋削りが入り、内面は篋撫でである。これらの遺物の状況は、10世紀頃に位置づけられるものであろう。

(9) D VI b 9 土坑 (第366図、第376図170~172、写真図版57)

東館の東端から38m西方、同南端から21mにC VII a 1 溝跡・D VI e 7 溝跡や中世の柱穴状土坑と重複して位置し、東側と南側は輪郭が不明である。開口部径東西不明、南北9.9m、底部径東西不明、南北9.5m、深さ0.35mの規模をもち、南壁と東壁は不明であるが、隅丸長方形を示



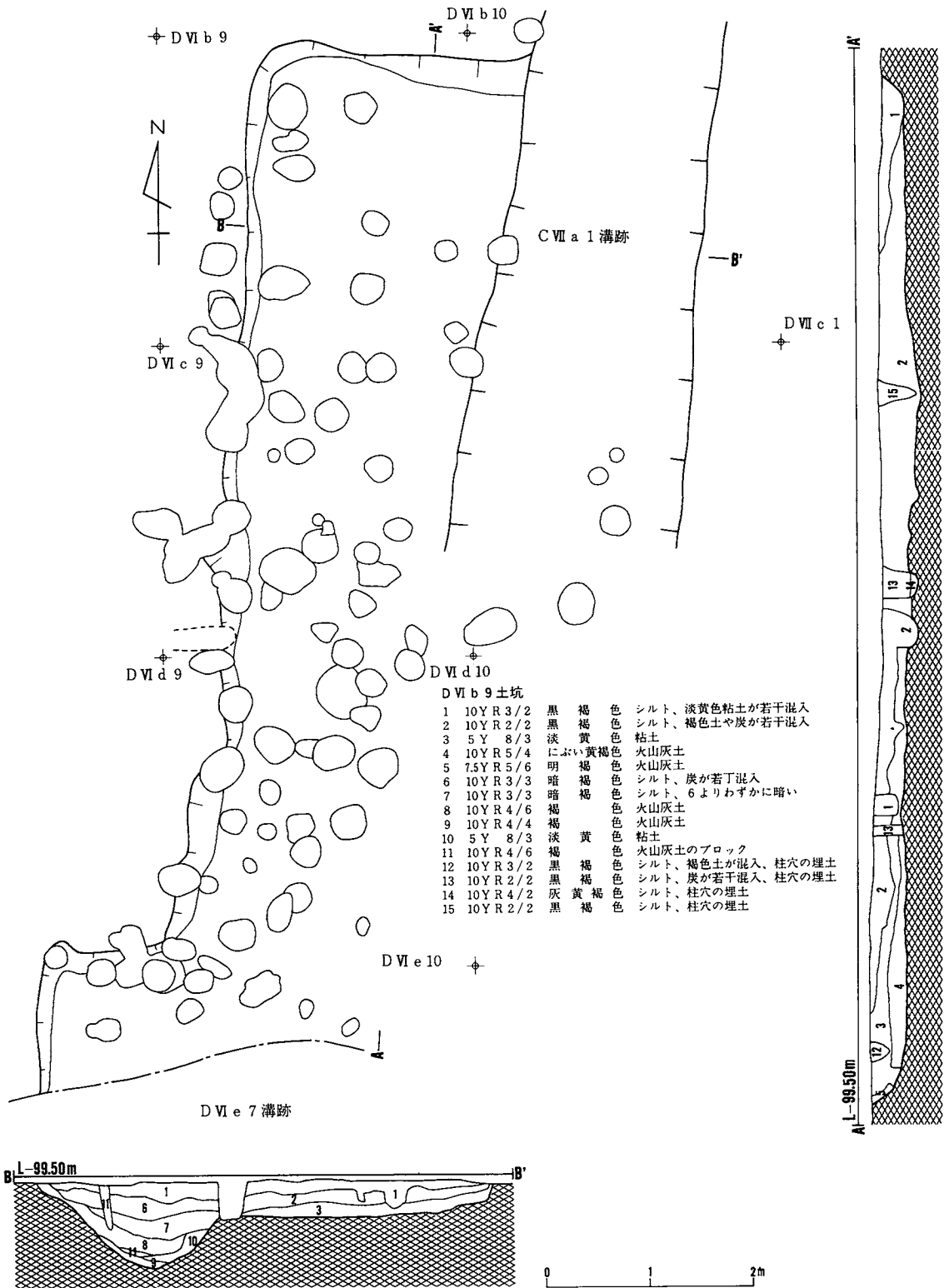
第365図 (8) c VII i 10 土坑

C VII i 2 土坑

- | | | | | | |
|---|--------------|-----|-----|---|-----------------------|
| 1 | 10 Y R 2/3 | 黒 | 褐色 | 色 | 砂質シルト、炭か混入 |
| 2 | 7.5 Y R 4/3 | 褐 | 褐色 | 色 | シルトに灰白色火山灰(十和田a)が多く混入 |
| 3 | 10 Y R 1.7/1 | 黒 | 褐色 | 色 | シルト、炭が多く混入 |
| 4 | 10 Y R 2/2 | 黒 | 褐色 | 色 | シルト、黄褐色土が混入 |
| 5 | 10 Y R 4/3 | にぶい | 黄褐色 | 色 | 火山灰土主体に暗褐色土が混入 |
| 5 | 10 Y R 4/6 | 褐 | 褐色 | 色 | 火山灰土主体に暗褐色土が混入 |
| 6 | 10 Y R 2/2 | 黒 | 褐色 | 色 | シルト、淡黄色粘土が混入、炭を含む |
| 7 | 10 Y R 3/4 | 暗 | 褐色 | 色 | シルト、柱穴の埋土 |

C VII i 10 土坑

- | | | | | | |
|---|---------------|-----|-----|---|---------------|
| 1 | 10 Y R 3/2 | 黒 | 褐色 | 色 | シルト、炭と焼土が若干混入 |
| 2 | 10 Y R 3/2 | 黒 | 褐色 | 色 | シルト、細砂や炭が混入 |
| 3 | 10 Y R 3/4 | 暗 | 褐色 | 色 | シルト、炭が若干混入 |
| 4 | 10 Y R 2/3 | 黒 | 褐色 | 色 | シルト、炭が若干混入 |
| 5 | 7.5 Y R 1.7/1 | 黒 | 褐色 | 色 | シルト、炭か混入 |
| 6 | 10 Y R 4/6 | 褐 | 褐色 | 色 | シルト、鉄分を含む |
| 7 | 10 Y R 7/6 | 明 | 黄褐色 | 色 | 火山灰土 |
| 8 | 10 Y R 3/3 | 暗 | 褐色 | 色 | シルト |
| 9 | 10 Y R 7/4 | にぶい | 黄褐色 | 色 | 粘土 |



第366図 (9)D VI b 9 土坑

すものと推定され、断面形は皿形をなす。埋土は15層に細分されるが、黒褐色土、暗褐色土、褐色土、灰褐色土、淡黄色土等が堆積し、地山粘土粒や炭化物粒が混入する。12層～15層は上位から重複する柱穴状土坑の埋土である。

遺物は土師器の坏が17個体25点、甕2個体3点、須恵器大甕4個体8点の出土であるが、土師器は小破片の出土が多く、実測できるものを含まない。土師器はいずれもロクロ成形で、坏の中には内面黒色処理のものを若干含む。掲載した須恵器大甕の体部破片は、3点とも外面に並行叩き具痕をもち、内面には170が綾杉状当て具痕、171が並行当て具痕、172は凸面当て具痕を付す。時期は明確でないが、平安時代に属するであろう。

2) 溝 跡

古代の溝と判断したのは、中世の溝は埋め戻されているか一見して新しい土が埋土として堆積する例が多く、このような様相とまったく異なる埋土が堆積し、さらに平安時代の土師器と須恵器のみが埋土内から出土し、中世に属する遺物をまったく出土していないことによる。このような溝はすべて東館に位置し、南北方向が3条、東西方向1条が検出されている。

(1) C VI a 4 溝跡 (第367図、第371図69、写真図版57)

西端がグリッドC VI a 4に位置し、N-100°-Eの方向へ約55m延び、東館の東端に達する。西端は古代に属するC VI b 4 溝跡と接続しそうな様相を示すが、両者の末端を確認していないので詳細は定かでない。また、中世に属する多くの遺構と古代に属するC VII a 1 溝跡、同C VI b 8とも重複し、中世遺構の削平を受け、C VII a 1 溝跡は本溝跡を切断しC VI b 8 溝跡は本溝跡と合流する。東端からほぼ直線的に西北西へ約30m延び、その後約43m地点まではほぼ真西方向に向きを変えてさらに延び、この地点でC VI b 8 溝跡と合流して再び向きを西北西に変え次第に真西の方向へ湾曲して西端に達する。幅は西端が約1.6m位で、東に寄ると幾分狭くし1.3m位である。底面は、西部が1.3m、東端が0.3m位で、断面は西部は皿形、東端は箱葉研状に近い形を示し、東端の法面は両面とも幅の狭い中段がつく。深さは、東端が約0.55mあり西に寄るほど次第に浅くなり、西端では0.25m位となり、底面レベルもこれに準ずる。埋土は黒褐色土がレンズ状に堆積し、自然堆積によって埋没したものであろう。

埋土内から土師器の坏が2個体4点、須恵器の瓶が1個体1点出土している。土師器は小破片のため実測不能であるがロクロ成形で非内面黒色処理のものである。須恵器は外面に並行叩き具痕、内面に並行と青海波状同心円当て具痕が付き、器表には黒色の自然釉が付着する。



C VII a 1 溝跡

- 1 10Y R 2/2 黒褐色 シルト、褐色土や炭が若干混入
- 2 10Y R 3/3 暗褐色 シルト、褐色土や炭が若干混入
- 3 10Y R 3/3 暗褐色 シルト、2よりわずかに暗く、やわらかい
- 4 10Y R 4/6 褐色 火山灰土
- 5 10Y R 4/4 褐色 火山灰土
- 6 5 Y 8/3 淡黄色 粘土
- 7 10Y R 4/6 褐色 火山灰土、ブロック状

C VII a 1 溝跡

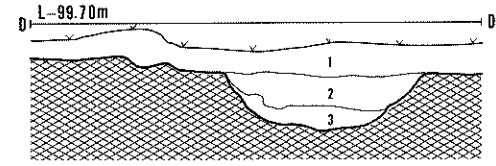
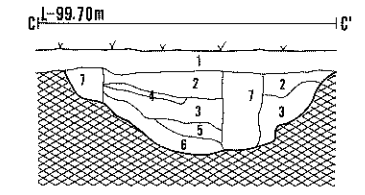
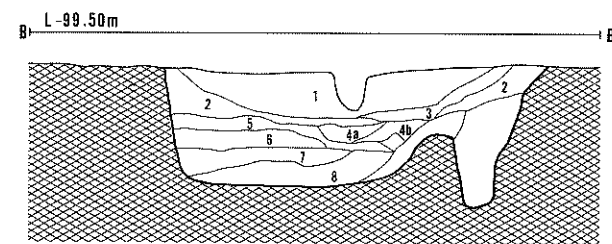
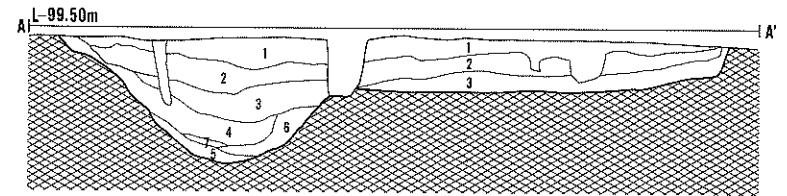
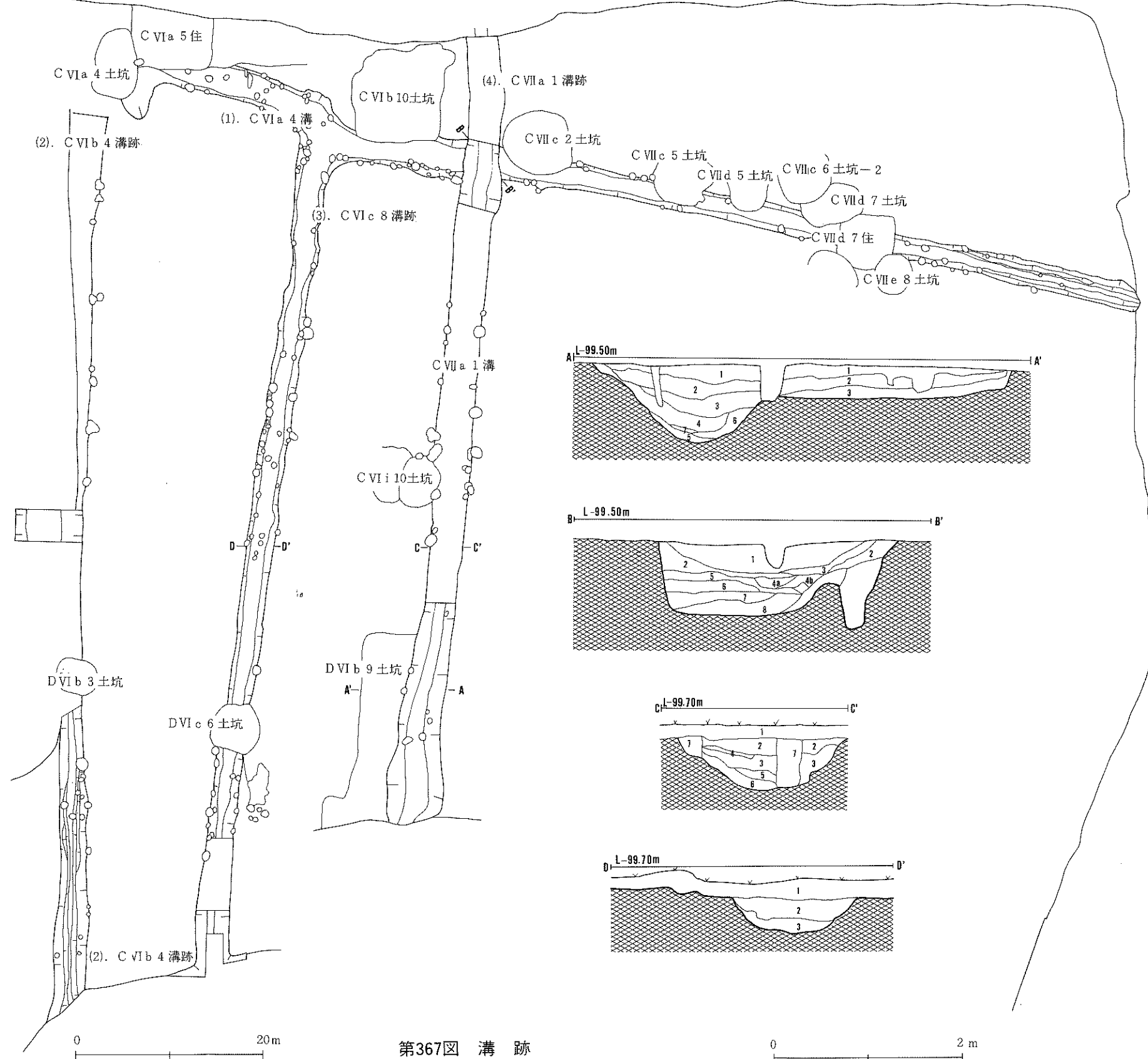
- 1 10Y R 2/2 黒褐色 シルト、CVIの4溝の埋土か
- 2 10Y R 3/2 黒褐色 シルト、鉄分が若干入る
- 3 10Y R 3/3 暗褐色 シルト、にぶい黄褐色土が多く混入
- 4a 10Y R 3/3 暗褐色 シルト
- 4b 10Y R 3/3 暗褐色 シルト、4aに灰が混入したもの
- 5 7.5Y R 3/3 暗褐色 シルト、炭や焼土が混入
- 6 10Y R 3/3 暗褐色 シルト、炭や焼土が若干混入
- 7 10Y R 2/1 黒色 シルト、炭化物の多く混入する層
- 8 10Y R 6/4 にぶい黄褐色 粘土

C VII a 1 溝跡

- 1 10Y R 2/2 黒褐色 ~暗褐色シルト、水田の耕作土
- 2 10Y R 3/4 暗褐色 シルト、黄褐色土が粒状に混入
- 3 10Y R 3/4 暗褐色 シルト、黄褐色土がやや多く混入
- 4 10Y R 5/6 黄褐色 火山灰土、汚れた地山
- 5 10Y R 4/4 褐色 シルト、黒褐色土と黄褐色土若干混入
- 6 10Y R 4/3 にぶい黄褐色 火山灰土、汚れた地山
- 7 10Y R 2/2 黒褐色 シルト、柱穴の埋土

C VI c 8 溝跡

- 1 10Y R 2/2 黒褐色 シルト、水田の耕作土、黄褐色土若干混入
- 2 10Y R 2/2 黒褐色 シルト、黄褐色土や炭が若干混入
- 3 10Y R 2/3 黒褐色 シルト、黄褐色土や淡黄色粘土が多く混入



第367図 溝跡

(2) C VI b 4 溝跡 (第367図)

北端が東館の西端から23mのグリッドC VI b 4にあり、その他点からほぼ真南へ約47m延びて旧段丘崖へ達し、崖下低地へ落ちている。北端はC VI a 4 溝跡と合流する様相を示すが、確認はしていない。南端から約15mから以北は中世のC VI a 3 溝跡によって削平を受け、僅かな土層変化としてC VI a 3 溝跡の東側に幅狭く並行している。他に中世の柱穴状土坑とも重複する。北端の幅は不明であるが、南端部で1.5m～1.8mの幅があり、北寄りには狭くなる傾向がある。深さも幅同様北側は定かではないが、南端部で約0.6m、C VI a 3 溝跡との重複部で0.45m位と南に寄るほど深くなる傾向を示し、底面レベルもこの状況に準じている。埋土はC VI a 4 溝跡のそれと同様で、黒褐色土がレンズ状に堆積していることから、自然堆積による埋没を示すものであろう。

遺物の出土はない。

(3) C VI c 8 溝跡 (第367図、写真図版58)

北端が東館西端の東約36mのグリッドC VI c 8に位置し、その地点からN-5°-Eの方向に約43m延びて旧段丘崖に達し、崖下の低地に落ちる。北端はC VI a 4 溝跡と合流する。その他多くの中世の柱穴状土坑や溝跡、縄文時代の陥し穴状遺構と重複する。幅は若干の異同はあるがほぼ1.2m～1.5mの範囲で、深さは南端で0.4m前後、中央部から以北は0.3m位と、南の方が幾分深い様相を示す。埋土はC VI b 4 溝跡と大差ないが、黒褐色土が堆積し、混入物によって3層に細分されている。

遺物は土師器の甕が3個体15点、須恵器坏が2個体5点が中央部より北側で出土しているが、小破片の出土であるため実測不能である。土師器・須恵器ともロクロ成形である。

(4) C VII a 1 溝跡 (第367図、写真図版58)

東館の西端から約45m東のグリッドC VII a 1に北端が位置し、N-5°-Eの方向に約42m南方へ延びてD VI e 7 溝跡に削平され、さらに7m南で段丘崖に達するものと推定される。北端から南へ6mの地点でC VI a 4 溝跡と重複するが、埋土の断面観察から本溝跡の方が新しい遺構である。その他多くの中世の柱穴状土坑や土坑と重複している。幅は南端部が3m、北端部が約2mと南寄りの方が広くなり、深さは南端部で約0.85m、北端部で0.7m位と南に寄るほど深くなる傾向がみられる。埋土は8層に細分されるが、上位が黒色土、中位が暗褐色土、下位は褐色土が堆積し、その様相はほぼ共通する。いずれもレンズ状堆積や平面的な堆積状況を示すことから、自然堆積による埋没を示すものであろう。

遺物は、埋土内から土師器の坏が1個体1点、甕が2個体2点出土しているが、いずれも小破

片のため実測不能である。坏・甕ともロクロ成形で平安時代に位置づけられるであろう。

2. 遺物

古代に属する遺物には土師器・須恵器の土器類と石製品としての勾玉がある。しかし、全体で見るとそのほとんどを土器類が占めている。

1) 土器類

土師器・須恵器を合わせた出土点数は、破片数1,810点、個体数1,017個体である。出土地点別にみると、西館から破片数531点、個体数349個体、東館は破片数1,271点、個体数656点の出土で、東館からの出土が西館の倍以上と、本遺跡の古代に関連する主体は東館にあることを如実に示している。さらにグリッド別にみると、CV区・CVI区・CVII区からの出土が合わせて808点と全体の44.6%を占めている。土師器の出土は破片数で1,469点、個体数で722個体で、須恵器の破片数345点、個体数で295点の出土と、土師器の出土が圧倒的に多い。これらの出土点数のうち、1,339点は中世の土坑や溝跡、柱穴状土坑と古代の遺構から、471点は粗掘り中の出土である。

以上の中から、本報告書には、実測図、拓影図合わせて249点掲載した。

(1) 土師器

出土した破片総数1,469点の中に個体が識別できる722個体を含み、これらを器種別にみると、坏は破片数782点に399個体、甕は624点に316個体、鉢と埴が55点に4個体、器種不明が8点に3個体の組成になる。

以上の中から坏76個体、甕15個体、壺1個体、高台付坏1個体、埴3個体、鉢1個体を掲載した。

〈坏〉 (第23表、第368～380図、写真図版127～130)

掲載した76個体はいずれもロクロ使用の成形であるが、完形になるものは11個体(82・83・85・89・95・115・150・169・227・230・232)のみで他は、口縁部～体部を残すもの13個体、体部～底部を残存する52個体が含まれる。また、内面を黒色処理するものは8個体(44・54・63・86・139・175・220・221)と少なく、他はいずれも黒色処理のない無調整である。底部はすべて回転糸切りによって切り離され、底面や体部下端の筧による再調整は全くみられない。

大きさをみると、口縁部径は最大18cm台1個体～8cm台1個体まで含まれるが、12cm台4個体、13cm台3個体、14cm台9個体、15cm台5個体、16cm台2個体、17cm台1個体の構成を示し、平均すると14.4cmとなる。器高は最大5.5cm1個体から最小2cm1個体まで各種みられるものの、4.6cm～5.2cmの範囲に10個体が入り、平均値では4.26cmである。底部径は最大7.6cm、最小4.1cmまで各種含まれるが、約半数の27個体が6cm～6.8cm台に入り、平均値は6.14cmである。

また、体部の外面に墨書をもつものが7点(83・84・89・96・98・145・167)出土している。書かれた文字は正確に判読できないが145は「寺」らしく見受けられる。

〈甕〉 (第23表、第368～380図、写真図版127～130)

1個体(149)を除いて他はロクロ使用による成形であるが、口縁部～底部を残すものがないため詳細は不明である。口縁部径が20cm以上の大型のものと15cm以下の小型がある。また、体部の外面に並行叩き具痕をもつ3個体(11・61・62)ともたない6個体(148・153・159・191・192・206)が含まれる。器形は長胴形をなす例が多いものの、117のように頸部が窄んで体部が若干膨らむ個体もある。体部上位～口縁部はロクロ目を良く残して再調整は認められないが、中位～下位にかけては篋で削りや撫での再調整を入れる例が多くみられる。口縁部は大型・小型に関係なく外方にくの字状に外反するが、口唇は角張るもの、上方に薄く挽き出されるもの、やや丸味をもつもの等がある。

〈壺〉 (第23表、第369図37、写真図版128)

壺としたものはCIV区の門跡を構成する柱穴状土坑の埋土内から出土した肩部破片(37)を当てたが、器面に並行叩き具痕を明瞭に残し、それも土師器甕にみられるそれとは異なり所謂須恵器にみられる叩き具痕である。しかし、輪積み痕を明瞭に残すともに酸化炎焼成されていることから土師器としたものである。

〈高台付坏〉 (第23表、第372図116、写真図版129)

CVII i 10土坑から出土した1個体(116)のみである。ロクロ成形された非内面黒色処理の坏にハの字状に斜外方に踏ん張る高さ1.4cmの高台を付したものである。高台を付けない坏と比較すると大型で、底径9.8cm、高台径10.8cmである。

〈埴〉 (第23表、第373図118～120、写真図版129)

CVII i 10土坑の埋土から出土した3点(118～120)がこれに相当する。底部を残存しないため全体の形状は不明であるが、体部は直線的に外傾するもの(118)、内湾気味に外傾するもの

(119)、内湾気味に外傾した体部が上位で直立気味に立ち上がる3型がある。また、118は粘土紐巻き上げで成形された後ロクロを使用しないで調整されたものらしい。119～120はロクロ使用成形で体部上位にロクロ目、下位に篋削りや篋撫での調整痕が入る。大きさは、118・119が口縁部径35.9cm、35cmとほぼ同じであるが、120は21.5cmと小型である。

〈鉢〉 (第23表、第371図87、写真図版129)

C VII i 2 土坑の埋土内から1点(87)出土している。口縁部径25.6cm、器高10.8cm、底径16.4cmの大きさである。ロクロ成形され、体部外面の下半を篋削りで調整している。体部上位はロクロ目を残し、口縁部は外反し、口唇部は角張る。

(2) 須恵器

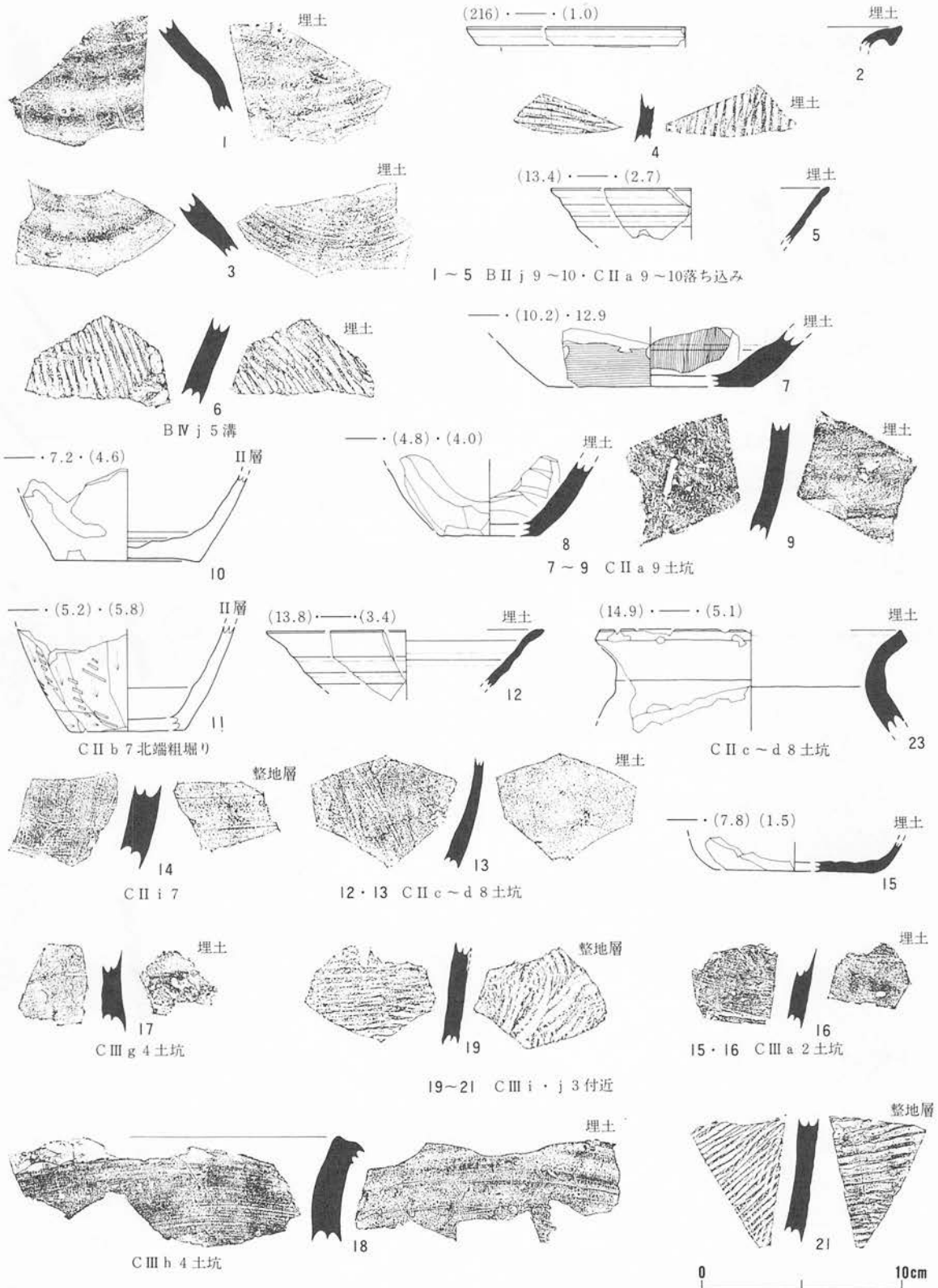
破片総数345点の中には295個体の破片が含まれ、その中から坏43個体の実測図と甕94個体、瓶14個体の拓影図や実測図を掲載した。

〈坏〉 (第23表、第368～380図、写真図版127～130)

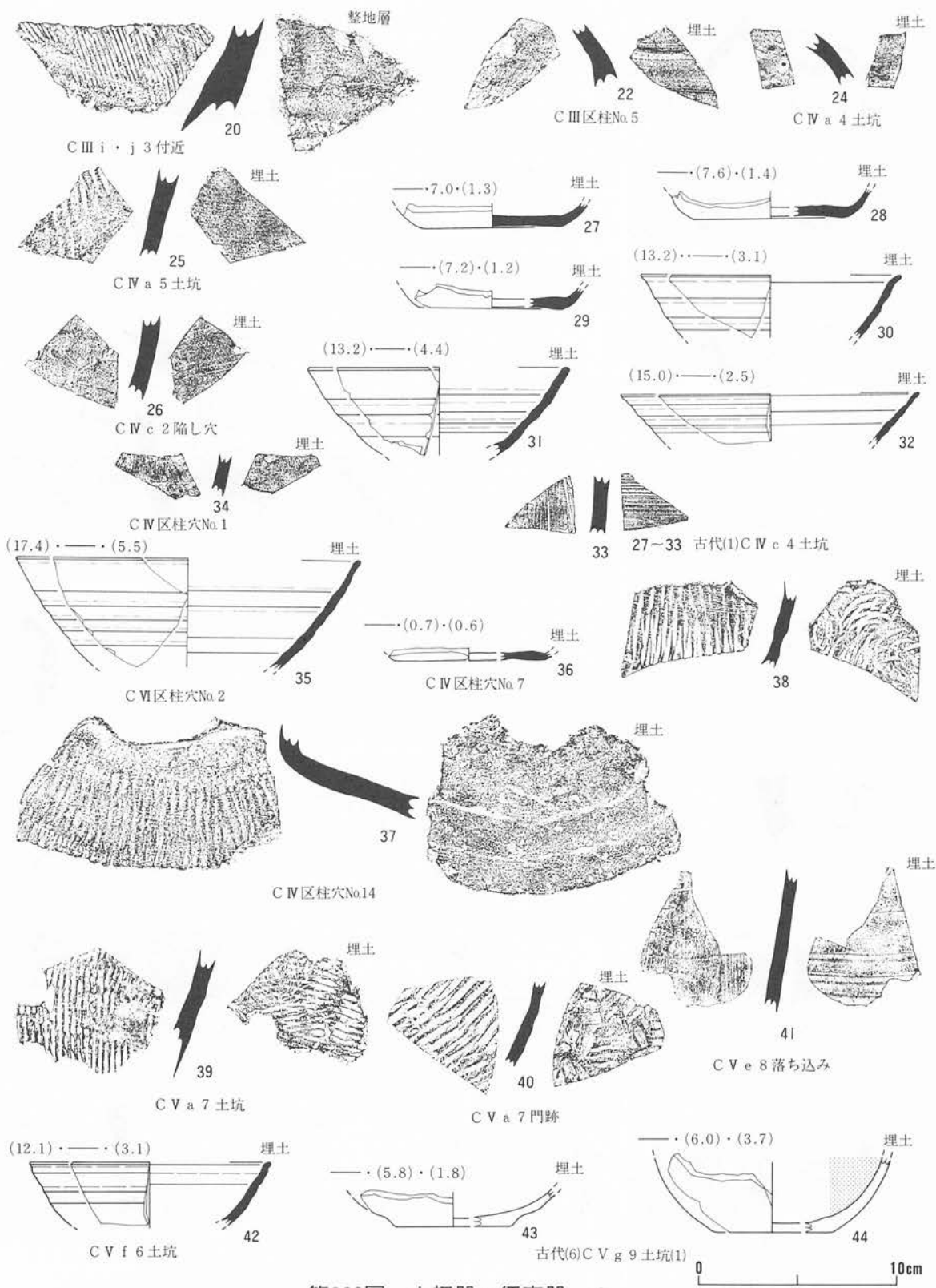
43個体はいずれもロクロ使用成形であるが、底部の切り離しが回転篋切りのもの12点(15・27～29・50・58・65・66・75・136・143・235)と回転糸切りのものを31点含む。大きさをみると、口縁部径は最大17.7cmから最小11cmまで各種含まれるが、平均すると13.98cm位となる。底径は、回転糸切りのものが最大7.8cmから最小4.7cmまでみられ平均すると5.96cmであるのに対し、回転篋切りの場合は最大8cm～最小6cmで、平均すると7.3cmと前者より1cm位大きく作られている。器高は全体の平均では4.38cmであるが、回転糸切りの場合は4.7cm、回転篋切りの場合は3.7cmと低く作られている。口縁部径についても同じようにみると、糸切り14cm、篋切り14.35cmと篋切りの方が大きい。以上から回転篋切りのものは、口縁部径と底部径は回転糸切りのそれより大き目であるが器高が低いという特徴をもつ。

〈甕〉 (第23表、第368～380図、写真図版124～130)

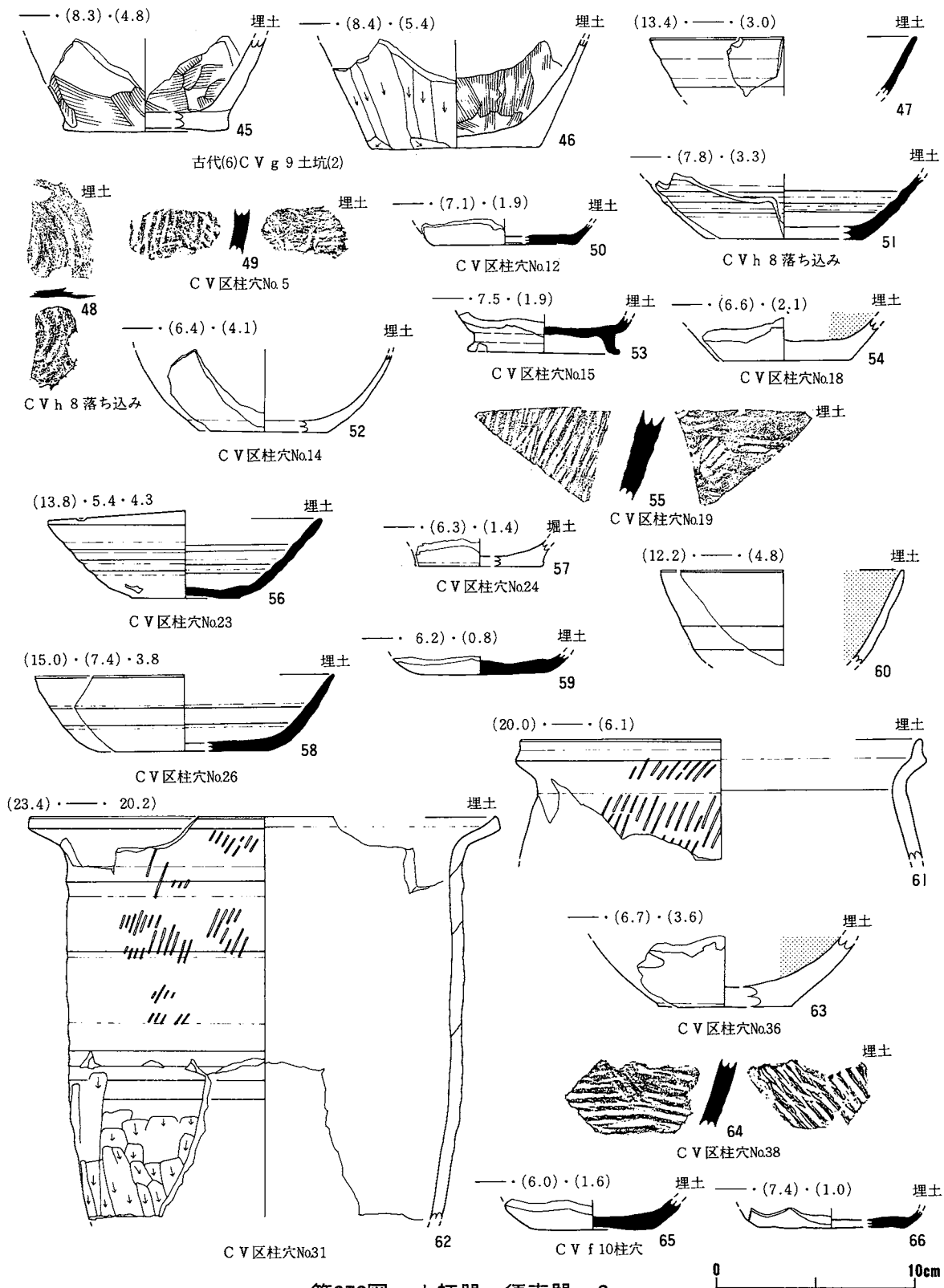
掲載した94個体に完形となるものはまったく含まず、口縁部や底部の破片は可能な限り図化した。体部破片は拓影図で掲載した。破片の状態で出土しているため全体の形状が不明のため甕と一括したが、この中に器面調整が叩き板による叩き締めをもつものと篋削りによるものがみられる。さらに、前者には内面にも当て具痕をもつものと最終的に篋で撫でて消去するものが含まれる。叩き具痕はいずれも並行文で一部に擬格子文らしいものがみられる。内面の当て痕には並行文、同心円文、青海波文、円形凸文がみられる。



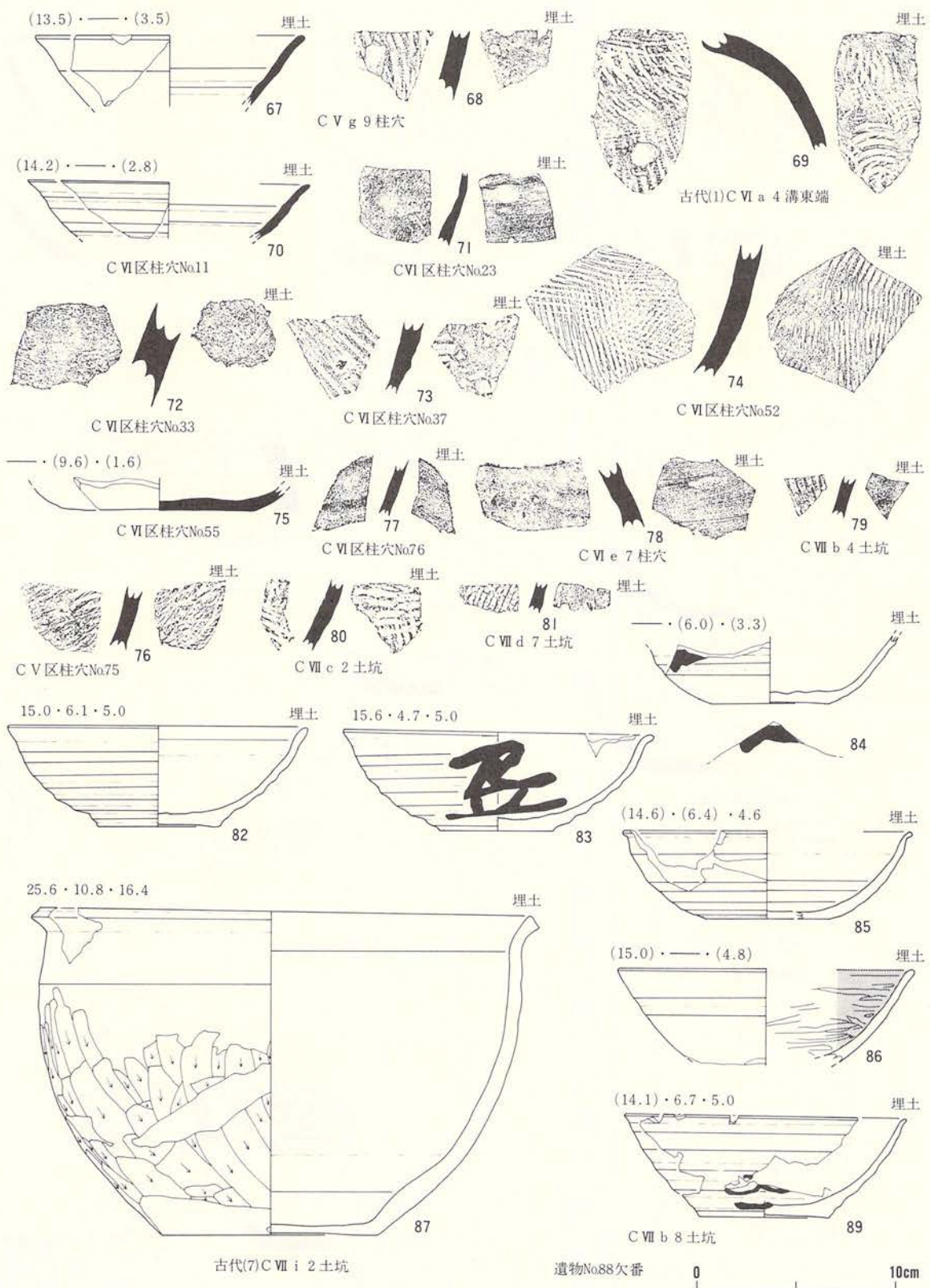
第368図 土師器・須恵器一 I



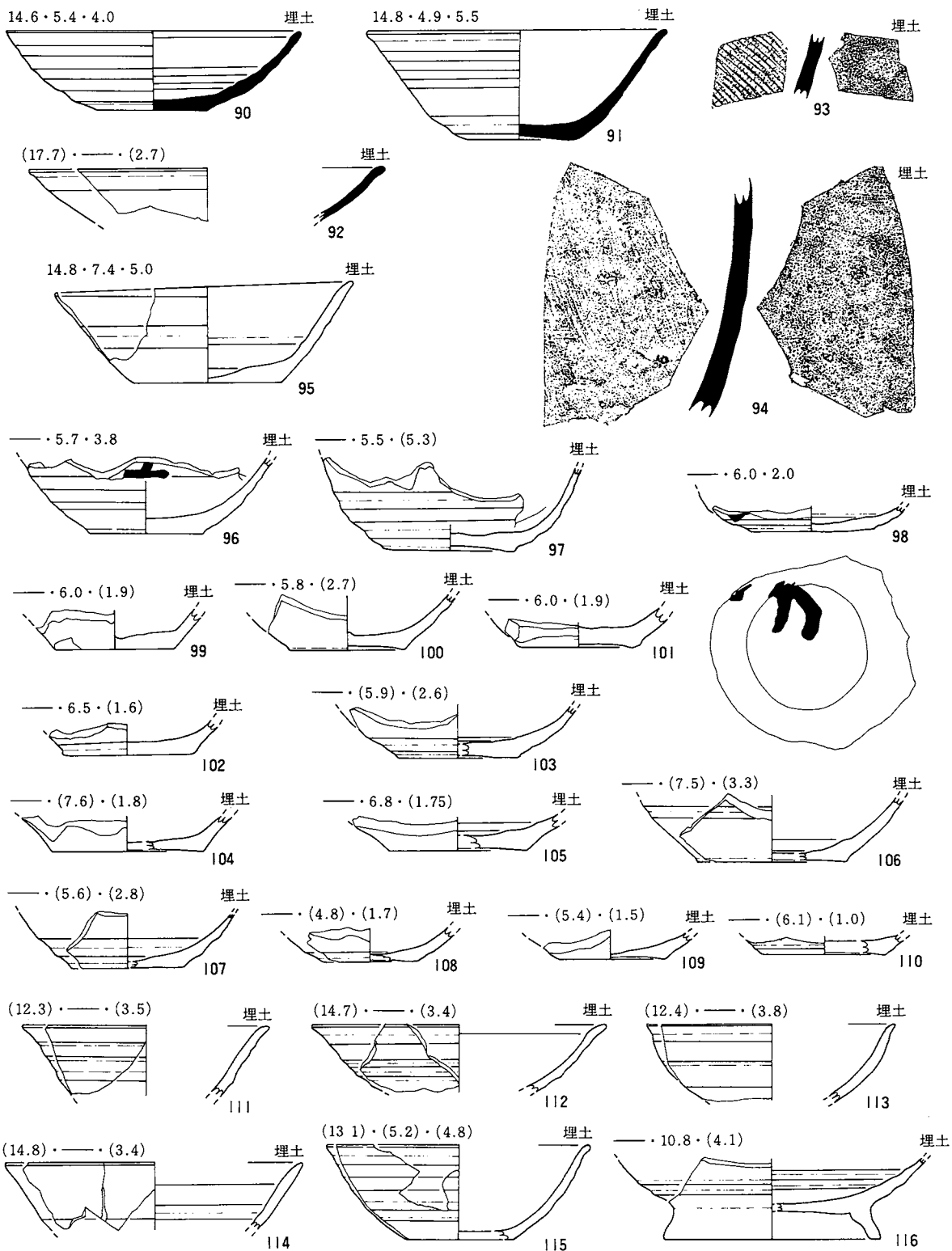
第369図 土師器・須恵器一 2



第370図 土師器・須恵器—3

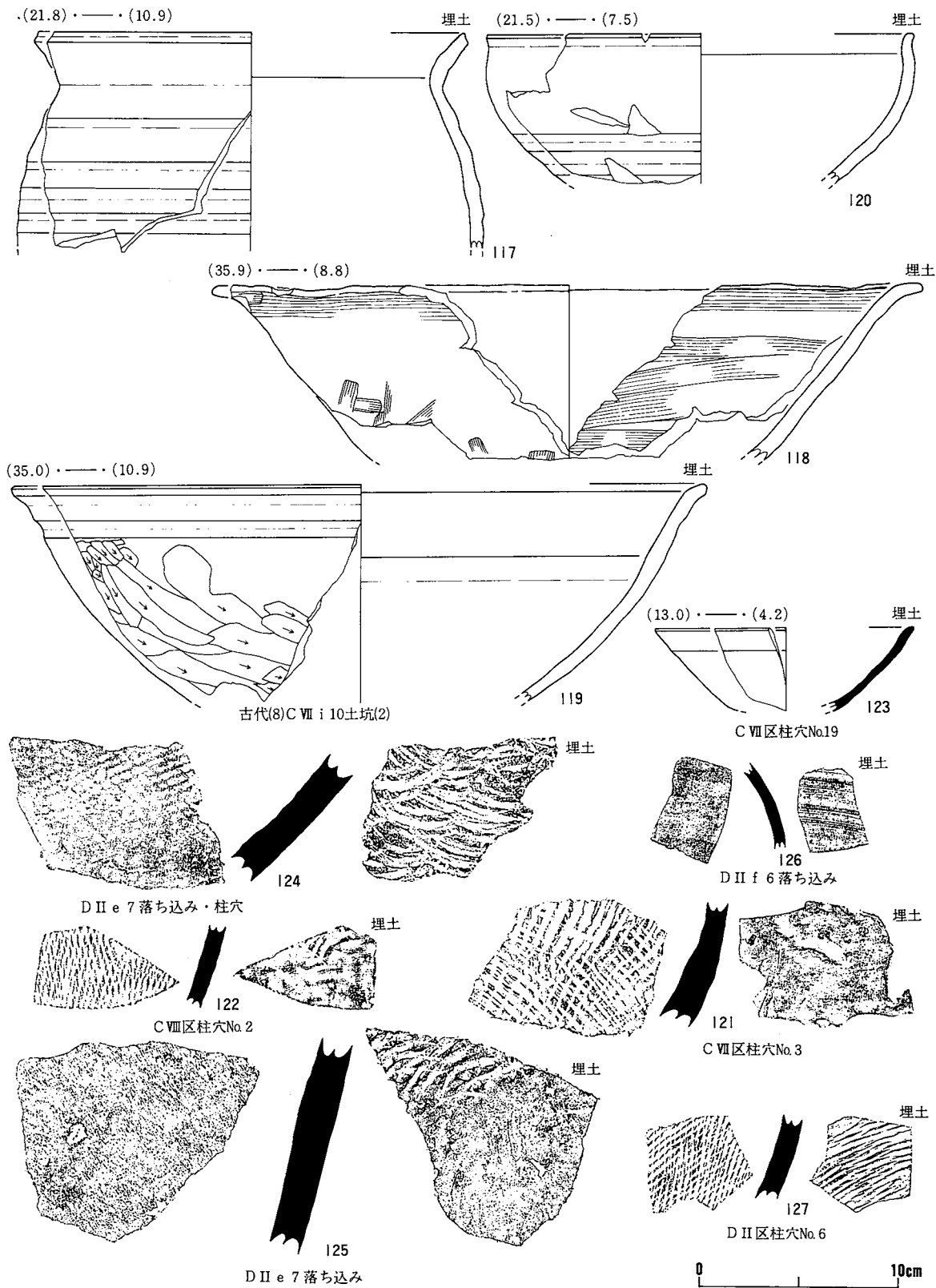


第371図 土師器・須恵器—4

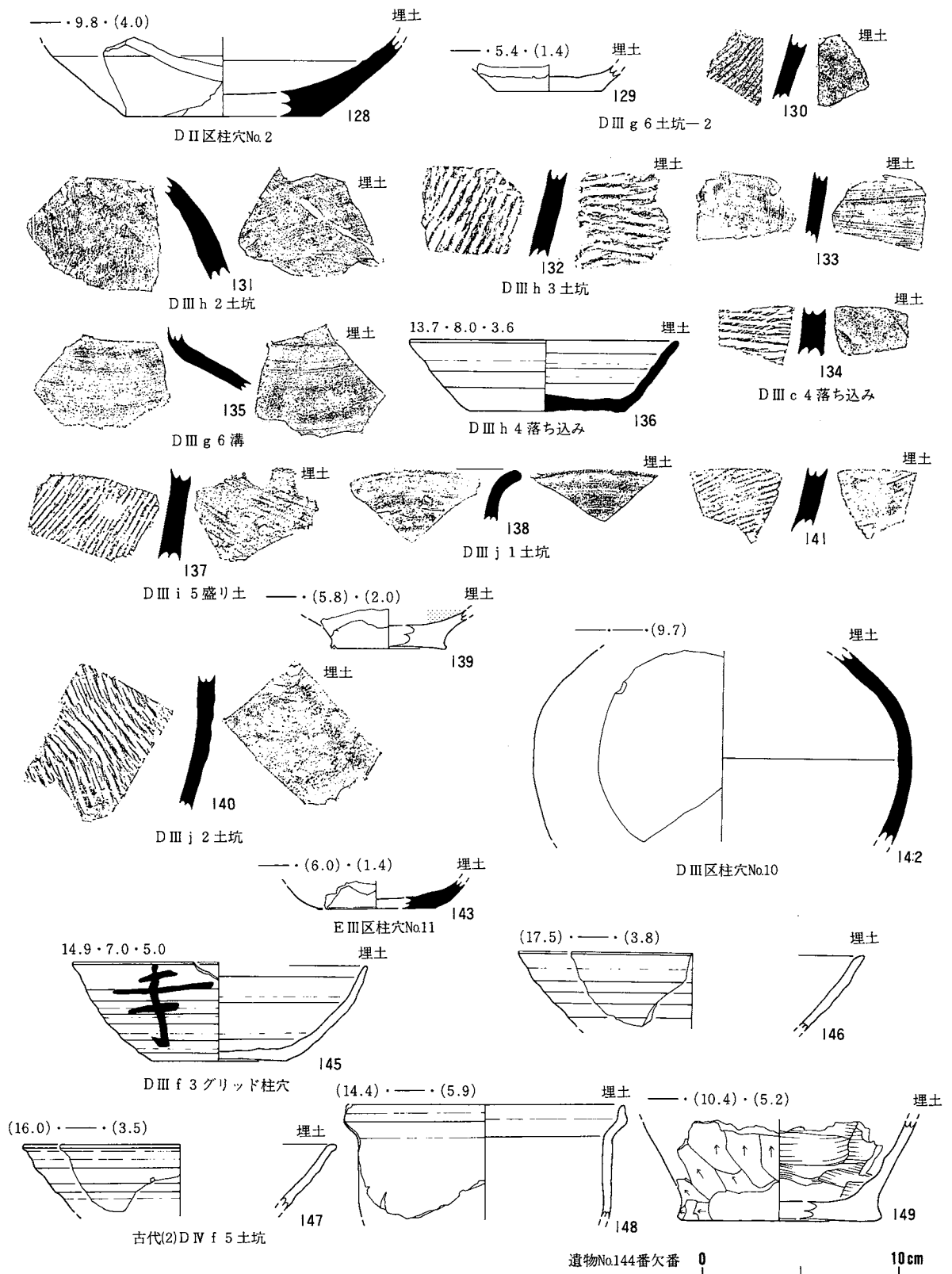


古代(8)CⅦ i 10土坑(1)

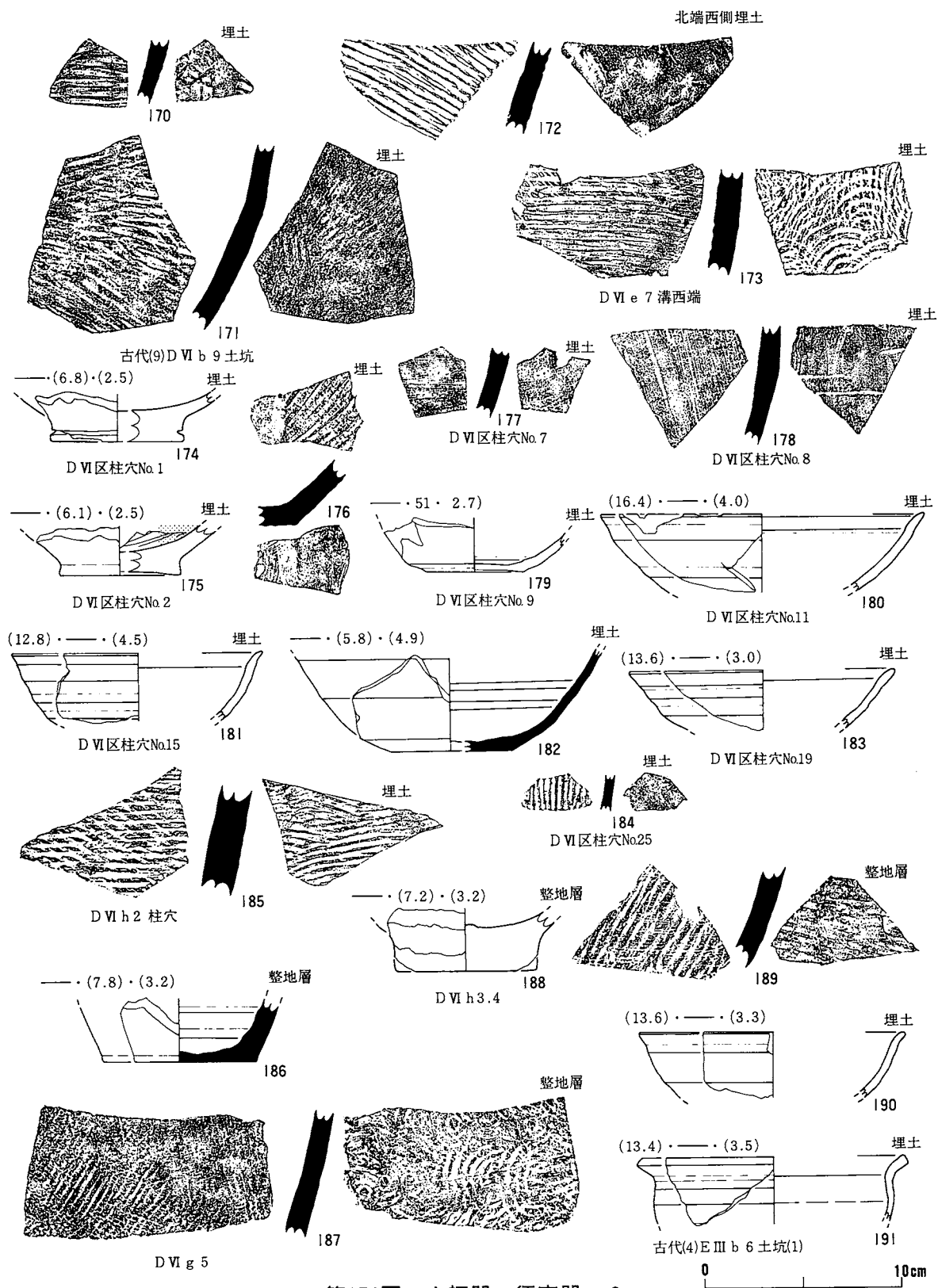
第372图 土師器·須恵器—5



第373図 土師器・須恵器一6

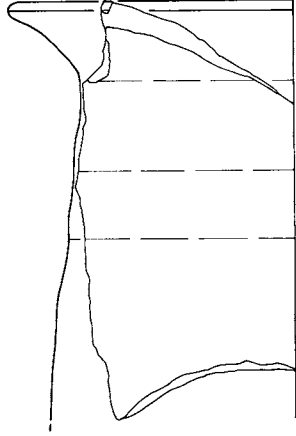


第374図 土師器・須恵器-7



第376図 土師器・須恵器—9

(22.9)・——・(16.8)



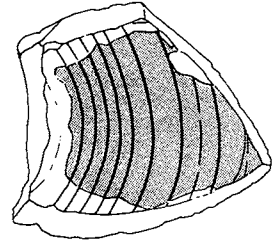
古代(4)E III b 6 土坑(2)

埋土

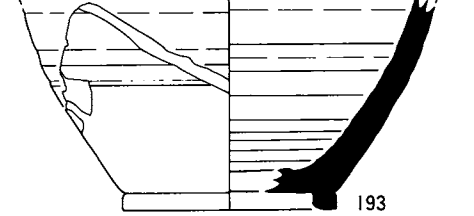


192

転用碗の範囲



——・(8.6)・(8.7)



埋土

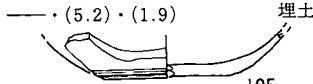
193

埋土



194

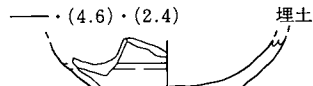
E III b 5 落ち込み



——・(5.2)・(1.9)

埋土

195



——・(4.6)・(2.4)

埋土

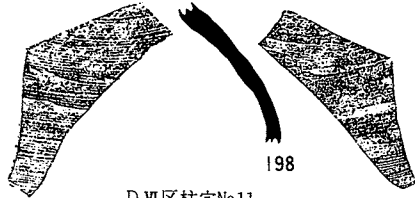
196

古代(5)E IV b 1 土坑-2



埋土

D III g 6 溝



198

D VI 区柱穴No.11



埋土

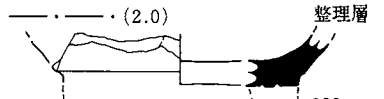
200



埋土

201

D III g 6 溝

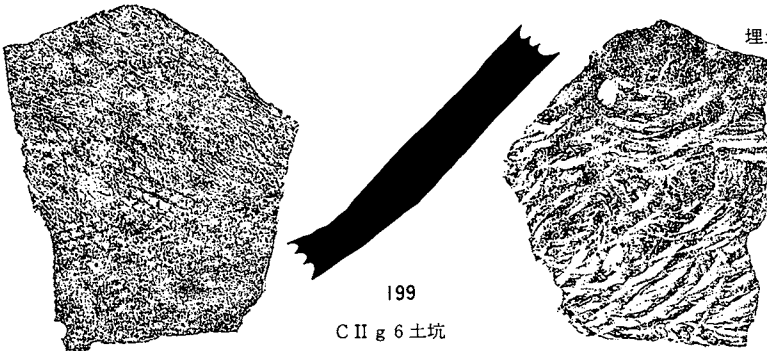


——・(2.0)

整理層

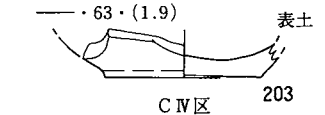
202

C II 区



199

C II g 6 土坑

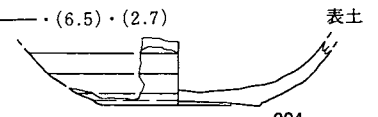


——・63・(1.9)

表土

203

C IV 区

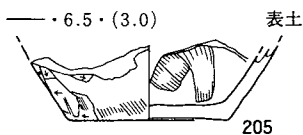


——・(6.5)・(2.7)

表土

204

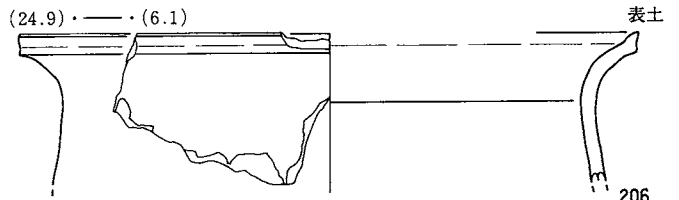
D III 区



——・6.5・(3.0)

表土

205



(24.9)・——・(6.1)

表土

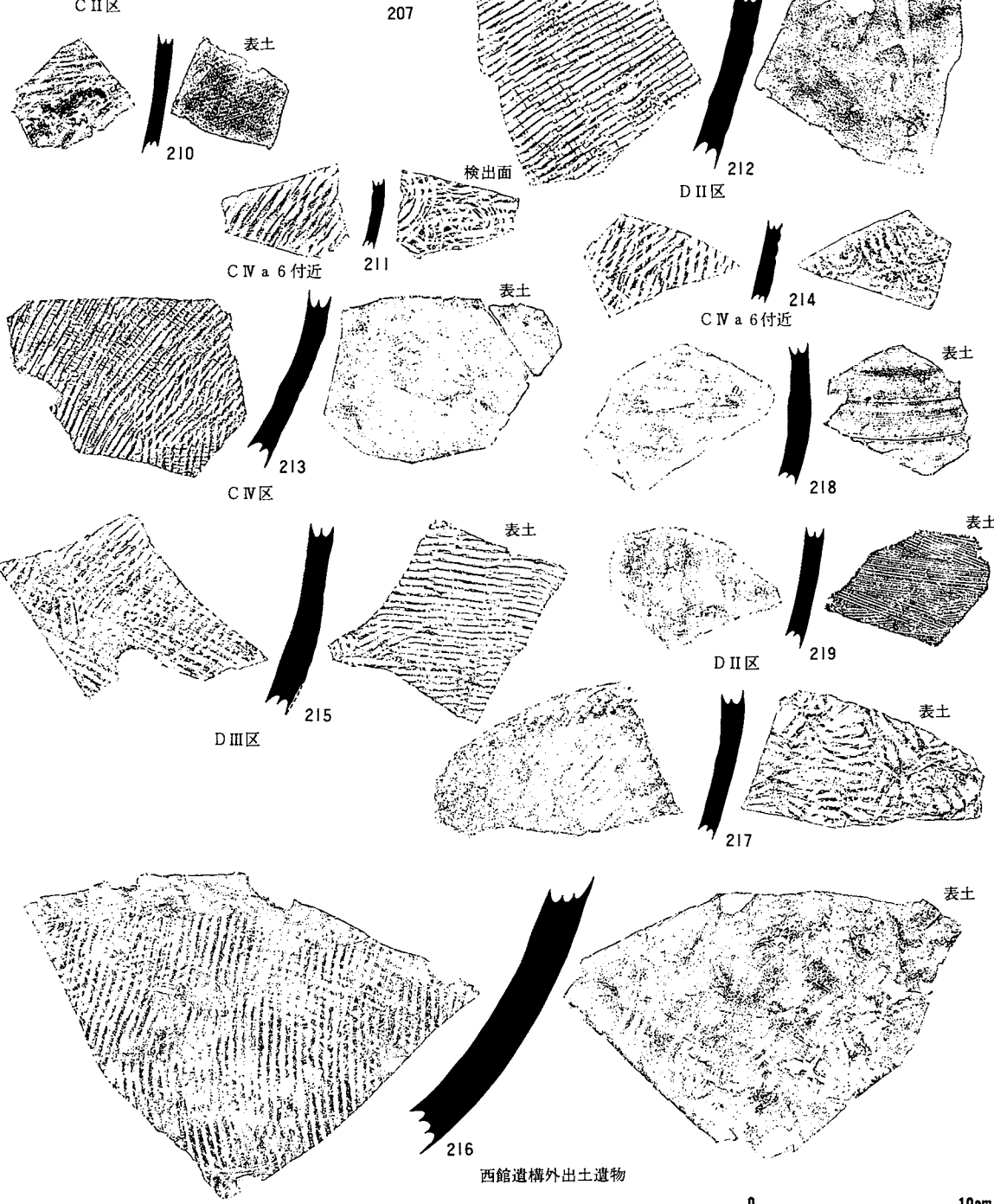
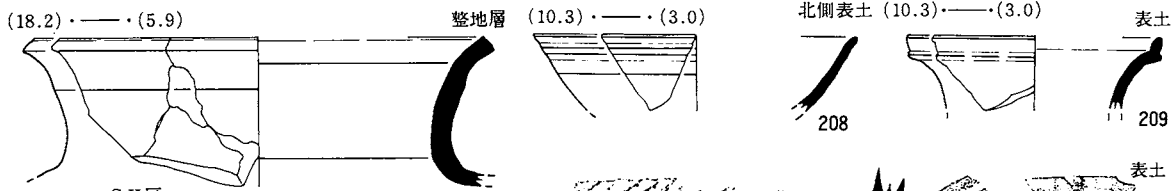
206

D IV 区

西館遺構外出土遺物

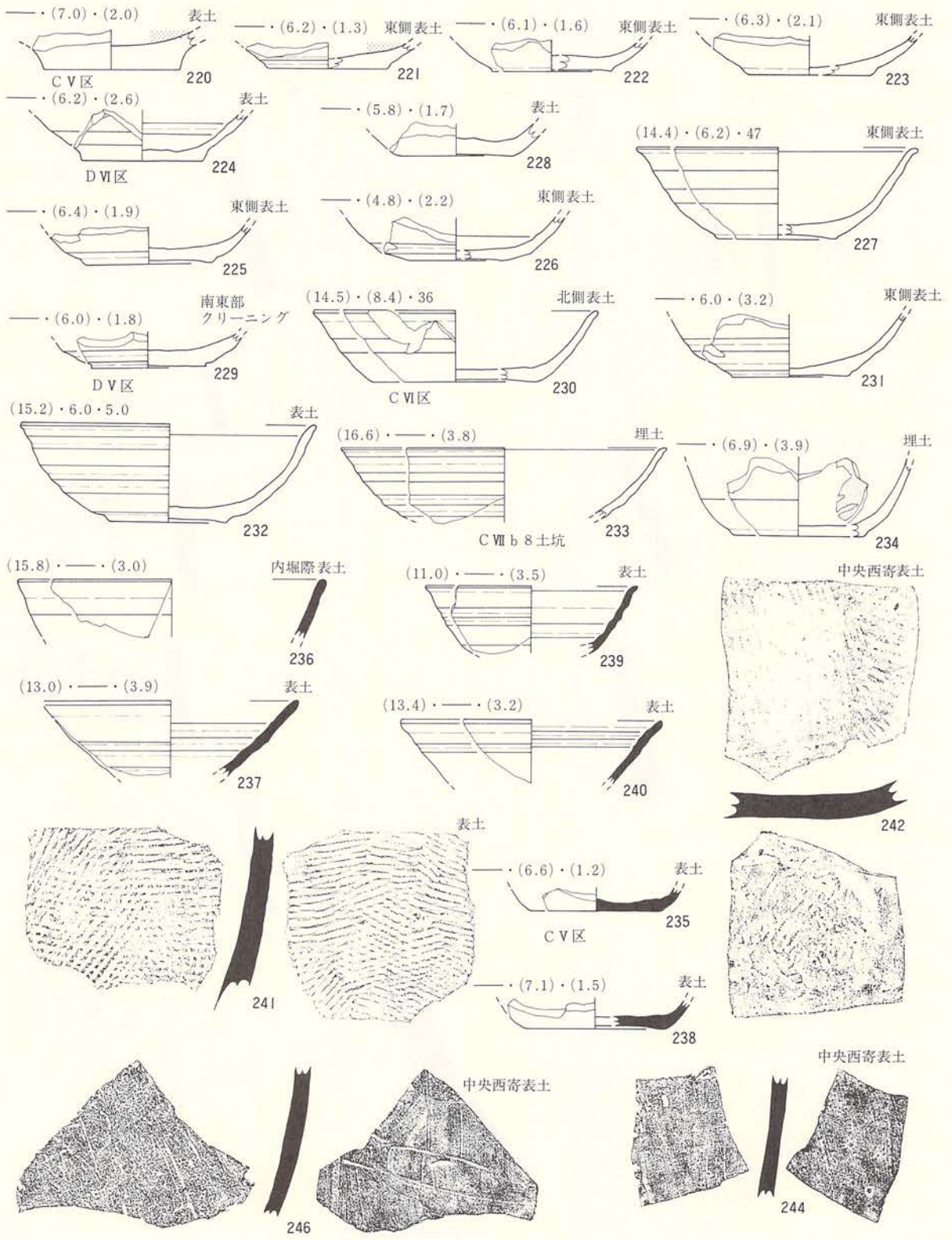
0 10cm

第377図 土師器・須恵器-10



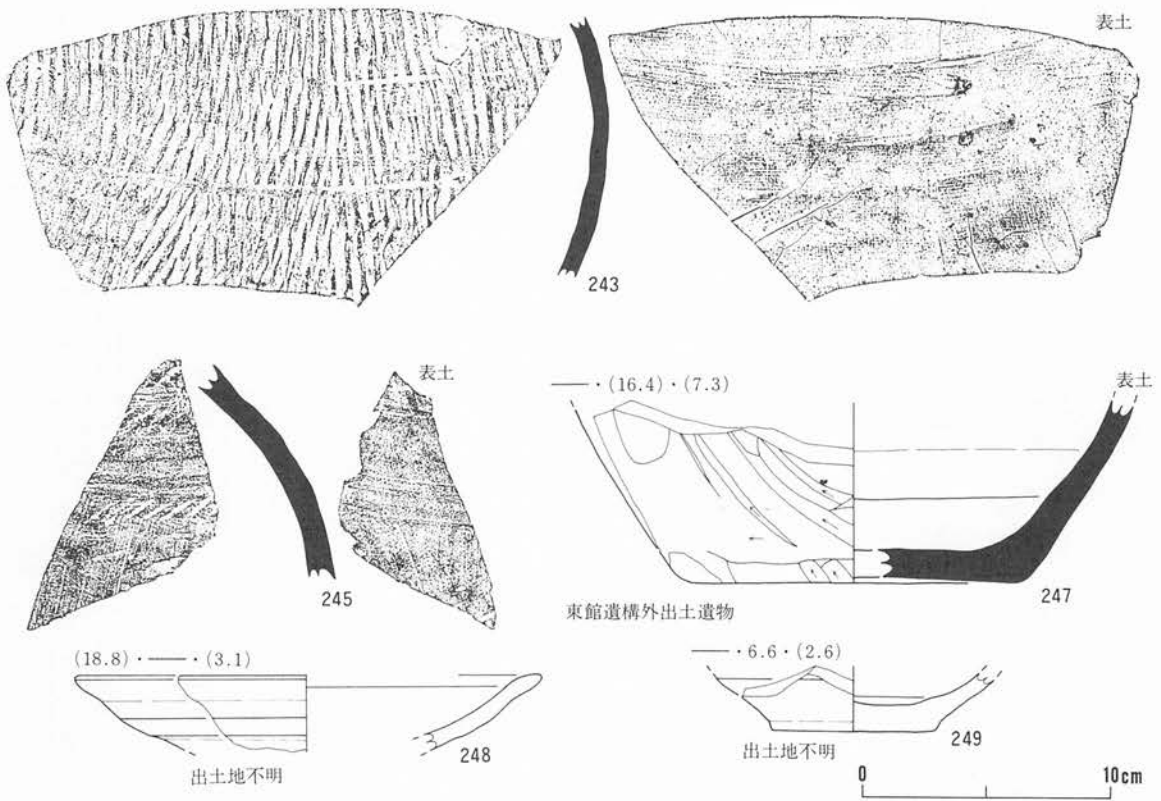
西館遺構外出土遺物

第378図 土師器・須恵器一Ⅱ



第379図 土師器・須恵器一12

0 10cm



第380図 土師器・須恵器一13

第23表 土師器、須恵器一覧表

No	遺構名	層位	種類	器種	部位	法量(cm)			成形	調整						備考	図版	写真
						口径	底径	器高		口縁部		体部		底部				
										内面	外面	内面	外面	内面	外面			
1	BIIj 9~10 CIIa 9~10 落ち込み	埋土	須恵器	瓶	肩部				ロクロ			ロクロ目 ヘラナデ	ロクロ目			表面黒色で、断面 暗褐色土。	368	124
2	BIIj 9~10 CIIa 9~10 落ち込み	埋土	須恵器	瓶か 壺	口縁部	(21.6)	—	(1.0)	ロクロ	ロクロ目	ロクロ目					自然釉が内面に つく。外面黒色、 断面灰褐色。	368	128
3	BIIj 9~10 CIIa 9~10 落ち込み	埋土	須恵器	瓶	肩部				ロクロ			ロクロ目	ロクロ目			表面灰色で、断面 暗灰褐色。	368	124
4	BIIj 9~10 CIIa 9~10 落ち込み	埋土	須恵器	壺か 壺	体部				不明			並行当て 具痕	並行叩き 具痕			小破片であるが、 大型品と推定され る。	368	124
5	BIIj 9~10 CIIa 9~10 落ち込み	埋土	須恵器	坏	口縁部	(13.4)	—	(2.7)	ロクロ	ロクロ目	ロクロ目					端部が跳りする。 明灰褐色。	368	128
6	BIVj 5溝	埋土	須恵器	大甕	体部				不明			並行当て 具痕	並行叩き 具痕			灰色、断面は灰褐 色。	368	124
7	CIIa 9~ 10溝	埋土	須恵器	壺か 壺	体下部 ~底部	—	(10.2)	(2.9)	不明			縦ハケメ	横ハケメ	縦ハケメ	ヘラ削り	外面に黒色の自然 釉断面セピア色。	368	128
8	CIIa 9~ 10溝	埋土	須恵器	壺	体下部 ~底部	—	(4.8)	(4.0)	不明			横ヘラ 削り	横ヘラ 削り		ヘラ削り	内外面とも黒色の 自然釉砂粒の 多い胎土。	368	128
9	CIIa 9~ 10溝	埋土	須恵器	壺か 壺	体部				ロクロ?			横 ロクロ目	縦ヘラ 削り			磨減がはげしい。	368	124
10	CIIb 7北端	II層	土師器	甕	体下部 ~底部	—	7.2	(4.6)	ロクロ			横 ロクロ目	縦ヘラ 削り	ロクロ目	回転 糸切り	二次焼成を受け ている	368	128
11	CIIb 7北端	II層	土師器	甕	体下部 ~底部	—	(5.2)	(5.8)	ロクロ			横 ロクロ目	縦ヘラ 削り後 並行叩き	不明	不明		368	128

12	CIIc~ d 8 土坑	埋土	須恵器	坏	口縁~ 体中部	(13.8)	—	(3.45)	ロクロ	ロクロ目	ロクロ目	ロクロ目	ロクロ目			灰褐色を示し、内面に層減痕あり。	368	128
13	CIIc~ d 8 土坑	埋土	須恵器	壘	体部				輪積み			縦指ナデ	斜ヘラ 削り			表面に黒色の自然軸	368	124
14	CIIi 7 整地層		須恵器	大壘	体部				輪積み			横ナデ痕	縦指ヘラ 削り			明褐色	368	124
15	CIIIa 2 土坑	埋土	須恵器	坏	体下部 ~底部	—	(7.8)	(1.5)	ロクロ			ロクロ目	ロクロ目	ロクロ目	回転ヘラ 切り	灰色	368	128
16	CIIIa 2 土坑	埋土	須恵器	壘か 甕	体部				ロクロ			ロクロ目	横ヘラ 削り			灰黒色	368	124
17	CIIIg 4 土坑	埋土	須恵器	壘か 甕	頸部				ロクロ	ロクロ目	ロクロ目					灰黒色	368	124
18	CIIIh 4 土坑	埋土	須恵器	大壘	口縁部				輪積み	ロクロ目	ロクロ目					断面セピア色	368	124
19	CIIIij 3 付近	整地 層	須恵器	壘	体部				輪積み			同心円 当て具痕	並行叩き 具痕			表面が黒色	368	124
20	CIIIij 3 付近	整地 層	須恵器	大壘	体下部				輪積み?			横ナデ	並行叩き 具痕			表面が灰黒色	369	124
21	CIIIij 3 付近	整地 層	須恵器	大壘	体部				輪積み?			並行当て 具痕	並行叩き 具痕			灰色	368	124
22	CIII区柱No 5	埋土	須恵器	甕	肩部				ロクロ			ロクロ目	ロクロ 後削り				369	124
23	CIIc~ d 8 土坑	埋土	須恵器	壘	口縁部	(14.9)	—	(5.1)	輪積み?	横ナデ 輪積み痕	並行叩き 具痕 横ナデ					黒色無軸	368	124
24	CIVa 4 土坑	埋土	須恵器	壘か 甕	肩部				ロクロ			ロクロ目	ロクロ目			黒色無軸	369	124
25	CIVa 5 土坑	埋土	須恵器	壘	体部				不明			横ナデ	並行叩き 具痕後 横カキ目			断面濃灰褐色	369	124
26	CIVc 2 土坑-2	埋土	須恵器	壘	体部							横ナデ	ヘラ削り			無軸灰色	369	124
27	CIVc 4 土坑	埋土	須恵器	坏	体下部 ~底部	—	7.0	(1.3)	ロクロ			ロクロ目	ロクロ目	ロクロ目	回転 ヘラ切り	灰色無軸	369	128
28	CIVc 4 土坑	埋土	須恵器	坏	体下部 ~底部	—	(7.6)	(1.45)	ロクロ			ロクロ目	ロクロ目	ロクロ目	回転 ヘラ切り	灰色無軸	369	128
29	CIVc 4 土坑	埋土	須恵器	坏	体下部 ~底部	—	(7.2)	(1.2)	ロクロ			ロクロ目	ロクロ目	ロクロ目	回転 ヘラ切り	灰色無軸	369	128
30	CIVc 4 土坑	埋土	須恵器	坏	口縁~ 体中部	(13.2)	—	(3.15)	ロクロ	ロクロ目	ロクロ目	ロクロ目	ロクロ目			灰色無軸	369	128
31	CIVc 4 土坑	埋土	須恵器	坏	口縁~ 体中部	(13.2)	—	(4.45)	ロクロ	ロクロ目	ロクロ目	ロクロ目	ロクロ目			灰色無軸	369	128
32	CIVc 4 土坑	埋土	須恵器	坏	口縁~ 体中部	(15.0)	—	(2.5)	ロクロ	ロクロ目	ロクロ目	ロクロ目	ロクロ目			灰色無軸	369	128
33	CIVc 4 土坑	埋土	須恵器	壘	体部				ロクロ?			横ナデ	ヘラ削り			灰色無軸	369	124
34	CIV区柱穴 No 1	埋土	須恵器	壘	体部				ロクロ			ロクロ目	ヘラ削り			灰色無軸	369	124
35	CIV区柱穴 No 2	埋土	須恵器	坏	口縁~ 体下部	(17.4)	—	(5.5)	ロクロ	ロクロ目	ロクロ目	ロクロ目	ロクロ目			一部に黒色自然軸あり	369	128
36	CIV区柱穴 No 7	埋土	須恵器	坏	底部	—	(9.5)	(0.6)	ロクロ					ロクロ目	回転ヘラ 切り	灰色無軸	369	128
37	CIV区柱穴 No 14	埋土	土師器	壘	胴部				輪積み			輪積み痕	並行叩き 具痕			須恵の可能性あり	369	128
38	CIV区柱穴 No 14	埋土	須恵器	壘	体部				不明			背海波 当て具痕	並行叩き 具痕と 横カキ目			表面に黒色自然軸	369	124
39	CVa 7 土坑	埋土	須恵器	大壘	体部				不明			並行当て 具痕	並行叩き 具痕			環元不足	369	124
40	CVa 7 門跡	埋土	須恵器	大壘	体部				不明			矢羽状 当て具痕	並行叩き 具痕			外面に自然軸	369	124

41	CVe 8 落ち込み	埋土	須惠器	壘	体部				ロクロ			ロクロ目	ヘラ削り			断面セピア色	369	124
42	CV f 6 土坑	埋土	須惠器	坏	口縁～ 体下部	(12.1)	—	(3.1)	ロクロ	ロクロ目	ロクロ目	ロクロ目	ロクロ目			口縁端部に自然 軸	369	128
43	CV g 9 土坑	埋土	土師器	坏	体下部 ～底部	—	(5.8)	(1.8)	ロクロ			ロクロ目	ロクロ目	ロクロ目	回転糸 切り	赤焼	369	128
44	CV g 9 土坑	埋土	土師器	坏	体下部 ～底部	—	(6.0)	(3.7)	ロクロ			ロクロ目	ロクロ目	ロクロ目	回転糸 切り	内面黒色処理	369	128
45	CV g 9 土坑	埋土	土師器	壘	体下部 ～底部	—	(8.3)	(4.8)	輪轂み?			ヘラナデ	ナデ	ナデ	木葉痕 あり		370	128
46	CV g 9 土坑	埋土	土師器	壘	体下部 ～底部	—	(8.4)	(5.4)	輪轂み?			指ナデ	ヘラ削り	指ナデ	ナデ		370	128
47	CV g 9 土坑	埋土	須惠器	坏	口縁部	(13.4)	—	(3.0)	ロクロ	ロクロ目	ロクロ目					小破片	370	128
48	CV h 8 落ち込み	埋土	須惠器	坏	底部				ロクロ				ロクロ目	回転ヘラ 切り		淡灰色	370	124
49	CV区柱穴 No5	埋土	須惠器	大壘	体部				不明			並行 当て具痕	並行 叩き具痕			環元不足	370	124
50	CV区柱穴 No12	埋土	須惠器	坏	体下部 ～底部	—	(7.1)	(1.3)	ロクロ			ロクロ目	ロクロ目	ロクロ目	回転ヘラ 切り		370	128
51	CV h 8 落ち込み	埋土	須惠器	坏	体中部 ～底部	—	(7.8)	(3.3)	ロクロ			ロクロ目	ロクロ目	ロクロ目	回転糸 切り	やや環元不足	370	128
52	CV区柱穴 No14	埋土	土師器	坏	体中部 ～底部	—	(6.4)	(4.1)	ロクロ			ロクロ目	ロクロ目	ロクロ目	回転糸 切り	磨滅はげしい	370	128
53	CV区柱穴 No15	埋土	須惠器	高台付 坏	底部	—	7.5	(1.9)	ロクロ				ロクロ目	回転ヘラ 切り	断面サンドイッ チ状	370	128	
54	CV区柱穴 No18	埋土	土師器	坏	体下部 ～底部	—	(6.6)	(2.1)	ロクロ			ミガキ 黒色処理	ロクロ目	ミガキ 黒色 処理	回転糸 切り	磨滅している	370	128
55	CV区柱穴 No19	埋土	須惠器	大壘	体部				不明			並行 当て具痕	並行 叩き具痕			黒色自然軸あり	370	124
56	CV区柱穴No23	埋土	須惠器	坏	口縁～ 底部	(13.8)	5.4	4.35	ロクロ	ロクロ目	ロクロ目	ロクロ目	ロクロ目	ロクロ目	回転糸 切り	1/2残存	370	128
57	CV区柱穴No24	埋土	土師器	坏	底部	—	(6.3)	(1.4)	ロクロ					ロクロ目	回転糸 切り	磨滅あり	370	128
58	CV区柱穴No26	埋土	須惠器	坏	口縁～ 底部	(15.0)	(7.4)	(3.8)	ロクロ	ロクロ目	ロクロ目	ロクロ目	ロクロ目	ロクロ目	回転ヘラ 切り	やや環元不足	370	128
59	CV区柱穴 No31	埋土	須惠器	坏	底部	—	(6.2)	(0.8)	ロクロ					ロクロ目	回転ヘラ 切り	環元不足	370	128
60	CV区柱穴 No31	埋土	土師器	坏	口縁～ 体下部	(12.2)	—	(4.8)	ロクロ	ミガキ 黒色処理	ロクロ目	ミガキ 黒色処理	ロクロ目			磨滅している	370	128
61	CV区柱穴 No31	埋土	土師器	壘	口縁～ 体上部	(20.0)	—	(6.1)	ロクロ	ロクロ目	並行 叩き目 ロクロ目	ロクロ目	並行 叩き目 ロクロ目			口唇上方挽き出 し	370	128
62	CV区柱穴 No31	埋土	土師器	壘	口縁～ 体中部	(23.4)	—	(20.2)	ロクロ	ロクロ目	並行 叩き目 ロクロ目	ロクロ目	並行 叩き目 ロクロ目			輪轂み痕あり	370	129
63	CV区柱穴 No36	埋土	土師器	坏	体下部 ～底部	—	(6.7)	(3.6)	ロクロ			ミガキ 黒色処理	ロクロ目	ミガキ 黒色処理	回転糸 切り	磨滅している	370	128
64	CV区柱穴 No38	埋土	須惠器	大壘	体部				不明			並行 当て具痕	並行 叩き具痕			環元不足	370	124
65	CV f 10柱穴	埋土	須惠器	坏	底部	—	3.0	(1.6)	ロクロ					ロクロ目	回転ヘラ 切り	環元不足	370	128
66	CV f 10柱穴	埋土	須惠器	坏	底部	—	(7.4)	(1.0)	ロクロ					ロクロ目	回転ヘラ 切り	濃灰色	370	128
67	CV g 9 柱穴	埋土	須惠器	坏	口縁～ 体中部	(13.5)	—	(3.5)	ロクロ	ロクロ目	ロクロ目	ロクロ目	ロクロ目			褐色色	371	124
68	CV g 9 柱穴	埋土	須惠器	大壘	体部				不明			ナデ痕 あり	並行 叩き具痕				371	124
69	CVJa 4 講東端	埋土	須惠器	瓶	肩部				不明			青海波文	並行 叩き具痕 カキ目			黒色自然軸あり	371	124

70	CVI区柱穴 No11	埋土	須恵器	坏	口縁～ 体部	(14.2)	—	(2.8)	ロクロ	ロクロ目	ロクロ目	ロクロ目	ロクロ目			断面褐色	371	128
71	CVI区柱穴 No23	埋土	須恵器	高か 埴	体部				ロクロ			ロクロ目	ヘラ削り			淡褐色、薄い釉あり	371	124
72	CVI区柱穴 No33	埋土	須恵器	大埴	底部				不明					青海波文	叩き具痕	灰色	371	124
73	CVI区柱穴 No37	埋土	須恵器	大埴	体部				不明			稜形状 当て具痕	並行 叩き具痕			灰色、自然釉あり	371	124
74	CVI区柱穴 No52	埋土	須恵器	大埴	体部				不明			並行 当て具痕	並行 叩き具痕			断面褐色	371	125
75	CVI区柱穴 No55	埋土	須恵器	坏	体下部 ～底部	—	(9.6)	(1.6)	ロクロ			ロクロ目 ?	ロクロ目 ?	ロクロ ?	回転 ヘラ切り	焼成不良品	371	128
76	CVI区柱穴 No75	埋土	須恵器	大埴	体部				不明			並行 当て具痕	並行 叩き具痕			黒色自然釉	371	124
77	CVI区柱穴 No76	埋土	須恵器	高か 埴	体部				ロクロ			ロクロ目	ロクロ目			黒色自然釉	371	124
78	CVIe 7柱穴	埋土	須恵器	埴	体部				ロクロ			ロクロ目	ロクロ目			黒灰色	371	124
79	CVII b 4土坑	埋土	須恵器	埴	体部				不明			円形凸面 当て具痕	並行 叩き具痕			黒色自然釉	371	124
80	CVII c 2土坑	埋土	須恵器	大埴	体部				不明			並行 当て具痕	並行 叩き具痕			焼成不良品	371	124
81	CVII d 7土坑	埋土	須恵器	埴	体部				不明			ナデ痕	並行 叩き具痕			擬格子状	371	124
82	CVII i 2土坑	埋土	土師器	坏	完形	15.0	6.1	5.0	ロクロ	ロクロ目	ロクロ目	ロクロ目	ロクロ目	ロクロ目	回転 糸切り	赤焼き	371	128
83	CVII i 2土坑	埋土	土師器	坏	口縁～ 底部	15.6	4.7	5.0	ロクロ	ロクロ目	ロクロ目	ロクロ目	ロクロ目	ロクロ目	回転 糸切り	赤焼き、墨書あり	371	128
84	CVII i 2土坑	埋土	土師器	坏	体部～ 底部	—	6.0	(3.3)	ロクロ	ロクロ目	ロクロ目	ロクロ目	ロクロ目	ロクロ目	回転 糸切り	赤焼き、墨書あり	371	128
85	CVII i 2土坑	埋土	土師器	坏	口縁～ 底部	(14.6)	(6.4)	4.6	ロクロ	ロクロ目	ロクロ目	ロクロ目	ロクロ目	ロクロ目	回転 糸切り	赤焼き	371	128
86	CVII i 2土坑	埋土	土師器	坏	口縁～ 体部	(15.0)	—	(4.8)	ロクロ	ミガキ	ロクロ目	ミガキ	ロクロ目			内面黒色処理?	371	128
87	CVII i 2土坑	埋土	土師器	鉢	口縁～ 底部	25.6	10.8	16.4	ロクロ	ロクロ目	ロクロ目	ロクロ目	ヘラ削り	ナデ	ナデ	一部に黒斑あり	371	129
89	CVII b 8土坑	埋土	土師器	坏	口縁～ 底部	(14.1)	6.7	5.0	ロクロ	ロクロ目	ロクロ目	ロクロ目	ヘラ削り	ナデ	回転 糸切り	赤焼き、墨書あり	371	128
90	CVII i 10土坑	埋土	須恵器	坏	ほぼ 完形	14.6	5.4	4.0	ロクロ	ロクロ目	ロクロ目	ロクロ目	ロクロ目	ロクロ目	回転 糸切り	底径小さく開く 器形、燈明皿	372	128
91	CVII i 10土坑	埋土	須恵器 ?	坏	ほぼ 完形	14.8	4.9	5.5	ロクロ	ロクロ目	ロクロ目	ロクロ目	ロクロ目	ロクロ目	回転 糸切り	土師器の可能性 もある。燈明用	372	128
92	CVII i 10土坑	埋土	須恵器	坏	口縁～ 体部	(17.7)	—	(2.7)	ロクロ	ロクロ目	ロクロ目	ロクロ目	ロクロ目			灰褐色	372	125
93	CVII i 10土坑	埋土	須恵器	埴	体部				不明			円形凸面 当て具痕	並行 当て具痕			無釉	372	125
94	CVII i 10土坑	埋土	須恵器	埴	体部				不明			ナデ痕	ヘラ削り			無釉	372	125
95	CVII i 10土坑	埋土	土師器	坏	ほぼ 完形	14.8	7.4	5.0	ロクロ	ロクロ目	ロクロ目	ロクロ目	ロクロ目	ロクロ目	回転 糸切り	内面に油煙が付着、 燈明皿、赤焼	372	128
96	CVII i 10土坑	埋土	土師器	坏	体部～ 底部	—	5.7	(3.8)	ロクロ			ロクロ目	ロクロ目	ロクロ目	回転 糸切り	赤焼、墨書あり	372	129
97	CVII i 10土坑	埋土	土師器	坏	体部～ 底部	—	5.5	(5.3)	ロクロ			ロクロ目	ロクロ目	ロクロ目	回転 糸切り	赤焼、墨書あり	372	129
98	CVII i 10土坑	埋土	土師器	坏	体部～ 底部	—	6.0	(1.2)	ロクロ			ロクロ目	ロクロ目	ロクロ目	回転 糸切り	赤焼	372	129
99	CVII i 15土坑	埋土	土師器	坏	体部～ 底部	—	6.0	(1.95)	ロクロ			ロクロ目	ロクロ目	ロクロ目	回転 糸切り	赤焼	372	129

100	C VII i 10土坑	埋土	土師器?	坏	体部~ 底部	-	5.8	(2.7)	ロクロ目				ロクロ目	ロクロ目	ロクロ目	ロクロ目	回転 系切り	赤焼、須恵器かも	372	129
101	C VII i 10土坑	埋土	土師器	坏	体部~ 底部	-	6.0	(1.9)	ロクロ				ロクロ目	ロクロ目	ロクロ目	ロクロ目	回転 系切り	黒斑あり	372	129
102	C VII i 10土坑	埋土	土師器	坏	体部~ 底部	-	6.5	(1.6)	ロクロ				ロクロ目	ロクロ目	ロクロ目	ロクロ目	回転 系切り	赤焼	372	129
103	C VII i 10土坑	埋土	土師器	坏	体部~ 底部	-	(5.9)	(2.6)	ロクロ				ロクロ目	ロクロ目	ロクロ目	ロクロ目	回転 系切り	赤焼	372	129
104	C VII i 10土坑	埋土	土師器	坏	体部~ 底部	-	(7.6)	(1.85)	ロクロ				ロクロ目	ロクロ目	ロクロ目	ロクロ目	回転 系切り	赤焼	372	129
105	C VII i 10土坑	埋土	土師器	坏	体部~ 底部	-	6.8	(1.75)	ロクロ				ロクロ目	ロクロ目	ロクロ目	ロクロ目	回転 系切り	赤焼	372	129
106	C VII i 10土坑	埋土	土師器	坏	体部~ 底部	-	(7.5)	(3.3)	ロクロ				ロクロ目	ロクロ目	ロクロ目	ロクロ目	回転 系切り	赤焼	372	129
107	C VII i 10土坑	埋土	土師器	坏	体部~ 底部	-	(5.6)	(2.8)	ロクロ				ロクロ目	ロクロ目	ロクロ目	ロクロ目	回転 系切り	赤焼	372	129
108	C VII i 10土坑	埋土	土師器	坏	体部~ 底部	-	(4.8)	(1.7)	ロクロ				ロクロ目	ロクロ目	ロクロ目	ロクロ目	回転 系切り	赤焼	372	129
109	C VII i 10土坑	埋土	土師器	坏	体部~ 底部	-	(5.4)	(1.5)	ロクロ				ロクロ目	ロクロ目	ロクロ目	ロクロ目	回転 系切り	赤焼	372	129
110	C VII i 10土坑	埋土	土師器	坏	底部	-	(6.1)	(1.0)	ロクロ						ロクロ目	ロクロ目	回転 系切り	赤焼	372	129
111	C VII i 10土坑	埋土	土師器	坏	口縁~ 体部	(12.3)	-	(3.5)	ロクロ	ロクロ目	ロクロ目	ロクロ目	ロクロ目	ロクロ目				赤焼	372	129
112	C VII i 10土坑	埋土	土師器	坏	口縁~ 体部	(14.7)	-	(3.4)	ロクロ	ロクロ目	ロクロ目	ロクロ目	ロクロ目	ロクロ目				赤焼	372	129
113	C VII i 10土坑	埋土	土師器	坏	口縁~ 体部	(12.4)	-	(3.8)	ロクロ	ロクロ目	ロクロ目	ロクロ目	ロクロ目	ロクロ目				赤焼	372	129
114	C VII i 10土坑	埋土	土師器	坏	口縁~ 体部	(14.8)	-	(3.4)	ロクロ	ロクロ目	ロクロ目	ロクロ目	ロクロ目	ロクロ目				赤焼、油煙付替、 燈明用	372	129
115	C VII i 10土坑	埋土	土師器	坏	口縁~ 体部	(13.0)	(5.6)	4.8	ロクロ	ミガキ 黒色処理	ロクロ目	ロクロ目	ロクロ目	ロクロ目				赤焼	372	129
116	C VII i 10土坑	埋土	土師器	高台付 坏	体部~ 底部	-	10.8	(4.1)	ロクロ				ロクロ目	ロクロ目	ロクロ目	ロクロ目	回転 系切り	赤焼、輪高台付	372	129
117	C VII i 10土坑	埋土	土師器	壁	口縁~ 体部	(21.8)	-	(10.9)	ロクロ	ロクロ目	ロクロ目	ロクロ目	ロクロ目	ロクロ目				頸部の括れ大、体 部膨む	373	129
118	C VII i 10土坑	埋土	土師器	埴?	口縁~ 体部	(35.9)	-	(8.8)	輪積み	ヨコナデ	ナデ	ヨコナデ	ナデ					作りが粗雑	373	129
119	C VII i 10土坑	埋土	土師器	埴?	口縁~ 体部	(35.0)	-	(10.9)	ロクロ?	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ削り				輪積みロクロ仕 上げ	373	129
120	C VII i 10土坑	埋土	土師器	鉢	口縁~ 体部	(21.5)	-	(7.5)	ロクロ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ					口縁端部に括れ あり	373	129
121	C VII 区柱No 3	埋土	須恵器	大甕	体部				輪積み				円形凸面 当て具痕	並行 叩き具痕				淡褐色		
122	C VII 区柱No 2	埋土	須恵器	大甕	体部				輪積み				同心円文	並行 叩き具痕				磨減はげしい	373	125
123	C VII 区柱No 19	埋土	須恵器	坏	口縁~ 体部	(13.0)	-	(4.2)	ロクロ	ロクロ目	ロクロ目	ロクロ目	ロクロ目	ロクロ目				No92と同個体	373	130
124	D II e 7 落ち 込みと柱穴	埋土	須恵器	大甕	体部				不明				青海波文	斜格子文				二次焼成を受け ている	373	125
125	D II e 7 落ち込み	埋土	須恵器	大甕	体部				不明				青海波文	斜格子文				器壁が厚い	373	125
126	D II f 6 落ち込み	埋土	須恵器	瓶	胴部				ロクロ				ロクロ目	ロクロ目				器表が黒灰色	373	125
127	D II 区柱穴 No 6	埋土	須恵器	大甕	体部				不明				並行 当て具痕	並行 叩き具痕				断面 サッドイッ チ	373	125
128	D II 区柱No 2	埋土	須恵器	坏	体部~ 底部	-	9.8	4.0	ロクロ				ロクロ目	ロクロ目	ロクロ目	ロクロ目	回転 系切り	赤焼	374	129

129	DIII g 6 土坑-2	埋土	土師器	坏	底	-	5.4	(1.4)	ロクロ					ロクロ目	回転 糸切り	赤焼	374	129	
130	DIII g 6 土坑-2	埋土	須惠器	甕	体部				不明				円形凸面 当て具痕	並行 叩き具痕		灰色	374	125	
131	DIII h 2 土坑	埋土	須惠器	甕	体部				ロクロ				ロクロ目	ヘラ削り		淡い灰色	374	125	
132	DIII h 3 土坑	埋土	須惠器	甕	体部				不明				並行 当て具痕	並行 叩き具痕		焼成不良品	374	125	
133	DIII c 4 落ち込み	埋土	須惠器	甕	体部				ロクロ				ヨコナデ	ヘラ削り		灰色	374	125	
134	DIII c 4 落ち込み	埋土	須惠器	甕	体部				不明				平滑な 当て痕	並行 叩き具痕		鉄分の増量多し	374	125	
135	DIII g 6 満	埋土	須惠器	瓶	肩部				ロクロ				ロクロ目	ロクロ目		黒灰色	374	125	
136	DIII h 4 落ち込み	埋土	須惠器	坏	ほぼ 完形	13.7	8.0	3.6	ロクロ	ロクロ目	ロクロ目	ロクロ目	ロクロ目	ロクロ目	回転 ヘラ切り	焼成不良	374	129	
137	DIII i 5 盛り土	埋土	須惠器	大甕	体部				不明				並行 当て具痕	並行 叩き具痕		灰黒色	374	125	
138	DIII j 1 土坑	埋土	須惠器	瓶?	口縁部				ロクロ	ロクロ目	ロクロ目					淡灰色	374	126	
139	DIII j 2 土坑	埋土	土師器	坏	体部~ 底部	-	(5.8)	(2.0)	ロクロ				ミガキ 黒色処理	ロクロ目	ミガキ 黒色処理	ベタ 高台状 回転 糸切り	若干磨減あり	374	129
140	DIII j 2 土坑	埋土	須惠器	甕	体部				不明				ナデ?	並行 叩き具痕		灰色	374	125	
141	DIII j 6 落ち込み	埋土	須惠器	甕	体部				不明				並行 当て具痕	並行 叩き具痕		濃灰色	374	125	
142	DIII区柱穴 No10	埋土	須惠器	瓶	肩部	-	-	(9.7)	ロクロ				ロクロ目	ロクロ目		灰黒色	374	130	
143	DIII区柱穴 No11	埋土	須惠器	坏	底部	-	(6.0)	(1.4)	ロクロ					ロクロ目	回転 ヘラ切り	淡灰色	374	129	
144	DIII f 3 グリッド柱穴	埋土	土師器	坏	底部				非ロクロ					ミガキ 黒色処理	ミガキ 黒色処理	奈良時代土師			
145	DIII f 3 グリッド柱穴	埋土	土師器	坏	ほぼ 完形	14.9	7.0	5.0	ロクロ	ロクロ目	ロクロ目	ロクロ目	ロクロ目	ロクロ目	回転 糸切り	赤焼、墨書あり	274	130	
146	DIV f 5 土坑	埋土	土師器	坏	口縁~ 体部	(17.5)	-	(3.8)	ロクロ	ロクロ目	ロクロ目	ロクロ目	ロクロ目			赤焼、黒斑あり	374	129	
147	DIV f 5 土坑	埋土	土師器	坏	口縁~ 体部	(16.0)	-	(3.5)	ロクロ	ロクロ目	ロクロ目	ロクロ目	ロクロ目			赤焼	374	129	
148	DIV f 5 土坑	埋土	土師器	甕	口縁~ 体上部	(14.4)	-	(5.9)	ロクロ	ロクロ目	ロクロ目	ロクロ目	ロクロ目			小型	374	130	
149	DIV f 5 土坑	埋土	土師器	甕	体下部 ~底部	-	(10.4)	(5.2)	非ロクロ				ヨコナデ	ヘラ削り	ナデ	ナデ	細礫の混入した 粗い土	374	130
150	DIV f 6 土坑	埋土	土師器	坏	ほぼ 完形	15.2	4.8	5.2	ロクロ	ロクロ目	ロクロ目	ロクロ目	ロクロ目	ナデ	回転 糸切り	赤焼、黒斑あり	375	130	
151	DIV f 6 土坑	埋土	土師器	坏	体下部 ~底部	-	(6.0)	(2.7)	ロクロ				ロクロ目	ロクロ目	ナデ	回転 糸切り	赤焼き	375	129
152	DIV f 6 土坑	埋土	土師器	坏	底部	-	5.9	(1.3)	ロクロ					ロクロ目	回転 糸切り	赤焼き	375	129	
153	DIV f 6 土坑	埋土	土師器	甕	口縁~ 体部	(23.0)	-	(13.2)	輪積み ロクロ 仕上げ	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	ロクロ目 ヘラ削り			口唇部挽き出し	375	130	
154	DIV f 6 土坑	埋土	須惠器	大甕	体部				不明				青褐色文 並行 当て具痕	並行 叩き具痕		断面サンドイ チ状	375	125	
155	DIV f 6 土坑	埋土	須惠器	大甕	体部				不明				青褐色文 並行 当て具痕	並行 叩き具痕		断面サンドイ チ状	375	125	
156	DIV c 4 井戸	埋土	須惠器	大甕	体部				不明				並行 当て具痕	並行 叩き具痕		断面サンドイ チ状	375	125	
157	DIV区柱穴 No1	埋土	須惠器	甕	底部				不明				ナデ痕	ナデ痕		外面に砂付着多 し	375	125	

158	DIV区柱穴 No4	埋土	須恵器	壘	底部			不明				並行 当て具痕	並行 叩き具痕			小破片	375	125
159	CVj6 溝-1	埋土	土師器	壘	口縁~ 体部	(26.0)	-	(6.8)	ロクロ	ヨコナデ	ヨコナデ	ロクロ ナデ	ロクロ ナデ				375	130
160	CVj6 溝-1	埋土	土師器	坏	底部	-	(11.6)	(2.0)	ロクロ				ロクロ ナデ	回転 糸切り	新しいカワラケ 的赤焼き	375	130	
161	CVj6 溝-1	埋土	土師器	坏	体下部 ~底部	-	(6.0)	(1.8)	ロクロ			ロクロ ナデ	ロクロ ナデ	ロクロ ナデ	回転 糸切り	赤焼き	375	130
162	CVj6 溝-1	埋土	須恵器	坏	底部				ロクロ				ロクロ ナデ	回転 ヘラ切り	小破片	375	125	
163	CVj6 溝-1	埋土	須恵器	大壘	体部				不明			並行 当て具痕	並行 叩き具痕			断面灰褐色	375	125
164	CVj6溝- 2中央	埋土	須恵器	坏	体下部 ~底部	-	(6.4)	(1.5)	ロクロ			ロクロ ナデ	ロクロ ナデ	ロクロ ナデ	回転 糸切り	濃灰色	375	125
165	CVj6溝 1~3西端	埋土	須恵器	瓶	肩部				ロクロ			ロクロ ナデ	並行叩き 具痕 ロクロ ナデ			灰色	375	126
166	CVj6溝 1~3西端	埋土	須恵器	壘	体部				不明			円形凸面 当て具痕	擬格子文			灰色	375	126
167	CVIIi10土坑	埋土	土師器	坏	口縁部	-	--	(2.6)	ロクロ	ロクロ ナデ	ロクロ ナデ					罍首あり	375	130
168	DVI区柱No7	埋土	須恵器	坏	口縁~ 底部	(13.0)	(4.7)	5.1	ロクロ	ロクロ ナデ	ロクロ ナデ	ロクロ ナデ	ロクロ ナデ	ロクロ ナデ	回転 糸切り	環元不足	375	130
169	DVIb9 土坑中央西側	埋土	土師器	坏	口縁~ 底部	(8.6)	(4.1)	2.0	ロクロ	ロクロ ナデ	ロクロ ナデ	ロクロ ナデ	ロクロ ナデ	ロクロ ナデ	台状高 台回転 糸切り	赤焼き、小型品	375	130
170	DVIb9土坑	埋土	須恵器	大壘	体部				不明			線杉状 当て具痕	並行 叩き具痕			断面サンドイッ チ状	376	125
171	DVIb9土坑	埋土	須恵器	大壘	体部				不明			並行 当て具痕	並行 叩き具痕			黒色自然釉付着	376	126
172	DVIb9 土坑北端西側	埋土	須恵器	大壘	体部				不明			円形凸面 当て具痕	並行 叩き具痕			無釉、灰色	376	126
173	DVIe7 溝西端	埋土	須恵器	壘	体部				不明			背海波文	並行 叩き具痕			無釉、灰色	376	126
174	DVI区柱穴 No1	埋土	土師器	坏	体部~ 底部	-	(6.8)	(2.5)	ロクロ			ロクロ ナデ	ロクロ ナデ	ロクロ ナデ	台状高 台回転 糸切り	赤焼き	376	130
175	DVI区柱穴 No2	埋土	土師器	坏	体部~ 底部	-	(6.1)	(2.55)	ロクロ			ミガキ 黒色処理	ロクロ ナデ	ミガキ 内黒処理	回転糸 切り?	もと高台あり?	376	130
176	DVI区柱穴 No7	埋土	須恵器	壘	体下部 ~底部				不明			ナデ痕	擬格子 叩き具文	ナデ	ナデ	黒色	376	126
177	DVI区柱穴 No7	埋土	須恵器	壘	体部				不明			ナデ	ナデ			灰色	376	126
178	DVI区柱穴 No8	埋土	須恵器	壘	体部				不明			ナデ	ヘラ削り			灰色	376	126
179	DVI区柱穴 No9	埋土	土師器	坏	体部~ 底部	-	5.1	(2.7)	ロクロ			ロクロ ナデ	ロクロ ナデ			赤焼き	376	130
180	DVI区柱穴 No11	埋土	土師器	坏	口縁~ 体部	(16.4)	-	(4.0)	ロクロ	ロクロ ナデ	ロクロ ナデ	ロクロ ナデ	ロクロ ナデ			赤焼き	376	130
181	DVI区柱穴 No15	埋土	土師器	坏	口縁~ 体部	(12.8)	-	(4.5)	ロクロ	ロクロ ナデ	ロクロ ナデ	ロクロ ナデ	ロクロ ナデ			赤焼き	376	130
182	DVI区柱穴 No15	埋土	須恵器	坏	体部~ 底部	-	(5.8)	(4.9)	ロクロ			ロクロ ナデ	ロクロ ナデ	ロクロ ナデ	回転 糸切り	煤の付着あり	376	127
183	DVI区柱穴 No19	埋土	土師器	坏	口縁~ 体部	(13.6)	--	(3.0)	ロクロ	ロクロ ナデ	ロクロ ナデ	ロクロ ナデ	ロクロ ナデ			赤焼き	376	130
184	DVI区柱穴 No25	埋土	須恵器	壘	体部				不明			ナデ	並行 叩き具痕			小破片	376	126
185	DVI区h2 柱穴	埋土	須恵器	大壘	体部				不明			並行 当て具痕	並行 叩き具痕			断面セピア色	376	126
186	DVIg5 壘地層		須恵器	壘	体下部 ~底部	-	(7.8)	(3.2)	ロクロ			ロクロ目	ロクロ目	ロクロ目	回転 糸切り	灰色	376	130

187	DVI 8 5 整地層		須恵器	大甕	体部				不明				青海波文	並行 叩き具痕			濃灰色	376	126
188	DVI h 3・4 整地層		土師器	坏?	底部	—	(7.2)	(3.2)	ロクロ					ナデ	回転 糸切り		黒斑あり	376	130
189	DVI h 3・4 整地層		須恵器	大甕	体部				不明				並行 当て具痕	並行 叩き具痕			断面セピア色	376	126
190	EIII b 6 土坑	埋土	土師器	坏	口縁～ 体部	(13.6)	—	(3.3)	ロクロ	ロクロ ナデ	ロクロ ナデ	ロクロ ナデ	ロクロ ナデ	ロクロ ナデ			赤焼き	376	130
191	EIII b 6 土坑	埋土	土師器	甕	口縁～ 体部	(13.4)	—	(3.5)	ロクロ	ロクロ ナデ	ロクロ ナデ	ロクロ ナデ	ロクロ ナデ	ロクロ ナデ			小破片	376	130
192	EIII b 6 土坑	埋土	土師器	甕	口縁～ 体部	(22.9)	—	(16.8)	ロクロ	ロクロ ナデ	ロクロ ナデ	ロクロ ナデ	ロクロ ナデ				器壁厚くズンドウか?	377	130
193	EIII b 6 土坑	埋土	須恵器	瓶	体部～ 底部	—	(8.6)	(8.7)	ロクロ				ロクロ ナデ	ロクロ ナデ	ロクロ ナデ	回転 糸切り 輪高台	転用履か?	377	130
194	EIII b 5 落ち込み	埋土	須恵器	大甕	体部				不明				同心円文	並行 叩き具痕			灰色	377	126
195	EIV b 1 土坑-2	埋土	土師器	坏	体部～ 底部	—	(5.2)	(1.9)	ロクロ				ロクロ ナデ	ロクロ ナデ	ロクロ ナデ	回転 糸切り	赤焼き	377	130
196	EIV b 1 土坑-2	埋土	土師器	坏	体部～ 底部	—	4.6	(2.4)	ロクロ				ロクロ ナデ	ロクロ ナデ	ロクロ ナデ	回転 糸切り	赤焼き ヨコミガキ	377	130
197	EIV b 1 土坑-2	埋土	須恵器	大甕	体部				不明				円形凹面 当て具痕	並行 叩き具痕			灰色	377	126
198	DVII区柱穴 №11	埋土	須恵器	瓶	肩部				ロクロ				カキ目	ロクロ目			器表に自然釉	377	126
199	CII 8 6 土坑	埋土	須恵器	大甕	体部				不明				青海波文	斜格子 叩き痕			灰色	377	130
200	CII 8 6 土坑	埋土	須恵器	大甕	体部				不明				青海波文	斜格子 叩き痕			灰色	377	126
201	DIII 8 6 溝	埋土	須恵器	甕	体部				ロクロ				ロクロ目	へら削り			灰色	377	126
202	西館CII区	整地層	須恵器	甕か 壺	体下部 ～底部	—	(19.4)	(2.0)	ロクロ	ロクロ ナデ	ロクロ ナデ	ロクロ ナデ	ロクロ ナデ	ロクロ ナデ	ロクロ ナデ	砂が 付着	灰黒色	377	127
203	西館CIV区	表土	土師器	坏	体下部 ～底部	—	6.3	(1.9)	ロクロ				ロクロ ナデ	ロクロ ナデ	ロクロ ナデ	回転 糸切り	赤焼き	377	127
204	西館DIII区	表土	土師器	坏	体下部 ～底部	—	(6.5)	(2.7)	ロクロ				ロクロ ナデ	ロクロ ナデ	ロクロ ナデ	回転 糸切り	赤焼き	377	127
205	西館粗掘り	表土	土師器	甕	体下部 ～底部	—	6.5	(3.0)	ロクロ?				ユビナデ	並行 叩き目 ナデ	ユビナデ	へらナデ		377	127
206	西館DIV区	表土	土師器	甕	口縁～ 体部	(24.9)	—	(6.1)	ロクロ				ロクロ ナデ	ロクロ ナデ	ロクロ ナデ	ロクロ ナデ		377	130
207	西館CII区	整地層	須恵器	甕	口縁部	(18.2)	—	(5.95)	ロクロ	ロクロ ナデ	ロクロ ナデ						自然釉付着	378	130
208	西館北側	表土	須恵器	坏	口縁部	(13.0)	—	(3.0)	ロクロ	ロクロ ナデ	ロクロ ナデ						灰色	378	127
209	西館粗掘り	表土	須恵器	瓶	口縁部	(10.3)	—	(3.0)	ロクロ	ロクロ ナデ	ロクロ ナデ						黒色	378	130
210	西館西側粗掘	表土	須恵器	甕	体部				不明				カキ目	並行 叩き具痕			器表に自然釉あり	378	126
211	CIV a 6 付近検出面		須恵器	甕	体部				不明				同心円文	並行 叩き具痕			薄作り	378	126
212	西館DII区	表土	須恵器	甕	体部				不明				円形凸面 当て具痕	斜格子 叩き具痕			灰色	378	126
213	西館CIV区	表土	須恵器	甕	体部				不明				円形凸面 当て具痕	斜格子 叩き具痕			鉄分の溶出多い	378	126
214	CIV a 6 付近検出面		須恵器	甕	体部				不明				同心円文	斜格子 叩き具痕			灰色	378	126

215	西館DIII区	表土	須恵器	甕	体部												並行 当て具痕	並行 叩き具痕			黒色の煤付着	378	126	
216	西館北端	表土	須恵器	甕	底部 付近												並行 当て具痕	並行 叩き具痕			灰色	378	126	
217	西館粗掘り	表土	須恵器	甕	肩部 付近												放射状文	並行 叩き具痕			黒色の自然釉付 着	378	127	
218	西館表採	表土	須恵器	甕?	体部												ロクロ ナデ	ロクロ ナデ			断面赤褐色	378	127	
219	西館DII区	表土	須恵器	甕	体部												カキ目	ヘラ削り			灰色	378	128	
220	東館CV区	表土	土師器	坏	底部	—	7.0	(2.0)	ロクロ										ミガキ 黒色処理	回転 糸切り	黒斑あり	379	127	
221	東館東側 粗掘り	表土	土師器	坏	底部	—	(6.2)	(1.3)	ロクロ										ミガキ 黒色処理	回転 糸切り		379	127	
222	東館東側 粗掘り	表土	土師器	坏	底部	—	(6.1)	(1.65)	ロクロ										ロクロ ナデ	回転 糸切り	黒斑あり、赤焼き	379	127	
223	東館東側 粗掘り	表土	土師器	坏	底部	—	(6.3)	(2.1)	ロクロ										ロクロ ナデ	回転 糸切り	黒斑あり、赤焼き	379	127	
224	東館DVI区	表土	土師器	坏	底部	—	6.2	(2.6)	ロクロ										ロクロ ナデ	回転 糸切り	黒斑あり、赤焼き	379	127	
225	東館東側 粗掘り	表土	土師器	坏	底部	—	(6.4)	(1.9)	ロクロ										ロクロ ナデ	回転 糸切り	赤焼き	379	127	
226	東館東側 粗掘り	表土	土師器	坏	底部	—	(4.8)	(2.2)	ロクロ										ロクロ ナデ	回転 糸切り	赤焼き	379	127	
227	東館東側 粗掘り	表土	土師器	坏	口縁～ 底部	(14.4)	(6.2)	4.7	ロクロ	ロクロ ナデ	ロクロ ナデ	ロクロ ナデ	ロクロ ナデ	ロクロ ナデ	ロクロ ナデ	ロクロ ナデ					回転 糸切り	赤焼き	379	130
228	東館 セクション	表土	土師器	坏	体下部 ～底部	—	(5.8)	(1.7)	ロクロ										ロクロ ナデ	ロクロ ナデ	回転 糸切り	赤焼き	379	127
229	DV区南東部		土師器	坏	体下部 ～底部	—	6.0	(1.8)	ロクロ										ロクロ ナデ	ロクロ ナデ	回転 糸切り	赤焼き	379	127
230	東館CVI区 北側	表土	土師器	坏	口縁部 ～底部	(14.5)	(8.4)	3.6	ロクロ	ロクロ ナデ	ロクロ ナデ	ロクロ ナデ	ロクロ ナデ	ロクロ ナデ	ロクロ ナデ	ロクロ ナデ					回転 糸切り	赤焼き	379	127
231	東館東側 粗掘り	表土	土師器	坏	体部 ～底部	—	6.0	(3.2)	ロクロ										ロクロ ナデ	ロクロ ナデ	回転 糸切り	赤焼き	379	127
232	東館東西セ クションベルト	表土	土師器	坏	口縁部 ～底部	(15.2)	6.0	5.0	ロクロ	ロクロ ナデ	ロクロ ナデ	ロクロ ナデ	ロクロ ナデ	ロクロ ナデ	ロクロ ナデ	ロクロ ナデ					回転 糸切り	赤焼き	379	127
233	東館住状 Pit	埋土	土師器	坏	口縁 ～体部	(16.6)	—	(3.85)	ロクロ	ロクロ ナデ	ロクロ ナデ	ロクロ ナデ	ロクロ ナデ	ロクロ ナデ	ロクロ ナデ	ロクロ ナデ						赤焼き	379	130
234	東館住状 Pit	埋土	土師器	坏	体部 ～底部	—	(6.9)	(3.9)	ロクロ										ロクロ ナデ	ロクロ ナデ	回転 糸切り	赤焼き、燈明用 スス付着	379	127
235	東館CV区	表土	須恵器	坏	底部	—	(6.6)	(1.2)	ロクロ										ロクロ ナデ	回転 ヘラ切り	灰色	379	127	
236	東館内堀際	表土	須恵器	坏	口縁～ 体部	(15.8)	—	(3.0)	ロクロ	ロクロ ナデ	ロクロ ナデ	ロクロ ナデ	ロクロ ナデ	ロクロ ナデ	ロクロ ナデ	ロクロ ナデ						環元不足	379	130
237	東館南北 ベルト内 セクション	表土	須恵器	坏	口縁～ 体部	(13.0)	—	(3.9)	ロクロ	ロクロ ナデ	ロクロ ナデ	ロクロ ナデ	ロクロ ナデ	ロクロ ナデ	ロクロ ナデ	ロクロ ナデ						環元不足	379	130
238	東館東西 ベルト内 セクション	表土	須恵器	坏	底部	—	(7.1)	(1.5)	ロクロ										ロクロ ナデ	回転 糸切り	灰色	379	127	
239	東館南北 ベルト内 セクション	表土	須恵器	坏	口縁～ 体部	(11.0)	—	(3.5)	ロクロ	ロクロ ナデ	ロクロ ナデ	ロクロ ナデ	ロクロ ナデ	ロクロ ナデ	ロクロ ナデ	ロクロ ナデ						灰色	379	127
240	東館粗掘り	表土	須恵器	坏	口縁～ 体部	(13.4)	—	(3.2)	ロクロ	ロクロ ナデ	ロクロ ナデ	ロクロ ナデ	ロクロ ナデ	ロクロ ナデ	ロクロ ナデ	ロクロ ナデ						灰黒色	379	127
241	東館南北 ベルト 東寄り	表土	須恵器	大甕	体部														並行 当て具痕	並行 叩き具痕		379	127	
242	東館中央 西寄り	表土	須恵器	大甕	底部														並行 当て具痕	並行 叩き具痕	ナデツケ	379	127	

243	東館北東 粗掘り	表土	須恵器	壺	肩部										ナデ痕	並行 叩き具痕			自然袖付着	380	127
244	東館中央 西寄り	表土	須恵器	壺	体部										ナデ痕	ヘラ削り			断面セピア色	379	127
245	東館東西 ベルト	表土	須恵器	壺	肩部										ナデ痕	並行叩き 具ナデ ケズリ			内面に自然袖	380	127
246	東館中央 西寄り	表土	須恵器	壺	体部										ナデ痕	ヘラ削り			器表がザラつく	379	127
247	東館北西 粗掘り	表土	須恵器	壺	体部～ 底部	—	(13.4)	(7.3)							ヘラナデ	ヘラ削り	ヘラナデ	ヘラ ナデ	一部に自然袖付 着	380	127
248	出土地不明		土師器	坏	口縁～ 体部	(18.8)	—	(3.1)		ロクロ ナデ	ロクロ ナデ	ロクロ ナデ	ロクロ ナデ						赤焼き	380	127
249	出土地不明		土師器	坏	体部～ 底部	—	6.6	(2.6)				ロクロ ナデ	ロクロ ナデ	ロクロ ナデ	回転 糸切り				赤焼き	380	127

〈瓶〉 (第23表、第368～380図、写真図版124～130)

ここには肩部～頸部を残存し、明らかに瓶であると判断できたもののみを当てたことから、甕とした中にも含まれる可能性がある。いずれも破片の状態での出土であるため、全体的なことは不明である。すべてロクロ成形され、肩部～頸部にロクロ目を良く残し、体部は篋による再調整が入る。大きさ等は不明である。

2) 石製品類 (第15表、第338図13、写真図版100)

石製品としたのは西館CⅢ区のCⅢa 2土坑の埋土内から出土した瑠璃製の勾玉1点である。大きさは、縦4.4cm、横幅2.4cm、厚さ1cm、重さ15gで、灰緑色をした原石を使用した完形品である。上位の屈曲部に上面2mm、下面1mmの円孔が穿たれる。部分的に原石の表皮に近い白濁した縞文様部分を残し、一部に成形時の欠損と推定される凹みが見られる。全面に研磨時の細かい擦痕をもち、円孔の周囲を主とする上位は使い減りによる光沢をもつが、他の部分は光沢を放つほどではない。全体的にみてあまり上等な品ではない。

VI 縄文時代の遺構と遺物

1. 遺 構

検出された遺構は土坑15基、円形陥し穴状遺構26基、溝形陥し穴状遺構45基、長方形陥し穴状遺構3基である。遺構の種別に西館から東館へ順に記述する。

1) 土 坑

(1) C III g 2 土坑 (第381図)

西館北西部の中央寄りに位置し、柱穴の密集する地域のため、北半は柱穴によって壊されている。開口部の推定径80cm、底部径65cm×60cm、深さ40cmの規模をもち、平面形は円形でピーカー形の断面形である。底面は平坦で、小穴は見られない。壁はほぼ垂直に立ち上がる。

埋土は3層に細分され、黒褐色土や暗褐色土が主体である。上半はかたい。水平堆積を示し自然埋没である。

(2) C III h 2 土坑 (第382図、写真図版59)

西館の北西中央寄りに位置し、柱穴の多い地域に立地する。南側は東西に伸びる落ち込み遺構によって削平を受けている。開口部径110cm×110cm、底部径85cm×75cm、深さ35cmの規模をもち平面形は円形で、ピーカー形の断面形である。底面は中央がやや凹み、小穴の痕跡も見られたが図化しなかった。壁はほぼ垂直であるが、上半部はやや開く。埋土は精査できなかった。

(3) D III h 4 土坑 (第383図、写真図版59)

西館の南半部中央に位置し、D III g 6 溝跡や落ち込み遺構と接している。開口部径120cm×90cm、底部径80cm×70cm、深さ40cmの規模をもち、平面形は長軸を南北方向とする楕円形で、浅いピーカー形の断面である。北端は柱穴に壊されている。底面は平坦で小穴等はない。壁は垂直又はやや外傾して開く。

埋土は5層に細分される。黒褐色土や暗褐色土及び黄褐色土がレンズ状に堆積する。上層はかたいが下層はやわらかい。全体に黄褐色土が粒状に混入する。自然埋没であろう。

(4) D III h 6 土坑 (第384図、写真図版59)

西館の南半部中央に位置し、落ち込み遺構に重複している。開口部径85cm×85cm、底部径80cm×80cm、深さ30cmの規模をもち、平面形は円形で、浅いピーカー形の断面形である。底面は平坦で、小穴等はない。壁は垂直であるが、やや内傾する部分もある。

埋土は5層に細分され、暗褐色土や黒色土が主体である。全体に黄褐色土が粒状に混入しやわらかい。レンズ状の堆積を示しており自然埋没である。

(5) D III h 7 土坑 (第385図、写真図版59)

西館の南半部中央に位置し、周辺にはD III i 7 陥し穴状遺構やD III h 8 土坑-2 などがある。開口部径80cm×80cm、底部径55cm×45cm、深さ45cmの規模をもち、平面形は円形でピーカー形の断面形である。底面はほぼ平坦であるが、小穴等は検出されなかった。壁は垂直に立ち上がり、崩落のため開口部では大きく外傾する部分がある。

埋土は4層に細分され、黒褐色土や黄褐色土である。上半はかたく、下半はやわらかい。1層以外は混土状態であり、人為的に埋め戻したものであろう。

(6) D III i 7 土坑 (第385図、写真図版59)

西館の南半部中央に位置し、D III i 7 土坑-2 と重複し、当遺構が古い。周辺にはD III h 7 陥し穴状遺構やD III h 8 土坑-2 などがある。開口部径80cm×65cm、底部径55cm×50cm、深さ45cmの規模をもち、平面形は円形でピーカー形の断面形である。上半部は削平され浅くなっている。底面はやや凹凸がある。小穴等は検出されなかった。壁は垂直である。

埋土は4層に細分され、黒褐色土や淡黄色粘土、黄褐色土などの混土状である。全体にやわらかい。最下層の4層の底面は酸化鉄のため赤く発色している。混土が主体であることから、人為的に埋め戻したものであろう。

(7) D III i 8 土坑 (第387図、写真図版59)

西館の南半部中央に位置し、D III h 8 土坑-2 と重複しており半分は失われている。開口部径は推定約70cm、底部径55cm、深さ40cmの規模をもち、平面形は円形と推定される。残っている東壁の様子から断面形はピーカー形であろう。底面は平坦で小穴は検出されなかった。

埋土は大半が削平されており精査はできなかった。

(8) D III j 7 土坑-2 (第388図、写真図版59)

西館の南半部中央に位置し、周辺にはD III h 8 土坑-2 や落ち込み遺構がある。開口部径80cm×75cm、底部径65cm×60cm、深さ45cmの規模をもち、平面形は南東側に角ばった部分がある

がほぼ円形である。浅いビーカー形の断面形である。底面は東側がやや高く傾斜している。小穴は検出されなかった。壁は垂直である。

埋土は4層に細分され、暗褐色土と黄褐色の粘土質土が主体である。全体的にやわらかい。1層には炭を含む。上半は自然堆積であるが下半は粘土質土と黒色土が混土状となっており、埋め戻したものであろう。

(9) D III j 8 土坑—3 (第389図、写真図版59)

西館の南半部中央に位置し、D III j 7 土坑—1 と重複しており南壁の一部が壊されている。開口部径80cm×80cm、底部径60cm×50cm、深さ40cmの規模をもち、平面形は円形でビーカー形の断面形である。底面は中央に低くなりやや湾曲しているが、小穴は見られない。壁は垂直である。

埋土は精査できなかった。

(10) D IV d 9 土坑 (第390図、写真図版60)

西館の南東で内堀付近に位置し、水田造成の際かなり深く削平された区域にあり、周辺に柱穴は全くない。北西に少し離れてD IV c 8 井戸があるのみである。開口部径90cm×75cm、底部径65cm×65cm、深さ55cmの規模をもち、平面形は円形で、底部が膨らむ浅いフラスコ形の断面形である。底面は平坦であり、小穴は見られない。壁は底部で内湾して立ち上がり、開口部に向ってやや狭くなる。上半は削平により失われている。

埋土は5層に細分され、黒褐色土と黄褐色土が主体である。1層には炭を含む。黄褐色～褐色土は壁の崩落土であり、2層と4層以外にも粒状に混入している。水平やレンズ状の堆積を示し、自然埋没である。

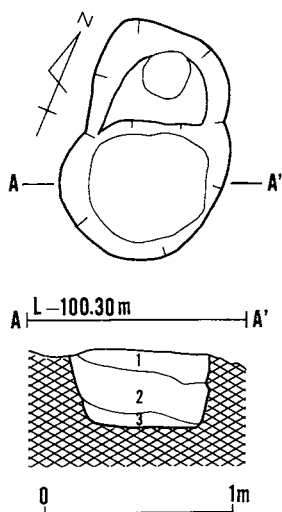
(11) E III a 7 地坑—2 (第391図、写真図版60)

西館の南半部中央に位置し、E III a 7 土坑と重複しており南壁を壊されている。開口部径80cm×70cm、底部径65cm×60cm、深さ40cmの規模をもち、平面形は円形で浅いビーカー形の断面形である。底面は中央にやや低くなるが、小穴は見られない。壁は垂直である。

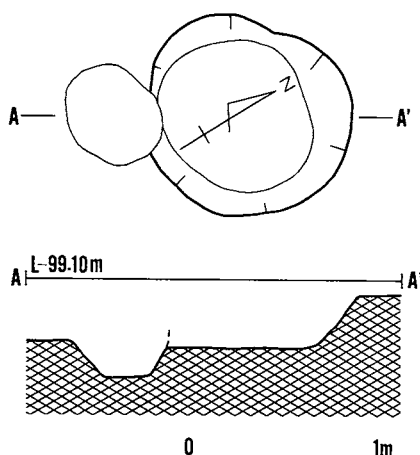
埋土は3層に分けられ、黄褐色土と黒褐色土の混土である。全体にかたくしまっている。混土状態であることから、人為的に埋め戻されたものであろう。

(12) E III a 7 土坑—3 (第392図、写真図版60)

西館の南半部中央に位置し、D III j 7 土坑—1 と重複し、大半は削平されている。底部と東



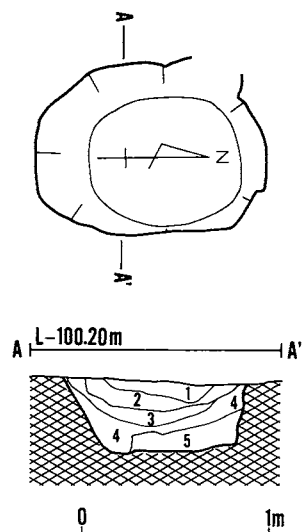
第381図 (1)C III g 2 土坑



第382図 (2)C III h 2 土坑

C III g 2 土坑

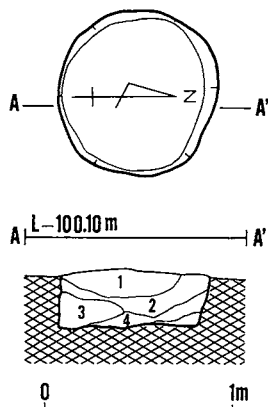
- 1 10Y R 3/2 黒褐色 シルト、かたくしまる
- 2 7.5Y R 3/4 暗褐色 1よりやわらかい
- 3 7.5Y R 4/3 褐色 粘土



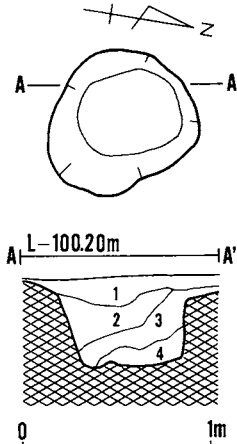
第383図 (3)D III h 4 土坑

D III h 4 土坑

- 1 10Y R 3/2 黒褐色 シルト、火山灰土若干混入
- 2 10Y R 6/6 明黄褐色 火山灰土、黒褐色土が混入
- 3 10Y R 3/2 黒褐色 シルト、火山灰土が多く混入
- 4 10Y R 5/4 にぶい黄橙色 粘土質土
- 5 10Y R 3/3 暗褐色 シルト



第384図 (4)D III h 6 土坑



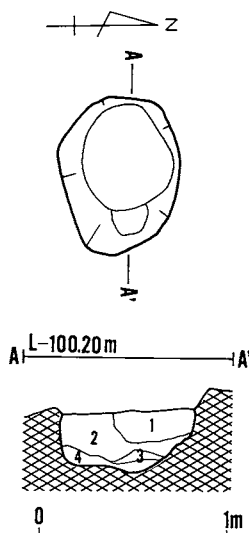
第385図 (5)D III h 7 土坑

D III h 6 土坑

- 1 10Y R 3/3 暗褐色 シルト、黄褐色土が混入
- 2 暗褐色 シルトと淡黄色粘土質土半々の混入
- 3 10Y R 1.7/1 黒色 シルト、淡黄色粘土質土が混入
- 4 2.5Y 8/4 淡黄色 粘土質土
- 5 10Y R 1.7/1 黒色 シルト

D III h 7 土坑

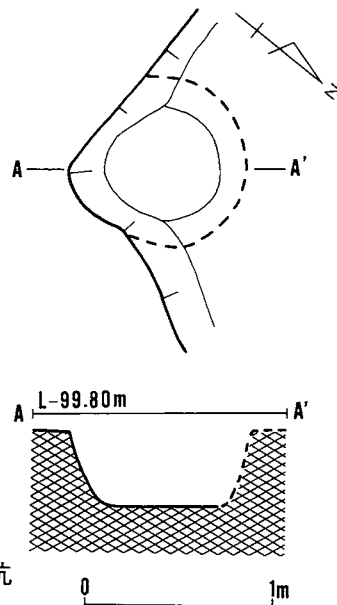
- 1 10Y R 2/2 黒褐色 シルト
- 2 10Y R 5/6 黄褐色 火山灰土、暗褐色土が混入
- 3 10Y R 3/1 黒褐色 シルト
- 4 10Y R 3/3 暗褐色 シルトと黄褐色火山灰土との混入



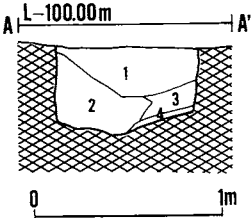
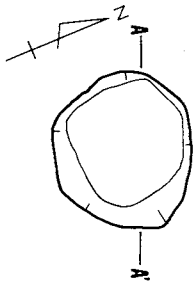
第386図 (6)D III i 7 土坑

D III i 7 土坑

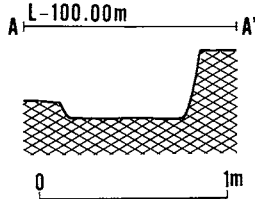
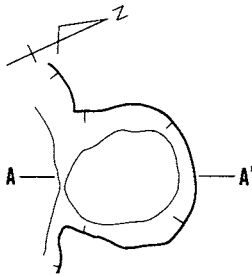
- 1 10Y R 2/2 黒褐色 シルト
- 2 淡黄色 粘土質土と火山灰土と暗褐色土との混入
- 3 10Y R 2/1 黒褐色 シルト
- 4 7.5Y R 4/6 褐色 火山灰土、酸化鉄分が赤く発色



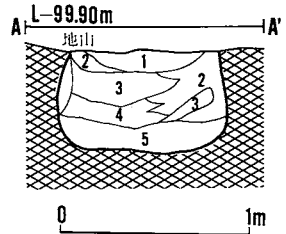
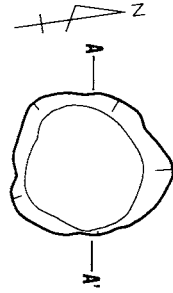
第387図 (7)D III i 8 土坑



第388図 (8) D III j 7 土坑—2



第389図 (9) D III j 8 土坑—3



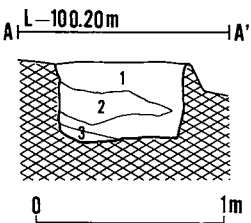
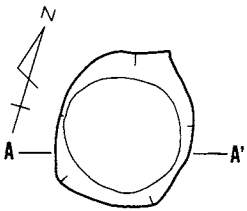
第390図 (10) D IV d 9 土坑

D III j 7 土坑—2

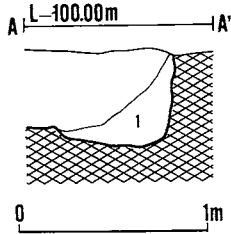
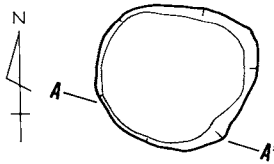
- 1 10Y R 3/3 暗褐色 シルト、炭が若干混入
- 2 10Y R 7/3 にぶい黄褐色 粘土質土、黒色土が混入
- 3 10Y R 6/4 にぶい黄褐色 粘土質土
- 4 10Y R 1.7/1 黒 シルト

D IV d 9 土坑

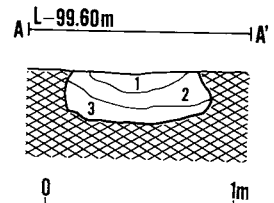
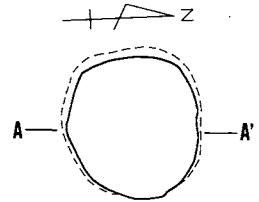
- 1 10Y R 2/2 黒褐色 シルト、炭が若干混入
- 2 10Y R 5/4 にぶい黄褐色 火山灰土、崩落土
- 3 10Y R 3/2 黒褐色 シルト、酸化部分あり
- 4 10Y R 4/4 褐色 火山灰土
- 5 10Y R 3/1 黒褐色 シルト、火山灰土が若干混入



第391図 (11) E III a 7 土坑—2



第392図 (12) E III a 7 土坑—3



第393図 (13) E IV a 4 土坑

E III a 7 土坑—2

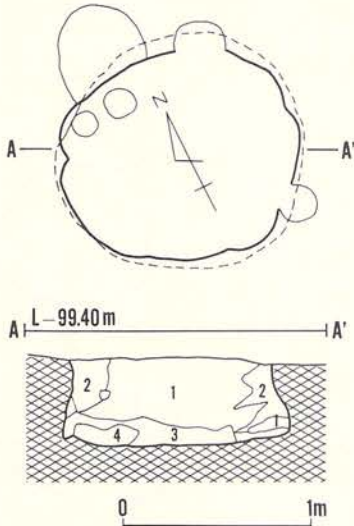
- 1 10Y R 5/6 黄褐色 火山灰土主体に黒褐色土が混入
- 2 黄褐色 火山灰土と黒褐色土半々の混入
- 3 10Y R 2/2 黒褐色 シルト

E IV a 4 土坑

- 1 10Y R 3/3 暗褐色 シルトかたい
- 2 10Y R 3/4 暗褐色 シルトかたい
- 3 10Y R 3/3 暗褐色 シルト

E III a 7 土坑—3

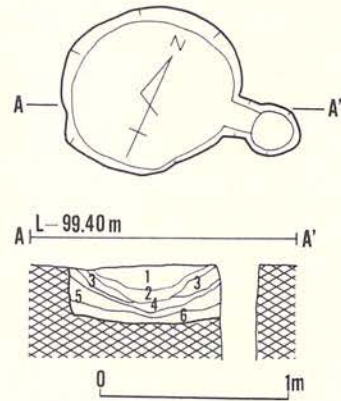
- 1 10Y R 3/2 黒褐色 シルト、粘土質土が混入



第394図 (14) C VII d 9 土坑

C VII d 9 土坑

- 1 10Y R 2/2 黒褐色 シルト、黄褐色土が混入
- 2 10Y R 4/4 褐色 シルト、黄褐色土がブロック状に混入
- 3 10Y R 4/4 褐色 シルト、黄褐色土が粒状に混入
- 4 10Y R 2/3 黒緑色 シルト、1に似るがやわらかい



第395図 (15) C VII j 2 土坑

C VII j 2 土坑

- 1 10Y R 3/2 黒褐色 シルト
- 2 10Y R 3/4 暗褐色 シルト
- 3 10Y R 5/8 黄褐色 火山灰土
- 4 10Y R 3/4 暗褐色 シルト
- 5 10Y R 4/6 褐色 火山灰土の汚れたもの
- 6 10Y R 6/3 にぶい黄褐色 粘土質土

壁が残っている。開口部径推定85cm、底部径75cm×70cm、深さ50cmの規模をもち、平面形は円形でビーカー形の断面形である。底面は平坦で小穴は見られない。壁は垂直である。

埋土は底部に残った1層だけである。黒褐色土でにぶい黄橙色粘土がブロック状に混入する。

(13) E IV a 4 土坑 (第393図、写真図版60)

西館の南東端に位置し、一段と深く削平された区域にあり、周辺に柱穴や他の遺構はない。上半部は失われ底部のみである。開口部75cm×70cm、底部80cm×75cm、深さ25cmの規模をもち、平面形は円形で浅いフラスコ形の断面形である。底面は中央がやや低く湾曲しているが、小穴は見られない。壁は内湾しており開口部で狭くなる。

埋土は3層に細分され、いずれも暗褐色土でかたくしまっている。レンズ状堆積を示し、自然埋没である。

(14) C VII d 9 土坑 (第394図、写真図版60)

東館の北東端に近い区域に位置し、柱穴によって一部壊されている。開口部径130cm×110cm、底部径135cm×125cm、深さ45cmの規模をもち、平面形は円形でフラスコ形の断面形である。底面は平坦である。北西隅にある2個の小穴は径15cm、深さ10cm～18cmあるが、中世の柱穴の下位部分で、当土坑に伴うものではないらしい。壁は内傾や内湾し、開口部で狭くなる。

埋土は4層に細分され、黄褐色土が粒状に混入した黒褐色土(1層)が大部分を占める。2

層と3層は崩落土と見られる。全体にかたくしまっている。黄褐色土の入り方から自然に埋没したものであろう。

(15) C VII j 2 土坑 (第395図、写真図版60)

東館の中央東寄りに位置し、C VII j 1 陥し穴状遺構と接している。また東側の壁で柱穴に壊された部分がある。開口部径90cm×90cm、底部径85cm×80cm、深さ30cmの規模をもち、平面形は円形で底部がわずかに膨らむフラスコ形の断面形である。底面は平坦で小穴等は見られない。壁はわずかに内湾しながら立ち上がる。

埋土は6層に細分され、黒褐色～暗褐色土と壁の崩落土である。上半はかたくしまっている。レンズ状堆積を示し、自然埋没である。

2) 円形陥し穴状遺構

(1) C III a 1 陥し穴状遺構 (第396図、写真図版61)

西館の北西に位置し、東西に伸びた落ち込み遺構と重複している。開口部径130cm×115cm、底部径105cm×95cm、深さ50cmの規模をもち、平面形は円形で、浅いピーカー形の断面形を示す。上半部は削平されて浅くなっている。底面の中央には径25cm、深さ45cmの小穴がある。底面は平坦である。壁はほぼ垂直となっており、崩落はほとんどない。

埋土は4層に細分され、上位は黒褐色～暗褐色土、下位は黄褐色粘土が主体である。色調は異なるがいずれも粘性がある。各層は均一性があり自然埋没である。

(2) C III b 4 陥し穴状遺構 (第397図、写真図版61)

西館の北西に位置し、上半部は削平され浅くなっている。開口部径140cm×140cm、底部径120cm×115cm、深さ40cmの規模をもち、平面形は円形で、浅いピーカー形の断面形である。底面は中央がやや低くなるもののほぼ平坦である。壁は垂直に立ち上がっており、凹凸もない。

埋土は5層に細分される。かたくしまった暗褐色土(2層)が大半を占める。レンズ状の堆積を示し、自然埋没である。

(3) C III b 5 陥し穴状遺構 (第398図、写真図版61)

西館の北西に位置し、上半部は削平され浅くなっている。開口部径135cm×120cm、底部径110cm×100cm、深さ55cmの規模をもち、平面形は円形で、浅いピーカー形の断面形である。底面は平坦で、中央に径25cm、深さ20cmの小穴がある。壁は垂直に立ち上がり、一部に崩落が見られ

る。

埋土は3層に細分され、上半は炭まじりのかたい黒褐色土、下半は汚れた地山の粘土質土でやわらかい。レンズ状及び水平堆積が見られ自然埋没である。

(4) C III a 2 陥し穴状遺構 (第399図、写真図版61)

西館の北西に位置し、C III a 2 土坑-2 と東側で重複している。当遺構が古い。開口部径80cm×60cm、底部径40cm×35cm、深さ50cmの規模をもち、平面形は長軸を南北方向にする楕円形で、断面はピーカー形である。底部は円形に近い。底面は椀状となり壁の立ち上がりはゆるやかである。底面の東側には径10cm、深さ5cm程の小穴が2個ある。開口部の壁にやや崩落が見られる。

埋土の精査はできなかったが、上部は黒褐色土である。

(5) C III c 5 陥し穴状遺構 (第400図、写真図版61)

西館の北西に位置している。開口部径85cm×80cm、底部径65cm×60cm、深さ50cmの規模をもつ。平面形は隅丸方形に近い円形でピーカー形の断面形である。底面は平坦で、中央に径10cm、深さ不明の小穴がある。壁はほぼ垂直であるが、開口部の東南と北東に大きな崩落がある。

埋土は6層に細分され、上半は黒褐色土、下半は壁の崩落土で全体にやわらかい。レンズ状堆積を示しており、自然埋没である。

(6) C III c 6 陥し穴状遺構 (第401図、写真図版61)

西館の北西に位置し、C III b 6 土坑-1 と重複しており、南壁と底部を残すのみである。開口部径は不明であるが、底部径は80cm×55cm、深さは南壁部分で60cmの規模をもち、平面形の上部は不明であるが底部は隅丸長方形を示す。断面は残存する南壁の様子からピーカー形であったと推定される。平坦な底面の中央には径10cm、深さ5cmの浅い凹み状の小穴がある。

埋土はC III b 6 土坑-1 に削平され不明である。

(7) C III j 10 陥し穴状遺構 (第402図、写真図版62)

西館の中央部に位置し、柱穴の比較的少ない地域に立地する。開口部径65cm×65cm、底部径55cm×55cm、深さ60cmの規模をもち、平面形は円形でピーカー形の断面形である。底面は平坦で、中央には径15cm、深さ10cmの小穴がある。壁は垂直であるが開口部でやや内湾気味となっている部分や若干の崩落が見られる。埋土の精査はできなかった。

(8) C IV b 9 陥し穴状遺構 (第403図、写真図版62)

西館の北東にあり内堀に近い地域に位置している。開口部径60cm×50cm、底部径50cm×45cm、深さ70cmの規模をもち、平面形は円形で、深いピーカー形の断面形である。底面は平坦で中央には径10cm、深さ5cmの浅い小穴がある。壁はほぼ垂直に立ち上がっている。

埋土は4層に細分され、暗褐色～黒褐色土を主体に黄褐色土が粒状や小ブロックに混入した土層である。全体にやわらかく、2層には炭を含む。水平な堆積を示し、自然埋没である。

(9) C IV b 10 陥し穴状遺構 (第404図、写真図版62)

西館北東部の内堀に近い地域に位置し、BIV j 5溝と接している。開口部径65cm×55cm、底部径50cm×45cm、深さ65cmの規模をもち、平面形は円形で、深いピーカー形の断面形である。底面は中央が緩く凹み、中心には径10cm、深さ5cmの浅い小穴がある。壁はほぼ垂直であるが、東側にはやや内湾気味の部分が見られる。

埋土は3層に細分され、暗褐色～黒褐色土が大半を占める。全体に炭を含みやわらかい。2層は壁の崩落土であり、自然堆積による埋没と考えられる。

(10) C IV c 1 陥し穴状遺構 (第405図、写真図版62)

西館の北東に位置し、C IV c 2 陥し穴状遺構と近接している。開口部径115cm×105cm、底部径100cm×95cm、深さ55cmの規模をもち、平面形はほぼ円形で、浅いピーカー形の断面形である。底面は中央でやや凹む。中心よりやや離れた位置に2個の小穴があり、P₁は径10cm、深さ20cm、P₂は径5cm、深さ10cmである。上半部は削平されているが、底部の壁はやや内傾しながら立ち上がることから、フラスコ形に近い断面形であった可能性もある。

埋土は2層に細分され、黒褐色土と汚れた黄褐色土である。全体にやわらかく、1層には炭を含む。レンズ状堆積を示し、自然埋没である。

(11) C IV c 2 陥し穴状遺構 (第406図、写真図版62)

西館の北東に位置し、C IV c 1 陥し穴状遺構とC IV c 2 土坑-1と近接している。水田の畦にあたり北側は削平を受けている。開口部径130cm×120cm、底部径115cm×100cm、深さ60cmの規模をもち、平面形はややゆがんだ円形で、ピーカー形の断面形である。底面はやや凹凸があり、中央には2個の小穴が東西に並ぶ。P₁は径13cm、深さ10cm、P₂は径13cm、深さ5cmである。壁は垂直であるが西壁に若干の崩落が見られる。

埋土は4層に細分される。1層以外は黄褐色土を主体とした粘性の強い土層である。レンズ状堆積を示し、自然埋没である。

(12) C IV c 5 陥し穴状遺構 (第407図、写真図版62)

西館の北東に位置し、外堀に近い区域に立地する。開口部径100cm×100cm、底部径95cm×90cm、深さ45cmの規模をもち、平面形は円形で、浅いビーカー形の断面形である。上半部は水田のため削平を受けている。底面は中央が緩く凹むものの、ほぼ平坦で、中央と南と東寄りに3個の小穴がある。P₁は径13cm、深さ10cm、P₂は径7cm、深さ13cm、P₃は径7cm、深さ5cmである。壁は垂直であるが、一部内湾気味の所もある。

埋土は5層に細分され、地山の黄褐色土が主体である。1層はかたくしまっているが、2～5層はやわらかく粘性が強い。レンズ状の堆積を示し、自然埋没である。

(13) C IV c 8 陥し穴状遺構 (第408図、写真図版62)

西館の北東に位置し、周辺にはC IV b 9 陥し穴状遺構やC IV d 7 陥し穴状遺構がある。開口部径70cm×70cm、底部径65cm×60cm、深さ60cmの規模をもち、平面形は円形で、ビーカー形の断面形である。底面は中央に向かってやや低くなり、中心に径10cm、深さ5cmの小穴がある。壁は下半部でやや内湾し、膨らむ部分が西側に見られ、フラスコ形に近い形状を一部にもつ。

埋土については精査できなかった。

(14) C IV d 7 陥し穴状遺構 (第409図、写真図版63)

西館の北東に位置し、周辺にはC IV c 8 陥し穴状遺構がある。開口部径90cm×85cm、底部径80cm×75cm、深さ75cmの規模をもち、平面形は円形で、断面形は底部がふくらむフラスコ形に近い形状を示す。底面は中央に向かって丸く凹み、湾曲している。小穴は検出されない。壁面は中段まで膨らみ、そこからやや開き気味となっている。

埋土は4層に細分され、上半はかたい黒褐色～暗褐色土、下半は黄褐色土と黒褐色土の混土である。1～2層は炭を含む。ブロック土が見られるが、全体的にはレンズ状堆積となっており自然埋没であろう。

(15) D II j 10 陥し穴状遺構 (第410図、写真図版63)

西館の西南部に位置し、周辺にはD II i 10 陥し穴状遺構やE II a 10 陥し穴状遺構などがある。開口部径70cm×70cm、底部径45cm×45cm、深さ70cmの規模をもち、平面形は円形で、深いビーカー形の断面形である。底面は湾曲して中央が低くなり、中心部に径10cm、深さ10cmの小穴がある。壁はほぼ垂直であり、崩落による変形はない。

埋土は5層に細分され、黒褐色土及び黄褐色土の崩落土が主体である。1層以外はやわらかい。黄褐色土が全体に粒状で混入することや堆積方向などから、自然堆積による埋没であろう。

(16) D III b 7 陥し穴状遺構 (第411図、写真図版63)

西館の中央に位置し、比較的柱穴の少ない区域で周辺にはD III b 8 陥し穴状遺構がある。開口部径75cm×75cm、底部径50cm×50cm、深さ55cmの規模をもち、平面形は円形で、ピーカー形の断面形である。底面は中央に向って低くなり、中心部に径10cm、深さ10cmの小穴がある。壁は垂直であるが、開口部に若干崩落が見られる。

埋土については精査できなかった。

(17) D III b 8 陥し穴状遺構 (第412図、写真図版63)

西館の中央部に位置し、掘立柱建物跡の下に重複している。開口部径85cm×80cm、底部径50cm×50cm、深さ60cmの規模をもち、平面形は円形である。開口部が崩落している部分は鉢型となっているが、全体的にはピーカー形の断面形を示す。底面は中央に向って低くなり、中心には径10cm、深さ5cmの小穴がある。壁は垂直であるが崩落のため開き気味の部分もある。

埋土については精査できなかった。

(18) D III c 9 陥し穴状遺構 (第413図、写真図版63)

西館の中央部に位置し、掘立柱建物跡と接している。開口部径95cm×85cm、底部径70cm×55cm、深さ55cmの規模をもち、平面形はやや不整な円形で、フラスコ形の断面形である。底部の膨らみはそれほど大きくない。底面は平坦で、中央に径10cm、深さ5cmの小穴がある。壁は底面より内傾して立ち上がり、中段で垂直となる。開口部の南側の壁は柱穴によって壊されている。

埋土は5層に細分され、黄褐色土が粒状に混入した暗褐色土や黒褐色土が大半を占める。1層はかたいが、それ以外は粘性がありやわらかい。3層には炭が含まれる。各層がレンズ状の堆積を示し、自然埋没である。

(19) D III d 3 陥し穴状遺構 (第414図、写真図版63)

西館の中央部西寄りに位置し、柱穴群が密集する区域である。開口部径65cm×60cm、底部径50cm×45cm、深さ75cmの規模をもち、平面形は円形で、ピーカー形の断面形である。開口部の一部は柱穴に壊されている。底面は中央がやや低く湾曲している。小穴は検出されなかった。壁は若干膨らんでいる。

埋土は4層に細分される。黒褐色土と黄褐色土との互層であり、全体にやわらかい。各層はレンズ状に堆積し、自然埋没である。

(20) D III f 3 陥し穴状遺構 (第415図、写真図版64)

西館の中央西寄りに位置し、柱穴群の密集した区域である。柱穴によって東側が大きく壊されている。開口部径80cm×70cm、底部径50cm×45cm、深さ75cmの規模をもつ。柱穴と重複するため形はゆがんでいるが、平面形は円形で、深いピーカー形の断面形である。底面は平坦で中央には径10cm、深さ10cmの小穴がある。壁はほぼ垂直であるが、一部崩れて膨んだ部分もある。埋土は精査できなかった。

(21) D III g 2 陥し穴状遺構 (第416図、写真図版64)

西館の南西に位置し、柱穴の多い区域である。D III g 6 溝と重複している。開口部径70cm×60cm、底部径45cm×45cm、深さ70cmの規模をもち、平面形は円形でピーカー形の断面形である。底面は平坦で、中央に径10cm、深さ10cmの小穴がある。壁は垂直である。埋土については精査できなかった。

(22) D III h 8 陥し穴状遺構 (第417図、写真図版64)

西館の南半部中央に位置し、柱穴と重複し一部壊されている。開口部95cm×70cm、底部85cm×55cm、深さ70cmの規模をもち、平面形は楕円形で深いピーカー形の断面形である。底面は平坦であるが、小穴は検出されなかった。壁は垂直である。埋土は3層に細分され、黒褐色土が主体である。全体にやわらかく、黄褐色土が粒状に混入する。レンズ状の堆積を示し、自然埋没である。

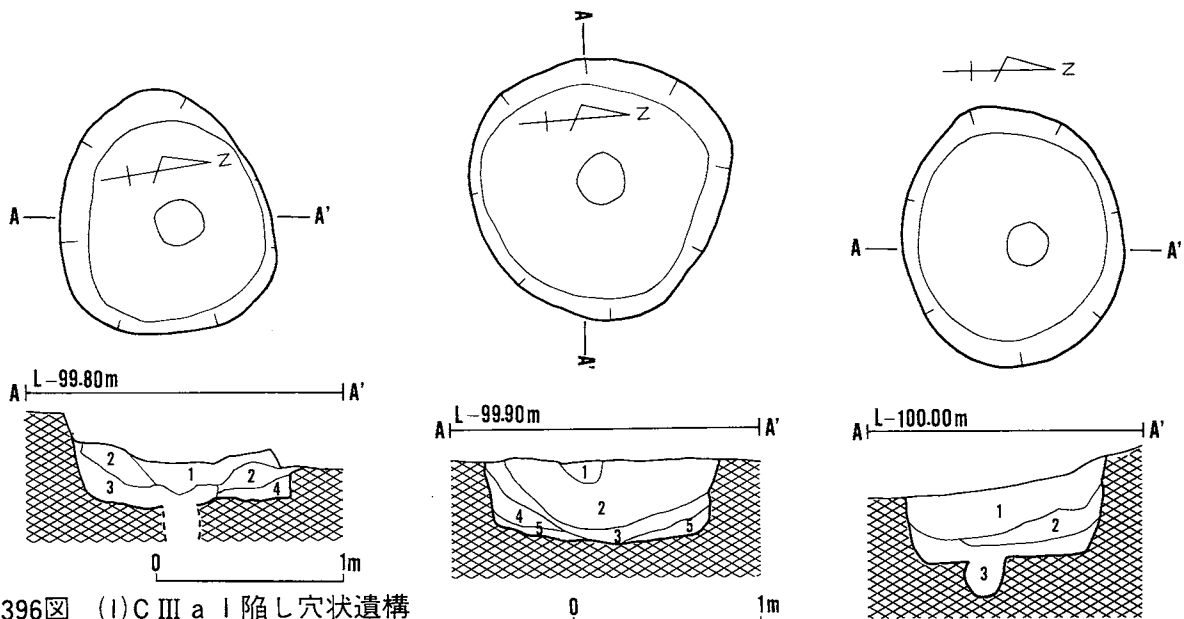
(23) D III i 1 陥し穴状遺構 (第418図、写真図版64)

西館の南西に位置し、周辺にはD II i 10陥し穴状遺構やD II g 10陥し穴状遺構がある。柱穴で開口部の一部が壊されている。開口部径70cm×65cm、底部径60cm×50cm、深さ65cmの規模をもち、平面形は東側にやや角ばった部分はあるが円形である。断面形は深いピーカー形である。底面は中央に向かってやや低くなり湾曲しているが、小穴は検出されなかった。壁はやや外傾して開くが凹凸はない。

埋土は7層に細分され、黒褐色土と黄褐色土が主体である。1層には炭を多く含む。壁からの崩落土が見られ、レンズ状の堆積を示し自然埋没である。

(24) D IV a 1 陥し穴状遺構 (第419図、写真図版64)

西館の中央部に位置し、D IV a 1 土坑と重複しており北壁の上半は失われている。開口部径65cm×65cm、底部径75cm×75cm、深さ55cmの規模をもち、平面形は円形で、底部がやや膨らむ



第396図 (1)C III a I 陥し穴状遺構

C III a I 陥し穴状遺構

- 1 10Y R 2/3 黒褐色 シルト
- 2 10Y R 3/4 暗褐色 シルト
- 3 10Y R 5/6 黄褐色 粘土、やわらかい
- 4 10Y R 4/4 褐色 粘土

第397図 (2)C III b 4 陥し穴状遺構

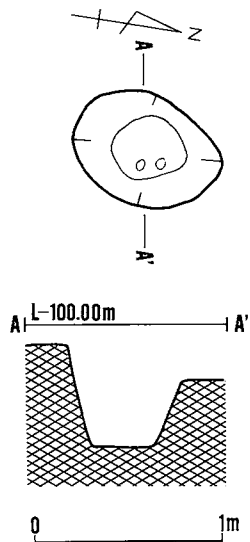
C III b 4 陥し穴状遺構

- 1 規乱
- 2 10Y R 3/3 暗褐色 シルト、かたい黄褐色ブロック土が混入
- 3 10Y R 3/2 黒褐色 シルト、2を基本に4が混入
- 4 10Y R 6/4 にぶい黄褐色 粘土質土
- 5 10Y R 5/4 にぶい黄褐色 粘土質土、4の汚れたもの

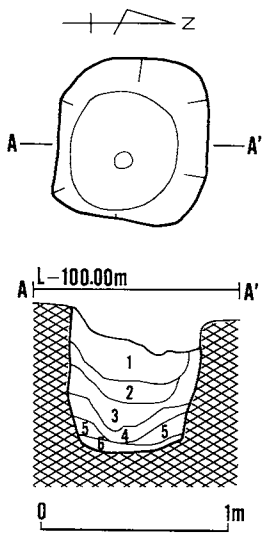
第398図 (3)C III b 5 陥し穴状遺構

C III b 5 陥し穴状遺構

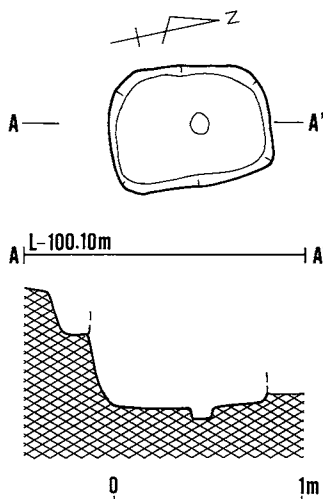
- 1 10Y R 2/3 黒褐色 シルト、鉄分、炭が若干混入かない
- 2 7.5Y R 6/4 橙褐色 粘土
- 3 10Y R 6/4 にぶい黄褐色 粘土



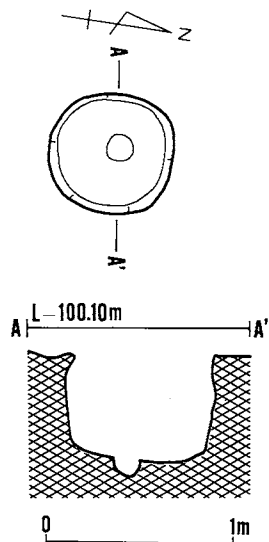
第399図



第400図



第401図



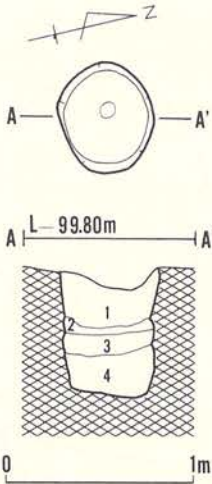
第402図

(4)C III a 2 陥し穴状遺構 (5)C III c 5 陥し穴状遺構 (6)C III d 6 陥し穴状遺構

C III c 5 陥し穴状遺構

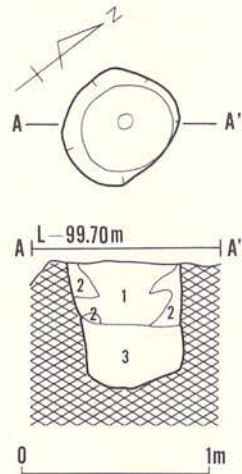
- 1 7.5Y R 3/2 黒褐色 鉄分混入
- 2 10Y R 3/2 黒褐色 粘土、やわらかい
- 3 7.5Y R 4/3 褐色 粘土、2よりやわらかい
- 4 10Y R 5/4 にぶい黄褐色 粘土、やわらかい
- 5 10Y R 6/6 明黄褐色 最もやわらかい粘土
- 6 10Y R 5/4 にぶい黄褐色 粘土

(7)C III j 10 陥し穴状遺構



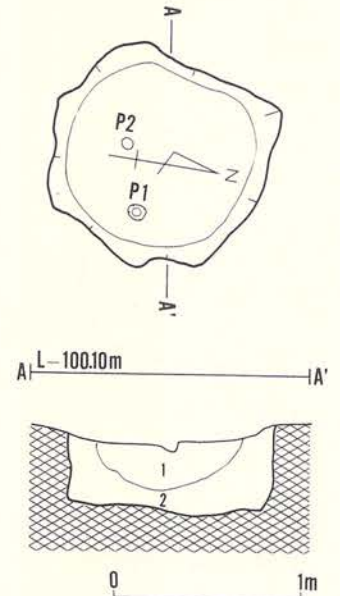
第403図

(8) C IV b 9 陥し穴状遺構



第404図

(9) C IV b 10 陥し穴状遺構



第405図

(10) C IV c 1 陥し穴状遺構

C IV b 9 陥し穴状遺構

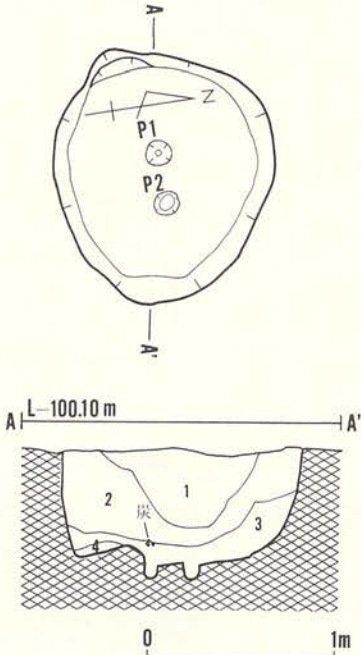
- 1 10Y R 3/3 暗褐色 シルト、黄褐色土が粒状に混入
- 2 10Y R 2/2 黒褐色 シルト、炭が混入
- 3 10Y R 2/2 黒褐色 シルト、黄褐色土が多く混入
- 4 10Y R 2/3 黒褐色 シルト、黄褐色土ブロック状に混入

C IV b 10 陥し穴状遺構

- 1 10Y R 3/3 暗褐色 シルト、炭が混入
- 2 10Y R 4/3~4/6 に近い黄褐色~褐色 黄褐色火山灰土主体
- 3 10Y R 2/2 黒褐色 シルト、炭が混入

C IV c 1 陥し穴状遺構

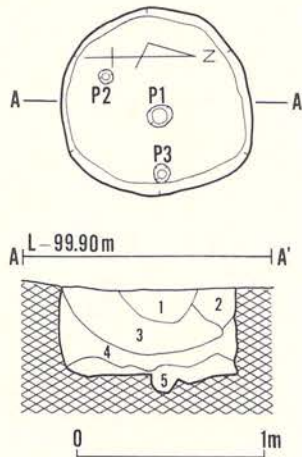
- 1 10Y R 3/2 黒褐色 シルト、炭が混入
- 2 10Y R 5/4 に近い黄褐色 火山灰土



第406図 (11) C IV c 2 陥し穴状遺構

C IV c 2 陥し穴状遺構

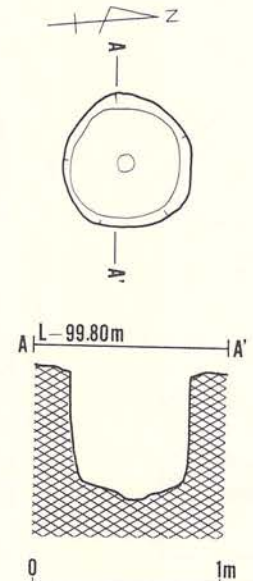
- 1 10Y R 2/2 黒褐色 シルト、かたい、炭が微量混入
- 2 10Y R 5/4 に近い黄褐色 粘性強い
- 3 10Y R 7/6 明黄褐色 粘土、床面の土と同じ
- 4 10Y R 5/4 に近い黄褐色 2に近い



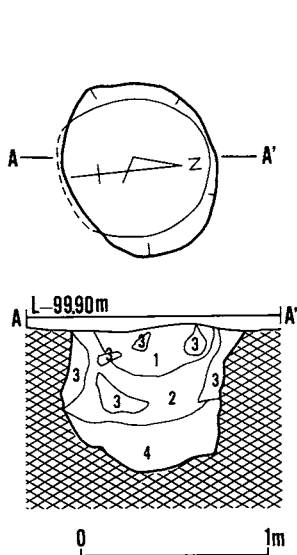
第407図 (12) C IV c 5 陥し穴状遺構

C IV c 5 陥し穴状遺構

- 1 10Y R 3/2 黒褐色 シルト、かたい
- 2 7.5Y R 4/4 褐色 粘土質土
- 3 7.5Y R 4/3 褐色 2の汚れたもの
- 4 7.5Y R 5/4 に近い褐色 粘性あり、やわらかい
- 5 10Y R 5/6 黄褐色 粘性あり、やわらかい

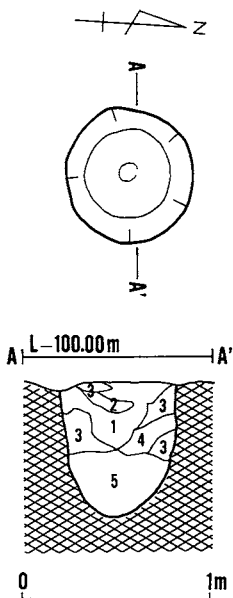


第408図 (13) C IV c 8 陥し穴状遺構



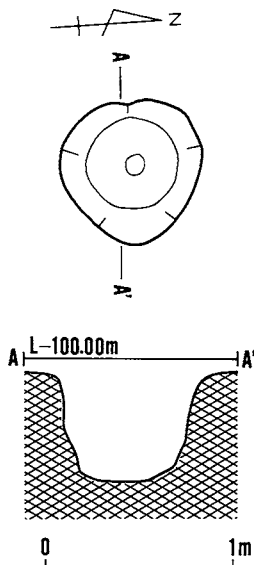
第409図

(14) C IV d 7 陥し穴状遺構



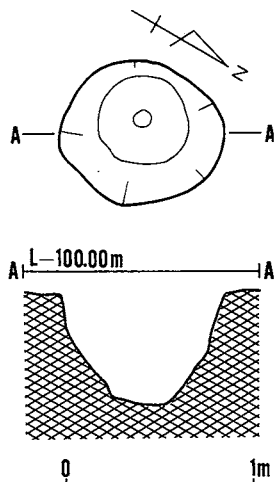
第410図

(15) D II j 10 陥し穴状遺構



第411図

(16) D III b 7 陥し穴状遺構



第412図

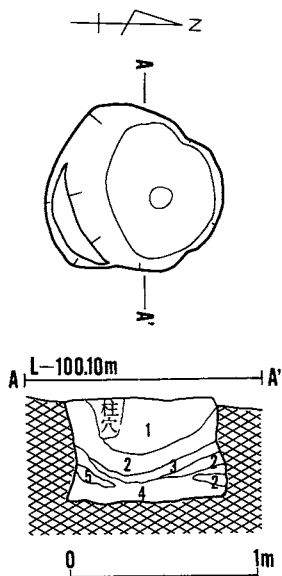
(17) D III b 8 陥し穴状遺構

C IV d 7 陥し穴状遺構

- 1 10Y R 2/2 黒褐色 シルト、黄褐色土や炭が混入
- 2 10Y R 3/3 暗褐色 シルト、炭が混入
- 3 10Y R 5/6 黄褐色 火山灰土主体に黒褐色土が混入
- 4 10Y R 2/2 黒褐色 シルト、黄褐色火山灰土が混入

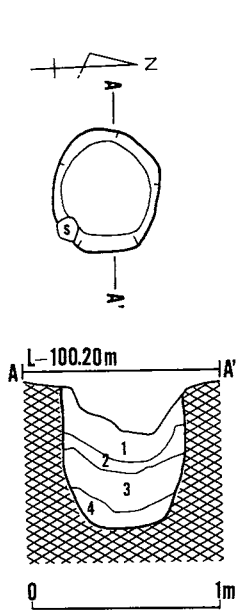
D II j 10 陥し穴状遺構

- 1 10Y R 2/3 黒褐色 シルト、かたい
- 2 10Y R 2/2 黒褐色 シルト、やわらかい
- 3 10Y R 5/4 にぶい黄褐色 火山灰土主体
- 5 10Y R 4/4 褐色 火山灰土と暗褐色シルトの混入
- 5 10Y R 2/2 黒褐色 シルト、黄褐色土が混入



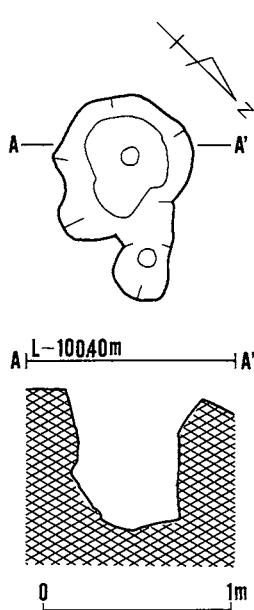
第413図

(18) D III c 9 陥し穴状遺構



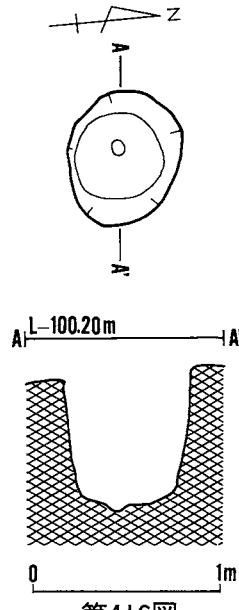
第414図

(19) D III d 3 陥し穴状遺構



第415図

(20) D III f 3 陥し穴状遺構



第416図

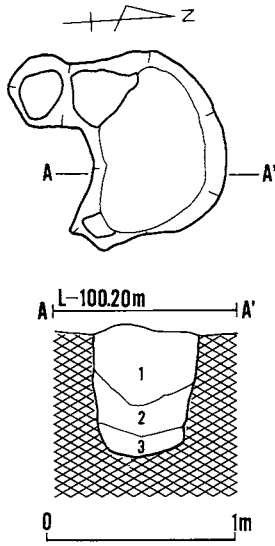
(21) D III g 2 陥し穴状遺構

D III c 9 陥し穴状遺構

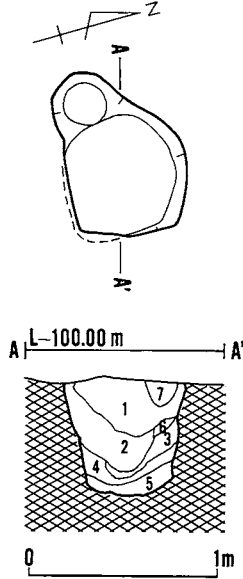
- 1 10Y R 3/2 黒褐色 シルト、火山灰土混入
- 2 10Y R 6/4 にぶい黄褐色 火山灰土、やわらかい
- 3 10Y R 3/2 黒褐色 シルト、炭が若干混入
- 4 10Y R 3/3 暗褐色 シルト、火山灰土が混入
- 5 10Y R 3/2 黒褐色 シルト

D III d 3 陥し穴状遺構

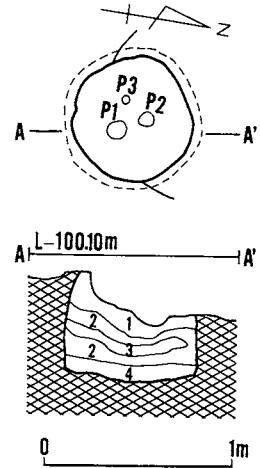
- 1 10Y R 2/2 黒褐色 シルト、炭化物少量混入
- 2 7.5Y R 5/4 にぶい褐色 壁の崩落土
- 3 10Y R 2/2 黒褐色 シルト、1とほぼ同じ
- 4 7.5Y R 5/4 にぶい褐色 2と同じ



第417図 (22) D III h 8 陥し穴状遺構



第418図 (23) D III i 1 陥し穴状遺構



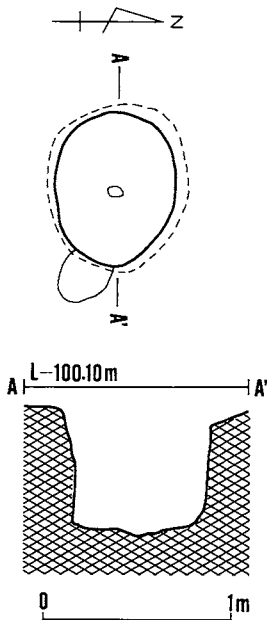
第419図 (24) D IV a 1 陥し穴状遺構

D III h 8 陥し穴状遺構

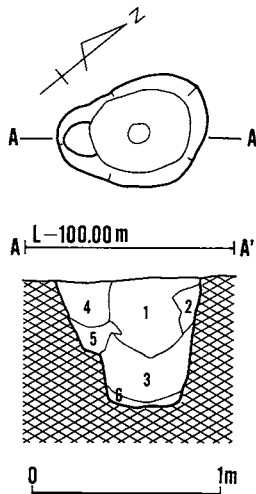
- 1 10Y R 3/2 黒褐色 シルト、火山灰土を若干混入
- 2 10Y R 5/6 黄褐色 火山灰土、暗褐色土が混入
- 3 10Y R 3/2 黒褐色 シルト

D III i 1 陥し穴状遺構

- 1 10Y R 2/2 黒褐色 シルト、炭を多く含む
- 2 10Y R 4/3 にぶい黄褐色 火山灰土と暗褐色土との混土
- 3 10Y R 3/3 暗褐色 シルト
- 4 10Y R 1.7/1 黒褐色 シルト、淡黄色粘土質土が多く混入
- 5 2.5Y 7/4 浅黄色 粘土質土、黒色土が若干混入
- 6 黄褐色 火山灰土のブロック土
- 7 黄褐色 火山灰土と灰白色粘土と黒褐色土の混土



第420図 (25) D IV b 2 陥し穴状遺構



第421図 (26) E II a 10 陥し穴状遺構一 I

D IV a 1 陥し穴状遺構

- 1 7.5Y R 4/4 褐色 火山灰土
- 2 7.5Y R 5/4 にぶい褐色 壁の崩落土
- 3 7.5Y R 4/3 褐色 2に黒色土が混入したもの
- 4 10Y R 4/4 褐色 3より多く黒色土が混入

E II a 10 陥し穴状遺構一 I

- 1 10Y R 2/2 黒褐色 シルト、黄褐色土が若干混入
- 2 黒褐色 シルトと黄褐色土半々の混入
- 3 10Y R 3/2 黒褐色 シルト、黄褐色土が多く混入
- 4 10Y R 3/3 暗褐色 シルト、黄褐色土が多く混入
- 5 10Y R 5/6 黄褐色 火山灰土主体に暗褐色土若干混入
- 6 10Y R 1.7/1 黒褐色 シルト

フラスコ形の断面形である。底面は中央に向かってやや低くなり、4個の小穴が中央と西壁寄りで検出された。P₁は径10cm、深さ15cm、P₂は径8cm、深さ15cm、P₃は径5cm、深さ10cm、P₄は径5cm、深さ10cmである。壁はやや内傾して立ち上がり、開口部では崩落が見られる。

埋土は4層に細分され、壁の崩落土である褐色土が主体である。黒色土が若干混入している。水平やレンズ状の堆積を示し、自然埋没である。

(25) D IV b 2 陥し穴状遺構 (第420図、写真図版64)

西館の中央に位置し、周辺にはD IV a 1 陥し穴状遺構やD IV a 2 土坑などがある。開口部径80cm×65cm、底部径90cm×75cm、深さ60cmの規模をもち、平面形は長軸方向を東西とする楕円形である。断面形は底部がやや膨らむフラスコ形である。底面は平坦であり、中央に径10cm、深さ5cmの浅い凹み状の小穴がある。壁はやや内傾して立ち上がり中段より直上している。

埋土は精査できなかった。

(26) E II a 10 陥し穴状遺構—1 (第421図、写真図版64)

西館の南西に位置し、E II a 10 陥し穴状遺構—2 (長方形型) と隣接している。開口部径70cm×60cm、底部径55cm×45cm、深さ70cmの規模をもち、平面形は円形で深いピーカー形の断面形である。開口部の南側は柱穴によって壊されている。底面は平坦で中央に径10cm、深さ不明(計測しなかった)の小穴がある。壁はほぼ垂直に立ち上がり、開口部に向かってやや開く。

埋土は6層に細分されるが、4層と5層は柱穴の埋土である。大部分は黄褐色土が混入した黒褐色土であり、底面には薄く黒色土(6層)が入る。1層はかたくしまっている。レンズ状の堆積を示し、自然埋没である。

3) 溝形陥し穴状遺構

(1) C III g 1 陥し穴状遺構 (第422図、写真図版65)

西館の北西に位置し、柱穴が密集した区域であり、いくつか重複している。開口部径350cm×20cm、底部径330cm×10cm、深さ35cmの規模をもち、細い溝形の平面形である。長軸方向はN—80°—Eである。底面はほとんど水平に近く平坦である。削平されて浅いため、柱穴による変形以外には壁の崩落はない。壁は垂直に立ち上がっている。埋土は精査しなかった。

(2) C III i 3 陥し穴状遺構 (第423図、写真図版65)

西館の北西中央寄りに位置し、C III j 4 土坑と重複し、その下位にあたる。開口部径345cm×

25cm、底部径320cm×20cm、深さは土坑下で30cm、土坑外で70cmの規模をもち、細長い溝形の平面形である。長軸方向はN-16°-Eである。底面は北側にやや低くなるものの平坦である。壁は垂直である。埋土は精査しなかった。

(3) CIV c 4 陥し穴状遺構 (第424図、写真図版65)

西館の北東に位置し、CIV c 4 土坑とCIV d 4 土坑と重複しており上半部を削平されている。開口部径395cm×35cm、底部径375cm×15cm、深さ70cmの規模をもち、細長い溝形の平面形である。長軸方向はN-37°-Eである。底面は長軸両端がやや高く、中央で15cm程低くなり緩やかに湾曲しており、若干屈曲も見られる。壁は垂直に立ち上がり、所々に崩落がある。

埋土はCIV d 4 土坑に削られた部分より下位で、6層に細分され、上位に黒褐色土があり、中位～下位では壁の崩落土である褐色～黄褐色土がブロック状に堆積している。

(4) CIV g 6 陥し穴状遺構 (第425図、写真図版65)

西館の北東に位置し、水田の畦を横断しているため検出面に20cmの段差がある。開口部径395cm×35cm、底部径380cm×15cm、深さは70cmの規模をもち、細長い溝形の平面形である。長軸方向はN-83°-Wである。底面は平坦で東端部でやや幅広となる。柱穴の多い区域であり、3箇所に壁の崩落が見られる。壁は垂直に立ち上がっている。

(5) DII a 8 陥し穴状遺構 (第426図、写真図版65)

西館の西端部に位置し、落ち込み遺構の下位に検出された。上半部が削平され底部のみである。開口部径300cm×25cm、底部径290cm×15cm、深さ20cmの規模をもち、細長い溝形の平面形である。長軸方向はE-Wである。底面は平坦である。壁は垂直に立ち上がっているが、柱穴によって壊されている部分が多い。埋土は精査しなかった。

(6) DII d 9 陥し穴状遺構 (第427図、写真図版65)

西館の南西に位置し、DII e 9 陥し穴状遺構と並列している。開口部径300cm×20cm、底部径235cm×10cm、深さ30cmの規模をもち、細長い溝形の平面形である。長軸方向はN-82°-Wである。底面は中央が平坦であるが長軸両端で浅くなる。長軸両端の壁は底面より緩やかに外傾して立ち上がる。壁の一部は柱穴で壊されている。埋土は2層に分けられ、暗褐色土と黒褐色土である。

(7) DII e 9 陥し穴状遺構 (第428図、写真図版65)

西館の南西に位置し、D II d 9 陥し穴状遺構と並列している。開口部径365cm×45cm、底部径340cm×25cm、深さ50cmの規模をもち、細長い溝形の平面形である。中央がやや幅広く膨らんでいる。長軸方向はN-84°-Eである。底面は中央でやや低くなるがほぼ平坦である。壁は垂直であるが、やはり柱穴によって一部壊されている。埋土は4層に細分され、上半は黒褐色～黒色土、下半は壁の崩落土の黄褐色土である。

(8) D III b 8 陥し穴状遺構 (第429図、写真図版65)

西館の中央に位置し、掘立柱建物跡の下位に検出された。開口部径310cm×30cm、底部径290cm×20cm、深さ25cmの規模をもち、細長い溝形の平面形である。長軸の北端は大きな柱穴が重複している。長軸方向はN-35°-Wである。底面は平坦で南半部は幅広となっている。壁は垂直である。埋土は精査しなかった。

(9) B V j 9 陥し穴状遺構 (第430図、写真図版66)

東館の北西端に位置し、C V a 8 土坑と重複し上半の一部が削平されている。開口部径250cm×35cm、底部径310cm×20cm、深さ95cmの規模をもち、細長い溝形の平面形である。開口部に比べ底部が長く、長軸断面形ではフラスコ形を呈している。長軸方向はN-69°-Wである。底面は中央でやや低くなるもののほぼ平坦である。側辺の壁は垂直であるが、長軸両端では底部で大きく膨らみ、内傾して立ち上がり、中段から垂直気味となる。東端では柱穴によって壊された部分がある。埋土は精査しなかった。

(10) C V b 8 陥し穴状遺構 (第431図、写真図版66)

東館の北西端に位置し、C V a 8 土坑と隣接している。開口部径250cm×60cm、底部径275cm×25cm、深さ75cmの規模をもち、細長い溝形の平面形である。開口部より底部が長く、長軸断面形ではフラスコ形を呈している。長軸方向はN-45°-Wである。底面は平坦である。側辺の壁は垂直であるが、長軸両端では底部で膨らみ、内傾して立ちあがり、中段から開口部にかけて垂直気味となる。南壁の上部の一部は柱穴によって壊されている。埋土は精査しなかった。

(11) C V c 7 陥し穴状遺構 (第432図、写真図版66)

東館の北西に位置し、周辺にはC V b 8 陥し穴状遺構やC V e 6 溝跡などがある。開口部径235cm×30cm、底部径255cm×10cm、深さ70cmの規模をもち、細長い溝形の平面形である。開口部より底部が長く、長軸方向ではフラスコ形の断面形を示す。長軸方向はN-78°-Wである。底面は平坦となっている。側辺の壁は垂直であるが、長軸両端では内湾して膨らみ、中段で垂

直からやや外傾する。柱穴による攪乱はない。埋土の精査はしなかった。

(12) C V i 8 陥し穴状遺構 (第433図)

東館の西側中軸線寄りに位置し、C V h 8 土坑と重複し上半を削平されている。柱穴の密集する区域であり、壁の不明な部分が多い。残存する開口部径155cm×20cm、底部径145cm×10cm、深さ35cmの規模をもち、細長い溝形の平面形である。長軸方向はE-Wである。底部は西側にやや低くなるが平坦である。壁は垂直であるが長軸両端部はさらに長くなっていたと思われる。埋土は精査しなかった。

(13) C V i d 10 陥し穴状遺構 (第434図、写真図版66)

東館の北側中央に位置し、C V i d 9 土坑と隣接している。周辺はC V i a 1 溝跡や落ち込んだ区域にあり上半部は削平を受けている。開口部径280cm×25cm、底部径260cm×15cm、深さ55cmの規模をもち、細長い溝形の平面形である。長軸方向はN-27°-Wである。底面は平坦である。壁は垂直となっているが、長軸両端の壁は柱穴によって壊されている。埋土は精査しなかった。

(14) C V i e 7 陥し穴状遺構 (第435図、写真図版66)

東館の北側中央に位置し、C V i e 7 土坑と重複しており大半は壊され、南壁と底部を残すだけである。開口部径290cm×25cm、底部径260cm×8cm、深さ50cmの規模をもち、細長い溝形の平面形である。長軸方向はN-78°-Wである。底面は平坦で壁は垂直であるが、長軸の両端は柱穴によって壊されている。埋土は精査しなかった。

(15) C V i h 7 陥し穴状遺構 (第436図、写真図版66)

東館の中央に位置し、C V i c 8 溝跡と重複しており大半は壊され、底部と長軸両端部を残している。柱穴もいくつか重複する。C V i i 7 陥し穴状遺構と並列している。開口部径320cm×15cm、底部径290cm×10cm、深さ40cmの規模をもち、細長い溝形の平面形である。長軸方向はN-54°-Wである。底面は平坦である。壁は長軸の両端部にわずかに残存するのみであるが、やや内湾して立ちあがる。埋土は精査しなかった。

(16) C V i i 6 陥し穴状遺構 (第437図、写真図版66)

東館の中央に位置し、C V i i 7 陥し穴状遺構と東端部で接している。柱穴の多い区域であり壁の崩落や攪乱が見られる。開口部径345cm×40cm、底部径320cm×15cm、深さ30cmの規模をもち、細長い溝形の平面形である。長軸方向はE-Wである。底面は平坦で、壁は垂直であるが、

側辺は壊されて変形している。埋土は精査しなかった。

(17) C VI i 7 陥し穴状遺構 (第438図、写真図版66)

東館の中央に位置し、c VI c 8 溝と重複しており西半部は削平を受けている。C VI i 6 陥し穴状遺構と西側で接し、またC VI h 7 陥し穴状遺構と並列している。開口部径305cm×20cm、底部径285cm×15cm、深さ40cmの規模をもち、細長い溝形の平面形である。長軸方向はN-60°-Wである。底面は平坦である。壁は垂直であるが長軸の両端は削平や攪乱がある。埋土は精査しなかった。

(18) C VII d 1 陥し穴状遺構 (第439図、写真図版67)

東館の北側中央に位置し、C VII a 1 溝跡と重複しており大半は削平されている。長軸の両端部を残すだけである。開口部径275cm×40cm、底部径255cm×20cm、深さ70cmの規模をもち、細長い溝形の平面形である。長軸方向はN-58°-Eである。底面は中央が一部失われているがほぼ平坦であったと推定され、壁は垂直である。C VII a 1 溝跡の断面図にかかった部分の観察によれば、埋土は5層に細分され、いずれも地山の黄褐色土を主体とした自然埋没土である。

(19) C VII d 2 陥し穴状遺構 (第440図、写真図版67)

東館の北側中央に位置し、C VII d 2 土坑-2 とC VII c 2 土坑及びC VI a 4 溝跡と重複しており削平を受けて底部のみを残す。開口部推定径260cm×20cm、底部径推定250cm×15cm、深さ55cmの規模をもち、細長い溝形の平面形である。長軸方向はN-5°-Wである。底面は平坦で、残存する壁は垂直である。埋土は精査しなかった。

(20) C VII j 1 陥し穴状遺構 (第441図、写真図版67)

東館の中央部やや東寄りに位置し、C VII j 1 土坑-2 とC VII j 2 土坑と重複し一部削平されている。開口部径350cm×35cm、底部径310cm×15cm、深さ35cmの規模をもち、細長い溝形の平面形である。長軸方向はN-33°-Wである。底面は平坦であるが、中央で緩く弧状に屈曲している。壁は垂直となっているが長軸の北端は複数の柱穴で壊されている。埋土は精査しなかった。

(21) D V b 7 陥し穴状遺構 (第442図、写真図版67)

東館の西端中央寄りに位置し、周辺にはD V b 6 土坑やD V d 6 溝跡、D V b 8 陥し穴状遺構などがある。開口部径230cm×20cm、底部径215cm×15cm、深さ40cmの規模をもち、細長い溝形

の平面形である。長軸方向はN-81°-Eである。底面は東側が幅広く、西へ向って狭くなるとともに浅くなる。側辺は垂直であるが長軸の両端はやや外傾し緩やかである。南西壁の一部は柱穴に壊されている。埋土は精査しなかった。

(22) DV b 8 陥し穴状遺構 (第443図、写真図版67)

東館の西端中央寄りに位置し、周辺にはDV b 7 陥し穴状遺構、DV b 9 土坑などがある。開口部径400cm×25cm、底部径380cm×15cm、深さ55cmの規模をもち、細長い溝形の平面形である。長軸の両端及び側壁の一部は柱穴と重複し壊されている。長軸方向はN-89°-Eである。底面は平坦で壁は垂直である。埋土は精査しなかった。

(23) DV e 7 陥し穴状遺構 (第444図、写真図版67)

東館の西端南寄りに位置し、周辺にはDV b 6 溝跡やDV d 6 溝跡などがある。開口部径335cm×25cm、底部径285cm×20cm、深さ35cmの規模をもち、細長い溝形の平面形である。長軸方向はN-79°-Eである。底面は平坦であるが西方でやや浅くなり、幅も広めとなる。わずかに湾曲している。側辺の壁は垂直であるが、長軸両端ではやや外傾している。柱穴によって数箇所壁が壊されている。埋土は精査しなかった。

(24) DV f 10 陥し穴状遺構-1 (第445図、写真図版67)

東館の南西に位置し、DV f 10 陥し穴状遺構-2 やDV g 9 陥し穴状遺構と隣接し、並列している。開口部径285cm×25cm、底部径275cm×15cm、深さ25cmの規模をもち、細長い溝形の平面形である。長軸の両端は柱穴で壊されている。長軸方向はN-30°-Wである。底面は平坦で壁は垂直である。埋土は精査していない。

(25) DV f 10 陥し穴状遺構-2 (第446図、写真図版67)

東館の南西に位置し、DV f 10 陥し穴状遺構-1 やDV i f 1 陥し穴状遺構と隣接し並列している。開口部径440cm×30cm、底部径430cm×20cm、深さ35cmの規模をもち、細長い溝形の平面形である。長軸方向はN-42°-Wである。底面はほぼ平坦となっている。壁は垂直であるが、側壁は数箇所柱穴によって壊されている。埋土は精査していない。

(26) DV g 6 陥し穴状遺構 (第447図、写真図版68)

東館の南西端に位置し、DV b 6 溝跡と重複しており中央の一部が削平を受けている。開口部径190cm×20cm、底部径180cm×15cm、深さ25cmの規模をもち、細長い溝形の平面形である。長

軸方向はN-87°-Eである。底面は凹凸があり、長軸の両端がやや角ばる。埋土は精査しなかった。

(27) D V g 8 陥し穴状遺構 (第448図、写真図版68)

東館の南西に位置し、D V h 7 陥し穴状遺構-2とD V g 9 陥し穴状遺構と並列している。開口部径275cm×20cm、底部径265cm×15cm、深さ40cmの規模をもち、細長い溝形の平面形である。長軸方向はN-39°-Wである。底面は平坦で、壁は垂直に立ち上がっている。柱穴との重複は3箇所で見られるが大きな変形はない。埋土は精査しなかった。

(28) D V g 9 陥し穴状遺構 (第449図、写真図版68)

東館の南西に位置し、D V f 10 陥し穴状遺構やD V g 8 陥し穴状遺構と並列している。開口部径285cm×20cm、底部径270cm×15cm、深さ35cmの規模をもち、細長い溝形の平面形である。長軸方向はN-45°-Wである。底面は平坦である。側壁の一部は柱穴で壊されているが垂直である。埋土は精査しなかった。

(29) D V g 10 陥し穴状遺構 (第450図、写真図版68)

東館の南西に位置し、D V f 10 陥し穴状遺構-1やD V g 9 陥し穴状遺構に近接している。大きな柱穴と重複し、壁の崩落が著しく、幅広な形状となっている。開口部径270cm×40cm、底部径250cm×35cm、深さ50cmの規模をもち、やや幅広で細長い溝形の平面形である。実際はもっと幅が狭かったと推定される。長軸方向はN-86°-Wである。底面は平坦で壁は垂直に立ち上がっている。埋土は精査しなかった。

(30) D V h 5 陥し穴状遺構 (第451図、写真図版68)

東館の南西に位置し、陥し穴状遺構群の配列の西端にあたる。開口部径280cm×20cm、底部径270cm×15cm、深さ25cmの規模をもち、細長い溝形の平面形である。長軸方向はN-33°-Wである。底面は平坦であり、長軸中央付近でやや湾曲している。壁の残りは浅いが、側辺は垂直に、長軸両端は外傾気味に立ち上がっている。埋土は精査しなかった。

(31) D V h 7 陥し穴状遺構-1 (第452図、写真図版68)

東館の南西に位置し、D V h 5 陥し穴状遺構とD V h 7 陥し穴状遺構-2に並列している。開口部径275cm×20cm、底部径265cm×15cm、深さ20cmの規模をもち、細長い溝形の平面形である。長軸方向はN-40°-Wである。底面は平坦であり中央にはわずかに折れ曲った部分がある。

壁は浅く垂直である。埋土は精査しなかった。

(32) DVh 7 陥し穴状遺構— 2 (第453図、写真図版68)

東館の南西に位置し、DVh 7 陥し穴状遺構— 1 とDVg 8 陥し穴状遺構に並列している。開口部径285cm×25cm、底部径270cm×15cm、深さ35cmの規模をもち、細長い溝形の平面形である。長軸方向はN—33°—Wである。底面は平坦である。壁も垂直であるが南端部は柱穴で壊された部分がある。埋土は精査しなかった。

(33) DVI a 6 陥し穴状遺構 (第454図、写真図版68)

東館の中央に位置し、CVj 6 溝跡— 4 とCVI c 8 溝跡と重複しており一部削平されている。CVI i 7 陥し穴状遺構とDVI b 6 陥し穴状遺構に並列している。開口部径260cm×25cm、底部径240cm×15cm、深さ30cmの規模をもち、細長い溝形の平面形である。長軸方向はN—63°—Wである。底面は平坦で中央部がやや幅広くなっている。壁の側辺と長軸両端部は攪乱や削平を受けているが、ほぼ垂直の立ち上がりである。埋土は精査しなかった。

(34) DVI b 5 陥し穴状遺構 (第455図、写真図版69)

東館の中央に位置し、DVI b 6 陥し穴状遺構とDVI c 5 陥し穴状遺構に隣接している。開口部径380cm×20cm、底部径355cm×10cm、深さ20cmの規模をもち、細長い溝形の平面形である。浅く底部しか残っていない。長軸方向はN—77°—Wである。底面は非常に細く、東側がやや幅広く深くしている。壁は浅いため長軸両端では緩やかに外傾して立ち上がるが、側辺は垂直である。柱穴によって東寄りの2箇所が壊されている。埋土は精査しなかった。

(35) DVI b 6 陥し穴状遺構 (第456図、写真図版69)

東館の中央に位置し、DVI b 5 陥し穴状遺構と近接し、DVI a 6 陥し穴状遺構やDVI c 5 陥し穴状遺構とは長軸方向を同じくして並列している。またCVI j 6 溝跡— 3 によって中央部が削平されている。開口部径290cm×30cm、底部径260cm×15cm、深さ25cmの規模をもち、細長い溝形の平面形である。やや幅広く長軸両端も膨らみをもつ。長軸方向はN—56°—Wである。底面はやや凹凸があり東側が若干低くなっている。壁は浅く垂直である。埋土は精査しなかった。

(36) DVI c 4 陥し穴状遺構 (第457図、写真図版69)

東館の中央に位置し、DVI c 5 陥し穴状遺構とDVI e 3 陥し穴状遺構に並列している。長軸の両端部は多数の柱穴と重複し壊されている。開口部径295cm×20cm、底部径285cm×15cm、深

さ40cmの規模をもち、細長い溝形の平面形である。長軸方向はN-54°-Wである。底面は狭く平坦である。壁は垂直である。埋土は精査しなかった。

(37) DVI c 5 陥し穴状遺構 (第458図、写真図版69)

東館の中央に位置し、DVI c 5 土坑-1と重複しており東端部が削平されている。DVI b 6 陥し穴状遺構とDVI c 4 陥し穴状遺構に並列している。開口部径225cm×20cm、底部径210cm×13cm、深さ30cmの規模をもち、細長い溝形の平面形である。長軸方向はN-58°-Wである。底面は平坦で壁は垂直となっている。柱穴による壁の攪乱は4箇所である。埋土の精査はしなかった。

(38) DVI c 7 陥し穴状遺構 (第459図、写真図版69)

東館の中央に位置し、DVI c 8 陥し穴状遺構と近接している。柱穴の多い区域であり、7箇所攪乱を受けている。開口部径325cm×35cm、底部径240cm×15cm、深さ45cmの規模をもち、細長い溝形の平面形である。やや幅広い形状である。長軸方向はN-25°-Wである。底面は平坦で中央部が若干広くなる。壁は垂直である。埋土の精査はしなかった。

(39) DVI c 8 陥し穴状遺構 (第460図、写真図版69)

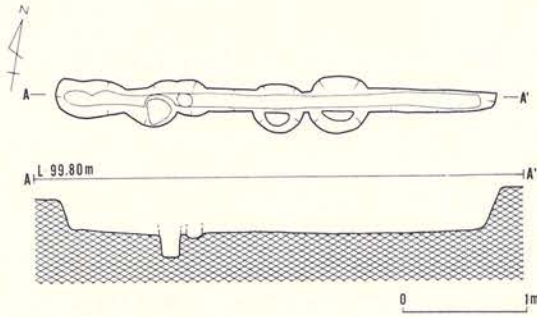
東館の中央に位置し、DVI b 9 土坑と重複しており東端を削平されている。またDVI c 7 陥し穴状遺構と近接している。開口部径推定400cm×20cm、底部径380cm×10cm、深さ40cmの規模をもち、細長い溝形の平面形である。非常に細く弧状に湾曲した形である。長軸方向はN-2°-Eである。底面は狭く蛇行気味となっている。壁は垂直であるが柱穴による攪乱が多い。埋土は精査しなかった。

(40) DVI e 1 陥し穴状遺構 (第461図、写真図版69)

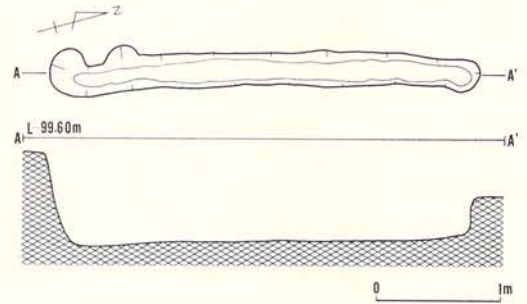
東館の南西に位置し、DVI f 1 陥し穴状遺構と並列している。開口部径390cm×15cm、底部径385cm×10cm、深さ45cmの規模をもち、細長い溝形の平面形である。非常に細く、中央付近で若干屈曲した形状を示す。長軸方向はN-49°-Wである。底面は狭く平坦である。壁は垂直で、柱穴による攪乱を数箇所を受けている。埋土は精査していない。

(41) DVI e 2 陥し穴状遺構 (第462図、写真図版69)

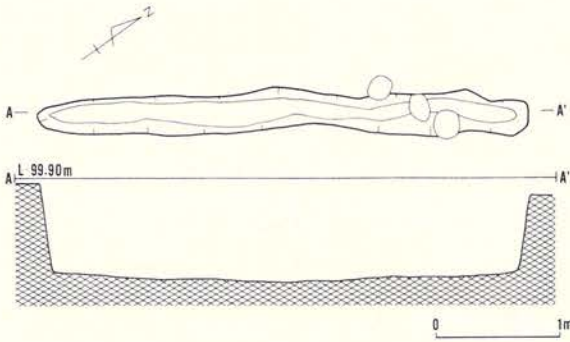
東館の南西部中央寄りに位置し、DVI e 2 土坑と重複し上半を削平されている。開口部径340cm×25cm、底部径325cm×10cm、深さ55cmの規模をもち、細長い溝形の平面形である。非常に細



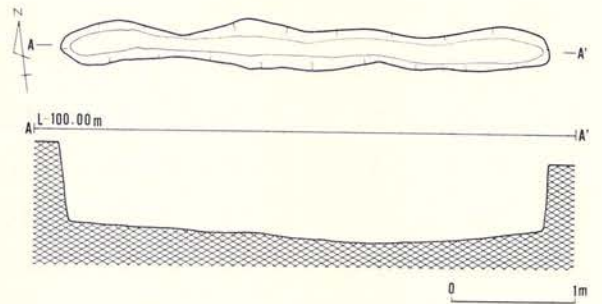
第422図 (1)C III g I 陥し穴状遺構



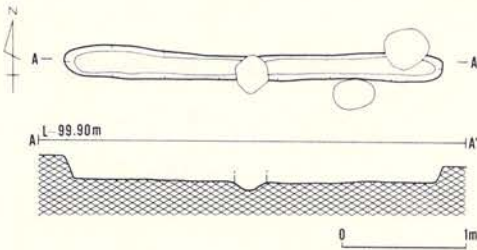
第423図 (2)C III i 3 陥し穴状遺構



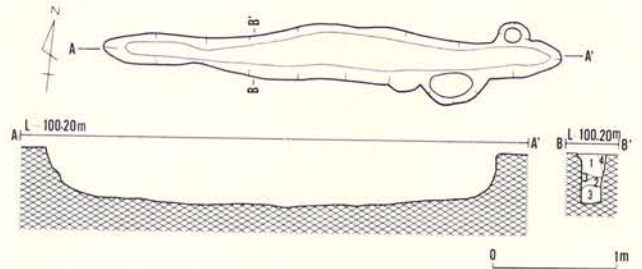
第424図 (3)C IV c 4 陥し穴状遺構



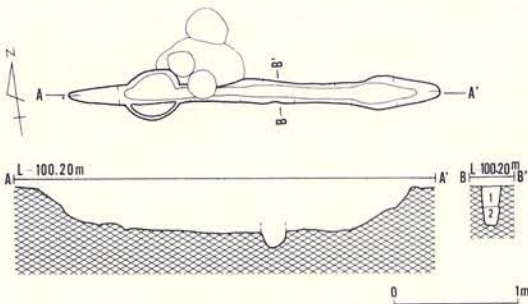
第425図 (4)C IV g 6 陥し穴状遺構



第426図 (5)D II a 8 陥し穴状遺構



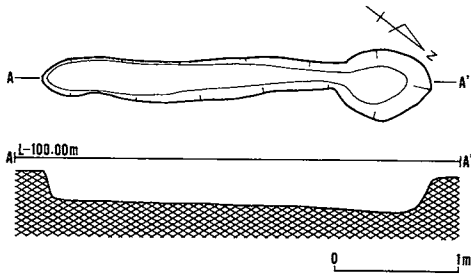
第428図 (7)D II e 9 陥し穴状遺構



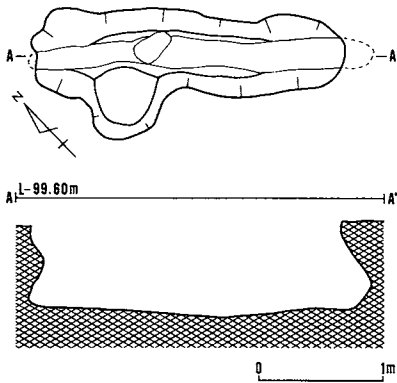
第427図 (6)D II d 9 陥し穴状遺構

D II e 9 陥し穴状遺構

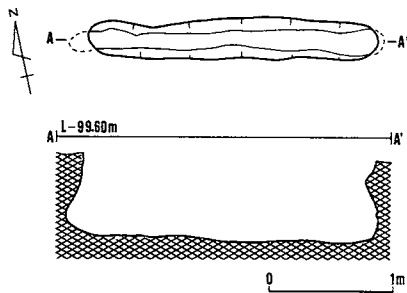
- | | | | |
|---|---------------|--------|---------------|
| 1 | 10Y R 2 / 2 | 黒 褐 色 | シルト、黄褐色土若干混入 |
| 2 | 10Y R 1.7 / 1 | 黒 色 | シルト |
| 3 | 10Y R 4 / 3 | にぶい黄褐色 | 火山灰土、崩落土 |
| 4 | 2.5Y 5 / 4 | 黄 褐 色 | 火山灰土、黒褐色土若干混入 |



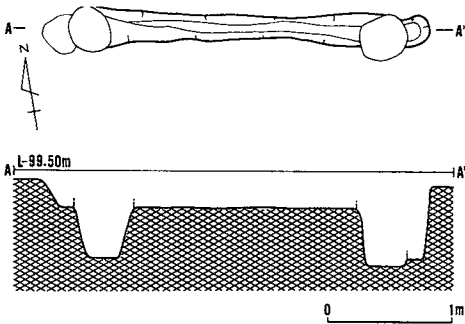
第429図 (8)D III b 8 陥し穴状遺構



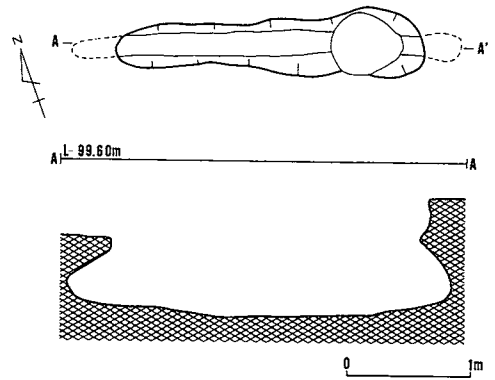
第431図 (10)C V b 8 陥し穴状遺構



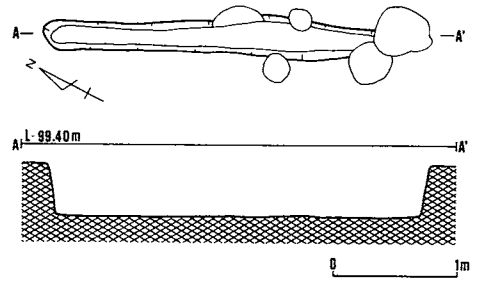
第432図 (11)C V c 7 陥し穴状遺構



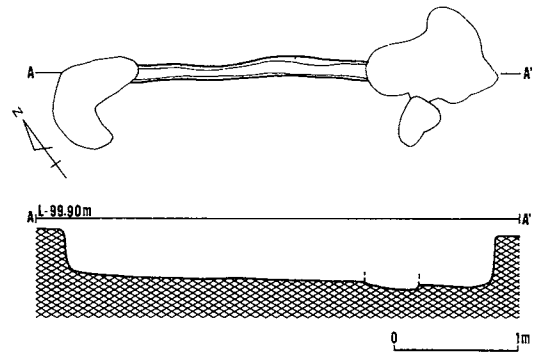
第435図 (14)C VI e 7 陥し穴状遺構



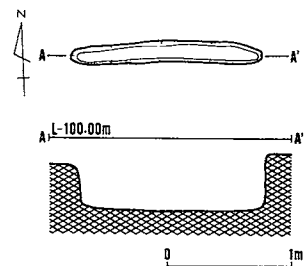
第430図 (9)B V j 9 陥し穴状遺構



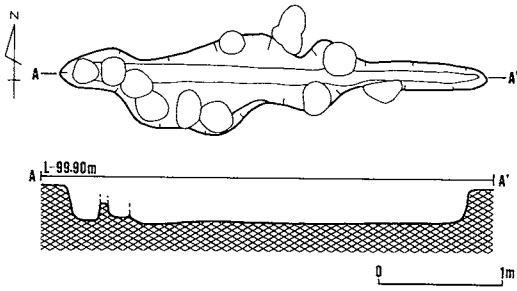
第434図 (13)C VI d 10 陥し穴状遺構



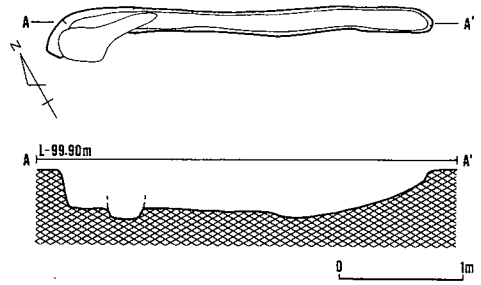
第436図 (15)C VI h 7 陥し穴状遺構



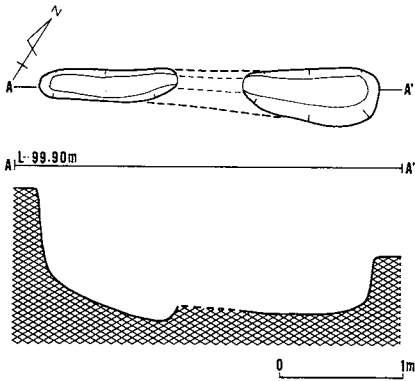
第433図 (12)C V i 8 陥し穴状遺構



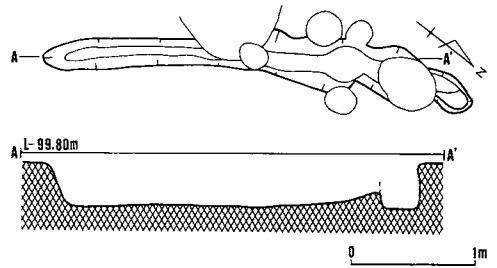
第437図 (16) C VI i 6 陥し穴状遺構



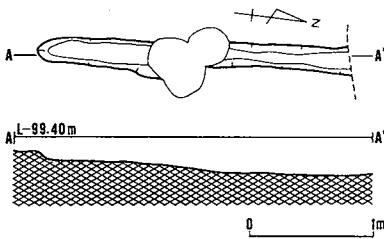
第438図 (17) C VI i 7 陥し穴状遺構



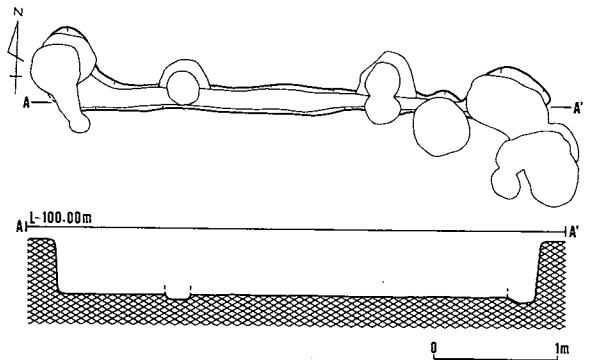
第439図 (18) C VII d 1 陥し穴状遺構



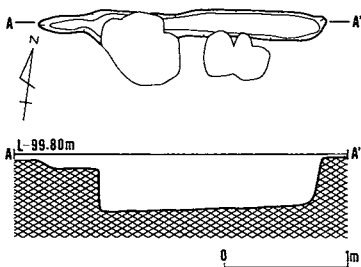
第441図 (20) C VII j 1 陥し穴状遺構



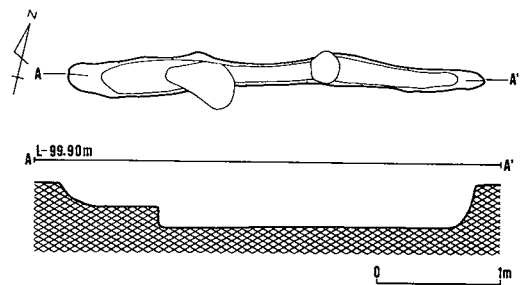
第440図 (19) C VII d 2 陥し穴状遺構



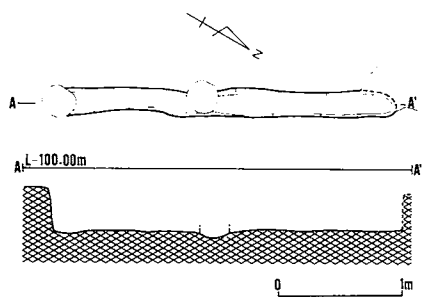
第443図 (22) D V b 8 陥し穴状遺構



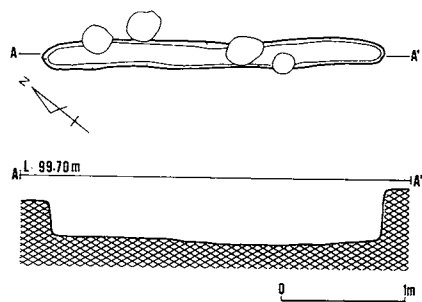
第442図 (21) D V b 7 陥し穴状遺構



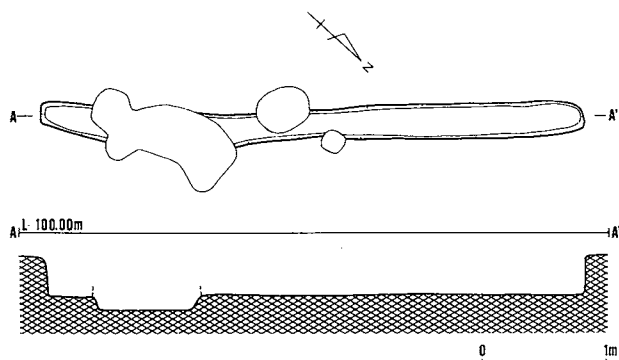
第444図 (23) D V e 7 陥し穴状遺構



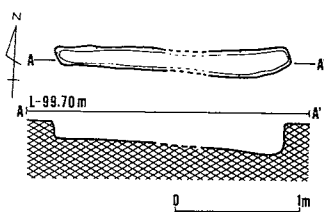
第445図 (24) D V f 10 陥し穴状遺構一 I



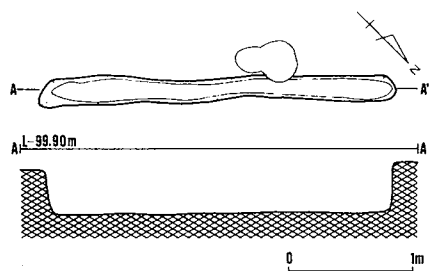
第448図 (27) D V g 8 陥し穴状遺構



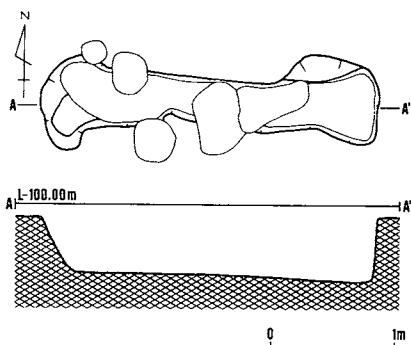
第446図 (25) D V f 10 陥し穴状遺構一 2



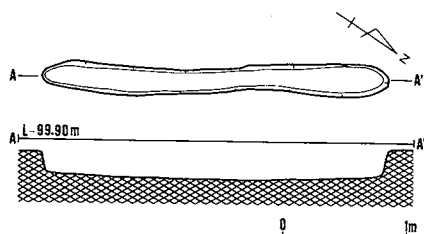
第447図 (26) D V g 6 陥し穴状遺構



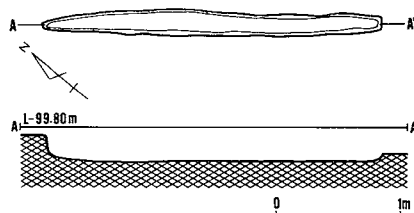
第449図 (28) D V g 9 陥し穴状遺構



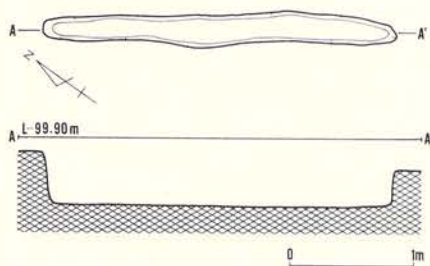
第450図 (29) D V g 10 陥し穴状遺構



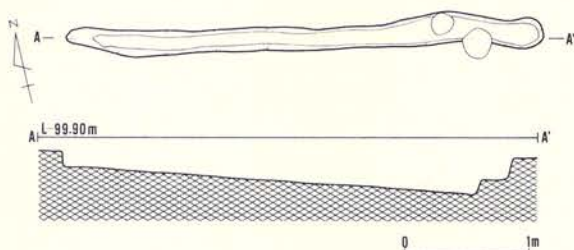
第451図 (30) D V h 5 陥し穴状遺構



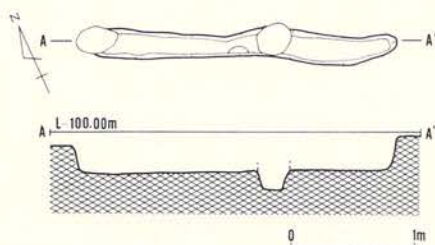
第452図 (31) D V h 7 陥し穴状遺構一 I



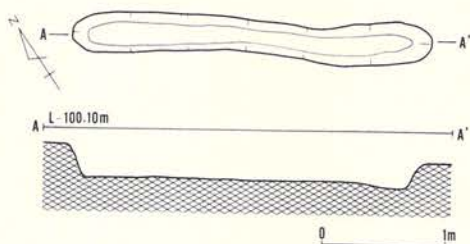
第453図 (32) D V h 7 陥し穴状遺構— 2



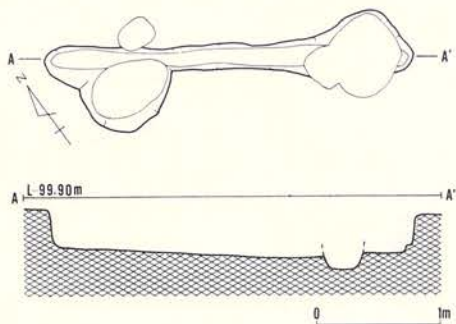
第455図 (34) D VI b 5 陥し穴状遺構



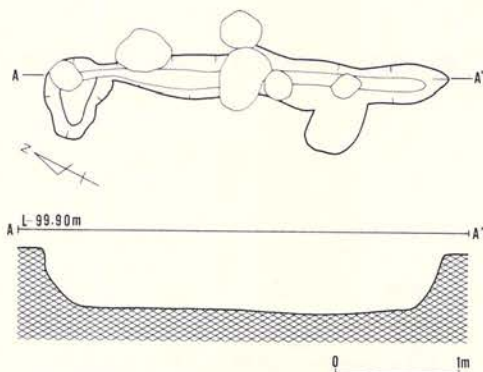
第454図 (33) D VI a 6 陥し穴状遺構



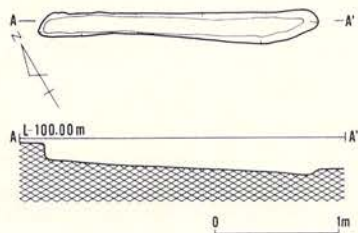
第456図 (35) D VI b 6 陥し穴状遺構



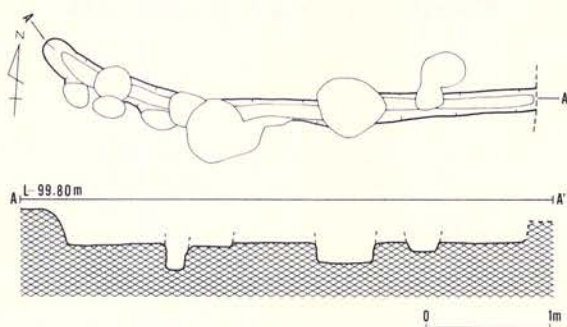
第457図 (36) D VI c 4 陥し穴状遺構



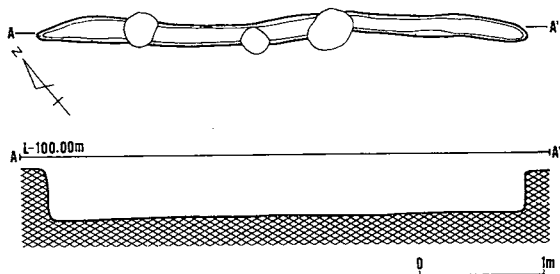
第459図 (38) D VI c 7 陥し穴状遺構



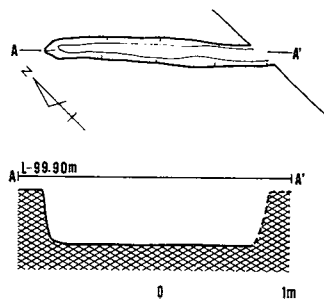
第458図 (37) D VI c 5 陥し穴状遺構



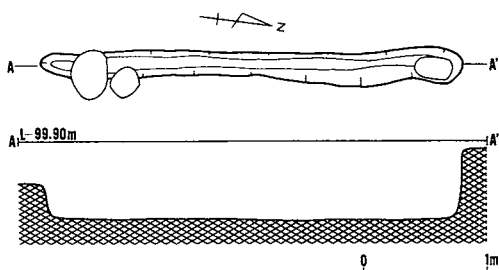
第460図 (39) D VI c 8 陥し穴状遺構



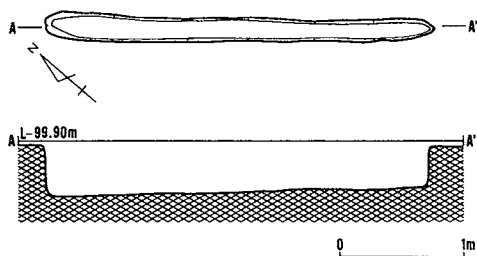
第461図 (40) D VI e 1 陥し穴状遺構



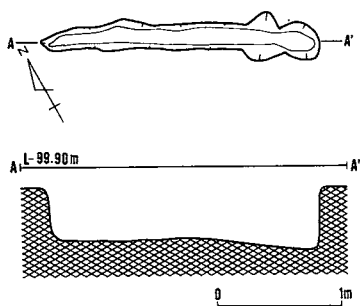
第463図 (42) D VI e 3 陥し穴状遺構



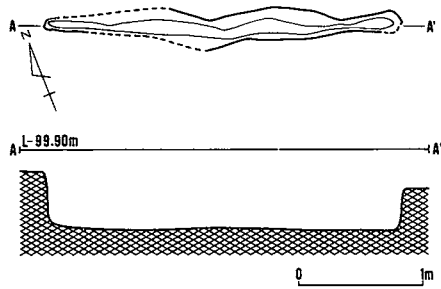
第462図 (41) D VI e 2 陥し穴状遺構



第464号 (43) D VI f 1 陥し穴状遺構



第465図 (44) D VII c 6 陥し穴状遺構



第466図 (45) D VII d 5 陥し穴状遺構

く直線的な形状を示す。長軸方向はN-7°-Wである。底面は平坦で、壁は垂直となっている。柱穴による攪乱を3箇所を受けている。埋土は精査しなかった。

(42) D VI e 3 陥し穴状遺構 (第463図、写真図版70)

東館の南西部中央寄りに位置し、D VI e 2 土坑や溝跡と重複しており大部分が削平され最下底部を残すのみである。残存する規模は開口部180cm×20cm、底部170cm×10cm、深さ10cmであ

る。細長い溝形の平面形と推定される。底面は平坦であり、壁は浅いが垂直となっている。埋土は精査しなかった。

(43) D VI f 1 陥し穴状遺構 (第464図、写真図版70)

東館の南西に位置し、D V f 10陥し穴状遺構とD VI e 1 陥し穴状遺構に並列している。開口部径310cm×20cm、底部径300cm×13cm、深さ35cmの規模をもち、細長い溝形の平面形である。長軸方向はN-40°-Wである。底面は平坦で狭い。壁は垂直であるが、柱穴によって壊された部分が数箇所見られる。埋土は精査しなかった。

(44) D VII c 6 陥し穴状遺構 (第465図、写真図版70)

東館の南東部に位置し、D VII d 5 陥し穴状遺構と並列している。柱穴の密集する区域である。開口部径220cm×20cm、底部径210cm×15cm、深さ40cmの規模をもち、細長い溝形の平面形である。長軸方向はN-60°-Wである。底面は東側でやや低くなるも平坦である。壁は垂直で、柱穴による攪乱は2箇所に見られる。埋土の精査はしなかった。

(45) D VII d 5 陥し穴状遺構 (第466図、写真図版70)

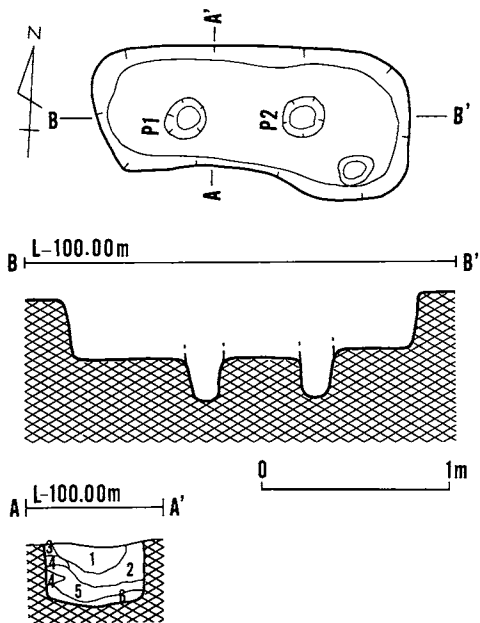
東館の南東に位置し、D VII c 6 陥し穴状遺構と並列している。柱穴の密集する区域であり、壁の大半は壊されている。開口部径285cm×25cm、底部径270cm×10cm、深さ45cmの規模をもち、細長い溝形の平面形である。底面は凹凸があり、狭く蛇行気味となっている。壁を残存する部分は少ないが垂直である。埋土は精査していない。

4) 長方形陥し穴状遺構

(1) D II g 10陥し穴状遺構 (第467図、写真図版70)

西館の南西に位置し、水田造成の際に一段低く削平された区域であり下半部のみ残存している。D II i 10陥し穴状遺構とE II a 10陥し穴状遺構-2と長軸方向を同じくして並列する。開口部径170cm×75cm、底部径155cm×60cm、深さ35cmの規模をもち、平面形は隅丸長方形で、ほぼ箱形の断面形である。東側でやや幅広い形状を示している。底面の中軸線上に2個の小穴がある。P₁とP₂とも径20cm、深さ20cmを測る。長軸方向はN-88°-Wで東西方向である。底面は平坦で、壁は垂直である。南東隅に柱穴による攪乱がある。

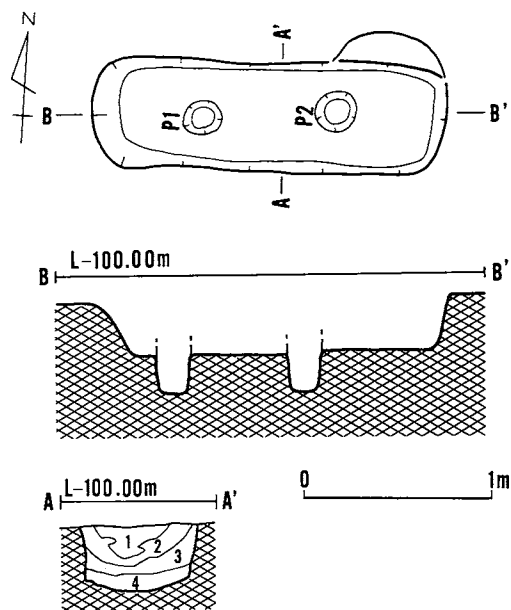
埋土は4層に細分され、黒褐色～暗褐色土主体で中間に黄褐色土層が入る。上半部はかたくなっているが下半は湿っておりやわらかい。全体に黄褐色土が粒状に混入する。レンズ状に



第467図 (1) D II g 10陥し穴状遺構

D II g 10陥し穴状遺構

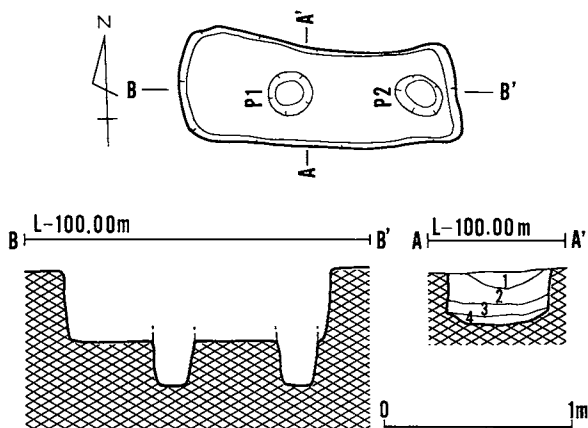
- | | | | |
|---|-----------|-----|----------------|
| 1 | 10Y R 2/2 | 黒褐色 | シルト |
| 2 | 10Y R 3/4 | 暗褐色 | シルト |
| 3 | 10Y R 5/6 | 黄褐色 | 火山灰土 |
| 4 | 10Y R 2/2 | 黒褐色 | シルト、淡黄色粘土質土が混入 |



第468図 (2) D II i 10陥し穴状遺構

D II i 10陥し穴状遺構

- | | | | |
|---|-----------|--------|---------------|
| 1 | 10Y R 2/2 | 黒褐色 | シルト、炭が混入 |
| 2 | 10Y R 7/3 | にぶい黄褐色 | 火山灰土、崩落土 |
| 3 | 10Y R 3/3 | 暗褐色 | シルト、酸化した部分がある |
| 4 | 25Y 7/2 | 灰黄色 | 粘土質土と暗褐色土の混土 |



第469図 (3) E II a 10陥し穴状遺構—2

E II a 10陥し穴状遺構—2

- | | | | |
|---|-----------|--------|----------|
| 1 | 10Y R 2/2 | 黒褐色 | シルト |
| 2 | 10Y R 3/2 | 黒褐色 | シルト |
| 3 | 10Y R 4/4 | 褐色 | 火山灰土、崩落土 |
| 4 | 10Y R 2/3 | 黒褐色 | シルト |
| 5 | 0Y R 5/4 | にぶい黄褐色 | 粘土質土、崩落土 |
| 6 | 10Y R 2/2 | 黒褐色 | シルト |

堆積しており、自然埋没である。

(2) D II i 10 陥し穴状遺構 (第468図、写真図版70)

西館の南西に位置し、D II g 10 陥し穴状遺構や E II a 10 陥し穴状遺構—2 と長軸方向を同じくして並列する。開口部径190cm×60cm、底部径165cm×55cm、深さ30cmの規模をもち、平面形は隅丸長方形で、箱形の断面形である。北東隅は柱穴により壊された部分がある。底面の中軸線上に2個の小穴がある。P₁は径20cm、深さ20cm、P₂は径22cm、深さ20cmを測る。長軸方向はN—89°—Eでほぼ東西方向となっている。底面は平坦であるが西壁際に柱穴の底部が残る。壁は垂直である。

埋土は4層に細分され、黄褐色土の汚れた層(2層)が大半を占める。黒褐色土や暗褐色土にも黄褐色土が粒状に混入する。1層には炭を含む。全体にかたくしまっている。レンズ状から水平堆積を示しており、自然埋没である。

(3) E II a 10—2 陥し穴状遺構 (み469図、写真図版70)

西館の南西に位置し、E II a 10 土坑と E II a 10 陥し穴状遺構—1 と近接している。開口部径145cm×60cm、底部径135cm×50cm、深さ35cmの規模をもち、平面形は隅丸長方形であるがやや弧状にゆがみがある。断面形は箱形である。底面の中軸線上には東側に片寄って2個の小穴がある。P₁とP₂とも径25cm、深さ25cmを測る。長軸方向はN—89°—Eでほぼ東西方向である。底面は平坦で、壁は垂直となっている。北の側壁は弧状に湾曲している。

埋土は6層に細分され、黒褐色土が大半で、下位に汚れた黄褐色土が入る。上半がかたく、下半はやわらかい。レンズ状堆積を示し自然埋没である。

2. 遺物

土器115点と石器31点が出土している。

1) 土器 (第24表、第470・471図、写真図版131・132)

出土数115点と少なく、縄文の遺構から出土したのは1点のみである。破片のみで器形の全体を復元できるものはない。時期は早期から前期のものが大部分で、後・晩期のものがわずかに混じる。土器の地文と胎土の特徴から、第I群(早期)、第II群(前期)、第III群(後・晩期、その他)とに分類し、さらに細分した。

〈第I群土器〉 (第470図1～10、写真図版131)

出土点数は28点で、うち10点を図示した。I群土器はさらに1類と2類に細分される。

1類は早期後半～終末のもので5点出土している。1は文様に浅い1条の沈線と爪形の刺突文をもつ細片である。胎土に砂粒を含むが固い焼きしまりであり、また黒ずんでいる。爪形の刺突文は横2列のみ確認できる。地文は単節斜行縄文らしいが不明瞭である。白浜、小舟渡平式などに類似する。

2～5は表裏に縄文を施文するものである。2と4は単節斜行縄文、3は0段多条縄文、5は条痕文をそれぞれ地文としている。2と3と5は胎土に繊維を含み、器面に凹凸がある。4は器厚が薄手(3～4mm)で、繊維は含まない。縄文が細かく他の3点とは異質である。

2類は早期に属すると思われる無文の土器片で6～11など23点出土している。6と7は口縁部で8～10は体部である。胎土に繊維を含むのは6のみである。6は平坦な口唇部であるが、その外縁は剝落し黒ずんでいる。胎土に砂粒は多いが固い焼きしまりである。7は口唇部が平らに撫でられてはいるが緩く波うっている。口唇の内側はその撫でつけによる盛り上がりが見られる。器厚が5mmと薄く、内壁は煤で真黒となっている。8～10の体部片はともに器面の凹凸がない。10は磨耗がはげしい。早期としたが細片のため、それ以外の時期の体部片かもしれない。

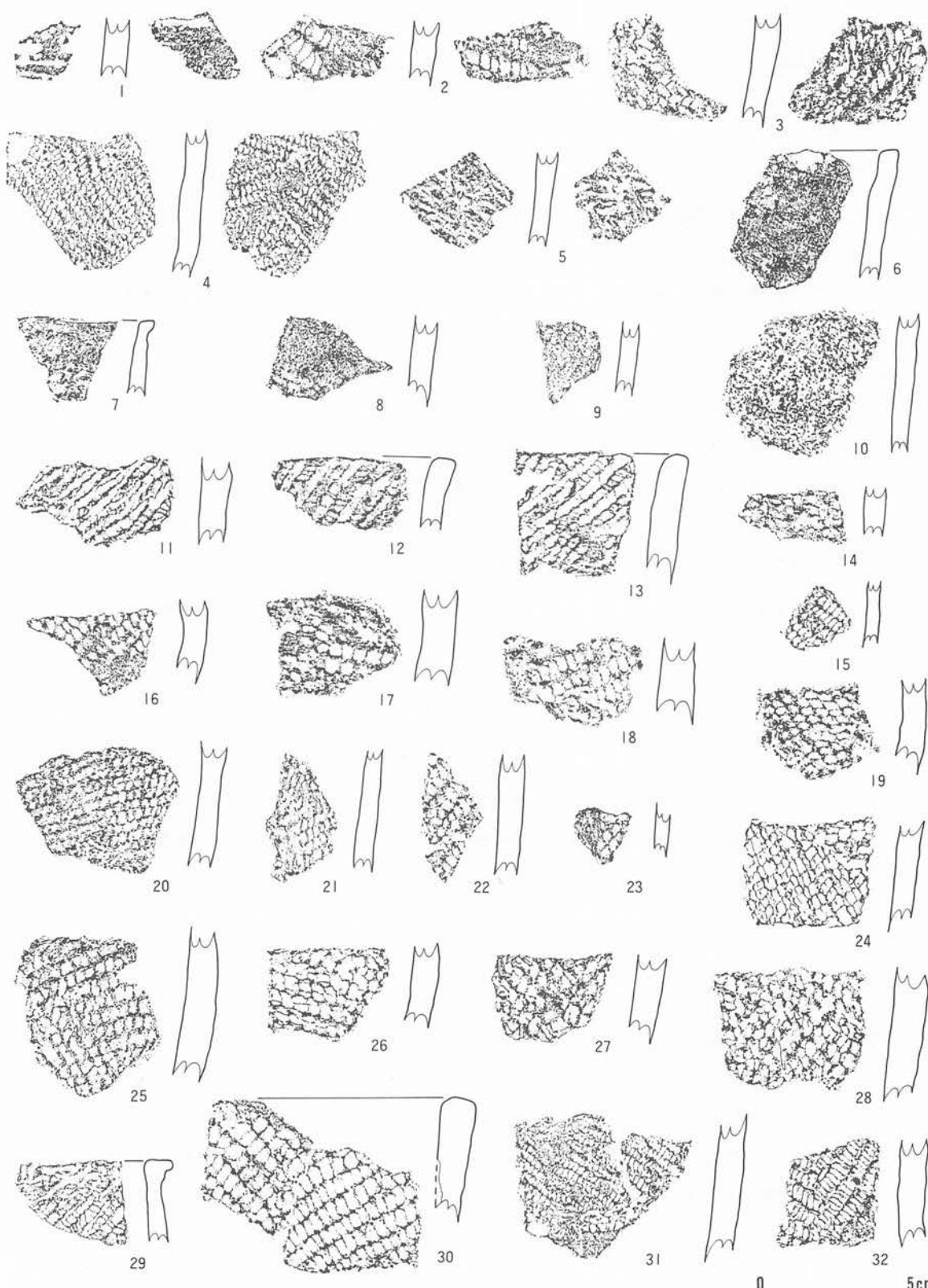
〈第II群土器〉 (第470・471図11～47、写真図版131・132)

出土数は54点のうち38点を図示した。縄文時代前期初頭のものである。II群土器は地文の種類によってさらに6類に細分した。1類は無節斜行縄文、2類は単節斜行縄文、3類は複節斜行縄文、4類は0段多条縄文、5類は網目状撚糸文、6類は不整綾絡文や葎瓦状撚糸文をそれぞれ地文として用いている。

1類は無節斜行縄文を地文としたもので11の1点だけである。胎土に繊維を多く含み、器面に凹凸がある。器厚9mmと厚手である。焼きしまりは良い。

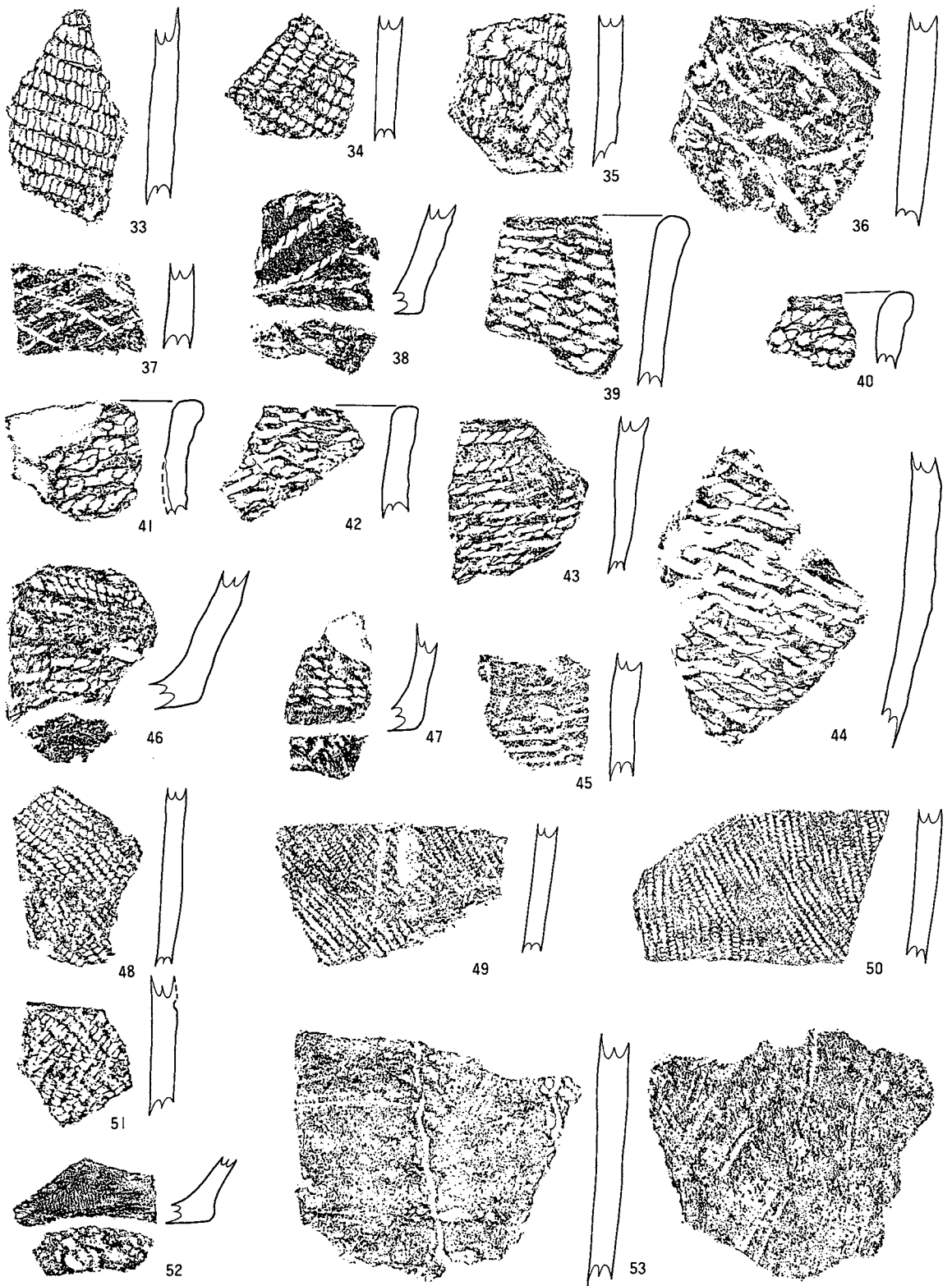
2類は単節斜行縄文を地文としたもので、12～23などの20点出土している。12と13が口縁部であるが、他は体部片である。胎土に繊維を多く含むのは12・13・20であり、全く含まないものは15と13の2点、その他は少量ずつ含んでいる。表面には若干凹凸があるも、内面は平らなものが多い。器厚は4～12mmとバラエティーがある。12と13は同一個体の口縁部で、胎土内の繊維が炭化して真黒になっている。16は湾曲のしかたから丸底の底部に近い体部片らしい。21は土器片円盤の可能性がある。2類は撚り方向や太さに違いが見られる。羽状となるものはない。

3類は複節斜行縄文を地文とするもので、24～28など7点出土している。いずれも体部片で



第470図 縄文土器一 I

0 5cm



策471図 縄文土器—2

第24表 縄文土器一覧表

No	地 点	層位	器種	部 位	縄 文	胎 土	時 期	分 類	特 徴	図版	写真
1	西館北側掘り	表土	深鉢	体 部	沈 線 と 爪 形	やや粗	早 期	I-1		470	131
2	C VII i 10土坑	埋土	深鉢	体 部		やや粗、若干の繊維含む	早 期	I-1	表裏縄文	//	131
3	C VII i 10土坑	埋土	深鉢	体 部	O 段 多 条	やや粗、若干の繊維含む	早 期	I-1	表裏縄文	//	131
4	表採	埋土	深鉢	体 部	R L 単 節	密	早 期	I-1	表裏縄文	//	131
5	表採	埋土	深鉢	体 部	内 外 条 痕 文	やや密、若干の繊維含む	早・前期?	I-1	表裏条痕	//	131
6	C VII b 8 住居状土坑	埋土	深鉢	口 縁 部	無 文	やや粗、若干の繊維含む	早・前期?	I-2	口唇が平ら	//	131
7	D III i 6 土坑	埋土	深鉢	口 縁 部	無 文	やや粗	早・前期?	I-2	口縁に起伏があり口唇は平ら	//	131
8	C VI区柱No37	埋土	深鉢	体 部	無 文	やや粗	早・前期?	I-2	口縁に起伏があり口唇は平ら	//	131
9	C VII i 2 土坑	埋土	深鉢	体 部	無 文	粗	早・前期?	I-2	小破片	//	131
10	D IV b 2 陥し穴	埋土	深鉢	体 部	無 文	粗	早・前期?	I-2	磨減がはげしい	//	131
11	D IV b 2 陥し穴	埋土	深鉢	体 部	L 無 節	粗、繊維を含む	前 期	II-1	燃糸文的である	//	131
12	C VII b 8 住居状土坑	埋土	深鉢	口 縁 部	R L 単 節	やや密繊維を多く含む	前 期	II-2	端部に起伏あり	//	131
13	C VII b 8 住居状土坑	埋土	深鉢	口 縁 部	R L 単 節	やや密	前 期	II-2		//	131
14	C VII b 8 住居状土坑	埋土	深鉢	口 縁 部	R L 単 節	やや密、若干の繊維含む	前 期	II-2	小破片	//	131
15	C V g 9 土坑	埋土	深鉢	口 縁 部	L R 単 節	粗、金雲母を混	前 期	II-2	小破片のため詳細不明	//	131
16	C VI a 4 溝東端	埋土	深鉢	口 縁 部	L R 単 節	やや密、若干の繊維含む	前 期	II-2	湾曲の程度からみて丸底の土器か?	//	131
17	C VI h 10土坑	埋土	深鉢	口 縁 部	R L 単 節	やや密、若干の繊維含む	前 期	II-2	器表の荒れた土器	//	131
18	D IV区柱No 1	埋土	深鉢	口 縁 部	R L 単 節	粗、若干の繊維含む	前 期	II-2	横回転	//	131
19	C IV c 4 土坑	埋土	深鉢	体 部	L R 単 節	やや粗、若干の繊維含む	前 期	II-2	脆く、磨減がはげしい	//	131
20	C IV c 4 土坑	埋土	深鉢	体 部	L R 単 節	やや粗繊維を多く含む	前 期	II-2	薄手の土器片	//	131
21	C VII e 8 土坑	埋土	深鉢	体 部	L R 単 節	やや粗、若干の繊維含む	前 期	II-2	土器片円盤である可能性大	//	131
22	D III区柱No 9	埋土	深鉢	体 部	L R 単 節	やや粗、若干の繊維含む	前 期	II-2	小破片又は復節か	//	131
23	C VI区柱No39	埋土	深鉢	体 部	R L 単 節	やや粗、若干の繊維含む	前 期	II-2	小破片	//	132
24	C V h 8 落込み	埋土	深鉢	体 部	R L R 複 節	やや粗、繊維を含む	前 期	II-3	原体末端の回転文あり	//	131
25	C VI区柱No80	埋土	深鉢	体 部	R L R 複 節	やや粗、繊維を含む	前 期	II-3	縦横回転による羽状(磨耗)	//	131
26	C V g 9 柱穴	埋土	深鉢	体 部	R L R 複節羽状	やや粗繊維を含む	前 期	II-3	回転方向を変えた羽状縄文	//	132
27	C VI d 9 付近柱穴	埋土	深鉢	体 部	R L R 複 節	やや粗、繊維混	前 期	II-3	表面が荒れている	//	131
28	C VI区柱No74	埋土	深鉢	体 部	L R L 複 節	やや粗、繊維混	前 期	II-3	羽状気味の縄文	//	132
29	C VI区柱No74	埋土	深鉢	口 縁 部	0 段 多 条	やや粗、繊維を含む	前 期	II-4	口縁端部に原体末端が位置する	//	131
30	C VI区柱No54	埋土	深鉢	口 縁 部	0 段 多 条 L R 単 節 羽 状	粗、繊維を含む	前 期	II-4	縦横回転による羽状	//	132

31	D III 8 9 柱穴	埋土	深鉢	体	部	0 R	段 L	多 単	条 節	粗、繊維を含む	前	期	II-4	横回転、1本綾絡文がある	〃	131
32	D VI 区柱No2	埋土	深鉢	体	部	0 R	段 L	多 単	条 節	やや粗、繊維を含む	前	期	II-4	縦横回転の羽状	〃	131
33	D VI 区柱No2	埋土	深鉢	体	部	0 R	段 L	多 単	条 節	やや粗、繊維を含む	前	期	II-4	口唇かに丸く、端部が軽く外反	471	132
34	E III b 5 落ち込み	埋土	深鉢	体	部	0 R	段 L	多 単	条 節	やや粗、繊維を含む	前	期	II-4	回転方向を変える羽状	〃	132
35	C II c ~ d 8 土坑	埋土	深鉢	体	部	0 R	段 L	多 単	条 節	細密、繊維を含む	前	期	II-4	回転方向を変えた羽状縄文	〃	132
36	東館中央北側	表土	深鉢	体	部				網目状燃紋	粗、繊維を含む	前	期	II-5		〃	132
37	東館中央北側	表土	深鉢	体	部				網目状燃紋	粗、繊維を含む	前	期	II-5	砂粒多く、内面調整も粗雑	〃	132
38	C IV 区柱No9	埋土	深鉢	体部~底部					網目状燃紋	やや粗、若干の繊維と金雲母を混	前	期	II-5	底部の周辺部が軽突出する、網代底	〃	132
39	D III 区柱No2	埋土	深鉢	口縁部					不整燃紋	やや密、繊維を含む	前	期	II-6	口縁部に不整燃紋	〃	132
40	E II a 5 土坑	埋土	深鉢	体	部				不整燃紋	やや密、繊維を含む	前	期	II-6		〃	132
41	C VI d 9 付近柱穴	埋土	深鉢	口縁部					不整綾絡文	やや粗、繊維を含む	前	期	II-6	口唇丸く、端部若干外反	〃	132
42	C VI d 9 付近柱穴	埋土	深鉢	口縁部					不整綾絡文	やや密、繊維を含む	前	期	II-6	口唇丸く、端部若干外反	〃	132
43	C VI d 9 付近柱穴	埋土	深鉢	体	部				不整燃糸文	やや粗、繊維を含む	前	期	II-6	燃糸文的である	〃	132
44	C VI d 9 付近柱穴	埋土	深鉢	体	部				不整綾絡交	粗、繊維を含む	前	期	II-6	燃糸文的である	〃	132
45	D II 区柱No8	埋土	深鉢	体	部				斑き瓦状燃糸文	やや粗、繊維を含む	前	期	II-6	燃糸文を付す	〃	132
46	D II 区柱No8	埋土	深鉢	体下部~底部					斑き瓦状燃糸文	やや粗、繊維を含む	前	期	II-6		〃	132
47	D II 区柱No8	埋土	深鉢	体下部~底部					斑き瓦状燃糸文	やや粗、繊維を含む	前	期	II-6	脆弱、薄手	〃	132
48	D VI 区柱No10	埋土	深鉢	体	部	R	L	単	節	やや密	後・晩?	III-1		薄手の破片である	〃	132
49	D VI 区柱No12	埋土	深鉢	体	部	R	L	単	節	やや粗	後・晩?	III-1		薄手の破片である	〃	132
50	D VI 区柱No12	埋土	深鉢	体	部	R	L	単	節	やや粗	中・後?	III-1		横回転	〃	132
51	D VI b 9 土坑北端西側	埋土	深鉢	体	部	R	L	単	節	やや粗	中・後?	III-1		回転を変える羽状沈線あり	〃	132
52	D VI b 9 土坑北端西側	埋土	深鉢	体下部~底部					無	やや粗	不	明	III-2	底部の周辺部が突出する感じ	〃	132
53	D VI b 9 土坑北端西側	埋土	深鉢	体	部				綾絡文	やや粗	不	明	III-2	無文の器面に縦位の綾絡文	〃	132

胎土に繊維を含んでいる。24と27はともにR-L-Rの複節斜行縄文であるが、25と26・28は異なる燃りの原体による羽状縄文となっている。器面に凹凸はあるが焼きしまりは良い。24と25・28の3点には器面に粉状の煤が付着している。3類の器厚は9~10mmと平均して厚い。

4類は0段多条縄文を地文としたもので、29~35など8点の出土である。29と30は口縁部で他は体部片である。胎土にはいずれも繊維を含み、特に35には多い。ほとんどが0段多条の羽状縄文になるようであるが、29と31・33は羽状部分が見えない。器面に凹凸がなく平坦で、焼きしまりも良い。29は口唇部の強い撫でつけによって、上端が外にはり出している。胎土が他のものに比べて細密である。30は縦方向の羽状で、口縁部上端が12mmと厚く、下方で8mmと薄くなる。31は細い原体で特徴があり、さらに下方に横1条の綾絡文が入る。内壁には真黒に煤が付着している。35の器壁内は繊維が炭化し黒ずんでいる。

5類は網目状燃糸文を地文としたもので、36~38など5点の出土である。36と37は体部、38

は底部片である。胎土に繊維を含む。砂粒も多く含んでいるが焼きしまりは良い。36と38は太い原体、37は細目である。器厚が8～9mmと平均している。

6類は不整綾絡文や葺瓦状捺糸文、不整捺糸文を地文としたもので、39～44など13点出土している。39・40・43は不整な捺糸文、41・42・44は不整綾絡文、45～47は葺瓦状の捺糸文である。胎土には繊維を含み焼きしまりも良い。39～42は口縁部であるが、いずれも口縁上端が膨らんで厚くなっている。口唇部の仕上げは丸味がある。43と44は体部片である。44には繊維が特に多く含まれ、それが焼成の際燃え尽きて凹みや穴になった箇所がある。46の底部は上位に捺糸文、下位に綾絡文と分かれて施文されている。内壁に煤が多く付着する。45は磨耗のげししい破片である。46や47、そして図示しなかった底部片などを見ると、6類土器の底部は平底らしい。

〈第Ⅲ群土器〉 (第471図48～53、写真図版132)

出土数は16点で、うち6点を図示した。後期～晩期のものを1類、時期不明のものを2類とする。1類は48～51など14点である。文様帯の判明するものはなく、体部片のみである。器厚が5～7mmと薄く、細かい単節の斜行縄文を地文としている。51だけは上端に一部沈線が見える。胎土に砂粒を含み焼きしまりは良く、色調も灰色味の強い黄褐色である。

2類は52と53の2点である。時期は不明である。52の底部は無文で、下端がやや張り出す形である。53は縦の綾絡文が2本施された体部片である。地文はないが、撫で調整の際のヘラによる擦痕が内外面に残っている。胎土に砂粒を含み硬い焼成で、灰黄褐色の色調である。

2) 石器 (第25表、第472～474図1～31、写真図版133・134)

縄文時代の石器の出土総数は31点である。器種の内訳は石匙4点、不定形石器(切削器、搔器)13点、使用痕ある剥片9点、磨製石斧1点、打製石斧3点、敲き石1点である。縄文時代の遺構に伴ったものはなく、すべて表土や中世の土坑、柱穴の埋土から出土している。

〈石 匙〉 (第472図1～4、写真図版133)

4点のうち完形は2点、破片が2点である。すべて縦形石匙である。1は丸味を帯びた三角形を呈し、上端につまみがつく。下端部は尖っていたと思われる。つまみ部は両面調整で整形しそれ以外は縁辺を背面からの片面調整である。2は細身で下端が切り出しナイフ形となっている。両側辺は背面からの片面調整であるが、つまみ部と下端の1辺は両面調整である。先端部は尖っている。つまみ部は焼けたか薄くタールが付着したか、黒色に変色している。3と4は共に右匙の破片である。3は先端部で、1側辺は表裏両面調整、他の側辺は片面調整で整形

している。尖頭器様に細身である。4はつまみ部と下半部の欠けたものである。整形は表裏両面調整で施し、横断面は凸レンズ状である。

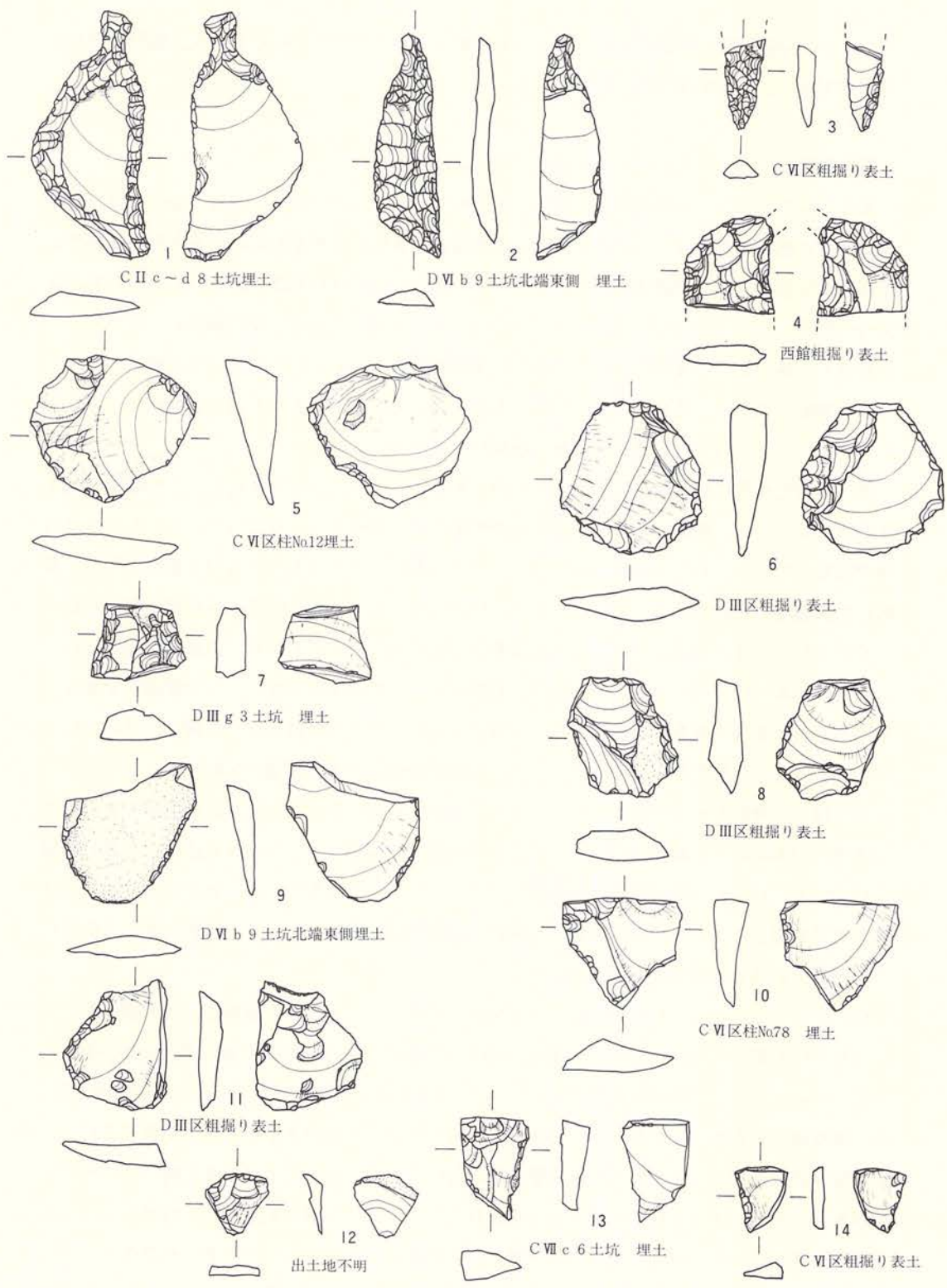
〈不定形石器〉 (第472・473図5～17、写真図版133)

剥片の側辺や1部分に剝離調整を施し、刃部をもつ石器が13点ある。素材となる剥片の全体形を整える細部調整はほとんど見られない。搔器的な急斜度の刃部のものやそれより鋭利な切削器的なものがある。刃部は表裏どちらか一方のみの片面調整が主体である。およその形の特徴毎に図示した。5～6はほぼ円形のものである。5は表面の左辺側に片面調整の刃部がある。調整はやや雑である。裏面の下端には細かい使用痕がある。6は肩の部分に形を整えるための大きな剝離を両面から施している。刃部は表面の右上辺の直刃部と左下辺の2箇所につくり出している。右上辺のそれは急斜度調整で搔器的である。

8～11は台形又は形の崩れた多角形のものである。7は上下が折断されたような厚手の剥片を素材としている。裏面の左右両側辺に片面調整による刃部をつくり出している。刃部は急斜度で搔器的である。石匙などの折損したものかもしれない。8は裏面側右辺と表面左下の2箇所片面調整の刃部をもつ。使用による刃こぼれも見られる。9は円礫の自然面を残した剥片を素材としている。裏面の2側辺に片面調整の刃部をつくり出している。表面には使用痕らしい剝離がある。10は左右の側辺に2箇所の刃部をもつ。裏面又は表面のみの片面調整である。刃部の剝離は急斜度調整で搔器的である。11は湾曲した剥片を素材とし、裏面左上辺に刃部をつくっている。片面調整で図上ではわからないが表面側に湾曲した短い刃部である。

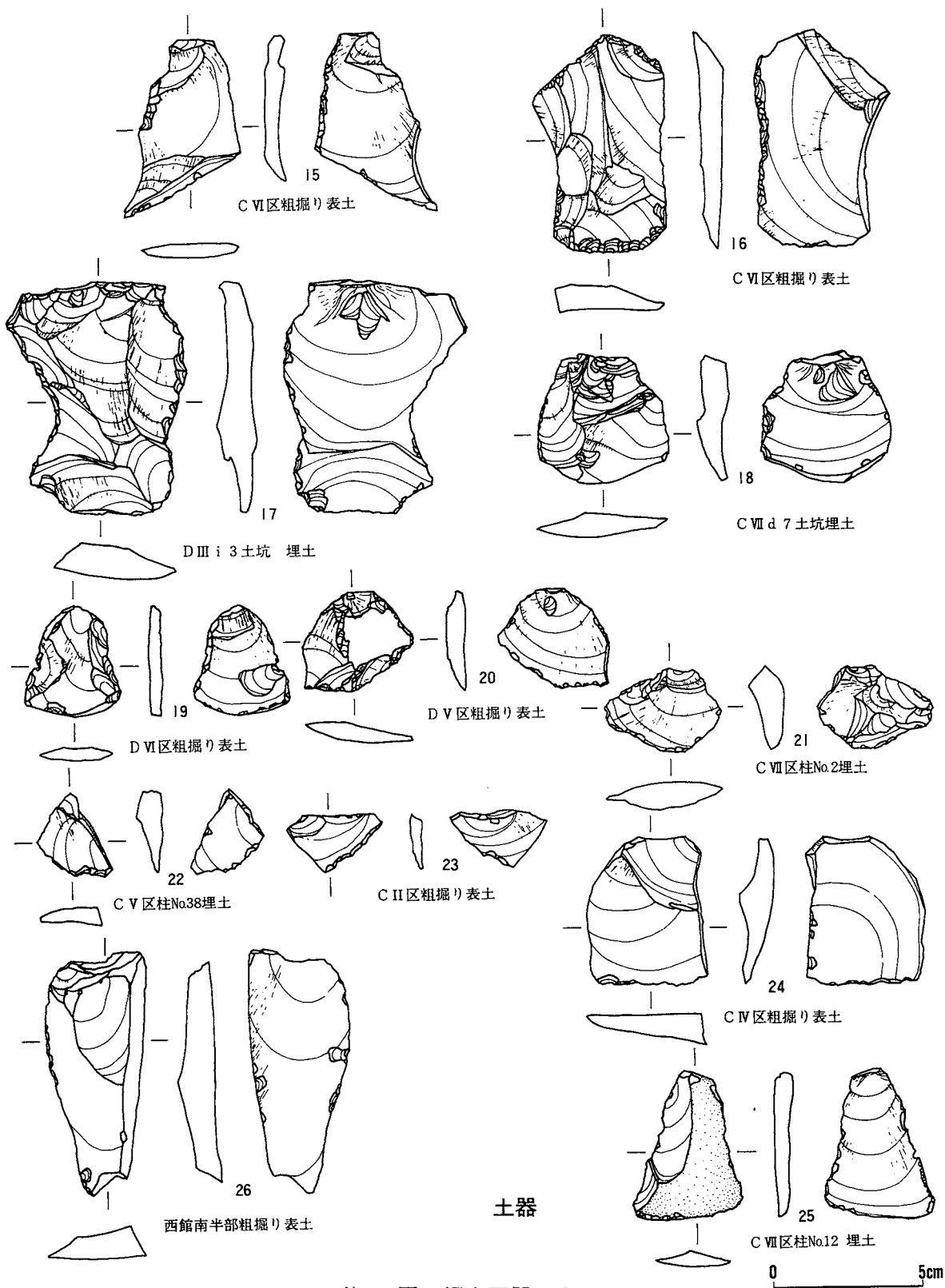
12～14は三角形のものである。いずれも1辺のみに刃部を持っている。12は裏面右下辺に片面調整の刃部がある。細かい剝離による急斜度調整で搔器的である。裏面上辺には刃潰しが施されている。13は裏面の右側辺に急斜度の刃部をもつ。片面調整である。裏面の左上部分には整形加工が施されている。14は裏面の左側辺に片面調整の刃部をもち、その表面側には使用による剝離痕が残る。刃部は若干凹凸がある。

15～17はやや大きめのものである。15は左右の側辺に2箇所、片面調整による刃部をもつ。裏面左辺の刃部は1.5cm程と短い、表面左辺の刃部は長さ4cmにわたる直刃型である。後者の刃部は非常にいねいな細部調整を施している。下辺には使用痕と見られる小さな剝離がある。16は横型剥片を素材としたもので、刃部は2箇所である。裏面の下辺と表面の左側辺で共に片面調整で直刃型である。刃部の細部調整はいねいである。裏面左上には使用痕らしい刃こぼれがある。下半の器面には酸化鉄分の付着が見られる。17は分銅形を呈したものである。刃部は裏面左側辺にある。裏面のみの片面調整で内側に抉れた刃部となっている。その他にも不規則な剝離が所々に施されている。これらの剝離面は器面の風化した白っぽい灰色と異なり、黒

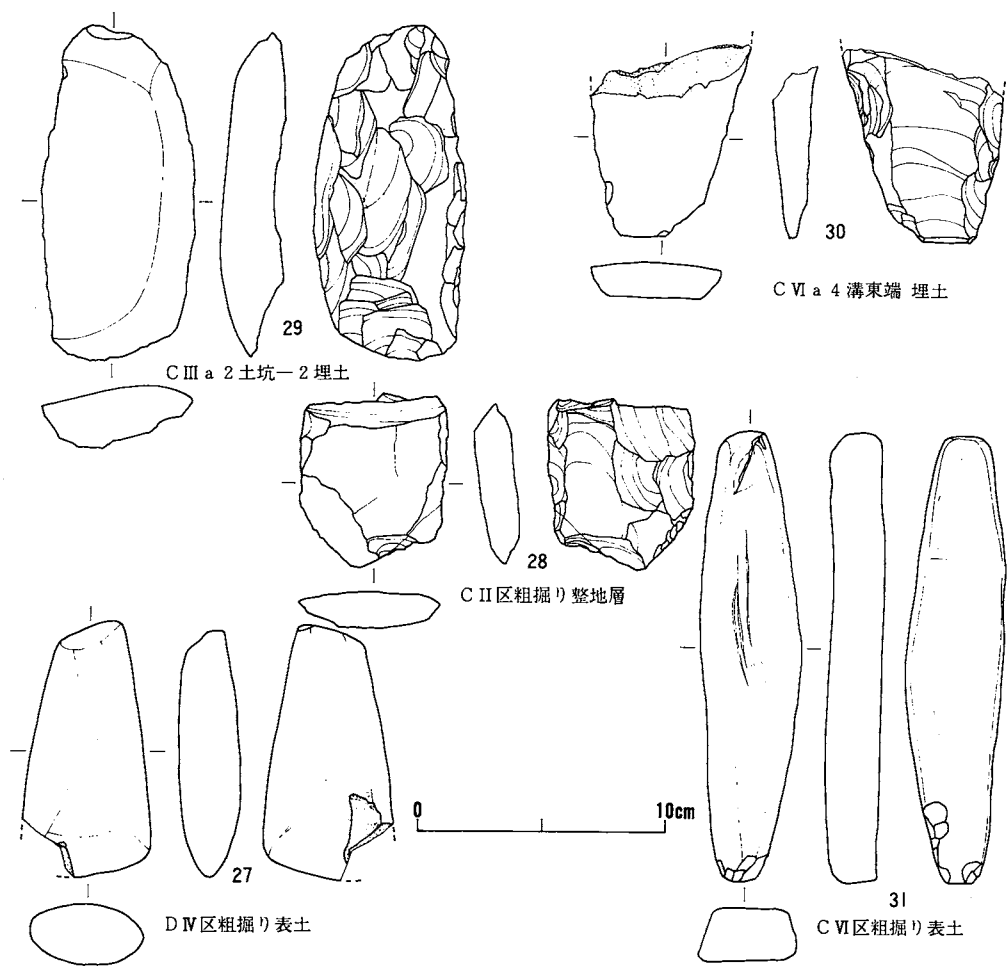


第472図 縄文石器一 I

0 5cm



第473図 縄文石器一2



第474図 縄文石器—3

第25表 縄文石器一覧表

No	地 点	層 位	器 種	法 量				石 質	産 地	備 考	図版	写真
				縦cm	横cm	厚cm	重g					
1	C II c ~ d 8 土坑	埋 土	石 匙	8.0	3.8	0.8	25	凝灰質珪質泥岩 礫石盆地西部 新第三系中新統	縦形左刃型の変形、完形品		133	
2	D VI b 9 土坑北端東側	埋 土	石 匙	7.1	2.2	0.6	10	凝灰質珪質泥岩 礫石盆地西部 新第三系中新統	縦形左刃、完形品		133	
3	C VI 区粗掘り	表 土	石 匙	2.9	1.3	0.6	1.8	凝灰質珪質泥岩 礫石盆地西部 新第三系中新統	縦形、先端部のみ		133	
4	西館粗掘り	表 土	石 匙	2.9	3.1	0.7	10	流紋岩質極細粒凝灰岩 礫石西南部 新第三系中新統	折断切片の両側縁に両面剥離調整		133	
5	C IV 区柱No12	埋 土	削 搔 器	4.7	5.3	1.7	28	流紋岩質極細粒凝灰岩 礫石西南部 新第三系中新統	右側縁に裏面へ微細な片面剥離調整		133	
6	D III 区粗掘り	表 土	削 搔 器	5.0	4.5	1.2	26	流紋岩質極細粒凝灰岩 礫石西南部 新第三系中新統	左右側縁に片面剥離調整		133	
7	D III a 3 土坑	埋 土	削 搔 器	2.5	3.0	1.0	10	凝灰質珪質泥岩 礫石盆地西部 新第三系中新統	両側縁に裏面からの片面剥離調整		133	

8	DIII区粗掘り	表土	削搔器	3.8	3.6	1.1	16	流紋岩質極細粒凝灰岩	掣石西南部新第三系中新統	右側縁に裏面から片面剥離調整、表片を残す	133
9	DVI b 9土坑北端東側	埋土	削搔器	4.5	4.3	0.9	15	流紋岩質極細粒凝灰岩	掣石西南部新第三系中新統	周縁に裏面からの片面剥離調整	133
10	CIV区柱№78	埋土	削搔器	3.5	3.9	1.1	12	硬質泥岩	掣石西部新第三系中新統	両側縁に片面の剥離調整、折断剥片	133
11	DIII区粗掘り	表土	削搔器	4.2	3.4	0.8	12	珪質泥岩	掣石西部新第三系中新統	左側面に裏面からの片面剥離調整	133
12	出土地不明			2.0	2.1	0.6	1.6	凝灰質珪質泥岩	掣石盆地西部新第三系中新統	側縁に片面剥離調整	133
13	CVII c 6土坑	埋土	削搔器	3.3	2.2	1.0	8	流紋岩質極細粒凝灰岩	掣石南部新第三系中新統	下縁に裏面からの片面剥離調整	133
14	CVI区粗掘り	表土	削搔器	2.1	1.7	0.4	1.6	凝灰質珪質泥岩	掣石盆地	下縁に裏面からの片面剥離調整	133
15	CVI区粗掘り	表土	削搔器	5.8	4.0	0.7	12	流紋岩質極細粒凝灰岩	掣石西南部新第三系中新統	右側縁に表面からの片面剥離調整	133
16	CVI区粗掘り	表土	削搔器	7.2	4.4	0.8	33	流紋岩質極細粒凝灰岩	掣石西南部新第三系中新統	左側縁と下縁に片面剥離調整	133
17	DIII i 3土坑	埋土	削搔器	7.8	6.0	1.3	55	流紋岩質極細粒凝灰岩	掣石西南部新第三系中新統	周縁に裏面から片面剥離調整	133
18	CVII d 7土坑	埋土	削搔器	4.3	4.4	1.1	17	凝灰質硬質泥岩	掣石西部新第三系中新統	左右側縁に使用痕あり	133
19	DVI区粗掘り	表土	削搔器	3.7	3.2	0.4	7	凝灰質硬質泥岩	掣石西部新第三系中新統	両側縁に使用痕あり	133
20	DV区粗掘り	表土	削搔器	3.3	3.7	0.7	8	硬質泥岩	掣石西部新第三系中新統	周縁部に使用痕あり	133
21	CVII区柱№2	埋土	削搔器	2.8	3.9	1.2	10	硬質泥岩	掣石西部新第三系中新統	周縁に微細な剥離あり	133
22	CV区柱№38	埋土	削搔器	2.8	2.5	0.9	5	粘板岩	北上山地古世界	下縁に使用痕あり	133
23	CII区粗掘り	表土	使用痕のある剥片	3.2	1.9	0.4	21	硬質泥岩	掣石西部新第三系中新統	下縁に刃こぼれあり	133
24	CVII区粗掘り	表土	使用痕のある剥片	4.9	4.0	1.2	24	凝灰質硬質泥岩	掣石西部新第三系中新統	右側縁に使用痕あり	133
25	CVII区柱№2	埋土	使用痕のある剥片	5.0	3.6	0.6	10	硬質泥岩	掣石西部新第三系中新統	左右側縁に使用痕あり	133
26	西館南半部粗掘り	表土	使用痕のある剥片	8.2	3.4	1.2	32	玻璃質流紋岩	奥羽山地東部新第三系中新統	左側縁に使用痕あり	133
27	DIV区粗掘り	表土	磨製石斧	10.4	5.2	2.5	205	チャート質淡緑色凝灰岩	北上山地古世界	刃部右を欠損、定角式	134
28	CII区粗掘り	整地層	打製石斧	7.1	6.0	1.9	90	粘板岩オルフェルス	北上山地古世界	周縁部を粗雑に剥離	134
29	CIII a 2土坑-2	埋土	打製石斧	13.5	6.2	2.6	267	粘板岩オルフェルス	北上山地古世界	片面に自然面を残し、表面から敲打剥離で整形	134
30	CVI a 4溝東端	埋土	打製石斧	7.8	6.4	1.8	92	粘板岩オルフェルス	北上山地古世界	片面に自然面を残し、表面から敲打剥離で整形	134
31	CVI区粗掘り	表土	叩き石	18.2	4.1	2.4	204	細粒質凝灰岩(石質凝灰岩)	掣石西南部新第三系中新統	細長い自然石の一端を使用している	134

味が強い。

〈使用痕のある剥片〉 (第473図18~26、写真図版133)

剥片の縁辺に使用痕と見られる剥離のあるものが9点ある。粗雑な刃部調整と考えるべきものも含んでいる。18~21は円形や丸味を帯びた三角形のものである。いずれも2箇所以上に

使用痕がある。22と23は小さな三角形で下辺の1辺のみに使用痕がある。24は下辺の直線部分に使用痕がある。25は撥形の薄い剥片で、裏面に自然面を多く残す。使用痕は裏面下辺左と表面右辺に顕著に見られる。26は縦長の剥片で裏面の左側辺に細かい使用痕がある。

〈磨製石斧〉 (第474図27、写真図版134)

長さ10cmの中型のもの1点である。先端の一部が欠損している。全面にわたって良く研磨され光沢がある。頭部がせまく刃部が広い撥形で、定角式磨製石斧に分類されるが、両側縁と表裏面とのあいだの稜はそれほど角ばっていない。刃部は直線的に仕上げられた蛤刃形の両刃である。器面下半から刃部にかけては使用痕とみられる擦痕が残っている。

〈打製石斧〉 (第474図28～30、写真図版134)

3点のうち2点は半分程の破片である。いずれも同質の石材で、剥離面が明確でないほど磨耗している。28は特に磨耗している。29は完型である。裏面のほとんどに円礫の自然面を残し、整形剥離は表面だけである。粗雑な調整で刃部をはじめ側辺も片刃状となってやや鋭角な稜を成している。30も同様に自然面を多く残す。片面調整で台形に近い横断面形である。28と30は器形が不明である。

〈敲き石〉 (第474図31、写真図版134)

細長い自然礫を使用した1点のみである。中央がやや膨らんだ棒状で、横断面は台形を示す。敲打する機能面は下端部にあり、使用によるいくつかの剥離がある。特に整形し磨いた痕跡はない。裏面に3本の線条痕を残している。

VII ま と め

1. 中 世

1) 遺 構

前項の記述の中から次の諸点について、若干の考察を示しまとめとしたい。

(1) 地形上の占地と縄張り

当笹間館跡は、東方に延びて舌状を示す洪積低位段丘の突端部に構築されることは既述のとおりである。本来の段丘には一ノ郭・二ノ郭・六ノ郭が段丘を掘り切る形で構築されている。三ノ郭～五ノ郭は、先の郭を構築する際に生じた残土を盛土造成したと推定される。

検出された状況から考えて、これらの郭が一時期に構築されたとは考えられない。一ノ郭と二ノ郭を結ぶ土橋が、西側は盛り土であるとともに、一ノ郭と二ノ郭を限る内堀の南端が馬出口の下に埋没していること等から、当初は二ノ郭のみの単郭であったと推定される。しかし、二ノ郭内から埋め戻された堀が東西方向3条、南北方向3条が検出され、さらに小期に細分される可能性を示す。外堀は調査時の内堀がその役割を果し、その東側に並行するBVI 6溝跡と組をなす二重堀であった可能性が強く、さらに、段丘崖下の水田面にも堀を全周させるものと推定される。郭内部の区画については、当初BVI j 1溝跡とCV d 5溝跡が接続して柵形状をなし、CV a 7門跡から入った人間がBVI j 1溝跡と北辺の間を通路として出入したと想定される。次の段階には、BVI j 1溝跡を南へ延長してDV d 5溝跡に連続する柵形状となる。次いでBVI j 1溝跡が埋め戻されて新たにCVI a 3溝跡が掘削されてDV d 5溝跡と接続させて面積の広い柵形状の区画をしてCVI a 3溝跡と北端部の間を通路としたことが考えられる。最終段階には、DV d 5溝跡を埋め戻してCVI a 3溝跡を深く掘り下げるとともに、DVI e 7溝跡を掘削して郭全体を方形に区画し、CVI a 3溝跡の南端部とDVI e 7溝跡の西端部の間を通路にしたと推定される。この時にはCV a 7門跡は既に使用されていなかったと推定され、この時点に土橋か馬出口が構築されている可能性がある。一ノ郭を構築し全体を拡張した時期を特定することは不可能であるが、一ノ郭と二ノ郭が火災を受けていることは明らかであり、火災の時期の推定から想定される拡張期は以下のとおりである。一ノ郭・二ノ郭とも火災後に土坑や凹地を埋めて整地している。特に一ノ郭の西端部は顕著である。西端部の整地層内から中国産や国産の陶磁器を多く出土しているが、整地層内からは中国産青磁と古瀬戸期の灰釉陶器に限られ、白磁や染付と美濃大窯期のものをまったく含まない。整地層より上位から出土す

るそれは青磁・白磁・染付の中国産磁器と美濃大窯 I 期の灰釉陶器などが含まれ、全体として前者より新しい様相を示す。前者に含む陶磁器の所属時期をみると、青磁は14世紀～15世紀、古瀬戸期灰釉陶器は15世紀前半頃の製品であり、このことから、笹間館が火災を被った時期は15世紀前半と想定することが可能であることから、二ノ郭から一ノ郭に拡張された時期はそれ以前と考えられ、単郭の時期は非常に短期間であったと考えることができる。

一ノ郭・二ノ郭（もしかすると六ノ郭も入る）の複郭であった時期の全体的な縄張りを推定することは現時点では不能であるが、堀を掘削した時の残土を盛り上げて三ノ郭～五ノ郭を順次構築し、次第に拡張していったものと考えられる。

防御についてみるならば、一ノ郭、二ノ郭・三ノ郭はほぼ同じ高さであったことを地元の関係者が記憶していることから、当笹間館はいずれの郭も同じ高さを示すいわゆる平城の型式に入り、周囲の水田面との比高1.5m～2mと、これだけでは必ずしも優れた防御性を備えているとはいえない。構築当時は、遺跡の北側と南側に位置する沢と湿地が外堀的な機能を持ち、これがもっとも外側の防御線であったと推定される。西側と北側は二重堀にして防御性を高め、南側と東側に堀で区画された郭を配した縄張りを示す。城外と城内を結ぶ通路は定かでないが、二ノ郭の南西部にみられる突出部を馬出口とする考え方が正しいとすれば、この部分が大手口となる。それから考えると、城外から四ノ郭・三ノ郭を通過して二ノ郭に入り、内堀に架かる土橋を渡って門を通り抜けて一ノ郭に入る経路が想定される。昭和21年の空中写真には二ノ郭の北西隅部に土橋らしい痕跡が写しだされており、この付近に搦め手が存在した可能性がある。以上のことから一ノ郭が主郭で二ノ郭が主郭に準ずる郭である可能性がある。二ノ郭の土橋の前に東西方向を示す4条の溝は、一ノ郭に入る道路に伴う側溝である可能性がある。

(2) 掘立柱建物跡の検討

当笹間館跡から検出された西館5290、東館7720の柱穴状土坑から西館37棟、東館35棟の掘立柱建物跡を組立てたが、これらを柱穴配置や平面形で分類すると次のような類型に細分される。

- I 型——規模が大きく、内柱が多く入り板張り床とおもわれる建物跡
- II 型——桁行か梁行に庇が付く建物跡で、次の3類に細分される。
 - ①——桁行のみに付き、a—2面庇、b—1面庇に分けられる。
 - ②——梁行のみに付き、a—2面庇、b—1面庇に分けられる。
 - ③——桁行と梁行に付き、a—2面庇、b—4面庇、c—3面庇に分けられる。
- III 型——庇をもたない長屋的な建物跡、次の3類に細分される。
 - ①——桁行が3間以内かそれに準ずる小規模な建物跡。

第26表 掘立柱建物跡一覽表

No	遺構名	棟方向	全 体 の 規 模			此の		間		間仕切り	備 考
			桁行	梁行	桁行	梁行	有無	有無	桁行		
1	CIIc10建物跡	N-88°-W	10.3m-34尺-5間	8.44m-16尺-2間	6.5尺・7尺	7尺・9尺	有	無	無	北西隅部の柱穴が不明	
2	CII d10建物跡-1	N-85°-W	14.84m-49尺-7間	10.6m-35尺-4間	7尺	10尺	有	有	有	西端は削平か？	
3	CII d10建物跡-2	N-85°-W	13.02m-43尺-6間	10.6m-35尺-4間	7尺・7.5尺	9尺	有	有	有	西端は削平か？	
4	CII j 8建物跡	N-2°-E	16.36m-54尺-8間	3.18m-10.5尺-2間	6.5尺・7尺	5.25尺	無	無	無	西側に桁行7.92m・梁行4.24mの張り出しあり	
5	CII j 10建物跡	N-10°-W	9.99m-33尺-4間	3.03m-10尺-1間	7.5尺・9尺	10尺	無	無	無	棟持柱不詳	
6	CIII b 1建物跡	N-17°-E	8.93m-29.5尺-5間	8.02m-26.5尺-4間	7尺	7尺	有	有	有	ベタ柱、北側は削平か？	
7	CIII c 4建物跡	N-83°-W	6.81m-22.5尺-3間	6.81m-22.5尺-5間	7.5尺	5尺	有	無	無	正方形の建物	
8	CIII c 7建物跡	N-78°-W	13.6m-45尺-7間	8.93m-29.5尺-5間	7尺・7.5尺	6.5尺・7.5尺	有	有	有	北側桁行が南側より2尺5寸短い	
9	CIII d 1建物跡	N-90°-W	15.5m-51尺-8間	7.6m-25尺-4間	6尺・6.5尺	5尺・7尺	無	無	無	西側の妻柱が不明	
10	CIII d 7建物跡	N-85°-W	10.6m-35尺-5間	6.06m-20尺-3間	7尺	8尺	有	有	有	南西隅の柱穴不明	
11	CIII e 9建物跡	N-88°-W	22.11m-73尺-10間	8.65m-28.5尺-4間	5尺~11尺	7尺・8尺	有	有	有	庇の柱穴が小規模	
12	CIII h 6建物跡	N-85°-W	13.33m-44尺-6間	6.96m-23尺-2間	7.5尺	7尺・16尺	無	無	無	棟持柱不明	
13	CIII i 2建物跡	N-83°-W	3.93m-13尺-2間	2.12m-7尺-1間	6.5尺・7尺	7尺	無	無	無	小型の建物	
14	CIII i 4建物跡	N-2°-W	6.66m-22尺-3間	4.54m-15尺-1間	7尺・7.5尺	15尺	無	無	無	小型の建物	
15	CIII j 2建物跡	N-6°-E	13.98m-46尺-6間	6.36m-21尺-3間	7.5尺・8.5尺	7尺	有	無	無	中規模の建物	
16	CIII j 5建物跡	N-7°-E	5.9m-19.5尺-3間	3.93m-13尺-1間	6尺~7尺	13尺	無	無	無	小型の建物	
17	CIII j 7建物跡	N-7°-W	13.33m-44尺-6間	5.45m-18尺-3間	7尺~8尺	7尺	有	無	無	中規模の建物、片面庇	
18	CIV c 5建物跡	N-93°-W	9.99m-33尺-4間	4.39m-14.5尺-2間	8尺・8.5尺	7.75尺	無	無	無	桁行南側が短い	
19	CIV e 1建物跡-1	N-89°-W	19.54m-64.5尺-9間	8.48m-28尺-4間	5尺~9尺	7.5尺・8尺	有	無	無	一部の柱穴が不明	
20	CIV e 1建物跡-2	N-88°-W	14.69m-48.5尺-8間	4.84m-16尺-4間	4尺~7.5尺	2.5尺~4.5尺	無	無	無	長屋的な建物	
21	DII a 6建物跡	N-4°-E	9.69m-32尺-4間	6.96m-23尺-4間	8尺	7.5尺	有	無	無	2面庇の建物	
22	DII a 7建物跡	N-7°-E	10.9m-36尺-5間	6.09m-20尺-2間	7尺・7.5尺	10尺	無	無	無	長屋的な建物	
23	DII d10建物跡	N-2°-E	6.66m-22尺-3間	4.24m-14尺-2間	7尺・7.5尺	7尺	無	無	無	小型の建物	
24	DII e 6建物跡	N-3°-E	7.57m-25尺-4間	4.99m-16.5尺-4間	6尺~10尺	5尺	有	無	無	小型の建物	
25	DII h 8建物跡	N-4°-W	8.48m-28尺-4間	5.45m-18尺-2間	7尺	9尺	無	無	無	小型の建物	
26	DII h 9建物跡	N-6°-W	6.36m-21尺-3間	1.82m-6尺-1間	7尺	6尺	無	無	無	小型の建物	
27	DII i 8建物跡	N-2°-E	6.81m-22.5尺-3間	4.54m-15尺-1間	7.5尺	15尺	無	無	無	小型の建物	
28	DIII a 7建物跡	N-7°-W	13.02m-43尺-6間	4.84m-16尺-2間	7尺・7.5尺	5尺・11尺	無	無	無	長屋的な建物	
29	DIII b 1建物跡	N-11°-W	11.81m-39尺-5間	6.06m-20尺-2間	7尺・9尺	10尺？	無	無	無	長屋的な建物	
30	DIII d 1建物跡	N-12°-W	9.09m-30尺-4間	6.06m-20尺-1間	7.5尺	20尺	無	無	無	長屋的な建物	
31	DIII e 1建物跡	N-10°-W	13.02m-43尺-6間	6.36m-21尺-4間	7尺・7.5尺	7尺	有	有	有	2面庇の建物	
32	DIII e 2建物跡	N-10°-W	9.24m-30.5尺-4間	5.45m-18尺-2間	7.5尺・8尺	11尺	有	無	無	片面庇の建物	
33	DIII e 2建物跡-2	N-99°-W	11.66m-38.5尺-5間	6.36m-21尺-3間	7.5尺・8尺	7尺	有	有	有	片面庇の建物	
34	DIII e 7建物跡	N-6°-W	17.27m-57尺-7間	6.06m-20尺-2間	4尺~10尺	8.5尺・11.5尺	無	無	無	梁行が北側より南側が1.5尺狭い	
35	DIII h 4建物跡	N-104°-W	11.21m-37尺-4間	5.9m-19.5尺-2間	不定	不定	無	無	無	間尺が不定	
36	DIV c 1建物跡	N-5°-W	5.75m-19尺-3間	2.43m-8尺-1間	5.5尺・8尺	8尺	無	無	無	小型建物	
37	DIV d 2建物跡	N-5°-W	4.24m-11尺-4間	3.63m-12尺-2間	4尺~5尺	9尺	無	無	無	小規模建物	
38	CV b10建物跡	N-14°-E	7.72m-25.5尺-4間	4.24m-14尺-2間	5.5尺~7.5尺	7尺	無	無	無	小規模建物	
39	CV e 7建物跡	N-77°-W	15.9m-52.5尺-7間	10.3m-34尺-5間	7.5尺	7.5尺	有	有	有	一部ベタ柱の大型建物	
40	CV e 8建物跡-1	N-76°-W	14.84m-49尺-7間	10.15m-33.5尺-5間	7尺	7尺	有	有	有	一部ベタ柱の大型建物	
41	CV e 8建物跡-2	N-10°-E	11.51m-38尺-6間	6.96m-23尺-4間	7尺	6.25尺	有	無	無	2面庇の建物	
42	CV f 9建物跡	N-82°-W	8.48m-28尺-4間	6.06m-20尺-4間	7尺	5尺	有	無	無	2面庇の建物	
43	CVI c 9建物跡	N-78°-W	8.48m-28尺-4間	3.93m-13尺-1間	7尺	11尺・13尺	無	無	無	両妻の寸法に2尺の差がある	
44	CVI d 4建物跡	N-2°-E	11.36m-37.5尺-6間	4.54m-15尺-2間	5.5尺~7尺	7.5尺	無	有	有	間仕切りをもつ長屋的な建物	
45	CVI e 4建物跡	N-7°-E	10.9m-36尺-5間	2.27m-7.5尺-1間	7.5尺	7.5尺	無	無	無	長屋的な建物	
46	CVI e 9建物跡	N-97°-W	7.27m-24尺-3間	3.33m-11尺-2間	7.5尺・9尺	不定	無	無	無	西妻が東妻に比し1尺狭い	
47	CVI f 4建物跡	N-8°-E	11.51m-38尺-5間	5.3m-17.5尺-2間	7尺・8.5尺	8尺・9尺	無	有	有	間仕切りをもつ長屋的な建物	
48	CVI f 5建物跡	N-1°-W	8.18m-27尺-4間	7.12m-23.5尺-3間	6尺~8尺	7.5尺・8.5尺	無	有	有	間仕切りをもつ長屋的な建物	
49	CVI f 7建物跡	N-1°-W	9.39m-31尺-4間	6.06m-20尺-3間	7.25尺・8尺	6尺	有	無	無	ベタ柱の建物	
50	CVI g 8建物跡	N-90°-W	13.93m-46尺-6間	8.18m-27尺-4間	7尺・8尺	6尺・7尺	有	有	有	片面庇を建物跡	
51	CVI h 8建物跡	N-91°-W	14.39m-47.5尺-7間	6.36m-21尺-3間	6.5尺・7尺	7尺	有	有	有	一部を除いてベタ柱	
52	CVI e 3建物跡	N-90°-W	6.06m-20尺-2間	3.64m-12尺-2間	10尺	6尺	無	無	無	一部を除いてベタ柱	
53	CVI f 1建物跡-1	N-91°-W	10.9m-36尺-5間	7.57m-25尺-4間	7.5尺	6.5尺・7尺	有	有	有	2面庇の建物	
54	CVI f 1建物跡-2	N-92°-W	7.27m-24尺-3間	5m-16.5尺-1間	8尺	16.5尺	無	無	無	小型建物	
55	CVI f 6建物跡	N-93°-W	6.36m-21尺-3間	4.54m-15尺-3間	7尺	不定	無	無	無	小型建物	
56	CVI f 7建物跡	N-4°-E	8.48m-28尺-4間	2.42m-8尺-1間	7尺	8尺	無	無	無	小型建物	
57	CVI g 2建物跡	N-93°-W	20.45m-67.5尺-9間	4.39m-14.5尺-2間	不定	不定	無	無	無	東妻が西より狭く、細長い建物	
58	CVI g 9建物跡-1	N-2°-W	6.36m-21尺-3間	4.39m-14.5尺-2間	7尺	7.25尺	無	無	無	小型建物	
59	CVI h 9建物跡-2	N-0°-E	6.36m-21尺-3間	3.33m-11尺-2間	7尺	5.5尺	無	無	無	小型建物	
60	CVI h 2建物跡	N-97°-W	12.72m-42尺-6間	5.3m-17.5尺-3間	不定	不定	無	無	無	東妻が西より狭く細長い建物	
61	CVI j 2建物跡	N-87°-W	13.63m-45尺-7間	7.57m-25尺-4間	7.5尺	8.5尺	有	無	無	四面庇の建物	
62	DV a 7建物跡	N-5°-E	5.9m-19.5尺-3間	1.2m-4尺-1間	7尺？	4尺	無	無	無	細長い小型建物	
63	DV a 8建物跡	N-87°-W	6.36m-21尺-3間	3.78m-12.5尺-1間	7尺	12.5尺	無	無	無	小型建物	
64	DV b 8建物跡	N-85°-W	12.72m-42尺-6間	1.97m-6.5尺-1間	7尺	6.5尺	無	無	無	細長い小型建物	
65	DV f 7建物跡	N-97°-W	6.51m-21.5尺-3間	3.08m-10尺-1間	7尺	10尺	無	無	無	小型建物	
66	DV f 9建物跡	N-95°-W	10.3m-34尺-4間	4.09m-13.5尺-2間	8.5尺	6.75尺	無	無	無	小型建物	
67	DVI b 5建物跡	N-83°-W	8.48m-28尺-4間	9.84m-32.5尺-4間	7.5尺	11.5尺	有	有	有	南側が柱穴不明	
68	DVII a 1建物跡	N-90°-W	17.42m-57.5尺-8間	7.87m-26尺-4間	6.5尺~9.5尺	7尺	有	有	有	四隅が直交しない	
69	DVII a 4建物跡	N-92°-W	13.02m-43尺-6間	9.54m-31.5尺-5間	7尺・7.5尺	5.5尺・8.5尺	有	無	無	四面庇の建物	
70	DVII b 1建物跡	N-96°-W	15.3m-50.5尺-7間	6.66m-22尺-2間	7.5尺	11尺	無	無	無	長屋的な建物	
71	DVII b 4建物跡	N-0°-W	9.08m-30尺-4間	6.96m-23尺-3間	7.5尺	8尺？	無	無	無	ベタ柱建物	
72	DVII b 7建物跡	N-88°-W	6.06m-20尺-3間	6.81m-22.5尺-2間	6.5尺・7尺	11.25尺	無	有	有	小型建物	

②——桁行を3間以上とする建物跡

③——桁行を3間以上とし、間仕切りをもつ建物跡。

となり、西館と東館を分けて該当する建物跡を集計すると、以下の表となる。

型 館	I 型	II 型							III 型			合計
		①		②		③			①	②	③	
		a	b	a	b	a	b	c				
西館	4棟	3棟	7棟			1棟		1棟	8棟	13棟		37棟
東館	10棟	2棟	1棟				1棟	1棟	9棟	8棟	3棟	35棟
合計	14棟	5棟	8棟			1棟	1棟	2棟	17棟	21棟	3棟	72棟

類型ごとの棟数集計表

< I 型 >

西館に4棟、東館に10棟と東館に多く、西・東館とも同じ場所に何棟か重複する形で検出されている。

西館の4棟は北辺の西端に3棟、中央部に1棟あり、西端部はお互いに重複している。西端部は西側と北側が削平を受けているため、検出された規模が全体形であるかは定かではないが、棟方向をほぼ東西にとるC II d 10建物跡—1と同2は、前者の桁行が1間短く間尺のとり方に違いがあるものの基本的にはほぼ同じ平面形を示している。棟方向を北北東—南南西にとるC III b 1建物跡は北側にさらに延びる建物跡と推定されるが、検出された部分では柱の省略がまったくない建物跡である。中央部のC III c 7建物跡は四面庇であるが、C II d 10建物跡—1・2とほぼ同様の柱配置である。面積のもっとも広いのはC II d 10建物跡—1の157.3㎡(47.6坪)で、次いで同一—2の138㎡(41.82坪)、C III c 7建物跡の121.4㎡(36.8坪)、C III b 1建物跡の71.6㎡(21.7坪)である。間尺をみると、桁行はC III c 7建物跡は7.5尺が基準である以外はいずれも7尺としている。梁行は、C II d 10建物跡—1の両側7.5尺・中央10尺、C III c 7建物跡の両側7.5尺・中央6.5尺のように両側と中央の間尺を別にする例と、残る2棟のように片側1間を狭ましく他を広くする例がある。いずれにしてもこの4棟は板張り床をもち、複数の部屋に仕切られた住宅であることは確実であろう。さらに、所在する場所がほぼ限定されることから、西館の中心をなす建物跡であろうことが推定されるとともに、西端部の重複状況から最少4期位の遺構変遷が想定される。

東館の10棟は、南辺の東側部分に3棟ある以外はいずれも北辺部の西部寄りに位置し、南辺中央のD VI b 5建物跡以外は他の建物跡と重複する。棟方向をみると、C VI e 4建物跡がほぼ南北を示す以外はいずれも東西にもち、これらの建物跡が北辺と南辺に相対して東西方向に並列する状況を示している。北辺西端部はC V e 7建物跡、C V e 8建物跡—1の東西棟2棟と

南北棟のC V e 8建物跡-2が重複するが、I型は前者2棟である。北辺中央部には非常に多くの建物跡が検出されているが、その中の西からC V i e 4建物跡、C V i f 5建物跡、C V i g 8建物跡、C V i h 8建物跡、C V i i f 1建物跡-1の5棟がI型の建物跡であり、前者2棟、後者3棟がお互いに重複している。また、前者二棟は南北棟であるが、後者は棟方向を東西にもつ。南側の3棟は、中央部のD V i b 5建物跡は単独であるが、東寄りのD V i i a 1建物跡とD V i i b 4建物跡は重複し、棟方向は前者が南北、後者は東西を示す。これらの中で、C V i f 5建物跡、D V i i b 4建物跡は桁行4間・梁行3間の総柱建物跡で、他の8棟と平面形や柱配置が異なる様相を示し、機能的な違いを示している可能性がある。残る8棟はいずれも多くの内柱を配置し、複数の部屋に仕切られた板張り床をもつ住家であることは確実であろう。間尺をみると、桁行が7尺を基準とするC V e 8建物跡-1、C V i h 8建物跡、D V i i a 1建物跡、7.5尺にとるC V e 7建物跡、C V i e 4建物跡、C V i i f 1建物跡-1、D V i b 5建物跡、7尺と8尺を併用するC V i g 8建物跡に分けられる。梁行は、7尺とするC V i g 8建物跡、C V i h 8建物跡、D V i i a 1建物跡、7.5尺にするC V e 7建物跡、C V i e 4建物跡、7尺と6.5尺そして10尺と11尺の2積類を併用するC V i i f 1建物跡-1とD V i b 5建物跡、6.5尺・7尺・8.5尺の3種類を使用するC V e 8建物跡-1に細分される。また、3間×4間の総柱建物跡は、C V i f 5建物跡が桁行は6尺・6.5尺・8尺、梁行が7.5尺・8尺と各種の間尺を使用し、D V i i b 4建物跡は桁行・梁行とも7.5尺を基準としている。3間×4間の総柱建物跡2棟とC V i h 8建物跡以外は、桁行か梁行もしくはその両面に庇をもつ。面積をみると、もっとも広いのはC V e 7建物跡の163.77㎡(49.6坪)で以下C V e 8建物跡-1の150.6㎡(45.6坪)、D i i i a 1建物跡137㎡(41.5坪)、C V i g 7建物跡113.1㎡(34.2坪)、C V i i f 1建物跡-1の108.15㎡(32.7坪)、C V i h 8建物跡91.5㎡(27.7坪)の順となる。以上の建物跡はいずれも3棟か4棟の建物跡と重複していることから、3～4期の遺構変遷が想定される。

〈II 型〉

17棟が該当し①～③類に分けられ、各類はさらに細分される。これらは、西館に12棟、東館に4棟が位置する。以下に分類ごとに分けて記述する。

① 類

13棟の該当ともっとも多く、特に西館に10棟と偏在する。両面につくaと片面のみにつくbに細分される。

西館には10棟存在するが、そのうち3棟が①a類、7棟が①b類に相当する。①a類の3棟はいずれも西端部に位置し、規模もC i i i c 4建物跡の6.81m(3間)×6.81m(5間)の46.37㎡(14坪)、D i i a 6建物跡の9.69m(4間)×6.96m(4間)の67.5㎡(20.4坪)、D i i e 6建物跡の7.57㎡(4間)×4.99m(4間)の37.8坪(11.1坪)の広さと小規模である。特に、C

III c 4 建物跡は桁行・梁行とも同じ長さを持ち平面形が正方形を示し、内柱はまったくないが東館の I 型に属する総柱建物跡に近い機能を推定することができる。間尺をみると、桁行は C III c 4 建物跡の7.5尺、D II a 6 建物跡の8尺、D II e 6 建物跡はそれぞれ異なった間尺を使用している。梁行をみると、前者5尺、中者7.5尺、後者が5尺と3.3尺である。棟方向は、前者が東西棟であるほかは南北棟である。① b 類の7棟には、C III j 2 建物跡、D II e 2 建物跡—2のように梁行の基準間尺7尺と同じ間尺の庇をもつ建物跡とほぼそれに近いD III e 2 建物跡—1、そしてC II c 10建物跡の棟持柱に近い位置に柱を配置する型と、4尺や4.5尺と幅の狭い庇をもつC III d 7建物跡、C III j 7建物跡、C IV e 1建物跡—1の2型ある。規模をみると、柱穴の配置や平面形が近似するC II c 10建物跡が桁行10.3m (5間) × 梁行4.85m (2間) の46.2 m² (14坪)、D III e 2 建物跡—1が桁行9.24m (4間) × 5.45m (2間) の50.36m² (15.3坪) がもっとも小規模である。それに続く規模はC III d 7建物跡の桁行10.6m (5間) × 梁行6.06 m (3間) の64.24m² (19.5坪)、D III e 2 建物跡—2の桁行11.66m (5間) × 梁行6.36m (3間) の70.62m² (21.4坪)、C III j 7建物跡の桁行13.33m (6間) × 5.45m (3間) の72.65m² (22坪)の4棟であり、もっとも大規模なのはC IV e 1建物跡—1の桁行19.54m (9間) × 8.48 m (4間) の165.7m² (50.2坪) である。間尺をみると、桁行の間尺を7尺とする建物跡はC II c 10建物跡・C III d 7建物跡、C III j 2建物跡、7.5尺にとるのはD III e 2建物跡—1、7尺と7.5尺や8尺と7.5尺という2種類の間尺を併用するC III j 7建物跡、D III e 2建物跡—2、まとものないC IV e 1建物跡—1の4種類ある。身舎部分の梁行は、7尺の2間にするC III j 2・C II j 7・D III e 2—1の各建物跡、8尺の2間にするC III d 7建物跡、8尺・7.5尺・8尺の3間にするC IV e 1建物跡—1と梁間を複数にする建物跡とC II c 10建物跡の9尺、D III e 2建物跡—1の11尺のように1間にする建物跡の2種類ある。また、C III d 7建物跡とD III e 2建物跡—2には棟持柱列に間仕切りに関連すると推定される柱穴を配する。棟方向は、C III j 2建物跡とC III j 7建物跡が南北棟である以外は、いずれも東西棟である。

東館には3棟のみと西館のそれに比較して棟数が少ない。① a 類には2棟該当し、C V e 8建物跡—2は桁行11.51m (6間) × 梁行6.96m (4間) の80.1m² (24.2坪)、C V f 9建物跡が桁行8.48m (4間) × 梁行6.06m (4間) の51.39m² (15.6坪) の規模をもつ。間尺をみると、桁行は2棟とも7尺を基準にし、身舎の梁行は前者が6.25尺、後者が5尺でともに2間にしている。庇部分の間尺は前者が5.5尺と5尺、後者は5尺である。① b 類に属するのは1棟のみで、桁行9.39m (4間) × 梁行6.06m (3間) の56.9m² (17.2坪) の規模をもつ南北棟である。

①類に該当する建物跡13棟を機能的な面からみると、1 a としたC III c 4建物跡はI型のC VI f 5建物跡・D VII b 4建物跡と近似した平面形を示し、機能的にも同じ可能性がある。おそらく倉庫として使用され「蔵」的な性格を想定することができる。他の12棟は、桁行を4間に

上とする細長い平面形を示し、C III d 7 建物跡のように間仕切りをもつ例があることから、すべてを倉庫的な性格の建物跡と理解することには無理がある。特に、① a 類とした2面庇をもつ建物跡と① b 類とした片面庇の建物跡のうち庇の間尺を7尺と広くするC II c 10建物跡・C III j 2建物跡・D III e 2建物跡-1・D III e 2建物跡-2・C VI f 8建物跡は、床を板張りとし、土座床か土間と考えれば、住家としてもまったく支障がない。規模的にも15坪以上25坪位は近世民家にも散見される規模であり、居住する人物の階層をも考え合わせれば、何んら問題はない。

② 類

検出されている建物跡71棟の中に、梁行のみに庇を付す建物跡はまったく含まれず、本類に該当する例はない。

③ 類

4棟が該当するが、a～cに細分される。

西館には③ a 類にC III e 9建物跡、③ c 類にD III e 1建物跡の各1棟がある。C III e 9建物跡は桁行・梁行とも片面の2面に庇がつき、さらに間仕切りをもつ。D III e 1建物跡は桁行2面・梁行1面の3面に庇がつき、間仕切りをもつ。規模をみると、前者は桁行22.11m(10間)×梁行6.96m(4間)の153.88㎡(46.6坪)、後者は桁行13.02m(6間)×梁行6.36m(4間)の82.8㎡(25坪)で、身舎の梁行を前者は3間、後者は2間にとり、両者とも間仕切りをもつ。間尺をみると、桁行は前者が各柱間によって異なるが全長から算出すると2.29mの7.55尺となり、後者は7尺と7.5尺の併用である。梁行は、前者が7尺と8尺の併用、後者が7尺の間尺にしている。庇の幅は、前者は桁行5.5尺、梁行5尺とし、後者は桁行3.5尺、梁行7尺にしている。

東館には③ b 類に桁行13.63m(7間)×梁行7.57m(4間)の103.1㎡(31.2坪)の規模をもち4面庇のつくC VII j 2建物跡、③ c 類に桁行13.02m(6間)×梁行9.54m(5間)の124.21㎡(37.6坪)の規模をもち、桁行2面と梁行1面の3面に庇がつくD VII a 3建物跡の2棟がある。身舎の間尺は、桁行は前者が7尺と7.5尺の併用、後者が7尺・7.5尺・10尺が併用され、梁行は前者が8尺・9尺の2間とし、後者は8.5尺2間と5.5尺の3間にとっている。庇の幅をみると、前者は4面とも4尺、後者は桁行1面と梁行を4尺・桁行1面を5尺としている。

これらの建物跡を機能的な面から考えると、C III e 9・D III e 1各建物跡には間仕切りをもつが、C III j 2建物跡・D VII a 3建物跡には間仕切りに関連する柱穴は未検出であるが、規模や平面形がI型の内柱を除去した形とほぼ同様であることから考えると、本類も住家として使用されてもまったく問題がない。内柱がないということは、板張り床ではなく土座床の可能性がある。

〈Ⅲ 型〉

本遺跡から検出された72棟の建物跡のうち55.5%に相当する40棟が本型に相当するが、それらは桁行の長さや間仕切りの有無によって1～3類に細分される。

① 類

西館8棟、東館19棟の17棟が該当する。桁行を2間とする2棟以外はすべて3間の桁行を持ち、梁行は5棟が2間、1棟が3間のほかいずれも1間にとる。

西館の8棟は、中央部やや西寄りのCⅢ区にCⅢ i 4建物跡、CⅢ j 5建物跡の3棟、中央部の南西寄りにDⅡ d 10建物跡、西端部南側にDⅡ h 9建物跡、DⅡ i 8建物跡の2棟、中央部南東寄りにDⅣ c 1建物跡、DⅣ d 2建物跡の2棟が、それぞれがこれらの地点で隣接や重複して位置する。規模はすべて異なるが、面積が5坪以下と5坪～7坪、7坪以上に分けられる。5坪以下にはCⅢ i 2建物跡の桁行3.93m(2間)×梁行2.12m(1間)の8.33㎡(2.5坪)、DⅡ h 9建物跡の桁行6.36m(3間)×梁行1.82m(1間)の11.57㎡(3.5坪)、DⅣ c 1建物跡の桁行5.75m(3間)×梁2.42m(1間)の13.91㎡(4.2坪)の3棟があり、桁行と梁行の間尺を同じ長さかやや狭くする特徴がある。桁行の間尺は、前者は6尺と7尺の併用、中者は7尺、後者は8尺と5.5尺の併用であり、梁行は7尺、6尺、8尺である。棟方向は前者が東西棟である以外は、南北棟である。5坪～7坪にはCⅢ j 5建物跡、DⅣ d 2建物跡の2棟が入る。CⅢ j 5建物跡は桁行5.9m(3間)×梁行3.93m(1間)の23.18㎡(7坪)、DⅣ d 2建物跡は桁行5.75m(4間)×3.63m(2間)の20.87㎡(6.3坪)の規模で、梁行の間尺を桁行間尺の倍かそれに近い長さとする特徴がある。因みに、前者は桁行6.5尺に梁行13尺、後者は桁行4.5尺に梁行9尺である。いずれも南北棟である。7坪以上の規模にする3棟は、CⅢ i 4建物跡の桁行6.66m(3間)×4.54m(1間)の30.23㎡(9.16坪)、DⅡ d 10建物跡の桁行6.66m(3間)×梁行4.24m(2間)の28.23㎡(8.55坪)、DⅡ i 8建物跡の桁行6.81m(3間)×梁行4.54m(1間)の30.91㎡(9.36坪)が入り、梁間を桁間の倍かそれに近い長さとしている。桁行は7.5尺と7尺を併用する前・中者、7.5尺の等間にする後者、梁行は15尺にする前・後者と7尺等間の2間にする中者がある。3棟とも南北棟を示す。

東館には9棟あり、北辺部に西から東に6棟、西辺部の中央に2棟、同南寄りに1棟がある。1棟が桁行を2間とする以外はいずれも3間にとり、梁行は1間が3棟、2間が5棟、3間が1棟と差があり、3棟は棟方向を南北に示すが他は東西棟である。北辺部の6棟はCⅣ e 9建物跡が中央部に占地し、残るCⅦ e 4、CⅦ f 1-2、CⅦ f 6、CⅦ g 9-1、CⅦ g 9-2の各建物跡は北東部のCⅦ区に密集し、隣接や重複して立地する。規模はそれぞれによって異なり一様ではないが、もっとも小規模な建物跡はDⅤ a 7建物跡の桁行5.9m(3間)×梁行1.2m(1間)の7.08㎡(2.1坪)で、他の8棟は5坪～7坪に4棟と7坪以上4棟に分けられ

る。前者にはD V f 7 建物跡の桁行6.51m (3間) × 梁行3.03m (1間) で20.2㎡ (6.1坪)、C VII g 9 建物跡—2の桁行6.36m (3間) × 梁行3.32m (2間) で21.11㎡ (6.4坪)、C VII e 4 建物跡の桁行6.06m (2間) × 梁行3.64m (2間) で22.05㎡ (6.68坪)、D V a 8 建物跡の桁行6.36m (3間) × 梁行3.64m (2間) で23.15㎡ (7坪) が入る。後者には、C VI e 9 建物跡の桁行7.27m (3間) × 梁行3.33m (2間) で24.2㎡ (7.3坪)、C VII g 9 建物跡—1の桁行6.36m (3間) × 梁行4.39m (2間) で27.9㎡ (8.5坪)、C VII f 6 建物跡の桁行6.36m (3間) × 梁行4.54m (3間) で28.87㎡ (8.7坪)、C VII f 1 建物跡—2は桁行7.2m (3間) × 梁行4.99m (1間) で32.7㎡ (9.9坪) である。桁行の間尺は、7尺とするものがC VII f 6、C VII g 9—1、C VII g 9—2、D V a 8、D V f 7の各建物跡、10尺がC VII e 4 建物跡、7.5尺と9尺を併用するC VI e 9 建物跡、7尺と7.5尺を併用するC VII f 1 建物跡—2、D V a 7 建物跡の5.5尺と7尺の併用等がある。梁行の間尺は、それぞれによって差があり、1間にする3棟は1.2m、3.03m、4.99mの3種類、2間にする建物跡は1.51m、1.66m、1.82m、2.2mの4種類、不定にする3間に分けられる。

これらの小規模な建物跡を機能的な面からみると、面積が10坪以下であることを考えると住家とするには狭すぎるように思える。階層によっては住家とした可能性をまったく否定するものではないが、住家と推定される建物跡が数多く存在することを考えれば、倉庫的な使われ方がもっとも妥当であろう。

② 類

西館13棟、東館8棟の合わせて21棟が該当する。

西館の13棟は全体に散在する在り方を示すが、棟方向によって東西棟6棟と南北棟6棟、東西棟に南北棟が接続した形1棟に分けられる。桁行の柱間を3間にする建物跡はD III h 4 建物跡の1棟、4間にするのはC II j 10建物跡、C VII c 5 建物跡、D II h 8 建物跡、D III d 1 建物跡、D III e 7 建物跡の5棟、5間にするのはD II a 7 建物跡、D III b 1 建物跡の2棟、6間にするのはC III h 8 建物跡、D III a 7 建物跡の2棟、7間にするのはD III e 7 建物跡である。また、梁行を1間にするのはC II j 10建物跡、D III d 1 建物跡、2間にするのはC IV c 5 建物跡、D II a 7 建物跡、D II h 8 建物跡、D III b 1 建物跡、D III e 7 建物跡、D III h 4 建物跡、2間であるが柱穴が中心をずれるものがC II h 6 建物跡、D III a 7 建物跡、4間にするものC III d 1 建物跡、C IV e 1 建物跡—2である。規模をみると9坪台がC II j 10建物跡、10坪台がC IV c 5 建物跡、D II h 8 建物跡、D III d 1 建物跡、D III h 4 建物跡、D III a 7 建物跡、D II a 7 建物跡、20坪台がC IV e 1 建物跡—2、D III b 1 建物跡、C II j 8 建物跡、C III h 6 建物跡、30坪台がD III e 7 建物跡、C III d 1 建物跡となる。桁行の間尺には、7尺にとるD II h 8 建物跡、7.5尺にするC III h 6 建物跡、D III d 1 建物跡、7尺と7.5尺を併用するD II a 7 建物跡、

D III a 7 建物跡、7 尺と 9 尺を使う D III b 1 建物跡、7.5 尺と 9 尺にする C II j 10 建物跡、7.5 尺と 8 尺を併用する CIV c 5 建物跡、5 寸単位の完数尺で多くの間尺を使用する CIV e 1 建物跡—2・D III e 7 建物跡、まったく規則性のない D III h 4 建物跡などに分けられるが、もっとも多いのは 7 尺～8 尺を基準にする建物跡で、ほとんど建物跡がこの間尺を何んらかの形で使用している。梁行の間尺はそれぞれによって差があり一様でない。2 間にする場合も間柱が必ずしも中心に位置しない例も多くみられる。しかし、梁行全長を 6.06m にする建物跡が D II a 7 建物跡・D III b 1 建物跡・D III e 7 建物跡・D III d 1 建物跡の 4 棟あり、これが一つの基準となりうるであろう。

東館の 8 棟は、北側は C V 区 1 棟・C VI 区 1 棟・C VII 区 3 棟と北東部に多く、南側は D V 区 2 棟、D VII 区 1 棟と、南西部に多くみられる。棟方向は、C V b 10 建物跡が南北を示すほかいずれも東西方向にとる。規模をみると、C VII f 7 建物が 20.52m² (6.2 坪)、C V b 10 建物跡 32.07 m² (9.91 坪)、D V b 8 建物跡 25.1m² (7.6 坪)、C VI c 9 建物跡 33.3m² (10 坪) の 4 棟が 10 坪以下で、D V f 9 建物跡 42.13m² (12.8 坪)、D VII b 7 建物跡 41.27m² (12.5 坪)、C VII h 2 建物跡 63.6m² (19.3 坪)、C VII g 2 建物跡が 80.67m² (24.4 坪) と 4 棟が 10 坪以上の規模であるが、全体としてみるとバラツキが大きく規則的な状況は窺えない。間尺は、桁行では 7 尺を基準とする C VI c 9 建物跡・C VII f 7 建物跡・D V b 8 建物跡、全長から割り出すと 7.5 尺となる C VII g 2 建物跡、8.5 尺にする D V f 9 建物跡、中央を 7 尺とし両側を 6.5 尺にとる D VII b 7 建物、全長から割り出すと 7 尺になる C VII h 2 建物跡、6.5 尺を基準とするらしい C V b 10 建物跡などがある。梁行は、6.5 尺 1 間の D V b 8 建物跡、13 尺 1 間の C VI c 9 建物跡、14.5 尺 1 間にする C VII g 2 建物跡、8 尺 1 間にとる C VII g 7 建物跡、6.75 尺 2 間にする D V f 9 建物跡、7 尺 2 間にとる C V b 10 建物跡、11.25 尺 2 間にする C VII b 7 建物跡、中央 6.5 尺両側 5.5 尺の 3 間にとる C VII h 2 建物跡等、それぞれによって差がある。桁行の長さは、9 間とする C VII g 2 建物跡を最長とし、6 間にする C VII h 2 建物跡と D V b 8 建物跡が続き、次いで 4 間にする C V b 10 建物跡・C VI c 9 建物跡・C VII f 7 建物跡・D V f 9 建物跡、3 間にする D VII b 7 建物跡と続く。東館の特徴として C VII f 7 建物跡・D V b 8 建物跡のような梁行の幅が狭く桁行の長い建物跡の存在と、C VI c 9 建物跡・C VII g 2 建物跡・C VII h 2 建物跡にみられる相対する妻の梁行全長が異なる例である。例えば前者で 2 尺、中者で 2.5 尺、後者で 2 尺の差がみられることである。

本類には庇の付かない身舎だけで桁行の長い所謂長屋的な建物跡を含めたが、このような平面形を示す建物跡の機能的な役割を考えると、少なくとも住家と考えるには無理がありそうである。まず、間仕切りや床束と推定される内柱がまったく検出されないことから考えると、土間であったか転し根太による床であろうと推定されることや、I 型・II 型の建物跡と重複する例がほとんどないことをも考え合わせると住家とは異なる性格の建物跡と考えるのが妥当であ

ろう。おそらく倉庫的な使われ方をされた建物跡と推定される。

③ 類

東館のみに3棟あり、北辺の中央CVI区に2棟と南辺の東端寄りに1棟位置する。DVII b 1建物跡が東西棟のほか2棟は南北棟である。規模をみると、最大はDVII b 1建物跡の101.9㎡(30.9坪)、次いでCVI f 4建物跡の61㎡(18.5坪)、CVI d 4建物跡の51.6㎡(15.6坪)と続く。間尺は、桁行が7尺×5間と7.5尺・8尺を各1間の7間とするDVII b 1建物跡、7尺×3間と8.5尺×2間の5間にするCVI f 4建物跡、おそらく6尺×4間と6.5尺×2間の6間と推定されるCVI d 4建物跡といずれも異なる間尺が使用されている。梁間は、7.5尺2間のCVI d 4建物跡、9.5尺と8尺の2間にするCVI f 4建物跡、11尺2間のDVII b 1建物跡とすべて間尺が異なる。内柱の配置をみると、CVI d 4建物跡は北から3間目に入れて建物を2分し、CVI f 4建物跡の場合は北から1間目と3間目に入り、建物が北から1間・2間・2間の3部屋に仕切られていた可能性を示唆している。DVII b 1建物跡は東側1間を除いて全て入り、板張り床の部分と土間か土座床とを組み合わせる3部屋に仕切られていた可能性がある。

本類は内柱の配置がまったくなければIII型②類とまったく同じ平面形を示すが、②類は内柱が入らないことから考えると、複数の部屋に仕切ることとはしなかった建物跡と理解され、倉庫的な機能を想定したが、本類は間仕切りをもつという違いがあり、倉庫的ではあるが、住家として使用されても何んら問題がない。特に、DVII b 1建物跡は面積も30.9坪と大規模であることことから住家である可能性が大きい。また、これらの3棟はいずれもI型の建物跡と重複しており、I型の前身建物である可能性も推定されることをも考え合わせると、住家である可能性を強く示唆している。

(3) 建物跡と他遺構の検討からみた郭の性格と時期区分

前項で、建物跡72棟を平面形と柱穴配置からI～III型に大別し、さらに各型の中で柱穴配置と面積によって細分し検討を加えたが、その結果から郭の性格と時期区分について考えてみることにする。なお、当遺跡は本来一ノ郭～六ノ郭まで存在したらしいが、発掘調査は西館とした一ノ郭と東館と呼称した二ノ郭だけ行ったことから、この両郭に限定して記述する。

〈郭の性格〉

建物跡の検討によってI型・II型・III型③が住家か住家として利用されたいことが明らかになったが、住家と考えられる建物跡が西館にはI型—4棟、II型—12棟、東館にI型—10棟、II型—5棟、III型③—3棟が入り、東館が2棟多い。しかし、細部についてみると、I型の建物跡は東館に多く、それも北側が西端部と中央部に2カ所の3カ所、南側は中央部と東端

部の2カ所と5カ所に配置されるのに対し、西館では北西隅部と北側中央部の2カ所のみである。これらは両館とも何棟かが重複している。例えば、東館では北側西端部が3棟、同中央部は東端部にかけて14棟、南側東端部が5棟、西館は北西隅部が5棟、北側中央部は東部にかけて5棟の重複関係を示している。このことは、重複棟数の多い場所ほど長期にわたって建物跡が存在したことを表し、東館北側西端部では3回、南側東端部は5回の改築があったことをも示している。また、I型の建物跡に限ってみれば、東館では4棟～5棟が、西館では2棟が同時に存在したことを表し、それと、倉庫と推定した建物跡を付属屋と考えればそれらが何棟か有機的に結び付いて一遺構群ひいては住人一人当りの建物跡群を構成すると推定される。この考え方が正しいとすれば、東館の場合は最少でも4人～5人の人物が同時に住し、屋敷地として使用していたと考えることができる。西館の場合は、同様に2人の屋敷である可能性が強い。

一方、前項で当初は東館だけの単郭であったのが、ある時期（火災で焼亡する前）に西館を拡張したと推定した。したがって、中枢部も当初は東館内に存在したはずである。堀跡や溝跡と建物跡との重複関係をみると、北側西端部の建物跡群はいずれもBVI j 1溝跡(旧堀)より新しいことは明らかである。同中央部ではCVI a 3溝跡との距離的關係からみてCVI d 4・CVI e 4・CVI f 4各建物跡はCVI a 3溝跡(旧堀)より新しい可能性が強く、さらに、南側東端部の建物跡群のうちDVII b 1・DVII a 4・DVII b 4各建物跡はDVI e 7溝跡(旧堀)より新しい可能性があり、当初の中枢部はCVI g 8・CVI h 8・CVII f 1-1各建物跡のいずれであろうと推定され、CV a 7門跡を出入口としたものであろう。西館の場合は、東館より後に構築されることは既述のとおりであり、東館と繋ぐ土橋の正面前にCIV i 9門跡が存在することは、西館に渡るにはこの土橋を進む以外に方法がなかったことを示すものである。また、東館の土橋正面に東西方向に延びるCV j 6溝跡-1～4は道路側溝の可能性があるとともに、DV a 7・DV a 8・DV b 8各建物跡は、西館に入る人物の監視所、また、DV f 7・DV f 9各建物跡は馬出口(大手口)から東館に入る人物に対する監視所的な建物跡と想定することができる。これらのことから全体的に判断すると、西館が拡張された時点で中枢部(主郭)は西館へ移ったと考えても大過ないであろう。この推定が正しいとすれば、西館の北西隅部に位置しI型に属するCII d 10建物跡-1・同一-2・CIII b 1建物跡か中央部のCIII c 7建物跡のいずれかが主殿に相当する建物跡であることに間違いなからう。それ以外の建物跡は付属屋であろう。

以上のことから総合的に判断すると、当館が構築された当初は東館のみの単郭であったため、DVI e 7溝跡とCVI a 3溝跡に区画された北東部を主郭としたのが、西館を拡張することによって主郭が西館に移り、東館は家臣団屋敷になったと推定され、この状況は廃城となる16世紀末まで踏襲されたと考えられる。

〈時期区分〉

検出された掘立柱建物跡をはじめとする各種の遺構すべてについて、その前後関係を明確に示すことは困難である。しかし、郭が拡張や改修されていること、建物跡が数多く重複すること、火災を受けていること等が調査によって確認されていることや、後述する遺物の所属時期によって、時期区分をある程度推定することが可能である。それによると、次の3期に大別されさらに何時期かに細分されることが推定される。

I 期

東館のみの単郭の時期である。東館内で検出された旧堀跡の前後関係や建物跡の配置関係、火災による草木灰堆積の有無等から、非常に短期間で、小期はないと推定される。

西側の堀（調査時の内堀）に並行するBVI i 1溝跡と直交するCV d 5溝跡でL形に区画され、CV a 7門跡を大手口にしたと推定される。土橋・馬出口は未だ構築されておらず、西側の堀が馬出口を分断する形で直線的な形状である。建物跡の配置は断定できないが、CVI h 8建物跡・DVII b 1建物跡を中核とし、CV e 8建物跡—2、CVI d 4建物跡、CVI e 9建物跡、DVI b 5建物跡などを付属屋とする構成が推定される。CV a 7門跡から入り、BVI i 1溝跡北端と北辺部間の空地を通り抜けて建物跡と接続していたものと考えられる。

本期の溝跡の内BVI i 1溝跡には埋土最下層に西館でも確認されている火災に伴うと推定される草木灰が堆積しており、火災時にこの溝跡が使用されていたことを示していることから、本期中に西館が拡張されたことは確実であろう。

II 期

東館と西館の複郭となった時期で、東館内に存在する旧堀の状況と大手口の変更によって、次のA～Bの2小期に細分される。

A——西館が拡張されることによって内堀に土橋を構築して東館と接続する。I期と同様にCV a 7門跡を大手口とするため、BVI i 1溝跡を南へ延長しDV a 5溝跡へと屈曲させて区画し、それまでのCV d 5溝跡は埋め戻す。馬出口はまだ構築されず内堀は直線的に南へ抜ける。建物跡の特定はできないが、西館・東館ともI型の建物跡を中核とし、何棟かの付属屋で構成されるであろう。DV a 8建物跡は土橋を渡る人間を監視する監視的な建物跡の可能性はある。

B——東館の南西部に馬出口を構築して、それまでのCV a 7門跡を廃止して大手口を馬出口に変更し、それまでの堀をDV d 5溝跡だけを残して埋め戻し、新たにCVI a 3溝跡を南北に掘削してDV d 5溝跡と接続させ、さらに東西にDVI e 7溝跡を掘って東西50m、

南北45mの範囲に区画する。西館には区画施設がないため明確ではないが、特に区画する必要がなかったものであろう。建物跡の特定は困難であるが、東館内部を区画する施設的位置が変更されたことは、それまでの位置を変更するため改築された可能性が大きい。馬出口から東館に入った人物は区画する両溝の間を通り抜け、CVI a 3 溝跡の北端部と北辺部の間の空地を通過して土橋を渡って西館に入った可能性がある。DV b 6 柱穴列は目隠し塀と推定され、DV f 7 建物跡は監視所的な役割が考えられる。

III 期

東館内部を区画したCVI a 3 溝跡とDVI e 7 溝跡が廃棄されて埋め戻され、土橋の前から東へ延びるCV i 5 溝跡1～4を側溝とする西館へ通ずる道路が設けられた時期である。本来はII期の中の小期である可能性も考えられるが、後述する国産陶器の生産時期が、瀬戸・美濃系と唐津系の上に約50年間位の空白が存在することから、一応、本期を唐津系陶器を共伴する時期として、一時中断した後新たに再使用された可能性を示し、文献に記載される和賀月齊や和賀主馬が入城したとする記録に一致する時期と理解しておく。

2) 遺 物

本遺跡から出土した中世に属する遺物は、陶磁器・石製品・金属製品・漆と木製品・炭化穀類・その他の種類等を含めて1,445点が出土し、可能な限り本報告書に掲載した。本項では、その中の陶磁器について以下の諸点について分析し、まとめとする。

(1) 各館ごとの出土状況

本遺跡から出土した各種の陶磁器類428点には国産陶器176点と舶載陶磁器252点を含むが、これらは西館から59.11%に相当する239点、東館から40.89%の189点が出土している。

西館から出土した239点には国産陶器124点、舶載陶磁器115点を含み、51.88%は国産の陶器によって占められる。細部を検討すると、国産陶器では瀬戸・美濃系の灰釉皿が東館に比較して10点少ない以外は、全種類が東館よりも多く出土し、本遺跡出土のほぼ全器種を網羅している。特に、鉄釉の天目茶碗と鉄釉壺、常滑系甕は圧倒的に多く、注目に値する。しかし、鉄釉の壺と常滑系の甕は破片数は多いものの、大型品であることが推定されることから同個体の破片を多く含む可能性も考えられ、留意する必要がある。舶載陶磁器をみると、青磁・白磁・染付はほぼ全器種が揃うものの、鉄釉天目茶碗は1点と少ない。特徴といえることは、青磁稜花皿の出土がないことと、白磁の口兀系と碗の出土である。

一方、東館の場合は国産陶器52点、舶載陶磁器137点と、189点の72.48%を舶載陶磁器が占めており、西館の比率と若干異なる様相を示している。細部についてみると、国産陶器では瀬戸・美濃系灰釉皿の出土が圧倒的に多いことと、灰釉碗・鉄釉天目茶碗の出土が少ないことが目を引くし、舶載陶磁器の場合は青磁丸皿・同盤・同水注・口元げ白磁の出土がまったくないことと、鉄釉天目茶碗の出土が異常に多いことが特徴としておげられる。

以上のことから、各館ごとに国産陶器と舶載陶磁器の同器種を集計すると、碗は西館64点・東館62点と西館が若干多いものの、皿では西館51点に対し東館88点と東館での出土が圧倒的に多い。盛器としての盤は西館8点、東館1点と西館からの出土が多い。鉄釉の天目茶碗についてみると、西館15点・東館11点と西館が若干多いものの、西館はほとんどが国産品であるのに対し東館は中国の天目茶碗が非常に多いという違いがある。壺・水注・小杯・香炉と言った供膳具以外の器種は西館とも出土量が少なく、比較対照とはならない。壺・甕といった貯蔵具は西館とも舶載品を1点含む以外は国産品であるが、量的には西館が多い。このような出土状況は、郭としての時代性と時間的連続性・郭の使われ方を反映しているものと考えられる。特に、西館では瀬戸・美濃の灰釉は15世紀前半の製品が多く、逆に15世紀末～16世紀初期の皿が東館に多いことは時期的な差を示す可能性があり、この状況は舶載の青磁・白磁口元げ系や瀬戸・美濃系鉄釉天目茶碗についても同様なことが言える。また、供膳具と調理具以外の器種が西館からの出土が多いことは、郭の使われ方、所謂性格を表している可能性があるとともに、居住した人物の階層の違いをも示している可能性がある。

(2) 器種組成

出土陶磁器428点を国内産と中国産・朝鮮産に大別し、それらがどのような器種で構成されるかを分析し、本遺跡から出土した陶磁器の特徴を明らかにしておきたい。なお、出土点数はいずれも破片点数であり、個体数ではない。それは、これらが全て破片での出土であり、個体判別が困難なことによる。接合によっては構成比率に影響を及ぼすことは明らかであるが、各種類とも同じ条件下にあることもまた事実であり、極端な影響はないものとする。

〈国産陶器〉

出土した176点を産地別にみると、瀬戸・美濃系が108点の61.36%、次いで常滑・知多・信楽の広義の東海系が40点の22.72%、さらに瓦質陶器と土器が16点の9.1%、唐津系が6点の3.4%、産地不明の陶器が4点の2.27%、北陸系の須恵系陶器が2点の1.13%と続き、全体の60%強を瀬戸・美濃系が占めている。産地別のこのような出土状況は、岩手県内の中世城館の出土状況と比較すると大筋では一致しているものの、細部をみると他遺跡よりも多くの産地の製品が運ば

第28表 地点別・種類別・器種別出土点数一覧表 (船載)

産地 器種 調査 地区	中														明				計							
	青				磁				白						鉄		漆			附						
	陶	綠花皿	丸皿	盆	水注	豆	小杯	荷白磁	碗	口皿	元蓋	碗・杯	皿	香炉	磁	碗	皿	水注		茶碗	碗	区	軸	黒	種	
BII																										
BIII																										
BIV																										
CII 14				1																				1		27
CIII 7				1				1																		12
CIV 5												2														10
DII 4													4													19
DIII 11			1	2	1					1	1		4													27
DIV													2													4
EII																										
EIII			1	2																						3
EIV 1						1																				2
EIV 4																										11
西館																										115
小計点数	46		2	6	1	1	1	1	1	1	2	1	4	19										1		
BV																										
BVI 2																										2
BVII																										
BVIII													1													1
CV 7																										1
CVI 11	2					1	1						6		1	2	10			1					29	
CVII 5	3												7			2			5						28	
DVI 4														1		1									11	
DVI 12													5										1		6	
DVI 6	1														1	1	5								22	
EVI																9			1		2				21	
EVI																										
EVI																										
EVI																										
EVI																										
楽庭	5	1																								
小計点数	52	7				1	1	1					1			3	5								15	
採	1																									
総計	99	7	2	6	1	2	2	1	1	2	1	4	40	1	4	16	50	1	8	1	2	1			252点	
比率																										9点3.57%
																										3点1.19%
																										67点26.58%
																										53点21.03%
																										1点0.39%
																										119点47.22%

れているという違いがみられる。それは、岩手県内では唐津系と信楽系は出土遺跡・量ともに少ないが、本遺跡ではその両者が出土している。唐津系の16世紀末の製品として最多の出土であり、流通を考える上での問題点を提起したといえよう。

産地ごとに出土した器種をみると、瀬戸・美濃系には碗・皿・折縁深皿の供膳具、下ろし皿の調理具、香炉・花瓶・瓶子の供献具、天目茶碗・壺の喫茶具等多くの器種があるのに対し、他産地のそれはある特定の器種に限定されるという特徴がみられる。もっとも、産地によっては供膳具を生産しない地域もあることから考えると、その反映の結果と受け取れなくもない。例えば、瀬戸・美濃系以外の産地で碗・皿が出土しているのは唐津系と産地は不明であるが土器のみである。その他では、調理具としての播鉢が北陸系須恵質、水甕や各種貯蔵具としての大型甕類は東海系というように、先の考え方と矛盾のない出土状況を示している。以下には、産地に関係なく各器種ごとの構成比率について記することにする。また、その状況は第29表に集計してある。

碗は15.9%に相当する28点の出土であるが、唐津系を1点(3.6%)含む以外はすべて瀬戸・美濃系で占められるが、供膳具としての灰釉碗は9点の32.1%のみで、残る18点の64.3%は喫茶具である鉄釉の天目茶碗である。

盤の3点(1.7%)はいずれも瀬戸・美濃系の灰釉で、四足盤や折縁深皿と呼ぶ器種である。

皿は26.7%に相当する47点の出土であるが、その中の28点59.6%を瀬戸・美濃系が占め、その他は唐津系の5点10.6%と、土器皿の29.8%14点がある。本遺跡で出土した土器皿の14点は、岩手県内の中世城館の出土量としてはもっとも多く、本遺跡の場合は皿の一種として明確な位置付けがあったと推定され、今後の城館調査でも留意する必要があるだろう。

下ろし皿は2.8%に相当する5点の出土であるが、いずれも瀬戸・美濃系の灰釉である。下ろし皿と同様は使われ方をする播鉢は2点の1.1%と非常に少なく、それも北陸系の須恵質に属する製品である。この両者を合わせても3.9%の7点の出土量は、他の器種に比較して少ない。

香炉は1.7%の3点と少なく、いずれも瀬戸・美濃系の灰釉である。本遺跡では中国磁器の中に香炉をまったく含まないことを考え合わせれば、出土量が少ないということになろうか。

花瓶も3点と1.7%の出土で、すべて瀬戸・美濃系であるが、2点は灰釉、1点は鉄釉である。

瓶子はいずれも瀬戸・美濃系の灰釉で、5.7%に相当する10点の出土である。

壺には瀬戸・美濃系の灰釉が4点、鉄釉が25点の16.5%に相当する29点が出土しているものの、細部をみると、灰釉には小型の合子が1点含まれ、鉄釉には肩衝に近い器形と四耳壺型の祖母懐の茶壺があり、実際には供献具としての壺と喫茶具としての壺が混在している。

甕は25%に相当する44点の出土であるが、この中には常滑系が59%の26点を占め、その他は知多系、信楽系、産地不明等である。しかし、信楽系、産地不明は数が少なく、大多数を常滑

第29表 器種別・産地別構成一覽表 (国産製品)

No.	産地 器種	瀬戸・美濃		唐津	常滑	知多	信楽	北陸	産地不明	合計点数	%
		灰釉	鉄釉								
1	碗	9	18	1						28	15.90
2	盤	3								3	1.70
3	皿	28		5					14	47	26.70
4	下ろし皿	5								5	2.84
5	香炉	3								3	1.70
6	壺	4	25							29	16.47
7	花瓶	2	1							3	1.70
8	瓶子	10								10	5.68
9	甕				26	11	3		4	44	25.00
10	播鉢							2		2	1.13
11	火鉢								1	1	0.56
12	植木鉢								1	1	0.56
出土点数		64	44	6	26	11	3	2	20	176	99.94
%		36.36	25.00	3.40	14.77	6.25	1.70	1.13	11.36	99.97	
		61.36									

第30表 機能別・器種別構成一覽表 (国産製品)

No.	器種 機能	碗	盤	皿	下ろし 皿	香炉	壺	花瓶	瓶子	甕	播鉢	火鉢	植木鉢	合計点数	%
2	供献具					3	3	3	10					19	10.79
3	調理具				5						2			7	3.97
4	喫茶具	18					26							44	25.00
5	貯蔵具									44				44	25.00
6	暖房具											1		1	0.57
7	趣味品												1	1	0.57
出土点数		28	3	47	5	3	29	3	10	44	2	1	1	176	99.99
%		15.90	1.70	26.70	2.84	1.70	16.47	1.70	5.68	25.00	1.13	0.57	0.57	99.96	

系と知多系が占め、その当時の生産地での生産量や流通の問題が介在している可能性を示唆する。また、瀬戸・美濃系はまったく含まない。

火鉢・植木鉢の瓦質陶器は各1点の出土で、ともに0.6%に相当する。

次に使われ方所謂機能別にその構成をみると以下ようになり、第30表に集計しておいた。

もっとも出土量の多いのは碗・皿・盤といった供膳具で、全体の34.09%に相当する60点が出土しており、さらにその中の78.33%に相当する47点が皿で占められる。碗が10点の16.6%と比較して対照的である。このことは中国磁器の器種組成と関わりをもつものと推定される。

香炉・壺・花瓶・瓶子といった仏具や供献具は19点と10.79%を占める。器種は豊富であるがいずれも出土点数が少なく、瓶子の10点が最多である。

調理具は下ろし皿5点、播鉢2点の3.97%に相当する7点の出土と非常に少ない。供膳具に比較して少なすぎるきらいがある。

喫茶具としたのは天目茶碗18点、茶壺26点と25%に相当する44点の出土であり、これに中国天目8点を加えると更に数がふえ、出土が非常に多いことがわかる。茶臼の出土量も多いことがこれを裏付けていると考えられるが、喫茶それも抹茶を飲む生活習慣が定着していたことを示すものと注目される。

貯蔵具としての甕は25%に相当する44点の出土で、量的には比較的多い。貯蔵具としての甕は重要な器種ではあるが、木製品の曲物や桶、樽も貯蔵具としての性格をもっており、この両者を合わせて考える必要がある。

暖房具である大鉢は1点の0.57%と非常に少ない。

趣味品と考えられる植木鉢が0.57%の1点出土しているが、素焼き製の瓦質である。

〈舶載陶磁器〉

出土した252点は、3点の朝鮮製品を含む以外はいずれも中国製品である。中国製品249点には青磁が119点の47.22%、白磁が53点の21.03%、染付が67点の26.58%、鉄釉が3.57%に相当する9点、青白磁が1点の0.39%があり、朝鮮製品は灰釉が2点の0.79%、鉄釉が1点の0.39%になる。これらを種類ごとに含まれる器種について以下に記すが、第31表に集計してある。

青磁119点には碗が99点の83.19%、稜花皿が7点の5.88%、皿が1.68%に相当する2点、盤が6点の5.04%、小杯が2点の1.68%、水注が0.84%に相当する1点、壺が2点の1.68%が含まれ、ほとんどが碗で占められるという特徴がある。

白磁は、碗が4点の7.54%、皿が79.24%に相当する42点、小杯が1点の1.88%、香炉が1点の1.88%、壺が5点の9.43%を含み、80%弱が皿で占められるとともに、青磁に比較して器種が少ないという特徴がある。

第31表 種類別・器種別構成一覽表 (外国製品)

No	器種 種類		碗	稜花皿	皿	盤	小 坏	水 注	香 炉	壺	合計点数	計
	1	中 国	青 磁	99	7	2	6	2	1		2	119
2	白 磁		4		42		1		1	5	53	21.03
3	染 付		16		50			1			67	26.58
4	鉄 釉		8							1	9	3.57
5	青 白							1			1	0.39
6	朝	灰 釉	2								2	0.79
7	鮮	鉄 釉								1	1	0.39
出土点数			129	7	94	6	3	3	1	9	252	99.97
%			51.19	2.77	37.30	2.38	1.19	1.19	0.39	3.57	99.98	

第32表 機能別・器種別構成一覽表 (外国製品)

No	器種 機能		碗	皿	盤	小 坏	水 注	香 炉	壺	合計点数	%
	1	供 膳 具		121	101	6	3	3			234
2	供 献 具							1	7	8	3.17
3	調 理 具										
4	喫 茶 具		8							8	3.17
5	貯 藏 具								2	2	0.79
出 土 点 数			129	101	6	3	3	1	9	252	99.98
%			51.19	40.07	2.38	1.19	1.19	0.39	3.57	99.98	

染付には碗が16点の23.88%、皿が50点の74.62%、水注が1点の1.49%があり、約75%が皿で占められ、青磁よりも器種の少ない白磁よりも器種が少ない。

鉄釉は天目茶碗が88.88%に相当する8点が出土し、他に壺が11.11%の1点ある。天目茶碗は喫茶専用の器であること考えると、当地でも喫茶の習慣がすでに定着していたことを示すものであろう。これから考えると、1点出土している壺も茶壺である可能性が大きい。

青白磁は水注が1点の出土である。

以上から分るように、中国製品は碗と皿で全体の88%を占め、これらのほとんどは供膳具として日常生活に使用するための講入であり、使われたことを示すものであろう。他は器種・出土点数とも少なく、特殊な器種や高級品であったことを窺い知ることができる。

朝鮮製品は、舶載製品全体からみれば1.19%に相当する3点と少ない。器種も灰釉碗2点と鉄釉壺1点と少ない。

機能別に分類すると以下のようになるが、その状況は第32表に集計してある。

供膳具は234点と全体の92.85%を占め、器種も碗・皿・盤・小杯・水注と国産に比較して多い。234点の内訳をみると、碗が121点と約半数の51.7%を占め、次いで皿の101点の43.16%が続き、この2種類で95%弱の222点となり、日常生活に密接な関わりをもつ器種であることが知られる。他は盤の6点の2.56%、小杯と水注が各3点の1.28%で、貴重品的な使われ方が推定される。供献具は白磁の香炉1点と同壺7点の8点3.17%と少なく、国産製品でも不自由しなかったのかも知れない。器種も国産製品より少なく、当遺跡では国産製品が主体で中国製品は補完的な役割であった可能性が強い。

喫茶具は天目茶碗の8点3.17%である。中国天目の出土点数としては岩手県でもっとも多い。国産の天目茶碗とも合わせると26点と、岩手県内としては出土量が多い。

貯蔵具としたのは中国・朝鮮製品各1点の2点0.79%であるが、器種としては甕は含まず壺と推定されることから、茶壺として利用された可能性が強い。それが正しいとすれば、貯蔵具としての一面と喫茶具の一側面ももっていることになる（第33表）。

〈全体からみた器種組成〉

出土した428点全体を器種ごとの組成をみると次のようになる。

碗は157点と36.68%を占めるが、この中には26点の天目茶碗が含まれており、いわゆる供膳具としての碗は83.5%に相当する131点である。さらに供膳具としての碗は瀬戸・美濃系の灰釉碗9点の6.87%、唐津系1点の0.76%、中国製品の青磁が99点の75.57%、白磁が4点の3.05%、染付16点の12.21%、朝鮮製品の灰釉碗が2点の1.52%といった構成を示し、国産製品が10点の7.63%にすぎず、中国製品特にも青磁に大きく依存していることが判る。国産製品が少ない背

景には生産地での生産量と流通の問題が介在すると考えられるが、さらに木椀や漆器椀の果たした役割についても無視することはできないであろう。天目茶碗は16.5%に相当する26点であるが、この内8点の31%が中国製品である。天目茶碗の使われ方が喫茶に限定されると推定されることや、茶葉を貯蔵する鉄釉の壺、抹茶を作る茶臼の出土等を考え合わせると、当城館では日常的に喫茶をする習慣が定着していたことを示すものであろう。

皿は34.57%に相当する148点と碗とほぼ同数の出土であるが、この中には国産製品が47点の31.75%、中国製品が101点の68.25%が含まれ、磁と同じように中国製品が全体の2/3強を占める。また、国産は28点の59.57%を瀬戸・美濃系の灰釉皿が占め、他は5点の10.63%は唐津系、14点の29.78%が土器と、岩手県では出土量の少ない土器が国産製品の約1/3を占めることは、当城館の場合は供膳具の器種として確たる位置付けがあった可能性を示すものとして注目される。さらに、中国製品の101点は青磁9点の8.91%、白磁が42点の41.58%、染付は50%の49.5%に分けられ、白磁と染付が91%を占めている。青磁の9点は7点が稜花皿で残る2点が丸皿である。皿は碗と同様日常の供膳具として常に使用される器種であり、このような器種が中国製品によって占められることに留意する必要がある。

第33表 機能別・器種別構成一覧表（全点含む）

No	器種 機能															合計 点数	%	
		碗	皿	盤	小坏	水注	下ろし皿	播鉢	壺	香炉	花瓶	瓶子	甕	火鉢	植木鉢			
1	供膳具	131	148	9	3	3											294	68.69
2	供献具								10	4	3	10					27	6.30
3	調理具						5	2									7	1.63
4	喫茶具	26							26								52	12.14
5	貯蔵具								2				44				46	10.74
6	暖房具													1			1	0.23
7	趣味品														1		1	0.23
出土点数		157	148	9	3	3	5	2	38	4	3	10	44	1	1		428	99.96
%		36.68	34.57	2.10	0.70	0.70	1.16	0.46	8.87	0.92	0.70	2.33	10.28	0.23	0.23		99.93	

盤の9点は瀬戸・美濃系の灰釉四足盤が3点の33.33%、青磁6点の66.66%が含まれ、出土総数が9点と少ないものの碗・皿と同じように中国製品が主体を占める。

小杯は3点の出土であるが、すべてが中国製品で占められ、青磁2点と白磁1点に分けられる。酒杯として使われたであろうことを考えれば、他に木杯などもあったと推定される。

水注も小杯と同様の3点出土しているが、すべて中国製品であり、青磁1点、青白磁1点、染付1点が含まれる。

調理具である下ろし皿と播鉢は前者5点、後者2点と7点の出土であるが、いずれも国産製品である。しかし、産地をみると下ろし皿は瀬戸・美濃系の灰釉陶器、播鉢は北陸系の須恵系陶器とまったく異なり、産地特有の器種が当地にも流通していたことを示すものである。

壺の38点8.87%には国産の29点が76.31%を占め、残る8点の21.05%が中国製品、1点の2.63%が朝鮮製品である。国産製品の29点はすべて瀬戸・美濃系であるが、灰釉4点13.79%、鉄釉25点86.2%に分けられる。また、灰釉はいずれも小型品であり、鉄釉は肩衝や四耳壺であることから、これらは喫茶に関係するものであろうか。特に肩衝と祖母懐の四耳壺は茶壺であり、ともに喫茶に関係する器種である。

香炉は4点の0.92%と出土点数が少ない。この中の3点は瀬戸・美濃系の灰釉であり、残る1点は白磁である。白磁の香炉は稀有な例であろう。

同じ供献具としての花瓶は3点の0.7%と少なく、いずれも瀬戸・美濃系の灰釉である。また、瓶子は2.33%に相当する10点の出土であるが、花瓶と同じように瀬戸・美濃系の灰釉で占められる。

甕は10.28%に相当する44点の出土であるが、いずれも国産製品である。しかし、産地をみると常滑系が59.09%の26点、知多系が25%の11点、信楽系が3点の6.81%、産地不明が9.09%に分けられ、甕の生産として著名な製品が入っており、それが主体を占めている。

火鉢や植木鉢といった瓦質の陶器はともに0.23%に相当する1点の出土と少ない。植木鉢の出土例としては岩手県初例であるが、火鉢の出土としては他遺跡例に比較して少なすぎる。

以上、各器種ごとにその組成についてみたが、それを機能的な面から分類してその構成比率をみると以下のようなになる。

供膳具は国産製品の34.09%、外国製品の92.85%に相当する294点の68.69%を占め、当遺跡から出土した陶磁器の70%弱が日常生活の中で食膳上の食器として使用されていたことになる。しかし、細部をみると、器種は碗・皿・盤・小杯・水注の5種類であるが、碗と皿の2種類で279点と94.89%を占め、その他の器種は少数である。

供献具は6.3%に相当する27点の出土であるが、これには壺・香炉・花瓶・瓶子の4器種が含まれる。壺には国産製品3点と中国製品の白磁四耳壺7点、そして香炉が国産3点、中国白磁

1点に分かれるが、他の器種はすべて国産の製品で、それも瀬戸・美濃系の鉄釉を1点含む以外はいずれも灰釉の製品である。

調理具は1.63%に相当する7点と少数の出土であり、下ろし皿と播鉢の2器種が含まれる。いずれも国産の製品であるが、下ろし皿は瀬戸・美濃系の灰釉、播鉢は北陸系の須恵質と産地は異なる。他遺跡の出土例や当遺跡の他器種の出土数に比較して少ない出土である。

喫茶具は12.14%に相当する52点の出土であるが、これには天目茶碗26点、茶壺26点が含まれる。さらに、天目茶碗の8点は中国製品である。また、貯蔵具とした中国製品と朝鮮製品各1点の鉄釉壺も茶壺である可能性が強い。

貯蔵具は46点の10.74%の出土であるが、器種は甕のみですべて国産製品である。

暖房具は火鉢の1点0.23%と少数である。趣味品とした植木鉢は1点0.23%の出土であるが、他遺跡での出土例もなく評細は不明である。この2種各1点は国産製品である。

(3) 時期区分

事実記載の遺物の項で本遺跡から出土した陶磁器を、国産製品は産地ごと、舶載製品の場合は種類ごとに大別し、それぞれの中で各器種ごとに特徴を記し、さらに時期的な属性についても明らかにした。しかし、本遺跡では時期を直接的に示すような出土状況は確認されていないことから、現在一般に考えられているそれぞれの編年に対比させて考えることとする。

本項では、既述した各種類ごとを時期を参考にして、それらがどういう種類と共伴し組み合わせるかについて記し、本遺跡の時期を決定する一助にする。

まず、全体を概観すると、各種類が矛盾なく連続する出土状況とは言えない。例えば、国産製品の場合は、甕に13世紀代、花瓶に14世紀代の製品を含む以外はすべて15世紀初期～16世紀末の製品で占められる。舶載製品では、青磁が14世紀前期～16世紀、白磁は13世紀後期～16世紀、染付は15世紀～16世紀の製品を含み、必ずしもこれらが一致しない。以下に各時期ごとに属する種類と器種について記すこととする。

<13世紀>

国産は口縁部が受口状を示す知多系の14・18と産地不明の7があり、ともに甕であるが、後者が古い口造りの形である。舶載製品は、白磁の50～53が南宋タイプの四耳壺と推定される。国産製品の前者は中期頃、後者と白磁は後半期に位置づけられるが、供膳具をまったく伴わないという特徴がある。

<14世紀>

国産製品では瀬戸・美濃系の灰釉瓶子54～57、鉄釉の花瓶19の2点だけであるが、前者の瓶

種類	国産製品		舶載製品				
	瀬戸・美濃系灰釉・鉄釉・唐津系・その他		甕	青磁	白磁	染付	天目
13世紀							
14世紀							
15世紀	平碗 天目茶碗 折縁深皿 下ろし皿 香炉 瓶子・壺 						
16世紀							

註 本遺跡では層位的に確認できる出土状況を示す例はないことから、現在一般的に言われている編年に当遺跡出土の陶磁器を該当させ本図を作成した。

第475図 陶磁器の推定編年図

子は紐づくりであることから後期・鉄釉の花瓶は体部の印花文や器形から中期頃の製品と考えられる。舶載製品では、青磁は11の皿、16の水注、18の蓋付壺、19・20の碗の5点がこの時期に属するであろう。時期的には16の水注が後期に属する以外はいずれも前期の製品と考えられる。白磁では、所謂口元げに属する1の碗、2・3の皿と4の小型壺、6～8の碗が位置づけられる。時期的にはいずれも前期～中期の製品と推定される。染付はまったくない。さらに、青磁では生地のリクロ目が明瞭に判別ができ端反りする碗の一部もこの時期に属する可能性がある。この時期の特徴は、国産製品に供膳具を含まないことと、舶載製品は点数が少ないものの供膳具の組成が揃っていることにある。

<15 世紀>

この時期に属する製品は本遺跡から出土した陶磁器の主体をなし、器種もすべて揃っている。国産製品では、瀬戸・美濃系の灰釉が1～6の平碗、7～10の折縁深皿、40～44の下ろし皿、45～47の香炉、50・52小壺、53・58～62の瓶子と多くの器種と点数が出土している。時期的にも、4～10・40～42・45～50・52・53は前期、1・2は中期、3・43・44・58～62は後期と連続している。鉄釉では、1～4・7・9・11～15・17・18の天目茶碗、20の祖母懐の茶壺がある。時期的には前期が7、中期は1・9・12～15・17、後期には2～4・20がそれぞれ属する。舶載製品では、青磁は、12～15の盤・17・21・24・25・27・28・35・44・51・58・63・66・70～73・75・93の碗、1～6の稜花皿、白磁では36～49の直口型の皿と端反り皿の一部と香炉、染付は玉取獅子や唐草文、渦状文を器表に付し、内底に十字花文等をもつ型等が属するであろう。しかし、白磁・染付は時期の特定は困難である。時期的には、青磁の場合は21・70～73、白磁では36～49が前期と推定されるが、他は特定しがたい。大型容器としての甕には常滑系の35がある。おそらく、播鉢も本期に属するであろう。本期の特徴は、国産・舶載とも供膳具、貯蔵具、喫茶具等の器種が良く揃い、組成としてもっとも充実しており、遺跡の所属時期を示唆している可能性が強い。さらに、青磁の碗が端反りする無文碗がほとんどであることを考えれば、この時期に属する個体をもっとも多いものと推定される。

<16 世紀>

国産製品では瀬戸・美濃系の11～39の灰釉皿5・6・10・16の鉄釉天目茶碗、唐津系の1～4・6の皿と5の碗、大型容器である常滑系の20の大甕等があります。時期的には、瀬戸・美濃系灰釉皿は、18以外はいずれも輪トチンで重ね焼された低い輪高台を付す端反りする器形を示す大窯I期の製品で、18は直口々縁をもつ大窯II期の製品であることから、前者は15世紀末から16世紀前期、後者は16世紀中期頃に位置づけられる。天目茶碗も灰釉皿同様大窯I期の5・

6、大窯II期の10・16が含まれ、灰釉皿の時期に共伴するものであろう。唐津系の陶器は1580年頃の生産開始とされていることから、16世紀末に属するであろう。常滑系の大甕は16世紀前期の製品である。舶載製品は、青磁では37～42の線描蓮弁文の碗、8・9の丸皿、白磁の場合は端反りの皿、染付では6・13の碗、24～30の碁笥底の皿、32～37の直口口縁の丸皿等が属するであろう。時期的には、線描蓮弁文の青磁碗は15世紀中・後期から16世紀までみられるが、本遺跡出土のそれは15世紀～16世紀前期頃に位置づけられ、その内でも16世紀に主体があると考えられる。白磁の端反り皿は15世紀から16世紀にかけて使用されたもっとも一般的に出土する製品である。染付では15世紀からそのまま引き継がれるものと、本期の中・後期に属する種類があり、上記の個体はその中・後期に属すると推定される。特に13は中国明代の万暦頃の製品とされていることから、16世紀末期まで使用されていたものであろう。本期の特徴は、国産製品が瀬戸・美濃系の灰釉皿と鉄釉天目茶碗が大窯I期を主体とし若干の同II期を含む前半期に属する製品と、末期に属する唐津系陶器の2時期に大きく分けられることである。舶載製品は国産製品と組み合わせて使用されたであろうことを考えれば、実際は本期前半と末期に分けられる可能性がある。このことは、遺跡が本期中頃～後期にかけて中断する可能性を示すものであり、重要な問題点を示唆している。

3) 笹間館の時期

遺構のまとめで既述のとおり、本笹間館跡をI～III期に大別しII期はさらにA・Bの2小期に細分したが、これらの各時期が実年代で何世紀に属する遺構であるかを直接示す資料はまったく確認されていない。しかし、出土した陶磁器と中国貨幣の時期や関連する文献の検討から、本笹間館跡が何世紀に構築され廃城となったかについて推定し、締め括りとしていたい。

出土した陶磁器には既述のように13世紀～16世紀末に属する個体が混在している。それらを詳細に検討すると、国産製品のうちもっとも古い13世紀の製品は大型容器である甕に限定され、さらに14世紀に属するそれは瓶子・花瓶という供献具であり、供膳具・供献具・喫茶具・調理具・貯蔵具・暖房具・灯火具（土器）の各用途をもつ器具が揃っているのは、15・16世紀の製品であるという特徴があり、さらにも15・16世紀の製品が国産製品の90%強を占めており、この時期が笹間館の活動期を示している可能性が強い。なお極言すれば、もっとも出土点数の多い瀬戸・美濃系製品のうち、供膳具・喫茶具・調理具は上限が15世紀前期、下限が16世紀前期の製品に限定され、他産地の供膳具である唐津系の陶器が1580年頃の生産開始であれば、瀬戸・美濃系と唐津系の間には約50年の開きがあり、これは当城館は16世紀前期に一度廃城となり、その後、1580年以降に再使用されたことを示唆している可能性が強い。舶載製品も13世紀を上

限とするが、南宋タイプの四耳壺であり、14世紀の製品は青磁・白磁の供膳具が揃うものの点数は僅かである。器種・点数とも多いのは15・16世紀の製品で、この状況は国産製品のそれと良く一致する。16世紀末の青磁・白磁を特定することは困難であるが、染付の場合は16世紀後半に属する製品を多く含み、中国明代の万暦年代の製品と言われる見込みに菊花文を付す碗も含むことから考えれば、国産の唐津系と共伴する舶載製品も存在すると理解される。

中国貨幣について検討すると、本笹間館跡からは唐代～明代までの多くの銭名をもつ中国貨幣があるものの、もっとも鑄造年代の新しいものは中国明代の永楽通寶（1408年）であり、この状況は中世城館跡から出土する中国貨幣の一般的な傾向と一致するものであり、これだけで結論を得ることは危険である。しかし、本遺跡でもっとも新しい既述の永楽通寶は出土点数も多く時期的な背景を示唆している可能性がある。それは、平安時代以降江戸時代まで貨幣を鑄造しなかった時の為政者達は、中国貨幣を輸入して国内で通用させ、特に室町時代後半から戦国期には永楽通寶が「楽銭」と呼ばれ特に重宝されていたことが知られており、当遺跡での出土状況はこの社会的な風潮に沿うものと考えれば、本笹間館跡は15世紀初期を構築年代の上限として大過ないものと考えられる。また、同じ明代の洪武通寶（1368年）も出土点数が多く、さらにこの両種は磨耗も少なく、これらは退蔵された備蓄銭であることも既述のとおりである。

文献については、本報告書の冒頭で記したように、15～16世紀後期までの記録に笹間館や笹間村という記事はまったく不明であり、16世紀末の記録に初めて和賀主馬、和賀忠親、和賀月齊が笹間村を知行して笹間館に住したと見える。また、系図の中に笹間玄馬資弘に嫁した和賀忠親の妹が記載されており、笹間氏を名乗った人物が存在したことも確実であろう。以上、文献で知られた事項を陶磁器の所属時期に対比させると、笹間村を知行して笹間館に住した和賀氏が当地を知行したのはいずれも天正年代（1573～1592年）と記載されていることから、唐津系陶器に結び付くのはこの和賀氏と考えることができる。それでは先の笹間氏との関係はどうかというと、おそらく笹間村が和賀氏宗家の領地であったために、その領地を管理する代官として笹間館に住した人間と考えられ、時期的には和賀氏より前の段階と推定される。

以上のことを要約すると、当笹間館跡は出土した陶磁器の所属時期やその器種組成から15世紀初期から16世紀末期まで存続した中世城館と考えて大過ないと推定されるが、16世紀の中・後期に無住の時期が想定されることも既述のとおりである。それではⅠ～Ⅲ期に区分した各期の所属時期について考えてみることにする。

当城館が火災によって全域が焼亡していることは再三既述してきたとおりである。数多く検出された遺構の中に火災に伴う炭化物の粉や灰を層状に堆積し、人為的に埋め戻した例と、まったく堆積しない場合があり、この状況は西館・東館とも同じである。ということは、調査時の遺跡全体の形がもう既に完成してから火災を受けたことを示すものであり、火災の時期を推定

しそれによって各期の実年代について考えることにする。火災以前や火災時に使用されていた陶磁器が西館の落ち込み遺構の整地層内から出土している。ここの整地層は、上層が埋め戻しによる黄褐色土と黒褐色土そして焼土粒・炭化物が混合した上・中層の草木炭と炭化物粒層、下層の暗褐色土～黒褐色土の3層が堆積し、火災後にこの付近の低地がすべて埋め戻し整地されたことを示している。この埋土内から青磁10点、白磁3点、天目茶碗1点の舶載陶磁器と、瀬戸・美濃系灰釉陶器3点、同鉄釉5点、土器2点の国産陶器が出土している。これらの所属時期についてはB II j 9落ち込み遺構の項で既述したので改めて触れないが、要約すると、埋土内からの出土品は概ね15世紀前半に属するもので、舶載・国産とも同様である。さらに、整地層の上面から出土した陶磁器は、瀬戸・美濃系の15世紀後半に属する祖母懐の茶壺をはじめ、15世紀後半代～大窯 I・II期の製品を多く含み、整地層内から出土した陶磁器と整地層上面から出土したその所属時期を比較すると、整地層内からの出土品はほぼ15世紀前半代の製品に限定され、古いことを示している。このことは、この整地層は15世紀前半代の土木工事に伴うことは確実で、さらに火災による焼亡もまた15世紀前半代であることをも示すものであろう。おそらく、この火災が永享7年(1435年)5月の和賀の大乱に伴う火災と断定して大過ないものと考えられる。以上から、当笹間館のI期は、国産陶器と舶載陶磁器の供膳具が器種組成として揃う15世紀初期に、II期は国産の瀬戸・美濃系灰釉・鉄釉陶器のもっとも新しい製品が大窯II期に属することから、永享7年以後16世紀前半代までの約100年間位に相当すると考えるが、A・B小期の実年代は明示できる資料がないため不明である。III期は国産の唐津系陶器を使用した1580年頃以降廃城までの期間に相当し、和賀主馬、同忠親や同月斉が住したとする記録に一致する時期である。おそらく、それまで無住であった城を改修して住したものと推定される。

要約すると、I・II期はおそらく笹間氏を名乗った人物が住した時期で、III期は和賀氏の時期であることを示唆しており、笹間氏時代を前期、和賀氏時代を後期に大別することも可能である。いずれにしても、当笹間館はおそらくは応仁の乱(1399)以降に築城後、豊臣秀吉の奥州仕置が行われた天正19年(1591)に廃城になるまでの約200年弱の間、笹間村を政治的・経済的支配を実行する拠点として、さらにまた戦略的にもその要地として大きな役割を果たしたことは確実であろう。

2. 古 代

本遺跡で発見された古代の遺構は土坑9基、溝跡4条であり、住居跡はまったく検出されていない。遺物は土師器・須恵器を合わせて破片数で1810点、個体数で1017個体が出土している。これらはいずれも平安時代に属する。以下に遺構と遺物に分けて要約し、まとめとする。

1) 遺 構

住居跡は未検出であるが、土坑と溝跡の検出、そして多くの遺物が出土していることから、本来は平安時代の集落が存在したことは確実であろう。おそらく、館跡の構築やその後の耕作などに伴う攪乱によって消滅したものであろう。

(1) 土 坑

古代の土坑としたのは多くの復元可能な土師器や須恵器を複数個体出土した土坑を充てたが、9基はCIV区1基、CV区1基、CVII区2基、DIV区2基、DVI区1基、EIII区1基、EIV区1基がそれぞれ位置し、調査範囲の中では東寄りに位置する例が多い。規模は径が1m以内がDIV f 5土坑・EIII b 6土坑の2基、1m台がEIV b 1土坑—2・CV g 9土坑—1の2基、2m台がCIV c 4土坑・DIV f 6土坑・CVII i 2土坑・CVII i 10土坑の4基、9m台がDVI b 9土坑が1基に分けられ、径2m台がもっとも多い。深さは10cm台がCIV c 4土坑の1基、20cm台がDIV f 5土坑・EIII b 6土坑・EIV b 1土坑—2の3基、30cm台がDIV f 6土坑・CV g 9土坑—1・CVII i 2土坑・DVI b 9土坑の4基、40cm台がCVII i 10土坑が1基に分けられる。平面形は円形がCV g 9土坑—1・CVII i 2土坑の2基、楕円形がCIV c 4土坑・DIV f 6土坑・EIII b 6土坑・CVII i 10土坑の4基、方形または方形気味がDIV f 5土坑・EIV b 1土坑—2・DVI b 9土坑の3基に分けられる。以上の集約は規模が径2m台で深さ30cm台、平面形が楕円形を示す例が多いことを示しているが、全体としては平面規模に比較して浅く、平面形も不規則である。これらの土坑が既述のとおり東寄りに位置する例が多いことは、集落も東寄りに立地したことを示唆しているものであろう。

(2) 溝 跡

検出された4条はいずれも東館に位置し、東西方向1条、南北方向3条に分けられる。全掘できなかった溝もあるため断定はできないが、南北方向の3条は10m強の間隔を置いて並行しており、南端は旧地形の段丘崖に達し低地に落ちている。もっとも東端に位置するCVII a 1溝跡は北端がCVI a 4溝跡と重複し、この溝を切ることが確認されている。中央のCVI c 8溝跡は北端が先のCVI a 4溝跡と合流し、もっとも西側に位置するCVI b 4溝跡の北端はCVI a 4溝跡の西端部と接続しそうであるが、確認できなかった。このような状況から判断すると、これらの溝は少なくとも2時期に区分されるであろうことが推定される。

性格を示す状況は観察されていないが、これらの溝がいずれも一端が段丘崖に達し低地に落ちていることは、区画溝と言うよりは排水溝と考えるのが妥当であろう。しかし、かつては集

落遺跡であったと推定されることを考えると、何んらかの意図・目的をもった区画溝的な性格がまったくなかったと断定することはできない。

2) 遺物

出土した遺物は土師器・須恵器の土器類の他に瑪璃で作った勾玉が1点出土しているが、ここでは土器類について若干記しまとめにする。

(1) 土師器

既述のとおり破片数で1,082点の出土で、その中に坏285個体、甕201個体、鉢1個体、埴3個体が含まれている。全体でみると東館からの出土が多い。

坏はいずれもロクロ使用成形であるが、内面がミガキ後黒色処理される個体と無処理の個体が含まれ、底部はすべて回転糸切り無調整である。高台の付く個体もある。

甕も1個体以外はロクロ使用成形され、器表が口縁部横撫で、体部縦方向ヘラ削り、内面は横方向ヘラ撫で等で調整される。また、器表に並行叩き具痕を付す例もある。その他壺・埴・鉢ともほぼ同じ状況を示し大きな差はみられない。

このような成形と調整の特徴をもつ一群は一般に9世紀～10世紀に属すると理解されている。

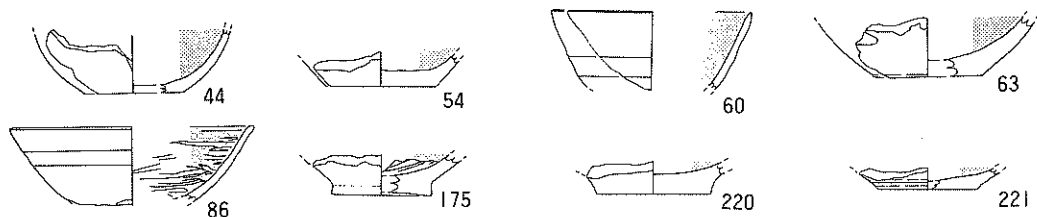
(2) 須恵器

295個体の中に43個体の坏を含み、その他は甕や壺・瓶といった器種である。

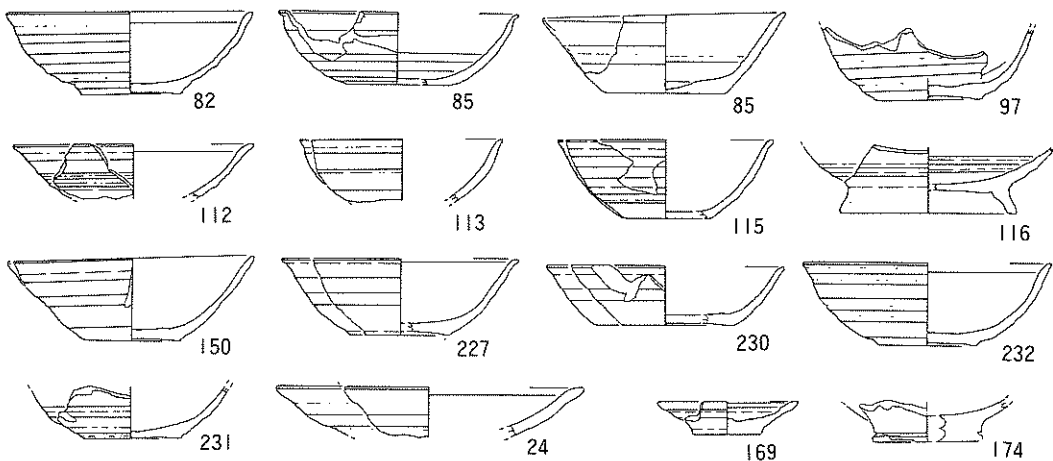
坏はすべてロクロ使用成形で、底部の切り離しが回転篋切り12点と回転糸切り31点を含む。法量をみると、回転糸切りは口縁部径14cm、底径7.8cm²～4.7cm、器高4.7cmであり、回転篋切りは口縁部径14.35cm、底径8cm～6cm、器高3.7cmとなり、この両者を比較すると回転篋切りの方が口縁部径・底径とも大であるが器高が低いという特徴をもつ。

他の器種は完形や復元実測の可能な個体が出土していないため定かなことは不明である。しかし、胎土分析の結果によると、①地元の瀬谷子窯産、②宮城県付近の製品、③静岡県の湖西以西の西日本産の3地域で生産された製品が当遺跡にもたらされているという。

時期的には、底部が回転篋切りの坏は一般に9世紀初頭に位置づけられており、回転糸切りをもつ坏は前者より後出することは確実であり、9世紀前期～10世紀に属するであろう。



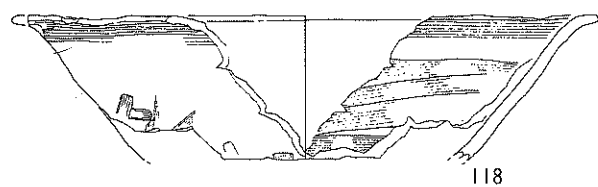
内面黒色処理の土師器坏



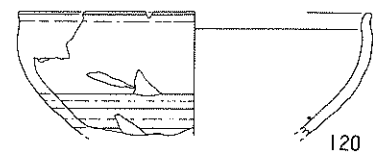
非内面黒色処理の土師器坏



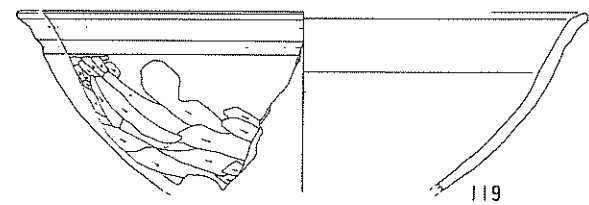
墨書のある土師器坏



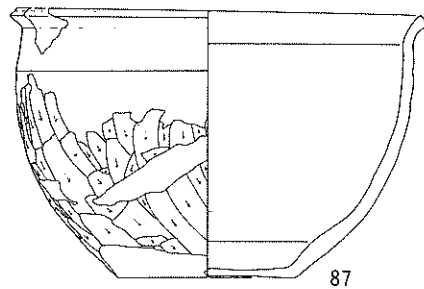
118



120

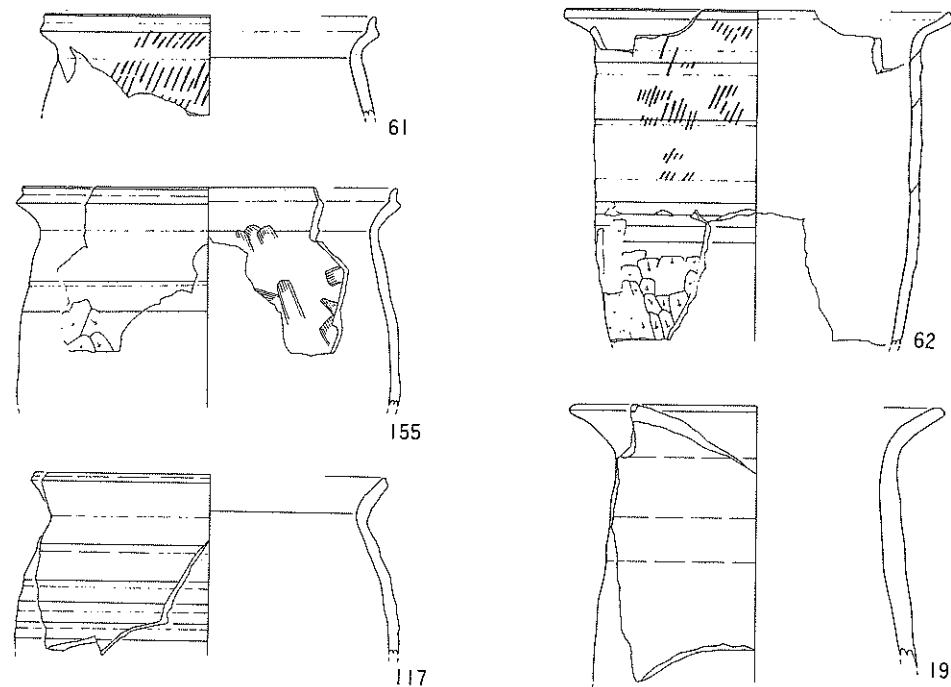


119

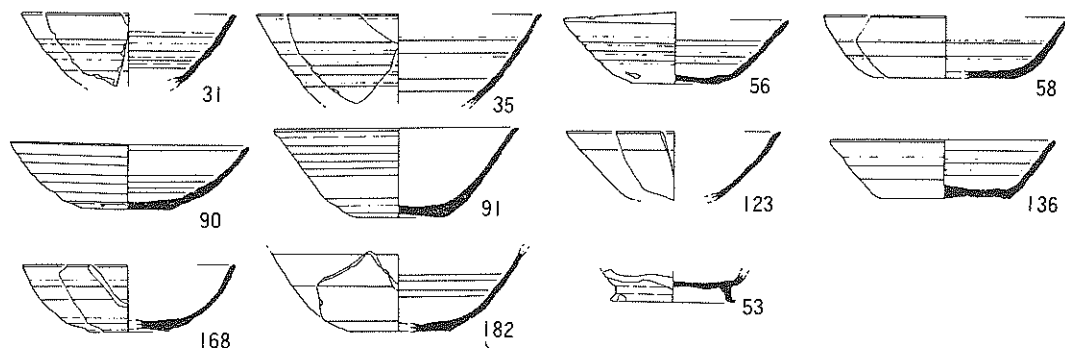


87

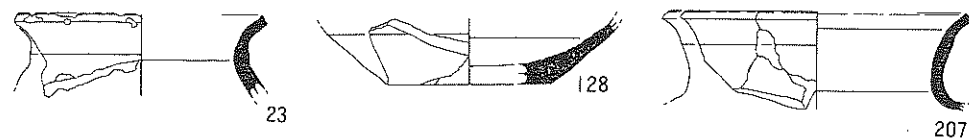
土師器鉢



土師器甕のいろいろ



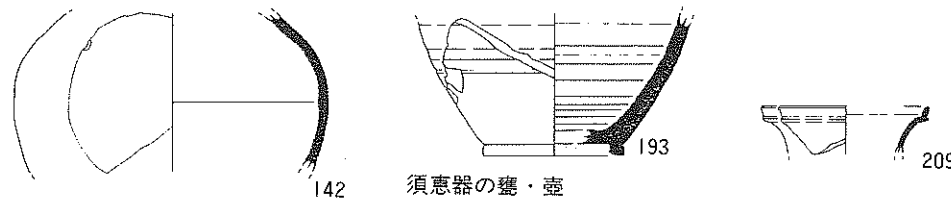
須恵器の坏



23

128

207



142

須恵器の甕・壺

193

209

118~120は土師器の埴

第476図 土師器・須恵器の各種

0 10cm

第34表 土師器・須恵器出土点数集計表

	土 師 器					須 恵 器					合 計	
	坏	甕	鉢	不明	合 計	坏	甕	瓶	不明	合 計		
西 館	B II											
	B III											
	B IV						2(2)	2(2)			4(4)	4(4)
	C II	4(4)	35(6)			39(10)	3(3)	8(8)	1(1)		12(12)	51(22)
	C III	3(3)	6(4)			9(7)	2(1)	7(7)			9(8)	18(15)
	C IV	11(10)	17(17)			28(27)	21(7)	9(8)	2(2)		32(17)	60(44)
	D II							1(1)	1(1)		2(2)	2(2)
	D III	11(10)	8(5)			19(15)	2(2)	5(5)	2(1)		9(8)	28(23)
	D IV	61(33)	69(32)			130(65)	2(2)	10(7)			12(9)	142(74)
	E II											
	E III	6(6)	29(10)			35(16)		2(2)	1(1)		3(3)	38(39)
	E IV	12(8)	3(3)			15(11)		2(2)			2(2)	17(13)
	西館	56(34)	44(37)			100(71)	11(9)	52(49)	7(4)		70(62)	170(133)
	計	164(108)	211(114)			375(222)	43(26)	98(91)	14(10)		155(127)	531(349)
東 館	B V											
	B IV		1(1)			1(1)						1(1)
	B VII											
	C V	84(65)	244(86)			328(151)	40(34)	9(8)	1(1)		50(43)	378(194)
	C VI	22(17)	35(21)		2(1)	59(39)	14(9)	7(7)	1(1)		22(17)	81(56)
	C VII	245(75)	30(27)	55(4)	6(2)	336(108)	5(4)	8(8)			13(12)	349(120)
	C VIII	3(3)				3(3)		1(1)			1(1)	4(4)
	D V	27(15)	28(19)			55(34)	4(3)	2(2)			6(5)	61(39)
	D VI	62(37)	9(8)			71(45)	2(2)	15(10)	1(1)		18(13)	89(58)
	D VII	5(4)				5(4)	1(1)		1(1)		2(2)	7(6)
	D VIII											
	内堀								1(1)		1(1)	1(1)
	東館	162(69)	62(39)			224(108)	24(22)	51(50)	2(2)		77(74)	301(182)
	計	610(285)	409(201)	55(4)	8(3)	1082	90(75)	93(86)	7(7)		190(168)	1272(661)
					493						661	
不明	8(6)	4(4)			12(10)						12(10)	
破片	782	624	55	8	1469	133	191	21		345	1810	
個体	399	316	4	3	722	101	177	17		295	1017	
%	55.3	43.8	0.6	0.42	71.0	34.2	60.0	5.8		29.0	100	

3. 縄文時代

1) 遺 構

縄文時代の遺構は土坑15基、陥し穴状遺構51基である。その内陥し穴状遺構は円形型26基、溝形型45基、長方形型3基の3型態に分けられる。これらの遺構から出土した遺物は土器1点のみであり、時期を特定することは困難である。埋土が中世や古代の土坑と比較して褐色味が強く、各層の均一性が高いことなどで比較的容易に区別される。他遺跡の例などから縄文時代の遺構との結論に達した。

古代以降現在に至るまでの築城や田畑の耕作等による攪乱を受け、上部は削平され浅く残っている。当時の地形としては、内堀はなく一続きの微高地となっていたはずで、ある程度の起伏もあったと推定される。

(1) 土 坑

土坑15基のうち、東館には僅か2基のみで残る13基は西館に占地している。形状はそれぞれによって違いがみられる。西館に位置する大部分は、後述する円形型陥し穴状遺構の下半部に近似する形状と規模をもつ。それは、C III g 2 土坑・C III h 2 土坑・D III h 6 土坑・D III h 7 土坑・D III i 7 土坑-1・D III i 8 土坑-2・D III j 7 土坑-2・D III j 8 土坑-3・E III a 7 土坑-2・E III a 7 土坑-3の10基であり、これらは平面形は円形で浅いピーカー形の断面形をもつ。規模も開口部径80cm、深さ40cm程と平均している。底面に小穴がないという違いはあるが、2基あるいはそれ以上が連続する在り方が窺えること、規模や形状が近似すること、占地もほぼ共通する等から、円形型陥し穴状遺構と同様の性格をもった土坑の可能性が高い。また、D III h 4 土坑は上記の10基に比し、規模がやや大きく平面も楕円形である。

西館のD IV d 9 土坑とE IV a 4 土坑、東館のC VII d 9 土坑とC VII j 2 土坑の4基はともに開口部より底部が広がる断面フラスコ形に近い形状を示す。C VII d 9 土坑のみは開口部130cmと大きく、他の3基は75cm～90cmと小さい。深さは25cm～55cmと浅いが、本来はもっと深い可能性が高い。これらは近接せず単独して位置する様相を示し、一般にフラスコ形の貯蔵穴といわれる土坑に類する。

(2) 陥し穴状遺構 (袋詰図版10)

本遺構には円形型、溝形型、長方形型の三型態に分類される。

〈円形型陥し穴状遺構〉

検出された26基はいずれも西館に立地する。これらを前述の土坑と区別した理由は、底面に小穴があること、開口部径に比較して深いこと、何基かが組をなして連続するらしいこと、の3点をあげることができ、そのどれかに該当する土坑を抽出したものである。底面に小穴のある土坑はすべて本遺構に分類しており、従来は貯蔵穴状の土坑とされた類も含んでいる可能性がある。規模の上からA型とB型の2種類に細分される。

A型は開口部径が1m未満のもので、CIII a 2・CIII e 5・CIII c 6・CIII j 10・CIV b 9・CIV b 10・CIV c 8・CIV d 7・DII j 10・DIII b 7・DIII b 8・DIII c 9・DIII d 3・DIII f 3・DIII g 2・DIII h 8・DIII i 1・DIV a 1・DIV b 2・EII a 10-1の20基が該当する。平面形は円形か楕円形であるが、CIII区の北寄りに並んでいるCIII c 5・CIII c 6の2基は隅丸方形、長方形である。断面形は深いピーカー形を基本とするが、その占地する地点ごとに共通する特徴がある。例えば、西館中央付近にあるCIII j 10・DIII c 9・DIV b 2・DIV a 1の4基は比較的浅く、断面形がフラスコ形気味を示す。また、西館の北東に並ぶCIV b 9・CIV b 10・CIV c 8の3基と西館の南西に並ぶDII j 10・DIII d 3・DIII f 3・DIII g 2・DIII h 8・DIII i 1・EII a 10-1の7基は開口部径が小さく深い円筒形に近い断面形を示している。また、西館中央にあるDIII b 7・DIII b 8の2基は開口部径が大きく、壁が外傾する。これは、形態ごとに、または地点ごとに同時性を示している可能性を示している。この型の規模は、平均値で開口部径75cm、底部径60cm、深さ65cmである。並んで検出された遺構に近似した規模を示し、規模においても一定のまとまりがみられる。大部分には底面に径10cm、深さ5cm~10cm程度の小穴があり、明確な杭穴状を示す場合と浅い凹み状がみられる。ほとんどの場合は中央に1カ所であるが、CIII a 2とDIV a 1の2基には複数みられる。小穴のない4基も本来はあった可能性がある。本型は単独で位置する場合と、複数が列をなして並ぶ例がある。前者にはCIII a 2・DIII h 8の2基があり、後者は緩い弧状か直線的に3基~5基が南西-北東の方向に列をなして並ぶ。具体的には、EII a 10-1とDII j 10とDIII i 1の3基が南西端から3m~4mの間隔で弧状に並ぶ。DIII g 2・DIII f 3・DIII d 3の3基は5mの間隔で弧状に並ぶ。DIII b 7・DIII b 8の2基は4.5m離れ、CIII j 10まで続くとすれば直線的に3基並ぶことになる。北東にまとまっているCIV d 7・CIV c 8・CIV b 9・CIV b 10の4基はほぼ直線的に並び、その間隔は5m・3.5m・4mである。以上の4組を連続すると考えると、西館を南西から北東へ斜めに横断する方向が想定される。陥し穴の機能を考えれば、この方向はけもの道であった可能性がある。方向は異なるが2基のみ近接する例に、CIII c 5とCIII c 6、DIV a 1とDIV b 2があり、その距離は2mと1.5mである。

B型は開口部径が1mを超えるもので、CIII a 1・CIII b 4・CIII b 5・CIV c 1・CIV c

2・CIV c 5 の 6 基が該当する。複数が列をなして並ぶ状況ではないが、C III b 4 と C III b 5、CIV c 1 と CIV c 2 は 2 基が近接している。また、間隔の違いを考えなければ、C III 区の 3 基と CIV 区の 3 基はそれぞれ直線上に並ぶ配列状況を示す。

このように、円形型陥し穴状遺構は開口部径の大小によって A 型と B 型に分類されるが、他遺跡で検出例の多いのは B 型である。A 型は岩手県北部に多く見られる円形型陥し穴状遺構と形態が似ているものの、開口部・深さとも規模が小さい。しかし、連続して並ぶこと、底面に小穴があるなど陥し穴としての要件を具備している。貯蔵穴とか太い柱穴とも考えられている場合があり、類例は少ないが小規模な陥し穴として今後注目されていく遺構である。なお、本遺跡の検出面はかなり厚く削平された面であり、いずれの遺構も本来は開口部がもっと大きくそして深かった可能性があり、その下半部のみが残存していた可能性も推定される。

〈溝形型陥し穴状遺構〉

細く深い溝形の平面形を示す陥し穴状遺構は 45 基検出されているが、西館には 8 基のみで残る 37 基は東館に立地し、西館のみに立地する円形型とは対照的である。本型の遺構はその多くが中世の柱穴群と重複し攪乱を受けて形状が不整になり、さらに削平によって深さも浅くなっていると推定される。基本的には底部の幅が 10cm～20cm と極めて狭い型の溝形であるが、DV g 10・CV b 8 の 2 基は若干幅広である。長軸方向の断面でみると、壁が垂直に近い立ち上がりのもとの、やや内湾して立ち上がり内傾した壁を示すもの、緩やかに外傾して立ち上がるものなどがある。比較的深い東館の BV g 9・CV b 8・CV e 7 の 3 基では長軸両端の壁は内傾し括れているが、C III i 3・CIV c 4・CIV g 6 の 3 基はほぼ垂直であるが、全体的には後者の方が多い。規模をみると、底部の長軸が 250cm～300cm の範囲がもっとも多く、次いで 300cm～350cm が多く、特に西館に位置する遺構はすべて 300cm 以上の長さをもつ。最短は CV i 8 や DV g 6、最長は DV b 8・DV f 10-1・DVI e 1 等である。深さは、このような溝形型は一般に 1m 以上の深さをもつが、本遺跡の場合は 30cm～50cm が多く、70cm 以上の深さをもつのは 7 基だけであり、全体の平均は 37cm と非常に浅い。この現象は、既述のとおり削平に起因すると考えられる。西館の当遺構は単独で散在し、僅かに D II d 9 と D II e 9 が 2.5m の間隔で近接する。それに対し、東館の場合は数基～8 基が連続して並ぶ人為的な配列状況が観察される例と、単独で立地する例と両者がみられる。例えば、DV h 5・DV h 7-1・DV h 7-2・DV g 8・DV g 9 の 5 基と、それに続く DV f 10-1・DV f 10-2・DVI f 1・DVI e 1 の 4 基、さらに DVI e 3・DVI c 4・DVI c 5・DVI b 6・DVI a 6・CVI i 7・CVI h 7 の 7 基等が人為的に連続させるように配列されたと考えられる例である。連続する方向をみると、南西部から北東部に向って円弧を描くように配列され、この状況は西館の円形型が連続する方

向とほぼ一致する。矢張りけもの道に仕掛けられたわなであれば、この方向にけもの道が存在したことを示すものであろう。その他、2基が近接しているのはDVIc 6とDVI d 5、3基並ぶ例はBV j 9・CV b 8・CV c 7である。このように長軸方向を同じにして並ぶ陥し穴状遺構は、規模においてもそれぞれ近似しており、同時性を示すものとして注目される。

〈長方形型陥し穴状遺構〉

西館の南西部に検出された3基の当遺構は、長軸方向を東西にして等間隔に並ぶ。平面形はともに隈丸長方形で、規模は長軸が135cm～155cm、短軸が50cm～60cmとその比率が約3：1を示し、深さも30cm～35cmと良く近似する。深さが浅いのは削平を受けていることに起因するであろう。底面には径・深さとも20cm～25cmの柱穴状小穴を中軸線上に2カ所もつが、E II a 10-2はやや東に寄る。また、底面の小穴は逆茂木等の施設を設置した際の痕跡と考えられる。3基の並ぶ間隔は約3mで円形型の列と交錯している。この型の検出例は、岩手県内では少ない。岩手県北部の安比川流域で平面形が長方形を示す例が多数検出されているが、柱穴状小穴の位置と数、規模が異なり、必ずしも一致した様相ではない。

2) 遺物

出土した遺物は土器98点、石器31点である。面積や遺構数の割に少ないが、本遺跡の場合は住居跡の検出がなく、集落としての要素を欠くことから考えれば、生活遺物としての土器や石器が少ないことは、必ずしも矛盾してはいない。

(1) 土器

出土した98点には早期28点、前期54点、後・晩期とその他16点と前期に属するものが多い。出土地点をみると、ほぼ全域に分布して出土するが、東館からの出土が多い。また、時期によって若干異なった様相を示し、早期や後・晩期は東館側に集中し、前期は東・西両館に分布する。いずれにしても、出土量が少なく多くを記述することは控えるが、以下には早期を第I群土器、前期を第II群土器、後・晩期とその他を第III群土器に大別し、各群でさらに細分して記述する。

〈第I群土器—早期〉

28点には、爪形刺突文・縄文・無文等の文様を付す土器が混在しており、その文様によって以下の3類に細分される。

1類—沈線や爪形刺突文が施文された土器で1点出土している。縦形の爪形刺突文が横に列

をなして並び、器面は内外とも良く研磨される。胎土に砂粒が混じるも焼成は非常に良好である。施文技法や文様は白浜式や小舟渡平式等に類似するが、小破片のため明確ではない。

2類—表裏両面に縄文を施文した土器が4点出土している。体部破片のみであるため詳細は不明であるが、地文に単節斜縄文、0段多条による斜縄文、条痕文等があり多様である。胎土に砂粒を混じり、焼成は良好であるが、一部に繊維を含むものが含まれる。以上の特徴は早期終末の赤御堂式や早稲田4類に近似するが、繊維を含む例がある点は他遺跡例と異なる。

3類—23点の無文土器であるが、胎土に砂粒を多く含むが繊維はほとんど含まず、焼成が良く堅緻であることから早期としたが、詳細は不明である。2点の口縁部破片をみると、直上形で口唇部を平らに撫で調整するか、底部形態は不明である。

〈第II群土器—前期〉

胎土に繊維を多く含み、器厚が比較的厚い土器で、各種の縄文を施文している。地文の種類によって6類に細分される。

1類—無節縄文を付す土器である。2類—単節斜縄文を施文する土器。3類—複節の斜縄文をもつ土器である。以上、1～3類は器表の縄文に違いはあるが、胎土に繊維が多量に混じり、さらに砂粒の混入や焼成が近似していることから、ほぼ同系統に属する土器であろう。器形は定かでないが、2類の1点は緩く外反する器形の深鉢と推定され、また、別の1点は丸底を想定させる体部下位が湾曲した状況を示す。不明な点が多く断定はできないが、一部は早期末の早稲田5類、そして前期初頭の上川名II式に近い土器群と推定される。

4類—0段多条の原体を使用した羽状縄文を地文とする土器である。口唇部は平らに撫でられ、器面は他の類に比較して平滑であるが、底部形態は不明である。前期初頭の大木1式や長七谷地第III群、早稲田6類等に近似した土器である。

5類・6類—口縁上端がふくらんで厚くなる深鉢で、底部形態は平底である。器厚は薄手のものから厚手まであり、器にやや凹凸がある。網目状撚糸文や不整な綾絡文、葺瓦状撚糸文の縄文を地文とすることから、前期初頭から大木2式に近い土器である。

〈第III群土器—後・晩期・その他〉

1類—口縁部文様が全く不明で、後期・晩期いずれに属するかは定かでない。器厚が薄く、細い原体を使用した細かい縄文・灰黄褐色の胎土など共通している。

2類—2点とも時期の特定はできない。器面が平らなことや薄手の器厚などから後期以降の土器と推定される。

(2) 石 器

石匙 4 点 (13%)、不定形石器 (切削器・搔器) 13 点 (42%)、使用痕のある剥片 9 点 (27%)、磨製石斧 1 点 (3%)、打製石斧 3 点 (10%)、敲き石 1 点 (3%) と、不定形石器の占める割合が大きい。また、石鏃や尖頭器・石筥・磨石等といった縄文時代の石器として普遍にみられる器種が出土せず、出土点数が少ないこともさることながら構成器種が少ないという特徴がみられる。このことは、生活遺物を通常共伴しない狩猟施設だけが検出されていることに起因するものであろうか。

石匙はすべて縦形であり、その他の剥片石器は剥片の一部だけを刃部としたもので、定形的な石器にこだわらない傾向がある。本遺跡から出土した縄文土器は早期～前期初頭を主体としており、この時期に伴うことは間違いないことであることから、この時期の石器組成の一端を示している可能性が強い。分布状況を見ると、東館と西館にほぼ平均的に出土するが、やや多いのは東館の C IV 区と西館の D III 区であるが、遺構の分布状況と符合する傾向を示す。

〈参考文献〉

- | | | |
|--------------|-----------|--|
| 1. 岩手県教育委員会 | 1980 | 「柳田館跡」『岩手県文化財調査報告書第53集』 |
| 2. 岩手県教育委員会 | 1981 | 「大瀬川 C 遺跡」『岩手県文化財調査報告書第57集』 |
| 3. 北上市教育委員会 | 1976 | 『鹿島館遺跡発掘調査報告 I』 |
| 4. 大東町教育委員会 | 1984 | 『伊勢館跡発掘調査報告書』 |
| 5. 秋田県教育委員会 | 1980 | 『鶴沼城跡発掘調査報告書』 |
| 6. 青森県教育委員会 | 1986 | 『境関館遺跡』 |
| 7. 浪岡町教育委員会 | 1979～1986 | 『浪岡城跡発掘調査報告書 I～VIII』 |
| 8. 八戸市教育委員会 | 1979～1986 | 『史跡根城跡発掘調査報告書 I～VIII』 |
| 9. 上の国町教育委員会 | 1980～1986 | 『史跡上之国勝山館 I～VII』 |
| 10. 福井県教育委員会 | 1979 | 『朝倉氏遺跡発掘調査報告 I』 |
| 11. 文化庁監修 | | 『日本の建築』文化財講座 第一法規 |
| 12. 平井 聖 | | 『日本住宅の歴史』日本放送協会 |
| 13. 伊藤 ていじ | | 『中世住居史』東大出版会 |
| 14. | | 『建築学大系 4 - 日本建築史』彰国社 |
| 15. 太田 博太郎 | | 『日本建築史序説』彰国社 |
| 16. 小泉 袈裟勝 | | 『ものさし』法政大学出版会 |
| 17. 三上 次男 他 | 1982 | 「15・16世紀を中心とした出土陶磁」『島根県立博物館報告』島根県立博物館 |
| 18. 井上 喜久夫 | 1985 | 「16世紀の瀬戸・美濃窯」『中近世土器の基礎研究』中世土器研究会 |
| 19. | | 『瀬戸市史・陶磁史編 II』瀬戸市 |
| 20. 東京国立博物館 | 1979 | 『日本出土の中国陶磁』東京美術出版 |
| 21. | 1976 | 『美濃の古陶』光琳社 |
| 22. | 1977 | 『日本陶磁全集』中央公論新社 |
| 23. | 1977 | 『世界陶磁全集 3・4・12～14』小学館 |
| 24. | | 『貿易陶磁研究』貿易陶磁研究会 |
| 25. 田村 莊一 | 1987 | 「陥し穴状遺構の形態と時期について」『級要 VII』(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター |

VIII む す び

以上、本遺跡の発掘調査で得られた成果について記したが、以下に要約しむすびとする。

1. 笹間館跡は15世紀初期に構築され、I期～III期の変遷を経て16世紀終末の豊臣秀吉による奥州仕置によって廃城となったらしいことが判明した。しかし、その間16世紀中・後期には無住であったらしいことも推定される。
2. 城主については、直接的な表現によって明記した文献はいずれも16世紀終末の城主に関わる記録であるが、和賀主馬、和賀忠親、和賀主殿、和賀月斎等城主の名前が一定せず、特定することは困難である。しかし、いずれも和賀氏宗家を出自とする人物であることを考えれば、和賀氏宗家の血縁者が最後の城主として大過ないであろう。また、笹間氏を名乗る人物として和賀氏の娘が嫁したとされる笹間玄馬資弘なる人物が知られ、この人物も笹間館に関係ある人物であろう。以上から推定されることは、構築当初の城主は笹間氏であった可能性が強く、永享7年の乱によって焼亡した後再興して16世紀前期まで続き、一時期中断の後16世紀末になって和賀氏宗家の血縁者が城主となったらしいことである。
3. 城館が構築される以前の歴史についてみれば、平安時代には大規模な集落が存在したらしい状況が看取されるし、縄文時代にも集落の存在が予想され、さらに狩猟の場であったことも明らかとなった。

発掘調査によって得られた多くの知見は、現在までの考え方の追認、全く新しい知見等多くの資料を含んでいるが、本報告書を作成するに当りそれら全てを網羅するに至らなかった。それらの多くの資料は、新たな考え方の中で検討を加え、何んらかの形で公にするとともに今後の発掘調査にその成果を活用して行きたい。しかしながら、当遺跡のような水田面に立地する平城の発掘調査は岩手県初の例であることから、その意味では得られた資料・成果は膨大な物であり、今後の同種遺跡の発掘調査に与える示唆は大きなものがあるだろうと確信している。

最後になったが、本遺跡の発掘調査に当り、文化庁文化財調査官佐久間豊氏、奈良国立文化財研究所宮本長二郎氏、八戸工業大学高島成侑氏、北上市立博物館本堂寿一氏、青森県埋蔵文化財調査センター三浦圭介氏等から多くのご指導・ご教示を頂いた。さらに現地の発掘に当っては地元の根子広氏、斎藤万次郎氏他35名の方々からご協力を頂いた。併せて感謝の意を表したい。また、報告書作成に当っても東京国立博物館矢部良明氏、金沢大学佐々木達夫氏、朝倉氏遺跡資料館南洋一郎氏、同水野和雄氏、愛知県教育庁赤羽一郎氏、愛知県立陶磁資料館井上喜久男氏、佐賀県立肥前陶磁文化館大橋康治氏他上記の方々から有益なご教示を頂き、ここに記して謝意を表したい。分析・鑑定に当っては奈良教育大学三辻利一氏、佐藤地質工学研究所佐藤二郎氏にお願いし、その成果を引用した。

写 真 图 版



遺跡全景（航空写真）
写真図版 I

西から撮影



西館（航空写真）
写真図版 2

西から撮影



東館（航空写真）
写真図版 3

西から撮影



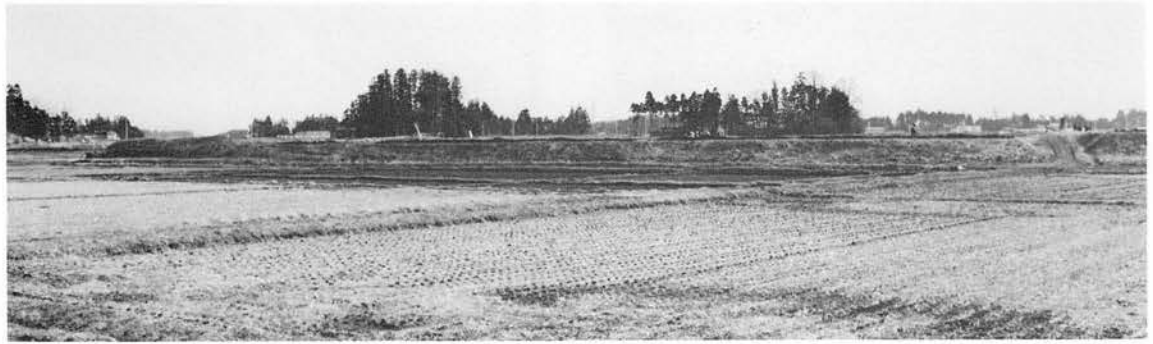
昭和21年撮影の航空写真 縮尺約6400分の1
写真図版 4



調査前 全景 (南→)



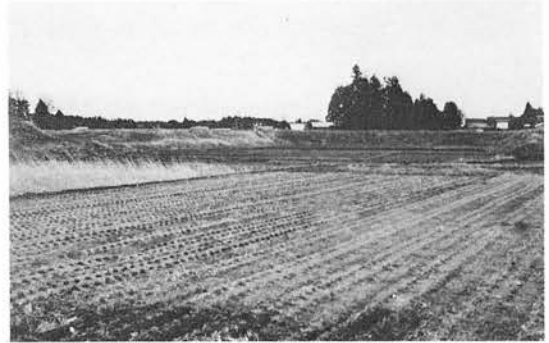
調査前 遠景 西館 (西→)



調査前 遠景 東館 (北→)



調査前の水田と農道 西館



調査前 西端外堀

調査前の現況
写真図版 5



表土除去



粗掘



精査



精査



地区子供会の参加



現地説明会

調査風景と現地説明会

写真図版 6



西館南北ベルト 北端部



西館南北ベルト 北端部



東館南北ベルト 南端部



東館南北ベルト 南端部



東館南北ベルト 北端部

法面の現況の土層



東館東西ベルト 東端部

写真図版 7



内堀 断面（南→）



内堀 南半部



東館南西部張り出し部（入口）



内堀 北端部



西館 南端部

写真図版 8 堀跡



西館 西端部



東館 東端部外堀断面



東館 北端部

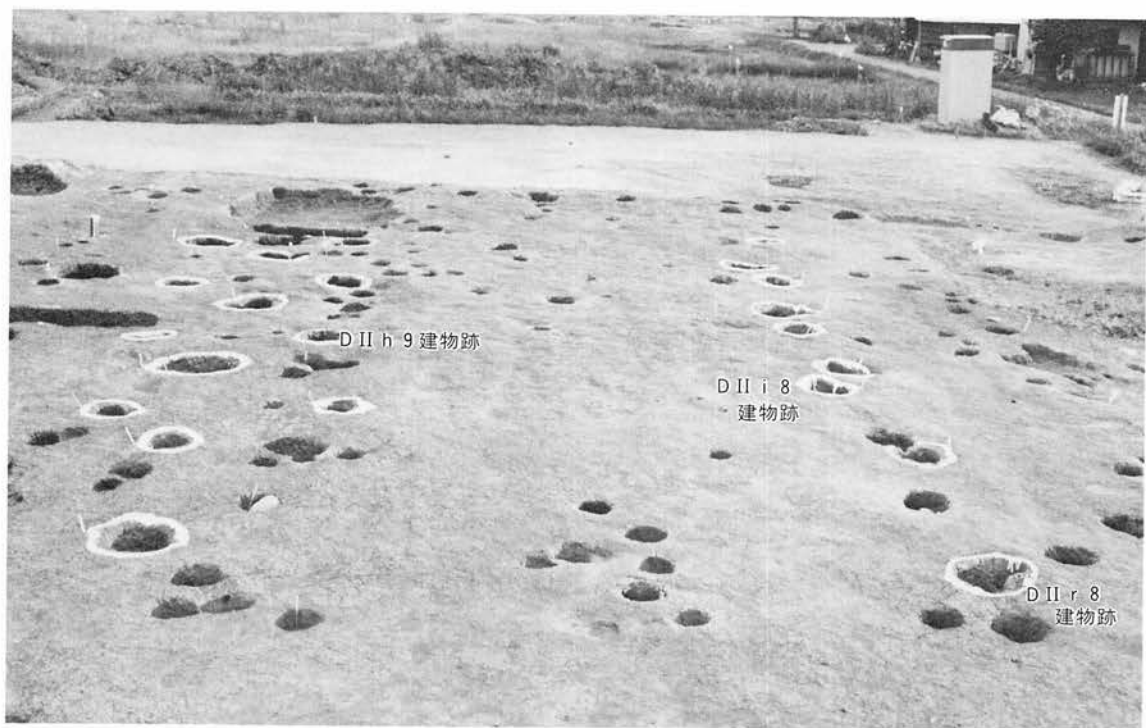


東館 南端部



土橋

写真図版9 外堀と土橋



A 西館建物跡



B 西館建物跡

写真図版10 建物跡一 I



D-II a 6 建物跡

A 西館建物跡



C III r 4 建物跡

B 西館建物跡

写真図版II 建物跡一 2



A 西館建物跡



B 西館建物跡

写真図版12 建物跡—3



A 東館建物跡



B 東館建物跡

写真図版13 建物跡-4



A 東館建物跡



B 東館建物跡

写真図版14 建物跡—5



西館 CIV i 9門跡一・二



柱穴 断面



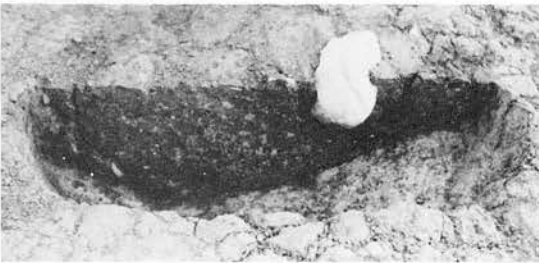
柱穴 断面



柱穴 断面



柱穴 断面



柱穴 断面



柱穴 断面

写真図版15 門跡



A 東館 CV a 7門跡



B 西館 DII a 10豎穴住居跡

写真図版16 門跡・豎穴住居跡



A 東館 C VI a 5 竪穴住居跡



B 東館 C VII d 7 竪穴住居跡

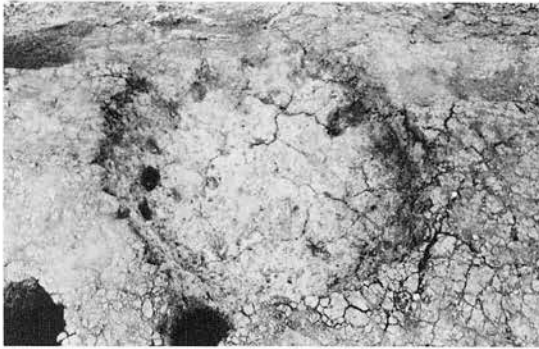
写真図版17 竪穴住居跡



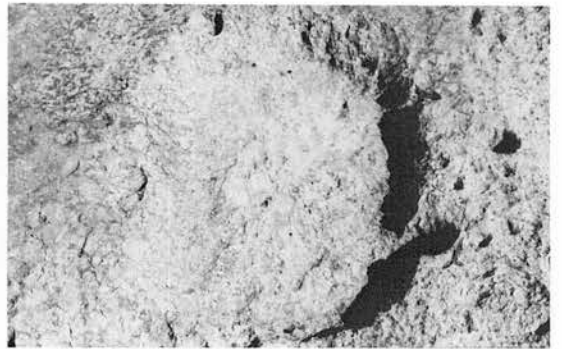
(2) B II j 9 土坑



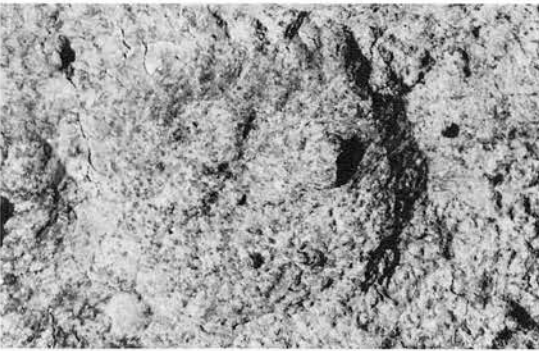
(4) B IV j 3 土坑



(5) B IV j 5 土坑



(8) C II b 8 土坑



(11) C II c 8 土坑



(9) C II b 9 土坑



(10) C II b 10 土坑



(12) C II d 8 土坑

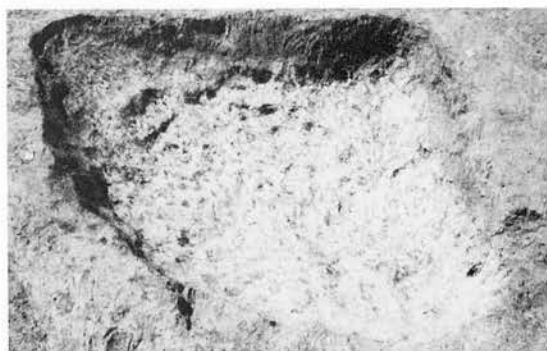
写真图版18 土坑一 I



(13) C II e 7 土坑



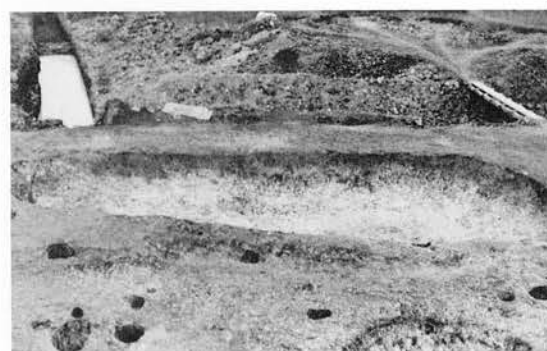
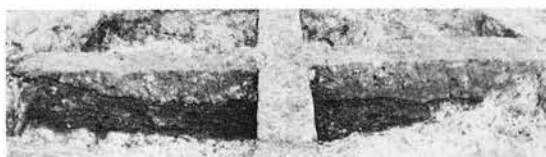
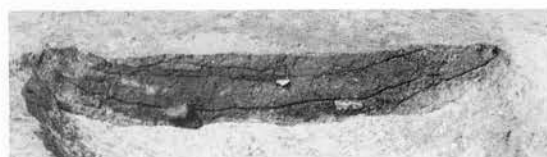
(14) C II f 7 土坑



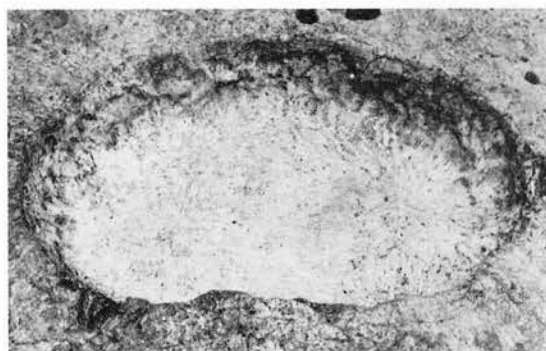
(15) C II g 6 土坑



(16) C II g 8 土坑



(18) C II i 6 土坑



(19) C II i 7 土坑



写真図版19 土坑—2



(20) C III a 2 土坑-1



(21) C III a 2 土坑-2



(22) C III a 3 土坑



(23) C III a 10 土坑



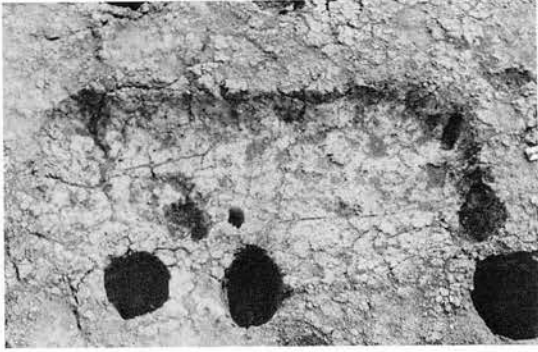
(24) C III b 6 土坑-1



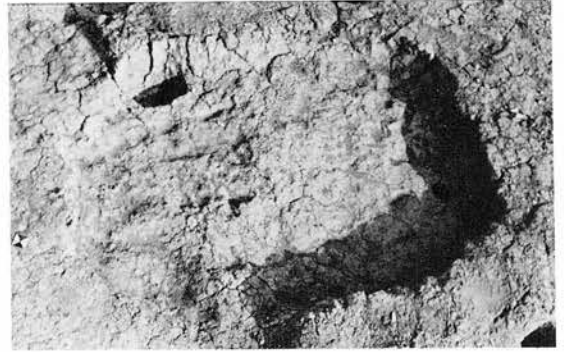
(25) C III c 6 土坑



写真図版20 土坑-3



(26) C III c 8 土坑



(27) C III c 9 土坑



(28) C III c 10 土坑



(29) C III d 7 土坑



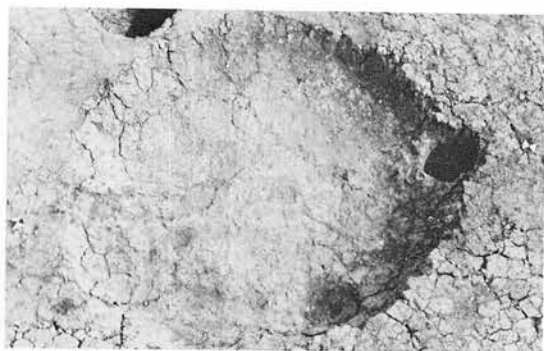
(30) C III d 9 土坑



(31) C III f 4 土坑



写真図版21 土坑一4



(35) C III i 9 土坑



(32) C III g 4 土坑



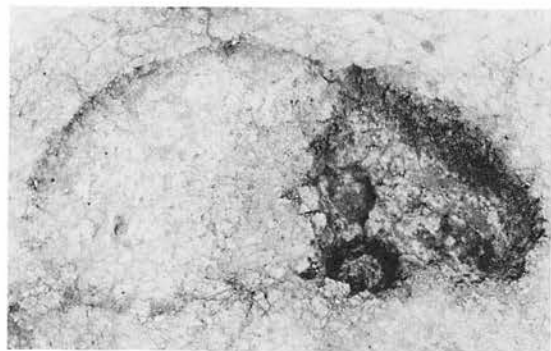
(36) C III j 1 土坑



(33) C III h 4 土坑— I



(37) C III j 4 土坑

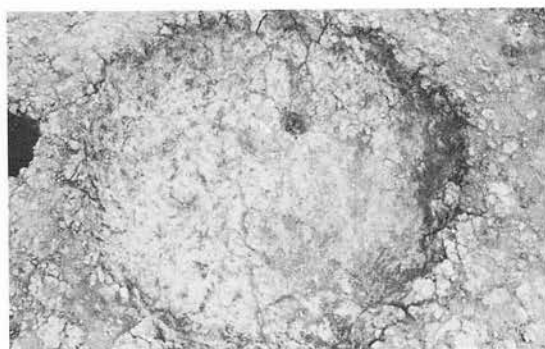


(38) C IV a 5 土坑

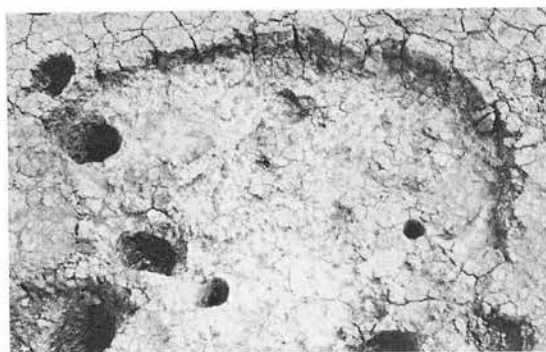


(39) C IV b 2 土坑

写真图版22 土坑— 5



(40) C IV c 2 土坑— I



(41) C IV d 3 土坑



(42) C IV d 4 土坑



(43) C IV e 4 土坑



(44) C IV h 1 土坑



(45) D II a 5 土坑— I



(50) D II e 5 土坑



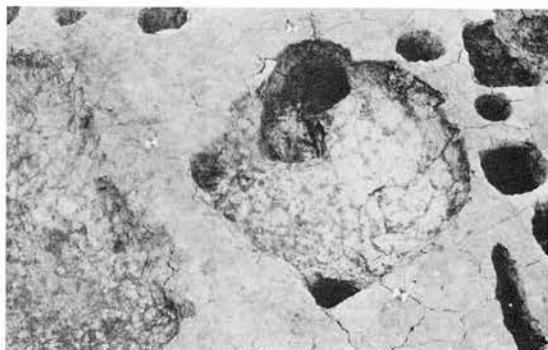
写真图版23 土坑— 6



(51) D II f 5 土坑



(52) D II f 8 土坑一 I



(53) D II f 8 土坑一 2



(54) D II h 5 土坑平面



(55) D II i 5 土坑



(56) D III f 3 土坑平面

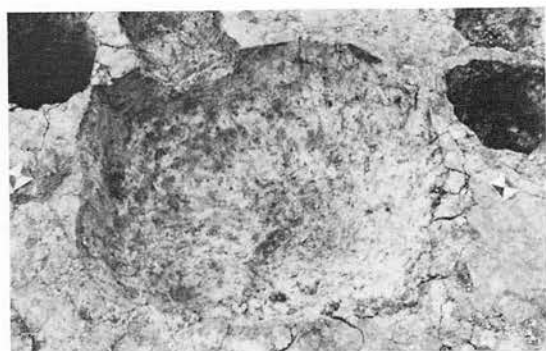


(57) D III f 8 土坑一 I



(58) D III f 3 土坑断面

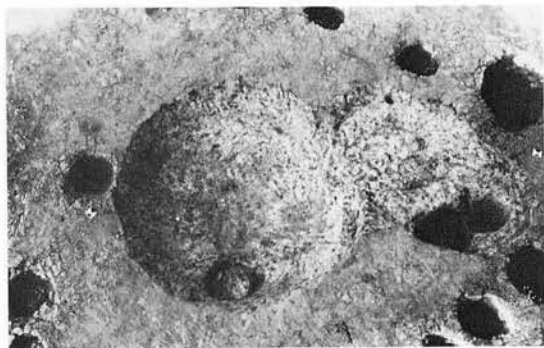
写真图版24 土坑一 7



(59) D III g 3 土坑



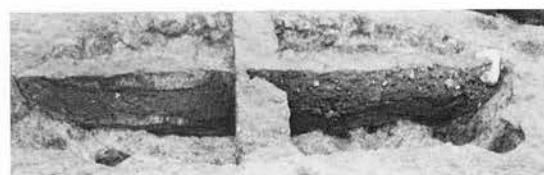
(62) D III g 6 土坑—1



(60)(61) III g 5 土坑—1·2



(63) D III g 6 土坑—2



(65) D III h 2 土坑



(66) D III h 3 土坑

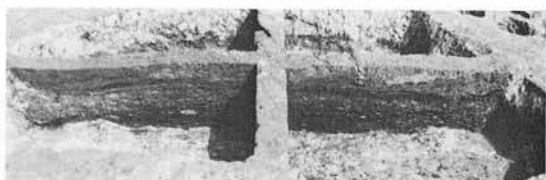
写真図版25 土坑—8



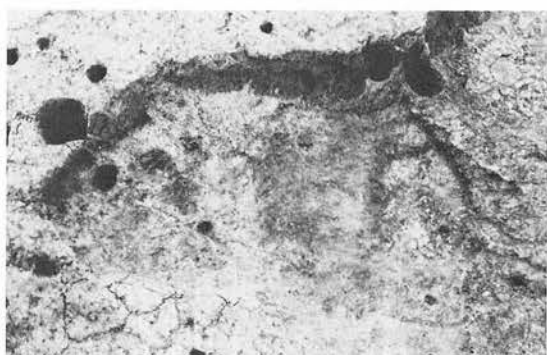
(67) D III h 8 土坑-1



(68) D III h 8 土坑-2



(70) D III i 3 土坑



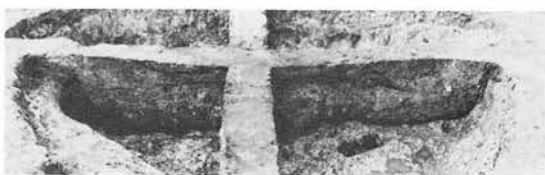
(71) D III i 4 土坑



(69) D III i 1 土坑



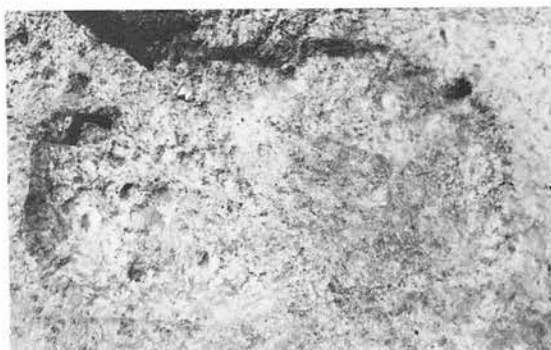
(72) D III i 5 土坑



写真图版26 土坑-9



(73) DIII i 7 土坑-2



(75) DIII i 9 土坑



(74) DIII i 8 土坑-1



(76) DIII j 1 土坑



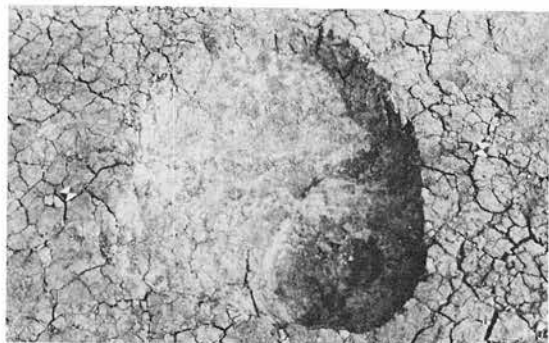
(77) DIII j 2 土坑



(78) DIII j 7 土坑-1

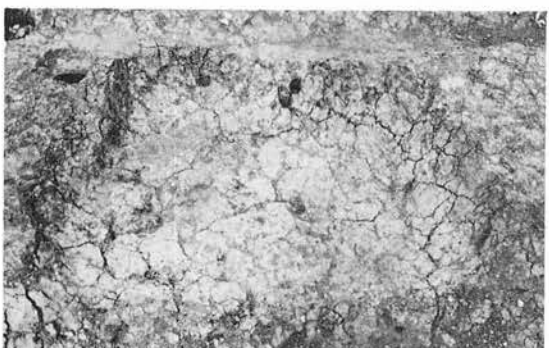


写真图版27 土坑-10



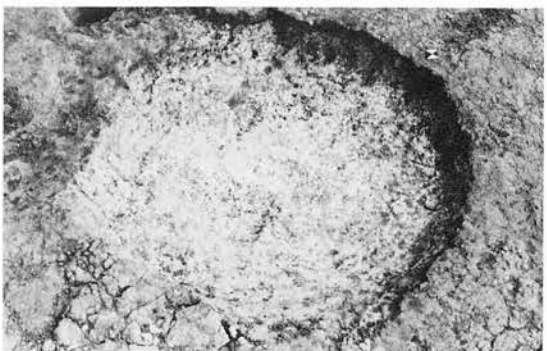
(79)(80) D III j 8 土坑—1·2

(81) D IV a I 土坑



(82) D IV a 2 土坑

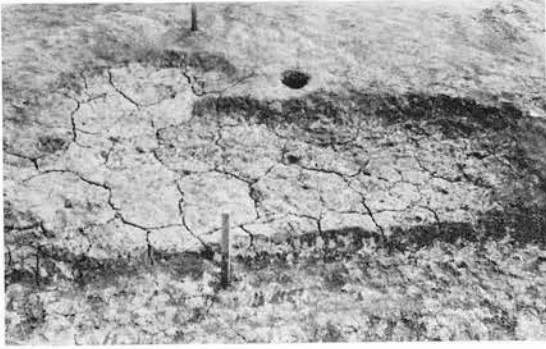
(85) D IV g 7 土坑



(83) D IV d 3 土坑

(84) D IV e 2 土坑

写真图版28 土坑—II



(86) E II a 5 土坑



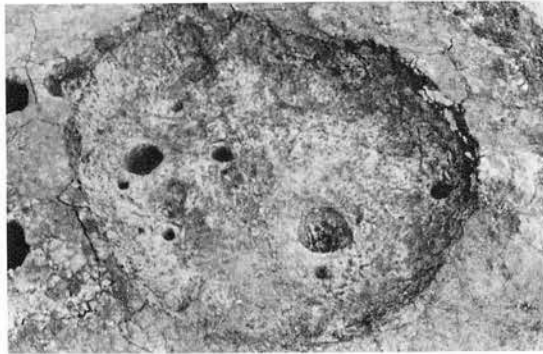
(87) E II a 10 土坑



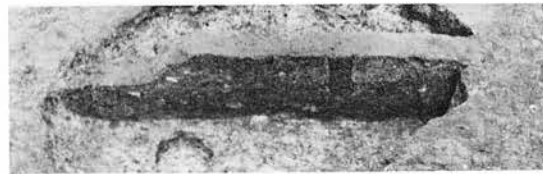
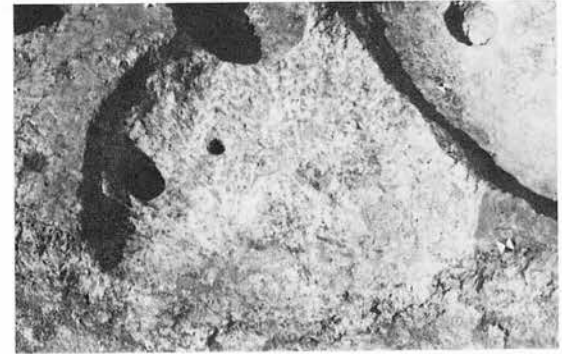
(88) E II b 6 土坑



(89) E III a 1 土坑



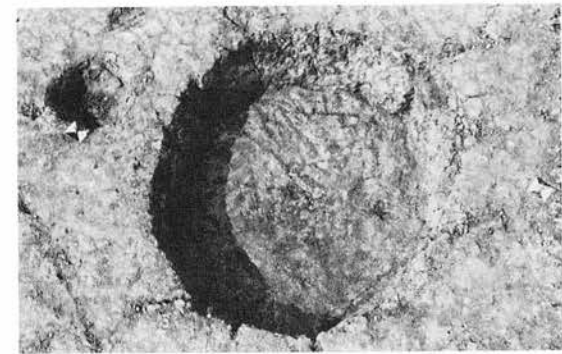
(90) E III a 7 土坑



(92) E IV b 1 土坑一



(94) E IV b 1 土坑一



写真图版29 土坑—12



(93) C V a 8 土坑



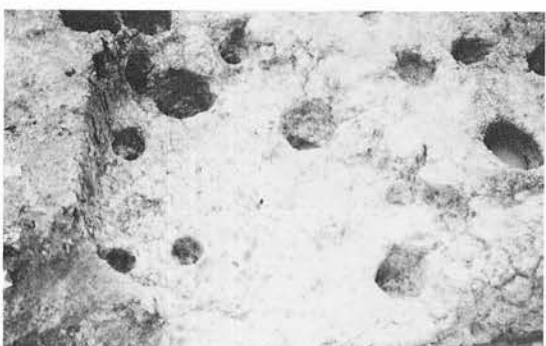
(94) C V e 7 土坑—1



(95) C V e 7 土坑—2



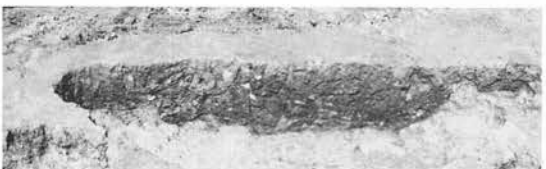
(97) C V f 6 土坑



(98) C V f 7 土坑



(101) C V g 6 土坑



写真图版30 土坑—13



(102) C V g 8 土坑



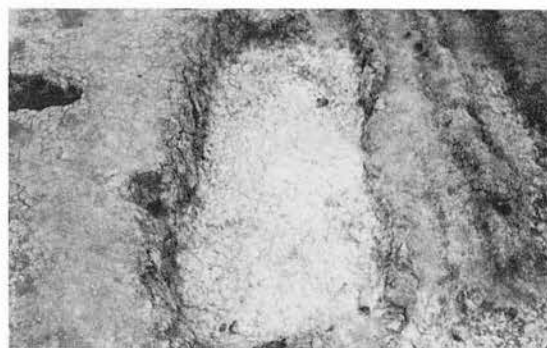
(106) C V j 8 土坑



(107) C V j 9 土坑 -1



(108) C V j 9 土坑 -2



(109) C V I a 4 土坑



(110) C V I b 5 土坑



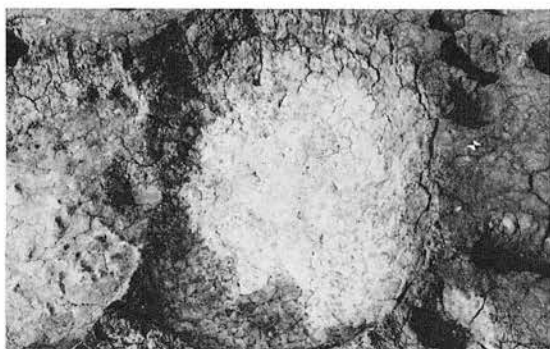
(111) C V I b 10 土坑



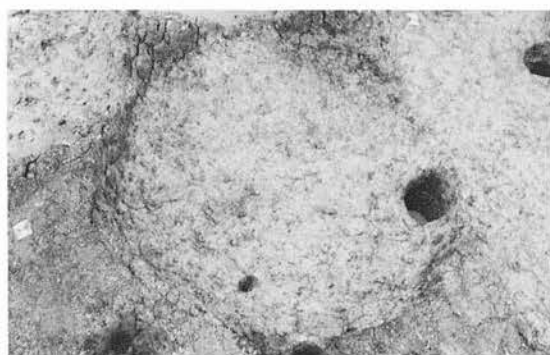
写真图版31 土坑一14



(112) C VI c 6 土坑



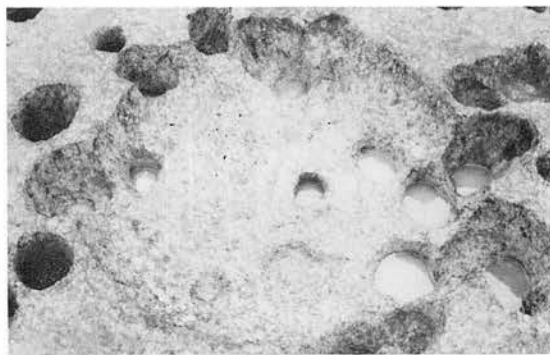
(113) C VI c 7 土坑



(114) C VI d 6 土坑



(115) C VI d 7 土坑



(116) C VI d 9 土坑

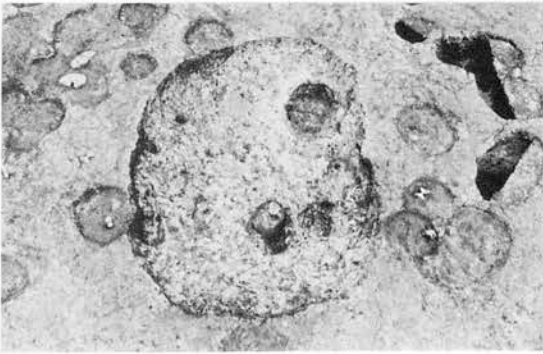


(117) C VI e 4 土坑

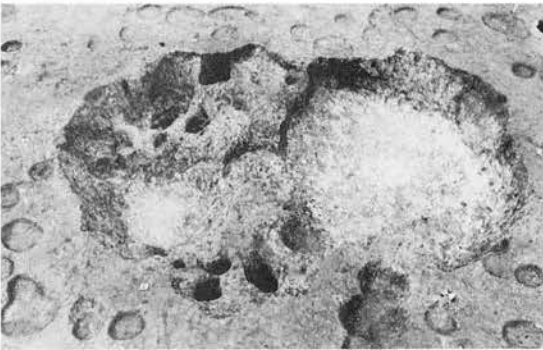
写真图版32 土坑—15



(118) C VI e 7 土坑



(121) C VI g 8 土坑



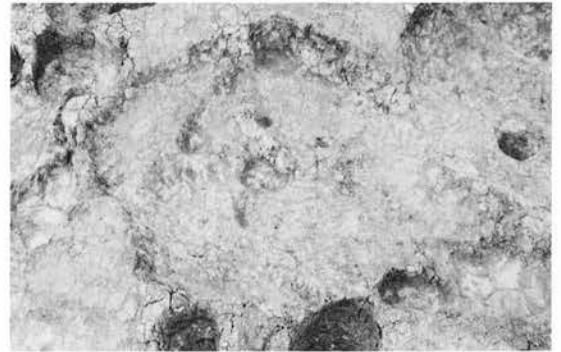
(122) (123) C VI i 9 土坑と C VI i 10 土坑



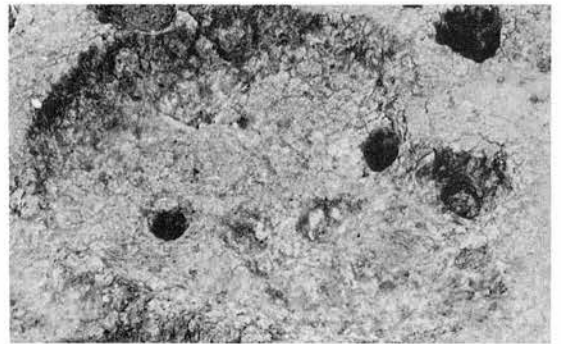
(120) C VI g 6 土坑



(124) C VI j 4 土坑



(125) C VI j 5 土坑一 I

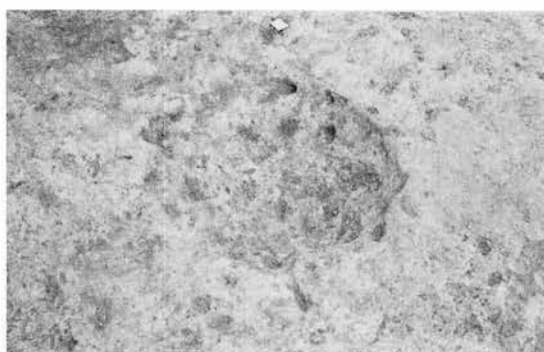


(127) C VI j 6 土坑

写真図版33 土坑一16



(128) C VI j 8 土坑



(130) C VII a 3 土坑- I



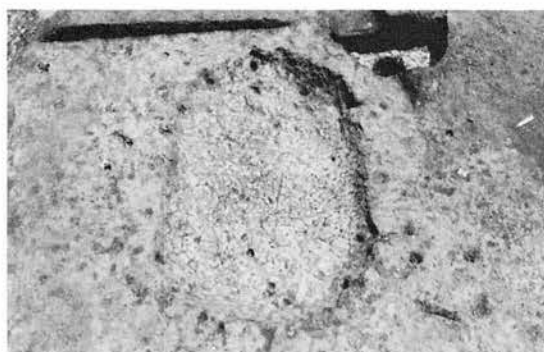
(131) C VII a 3 土坑- 2



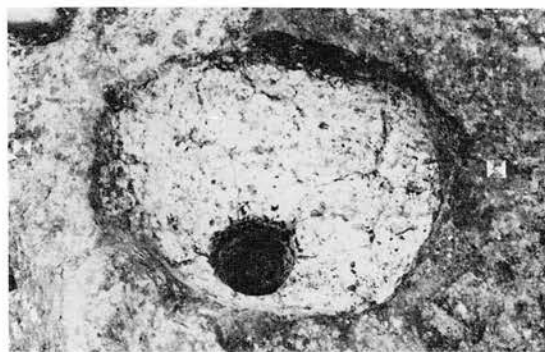
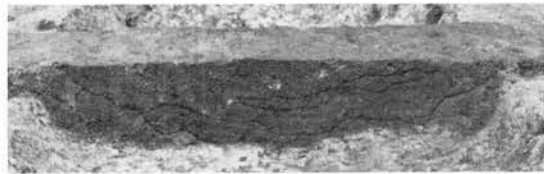
(132) C VII a 3 土坑- 3



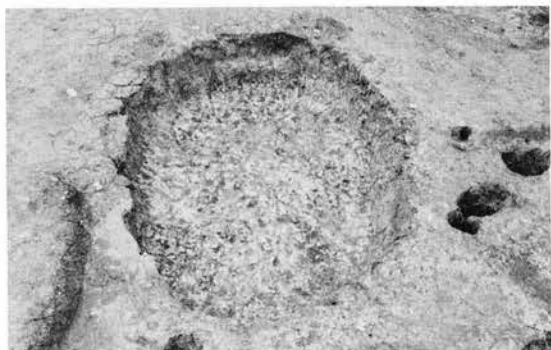
(134) C VII a 4 土坑- 2



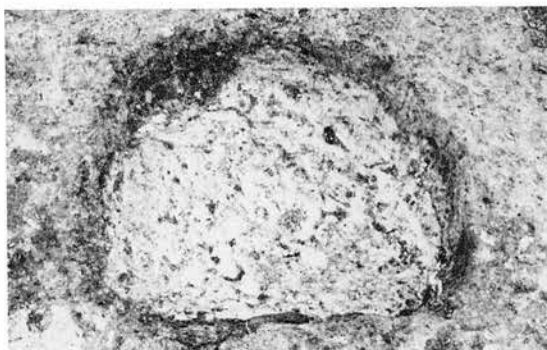
(135) (136) (137) (138) C VII a 5 土坑 I ~ 4



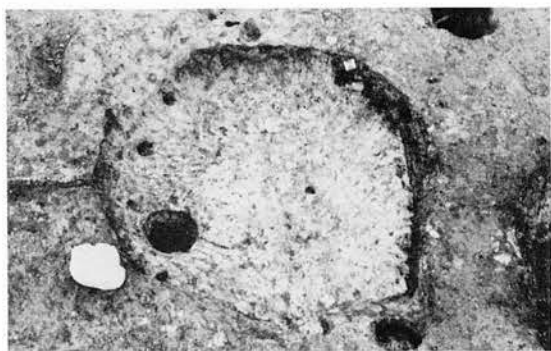
写真図版34 土坑-17



(139) C VII b 2 土坑



(142) C VII b 7 土坑— I



(141) C VII b 6 土坑



(143) C VII b 8 土坑



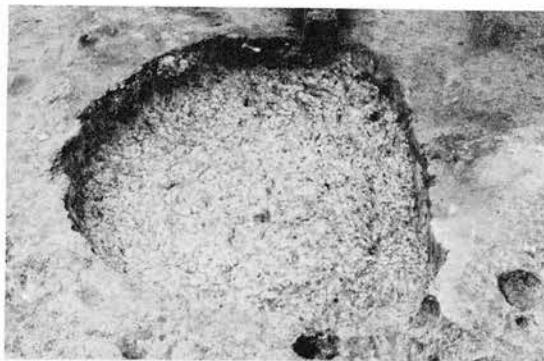
(144) C VII c 2 土坑



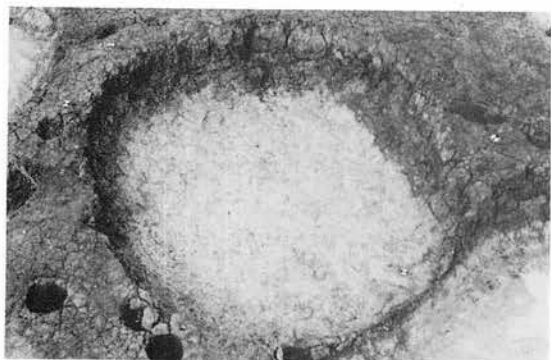
(145) C VII c 5 土坑



写真図版35 土坑—18



(146) C VII c 6 土坑—1



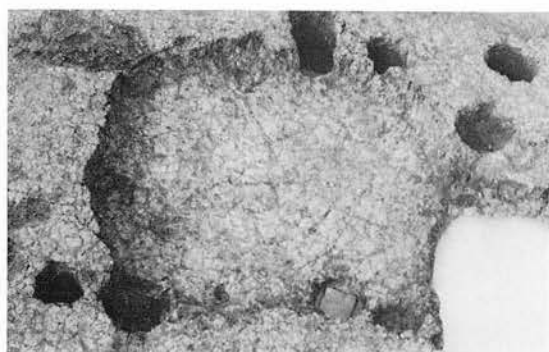
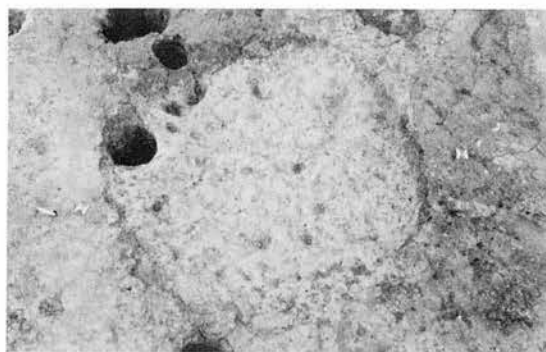
(147) C VII c 6 土坑—2



(149) C VII d 2 土坑—1



(151) C VII d 3 土坑



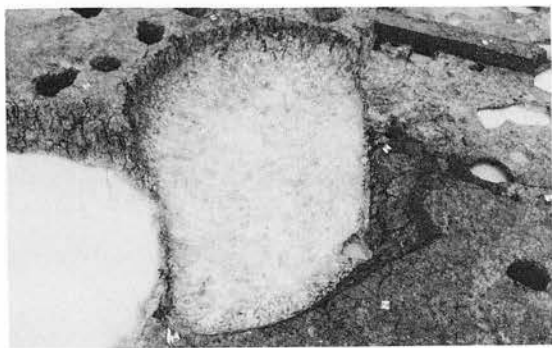
(150) C VII d 2 土坑—2



(152) C VII d 5 土坑



写真図版36 土坑—19



(153) C VII d 7 土坑



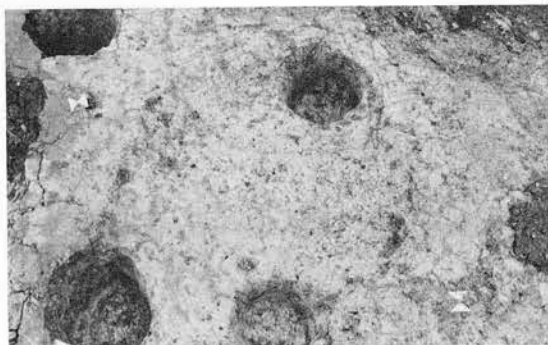
(154) C VII d 10 土坑



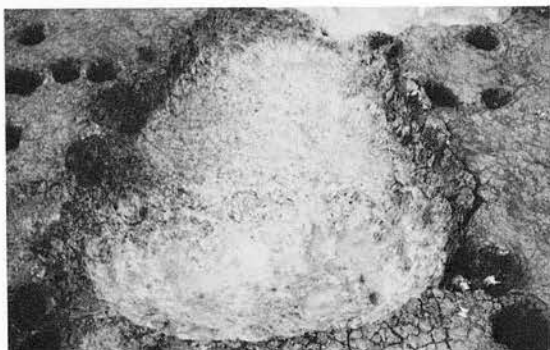
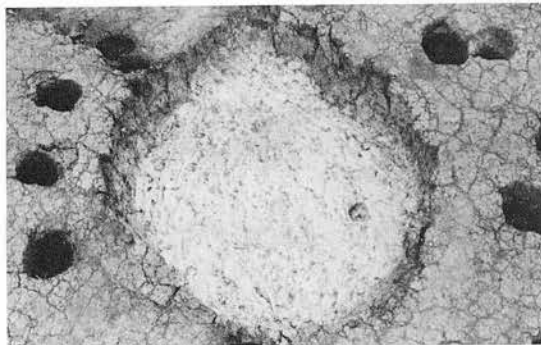
(155) C VII e 2 土坑



(156) C VII e 3 土坑



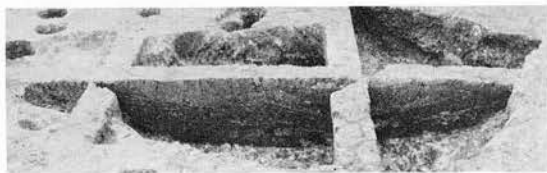
(157) C VII e 4 土坑



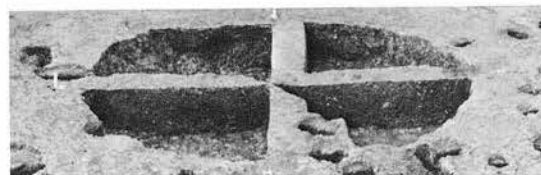
(159) C VII e 5 土坑



(160) C VII e 6 土坑



(161) C VII e 7 土坑

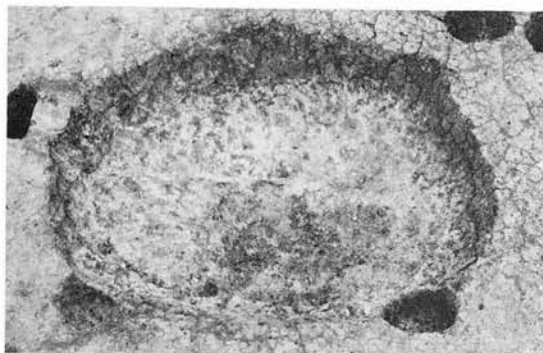


(162) C VII e 8 土坑

写真图版37 土坑—20



(159) C VII e 8 土坑



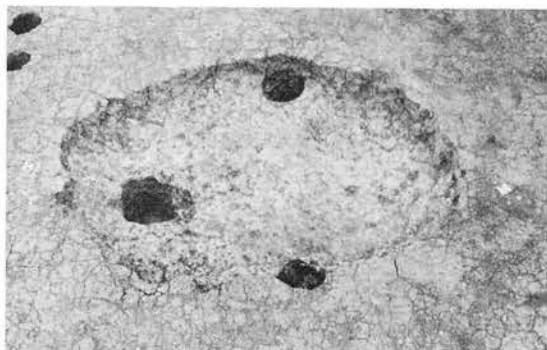
(160) C VII g 9 土坑



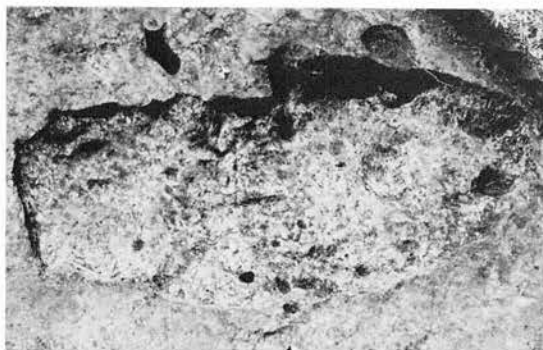
(161) C VII h 8 土坑



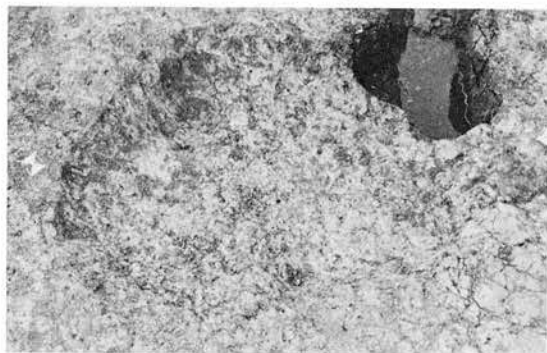
(162) C VII h 10 土坑



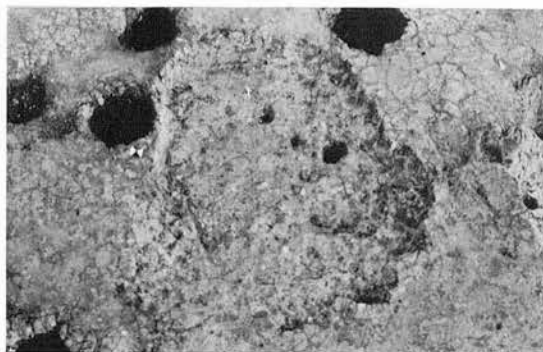
(163) C VII i 9 土坑



(164) C VII j 1 土坑— I

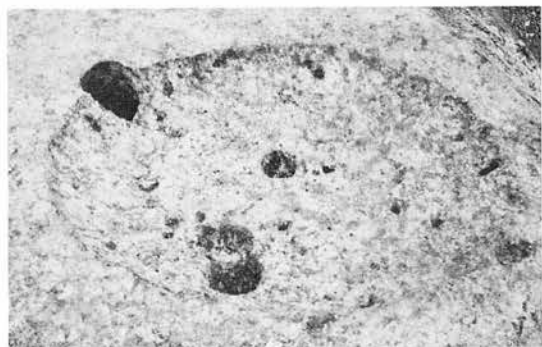


(165) C VII j 1 土坑— 2



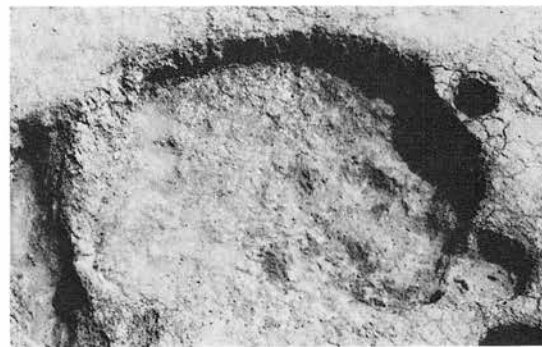
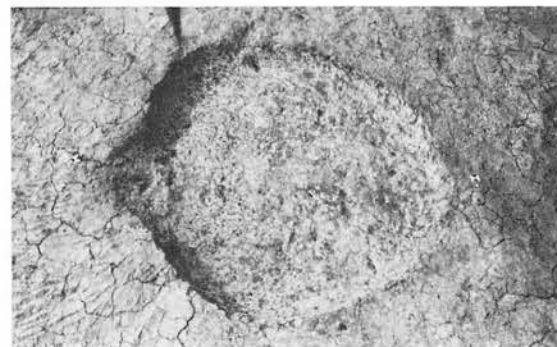
(166) C VII j 7 土坑— I

写真图版38 土坑—21



(167) C VII j 7 土坑—2

(168) C VIII e 2 土坑



(169) C VIII g 2 土坑

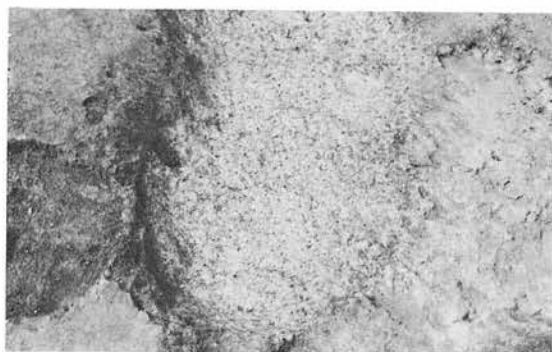
(173) D V a 9 土坑



(171) D V a 7 土坑

(175) D V b 9 土坑

写真图版39 土坑—22



(172) D V a 8 土坑



(176) D V f 7 土坑



(174) D V b 6 土坑



(180) D VI c 5 土坑-1



(179) D VI b 3 土坑



(181) D VI c 5 土坑-2



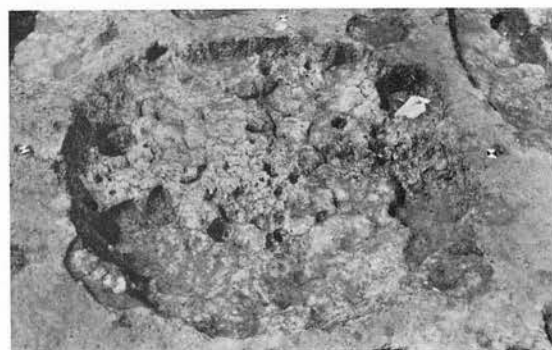
写真図版40 土坑—23



(177) D VI a 9 土坑



(178) D VI a 10 土坑



(183) D VI d 4 土坑— I



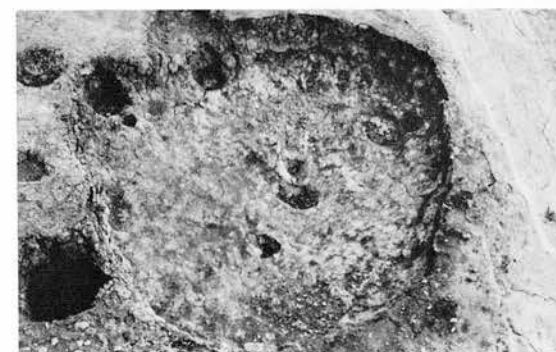
(184) D VI d 4 土坑— 2



(186) D VI e 2 土坑



(185) D VI d 5 土坑

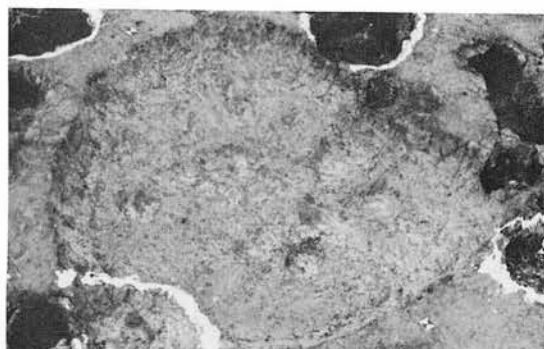


(187) D VI h 3 土坑

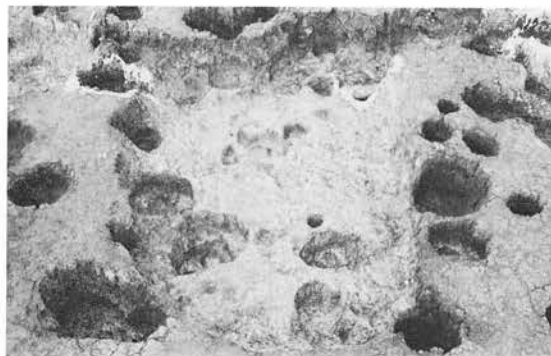
写真图版41 土坑—24



(188) D VII a 1 土坑



(189) D VII b 2 土坑



(190) D VII b 3 土坑



(191) D VII b 4 土坑



(192) D VII b 6 土坑



(193) D VII c 7 土坑



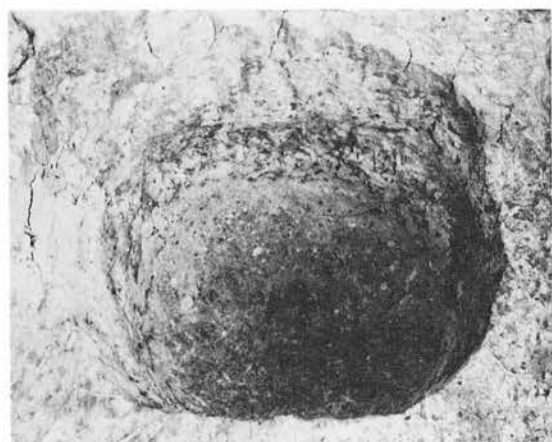
写真图版42 土坑—25



(1) C II d 8 井戸平面



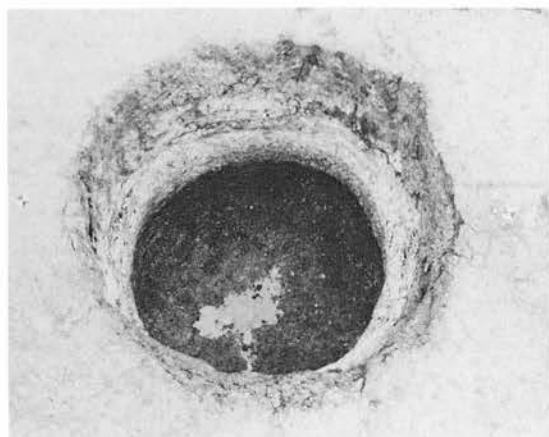
(1) C II d 8 井戸断面



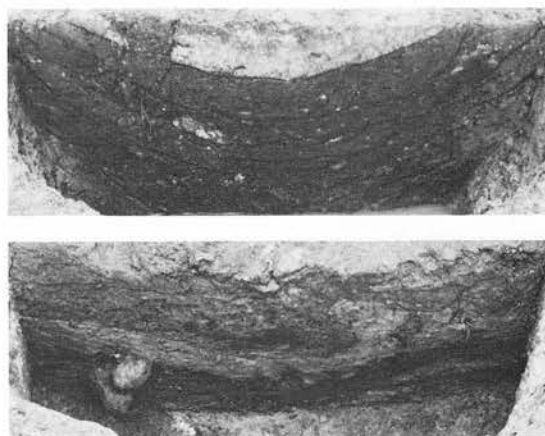
(2) C II h 9 井戸平面



(2) C II h 9 井戸断面



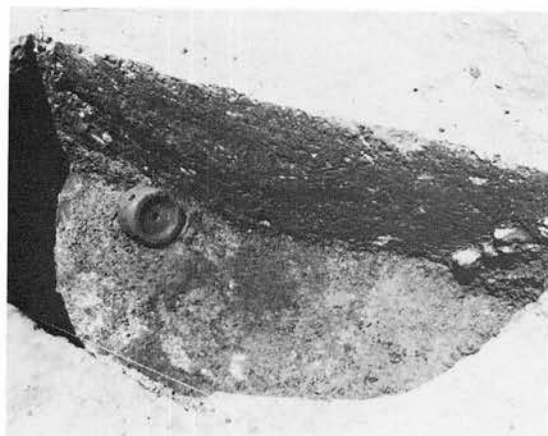
(3) C IV a 7 井戸平面



(3) C IV a 7 井戸断面(上半と下半部)



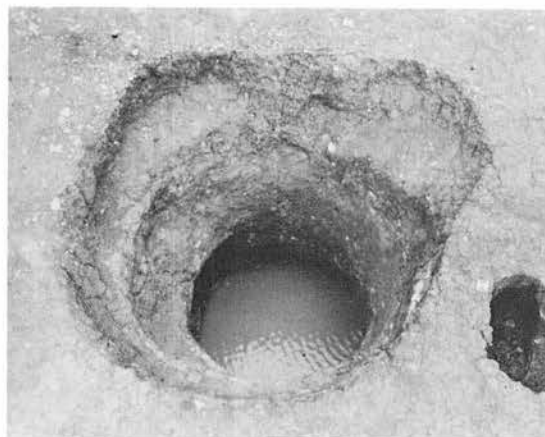
(4) C IV j 4 井戸平面



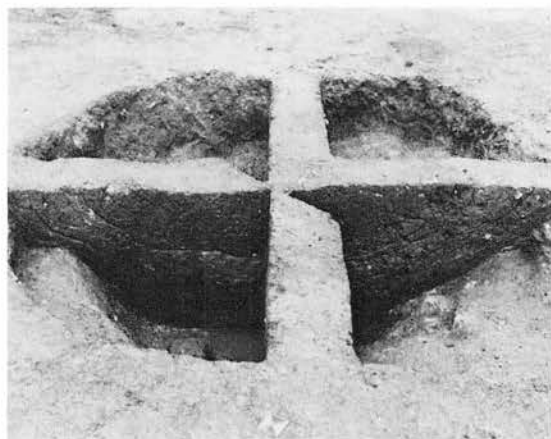
(4) C IV j 4 井戸茶臼出土状況



(4) C IV j 4 井戸木材出土状況



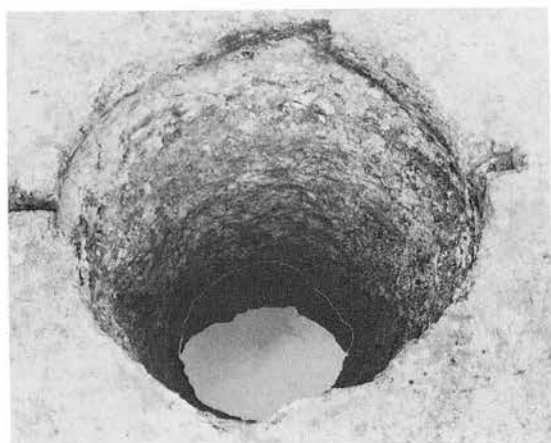
(8) D VII e 3 井戸平面



(8) D VII e 3 井戸上半断面



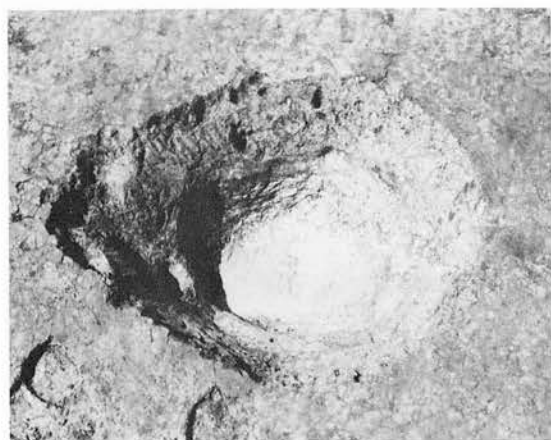
(8) D VII e 3 井戸下半断面



(5) D IV c 8 井戸平面



(5) D IV c 8 井戸断面



(6) C VII j 8 井戸平面



(6) C VII j 8 井戸断面



(7) C VII j 10 井戸平面



(7) C VII j 10 井戸断面



西館 落ち込み遺構全景 (航空写真)



(3) D III h 4 落ち込み遺構



(1) B II j 9 落ち込み遺構

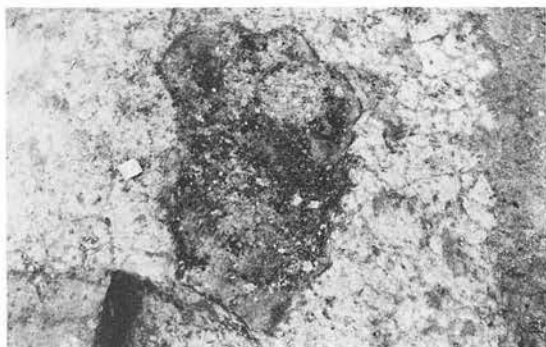


(2) D II f 6 落ち込み遺構

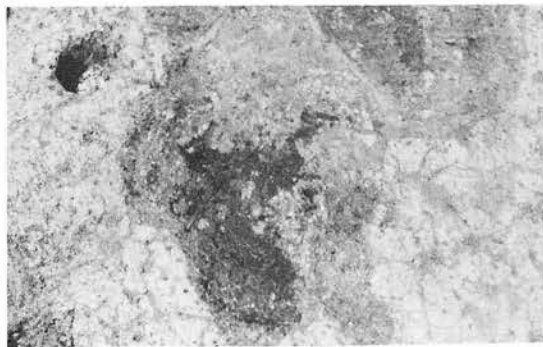


C III h 1 落ち込み遺構

写真図版46 落ち込み遺構



C VII d 3 カマド跡-1



C VII d 3 カマド跡-2



C VII i 8 カマド跡平面



C VII i 8 カマド跡断面



B II j 9 塚 (南→)



B II j 9 南北断面 (南→)

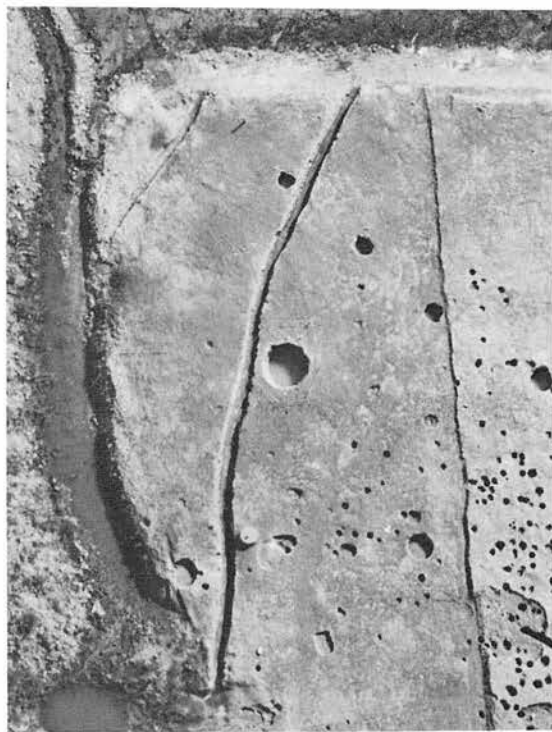


B II j 9 東西断面 (北→)



B II j 9 東西断面 (南→)

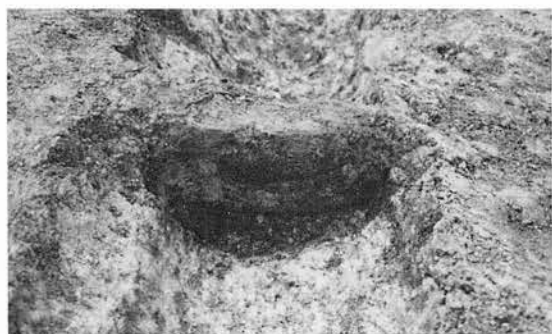
写真図版47 竈跡・塚



(2) B IV j 5 ③ B IV j 10:溝平面



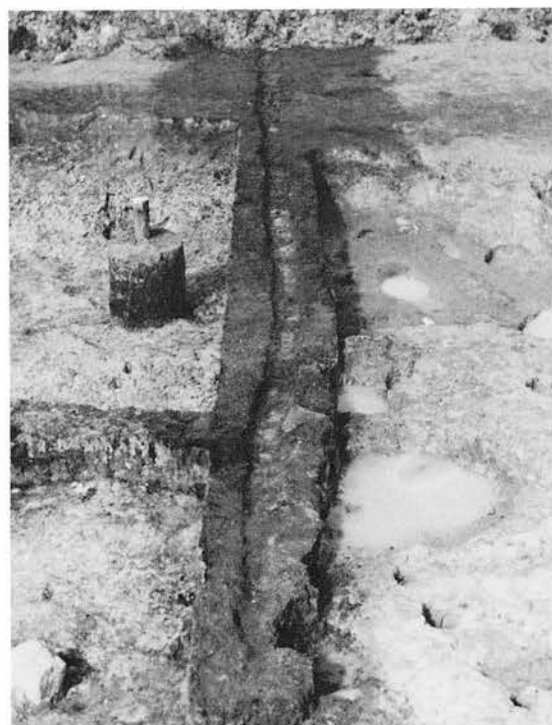
(2) B IV j 5 溝断面



(3) B IV j 10 溝断面

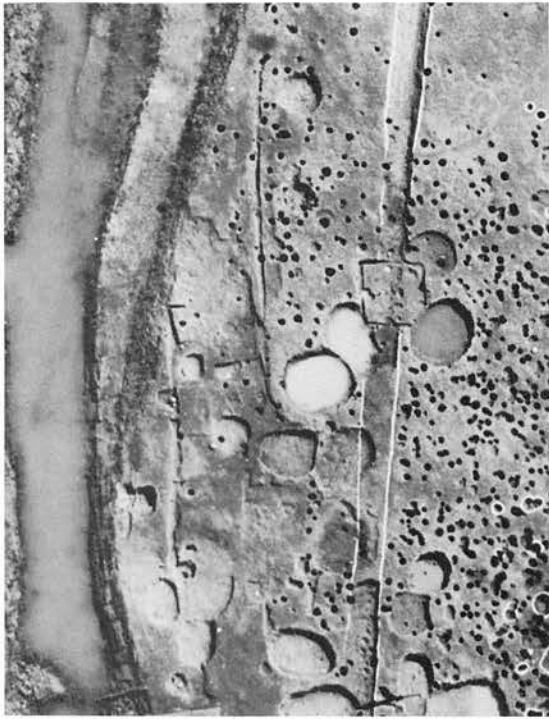


(4) C II e 7 溝



C III a I 溝

写真図版48 溝跡一 I



(15) C VII a 4, C VII c 8 溝



(17) D V b 6 溝



(13) C V i 6, C V j 6 溝 1~4

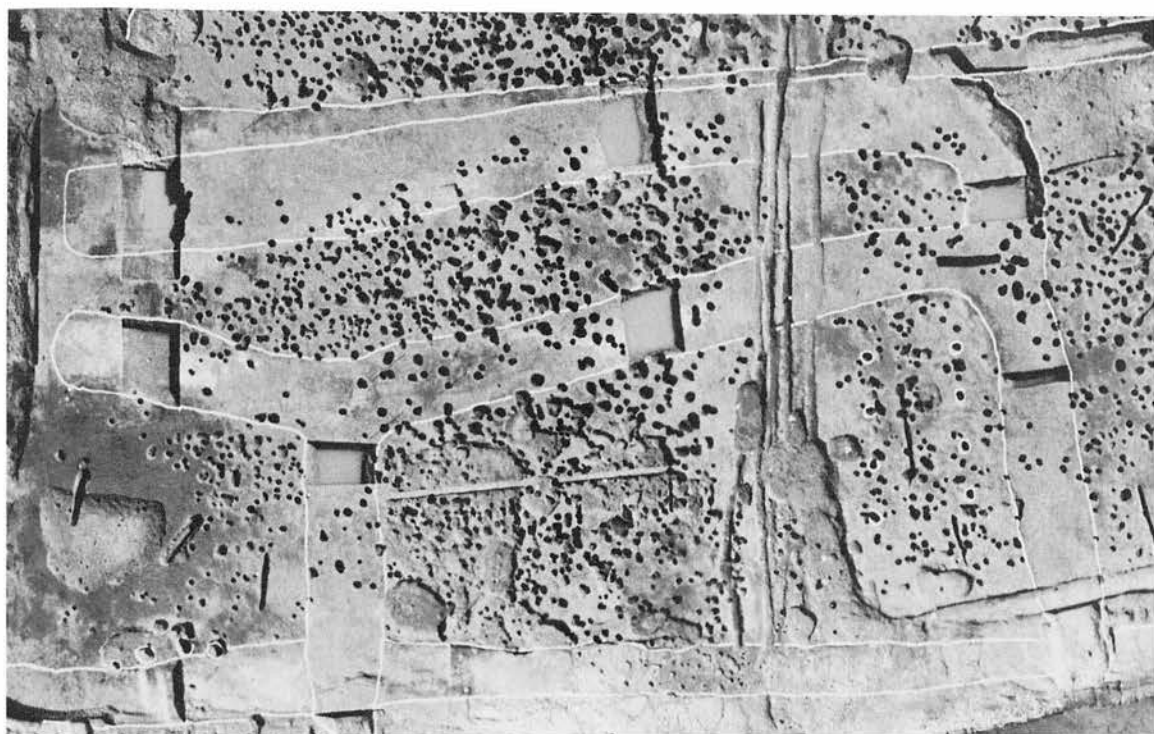


(19)~(12) C V j 6 溝 1~4 断面No. 1

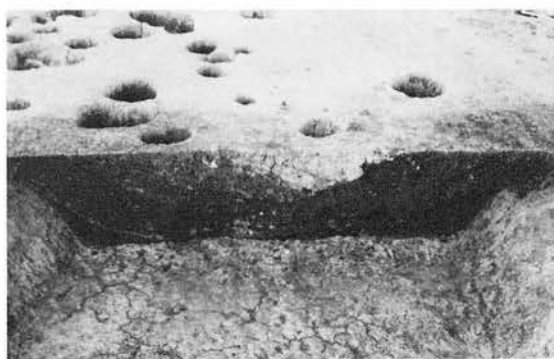


(19)~(12) C V j 6 溝 1~4 断面No. 2

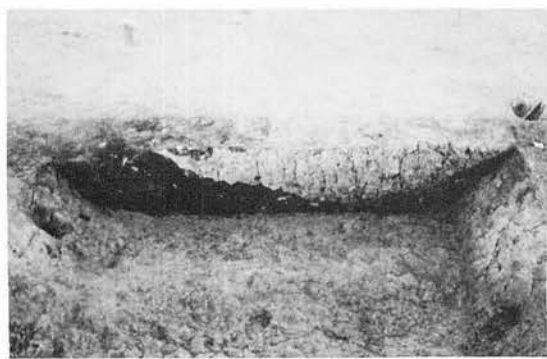
写真図版49 溝跡一 2



(7) BVI j I 溝 CV a 6 溝 C V e 6 溝 C VI a 3 溝 C V d 6 溝 平面



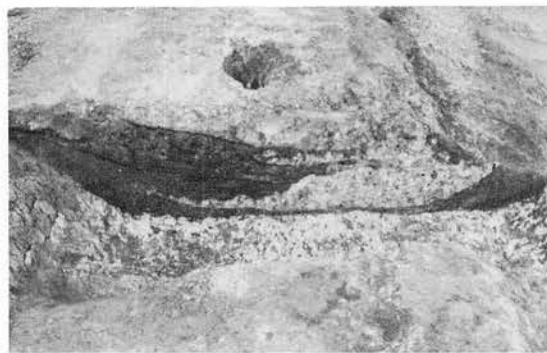
(7) BVI j I 溝断面No. 1



(7) BVI j I 溝断面No. 2



(7) BVI j I 溝断面No. 3



CV a 6 溝断面No. 1

写真図版50 溝跡—3



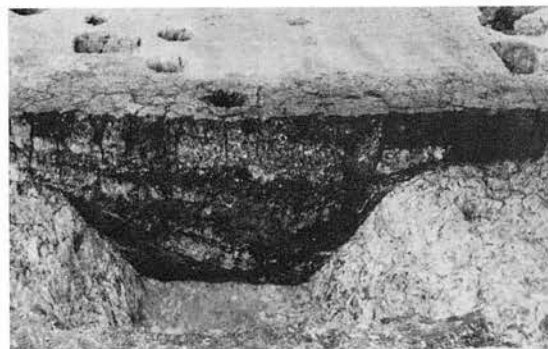
C V a 6 溝断面No. 2



(14) C VI a 3 溝断面No. 1



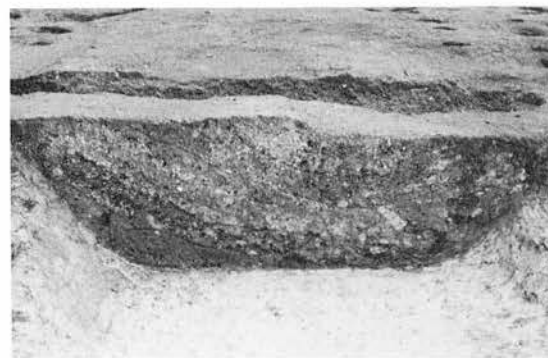
C V e 6 溝断面No. 1



(14) C VI a 3 溝No. 2



C V e 6 溝断面No. 2



C V d 6 溝断面No. 1



D V d 6 溝断面No. 2



C V d 6 溝断面No. 3

写真図版51 溝跡—4



(1) C II f 8周溝



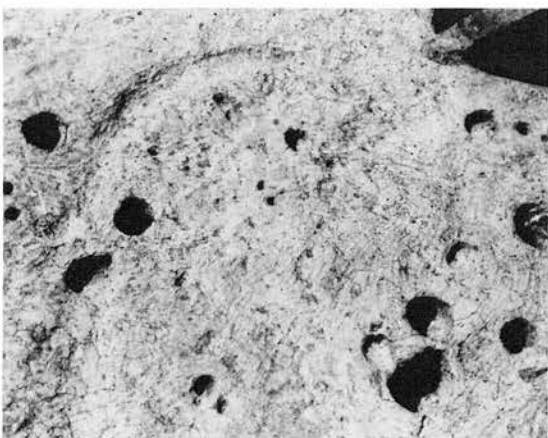
(2) C II g 7周溝



(4) C II h 8周溝



(5) C II h 10周溝



(6) C II i 8周溝



(7) C II i 9周溝

写真図版52 周溝一 I



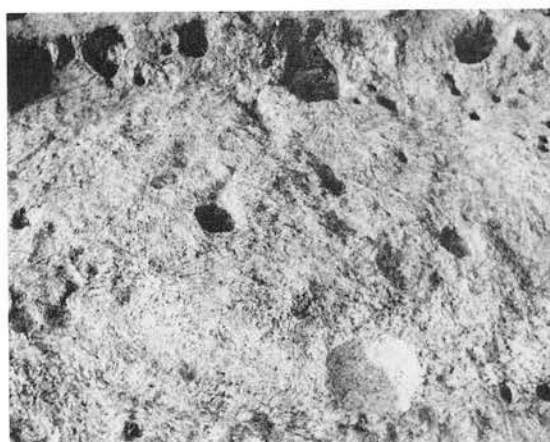
(8) C II j 7 周溝



(9) C III h 1 周溝



(10) C III h 2 周溝



(11) C III h 3 周溝



(12) C III h 4 周溝



C III h 1 ~ h 4 周溝の並び



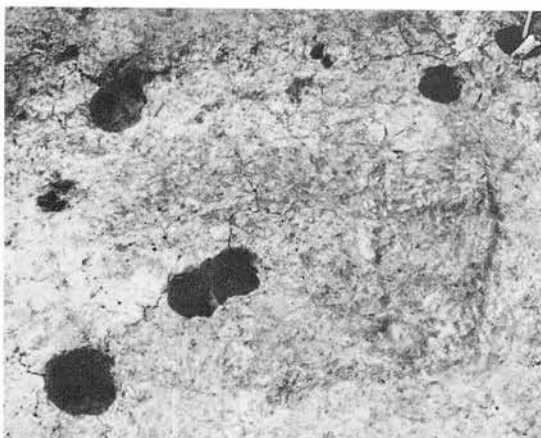
(13) D II a 8周溝



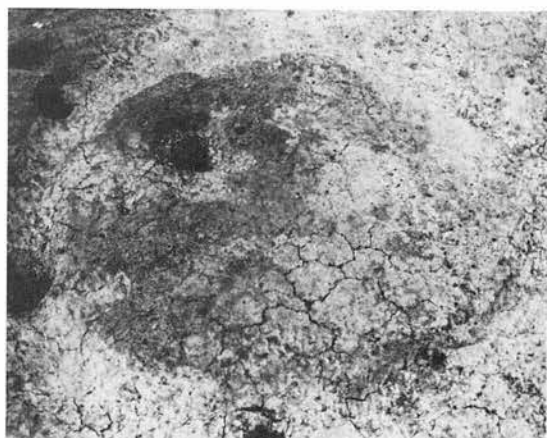
(14) D II b 6周溝



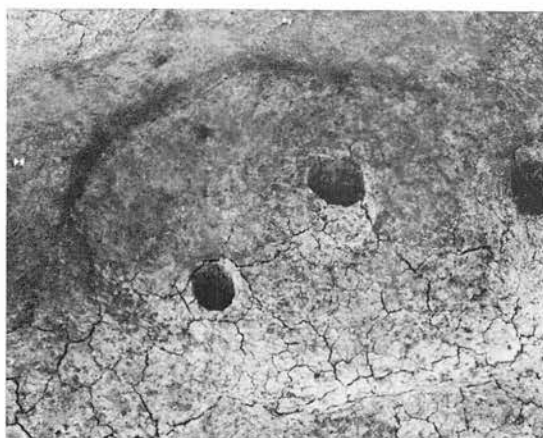
(15) D II e 6周溝



(16) D II f 6周溝



(17) D II g 6周溝



(18) D II h 6周溝

写真図版54 周溝—3



写真図版55 蓄銭遺構



(1) C IV c 4 土坑



(7) C VII i 2 土坑



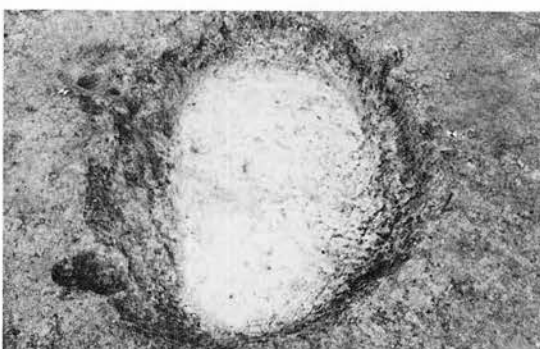
(3) D IV f 6 土坑



(8) C VII i 10 土坑



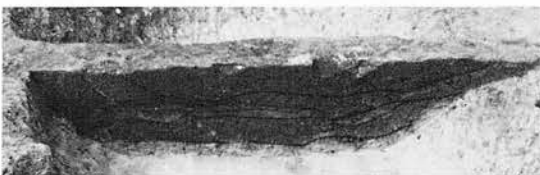
(2) D IV f 5 土坑



(4) E III b 6 土坑



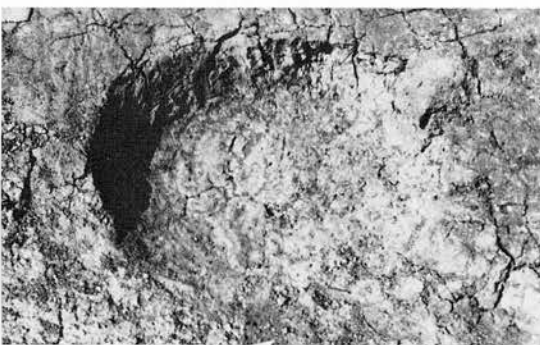
(3) D IV f 6 土坑



(8) C VII i 10 土坑

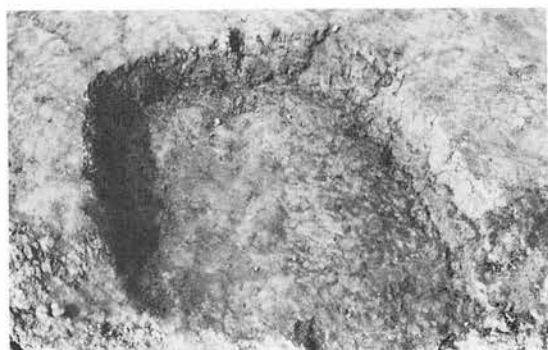


(2) D IV f 5 土坑



(4) E III b 6 土坑

写真图版56 古代一 I



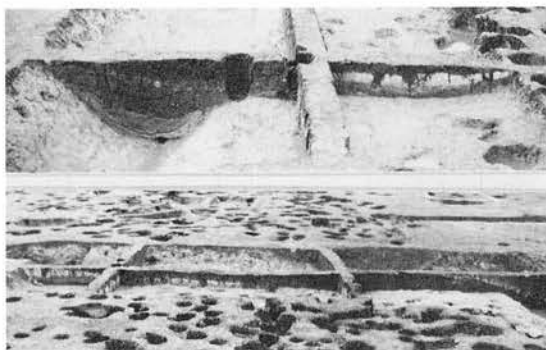
(5) E IV b I 土坑—2



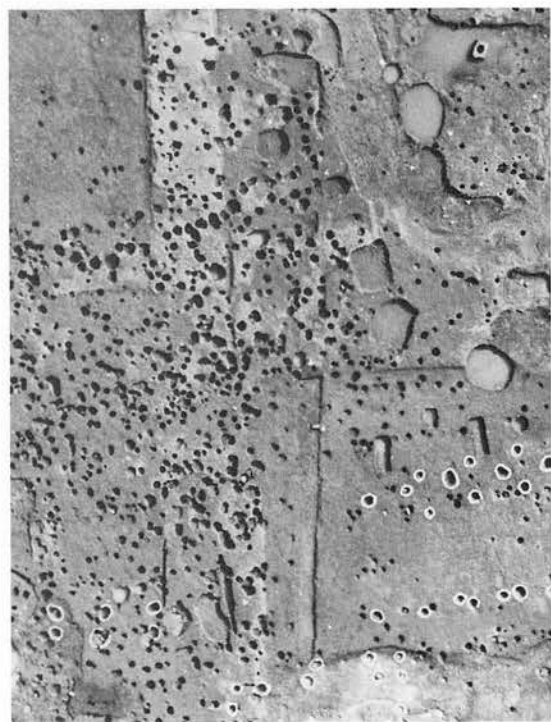
(9) D VI b 9 土坑



(6) C V g 9 土坑—1



(9) D VI b 9 土坑断面



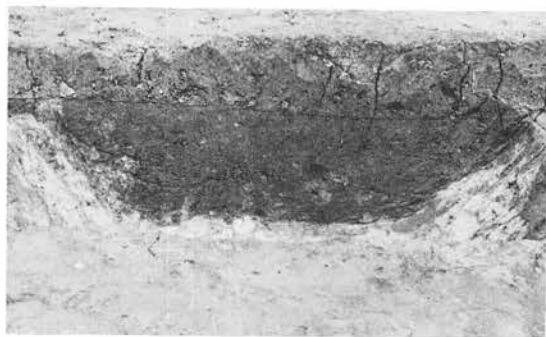
D III g 6 沟



(1) C VI a 4 沟



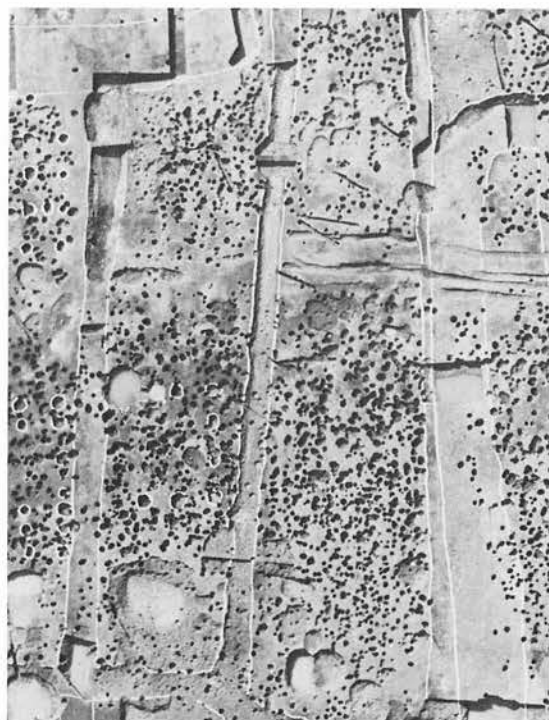
(3) C VI c 8 溝



(3) C VI c 8 溝断面No. 1



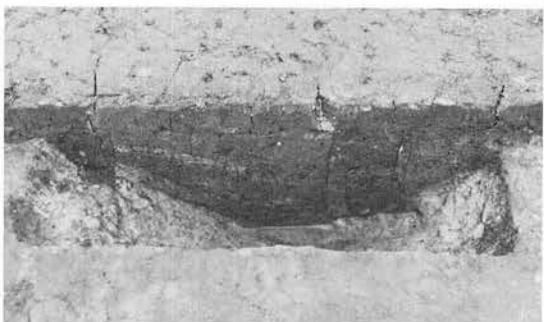
(3) C VI c 8 溝断面No. 2



(3/4) C VII a I 溝、C VI c 8 溝



(4) C VII a I 溝断面No. 1



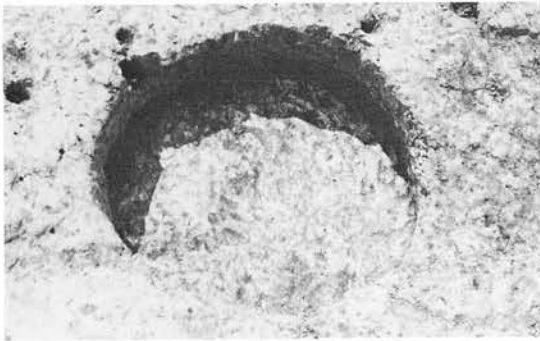
(4) C VII a I 溝断面No. 2



(2) C III h 2 土坑



(3) D III h 4 土坑



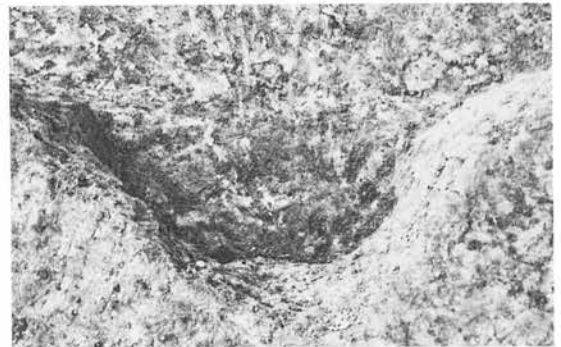
(4) D III h 6 土坑



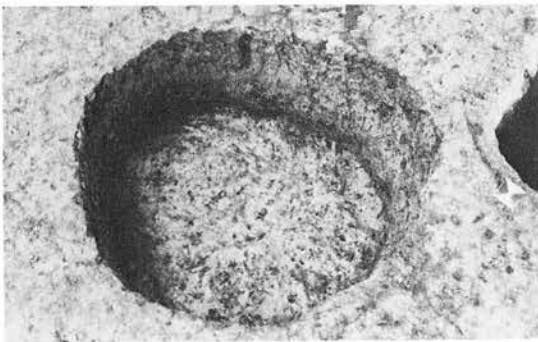
(5) D III h 7 土坑



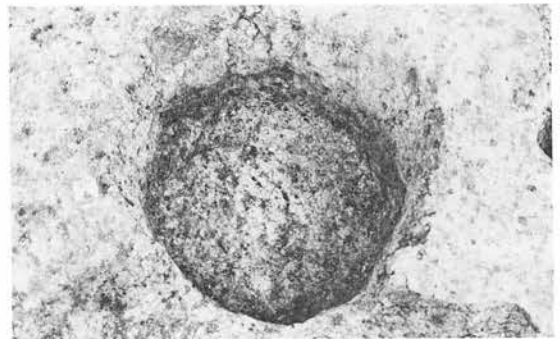
(6) D III i 7 土坑



(7) D III i 8 土坑

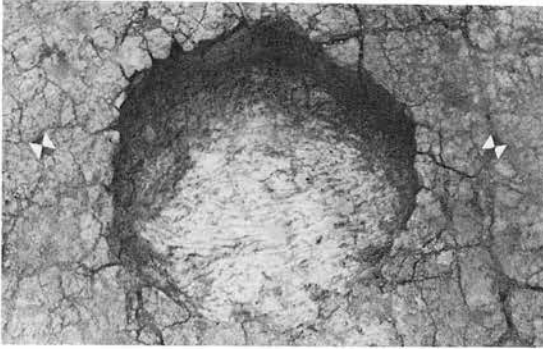


(8) D III j 7 土坑-2



(9) D III j 8 土坑-3

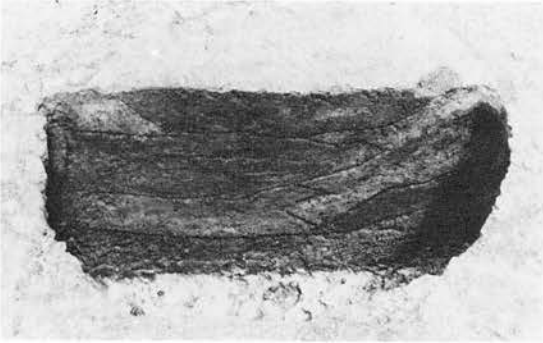
写真図版59 縄文一 I



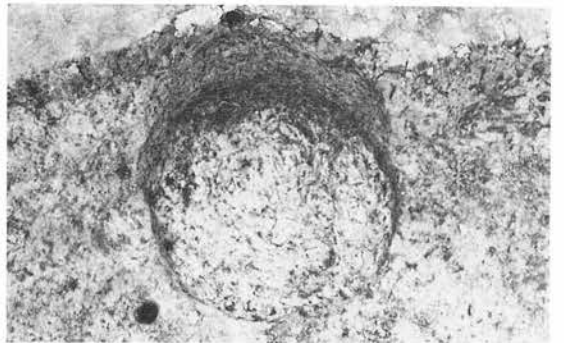
(10) D IV d 9 土坑



(11) E III a 7 土坑—2



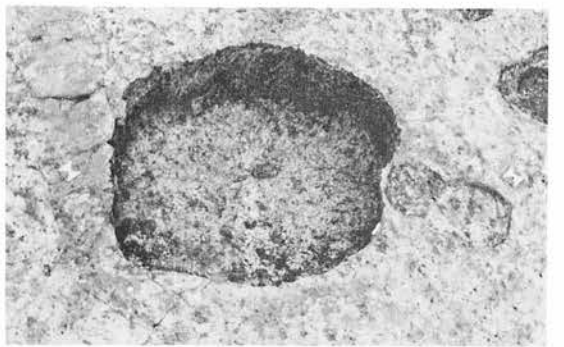
E III a 7 土坑—1



(12) E III a 7 土坑—3



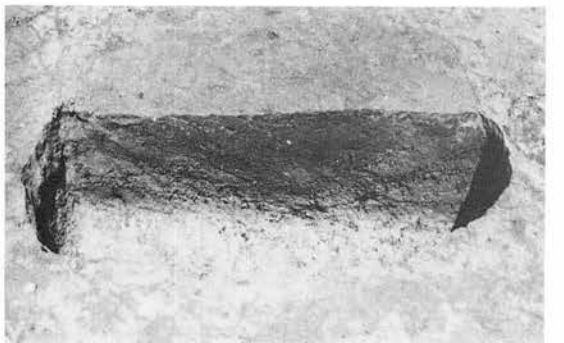
(13) E IV a 4 土坑



(15) C VII j 2 土坑

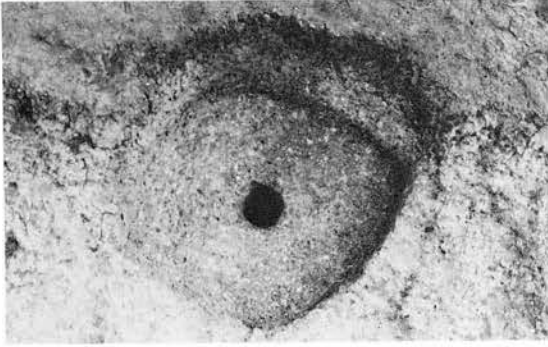


(14) C VII d 9 土坑



(15) C VII j 2 土坑断面

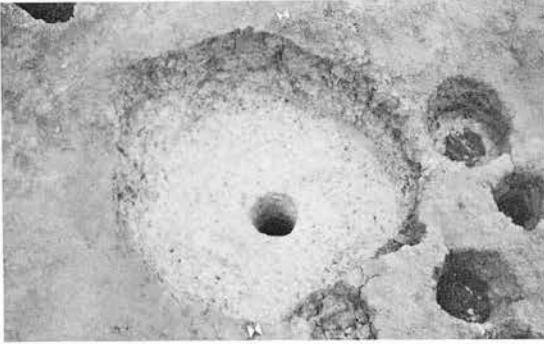
写真図版60 縄文—2



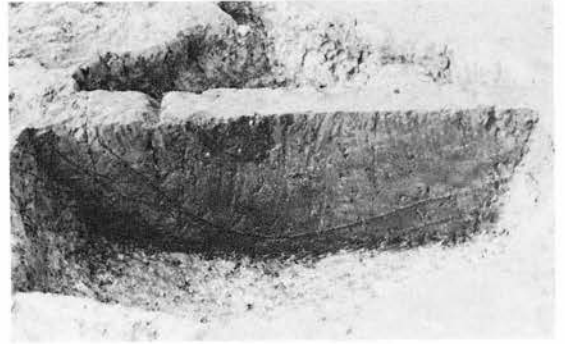
(1) C III a 1 陥L穴状遺構



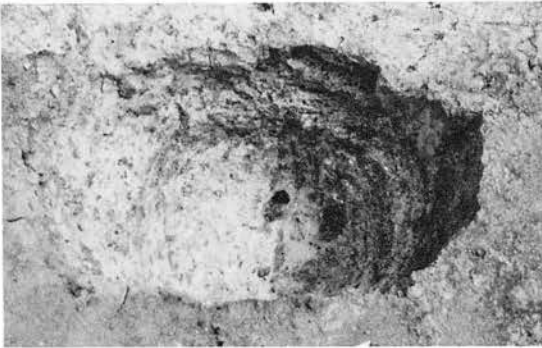
(2) C III b 4 陥L穴状遺構



(3) C III b 5 陥L穴状遺構



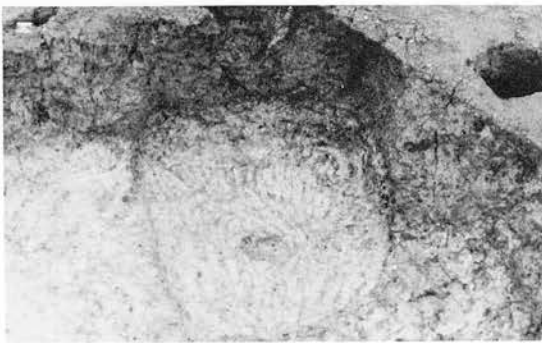
(3) C III b 4 陥L穴状遺構断面



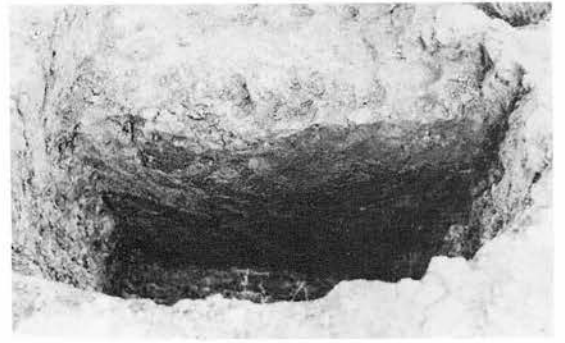
C III a 2 陥L穴状遺構



(5) C III c 5 陥L穴状遺構



(6) C III c 6 陥L穴状遺構



(5) C III c 5 陥L穴状遺構断面



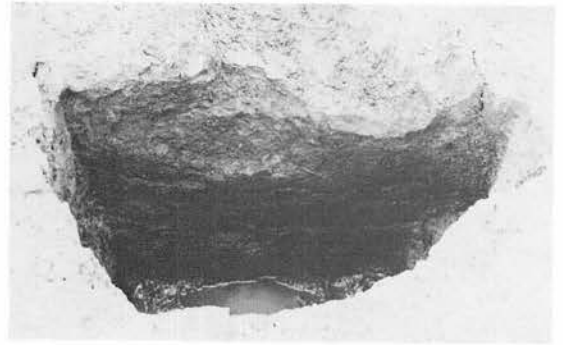
(7) C III j 10陥L穴状遺構



(8) C IV b 9陥L穴状遺構



(9) C IV b 10陥L穴状遺構



(8) C IV b 9陥L穴状遺構断面



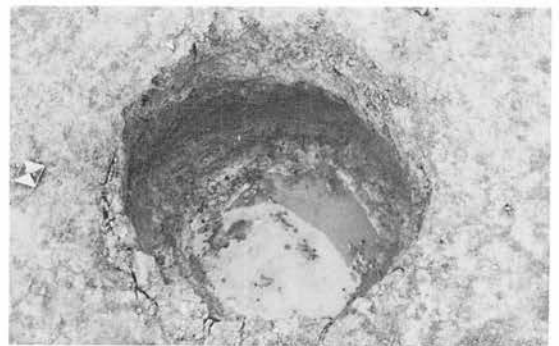
(10) C IV c 1陥L穴状遺構



(11) C IV c 2陥L穴状遺構



(12) C IV c 5陥L穴状遺構



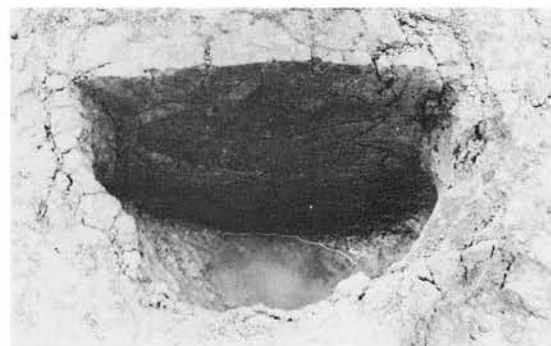
(13) C IV c 8陥L穴状遺構



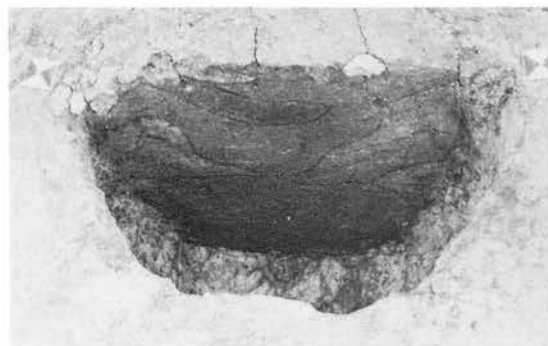
(14) C IV d 7 陥し穴状遺構



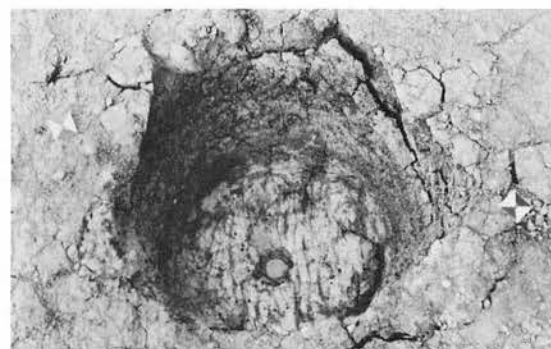
(15) D II j 10 陥し穴状遺構



(14) C IV d 7 陥し穴状遺構断面



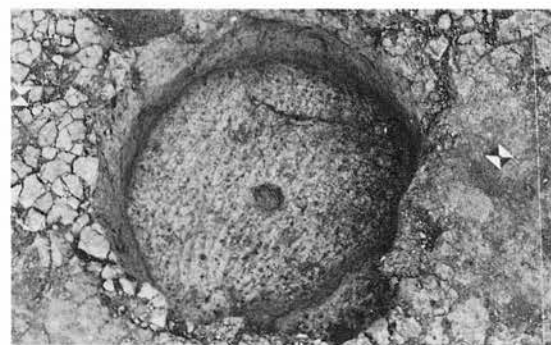
(15) D II j 10 陥し穴状遺構断面



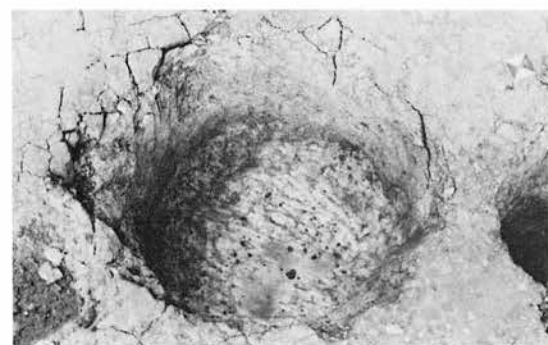
(16) D III b 7 陥し穴状遺構



(17) D III b 8 陥し穴状遺構



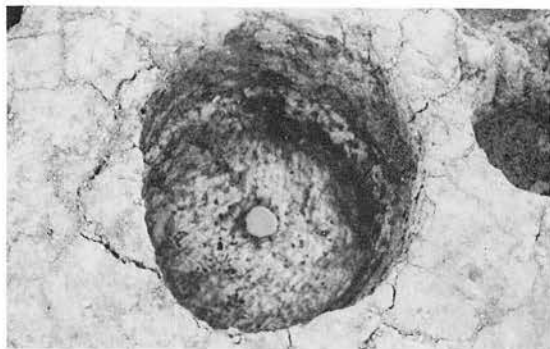
(18) D III c 9 陥し穴状遺構



(19) D III d 3 陥し穴状遺構



(20) D III f 3 陥し穴状遺構



(21) D III g 2 陥し穴状遺構



(22) D III h 8 陥し穴状遺構



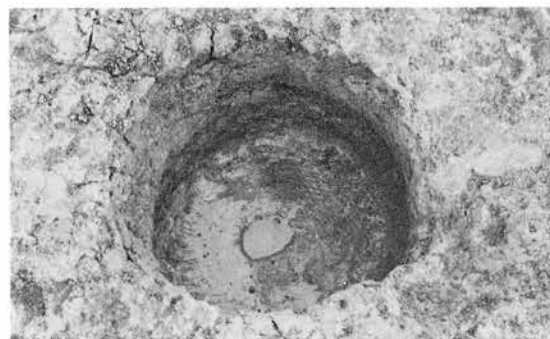
(23) D III i 1 陥し穴状遺構



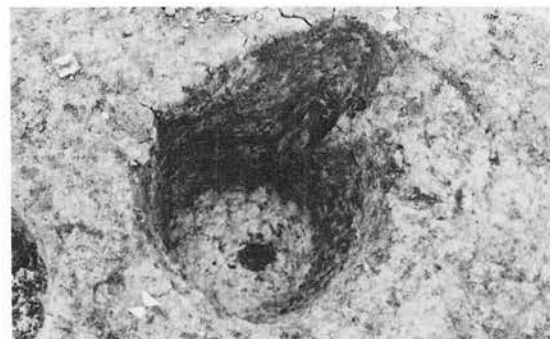
(22) D III h 8 陥し穴状遺構断面



(24) D IV a 1 陥し穴状遺構



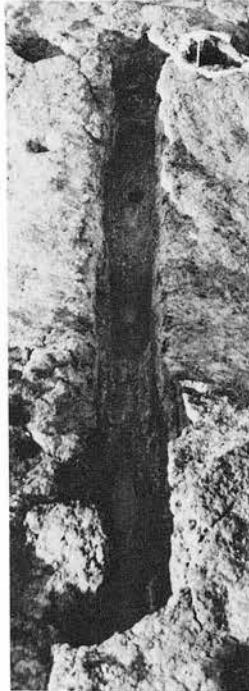
(25) D IV b 2 陥し穴状遺構



(26) E II a 10 陥し穴状遺構一 I



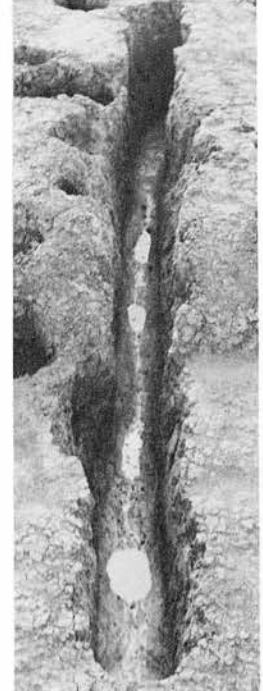
(1) C III g 1 陷L穴状遺構



(2) C III i 3 陷L穴状遺構



(3) C IV c 4 陷L穴状遺構



(4) C IV g 6 陷L穴状遺構



(5) D II a 8 陷L穴状遺構



(6) D II d 9 陷L穴状遺構



(7) D II e 9 陷L穴状遺構



(8) D III b 8 陷L穴状遺構

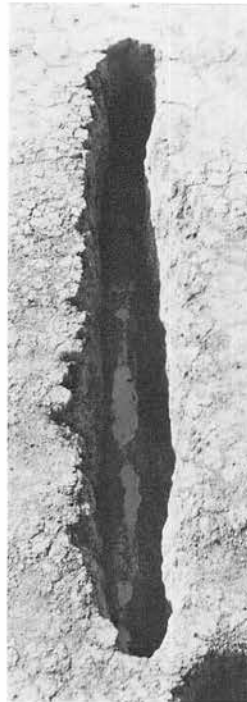
写真図版65 縄文一7



(9) B V j 9 陥L穴状遺構



(10) C V b 8 陥L穴状遺構



(11) C V c 7 陥L穴状遺構



(13) C VI d 10 陥L穴状遺構



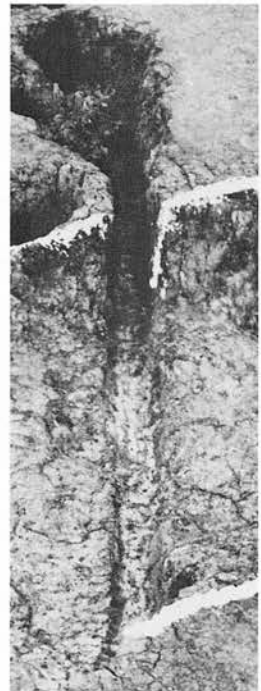
(14) C VI e 7 陥L穴状遺構



(15) C VI h 7 陥L穴状遺構



(16) C VI i 6 陥L穴状遺構



(17) C VI i 7 陥L穴状遺構

写真図版66 縄文—8



(18) C VII d 1 陥L穴状遺構



(19) C VII d 2 陥L穴状遺構



(20) C VII j 1 陥L穴状遺構



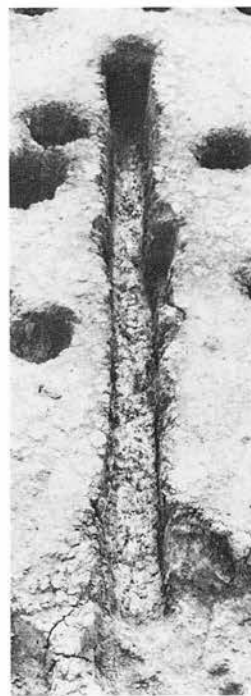
(21) D V b 7 陥L穴状遺構



(22) D V b 8 陥L穴状遺構



(23) D V e 7 陥L穴状遺構



(24) D V f 10 陥L穴状遺構—1

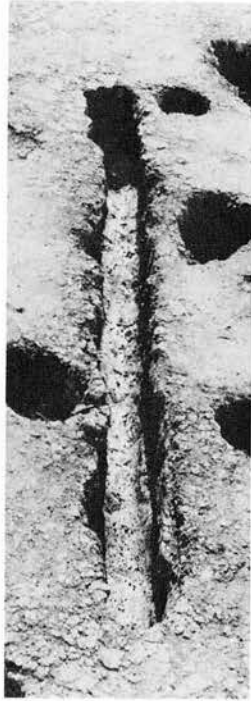


(25) D V f 10 陥L穴状遺構—2

写真図版67 縄文—9



(26) DV g 6陷L穴状遺構



(27) DV g 8陷L穴状遺構



(28) DV g 9陷L穴状遺構



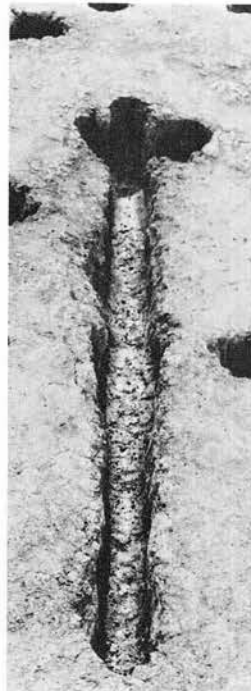
(29) DV g 10陷L穴状遺構



(30) DV h 5陷L穴状遺構



(31) DV h 7陷L穴状遺構-I



(32) DV h 7陷L穴状遺構-2



(33) DV l a 6陷L穴状遺構

写真図版68 縄文—10



(34) DVI b 5 陥L穴状遺構



(35) DVI b 6 陥L穴状遺構



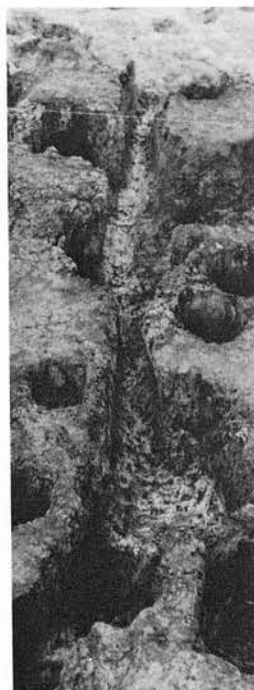
(36) DVI c 4 陥L穴状遺構



(37) DVI c 5 陥L穴状遺構



(38) DVI c 7 陥L穴状遺構



(39) DVI c 8 陥L穴状遺構



(40) DVI e 1 陥L穴状遺構



(41) DVI e 2 陥L穴状遺構



(42) D VI e 3 陥し穴状遺構



(43) D VI f 1 陥し穴状遺構



(44) D VII c 6 陥し穴状遺構



(45) D VII d 5 陥し穴状遺構



(1) D II g 10 陥し穴状遺構



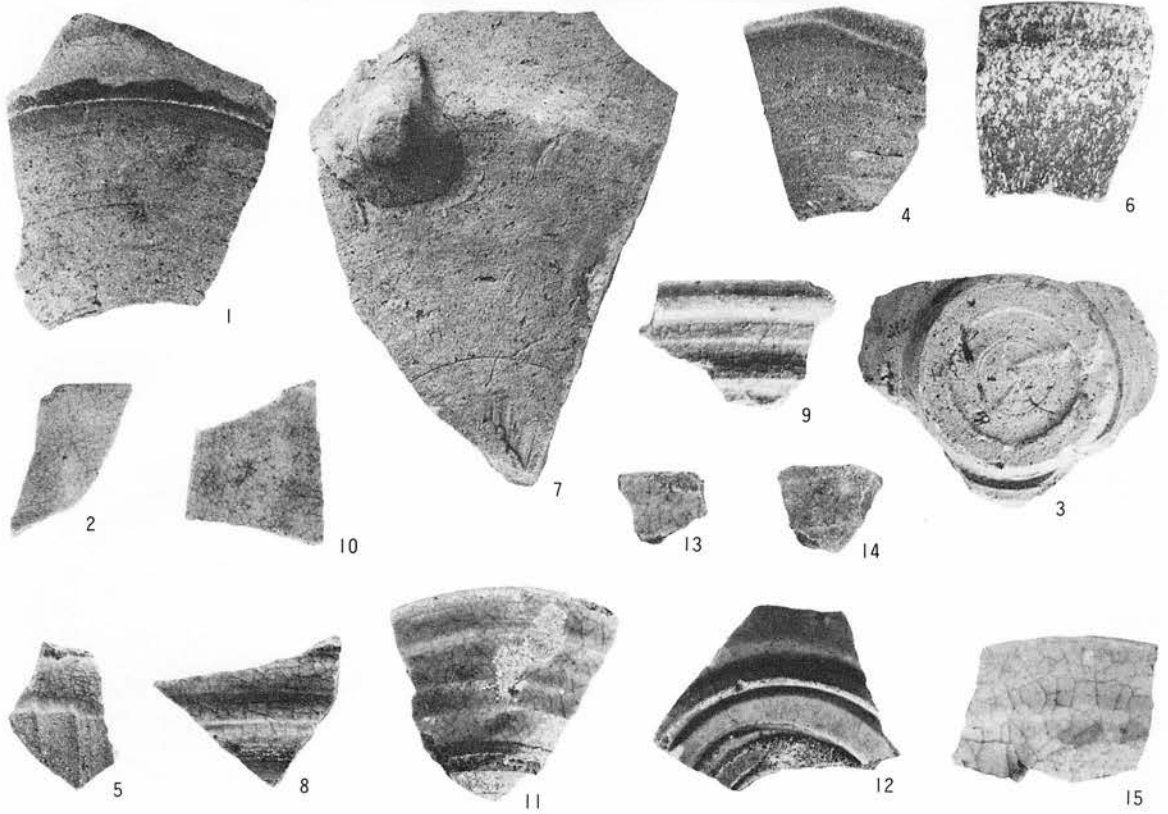
(2) D II i 10 陥し穴状遺構



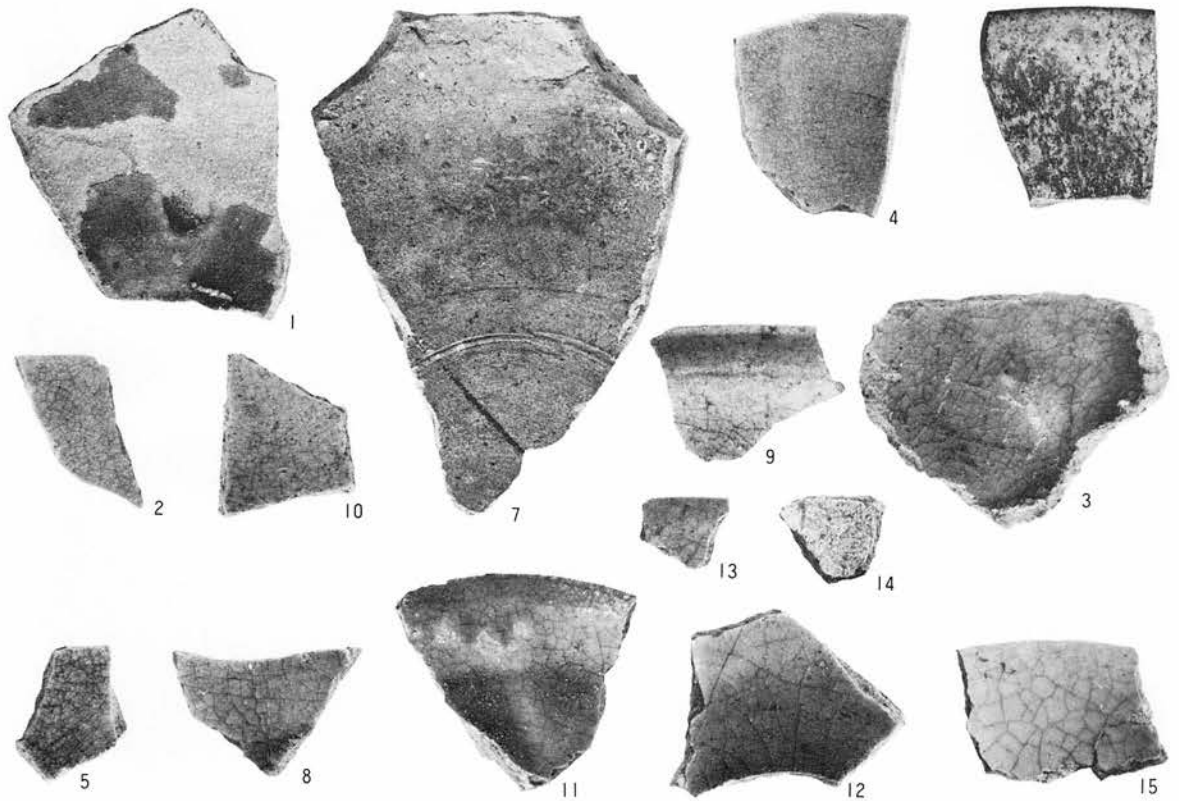
(3) D II a 10 陥し穴状遺構—2



写真図版70 縄文—12



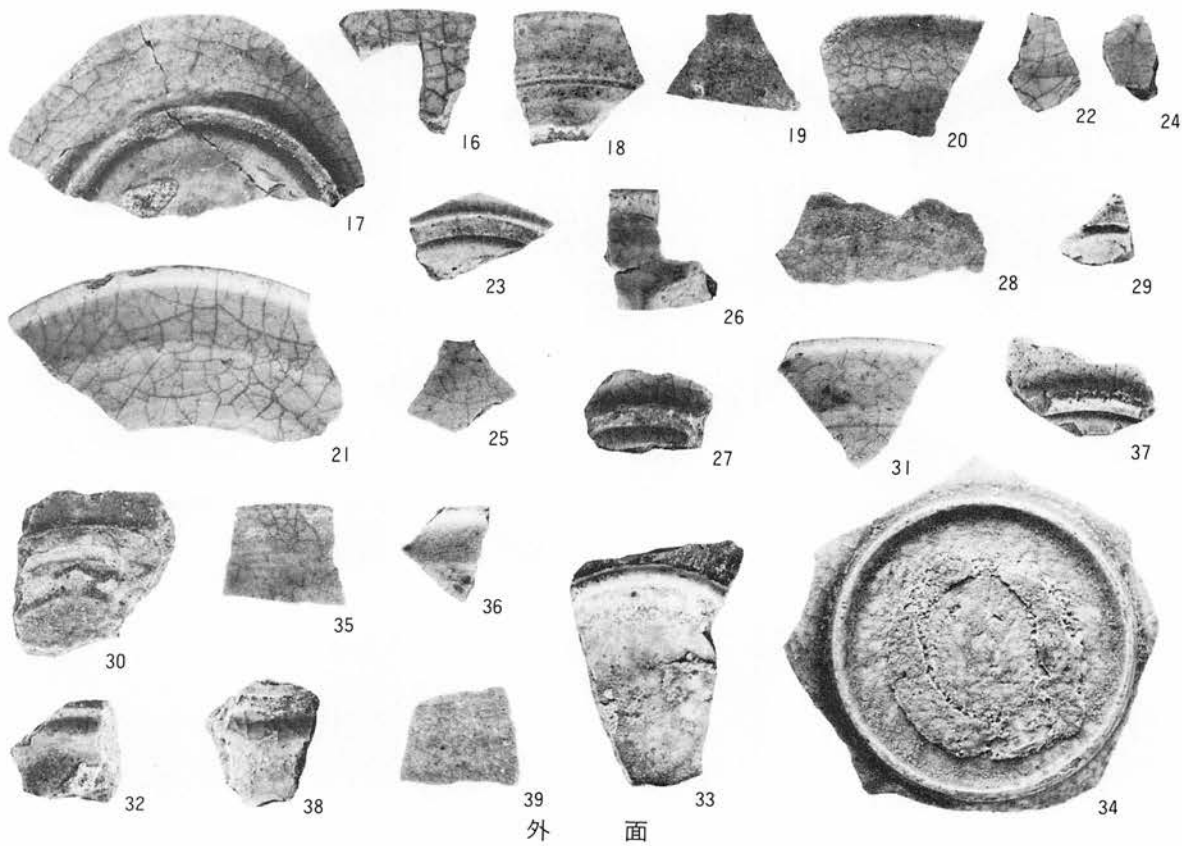
外 面



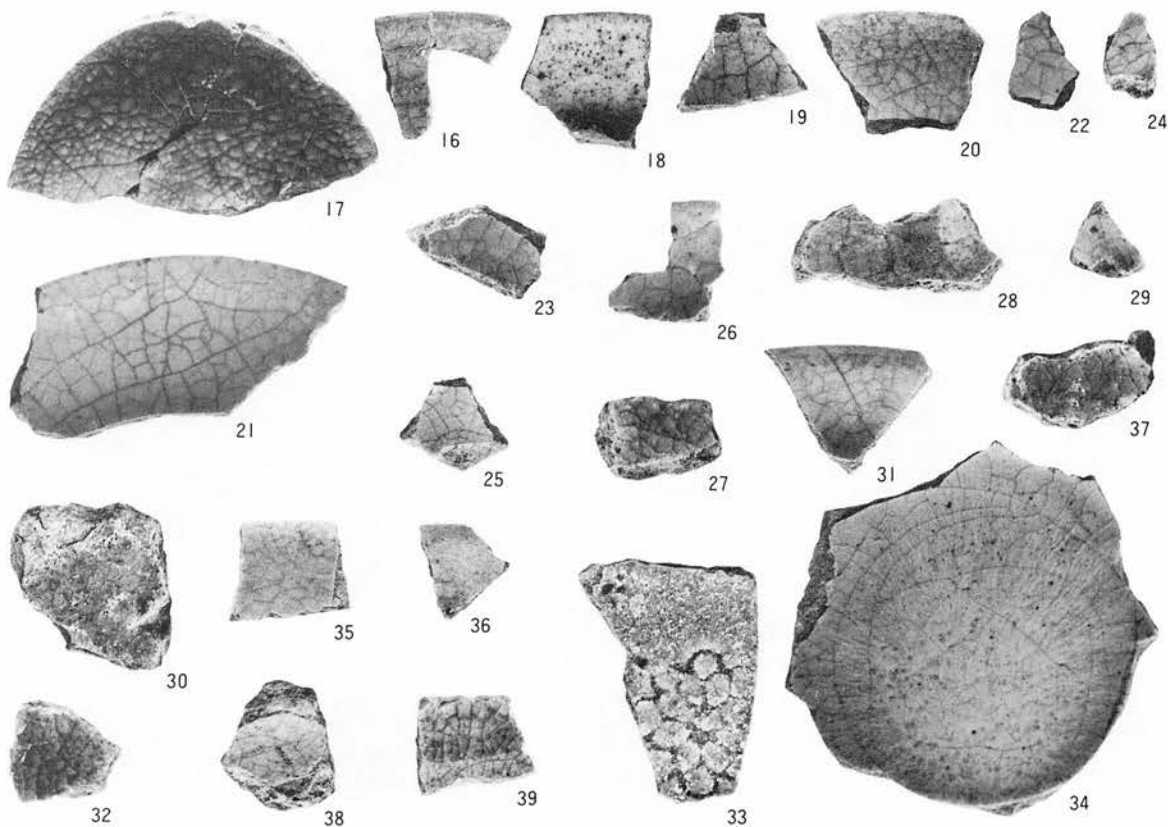
内 面

1-15 縮尺 $\frac{2}{3}$

写真図版71 瀬戸・美濃系灰釉陶器(1)

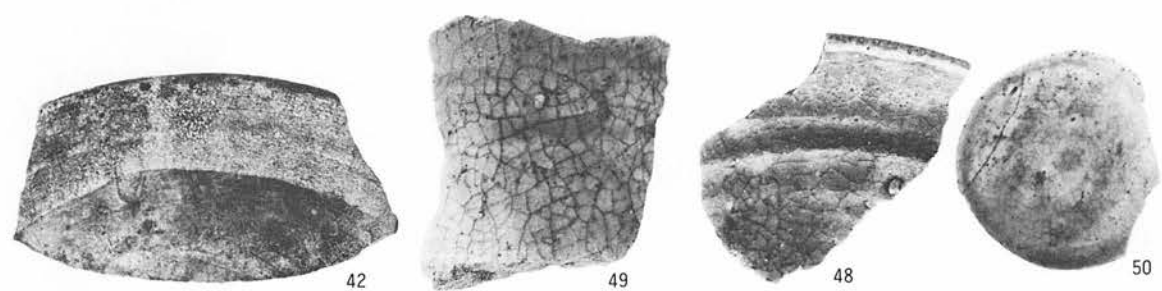
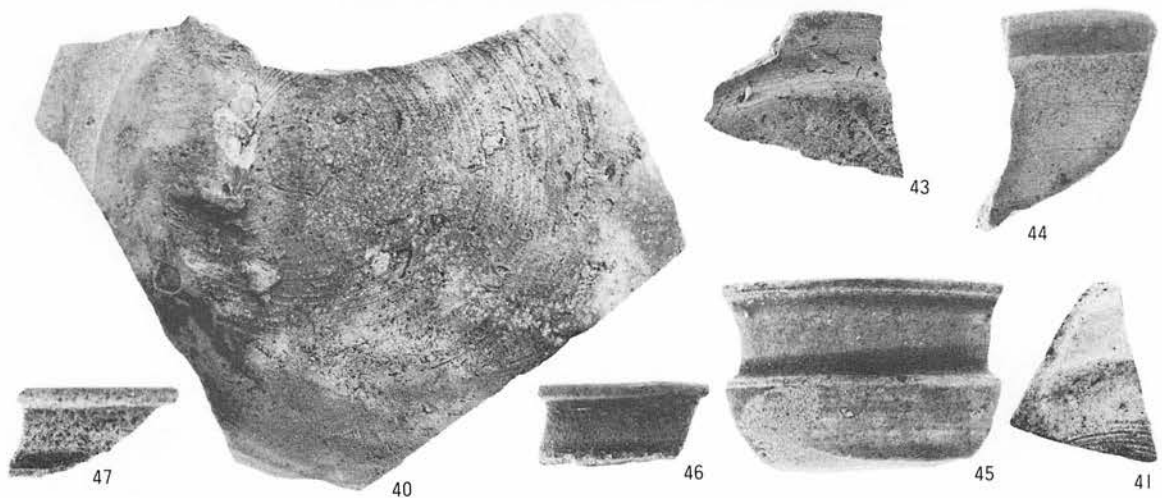


外 面

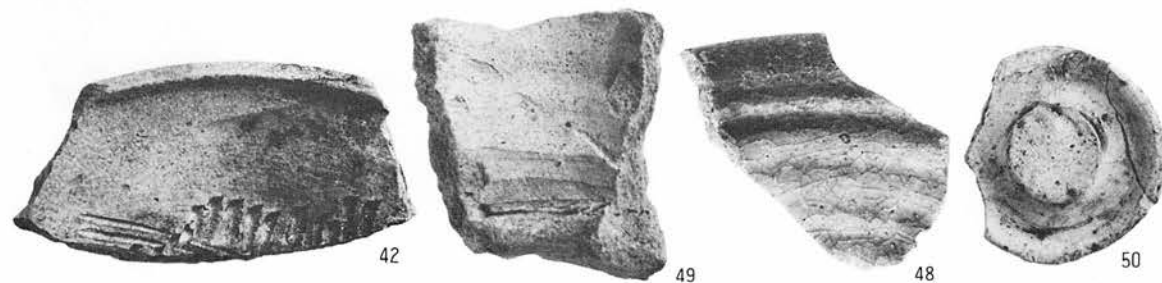
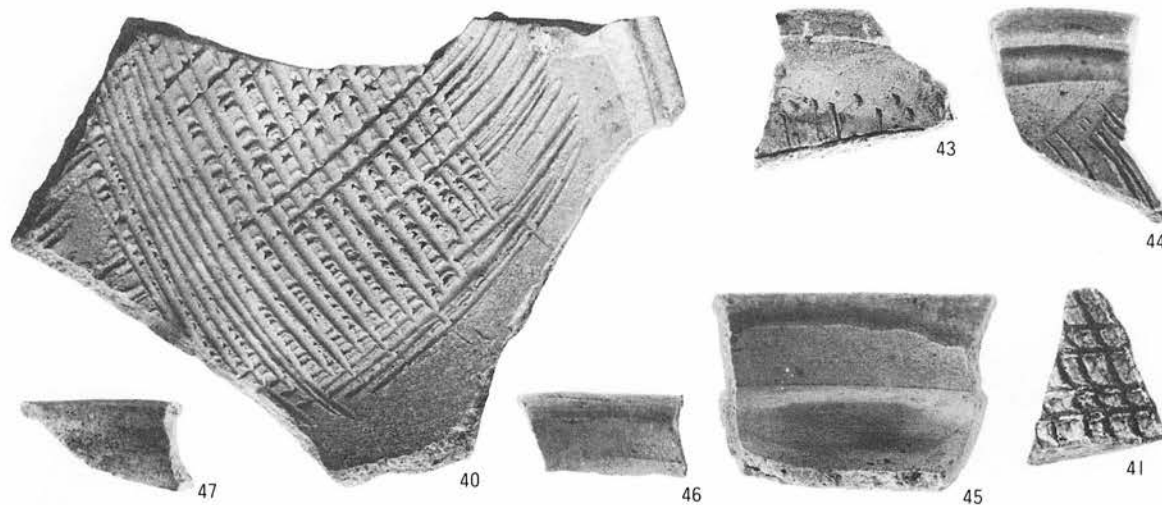


内 面

16~39 縮尺号

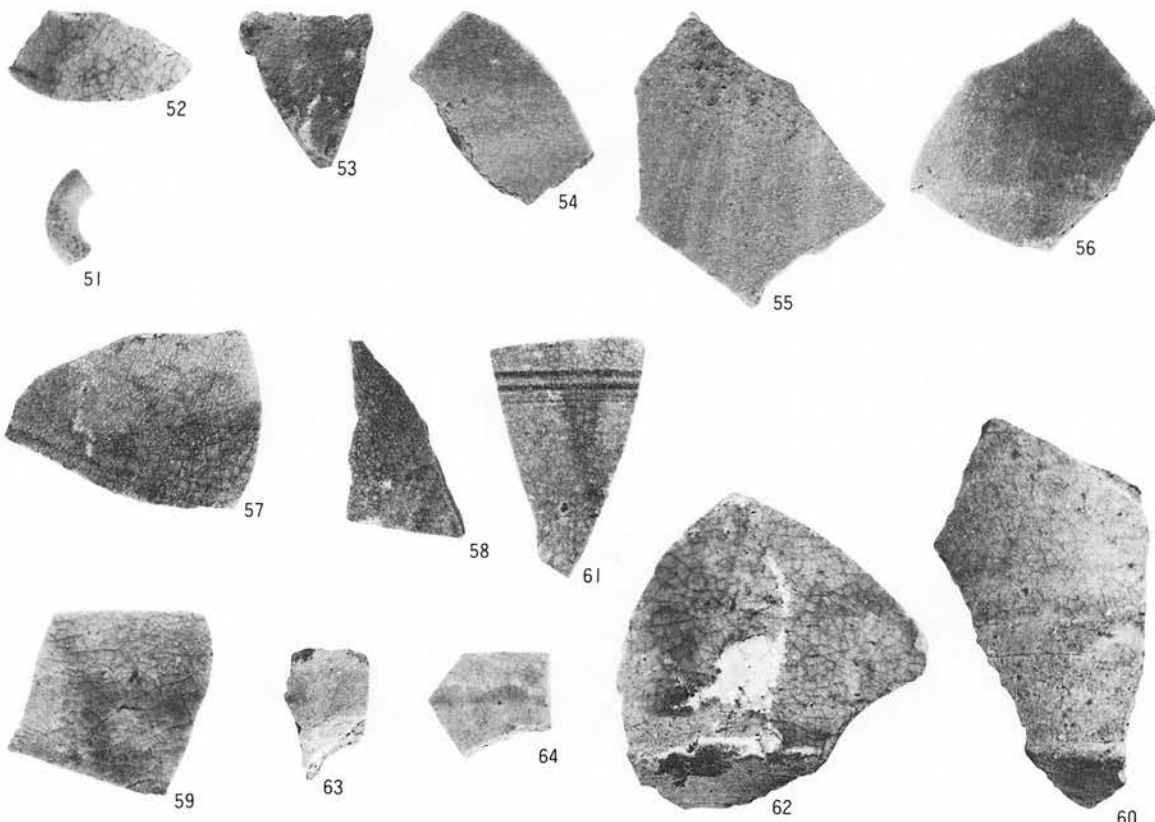


外 面

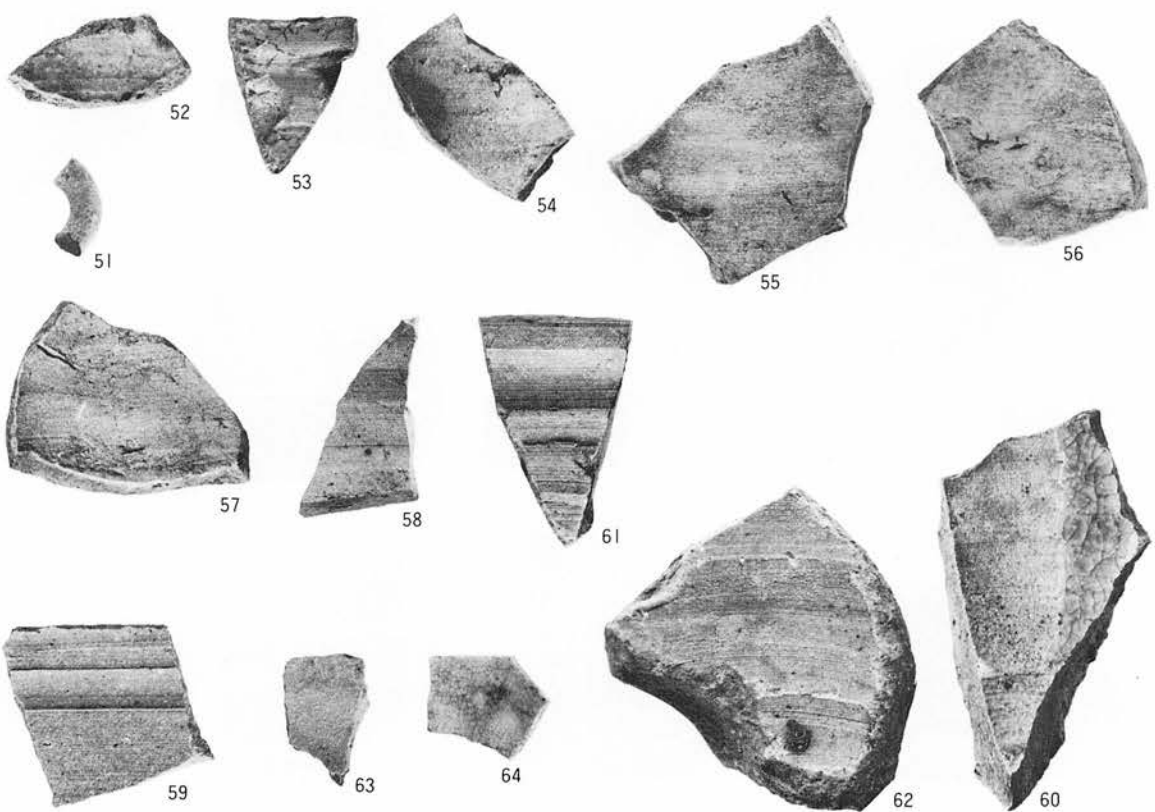


内 面

40~50 縮尺 $\frac{2}{3}$



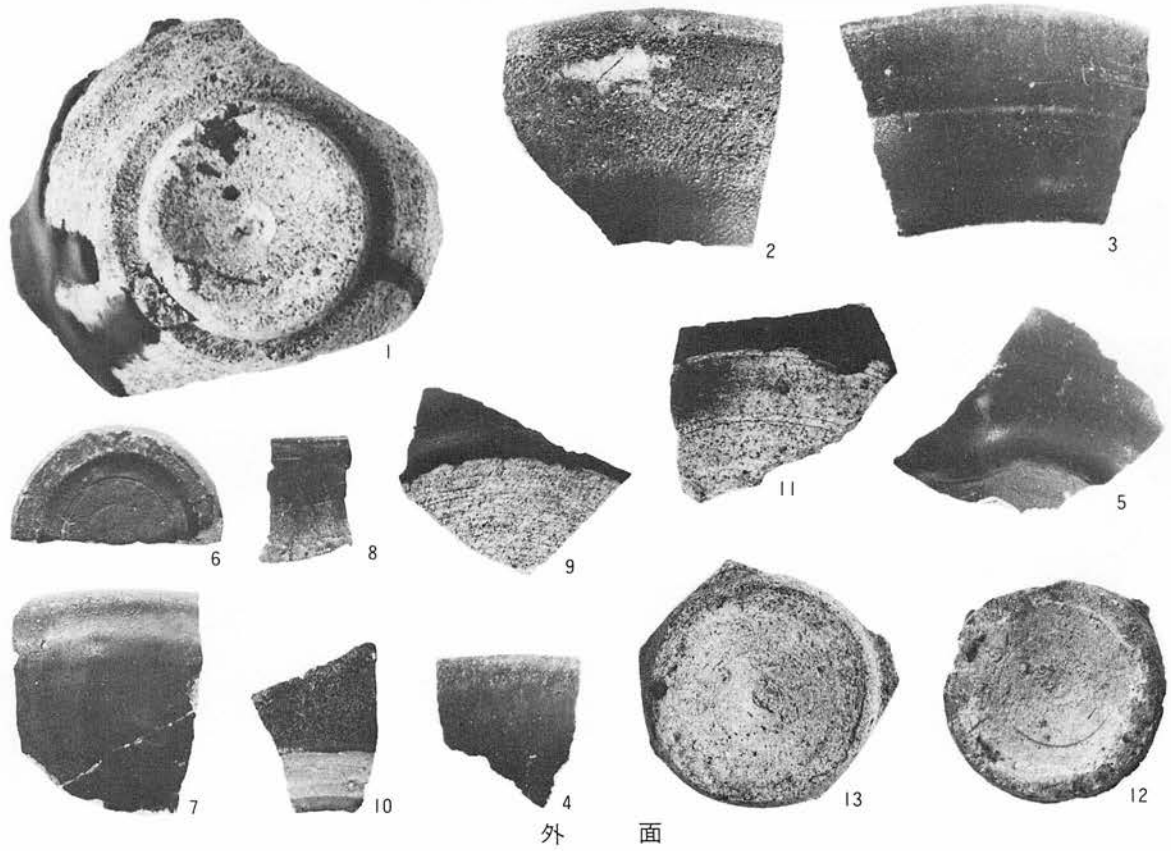
外 面



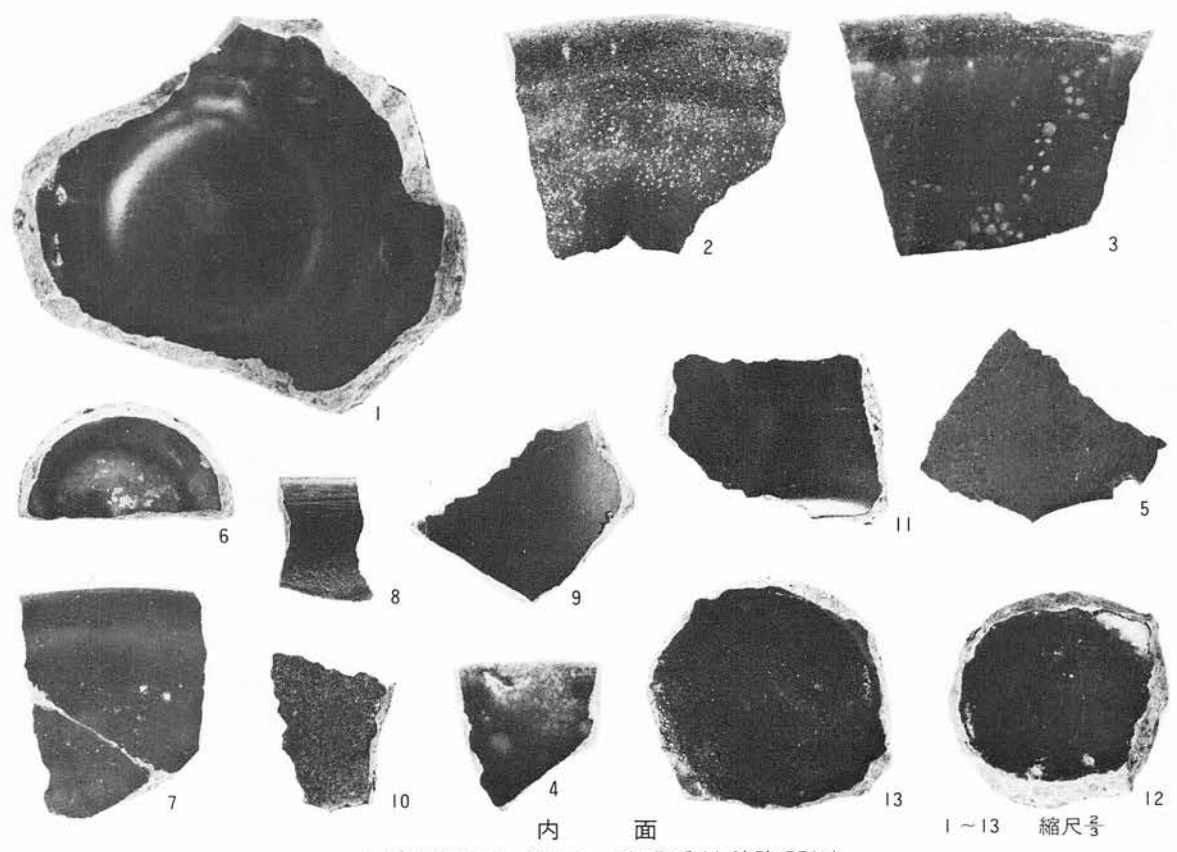
内 面

51~64 縮尺 $\frac{2}{3}$

写真図版74 瀬戸・美濃系灰釉陶器(4)



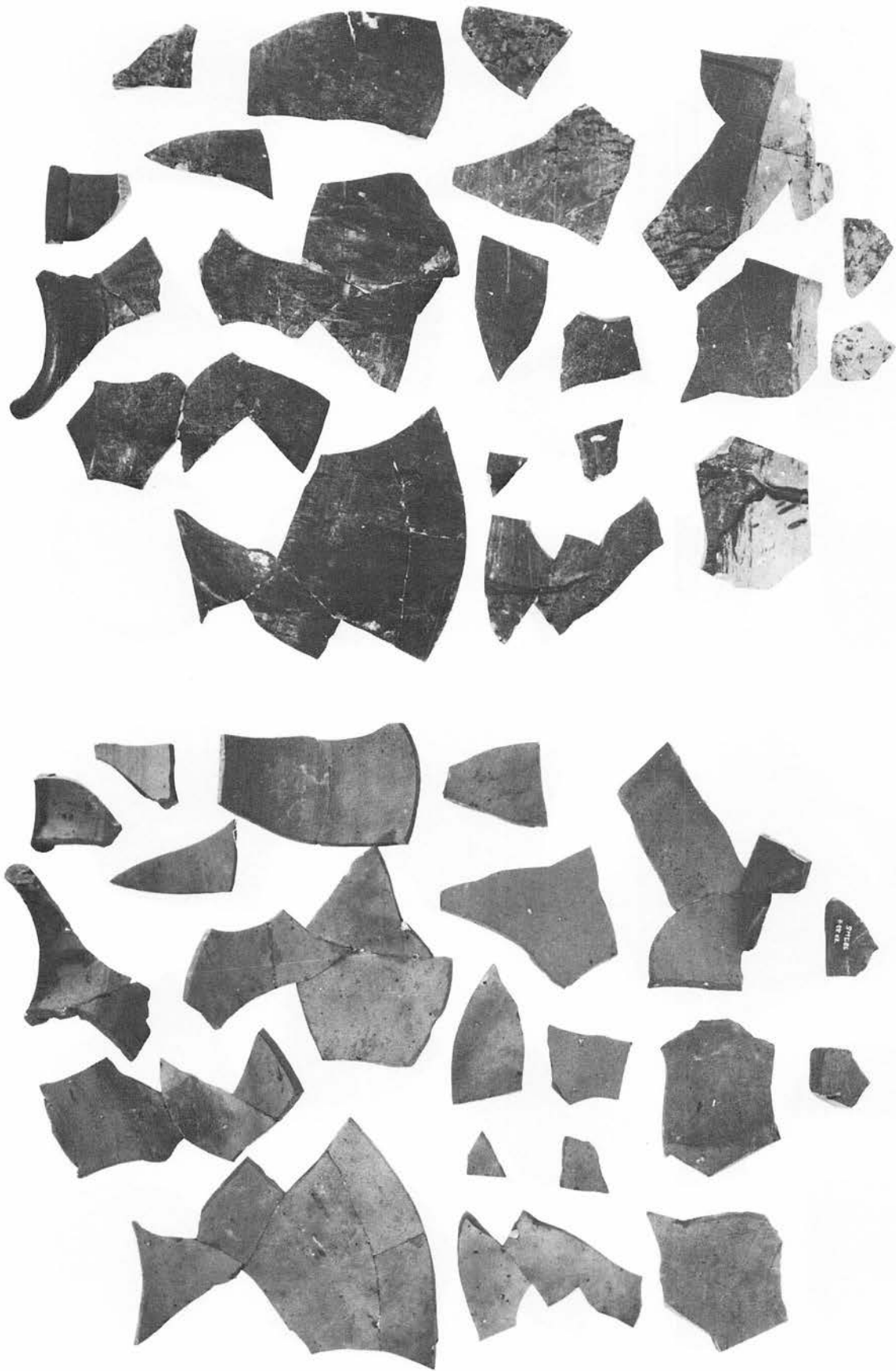
外 面



内 面

1~13 縮尺号

写真図版75 瀬戸・美濃系鉄釉陶器(1)



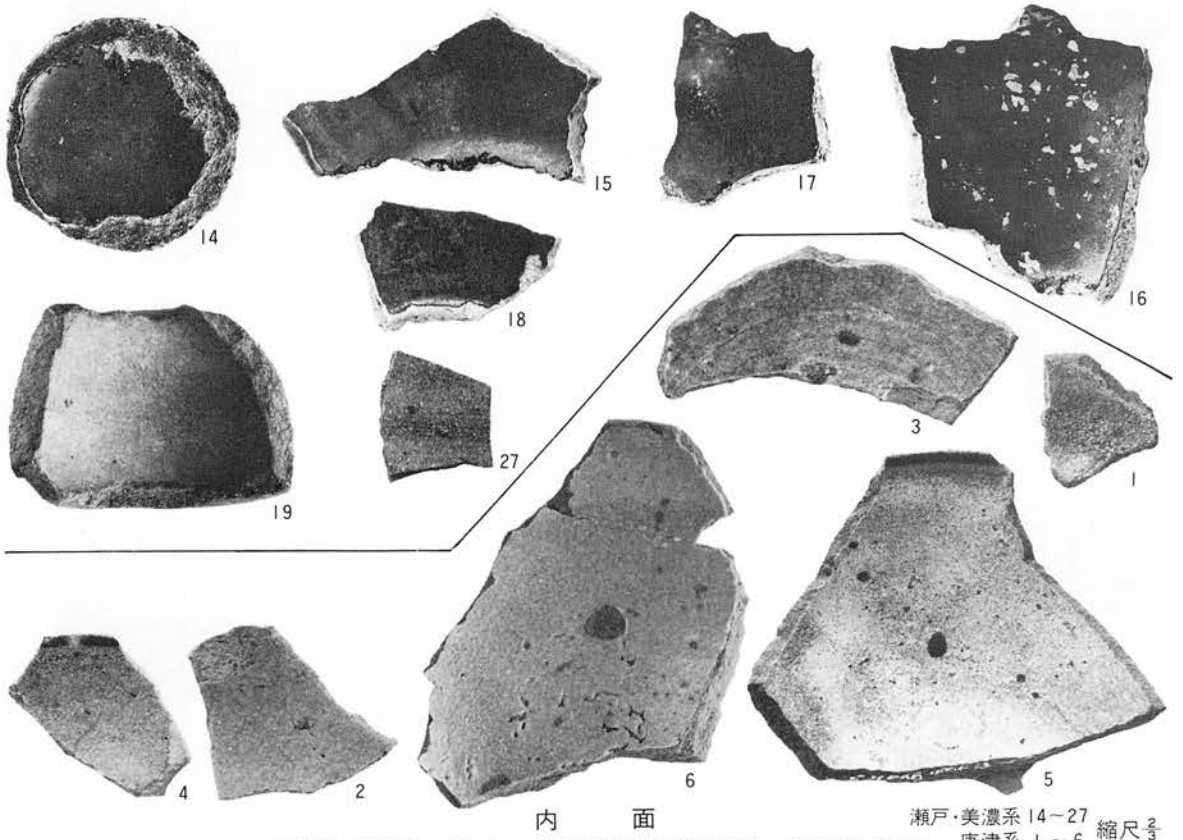
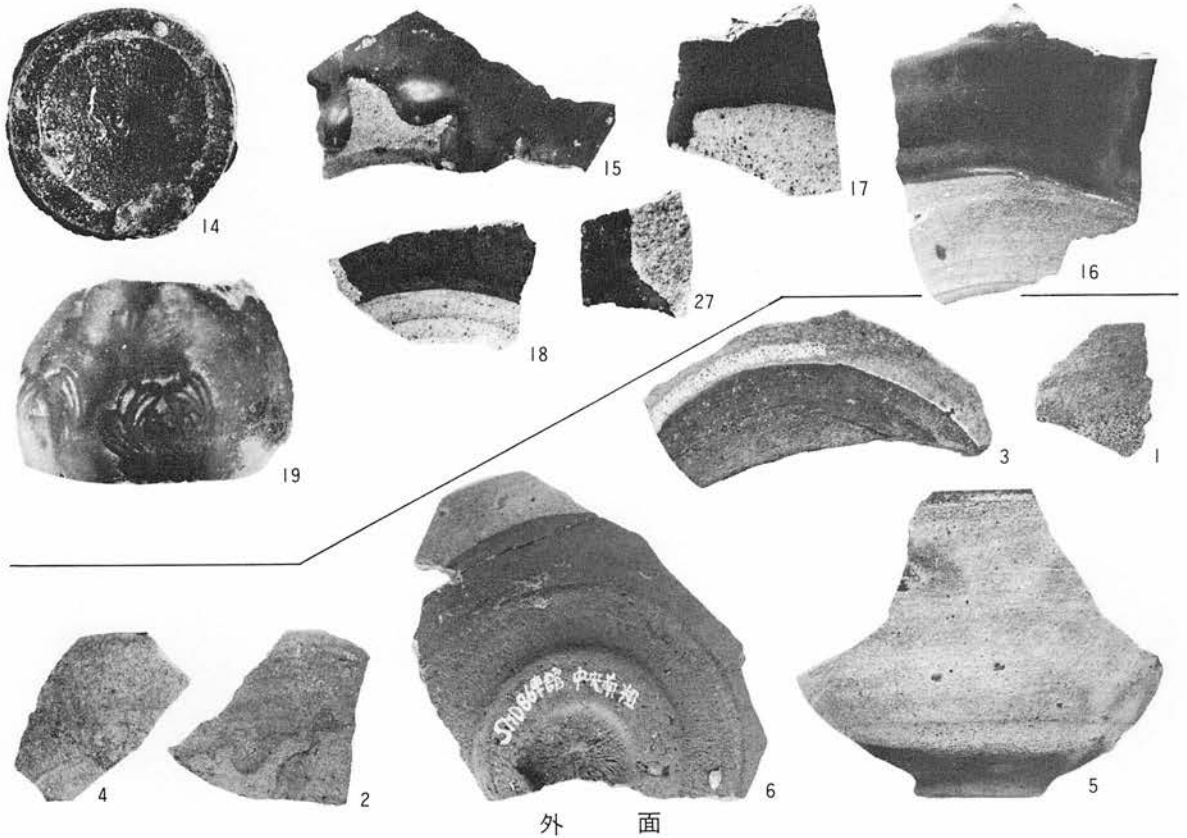
外面

内面

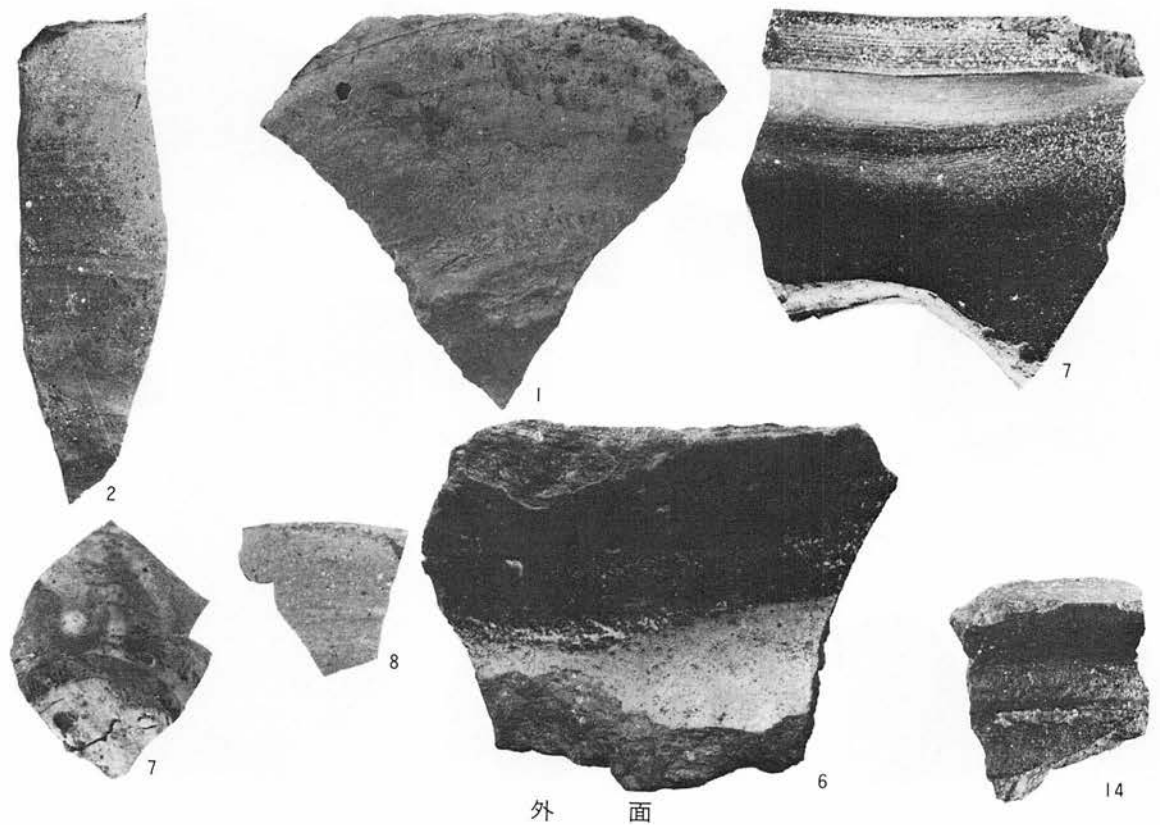
(同個体の破片)

縮尺約1/3

写真図版76 瀬戸、美濃系鉄釉陶器(2)



写真図版77 瀬戸・美濃系鉄釉陶器(3)・唐津系陶器
瀬戸・美濃系 14~27 縮尺 2/3
唐津系 1~6



写真図版78 朝鮮陶器・その他の国産陶器

縮尺 $\frac{2}{3}$ ・ $\frac{1}{2}$



外 面



外 面



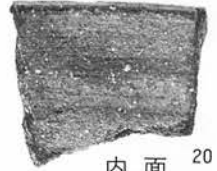
外 面 20



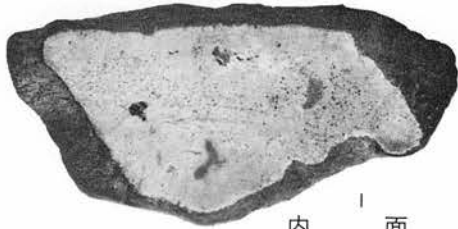
外 面



18



内 面 20



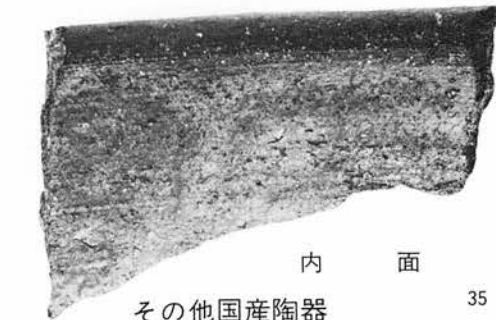
内 面



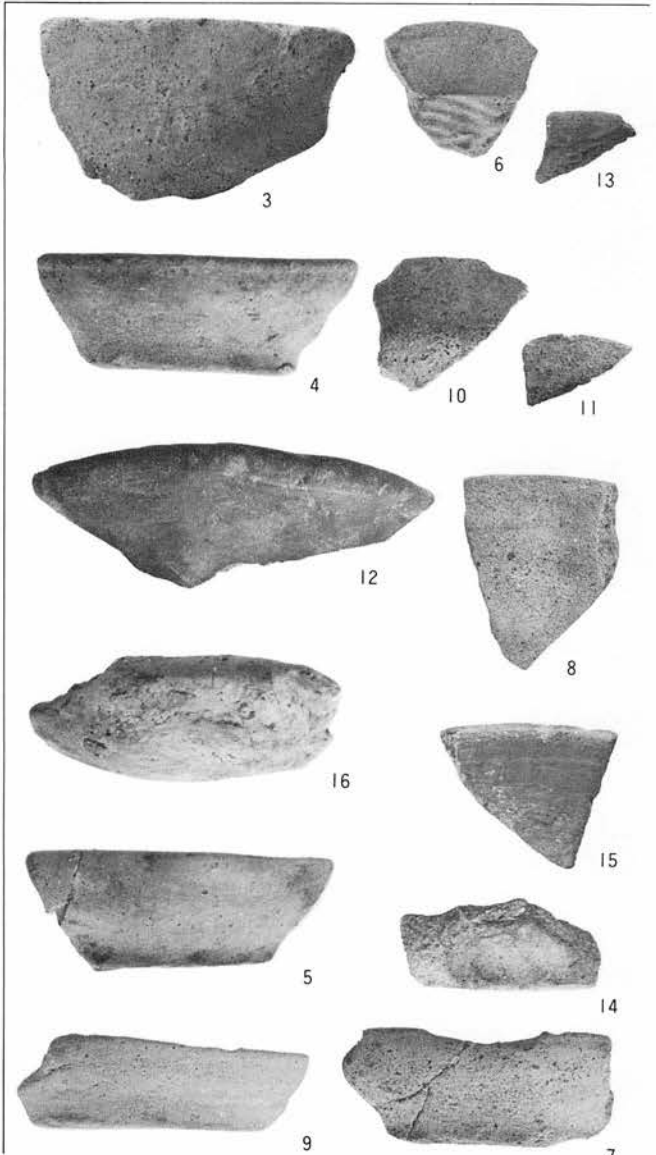
底 面



外 面 35

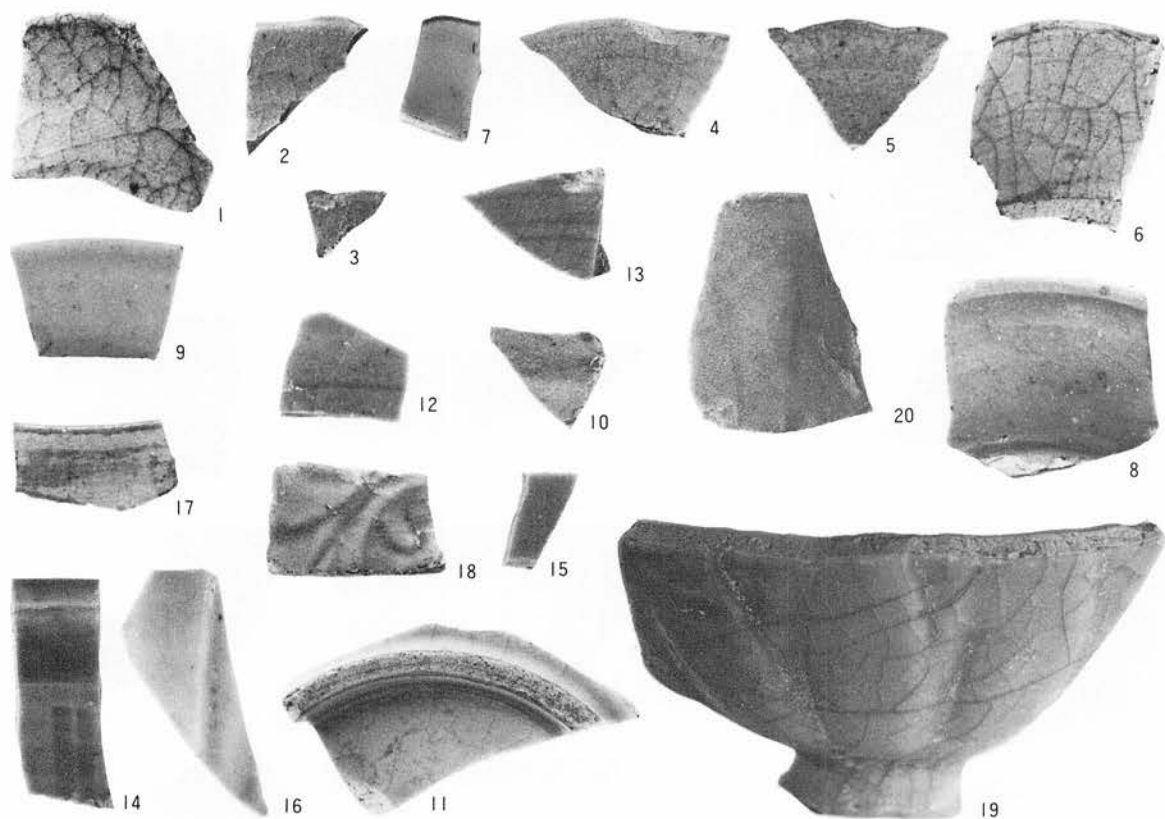


内 面 35
その他国産陶器

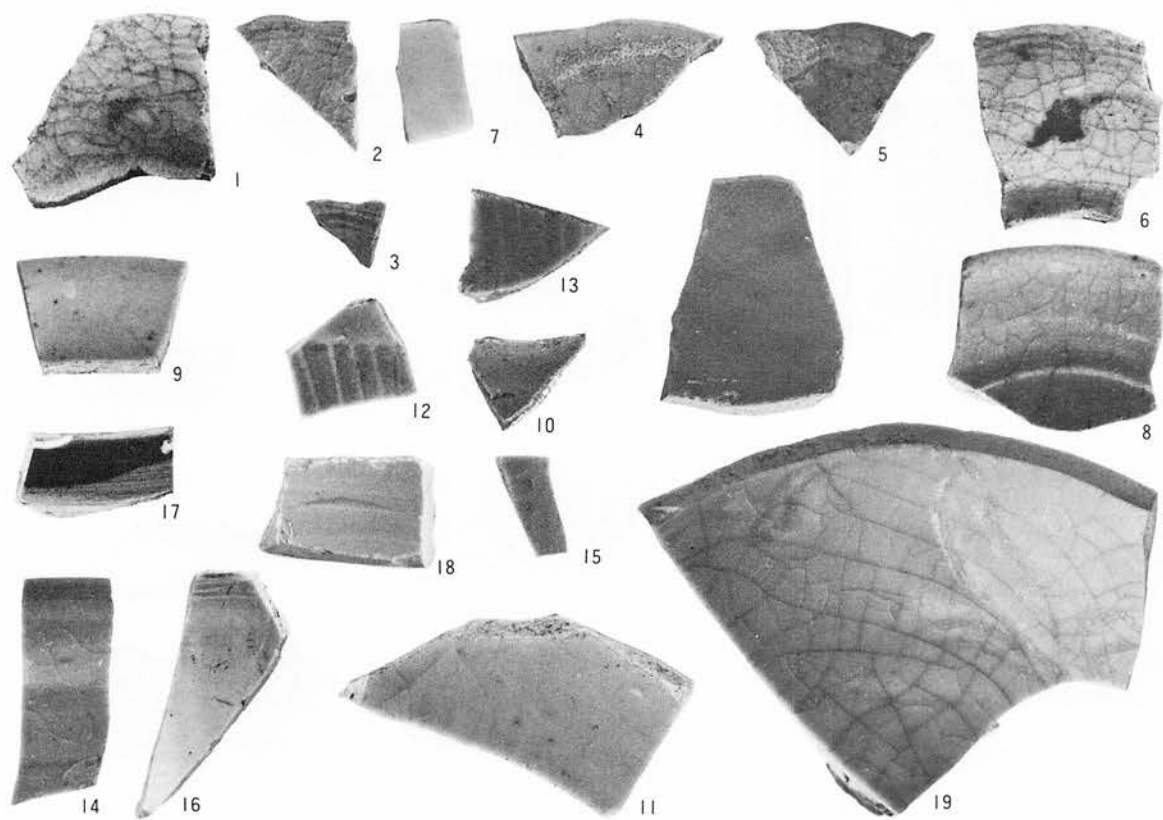


縮尺 $\frac{2}{3} \cdot \frac{1}{2}$

写真図版79 その他国産の陶器(2)・カクラケ

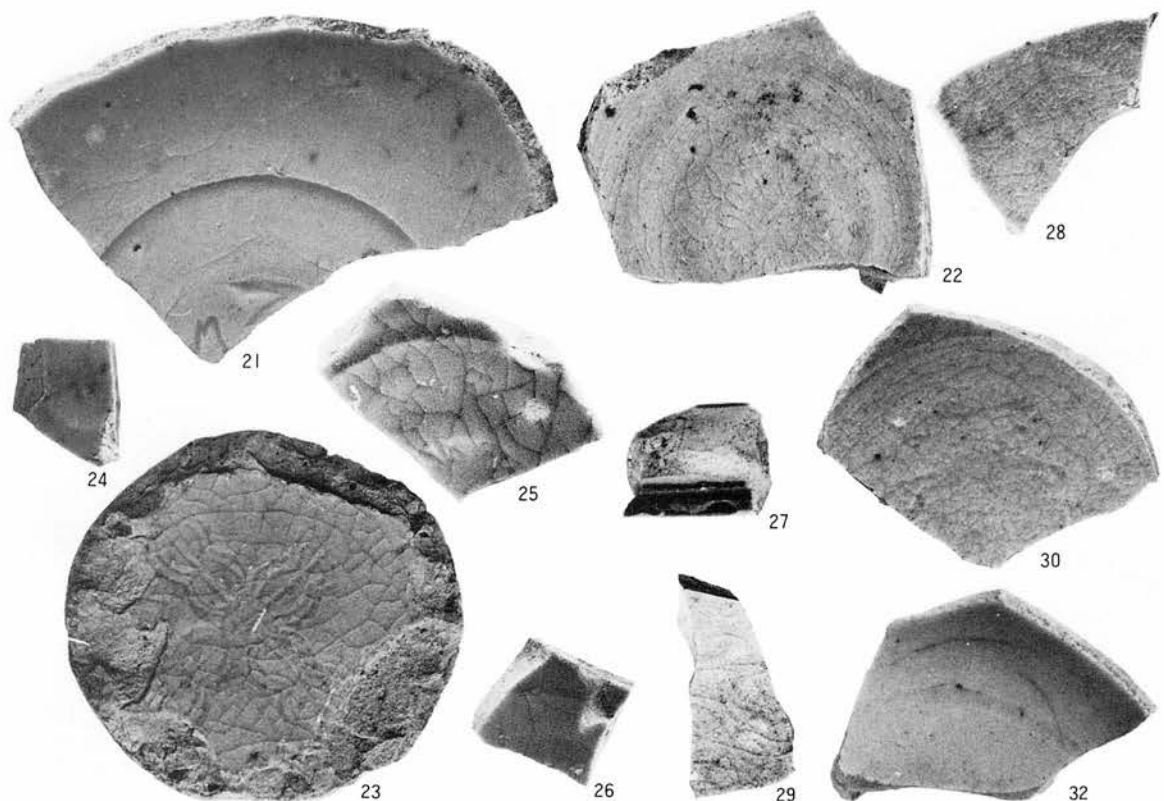
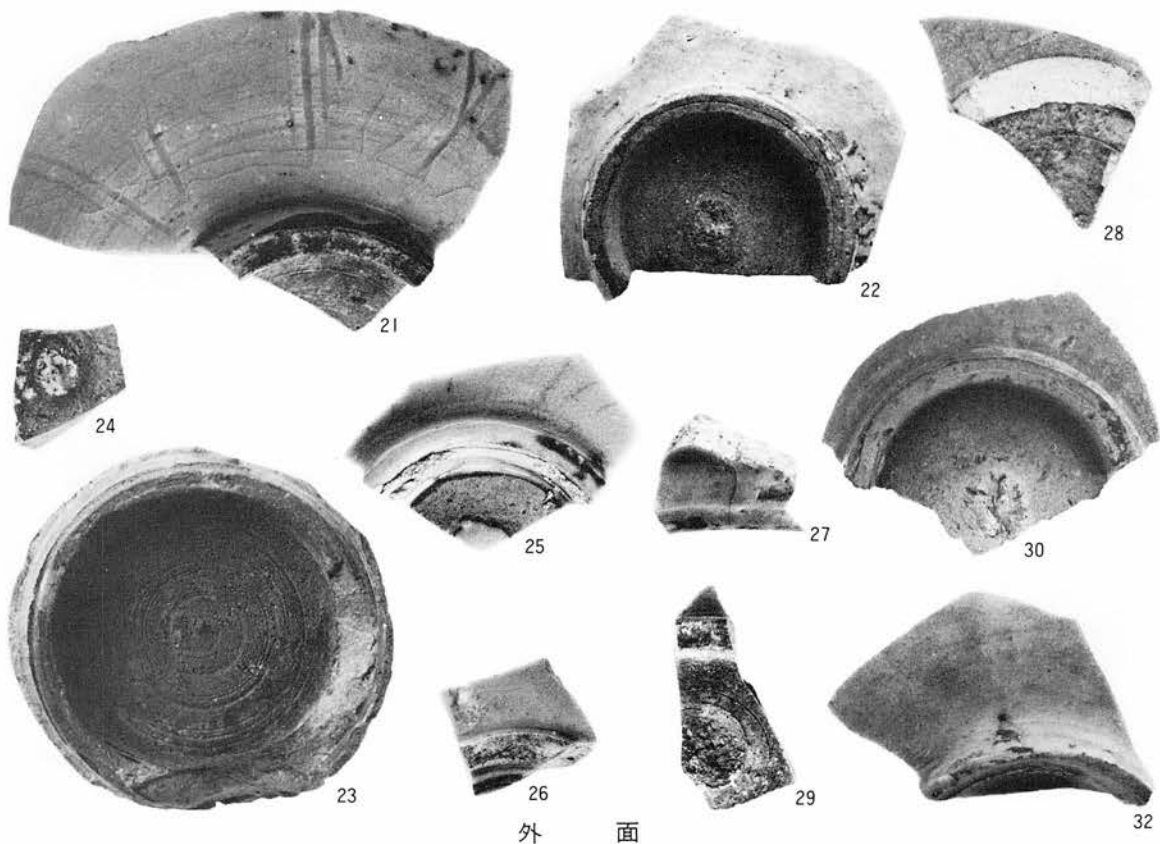


外 面



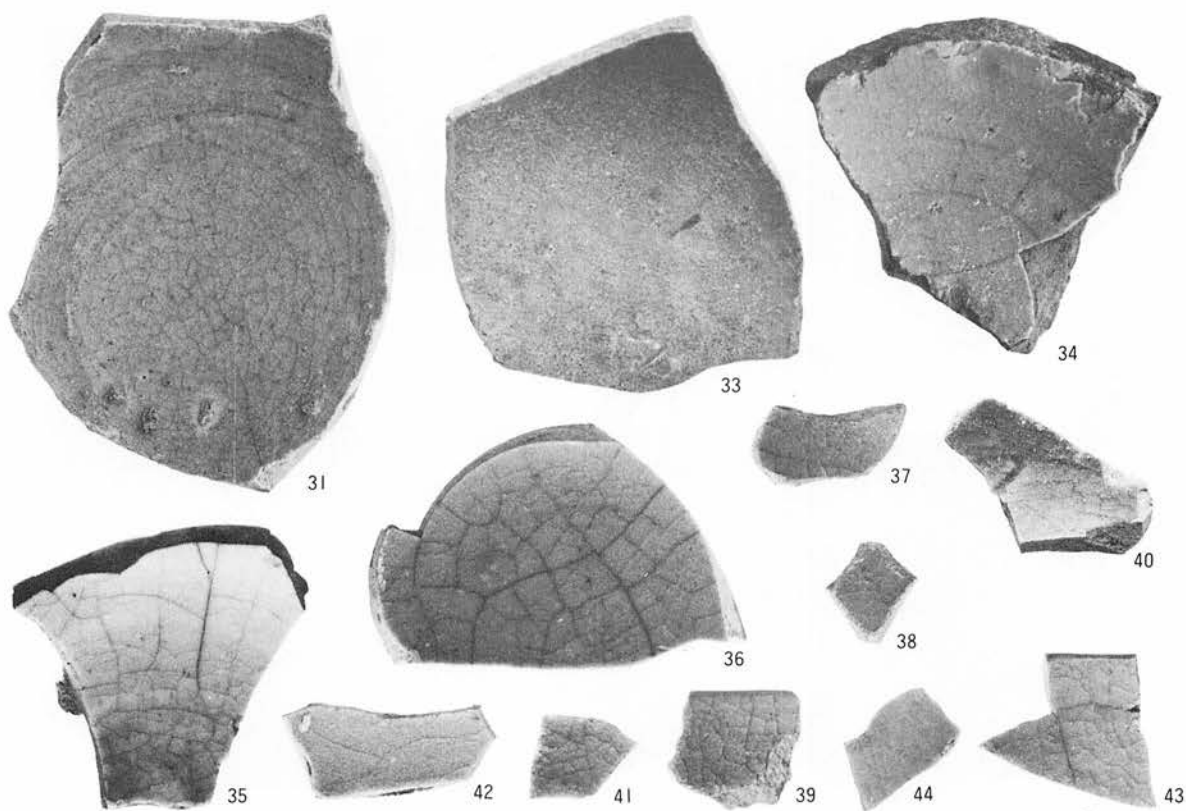
内 面
写真図版80 青磁(1)

1~19 縮尺 $\frac{1}{2}$



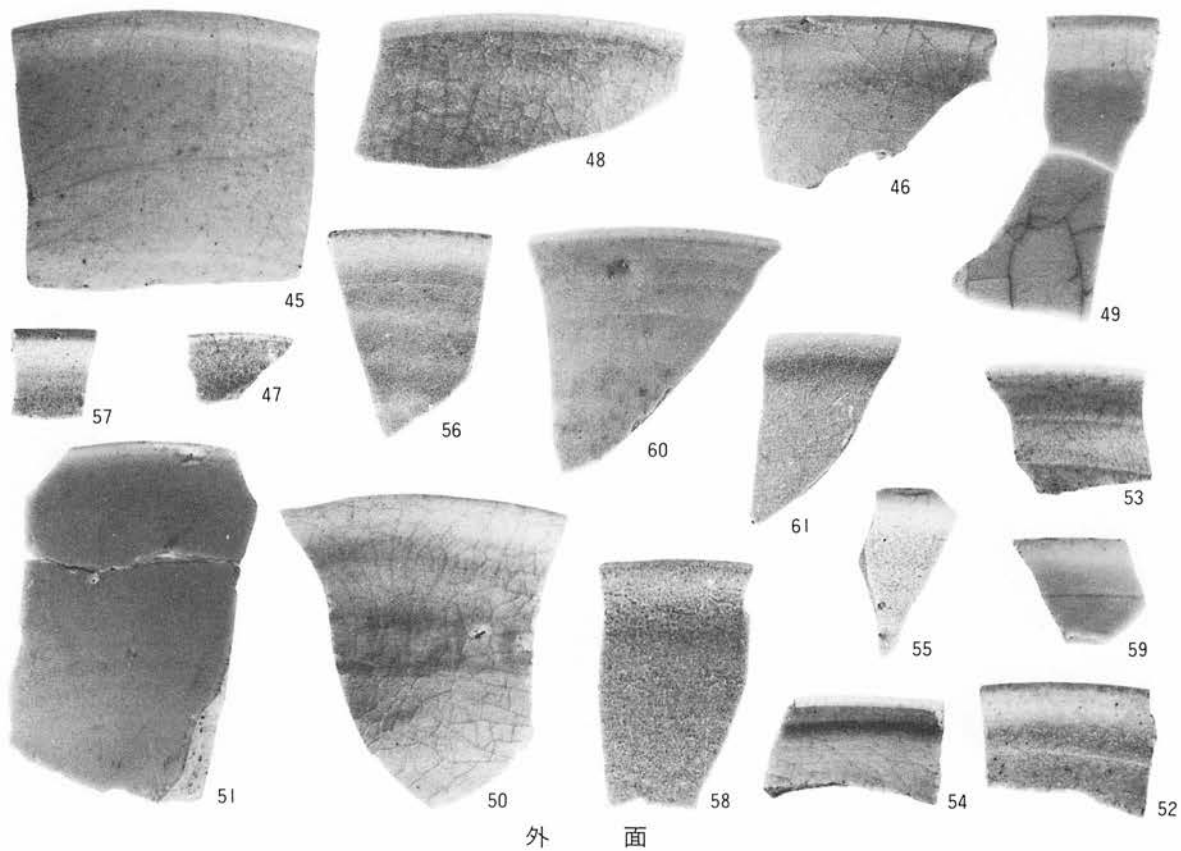
内 面
写真図版81 青磁(2)

21-30・32 縮尺 $\frac{2}{3}$

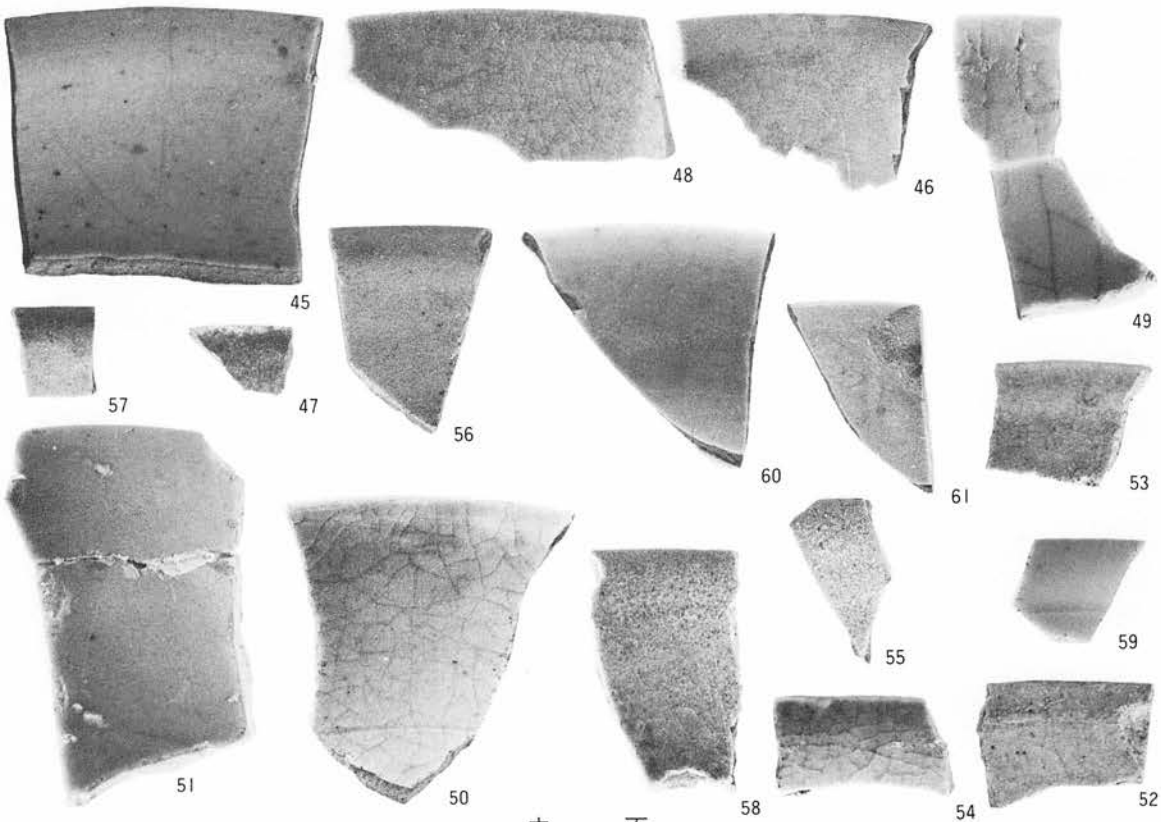


写真図版82 青磁(3)

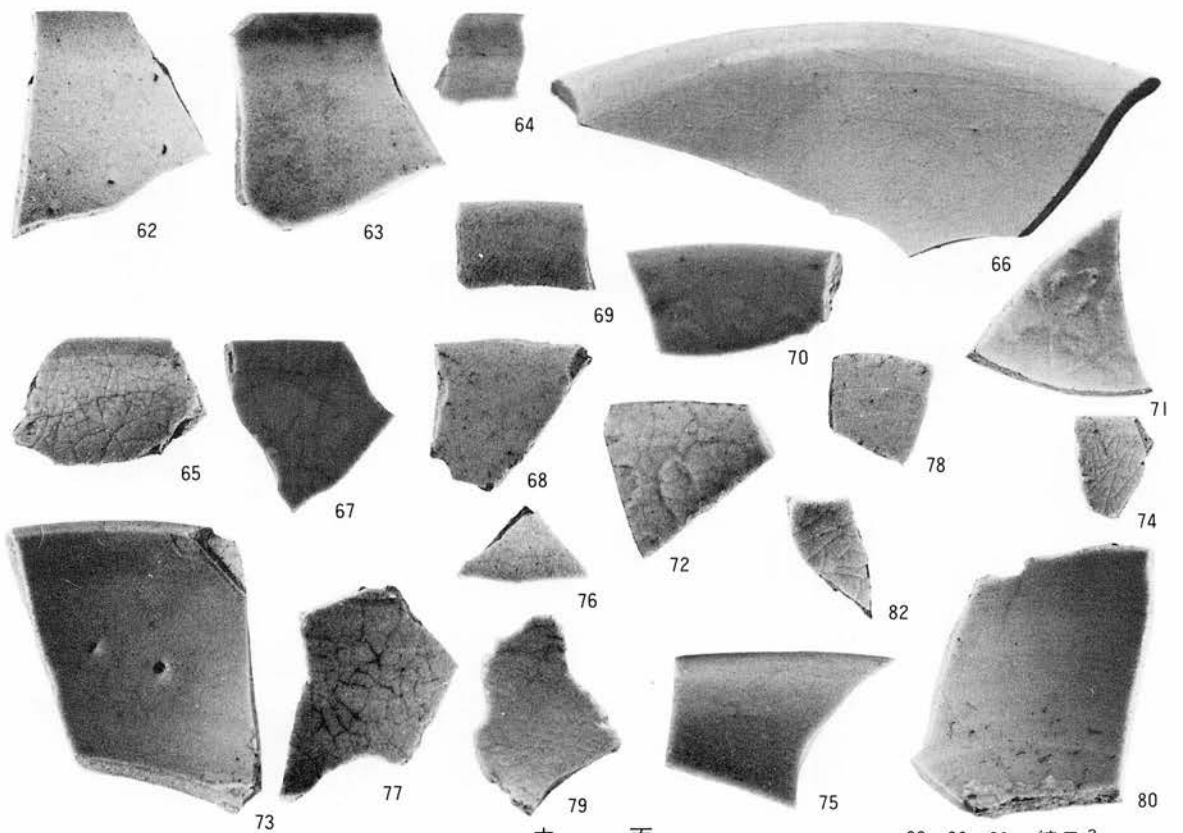
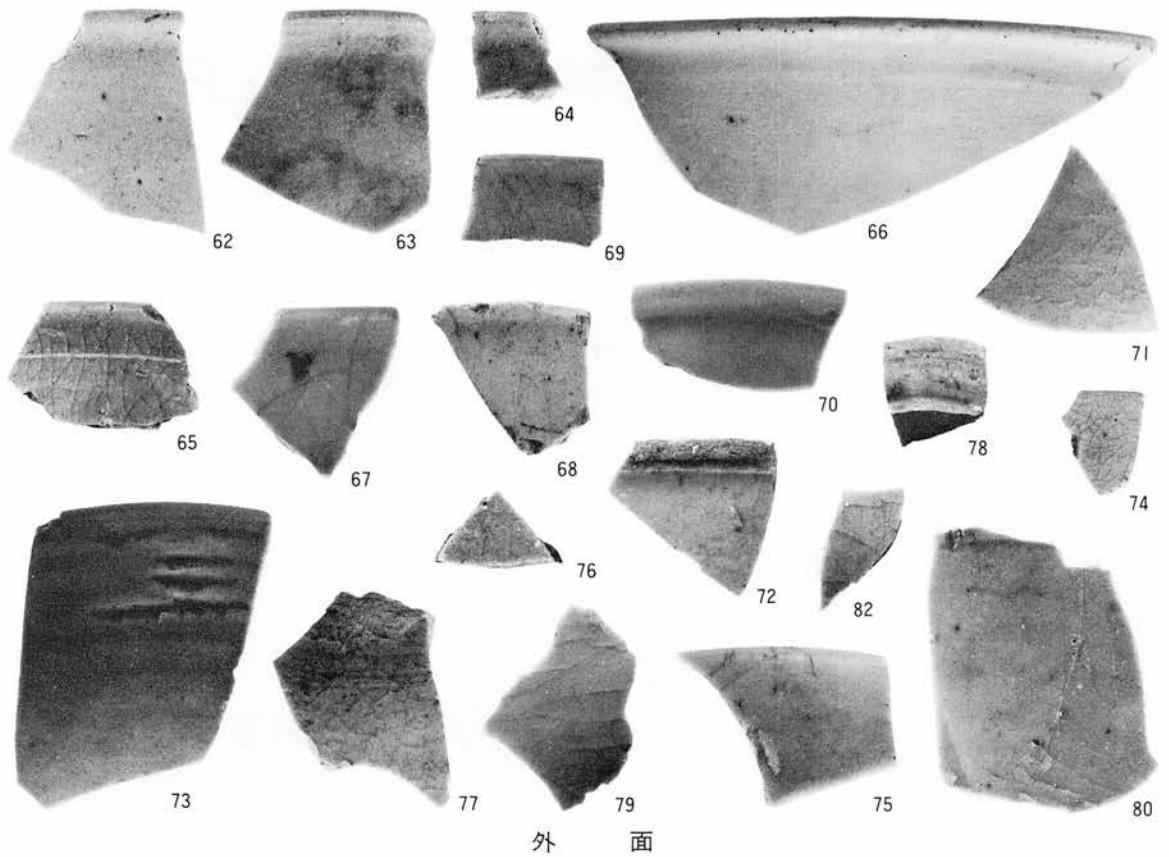
31・33-44 縮尺 $\frac{2}{3}$



外 面

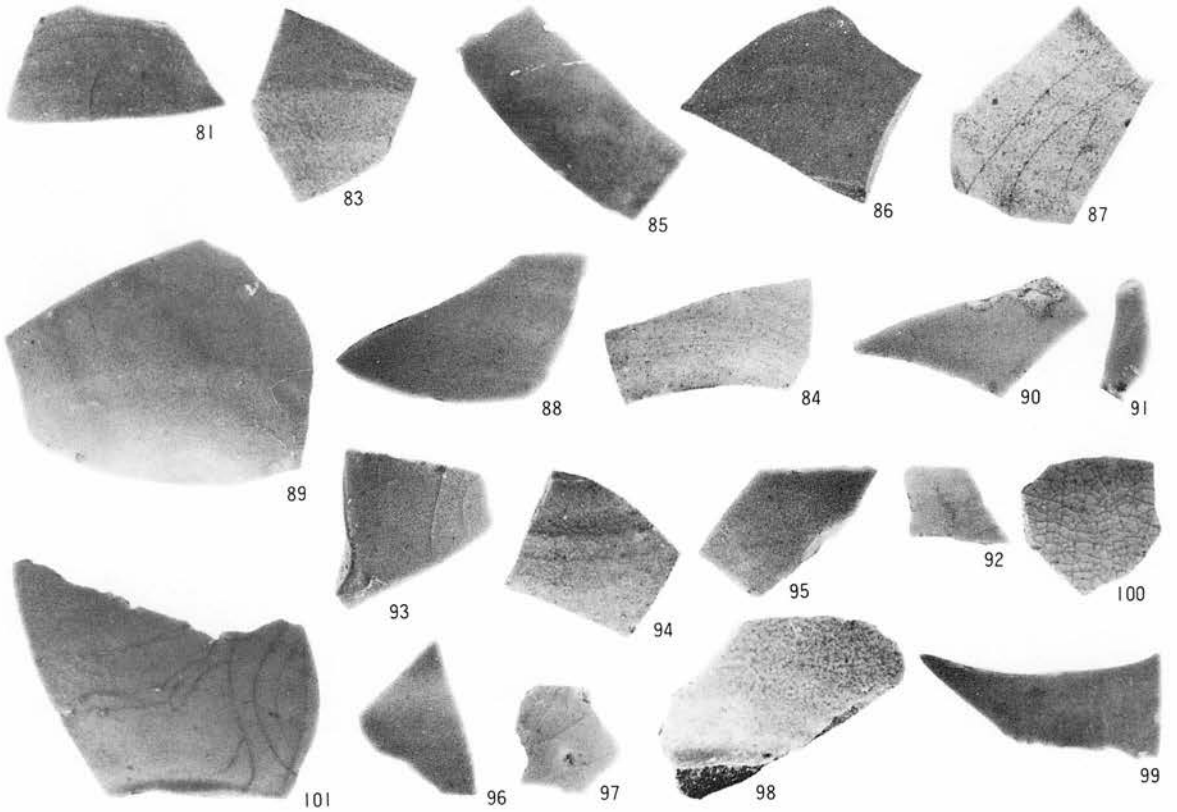


内 面

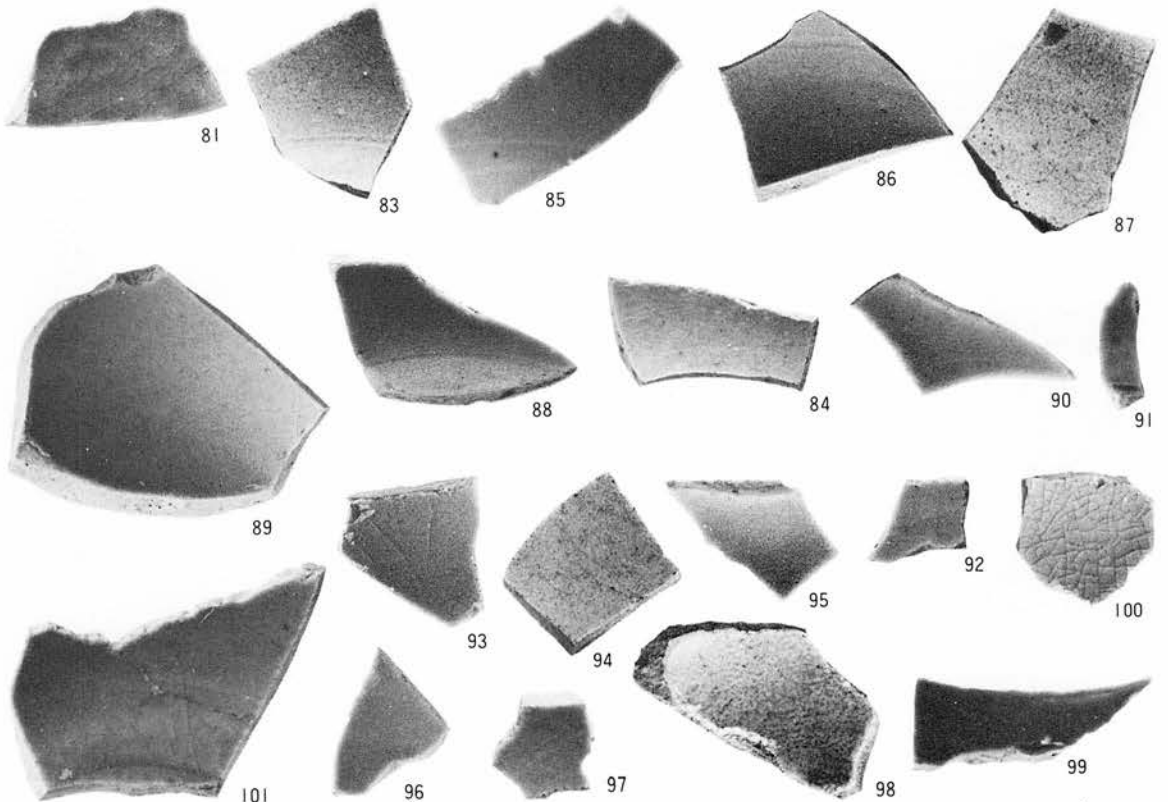


写真図版84 青磁(5)

62~80・82 縮尺 $\frac{2}{5}$



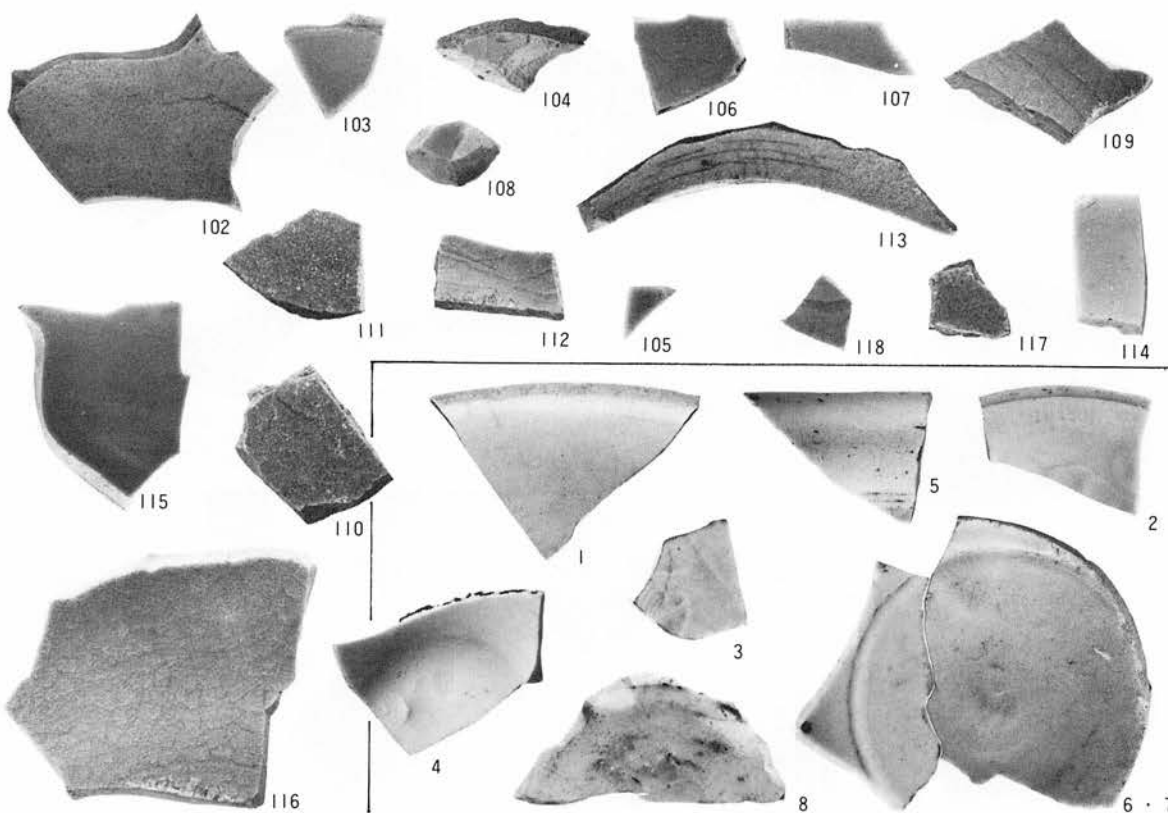
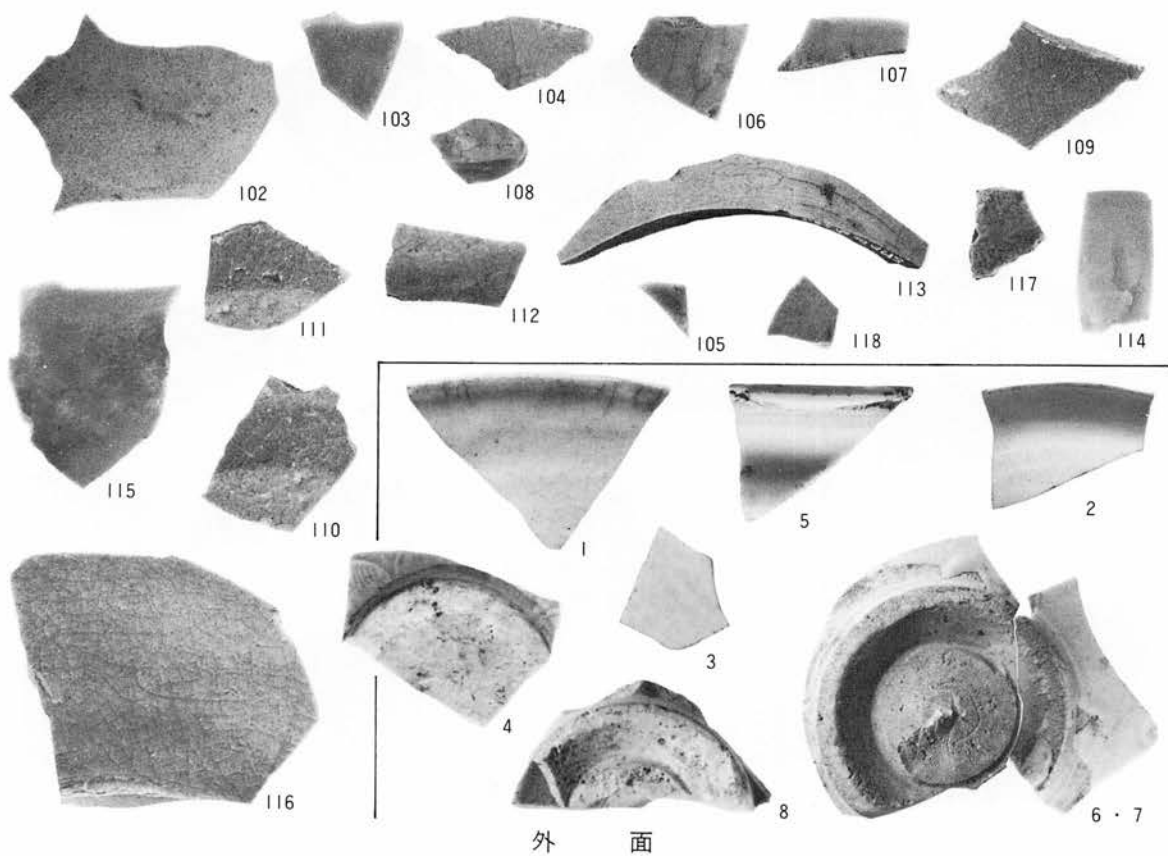
外 面



内 面

写真図版85 青磁(6)

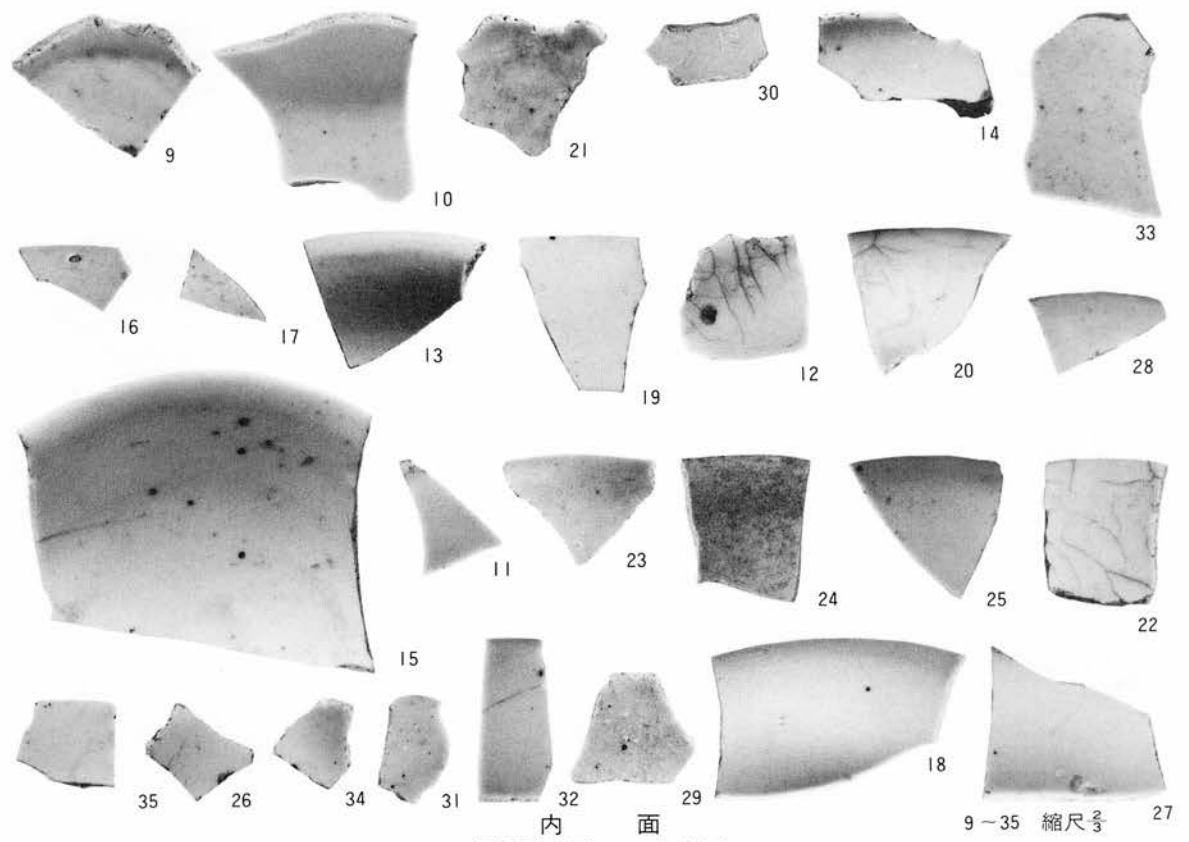
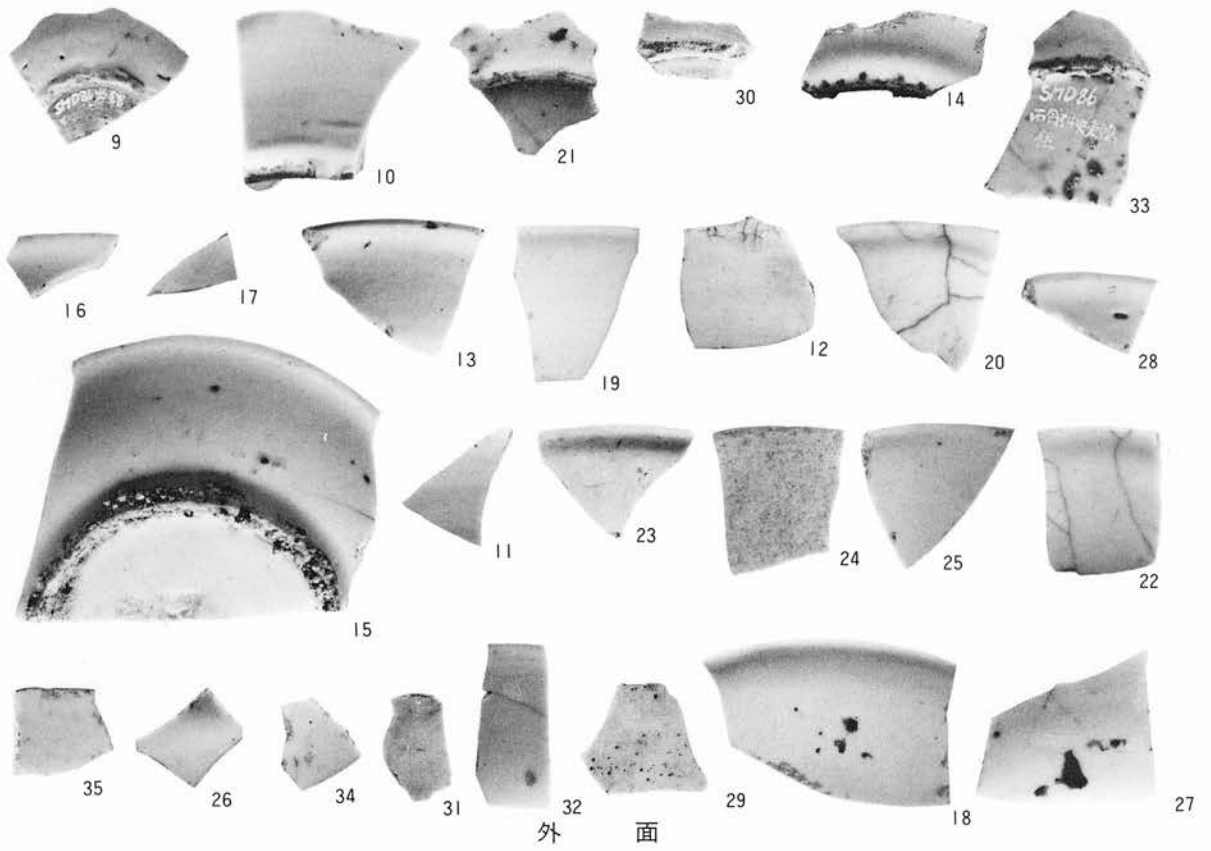
81・83~101 縮尺 $\frac{1}{2}$



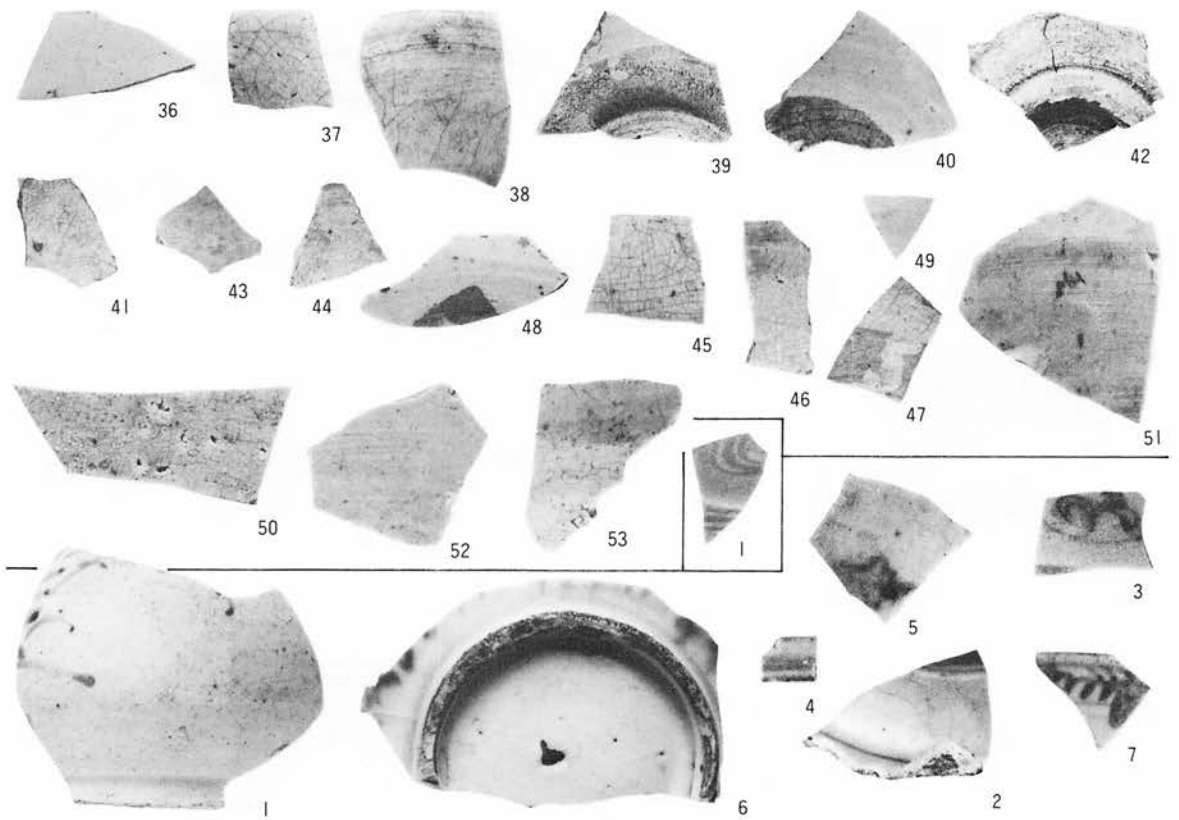
写真図版86 青磁(7)・白磁(1)

青磁102~118
白磁1~8

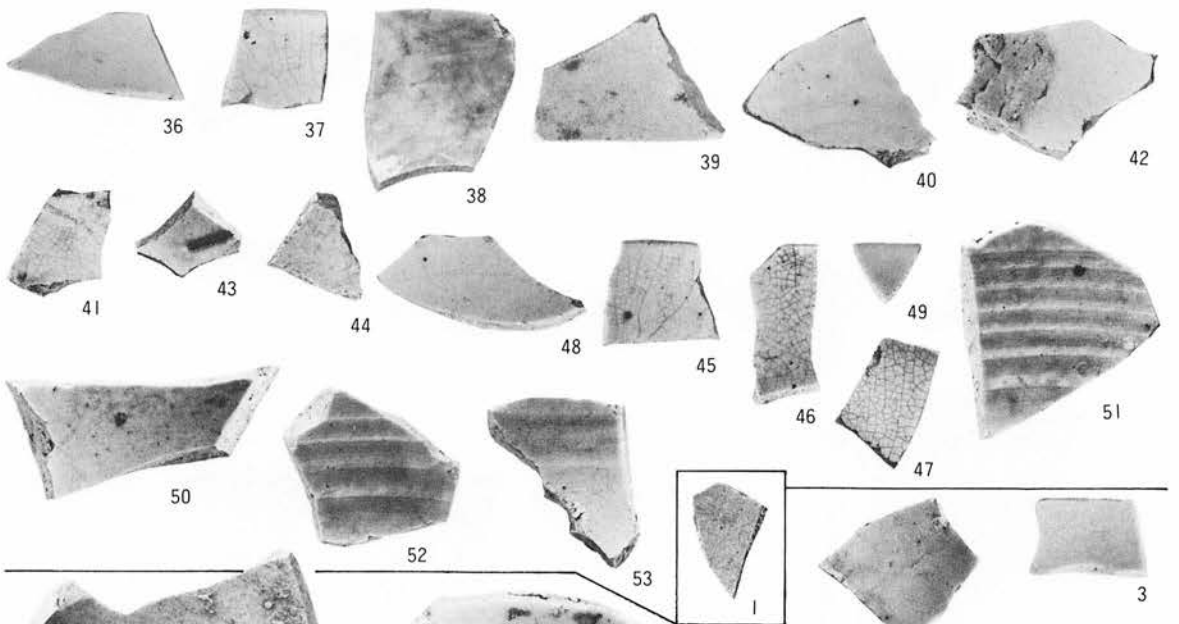
縮尺 $\frac{2}{3}$



9-35 縮尺 $\frac{1}{2}$ 27



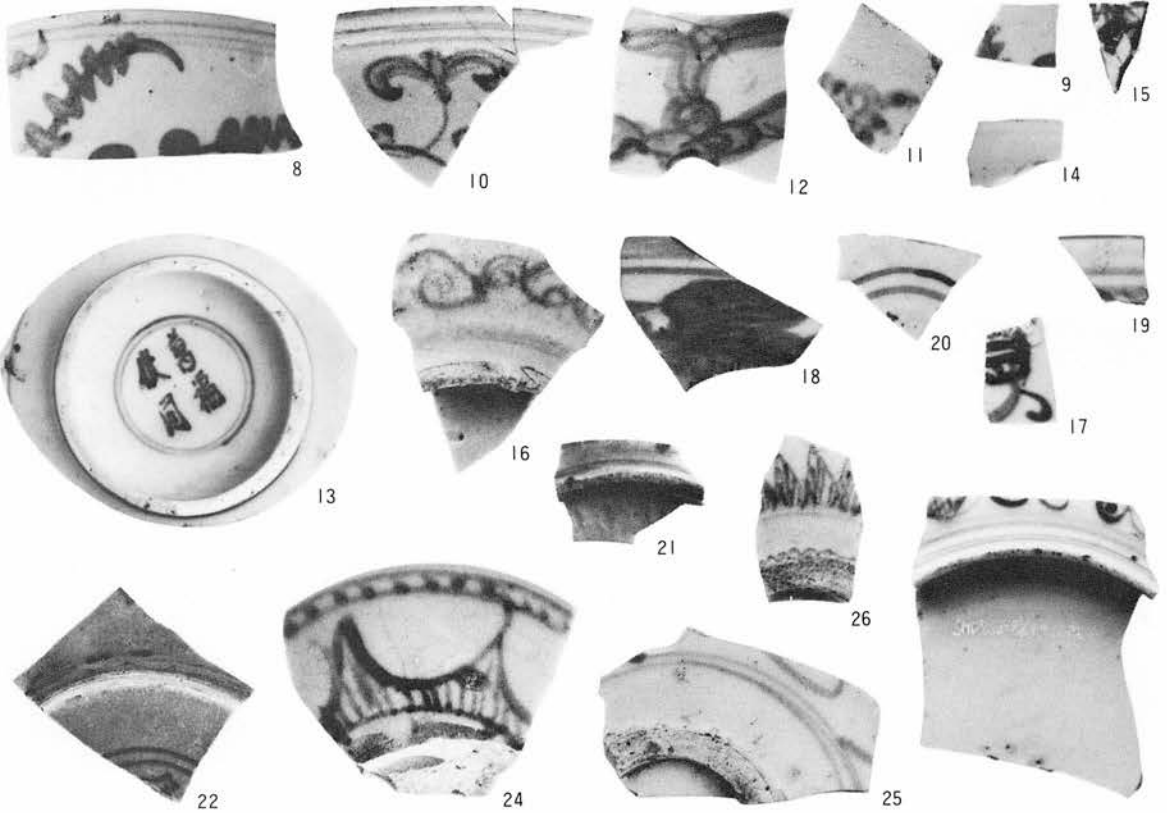
外 面



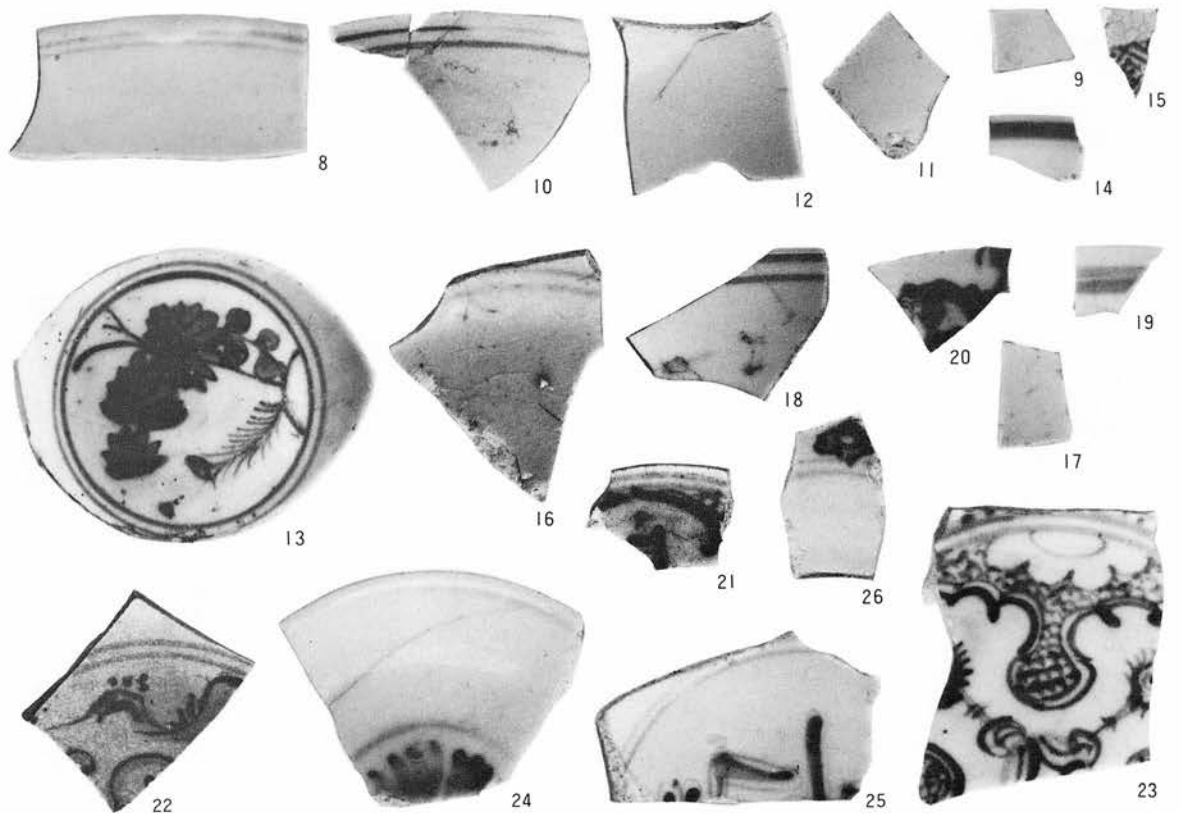
内 面

写真図版88 白磁(3)・青白磁・染付(1)

白磁36-53
 青白磁 1
 染付 1-7
 縮尺 2/3

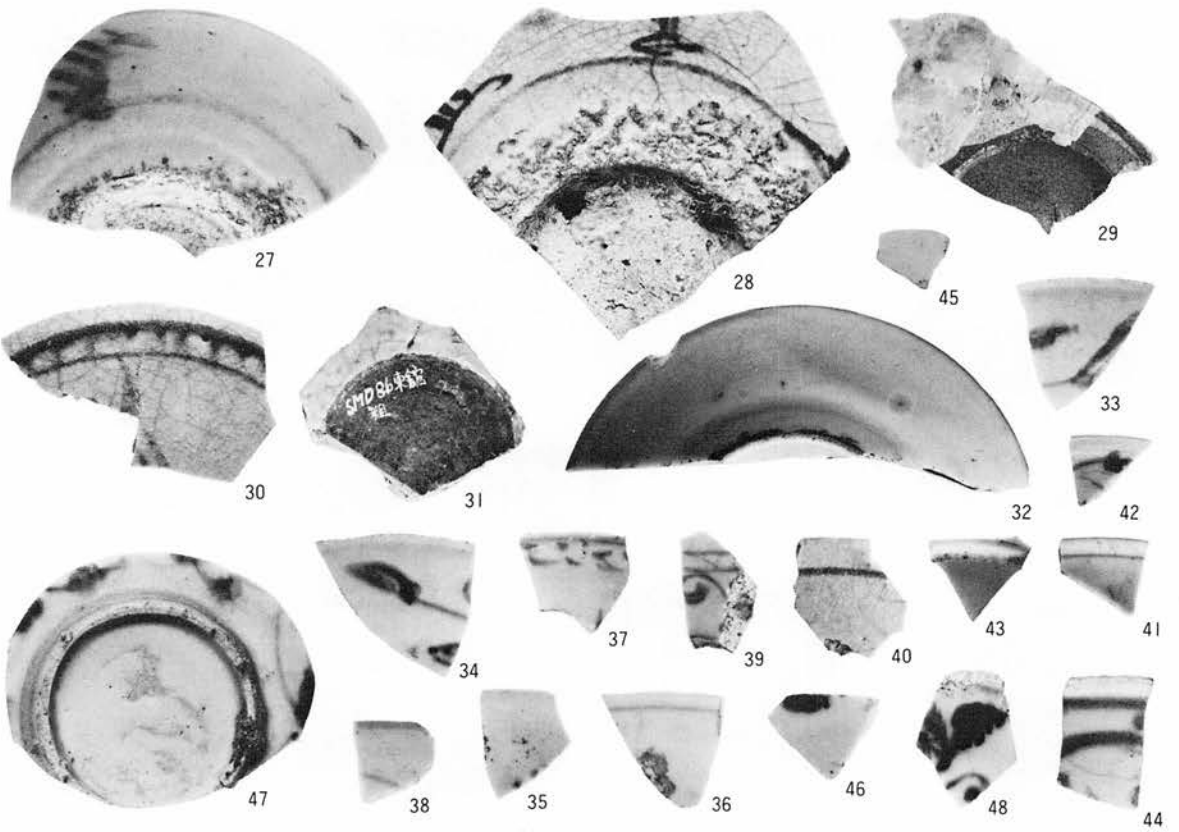


外 面

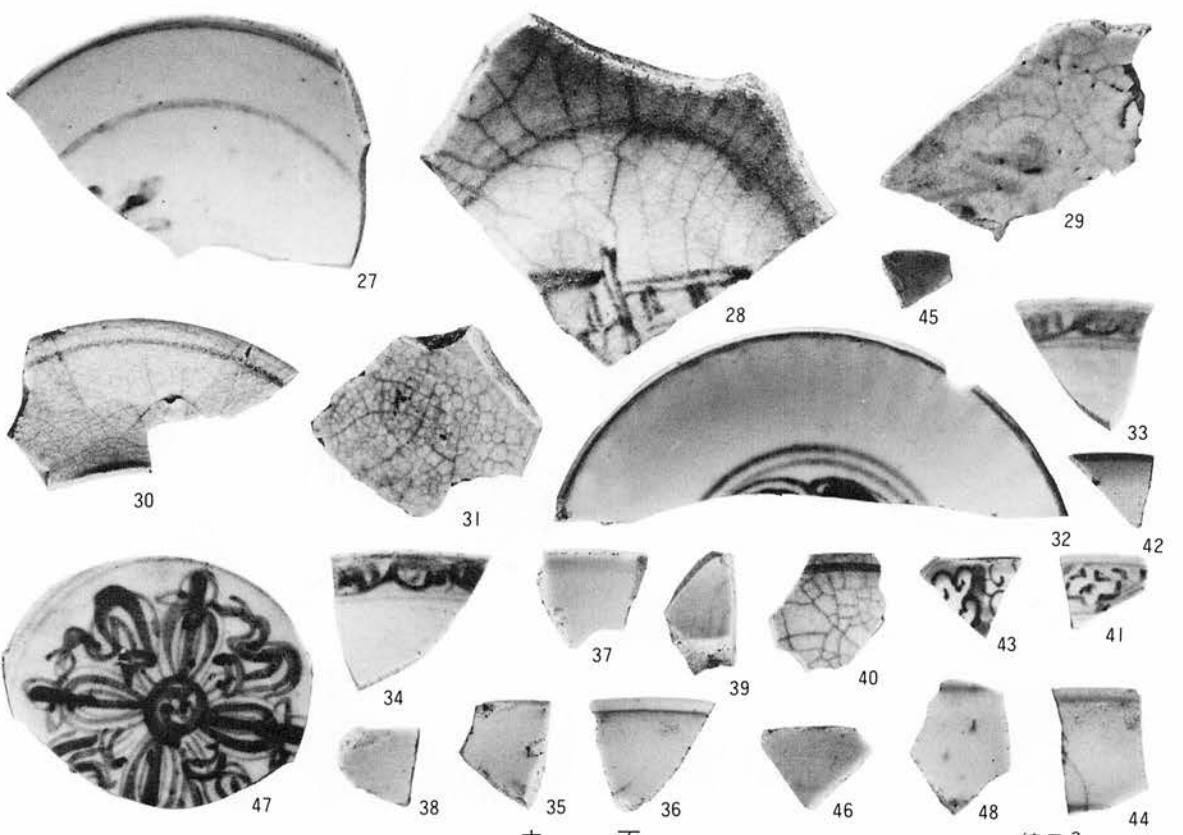


内 面

縮尺 $\frac{2}{3}$

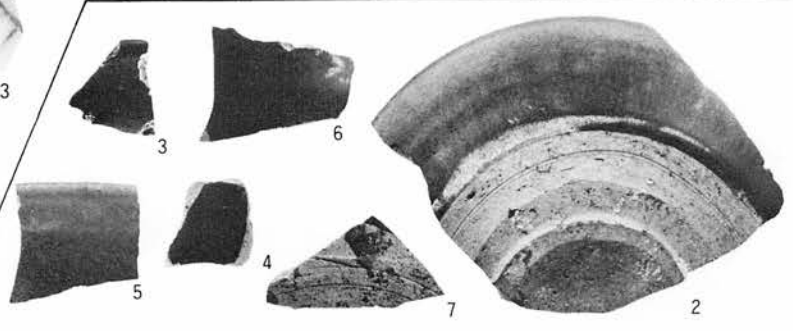
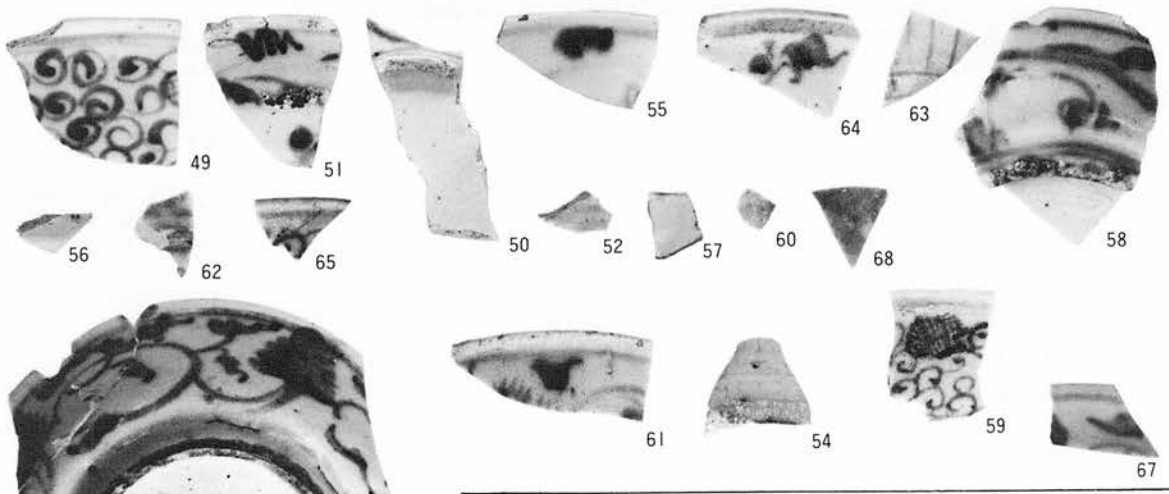


外 面

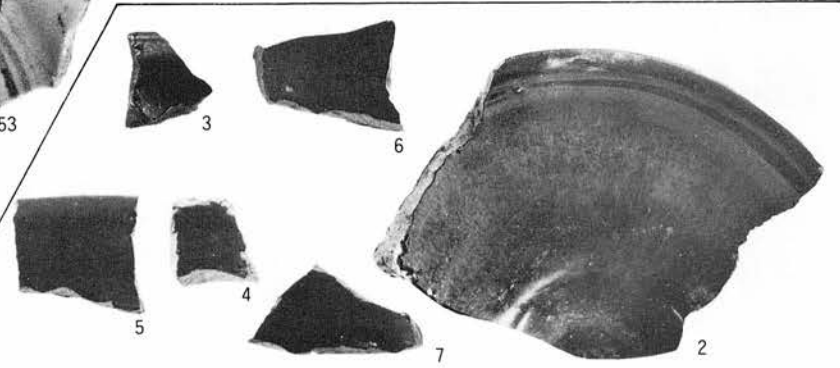
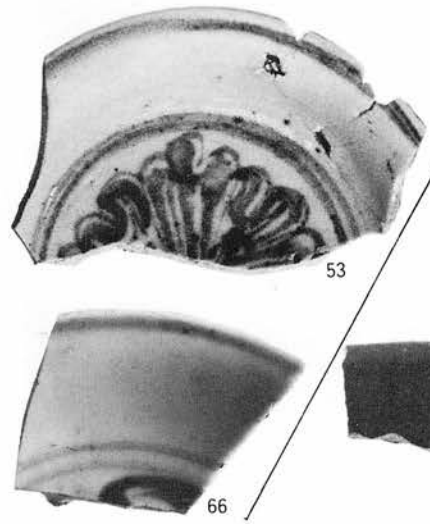
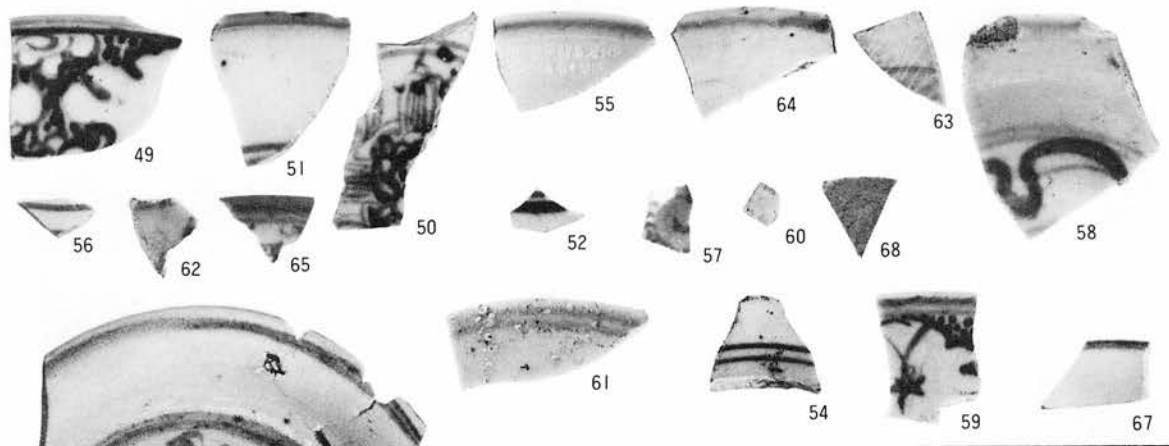


内 面
写真図版90 染付(3)

縮尺 号



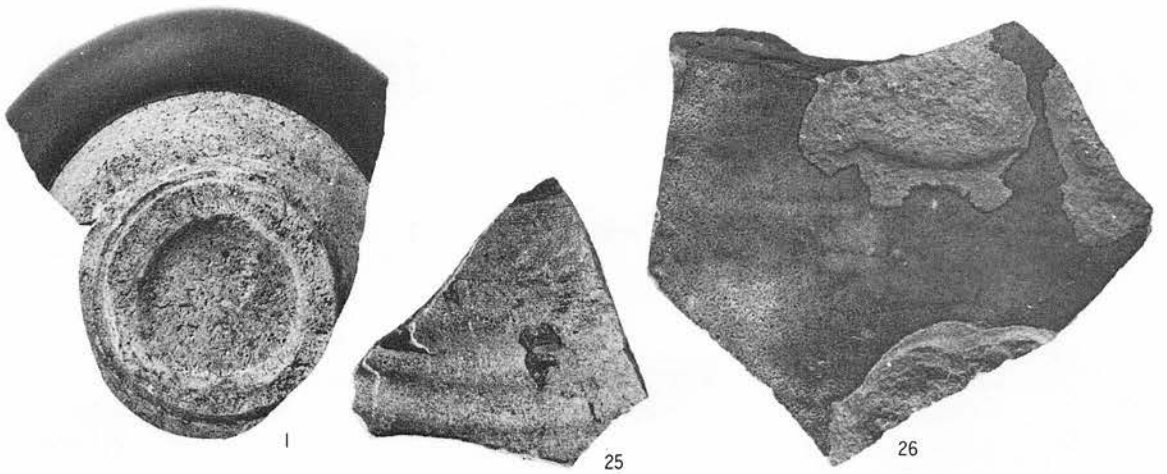
外 面



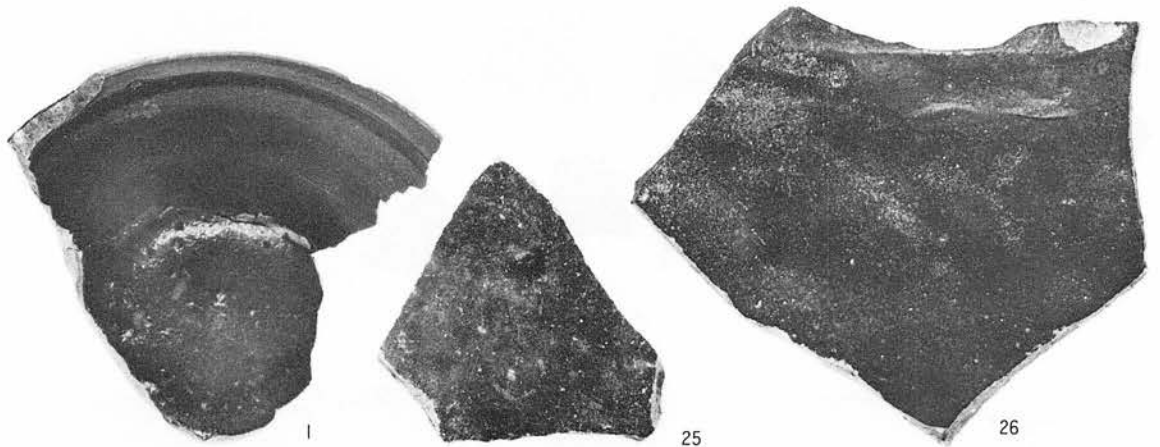
内 面

写真図版91 染付(4)・鉄釉 縮尺 $\frac{2}{3}$

染付49-68
鉄釉 2-7

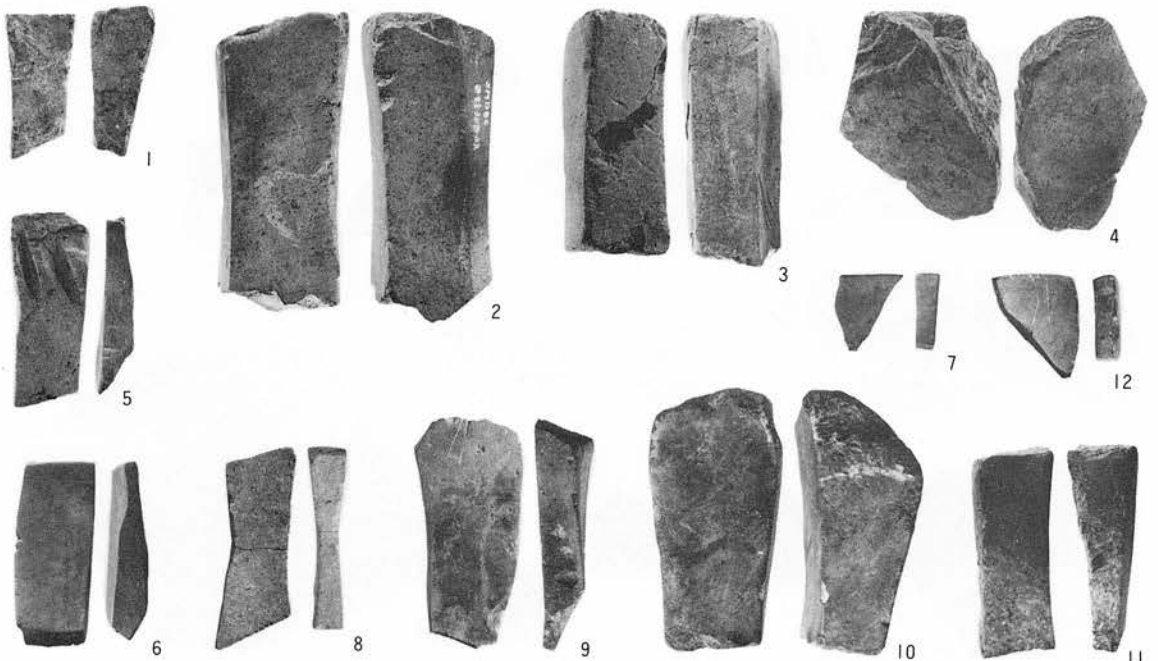


外 面



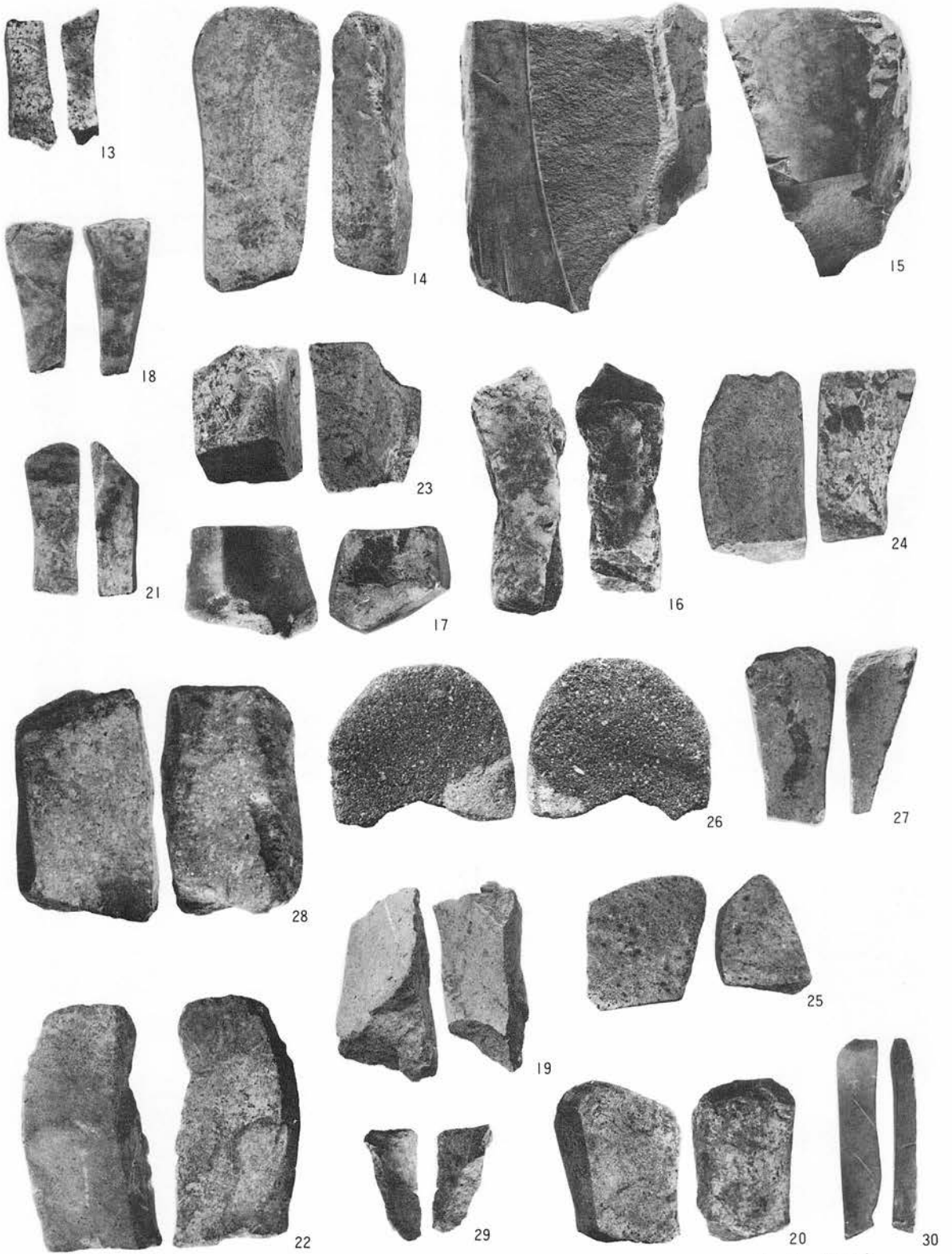
内 面
A. 鉄釉(2)

1・25・26 縮尺 $\frac{2}{3}$



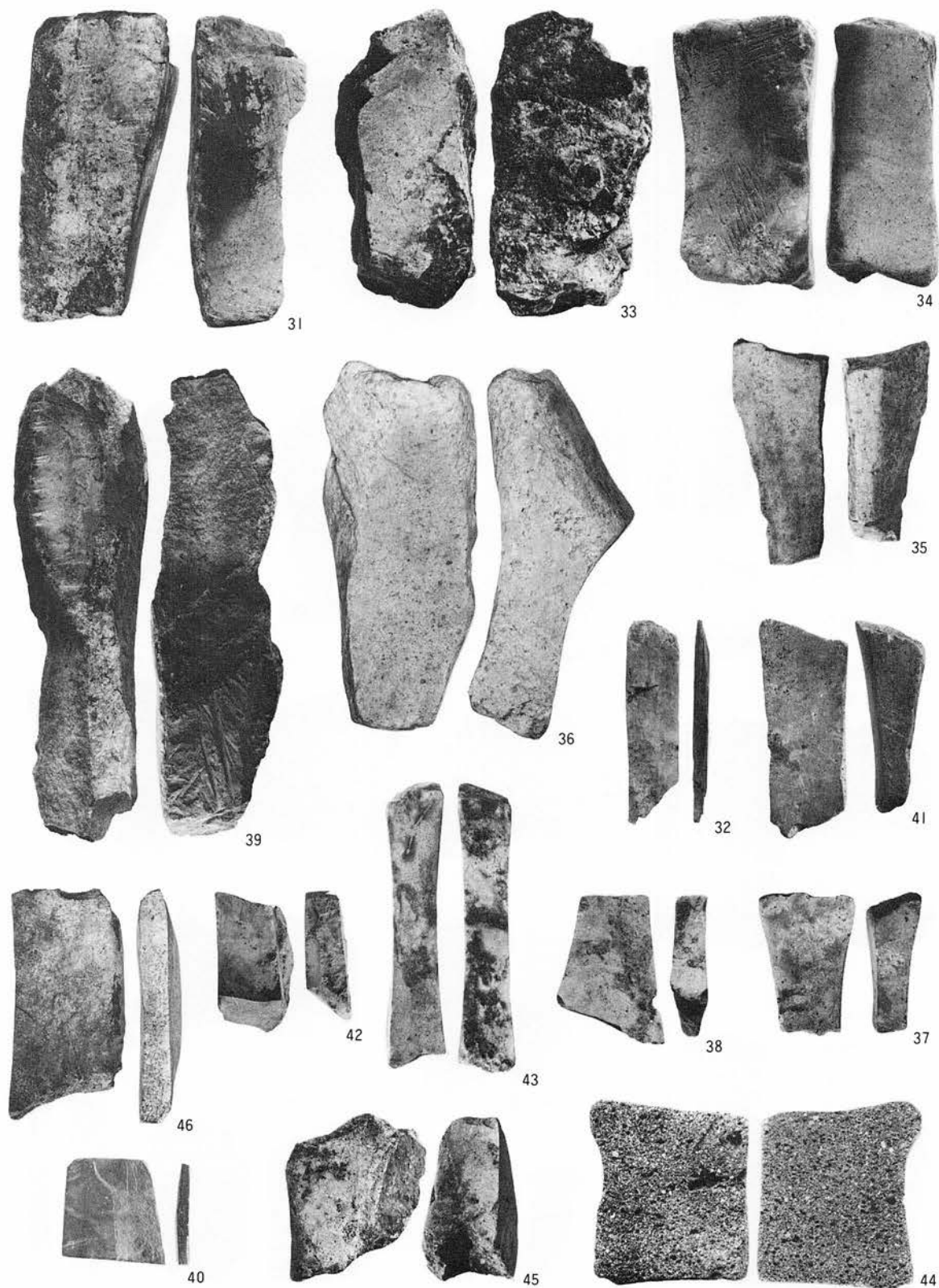
B. 砥石(1)

1-12 縮尺 $\frac{2}{3}$



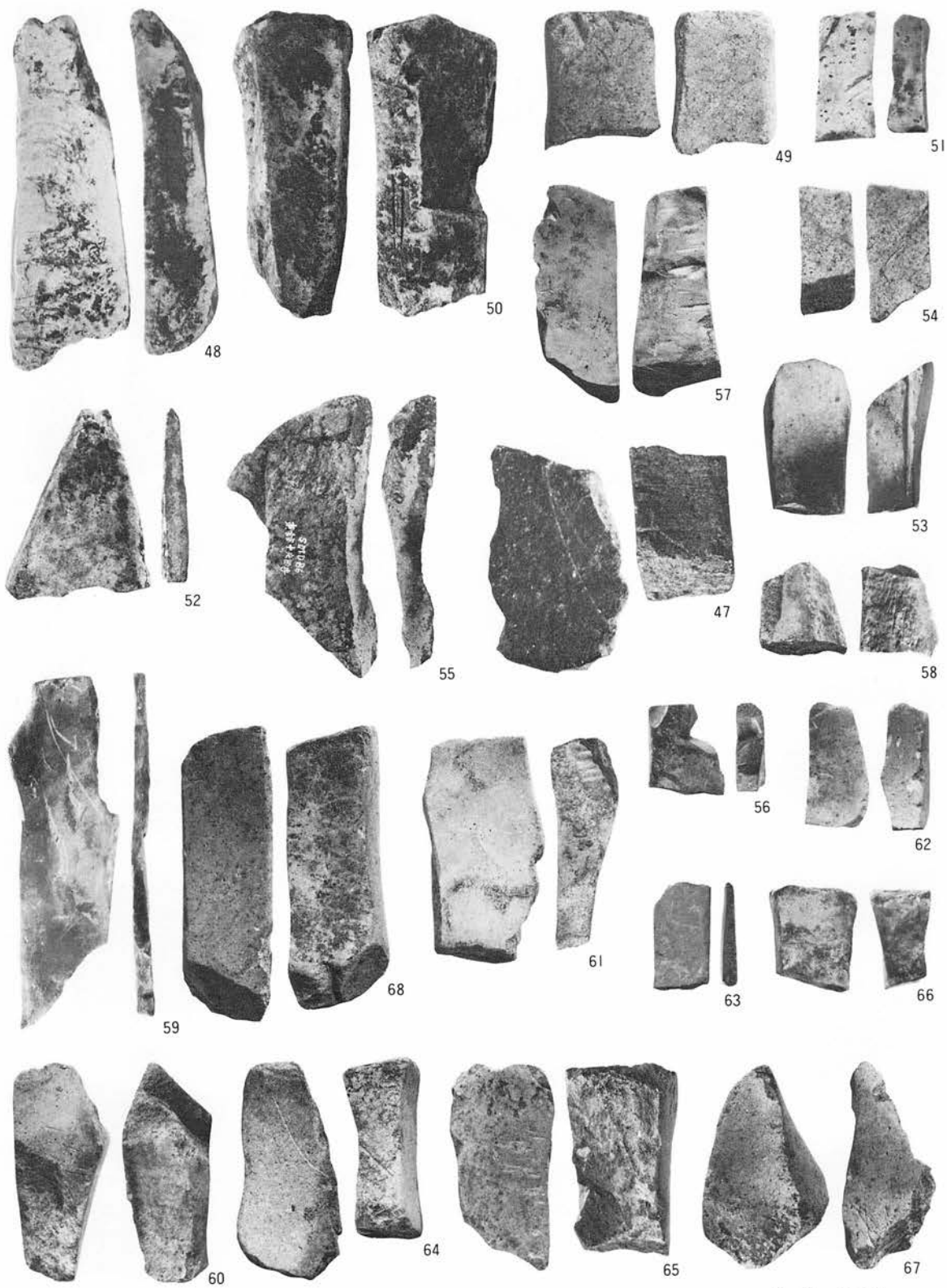
13-30 縮尺 $\frac{1}{2}$

写真図版93 砥石(2)



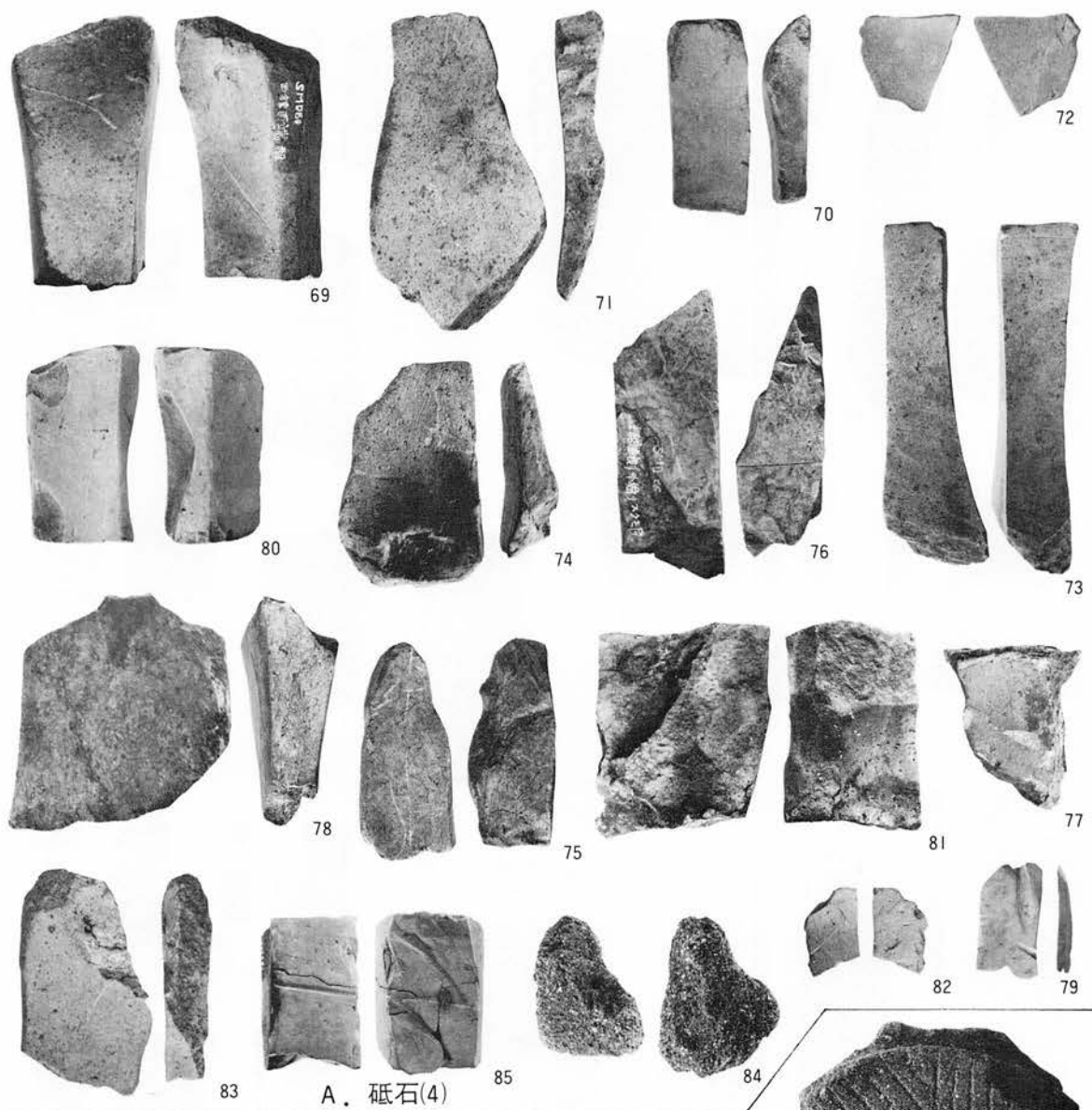
31-46 縮尺 $\frac{1}{3}$

写真図版94 砥石(3)

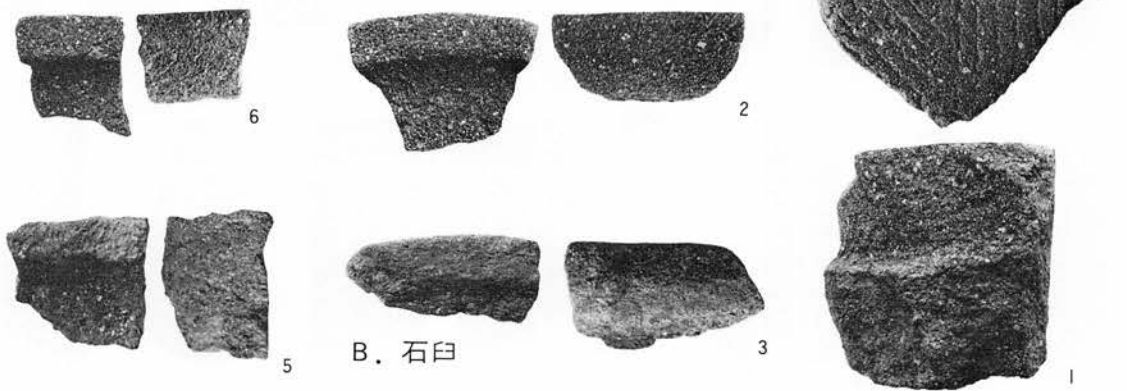


47-68 縮尺 $\frac{1}{3}$

写真図版 95 砥石(4)



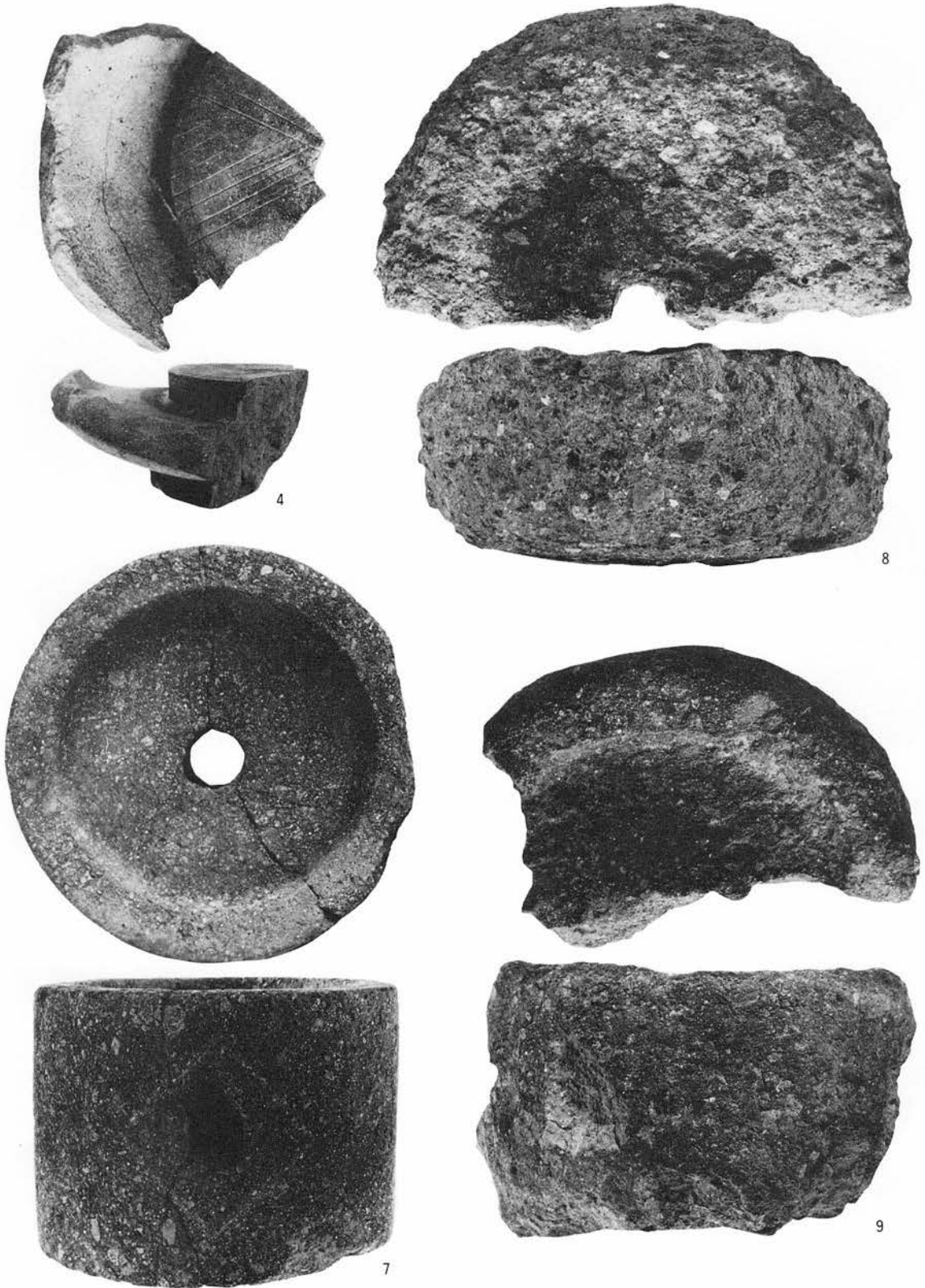
A. 砥石(4)



B. 石臼

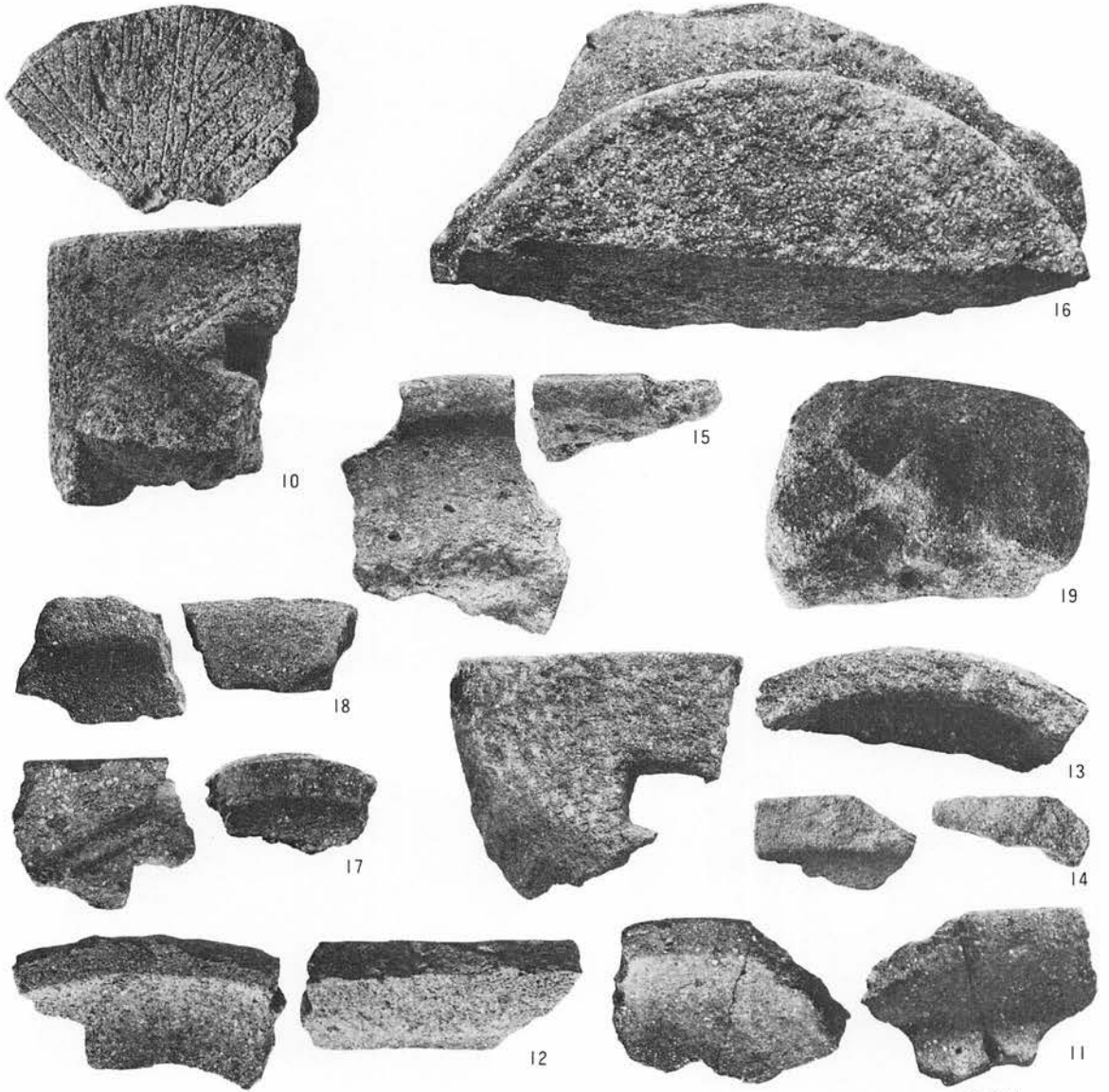
砥石69~85
石臼1~3・5・6 縮尺 $\frac{1}{3}$

写真図版96 砥石(4)・石臼(1)



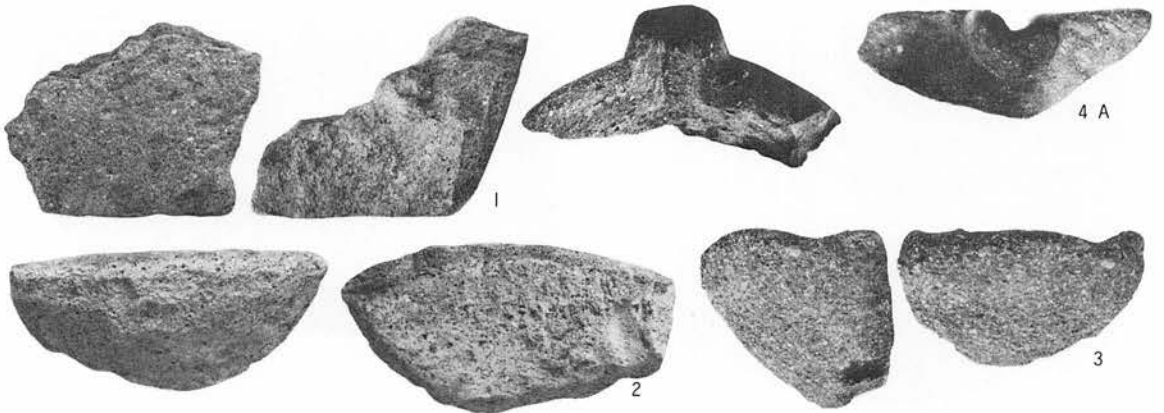
写真図版97 石臼(2)

縮尺 $\frac{1}{3}$



A. 石臼(3)

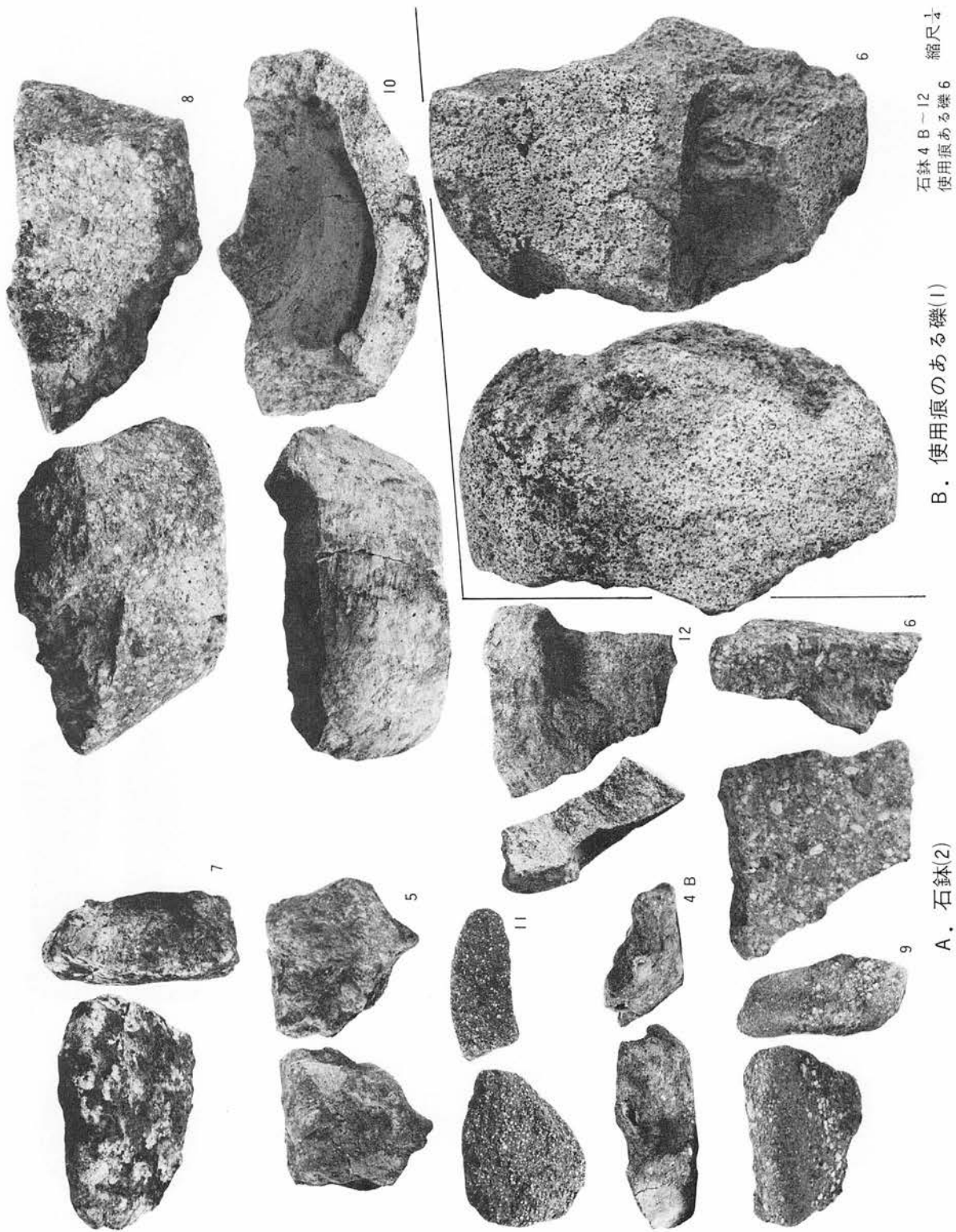
10~19 縮尺 $\frac{1}{3}$



B. 石鉢(1)

1~4 A 縮尺 $\frac{1}{4}$

写真図版98 石臼(3)・石鉢(1)

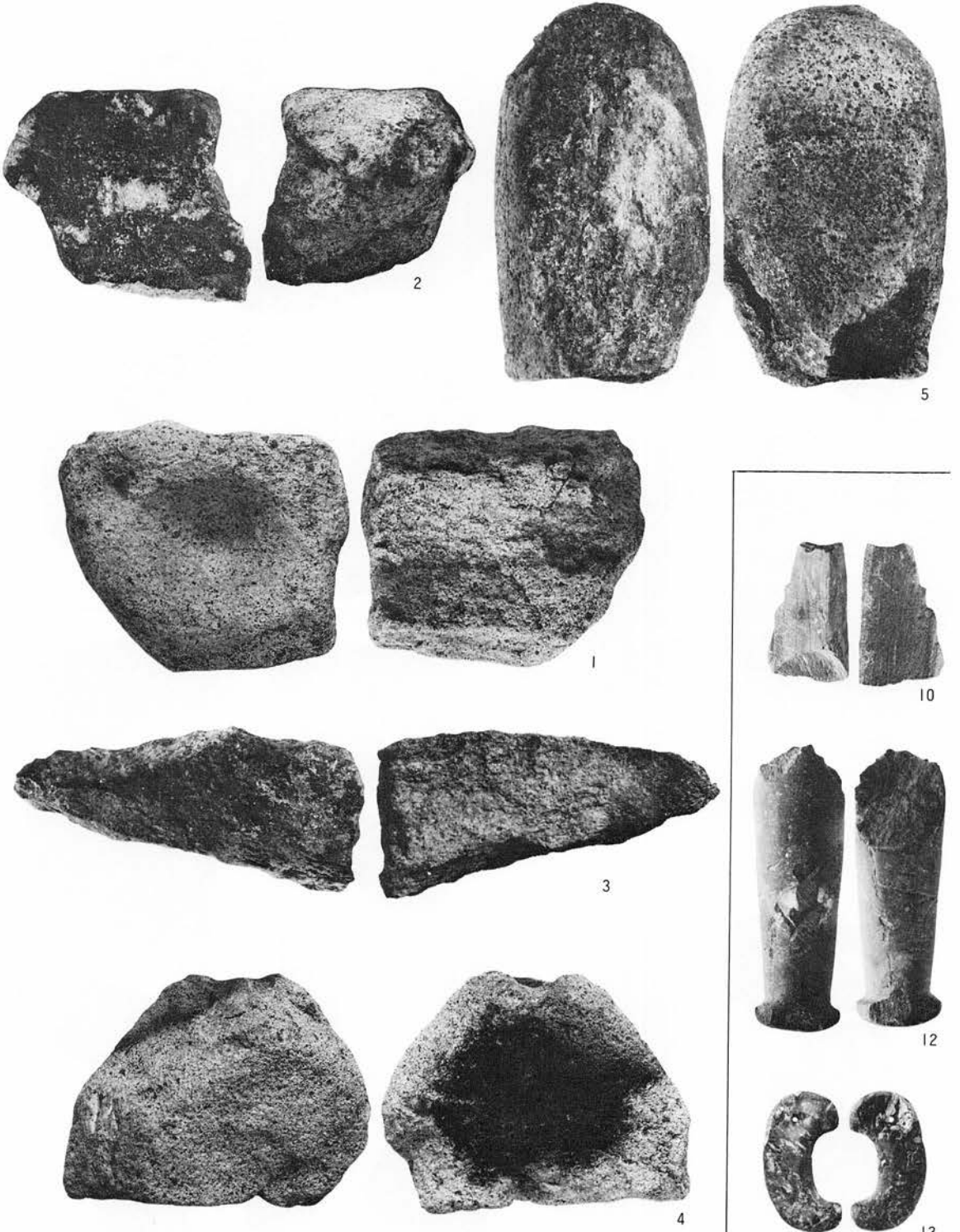


石鉢 4 B ~ 12 縮尺 $\frac{1}{4}$
 使用痕ある礫 6

B. 使用痕のある礫(1)

A. 石鉢(2)

写真図版99 石鉢(2)・使用痕ある礫(1)

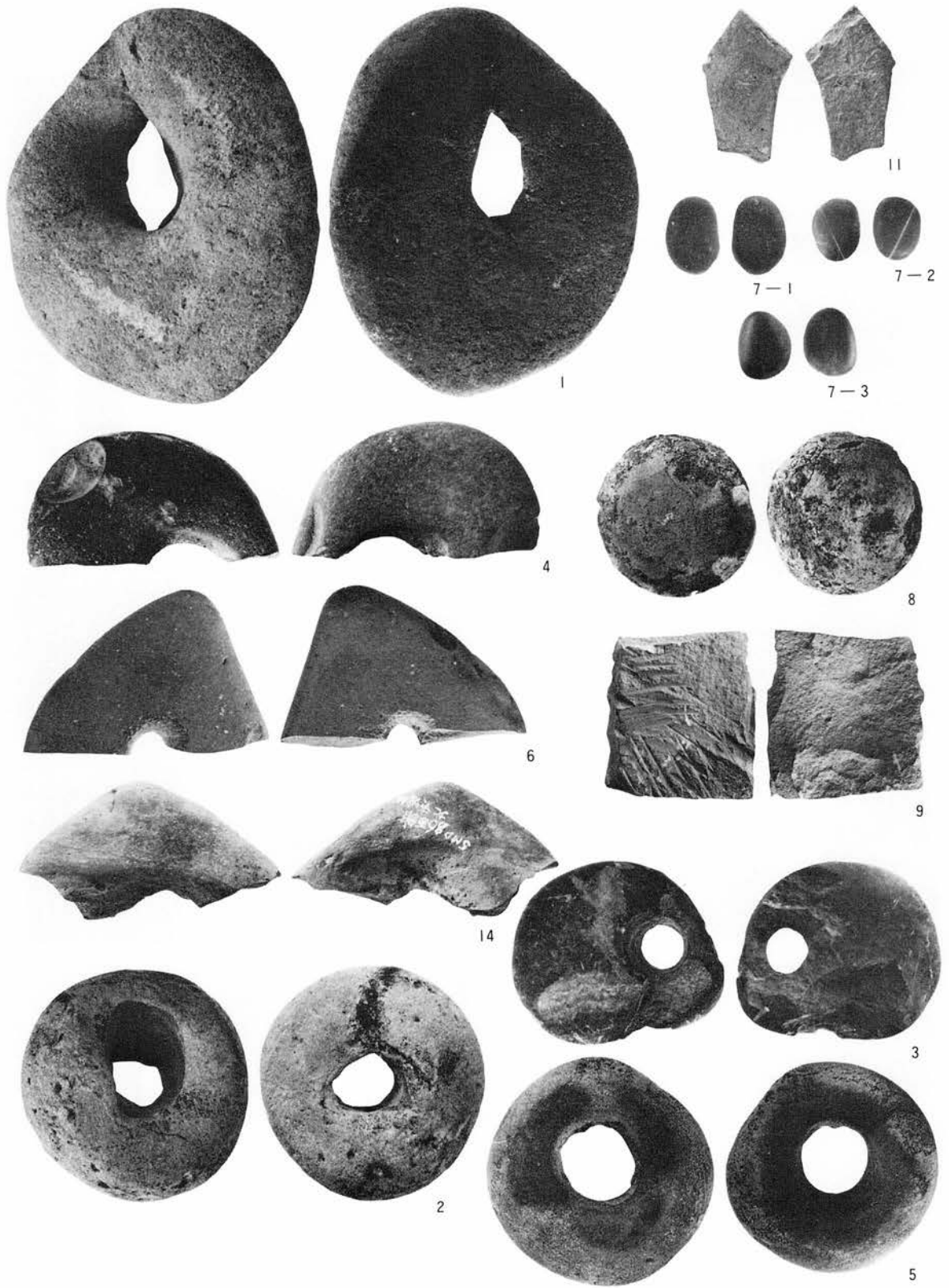


A. 使用痕ある礫(2)

B. その他の石製品(2)

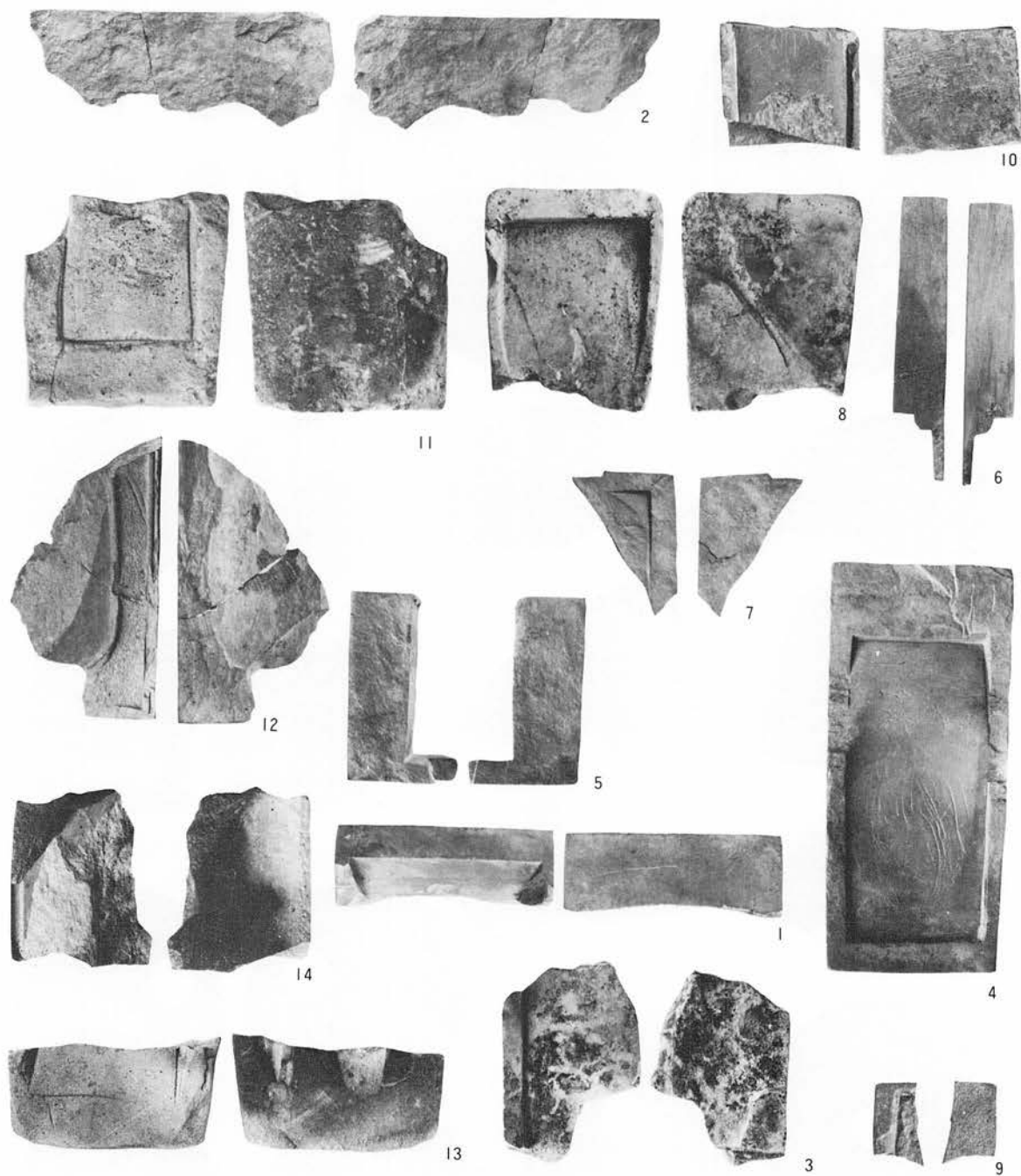
使用痕のある礫 1-5 縮尺 $\frac{1}{4}$
 その他の石製品 10・12・13 縮尺 $\frac{1}{2}$

写真図版100 使用痕ある礫(2)・その他石製品(2)



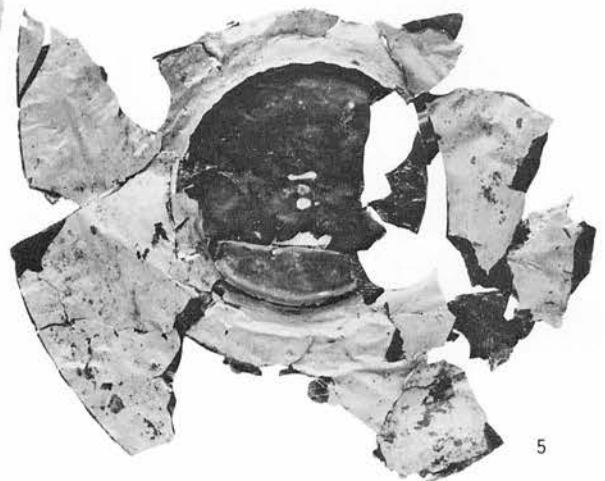
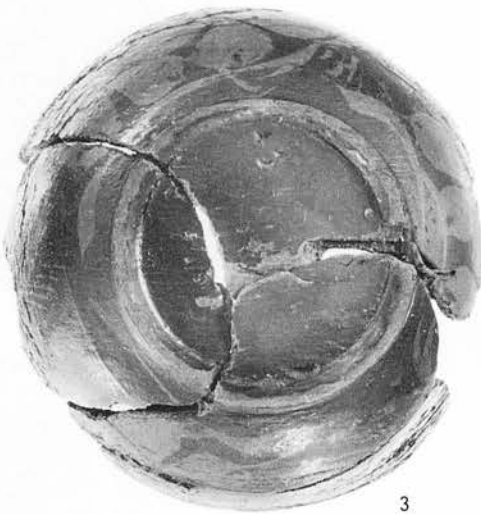
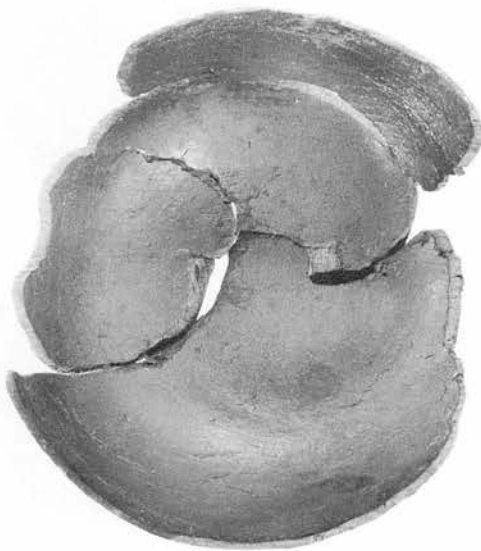
1 ~ 9 · 11 · 14 縮尺 $\frac{2}{3}$

写真図版101 その他石製品(1)



写真図版102 硯

縮尺 $\frac{1}{2}$



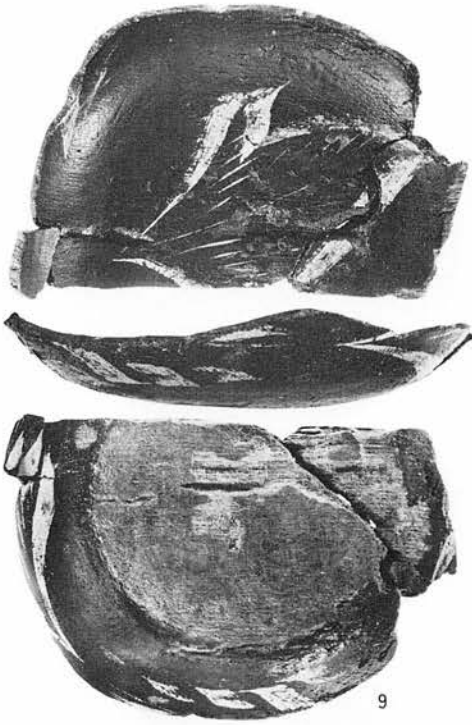
3

8

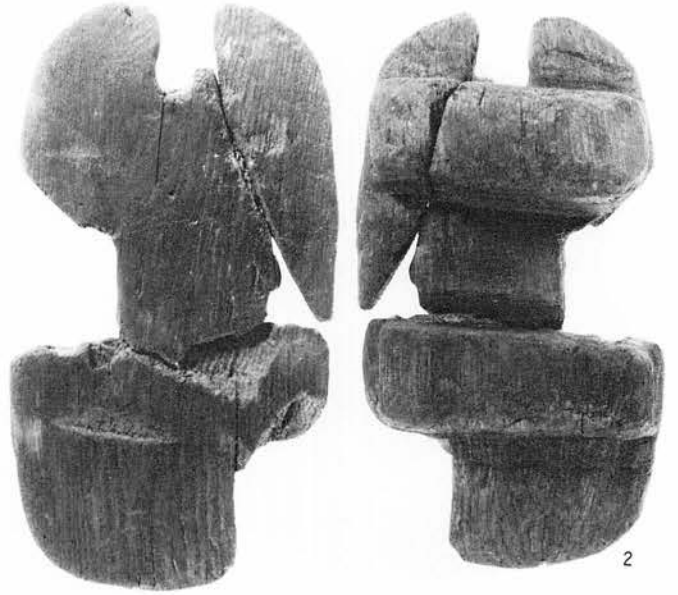
5

縮尺 $\frac{1}{2}$

写真図版103 漆器(1)



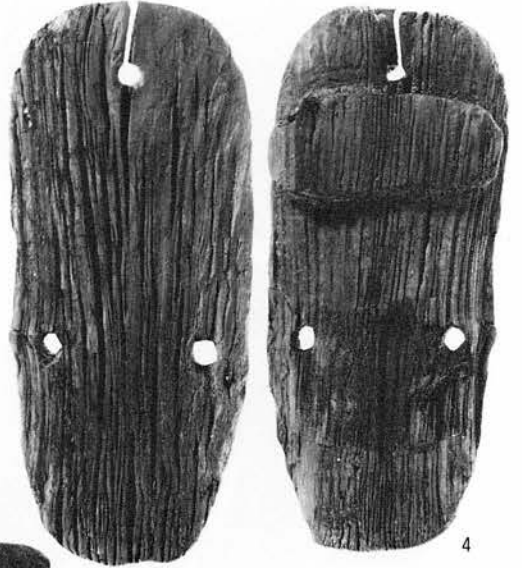
A. 漆器(2)



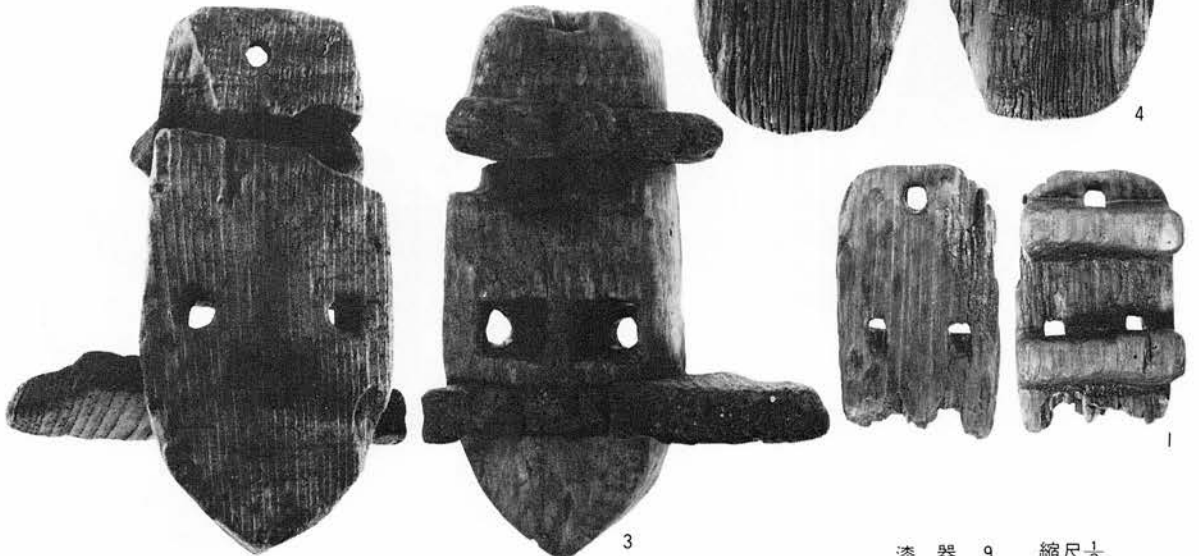
2



5



4

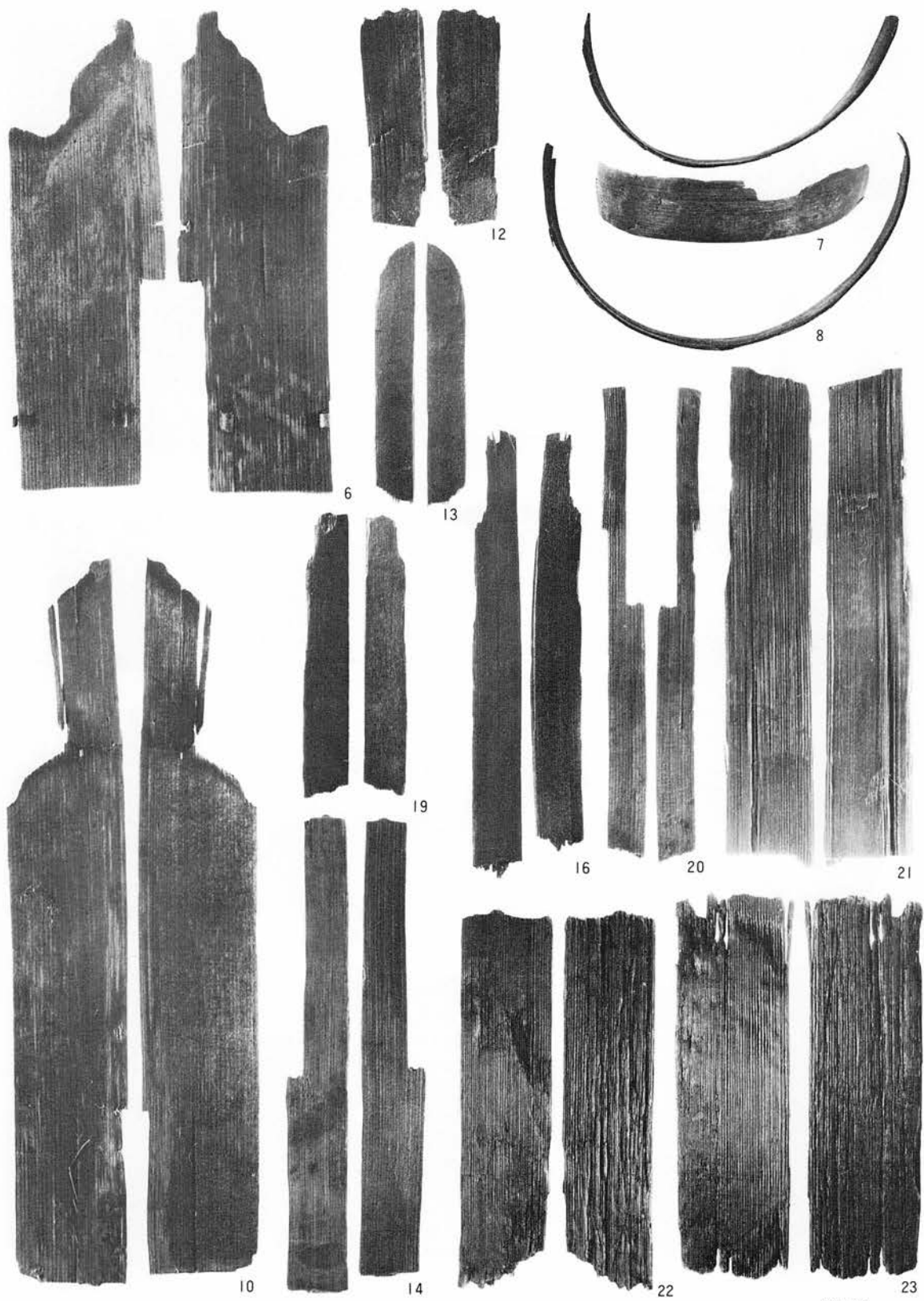


3

B. 木製品(1)

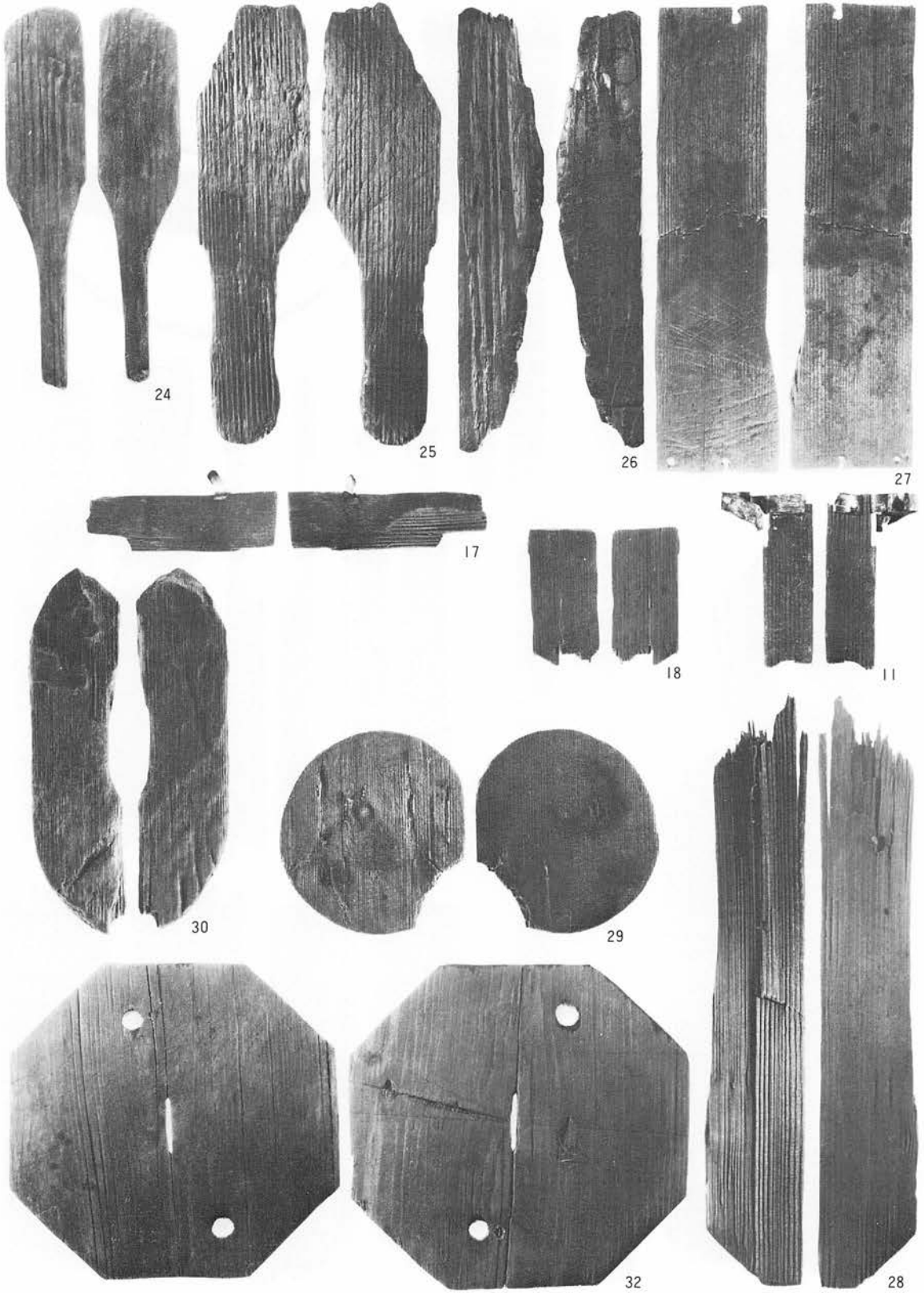
写真図版104 漆器(2)・木製品(1)

漆器 9 縮尺 $\frac{1}{2}$
木製品 1-5 縮尺 $\frac{1}{3}$



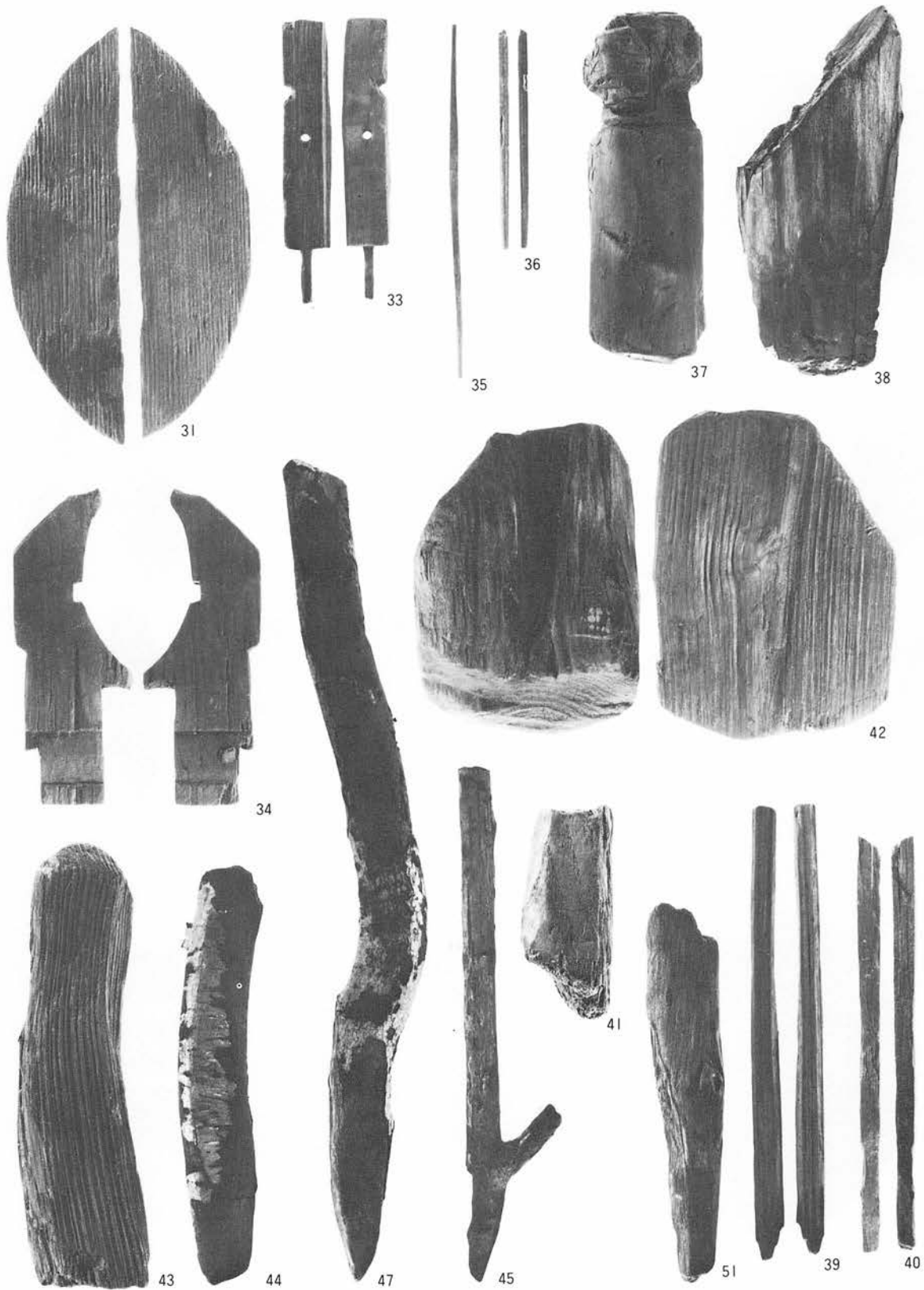
写真図版105 木製品(2)

縮尺 $\frac{1}{3}$



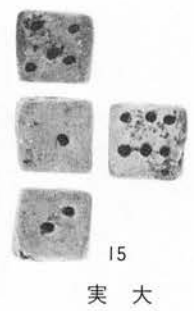
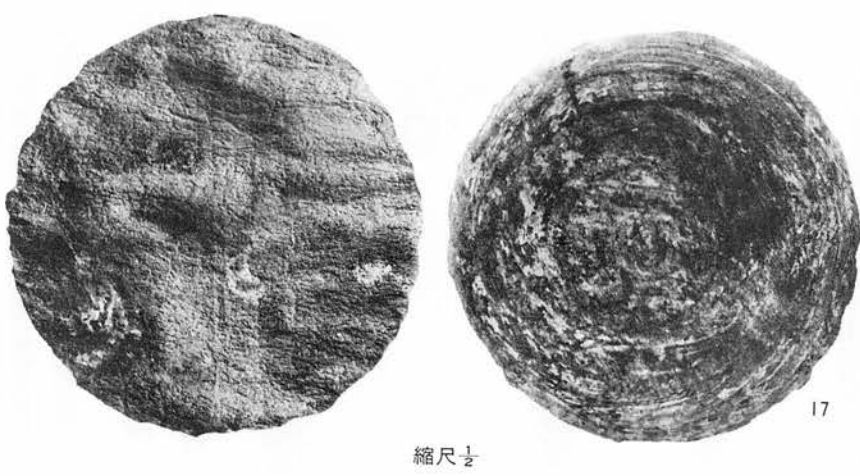
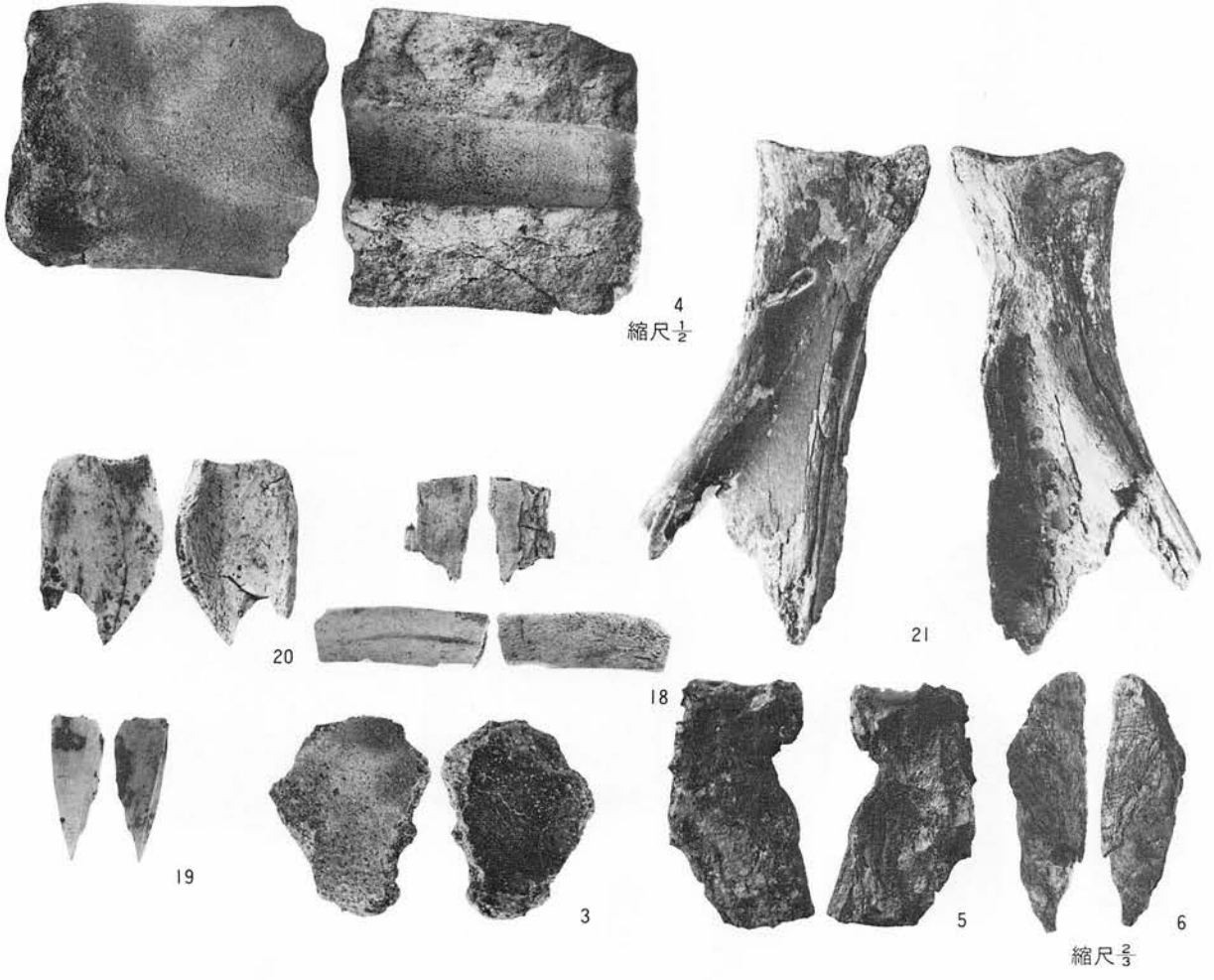
写真図版106 木製品(3)

縮尺 $\frac{1}{3}$

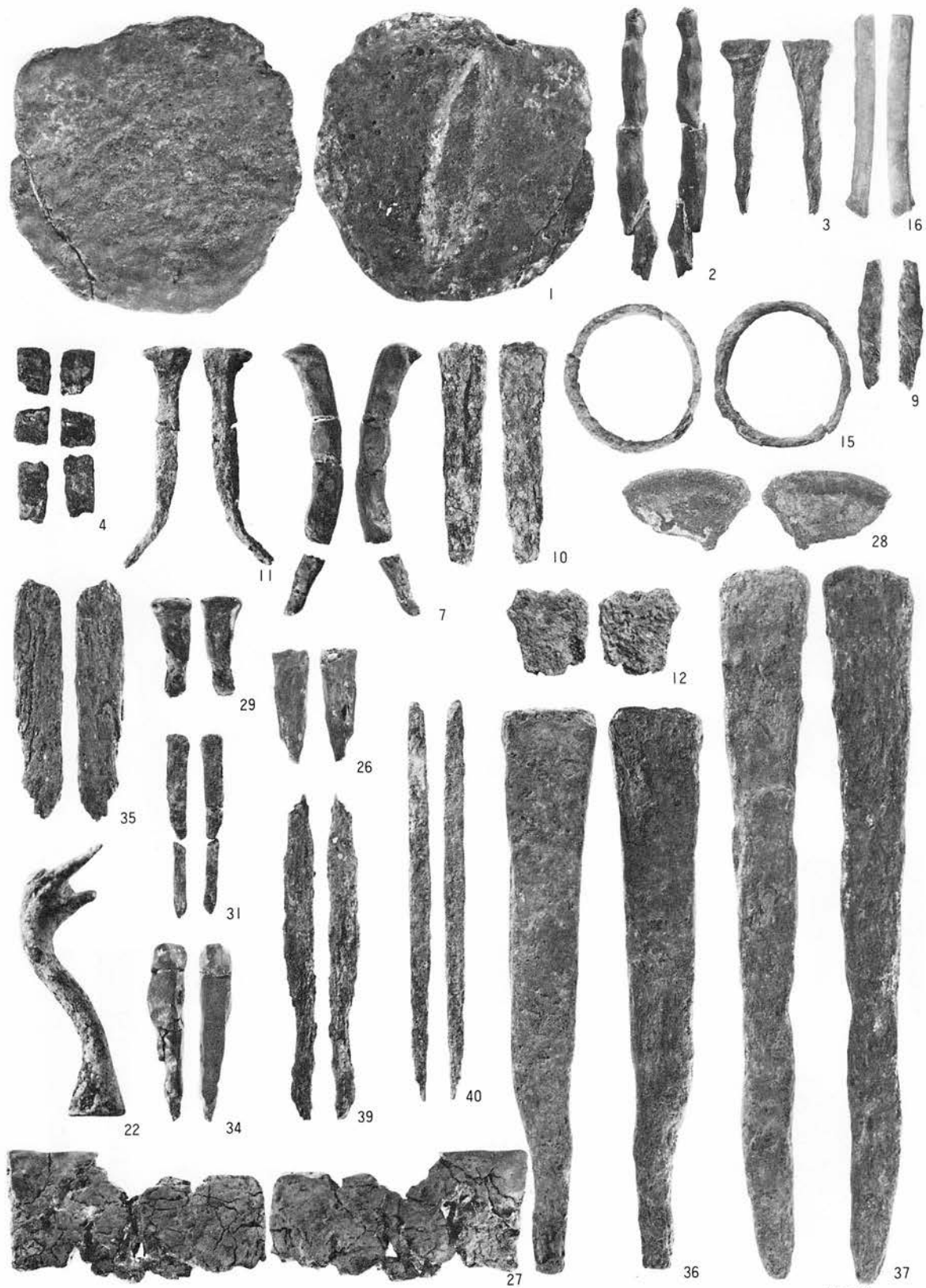


写真図版107 木製品(4)

縮尺 $\frac{1}{3}$

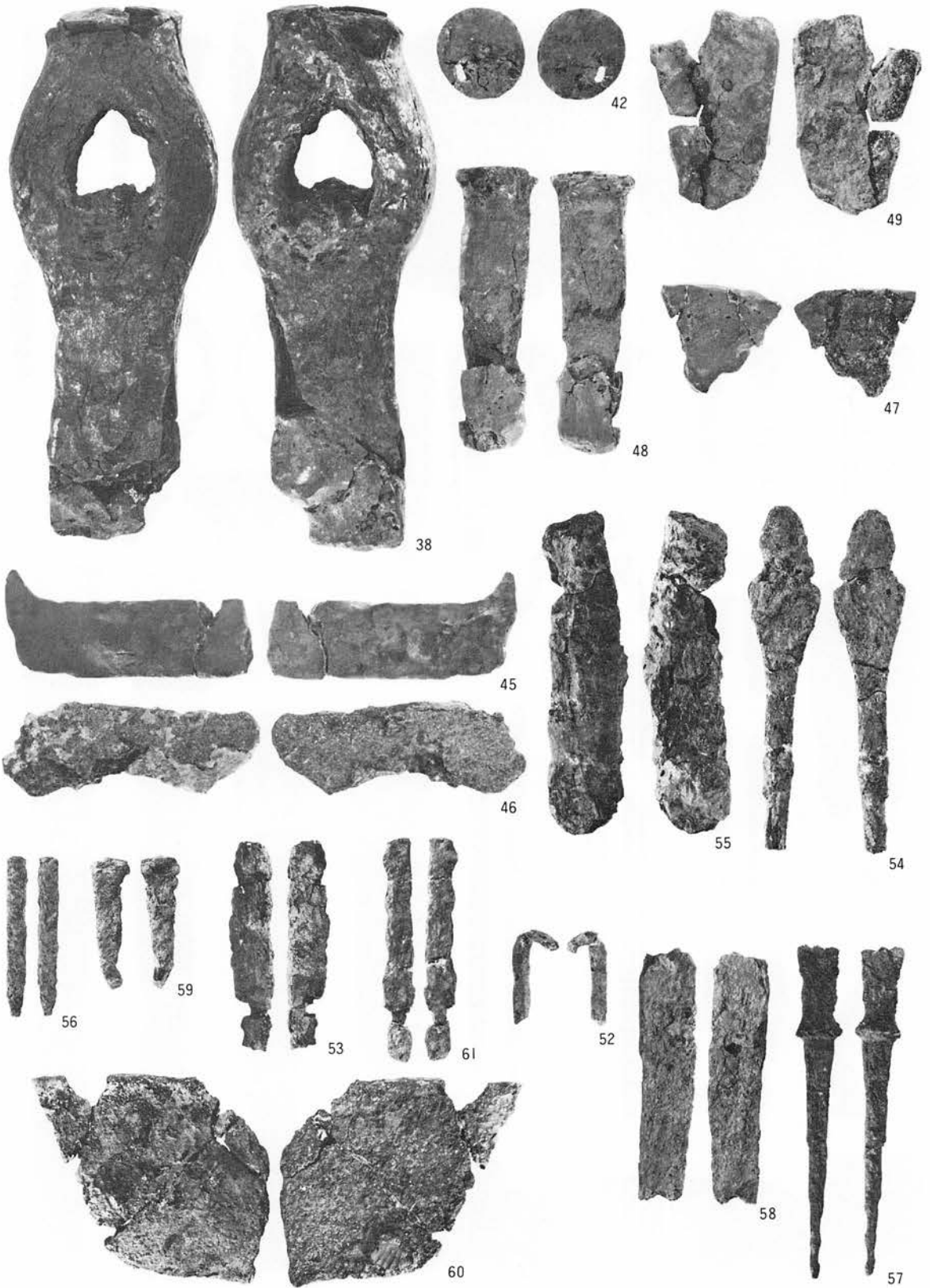


写真図版108 その他の遺物



写真図版109 金属製品(1)

縮尺 $\frac{2}{3}$



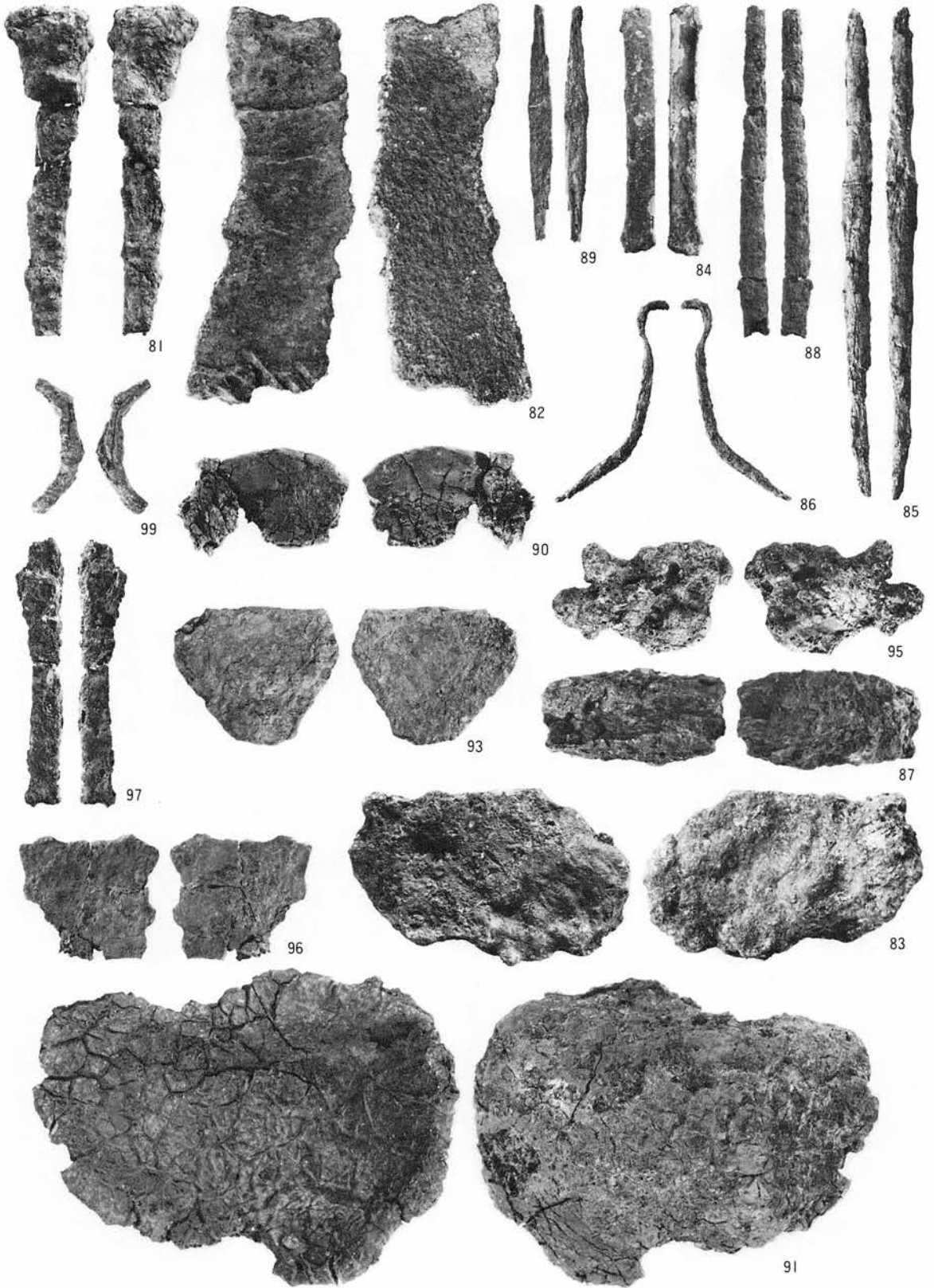
写真図版110 金属製品(2)

縮尺 $\frac{2}{3}$



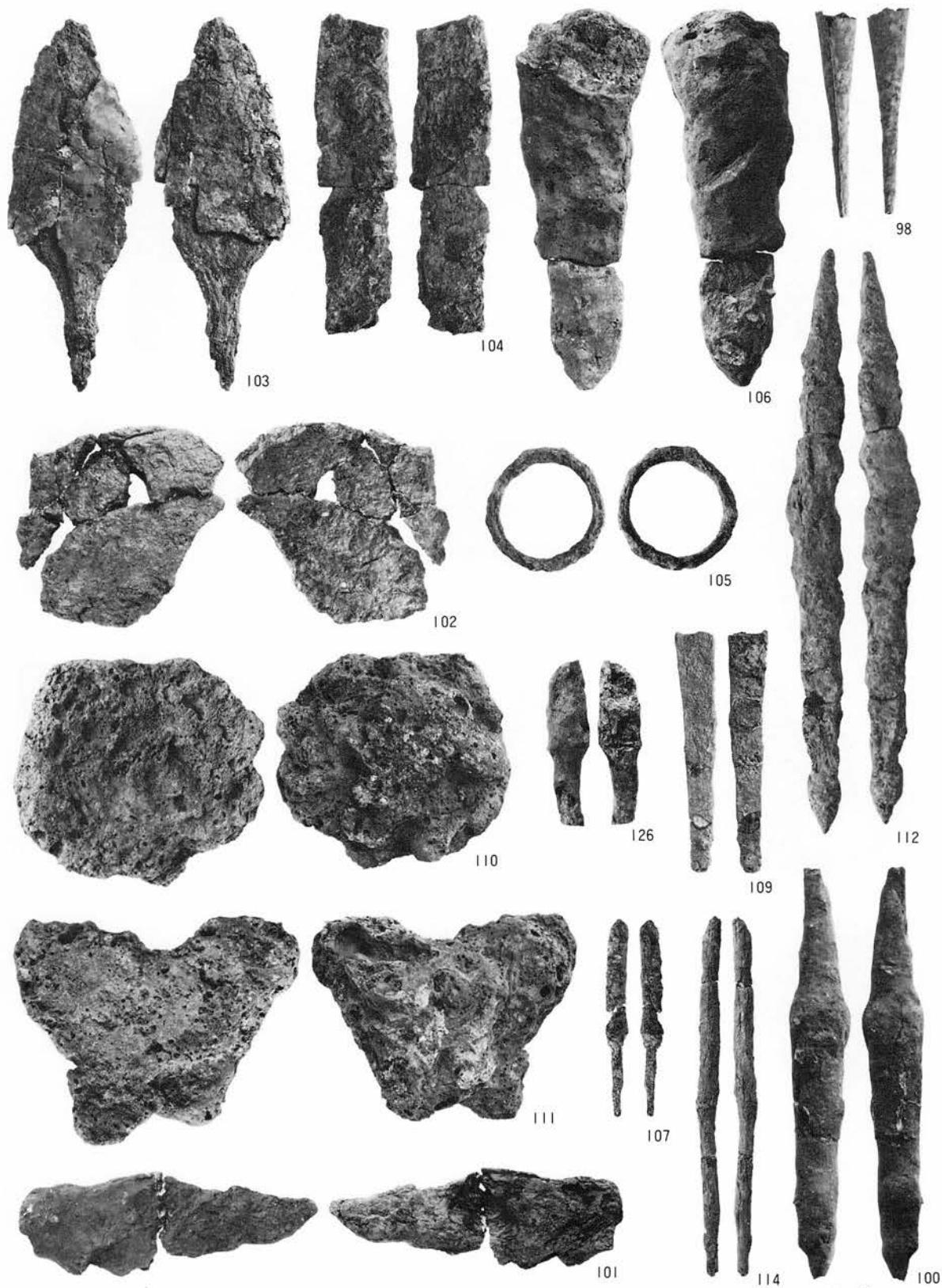
写真図版III 金属製品

縮尺 $\frac{2}{3}$



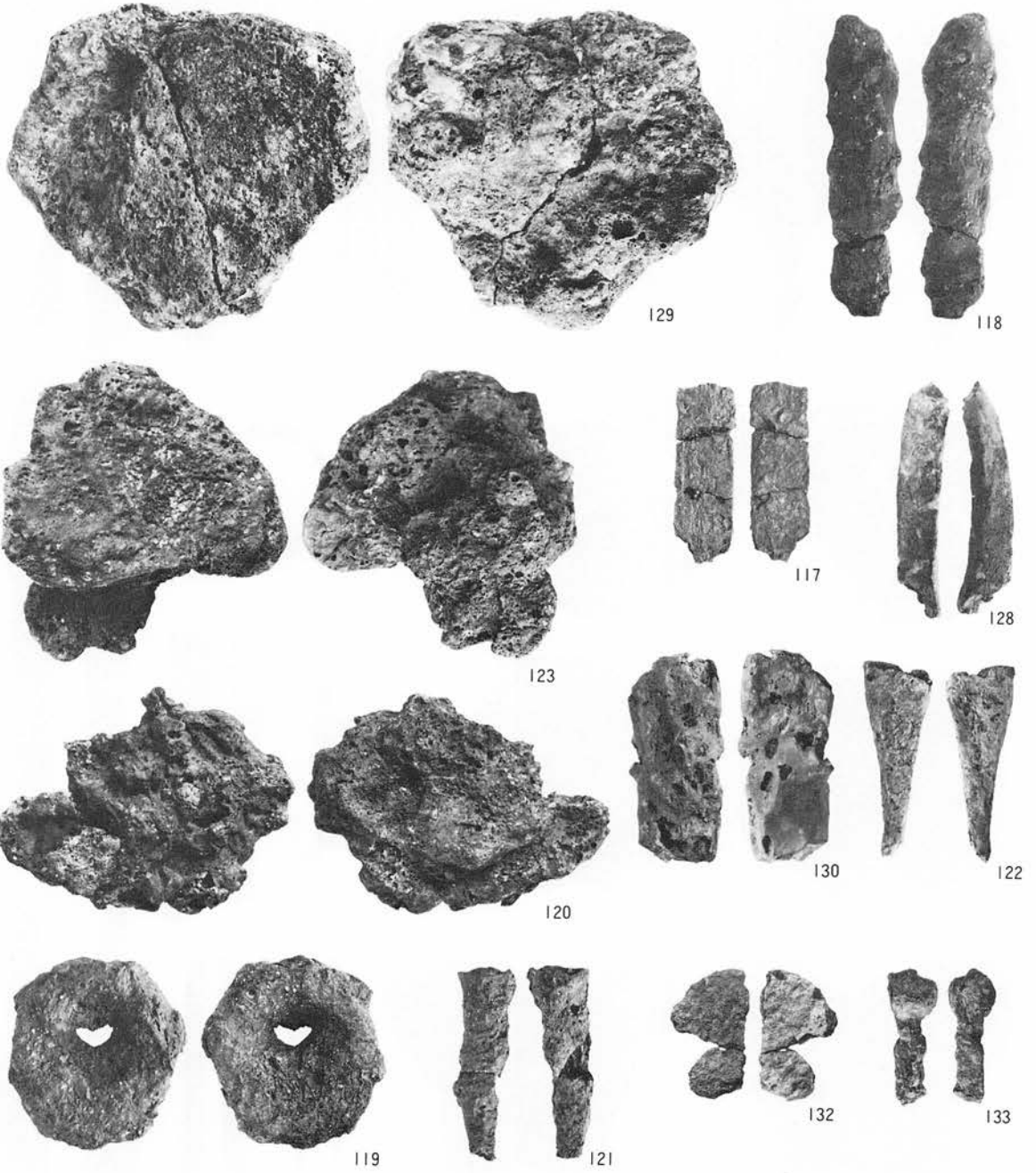
写真図版112 金属製品(4)

縮尺 $\frac{2}{3}$



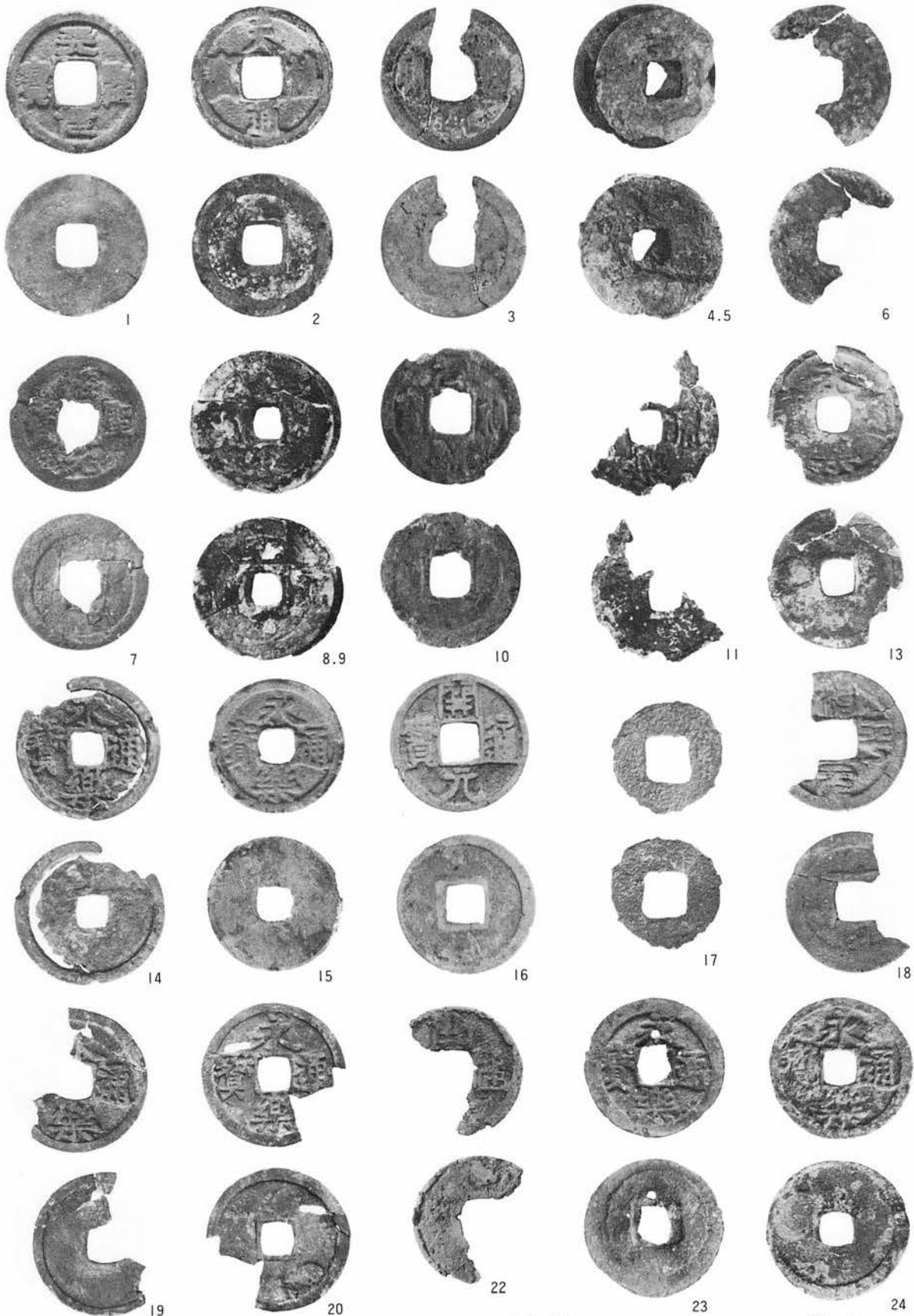
縮尺 $\frac{2}{3}$

写真図版113 金属製品(5)



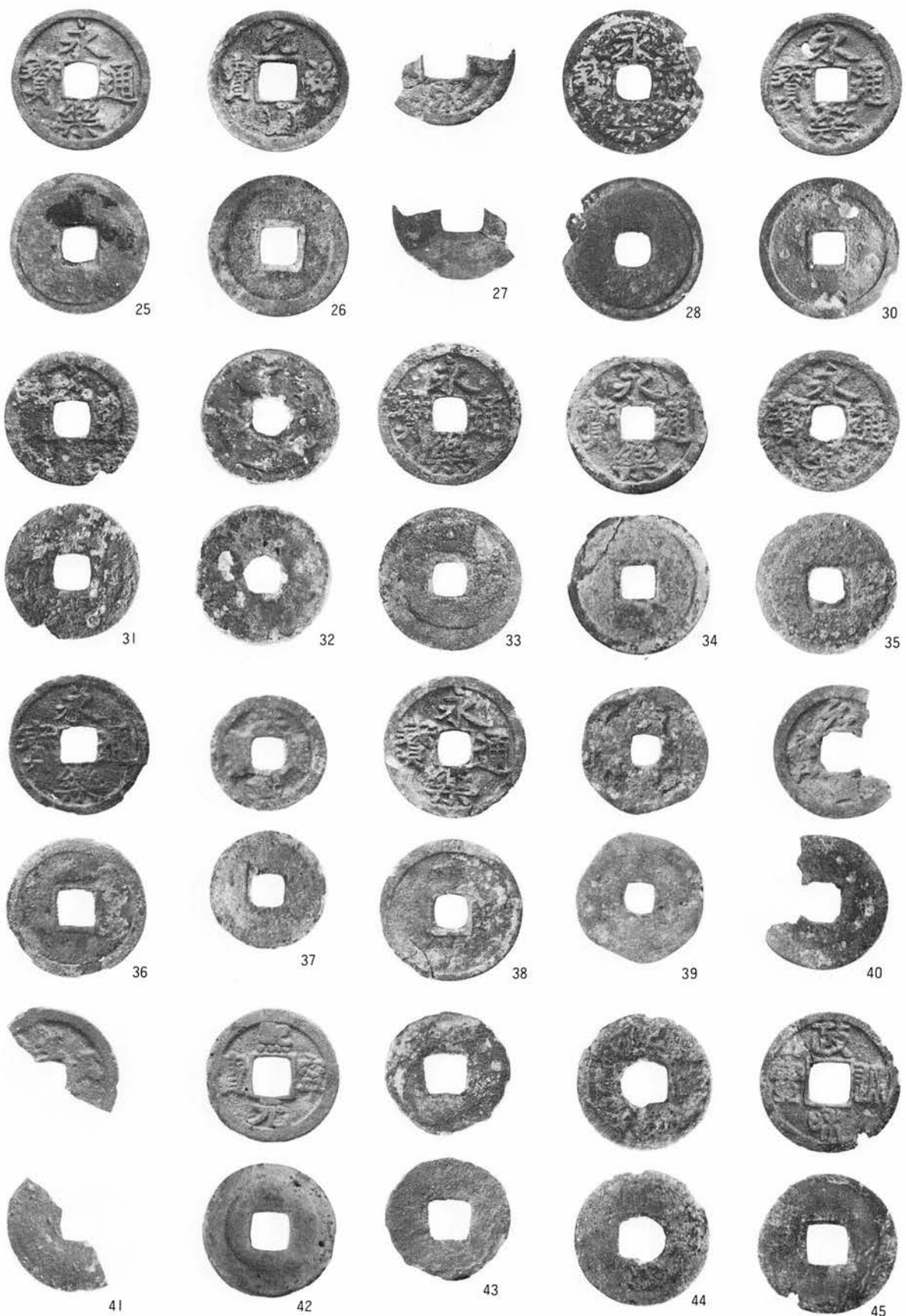
写真図版114 金属製品(6)

縮尺 $\frac{2}{3}$



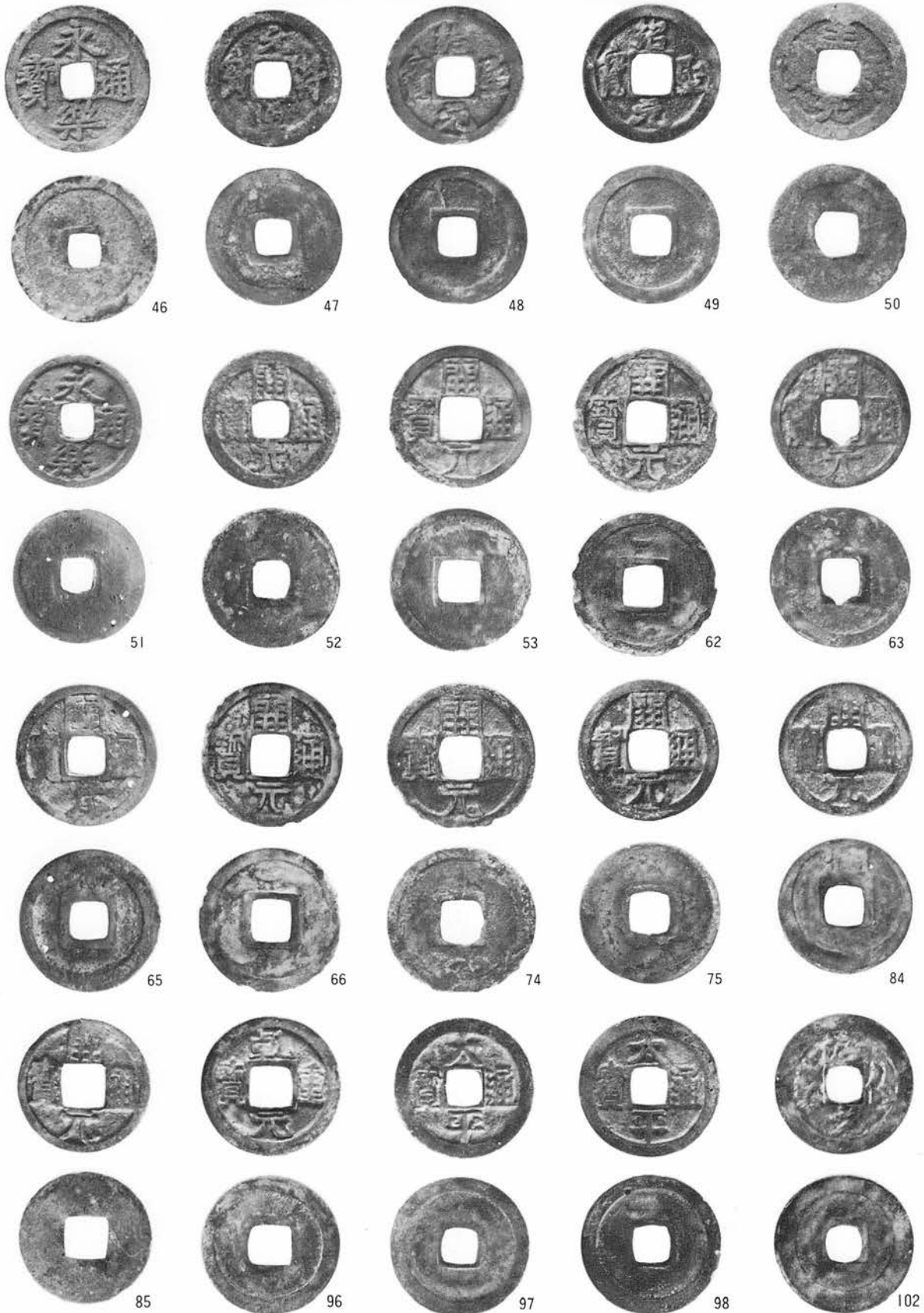
写真図版115 貨幣(1)

大実



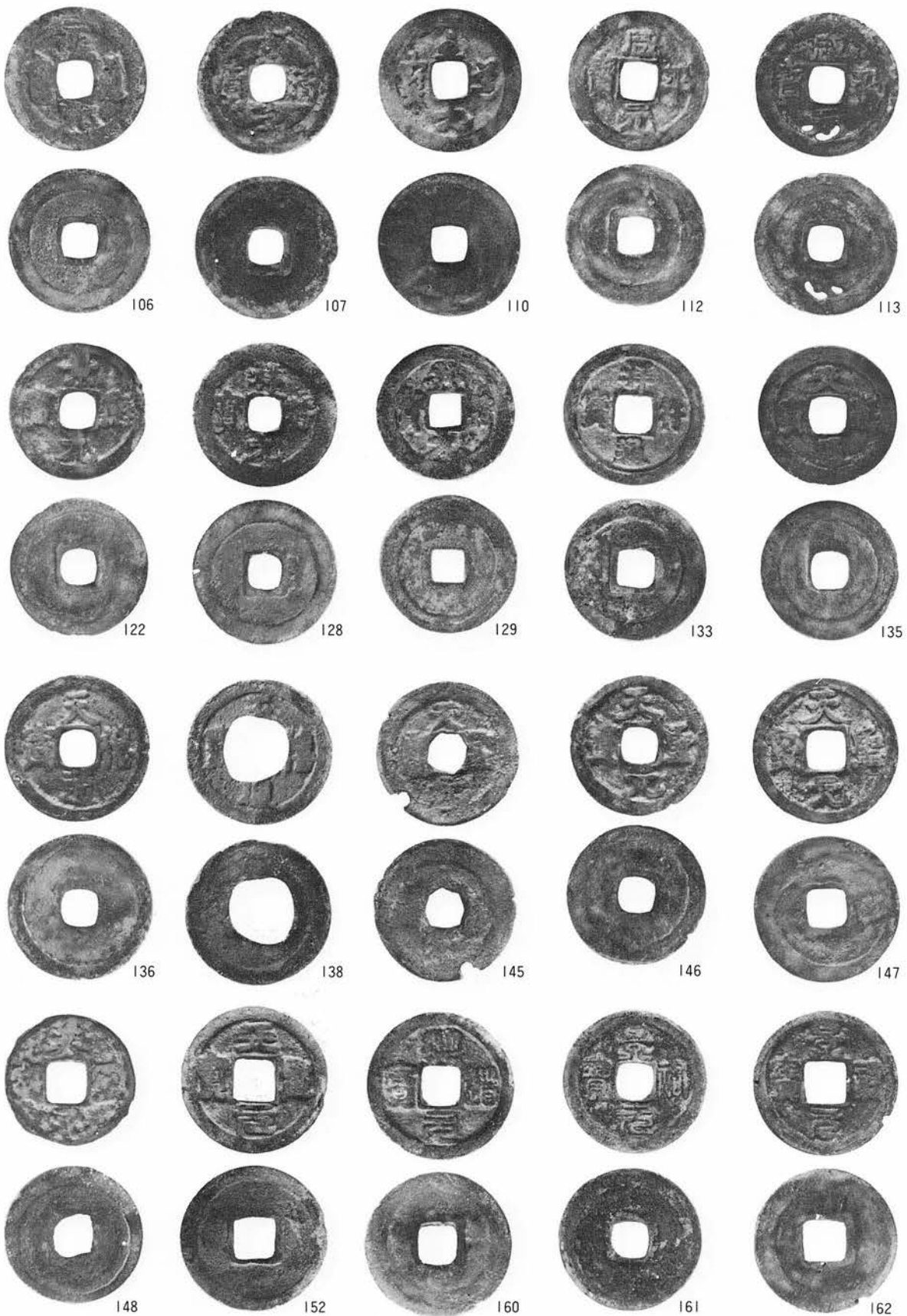
写真図版116 貨幣(2)

実大



写真図版117 貨幣(3)

大 実



写真図版118 貨幣(4)

大実



165

166

167

168

169



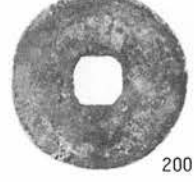
181

185

188

189

193



197

200

201

202

203



208

211

213

219

222

写真図版119 貨幣(5)

大実



223

224

225

226

228



230

232

235

240

247



253

258

264

265

273



274

303

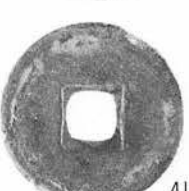
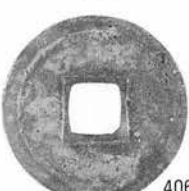
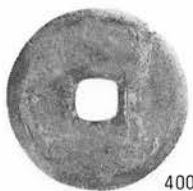
304

320

321

写真図版120 貨幣(6)

大実



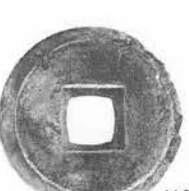
400

405

406

410

411



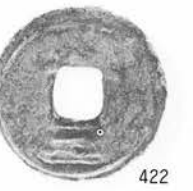
417

418

419

420

421



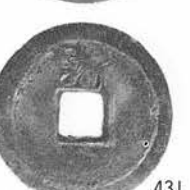
422

423

424

425

426



427

428

429

430

431

写真図版122 貨幣(8)

大実



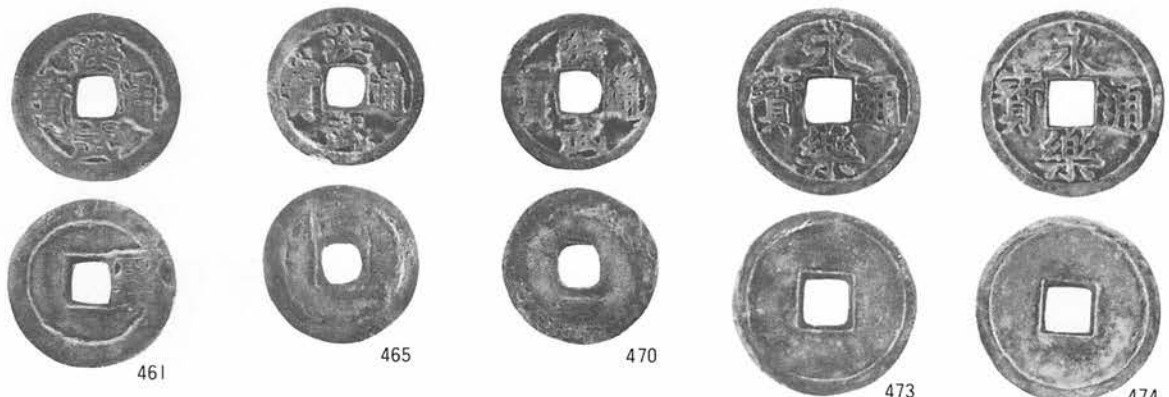
432

435

436

438

439



461

465

470

473

474



475

506

507

508

509



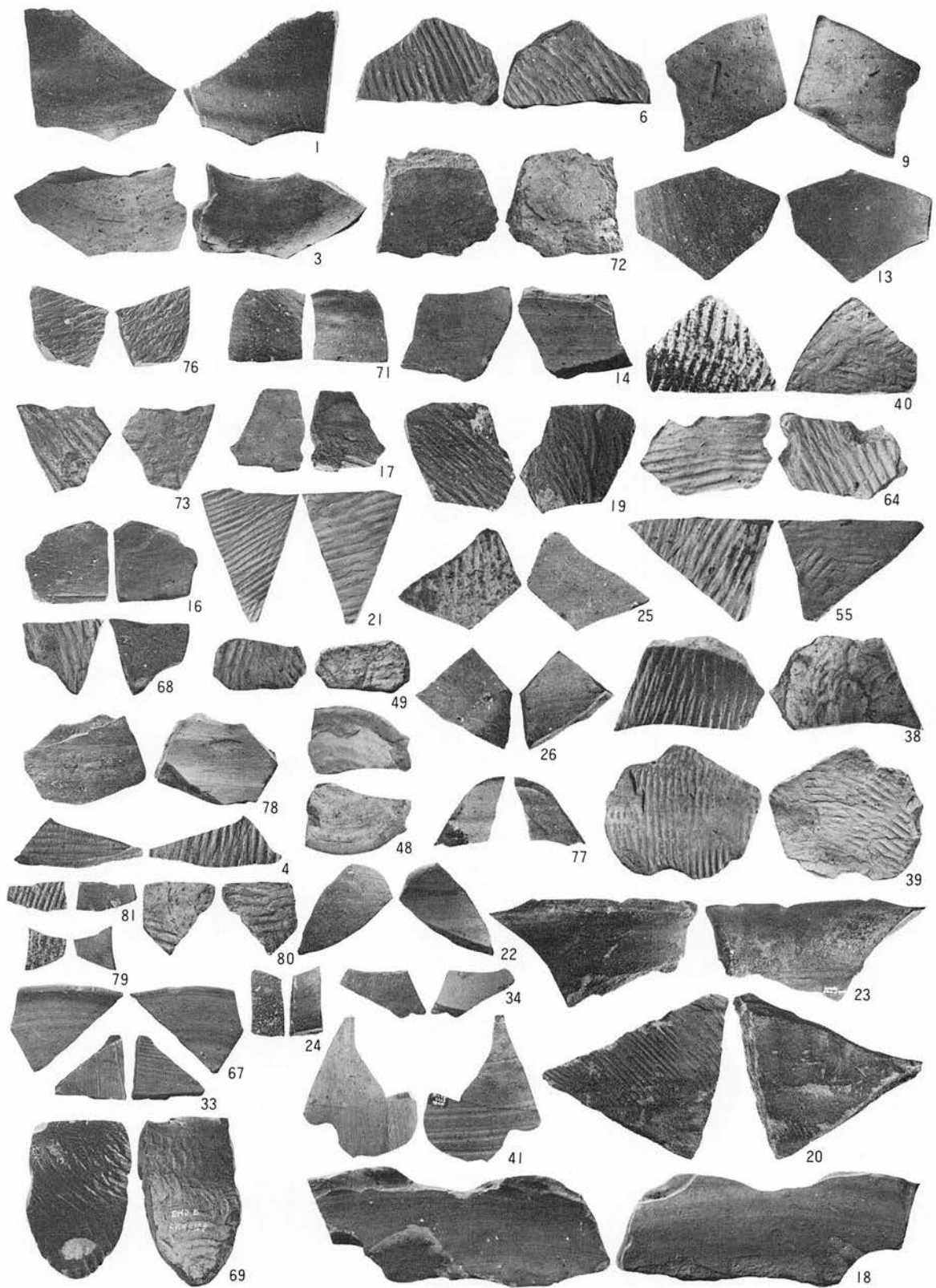
510

511

512

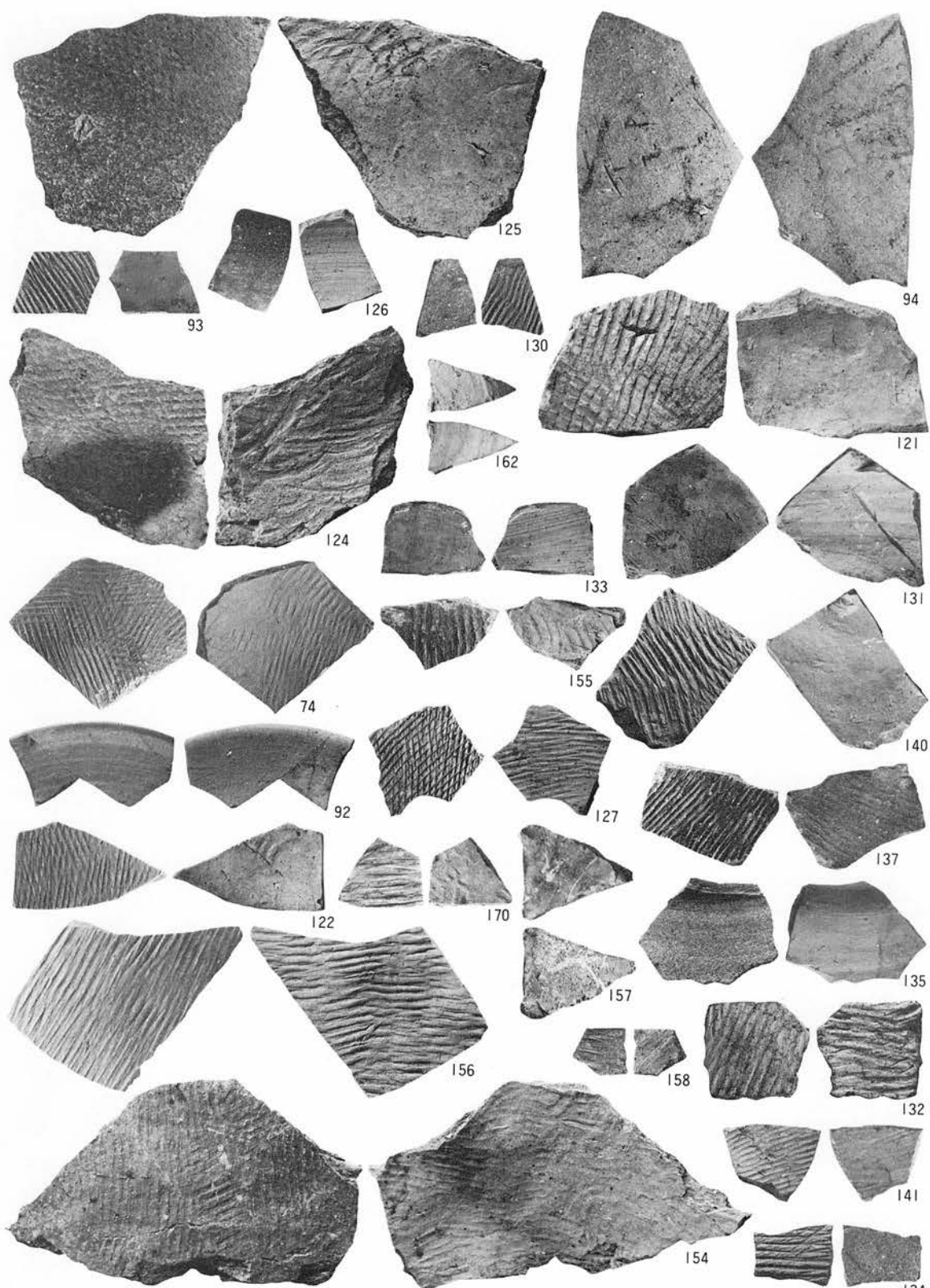
513

514



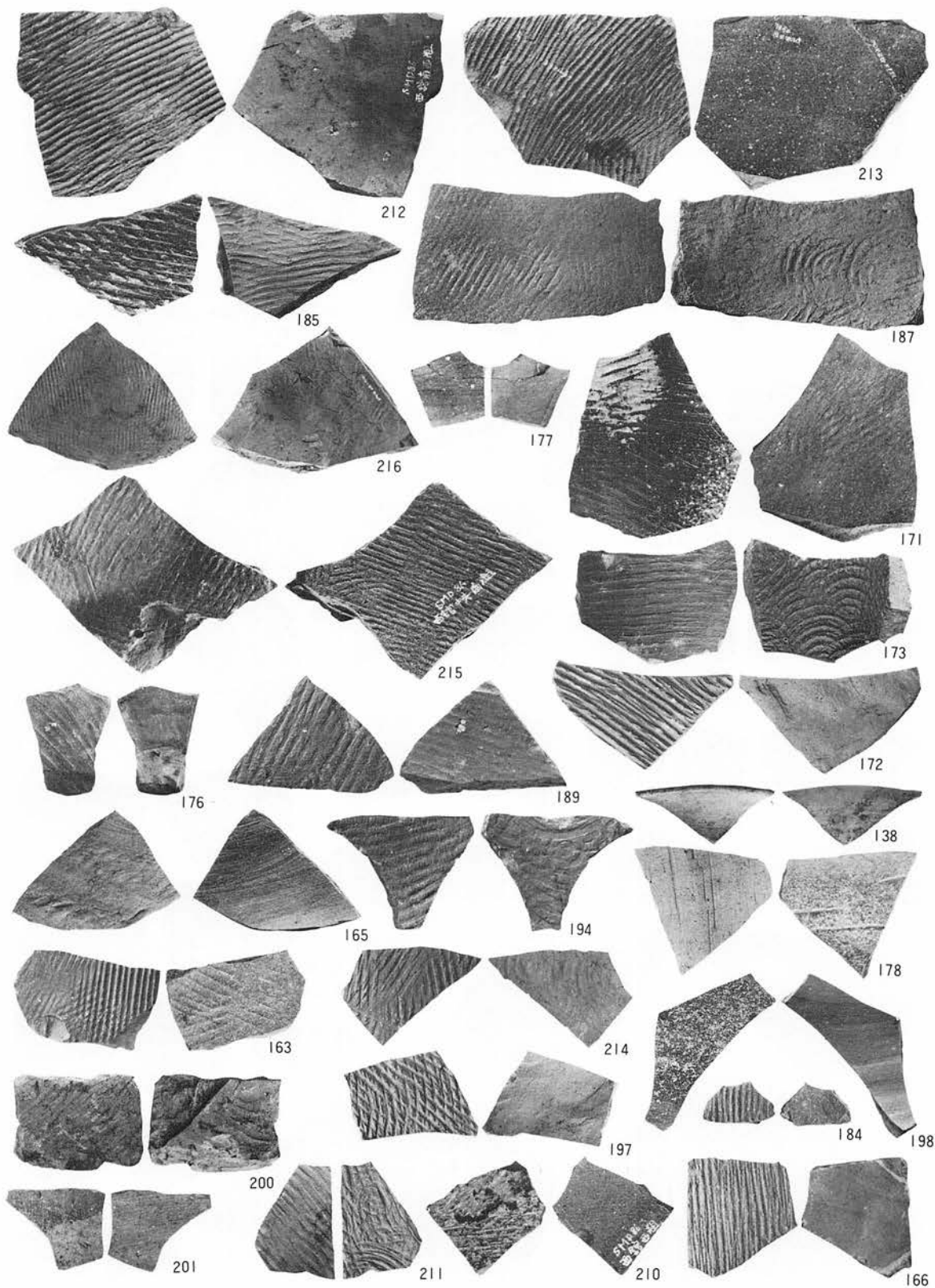
写真図版124 須恵器(1)

縮尺 $\frac{1}{3}$



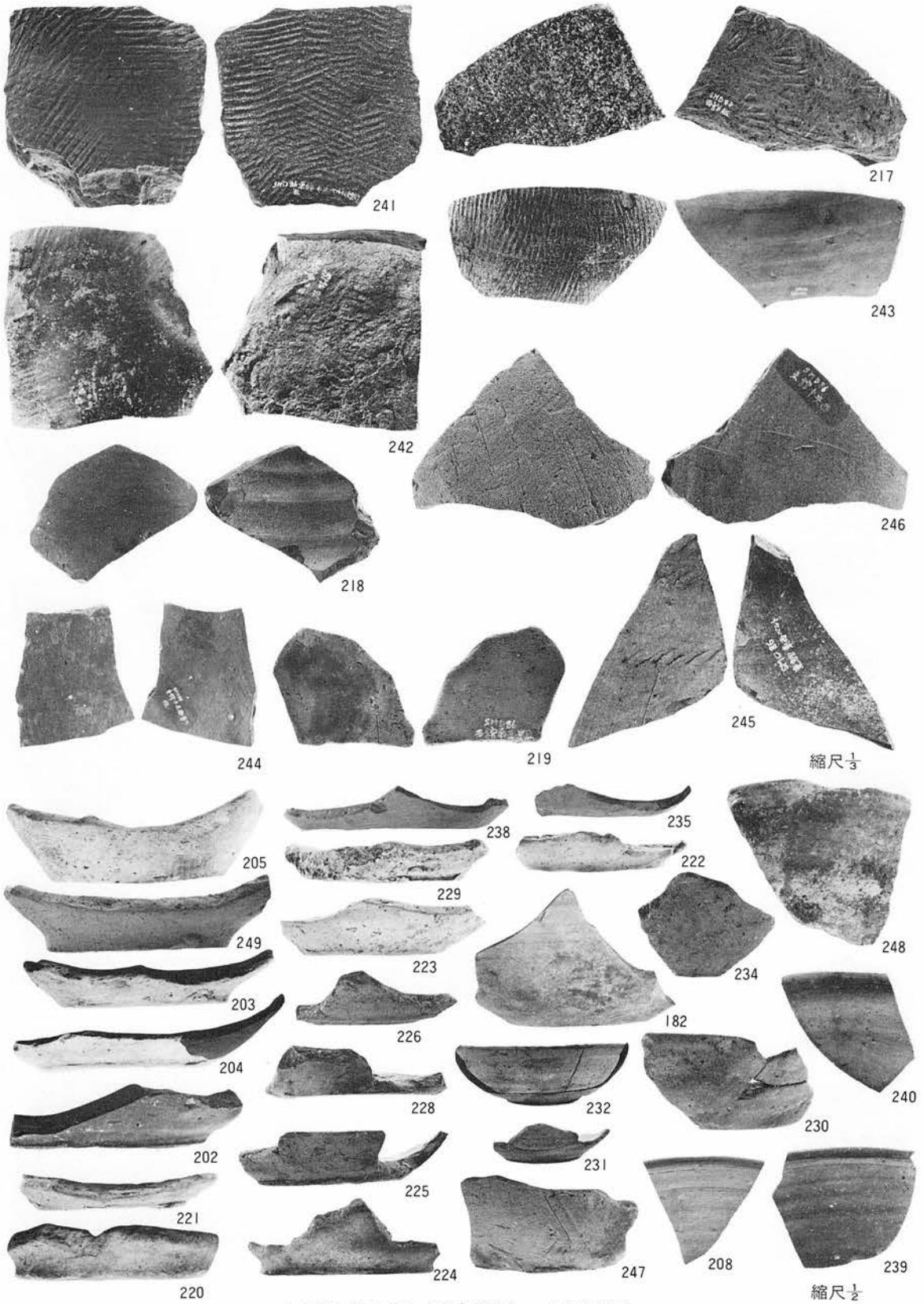
写真図版125 須恵器(2)

縮尺 $\frac{1}{3}$

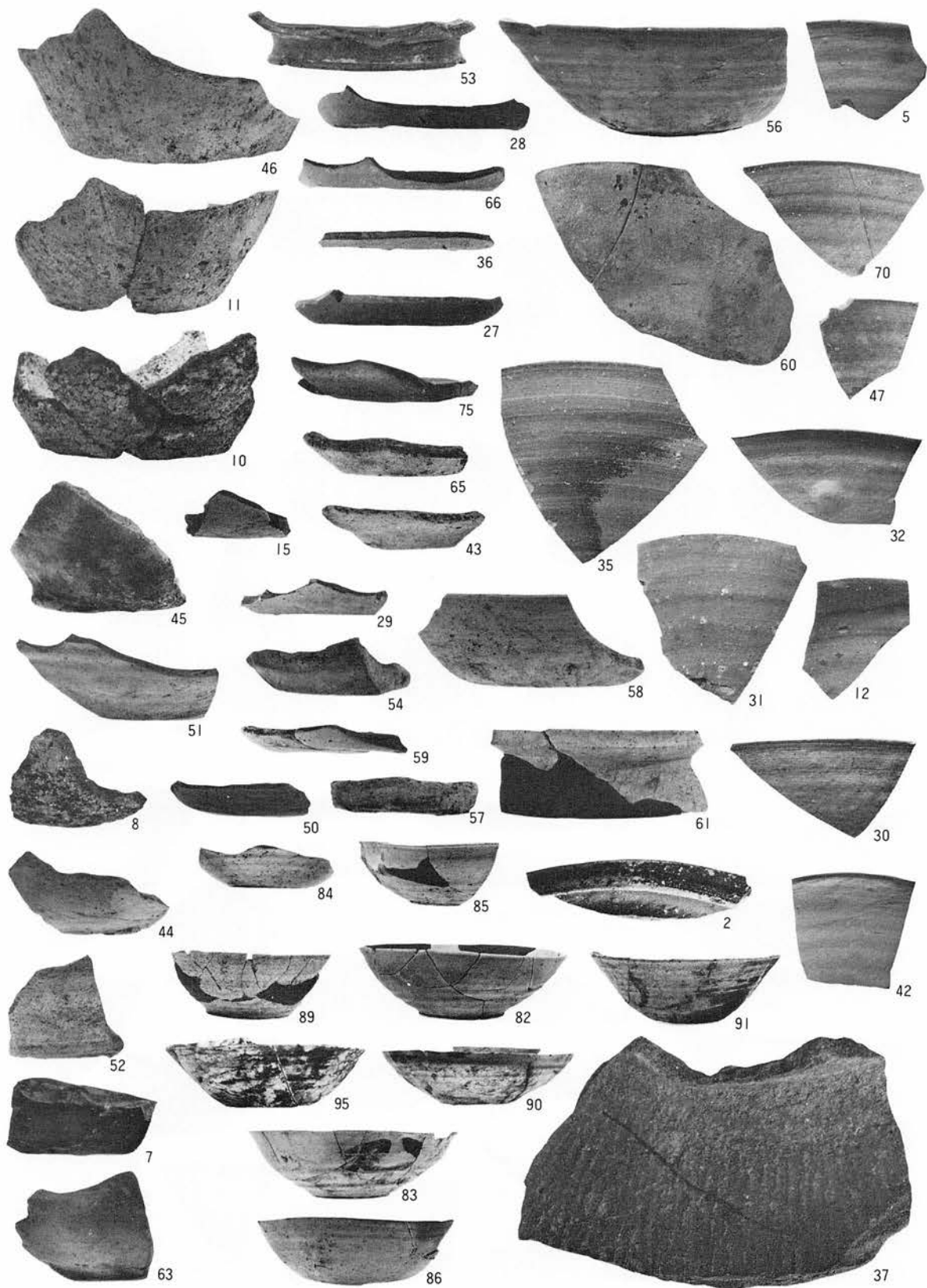


写真図版126 須恵器(3)

縮尺 $\frac{1}{2}$

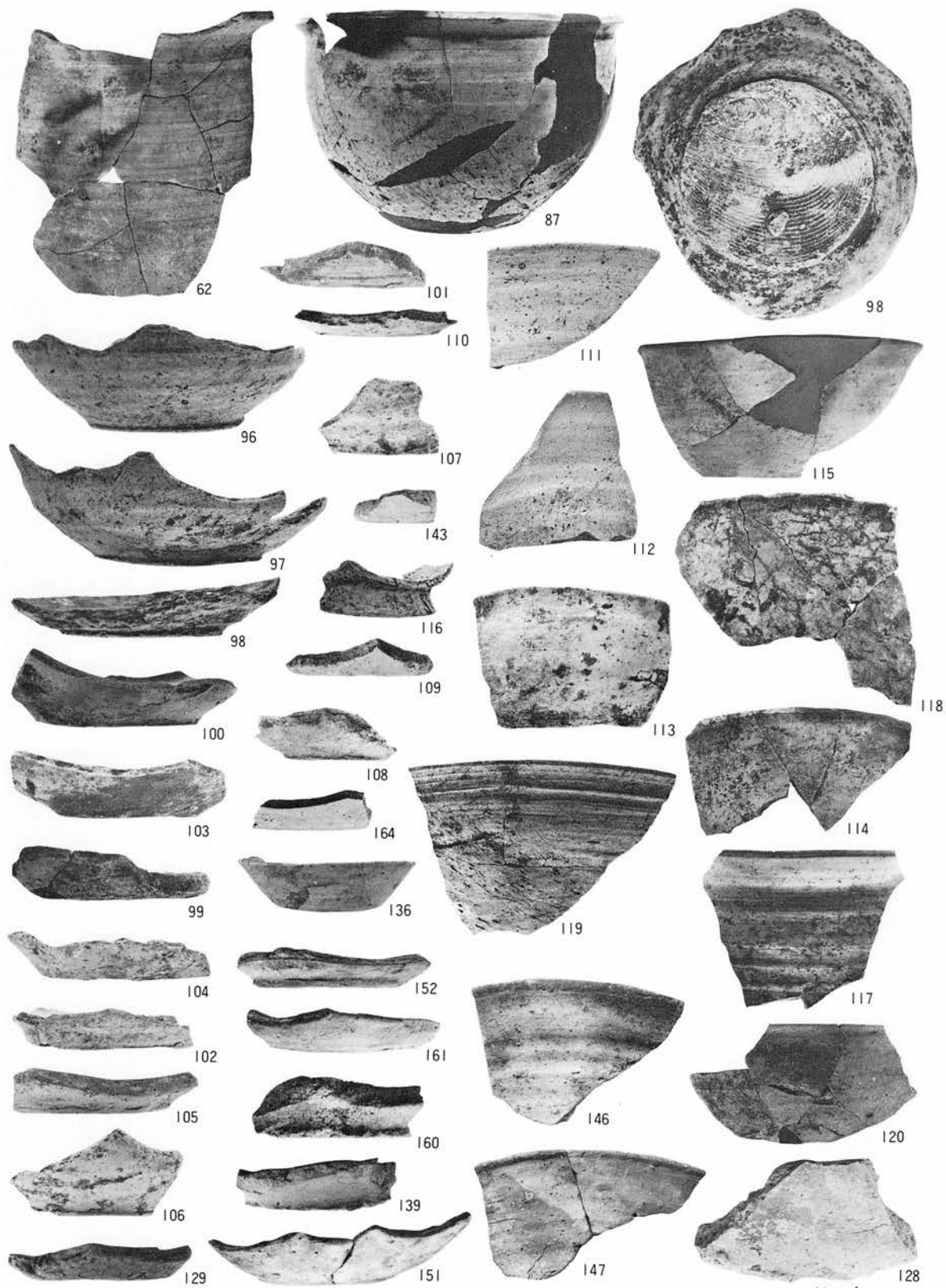


写真図版127 須恵器(4)・土師器(1)



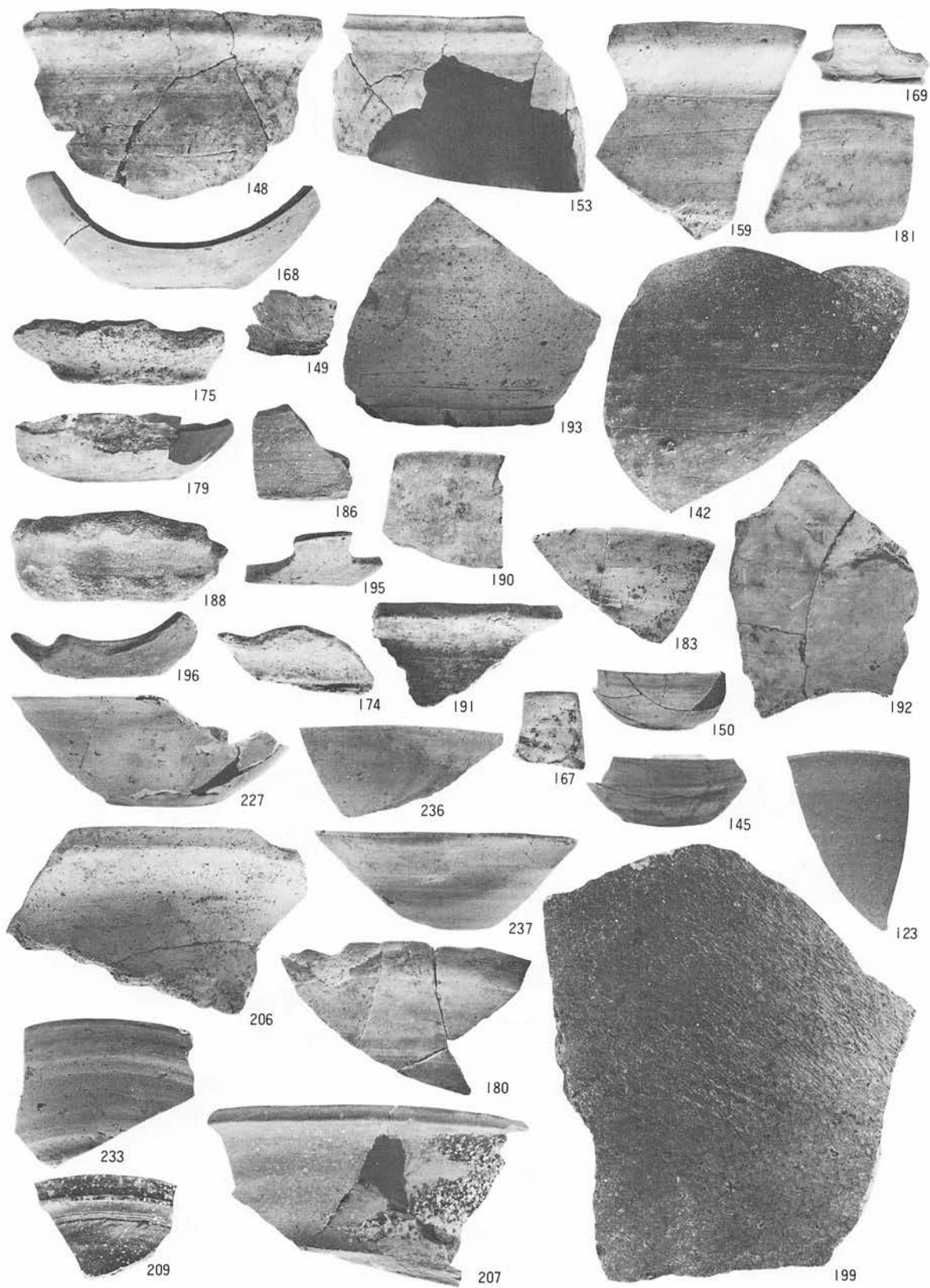
写真図版128 須恵器(5)・土師器(2)

縮尺 $\frac{1}{2}$



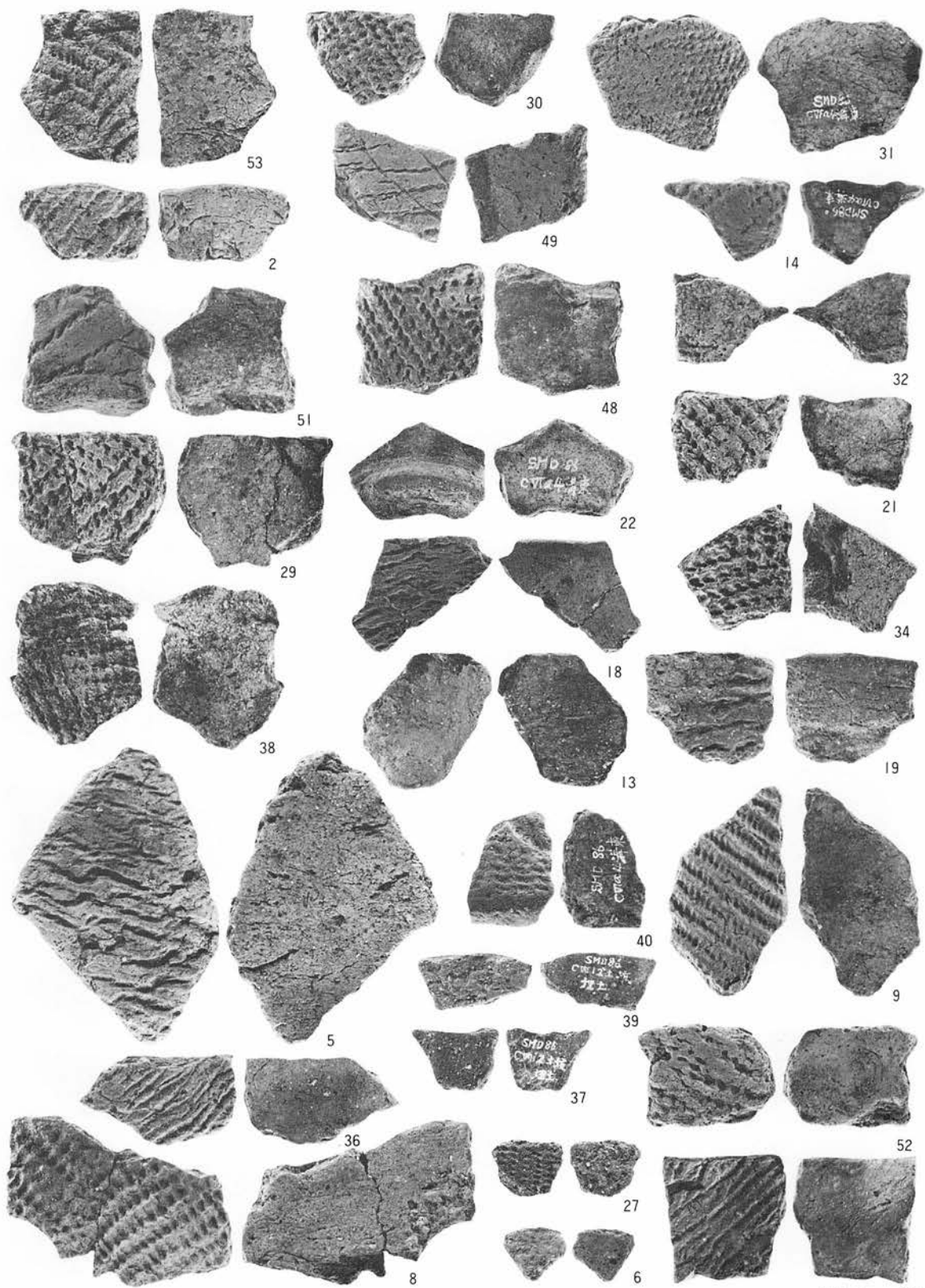
縮尺 $\frac{1}{2}$

写真図版129 須恵器(6)・土師器(3)



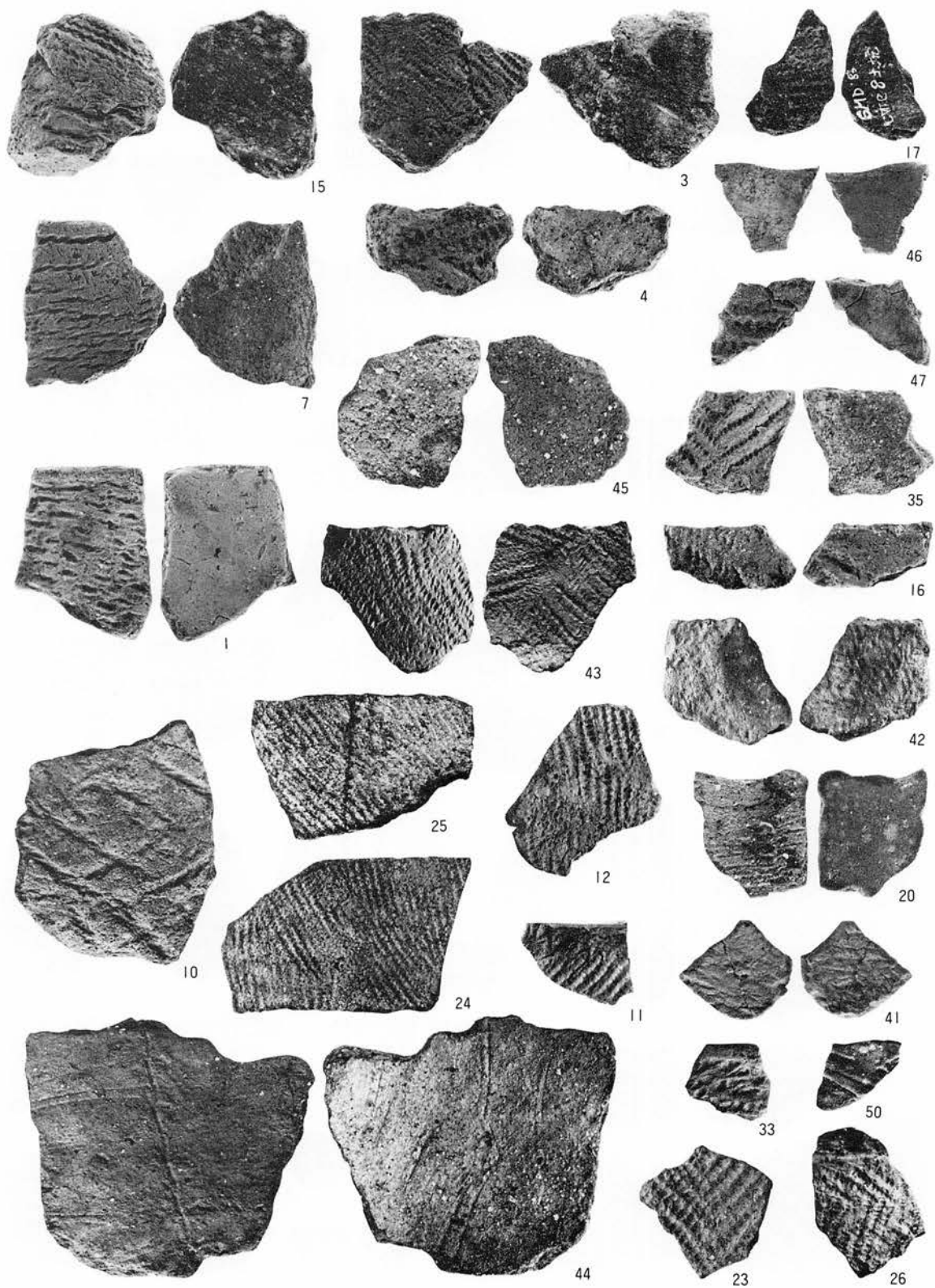
写真図版130 須恵器(7)・土師器(4)

縮尺 $\frac{1}{2}$



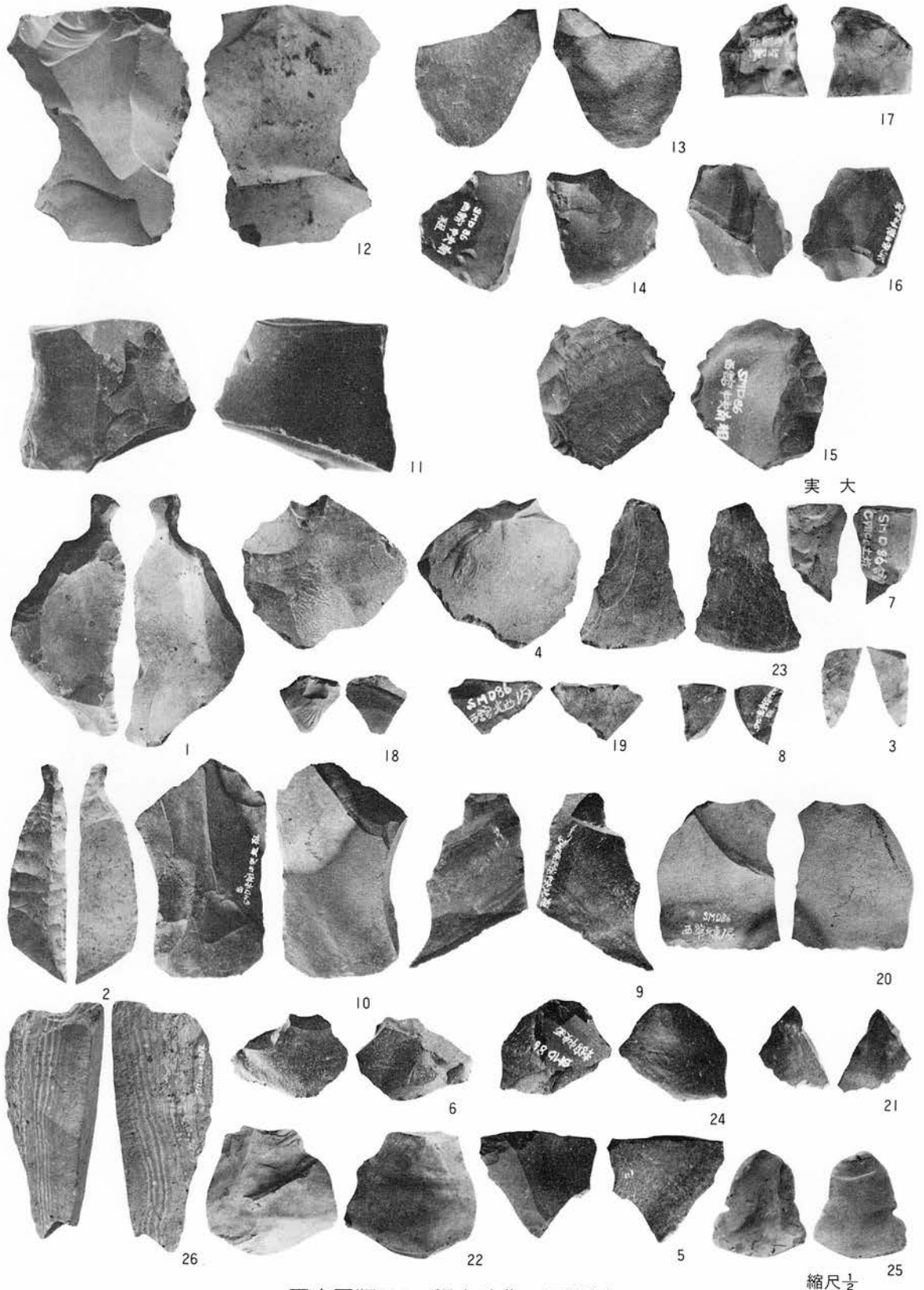
写真図版131 縄文土器(1)

縮尺 $\frac{1}{2}$ 28

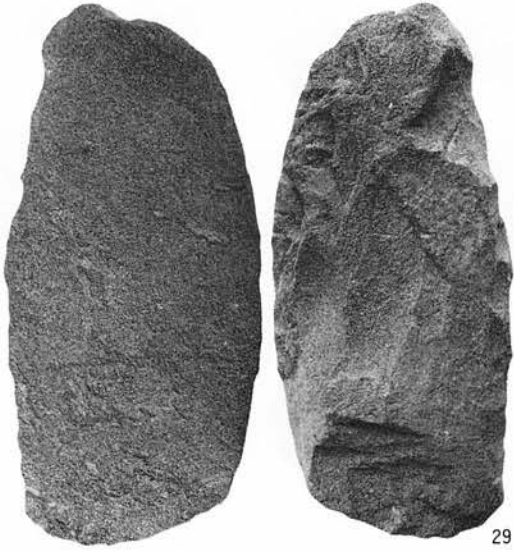


写真図版132 縄文土器(2)

縮尺 $\frac{1}{2}$



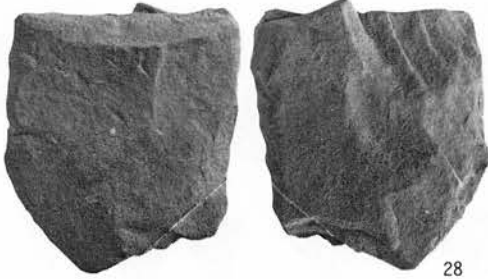
写真図版133 縄文時代の石器(1)



29



31



28



30



27

写真図版134 縄文時代の石器(2)

縮尺 $\frac{1}{2}$

財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員

所 長 及 川 昌 二
副 所 長 宮 英 一

[管理課]

課 長 宮 英 一
課 長 補 佐 伊 藤 吉 郎
主 事 立 花 多加志
嘱 託 似 内 喜 兵
巡 転 技 士 佐 藤 春 男
兼 技 能 員

[調査課]

課 長	昆 野 靖		
主任文化財 専門調査員	小 田 野 哲 憲		
〃	三 浦 謙 一		
〃	工 藤 利 幸		
文 化 財 専門調査員	佐々木 嘉 直	文 化 財 専門調査員	平 井 進
〃	中 村 良 一	〃	田 村 壯 一
〃	光 井 文 行	〃	玉 川 英 喜
〃	佐 藤 嘉 広	〃	中 川 重 紀
〃	高 橋 義 介	〃	酒 井 宗 孝

[資料課]

課 長 新 田 和 雄
主任文化財
専門調査員 高 橋 与 右 工 門
文 化 財
専門調査員 田 鎖 寿 夫

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財発掘調査報告書第124集

笹間館跡発掘調査報告書

ほ場整備事業笹間地区関連遺跡発掘調査

印刷 昭和63年3月20日

発行 昭和63年3月25日

発行 財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

〒020 岩手県紫波郡都南村大字下飯岡11-185

電話 (0196) 38-9001~2

印刷 株式会社 杜陵印刷

〒020-01 岩手県盛岡市厨川四丁目2番6号

電話 (0196) 41-8000